
虚幻のディアノイア

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚幻のディアノイア

【Nコード】

N8202F

【作者名】

神宮寺飛鳥

【あらすじ】

裕福な家庭で育った少年、本城夏流。家庭の事情から家を出て数年経ったある日、死んだはずの双子の妹からの手紙で一冊の書きかけの本に出会う。それは、彼女が生み出した異世界への道を開く扉だった。作り物の幻想世界で彼に与えられた役割は、『勇者』の少女を導く『救世主』。物語のバッドエンドを回避する為、妹の真意を知る為、少年の冒険が始まった。十三年後、ディアノイアで伝説の英雄の一人、ゲルトと出会うマナ。そこでマナはユリアが背負う様々な物を知り、小さな勇者と友達になる事を決める。わがまま勇

者とへこたれ魔術師が送る、愛と勇気の異世界ファンタジー！今度こそ完結！9 / 12 :なんで伸びてんの.....？

プロローグ

傲慢じゃないが、俺の家は裕福なご家庭だ。

そこで勘違いしないで欲しいのは、家が裕福だったら絵に描いたようなボンボンが生まれるかと言うと、実はそうでもないって事だ。少なくとも俺はこの十七年間、金持ちのせがれっぽい事は何一つしてこなかったんだから、これは間違いないと言えるだろう。

裕福な家庭ということは、両親のどちらかが金持ちと言う事になる。で、俺の両親は両方とも金持ちである。医者と弁護士のせがれなのである。

実家は、とんでもなく巨大だ。ここで誤解しないでほしいのは、家そのものが巨大なのではなく、庭がとんでもなく広いつてところだ。うつそうと木々が生い茂る山奥に、その屋敷は存在する。父方の一族が代々暮らしてきたらしいその家は、子供心にまるで城のように思えたのを良く覚えている。

さて。そんな事を考えながら進む俺の足元を覆う真っ白な雪の塊ども。なんとも憎たらしいが、この時期殆ど毎日雪が降っている北国としては、まあ仕方のないことなのだが、あまりにも人通りがないせいで足跡一つない純白の世界が広がっているというのはいかがなものなのだろうか。

少なくとも俺の帰郷を思い切り阻んでいるのは間違いない。つまり

……邪魔だっ！！

「だあああああっ！！ いつになったら家に着くんだよッ！！」

森の中で俺は叫んでいた。森とはいえ、一応ここは実家の領地内だ。真冬だというのに汗だくになって、俺はこんなところで何をしているんだ？ いきなりで申し訳ないが、このまま遭難して終了とかじゃないだろうか。

実家に帰るのに遭難……？　そうなんですか。笑えるか！　ガキの時は城だったかもしれないが、今はただの迷宮なんだよっ！
昔はこんな劣悪な環境でも平然と生活していたっていうのに、時間の経過とは恐ろしいものだ。何で成長したはずなのに衰えてんだよいや、ガキの時は確か、雪があまり積もらない道を完全に網羅していた気がする。裏道やらなにやら、何でも知っていたっけな。

「ふっつ」

雪を掻き分けて進むと、遠くにぽつんと豆粒のような実家が見えた。サイズを考えれば、まだまだ遠いということだろう。

「帰ってきたな……。最寄の駅から歩いて四時間半……。我が家の登場だ」

思い切りため息をついて、雪が入り込んで重たい靴を持ち上げた。吐き出す息が空に昇って、白さは淡く溶けて行った。

プロローグ

南京錠の鍵は、二年前に家を出た時からカバンに突っ込んだままだった。

玄関の鍵が閉まっていた時は本気で背筋がぞつとしたが、どうやら往復九時間の道のりを無駄にすることにはならずに済みそうだった。錆びついた錠を外し、重苦しい木製の扉を開く。両開きなのだが、雪の影響もあり片方だけ開いて小さな隙間に身体をねじ込むことにした。

洋館の中は独特のかび臭さに包まれていた。無論手入れなんて誰も

やっていないのだろう。

俺が顔をしかめたのは匂いや屋敷の暗さだけが理由ではない。お気に入り入りのスニーカーが雪でぐっしょりだったから、そして洋館の中が何故か外より寒いじゃねえかってこと。この二つも付け加えなきゃ気がすまない。

「つたく、幽霊屋敷かここは……っ」

幼少時代を過ごした実家に対して結構失礼な物言いだっただ、知った事ではない。好き好んでこんなところに自ら赴く奴は頭イカれるとしか思えない。

つまり別に俺は好き好んでここにやってきたわけではない。勿論頭もイカれてない。至極真つ当だ。一応念を押しておく。

肩やら頭にもりに積もった雪を払い、一歩足を踏み出した。明かりはつかなかったが、暗闇の中でも俺は迷う事無く進む事が出来た。

「懐かしいな」

思わず呟いてしまうほど、そこは思い出に包まれていた。当然だ。子供の頃、ここで毎日のように遊んだのだから。

色々と見て回りたいところだが、本命はそこではない。別の明確な目的を持って足を運んだのだから、まずはそれを済ませよう。

階段を上り続け三階へ。さらに元々自分の部屋だった小部屋に向かい……扉は閉まっていたので、蹴破って中に入り、舞い散る埃に嫌気が差しながらもベッドの上に立った。

さらにベッドの上にイスを置き……昔の両親が見たら卒倒しそうな状況だ……その上に乗り、天井に手を伸ばした。

俺の部屋の天井は低い。理由は知らない。自宅の建築事情を事細かに把握している子供はそうそういないはずだしな。

まあともかく、そこには取っ手がある。少し硬くなっていたが、扉

は押せばきちんと開いた。小さくなってしまった出入り口を恨めしく感じながら俺は身を乗り出した。

「よっと」

三階立ての屋敷だが、その上にはさらに屋根裏部屋がある。

そこだけは昔頃から埃っぽくて、昔頃から散らかっていて

そして、昔のまんまだった。

上着についた埃を払い、窓を開ける。木製のテーブルの上に鞆と上着を置き、ランプに火を灯した。

暗闇の中浮かび上がったのは、幻想的な景色だった。何が幻想的というわけでもない。ただ俺にとってそれは、懐かしい思い出の景色であり、十分過ぎるほど幻想的だった。

小さな本棚には沢山の本がびっしりと敷き詰められていた。そこに収まりきらないものは、床の上に直接塔を作っている。乱雑に散らばった一つ一つの本に見覚えがあり、俺は思わずため息を漏らした。そう、ここは秘密基地だった。机の上を指で撫でると、埃が時間の経過を教えてくれる。

もう十年以上前の事だ。この家にまだ家族が暮らしていた頃の話。俺と彼女は、よくここで一緒に時間を過ごした。

彼女、というのは別に将来結婚する事を誓い合った幼馴染とかではない。普通に生まれた瞬間からそばに居た、妹の事である。

ではなぜ彼女などと他人行儀名呼び方をするのかということだが：

…まあ、それはひとまず置いておく。

何はともあれ彼女は俺にとって唯一の妹であり、幼少時代を共にすごした人なのである。

その妹が死んだのが一月ほど前である。思い返すと少々ヘビーだが、とりあえず問題なのはそこではなかった。

数日前、その死んだはずの妹から手紙が届いたのである。俺の住んでいるアパートの郵便受けに、白い封筒で。

差出人は不明。いつ届いたのかも全く不明。ただ、俺には妹から手紙だという確信めいた想いがあった。

「……本当にあった」

今自分がどんな顔をしているのか想像できない。

手にしたのは一冊の本だった。本……。本、なのだろうか？ ぱらぱらとめくってみるが、そこに記されている文字は活字ではない。ハードカバーの中身、書面は完全に手書きだったのである。まっさらな書面に、恐らく彼女が記したのであるう様々な文字。それは長い長い時間をかけて、不思議と当たり前のように俺の手元に届いた。本は机の引き出しに入っていた。ちなみに引き出しは二つある。左右に一つずつだ。左が彼女ので、右が俺のアイテムボックスだった。本は左側に入っていた。

ただ、本が入っていたただけだ。引き出しを全部引つ張り出してみたが、他には何もみあたらなかった。手書きの本が一冊だけ。

雪で湿った上着から封筒を取り出し、もう一度手紙を読み返した。俺はそれから椅子に腰掛け、ランプを机の上において本を開いた。

夏流、元気ですか？ 私は多分、元気ではないでしょう。

この手紙が届いたら、秘密基地に行ってみてください。夏流に見せたかったものが、そこにあります。

何もかも、ただそこに残してきました。夏流ならきっと私の思いに気づいてくれると信じています。

もしかしたらとても大変な事かも知れませんが。夏流を苦しめる事になるかも知れません。

それでも私は、夏流に託したいのです。お父さんでも、お母さんでもなく、他の誰でもなく……夏流に。

あの夏を覚えていますか？ 私は今でも鮮明に思い返す事が出来ま

す。
なっちゃん。きっと、あの時のなっちゃんは、正しい事を言っていたんだね。
そろそろ、お別れです。書き始めたらきりがなくなっちゃんから…
…名残惜しいけど、これまでです。それじゃあ、お元気で。
最後に……さようなら、なっちゃん。ありがとう。

本城 冬香。

「……」

気づけば夜になっていた。

本を読んでいたはずなのだが、どうやら眠ってしまっていたらしい。目をこすりながら窓の外を見ると、すっかり日が暮れてしまっていた。

「^{トウカ}冬香……」

ポツリと呟いた名前。まあ、そういう気分だったんだろう。大きく身体を伸ばし、首を鳴らしながら立ち上がると、足元から悲鳴が聞こえた。

「み……みず……」

「うおおあつ!?!」

驚きのあまりマンガみたいなりアクションをとってしまった。だがそれも仕方のない事だ。つい先ほどまで俺一人だけだったはずの屋根裏部屋に、見ず知らずの男が倒れていたのだから。

若い男である。所謂タキシード姿であり、ステッキとシルクハットは床の上に転がっていた。見るからに顔が悪い。今にも死んでしまいそうだ。そういえばこんなのを映画とかで見たこともある。

「みず……」

「……あんだ、どこから入ったんだ？」

「そんなことより水を……」

「そんなもんねえよ！！ 屋根裏に蛇口着いてたらビックリだろうが！」

「それもそうですね」

男は何事もなかったかのように立ち上がった。俺はもう、何も言うまいと思った。

「これはこれは。とりあえずジョークで場を和ませようと努力してみたのですが……。ユーモアのセンスはお持ちになっておられないようで」

シルクハットについた埃を叩き落としながら見下すような視線で俺を見つめる男。俺はただ口をぽかーんとあけたままそれを見ていた。言うまでもなく、ここは俺の実家だ。まあ、古い実家の蔵とかには何か幽霊とか入っていたりするもんだが、別に囲碁って感じの格好でもないし、なんだこいつ。

とにかく突然過ぎて疑問だらけで思考が追いついていない。ただただ呆けることしか出来ない。

「……大丈夫ですか？ 貴方がホンジョウナツル様でよろしいのでしょうか？」

「え？ あ、ああ……。確かに俺の名前は本城夏流だが……」

「フフフ。今、何故俺の名前を知っているんだ……とか考えたでしょう？」

「あ、ああ……。そりやな」

「そんなありきたりなりアクションで人気が取れると思ったたら大間違いですよ」

やれやれと肩を竦める長身の男。無駄に腹が立ったのでとりあえず蹴倒しておく事にした。

「ぐはあっ！」

と、悲鳴を上げながら本棚に突っ込んでいく男。腕時計で時間を確認すると、あれからまだ一時間も経過していなかった。

一体どこから入ったのか。入り口の鍵は……閉めたかどうかは定かではないが、そもそもこんな森の奥にいる時点で十分不審だ。

それにしても妙だ。この男、雪などで汚れた様子が一切見られない。まるで最初からこの屋敷の中に住んでいたかのようなようだ。

「……この幽霊屋敷に住み着いてたのか？」

「まあ、そうとも言いますが……乱暴はやめなさい！ 弱いものをいじめて楽しいのですかッ!？」

自分で言うな。

「とりあえず自己紹介をさせてください、ナツル様」

「……お前の名前に興味はねえ。とっとと出て行け」

「そうはいかんざき」

殴った。

男は血を吐きながら土下座をした。

「お願いします、話を聞いてください……」

「……聞いたら帰れよ」

椅子に腰掛け、土下座する男の頭をぐりぐりと踏みつけながらふんぞり返る。なんだか良くわからないが、とりあえず悪い奴でもなさそうだった。

「ワタクシの名前は、ありません。ちょっと!! 話は最後まで聞きなさい! 貴方はすぐ暴力で物事を解決しようしますが、それはいけないことですよ! 平和的に話をするという選択肢は存在しないのですか!？」

「……まあいいだろう。続ける」

振り上げた拳を引っ込めたため息をついた。男も安堵したのか、きりつとした表情に戻り話を続ける。

「ワタクシのご主人は、ワタクシの事を『ナナシ』と呼んでいました。ですが名称など形式上の物……特に、ワタクシにとっては必要なものではありませんので、ワタクシのことはナナシとお呼び下さい」

タキシードの男、ナナシはそう言って深々と頭を下げた。

長い白髪と真紅の瞳。日本人とは言い難い整った顔立ちで微笑むその姿は、間違いなくイケメンなのだが、先ほどのなよなよした態度を見ている俺の目にはその姿がかつこよく映る事はなかった。

「無論、貴方に用件があるからこそここにやってきました。手っ取り早く話を進める為に、あらかじめ明言しておきます」

「何をだ？」

ナナシは微笑み、それからシルクハットを被って背を向けた。

「今からお話する事に関して、貴方は全ての自由と権利を所持しています。話を途中で聞くのをやめるのも、最後まで聞くのも、それを信じるも信じないも貴方の自由です」

「はい？」

「結果、貴方は『選択』する事になる……ということを、心の片隅に残して置いてください」

わけがわからないセリフだったが、ナナシの態度は本気であるように思えた。

他人の真面目な話を無下にするのもあれなので、俺はしぶしぶ頷いて話の続きを聞くことにした。

難しい言い回しをしているが、要はここから先はご勝手に、ということだ。ならせいぜい勝手にさせてもらおうじゃないか。

「ワタクシの役目は、ご主人の願いを叶えることにあります。そのためにワタクシはもう何年もここで貴方を待っていました」

「ご主人……願い？」

「単刀直入に申し上げましょう。貴方が手にしているその名も無き本……それを、完成させて欲しいのです」

俺の手元には、冬香が残した一冊の本がある。
タイトルは……そう、ナナシの言う通りまだつけられていない。白紙のタイトルをじっと見つめていると、ナナシはゆっくりとページをめくった。

「先ほど貴方はこの本を全て読み終えたところです。それはお分かりですね？」

「ああ……。えっと、俺はさっきまでこの本を読んで……読み終えたのか？ 一時間も経っていないのに？」

「読み終えた、というのとは違うかもしれませんが、とにかく内容を把握したはずです。それでは、内容を思い出していただけますか？」

「そんなのは簡単だ。さっき読んだんだし………？」

途端、俺は首を傾げていた。

何度も何度もつい先ほどまでの記憶を思い返してみるのが、まる

でそこだけがぽっかりと切り抜かれているかのように思い出す事が出来なかった。

ナナシを見つめると、そうなる事を知っていたかのように微笑んでいる。じつと睨みつけ、立ち上がった。

「何をしやがった!？」

「その質問に答えるのは少々難しいところです。とりあえず、この一頁目をご覧ください」

トントンと、指先で開かれた頁を叩いてみせるナナシ。そこには左側に文章が、そして右側には全画面を使って挿絵が描かれていた。挿絵に描かれているのは、どこかの神殿のようだった。右画面半分はその神殿で儀式のようなものを行っている黒い髪の少女の様子が、そして下半分には、草原を慌てて走っている茶髪の少女の様子が描かれていた。

文章に目をやる。しかし、そこに描かれているのは一番上の部分にたった一行、一言だけだった。

「『始まりの日』?」

むしろそれはサブタイトルか何かのように見えた。

それにしても右半分がまるきり全部絵とは、まるで絵本だ。俺が読んだときは、こんな絵なんかなかったと思ったんだけどな……。

不思議な事は重なるものだ。始まりの日という一行は、淡く金色に輝いていた。まるでそれを読み上げる事を活字が待ち望んでいるかのようにも見える。

恐らく怪訝な表情を浮かべていただろう。俺の視線を受け、ナナシは腕を組んだ。

「その物語は、貴方に読み解かれる事を待っています。そしてそれを読み解くという事は他でもなく貴方の妹、ホンジヨウトウカの願いでもあるのです」

「……冬香の、願い？」

郵便受けに入っていた白い封筒。いなくなった彼女からの不思議な手紙。

導かれるようにやってきたこの場所で見つけた名も無き本と名も無き男。

そこに俺は、いなくなった妹の思惑を感じずにはいらなかった。

「貴方はその物語を読み解いてもいいし、読み解かなくてもいい。ただ、ホンジヨウトウカの願いを叶えるつもりがあるのなら、物語を読み解いてください。何、それほど不安に思う事はありません。嫌になったのならいつでも辞める事が出来ますし、貴方に危険もありません」

「……」

いかにも胡散臭いのだが、ナナシの言葉に嘘があるようには思えなかった。だからそう、きっと俺は自分の手で選ばねばならないのだろう。

妹が俺に託したものが何なのか……それを果たして知るべきなのか、知らざるべきなのか。

いや、答えなどとつくだに出ている。俺はそのために、ここまでやってきたんだ。

「どうすればいい？」

顔を上げて正面からナナシを見つめた。

目を細め、男は微笑んだ。それから深々と頭を下げ、金色に光る始まりの文字を指差す。

「よろしいですね？」

「ああ」

「それでは参りましょう。全ての始まりの日へ」

文字は金色に光っている。

神殿の女も、草原を走っている女も、今はとにかくワケがわからない。ただ、俺はそうする事が前に進むきっかけになるのだと知っているかのように、深く息を吸い込み、

「『始まりの日』へ」

そう、眩いていた。

眩い金色の光が本からあふれ出し、部屋を眩く染め上げていく。そうして何もかもが光に溢れた頃、上下左右の間隔が消滅し……俺の意識は途切れていた。

それが、様々な問題やら冒険やら何やら、そんな彼女の仕組んだゲームに俺がハマってしまった瞬間だった。

プロローグ（後書き）

えー、なんかファンタジーを書きたくなりました。

今回掲載分は事前に書いてあったもので、とりあえずプロローグ部だけ掲載して後はちまちま上げてきます。

年末年始は忙しいので、更新ペースは微妙になるかもしれません。何はともあれよろしくおねがいします。かしこ。

始まりの日（１）

その世界には、雨が降っていた。

一目でそれが葬式だとわかったのは、誰もが喪服を身に纏い、黒い参列がぞろぞろと続いていったからだ。

草原の中にある墓地を、盛大な飾りつけの棺桶が横断していた。神官と思しき偉そうな服装の連中が棺桶の周りを囲い、甲冑姿の騎士がそれを守っていた。

列の邪魔にならぬように、人々は皆道端から棺桶を見送っている。死んだらしいやつが誰もに愛されていたという事は、皆が皆涙を流していることからよくわかった。

大往生、だったのかもしれない。様々な人に涙を流して死を惜しんでもらえるのなら、それはただ悲しいだけの死ではない。

そんな事を何故か冷静に考えることが出来たのは、その景色に現実味が無かったからだろう。

「おじいちゃん……。おじいちゃん？」

小さな声が聞こえた。

その世界は無音でしかも無色。くすんだ色彩の殆どない世界の中、その声の主の姿だけははっきりと彩られていた。

幼い少女だ。まだ五歳とかそんなものではないだろうか。長靴を履き、泥道を危なっかしい足取りで歩きながら、隣を歩く老人に声をかけている。

幼女の手を取り歩いているあの爺さんが恐らくおじいちゃんなのだろう。爺さんは振り返り、少女を見下ろした。

「ねえおじいちゃん……。お父さん、どうしちゃったの？」

爺さんは答えなかった。少女は何もわかっていないのか、目を丸くして老人を見上げている。

葬儀の列に取り残され、老人と少女はその場に立ち尽くしていた。やがて老人は何も言わず少女を強く抱きしめると、景色はゆっくりと見えなくなつた。

というか、なんだこれは？ 何のワンシーンなんだ……？

何が起きているのかもさっぱりわからないまま、俺はその景色の向こう側に急速に意識を吸い込まれて行つた。

始まりの日（１）

「はわわわあああゝゝつ！？」

「……ぬぐおつ！？」

誰かに思い切り踏みつけられる激痛に思わず悲鳴をあげる。

鳩尾に踵をねじ込まれたのが、胃がきりきりする。傷口を押さえながら身体を起こすと、そこはどこかの草原だった。

どこまでも広がっている豊かな緑の景色。突然の展開に全く着いていけない俺の頭を他所に、俺を踏みつけた奴は何故か地べたに転がっていた。

というか、俺も寝てたのか。こんな道端でか。ていうかここはどこだ。そしてお前は誰だ。

「い、いたあい……。何かふんづけちゃったのかなあ……。うう」

顔面からモロにダイブしたらしい女は鼻頭を押さえながら目尻に涙を浮かべていた。ふと振り返ったその視線が俺の視線とぶつかった

時、時間が停止した。

茶髪の女の子だった。長い髪を背後で括り、白銀の髪飾りがきらりと太陽の光を反射して光っていた。

上から下に視線を動かす。同じく白銀の服装。アーマークローク、とても言うのだろうか？ 一部鎧化された不思議な服装の少女は、両手で馬鹿でかい剣を抱えていた。

緑色の瞳がきらきら輝いている。真ん丸く見開かれた瞳と間抜けに開けっ放しな口が、どうにも知性というものを感じさせないが、顔立ちは悪くない……むしろ可愛らしいほうだろう。

しかし問題は、この子供が俺の鳩尾を踏んづけて転んだ、ということにある。

「……何か言う事はないのか？」

「……………えっ？ あっ、そうですね……。えと……？ 寝心地はどうですか？」

「違うわっ！！ まず踏んだ事を謝るべきだろうがっ！！」

「ひゃあっ！？ ごめんなさい、ごめんなさいいっ！！」

両手で頭を抱えてぺこぺここと平謝りするその姿を見ると、まるで俺がいじめているかのように思えてくるが、別に俺は悪い事をしているわけではない。

ついでに言えばここまでへこへこするようなこともない。とりあえず謝ればそれでチャラになる程度の事だ。そのせいでこいつは転んだわけだし。

「ごめんなさい、ごめんなさいい！ あの、お怪我はありませんか？」

「怪我はないよ……むしろお前の方が鼻血出てるが」

眉を潜めながら指差すと、少女の鼻からはぼたぼたと血が流れていた。むしろお前が大丈夫かと。

顔面から思い切り大地にダイブしたのだから当然の結果のようにも見えた。せつかく綺麗に光沢するアーマークロークも鼻血で汚れてしまっていた。

「ああう！ 神聖な勇者の正装があつ！」

「ああつ、ちょっと待て！ そんな乱暴に拭うな！！ 余計染みになるだろうが！」

座ったまま懸命のクロークの血を拭おうとしているのだが、そんなにゴシゴシこすったら余計に広がってしまう。

上着のポケットからハンカチを取り出し、クロークの血を拭う。少女は目を丸くして俺の作業を見つめていたが、鼻に強引に布を詰められ流石に意識がはつきりしたようだった。

「ふあ。ふいまへん……あの？」

「ん？ 何だ？」

「どふおはで、おあいひはことがありまふえんか？」

「……もついいから喋るな」

何で俺はこんなところで鼻血だしまくりの女と話しているんだろうか。めまいがしてきそうだ。

改めて周囲を眺めてみるが、だだっ広い草原が果てしなく広がっているだけで人工建造物の影さえない。爽やかな風が吹きぬけ、とてもいい天気だ。

絶望的なまでにどこなのかわからない。手がかりはこの知性の低そうな女の子だけなのだが……。

「ん？　そういえばお前、『急いでいるんじゃないのか？』」

自分の口から出た言葉にはっとする。

そう、俺はこの少女に見覚えがある。剣を抱えて草原を急ぐ少女……間違いはない、それはあの本の挿絵にあった……。

「ああっ！　そうれひた！　遅刻しちゃいまふ！」

もう血が止まったのか、詰め物を取り出し、慌てて立ち上がる。スカートについた埃を叩いて落とし、それからおずおずとハンカチを差し出した。

「あのう、これどうしたら……」

「返さなくていい……。そんな鼻血まみれのハンカチ持ち歩いてたら頭おかしいやつだと思われるだろ」

「あう……ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさいですー……」

「もういいから……先を急いだらどうだ」

「は、はい。ごめんなさい……。それじゃあ、行きますね。お昼寝がんばってくださいね！」

「昼寝違っわっ!!」

悲鳴を上げながら逃げていく少女を見送り、深くため息をついた。しかし、せっかく人に会えたのに何も聞かないまま行かせてしまったが、それでよかったのだろうか。なんだか先を急がせなければならぬような気がして、なんとなく先に進ませてしまったのだが……。

「その選択は正しかったのではないでしょうか」

ふと、声が聞こえた。無駄に男前な声の持ち主を探し、俺は足元を見下ろした。

そこには草むらから顔を出す一羽のうさぎの姿があった。うさぎの頭の上にはシルクハットが乗っていて、俺は直感的にそれがナナシなのだとわかった。

何でわかったのかといわれても困るのだが、とにかくそれは間違いない。ナナシだった。しかもシルクハット以外は全くの完全なうさぎ。生のうさぎだ。もう少しマスコットの姿になれなかったものかと思うと色々と言いたいこともあるが、とにかくそれは本物の動物だった。喋る、しかもナナシであるということを除けば。

「おや、あまり動揺していないようですね？ 流石はナツル様……トウカ様の兄君であるだけの事は……いたたたっ！ やめなさい！ 何故耳を引っ張るのですか!？」

「いや、本物かどうか確認したくて……。それで、これはどうなってるんだ？」

耳を掴んで持ち上げる。ナナシの目は真ん丸く見開かれ、知性のかけらも感じられない。まあ、こういう動物の目ってのは得てしてみ

んなそんなもんだが。

「……ここは、『始まりの日』の中です。単刀直入に申し上げますと、今まさに貴方は物語を体感しているというわけです」

ぶらぶらと目の前でゆれるうさぎ。まあ、色々と厄介な事に説明をつけるにはそんな摩訶不思議な設定が必要だとは思うが。

「ってことはなんだ？　ここは本の中ってことか？」

「その呼び方は少々不適切ですが、まあ概念的にはそれでいいでしょう。ワタクシのシルクハットの中に手を突っ込んでみてください」

「……なんか気持ち悪いな」

「まあそう仰らずに。一度やってしまえば病み付きになるかもしれませんよ」

うさぎの帽子を引つたくり、うさぎを地面に投げ捨てる。

何やら悲鳴が聞こえたが無視して帽子の中に手を突っ込んでみると、小さいシルクハットの中には外見からは想像出来ないほど広い空間が広がっていた。

ごそごそと手探りで漁っていると、中に何やら紙のような質感のものが眠っていた。ぐいっと引っ張り出してみると、それはあの本だった。

「ドラ　もんみたいだな……」

「マスコットキャラ的な意味では同じだと言えるかもしれませんが、その話題には触れないように」

色々な意味でまずいしな。

勝手に本を開くと、やはり『始まりの日』以外のページは白紙になっていた。だが、変化はもう一つあった。

『始まりの日』というサブタイトルの下に、文章が浮かび上がっていたのである。めばしい変化はそれだけだったので、俺はその部分を読むことにした。

十五歳の誕生日を向かえ、勇者の資格を得る大切な儀式の日。リリア・ライトフィールドは、町外れの神殿に向かって急いでいた。大切な日であることは重々承知だったのだが、強い責任感と期待から、前日寝付く事が出来なかったリリアは、すっかり寝坊してしまったのである。

約束の時間まで間もない時目を覚まし、慌てて着替えを済ませたりリリアは家を飛び出した。通いなれた石畳の町並みを抜け、草原へ急ぐ……。

「つて、これは……？」

「物語が進展した事を示しています。どうぞ続きをくらんどさい」

「あ、ああ」

さらにその下に続く文章へと目をやる。

慌てて草原を走っていたリリアは躓き、盛大に転んでしまう。その時に大事な勇者の証をどこかへ落としてしまい、約束の時間に間に合ったものの、リリアは神官にこっぴどくしかられてしまうのだった。

人々に笑われ、恥ずかしい思いをしたりリアだったが、何とか儀式は無事に終了し、勇者になる為の第一歩が踏み出された。

しかし、勇者の証を家に忘れただけだと嘘をついてしまったリアは一人で真夜中まで草原を探し回り、夜明け頃ようやく勇者の証を見つけ、泣きながら帰路に着くのであった……。

「……あいつ、相当ドジだな」

見ると挿絵も変化していた。暗闇に包まれた草原の中を、女の子が泥だらけになりながら泣いている絵がゆっくりと浮かび上がる。それがまた絵本のようなやわらかいタッチで描かれており、とてもかわいそうに見えた。

とりあえず判った事がいくつかある。あの少女はリア・ライトフールドという名前であるということ。そして俺とぶつかったせいで大切なものを落としてしまったということ。ついでに言えば、このまま行けば儀式で笑いものになるということだ。

状況を把握し、俺は足元の草むらを漁ってみることにした。しばらくすると、掌に乗るような小さな宝石箱を見つけ出す事が出来た。

「これか……?」

開く事は出来なかった。何やら不思議な力で止められているらしい。振り返るとうさぎが足元で跳ねていた。

「貴方をお願いしたい事とは、まさにそれなのです」

「……それ?」

うさぎが見つめる先には俺の掌の上の宝石箱がある。

「この物語の主人公は彼女、リリア・ライトフィールドです。しかしかんせん作者の愛を受けることの無かった彼女は、今後恐ろしいほど不運に見舞われることになります」

「……冬香はじゃあなんであいつを主人公にしたんだろな」

「とにかく、このままでは主人公のリリア、しいてはこの世界全てが不運に見舞われる事になります。貴方にはこの決まってしまうている筋書きをより良い方向に導き、リリアを立派な勇者に育て上げて欲しいのです」

腕を組み、状況を整理する事にした。

あいつが残した名前のない本。その内容は恐らくファンタジー。この世界はその本の開いたページの中の内容が再生される、所謂シミユレータみたいなもの。

そしてこの物語の主人公はあの少女、リリアであり、そのへっぽこ勇者であるリリアを一人前にすること……それが、このゲーム……俺の役目の正体ということらしい。

「……つまり、お前はその案内役？」

「ええ。お察しが早くて助かります」

「だったら何でうさぎ……。いや、気にしたら負けか……」。

「それほど気難しく考える必要はありません。ページごとに出てくる課題を解決するシンプルなゲームです。嫌になったら中断も出来ますし、軽い気持ちでやっていただければそれで構わないのです」

「……どうやれば終わるんだ？」

「とりあえず各シナリオごとの最後まで行けば、先ほどまでワタクシたちがいた屋根裏部屋に戻る事が出来ます。逆に言うと、それまでの間はこの世界に留まる事になりますし、一度始めたらそのシナリオが終了するまでは戻れません」

とりあえずぐりぐりとうさを踏みつけてやることにした。何やら苦しい鳴き声が聞こえたが気にしない。

「そういうことは先に言え……な？」

「……ぐええええ」

全く不親切な案内人だ。うさぎの姿でも容赦はしない。思い切りぐりぐり踏んでやる。

「と、とにかくこんな事をしている場合ではありませんよ！ 早くその落し物を届けないと、リリアが笑いものになった挙句、一人で夜な夜な彷徨うことになってしまいます！」

「いいんじゃないのか？ このままでも死んだりするわけじゃねえし」

「言ったでしょう？ よりよい状況にするのが貴方の役目です。それと、その本……『原書』は貴方が持つていてください」

ハードカバーの地味な本を見つめる。なるほど、つまりある時点まで物事が確定したらここに出てくるわけか。

あとは確定している出来事から悪要因を取り除くように俺がすればいいというわけだな。

「ま、いいか。お前の言うとおり、気軽に楽しむとするよ」

ばたんと本を閉じて大きく伸びをする。あいつが作った世界なら、難しく考えずそれをシンプルに楽しめばいいのだ。

それに、この『役目』を果たしていけば……あいつの見ようとしていたものが俺にもわかるかもしれない。

いわばこれは冬香の出した俺への課題だ。このゲームをクリアしなければ、知る権利はないという挑戦だろう。

「あいつらしいか……。に、しても　まるでファンタジーだな」

「あまり驚きがないようですね」

「慣れた」

ナナシは目を真ん丸くしていた。それから俺のズボンをカリカリと引っかきだす。

「頭の上に乗せてください。ワタクシも一緒に行かねば色々と不都合があるはずです」

「頭の上かよ……」

嫌々うさを頭の上に乗せる。当然重くなる。これは肩が凝りそうだ……なんて事を考えながら俺は駆け出した。

草原は果てなく続いている。うさぎの指示する方向に向かい走るのだが、殆ど真っ直ぐなので迷う事はなかった。

「ついでに質問していいか？」

「なんでしょう?」

「走って追いつけるのか?」

「儀式まではまだ僅かに時間があります。序に言うと、リリアは体力ありませんので走り続けて神殿にたどり着く事は難しいでしょう。休み休み向かっているとすれば、今からでも間に合う可能性は十分にあります」

いや、それは勇者なのか?

「十五歳の誕生日になると、冒険にでも出るのか?」

「似たようなものですね」

ドラ エミたいだな。ポ モンか? まあどっちでもいい。つまりはそのまんまってことか。

雪解け水で濡れた上着も靴も今はもう気にならなくなっていた。現実には雪が降るような寒さなのに、ここは春のように暖かい。

すがすがしい風が通り抜け、ただ走っているだけなのにとても気分がよかった。深く息を吐き出し吸い込む……それだけで、何となく爽快だ。

「あれが神殿か?」

進んでいるうちに小川が見え始め、さらにそれが進んだ丘の上に巨大な建造物が見えた。

いかにも神殿といった様子で、荘厳な気配が漂っている。頂上についている鐘が鳴り響き、それを合図のように俺は一度足を止めた。

人の気配は周囲に無いが、何となくあの神殿には人が集まっている気がした。それはきつと儀式の様子を挿絵で見ているからなのだろう。

その記憶から、ざっと内部の様子は理解していた。挿絵にはそういう力もあったのかもしれない。とにかく迂回し、人気のない方向から神殿に忍び込む。

内部に入ると人の声が聞こえてきた。沢山の人がいるはずなのに声は一つであり、それは神官が教典を読み上げている声だと気づく。何やらわけのわからん言語で流れるありがたいお声をBGMに俺は広い廊下を走った。肝心のリリアの姿が見つからなければここまで来た意味がない。

「どこ行っただ、あいつ……」

きよろきよろと周囲を見渡す。息切れがだんだんと収まってくる頃、廊下を這うように歩いているリリアの姿を発見した。

「あうっ……ない、ないよう……っ！ あれがないと、勇者にならないよううう……っ」

もう既にリリアは泣いていた。ぼろぼろと涙を零しながら石畳の床を這いずり回っている。その姿があまりに惨め過ぎて俺は先のことを考えると頭が痛くなった。

「……リリア」

「ひゃいつ！？ リリア・ライトフィールドですが、なんでしょうか！？」

背後から声をかけると、勇者のたまごは慌てて立ち上がった。

そうして再び二人の視線がぶつかり合い、時間が停止する。やはりありがたいお言葉だけがBGMとして流れ続け、俺は小さくため息をもらした。

「探し物はこれか？」

宝石箱を差し出すと、ぱあっとリリアの目が輝いた。

「わあ〜っ！ これです、これ、これなんですっ！ ありがとうございます、ございます、ごめんなさい、すいません！ ありがとうございます！」

「わかったから早く行きなさいな。このままだと笑われるぞ」

「そ、そうですね……。あれ？ あのう、あなたはさっき……」

「俺の事は後回しだ。とにかく急げ」

「は、はいい……。！ 本当に、ありがとうございます！ 昼寝の人っ！」

「昼寝違うつつつてんだろボケエツ！！」

肩が外れるんじゃないかってくらい元気よく両手をぶんぶん振り回し、リリアは走り去っていった。

間も無くありがたいお言葉が聞こえなくなり、俺は安堵の息を漏らした。

「で、これでいいのか？」

「上出来です。ほら、原書をもらってください」

『始まりの日』のページをめくり、俺はほっと胸を撫で下ろした。

「どうやらうまくいったみたいだな」

そのページの挿絵は変わっていた。

神官の前に跪き、儀式の洗礼を受けるリリアの姿。そしてその周囲の人々は、勇者の誕生に拍手を送っていた。

十五歳の誕生日を向かえ、勇者の資格を得る大切な儀式の日。リリア・ライトフィールドは、町外れの神殿に向かって急いでいた。大切な日であることは重々承知だったのだが、強い責任感と期待から、翌日寝付く事が出来なかったリリアは、すっかり寝坊してしまったのである。

約束の時間まで間もない時目を覚まし、慌てて着替えを済ませたりリアは家を飛び出した。通いなれた石畳の町並みを抜け、草原へ急ぐ……。

慌てて草原を走っていたリリアは躓き、盛大に転んでしまう。その時に大事な勇者の証をどこかへ落としてしまう。必死で探し回るリリアだったが、何とか時間までに勇者の証を見つけ、無事儀式を受けることが出来た。

ほっと胸を撫で下ろし、ふと、落し物を拾ってくれた誰かの姿を探してみたが、その姿はどこにも見当たらなかった。

そっと、形見の宝宝箱を開くと、そこには淡く光沢する銀色の宝石をあしらった指輪が輝いていた。

それを強く胸に抱き、少女は踊りだしそうな足取りで帰路に着いた……。

「それでは、戻りましょうか」

「ああ」

少しだけいい事をした気分になり、俺まで嬉しくなっていました。
本をパタンと閉じ、草原から神殿を振り返る。

ゆっくりと消えていくその景色を見つめながら、その先にある何かを知りたいと思った。

何はともあれ、こうして俺の初めての仕事は終了したのであった。
。

始まりの日(2)

「つとと……。帰って来たのか……？」

気づけば俺は現実の屋敷に戻ってきていた。急激に誇りっぽくなつた空気に思わず咳き込み、一息付く。

隣には相変わらずいけしゃあしゃあとした様子でナナシが本棚から本を取り出し眺めていた。どうしてこいつはこう、最初から居ましたよ、みたいな顔でここにいるんだ……。

「どうでしたか？ 物語に干渉したご感想は？」

「……つて、言われてもなあ。まあ、とりあえずあの子が無事に儀式を終えられて良かったよ」

「そうですか。じゃあ良かったじゃないですか」

何でお前他人事なんだよ。お前のせいでこうなってるんじゃない？ ナナシは本を閉じると一つしかない椅子の上に腰掛ける。それから本を俺に手渡し、シルクハットを胸に抱きながら微笑んだ。

「おさらいでもしましょうか？」

俺はしぶしぶ頷いた。ここいらで少し状況を整理しておかないと、後々ワケの判らない事になりそうだ。

本城夏流……つまり俺は、先ほどあの本の中の世界に入った、という事。その本は妹の本城冬香が作ったもので、冬香が生み出したストーリーに俺は干渉している、ということ。

俺の行動により登場人物の結末が変化し、世界も変わっていく。その案内人となるのがこの本……『原書』であり、そしてこのタキシード男件うさぎのナナシであるという事。

「……で、いいのか？　まだちょっと正直よく判らないで混乱してるんだが」

「いえ、充分です。それにしても本当に落ち着いて居ますね？　もう少しこう……な、なんで僕がこんな事しなきゃいけないんだ！？　とか、そんな感じで喚くシーンではないですか？」

そんな事を言われても困る。正直ここに来たのは高校が冬休みで暇だったからという理由もある。勿論本命は……いや、それは考えないようにしよう。

理由はともあれ、別段ここから立ち去るような理由もまた見つからないのが事実。それに、冬香が作ったものに俺が興味を持たない方がおかしい道理だろう。

腕を組み、少々考え込む。しかしどちらにせよそう悪い状況であるようには俺には思えなかった。ナナシを正面から見つめ、俺は首をかしげた。

「喚こうが騒ごうが現実是不変ならないだろ？　お前は最初、『ゲームのつもりで楽しめばいい』と言った。俺はその通りだと思った。それ以上に理由があるか？」

俺の言葉にナナシは微笑を浮かべて応えた。こいつが何を考えていたのかは……ぶっちゃけ謎である。

溜息をついて携帯電話のディスプレイを確認する。時間は先ほど本に入った時から数分しか経過していなかった。その様子を見て、慌ててナナシが付け加えた。

「ああ、中での時間はこちらにはほんの僅かにしか影響しません。中で何日も経過したところで、こちらでは関係のないことです」

「じゃあ、中で色々やってたら冬休み終わってましたハイ残念ってことにはならないんだな」

「そういうことですね」

なんともご都合主義だ。しかしまあそれくらいでないと面白くはないか。

振り返り、ナナシを見つめる。それから原書を手に取り、ページを捲った。

「次のシナリオが出てきてないぞ？」

「ああ、そうですね。それも含めてもう一度物語に干渉してみませんか？ 色々説明しなければならぬことはありますが、それは追々実際に見ながらした方が遥かに分かりやすいでしょうしね」

確かにそれもそうだ。ここでこの物語の設定だけ聞かされてもわけわからん。

というか、何故俺はこの本の事を忘れてしまっているのだろう。ついさっき読んだはずなのに、内容がぴくりとも頭の中で動こうとしない。

リア・ライトフィールドが主人公であるという事以外、この世界の事について何一つ思い出す事が出来ないのは、俺がこの本をきちんと読んでいなかったからなのか。

いや、どちらでも構わない。そんなに気負う必要はない。俺はただ、知りたくてここに来ただけなのだから。

「どうすればいいんだ？ 何も書いてなくても普通に入れるのか」

「ワタクシが同行していれば問題ありません。では、共に参りましょう。ホンジヨウナツル様」

胡散臭い発音で自分の名前を呼ぶ男。その手を取り、俺は二度目の干渉を開始した。

始まりの日（2）

「いてえっ！？」

何故こっちに来る時、まともな状態で目覚める事が出来ないんだろう……。

完全に背中から落ちた衝撃でまだ息苦しい……。しかしいつまでも倒れているわけにもいけないので身体を起こすと、そこには見た事の無いほど巨大な街が広がっていた。

それは完全にファンタジーの街並みだった。中央に聳える巨大な塔、それへ向かっていく上り坂にビツシリと立てられた建造物。石畳の上に尻餅を付いたまま暫くポカンと口を空けたまま停止した。

人通りはかなり多いが、誰も俺が無様にすっ転んでいるのを気にしたりはしなかった。それが多分都会というものなのだろう。そのあたりの乾いた心は現実と変わらないのか、とか考えながら立ち上がり、ズボンの埃を叩いて落とした。

「どこだよここ……。ナナシー？ ナナシいるかー？」

ナナシの姿が見当たらない。案内人が居ない事に気づき、冷や汗が頬を伝う。

というか、なんだ。こんな所に行きなり放り出されても、俺一人じや何をどうすればいいのかサッパリわからないぞ……。

「な、ナナシー！ どこいきやがったーっ!？」

やばい、まさか……高校生にもなつて迷子!？

いくらなんでもかつこ悪いぞ……。というかなんであいつは案内役の癖に俺の傍に居ないんだ？ 馬鹿なのか？ それじゃ存在する意味がねえだろうが。

街は広すぎてわけわからないし、そもそもここがどこなのかもわからないし、ナナシはいないし、皆ガンガン歩いていつて俺のことなんか眼中にないし……。

あれ、これ本当に迷子なんじゃないか？ だんだん冷や汗が止まらなくなってきた。こんな所で俺、まさかこのまま永遠に……？

そんな不安を抱えながら腕を組み振り返る。するとすぐ目の前に見覚えのある知性の無い目がぱちくりしながら俺を見上げていた。

「うわ、ビックリした……」

「うわぁ？ びっくりしましたか？」

口元に手を当てながら首を傾げたこの物語の主人公、リリア・ライトフィールド。ついこの間勇者の儀式を受けた彼女だったが、今でもどうやら元気そうだった。元気というかこう……成長してなさそうだった。

上から下までじっくりと舐めるように見やる。しかし色々な意味で成長していなさそうだった。

「あの……？　一ヶ月くらい前に、戴冠の儀式の時、勇者の指輪を拾ってくれた人……ですよね？」

一ヶ月前？　つい数分前のような気がするのだが、どうやら時間の経過は現実世界とイコールではないらしい。

いや、当然か。俺は時間の概念は関係なく、物語そのものにアクセスしている状態にある。介入地点が違う以上、時間の経過は等価でなくて当然か。

等等考え込んでいるうちにリリアの顔は本当に目と鼻の先にまで近づいていた。慌ててのけぞると、リリアはにっこりと微笑んだ。

「やっぱりそうですよね？　あの時の人とおんなじにおいがしますよ。」

において人を判別する主人公ってどんだけ。

まあ、隠すような事ではないし、隠したところで別に特はない。俺は素直に縦に首を振った。すると少女は目をきらきらと輝かせ、ぺこぺここと頭を下げ始めた。

「あの時は本当に本当にありがとうございました！　お陰でなんとか……なんとか勇者になる事が……ううう、もう死にたい……」

しかし途中でそのまま俯いてその場に両手を着いて落ち込んでしまった。何が起きたのかわからなかったが、恐らくあの短い一行の中で少女の心境に大きな変化が生じたのだろう……。

「そんな行き成り目の前で落ち込まれても困るからさ……せめて大通りではしゃんとしてようよ」

「そうですね……そうですね。こんな所にいるだけ私、迷惑です

よね……。リリアの存在が通行人の健やかな日常を阻害しているんですね……。はうっ！」

面倒くさくなったので襟首を掴み、ずるずると狭い路地に連れ込んだ。そのままぐいっとな引張ってその場に立たせ、顔をぐにやぐにやいじってしゃんとさせる。

「にゃ、にゃにをしゅるんでしゅか〜!？」

「そんなウダウダしててもしょうがないだろうが……。というか、こっちはそれどころじゃないんだよ、忙しいんだ。お前、この辺でこっ……シルクハットを被ったうさぎを見なかったか？」

「え、そんな可愛いうさぎ居ませんよ。ファンタジーじゃあるまいし〜」

お前この話の趣旨理解してる？

へらへらしているリリアは何故か立っているだけで幸せそうだ。こっ……というお脳に生まれる事が出来たら俺もさぞかし幸せだったろうが、なりたいとは思えない。

兎に角今はナナシと合流しなくてはならない。それが最優先であって当然だ。こんな所に一人放置しやがってあの野郎……。絶対あとで耳引っ張りまわしてやる。

というか……。今更ながらに気づいた。目の前にこの世界の住人がいるじゃないか。わからないならこいつに訊けばよかったんだ。

物凄く単純な事に気づき、俺は一人で勝手に納得して頷いた。小首を傾げているリリアの肩を叩き、表通りを指差した。

「リリア、こっ……ってどこなんだ？」

「ここはどこ、って……………へっ？　どこだかわからないのに道端でお昼寝してたんですか？」

こいつ…………。俺が倒れてたところから見てやがったのか…………。ていうか昼寝じゃないし…………こいついつまでそのネタ引つ張るつもりなんだ。ああ、こいつふざけてるんじゃないかって至って真面目なのか。俺が間違ってるのか。

「ここは学園都市シャングリラですよ？　英雄学園ディアノイアを中心に構成される、聖クイリアダリア王国が誇る要塞都市です」

行き成り横文字の地名が三つ出てきて俺は眉間に皺を寄せる。その俺の態度が怒っているかのように見えたのだろっ。リリアは急に口をぱくぱくしながら目を涙で潤ませた。

「なんで怒るんですか…………。リリア、質問に答えただけですよおう…………」

「怒ってない…………怒ってるんじゃないくて、何だかわからないんだよ…………。っーかそんなことでいちいちビビって泣くな！　勇者だろっが！」

「ふあ、ふあい…………ひぐ…………っ」

ああもう！　いらいらするっ！

こんなナヨナヨした奴が主人公？　勇者？　何を考えてこいつを生み出したんだ、冬香は…………。こんな奴どうやったって途中で挫折して終わりじゃねえか。

何かを決めて貫く人にはそれ相応の強さがある。こんな奴が勇者じゃ、この世界の行方は暗澹が立ち込めているな…………。

こつちがいらいらしている間にもリリアは涙を袖で拭い、唇を噛み締めてじつと我慢していた。場所が場所だけあって、まるで俺が苛めているみたいな状況になってしまったが……。

「あゝ。不良が女の子苛めてる」

背後からの声にどきりとして振り返ると、シルクハットにタキシードの胡散臭い男が俺を見ながらニヤニヤしていたので何も考えずに蹴り飛ばした。

男が石畳の上に転がると、その頭を靴で踏みつける。その様子がありにも怖かったのだろう、リリアはまた涙を流しながら壁にすり付いて首を横に振っていた。

「ぎにやゝゝっ！　なんでそんな通行人をいきなりしばくんですかゝゝ！？」

「しばくって……っ！　かこいつ俺の知り合いだから。おいナナシ、てめえよくも人を放置してくれたな……」

「いえ、だから……色々下準備が、ですね……。あなた本当に救世主やる気あるんですか……？　無力な人間を踏みにじって楽しいですか……？」

確かにこのままで会話もままならない。足を退けるとナナシは立ち上がり、顔面に靴跡をくつきりと残したまま深々と溜息を漏らした。

「全く、ナツル様はもう少しおらかな心を持つべきだとワタクシは考えます」

「なつ、る？　不思議な名前ですね？」

確かにリリアの言うとおり、こっちじゃ妙な名前だろう。そもそも向こうでだってそう居る名前じゃないだろうしな。

それになんというか……女みたいであんまり好きではない。腕を組んで背を向けると、リリアはにこにこ笑いながらもう一度俺の名前を口にした。

「なつるさんっ」

「何だよ……」

「えへへ、なつるさんって女の子の名前みたいで可愛いですね！」

思い切り睨み返すと、リリアは笑顔のまま停止した。体が小刻みに震えている様子を見ると、あまりの恐怖に硬直してしまったらしい。眉間に手をやり首を横に振った。どうしてこんなやつに会ってしまったのだろう。そればかりが疑問として頭の中で繰り返される……。

「で、ナナシ……。下準備って何してたんだ？」

「ええ、まあ。それは移動しながらお話ししよう。ここから見える街の中心部、ディアノイア目指して真っ直ぐ行きますよ」

英雄学園ディアノイア、だったか？ 天高く聳える塔、それがその学園だというのだろうか。とりあえず振り返ってリリアを見ると、路地の隅っこに膝を抱えて丸くなっていた。多分本人なりの自衛なのだろう……。

いつまでもあれに構っていては話が進まない。俺はもうどうでもよくなったので、ナナシの背中を押して路地を出た。

「あの子、ほつといていいんですか？」

「いいよもう……。それよりお前、こんな所まで連れてきておいでくだらない理由だったらぶっ飛ばすからな」

俺達はリリアを置いて歩き出した。ディアノイアへと続く大通りは一本道で、ひたすらに真っ直ぐ坂道を登っていく。

街を覆う巨大な城壁も、中心に聳える塔も、その街並みは全て俺にとっては未知の存在だった。自分が全く知らない世界の中に居るという事を実感すると、少しだけ気分がわくわくしてくるのを感じる。ナナシと共に歩き続け、たどり着いたのは巨大な塔を囲むように存在する文字通りの学び舎だった。沢山の生徒たちが出入りする門の前に立ち、ナナシは腰に手を当て振り返る。

「さて、何から説明したものでしょうかね」

「とりあえずこの街が学園都市シャングリラで、ここがその中心部の学園ディアノイアだってことはわかった。他に説明する事はあるか？」

「では、この学園がどういった学園なのか説明しながら歩くとしましょう」

英雄学園ディアノイア。

聖クイリアダリア王国が誇る、兵士養成学校。

この世界に存在する様々な技術を学び、様々な分野で秀でた人材

所謂後世に名を轟かせるほどの名誉を持つ人物、英雄を生み出すのがこの学園の目的らしい。

様々な学問と様々な武芸に通じた一流の教師たちによる超エリート学校。この学園から誕生した英雄は数知れず、この世界に存在する

教育機関の中では図抜けたレベルを誇る。

そんな話を聞きながら学園内の中庭を歩いていく。塔の周辺に作られた水路が学園中に張り巡らされ、木々は生い茂り古びた校舎の壁を侵食している。

光を浴びた水しぶきが生徒たちの姿を霞ませ、吹き抜ける風が頬を撫でて行く。まるで御伽噺の世界に迷い込んだような いや、実際その通りなのだろう。文字通りその場所は、自然に囲まれた美しい学園だった。

「俺をここに連れてきたという事は……」

「ええ。お察しの通り、この英雄学園ディアノイアはリリア・ライトフィールドが通う場所でもあるわけです。彼女はここの勇者学科で日々鍛錬しています」

「そんな学科があるのか。まるでファンタジーだな」

「まるでではなくファンタジー、ですよ」

校舎に入ると巨大なエントランスに出た。そこから伸びている螺旋階段を上り続け、最上階にまで移動する。

そこには扉が一つだけぽつんとあり、両開きな巨大なそれを開くと、そこには塔からの眺めが広がっていた。

遙か彼方まで続く草原と吹きぬける風が生み出す緑の波。街中で巨大な風車が回転し、ゆっくりと風羽の軋む音が聞こえてくる。

穏やかなメロディのようなその音色の中、正面にあるデスクに全身を甲冑で包み込んだ人物が座っていた。ナナシは帽子を脱いでその人物に小さく会釈した。

鎧の人物は席を立ち、こちらに歩いてくる。ずんずん歩いてくる。そこでようやく俺は違和感に気づいた。

「……いや、なんかさ……でかくねえか？」

余りにもこの最上階が広すぎて気づかなかったのだが、遠くから歩いてくる鎧はとても大きかった。2メートルは余裕で飛び越えてしまっている巨大な図体の鎧……恐らくあの机も物凄く巨大だったのだろう。遠いと判らないが、近づいてくると思い切り見上げ無ければ成らないほどだった。

完全に圧倒され、表情が引き攣る俺。それに対し、ナナシは全く以って余裕と言った表情だった。二人は知り合いなのか、会釈だけで挨拶を済ませてしまった。

「貴方が、本城夏流ですね？」

更に俺が驚いたのは、その声がとても可憐な少女のものだったということだ。でかい鎧の見た目からは怪物みたいな図体の巨漢しか想像出来ないのだが、聞こえてきたのは俺よりも年下なのではないかと思えるほど幼く、そして優しく威厳の在る不思議な声だった。

巨大な鎧は俺の前で肩膝を着く。しかしそれでも俺よりも高さがあるというのが驚きだ。鎧の中の様子は全く窺う事が出来ないが、とりあえず俺の事は知っているようだった。

「大丈夫、私は貴方の味方です。貴方がこの世界の外から来た救世主であるという事も、貴方がリア・ライトフィールドを救わねばならないという事も、既に聞き及んでいます」

「それは……いいのか？」

ナナシに視線を向けると、頷いて歩き出す。二人が知り合いならば、俺の存在を知っていても別におかしくはない……おかしくはないの

だが。

二人に続いて机まで移動する。するとやはりそれは超巨大だった。同じく巨大な椅子の上にどっかりと腰掛け、鎧は腕を組んで俺たちを見下ろす。

『自己紹介が遅くなりましたね。私はこの英雄学園ディアノイアの学園長、アルセリア・バフラム。貴方の協力者です』

「……知ってるみたいだけど、本城夏流だ。残念ながら肩書きはただの高校生だよ」

『件、救世主……そういう自覚が芽生える日もそう遠くはないでしょう。単刀直入に本題だけお伝えしたいのですが、宜しいですね？』

頷いた。どっちみち、うだうだ説明されてもわからないだろうし。鎧……いや、彼女は頷いてすぐに話を始めた。それは俺にとっても興味深い話だった。

『この世界は本城冬香という一人の人物の手で生み出された……その事実を知っているのは、恐らく私とその彼くらいのものでしょう。そして夏流、貴方は私たち以外の人間にそれを知られてはなりません』

まあ、当然だろう。異世界からやってきた人間……世界の創造主の兄にしてこの世界の運命を変え得る存在。言い換えればそれは神にも等しい。

そんな存在が居る事が分かれば、どんな影響を齎してしまうのかも判らない。この世界で生きるのが現実である彼女たちにとって、その混乱は望ましくないものだろう。

『貴方は他の誰にも感づかれず、リリアを勇者として一人前に育てなければならぬのです。その為に手っ取り早く、貴方はディアノイアの生徒の一人になってもらいます』

「まあ、そうなるよな」

学園の生徒に一番効率よく近づくには同じ学園の生徒がいいのは当然の事、ここに居ればこの世界の事ももう少し判ってくる事だろう。それに何より事情を知っている人間の膝元で行動できるのはありがたい。学校に通っている事がわかれば、当ても無く『なんとか立派にする』何てわけのわからない手段ではなく、『立派に学校に通わせる』とか、もう少し具体的にやるべき事も見えてくるはずだ。

「それにしても、一つだけ訊いてもいいか？」

『何でしょう？』

「俺がリリアを立派に育てられなかったら、その時はどうなるんだ？」

結局、その質問にアルセリアが答えてくれる事は無かった。だがまあ、大体の想像は付く。そういうルールのゲームなら、それが叶わない時点で決まっている結末は一つだけだ。

協力を約束してくれるというアルセリア。彼女の協力を得て、俺は少しだけこちらの世界での活動がしやすくなったことになる。

もうじき学園への編入手続きが終わり、俺も自由に学園を出入り出来るようになるだろう。そうすればまた、こちらの世界に馴染みやすくなる。

坂道に広がった芝生、風車の膝元に寝転がって俺は空を眺めていた。広い、青い、空。傍らにナナシは立ち、俺に問い掛ける。

「なんだか浮かない表情ですね」

「……まあな」

何だか全てが上手く行き過ぎている気がする。

いや、問題はこれからか。あの弱虫な女の子をどうにかして立派な勇者に育てる。

育てる、か……。そんな偉そうな事をする資格が、俺にあるのだろうか。

ごちゃごちゃ考えていても仕方がない。頭を振り被り、立ち上がる。

「で。俺は次に何をすればいいんだ？ 案内役」

とりあえず今はこの話を楽しむだけだ。

それ以上の事は……。あとで考えればいい。俺はそう自分に言い聞かせ、原書を手に取った。

そうして胸の中にしまいこんだ幾つかの疑問が、後の自分を苦しめる事になるとは知らない

始まりの日(3)

「で……今度はどこだ？」

一体どこに飛ばされるのか全く検討のつかない転送も三度目となると流石に慣れてくる。

今度は横やら背面やらからぶつ倒れる事は無かったものの、わりと高い位置から落とされたせいで着地の衝撃で足がジンジンする……。周囲をきよるきよる見渡すと、そこがディアノアの校門前である事が直ぐに判った。突如空中に出現して落下したというのに、特に驚いている生徒が居ないのがまた凄いな……。

「ナナシー。どこだー」

「はいはい、ワタクシならこちらですよ」

声は背後から聞こえていた、というよりうさぎが背中へはりついていて。耳を掴んで引つpegすと、落ちそうになったシルクハットを足で掴みながらナナシがじたばたしていた。

「何故そこを持つのですか!？」

「いや、他に持つ所ないじゃん……」

「……とりあえず、前回から数日が経過しているはずです。ディアノアに入学申請手続きに向かいましょう。道は分かりますか？」

「全然わかんねえけど、とりあえずエントランスに入って受付に訊

けばいいんだろ？」

というわけで、再び駆け足で校内に入る。学生たちは殆どが私服なので、この格好でも目立たないのはありがたい。そもそもこれだけ人通りの多い学園なら一々通行するやつの顔なんて覚えちゃいないだろうが。

開かれたままになっている扉を潜り、エントランスに出る。例のかい学園長、アルセリアの居る部屋へと続く螺旋階段を素通りし、受付へと向かう。

いくつかあるカウンターは生徒たちで賑わっていた。仕方が無いのでその中で一番空いているカウンターに並び、うさぎを肩に乗せたまましばし待つ。

その間行き交う生徒たちを眺めていたのだが、どいつもこいつも物騒窮まりない。平然と武器を持ち歩いているのがウヨウヨいるし、年齢もかなり千差万別で小さな子供も居ればおっさんみたいなのも歩いていた。

「つーか、ここ何する学校……？」

「ありとあらゆる学問と武芸を学ぶ学園、と言いましたよ」

「それには何……あんな剣とか使っちゃったりする学問とかあるの……？」

「ええ、ありますよ。あ、そろそろ順番ですよ」

前を見るとカウンターが開いていた。そして直後にぎよつとする。カウンターに並んでいるのはメイド服の女性……それはまだいい。ずらりと横に並んだ無数のカウンターそこに並んでいるメイドの顔が全て同じだったのだ。

全く同じ外見のメイドがにこにこしながら生徒からの用命を承っている姿に思わず冷や汗が走る。これ、かなり怖くないか……？

「ようこそディアノイアへ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

「あ、えつと……」

なんだっけ。異様な光景に一瞬自分がここで何やってるのかわからなくなってきた。

いや、実際わからない。何やってんだ俺……駄目だ、割り切れ。割り切るんだ。多分全員姉とか妹とか親戚とかそいうのだ。気にするな、俺。

「申請は済んでるんだけど、編入手続きの……」

「お名前は？」

「本城夏流……あー、どう書けばいいんだ？ スペルは……」

「ホンジョウナツル様ですね。学園長より承っております。特別英雄育成科に編入ですね」

何その胡散臭いことこの上ない学科。

「まだ設立して間もなく、この学科の生徒はナツル様一名のみとなっております。よって、チュートリアルセクションには他の学科の生徒が付き添う事になります。こちらの書類をお持ち下さい」

メイドから手渡されたのはこの学園の紹介パンフレットと、チュートリアルセクション受諾書というものだった。もう全く判らないの

で適当にハイハイ言って話を聞き流す。

次から次へと出てくる書類にガンガン名前をサインして、右から左へとメイドたちが流して行くその書類を見送る間も無く、ワケの判らない質問にどんどん答えた。

魔法経験はあるかどうか、とか。出身国はどこか、とか。もう本当にワケがわからないのでそのまま本気で記入した。魔法経験はないし、出身国は日本だ馬鹿野郎。

もう半ばやけくそだったので引つかかっても仕方がないと思っていたが、学園長から話に通っていたのか手続きはパスする事が出来た。思わず安堵の息をつき、パンフレットを片手にカウンターを後にする。

「あんなのでよかったんだろうか……」

「結構テキトーですから、よろしいのでは？　とりあえずはチュートリアルセレクションを受けましょう」

「何それ？」

「学校案内のようなものです。在校生の誰かが案内をしてくれるはずです。本来ならば同じ学科の生徒が担当するのですが、貴方はちよつと事情が異なりますので」

資料に再び目を通す。俺のセレクションの待ち合わせ場所はこのエントランスで、担当者はアクセル・スキッドというらしい。名前からして男だろうか。とりあえずリリアじゃなかったのだけが幸いである。

ここで待っていればいいのだろうか？　壁際に立ち、背を預けてパンフレットを捲る。まるで何かのテーマパークにでも迷い込んだ気分になった。

しばらくペラペラとページを捲っていると、正面から一人の少年が真っ直ぐに歩いてくる。腰からは細身の剣を二つ提げ、軽装の鎧を装備している。髪は金髪で、歩いてくる様子からも顔つきからも気さくな雰囲気を感じ取れる。

少年は俺の前で立ち止まると、ポケットの中からくしゃくしゃになった紙つぺらを取り出し、皺を伸ばして俺に突き出した。

「ホンジョウナツルってお前？ 俺、チュートリアルセレクションの担当しろって言われてんだけど」

紙にはつい先ほど俺が書類にサインしている時の混乱した表情がくつきりと描かれていた。写真かなにかをプリントアウトしたかのような精巧な画質だが、そんなもんいつのまにやられたんだ？

「ああ、俺が夏流だ。ってことはあんたがアクセル・スキッド？」

「そうそう、俺がアクセルだ。傭兵学科二年、得物はサーベル二刀流！ かつこいいだろ？ 好きな言葉は『成せば成る』で、このセレクションには遅刻回数をチャラにするからって絶賛タダ働き受領中だ。ヨロシクな、ナツル！」

俺の手を勝手に取り、ブンブン振り回すアクセル。遅刻回数をチャラにするからって……そんなやつに俺のセレクションを任せるなよ、学園長……。

言いたい事は色々あったが、アクセルの勢いで完全にすっ飛んでしまった。握手したまま手を握り締め、アクセルはそのまま強引に歩き出す。廊下をグイグイ進み、どこかへ向かっているようだ。

「お、おいっ!？」

「いやゝしかしホンジョウナツルって変な名前だよなゝ！ 生まれどこ？ 日本って何？ どっかの田舎町？ あーそっぴや服装なにそれ？ 初めて見んだけど、俺」

「いや、だからっ！？ どこ行くんだよっ！？」

「どこ行くって……学校案内するんだろ？ 俺この後バイト入ってんだよ。時間ぶっちゃけヤバイからさ、とっとと行こうぜ」

「腕を引っ張るなあああああっ！！」

こちらの話はまるで聞いて居ない強引な男、アクセル。その学校案内は、予想通り順調には行かないものだった。

始まりの日（3）

アクセルに腕を引かれてやってきたのは講堂が大量に並んでいる校舎だった。沢山の生徒が授業中だというのに行き交っている。

「うちの学校は基本的に授業は選択制で、自分でカリキュラムを組んで月の初めと途中、二回に分けて提出するんだ。学科によって違うらしいが、必要な授業数と単位が決まってて、それが必要最低限の必修授業になる。でまあ、他の授業は好きに出られるわけ」

だから授業をやっている横で他の生徒は平然と歩き回っているのか。賑やかな廊下から講堂を覗き込んでみると、生徒たちが熱心に授業を聴いていた。その様子は向こうと……いや、むしろ現実よりも真面目な雰囲気だった。

俺の高校はこんなに熱心に勉強しているやつなんていない。まあ多分この学校でもそうなんだろうが……そういう意味ではちょっと異常な空間だった。

「俺は傭兵科だから、あー……戦闘技術と格闘術……あとは兵法術？ それから……まあ四つか五つくらい必修の課目がある。お前も多分あると思うから、後でマニュアルチェックしとくといいぞ」

「それ以外の授業には勝手に参加していいのか？」

「勿論事前にカリキュラム申請が必要だけどな。学科に全く関係ない授業もタダで受けられるぜ。傭兵学科だからって魔法学を学んじやいけないわけじゃないし、魔術学科だからって剣術を学んじやいけないわけじゃない。ま、その自由な育成方針がこの学校のウリなんだけどな」

こうして聞いていると本当に学校のような。ただ勉強している内容がちよつとぶつ飛んでいるのがあれなんだけど。

アクセルは横で物凄い勢いで喋くり続けている。ちよつとついていけない感じの元気の良さだ。圧倒されたまま苦笑を浮かべていると、うさが耳元に口を寄せて言った。

「ちよつと楽しくなってきたでしょう？」

余計なお世話だった。

アクセルの案内は続く。巨大な食堂、中庭の公園、螺旋階段を上った二階、三階にも講堂があること、寮の場所、等等……。

一緒に学園を周っていくと確かに学園の事が分かってきた。だが逆にわけのわからない情報が増えまくり、自分の世界との違いをまざまざと見せ付けられる事になった。

そうして最後にアクセルが案内してくれれたのが学園の裏にある巨大な闘技場だった。中では何かイベントでもやっているのか、人々の盛況が聞こえてくる。

「ここが闘技場。生徒同士で戦ったり、試験会場になったりするから何度か来る事になると思うぜ。まあざっとだけ案内はこんなところかねえ。どうだ、勉強になったろ？」

「ああ、ありがとう。ところでアクセル、バイトはいいのか？」

「おつといけねえ！ そんなじゃ俺はもう行くけど、また何かわかんない事があつたら遠慮なく訊ねに來いよ？ 傭兵学科二年、アクセル・スキッドだ。名前だけ覚えとけばまた会えるのがこの学園だからな。ほんじゃまたな、ナツル！」

気さくな笑顔と共に少年は手を振って走り去って行った。その様子を見送り、深々と溜息をついた。

「どうでしたか？」

「とりあえずファンタジーって事は分かった……」

額に手を当てる。まあ、そろそろビックリしたりドッキリしたりするのは卒業した方がいいのかもしれない。こういうもん　ゲームなのだ。楽しむにはそれなりに適応しなければ。

「さて、とりあえずどうしたものか……」

一人でそんな事を呟きながらパンフレットを開くと、背後に何か違和感を覚えた。

違和感……そう、とても弱い力でジャケットの裾が引っ張られているのだ。振り返るとそこには案の定見覚えのあるちっこい女の子の姿があった。

「またお前か、リリア」

「は、はい！ あ……この間はごめんなさ……あれ？ なんでお兄さん、リリアの名前知ってるんですか？」

ぎくつ。そういえばそうだ。当たり前のように説明を受けてこいつがリリアだというのが頭の中にすっかり認識されていたのが裏目にでてしまった。

「そういえばこの間の時も、リリアって呼んでましたよね？ なんですか？ なんですか？」

「別になんてだっていいだろう？ お前は人にいちやもんつける為に呼び止めたのか……？」

「ちち、違いますよおう！ あ、この間はなんか……その、怒らせちゃったみたいだから、ごめんなさいしようと思って……そのう……」

胸の前で指先をちまちま弄りながら上目遣いにちらちらとこちらの様子を窺うリリア。そんなにビビられても正直困っちゃうんだけどなあ。

まあ、仕方が無い。肩をポンと叩くとリリアの体が跳ね上がった。しかし俺が怒っているわけではないというのが分かったら、ぱあっと花が開くように笑ってくれた。

何だかんだで悪い奴ではないのだ。ただまあちょっと、うっとうし

いだけで。

「リリアはどうしてここに？」

「はいっ！今日は校内のランキング戦の日ですからっ！大好きな人が出るので、ちょっとだけでも見ようと思って来たんですっ！」

校内ランキング戦。

戦闘学科の生徒にはそれぞれ戦闘能力によるランキング付けがされているらしい。成績や学園からの学費の融資など、様々な分野に係るそのランキング戦は月に何度かここ闘技場で行われ、一般客もこの日は学園内に入り、観戦が許されるらしい。

生徒たちはこのランキング戦で自分の英雄の資質を競い合い、将来の夢の為に日々刃を交えている……様な事がパンフレットに書いてあった。

確か戦闘学科の奴は強制参加のはずだから、リリアも闘技場には馴染みがあるはずだが……このはしゃぎよう、まるでスポーツの観戦に来たかのようだ。

「大好きな人って？」

「大好きっていうか、憧れていうか……えへへ。ゲルト・シユヴァインの観戦チケットって、結構手に入らないんですよ！はい！」

チケットを見せびらかすように俺に差し出した瞬間、強風がリリアの手からチケットを攫って行った。何が起きたのか全く理解できないと言った様子でリリアは目を真ん丸くしてぱちくりさせている。その首がゆっくりとチケットの飛んで言った方へ向けられる。俺は

冷や汗を流しながらその様子をひたすらに眺める。しばらくするとリリアは泣き出しそんな顔で俺のジャケットを引っ張った。

「リリアの目がちよつと腐ってるのかもしれないですけど……もしかしてチケット、飛んできました？」

「……………飛んでったな」

「いやあああああぁあぁあつ！？ なつ、なつ！ 並んで買ったのにiiiiiiii！！ わあああんつ！！！」

「泣いてないで早く探しに行った方がいいんじゃないか？」

「うあ、あああ……あうあ……っ」

どう見ても一緒に探してくださいって感じだった。

しょうがないので一緒に坂道を下り、学園の中庭に向かった。中庭は生徒で賑わっているし、やたらと多い水路と木々のお陰でどこにチケットが飛んでいったのかまるで推測出来ない。

「参ったな……。これじゃどこに行ったのか全然わからないぞ」

「う、うう……！ どこ行っちゃったの……？ 返事をしておくれ……！」

この子のお脳が心配でしょうがない今日この頃。床を這いずり回っているリリアに溜息を漏らし、俺も木々の中に顔を突っ込んで探し始めた。

そもそも、中庭の広さが普通ではないのだ。あっちこっち顔を突っ込んで捜してみるものの、どうにもチケットが見つかる様子はない。

リリアはぼろぼろ涙を流しながら顔を泥だらけにして一生懸命捜している。こうして横から見ていると、なんでこういつはいつもいつもこんなのだろつかと真面目に疑問に思えてくる。

「お前、本当についてないな……」

「そ、そうですか？」

「ついてないっていうか……なんか憑いてんじゃねえの」

「何が憑いてるんですか!？」

「なんかこう、疫病神みたいな……あ、あつたぞ」

水路をぷかぷか流れていく、リリアが一生懸命手に入れたチケット。何を思ったか、俺が止める間も無くリリアは水路に飛び込んでいた。水しぶきが盛大に上がり、リリアが浮かんでくる。手にはチケットを握り締め、嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

仕方なく陸に引っ張り上げると、リリアの全身はびっしょりびしょだった。ぽたぽた水が滴る状態でチケットを一生懸命乾かそうとふーふーしている。

「お前……無茶するなあ」

「だって、ゲルト・シュヴァインのチケットですから……へくちっ!」

「おいおい、大丈夫かよ……。タオルなんか持ってないしなあ」

「大丈夫ですよ。結構しょっちゅう転んで水路におっこちるんで、

慣れてますから」

それって慣れてても全然いい事じゃないと思うのは俺だけか？

そんな会話をしていると、リリアは何かを思い出したように半ズボンのポケットに手をつ突っ込んだ。そこから取り出したのは、以前俺が彼女に差し出したハンカチだった。

鼻血の痕は残って居ない、が……当然ながらずぶ濡れだった。俺達はお互いに苦笑を浮かべたまま停止する。

「いや、それ返すのは後にしねえ？」

「……そ、そうですね」

「ていうか、そのゲルト・シュヴァインの試合、いつから開始なんだ？ もう大分探し回ってるけど」

「……ほああああっ！？ い、急ぎましょう！ 試合が終わっちゃうよおっ……！」

俺の手をびしょびしょの手で掴み、リリアは走り出す。なんだか今日はずっとこんな具合のような気がする。

リリアの遅い足取りにあわせノンビリ走って闘技場へ逆戻り。受付の前に立ち、リリアはへなへなのチケットを差し出した。

「あの！ 入れますか!？」

水滴の滴るチケットと入場客を見て受付のおじさんは顔を顰めた。どう考えてもこんなやつは俺だったら入場させない。

「あのねえ、お嬢ちゃん……。悪いけど、流石にその状態の……チ

ケットは兎も角君を客席に上げるわけには……」

おじさんの発言をリリアは目に一杯の涙を溜めながら聞いていた。あと一步でも不幸が重なればここで彼女は思い切り泣き出す。そんなカウントダウンのようにも思える。

たじろぐおしさん。二人の間、視線が激突する。客席にずぶ濡れの女の子を入れるべきか、追いついてここで泣かれるべきか……多分おじさんの中でそんな選択肢がグルグル回転していたはずだ。

しばらくすると根負けしたのはおじさんの方だった。溜息をつき、しおれたチケットを受け取る。

「入って見といで。その代わりもう試合は終わっちゃうと思うけどね」

「うそっ!? わあ、は、早くしなきゃ……なつるさん、こっちこっち!」

「え? 俺も!?!」

「お兄ちゃん、チケットは!?! コラーツ!!」

なにやら怒号が飛び交う中、俺はリリアに手を引かれて闘技場の中に入る事になった。

中に入ってしまったはこの想像を絶する人ごみ。俺たちの姿を見つけて出す事は不可能に近い。リリアに手を引かれ、俺は闘技場の最後列に立っていた。

闘技場内部はすごい熱気だった。実際に何をやっているのかはよく見えないが、闘技場の中に設置された大型の映像モニターに試合の内容が映し出されている。

リリアが目を輝かせながら見つめている憧れの人は、黒髪の少女だ

った。ゲルト・シュヴァイン　黒い髪に巨大な剣を握り締める少女は、リリアよりも幾分か年上に見える、しかしただの少女だった。相手はでかい斧を担いだ男だというのに、ゲルトは全く怯む様子がない。むしろその鋭い眼差しに対戦相手の方が気圧されているくらいだった。

確かにリリアが憧れる気持ちもわからないでもない。凜々しく、鋭い存在感。美しい瞳から放たれる敵意は自分に向けられてもやはり胸を打つのだろう。

男が斧を振り上げ、雄叫びと共に突進する。同時にゲルトも走り出し、二人の武器は空中で激突した。

打ち合う武器の衝撃に火花が舞う。しかしゲルトは大剣をしなやかに操り、斧の重圧をいなして体を回す。

紅い瞳が軌跡を描く　そんな幻想さえ抱くような、美しく無駄のない動き。刃は小さく振り上げられ、しかし的確に、迅速に、男の首元へと振り下ろされる。

「つぶね……!？」

思わず声を上げてしまった。それほど早く、強く、ゲルトの刃は男の首筋を取られていたのだ。しかし、首が刎ねられたと思った一瞬、ゲルトは刃を見事に止めていた。

男の首筋から血がうつすらと流れ出し、勝敗は決した。割れんばかりの歓声の中、ゲルトは剣を背中に担いで背を向ける。試合が終われば興味はない　そんなあっさりとした態度が更に男らしく見える。

実況中継者と思われる男の叫び声が響き渡る。リリアも飛び跳ねて喜んでいるのだが、俺は全くそんな事は眼中になかった。

退場直前、ゲルトは一瞬だけ振り返ったのだ。その視線は確かに俺とリリアを射抜いていた。この数百人いる観客の中、彼女が俺たちを見つめた意味……。それを考えると素直に興奮する気にはなれない。

かった。

しかし恐らくリリアはそれに気づかなかったのだろう。きゃあきやあいいながら飛び回り、水しぶきを俺にひっかけて笑っていた。その時だけは、リリアは本当に楽しそうに……幸せそうに見えたのだった。

試合が終わり、俺達は他の観客の流れに紛れ込んで闘技場を後にした。出入り口が四方にあったのが何よりも救いだ。

二人で闘技場を出て歩き、再び中庭へ来る頃にはリリアもちよっただけ乾いていた。嬉しそうにニコニコしながら立ち止まったリリアの姿に俺も少しだけ嬉しくなった。

「すごいですよね、ゲルトさん……。かつこよくて、きれいで……何でも出来ちゃうんですよ？ 今日の試合相手は弱かったから、魔法は使ってなかったみたいでしたけど、ゲルトさんは魔法も凄くて……あ、ごめんなさい、なんか……。喋りすぎですよ？」

「いや？ かつこよかったぞ、ゲルト。お前が好きになるのも分かるよ」

「ホントですかっ！？ リリア、ゲルトさんの大、大、大ファンなんですっ！ 試合、チョットしか見られなかったけど……。えへへ、大満足ですよ」

リリアはそれから捲くし立てるようにゲルトがいかに偉大な存在なのかを俺に身振り手振り語ってくれた。そうしているうちに俺は自分の目的をようやく思い出したのだ。

「なあ、リリア。お前、ゲルトみたいになりたいんだろ？」

「う？ そうですけど……。無理ですよ。リリア、ほら……。落ち零

れなので……えへへ」

「えへへ、じゃない!!」

リリアの顔をビシッと指差して俺は叫び声を上げる。突然の出来事にリリアは目を白黒させていた。

「いいか！ お前がそんなつもりじゃ色々俺は都合が悪いんだよ！ よし、決めたぞ。お前……ゲルトを倒せ」

「……………え？ えええええええっ！？ む、むり！ むりむり、むりっ！ 無理ですよっ!？」

「無理かどうかはお前が決めるんじゃない、俺が決めるんだ!! いいか良く聞けリリア……。 お前がとことんついてない奴だっ言うのは良く分かった。だが、それに甘んじているようでは駄目だ！」

自分でも何を熱くなっているのか良くわからなくなってきたが、こういうヤツはこのままノリで押し切ってその気にさせてしまった方が早い。

どちらにせよ、こいつには立派な勇者ってやつになってもらわねばならないのだ。ならば目標は居ないより居た方がいい。こいつ自身のやる気に繋がるのなら、利用しない手はない。

「打倒ゲルト！ さあ、お前も口にしてみる！」

「そんなの恐れ多くて無理ですよっ……………」

「やれば出来る!! 打倒ゲルト!! さあ、言って見る！ 言わないと泣かす」

「ひいつ！？　だ、だとうゲルト！」

「打倒ゲルト！」

「だとうゲルト！」

「よし、それでいい。今日から俺の事は師匠と呼ぶんだ」

「な、なんですか！？」

「いいから呼べ！！　呼ばないと……」

「わ、わかりました！　師匠！！」

リリアは俺の前で背筋をぴんと伸ばして立っている。なんだか気合が入りすぎているような気がするが、これくらいで丁度いいだろう。それにしても、打倒ゲルトとは言ったもののゲルトとこいつの間にどれくらいの力の差があるのかよくわからない。とりあえずそこから訊いて見る事にした。

「ところで、ゲルトはランキングの何位なんだ？」

「その月にもよりますが、えっと……大体上位三位くらいには入ってます」

「お前は？」

「はい、毎月最下位です」

俺は生まれて初めて自分の耳を疑った。

腕を組み、リリアに背を向ける。青空を見上げると、ふわふわと白い雲が流れていった。ああ、きれいだなあ。

「あのう、師匠？ どうしたんですか？」

「……ちよ、待って。お前って勇者だよね……？」

「はい！」

「えっと……毎月最下位なの？ たまに勝てるとか、そういうのはないの？」

「今まで勝率0%ですよ、えへへ」

俺はリリアをその場に残し、ダッシュで中庭の隅っこまで移動した。肩に乗っているうさぎの耳を掴んで下ろし、叫ぶ。

「どういうことだよっ！？」

「……お気持ちはわかりますが、現実ですので……」

「最下位？ 勝率0%？ どうやってそれがゲルトに勝てるわけあるんだよっ！？」

「それは貴方が言い出した目標ですからワタクシは悪くないですよ！？」

俺達はしばらくそこで言い合った。とりあえず言い合うしかなかった。自分で言っておいてなんだが、それがどれだけ途方も無く遠い

目標なのかを再認識させられた。

うさぎを片手にぶら下げたままリリアのところにとぼとぼ歩いて戻ると、リリアは少しずつやる気になってきたのか、両手を挙げて笑っていた。

「よし、ゲルトさんみたいにかっこよくなるぞー！ 師匠、よろしく御願しますね！」

「……ああ、うん。こちらこそ、よろしくね……」

俺の手を取り、ぶんぶん振り回す最下位勇者。

なんだかとてもない事になってきてしまった。

こうして俺とリリアの打倒ゲルトの特訓が始まったのであった……。

特訓の日（１）

俺自身があちら側の住人ではなく、元の世界と自由に行き来する事が出来るというのはリリアとの特訓をする上で便利な条件だった。ディアノイアの生徒であるリリアは当然、昼間は学校で授業がある。よって特訓などたっぷり出来るのは夕方以降の時間帯に限られる。しかし俺はあちらの世界にそう何日も何日も居るつもりはない。つまり、俺は夕方になるとあちら側の世界に移動し、特訓が終わったら現実世界に帰る。これを一日ずつピッタリ時間をずらしながら行い続けるのである。

リリアも色々と事情があり、特訓できるのは夕方からの二時間程度だった。俺の体感時間ではまだたかが六時間程度だったが、既にリリアとしては三日間俺と一緒に過ごした事になる。

そんなわけで、特訓も三日目。流石に眠くなってきた今日この頃、俺はウトウトしながらリリアの引きリヤカーの荷台に横たわっていた。

「んぎ、んぐぐ……んあーっ!!」

リリアは一生懸命リアカーを引いている。その前進速度はかなり遅い。時速１kmも行かないのではないだろうか。俺はその荷台の上でウトウトしながらシャングリラの街並みを眺めていた。

シャングリラの大通りをリヤカー引いて移動するというだけのシンブルな自主トレーニング。リリアに絶対的に足りないものはまず技術がどうこうではなく、度胸とか体力とかそういう基礎的な部分だと俺は判断したのだ。

とはいえ流石に初日からこうだったわけではない。ただ二日間の特訓の経験上、リリアは少しでも難しい特訓だと持ち前の不幸さを発

揮し、途中でトラブルが起こって中断をくらってしまふのだ。

そもそもリリアは剣を振れない。理由は簡単、自前の大剣が重過ぎて構えるのもやっとなのだ。こんな調子ではどうやったってゲルト・シュヴァインになんぞ勝てるはずもない。

そういえばゲルトのやつ、片手でリリアと同じ大剣を振り回していたな。一体どれだけ怪力なのだろうか。どう見ても華奢な少女にしか見えなかったのだが。

と、ゲルトの戦いを思い出しているとうっかり半分くらい夢の世界に吸い込まれそうになる。慌てて身体を起こすと、リリアがリヤカーに引かれてぐったりしていた。

「お、おい！？ 大丈夫か！？」

「……こ、ころんで……そしたら、リヤカーが……」

仕方がないので飛び降りてリリアを引っこ抜く。泥だらけの服の汚れを叩いて落とし、顔についた土をハンカチで拭う。

リリアは涙ぐんだ瞳をこしこし擦りながらうなだれていた。今回の流石に俺が寝てたのも悪いと思うが、リヤカー引いてて転ぶか普通……？

「リリア、どうやってもゲルトさんに勝てる気なんかしないです……うええん」

「泣くな泣くな……」

まあ、最下位ランカーとトップランカーとではレベルの差が開きすぎていてちよつと想像が出来ないくらいに壁がある。リリアが勝てる気しないのは当然だ。俺だってしねえ。

流石に目標に据える人物を行き成り上のほうに設定しすぎただろう

か？ いやしかし、当時の俺はリリアがここまでへこたれた奴だとは思って居なかったのだ。

ファンタジー世界で言う勇者といえば、魔王をやっつけたりする最強の存在というのがデフォルトだ。俺だってロールプレイングゲームくらいやったことがある。勇者というのは最初からそこそこ強くて、適当に戦っているうちに強くなる……そんな手間のかからない存在だとばかり俺は思っていた。

しかし、リリアは違う。勇者という呼び名が本当に正しいのかどうかを疑うほど、体力も力も精神力も全く以って一般人以下なのである。

今は荷台で静かに横たわっている愛用の大剣も、本人には絶対に似合って居ない。鞘もなく、刀身にはぐるぐると鎖が巻かれた無骨な剣。その重さのあまり、リリアは通常移動する時この剣を引き摺りながら歩いている。

校内でそれをして以前注意されたらしく、学園の校舎を歩く時は出入り口にある傘立ての横に放置してあるという悲惨な扱いっぷり。これでは剣も報われない。

めめめしているリリアの頭を軽く小突く。叩かれたリリアは目を丸くして顔を上げた。

「泣いてたつてしょうがないだろうが……。わかったわかった、今日はもう特訓終わり。もう帰って休んでいいぞ」

「……ほんとうですか？ 師匠、怒ってないですか？」

「怒ってない怒ってない。ほら、満面の笑みだろ？」

「……師匠、顔引き攣ってますけど……」

そりゃ、ここまでどうにもならないくらいリリアがよわっちい事を

再認識させられれば、何とも言えない表情になりもする。

頭の中で自分の目標を再確認。俺はこのよわっちい自称勇者様を立派な勇者に育て上げる事を最終目標とする。それが出来なかった場合　なんかおっかないことになる。

何よりこんな所で終わるわけにはいかないのに……。何のためにこんな事をやっているんだか、俺は……。

リリアの頭をぐりぐり撫でてリアカーを自分で引いて片付けに戻る。来る途中の酒屋さんで借りたもんだから、早めに返さないと……。

「師匠？　いつつも特訓が終わると居なくなるけど、どこにいくんですか？」

「ぎくっ」

「たまには一緒に帰りましょうよ！　ねえねえ師匠、師匠」

腕にリリアがすがり付いてくる。無視してリアカーを引いて歩き出すと、リリアもリアカーに続いて地面をずるずる引き摺られてついてくる。

体が軽すぎて引っ張っている気がしない……。というかそういえばこいつの剣を荷台に乗せたままだ。

「わかったわかった、行くから離れる！　ほら、先にそっち行つてろ！」

「わーい！　じゃあ、下で待ってますね！」

手を振って走って坂道を下って行くリリア。俺は深々と溜息をつき、うさぎの帽子の中に手をつっ込んだ。

原書のページを開くと、うっすらと次のシナリオが浮かび上がろう

としている。俺はまだまだ、何にも出来て居ないっていうのに……。それにそこはかとなく、よくない内容が浮かび上がっているような気がしてならない。うさぎに視線を向けると、彼は帽子を被って言った。

「まだきちんと浮かび上がって居ない未来は、現時点で確定して居ないものです。どんなに悪い要素だとしても確定しない限りはまだ大丈夫ですよ」

「どうだかねえ……」

原書を閉じて溜息を漏らす。

そこにある絵が、リリアに剣が突き刺さっているようにしか見えな
い俺は、心配性なのだろうか。

リアカーを引きながら歩く、そんな特訓の日々。それも三日目を迎
えようとしていた。

特訓の日（１）

シャングリラの街を歩くのも三日目となると流石に少しずつ慣れて
来る。

俺の一步前を行くりリアに続き、周囲の街並みを眺めながら進んで
行く。基本的にこの街は中心に近づくとは殆どの建造物が坂道に存在
している為、いつも学園から街に行く場合は下り坂なのだ。

一つの山のような形状をしたこの街を歩く人たちにとって坂道なの
は当たり前。歩道脇には階段がある所さえある。

リリアは下り坂をぴよこぴよこ歩いていく。ぴよこぴよこ歩くとい
う表現がどうなのか俺にも微妙だが、ぴよこぴよこ歩いていると言

う以外に表現する方法を俺は知らない。

なんというか、ただ歩いているだけなのにぴよこぴよこしているのだ。とても頭の悪そうな効果音が似合う、そんな素敵過ぎる歩行だった。

その後ろを俺はついて歩く。肩の上に乗ったうさぎが耳元で鼻をすびすびさせ、小さな声で呟いた。

「そういえば貴方はずっと何も食べて居ないのでは？」

「あー……そういえばそうだな……」

「……どうしてワタクシを見るのですか？」

いや、別に食えるかなーと思ったわけじゃないけどさ。

歩いているとうさぎが道端に在るレストランを指差した。指ではなく前足なのだがそこは別にいいだろう。俺は足を止め、前を行くリリアに声をかけた。

「リリア、ちょっと寄っていかないか？」

ということでもそのまま俺達は並んでレストランの扉を潜った。

木造の建物の中はやっぱり木造だった。カントリー調の店内に入り、テーブルに付く。

そういえばこの世界の金なんて持って居ないがどうしたものか。リリアを見ると、メニューを見ながら楽しそうにニコニコしていた。

「何にしようかな。何にしようかな」

とてもじゃないがお金について訊ける状況ではない。うさぎの頭を指先で叩き、小声で訊ねる。

「お前、金持ってるか……？」

「帽子の中に入っていますから、後で必要金額だけワタクシが渡しますよ」

「なんだよ、あるなら寄越せって。俺持ってるから」

「貴方に渡したら全額使ってしまうかもしれないでしょう……いたたたたっ！？ 耳を引っ張らないで！！」

「俺は小学生か！！ いいから黙って金出しな！！」

そんな言い争いをしていると、同時に俺達は正面を向く。リリアは俺とうさぎがつかみ合っている絵を見て目をぱちくりさせていた。

「そういえばずっと気になってたんですけど……あのー、そのうさぎさんは？」

そりゃ疑問に思うよね。ていうか今まで放置されてたのが逆におかしいだろう。

返答に困っていると、うさぎが勝手にテーブルの上にぴょこんと飛び移る。そうして二本足で立って帽子を脱ぎ、ぺこりを頭を下げた。

「申し遅れました。ワタクシ、ナツル様の使い魔であるナナシと申します。どうぞ以後お見知り置きを」

「わあゝ！ かわいいゝ！ やっぱり師匠の使い魔だったんですねゝ！」

うさぎを抱きかかえ、頭を撫で繰り返し回すリリア。そういえばここ飲食店だけど、こんな動物連れ込んでいいんだろうか。

そんな事を考えていると、ウェイトレスがトレイの上に水を乗せて歩いてきた。しかし何が起きたのかウェイトレスが足を縛れさせて正面によるけ、トレイに乗ってた二人分の水の注がれたグラスがリリアに直撃した。

勿論そのお膝の上でなでられていたうさぎもずぶ濡れになる。二人が目を見て沈黙しているのを見て、俺は半笑いを浮かべた。

「す、すみませんっ!! 大丈夫ですかお客様!？」

「へ、へいきですよ……。なんかついこの間もこんな事があったような気がして軽くデジャヴってますけど……」

「……何故ワタクシまでまきぞいを……。うさぎの耳には水を入れてはいけないですよ……」

慌ててリリアの身体をナプキンで拭くウェイトレス。リリアはへらへらしながら頭の上に氷を載せたまま固まっていた。

それにしても、ここまで来るとリリアの不幸も相当だな……。いや、今までもそうだったけど……。今までののはこいつ自身がドジだからという理由で済んだ。だが今回ののはウェイトレスが『なぜか』転んでしまったのだ。

しかもグラスは『なぜか』リリアに直撃。他の客はおるか、正面の席にいる俺にさえ微塵も引つかかってはいない。リリアだけをピンポイントで狙ったように、水びたしなのである。

だというのに、リリアはへらへら笑って済ませている。本来ならばここは盛大に怒り出しても誰も咎めないようなシーンなのだが、リリアは笑顔でウェイトレスを許していた。そんなこんなでたばたしている、騒ぎを聞きつけた男性のウェ이터が走ってくる。

「いやーすいませんお客さん！！ タオル持って来ましたんで……
って、あれ？ リリアちゃん？」

「お前……アクセル・スキッド！？」

「あゝ、アクセル君だゝ。こんにちはゝ」

俺たち三人は各々同時に別々のセリフを口にした。ウェイターの制服を着用したアクセルはタオルでリリアの頭をこしこし拭きながら俺を見る。

「おゝ、ナツルも一緒か！ 三日ぶりか？ もう学園には慣れたか？ ていうかお前リリアちゃんとどういう関係だ？ リリアちゃん大丈夫か？」

そんなに同時に話されても困るんだが。アクセルはリリアの頭を拭き終わるとタオルをリリアに渡し、腕を組んでアクセルはリリアの隣に座った。水浸しになったうさぎはリリアにタオルでわしわし拭かれている。

「なんだなんだ、お前ら知り合いだったのか？ 奇遇だなゝおい！」

アクセルは豪快に笑い飛ばした。横でおろおろしていた加害者のウェイターを下がらせ、両手を合わせてリリアに頭を下げた。

「わりわり、この通り！ お詫びになんかオゴるからさ、許してよ
リリアちゃん」

そんな軽い謝り方でいいのだろうか、とか疑問に思うまでもなくリ

リアはむしろ奢ってもらえることに喜んでいた。現金なやつである。元気でもあるか。

「アクセルのバイト先ってここだったのか？」

「ああ、そうそう。つーか俺色々バイト掛け持ちしてっから、ここだけじゃないんだけどな。しかしリアちゃんは今日も可愛いなあ〜!!」

両手を広げて他の客の目も気にせずアクセルは叫ぶ。リアは恥ずかしがっているというよりは若干引き気味だ。俺はテーブルに頬杖を付きながら馬鹿の発言をジト目で見守っていた。

「リアちゃん、かわいいだろ？ 顔がいいのは勿論、この知性のない目！ 成長する気配のない胸！ 明らかに似合ってない大剣！ どこをとっても俺の好みストライクまっしぐらだぜ!!」

ストライクまっしぐら。それがどんな言葉なのかは兎も角、アクセルは冗談で言っているわけではなさそうだった。その瞳の中にきらきら輝く熱意のようなものを見た時、俺は全てを諦めた。

店内でそんなけなしているのか褒めているのかわからないセリフを叫ばれ、リアはおたおたしていた。アクセルはけらけら笑って俺の肩を叩く。

「しかしなんでお前いきなりリアちゃんとデートしてんだ？ 自分で言うのもなんだが、俺ほどの審美眼の持ち主じゃなきゃあ、リアちゃんに声はかけないぜ？」

「お前いちいちリアをへこませるのが好きだな……。つーかやっぱりリアは人気ないのか」

「人気ないっていうか、まあ一躍時の人ではあるけどな。入学からこっち闘技場での勝率0%、授業も落ち零れでついていけないし」

「ううつ……あ、アクセルくん……ひ、ひどいい……」

「でも、俺はそんな君が大好きなんだぜ！ さあ、結婚しよう！」

泣きそうになっているリリアの手を取り、アクセルは笑う。とりあえずそんなアプローチで女の子を口説けるんなら世の中の男は苦労しないと思う。

アクセルが新たに持ってきたグラスから水を飲み干し、テーブルに置く。とりあえず注文しない事には始まらない。というかこいつバイト中じゃなかったか。

しかし何を注文すればいいのかよくわからない。サンプル写真なんてもんは無く、平然と読めない文字だけが鎮座なさっている。眉間に皺を寄せ困っていると、アクセルが再び俺の肩をバシバシ叩いた。

「迷ってんなら俺がオススメを持ってきてやるよ！ 俺厨房もやってっからさ、アッハッハ！」

何故傭兵学科の生徒が料理……いや何も考えないほうがいい。こいつに突っ込み出したらキリがない。

こうして元気良く厨房に消えていくアクセルを見送り、俺達は一息ついた。何とも言えない気まずい空気が広がり、リリアは苦笑を浮かべていた。

「ええと……それで、何でしたっけ？」

「何だったか……とりあえずそのうさぎ、そろそろ返してもらえる

か？」

「あ、はい。またね、うさちゃん」

うさぎはぴょぴょ跳ねて戻ってきた。若干湿気ているのが気になるが、仕方あるまい。

それにしてもここでアクセルに会えたのは幸運かもしれない。俺はこっちの世界の事について疎すぎるし、アクセルは何だかんだでこちらの世界で身近に頼れる人物だ。

せっかくチュートリアルで縁があったのだから、利用させてもらわない手はない。先ほど水をぶっかけた店員が料理を持ってきてまたリリアに頭を下げる。俺達は目の前に並べられた数々の料理に目を丸くして、厨房の方を眺めた。

「アクセルくん、こんなにいっぱい作っちゃって……」

「食べきれないよな……って、早　ッ!？」

目の前でリリアが物凄い勢いでスパゲティを頬張っていた。既に半分くらい胃袋に収めたのか、驚嘆する俺を前に口元をケチャップだらけにしながら首を傾げた。

「もぐもぐ……どうしたんですか？」

「どうしたんですかじゃなくて、何その食べっぷり!？」

「え？　普通じゃないですか？」

いやいやいやいや、普通じゃないから。とかなんとかいっているうちに既に皿が一つ空になってしまった。俺も早く食べないと自分の

分がなくなってしまういそうな勢いだ。

しかし、よく食うな……。小さい身体に次々に飲み込まれていく料理たち。これでどうして背も伸びなければ太りもしないのか。この栄養はどこにいつているのか。謎である。

「ところでリリア」

「はい、なんですかー？」

「お前、あの剣振れないんだよな？　じゃあ他に何か出来ることとかないのか？　こう……ほら、魔法とかさ」

例えば炎を起こしたり、雷を落としたり……。ファンタジー世界なら腕力が在ればいいってもんじゃない。そういうこう、頭の良さそうな能力があるはずだ。

すると俺の質問にリリアは満面の笑みで頷いた。どうやら得意な魔法が存在するらしい。

「リリア、一個だけすつごく得意な魔法があるですよー！」

「おお！！　で、その魔法は？」

「はいっ！　ヒーリングスベル回復魔法ですっ！！」

俺達は笑顔のまましばらく停止する。雲行きが怪しくなってきたのを感じたのか、リリアは焦りながら語りだす。

「え、えつと……あの、リリア、よく転んだりひっかけたりして怪我するんですね？　だから毎日毎日回復魔法ばかり鍛えてたら、気づけば達人クラスになっていたのですよー！　えへへっ！」

「……………言いたい事はそれだけか？」

「はううつ！？ あ、その……回復魔法は便利なんですよ！？
回復魔法は人を傷つけない優しい魔法なんです！ それに、
一人くらい仲間に回復魔法の使える人間が居ないと、戦闘は厳しい
って魔法学の先生が言ってたんですよ！」

「……………お前、自分の職業を言ってみろ」

「……………勇者です」

「勇者は回復……………してもらう方じゃねえの？」

「……………う、うつ……………だって……………そのう……………ひぐつ」

頭を抱える俺と涙ぐんでいるリリア。俺たちの様子は他の客も心配
になるほど不安定だったことだろう。

「うああああん、ごめんなさあああいいい！」

「もういいから泣くな……………俺が苛めてるみたいだろ……………」

「なんだか師匠に申し訳なくって……………リリア、ダメな子で……………えぐ
つ……………！」

「まあ、水でも飲んで落ち着けよ……………なっ？」

リリアは泣きながら水を飲んでいった。しかし、本格的にどうしたも
んか。額に手を当て考え込む俺。しかも超眠い。

現実の活動時間と言えば、とつくに真夜中どころか朝方だろうし……流石にそろそろ寝ないと健康的にヤバイ気がする。ていうかこんな生活これから続けなきゃならないのかと思うとかなりウンザリしてきたぞ。

「なんかもう、やめたくなってきた……」

「な、何をですか……？」

「人生とか……色々だ」

でもリリアを見ていると自分はどん底つてわけでもないんだって思えてちよつと生きる氣力がわいてくるぜ……。

「じゃあお前、他に何が出来るんだ？」

「え、えつと……んーとお……」

口元に手を当て、必死で考えるリリア。そのまま俺たちの間を時間だけが無慈悲に流れて行く……。

俺もリリアも限界だった。何故か不自然に笑みを浮かべ、二人で低い声で笑う。それから同時に机の上に突っ伏して落ち込んだ。

ダメだ……。何もかもがダメ過ぎる……。こんなじゃ、打倒ゲルトなんて天地がひっくり返っても無理だ……。

そんなこんなで二人して泣いていると、バイトも終わりなのか私服に着替えたアクセルが歩いてきた。俺たちの惨状を眺め、流石のアクセルも一瞬のけぞる。

「お、おおい……？ 何だ何だ、何二人して死んでるんだ？」

「アクセルか……。いや、今リリアじゃゲルトに勝つのは天地がひっくり返っても無理って話をしていたところだ」

「はうう！？ そんな話してないですよ！？ そんなこと考えてたんですか、師匠！？」

「何、ゲルト！？ ゲルトってお前……ゲルト・シュヴァイン？」

俺は小さく頷いた。アクセルはそれを聞いて笑い出したが、俺たちが全く笑わず真顔なのを見て気まずそうに表情を変えた。

「……マジ？ ネタとかじゃなくて？」

「……マジもマジ、大マジだ……」

アクセルは俺を奥に押しのけ、隣に座る。それから真剣な表情でリリアの手を取り、頷いた。

「ゲルトはどう考えても無理だ、やめとけ！ ヘタしたら死んじやうぞ！ リリアちゃん、ちょっとしたことでも瀕死になりそうなんだから！」

「うえええええええええん……」

それがトドメとなり、リリアは号泣し始めた。しかしその泣き方は本当に悲しいのか、笑いながらぼたぼた涙を零すという奇妙な表情によって形成されていた。

暫くは俺たちもそうして落ち込んでいたのだが、突然アクセルが指を鳴らし、俺たちに言った。

「つかさ。ランキング戦って、確か自分より前後十位以内のランカーとしか試合できなかっただろ？」

「そうなのか？」「そうなんですか？」

俺とリリアの声が重なる。いや、お前は知つとけよ。

ゲルトは上位三位くらいで、リリアは最下位だったか。だとするとリリアはいつになったらゲルトに挑戦できる事になるんだ？

「リリア、お前最下位って言うてたけど、実際今何位なんだ？」

「んと……多分、六百位くらい……」

「ろっぴゃくう！？ マジか！？ ゲルトなんて夢のまた夢、神と平民みたいな差じゃねえか！？」

リリアは両手の人差し指を胸の前でつんつん合わせながらこくりと頷いた。しかし、話を吹っつけたのは俺の方だ。どうやら見込みが完全に甘かった。

ゲルト打倒は絶対無理だ。もうちょっとこつ、戦う相手は選んだ方がいい。そもそも剣が振れないリリアに勝因があるのかどうかかわからないが……。

「アクセル、リリアが勝てそうな相手っているか……？」

「……また難しい質問だなあ。とりあえず、自分より一つ上のランカーを狙うのがいいんじゃないかねえの？」

というアクセルの提案を受け、俺達は三人揃って店を出た。夕暮れ時だった空はすっかり闇に染まっている。星空の下俺達は坂

道を駆け上がりディアノイアへ急いだ。

学園の受付は夜だけあって流石に空いていたが、生徒は相変わらず歩き回っている。夜間も開いているディアノイアでは別に珍しい光景ではない。俺達は受付に駆け込み、同じ顔をしたメイドの一人に声をかけた。

「ランキングバトルの順位ですね？ 少々お待ちください」

俺達は三人で同時に身を乗り出し、浮かび上がった立体映像を凝視した。

リリア・ライトフィールド。バトルポイントゼロ、ランキング順位、八百三十二位。同時に落胆する。しかし直ぐに立ち直り、その一つ上を見つめる。

「……メリーベル・テオドランド……バトルポイント、ゼロ！？ 順位、八百三十一位！ おい、こいつもゼロポイントじゃねえか！？」

「わあ〜！ リリアとおそろいですう〜」

「うわー、ゼロポイントの奴なんてほかにも居たのねえ。リリアちゃん、このメリーベルって子だったら戦って勝てるんじゃないの？ 相手、錬金術科だし」

「錬金術科……って、何だ？」

「文字通り、錬金術を扱う学科さ。正直戦闘タイプの学科じゃないから、ランキングバトルには未登録の場合が多いんだけどよ。すんません、このメリーベル・テオドランドって子の登録情報出してもらえる？」

頷くメイド。画面に映し出されたのは茶髪の少女だった。歳の瀬は恐らくリリアよりは上。見た感じはそんなに強そうといった雰囲気ではなく、むしろ華奢な印象を受ける。勝率はリリアと同じく0%。ただ、学年がリリアより上の錬金学科二年であり、登録日時もこちらのほうが早いことからリリアよりは一つ上、という扱いになっているらしい。

メリーベルのデータをプリントアウトしてもらい……メイド服の下から印刷された写真が出てきた……俺達はカウンターを離れた。リリアは写真を眺め、目をぱちくりさせている。

「何でこの人、勝率0%なんでしょう？」

「……いやな？ それ、俺もお前に言いたいから」

「ん……まつ、0%ってチョット普通じゃねえよな。なんか事情とかあるんじゃないの？」

「事情……」

その言葉を聞いた瞬間、リリアの表情は曇ってしまった。今までの落ち込んでいるとかそういうった雰囲気陰りではない、何か。俺はその様子に首を傾げる。

アクセルはそれに気づかなかったのか、リリアと俺の肩を叩いて笑う。

「ま、戦う事になったら呼んでくれよな！ 応援しに行くからよ！ というわけで、次のバイトがあるから俺は行くぜ。じゃあな！」

何とも忙しいやつだ。手を振ってアクセルは学園から去っていく。

残された俺はアクセルに手を振り返したが、リリアは浮かない表情でじっと写真を見つめている。

「そいつがどうかしたのか？」

「……どうか、したわけじゃないんですけど。もし何か事情があつて、戦えないなら……そんな人に戦いを挑んじゃって、本当にいいのかな、って……」

別にまだ会つたわけでも話したわけでもないのに、リリアは既に落ち込んでいた。それは確かにまあ、事情もあるのかもしれない。でも、闘技場に登録してある以上、そういう事情を押してでも参加しなきゃならないのがルールだろう。

参加を取りやめる事が出来ないわけでもない。それに、勝率0%なのはリリアも同じ事。だというのに仮にも格上相手にこいつは何を甘い事を言っているのか。

しかしまあ、それもまたリリアらしいのかもしれない。溜息を漏らし、リリアの肩を叩いた。

「だったら会つて確かめてみればいいだろ？ 挑戦するのはそれからでも遅くないはずだ」

俺の提案にリリアは強く頷いた。戦うのに納得出来ないなら、とりあえず相手を知って納得すればいい。それで戦う事になれば、たとえ負けたとしても得るものはあるはずだ。

資料によれば、メリーベルはディアノアの学生寮に住んでいる事がわかった。俺達は夜の学園を抜け、対戦相手に会う為に学生寮へ向けて歩き出した。

特訓の日(2)

「ここが、メリーベルさんの住んでる学生寮ですか？」

学園を出て歩く事数十分。俺達はメリーベルの住む寮の前に立っていた。

確かに地図ではこの場所であっているし、そこは学園の所有地の寮なのだが、なんというか……その建造物は驚くほどボロかった。

学園都市シャングリラには幾つかの学生寮が存在するが、それぞれの寮によって格式のようなものが異なる……というかぶっちゃけた話、成績や学費によって住める寮が違ってくるらしい。

そうしたいくつかある学生寮の中でもメリーベルが住むのは最も古く、作りが荒い急ごしらえでなんとか増設しました、的な雰囲気溢れるボロ屋敷だった。

「……まあ、行って見ない事には話にならないだろう。行くぞ、リリア」

「は、はい……っ」

夜になってしまったこともあり、外灯も少ないこのあたりは闇に包まれどうにも怪しい雰囲気になっている。

寮に入ると管理人の男が階段脇で本を読んでいた。俺たちを一瞥すると、すぐに本に視線を戻す男。俺達はそそくさとその脇を通りぬけ、メリーベルの部屋を探した。

「こんなところに住んでいるとなると、よほど成績が悪いのか……」

「そ、そうとも限らないですよ？ リリアはお馬鹿さんですけど、

勇者待遇でちよつといい部屋に住んでたりするのですよ、えへへ」

それは自慢げに言うことか？

まあ逆に言えば事情があつてここに住んでいる可能性もあるのだとリリアは言いたいのだろうが、どうしてそういちいち墓穴を掘りたがるのか。

何はともあれ俺達はメリーベルの部屋の前に立つことに成功した。部屋番号と名札を確認した所、確かにここにメリーベル・テオドランドが住んでいるので間違いない。

意を決して扉をノックする。リリアはまだ決していなかったのか、驚いた猫のように背筋をびくりと震わせ、上目遣いに俺を見つめていた。

「ノックしなきゃ始まらないだろ……」

「そ、そうですよね……」

二人ともこのわけのわからない建物の雰囲気には呑まれている気がする。

というか、メリーベルの部屋以外殆ど空き部屋っていうのがまた……胡散臭さを加速させている。

暫く待つてみたが返事がないので少ししつこく音を大きめに扉をノックしてみた。すると次の瞬間、俺たちの背後にあつた扉が勢いよく開いた。

「ひゃうつっ！？ 命だけはお助けをーっ！！ 師匠、師匠、師匠！！」

よほど驚いたのか俺にすがり付いてぶるぶる震えているリリア。まあ俺もビクリしたくらいだから、仕方がない気もする。

振り返るとそこには下着姿の女子が立っていた。見た感じ明らかに善良な学生といった雰囲気ではない。というか、何故その格好で出てくる。

化粧の厚い女子は眠たげに目を擦りながら俺たちを眺め、それから口を開いた。

「あんたたち、メリーベルの知り合い？」

「あー……まあ、ちょっと」

「あそ。その部屋殆ど留守だから今日も多分帰ってこないわよ。東通りの裏路地に進んで行くと、錬金術師の研究区域に出るわ。そこにメリーベルの研究室があつて、彼女ずっとそこに寝泊りしてるみたいだから、そっち当たってみたら？」

と、思いのほか親切な発言を戴いた。俺は礼を言つて小さく頭を下げたが、リリアはまだ俺の背後に隠れてビクビクしたままだつた。そんなリリアを見て女は暫く腕を組んで考え事をしたと思つたら、突然両手を挙げて『ガオー』と叫んだ。リリアは悲鳴を上げて来た道を猛然と走り抜けて行った。

「じゃ、あたし寝るから。うるさいからもうここにはこないでね」

「あ、ああ……。ごめん……」

扉が再び勢いよく閉じられる。小さく溜息を漏らして寮を出ると、入り口付近の草むらに膝を抱えて縮こまっているリリアの姿を発見した。

ビビっているリリアの首根っ子を掴み強引にしゃんと立たせる。涙ぐんだまま俺の手を掴んで一生懸命に握り締めてくるリリアと共に

再び歩き出した。

「そんなにおっかなかったか、あいつ……」

「こ、香水のにおいがきつかったです……うつつ」

口元にクロークの袖を当て、涙目で歩くリリア。そういえばリリアは嗅覚がいいんだろうか。俺の事もおいで判断していたような。リリアと共に東の通りに出る。シャングリラは主に東西南北の四つの大通りによって構成されている。中心部には塔を抱く英雄学園デИАノイアを掲げ、そこにたどり着くまでの四つの通りがメインストリートなのである。

その中でも東の通りは怪しいグッズを売っている店が多く、魔術的なアイテムやそれこそ錬金術師が好みそうな素材など、ショーウィンドウの中で平然と輝いている。

胡散臭いファンタジーショップにも大分慣れたつもりだが、それでもここはさらに怪しかった。夜も更けてきたというのに、店は閉まるどころか開き出すばかりで夜はまだまだこれからというか、昼間は通う事の出来ないようなお店なのか、怪しい服装の人たちが歩いている。

その人たちもまたリリア的にはおっかないのか、びくびくしたままおっかなびつくり俺の後ろにくっついてくる。しょうがないのでそのまま俺達は研究室が立ち並ぶ一画まで移動した。

「さて、この辺にメリーベルの研究室があるわけだが……どれがどれだかわからんな」

俺に言わせると全部同じ建物に見える。この世界の人にとってはそれぞれが特徴的なんだろうが、俺には特徴的過ぎて逆にわけがわからなかった。

どうしたものと途方に暮れていると、何かに気づいたらしいリリアが突然顔を上げた。暗闇へと伸びている路地裏を見つめ、俺の手をちよこちよこ引いて言う。

「あっちの方に、人が倒れてます！」

俺は目を凝らしてみた。しかし、そんな様子はない。というか暗すぎて俺には見えなかった。

「本当か？ まあ、行つて見るか……」

リリアに手を引かれ、裏路地に走っていく。しかし十歩も足を踏み入れると完全な闇に包み込まれ、足元もろくに見えない状態に陥ってしまった。

そうして走っているうちにリリアもわからなくなったのか、その足取りが急激に不安げに変化する。そうして走っていたリリアが突然目の前ですっ転び、派手に倒れたのを見て俺は足を止めた。

「リリア！？ 大丈夫か？」

「ふぎゅ……」

暗くてリリアがどこにすっ飛んだのかもわからない。その場に足を止め、よくよく目を凝らす。そんな俺を救う為か、雲間から見えた月明かりが路地裏に薄っすらと差し込んで行く。

そうして俺が目にしたのはゴミの山に上半身をつっ込んでじたばたしているリリアと、そのリリアが躓いたらしい、足元に倒れた女の子の姿だった。

「本当に倒れてる。そして都合よくメリーベル・テオドランドだ」

メリーベルは良く見ると沢山の猫のようなものに囲まれていた。猫のようなもの、というのは猫にしてはなんというかこう、全員共通した意思を持っているかのように俺たちを睨みつけているのである。思わずたじろいだ、リリアをゴミ山から引く張り出す。また泣きそうになっているリリアの顔を拭き、足元のメリーベルに駆け寄った。

「おい、しっかりしろ！ 何でこんなところで倒れてるんだ！」

「メリーベルさん！ メリーベルさん！ 起きて下さい！ あ、もしかしてこれ最近流行ってるんですか？ 師匠もこの間道端で寝てたし……」

まだ引く張るのかそれ。そして本当に不思議そうな視線を俺に向けないでくれ。

しばらくすると、メリーベルがゆっくりと瞳を開いた。しかし体を起こす気配は微塵もない。目を開き、しかし倒れたままの姿勢でメリーベルは呟いた。

「……水」

「は？」「え？」

俺達は同時に聞き返した。すると今度は先ほどよりもすっかりした口調で、メリーベルは応えた。

「水……。あと、ご飯……。おなか……。すい、た……」

直後、盛大にメリーベルの腹の虫が鳴った。

リリアが馬鹿っぽい目で俺を見ている。違う。俺はあの時、腹が減って倒れていたわけじゃねえから。つーかマジでお前それいつまで引つ張るんだよ。

仕方が無くメリーベルを担ぎ上げようとすると、猫たちが一斉に襲い掛かってきた。慌てる俺を見て、リリアは突然びしりと人差し指を突き出し、猫たちに言う。

「めっ！……！」

リリアの一喝に猫が大人しくなる。なんというか、リリアに動物的な何かを感じ取ったのかも知れない。

意外な才能を発揮したへこたれ勇者様は得意げに俺に笑いかけていた。多分褒めて欲しかったのだと思ったが、あえてそれをスルーして歩き出す事にした。

「あ、あれ！？ 師匠、何かリリアに言うことないんですか！？」

「ない。お前にいう事なんてない」

「え、あれ……？ あれえゝ？」

リリアは暫くそうして首を傾げていた。メリーベルの腹が再びなり、俺達はその音に急かされるように路地裏を後にした。

特訓の日（２）

メリーベルの研究室は迷路のように複雑に行き交う裏路地を進んだ奥地に存在した。

古ぼけた木造の建造物で、あの寮よりもさらにボロくみえる。そもそもこのあたりの研究所たちは全部滅茶苦茶に乱立しており、どこからどこまでが元々あった建造物でどこからどこまでが後で勝手に錬金術師たちが増築してしまったものなのかよく判らない。

彼女の研究室はお世辞にも綺麗であるとはいえなかった。乱雑に床の上に散らばった本、蜘蛛の巣だらけの天井、埃っぽい強烈な淀んだ空気。それに付け加え薬品たちの独特の刺激臭が一斉に俺たちに襲い掛かる。

「ふぎゅうつ……っ」

きついのは俺よりもリリアらしかった。鼻を両手で押えながら目尻に涙を浮かべながらじたばたしている。なんだかわからない薬品が火にかけられ、泡立つそれから蒸気が立ち上る横でメリーベルはパンを無言で齧っていた。

メリーベル・テオドランド。錬金術科の一年生。しかし、歳は恐らく俺と同じか少し上くらいだろう。ボロボロのマントの下から伸びる作業用グローブのままパンを齧るその姿はちょっと普通ではない雰囲気が出ていた。

「で」

口に最後のパンの欠片を放り込み、ビーカーに入っていた液体……ではなく水を一気に飲み干すメリーベル。その容器使っているのか？　とか思いながらもメリーベルに視線を向ける。

「あたしに何か、用？」

淡々とした口調だった。長い前髪の間から覗く瞳は何を考えているのかよく判らない。表情からも考えは読み取れず、何とも話しづ

らい雰囲気だった。

「用ってわけじゃないんだが……」

冷静に考えてみると、ここに来たはいいものの目的は何故彼女がランキング下位に存在しているのかという質問をする為なのである。そんなもん行き成り押しかけて不躰にするもんじゃないと思う。まあ敵情視察という意味でもあるのだが、問題はリリアの方だ。リリアは鼻を抑えたままメリーベルに身を乗り出す。

「あの……」

「その前に、自己紹介。あたしの事は、知ってるみたいだけど。あたし、あんたたちのこと知らないし」

「は、そうですね。えっと、私はリリア・ライトフィールド……戦士学科一年生です」

リリアの名乗りには俺は違和感を覚えた。リリアは『勇者』という肩書きだったはず。それがどうして戦士学科なのか。

そんな質問を挟む余地も無く、メリーベルは頷いて答えた。

「それは知ってる」

じゃあどうして質問したんだ。

次は俺の自己紹介をするべきなのだろう。俺は腕を組み、少し思案する。自分の学科名が余りに長すぎてすっかりド忘れしてしまったのである。

まあ、実際に俺は授業を受けているわけでもないし、適当にその辺は誤魔化せばいいだろう。そう考えて名乗ろうとすると、メリーベ

ルは猫を一匹足元から抱きかかえ、俺に投げた。

「おわあっ！？ い、行きなり猫投げんなっ！」

「問題ない。猫はそのくらいじゃ死なないもの」

いや猫じゃなくて俺の方の心配をしてほしい。爪が服にめっちゃ食い込んでるんだけど。

「ホンジョウナツル、でしょ？ 最近ずっとへっぽこ勇者と一緒に居るって有名だから」

「そ、そうなのか？」

まあ確かにコイツ以外に一緒にいる相手なんていないわけだが、そんな噂になるほど人前を歩いているつもりはないが……。

そんな事を考えていると、メリーベルは新たに猫を二匹抱きかかえ、その喉元を撫でながら言う。

「猫の噂で、だけど」

「猫の噂って……お前猫の気持ち判るのかよ」

「分からなかったらそんな事は言わない。あなた……馬鹿？」

無表情に馬鹿にされるのがこんなにイラっとするとは思わなかったぜ。

メリーベルの足元にはそろそろと猫が集まってくる。気づけば室内は猫だらけになっていた。メリーベルは猫たちを構いながら、火にかけられた鍋を見つめている。

一見こいつが変わり者なのは充分にわかった。内面も勿論変わり者だろう。リリアにちらりと視線を向けると、目的も忘れ猫たちにすっかり目を奪われてへらへらしていた。

「ぬこー。ぬこですよーなつるさん！　かわいいですねえ」

俺は動物はそんなに好きじゃないんだが。

猫に手を伸ばしては手を引っかかっているリリアだったが、猫には引っかかれても噛み付かれても泣く事はなかった。むしろ楽しそうに笑っている。

「それで結局何をしに来たの」

「ああ。お前、気を使ったりするだけ無駄な感じだから単刀直入に言っていいか？」

「その判断は的確。どうぞ」

「あんたが闘技場ランキングで最下位から二番目だから、本当に最下位のリリアと戦ってほしいんだ」

俺の言葉にメリーベルは何の反応も示さなかった。聞いているのか聞いていないのかも判らないほど無反応。猫を指先で撫でながら、暫く彼女は黙り込み、視線だけで俺を捉えた。

「……それで？」

「……いや、それだけなんだが」

「ランキングバトルの申請なら、相手の許可が無くても出来るはず。」

わざわざここまで来た理由がそんな事だとしたら、やっぱりあなたは馬鹿」

さつきから黙って聞いていればこいつ……。

猫を膝の上に乗せたまま椅子に深く背を預け、メリーベルは顔を上げる。視線の先、指先を猫にガシガシ齧られながら笑うリリアと視線がぴつたりと一致した。

じいっとリリアを見つめたまま微塵も動かないメリーベル。対するリリアは蛇ににらまれた蛙のように同じくぴたりと動きを止めていた。

猫が鳴き、リリアの指先から血がどくどく流れ出す。それだけの沈黙が空間を支配し、俺も何も言えないまま数分間が経過しようとしていた。

「……あ、あのう」

沈黙を破ったのはリリアだった。リリアの血だらけになった猫が走り去っていき、リリアは真面目な表情でメリーベルを見据えながらときばきとハンカチで傷口を覆って行く。まるで呼吸するかの如く怪我の手当てをしている所を見ると、普段からよく転んだりしているんだらうと何となく想像してしまう。

「メリーベルさんは、弱いんでしょうか？」

「ん、弱い」

物凄く失礼な質問に間髪入れずに答えるメリーベル。俺は思いつきりずっこけそうになったが、そんなマンガ的表現は一步なんか思いとどまった。

「リリアより、弱いんでしょうか……？」

「それはやってみないとわからない。どうして？」

「その……どうして勝率0%なのかなって思って……。何か事情があるなら、リリア、戦ったりしちや申し訳ないかなって……」

「理由はない。ただ、試合は全部棄権しているから、勝率は0%なだけ。格下を倒した所で、ポイントにはならないから、誰も最近はおたしに挑まなくなった。それだけのこと」

なんか淡々とすごいこと告白しやがった。

全部試合は棄権？ だったら何で闘技場に登録してあるんだ？ それこそ何か事情があるんじゃないのか……色々と考えてしまう。

それはリリアも同じだったのだろう。瞳をきよるきよるさせ、不安そうに俺に救いを求めて視線を送ってくる。しかし俺だって何とも言えない。

「って、ちょっと待った。じゃありリアが試合を挑んだら？」

「勿論棄権する。あなたの勝率は0%ではなくなる。おめでとぅ、ぱちぱちぱち……」

「わぁーい、ありがとうございますー！」

一人でぱちぱちと拍手を送るメリーベル。俺は額に手をあて、メリーベルを手招きする。

彼女は小首をかしげ、とことこ歩み寄ってくる。俺は容赦なくその頭部を引っぱたいた。

軽快な音が鳴り響き、メリーベルの目が真ん丸くなる。俺はリリア

を手招きし、恐る恐る近づいてきたその頭をもう一度引っぱたく。
二人してポカーンとしたまま俺の前に立ち尽くしていた。

「お前ら馬鹿かっ！？ ちょっとそこに座れ！」

「……座っていたら、ナツルが立てって」

「うつさいボケ！ いいから黙って座る！ リリアは泣くなー！」

「うあい……っ」

二人を椅子に座らせ、俺は立ち上がる。腕を組み、二人の前で咳払いする。

「お前らなんか全体的におかしいぞ。どっからツッコめばいいのかよくわからんが、とりあえずリリア！ 相手が棄権して喜んでんじやねえ！ そんなんじゃゲルト・シュヴァインになんて永遠に勝てないぞー！」

「う、ごめんなさい……」

「……ゲルト・シュヴァイン？ トップランカーの？ ゲルト？」

俺の言葉を聞き、メリーベルはリリアに問い掛ける。おずおずとリリアが頷くと、メリーベルは後ろを向いて肩を小刻みに震わせていた。間違いなく笑っている。リリアにもそれが伝わったのか、顔を真っ赤にして俯いていた。

「随分と崇高な目的をお持ちのようで」

「悪いかな？　つか、お前も棄権するとか軽々しく言うならランキングなんて辞めちまえ！　なんで棄権するのかせめてその理由を言えっ！！」

「めんどくさい」

我が耳を疑った。メリーベルをもう一度手招きする。とことこ前に出てきたその頭を引っぱたき、さらに頭を両手で掴んでグルグル振り回す。

「おゝまゝえゝはゝっ！！　何言っただボケッ！！　少しはシャキッとせい！！」

「なんで今日あったばかりのナツルにそんな事言われなきゃいけないの……うゝあゝ……」

全くもって正論なのだが、今はあえてシカトする。

というか、頭を掴んで気づいた事が一つ。メリーベルの茶色の髪の毛の中に、なんとというか……いや、なんとというか……いや、気のせいだろう。

頭を離すとメリーベルは気持ち悪そうな表情を浮かべながら席に戻った。俺も椅子に座る。奇妙な沈黙が再び場を支配した。

「……と、いうか。試合を棄権しているのは、リリアも同じはず」

「はあ？　おい、リリア？」

リリアに視線を向けるとリリアはあさつての方向を見つめていた。俺はすぐさま駆け寄り、その頭をがしりと掴んで強引に視線を合わせる。

「どこ見てんだコラ……」

「べべ、別になんでもないですよ？」

「嘘付けコラアアアア！　てめえ、棄権してやがったのか！？
そんな事一言も言つて無かったじゃねえかつー！」

「だ、だって聞かれなかったもん……っ」

「んだとコラアアアアッ！！」

とりあえず頭を掴んだ状態のまま頭突きを見舞つ。リリアは額を両手で抑えながら涙目でうなだれていた。

「勝率0%の意味が判つたぜ……。お前ら、戦う気が最初からないんだろ」

「何を今更。ナツルはやっぱり馬鹿」

「何か言つたか？」

「暴力反対。可憐な乙女に対して何をするの。きゃー、こわーい」
全く怖がっている様子はなかったが、もう相手にするのも疲れたので溜息であしらう事にした。

「じゃあ、何だ……？　メリーベル、お前はこいつがしょっちゅう試合を棄権しているのを知っていたのか」

「猫の情報網を甘く見ない事。猫にも馬鹿にされるリリアの事だから、間違いはない」

「だからって、お前も棄権したりしていいとでも思ってたのか？」

自分でも驚くほどその声は威圧的だった。

メリーベルの言う通り、こいつと俺は初対面だ。だから自分のやり方についてとやかく言われる筋合いは全くないのだろう。しかし、彼女は俺の真剣な言葉に耳を傾けてくれた。

リリアもまた、顔を上げて俺を見ている。あんまり他人に対してこういう事を言うのは好きじゃないんだが、二人の態度を見ると黙っていらなかった。

「お前ら、何のために闘技場に登録しているんだ？」

二人は答えない。俺は言葉を続ける事にした。

「皆、理由は色々あるにせよ真剣に取り組んでる事だろ？ 棄権だけしていればそれでいいとか、負けても別にそれでいいとか、そういう考え方は相手に失礼だとは思わないのか？」

メリーベルは腕を組み、猫を抱えながらそっぽを向く。リリアは落ち込んだ様子で顔を上げ、それでも俺に異見した。

「でも……戦ったら相手だって傷つくんですよ？ だったら、出来れば戦わない方がいいじゃないですか」

「馬鹿を言うな！ そんな風に思っているんなら、即刻闘技場の登録なんて取り消して来い！！ 傷付ける事も、傷付けられる事も、覚悟して合意で戦うんだろう？ それを何だ、お前は何様だ！ 弱

くて力も無いくせに、一人前に他人を心配できる身分なのか？」

詰め寄る俺にリリアは完全に圧倒されていた。唇を噛み締め、俯くその様子に少し言い過ぎたかとも思ったが、これくらいハッキリ言わなければこいつには伝わらない。

リリアはいつもそうだ。なよなよしていて、へらへらしていて。本気で何かに取り組んだことなんて無いに違いない。そうした物事に対する浮ついた態度が、余計にコイツの馬鹿さに拍車をかけているんだ。

真剣に取り組む事をしなくせに、無理だのなんだのと諦めの言葉ばかり口にする。どうしてそうなんだ？ やりもしなくせにやつたつもりになりやがる。決められて与えられただけの人生でそれで楽しいのか……？

自分の過去を一瞬思い出し、少々熱くなってしまった。だが、リリアが試合を棄権していたという話は俺にとっては大きかった。闘って負けるのと、何もしないで逃げるのでは、敗北の意味が全く異なる。そのベクトルを履き違えている以上、リリアはこれ以上強くなることなんて無い。

「メリーベルにもリリアにも事情はあるのかもしれない。だが悪い事は言わない。闘えないんならこんな街に居るだけ無駄だ。二人ともさっさと荷物を纏めて田舎に帰ったほうがいい。俺の言いたい事はそれだけだ」

言い切った。年下の女の子と初対面の女の子相手に思い切り言い切ってしまった。

だが、無性に腹が立つのも仕方ないだろう？ だってこの世界は、あいつが……冬香が作った世界なんだ。それなのに、主人公も登場人物も、こんな情けない事を口にする。

やりもしないのに決め付けて諦めて勝手に終わらせて乗り越えた気

になっている奴が俺が一番許せない。性に合わない以上、これ以上この世界にいても仕方がない。

リリアは駄目だ。特訓するとかそういうレベルの話じゃない。最初から『勝つ気』が絶対的に欠落しているんだ。勝てるはずがない。背を向け部屋を後にしようと歩き出す。その時、メリーベルの言葉が俺を捉えた。

「確かにナツルの言う事も一理あるかもね」

ゆつくりと振り返る。メリーベルは相変わらずそつぽを向いて猫と遊んだままだったが、言葉だけは少なくとも真剣に聞こえる気がした。

「理由は兎も角。面倒くさくても、たまにはやることやるべきかも」

俺は素直に驚いていた。メリーベルは相当ひねくれた奴なのだとばかり思っていただけに、その発言は意外性充分だった。

そして猫だらけの研究室の主は立ち上がり、リリアの前に立つ。落ち込むリリアに猫を一匹渡してそれから囁いた。

「闘ってみる？ 一度くらい、全力で」

リリアはその言葉に応える事はなかった。

メリーベルは一方的に試合の日時をリリアに告げる。それを拒否する権利も棄権する権利もリリアは持ち合わせている。それはメリーベルからの正式な挑戦状にして、リリアに与えられた自由の選択肢だった。

別に選ばなければならぬわけではない。それを避けて通る事も出来る。だが、メリーベルがこう言ってくれている以上、闘わない事を選ぶのならば、俺はこれ以上リリアの面倒は見切れない……そう

考えていた。

共にメリーベルの研究室を後にする。帰り道、リリアはずっと黙って俺の半歩後ろを歩いていた。俺の言葉かメリーベルの言葉か、どちらかが余程シヨックだったのだろう。こうまで落ち込まれると悪い事をした気になってくるが、仕方が無い。いつかは誰かが言わなきゃ成らないことだ。

「……師匠」

「何だ？」

「……リリア、あんな風に怒られたの、初めてでした……」

「そうか」

「……師匠は、どうしてそんなにリリアに一生懸命何ですか……？」

思わず足が止まってしまった。振り返るとリリアは寂しげな表情で俺を見上げていた。

「一人ぼっちで、落ち零れで、駄目で……。でも、師匠は……なつるさんは何度もリリアを助けてくれました。傍に居てくれました。がんばれって言うてくれました。でもそれってどうしてなんですか？ どうして、リリアなんですか？」

俺は答えられなかった。何故といわれたところでその真意は俺にだつてわからない。ただそういうルールで、そういう取り組みをしなきゃならない。それだけのことだ。

なのに俺は今更になって自覚させられる。この世界を生きる登場人物にとって、俺の存在は現実であり、幻なんかではなく、俺の言葉

は確かに彼女に届いてしまう。

「……勇者、だからですか？」

その『勇者』の二文字を呟いた時、リリアはまるで別人のようだった。

暗く、淀んだ言葉。まるで憎しみでも抱くかのようなトーンでその二文字を口にした時、リリアは本当に悲しそうだった。言葉に出来ないその不安に押し黙っていると、彼女はゆっくりと顔を上げた。

「いいんです。なつるさんにそんな事訊く資格、ないですよ……。わかってます！ なつるさんが、師匠が一生懸命だっただけは……それは確かですもんね」

「リリア……」

「リリア、闘うですよ！ 闘って……今度は逃げないで闘うです。だから、見てくださいな？ 師匠が見てくれたら、リリアもつと頑張れると思いますから。だから……」

きつと不安でたまらないはずなのに、無理に笑ってみせる少女。

俺はその肩を少し強く叩き、歩き出す。俺の後を追ってくる足音が、少しだけ元気になったような気がしたのが気のせいでない事を祈りたい。

こうしてメリーベルとリリアの試合スケジュールが決定した。

その結果、あんな事になってしまつとは、勿論俺はこの時何も予想もしていなかったのだが……。

特訓の日（3）

別に、この世界を救う救世主になりたかったわけじゃない。

別に、なりたくて勇者になったわけでもなければ、仕方が無くここに居るわけでもない。

リリア・ライトフィールドの脳内を交錯する無数の思考。深く吐き出した息は自分で思うよりもずっと熱く、痛みを帯びて震わせる。

手にした剣は重く、振り上げる事さえ困難だった。それは何よりも己の努力不足なのだから仕方が無いのだが、今だけは鎖で頑丈に封印された聖剣を恨まずには居られなかった。

父であり先代の勇者である男、フェイト・ライトフィールドがたった一つ娘に残した遺品にして伝説の武具、聖剣リインフォース。本来ならばあらゆる災厄を両断し、一度は世界を救った剣も彼女の呼びかけに応える事はなかった。

闘技場に立つと己で決めた以上、傷つく事も傷付ける事も覚悟しなければならぬ。そんな事は夏流に言われずともとくに気づいていた。自分のしている事が問題を先送りしているだけだという事も、ただ受身になって未来を『諦められるとき』を待っているだけだという事も。

だけど、そう。なりたくて勇者になったわけではない。本当は普通の女の子でよかった。勇者なんて人種に、ロクな人間がいるはずもない。リリアはそう昔からずっと考えてきた。

救国の英雄。世界を守った勇者。百万の祝杯と勝利の美酒がその存在に浴びせられた所で、一人の勇者はたった一人の妻も、娘も、故郷も守る事は出来なかったのだから。

今でも鮮明に思い出せる己の中にある過去。旅に出た父親は、棺桶の中に入って帰郷を果たした。その時の景色を、リリアは今でも覚えてる。

レンガ敷きのグラウンドに剣を逆手に突き刺して立ち上がる。本来な

らば誰の目から見てもそれは無謀な試合だった。いや、最早それは試合ですらなく、一方的な暴力に過ぎない。

自分自身に問い掛ける。何故この舞台に上がったのか？ 勇者という肩書きが齎す様々な悲しみを、否定していたのではないのか？

「……決めた、から」

メリーベル・テオドランドは未だ遠く、彼女の声は既にリリアには届かない。

だが、その風の向こう側から聞こえる確かな相手の心遣いにリリアは微笑みさえ浮かべ、それから強い眼差しでメリーベルを見つめ返す。

そう、例えこの手足がばらばらに吹き飛んだとしても、逃げられない理由がある。

リリア・ライトフィールド対メリーベル・テオドランド。最弱の称号を欲しいままにする二人の決闘は、誰も予想しなかった状況を迎えようとしていた。

特訓の日（3）

リリアとメリーベルの決闘が予定される日。夏流は一人闘技場の観客席、その最前列に座っていた。

自分で戦うようにと言い出したくせに、少年の心は今不安で一杯だった。余りにも早く入場してしまったせいで、まだ客席は半分も埋まる様子がない。

「不安になりましたか？」

夏流の隣、人の姿に変化したナナシの姿があった。シルクハットの紳士は口元に手を当て、夏流に微笑みかける。

それは最早言葉で答える必要もないほどシンプルなこと。今はまだ誰もいないフィールドを眺めては複雑な心境を何度も脳内で繰り返していた。

あの日以来、リリアには会っていない。夜の帰り道、リリアが一瞬見せた寂しげな表情の意味……それが今になって彼を不安に陥らせる。

メリーベル・クラークの『棄権』の意味。リリア・ライトフィールドの『棄権』の意味。それをきちんと理解しないままあれだけの啖呵を切ってしまったのは何故なのか。

だが確かにあれでよかったのだとナナシは彼に語りかけた。きつかけはいつだって主人公を突き動かすのに必要になるものだから。つまり誰かが必ず背中を押してあげる必要があった。

他人と正面から向き合わずにズレた生き方をしてきたリリアにとって、夏流の言葉は始めて正面から向けられた誰かの熱い気持ちだった。それが心の中に燻っていた彼女の中の何かに火をつけたのならば、決して無意味などではない。

それでも不安になってしまふのは普段のリリアの弱弱い素顔を夏流が知ってしまったから。何も知らない、リリアを理解していない夏流がまだ同じ席に座っていたのだとしたら、今ほど悩んだりしなかったであろう。

「……リリアは、勇者になりたくなかったんじゃないかな」

夏流の呟きにナナシは苦笑を浮かべる。それはもう『なりたかったかどうか』なんて問題ではない。『そういう世界』に生まれ、『そういう役割』を持たされた。

わかっている。そういうものなのだ。そのために存在するのだ。だとしても、いや、だとしたならば、何故……。

「冬香は、あいつにそんな運命を課したのか……」

口元に手をあて、思考する夏流。その肩を叩き、ナナシは首を横に振った。

「貴方が今考えてもそれは答えの出ない事です。貴方はリリア・ライトフィールド……勇者を表舞台に引っ張り出した。今はそれだけで良いではないですか」

気を使つての言葉ではない。勿論嘘でもなければ、それはただ真実を指し示しただけの言葉に過ぎない。だが、夏流は後悔していた。もつとリリアの話をちゃんと聞いておけばよかった、と。

相変わらず原書にはばやけた絵と文章しか浮かび上がっていない。だが夏流が危惧した通り、そこにはうつすらと不気味な絵が浮かび上がろうとしている。

その結果へと世界を近づけている行動がもしも自分によるものなのだとしたら。そこで、少年は思考を閉ざした。

「……そうだな。確かに今、俺がうだうだ考えてもどうにもなることじゃない」

今はただ、リリアをちゃんと見ていてあげよう。

負けてしまってもかまわない。ちゃんとこの場所に出てくるのだと決めただけで、大きな一歩なのだから。

だから……無理はするな。そんな言葉を心の中で繰り返す。冷や汗が零れ落ち、自分が思いのほかリリアに肩入れしている事実を知る。ナナシは肩を竦める。夏流はそれを見てみぬフリをしてやり過ごした。少し、気持ちが浮いている。落ち着かない。これは少々、冷静さに欠ける状況だろう。

そんな時、夏流の隣に一人の少年が腰掛けた。少年……アクセル・スキッドの姿があった。二人は待ち合わせをし、事前にこの席を予約していた。

遅れてやってきた……否、時間通りにやってきたアクセルは夏流の落ち着かない様子を見て肩を叩き、苦笑を浮かべる。

「今からお前がそんなにビビっててどうすんだよ？ ほれ、もうちょっとシャキっとしろい！」

「あ、ああ……悪い。いや、だって……あのリリアだぞ？ リリア、剣も振れないっていうのに……一体どうするつもりなんだ」

「そうかい？ 別に勝つ手段は剣を振るだけじゃないさ。ま、勝つても負けてもリリアちゃんにとっては大きな前進だ。俺たちが口を挟むことじゃない」

「いいのか？ お前、リリアに気があるんだろ？ 怪我したりしたら……」

「好きだからこそ、信じてるんだよ。あの子は周囲に笑われて、駄目駄目で、しょっちゅう転んで泣いて、不幸で……でもよ、まだこの街に居る。あの子がこの街に自分の意思で居る意味を、俺は信じてみたいんだ」

アクセルの言葉に夏流の両肩に重く押し掛かっていた不安は少しだけ消え去った。確かにそう、アクセルの言う通り。好きだから傷ついて欲しくない……でも、それだけではない、もっと上の志がある。夏流は僅かに驚嘆さえしていた。アクセルは調子に乗っているようで、自分よりずっとリリアを信じている。信じられる。それは、本当に彼女をよく見て想っているという証拠なのかもしれない。

試合開始時間が近づくにつれ人が集まり始める。闘技場での試合は一日に何度か連続で行われ、何組かの組み合わせが事前のスケジュールから割り出される。

今日一番の試合がリリアとメリーベルのものである以上、無名の二人の試合を見るために朝早くからこの場所に集まっている面子は少ない。結局客席は半分埋まらないまま、試合開始時間を迎えようとしていた。

シャングリラの一番の娯楽施設でもある闘技場が人で埋まらないのは珍しいケースだった。予想はしていたものの、アクセルも夏流も苦笑を浮かべる。

「ま、まあ……誰も期待してない試合なんだろうねえ……」

「確かに、わざわざあいつらの試合を見に来ているのは……俺とアクセルと……？」

そうして客席を見渡していた夏流はようやく気づいた。自分たちの座っている列より三つ後ろの列、誰も居ないその客席の中央部にぽつんと座る黒い剣を携えた少女の姿があることに。

アクセルもゆつくりと振り返り、二人は目を丸くした。そこに座っていたのはリリアの憧れの人、トップランカーのゲルト・シュヴァインだったのである。

二人は同時に前を見て同時に首を傾げた。何でゲルトがこんなところにいる？　そう思うのは全く不思議な事ではない。無名の二人の試合をわざわざゲルトが観戦する理由……二人には全く検討もつかなかった。

「ナツル、ゲルトの知り合いなのかー？」

「んなわけないだろ……。なんで居るんだよ、しかも後ろに……」

「わたしが後ろの席に居ると、何か問題でもあるのですか？」

二人は同時に立ち上がり振り返る。二人のすぐ後ろに噂のゲルトの立つ姿があった。

リリアの着用している勇者のアーマークロークに近い形状の、しかし漆黒の衣服。長い黒髪に金色の髪飾り、背中には美しい装飾の施された漆黒の剣を携えている。

ゲルト・シュヴァイン。常にトップに立ち続ける学園のエリート。その彼女が何故この場所にいいのか、夏流もアクセルも全く知らなかった。

「ゲルト・シュヴァイン……」

「最近は名前ばかり勝手に一人歩きしてほんと困り果てています。そういう貴方は？」

「本城夏流だ。そっちはアクセル・スキッド」

「ナツルにアクセル、ですか。始めまして」

「は、はじめまして……」

腕を組み、背後の席に腰掛けるゲルト。その眼差しは冷たく、何もして居ないというのに強烈な威圧感が在る。

会話は一方的に終了させられてしまった。アクセルも夏流も席につくしかない。しかし、背後からゲルトの強烈な視線をひしひしと感じる。

「なぐんか、やな席になっちまったな……」

「……は、ははは」

試合開始時間を迎える。結局ゲルトは何も言わず腕と足を組んだまま、ステージを無言で見つめていた。その視線が夏流の後姿を捉え、少女の唇は一度言葉を紡ぎそうになった。

いや、しかしそれは必要のないこと。全ては試合を見れば分かるのだから。ゲルトは夏流を意識しつつ、フィールドに視線を向けた。

『さあ〜今日も始まりました！ 英雄学園ディアノイア、ランキングバトル〜！ 最早ここに居る人たちに説明は不要だとは思いますが、今日もわ〜たくし実況のマイクがルールを説明いたしましょうー！』

闘技場での戦いは基本的に何でもあり。武器も道具も使い放題で、要するに相手に己の全力のコンディションで勝利すればいいというだけの話である。

フィールドは特殊な結界を覆われており、透明な壁に覆われた空間で生徒たちは決闘を行う事になる。勝敗を決定するのは生徒の戦闘不能か、どちらかの降伏の二種類のみ。試合が終わるまでは決してフィールドを降りる事は出来ない。

『まあこんなのは説明しなくても皆分かってるでしょう！ さて、本日の戦目のカードは……おっと？ わたくし見慣れない生徒名に若干戸惑っておりますが、果たしてどんな試合になる事でしょう！？ 第一回戦！ リリア・ライトフィールド対メリーベル・テオドランド！！ 両選手、ただ今入場です！！』

夏流とアクセルが息を呑む。暫くの間、全員がフィールドに注目するが、一向に二人が現れる気配が無い。

実況も停止してしまった。会場がざわつきはじめる。すると、ようやく片方の生徒、メリーベルがフィールドに姿を現した。紅いマントで全身を覆い、足元には猫たちを引き連れている。その滑稽なスタイルに会場がざわめいた。

『なんででしょうか？ 猫でしょうか、あれは？ よく判らないが戦闘に使用するのか…… っと、思いきや猫たちはここで退場だあ……ッ！ 何故出てきたのかよく判らないぞ……ッ……！』

「め、メリーベル……」

「……随分変わったやつだなあ。まあ俺が言えたセリフじゃねえけど」

そしてメリーベルは舞台に出てきたというのに、いつまで経ってもリリアの姿が出てこない。

再び会場がどよめきだした頃、慌てて飛び込んでくるリリアの姿があった。リリアが遅れてやってきた理由を推測するにも容易い、明らかなリリアの異変に夏流もアクセルも思わず立ち上がり身を乗り出した。

「り、リリアのやつ……なんだ、あの装備！？」

よるめきながら入ってきたリリアは普段から装備しているアーマークロークの上にローブを何枚も重ね着し、顔もマスクのようなもので覆っている。夏流はなんとなくその顔のマスクだけはメリーベルの薬品のおいに対抗するものなのではないかと個人的に推察していた。

どこからどう見ても怪しい、フードの中から覗くマスクの少女。アクセルは爆笑し、夏流は両手を合わせて神に祈った。どうかこれ以

上おかしな事になりませんように、と。

『ず、随分と重装備ですね……。さて、選手も揃った所で試合を開始したいと思います！ わたくし、ジャッジも務めさせていただきますので皆さんどうぞよろしく！ それでは早速、試合開始！』

何だか投げやりな気がしたのは夏流だけではなかった。勿論この試合には誰も期待などしていないし注目もしていない、前座ですらない戦いだ。誰もがどうでもいいと思っているし、時間を潰すだけのものにすぎないだろう。

だがこの会場でフィールドに立った二人だけは全くそんな事は関係なかった。お互いに正面に向き合い、それから戦いに備える。

「あおう」

問い掛けたのはリリアだった。二人は近い距離、2メートル程の間をとって向かい合う。

「試合、受けてくれてありがとうございました」

「ん……。まあ、構わない。たまにはこういうのも悪くない」

「はい。それで、あの……。じゃあ」

「ん。全力で」

紅いマントが投げ捨てられる。

メリーベルの短い茶髪が風に揺れ、マントの下、研究室で夏流とリリアが見た物とは全く異なる軽装が露になる。革のブーツに革の防

具、両手には特殊な加工が施され、強力な魔力を帯びた手甲が強烈な存在感をリリアにアピールしていた。

会場がどよめいた。メリーベルは錬金術師である。そもそも、戦闘に向いているタイプではない。だがしかしその軽装と武具の様子、整え方、そして身のこなし……あらゆる点が証言していた。メリーベル・クラークは、格闘戦闘も出来る錬金術師なのだ。

構えも表情も、全て下位ランクのものとは思えない威圧感が在る。驚いていたのは夏流もアクセルもそうだったが、背後で腕を組んでいたゲルトも目を丸くする。

「おい、メリーベル……あいつ何者なんだ……」

メリーベルは指先をこきこきと鳴らし、軽く身体を動かしながらリリアを見つめる。

リリアもまた、メリーベルの意外な戦闘スタイルに完全に呆気に取りられていたが、メリーベルが指先でリリアを示すと同時に気を取り直した。

「やるからには手は抜けないし、怪我をさせると思う。もし死んじやっても、恨まないで」

「……は、……えっ!？」

リリアが返事をするよりも早く、メリーベルの拳がすぐ近くまで迫っていた。慌てて聖剣を掲げるが、ガードの上からリリアの小さな身体は後方に吹き飛ばされていた。

鳴り響いた重く激しい金属音はそれだけの威力が細い腕から繰り出された事を意味している。メリーベルのアームガンドレッドは淡く光沢する魔法文字を浮かべながら火花を散らす。

「ルーン加工」

突然のゲルトの発言に二人は振り返る。

「彼女は錬金術師でしたよね。武器に特殊な魔術を付与する事で、武器そのものに高い攻撃能力を事前に与えて来ている」

吹き飛ばされたリリアは剣の重さに振り回され、あっさりとダウンしていた。そこへ一直線に駆けてくるメリーベルの追撃が入る。倒れたままのリリアを蹴り上げ、フィールドの端、目には見えない壁に叩き付ける。その衝撃で既に意識朦朧となっているリリア目掛け、メリーベルは腰のベルトに挿された無数の試験管の内、紅いラベルのものを投げつけた。

「術式設置」

アクセルが身を乗り出していた。分かる人物にはわかっていた。いや、推測は難しいことではない。何せ相手は錬金術師。その瓶の身など、容易に想像がつく。

「擬似炎熱魔法」

メリーベルの唇が起動の術式を刻む。直後、瓶の内側に渦巻いていた魔力が炎の渦となり、リリアに襲い掛かった。

一瞬で発生した巨大な爆発。熱の暴風は術者であるメリーベルの指先さえ焦がすほど熱くフィールドを駆け抜ける。重い衝撃にコロシム全体が震動していた。

そんな強力な術の前にリリアに出来る事など何もなかった。まるで人形のように軽々と吹き飛ばされ、フィールドの中央に向かって転がっていく。何の受身も取れず、頭から落下した少女は血だらけに

なつて無様に倒れ、ピクリとも動かなかった。

血溜まりだけが残酷にレンガの網目を縫うように広がっていく。完全に会場は沈黙していた。メリーベルの強さにも驚きを隠せなかったが、だがしかし今の状況はそんな事を言っている場合ではない。目の前で人間の……少女の命があつさりと奪われようとしている。試合になんて最初からならない。わかつていたのに。夏流は身乗り出し、手摺を強く握り締めた。

「お、おい……リリア……？」

「……まずいぞ。思い切り頭を打った……つか、リリアちゃん……あんな強力な術式、防げるだけの魔力、持っていないんじゃない……」

アクセルの一言に夏流は我慢の限界を迎えた。幸いその場所は最前列。手摺を乗り越え、夏流はフィールドに飛び込もうとする。

そんな夏流の行動を制したのは何故かゲルト・シュヴァインであった。夏流の首元に剣を突きつけ、行動を阻害する。

「今入れば彼女は失格になります」

「そんな事言ってる場合じゃねえだろ！？ メリーベルは本気だ！つか、何であんな状態なのにまだ試合が続いているんだよ！？」

「落ち着けよナツル。終わってないのは　まだ、リリアちゃん諦めてないからだ」

静まり返った会場の中、立ち上がるリリアの姿があつた。夏流は我が目を疑った。『立ち上がる』？ 何故？

立ち上がれるような状態ではなかった。いや、そんな問題ではない。

何故リリアは立ち上がったのか。勝因など、何もないというのに。傷だらけの少女は剣を杖代わりに立ち上がる。重い剣を握り締める両手は震え、足取りは心許ない。それでも少女が立ち上がる事が出来た理由は二つある。

リリア・ライトフィールドという少女が唯一発動可能であり、そして得意分野でもある『回復魔法』。己に対してずっとそれをかけ続けていた少女の傷は、尋常ならざる速度で損傷と回復を繰り返していた。

焼け焦げた皮膚が、折れかけた骨が、それでも尚何とか活動する事を許してくれるのは、彼女が魔法により己を回復しているからに他ならない。頭から大量に流れていた血も傷が塞がったことで一応止める事が出来た。

しかし、痛みはそのまま彼女に襲い掛かる。涙が溢れて仕方が無かった。痛くて辛くて、それでもどうしても倒れなくなかった。それは、少女にとっても奇妙な感覚だった。

相手が全力で向かってきてくれるという事。そしてそれに諦めずに向かう事……それは戦いの中で何かを彼女に残したのかもしれない。メリーベルはリリアの前に立ち、瓶を手にして眉を潜める。

「恐ろしい根性……。諦めていても全然おかしくはないのに」

「え、へへへ……。ほ、本当は……三回くらい……意識、跳んだんだ……。で、でも……っ」

もう一つの理由が、観客席で今にも飛び出しそうな表情で自分を見つめてくれているから。

「……決めた、から」

全力で挑み、そして負けるならいい。

だから、せめて最後の最後まで足掻こう。痛くても辛くても耐えよう。その為にここに来た。ただ、認識したかったのかもしれない。自分の弱さと自分の甘さが呼んできた結果。そして……それでもそこに立つ事が出来るのかどうか。

「遠慮、せず……かかってきて、ください……ッ！！　リリアは……逃げも、隠れもしませんからっ！！」

重い剣を両手で必死に掴み、構える。その満身創痍の姿は風が吹けば消し飛ぶ程弱弱しかった。だがしかし、誰もそれを倒せないような迫力があつた。

メリーベルは返事もなく瓶を投げつける。今度は瓶の中から電撃が溢れ出し、リリアの身体を衝撃が襲う。

頭の中が真っ白になる直後、メリーベルの蹴りが脇腹に突き刺さる。吹き飛ばされたその身体にいくつも瓶が投げ込まれ、爆発と電撃の暴風がフィールドの内部で連続で炸裂する。

錬金術によって生み出した魔法瓶は詠唱も魔力の消費も必要なく、無慈悲なまでに連続での発動を可能とする。リリアはその激しい痛みの中、しかしそれでもまだ生存していた。

何の防御能力も魔法も持たないリリアにとって、攻撃に耐える手段は一つだけ。普段から愛用している勇者のアーマークローク、そしてその上に重ね着した対魔法防御効果のあるローブたち。それらを用意した時点で、リリアはもうこんな試合内容になる事を推測していた。

勝つことは絶対に出来ない。傷付ける以前に刃を相手に届かせる事も出来ないのだから。ならばこの試合でリリアに出来る事、逃げないでいられる事があるとしたら、それはただ全てを受ける事に他ならない。

攻撃を避けられるほどの能力も防げるほどの能力もない。そんな少女がまだそこに立っていられるのは、単純な防具の性能だけではな

い事をアクセルとゲルトだけが理解していた。

「聖剣リインフォース……」

ゲルトの呟き。爆発の中で必死に耐えているリリアを守っているものの正体。それは彼女が正面に突き刺し、盾代わりにしている巨大な無骨な剣。

「魔法は物理的手段で防ぐ事は出来ない。でもリインフォースなら……リリアの身体を在る程度守ってくれるはず」

聖剣の力はなんら発動していなくとも、それそのものが強い力を帯びた存在。魔術的な攻撃は全てリインフォースが軽減する。

その上伝説の防具を仕立て直したリリアの鎧とローブの重ね着。どう見ても戦いには適さないその格好は、しかし守り続けるだけならばシンプルにそれ以上の手段がないほど上等だった。

勿論それはリリア自身の力ではない。聖剣と鎧、そしてローブ。ただ道具に頼っているだけの、何の事は無い弱者の行い。だがそれでも、リリアは逃げ出したくなかった。

爆風に吹き飛ばされ、壁に背中を強く打ち付ける。倒れた身体をメリーベルの拳が、足が打ちつける。無様にフィールドを転がりまわり、血を流し、震える足で立ち上がりながら回復魔法をかける。

一方的な暴力だった。しかしリリアは敗北を認めようとしない。血を吐きボロボロになりながらも立ち上がる。何度も何度も、何度でも。

「もういい、リリア！！ 降参しろ！！ おまえ……死んじまうだろうがっ！！」

夏流の叫び声が静まり返っていた闘技場に響き渡った。しかしリリ

アの耳には届いてはいない。

今リリアが見ている物は目の前の敵だけ。全力で自分の挑戦に応えてくれたメリーベルだけ。明らかに勝敗がついている戦いに、まだ付き合ってくれる優しい彼女の存在だけ。

「どうして……」

メリーベルはリリアを殴りながら瞳を揺らしていた。

「どうして、あなたは……そこまで」

剣ごと吹き飛ばす回し蹴り。リインフォースが空中をくると舞い、地面に突き刺さる。リリアはふらつく足取りで立ち上がり、それでも立ち上がり、メリーベルを見つめる。

その視線に気づけばメリーベルは完全に圧倒されていた。理解が来ないものを正面から捉えたのなら、混乱しないはずがない。冷や汗が零れ落ち、ベルトに挿された瓶全てを両手に持つ。

投げ出される無数の瓶。その全てが無防備なリリアに命中すれば致命傷となるものばかり。そんな攻撃の嵐が降り注ぐより前、少女は走り出していた。

足取りは思いのほかしっかりしている。出来ない事はない。回復ばかり鍛えてきた。確かにそれ意外に出来る事は無い。武器も振れない未熟者。だが、それでも。

「わあああああああつ！！！！」

前に向かって思い切り跳んだ。

爆発を背景に、リリアはメリーベルにしがみつく。そのまま二人は吹き飛び、大地の上を転がった。

直ぐに体勢を立て直し、メリーベルはリリアに馬乗りになって拳を

振り上げた。しかし、それが振り下ろされる事はなかった。

『…………ど、どうした事でしょう？　なんだか、試合が止まってしまいました……ん？　あれ？　どういう事でしょうか！？』

立ち上がったメリーベルは両手を挙げて降参のポーズを取っていた。見れば先ほどまでメリーベルの手足を覆っていた術式の光が今はすっかり息を潜めている。

「降参」

メリーベルのあっけなく放った一言に全員が沈黙した。

『…………念の為、聞きなおしても宜しいですか？』

「うん。私、メリーベル・テオドランドは、降参します」

「……な、何イ……ッ!?　……」

夏流もアクセルもゲルトも全員が叫んでいた。だがしかし、理由は明白だった。

メリーベルは錬金術師。身体はそれほど鍛えていないし元々体力もない。それを補っているのが自慢の特殊武装と擬似魔法発生アイテムなのである。魔法の瓶は弾薬切れ、両手足に強力な打撃能力を付与するルーン加工も、時間制限切れで既に効果を失ってしまった。

「この状態でリリアを倒せる方法が浮かばないので、負けでいいです」

あっさりとそれだけ言いわけ、メリーベルは倒れたままのリリアを

抱き起こす。リリアは既に虚ろな目で肩で呼吸をし、意識があるのか判らないような状態だった。

ふらふらしているその身体を背負い、そそくさとフィールドを後にするメリーベル。会場は異例の事態の連続に完全に置いてけぼりをくらっていた。

『えーと……なんだかよくわかりませんが、そういうことなので……だ、第一試合！ 勝者、リリア・ライトフィールド……！』

ジャッジが名乗りを上げると同時に、会場中をブーイングの嵐が包み込んだ。

同時に駆け出した夏流は二人が消えて行った選手控え室に向かっていった。控え室に許可もなく飛び込むと、ベッドの上で倒れているリリアに駆け寄る。

「リリアッ……！」

その身体は所々焼け焦げ、本当にぼろぼろだった。防具が無かったら既に命はなかっただろうという程に。

しかし、リリアは安らかな表情で寝息を立てていた。見ればメリーベルは鞆から様々な薬品を取り出し、リリアの身体に塗りたくっている。

「心配ない。薬なら沢山持ってきたから」

「……そ、そうか……。死んだりしないんだよね？」

「当然。防具が良かったから、致命傷を与えられなかった。道具に頼ってるのはあたしも一緒だから、つべこべ言えないけど」

「そ、そうか……そうか、良かった……」

メリーベルの太鼓判に全身の気が抜けた夏流はその場に膝を着く。ベッドの上、眠っているリリアの手を握り締め、深々と溜息を漏らした。

「まったく……見ているこっちが死ぬかと思う試合だったよ……。でもメリーベル、あれでよかったのか？」

誰がどう見てもメリーベルの優勢は揺るがなかった。結局試合終了直後リリアは気を失って倒れてしまったのだ。あのままほっておけばメリーベルの勝ち揺るがなかった。

その当たり前の夏流の疑問にメリーベルは答えなかった。ただ薬を塗り、さらにそれを幾つか夏流に渡して鞆を手取る。

「リリアは強かった。少なくともあたしはそう思っただけ。それ、用法用量を守ってお使いください」

「あ、ありがとう……って、もう行くのか？」

「こんな所にいるなら、研究していたほうが有意義。この間は言い返さなかったけど、あたしってそういう奴。人と話すより、試験管と話していた方が有意義」

メリーベルはあっけらかんとそんな事を言い放つ。夏流は苦笑を浮かべ、それから改めて頭を下げた。

「ありがとな。リリアとちゃんと全力で向き合ってくれて」

彼女は応えなかった。ただそのまま部屋を去っていく。それと入れ

違いに入ってきたアクセルがベッドに駆け寄り、リリアの様子を見て溜息を漏らした。

「まじビビった〜……。でもリリアちゃん無事みたいで良かったぜ」

「ああ……。そういえば、ゲルトは？」

「試合終わったらそそくさと帰っちゃったよ。いや、しかしホント……」

「ああ、疲れたな……」

二人は同時に溜息を漏らす。それにあわせ、リリアは寝返りを打って小さな声で寝言を呟いた。

「むにゃむにゃ……ごはん……」

その言葉に二人は同時に肩を竦める。

何はともあれ、そうして波乱万丈のリリア初バトルが終了したのであった……。

特訓の日(3) (後書き)

「ディアノイア劇場」

ナナシ「おや？　ここは物語の舞台裏……ああ、確かに屋根裏部屋とも言いますね。ここに足を踏み入れたという事は、わざわざあとがきスペースに目を通していらっしゃる方とお見受けします。宜しければ原書をご覧くださいませんか？　貴方の知りたい世界の法が、そこで垣間見えるかも知れませんよ……」

「設定資料集その1」

とりあえず能力とかが出ている人から優先で

『本城　夏流』

読み方は『ほんじょうなつる』。年齢十七歳、高校二年生。新学期からは三年生になる。

キャッチコピーは捻くれものの救世主だが、実際にはそこまでひねくれてはいない。他の作品の主人公たちと比べると大分人格がまとも。

細身だが肉体は筋肉質。とある事情で家庭を離れ、親戚の武術家の家で過ごし道場に通っているのがその理由。

勉強は中の上程度で運動能力は高い。双子の妹の死の理由を知る為に幻想世界への入り口である『原書』を手にした救世主。

基本的に面倒見のいい兄貴分で、リリアを救うという役目に大人しく従事している。基本的に常識人だが、諦めてすっぱりと割り切るのは得意。

今まで自分が作った主人公の中では恐らく今の所一番無個性。その辺を今後物語りに織り交ぜて行きたいところ。

『リリア・ライトフィールド』

年齢十五歳の少女。聖クイリアダリア王国のはずれにある田舎町の出身。いじめらっ子で友達いない引きこもり。

『白の勇者』と呼ばれたかつての戦いで英雄の血族にして娘。二代目勇者として王国の英雄育成機関で鍛錬を積んでいる。

ドジで不幸で泣き虫で、しかし結局負けず嫌いで善人で空回り。ギヤグマンガみたいなヒロインを作ろうとして生み出された。

自らの背負う『勇者』という役職を本当は嫌っており、どうせならばそんなものはなくなってしまう方がいいと思っている。

戦闘能力はほぼ皆無であり、父の遺品である『聖剣リインフォース』も全く使いこなせないというより振り回せない状態で、使える魔法は回復のみ。

キャッチコピーは泣き虫勇者だが、意外と根性はあるのかもしれない。序盤は夏流よりこっちの成長をメインにしたいところ。

『メリーベル・テオドラント』

年齢十七歳の少女。出身は聖都オルヴェンブルム。捻くれものの猫好き錬金術師。

それなりに地位と名誉を持つ錬金術師一族であるテオドラント一族の末裔であり、同時に一族のつまはじき者でもある。それは性格的に他人と馴染めないからかもしれない。

錬金学科に属しているものの、手広く生産系の技術を学んでいる。自身に戦闘能力は皆無だが、錬金術を駆使した道具を駆使してある

程度の戦闘は可能。

その実力は学内でも上位なのが真相だが、戦う為には大量のアイテムを消費する事やそもそも戦いは時間の浪費と考えている事から戦いは好まない。

独自の思考を持ち、他人の言動に流されない性格。冷静で可愛げのない、しかし忌憚の無い意見を述べてくれる友人として作成した。リリアの初めての女友達である。ちなみに錬金学科一年生なのは、何度が留年しているから。学園のシステムの進学は難しいのだが、とある事情により研究に没頭するあまり、私生活が滅茶苦茶になっ
てしまっている。

友達の日（1）

「……………」

メリーベルとの戦いから数日後。全身に包帯を巻いたリリアは夏流と共にアクセルのバイトする喫茶店に訪れていた。

ようやく傷も治り始め、動く事が出来るようになったリリア。頭に巻いた包帯が緩み、ちよつとずれている。その視界の合間から正面の席でぐうぐう寝ている夏流を見つめていた。

既に食事は終了し、テーブルの上には山のように空いた皿が並べられている。ただ一つ、夏流の食べかけのグラタンを除けば、全てリリアが平らげたものだ。

リリアの丸っこい目がじいつと夏流の寝顔を捉える。腕を組んだまま、涎を垂らして眠る夏流。ちよつとやさつとの事では目覚めるような気配もなかった。

ぱちくり、ぱちくり。リリアの視線がじいつと夏流を捉えている。そんな停止した瞬間の間に挟まれ、ナナシは困ったような表情を浮かべていた。尤も、うさぎの表情を見て取れる人間はそうそういないのだろう。

「うさぎさん、うさぎさん」

「何でしょうか？」

ついに声までかけられてしまった。リリアは不思議そうな顔をして、小首を傾げる。

「なつるさん、疲れてるのかな？」

疲れている、というよりここ数日連続で活動しているため極端な睡眠不足状態にあるだけなのだが、確かにリリアの看病などをしていた夏流は疲れている、とも言えるのかもしれない。

うさぎはぴよちゃんとテーブルの上に飛び乗り、リリアを見つめる。

夏流はだんだん横に倒れ始め、壁にもたれかかって眠り続けている。

「疲れているというか、彼は今寝不足というか」

「うさぎさんたち、どこに住んでるの？ なつるさんって、どこの人なの？」

ぎくりとする。何故今まで夏流にはそんな事を一言も訊かなかったのに、今になって自分に言うのか。冷や汗が流れる……比喻であって実際には流れていない。何故ならうさぎだから。

「どこに住んでいるとなると……学園の寮ですよ、勿論」

嘘はついていなかった。学園長アルセリアは確かに夏流の部屋を用意している。それもこれ以上ないというほどの最高級の部屋である。しかし、実際夏流はそこに入っても居ない。もう少し休み休みやれば問題ないのだが、夏流は何か焦っているかのように休まず行動を続けていた。

その疲れが祟り、いよいよ活動限界となつてすっかりリリアとの話中に眠ってしまったのである。食べかけのグラタンはすっかり冷め切ってしまった。

「なつるさん……無理してなければいいけど」

心配そうな表情で夏流を見つめるリリア。その正面で夏流は涎を垂らしながら完全に熟睡している。

「そつえばリリア様、もう怪我は宜しいのですか？」

「うん、平気だよ？」 流石に何日かはベッドの上生活だったけど、もう出歩いて大丈夫」

「もう少し休んでいても良かったのではないですか？」

「うーん……でも、なつるさんが部屋に押し付けてきて看病するって言うから、申し訳ないんですよー」

結局リリアをベッドから追い出す結果になってしまった夏流の善意。しかしそれは確かにリリアにとっては嬉しいことだった。

理由ならまだいくつかある。休んでいる気なんてしなかった。早くベッドから出て、特訓……夏流と一緒に居たかった。もっと色々な事を話したかった。

恐らく彼の存在は、孤独な勇者の少女であつたリリアにとって、生まれて初めて出来た仲間なのだから。

「リリアじゃなつるさんを寮まで担いでいけないしなあ……うさぎさん、どうしたらいいかな？」

「ああ、じゃあワタクシが担いでいきますよ」

リリアの目の前で人間の姿に変化したナナシはシルクハットの下から覗く甘いマスクでにっこりとリリアに微笑みかける。

その変身っぷりを間近で目撃したリリアは口をぽかんと開けたまま呆然としていた。ナナシは眠っている夏流を背負い、リリアに頭を下げる。

「それでは、そういうことで」

「へ？ は、う？ はい……？」

夏流を背負って消えていくナナシの影。それを見送り、リリアは首を傾げていた。

「なんですか、あれ……？」

そんな、特訓は休みの日。

事件はリリアが一人でうろつろしている日に起きてしまった。

友達の日（１）

「それで暇だからってあたしの研究室に来た、と」

薄暗い通りを抜けた先、メリーベルの研究室にリリアの姿があった。しばらくの間、夏流のいない町を歩き回ったリリアは何故か猛烈に寂しい気持ちになり、誰でもいいから話をしたくなってここにやってきた。理由は簡単、他にリリアには口を利くような友達がいなかったためである。

とはいえ、別にメリーベルもリリアの友達になった覚えはない。相変わらず猫塗れの研究室の中、一人でローブのポケットに手を突っ込み、片手でフラスコを回していた。

「や、やっぱり急に来たら迷惑ですよね……？」

「うん、迷惑」

「はうつ！？ そんなハツキリ言わなくても……るるる……」

涙を流しながら笑うリリア。メリーベルは全く彼女の方を向かないまま小さく息をつき、フラスコを眺める。

指先でくると中身を混ぜながら見つめるその紅い液体にはリリアの姿が映りこむ。この研究室に人を上げるのは、実のところ彼女にとってもリリアと夏流が初めての事だった。

そもそも人を上げる必要性を感じなかったし、研究室に知らない人間が立ち入る事は錬金術師として失態である。しかし不思議と前回も今回も、リリアたちを部屋に上げる事にそれほど抵抗は覚えなかった。

自分もまた人間で、他人との接点に飢えていたとでもいうのだろうか。答えの出ない自問自答。メリーベルにしてみれば二人は確かに命を救ってくれた恩人でもある。それを理由とするには少々強引だが……一先ずは納得する事にした。

「怪我の調子はどう？」

「え？ あ、はい。薬がいいのかすぐ直りました。まだ包帯巻いてますけど、こんなのは飾りみたいなものなのですよ」

「そうやって男の関心を引く……包帯属性あり、的な……」

「はい？」

「なんでもない。それより、おなががすいた」

メリーベルの唐突な言葉と視線。それを正面から見据え、リリアはぱちくりと目を輝かせる。

「は、はい！ こう見えても、お料理は得意なんですっ！ 友達いないから、外食しないで自炊がメインですからっ！！」

「……今何気に悲しい設定が出た」

「台所とかあるんですか！？」

「奥に……もう一年くらい使っていないから汚いけど」

「充分です！ 行ってきましたっ！！」

元気良く頷き、走っていくリリア。静かになった研究室の中、火にかけていたフラスコが罅割れて中身が駄目になる情けない音が響いた。

メリーベルは淡々とそれを廃棄し、新しいフラスコを手にする。リリアが余りにも元気がいいものだから、一瞬混ぜるのを怠ってしまった。

足元に群がる猫たちが擦り寄ってくる。メリーベルは何も言わずに再び薬品を火にかけた。部屋の置くの台所からは定期的に何かを割るような甲高い音が聞こえて来る。

「……不安すぎる」

来る前よりも美しく、とまでは期待していないが、せめてあれ以上の惨状にならないことを祈る他ない。

足元の猫たちに視線を送ると、数十匹の猫が台所に走って行った。恐らく向こうで散らかった部屋の片づけを手伝っている事だろう。メリーベルは目を閉じ、ぐるぐるとフラスコを回す。

「騒がしいやつ」

「どうだったんだい？ 見てきたんだろっ、リリア・ライトフィードの初試合」

英雄学園ディアノイアに無数ある回廊。日差しが差し込むその支柱の合間、剣を手に佇むゲルト・シュヴァインの姿があった。

その背後から歩み寄ってきたのは長髪の男だった。歳の瀬は彼女たちより一回りも二回りも上の若い男。学園で魔法学の教師を務める彼、ルーファウスは魔術書を片手にゲルトの隣に立った。

一見親切そうな優男。眼鏡の向こう側に微笑む瞳をゲルトは睨み返して応える。踵を返し、剣を肩に乗せて。

「見たからどうというわけではありませんから。それより、生徒のプライベードにまで干渉されるのは不快なのですが」

「そういうつもりはないんだけどね。まあ、ある程度プライベードを知ってこそ正しい道を教えられる……というのは僕の師匠の方針なんだけど」

僕の師匠。その言葉に反応したゲルトは振り返る。視線には不快感がたつぷりと塗りたくられていた。肩を竦め、ルーファウスは腕を組む。

「少なくともリリアの方は君を気にしている。君も彼女の羨望の眼差しに気づいているはずだ。言いたい事があるのならば、きちんと言うべきじゃないかな？」

ゲルトは応えない。肩に乗せた大剣を握り締める手に力を込め、眉

間に皺を寄せる。まるで兄か父親に反発する娘であるかのように、彼女は視線さえ合わせようとしなかった。

その様子は今に始まったことではない。もう十年も前からずっと彼女はこの状態だったし、恐らく二人の距離感が縮まる事は今後永遠にありえないだろう。しかしそれでもルーファウスは言葉を続ける。

「君も彼女も、決められた運命からは逃れられない。せめて手を取り合うべきではないかな？ それを君の父上　先代『黒の勇者』、ゲイン・シュヴァインも望んでいるはず」

父親の名前を出された瞬間、ゲルトの我慢は限界を超えてしまった。一瞬で振り下ろされた巨大な殺意の塊は自らの兄弟子であり教師でもあるルーファウスの首筋に容赦なく突きつけられる。

巨大な物体が一瞬で移動する事により発生した風の流れ。空を切る音。二つの中、ルーファウスはしかし微動だにせずその刃を首筋に当てたまま微笑んでいた。

その態度をこれ以上崩せない事はゲルトにも分かりきっていた。しばらくの膠着状態の後、大剣は主の手元に戻り、ゲルトは今度こそ立ち去ろうと背を向ける。

「……………彼女は、勇者には相応しくない」

吐き捨てるような、憎悪を込めた一声。

「勇者は、わたし一人で充分過ぎる」

振り下ろした刃がレンガの大地を切り裂く。空を切る轟音と共に大地につけられたゆるぎない真っ直ぐの傷跡。ゲルトは苛立ちもそのままに、早足でその場を去って行った。

その姿を見送りルーファウスは己の首筋に手を当てる。血が滲むそ

の様子に苦笑を浮かべ、それから口元に手をあて思案する。

「……リリアの存在はやはりゲルトにとっていい刺激になる、か」

教師のその呟きを耳にする生徒は誰一人としていなかった。

「どうぞ、たーんとめしあがれっ！」

そういつてリリアが自慢げに机にならべた料理の数々。それを見てメリーベルは眉を潜めた。

それは決して料理がまずそうだったからではない。むしろ料理は全ておいしそうに輝いて見えた。一流料理人のそれと比べれば勿論見劣りするが、いかにもずつと家庭料理を嗜んできました、といった雰囲気の暖かい出来栄である。何より寝る間も食べる間も惜しんで研究に勤しんでいるメリーベルにとって、家庭料理は久しぶりに見るものだった。

では、なぜ困った顔をしているのか。それは机の上に並べられた料理の数々、その量のせいであった。軽く五人前はあるようなその分量にメリーベルは手にしたフォークを思わず落としてしまった。

どう考えても食べきれない量ではない。冷や汗を流すメリーベルを、リリアは満面の笑みで見つめている。食べた時のリアクションを楽しみにしている顔である。おいしいって言ってくれるかな？ 喜んでくれるかな？ 純粋な好意と期待がメリーベルの両肩に重く圧し掛かった。

あえて言うならば、メリーベルは余り食べる方ではない。小食ですと断言してしまってもなんら問題はないだろう。普段からぎりぎりまで食事を抜いているせいで、常に腹八分目までしか胃には収めない状態が続いている。

それがいきなりこんな分量を突っ込んだらどうなることか。食べす

ぎで戻してしまうのではないか。様々な思考がメリーベルの脳内を駆け巡る。ちなみにこの思考の間、経過した時間は僅かに一秒だった。

「い、いただきます……」

ごくりと生唾を飲み込む。リリアは正面に立つてニコニコ笑いながらメリーベルを見つめている。自分が何をしているのか段々良くなるようになってきた。

いや、今から考え込んでも仕方がない。とにかく一口と口に放り込んだサンドウィッチは本当においしかった。しかしこれだけの食材となると、この研究室について先日買い溜めした食料が殆ど全部つき込まれているのだろう。そこも考えると涙が出そうだった。

研究費に生活費を削ってまで当てているメリーベルにとつて、この出費は痛すぎる。しかし、リリアは目をきらきら輝かせているのだ。とても文句を言える気がしなかった。

「居るよね、頑張りすぎて逆に失敗するやつ……」

「う？ 何か言ったですか？」

「なんでもない。おいしいよ、おいしい……」

「うわあ、本当ですか？ 人に食べさせるの、おじいちゃん以外じゃ初めてだったのでも心配だったんで、ちょっと控えめに作ったんですけど……えへへっ」

「控え目？ 本気で言っているの……？」

「はいっ！」

溢れんばかりの笑顔に完全に硬直するメリーベル。意を決する事にした。全力で一度は命を賭けてやりあった仲なのだ。ここで手を抜くわけにはいかない。

メリーベルの戦いが始まった。ひたすらに無言、無表情で料理を食べ進めるメリーベル。リタイアは許されない。目の前でリリアが見つめているのだから。

ひたすらに口にかきこんでいく。必死に食べ続ける。全身が悲鳴をあげ、限界はとうに通り越している。それでも食べ続けた。

しばらくすると意識が朦朧としてくる。忘れかけていた死という概念を思い出した。体が言う事を聞かない。自然と前のめりになり、料理に顔を突っ込んでメリーベルは意識を失った。

「めめ、メリーベルさんっ!? ほわあっ!? 何が起きたんですか!? さっきまでフツーにご飯食べてたのに!？」

確かにメリーベルは一見どうにも正常そうに見えた。しかしそういう状態を維持するようにしているメリーベルの努力のお陰なのである。

完全に気を失っているメリーベルの身体を抱き起こし、激しく揺さぶるリリア。その状態がさらにメリーベルの気分を悪化させていく。

「メリーベルさん! メリーベルさん!! しっかりしてください! 死んじゃ駄目ですう! こんな所で料理なんかしたから、変なもの混じっちゃったんですか!? メリーベルさああああん!!」

「ゆ……あ……」

震える声と身体で必死に訴えかける。しかしリリアはまるで聞いて

いない。それでも何とか伝わってほしいと、必死で声を上げる。

「ゆ……すら……ない……で……… あっ」

「えっ？ あああああああああっ！？」

十分後。

メリーベルはソファの上に横たわり、口元から涎を垂らしながら完全にぐったりしていた。

色々あって盛大に汚れてしまった床の掃除を終えたリリアがその傍に駆け寄り、顔を寄せる。メリーベルは体の上に飛び乗ってくる猫たちを一匹ずつ引っぺがしながら突かれきった笑顔を浮かべている。

「め、メリーベルさん……本当に大丈夫ですか？ 回復魔法かけましょうか……？」

「平気……。でも、もう料理はいいや……猫にでも、食べさせて……」

「え？ でも猫に料理なんて食べさせたらまずくないですか？ 大丈夫なんですか？」

「野生の猫はそんなに柔じゃないから、平気……うぷっ」

吐き気を催し、口元を押さえるメリーベル。リリアはあたふたしてとりあえずメリーベルの上に押し掛かっている猫たちを引っぺがした。

「なんでこんなにぬこさんが寄ってくるんですか！？ 乗っちゃだめー！！」

何故かわらわらと猫たちがメリーベルに寄ってくる。それは猫たちなりにメリーベルを心配しての行動なのだが、倒れているメリーベルはほとんど猫で埋もれて行く。どこからともなくやってくる猫たちは窓やら扉やらから部屋に入り込み、メリーベルの上に乗ってしまっているのである。

猫に埋もれるメリーベルを必死で掘り起こすリリア。と、そこでリリアは机に戻り、料理を床に置いた。

「ぬこさんこつちですよー！ ご飯ですよー！」

野良猫たちは流石に空腹だったらしく、料理に群がって行った。猫たちが立ち去り、埋もれていたメリーベルはぐったりした様子でリリアを見つめた。

「うーん……き、気持ち悪い……」

「うう、何が当たったんですかねえ……？」

リリアの所為だとは言えない優しいメリーベルの閉じた瞳から薄っすらと涙が零れ落ちた。

メリーベルは何とか身体を起こし、上着のポケットに両手を突っ込んで深々とソファに腰掛ける。その隣にリリアは座り、心配そうにメリーベルの表情を窺っていた。

「にしてもすごい数のぬこですね……」

「あのさ……『ぬこ』って？」

「あ、リリアの地元では猫の事を『ぬこ』っていうんですよ」

「じゃあ犬は？」

「犬は普通に犬ですよ？」

「なんで……？」

「何でって言われても……そうなんだからしょうがないじゃないですか」

二人の会話が完全に途切れ、沈黙と猫の鳴き声だけが部屋を覆ったときだった。リリアの視線の先、メリーベルの頭部で何かが動いていた。

首を傾げる。頭……というよりは髪の毛が勝手に動いている。気になってその部分を摘んでみると、メリーベルが顔を顰めた。

「いたい」

「あれっ？　なんですか、これ？　ぬこの……耳？」

ありえないものがそこにはあった。リリアが両手で摘むメリーベルの頭部、髪の毛の中にまぎれていたのは紛れもなく猫の耳……所謂ネコミミというものであった。

首を傾げる。リリアの頭の上をクエスチョンマーク踊りだす。そんなリリアの様子を見てメリーベルは目を閉じ、溜息を漏らした。

「実験に失敗して、生えた」

「ええええっ！？ そんなあつさりと！？ あ！ それで猫が寄ってくる体質になっちゃったんですか！？」

こくりと頷くメリーベル。ふさふさとした質感の耳にリリアは胸をときめかせた。猫の耳をなでなですると、メリーベルはくすぐったそうに身をよじる。

「いじるな……」

「あ、はい、すいません……なんかふかふかしてて、つい……え？ ていうか、何をどうしたらこうなるんですか？」

「まあ色々あつて。それでも良くなってきた方。最初は尻尾もあつたし、語尾にも『ニヤー』ってついてた」

「え！？ あ、冗談ですかっ！？」

「うん、冗談」

二人の間に沈黙が走る。ほつぺたを膨らませたリリアが猫耳を指先でグリグリすると、メリーベルは頭を抑えてにやにや笑い出した。

「や、やめなさい……っ」

「イジワルするのが悪いんですよ……。でも、いいなあ。リリア昔からぬこさんにだけは嫌われちゃってて、触ろうとするとすぐ逃げられちゃうんですよ。リリアもぬこさんに好かれます」

リリアの発言を聞き、メリーベルは立ち上がる。無数に並んだ怪し

い薬剤の眠る棚の引き出しから猫の絵の描かれたラベルの瓶を取り出し、リリアに渡した。

「あげる」

「え？ いや、でもこれ使うとずっと猫耳になっちゃうんじゃない……」

「それは違う。解毒剤を作っている途中で開発した、弱い薬。しばらく猫になるだけで、翌日には直ってる……ハズ」

随分と胡散臭い語尾に苦笑を浮かべるリリア。一先ず瓶を受け取り、ポケットにしまった。

「あ、ありがたく貰っておきます……」

「どうぞどうぞ。それじゃああたしは寝るから。片付けはしないでいいよ、後でやる」

「そうですか？ じゃあそろそろお暇しますね。また今度です、メリーベルさん！」

元氣よく走り去って行ったりリリアを見送るメリーベル。それから最後の言葉を思い出し、顔を上げた。

「……また来るんかい」

「う、ううは？」

起きたら完全に日が暮れてしまっていた。

一体どれくらい俺は寝ていたのだろう？ 隣には本を呼んでいるナシの姿があるが、自分が寝ているベッドも天井も見覚えのない場所だった。

俺が目覚めたのに気づいたナシが本を閉じ、歩いてくる。ベッドからおきだすと、特に自分の身体に異常が無いかどうかを確認した。

「お前……俺が寝ている間に何もしてねーだろうな？」

「それどういう意味ですか……。そんな女の子みたいな事を言うなんて、ナツル様も随分と可愛いところがおありで……はっつ！？」

腹部にパンチを見舞ってやるとナシは腹を押さえてその場でうめいていた。部屋を出ると、学園の中庭が見える。どうやら学園内の寮のようだが……。

「行き成り殴るのはやめませんか……？」

「で、ここはどこだ？ 学園の寮か？」

「はい。あの部屋はアルセリアから貴方に与えられた部屋です。どうぞ、鍵をお持ちください」

ポケットから鍵を取り出し、俺に手渡す胡散臭い男。俺は鍵を受け取りそそくさと歩き出す。たしか、リリアと話している途中に寝てしまったはずだ。あいつのことだから、まだあそこで待っている……なんて事もあるかもしれない。

不安に思いながら階段を駆け下り、中庭に出る。ナシは何も言わずに俺のハイペースな移動についてきていた。

「そっといえば、お前に色々訊きたい事があんだけど」

「なんでしょうか？」

シルクハットを片手で抑えながら颯爽と走る男、ナナシ。結局俺はコイツに色々を訊きそびれたまま、時間を過ごしてしまった。

リリアのこと、この世界のこと、俺の存在のこと、何よりも冬香のこと。こっちにきて暫く過ごしたからわかったんだ。このままじゃいけないんだって。

「リリアとちゃんと話しねーと……。それに、俺だけ見てるだけっていうのもな……」

「それは良いのですが、正面からそのリリア様が歩いてきますよ？」

ナナシに言われ、正面を見ると確かにリリアが何か小さな瓶のようなものを手にしながら歩いているのが見えた。

走ってくる俺たちに気づいたのか、リリアは手を振って走ってくる。しかしその途中、坂道に躓き、盛大にずっこけた。

助けに入ろうと思ってリリアに駆け寄る。すると空で何かがキラリと輝いた。何だかよく判らないまま顔を上げると、突然瓶が俺の頭に直撃して中身の液体がぶっかった

なんだか甘いような匂いがする……。起き抜けにすかさずリリアにしかされた俺が立ち尽くしていると、顔を上げたリリアが俺を指差し大声を上げた。

「あっ!？」

「……あ、じゃねえだろ。お前なあ……」

見ると、リリアの様子がおかしい。口元に手をあて、目を丸くして

いる。そんなにビックリされるほどまずい状況でもないんだが……。

「いつまで座ってたんだ。さっさと立つんだにや」

にや？

「な、ななな、なつ、なつるさん……っ！　ご、ごめんなさいいいい……っ！！」

何だか嫌な予感がする。ナナシを見ると口元を押さえて盛大に笑っていた。非常に嫌な予感がする。

頭に手を当てる。ぬれているだけではない。何かがそこにはあった。冷や汗が流れる。言葉に出来ない不安を何とか確かめようと、シヨウウィンドウの硝子の前に立った。そうして俺は全てを理解した。振り返るとリリアが真っ青な顔をしてぶるぶる震えていた。俺は肩を竦める。それから星空を見上げた。ああ、今日も星が綺麗だ。ゆっくりと溜息を漏らし、それから頭を抱えて叫んだ。

「なんじゃそりゃああああああっ！？」

まるで俺の叫び声を効きつけたかのように何故か猫たちが駆け寄ってくる。

一斉に身体に飛び乗ってきた猫たちに埋もれ、俺はそのまま坂道でもがき苦しむ事になった……。

友達の日（2）

それは、英雄を育成する学園を有する都市でさえも異様な光景だった。

夜のシャングリラの街を駆ける漆黒の影二つ。月明かりにシルエットを浮かべながら空中で刃を交える。

それは刃の形をした破壊の象徴。既に武器と言う表現よりも工具と言った方が似合う、気品の欠片も無く絶え間なく唸り声を上げる機械の刃。

チェンソー。それ以外にその武装を表現する手段は存在しなかった。機械の塊。重機。それを両手に構え、屋根から屋根へと飛び移りながら振り回す影のシルエツトは長いスカートをふわりと棚引かせ、月下を華麗に舞う。

追う者、追われる者。相反する二つの影は逃げ惑う者と追い殺す者に分かれていた。影の一つ、月明かりの下に飛び出した少女はレンガの壁を蹴り、大きく跳躍する。

エンジン音が否応無く鳴り響く中、狙われる存在は大きく後方へ跳躍した。二つの存在の動作は人間に限りなく近い、しかしそれとは異なる存在の者。不出来な格好で後方へ何十メートルも跳躍し、ふらつく足取りで着地する。

夜の静けさを意にも介さないスカートの少女。それは、黒い給仕服を着用した見せ掛けは従者の殺戮者だった。追う存在が従者ならば、追われる方もまた従者。^{バトラー}執事とメイド、二つの存在は空中で何度も擦れ違う。

やがてメイドの放った大振りな一撃が屋根を砕き、火花が夜の闇を引き裂いた。照らされたメイドの表情は暗く、何一つ思考をしていない硝子球のような瞳で執事を捕らえている。

連続で繰り出され、障害物を意に介せず破壊し貫き両断する重機の

一撃。執事は咄嗟に身をよじったものの、その刃は容赦なく執事の片腕を文字通り削り奪って行った。

ぼたりと零れる血流の流れ。少年は吹き飛ばされ、落ちて行く。夜の闇の中、落ちて行く。腕を押さえ、しかし立ち止まる事もなく大地に着地した少年は、そのままシャングリラの町へと走り出した。見送る存在は月明かりの下、頬についた帰り血を甲で拭い、瞳を細める。異常事態が当然の学園都市でさえ、異例の景色。誰もが眠りにつく中走り続ける執事をメイドは追う事をしなかった。

やがて執事は走ることに疲れ、身体を震わせて路地裏に倒れこんだ。流れ出した血は絶えず、大地を汚して行く。もう長くは持たない……冷静に、客観的にその事実を捉え、メイドは踵を返した。

夜の街の中に消えて行く無数の命が一つ増えただけ。いや、そのよくなことさえメイドは感じないだろう。ただ主の命令をこなすだけの彼女にとつて、『裏切り者』ならば死して当然、億万の痛みを与えた所で道徳は痛まない。

放置された少年は動かなくなった。ゴミの山に囲まれ、一人朽ちて行く。まるでその姿はそう、彼もまたひとつの大きなゴミであるかのように。

誰かに救われる事もなく、失われる事も無く。忘れ去られていくように、静かに世界から消えて行く。そんな状態が当然であるはずの少年に差し込む影の姿があった。

月明かりを背に、たまたまその場を通りかかった少女は少年に駆け寄る。声をかけても反応は無い。当然、少女は少年の負傷を確認する。そして……。

「し、死んでるうつ!？」

悲鳴をあげ、おろおろとその場をうろつくのであった。

友達の日(2)

「や、やっとネコミミが直ったあああ……」

与えられた学園寮の自室の中、鏡を前に俺は深々と安堵の溜息を漏らしていた。

まさか、自分の頭にネコミミが生えるとは思ってもよらなかった。普通こういうのは女の子になったりするイベントじゃないのか。何で俺がサードビースーンを演じなければならぬのか。

が、まあそんなことはどうでもいい。本当に直ってよかった。このまま現実の世界でもネコミミで生きなければならぬんじゃないかと不安で仕方が無かった。昨晩はろくに眠れず、結局また寝不足になっってしまった。

それにしてもここまで来るとリアのドジっぷりも神がかったきたな……。髪型を整え部屋を出ると、背後からうさぎが跳ねて俺の肩の上に飛び乗った。

結局あの薬は丸一日治るのにかかるというメリーベルの言葉を聞き、俺は丸一日半、自室に閉じこもって過ごした。ネコミミのまま町を出歩くよりはよっぽど精神的に健康だろう。

こうして無事朝を迎える事が出来たので、部屋を出る。丸一日何も無い部屋でネコミミの恐怖に脅えながら過ごしたせいか、今は無性に外の空気が清しい……。

「いやあ、似合っていたのにもったいないですねえ」

「……最早お前を殴る気にもならねえ……」

本気で泣くかと思った。想像してみてほしい。ネコミミになっちゃったら普通泣くだろ。

部屋の前にはどこから集まったのか猫たちが集っていたが、俺が仲間ではなくなつたと分かるとそそくさと解散して行く。安堵の溜息をつくと同時に、薄情なやつらだなあとも思つた。

何はともあれ、階段を下りて学園の中庭へ移動する。俺の部屋がある最高ランクの学生寮は、既に学園内に敷地が存在し、それは中庭に隣接して作られ……つまり、校舎と一体になっている。

よつて通学が非常に楽であり、学園の施設も利用しやすい。まさに学生にとっては最高の設備だと言えるが、落ち零れのリリアの寮まで徒歩二十分はかかるのが俺の中では不満な所である。

リリアの寮は俺よりもいくつかランクが下がり、街の外周部に存在する。尤も学園から遠いだけであり、内装は豪華だ。ある程度は実力を認められた生徒か、よほど金持ちの子供でなければ入る事は出来ないらしい。

それよりも上に住んでいるのだから、俺は随分と偉くなつたものだ。自分では何もしていないだけになんだか実感がわかないが、アルセリアなりに俺を認めているという証を立てているのかもしれない。

「そのうちまたアルセリアにも顔を出さないと……つと、学園長って呼ぶべきか」

一応俺は生徒っていう設定なんだし、偉そうな口は利かないほうがいいだろう。

そんな事を考えながらリリアの寮へと急ぐ。真つ直ぐ歩いていけるからまだいいが、変な所にあると入り組んだシャングリラの町をうつつかされる事になって大変だろう。

タダでさえこの町はゴミゴミしているというか、増築に増築を繰り返してちよつとどこがどこに繋がっているのか住民でさえ判らない部分が大きいのだ。うっかりウロウロして迷子になつてもなんらかしくはない。

そんな事を考えながらぼんやりとリリアの寮へ向かう。別に女子だ

からとか男子だからとかで寮は分かれていない。部屋は完全な個室で、鍵も各々持ち歩いている。その辺はかなりルーズだ。門限もないし。

まあ、夜間も研究に勤しんでいるヤツとか授業を受けているヤツ、特訓しているヤツなど、色々な生徒がいるのだから制限をつければつけるほど人材が個性的に育たなくなる気もする。

さて、寮にやってきた。メリーベルのところで比べると相当見栄えのいい寮に足を踏み入れる。管理人も親切そうな表情を浮かべて俺に挨拶をしてくれた。気持ちの言い気分でリリアの部屋に向かい、扉をノックした。

「リリアー、特訓するぞー。おきろー」

ドアをノックする。しばらくしても返事がないのもう一度ノックした。これで出てこなければ部屋に突入して起こしてやるうかと思っていたところ、扉がゆっくりと開きだした。

その向こう側にリリアの顔以外を誰が想像しただろうか。出てきたのは繊細な顔立ちの美少年だった。しかも上半身裸である。俺は完全に固まった。

暫くの間少年と見詰め合う。金色の髪の間から覗く金色の瞳が俺を見つめている。綺麗な瞳だった。俺はしばらくそれを見つめてから、ゆっくりと扉を閉めた。

それからUターンし、通路を腕を組みながら歩く。壁に手をあて、うなり声をあげる。迷っただけでも仕方がない。俺はもう一度表札をチェックしてからドアをノックした。

やはり、美少年が出てきた。俺は完全に固まった。それから腕を組み、少年を見つめ、深呼吸してから、

「いや、おまつ！？　なんでやねんっ！？」

ツツコみを入れた。

少年はキョトンとした様子で俺を見ている。そいつを強引にどかして部屋に入ると、リリアはベッドの上ですやすや眠っていた。

別に裸とかではなかったが、そういうことなのか……？ まさか、行き成り俺が知らない所でこんなヤツと出会って、お、お、大人の階段を……。

額に手を当てる。待て待て、冷静に考えてまずリリアがこんな美少年と成り行きで寝るだろうか。早とちりはいけない。リリアはいじめられっ子で友達も居なければ男と話す機会なんて俺かアクセルくらいしかないはず。一体どこでこんなやつと知り合えるっていうんだ。

日がな一日部屋の中にうずくまって自分の駄目な所を数え上げながら休日を過ごすような寂しい少女リリア・ライトフィールドに彼氏？ いや、おかしい……待て、まさか……顔がいいからって騙されたのか？

少年を見る。上半身は裸だ。良く見たら 片腕がない。俺はますます眉間に皺を寄せた。どういうこと？

まさか、リリアにはそういう趣味があったのか？ リンフォースは振れないくせにSMグッズは使いこなせるってことか？ お前どんだけ勇者失格なんだよっていうかなんでお前腕片方千切れてんのに平然とした顔してんだっていうかりリアはどうなってるんだ寝てるのかさっさと起きろ！！

無言でベッドを蹴り飛ばすとリリアが飛び起きた。完全に寝ぼけたまま目をぱちくりさせているリリアの寝癖を掴み、頭をグリグリゆする。

「全部一から十まで全て完膚なきまでに俺に説明しろ今すぐだ早くしろ」

「へっ！？ ひっ！？ なな、なちゆるさ……おふあっ！ おはよ

「うございまっ!？」

「そんなことはどうでもいいんだ!! さっさと説明しろおおおつ!!」

「あにやあああ!？ 何で寝癖を掴むんですか!？」

「うるさいアホ毛ツ!! お前、そんな何も知りませんみたいな清纯そうな顔しておいて、腕ぶった切るとはどういうことだツ!!」

「なつるさん何言ってるんですかさつきから!？ リリアぜんっぜんなつるさんが理解出来ないですよ!？」

パニック状態を収める為に一呼吸置く事にした。パジャマ姿が恥ずかしいのか、リリアはベッドの中にもぐって顔だけ出したまま俺を見つめた。

「それで、師匠は何をそんなに怒ってるんですか……?」

「いや、だから……」

俺たちの視線は背後に立っている少年に向けられた。しかし当の本人は呆けた顔で首をかしげるばかりで要領を得ない。

リリアは俺が何に驚いているのかようやく理解したようで、何がどうなっただったのか、説明を始めた。

「この人は多分、オートマータ機械人形なんですよう」

事件は昨晚、リリアが俺の使いでメリーベルの研究室と俺の部屋とを何度も往復していたせいで起きた。

彼女は帰りが遅くなり、夜中の道をとぼとぼ一人で歩いていた。寮に戻る途中、たまたま視線を送った路地裏のゴミの山でこの少年を発見したのだという。

「物凄い音がしたので何かと思って見てみたら、人が倒れてたんでビックリしたんですけど……。機械人形なら、平気かなあって」

「なんだその機械人形ってのは」

「へ？ そのまんま、機械の人形ですよ？ ディアノイアの受付とかもそうじゃないですかー」

そういえば受付のメイドは全員同じ顔、同じ格好をしていた気がする。人間にしかみえなかったが、どうやらあれら全部機械だったらしい。

確かにそういわれれば納得が行くようなしかし行かないような……。いや、とりあえず腕が片方ないのに平然と立っているコイツの存在には納得が行った。機械だから傷みもない……。そういう事なのだろう。

しかし、ファンタジー世界にしては文明が発達してるなこの世界……。改めて少年を見る。部屋の窓辺には少年の物らしい衣服が吊るされている。ボロボロだったから脱がせたとかそんな所だろう。

「まあ大体話は分かったが……。結局こいつ何なんだ？ 何で拾った？」

「だって、困ってたんですよ？ 可哀想ですよー」

そんな理由だけで見ず知らずの胡散臭いロボットを拾って帰ってきて、オマケに破けた服を縫い直してやったのか。なんというか、リ

リアらしいというか……。

まあ、そりゃそうだ。リアだもんな。部屋に男を連れ込むという発想がそもそもないんだろ。全く自分がどういう誤解を受けていたのかわからないといった表情を浮かべている。俺の早とちりか……。

「それで、結局師匠はどういう誤解をしてたですか……？」

「えっ？ あ、いや……そ、それはいいだろもう。それでこいつ、名前はなんていうんだ？」

「えーっと、昨日聞いたら……クロ口って言っていました」

服を着ながら振り返った執事ロボ、クロ口。メリーベルを遥かに凌駕する無表情さで俺たちの前に立つ。

それにしても、拾ったところでどうしようもないだろうに……。これからリアはこいつをどうするつもりだったんだろうか。まあ犬でも猫でも、捨てられてたらその後どうするのか考えずに拾ってきそうなヤツだが。

そもそもその、機械人形オートマタつてのはどういう存在なんだ？ 街中でホイ見かけない気がするの、彼らが巧妙に人間を模して生み出された存在だからなのか、それとも希少な存在だからなのか。考えても仕方がない。俺は当初の予定通り行動する事にした。

「それでリア、ちょっと話があるんだが」

「……うう。それ、寝起きの女の子を前にいつまでもしなきゃいけない話ですか……？」

「あ」

寝癖が恥ずかしいのだろう。頭の上に枕を載せてリリアは顔を赤くして俯いていた。俺は慌てて踵を返し部屋を出ようとして……とりあえずクロロも一緒に外に引っ張り出すことにした。

二人して寮の廊下に出る。クロロは何が起きたのか良くわかっていない様子で俺を見つめていた。

「……あー、クロロ、だったか？」

「はい」

初めて喋った。案外普通の声だった。もっとロボっぽい……合成音声みたいなのを期待してたんだが。

「お前、一体なんで倒れてたんだ？」

「返答します。クロロがマスターに捨てられたからです」

あっけらかんと答えるクロロ。マスターに捨てられたから腕千切れたのか？ 不用品って事なのか……いや、問題はそこじゃない。

「ってことは、お前マジで行く所ないのか」

「肯定します。クロロは根無し草になりました」

そのセリフはどうなんだ……などと考えながらしばらくリリアを待つ。扉の向こうから普段通りのリリアの姿が現れると、何となく気まずい空気になった。

「それで師匠、話って何ですか？」

「あー。いや、それより先に……ちょっと寄り道していくか」

俺達は三人して移動を開始した。目指す場所は錬金術師たちの隠れ家のある東地区……。

メリーベルの研究室の扉をノックも無しに開く。すると扉の向こうでメリーベルは下着姿でソファの上に寝転がっていた。

しばし固まる俺。俺とクロロが前で停止したものだから、リリアは俺たちの背中にぶつかるとなる。前が見えずに戸惑うリリアに振り返り、俺は腕を組む。

「……すまん、リリア。メリーベルを起こしてくれないか？」

「へ？　なんでリリアが起こすですか？」

「いや……俺だと問題があるんだ」

「理解。では、クロロが起こします」

「いや、ちょっと待て!？」

止める間もなく部屋の中に走って行ったクロロが涎を垂らして寝ているメリーベルの肩をガクガク揺らす。目を覚ましたメリーベルは目の前に居るクロロを見て目を丸くしていた。

「待てクロロッ!!　メリーベル、これは違うんだ!!」

「……………何が違うのかはわからないけど、ナツルがえっちだってことは判った」

クロロが退いたお陰で中を覗けるようになったリリアがひょっこりと顔を出す。そうして状況を確認すると、リリアは俺の背中を思い切り蹴っ飛ばした。

「師匠ッ！！ 何やってるんですか！？」

「お、俺かつ！？ クロロは！？ 主に悪いのはクロロだろ！？」

「クロロは機械人形だから、いーんですっ！！ でも師匠は生身だからアウトです！！」

リリアにぐいぐい押し返され、部屋の外に放り出される。バタンと目の前で勢い良く扉が閉められ、俺はぽつんと一人で狭い路地に立ち尽くしていた。

「何故……？」

しばらくするとようやく部屋に上げてもらえるようになった。メリーベルはちゃんと服は着ていたものの、髪は寝癖でボサボサだった。昼夜逆転生活が長いメリーベルはつい先ほど眠りについたところらしく、俺たちの来訪で完全に睡眠を妨害してしまった。もう寝る気にもならないというメリーベルの言葉に甘え、俺達は話を続ける事にした。

「なるほどね……。壊れた機械人形の修理をしてほしいと」

「ああ。難しいか？」

俺が咄嗟にこの場所を思いついたのは、メリーベルの部屋にあった機械の塊を思い出したからだった。

この部屋には本当に様々なものが置いてある。わけのわからない肉片が吊つてあるし、人の手足みたいなものも平然と落ちている。それに錬金術師といえ、まあ大抵なんでも出来るような気がするじゃないか。

そもそも他に俺たちには頼れるような相手もないし、結局俺たちの中ではメリーベルが一番の博学だ。無理は承知で訊いて見ると、メリーベルは腕を組んで答えた。

「まあ、直せない事はないけど」

「直せるんですかっ！？ メリーベルさん本当に何でも出来るですねー！」

「……慌てないで。直せるには直せるけど……お金がかかるよ？ 機械部品は一般人が手に入れるにはちょっと値が張る代物だから」

この世界の通貨は『エン』という。大体レートも現実世界の円と同一だ。この間喫茶店で食べたグラタンは400エン。現実だったら安いくらいか。

そのレートのままメリーベルは俺たちにとんでもない金額を提示した。定価プレステ3が二十個くらい買える金額だ……って、他に例え方が無かったのだろうか、俺……。

「非現実的な額じゃないけど、ちょっと無理だと思うよ」

「でも……クロロ、腕がないんじゃないじゃ可哀想ですよ」

リリアはじいっとメリーベルを見つめる。俺は思った。メリーベルは多分リリアが苦手なのだ。

俺とメリーベルは恐らく性格的に通じる部分がある。出来れば面倒

事は避けたいし、他人に関わるのも好きじゃない。それでもこう、リリア相手だと目を反らせないというか、真っ直ぐ相手をしてやらなければならない気がしてくるのだ。

何となくリリアには相手を素直にさせる力があるというか、なんというか。強引に人を動かす能力とも言えるかもしれない。少なくとも現実目の前のメリーベルは困った表情を浮かべながら頭をぼりぼり掻いていた。

「……まあ、もげた腕があれば、繋ぐくらいならなんとかなるかもしれない」

「腕、ですか……。クロロ、腕はどこですか？」

「返答します。昨晚、戦闘時に切断され、シャングリラ市街地の南区で損失しました」

戦闘で切られたって、穏やかじゃないな……。まあ何はともあれ腕が見つければ直せるかもしれないなら、探せばいい話だ。

「それじゃあ、腕を捜してくるですよ！　クロロ、一緒に行くです！」

「承知しました。クロロは腕を捜しに南区に向かいます」

二人が部屋を去っていくのを見送り、俺は肩を竦めた。何だかんだでクロロは悪いやつではない気がする……。というか何かたくらめるほど思考する存在ではないようだ。一人残った俺の肩を叩き、メリーベル眠たげに目を擦りながら言った。

「それで、どう？」

「ん？ 何がだ？」

「人の下着姿を見物した感想」

思い切り吹いてしまった。メリーベルはニヤニヤしながらベッドの上に寝転がる。

「お前なあ……」

「んー、寝てるから。そっちの方は勝手にやって。見つかったら起こして。おやすみ」

言いたい事を言いたいただけ言っただけでメリーベルは速攻眠りについてしまった。俺は再び肩を竦め、遅れてリリアたちを追った。二人は東通に出たところで俺を待っていた。恐らくは一緒に探すつもりだったのだろうが、俺はリリアの誘いを拒否する事にした。

「ええ？ 一緒に探してくれないんですか？」

「ああ。ちょっと今日はなんていうか……用事があるんだ」

本当はリリアも誘うつもりだったが、こういう事情では仕方がない。俺は適当にリリアをあしらひ、別行動を取る事にした。

リリアとクロロが南区に歩いていくのを見送り、俺は学園に向かった。学園の門を潜ったあたりで待ち合わせをしていたアクセルに手を振り駆け寄る。

「悪いな、待たせたか？」

「ふわあ……。眠いぜ……。まあ、待つちやいないけどよ……。こんな朝早くに用事ってなんだ？　そして今日はリリアちゃん、一緒にじゃねえのな」

「ああ、実は……。アクセル、俺を戦えるようにしてくれないか？」

突然俺が言い出した言葉にナナシも目を丸くしていた。アクセルは腰に提げた二対のサーベルに手をあて、首を傾げる。

「そりゃ、構わねえけど……。ナツル、お前だつて学園の生徒なんだろう？　この学園に居るって事は、何らかの力を持つてるって事だ。剣術でも魔術でも構わないけど、何か才能がなきゃ入学試験をパス出来ない。敷居が高い学園だけに、生徒はそれなりに腕の立つやつだけだとばかり思ってたんだが……。何か事情でもあんのか？」

アクセルの発言は酷く真つ当だった。流石にこういわれることくらいは想定していたが、いつもノリが軽いアクセルにしては冷静に分析して返事をしてくる。

いや、アクセルはこういう男なのだ。見た目やノリは軽くとも、状況を冷静に判断できる。この間リリアとメリーベルが戦った時、止めに走ろうとした俺に対してアクセルは冷静に状況を読んでいた。あそこで止めに入ったところでリリアは絶対に喜ばない事も、まだ彼女があきらめていない事もアクセルはわかっていた。そんなアクセルだからこそ、頼める事なのだ。

自分でもどうしてリリアを誘おうと思つていたのだろう。同じ質問をリリアにも食らつていたはずだ。いや……。だからこそなのか？　ある意味俺は彼らを騙している。戦えないという事実を伝えることで、少しは良心の呵責が抑えられるとも思つたのだろうか。

どちらにせよ考えた所で意味はない。俺は意を決して、一晚有り余った時間で考えた言い訳を繰り出す事にした。

「……アクセル、実は俺……」

「実は……？」

「俺……記憶喪失なんだ」

沈黙が場を包み込んだ。

わかっている。自分でもわかっている。苦しい言い訳だって事はわかってるさ。でも他に言葉が見つからなかったんだ。仕方ないじゃないか。

「信じられないかもしれないが……って、うおおいつ！？」

顔を上げるとアクセルは号泣しながら俺の手を握り締めていた。まさか、一発で信じたのか！？　いくらなんでもお人よしが過ぎるだろう！？

「いやあ、そうだったのか……！　そうかそうか、そういう事はもっと早く言えよ……。俺たち……友達だろっ！？」

いつの間に友達になったんだ……。いや、そうアクセルが思い込んでくれている方がこっちとしては都合がいい。俺は苦笑いを浮かべながらアクセルの手を握り返した。

「そ、そうそう……俺たち、友達友達……」

「そう、友達であつ！！　くう……な、泣けるぜえっ！　ナツルがそんな事情を抱えていたとは……今までそんな素振り全くなかったのに、本当は苦しみを抱えて我慢していたんだ……。俺たちに

悟られまいとしてっ!!」

そこまで深読みされても困るのだが……まあそういうことにしておいてもらおう。そのほうが色々都合が良さそうだ。

「ん？　じゃあ何でリリアちゃんとは仲がいいんだ？」

「あ、ああ。リリアは俺が記憶を失う前の知り合いらしいんだ。でも、あいつにはそのことは言わないでやってくれないか？」

「ナ、ナツル……お前、男だぜっ!!　記憶喪失になった事を、リリアちゃんに隠しておきたいなんて……!　過去の事が分からなくて不安なのに、リリアちゃんを心配させまいと……ぐはあっ!!　お前、かつこよすぎだぜ!!」

一人で盛り上がっている。だんだんいつに師事を崩ぐのが不安になってきたが、もうこうなってしまうては後には引けない。アクセルは俺の肩を抱き、遠い空を指差して言った。

「よし分かった!!　ナツル、俺がお前をこれから全力でサポートしてやるっ!!　一緒にリリアちゃんを守る為にも頑張ろうなっ!!」

上手く行った……これ以上ないほどの大成功だと言えるだろう。そのはずなのになんだ、この腑に落ちない感じは……。

かくしてリリアの師匠となってしまった俺の、さらに師匠になってしまったアクセル。さっそく俺達は場所を移し、今後について相談する事にした。

……俺の明日はどっちだ。

友達の日(2)(後書き)

くディアノイア劇場く

はじめましてこんにちは編

『第一回』

リリア「それいけ！ ディアノイア劇場ー！」

夏流「……なあんか、どっかで見たことあるレイアウトだな……」

リリア「キルシュ○アッサーでそこそこ好評だったからこつちでもやる事になったんですよ！」

夏流「まあそれはいいけど、サブタイが『第一回』だと何をやればいいんだ？」

リリア「ほら、今度はロボットじゃないの？ とかく色々あるじゃないですかー」

夏流「ロボットはもういいだろ、どう考えても」

『ヒロインの私生活』

夏流「そういえばリリア、俺と会う前は何やってたんだ？」

リリア「え？ 何って、学校行ってましたよ？」

夏流「いや、自由な時間に何してたのかってことだよ。趣味とかあるのか？」

リリア「趣味はいっぱいあるですよー。えっと、家事は全部得意ですよ？ 家の中にずっと居るから、基本的に家の中では最強なんです」

夏流「……外に出ような」

リリア「外に出てもいい事はないですよー。リリア、いじめられっ子なので誰も遊んでくれないですし。拾い場所より部屋の隅っこでうずくまっているほうが落ち着くんです」

夏流「……一緒に頑張ろうな、リリア」

リリア「はいっ！！」

『バイト』

リリア「アクセル君っていつも忙しそうにしてるけど、いくつバイトを掛け持ちしてるんですか？」

アクセル「ん？ そうだなー……今は四つだ。先週までは五つやってたんだが、流石にキツくてやめたわい」

リリア「ど、どうしてそんなにお金が必要なんですか……」

アクセル「まあ色々あってな。でもバイトつてのも色々やってみると面白いぜ？ ムカつくこともあるけど、何事も経験だしな」

リリア「へー。リリア、バイトなんて絶対無理だと思います」

アクセル「何で？」

リリア「んつと、何度かやってみたけど、皆一日でクビになったんですよ。えへへ」

アクセル「それ、誇らしげに笑うところ？」

友達の日(3)

「……？ あれは確か……リリアの取り巻き」

中庭でなにやら話し込んでいるアクセルと夏流の姿を通りかかったゲルトは足を止めて眺めていた。

上着のポケットに両手をつ込み、視線を尖らせる。二人が何をしているのかには興味はなかったが、その場にリリアの姿がない事が気がかりだった。

「というか……本当に何をやっているのかしら」

ナツルが唐突に繰り出した拳がアクセルの顔面を殴り飛ばし、アクセルは派手に吹っ飛んで中庭を転がっていく。

そのわけのわからない状況に肩を竦め、踵を返すゲルト。振り返った直後、しかし目の前に突然現れた人物に驚嘆し、目を丸くした。何の気配もなく立っていた背の高い人物。美しい顔立ちと豪華な服装は男なのか女なのか外見では判断を難しくしている。金縁の眼鏡をかけた人物は腕を組んだまま薄っすらと微笑を向け、ゲルトに声をかけた。

「やあ、ゲルト。君も気になるのかい？」

「……何の話ですか？ それより、気配を消して背後に立たないでください、アイオーン」

溜息混じりに呼ぶ名前。アイオーンと呼ばれた人物は既にゲルトを見ては居なかった。その視線の先、倒れたアクセルに慌てて駆け寄

る夏流の姿がある。

「『白の勇者』の取り巻きと君が評する彼らだけれど、なかなかどうして興味深いよ」

「どうしてですか？ アクセルは兎も角、もう一人の方は特に凄みを感じないのだけれど」

「そこがいいんじゃないか。学園の生徒は他の生徒の戦闘能力に関するデータは閲覧自由のはず。だというのに、彼は所属学科さえ明らかにされていない……未知数なものこそ興味深いんだよ、ゲルト。まるでミステリーだよ、彼は」

「そうですか。もしかして惚れたんですか？」

「恋……そう、恋！ 恋、かもしれないねえ。まあ、ボクは恋多き人生だから、そんな事もあるさ。ああ、あるだろうとも」

「それは良かったですね。じゃあいつまでもそこで馬鹿みたいに彼らを眺めていてください」

冷たくあしらって歩き出すゲルト。その背後に突きつけられた金色の槍にゲルトも素早く大剣へと手を伸ばしていた。

「そうそう、ゲルト。明後日あたりチャレンジしてこないかい？ 君も今月、三位のまま終わらせるつもりじゃあないのだろう？」

ゲルトは振り返らなかった。自らより上位ランクにアイオンが居座っているからといって、特にこれといってがつくつもりはない。焦らずとも最終的に一位であればいい。敗北の二文字を決して許さ

ない己の勇者としての宿命さえまっとうできれば、後の事はどうでもいいのだ。

よって、アイオーンの個人的な挑発など意にも介さない。一瞬で抜いた刃でアイオーンの槍を弾き、ゲルトは今度こそその場を立ち去った。

残されたアイオーンは二人の姿　特に夏流に視線を集中させ、舌で唇を舐めて微笑んだ。

「気づいていないのかい、ゲルト。彼は本当に、面白い逸材だよ……壊してしまいたい程に、ね」

友達の日（3）

「と、とりあえずナツルの今の戦闘能力は良くわかった……」

頬を押さえながら立ち上がるアクセル。つい先ほど、俺が思い切りぶん殴ってしまったせいである。

アクセルに師事を扇ぐ事にした俺に対し、こいつがまず一番に要求してきたのがそれだった。今の自分に出来る全力での攻撃　今の俺に出来るのは、ただ全力で拳を突き出す事だけだった。

涙目になって頬を擦るアクセル。なんだか悪い事をしてしまった。本気で来いっていうから本気でやったのが間違いだっただか……。

「つか、ナツル……お前、どうしてそんなに腕っ節が強いんだ？なんでもないただのパンチで、何故この威力……」

「え？　あ、ああ……なんでだろうな。昔鍛えてたのかもな」

というより、実際は今の今まで鍛えていた。実家を飛び出してから、俺は親戚の家で暮らしてきた。その親戚の家というのが格闘技の道場を開いている師範代の家で、俺は朝と夕方、そこで師匠の特訓につき合わされていた。

元々親父も格闘技が趣味で自身も嗜んでいたので俺も自然とそういうものに興味を持っていたのだが、それから毎日当たり前のように鍛錬を積んできたお陰で自慢じゃないが体力だけは上等だと思っている。

とまあ、そんなことはアクセルに説明できるわけがない。どう説明すればいいのかもわからないし、そもそも俺は記憶喪失になってしまったはず。ああ、嘘が嘘を呼んでいく嫌な展開……大丈夫か、俺。

「んー、まあどっちにしろだったら問題は肉体的なところより精神的なところになるわけだな。よし、ナツル……これで俺に襲い掛かって来い」

と言ってアクセルが俺に渡したのはどこから取り出した木刀だった。これで襲い掛かって来いといわれても、こんなもんで襲い掛かったら怪我じゃすまないんじゃないか。

「何不安そうな顔してんだ。ホラ、問題ねえから来いよ。今度は俺も構えるからよ」

構える、といってもアクセルは片手をだらりとぶら下げ、身体を斜めに構えて片手を俺に翳しているだけだ。とても防御に向いている状態にあるとは思えない。だがしかし全力でやれというのだから、まずはやらないことには話にならないだろう。

「本当にいいんだな？」

「おう、どんと来い」

「行くぞっ!!」

わざわざ掛け声なんてかけている時点で本気なのかどうか。とにかく俺は少々齧った事の在る剣道の構えで木刀を握り、アクセル目掛けて思い切り振り下ろした。

踏み込みも上等、振り下ろした剣筋も真っ直ぐだったはず。全く手加減はなかったはずだ。直撃すれば骨くらいは軽くいつてしまう……そんな攻撃を受け、砕けていたのは木刀の方だった。

理解できない状況に目が丸くなる。俺が振り下ろした木刀をアクセルは受けたのだ。どこでって 右手の甲で、だ。

何が起きたのか。アクセルは当たり前のような顔をしているし怪我一つしていない。なのに木刀は折れている。単純な話、木刀の強度を生身の人間の肉体が上回った、という事である。

「その様子じゃ『魔力』の使い方が完全に判らないみたいだな」

こちら側の世界の人間ならば誰もが持っている力、それが魔力である。

魔法の詠唱に必要な力であり、生命力でもある魔力は己の肉体を強化する事も可能であるらしい。

「まあ早い話、今さっき俺は自分の手の甲に魔力を集めてお前の攻撃を弾いたわけだ」

「よく、わかんないんだが……。とにかくパワーを集めてガードしたんだな？」

「そうそう」

そんな事をあっけらかんといわれても、わかるわけがないだろうが。完全にフアンタジーだ……。非現実的すぎる。『気』みたいなもんか？ 修行すればビーム出せるようになるってことか……。おかしいだろ。

「さっきは防御の瞬間だけ放出したから良くわからなかったかもない。じゃあ今度は持続して出すから、よく見てみる事」

「わ、わかった」

アクセルが全身の力を抜き、深呼吸する。直後、アクセルの全身から緑色の光が薄っすらと溢れ出し、身体を覆っているのがわかった。

「す、すげえええっ!!」

「凄くはないだろ……。多分この学園の生徒は全員出来るぜ？」

「ま、まじで!？」

そんなバケモノみたいなのがいっぱい集まってる学校だったのか！？ この学園、相当フアンタジーだな……。

「まあとりあえず常時放出するのは結構難しい。普通は攻撃、防御の瞬間だけ発動するもんだが、まあこれは練習しなきゃわかんねえだろうな」

「ど、ど、どうやればいいんだ？ 俺も出せるのか、そのオーラみたいな……」

「魔力な。なんだ、本当にわかんないのか？ 見た感じお前、かなり魔力高そうだけど」

そんなもん見ただけでわかるのか？ いや、しかし別世界の住人である俺にそんな力があるはずはないんだが。

「魔力の使い道は基本的に二種類。『蓄積』か『放出』だ。魔力を使えば身体能力を強化出来る。つまり蓄積が得意なやつは前衛向け。放出技術はつまり魔法の詠唱を意味する……つまり、後衛向け。まあ、人によっちゃ両方出来るやつもいるんだけどな」

「アクセルはどうなんだ？」

「俺は放出は苦手だから、魔法として使っても威力は高が知れてる。だから俺は基本的に魔法攻撃は出来ないシンプルな剣士のスタイルだな。まあ大体一人一種類くらいは得意な魔法傾向があるもんなんだが」

話を聞いているだけではよく判らない。とりあえず俺は頭の中で事実を整理する。

この学園ではこれくらい出来なくてはやっていけないという事。要するにそういうことだ。アクセルに出来る事なら、俺にだって出来ないやいけな。なによりそれくらい出来なければ、リリアをこれから守ってやる事なんて出来ないのだから。

守ってやる？ 俺の目的はリリアを強くする事だったはず。守ってやる必要があるとしたら、そう……あいつがちゃんと一人前になって、俺の存在が必要なくなるくらいに強くなるまでの間の事だ。

俺の力が不要に成る瞬間、俺はこの世界に存在意義を失う。そんな事は最初からわかっていた事。だからこそ、俺は。

「大丈夫ですよ、ナツル様」

耳元でうさが囁いた。俺はアクセルには聞こえない小さな声に意識を傾ける。

「貴方はこの世界を導く救世主という役割を持っています。故に貴方には最初からありとあらゆる苦難を跳ね除けられる程度の力は存在しているのです」

「……どういうことだ？」

「特に難しい話ではありません。貴方が向こうの世界でどうなのかは関係なく、貴方はこちら側では最強なのです。ただ、その力は大きすぎるため普段は無意識にセーブされているでしょう。力を使うのならば、自分の中で気持ちを切り替えるのです」

気持ちを切り替える、といわれてもわからない。そもそもこちら側では最強、と言われた所でしつくりも来ない。

だから俺はとりあえず目を閉じる事にした。アクセルが言うには魔力とは生命エネルギーの事らしい。なら、誰にでも出来て当然の事考える。自分は今、向こうの世界の本城夏流という一般人ではない俺自身、恐らくまだどこかでこのファンタジックな世界に適応できていないのだと思う。

俺が非現実的だと心の中で否定する一つ一つの現実が俺の救世主の力から遠ざけているのだとすれば、気持ちを切り替えるとは割り切る事に他ならない。

「俺は、最強だ」

自分自身に言い聞かせるように呟いた言葉にアクセルが目丸くす

る。だが、俺はそれを意に介せず深呼吸する。

一瞬だけでいい。何もずつとこの世界に居る必要なんてない。ただ必要な時、必要なだけ救世主としての力。世界の法則から外れた力を発揮できればそれでいい。

そうすればこれから先ずつと楽になる。リリアを守ってやれる。もう、あんな無茶な戦い方をさせないで済む。そうすれば、俺は。心の中に冬香の姿を思い浮かべる。冬香が作った世界の中で、彼女が俺に与えた救世主の席。その意味を俺は受け止めなければならぬ。彼女の世界にとっての俺の存在意義。それが救世主という言葉ならば、俺はその事実を演じきらねばならない。

呪文をかけよう。己の心に魔法をかけるのだ。言い聞かせた思いを、この世界に顕現する。なんでもいい、口走れ。恥ずかしくてかっこ悪い、己に言い聞かせる言葉を。

「
救世主モード、オン」

我ながら馬鹿馬鹿しい台詞を口走った。

その瞬間、俺の周りにあった世界は光の速度で進み、急速にそれらは俺にとってのリアルになっていった。

シャングリラの街全体に響き渡るような激しい轟音がデアノイアで鳴り響いた時、リリアは狭い路地でゴミの山を漁っていた。

「うう、全然見つからないですねえ……」

ごそごそとゴミ山を漁る事数十分。一向に見つかる気配のないクロ口の腕にリリアは泥だらけになってしまっていた。

クロ口もまた、片方しかない腕でゴミを漁っているせいか、せつかく綺麗に洗った服もどろどろになってしまっている。二人してとぼ

とぼ裏通りから表通りに出ると、その汚さに通行人たちが一步引いて通り過ぎて行く。

あれからもう随分と探し回ったのが、腕は見つからない。そもそもクロ口は落とした場所を大体記録していたのだから、その周辺では腕は発見されなかったのである。

「まさか、誰か拾って持ち帰っちゃったんですかねえ」

「思案します。確かに、機械部品は希少価値がありますから、持ち帰ってしかるべき場所で売却するという可能性もあるでしょう」

「はうう……。そうだったらもうアウトだよ。ねえねえ、屋根の上に転がってたりしないかな？」

「探してきましょうか」

「いやいや、いいよ！ 今真昼だしさっ！！ あれ？ そういえば何か学園の方が騒がしいですね」

二人は坂道の上にある学園を見上げた。街中の人々が先ほどの音に何事かと学園に視線を向けているのだが、リリアが反応したのは少々遅かった。クロ口は服についた汚れを叩いて落としながら顔を上げる。

「返答します。先ほどの振動は強大な魔力の放出による衝撃かと推測されます」

「へえ」。世の中にはそんなただ魔力解放しただけでズドンってなっちゃうようなすごい人がいるもんなんですな」

「肯定。流石は英雄学園ディアノイアです」

二人はその振動の元が知り合いの夏流である事は全く知らない。そんな呆けた顔で立ち尽くす二人の脇を、見覚えの在る腕を持った人物が歩いていくのを見た。

リリアとクロロはゆっくりと同時に振り返る。すると、中年太りの男性がクロロの腕を持って鼻歌を歌いながら歩いているではないか。

「おおお、おじ、おじさんっ!!」

「お、おおおう!? 何だいお嬢ちゃん……そんな鬼気迫る表情で」

「そ、その腕!! どこで拾ったんですか!？」

「え? これ、お嬢ちゃんのかい?」

「厳密にはあっちのクロロ君の腕なんですが」

リリアが指差す先、腕を肩口から失っているクロロの姿があった。しかし男はだからといって腕を返そうとはしなかった。

「残念だけどねえ、お嬢ちゃん。これはさっきうちに来た客が金の代わりに置いて行ったものなんだよ。俺はそこで旅人用の保存食なんかを売ってるんだが、異国風の服装をした女の子がこれで何とか譲ってくれないかって言うもんでね。知り合いにこういうの買い取ってくれる業者がいるから、今から持ち込んで買い取ってもらう所なんだよ」

「そ、それなんとか待ってもらえませんか!? ていうかそれ……それクロロ君の腕だからああああっ!!」

「そういわれてもねえ……うちも商売だし……。どうしてもって言うんなら、さつき商品売った子を連れてきてよ。その子から品物を取り返せたら、返してあげてもいいよ」

「ほ、本当ですか！？ それでどんな人だったんですか！？」

男にその人物の特徴を教えてもらい、リリアとクロロは走り出した。異国風の服装の女、長い黒髪に腰には長い刀剣を装備している旅人との事。そんな目立つ格好をしていればいやでも直ぐに見つかるはず。そうして二人が走り回っているうちにたどり着いたのが大きな噴水を囲むようにして存在する広々とした広場だった。

そのベンチの前を通りすぎ、慌ててブレーキを駆ける。ベンチの上を見ると、そこには巫女装束に身を包んだ女がもぐもぐとお食事の真っ最中だった。

「……食べてる」

「肯定します。彼女は食べています」

「……食べてる ツ！？」

慌てて駆け寄り、女の足元につくりリア。女は目を丸くして食べかけのパンをごくりと飲み込んだ。

「た、食べちゃった……」

「肯定。彼女は食べてしまいました」

突然現れた二人に女は驚いた様子だったが、完全に満腹になると傍

らにおいてあった巨大な太刀を手に取り立ち上がった。

「一体何用かな、少女よ。拙者、特に君に泣きつかれる謂れは無いと思うのだが」

「な、泣きつかれる謂れがあるんですよっ！！ うああん！」

リリアは立ち上がり、早口に事情を説明した。泣きながらであるせいか、口調もかなり怪しい。長々と語るリリアに女は腰に手を当て逐一相槌を打っていた。

「成る程」

話が終わるとリリアは一気に喋ったせいで呼吸困難に陥っていた。激しく呼吸を荒らげるリリアに女は瞳を閉じ、凜々しい笑顔で言った。

「君が何を言っているのかさっぱりわからん」

「わああああんっ」

「まあ、一先ず落ち着き給えよ。そら、水だ。飲みたまえ」

「あ、どうもありがとうございます。ごくごく……ってえ！？ これ、だからさっき説明したじゃないですか！！ 飲んじゃ駄目なんですよっ！！」

「君は面白いな、あっはっは」

「面白くないんですよおおおおっ！！」

見かねたクロロが前に出て改めて事情を説明する。すると女は太刀を腰に挿し、片目を閉じたまま答える。

「残念ながら食べてしまった物は返そうにも返せないのだよ。それにそもそも、機械人形の腕など落ちていたら普通誰かが捨てたと思うだろう?」

「思いますけど…… 思いますけどそうじゃないんですよ……。じゃあ、クロロくんはこれからどうすればいいんですか? 腕が片方無いまま一生生きて行くなんで、そんなの可哀想ですよ!」

「案ずるな少女よ。ならば君が彼を救えばいいだけの話だ。君は優しい女の子だ。ならば、これから長い時間をかけて彼に腕を与えられるような存在になればいいだけの事。未来はまだまだ長いのだ、諦めるな。拙者も影ながら世界のどこかで応援しているよ」

「……お姉さん」

「では、達者でな」

女はリリアに一礼し、去っていく。その後姿はとても颯爽としていてかつこよかったのだが、リリアは笑顔のままその背中に駆け寄り、背後から女を突き飛ばした。

勢い良く噴水の中に上半身を突っ込んだ女は水浸しで振り返り、リリアを見て首を傾げた。まだ何か用か? といった視線にリリアはその場で地団駄を踏んだ。

「だーかーらーっ!! お金払ってくださいよう!! 全然いい話じゃないですからあっ!!」

「やれやれ、若い内からその様子では将来の苦難を乗り越えられないぞ？ 若い内の苦勞は買ってでもしろ、というではないか」

「そういうことじゃないんです！ てか、苦勞するのリアじゃないくてクロロ君なんですよう！！」

「そう言われても困るな。何を隠そう拙者は一文無し。先に立ち寄った賭博場で全て使いきってしまったな。やれやれ、困った物だ」

「……………それ、貴方が全部悪いんじゃないんですか？」

「欲が出たな。当たったところで引き上げて居れば少なくとも儲けだった物を、大博打など打つから見ての通りだ。まあ、ゴミ山で腕を拾ったから何とか生きながらえたがね」

「だから、その腕は……っ！！」

二人の無意味な問答は暫く続いた。リアがどんなに一生懸命に女に声をかけても、ぬらりくらりとかわしてしまう。まるで言葉が通じているのか通じていないのか、不思議な空回りが延々と続いていく。やがてリアが無言で目に涙を溜めて女をじいつと見つめるようになる、流石に女も堪えたのか溜息を漏らした。

「少女よ、君の名前は？」

「うぐぐ……。リア・ライトフィールドですう……」

「リアか。拙者は八代鶴来^{やしろつるめ}。東の異国、イザラキから遙々馳せ参じた。色々あって今は錢の持ち合わせが無いので返す事は出来ない

が、代わりと言ってはなんだが拙者、君の護身を勤めて差し上げよう」

「護身つて、ボディーガードつてことですか？」

「拙者しばらくこの街に留まる予定なのでな。その間、君をありとあらゆる危険から守って進ぜ様。用心棒を生業にして生活しているのでな。まあ本業は別にあるのだが」

「……それって結局お金は払わないって事じゃないですか？」

「そうとも言う。というか、金はないから払えないと何度も言っているだろう。そっちの人形君は腕が無くても死ぬ事はないが、拙者は今金が無くて死の危機に瀕している。君の言う『かわいそう』の度合いで言えば、拙者の方が若干上ではないかね？」

すっかり鶴来の言う事に丸め込まれ、リリアは仕方がなく金を貰うのを諦めることにした。というか実際に金目の物は一切所有していない様子だった。

全ては振り出しに戻ってしまった。結局腕は手に入らないまま、その上何故か妙な用心棒までついてしまった。鶴来は懐から札を一枚取り出すとそれをリリアに差し出す。

「名刺代わりだ。いざという時はこいつで呼んでくれ」

手渡された札には達筆な文字が記されている。聖クイリアダリア王国では異国の文字である漢字を読み書きできる人間はそう多くはない。学園にもその授業は存在するものの、リリアは特に特殊言語の授業は選択していなかったので読む事は出来なかった。

「この術布に願えばいつでも馳せ参じよう。というわけで拙者これから宿を探さねばならないのでな。申し訳ないが失礼仕る」

鶴来はそのまま踵を返し公園から立ち去って言った。とりのこされたりリアとクロ口はぽつんとその場に立ち尽くし、二人の間を風が吹きぬける。

「それで結局……腕、どうしよう」

残されたのはどうにもならない現実と一枚の札だけ。

結局何一つ進展のないまま、リアは肩を落として戻る事にしたのであった。

学園の日(1)

「うわあっ!?! 二人とも……ど、どうしちゃったんですか!?!」

夕暮れの日差しが差し込む学園の医務室で俺とアクセルは仲良くロボロボになっていた。

どこかで俺たちの話を聞きつけたのだろう。リリアはクロ口をつれて医務室に飛び込んでくるなり俺たちを見て叫んだ。それも無理は無い。俺達は文字通りロボロボだった。服は布切れみたいになつてゐるし、外傷も酷い。全体的にこげているといふかなんというか……兎に角酷い有様だった。

昼間に俺が魔力解放をした結果がこれである。あれから今の今まで俺達は仲良く二人して気絶していた。状況がよく判らないまま頭に巻かれた包帯を指先でなぞる。

「……どうしちゃったんだろうなあ。アクセル、俺たちどうなったんだ?」

「……どうしちゃったんだ、じゃないだろ……。お前、どれだけ魔力高いんだよ……。普通もう少し加減して解放するだろ……。お陰で俺までとばっちりじゃねえか……」

「ええ!?! 師匠が魔力解放しただけで、二人ともぼろぼろになっちゃったんですか!?!」

「いや、攻撃したつもりはなかったんだが……」

「ただの解放であれ!?! 俺本気で紙一重で死ぬところだったよ!?!」

ガードが上手く行ったから良かったけど、あれ生身で受けたら死んじゃうからね!!」

「ま、マジか!？」

三人とも驚いていた。一人クロロだけが医務室の中を興味深そうにうろろしている。薬品の陳列された棚をじろじろ眺めているのがちょっと不安だが、とりあえず腕は直っていないようだ。

それにしても一体なんだったんだ……？俺はただ、魔力解放つてやつをしただけなんだが……。つーかあれで出来てたんだろつか。謎だ。

何はともあれ気絶するとは情けない。アクセルは俺と距離を置き、まるで化物を見るかのような目で見つめている。リリアに至ってはぽかーんと口を開いたまま停止してしまっているし。

「兎に角悪かったよ……ごめんアクセル。いてて、マジでこれどつか折れてねえか……」

そんな事をばやきながら立ち上がる。すると医務室の扉が開き、人間の姿になったナナシと　その背後、完全に扉の向こうに見切れてしまっている巨大な鎧の姿の学園長、アルセリアが立っていた。

「目が覚めましたか、ナツル」

「ナナシか……。お前よく無事だったな」

「こう見えても優秀な使い魔ですから。あ、そうそう。アルセリアが貴方に話があるそうなので、ちょっと学園長室まで行きましょうか」

ここで話が出来ないのは単純に学園長がこの部屋に入ってこれないからじゃないのか。全長3メートルは軽い巨大な学園長は一生懸命扉を潜ろうとは何度か激突していた。その衝撃で扉が湾曲してしまっているが見なかったことにしたほうがいいのだろうか。とりあえず包帯塗れの情けない格好のまま医務室を出る。学園長に会釈すると、彼女はのしのしと歩いて階段を上っていった。階段壊れそうだなとか考えていると、背後でアクセルとリリアが俺を見ている事に気づいた。

「あー、ちよつと行ってくるから。先に帰ってていいぞ」

そう言つて扉を閉める。ナナシと共に螺旋階段を上り、二度目の学園長室訪問を果たした。

相変わらず恐ろしく広い空間だ。とぼとぼ歩いて夕日が差し込む巨大なフロアを進み、アルセリアの前に立つ。

執務机の上に座ったアルセリアは机の上で指を組み、俺を見下ろす。鎧の向こう側に光る鋭い眼光が凄まじい威圧感を与えてくる。

こいつの中身つてそういうええばどうなつてんだろうか。巨人でも入ってるんだろうか。でも声は女だしなあ。じゃあでかい女 怖いね

「お久しぶりですね、夏流。尤も、貴方の感じる時の流れではそう久しくはないのかもしれませんが」

俺がこの世界のルールの外側で生きている存在だという事を知るのは、彼女とナナシだけだという。そんな彼女を前にしていると、威厳があるのはわかるのだがどこか気が楽に思えてくる。

「挨拶は抜きで良いでしょう。夏流、貴方の行動はこの世界に大きな影響を及ぼします。それは承知していますね？」

「ああ」

行動により、世界の運命さえ変えられる能力　それを持つのが救世主。

この世の未来を予知する事を可能とする『原書』とその『原書』に記されていない未来を手繰り寄せる事が出来る力。更には時間、場所に限られない行動方法。そして先ほど始めて発覚した、救世主の力。

「貴方の持つ力はこの世界を変える力……。変化とは再生であり滅亡でもあります。つまり貴方はこの世界を生かす事も殺す事も出来る。その事を肝に銘じてください」

「……わかってるよ。あの力は『わきまえて』使えってことなんだろう？」

自分の掌をじっと見つめる。先ほど全身から溢れ返る程滾っていた力強い脈動は既に息を潜めている。今は何の特別な力も感じられないこの身体に、どれだけの力が溜め込まれているのか。

「貴方の存在は森羅万象の外側に存在します。最初から完全無欠の救世主としての存在を確約されている貴方にとって、人殺しなど呼吸をする如く容易い事……。『力』は膨大、それ故に存在する『封印』です」

「封印？」

「ワタクシは使い魔として貴方の傍に居ますが、同時に貴方の魔力を抑える役割も果たしているのです。普段の貴方はワタクシによる魔力の封殺と同時に、貴方自らが自身に課した特殊な封印によって

「二重に拘束されているんですよ」

シルクハットを人差し指の先で持ち上げながらナナシが微笑む。二重の拘束……そんなに嚴重に封印しなければやばいような代物なのか、救世主の力ってやつは……。

確かに、自分自身で『力を使う』と強く願わなければ俺は何も出来なかっただろう。俺自身が持つ現実感が力を封じているもう一つのストッパーになっているわけか。というか、あの時ナナシは俺の肩の上にいたはず。じゃあ、ナナシが居なかったらどうなってたんだろうか。想像するだけで寒気がする。

「夏流。貴方もこの世界での力の使い方を学ぶべきです。今の貴方は己の力をコントロール出来ない未熟な腕前……。力を使えば周囲に存在する物全てを薙ぎ払い、焦土と化してしまうでしょう」

「そんな物騒なの!？」

「ふふふ、そんなに恐れる必要はありませんよ。そういった強すぎる才能を持ってしまった子供たちを保護するのもまた、ディアノイアの役目。貴方も『見習い救世主』として存分に切磋琢磨してください。心配せずとも、貴方には『時間』だけはほぼ無限に存在するのですから」

確かにそうだ。こっちに居る限り俺の中の時間はほぼ停止した状態にある。こっちで修行する分にはなんら問題がないというわけか。だが、俺の役割はリリアを育てることのはず……。俺自身が戦わなければならぬような状況になんてなるのだろうか。その辺の質問はまたうまいことはぐらかされてしまったものの、何となく俺はそれでいいような気がしていた。

どちらにせよ、リリアに稽古をつけるのに自分が強いほうが良いに

決まっている。自分自身に救世主の素質があるとは思わないが、反則^トレベルの能力を最初から付与された裏業的存在が救世主なら、それを正しく使うにはある程度の鍛錬が必要になる。

文字通り、この世界の安定をぶち壊しかねない。それだけではどうにか遠慮願いたい所だな……。

「とりあえずは……こつちの世界の服を、調達しないと……」

自分でめちゃくちゃにしてしまった私服を指先でつまみ、苦笑を浮かべた。

やれやれ。どうにもこの先不安な救世主生活だなあ……。

学園の日（１）

校長室を出て螺旋階段を降り、一階のロビーへ出るとそこで二人が待っていた。先に帰っていていいと言ったのに律儀な奴らだ。

「わざわざ待っててくれたのか。悪いな……って、どうしたお前ら」

二人とも何か神妙な面持ちで俺を見つめていた。なんだろう、この憐憫の視線は……。

「師匠……退学ですか？」

「え？ 何で？」

「だって、学園長に呼ばれるなんて普通じゃないですよ……。あの学園長、阿修羅の如き強さだって有名なんですよ？ 甲冑着込ん

だ騎士だつて握り潰す腕力だとか……」

そりゃ確かにリアルにいけそうだが、話してみると意外と温厚な性格なんだが……あの学園長は。

とりあえず誤解を解くことにした。呼びだされた理由は大規模な魔力解放の注意、という事にしておいた。二人ともそう思っていたよ。うだからすんなり信じてもらう事が出来た。

「しかしナツルよお、お前只者じゃないな……。ゲルトだつてあそこまで凄くはないと思うぞ」

「ええええええっ！？ ししし、師匠っ！！ ゲルト・シュヴァインより強いって本当ですかっ！？」

生徒たちがぞろぞろ行き交う学園のロビーでリリアがそんな事を叫ぶものだから、周囲の視線が一撃で収束してしまった。相変わらずボロッボロの服装の俺を見て通りすぎる生徒たちが聞き耳を立てている。

「お、おいリリア……滅多なこと口にするなよ……」

「はう……ごめんなさい。でも、やっぱり師匠は凄いです！ 尊敬しちゃいます！ えへへっ」

とても嬉しそうにニコニコしているリリア。何とも幸せそうなのでツッコむ気力がうせてしまう。アクセルも一先ず俺が退学にならずに安心したのか、気の抜けた表情でリリアを見て笑っていた。

「あー、とりあえずリリアちゃんが叫んじゃった事だし、場所移動すっか？ なーんか、一躍時の人ってカンジ？」

「全然嬉しくないから……。ほら、さっさと帰るぞ」

うさぎ状態に戻ったナナシを頭の上に乗せ、三人で帰宅する。中庭を抜けて門を出たあたりで俺は何か違和感を覚えて立ち止まった。なんだかおかしい。俺が立ち止まったことで残りの二人も停止した。急停止したものだからどうしたものかと首をかしげているが、俺はとりあえず振り返る事にした。

「つてえ、誰だお前っ!？」

振り返るとリリアとアクセルの間に当たり前のように一人割り込んでいる見知らぬ人物の姿があった。二人も今の今まで気づかなかったのか、同時に気づいて思い切りのけぞっている。

「アイオーン!？ い、いつからそこに居たんだよ……」

真紅の髪に真紅の瞳。黒い正装の上に紅いローブを羽織っている謎の……男？俺とリリアの視線が胸に注がれる。胸は大きかった。女だった。

アイオーンと呼ばれた女は金縁の眼鏡の向こう側、鋭く光る眼差しで俺を見つめている。とりあえずアクセルの知り合いのようだが、本当に何なんだ？ どうやって割り込んできたんだ？ さっきまでいなかったと思ったのに……。

「嫌だなあ、アクセル。ボクはずっと君たちと一緒に居たじゃないか。ほら、君たちが魔力解放で気絶するよりも、ずっとずっと前から」

「え……?」

思わず寒気がした。ぐるぐると渦巻くような奇妙な瞳を持つ女、アイオン。鋭い歯を微笑みの向こうに見せながら、眼鏡に手を当て低く笑う。

俺たちが魔力解放で気絶するより前って……気絶したのがもう五時間くらい前だぞ？　ていうか、じゃあ医務室にも居たっていつのか？　んなアホな……。

そう考えてアクセルに視線を送ると、うんざりした表情で苦笑を浮かべていた。どうやらこの様子だとマジらしい。再び背筋がゾクツとした。

「と、言うか……気配は完全も完全、存在すら否定する勢いで消し去ったつもりだったのにね。良おく気づいたものじゃあないか、本城夏流。褒めてあげるよ、フッフ」

「そいつはどうも……。っか、気配消して後をつけるなよ」

「そいつは失敬。趣味がストーキングなものでね。いや、なかなか習慣付いた行動というのは止められない物さ」

さつきからずうつと俺のことだけ見ているのが怖いのだが、気のせいだろうか。アクセルに説明を求めて視線を送ると、嫌々といった様子で紹介してくれた。

「……こいつはアイオン・ケイオス。学科は魔術学科だけど、生徒の間じゃネクロマンサー死術使いで通ってる。強さはまあ、ゲルトと同じか上か
って所だな」

「紹介に預かったアイオン・ケイオスだ。これから仲良くしようじゃあないか……ねえ、本城夏流？」

両手をひしと握り締められ、握手を強制される。先ほどからずっとアイオーンは笑っているのだが、目が全く笑っていない。顔にぺたりとシールを貼り付けたような奇妙な笑顔……。そして何故か名乗ってもいないのに俺のフルネームを知っていたり、趣味はストーキングだったり、あんまり考えたくない結論が俺の脳裏をちらついている。

というか、ゲルトと同じかそれ以上　この学園でも一、二を争うほどの実力者ってことか。その死術使いネクロマンサーが何でまた俺の後をつけるのか。

「ああ……気持ちいいよ、夏流。君のその猜疑心の塊みたいな視線……ゾクゾクする。ボクの事を全く信用していないんだね」

「そりやあそうだろう……。お前のどこに胡散臭くない所があるのか逆に教えて欲しいくらいだ」

「そりやあそうだろうね。ただ、君はもうボクからは逃れられない……その事だけは覚えておいて欲しいな。なあに、悪いようにはしないさ。君の存在に、ちよつとばかり興味があるだけだね……。ああ、良ければ今夜一緒にどうだい？　こう見えても、夜の奉仕は得意なんだけども」

得物を狙う爬虫類のような目だった。絶対についていきたくないタイプの女だ。絶世の美女と呼んでも問題はないはずのその外見の上にへばりつく奇妙な笑顔、そしてこの視線……。絶対にモテないだろうなあ、とか思う。

リリアは何のことだか判らないのかきょとんとしているし、アクセルはもう話を聞き流しているのか、あさつての方向を眺めながら腕を組んで俺に背を向けている。この薄情者……。

「そんなに脅えないでくれよ……傷つくじゃあないか。大丈夫、ボクは総受けだからね。苛められるのとか、好きなのさ。君はどちらかと言うと、苛める方が好きそうだし……ねえ？」

リリアに視線を向けるアイオーン。なんだか今までの俺とリリアのやり取りを全て見透かされていたような気がして気分が悪くなった。思わず睨み返すと、アイオーンは頬を朱に染め腫を返す。

「フられてしまったようだね。それでは今日は挨拶までで……。そうそう、一つだけ忠告しておくよ」

「……何だ？」

「ゲルトには気をつけたほうがいいよ。君にとって彼女は恐らく……フフ、これ以上知りたかったら、今晚……」

「いかなーからっ!!」

肩を竦め、アイオーンは立ち去って言った。数歩歩いたその背中がまるで闇に解けるように消え去った瞬間、俺達は目を丸くした。アクセルは見慣れているのか眉を潜めて腕を組んでいたが、一体どういう関係なのか。

「ナツル、悪い事は言わないからアイオーンのいう事は真に受けないほうがいいぞ。あいつの台詞九割冗談だと思ったほうがいい」

伝説のバターかよ。

何だかわからないがどっと疲れた。今日はもう帰って眠りたい……。溜息を漏らして振り返ると、リリアがじいっと俺を見つめていた。

何事なのか、どうも先ほどのやり取りでリリアは不機嫌になったらしい。ほつぺたを膨らませながら踵を返すと俺たちを置いてずんずん歩いていく。

「お、おい……リリアさん？」

「……焼餅焼いたんじゃないの？ お前がアイオンにデレデレすっから」

「あれにデレデレするのはちょっと上級者だろ……。待てよりリア！ おいつー！」

リリアを追いかけ、三人で帰宅した……。つて、んん！？ 三人！？ 同時に振り返る。そういえば……医務室にクロ口置きっぱじゃねえか？

結局こうしてこの日はクロ口の回収に全員で戻り、ぐったりしたまま帰宅した。クロ口はとりあえずはリリアの部屋に寝泊りする事になったようで、俺はうさを肩に乗せて家に帰った。

家……寮がもう自分の部屋であるような気がしてきたのだから不思議なものだ。ベッドの上に寝転がり、深く息をつく。

とりあえずさっさと眠る事にした。もうこれ以上、今日は余計な事が起きませんように……。そう祈りながら。

そんなこんなで翌日。朝早く、寝ぼけたままで俺はリリアと一緒に学園の周りを走っていた。

リリアと俺はあれからも毎日のように特訓を行っていた。俺がこちらの世界に本格的に居座り初めてから、朝登校前にもちよつとした修行というか、トレーニングをするようになっていた。

俺は昔から朝はランニングしていたので問題ないのだが、リリアは

今にも死にそうな顔でぐったりしながら走っている。お陰でこつちまでスローペースになり、なかなかただの朝練習が終わらない。

「はあ、はあ……っ！ し、師匠……っ！ 早い……ですっ！」

「お前が遅すぎなんだよ…… 本当に基礎体力の無いヤツだな」

リリアを坂の上で待ちながら自分の体の調子を確認する。昨日の魔力解放ってやつの影響か、全身に奇妙な気だるさを感じる。何となく疲れが抜け切っていないような、不思議な感覚だ。

ナナシ曰く、慣れない極端な魔力解放は肉体に大きな負担をかけるらしい。生命エネルギーそのものである魔力を大規模に放出するにはそれなりの訓練を積みねばならないそうだ。それを行き成りドカんとやったものだから、どうにも具合がよくない。

流れる汗の量もいつもより多く、いくら水を飲んでも水分が抜け落ちて行く…… そんな気がする。呼吸が乱れるほどではない物の、いつまでも続くとなると少々辛い物があるな……。

「はあ、ふう……っ。師匠、どうしたんですか？ 珍しく親切にリリアを待っててくれたですか？ いつもはぶつちぎって先に帰っちゃうのに……」

「お前が遅いからだろ」

ちなみに俺は寝起きの機嫌が結構悪い。ちんたら走っているリリアを見ているとイライラしてきて全力でぶち抜いて部屋に帰って二度寝することはよくある。

リリアは俺の目の前で汗をタオルで拭いながら上目遣いに俺を見る。何か言いたい事があるのかと思いい腕を組んで首をかしげると、リリアは目を丸くして俺に言った。

「なんか、師匠……昨日の魔力解放から、雰囲気変わりました?」

その質問は意外だった。少なくとも自分で変わったような気はしていない。実際今は二重の封印で力は抑えこまれているはずだし、力を使おうとは今も思っていない。

それでも変わったものがあるとすれば、この世界に対する態度だろうか。流石にもう、どうでもいいとは思わない。せめてリリアくらいは、しっかり面倒を見てやらなければならないと思っている。

俺のそういう、リリアへの心境の変化を悟られたのだろうか。人の心に敏感な優しい少女は、恐らく俺のそんな些細な迷いやらなにも感じ取ってしまうのだろう。俺は適当に言葉を濁し、背を向けた。

「でも、師匠はやっぱりすごいです。いつも自信たっぷりで、しっかりしてて……。リリア、一目見た時から只者じゃないと思ってたですけど、やっぱり師匠はすごい人でした」

「そんな事はないよ。適当だし、自信もない……。ただ、熱くなりやすいだけだと思う」

「そうですか?　じゃあ、そういうことにします」

「そういうことにしといてくれ」

二人してくだらない事を言って笑いあう。その時自分の中でリリアの姿と冬香の姿がダブったような気がした。

何故なのか?　台詞回しが全く同じだったのである。リリアの笑顔と、俺に対する期待や信頼の瞳……。そして少しだけおどけるようなその口調が、嘗て自分で見捨てた妹のそれに良く似ていたから。

分かってた事だ。俺はこの世界に来て、リリアを見た瞬間から冬香の姿を重ねていた。自分でも気づいている。それに気づかないように、一生懸命目を反らしているんだって事も。

彼女が願って作った世界の中で、彼女に願われて主人公として存在するリリア。その存在には恐らく彼女の想いが、願いが、俺に伝えられなかった沢山のものが今も色褪せる事無く生きている。

リリアに肩入れする理由は、自分で探す必要も無い。彼女がメリーベルとの戦いで傷ついているのを見て、俺が割って入りたくなったのも……全ては彼女にリリアが似ていたから。

ドジで、ぼけぼけとしてて、いつも誰かにかかわれていた冬香。そんなあいつを守るために割ってはいるのは、俺にとっては当然の事だった。一分一秒だって見ていたくはなかった。あの子の泣いている顔は。

「師匠？ 急に黙り込んで……どうしちゃったんですか？」

「あ、いや……なんでもないよ。それよりいつまで休んでいるつもりだ？ もっともつと体力つけて、強くならんかな」

「はいっ！ でも師匠、ちょっと具合悪そうですよ？ リリア一人でもちゃんとサボらず走るから、師匠はもう帰って休んでください。それじゃっ！」

リリアは俺に手を振り走っていく。生真面目なあいつのことだ、俺が何も言わずともちゃんとトレーニングメニューをこなすんだろう。俺がこの世界にいらなくても、あいつは俺の言葉を信じて毎朝走る……。冬香もきつとそうだった。俺が居なくなっただ後も、俺の言葉を信じて……。

余計な事を考えすぎた。急激にこの世界にいてはいけないような気がしてくる。ここは、あの子が願った夢の欠片……。俺の居るべき

場所じゃないと。

口元に手をあて、思案する。肩の上のうさぎが道端に飛び降り、長身の男の姿に変身して振り返った。

「どうかしましたか？ 魔力解放の影響、そこまで大きかったのでしょうかね？」

「そうじゃねえよ。ただ……」

「ただ？」

「いや……俺はリリアにとって必要な存在なのかなって、ちょっと思ってたな」

YESでもNOでも、辛い答えになる事だっただけ。

リリアが俺を必要としないというのなら、俺はこの世界に……冬香の世界に干渉する権利を失ってしまう。

だがどうだ？ リリアが本当に俺の存在を必要だと思うようになった時……俺はあの子を裏切る事になる。この世界に俺は、永遠には存在できないのだから。

先の見えていない未来に囚われて考え込むのはよくない傾向だ。だが俺にだって迷う事くらいある。いつまでもゲーム感覚で居られないのなら、それなりの覚悟を決めなければならない。

「そうそう、ナツル様。原書の方ですが」

差し出された原書を開いて俺は眉間に皺を寄せる。そう、そこにはいよいよ持つて最悪の状況が映し出されていた。

「どういう事だよ、こりゃ」

「それを確かめるのが、貴方の役割でしょう？ 救世主ナツル様」

舌打ちして俺は原書を閉じる。時間がないのかもしれない。今はそんな気配は見えなくとも……。

原書に映し出されていた一つの絵。俺にはそれが、リアが剣で貫かれ命を落としているようにしか見えなかった。

学園の日（2）

学園闘技場は激しい熱気に包まれていた。

リリアとメリーベルが対決した試合とは質も格も人気も異なる。ランキング上位に存在する生徒同士の決闘は、最早一種の見世物としては至高でさえある。

娯楽の少ないこの世界において、世界の安寧を司る聖クイリアダリア王国の未来を守る戦士たちの活躍を見るのは、国民に安心さえも与えてくれる。

その最高のステージの上に立ち、ライトアップされた世界でゲルト・シュヴァインは大剣を片手に登場する。漆黒の勇者の外装に漆黒の魔剣フレグランスを胸の前に掲げ、騎士のように瞳を閉じる。

声援と共にゲルトの名前が叫ばれた。ただの学園の生徒でしかないはずのゲルト・シュヴァインの人気は想像を絶する。多数のファンが存在し、スポンサーが彼女を経済的に援助さえしている。雑誌のグラビアにはゲルトの勇士が飾られ、学園の案内書にさえゲルトの顔は広く載っている。

若干十五歳にして大人顔負けの気高さと圧倒的な戦闘力で他の追随を許さない人気ナンバーワン『勇者』、ゲルト・シュヴァイン。少女は瞳を閉じたまま、対戦相手に言葉を投げかける。

「貴方と対戦するのは二度目でしたか？ アクセル・スキッド」

瞳を開いたゲルトの視界に移りこむ、金髪の少年。腰に提げた二対のサーベルを美しい動作で抜き、指先で回転させたそれを構えた。

「覚えていてくれたとは光荣じゃねえか。お前、挑戦者数多でもう顔なんか一々覚えてないもんだと思ってたが」

「自分で斬って自分で倒した相手の顔は忘れませんよ。いかに相手が無様でも、どんなに弱くとも」

刃を揮うと大地が啼いた。ぴりぴりと、肌を突き刺すような鋭利に尖った攻撃的な魔力を肌で感じながらアクセルは真剣な顔つきで姿勢を低く構える。

「戦う前に、一つだけ訊いていいですか？」

「あん？　なんだ？」

「何故リリアではなく、貴方がわたしに挑むのですか？　アクセル・スキッド」

ゲルトにとってそれは望まない戦いだった。今までの彼女ならば、以下に望まぬ戦いとも言えども己が高い場所に立ち続けるためならば躊躇わずに切り伏せて来ただろう。

しかしアクセルは違う。元来戦いを好むような性格ではなく、勝ち目の無い自分に挑んでくるような男でもない。そんな彼に目的があるとしたら、それはたった一つだけ。

「リリア・ライトフィールド……ですか？」

「戦う前からそんな余計な事を考えているとは、嘗められたもんだな」

アクセルが正面で十字に構えた刃の合間、鋭い眼光がゲルトを射抜く。普段の彼を知る人物でもその姿は想像が及ばないだろう。きちんとした敵意と覚悟を秘めた、己の実力を過小評価も過大評価もしない、冷静な眼差し。ゲルトは一瞬その気配に気圧されてしまった。

「理由何てどうだっていいだろ？ 同じ舞台に立った以上、油断されたら即斬るぜ」

「……嘗めているのはどっちだ、剣士風情が」

齒軋りするゲルトの全身から溢れ出す漆黒の魔力。それは会場にいる観客たちさえ圧倒するほど膨大な力だった。

振り下ろした刃が轟音と共にアクセルを吹き飛ばすほどの風を巻き起こす。その暴風の中、しかし二人は距離を離すことはない。

「わたしはリリアのように甘くはありませんよ。仇成す存在は叩き斬って捻じ伏せる……。我が道の糧となりなさい、無名の剣士」

「まるで殺すみたいな言い方だな。ま それはこっちも同意するけどよ」

手加減して勝てるような相手ではない。それはお互い様だった。二人が刃を交える理由。それは今より数日前に遡る。

学園の日（２）

「あのおう、師匠だったらもしかしてゲルトさんに勝てたりしないですかねえ？」

リリアの突然の言葉に俺達は全員食事の手を止めた。

ディアノイア校内に存在する学生食堂。俺、アクセル、リリアの三人は授業の合間に集まり、食事を共にしていた。俺もディアノイア

での授業を受けるようになって数日経過したが、ここの所特にこれといって何も異常事態は発生していなかった。つまりなんの前フリもなく、いきなりリリアがそんな事を言うものだから、会話が完全に停止してしまったのである。

俺とアクセルが顔を見合わせているのを見てリリアは慌てた様子で苦笑を浮かべた。アクセルが一気に水を飲み干し、返答する。

「そりゃ、結構いい線行くと俺は思っけどさ」

「マジか……？ アクセル、ゲルト・シュヴァインの試合見た事あるのかよ？ 恐ろしい強さだったぞ」

自分より随分と巨大な体格の相手でさえ、片手で振った大剣で吹き飛ばすパワー。華奢な見た目通り、軽やかな動き。見る者に美しさすら覚えさせるゲルトの戦いは、強さで言えば相当なものだと俺にだってわかった。

しかしアクセルは当たり前のようにパンを口に放り込みながら、あっけらかんと白状した。

「見た事っつーか、戦った事あるぞ。一回だけだけど」

「「え？」」

俺とリリアの声が重なった。アクセルは俺たちが驚いているのを見て冷や汗を流しながら後退する。

「な、なんだよ……？ 二人ともそんなじろじろ見んなって」

「アクセル君、嘘はだめですよ？ ゲルトさんはトップランカーですよ？ 戦えるのは順位誤差が十位以内じゃないとですし……」

「だから、十位以内だったんだってば。俺今は十八位だぞ？ まあ下がっちまったけどさ……」

「え？」

俺とリリアの言葉が再び重なる。いや、ちょっとまで。アクセル……どうしてそんな平然と嘘をつくんだ。そんなに当たり前みたいに言われたら、まるで本当の事みたいじゃないか。

パンを食べ終え、アクセルは再び水を飲み干した。俺が哀れみの視線を……リリアは悲しそうな表情を浮かべているのを見ていよいよ自分が信じられていない事に気づいたらしく、慌てて立ち上がった。

「マジだつてマジ！！ なんなら受付で確認してこいって！！ なんだよナツル、可哀想だなあゝみたいな目で見んなよ！？ そしてリリアちゃんは俺を今見損なつただろ！？ 嘘ついてないからなつ！！」

「アクセル、いくらなんでもそう都合よくはないだろう。八百人以上登録されてるランキングで十八位って、お前かなり強い事になつちゃうだろうが」

「そうですよ。アクセル君みたいに元気のいい人が強いわけないですよ」

「……………泣いていい？ 俺泣いていい？ ちょっといいから来て……………。ランキング登録表見せるから……………いいから来て……………」

涙目になっているアクセルに半ば強引に引き摺られ受付へ急ぐ。そこでランキング順位を確認したところ、本当にアクセル・スキッド

は現在十八位だった。

俺とリリアは完全に停止していた。十八位？　どういうことだ？
何でそんなにアクセルが強いんだ？　見た目こんなのなのに、強いのか……？

「ほら、だから言っただろ？　何で信じねえかなあ……。俺ってそんな弱そうに見える？」

「弱そうではないが、決して強そうにも見えない！」

「うん、うん！」

アクセルはその場に膝を着いて落ち込んでいた。特に惚れている女の子であるリリアが力いっぱい俺の言葉を肯定したのが堪えたに違いない。

何はともあれすごい事実が発覚してしまった。いや、そういわれてみるともしかしてアクセルは凄いやつなのかもしれない。中庭に大穴を空けてしまった俺の魔力解放をたかだか1メートルくらいの距離で直撃したにも関わらず、五体満足で今平然とここに立っているわけだし……。

今思えばアイオンと顔見知りだったのも、同じく学園の実力者だったからなのかもしれない。頭の後ろで手を組み、アクセルは俺たちを笑いながら見つめていた。

「まあ、別にいいけどよ。アイオンやらゲルトやらは別格だからな。俺じゃ勝ち目ねえし」

「でも凄いよアクセル君！　バイトばかりしててちょっと学業おろそかになっちゃってる人かと思ってたけど、意外とちゃんと頑張ってたんですね！」

「ああ、正直見直した。もっとバカだと思ってた。いや、バカはバカなのか」

「お、おいおい……急に褒められると何か気持ち悪いな。つか君たち、それ俺の事馬鹿にしてます……？」

アクセルとリリアはなにやら漫才のような会話を繰り返している。しかし、それだけの力の持ち主であるアクセルが言うのだから、本当に俺ならゲルトに勝てるのかもしれない。

「それで、結局どうだ？」

「ん？ 何がだ？」

「俺はゲルトに勝てるのか？」

真顔で発言したのがまずかった。二人は面を食らったような表情を浮かべる。リリアも恐らくちよっと思っただけで、アクセルもそうだったのだろう。そこに俺が真顔で食いつけば、まあこういうリアクションになるだろうな。

リリアは慌てた、しかしちよっとワクワクした表情でアクセルを見上げる。しかし当のアクセルは歯切れの悪い態度で腕を組んだ。

「いやな、魔力総量なら明らかにナツルの方が上……つか、そもそもお前ほどの絶対量を持つてる奴は学園長くらいのもんだと思うけど。ただ、戦うとなると魔力総量だけが全てじゃないしな」

ゲルト・シュヴァインの強さの秘密はその技術力にある。

魔法を練り上げ、放つ。剣を振り上げ、振り下ろす……。単純な一

一つの動作が全て高い錬度で行われ、限りなく精密に攻撃を仕掛けてくる。例え反撃を受けても、それもまた正確に回避し、きつちりとカウンターを合わせてくるらしい。

ゲルトの性格を具現化したかのような真面目な、そして限りなく無駄の無いバトルスタイル。それに付け加え高い魔力と強力な装備を充実させているのだから、強くて当然だと言える。

「ゲルトが強いのは血筋だとも思うけど、まあ兎に角あいつは普通じゃないよ。戦いに対する心構えがハンパじゃねえんだ」

己に課した目標は死んでも果たす。一度勝つと決めたら死んでも勝つ。勝つまで何度でも戦う。何度でも何度でも、何度でも立ち上がる。

ゲルトとて最初から強かったわけではない。中の上程度の力しか持っていなかったゲルトは、たった数ヶ月で恐ろしい上達を見せた。負けても絶対に諦めない。勝利に対する異常とも言える執着心が、ゲルトに孤高の道を歩ませている。

仲間には要らない。救いの手も哀れみの声も要らない。ただただ強く、強く在る為に……その為に出来る百万の努力を怠らない。そんな人間なのである。

「まさに鋼の乙女だよ、ありや。女だと思わん方がいい。つか、勝っちゃったら勝っちゃったで大変だぞ？ あいつ、一度自分に勝った相手は執拗に追い回して勝てるまで挑んでくるからな。超がつかほどの負けず嫌い……プライド高いんだよ、ゲルトは」

確かに、何となくそんな雰囲気だった。他人を寄せ付ける事を良しとしない、絶対的な孤立に対する姿勢……。リリアが憧れるのも分かる。へっばこなこいつにとって、ゲルトの強さはまさに正反対。思い描く彼女にとっての理想像に近いのだろう。

「まー、今のナツルとゲルトがバトったら十中八九ゲルトが勝つだろうな。というわけで、ゲルトはマジでよしとけ。俺は授業あっから、もう行くぞー」

「ああ。悪かったな、長々と説明させて」

アクセルはひらひらと手を振って去って行った。何だかんだで気のいい奴なのだが、もしかしたら俺達はかなり心強い人物を味方につけられたのかもしれない。

振り返るとリリアはなにやら考え事をしているようだった。肩を叩くと、少し戸惑った笑顔を俺に向ける。

「ゲルト・シュヴァインに勝つ、かあ……。何だか凄く凄く遠い目標……。ですよね」

自分で提案してしまったのだから仕方が無い。が、撤回するつもりもない。少しでも寂しげな笑顔を浮かべるリリアの事が気になったが、とりあえずその場は解散と相成った。

アクセルはバイトで居なくなり、俺とリリアは特訓を初める夕方頃。相変わらず浮かない表情のリリアと校門の前で待ち合わせた。

俺を氣遣ってか、リリアは元氣良く歩き出そうとする。その頭の上にポンと手を乗せ俺は溜息を漏らした。

「ほえ？ 師匠、どうしたですか？」

「今日の特訓は中止だ！」

「……ほえ？」

リリアの頭をわしわし撫でる。きょとんとしているリリアの手を取り、俺は強引に歩き出した。

「し、師匠……？ なつるさーん？ どこに行くんですかー？」

「公園だ。実は前々からお前と二人きりで話がしたかったんだよ」

「へっ！？ それってどういう意味ですか！？ なな、なななな、なつるさ……こっ、心の準備がですねえっ！？」

なんだか背後で喚いているリリアを無視して移動した。前々から公園の存在には気づいていたが、なんだかんだで慌しくゆっくり来る事はなかった。

街の中に急にポツカリと空いた広いスペースに木々が立ち並んでいる。隅にあるベンチの上に腰掛け、噴水を眺めながら一息ついた。リリアは隣に座ってなにやらもじもじしていたが、なんだかよく判らないので気にしない事にした。暖かい日差しが差し込み、木漏れ日が揺れる。木々の囁く声に耳を傾けながら俺は話を切り出す事にした。

「リリアは、どうして勇者になったんだ？」

俺の質問にリリアが少しだけ戸惑うのがわかった。多分そのあたりは、彼女にとって容易に他人に踏み込まれない部分だと分かっていたから。

俯き加減になりながら、答えづらそうに指先を絡めるリリア。俺は焦らずに言葉を待つ事にした。何となく、わかるのだ。こういう時、冬香なら 自分の気持ちを纏めるのに、少しばかり時間がかかるはずだから。

「その……どうして、って言われると、難しいんですけど……あのう」

「ああ」

「リリアのお父さんが……その、『白の勇者』っていう人だったんです」

かつてこの世界では大きな戦争があった。

今は聖クイリアダリア王国という一つの国に統一されているものの、それ以前にはこの国の領土の半分はザックブルム帝国という国が収めていたと言う。

ザックブルムの帝王は『魔王』とまで呼ばれた残虐非道な人物で、近隣諸国を次々に攻め落として行った。それら近隣諸国を取りまとめ、魔王の軍勢とまで呼ばれたザックブルムに挑んだのが、当時はまだ辺境の小国に過ぎなかったクイリアダリアだったらしい。

そのクイリアダリアの聖騎士団を率い、仲間たちと共に魔王に挑んだのがリリアの父親とその仲間たち。つまり、勇者様ご一行、というわけである。

『白の勇者』『光の戦士』『聖騎士の刃』。リリアの父親、フエイト・ライトフィールドは様々な呼び名を持つ聖騎士団最強の騎士だった。魔王に挑み、そしてその巨大な軍勢を破ったフエイトは、いつしか人々に勇者と呼ばれ称えられるようになった。

その勇者の一人娘がこの冴えない少女、リリア・ライトフィールドなのである。つまり勇者の座は、娘に引き継がれたという事だ。

元々、勇者という職業は厳密には存在しない。彼女は戦士であり、騎士に過ぎないのだ。ただしこの英雄学園ディアノイアを囲む要塞都市では話が違ってくる。シャングリラはいつかまた世界を大きな脅威が襲った時、それに立ち向かう為の力を育成する場所なのである。

勇者は願わくばそうした生徒たち　未来の世界を守る英雄たちを導く存在であり、その模範で在ってほしいとの願いを込められ国より継承されたもの。つまりそこにリリアの思う余地など、わずかばかりも存在しないのである。

「お父さんは、魔王と相打ちになって死んだそうです。その時リリア、五歳だったんですよ。お父さんの顔なんて全然覚えてなくて……ああ、勇者ってそういうものなんだなって思ったんです」

人々に称えられた誇り高い存在である勇者、フェイト。しかし彼はきつと父親らしい事は娘に何もしてやれなかったのだろう。

リリアは死んでしまった父親と勇者と言う役職を好きになれなかった。そうして今も好きになれないまま、時間が過ぎてしまっている。

「お母さんは、お父さんより先に死んじゃったそうです。お父さんはお母さんが死にそうな時にも、帰ってこなかったんです。勇者が偉いって言う事もわかります。そういうのわかりますけど、でもそれじゃあ……何を守るために勇者になったのか」

リリアはベンチの上で膝を抱えていた。その瞳には普段の明るさからは想像も出来ないほどの薄暗い苦悩の色が見えた。時々リリアが見せる悲しげな瞳は、恐らく彼女にとって乗り越えられない過去に起因しているのだろう。

「周りの人はみんな、リリアは勇者になる才能があるって言います。リリア、おじいちゃんに育てられたんですけど……おじいちゃんは勇者なんてなくてもいいって言ってくれました。でも皆がなれっていつて、学園から何回も案内の人が来て、助成金を出してくれらるって……。おじいちゃん漁師で、でももう歳だから無理してほしくなくて……」

「……じゃあお前は、勇者になんて成りたくないのに、じいさんの為になつたって事か」

俺の言葉にリリアは背筋を縮こまらせる。怒られる　そう思ったのだろ。怯えた視線で俺を見上げては、今にも泣き出しそうに瞳を震わせる。

しかし俺はそんなリリアを責めなかった。彼女の気持ちは……俺には痛いほど良くわかった。分かりすぎるから、だから……そこで何も言えなくなつた。

「……そうか」

何一つ気の利いた言葉さえ言えなかった。あの日、冬香と別れた時のように。結局は俺も怖いのだろうか。壊れ物のような、他人の心に触れるのが。

しばらく噴水の音だけが世界を支配していた。俺たちの間にあった関わりは表面上だけで、こうしてお互いの気持ちを話し合う事は一度もなかった。だからいつでも笑っていられた。でもこうして蓋を開けてみれば、何の事は無い。リリアは俺に脅えていて、俺は彼女に何もしてやれない。それが、俺の現実　。

「……怒らないんですか？」

俺はこの間中途半端なことをするなとリリアを叱ったばかりだった。とすれば、俺がここで怒ったとしても不自然ではない。

ただ俺はそんな気持ちにはなれなかった。それは多分、リリアの優しさだから。学園都市　ここでは戦う事を目的とした生徒を教育している。熾烈な競争の現場で、こういう性格の奴は取り残されるんだ。他人を蹴落とせず、傷付けられないから。

俺は黙って手を振り上げた。叩かれると思ったのか、リリアは目をぎゅゅと瞑って頭を下げた。しかし俺は振り上げた手でリリアの頭を出来る限り優しく撫でる事にした。

「そんなビビンなつて。俺は別に、お前の親でも先生でもないんだからさ」

「……なつるさん」

「勘違いするなよ。別にお前を責めるつもりじゃないんだ。ただ……知っておきたかっただけで」

リリアが日々に脅えている理由や、ゲルトに憧れる理由。

彼女を『立派な勇者にしなければならぬ』という俺の目的の本質。ただ、強くなる事が彼女にとっての善ではない。だからといって、この少女を俺にどう変えろというのか。

それは過去に自分に出来なかった事を今やれといわれているような気がしてならなかった。俺が救えなかった冬香の代わりに、この子を救って見せろと。冬香が俺に言っているような気がして、胸が痛んだ。

あいつがこんな主人公を用意したのは、俺を苦しめる為……？ 確かに俺はそれだけの事をした。一生その罪を背負って生きていかなければならない。だからここで諦めるわけにはいかないんだ。リリアを救う事は、自分の過去を乗り越える事でもあるのだから。

「別に、いいんじゃないか」

「え？」

「別に……誰もが望むような、勇者にならなくても。お前が望む、

お前のなりたい勇者に……そういう物に成ればいいんだよ」

リリアは目を丸くしていた。それから少しだけ嬉しそうに微笑むと、小さく頷いた。

無理してガンバレなんて言えない。俺に出来るのは、この子が望む『理想の勇者』……その姿に近づけるように、応援してあげることだけのだから。

「リリアのなりたい勇者、かあ……。えへへ、そんなの考えた事も無かったです」

「そうか？ お前は父親の『勇者』に拘りすぎだろう。別に、人によつて違う、お前にはお前の勇者があつてもいいんじゃないか」

「そうですよね。そうですよね……うん。えへへ、そうですよね」

リリアが笑う。重苦しかった空気が払拭され、ようやく人心地ついた気分だった。

「リリアがなりたい勇者とはちょっと違うけど、ゲルトさんは心から尊敬してるんです。ゲルトさんのお父さんも、勇者だったんですよ？」

「そうなのか？」

白の勇者フェイトと黒の勇者ゲイン。二人は聖騎士団での相棒だった。

二人は類まれなる才能で魔王を打ち負かした大英雄。しかしゲインもまた命を落としている。

「リリアと同じ境遇なのに、どうしてゲルトさんはあんなに頑張れるんだろって、いつも思うんです。リリアはこんなダメで、へなへなで、部屋の隅っこで膝を抱えて泣いてたのに、ゲルトさんはその間に強くなる為に頑張ってた。それってすごくすごく、すごく大変な事だと思うんです。だから、ゲルトさんのことがリリアは大好きなんです。同じ勇者なのに、あそこまで立派で……あ、すいません、なんか一気に喋っちゃって」

慌てるリリア。リリアがここまで饒舌なのはいつもゲルトの事を話す時だな。苦笑を浮かべながら相槌を打つ。リリアは一所懸命、ゲルトが以下に凄いのかを身振り手振り説明してくれた。同じ境遇、同じ痛みを背負うリリアとゲルト。しかしその二人の間にある壁は、限りなく巨大だ。しかしそこで少々疑問が生まれる。

「それにしてもお前たち一緒に行動してないんだな」

父親同士が仲間でその役割を引き継いだ二人の勇者なら、仲良く切磋琢磨しているのが普通のような気がするのだが。

リリアは俺の言葉に苦笑を浮かべる。そうしてそれから何とも言えない寂しげな口調で、ゆっくりと想いを言葉にした。

「ゲルト、さんは……。遠すぎて、近づけないんです。見ているだけで、いいんです。リリアはあんなふうにかっこ良くなれないから……だから」

「なれるさ」

リリアの肩を強く叩き、同意を求める。

「っーか、なるんだよ。そうだよ？」

リリアは照れくさそうに頬を朱に染めながら、小さくこくりと頷いた。

だが俺は逆にわからなくなっていた。リリアはゲルトを心の底から尊敬している。

だったらどうしてなのだろう。

原書に記された近い未来、リリアを殺そうとしているのがゲルトにしか見えないのは。

リリアは少しだけ気持ちがすっきりしたのが、元気良く立ち上がった。俺はその背中に不安を覚えながらも、普段通りのトレーニングメニューをこなすことにした。

学園の日（3）

勇者なんて、嫌いだ。

勇者なんて、大嫌いだ。

勇者なんて、ならなければ良かったのに。

勇者って言葉が、パパを殺したんだ。

「……………」

眠りにつけば、何度でも繰り返し見る夢。

自分自身の幼き日の姿が呪いのように心と身体に染み付いては今の自分を責め立てる。

ゲルト・シュヴァインは寮の自室で目を覚ました。夜明けはまだ遠く、窓の向こうは夜の闇に包まれている。

暗闇の中で立ち上がり、グラスに水を汲んで飲み干した。寝巻きは汗で濡れ、気持ちの悪い感触に布地を指先で摘む。

「忌々しい」

瞳をきつく瞑る。額に当てたグラスは苛立つ思考を冷たくやわらげてくれる気がした。

もう何年も見なくなっただと思っていた。強く、ただ強くなる為に、その為に出来る全てを犠牲にしてきた。

人間らしい人生など勇者には必要ない。人々の墓標となる剣を背負い、延々と荒野を歩き続け朽ち果てるのが勇者の本質ならば、自身はそれに従うつもりもない。

ただ過去の記憶が、思い出が、あの日願った想いが、未だに脳裏にちらついては正常な思考を妨げるのだ。

「どうして……」

何故、今になってわたしの前に姿を現すのか。

誰も助けてくれないこの世界の中で、何故今更。今更なのか。

リリアはきつと覚えていない。そう思い返す度、彼女に対する憎しみと苛立ちは精神を苛んで行く。

願っても夢も希望も忘れられて消えて行くのならば、全て忘れ去れて欲しい。せめて、優しくった記憶のままで。

遠い夜明けを待つ間、ゲルトはベッドの上に腰掛け、額に手を当て過去に想いを馳せていた。

学園の日（3）

「必殺技、ですか？」

戦いに勝利する為に必要なものは何か。そんな雑談から始まり、結論的に導き出された答えが『必殺技』だった。

休日、学園が休みなので俺とアクセルはリリアの部屋を訪れていた。すっかりリリア御付の執事になってしまったクロロが片手でお茶を運んでくる。

ティーカップを受け取ると、中身は緑茶だった。何故緑茶……色々突っ込みどころはあるが慣れた飲み物だし普通に飲み干したが、アクセルはかなり戸惑っていた。

リリアは湯飲みでお茶を飲みながら目をぱちくりさせている。必殺技なんてそんな事を言われても、俺だってよく判らない。

「そうそう、必殺技。まあ基本的な能力の向上は必要だけども。」

当たれば必ず殺す技』……一発逆転の切り札だろ？　一つくらいそういうのが無いと、やっぱり強くはなれないかな」

クッキーを齧りながらそんな事を言うアクセル。必殺技……急激に胡散臭い話になってきた。どうすれば今よりリリアが強くなれるのかという話をしていたはずなのだが、この流れで行くとリリアに必殺技を覚えさせるということなのだろうか。

「えと、例えばどういのですか？」

「例えばそうだなー……。目からビームを出す、とか。リリアビイイイイツムー！　みたいな」

「リリアビームですかっ！？」

それはないだろう。というか、リリアが目からビームを出したらそれはそれで面白そうだけど……。

「まあ冗談はさておき、必殺の魔法とか必殺の剣技、って所か。俺にだって必殺技の一つや二つ、あるぞ？」

「そ、それはどうやって編み出したんですか……？」

「……そこからか。自分の得意な魔術性質を理解していれば、結構普通に見つかるもんだぞ。えーと、紙とペン取ってくれ」

アクセルが紙に書いたのは何かの図だった。アクセル曰く、人には必ず一つ適正魔術属性、というものが存在するらしい。

魔術属性は幾つか存在し、それぞれに得手不得手がある。それは本人が放出する魔力解放時の光の色で大まかに判断出来るんだとか。

「俺は緑だったろ？　ありや風属性。ゲルトは黒で闇属性……。ナツルは確か金色だったから、雷属性だな」

適正属性は生まれ持つて決まるものであり、一生変わる事はない。これらは遺伝などによるものが普通で、魔術師の家系などでは全員が同じ属性の魔法を一子相伝で受け継いでいたりする。

アクセルが書いた円形の図にはそれぞれの属性の名前が記されていた。火、水、風、地、雷、光、闇……七つの属性が円を作る。その中心に遅れ、アクセルは虚という文字を書き記した。

「全部で属性は七つ。まあ、そんな苦勞して覚えるようなもんじゃないから、自分の属性と何が相性がいいのかだけ覚えておけばいい。この表で自分の属性に隣接している物ほど適性が高く、円の反対側にある物ほど適性が低い。俺の風は隣接する『闇』『地』とはそこそこ相性がいいから技や魔法も習得し易いが、正反対の性質を持つ雷はまず会得できない」

「つまり、自分が持つ属性で既にある程度使いこなせる能力は変わってくるわけか」

俺が雷だとすると、相性がいいのは光と水……。逆にアクセルの風は難しいという事になる。が、これはあくまで分かりやすく表現するのならば、というものであり、基本的には己の属性が最も効力を発揮しやすいらしい。

リリアは流石にそれは聞いていたらしい。俺も授業で少し齧った事くらいはあるが、具体的に属性がどうこうとまで考える地点まで行っていないしな、俺。

「ちなみに属性は性格にも関わるってのは結構有名な噂話だぜ？

リリアちゃんの光属性は、いい子ちゃんが多い。優しく親切だが正義感が強く、負けず嫌い」

「うぐっ」

「ナツルは雷だったか？ 捻くれ者で他人と距離を置きがち。口が滑って人を傷つけやすい」

「……………」

「俺は風属性。気ままな性格で物事に囚われない。しかし、物事が長続きしない……色々あるけど結構思い当たるところあるだろ？」

こうしてアクセル先生の楽しい属性授業は続いた。しかし、これが必殺技とどう関係してくるというのだろうか。

「とりあえずリリアちゃん、魔力解放してみてよ」

「は、はい」

頷いたリリアがその場で魔力解放を行う。じわりと滲み出す白い光……リリアは光属性だとアクセルが言っていた気がする。しかしその光はすぐに消えてしまった。リリアはそれだけで精一杯だったのか、球のような汗を額に浮かべ、グッタリした様子で溜息を漏らしていた。

「も、もう無理です……はふう」

こうしてみると自分が以下にハデに解放していたのか良くわかるが、それにしただってリリアは体力が無さ過ぎるだろう。

「まあ、とりあえずはそれでいいけどさ。『必殺技』のポイントは二つ。『必ず当たる事』と『必ず倒せる事』だ」

魔法や技にはいくつもの特性がある。そうしたものは自分の属性や得意な動作によって往々にして個人で編み出していくものらしい。勿論授業やらなにやらで学ぶ事もあるが、剣術も魔術も基本一子相伝。特にこの学園では親から受け継いだ能力特性や技術がそのまま反映されているタイプの生徒が多い。

そんな数々の魔法や技の中には強力なものも貧弱なものも存在する。当たりやすいかどうか、そこも問題だ。必殺技とは出せば必ず倒せる技。つまり条件は必ず当たって必ず倒せる技であるという事。それが最低ラインなのだ。

「例えばまず相手の動きを止める魔法を使った後に、相手を一発で倒せる火力の術を発動したりな。要は組み合わせだから、オリジナル必殺技を開発するのはそんな難しくないぜ」

問題点は様々ある。まず、魔力は『放出』すると消費するということ。魔法として外部に打ち出す事により、魔法総量は減っていく。一度尽きてしまった魔力は休むまで戻る事はないが、高威力の魔法を放つには膨大な魔力を消費する。

だから、外れてはいけないのだ。必殺の威力を放出するという事は即ち自らも満身創痍になる事に他ならない。放てば必ず当たって当然、外れたら自らが窮地に立たされる事になる。

「ナツルみたいに総量が鬼畜レベルにあるやつは一度の戦闘で何発も必殺級の一撃を放てるだろうな。けどまあ、リアちゃんや俺みたいに普通のやつは一発で当たらなきゃ困る。だから必殺技を考えるコツは倒しきれずともとりあえず当てる方法、かな」

「ううう……。でも、リリアは回復魔法ヒールングスベル以外使えないんですよ？」

「ん……？ いや、ちよつといいか？ 気になる事があるんだが」

二人の会話に口を挟む。俺の考えが正しければ、『リリアが回復魔法しか使えない』なんて事はあるわけないんだが。

「魔法は一子相伝、技術は一子相伝なんだろ？ お前の家にだって、聖騎士で勇者だった親父の前の代か何かのこう……技の書みたいなのがあるんじゃないのか？」

「へ？ 魔術書……ですか？」

勿論リリアが回復魔法以外練習していないというのなら使えなくて当然だが、授業で習っている魔法を使うより最強だった親父の術を学んだほうがいい気がする。

しかし、リリアは乗り気ではなかった。人差し指を胸の前でつつんと突き合わせながら、歯切れ悪い態度で黙り込む。

そういえばこいつ、親父の勇者の力を嫌ってるんだっけ。いや、でもそんなことを言っている場合じゃないだろう。というかなんか、こいつ魔術書の存在知ってるのにあえて隠してたんじゃないかね……？

「……おい、クロロ？」

「はい？」

「魔術書、どこ？」

「返答します。あちらの棚の右上に」

「わにゃあああ！？ どうして！？ どうして言っちゃうのかなあっ！？ クロロ君、どうしてそうなのかなあっ！？」

クロロを激しく揺さぶるリリアを放置して棚に向かう。そこには白い本が一冊、絵本やら教材に紛れて存在感をアピールしていた。手に取り席に戻り、アクセルと一緒に本を開いた。

「うおおおっ！？ すげえ！！ 伝説の勇者、フェイト・ライトフィールドの使ってた技がこれかあっ！！」

アクセルはこっちの世界の人なので、やはりフェイトの名前は聞き及んでいるらしい。確かに伝説の英雄であるリリアの父フェイトが使っていた本……一子相伝、一族にのみ伝えられる魔術書を目の当たりにすれば興奮もするだろう。

しかしアクセルは何故か直ぐに本を閉じてしまった。そうしてリリアの前に本を置くと、ティーカップを一気に呷った。

「中は見たいけど、魔術書は基本的に一族以外には見せないのが普通だぞ？ リリアちゃん、自分でそれを読み解かないと」

と、アクセルは意外と冷静だった。確かに伝説の勇者が残した本ともなると、見るのも忍びない気がする。

リリアは自らに課せられた勇者という運命の象徴でもある魔術書を手にし、複雑な表情を浮かべていた。まるで救いを求めるように上目遣いに俺を見ては、指先でぐりぐり魔術書を擦っていた。

「リリア」

「はい……」

「お前が本当にその魔術書を使いたくないのなら、俺は別にそれで構わないから」

ティーカップを口につけ、一息つく。リリアは不安そうな顔をしてじっと俺を見ている。

「お前がお前の方法で強くなりたいんなら、別の方法を一緒に考えよう。嫌な事を無理にやる必要はない。嫌な時は、嫌ってハッキリ言っている」

「で、でも……確かにこれ以外に方法がない気も……」

「仕方がなくなるとかで物事を決めようとするな。お前はお前の気持ちに素直に従え。そうでなければ……いつかきつと、後悔する」

「……ううう」

リリアは決めあぐねているようだった。何はともあれ、これはもうリリアの問題だ。こいつがハッキリ『自分はどうしたいのか』という事を見つけ出せない限り、この問題からは先に進めない。

こうして一先ず今日の集まりは終了した。午後からはバイトがあるというアクセルと別れ、クロロの作った昼食を平らげてから俺達は学園に移動した。

学園は休日でも訓練施設としての役割を果たしている。とんでもなく広い中庭では簡単な特訓ならば出来るし、結界で補強されている学園ならば色々と術が暴発したりしても他人に迷惑をかけることもない。いや、それでも庭を破壊してしまったのだから、俺は少し自重しなければならないな。

魔法を使う云々以前に、俺たちには絶対的に魔力を扱う経験が欠如

している。そんなわけでアクセルにどうしたらいいのか相談した所、

「とりあえず解放状態を維持出来るようになる練習がいいと思うぜ。家でも出来るし、お手軽だしな」

とのアドバイスを頂いた。そんなわけで俺たちは庭でひたすら魔力解放状態を維持する特訓に取り組む事にした。

しかし、また校舎を破壊するハメになるんじゃないかと心配で仕方がない。冷や汗を流しながらナナシに目配せすると、大丈夫ですよ、的な視線が帰って来た。

そう、あの時は焦って一気に放出したから暴発したんだ。ゆっくり慎重に、ゆっくり丁寧に……。

「なな、なつるさん！？ それ、だ、大丈夫ですか！？」

「……………ヤバイかも」

放出した魔力がかなり不安定に大きくなったり小さくなったりを繰り返している。グラグラゆれているイメージだろうか。絶対値がどうにも安定しないのだ。

多分、自分の魔力が高すぎて一定に押さえ込むのが難しいんだろう。これはコントロール出来るようになるまで相当時間がかかりそうだ。それに魔力は維持するだけでも相当に疲労する。立っているのがやっとの状態にまで一瞬で疲労してしまうのだ。俺は基礎体力的に充実しているからいいが、リリアはそうもいかなかった。

「はあっ……！ はあっ！ はあっ！ は、……………う、く……………っ！」

既に全身汗びっしょりで膝を突いて肩で息をしている。開始まだ十分も経過していないというのにこれでは長く続けたら死んでしまう

のではないだろうか……。

「お前大丈夫か……？ 最初はもう少し無理なくやった方がいいんじゃない……」

「いえ、平気ですから……！ 師匠、頑張ってるのに……休んでるわけには……っ」

立ち上がり、瞳を閉じて再び放出を始めるリリア。意識して見られるようになってくると、相手の魔力総量がどんなものなのかわかってくる。

リリアはアクセルと比べても相当量が少ないように見える。それに今思えばアクセルの魔力解放は非常に安定していたし、オンオフもスムーズに切り替えられていた。やはりアクセルは只者ではない。少なくとも俺たちよりもずっと進んだ技術を持っていることだけは間違いないだろう。

俺も負けてられない……何となくそんな気になった。これからリリアに様々な事を教えていくつもりなら、アクセルくらいすぐに追い抜けなくては話にならないのだから。

それにしても、なんというか……妙な違和感を覚える。リリアの魔力解放はちよつと普通とは違う気がする。量が少なすぎるのもそうだが、なんというか……妙な表現になるが、『魔力が出るのを溢っているような』、そんな感じなのだ。

リリアが懸命に放出しようとしているのを、しかし矛盾して身体が強引に抑え込もうとしている感じ……。恐らく実際にそうなのだろう。放出と制限を同時に行っているせいで、こんなにも疲労しているのでは。

「少し休憩にしよう。三十分每くらいに休まないと、ぶっ倒れるぞ」

「……はあ……はあ……っ」

既に返事はなかった。恐ろしい勢いで疲労している。しかしこんな総量の魔力じゃ、魔法を放つどころか身体能力の強化さえ出来ない気がする。

適当なベンチに腰掛けると、リリアは完全にぐったりしていた。呼吸がいつまで経っても整わず、息苦しそうに瞳を閉じていた。

「大丈夫か？ 何か飲み物でも買って来る」

「へ、平気ですから……。ほんと、平気ですから……」

「何が平気なのか逆にわかんねえから。ていうかお前の魔力解放なんかおかしくないか？」

「ふえ？ おかしい……って、何がですか？」

何がといわれると何とも答えづらいのだが、思ったことを率直に言葉にしてみる。

「なんていうか……無理してる感じ、かな」

リリア自身に思い当たる事はないのだろう。不思議そうな顔をして首を傾げた。辛いのを我慢している事を心配しているのだと勘違いしたのか、明るく笑い飛ばして『そんなことないですよー』と俺に告げた。

しかしそうじゃない。何か決定的な事を見落としている気がする。何か俺は身近なところで、同じようなものを感じた事があるような……。

兎に角飲み物は買ってこよう。こんなに疲れるとは思わなかった。

たった数十分でここまで疲労するなら、本当に休み休みやらないと気を失いかねない。

そんなわけで立ち上がり、一度食堂に向けて移動しようとした時だった。正面に突然見知らぬ男子生徒が落下してきたのである。何が何だかわからないまま飛びのく俺の頭上、更にもう一つの影が舞い降りた。

漆黒の髪を靡かせ、仲間であるはずの生徒相手に殺意を湛えた視線を向け、大剣を振り下ろそうとしているのはゲルト・シュヴァインだった。拙い。咄嗟に判断する。ゲルトは本気で、行き成りこの生徒を殺そうとしている。

「ゲルトッ！！」

ゲルトは俺の声を聞いていなかった。振り下ろされた巨大な剣。俺は考える間もなく、二人の間に飛び込んでいた。

全力でゲルトが振り下ろした剣を、俺は片手で受け止める。咄嗟のモドチェンジ魔力解放が上手く行ったのだ。右手に収束した力で攻撃を弾き返した。そのつもりだった。

大地に大穴を空けるような膨大な魔力を一点に集中させた防御ならば、普通は剣のほうで弾かれるか砕かれるかどうかするはずだ。しかし、ゲルトの振り下ろした刃はきちんと俺の手に食い込み、痛みと共に血を流していた。

幸い少々刺さった程度で、掌が切れただけに過ぎない。致命傷には程遠いが、それでもゲルトは一瞬俺の防御をきちんと上回ったのだ。何より俺はその事実には驚きを隠せなかった。

「何やってんだ、ゲルト！ 殺すつもりか！？」

「貴方は」

ゲルトの瞳から殺意の色が消えた。まるで憑き物が落ちたかのように、ゲルトは普段の冷静な表情に戻り刃を引いてくれた。

ぼたぼたと零れ落ちる血が痛々しい。これはちよつと本当にもう少しでもゲルトの力が強かつたら片腕吹っ飛んでいたとは思えない……。

男子生徒は悲鳴を上げて逃げて行く。余程恐ろしい物を見たといった様子だ。それも仕方がない事だろう。誰一人俺以外には止めに入れなかったくらい、ゲルトの視線は凍てついていたのだから。

「お前、少しは手加減しろよ……。ケンカと呼ぶにはちよつとやりすぎだろ」

「……貴方には関係ありません。余計なお世話ですから」

ゲルトは刃を肩に乗せ、背を向ける。リリアが慌てて俺に駆け寄り、手に回復魔法をかけてくれた。

驚くほどのスピードで見る見る傷は癒えて跡形もなく消え去ってしまった。目をぱちくりしていると、リリアは既に俺を見ていなかった。黒い勇者の後姿に視線を向け、悲しげにただ黙り込んでいる。

「ゲルトさん、どうして……」

リリアの小さな問い掛けの声にゲルトは振り返った。そうして刃を地面に突き刺すと、腕を組んでリリアをにらみつける。まるで、自分の先程の行動の理由は全てリリアにあると、そんな風に責め立てるような攻撃的な眼差しだった。

「貴方には、判らない事です……。！ のうのうと、平和な世界で戦いから遠ざかり、地位も名誉も捨てて生きてきた貴方に判るはずがない！」

二人の間にはまるで巨大で分厚い壁があるかのようにだった。少なくとも俺にはそれがはつきりと感じ取れた。『かみ合わない』のだ。二人の思いも言葉も、きつと恐らく別の方向へ向けられている。二人とも正面から、相手を見ているようにには思えなかった。

気まずい沈黙が場を支配する。怪我は治ったことだし、とりあえず俺はもう文句はない。人だかりが出来てきた事もあり、この場から立ち去りたくなってきた。

しかしリリアはそうは行かなかったようだ。意を決したように口を開き、胸に手をあてゲルトに言葉を投げかける。

「……ゲルトちゃんは、まだ……リリアの事、憎んでいるの？」

既に俺は完全に蚊帳の外だった。ゲルトは目を閉じ、顔をそらして唇を噛み締めている。

「ゲルトちゃん、そんなの気にする必要ないんだよ？ ゲルトちゃん、昔から何でも出来たじゃない。リリアはダメで、今こんなんだけど……ゲルトちゃんは今はちゃんと立派な勇者になったんだよ？ ゲルトちゃんはリリアと違って努力家だし、それに 天才、なんだから ？」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。

ゲルトはリリアの目の前にまで歩み寄り、その顔を思い切り平手で叩いた。いや、吹っ飛ばしたという表現の方が正解に近い。意識してか無意識でか、手に魔力を込めて平手を繰り出したゲルトに対し、不意打ちに防御も出来ず思い切り吹き飛ばされたリリアは芝生の上に転がった。

震える手に血をつけながらゲルトは歯を食いしばっていた。それから倒れたまま起き上がらないリリアを見下すように一瞥し、背を向

けて走り去っていく。

完全に俺は呆けていた。何が起きたのかよくわからなかったのだ。ただ、リリアが倒れていて、血を流している……それがとりあえず確実な事実だった。

「リリア、大丈夫か!？」

リリアは口元を押さえながら身体を上げた。顔半分は完全に腫れ上がり、口と鼻から血が流れていた。しかしリリアはどこか悲しそうな、しかし全く怒りとは異なる不思議な目で俺から視線を反らしていた。

ふらつく足取りで立ち上がるリリア。それを支えようとしたのが、リリアは自然と俺の手を離れてしまう。一瞬、無意識なりリアの拒絶が俺へと頼る事を拒んでいたかのように。

「……平気ですから」

「リリア……」

「本当、平気ですから……。少し、一人にしてください……」

疲れきってぐったりしているはずなのに。顔を強打され、くらくらしているはずなのに。

リリアは剣を引き摺り、学園を去っていく。俺はバカだった。俺はその時リリアに何も声を掛けてあげる事ができなかった。

なんてバカなんだろう。俺がこの時リリアの気持ちをもっとわかってあげられたなら、あんな事にはならなかったかも知れないというのに。

確定されたバッドエンドへの道程が、俺の腕の中で未来を待ち望ん

で
い
た。

対の勇者の日（１）

「何度も言って来たけど、ゲルトと戦うのは諦める」

翌日、頬の腫れたリリアを見てアクセルはいつになく真面目な表情で言った。

その横顔が余りにも真剣すぎて、俺もリリアも反論する事が出来なくなっていた。それが、リリアが殴られた事に対して怒っているからなのだと気づき、俺は気まずい気持ちになった。

リリアを守ってあげられなかったのは俺が呆けていたせいだ。リリアとゲルト、二人の仲があそこまで悪いとは思って居なかったものの、もう少しあの場にいた俺には出来る事があつたはずなのに。

アクセルの言葉にリリアは視線を背けていた。リリアは時々こんな風な顔をする。他人を拒絶するような、言葉を聞きたくないような、そんな表情だ。

「そもそもナツルも迂闊過ぎだぜ。リリアとゲルトは、会えば基本的に一触即発なんだよ。だって、ゲルトは」

「いいじゃないですか、もう！」

俺に、それを聞かれたくなかったのだろう。そう判るほど、あからさまにアクセルの言葉を阻止するリリア。今まで聞いた事が無いようなリリアの叫び声に俺もアクセルも完全に言葉を失っていた。

「いいじゃないですか、もう。ただ最初から無理だったってだけで……いいんです、別に。リリアじゃゲルトさんには敵わない……判ってますから。挑んだりなんかもう、しませんから……」

「リリア……お前……」

リリアは笑いながら視線を反らす。作り笑いなのは明らかだった。辛い時、悲しい時、彼女はきつとそうして想いを阻害してきたのだろう。慣れた口調で、慣れた笑顔で、他人を拒絶する。

俺は何か誤解していたのかもしれない。リリアは、他人に受け入れられないからこそ独りなのだと思っていた。だが、それは違うのか……？

リリア自身が、他人を拒絶している。少なくとも俺にはそう感じられた。自分とリリアの間にある距離は果てしなく遠く、結局いつもの彼女の笑顔は偽りなんじゃないかとさえ思えてくる。

俺が声をかけようとすると、リリアは直ぐに背を向けてしまった。伸ばしかけた手が空しく何もつかめないまま引っ込まれる。沈黙が場を支配した時、アクセルは意を決して顔を上げた。

「ゲルト・シュヴァイン、か。どう考えても、これはやりすぎだよな」

アクセルの口調は静かだった。しかし、俺にはハッキリわかった。アクセルは怒っていた。リリアが怪我をした事にも、二人が会話さえままならない事にも、多分全部の事に。

リリアは何も言わずに俺たちの前から去っていく。学園のロビーに取り残された俺たちだったが、アクセルはおもむろに受付カウンタ―へと歩いていき、ランキングバトルの申し込みを行っていた。

「アクセル？」

「俺は今十八位。ゲルトは三位だから、少なくとも二、三人ぶっ倒さないと追いつかない」

「……まさか、お前……」

登録を追え、アクセルは腰のサーベルの柄に手をあて振り返る。

「俺がゲルト・シュヴァインと戦う」

アクセルの決意は固い。俺が何か言った所で聞くような様子ではなかった。

だが、アクセルは何のために戦うのか。まさかゲルトに仕返しをする為ではないだろうし、いまいち真意が理解出来ない。

「ナツル。お前は……リリアちゃんが『弱い』と思うか？」

突然の質問に俺の思考は追いつかなかった。だが俺は少しだけ思案し、直ぐに思った事を口にした。

「……思わない」

リリアは、恐らく『普通ではない』。

自分自身にセーブをかけるような矛盾した魔力解放。回復魔法しか使えないと口にする彼女が放つ、『魔力総量が低いはずなのに異常に回復する』魔法。時々見せる他人を拒絶した態度。勇者という存在に対する嫌悪……。

俺は最初リリアはただ間抜けでドジな女の子なのだと思っていた。だが違和感はどんどん強くなる。リリアはまるで何かに無理をしているかのようにしか見えないのだ。

様々な事柄を拒絶し、まるで自ら不幸を招いているかのようにさえあるその態度に、俺たちは結局リリアにとってのなんでもない存在でしかないのだと確認させられる。

ゲルト・シュヴァインが強さの為に孤高であろうとするのであれば、まるでリリアはその逆……。『弱く在り続ける為』に、孤高であるうとするかのような、そんな違和感。

アクセルもそれを感じ取っていたのかも知れない。そうして自らゲルトと当たる事で何かを伝えようとしている。少なくとも俺にはそんな風を感じられた。

「まあ、ゲルトとの付き合いも……ここまで来ると色々あるしな」

「始めまして、とか言われてたのにか？」

「ありや、ナツルに言ったんだろっよ。あいつは、ホラ。俺の事シカトしてっからさ」

苦笑を浮かべるアクセル。アクセルとゲルトの間に何かあるのかも気になるが、さし当たったの問題は二人の勇者の不仲だろう。

アクセルは何かを知っているようだが、それは俺がここで勝手に聞いていいことなのだろうか。今更ながらに気後れする自分の情けなさが嫌になる。

戸惑う俺の肩を叩き、アクセルは笑った。まるで慰められているかのような気分になる。本当に情けないな、俺は。

「ゲルトもそんな悪い奴じゃないんだけど……。あいつは色々あるんだよ。ま、とりあえずやれるだけやってみるわ」

「アクセル」

背を向け歩き出すアクセルに声をかける。何を言えいいのかよく判らなかったが、俺は兎に角その時アクセルに何か言わなければならぬ気がした。

「その……ありがとう」

そんなどうでもいい事を口にする自分が、余計に嫌になった。
アクセルとゲルトの試合は、それから三日後に行われた。

対の勇者の日（１）

ゲルトの振り下ろした刃は一撃で並の武具なら破壊する威力を秘めている。では、防御する為にはどうすればいいのか？

答えはシンプル。自らの装備する武器に魔力を流し込み、強度を強化する事。しかしそれでも尚、魔剣とまで呼ばれた嘗ての勇者の剣はアクセルの刃を吹き飛ばす威力を持つ。

故に『受け』る選択は無し。アクセルは両手の剣を上手く使い、レールを作るようにしてゲルトの剣を弾き飛ばす。

二人の刃がシンプルに激突したのは一撃目だけだった。身体を捻り、巨大すぎる剣を容易に振り回すゲルト。四方八方から放たれる重い一撃をアクセルは二対の刃で上手く受け流していた。

単純に刃で受けるだけならば難しいその流れるような動作は、刃に纏った風が実現する。表面を走る風はゲルトの振り下ろす刃の重みを分散させ、ふわりと流して弾き飛ばす。

故に火花が散るのは一瞬だけ。それでもゲルトは攻め続ける。弾かれても弾かれても攻撃を繰り返すその姿はまるで意地になっているかのようでさえあった。

「お前、こんなに強くなったのにまだ周りの目を気にしてるのか？」

アクセルの言葉を聞いた瞬間、ゲルトの空いている左手が突き出された。

漆黒の光が閃光し、アクセルの身体が吹き飛ばされる。至近距離で放たれた魔力に体制を崩し、しかし空中でアクセルは停止していた。全身に纏う風が髪を上へと吹き上げる。上昇気流の力でゆっくりと着地したアクセルは刃を逆手に構え、刃を打ち鳴らす。

「そんなに怖いのか？ お前以外の勇者の存在が」

「……………アクセル・スキッド……………」

ゲルトの声は低かった。アクセルの言葉は完全にゲルトの致命的な部分に触れてしまっていた。見境なく目の前の物を破壊するような鋭い殺気。構えた魔剣フレグランズが闇の光を纏って揺らめいた。

二人の戦いを、観客席でリリアは見つめていた。ナツルもまたリリアとは違う席で戦いを見守っている。擦れ違う幾つかの思いを背負い、アクセルは小さく息を吐き駆け出した。

ゲルトが刃を揮う。放たれた剣撃は地を這う魔力の刃となり、アクセルへと襲い掛かる。しかし真正面からそれに体当たりしたアクセルは闇の刃を突きぬけゲルトに迫る。

全身を覆う風の力がアクセルを守っていた。アクセルは決定的に魔力を放出する技術は苦手であった。故に蓄積 己の力として風を操る能力が何よりも得意分野である。

それしか出来なかった故に極めたたった一つの力の使い方。追い風を受けて繰り出される剣戟は繰り出す度に速さを増して行く。ゲルトは歯を食いしばり、大剣で防御を試みる。しかしアクセルの剣は二対であり、そしてその速さはゲルトの反応速度よりずっと早かった。

自分が押されているという事実がどうにも認め難かった。ゲルトはアクセルに勝利している。『公式の試合』で、たった一度だけ。

乗り越えたつもりだった。ぎりぎりとし合う三つの刃、その向こうでゲルトは確かに感じていた。かつてアクセルと初めて戦った時感じた、鋭い威圧感を。

勝ち星をもらえたのは公式戦での一戦だけ。そこにたどり着くまでに、軽い手合わせでゲルトは敗北していた。アクセル・スキッド。目の前の無名の剣士に。それも、四度も。

「嘗めるなっ!!」

背後に跳び、着地と同時に弾かれるように駆けるゲルト。低い姿勢から斬り上げるように繰り出される一撃。大量の魔力を込めたその攻撃にアクセルの剣が両方弾かれる。

空に舞い、くるくると踊る二対の刃。武器を失ったアクセルにゲルトはささず畳み掛ける。振り下ろし、直撃すれば真つ二つになるような強力な一撃、しかしアクセルはそれを跳躍で回避していた。ゲルトの頭上を飛んで行くアクセルの影。風を受け、軽やかに空を舞うアクセルを目で追ったのが失敗だった。直後、ゲルトはその場に膝を着く事になる。

「空を飛ぶ剣　　つてのは、考えなかったらしいな」

空に弾き飛ばした剣はまるで己の意思を持つかのように強風を受け左右からゲルトに襲い掛かったのだ。両足を斬られ、膝をついたゲルトの背後、地面に突き刺さった剣を抜いて立つアクセルの姿があった。

背後にアクセルの気配を感じながらゲルトの瞳は揺れていた。アクセル・スキッド　彼は一度確かに倒したはず。あれからゲルトは沢山の鍛錬を積んできた。その積み上げてきたものを、彼の存在が凌駕するとも言っのか。

「いつまでも逃げているだけじゃ話にならない。お前も本当はそれに気づいてんだろ……？」

ゲルトの頭の中が真っ白になっていく。あのゲルト・シュヴァインが膝を突くという状況に動揺する観客席の事など既に眼中にない。震える声で囁いた。

「……判ったような口を利くな」

立ち上がり、振り返るゲルト。その首筋に素早く突きつけられる二対の刃。アクセルの表情は窺い知る事が出来ない。前髪で隠れた視線は、しかし鋭く突きつけられた刃と同じく、冷酷にゲルトを切りつける。

「貴方に、何が判るッ！！ 一体何がッ！！ 魔剣解放 フレグランス ツ！！」

魔力を帯びた魔剣の巨大な刀身に紅く、花模様が浮かび上がる。

剣から放たれる溢れんばかりの力がアクセルを吹き飛ばす。模様の浮かび上がったフレグランスは大気を軋ませる程の力を溜め込み、ゲルトは片手でそれを緩く構え、空いた手と剣を持つ手を交差させるような独特の構えを取った。

それは、ゲルトが放つ必殺の一撃へと繋がる構え。『必ず命中』し、『必ず殺す』技への布石。踊るように回りながら揮う刃のから花びらのように輝く無数の光が舞い散り、フィールドを覆いつくして行く。

朱の花びらたち。舞い散るそれらはまるで意思を持つかのようにアクセルへと一気になだれ込む。朱色の渦と薔薇の香りがアクセルの視界と嗅覚を奪う。花びらの合間、ゲルトの姿を探す。ゲルトは右へ、左へ、花びらの中を踊るように移動しているように見えた。

「必殺の一撃　見切れますか？」

声は確かに正面から聞こえていた。しかし斬撃は背後からアクセルを襲う。完全に防御も出来ないまま切りつけられ、よろけるその身体に四方八方からの斬撃が襲い掛かる。

刃で防ぐ事は出来ない。五感が麻痺し、前後不覚に陥るような状況でアクセルは必死に攻撃を受けようと努力した。しかし重苦しい破壊力を秘めた剣は無慈悲に繰り出され、その身体を切り刻んで行く花びらが吹き飛び消え去った時、大地には無数の傷跡が残されていた。アクセルはそれでも立っていた、血まみれの傷だらけで立つアクセルの正面、剣を持たない手に魔力を収束させたゲルトが迫る。

「ロンド
華斬舞」

放たれた黒と朱の閃光は渦巻き、アクセルの体目掛けて放たれた。直撃を受けたアクセルの身体は大きく吹き飛び、フィールドを覆う結界の壁にたたきつけられる。アクセルの飛んでいった軌跡を追うように、螺旋を描いた花びらが空に輝き消えて行った。

アクセルは完全に気を失っていた。ゲルトはその姿を一瞥し、瞳を閉じて齒軋りする。

「勝てないとわかっていて、何故挑むのですか……ッ！！」

甲高い音が会場に響き渡った。ゲルトは両手でフレグランスを大地に突き刺す。そうして暫くの間時が止まったかのように、会場もゲルトも一歩も動く事はなかった。

舞い散る真紅の光の中、ゲルトは刃を抜いて歩き出す。残されたのは血塗れのアクセルと、それに覆いかぶさるような光の雨だけだった。

子供の頃は、自分が勇者になれる事が誇らしくて仕方が無かった。聖騎士団を率いて魔王を倒した勇者を父に持つ二人の少女。二人の両親は当然生前は親しく、幼い頃の二人は顔を合わせる事もあった。しかし、ゲルトは幼い日から既に理解していた。自分自身はきっと、何の才能もない、ただの少女なのだ。それも当然の事だった。彼女の父、ゲインは決して天才などではなかった。

真の天才とは、呼吸をするかのように常人の努力を超えていく存在。それは最早普通の人間とは一線を画す者だ。シュヴァイン家の騎士は、決して天才の血筋と呼べるようなものではない。

たまたまゲインは腕が立ち、団長であつたフェイトに腕を認められただけの副団長。その座も血の滲むような努力の果てに掴み取つたものだつた。例えば父が勇者であろうとも、ゲルトは決して天才などではなかった。

そんなゲルトに、自らの才能の不在を嫌というほど知らしめた少女がいる。何の努力もせず、生まれた時から呼吸するかのように魔法を扱う事が出来た少女。

にっこりと笑い、怪我をしたゲルトの傷を癒してくれた幼馴染。長い間、ゲルトが目標としてきた、もう一人の勇者。

「……わたしも、大きくなつたらリリアちゃんみたいになれるかな？」

嘗て、黒の勇者が憧れた人。

笑顔が素敵な、誰にでも分け隔てなく優しさを振り撒く事が出来る明るい少女。

「うんっ！ きつとなれる……うん、ゲルトちゃんなら、きつともつともつと凄い勇者になれるよっ！」

励ましの声がいつも嬉しかった。内気で人の輪に入る事が苦手だった自分に、いつでも笑いかけてくれた。

「ほんと……？」

「ほんとほんと！ リリアはほら、そういうの向いてないから……えへへ」

「そんなこと、ないよ……。わたしが勇者になったら……仲間パーティーは、リリアちゃんがいい。ううん……リリアちゃん以外じゃ、やだよ……」

二人は確かに約束したはずだった。少なくともゲルトはそれを覚えている。忘れる事など、きつと出来はしないのだろうから。

小指を絡ませて笑いあった日々。何故あの頃のようにには戻れないのだろう。世界の流れや沢山の声は、いつも自分の願いを裏切っている。

戦いを終えたゲルトは控え室へ向かう通路の途中、壁に拳をぶつけて俯いていた。誰にも言えない、果たされなかった、果たしてあげる事の出来なかった約束を胸に……。

リリアの顔を見るのも数日振りだった。

ゲルトの必殺技を受けてスタボロにされたアクセルはそのまま病院に運び込まれて行った。全ての試合が終了し、誰もいなくなった闘技場の観客席に一人ではぼつんと座ったままのリリアの前に立つ。

リリアは俯いたまま、ただ黙り込んでいる。何を考えているのか、何を思っているのか……今の俺にはわからない。隣に腰掛けると、何か声をかけねばと言葉を捜す。しかし何もかける言葉が見つからなかった。

しばらくそうして俺達は暗くなった闘技場の中で時間を過ごした。自分たちがこんな所で何をやっているのかわからなくなった頃、リアは小さな声で語りだした。

「……本当は、こんなはずじゃなかったんですよ」

リアの声は震えていた。額に前で両手を組み、祈るように呟く。

「どこで擦れ違っちゃったんでしょうね……」

「……リア」

何か言わなければならない。そう思うのに、何も言ってやれなかった。

言っでどうする？ 余計な思考が脳裏を過ぎる。そこまで関わったところで、お前に本当に救えるのか？ そこに意味はあるのか？ もう一人の自分の声が聞こえる。

それは冷静なんじゃない、臆病なだけだ。自分自身にかけているセービング機能。本気になりすぎず、熱くなりすぎないようにと……浅い付き合いを求めている痛みを恐れる声だ。

だが、俺にして上げられる事などあるのか。俺にかけられる言葉などあるのか。リアの嘆く声は、俺にも当てはまる。自分の事さえ清算できない俺に、誰かにかける言葉などないのかもしれない。

「ゲルトさんと戦うのは、もう諦めます。私はもう……彼女の傍にいない方がいいと思うから」

ゆっくりと席を立つリア。俺はとっさにその手を掴んでいた。必然的に停止する二人の距離が痛々しい。

リアは振り返る事もしなかった。俺は掴んだその手をどうしよう

というのか。あの日、こうして手をつかまれた俺は、それを振りほどいたっていうのに。

「……なつるさんは、どうしてリリアに構うんですか？」

振り返ったリリアの瞳は冷たかった。俺を拒絶する、暗い感情。揺れている瞳の中に見える不審の気持ち、何よりも胸に突き刺さった。

「なつるさんが声をかけてくれて、傍に居てくれて……嬉しかった。でも……でも、それで……あなたを信じてもいいんですか？」

信じてもいいのか。その問い掛けに俺はゆっくりと手を離していた。気づいた時にはもう遅い。自ら手放してしまった代償が、決定的に俺たちの間にある壁を厚くする。

リリアは去って行った。俺は何も言ってやれないまま、また何も出ないまま、無様に見送るだけ。振り返り、苛立ちを手摺に叩き付けた。魔力が籠っていた所為で完全に大破してしまったそれを見て、余計に自己嫌悪に陥る。

「俺は………何しにここに來たんだよ」

まるで俺の落ち込む心をあざ笑うかのように、ぽつりぽつりと雨が降り出していた。

シャングリラの東通り。細くうねり、こんがらがった通路の二画にあるメリーベルの研究室。

部屋の中でもいつも通り研究に明け暮れていたメリーベルに突然の来客が訪れた。外の天気は雨。ずぶ濡れの来客はドアをノックする。

リリアか夏流か。それくらいしか来客に覚えはないメリーベルは当然のように扉を開けに行った。しかしそこに立っていたのはリリアでも夏流でもなかった。

「どうして、ここに？」

メリーベルが質問をすると同時に来客の持っていた剣が淡く輝きだす。

漆黒の刀身に浮かび上がった華の紋様が、雨を滴らせて翻された。

対の勇者の日（２）

夏流に背を向けたリリアに帰る場所はないように思えた。

冷たい雨が降り注ぐシャングリラの町をふらふらと歩くリリア。一人きり、雨に打たれて冷え切った体で思い出すのはやはり夏流たちとの事だった。

勇者である事が重荷で仕方がなかった。生きる日々の先に希望も見出せない世界……。一人ぼっちで誰からも認められない、そんな人生を送る事が当たり前だと思うようになっていた。

どんな言葉もリリアの耳には届かない。あらゆる人々、この世界と向き合う事を止めてしまった少女にとって、夏流の差し伸べてくれた手は縋りつきたくなる程輝いて見えたのは確かな事実。

そう、たとえその得体の知れない少年が、リリアの無力さに腹を立てた聖騎士団や学園が送り込んできた、リリアを戦わせる為に存在する者だったとしても、関係はなかった。

久しぶりに誰かと触れる事が出来た。その暖かさは、騙されているかもしれないという気持ちを抑えこんで尚リリアの中で意味を持つ行為だったから。

しかし、わからなくなる。夏流は一体何の為に自分の傍に居るのか。自分を強くしようとしている？ それは判る。では、何故？ せめて騎士団の使いだというのなら、もつと強引に強くなれと命じてほしかった。自分で考えて、自分の道を選べなんて、そんな優しい言葉なんてかけてもらいたくはなかったのだ。

それを肯定すると夏流は言う。一緒に考えようと肩を叩く。その拳動の一つ一つがリリアを苦しめている。自分でどうにもならない現実を、気軽に変えられるかのように口にする少年……。苛立ちだったのかもしれない。それとも何も決められないまま、誰かに操られ人形のように生きる事を良ししようとする、自分自身への嫌悪だったのか。

恐らくは両方だろう。それでも夏流の傍に居たかった。居て欲しかった。初めて出来た友達。世界と自分を繋いでくれた優しい手。それは、リリアの手から離れてしまった。

「自業自得、かな……」

アクセルは何故ゲルトと戦ったのか。

ゲルト・シュヴァインは、常に手加減をして戦っている。リリアはそれを見抜いていた。ゲルトは決して相手に必殺技など使わない。それは、『当たれば必ず殺す技』……致命的なダメージを仲間である学園の生徒に与えてしまう事になるから。

どんなに冷たい態度で心を覆っても、どんなに憎しみで刃を黒く塗りつぶしても、どんなに勝利に執着しても、ゲルトは他人を傷付けない……少なくとも命を奪う事のないように努力してきた。

図抜けた力を持つ魔剣を使えば並の相手では勝負にならない事も充分に理解している。だからこそ、ゲルトはそれを誇りとしてきた。

弱者を傷付けない刃であり続ける事……それを覆ってまで、アクセルに勝利した意味。

ゲルトは見出したのだ。アクセルに倒すだけの意味を。絶対に勝利するだけの意味を。それは結局、リリア・ライトフィールドという少女との確執に巻き込んでしまった事に他ならない。

もう、アクセルに会うのも止めようと思った。誰かと関われば、その分自分の運命に他人を引き込む結果になる。そうすれば、誰かと繋ぎかけた手がまた離れてしまう事もないのだから。

戸惑いの表情を浮かべ、悲しげに手を離した夏流の顔が忘れられなかった。どれだけ雨に打たれても、胸につきささった痛みだけは落ちる事が無い。

まるで救いを求めるように、リリアはメリーベルの研究室の扉の前に立っていた。甘え、だろうか。メリーベルはリリアにとって初めて出来た友達。己の存在を真正面から認めてくれた人。そんな彼女

に相談でもしたかったのか。泣き言でも言つつもりだったのか。しかし扉を開いたリリアはその自分の考えそのものが甘かったという事を思い知らされる事になる。

滅茶苦茶に荒らされた研究室の中は、しかし真紅の光の花弁で満ちていた。床の上に倒れたメリーベルが流す血と輝く花弁が部屋の中を美しく彩っている。

一つの美術品であるかのようなその景色にリリアの指先は震えた。リインフォースが音を立てて床の上に転がり、リリアは一步後退する。

「ど……う、して……？」

メリーベルは動かなかった。触れたらその現実を受け入れなければならぬ気がして近づく事が出来なかった。リリアの両目から涙が溢れ出し、力なくその場に崩れ落ちるようにして膝を着く。

「どうしてなの……？ そんなに、リリアが憎いの……？ ゲルトちゃん……」

胸を締め付ける痛みは、ゲルトに仲間を傷付けられたからだけではなかった。

幼い日に約束した事。いつかきつと、一緒に背中を預けて戦える日が来る事を祈っていたのに。

長い前髪で顔を隠していつも一人で遊んでいた少女。そんな彼女の事がいつも気がかりで、大好きで、だからこそ傷付けたくなかった。背後の扉には、ゲルトの服の布の裾に赤いペンキで記された文字がリリアを待っていた。壁にナイフで突き刺されたそれを引き抜き、リリアは目を細める。

「……………ゲルトちゃん」

リインフォースを拾い上げる。

顔をあげたリリアは涙を流していなかった。悲しげな瞳をきつく瞑り、それから齒を食いしばる。

「……ごめんなさい、メリーベルさん」

リインフォースに巻かれた鎖が解き放たれる。

錠の落ちる音と共に、リリアは雨の中に飛び出して行った。

対の勇者の日(2)

「……おい、ナナシ」

学園の通路の中、人間の姿になったナナシに夏流は声をかける。

降りしきる雨の音の中、ナナシは黙ってシルクハットに指を沿わす。夏流は不機嫌そうに腕を組み、ナナシを睨みつけた。

「なんでこうなるんだ？ ゲルトとリリア、二人は同じ勇者なんじやねえのか？」

そもそも、俺は勇者が二人居るという事実を知っていたものの、ゲルトがそれであるという事は伝えられていなかった。

俺の役割は勇者を強くする事……それがリリアだけだというのも妙な話だが、そもそも二人のあの仲の悪さはちよつと普通ではない。

「お前、知ってたんだろ？ ゲルトとリリア……二人の仲が悪い事も、いつかこうなるって事も」

ナナシは答えなかった。しかしそれは肯定しているも同義。振り返り、ナナシを見つめると仕方がなくといった様子でナナシは語り出した。

「簡単な話ですよ。貴方はリリアにだけ構っていればいいのです」

「どついう事だ……？」

「リリアとゲルト　勇者になれるのは、どちらか一人だけだ、という事ですよ」

絶句する俺に、ナナシは語る。勇者が二人存在するというその状況について。

かつてゲインとフェイトは確かに勇者と呼ばれる存在だった。二人は聖騎士団、勇者とその仲間たちの中でも^{パーティー}図抜けた実力者であった。二人は最高のパートナーであり、常に背中を預けて多勢に無勢の戦いを切り抜けてきた。

その姿こそ勇者であると讃えられる者。しかし、事情は二人の勇者の結末の違いが生む格差がややこしくしていた。

「かつてこの世界を支配しようとした魔王ロギア。それと相打ちになった勇者は、実はフェイトだけだったのですよ」

「……ちよつと待て。二人は勇者、同じ仲間だったんだろ？　それがどうしてフェイトだけ……」

「ゲイン・シュヴァインは、最後の決戦を前に恐れを成して逃げ出した。それが、今のこの世界で伝わっている俗説です」

最後の戦い、強大な力を持つ魔王ロギアに挑む頃には仲間たちは傷つき、死に絶え、最後の決戦に挑めるのはたった二人だけとなっていた。

それが二人の勇者、フェイトとゲイン。二人は魔王に挑み、勝利し、世界に平和を齎すはずだった。

しかし決戦を前にゲインはザックブルムの魔城から引き返し、あるう事がフェイトにすべてを押しつけて逃げ出した、と。生き残り、たった一人だけクイリアダリアに戻ったほかならぬゲインが、そう口にしたのである。

「そんな……」

「シュヴァイン一族は没落貴族となりました。国中の人々がフェイトの死を嘆く中、罵倒の声はゲインの身体を蝕み、やがて彼は病に倒れた。勇者としての地位も剥奪され、シュヴァイン家は呪われた一族となったのです」

その栄光の差は天地程もあっただろう。真の勇者の娘として期待を一身に背負い、褒められ、讃えられ生きてきたリリア。逃げ出した偽りの勇者の娘として人々から罵倒の声を浴び、認められる事も無く一人孤独に生きてきたゲルト。

勇者の儀を受けた二人は、しかしそこで同時に契約を成したのだ。勇者になれるのはどちらか一人のみ。それまで全身全霊を賭け、互いに切磋琢磨し、勇者に相応しい存在となると。ゲルトにとってリリアを倒す事は己の人生だけではなく、父の不名誉を返上する為に必要な行為だったのだ。

「それでもゲルトはゲインを信じていました。ゲインは逃げたのではないと、最後の最後まで彼女は信じていた。しかしゲインはゲルトの想いに応える前に、命を落とした……。これが二人の間に在る

確執の理由です」

「……それじゃあ……でも、どうしてだ？　なんでゲルトはリリアに勝ってるのに、ああまでリリアを敵視する……」

考える。確かにゲルトにとってリリアは勝利すべき存在だ。勝たねばならない。生きて行くために。

だが、リリアはゲルトとは比べ物にならないほど『弱者』としての人生を送ってきた。そのリリアをゲルトが危険視し、敵視し、トラウマとしているのは何故なのか。

「……鎖……」

自分で呟いた言葉は全く意味不明だった。しかしその言葉に俺ははっとした。

この可能性がもしも事実なら、大変な事になる。どうして俺は考えなかったんだ。勇者は『何もしなくてもテキトーに戦っていれば勝手に強くなつて魔王を倒しちゃう存在』だと、俺は最初から思っていたはずなのに。

それがもしも事実だとしたら。リリアがもし仮に、真の勇者の素質を受け継ぐ存在で、つまり『恐ろしいほどの天才』だとしたら。そしてそれを、何らかの方法で強引に押さえ込み続けているのだとしたら。

「……アイツ……まさか、俺と同じ……ッ」

リリアの魔力解放はどう考えてもおかしかった。だがリリアの力を封じるような使い魔は、俺のように存在していなかった。

あいつの近くに常にあつて、使いもしないくせに持ち歩いている物……不自然だったんだ、あの大剣は。勇者を嫌うはずのリリアが、

わざわざ父親の剣を後生大事に持ち歩いている事も。あの剣に、ゲルトの魔剣にはないはずの『鎖』が巻かれている事も。

「リリアは……リリアはどこに行っただっ!!」

このままじゃまずい。リリアとゲルトの力は圧倒的に差があるからこそ、『本気の戦いにはならない』と思っていた。

だがもしも、二人の力が拮抗するようなものであったならば、手加減出来る戦いにはならない。

原書に記された未来が現実になってしまふ。それだけは避けなければならぬのに。俺はバカだ。どうしてあの時、リリアの手を離したんだ。

「くそっ!! 間に合ってくれ!!」

雨の中、駆け出した。リリアの行きそうな場所は限られている。全部片っ端から当たるしかない！

学園から離れた場所にある草原に対峙する二つの影があった。白と黒のシルエツトは互いに雨の中黙り込み、剣を構える事さえしない。ずぶ濡れになった髪の下、リリアは寂しげな視線をゲルトに向ける。それを見るだけでゲルトの頭の中は滅茶苦茶になるような気分だった。

いつか一緒に夢を叶えると誓った二人。大切な友人だった二人。その二人が手を離してしまったのは、ゲインの死が切欠だったのかもしれない。

二人の勇者の死と、それを継がねばならない現実が目の前に迫った時、二人はもう手を取り合う事は出来なくなっていた。ゲルトはゲインの正義を信じ、その為にはリリアの存在を認めるわけにはいか

なかった。何よりゲルトにとって、天才的な力を持つリリアの存在は自分自身の否定に他ならなかった。

「……覚えてる？ 貴方はいつも、お父様に稽古をつけてもらってた。わたしはお父様にもつと構ってほしかったのに、お父様は貴方のところに行って何日も帰ってこなかったッ！！」

戦いから戻ったゲインが気にかけていたのは、いつもゲルトではなくリリアだった。正義だと信じ、認めて欲しくて仕方が無かった父親は、ゲルトの事など見ていなかった。

ゲインに稽古をつけてもらうリリアがいつの間にか憎らしくなった。その父親が褒め称えられ、ゲインは蔑まれる現実が認められなかった。リリアの存在が自分から全てを奪い去っていくかのような錯覚さえ覚えた。

「ごめんね……ゲルトちゃん。ごめんね……」

「謝るなッ！！ わたしと闘えええッ！！ リリア・ライトフィールドッ！！」

涙を流し、首を振りながら剣を構えるゲルト。その正面、リリアは重苦しい波動を放つ聖剣を握り締め、それを片手で振り上げた。

「言われなくてもそうするよ……。ゲルトちゃんは……。お前は私の友達を傷付けた。私を憎むならいいよ。私を殺すのも構わない。でも……。だからってッ！！ 仲間に手を出されて黙っていられる程、私はお人良しじゃないんだよッ！！」

リインフォースの刀身が青白く輝く。浮かび上がった光の紋章は触れる雨を蒸発させ、ぐつぐつと煮えたぎるような光を纏って軌跡を

描く。

両手で剣を構えるリリアに対し、ゲルトは片手でフレグランスを構える。刀身に浮かび上がる二つの紋章が二人の勇者の本気を肯定していた。

手加減出来る気がしなかった。リリアの心もまた、怒りと絶望で煮えたぎっている。ずっとずっと押さえ込んできたゲルトに対する想いが爆発した今、刃を止められる気はしなかった。

「うおおおおおっ！！」

雄叫びと共にゲルトが突進する。振り下ろす刃の一撃はアクセルさえ下す程の圧力を持つているはずなのに、リリアはリインフォースでそれを受け止めていた。

二人の視線が交錯する。一度距離を離し、二人は打ち合いを始めた。刃と刃が何度も激突する。その巨大な剣がぶつかりあう衝撃は想像以上で、甲高い鋼の打ち合う音が曇り空に響き渡った。

「貴方はいつもそうだった！！ わたしが何日もかけて努力して得るものを、呼吸するみたいに一日で追い越して行くっ！！ あなたはわたしが欲しかったものを全部持っていた！！ 地位も名誉も世界の声も、愛情さえもっ！！ 貴方の父親が居なければ……！！ お父様だつて死んだりしなかった！！」

「……その言葉をゲインさんに聞かせてあげたいよ」

刃と刃を交え、二人は顔を突き合わせる。ぎりぎりと軋む音の中、リリアは言葉を続けた。

「君はゲインさんがどんな気持ちで帰ってきたのかを全然判ってない……！ それに……そんなのはリリアだって同じ！ リリアだっ

て、お父さんを殺されたんだっ！！」

刃を弾き合い、後退する二つの影。雨の中、ゲルトの魔剣が花弁を散らす。必殺の構えに涙と叫びを乗せ、ゲルトの吹雪がリリアへ襲い掛かる。

花弁の渦に囲まれ、リリアは剣を高々と頭の上に振り上げた。魔力を込められたリインフォースが閃光し、しかし、それ以上のことは何も無い。

ただ振り上げ。ただ想いを込め、ただ振り下ろすだけ。そんな単純な一撃が天地を吹き飛ばす程の圧力を込められ振り下ろされた。花弁の壁は両断され、その向こう側に立っていたゲルトに迫る。

斬撃を受け切れなかったゲルトの半身が切りつけられ、鮮血が噴出す。よろめきながらも魔法を放ち、螺旋する波動にリリアは吹き飛ばされて草原の上を転がった。

二人は同時に体制を立て直す。頭から血を流すリリアと肩から血を流すゲルト。二人は同時に血を口から吐き出し、再び剣を構えた。

始まりは些細な誤解だった。最愛の友情は簡単に世界の声に引き裂かれ、もう元に戻る事は無い。お互いに闘っている理由は既に曖昧になりはじめていた。ただ思う事は一つだけ。

負けたくない。

刃を構え交錯する視線は憎しみではない。きっとこれは誰もが願った最愛の結果。そう、この二人でさえ本当はこうなる事を祈っていたのだから。

何の為に強くなり、何の為に力を求め、何の為に明日へと進むのか。理由がなければ判らなくなりそんな毎日の中で、たった一つだけ失わない事が出来るものがあるとすれば、それはきつと魂に刻み込んだ誓いだけ。

身体を貫く激痛さえ今は気にもかからない。ずぶぬれの体も関係な

い。出来ればもう、戦いが終わらないで欲しいと願う。せめてこの夢のような時間の中のみまで。

二人は傷口に手を当て回復魔法を発動する。互いに癒えた傷に構えの新鮮さを取り戻し、攻防を再開する。

打ち鳴らす刃。空を裂く轟音。擦れ違う思いは皮肉にも今だけは重なり合っていた。ゲルトの瞳に宿っていた強い憎しみが和らぎ、リアの剣筋に冴えが戻っていく。まるで過去へと時間を逆行するかのよう、二人は戦いの中でその力を変化させて行く。

しかし、押されていたのはリアだった。いかに力を解放したところで、二人の間には大きな差がある。リアは悲しげに微笑みながら、攻防の中で言葉を紡ぐ。

「ゲルトちゃんは、勘違いしてるよ……」

自分は決して天才などではないのだということ。

生まれ持つ魔力総量が多かったとしても。魔術の才能があったとしても。それは最終的な結果には結びつかない。

必要なのは努力、ただその二文字だけ。ゲルトは知らなかったのだ。リアが嘗ての日々、何でも出来る天才のように見えたのはただの誤解に過ぎなかった。

「ゲルトちゃんが皆に馴染めないで一人膝を抱えていた時……リアは、ゲルトちゃんの何倍も……何倍も、修行をしてたんだよ……？」

「え……？」

「私は、天才なんかじゃない……。天才なんかじゃないの。ゲルトちゃんと同じ。誰にも見えない所で、ひたすらに努力するしかなかった……そうでしょう！？ そういうものなんだよ、リアたちは

っ！！」

父親を馬鹿にされ、子供たちの輪にも入れずいじめられ、石を投げられながら町を歩く事しか出来なかったゲルト。

その父親はリリアに付き、剣と術の修行に明け暮れた。誰にも交われなかったゲルトを救いたかった。だからこそ、リリアはやりたくもない勇者の修行に従事し、あたかも天才であるかのように振舞った。

ゲルトは思い出していた。幼き日々、リリアが自分の手を取って何を行ったのか。『自分よりもっともっと、ずっと強い勇者になれるよ』、と。

「う　わああああああっ！！！」

だからと言ってもう引き返す事は出来なかった。リリアを超えるそしていつかは倒す為だけに力を蓄えてきた。もうそれを空回りさせるわけにはいかなかった。

全力で解放された漆黒の魔力がリリアを弾き飛ばす。練り上げた全ての力を漆黒の剣に流し込む。螺旋渦巻く華の輝きを構え、ゲルトは突撃する。

それはただの突きだった。魔力を込め螺旋で挟む強烈な一撃。加速し、大地を根こそぎ吹き飛ばしながら突き進む削岩機のように何もかもを散り散りにしながらゲルトはリリアへ迫る。同時にリリアもまた全力で魔力を解放し、聖剣へと思いの全てを流し込んでいた。

「　必ず当てて、必ず殺す技」

両手で剣を振り上げる。刀身に浮かび上がる紋章が輝きを増して行く。

それは、つい昨日会得した必殺技。アクセルの言葉を聞き、自分の

意思で戦う為に覚えた技術。

かつて父がリインフォースで使いこなした奥義。雨の中、白い輝きが空へ立ち上る。『基礎』や『魔力総量』では倒せないゲルトの必殺の攻撃に対し、現時点で唯一対抗し得る必殺の一撃。

「鳴り響け　！」

大気を焼き尽くす白光。迫るは螺旋の漆黒。二つの刃は雄叫びと共に激突した。

ゲルトの突きと魔力の渦に対し、リインフォースで直接斬りつけるリリア。二つの剣はびりびりと震え、リリアの腕に無数の切り傷が奔る。

『剣で炎が切れるか』？ 答えは否。剣では魔法は切れない。いかに強力な武器であつたとしても、剣で魔法を斬る事は基本的には出来ないのだ。

いかに魔力を通した剣と言えども、魔力という触れる事の出来ないもので生み出されている自然現象に対し、物で干渉するには限度がある。

しかしリインフォースは正面からゲルトの生み出す魔力の渦を捉えていた。それどころか魔力の渦を受け、刀身は輝きを増して行くではないか。それこそが聖剣、魔剣と呼ばれるものの強み。『魔法を斬る事が出来る剣』の真骨頂。

炎だろうが雷だろうが水だろうが闇だろうが光だろうが風だろうが関係ない。有象無象の関係なく、聖剣リインフォースは魔の力を両断する。

「リインフォース・ベクトラ
反射共鳴剣ツ！！」

切り裂かれた漆黒の魔力の螺旋は見る見るリインフォースに吸い込まれていく。聖剣リインフォースが引き裂いた魔力の欠片を吸い込

み、リリアの力は急激に増幅されていく。

打ち合いから即座に反撃に転じる、攻防一体の技。カウンターである上にかわされず、同時に威力を増幅する故に必殺。

振り下ろされる光とゲルトの螺旋が激突する。激しく進む力の流れに髪を靡かせ、二人はありつたけの力を込めてその一撃に全てを込めた。

「ゲルトちゃんは、やっぱり強いね」

光の中、リリアが微笑んだ。リインフォースの光が力を失って行く。いかに才能に恵まれた存在と言えども、こう何年も封印した状態でも、常にも鍛錬を積んでいなかったならば、常に第一線の中で活躍してきたゲルトに及ぶはずもない。

リリアのリインフォースを覆う光が闇の渦に掻き消される。結局残ったのは二つの剣と二人の勇者だけだった。止まってしまいそうな時間の中、微笑んだリリアの姿に何もいう事も出来ず、泣きながらゲルトは巨大な剣を深々とリリアの胸に突き刺した。

「……………リリアちゃん？」

リインフォースが堕ちる音が鳴り響いた。

「リリアちゃん？」

震える声で名前を呼ぶ。ぐったりとうなだれたリリアは答えない、ゲルトは剣を引き抜き、そのまま倒れるリリアの身体を抱きとめた。

「リリアちゃん……………うそ……………」

血まみれで膝を突き、抱き合ったまま黙り込む二つの影。

雨を降らせる雲の合間から光が降り注ぎ、二人の悲しい戦いの終わりをただ静かに見下ろしていた。

対の勇者の日(3)

俺が戦いの場にたどり着いた時にはもう既に全てが終わってしまっていた。

雨の降る雲の合間から降り注ぐ光に照らされ、リリアは血塗れで目を閉じていた。俺は目の前の現実を受け入れる事が出来ないまま、ただ呆然と立ち尽くした。

泣きながらリリアを抱きしめるゲルトが顔を上げる。まるで救いを求めるようなその視線に俺はリリアに駆け寄った。リリアは完全に死んでいるように見えた。ラインフォースの封印は解かれ、聖剣は大地に転がっている。ゲルトは何も言わず、俺から視線を反らした。

「リリア……嘘だろ……？」

俺はまた救えなかったのか……？ また、リリアを守れなかった。あの時のように……あの日のように……結局俺は、リリアを救えなかった。

悔しさを叩き付ける大地。齒軋りして俺は絶句していた。何故救えなかった。何故守れなかった。何故傍に居なかった……。

「お願いだ、リリア……！ 目を開けてくれっ！！ リリア！！
リリア ツー！！」

叫び声はきつとリリアには届かない。そう思っていた。

違和感に俺より先に気づいたのはゲルトだった。俺の服を弱弱しい力で引つ張るゲルトに目を開くと、死んだはずのリリアの指先がぴくりと動くのが見えた。

俺の呼びかけが奇跡を起こした わけではない。背筋がぞくりと凍り付くような感覚に思わず身をよじると、突然リリアの伸ばした

手がゲルトの顔を掴んでいた。

「え？」

俺もゲルトもそんな間抜けな言葉しか口に出来なかった。一瞬で身体を起こしたリリアは掴み上げたゲルトを持ち上げ、遙か彼方へと投げつける。

リインフォースを拾い上げ、剣に魔力を込めて薙ぎ払う。周囲を焼き尽くすような白い光の波動を前に、武器も持たないゲルトは成す術も無く蒸発してしまう所だった。

間一髪で間に入る事に成功した俺がリリアの放った魔法を弾く。両腕を交差するように構え、なんとか攻撃を防いだものの、全身に焼きつくような鋭い痛みが走った。

「ナツル……！？」

「……ゲルト、お前……リリアに何をしたんだ！？」

「わ、わたしは……何も……」

立ち上がったリリアが瞳を閉じる。茶色だった髪が銀色に染め上げられ、傷は見る見る癒えて行く。致命傷さえも一瞬で回復し、再び瞳を開いたリリアは金色の眼差しで俺たちをにらみつけていた。

リインフォースに浮かび上がっていた青白い紋章が姿を買え、虹色に輝く。目の前で何が起きているのかはさっぱりわからなかったが、俺は今、ゲルトを守らなければならない……そんな気がしていた。

メリーベルの部屋にあった、^{リンチャックル}紋章武具を両手に装備する。もしいざゲルトと戦う事になったら素手では拙い事はこの間ので判っていたから無許可で持ち出したのだが、まさかリリアと戦う為にはめる事

になろうとは。

「リリア……どう、してしまったんですか……あれは……」

「こつちが知りたいくらいだ。あんなもん　原書には無かったぞ」

二つの拳を正面で突き合わせる。魔力を安定させるのは苦手だが、ナックルで覆うことである程度は制御が出来る。問題はこんな付け焼刃の戦闘力で今のリリアを止める事が出来るのかどうか。

まるで別人のように冷たい視線を俺たちに向けるリリアはリインフォースを肩に寄せ、悠然と歩いてくる。肌でビリビリ感じるくらい、今のリリアは殺気立っている。邪魔をすればゲルトどころではない、俺でさえ迷わず両断するだろうと思うほどに。

「手……貸してもらっても、いいか？」

背後で怯えるゲルトに声をかける。ビビっているのは俺だって同じだ。でもこうなった以上、ゲルトにだって責任はあるんだ。手を貸してもらわなきゃ困る。

ゲルトの身体は震えていた。ゲルトが恐怖するくらい、今のリリアは禍々しい力を放っている。だが、ここでビビって逃げ出したらもう絶対にリリアに信じてもらえない気がした。

「覚悟を決めろよ、黒の勇者。お前の勇氣はそんなものだったのか？」

「　ッ！　言われ、なくても……やりますよ！　責任はわたしにだって、ありますから……！」

「いい返事だ！」

心の中で唱える。救世主という存在へ自分自身を変化させる魔法の呪文。

全身から溢れ出す膨大な量の魔力を、全て左右のルーンナックルへ流し込む。今の俺は道具に頼らないとろくに力を操作することさえ出来ない。だが、それでも。

「目を覚ませ、リリア……！ お前は、優しい勇者になりたかったんじゃないのか　っ……！」

対の勇者の日（3）

「ずっと長い間、彼女の力は自らの課した枷と、ゲインの巻いた鎖で封じられてきた」

闇を切り裂いて草原から立ち上る光。それはシャングリラの病室からでも見る事が出来た。

傷だらけで眠るアクセルの傍ら、窓辺に立ちその光を眺めるアイオンの姿があった。

薄っすらと頬に微笑を浮かべ、真紅の瞳でその輝きを映し出し、心を震わせる。

「ようやく始まるわけだ……。ここがスタートラインだよ、夏流……」

街からその光を見ていたのはアイオンだけではなかった。それぞれの目的、それぞれの想い。物語の登場人物たちの心は今、光の主の上で交差していた。

対峙する白の勇者と救世主。二人の視線が交わった時、リリアは動き出した。大気を軋ませるような膨大な魔力を放つリリアの剣を手中で受けようとする夏流に、背後からゲルトの声が飛んだ。

「受けては駄目っ！！ リインフォースは魔力的防御を一切合切無視して来ますっ！！ 聖剣は、そういうものなんですっ！！」

「何いっ！？ そんな馬鹿なっ！？ 反則じゃ ねえかよっ！」

咄嗟に身をよじり回避する夏流。空振りとなったリインフォースは大地に叩きつけられ、土を空に吹っ飛ばす。

轟音と土の弾幕の中を突き進み、攻撃を仕掛けてくるリリア。夏流を援護しようと剣を失ったゲルトが魔法を詠唱し、闇の光で打ち出した魔力の弾丸がリリアに迫る。

しかし空中で身体を旋廻させたリリアはリインフォースで魔法を掻き消し、それを取り込んださらに強力な一撃を夏流に向けて叩き降ろす。今度は避けきれず、胴体部分をざっくりと斬られた上、土と一緒に派手に吹き飛ばされた。

「ナッル！」

剣を大地に刺し、遠く離れたゲルト目掛けてリリアは魔法を詠唱する。両手の間に溜め込んだ魔力を握り締め、空に掲げて大きく振る上げる。

ジャッジメント・ランス
「断罪の槍」

光で具現化された巨大な槍を振り上げ、投擲する。一直線に加速しながら突っ込んでくる魔法に対し、ゲルトは同時に魔法を唱え、同威力の魔法をぶつけて相殺を試みる。

しかし光の槍はゲルトの生み出した障壁を見る見る貫通してくる。防御貫通効果を付加された上位魔法。その切っ先がゲルトを貫こうとした時、側面から割り込んだ夏流の蹴りが槍を木っ端微塵に砕いていた。

「……ゲルト、回復魔法……使えるか？」

「は、はい……」

「お前は援護だけでいい……リリアは俺が止める」

「でも？」

夏流が呼吸を整え、更に魔力を搾り出すのを見てゲルトは絶句した。今まで目にした事が無いほど膨大な魔力総量に、密度。夏流はつい先程まで魔力のコントロールさえおぼつかなかったというのに、今は既にそれを会得しかけている。

もしも本当の天才や神に寵愛された存在が居るとしたら……彼のような者を言うのではないか。ゲルトはそんな事を考えた。少なくとも自分たちとは違いすぎる。

「貴方は、一体……」

「剣、借りるぞ……。素手じゃ、相性が悪過ぎる！」

ルーンナックルで魔力を制御し、フレグランスを握り締める夏流。ゲルトの回復魔法が傷を何とか塞ぐだけ塞ぐと、接近してくるリリアの斬撃を夏流は受け止めた。

激しい重く、濃い魔力が二つ衝突し、大気が揺れる。夏流は雄叫びを上げ、魔力でリリアを弾き飛ばす。ゲルトのようにフレグラ

ンスを扱えない。その能力も発揮できない。しかし同じく魔力を断ち切る剣を装備した事により、圧倒的不利な状況は打開された。聖剣は魔剣でしか、魔剣は聖剣でしか倒せない。魔法技術や魔力総量も今のリリアは以前とはそれこそ比較にならないほど図抜けている。つい先程ゲルトと戦った時の、さらにその数倍は軽い。それをも超える夏流の構える剣に込められる圧力は半端な物ではなかった。ゲルトは完全に戦いについていけなくなっていた。二人が繰り出す一撃一撃を目で追うのがやっとであり、その様子に恐怖すら覚えた。自分の知っているリリアはあんなに獰猛な剣の使い方をしなかった。あんなに冷酷な目で人を殺そうとはしなかった。まるで別人になってしまったかのようなリリアの姿に、ゲルトは恐怖を押さえ込む事が出来ない。

「いい加減にしろ、リリアッ！！俺が判らないのか！？」

夏流の声は届かない。リリアに振り下ろす刃は戸惑いを隠せなかった。いかに夏流がこの世界の外側の法則を司る存在だとしても、今のリリア相手に手加減をして圧勝できるはずもない。

「頼む、リリア……正気に戻ってくれ！こんな事でお前との物語を終わりにしたくないんだよ！！もっともっとお前の事が知りたいんだっ！！もっとちゃんと……今度はお前の事、わかってやれるようになりたいんだよっ！！」

「鳴り響け……」

剣ごと正面から夏流に体当たりし、距離を離すリリア。水平に剣を構え、身体を捻るようにしてぐるぐるとその場で回りだす。

「
リインフォース・ストラス
連続共鳴剣」

回転の勢いで夏流に斬りかかる光の剣。魔力を迸らせながらスピ
ンし、四連続で夏流に斬りかかり、防御に徹していたその腕を下から
蹴り飛ばす。

「しま　っ!？」

気づいた時にはもう遅い。夏流の手を離れ、魔剣は空を舞う。振り
上げられたリインフォースが強烈に白光を帯びながら振り上げられ、
夏流目掛け、全力で、振り下ろされる　　!

夏流は咄嗟に両手に力を集め、リインフォースを受け止める。刃で
はなく厚みのある刀身を白刃取りしたのである。僅かあと数センチ
で脳天が切断されるという所で刃は何とか動きを止めていた。

「ナツル様ッ!!　これをッ!!」

ナナシが夏流に投げて寄越したのは鎖だった。剣を横に反らし、靴
で刃を大地に減り込ませる。丁度落ちて来た鎖を受け取り、それが
リインフォースを封印していた物だと気づき、拳を強く握り締めた。

「ごめんな、リリア　　!」

剣を地面に突き刺された無防備なリリアの腹部に拳を叩き付ける。
防御が遅れたのか夏流の攻撃力がリリアの障壁を大幅に上回ったの
か、リリアは派手に吹き飛んで行く。

鎖をリインフォースに巻きつける。主の手から離れてもまるで意思
を持つかのようにリインフォースは魔力を纏い、激しく脈動してい
た。鎖に錠を付け……それから夏流ははっとした。

「封印ってどうやるんだよ!?　俺知らないぞ!？」

「魔力を込めて！！ 封印の術式はお父様が作っているはず！！
貴方はそれに新たに魔力を通すだけでいい！！ 早くっ！！」

迫ってくるリリアをゲルトが側面から飛びついて押さえ込む。夏流は深呼吸し、ありったけの力を込めた拳を錠に叩き付けた。

落雷のような轟音が鳴り響き、リインフォースは一瞬で力を失い元のただの重い大剣へと戻った。それと同時にリリアの身体は激しく痙攣し、やがて意識を失ってゲルトの腕の中に倒れこんだ。

「……………お、わった……………のか？」

大人しくなった聖剣を拾い上げ、夏流はリリアとゲルトの元に急いだ。三人ともボロボロだったが、リリアは気を失っているだけできちんと呼吸をしていた。

それを確認し、二人は深々と溜息を漏らした。ゲルトは涙を流し、唇を噛み締め、リリアを強く強く抱きしめていた……………。

さて、それから俺たちはどうなったのか……………。

リリアが眠る病院のベッドの傍で俺はその寝顔を眺めていた。安らかに上下する胸を見ると、とりあえずリリアが活着しているんだって事がはつきりとわかった。

原書を確認しても、相変わらず内容は変化していなかった。というか、俺の早とちりだったらしい。リリアは結局ここで死ぬ予定ではなかったのである。

だがしかし、あのリリアの暴走としか表現の仕様のない状況が追加される事は無かった。まるで原書　この世界にあるルールから外れたイレギュラーな出来事であったかのよう。

ナナシにそれを問い詰めようとしたのだが、やつも判らないとほざき、結局あれがなんだったのかは判らず仕舞い。勇者とその仲間たちは全員仲良く病院入りとなった。

考え事していると背後で扉が開いた。おずおずと顔を出したのはゲルトで、リリアの様子を見て少しだけ安心しているようだった。

「よお。元気そうだな」

「…………お陰さまで」

全然素直に嬉しそうにしないゲルトはそっぽを向いて腕を組んでいた。さて、そういえばリリアはこいつがメリーベルを殺したかなかしたかのように誤解していたようだが、実はそれは違っていた。

「メリーベル・テオドランド…………ですか？ 殺していませんよ？」

と、あの後ゲルトが言うので確かめに戻ってみた所、メリーベルは普通に起きて部屋を片付けていた。

「お、おま…………生きてんじゃねえかよ!？」

「え…………何が？」

ゲルトはやつを気絶させただけだった。その時倒れたメリーベルの手がすべり、机の上にあったペンキが零れてまるで血のようになっていただけらしい。

そのペンキを使ってメッセージを書いたゲルトもそれは確認していた。俺は思い切り溜息を漏らし、とりあえずメリーベルの頭を小突いておいた。

「う、うう……。あたし被害者なのに……。鬼畜……」

そんな事情もあり、リリアに殺人者だと誤解されているのが気に食わないのか、ゲルトは時々こうしてひょっこり顔を出す。多分ゲルトはゲルトなりにリリアを心配しているのだらう。眠ったままのリリアを見つめては苦しそうな表情を浮かべた。

「で……。お前らの間にあった禍根は消えたのか？」

「……………さあ、どうでしょう」

そう言うゲルトの視線は確かに戸惑っていたが、確かにあの戦いの前よりはすっきりした顔をしていた。逆に悩んでしまう原因が幾つか出来たようだったが、一先ずゲルトとリリアの間にあった確執は一段落したように思える。

結局殴り合って好きなことを言い合うのが一番スッキリする方法だと思うのは多分俺だけではないはずだ。あとはリリアが目覚めてくれれば万々歳なのだが、もう何日も眠ったまま目を覚まさない。

アクセルももう退院してバイトに勤んでいるというのに、どうしてしまったのだらうか。傷は俺たちの中で一番浅かった……。一度は死に掛けたが……。というのに、意識だけが戻らない。

色々と俺も考えたい事が増えてしまった。一先ず聖剣に巻いた鎖は外さないようにしたほうがいいような気がする……。

「あの……」

「ん？」

「一度しか、言わないので……。そのつもりで、御願します」

ゲルトは改まった様子で俺と向き合つと、顔を真っ赤にしてぺこりと頭を下げた。

「……ありがとう、ございました」

「へっ？」

「い、一度しか言わないと言いました！」

「いや、そうじゃなくて……何が？」

「貴方が来てくれなかったら、わたしは殺されていました。それはそれで嫌ですが、そうになったら……」

ゲルトの言いたい事はわかる。あんな状態でゲルトを殺してしまつたら、きつとリリアは一生それを後悔し、引き摺りながら生きていかなばならなかっただろう。

そんな風にリリアの事を思いやってやる事が出来る少女が、どうしてあんな無茶な戦いを挑んだのか。その理由を知ってしまった今となつては、どうにもゲルトを憎む事も出来そうになかった。

「感謝だけは、しているんです……ちょっと、だけ」

「ははは……そうかい」

「………あの、リリアにはこの事」

「判つてるよ。内緒にしたいんだろ？ 一日四回くらい見舞いに来てたつて事は黙っておいてやるよ」

ゲルトは俺をにらみつけ、それから走り去って行った。全くなんというかこう、素直じゃないやつだ。

リリアの傍、ベッドに腰を下ろしその手を握り締める。もう何日もリリアの馬鹿さを拝んで居ないと、どうにもこの世界の日常が退屈で仕方が無い。

何をやっても駄目で、何やつても上手くいかなくて、不幸で……でもリリアと一緒に居ると飽きないんだ。馬鹿騒ぎが続く毎日が俺はそれなりに気に入っていて、だから早くリリアが笑いかけてくれな

いと、気持ちが落ち着かない。
そんな自分自身に気づいた時、俺はもつと強くならなければならな
いと思った。リリアを守るように、だけじゃない。この子を救う
には、この世界にある大きな流れを制御出来るようにならねばなら
ない。運命と呼び変えてもいいその彼女を取り巻く鎖を、取り去つ
てあげられるように。

毎日のようにそうして祈っていたお陰だろうか。リリアは急にぱつ
ちりと目を覚ました。それから身体を起こし、その勢いが急すぎて
顔を覗き込んでいた俺の額と正面衝突する。

「わにやつ」

「いてえっ!?!」

お互いにのけぞり、額に手を当てる。リリアは寝ぼけた様子で俺を
ぼうつとしながら見つめると、ほんわかと柔らかいいつもどおりの
笑顔で笑ってくれた。

「あー、師匠……おふあようございま……す?」

「ああ、おはよう……って、どうした……? お目目はっちりじゃ
ねえか……」

「あ、あのう……なつるさん……」

多分色々な事情を思い出したのだろう。申し訳なさそうな顔で俺をじつと見つめるリリア。そういえば闘技場で喧嘩別れとまではいかないが、気まずい空気で別れっけ。

「あの、あの……あれはですね、そのお……う？　な、なつるさん？」

何も言わずにリリアをそつと抱き寄せた。頭を撫でながら腕の中でリリアの言葉を遮る。馬鹿でヘタレなくせに変なところで意地っばりで、無茶ばかりしているこの子の笑顔をまた見る事が出来たのが、多分俺は凄く嬉しかったのだ。

「なな、なつるさん……なんで泣いてるんですか！？」

「いや……マジ、良かった……」

素直にそう思う。俺はまた、冬香の時のように何も出来ないままで終わってしまうのではないかと思うと不安で仕方がなかったんだ。だから毎日リリアの顔を見る度に、胸を貫かれるような痛みに襲われる。俺は君を救う事が出来たのか？　そんな事は訊けないけど、また当たり前のようにこうしておろしている姿を見られる事が、今は最高に幸せだと思えた。

多分俺たちはまだお互いの事を何も判ってはいないし、この世界の事も俺は何もわかつちやいない。沢山の苦難があつて、俺はその全てから君を守ってあげられる自信はないけれど。

「おかえり、リリア……」

俺の言葉にリリアは目を丸くし、それから優しく微笑んでくれる。

「はい」

ベッドの上で暫くそうして抱き合っていると、扉ががらりと開いた。扉の向こうには何故か派手な花束を持ったアクセルとランチバスケットを片手にしたクロロの姿があった。

完全に俺たちは停止する。皆が停止している間に俺は立ち上がり、窓を開けて振り返る。

「誤解だから」

「……ナツルうううう！！ 一体病室で何やってやがったあああああっ！！」

「誤解だつて先に言つてんだろぅが馬鹿野郎がっ！！」

二階の窓から飛び降りる。魔力を使えるようになった今の俺には造作も無いが、風の力を使いこなすアクセルには更に造作も無い。凄まじい勢いでサーベルを振り回して追いかけてくるアクセル。リリアとクロロは窓辺に立って俺たちを見降ろしていた。

「み、見てないで助けてくれえっ！！ こいつ地味に強いんだぞ！？」

「地味にとか言うんじゃねえええ！！ もうちよつとでゲルトにだつて勝つてたっつーのっ！！」

「判ったから！！ 別にお前が考えているような事は何も無かった

からああああ!!」

リリアが笑いながら見下ろしている。クロロがランチバスケットを開き、お茶を淹れている。アクセルは涙目になりながら追いかけてきていて、俺は苦笑しながら走り回る。

かなりバカバカしくて、どうしようもない仲間たちだけね。この世界で会う事が出来た、かけがえのない日々だから。

だから今はもう少しこのアホらしさを満喫していきたい。それに一先ずの問題は、風の速さで繰り出されるアクセルの二対の剣を、どうするかということだ。

ああ、空が青いなあ。そんな事を考えながら俺は借りっぱなしのリンナツクルに魔力を点火した。

「白の勇者が目覚めたのなら、物語を次の段階に進めなくては。そうでしょう？ 救世主様」

学園のルーファウスの執務室。魔術書に映し出されている夏流とアクセルの様子を眺めながら薄暗い闇の中でルーファウスは呟いた。彼が呼びかける声の先、夏流と同じく『この世界の物ではない』服装をした少年が巨大な拳銃に弾丸を込めながら薄く笑いを浮かべていた。

対の勇者の日(3)(後書き)

くディアノイア劇場く

俺たちの戦いはまだ始まったばかりだ……編

アクセル「祝！ 第一部完結！」

ゲルト「え？ どこから第一部だったんですか……」

アクセル「いやまあ、一先ず起承転結の起が一段落したんだよ。作者の中で」

ゲルト「あくまで作者の中で、ですけど」

アクセル「しかし、原書の『勘違い』は酷くないか」

ゲルト「その辺が気になる人は次話も要チェックです」

アクセル「……宣伝じゃねえか、ただの……」

ゲルト「まあ、いいじゃないですか。こんな所までマメにチェックしてる人はそんなに居ないでしょうし」

アクセル「そういえばこの小説ってシリアスなの？ コメディなの？」

ゲルト「え？ コメディじゃなかったんですか？」

〈設定資料集その2〉

＊とりあえず一段落＊

『リリア・ライトフィールド（聖剣解放）』

聖剣リインフォースにかかっている封印を解除した状態のリリア。自分自身に課している魔力の枷と同時にゲインが課したリインフォースの枷を解除する事により、本来持つフェイトから受け継いだ魔力を発揮出来る。

ゲインの死後、封印は一度解放されており、再び鎖を締め直したりリアに解放の権限が委譲されている。この辺はそのうちやる事が出来ればいいなあ。

ゲルト以上の努力家であり、才能にも恵まれていたリリアはゲルトに対する負い目から力を封じて生きてきた。その為長い封印状態の代償で、解放時は上手く戦えない。

リインフォース解放状態では身体能力と魔力総量が大幅に増幅されるが、現段階ではゲルトには及ばない。聖剣の力が凄まじいだけであって、リリア自身の腕はまだそれほど高い錬度ではない。

リリアの未熟を補って余りある伝説の武具リインフォースにより、とりあえずは戦う事が出来るようになったようだが、謎の暴走など解明されていないメカニズムの多いリインフォースをリリアも夏流も危険視している。

『ゲルト・シュヴァイン』

魔剣フレグランスの担い手、十五歳。リリアの幼馴染。

リリアは田舎町の生まれで育ちも田舎だが、早くに「母親を失いシ

ユヴァイン家の近くに住んでいた過去がある。その頃リリアと知り合い、友達になった。

二人の友情は世界の声に引き裂かれ、いつの間にかリリアを強く敵視するようになっていたが、それは逆にリリアを強く認めているからである。

リリアの煮え切らない態度や怠けている様子、自分に負い目を感じている事が我慢ならず、あれこれやっちゃったおっちょこちょいの人。あと大剣でリリアぶっさす。

黒の勇者と呼ばれるもう一人の勇者だが、一つしかない勇者の席をリリアと争っている。

凄まじい負けず嫌いで努力マニア。学園内でも指折りの実力者だが、アクセルには四回負けている。あとツンデレ。リリアが幼児体系なのに比べ、こちらは……。

『アクセル・スキッド』

無名の剣士ことアクセル・スキッド十八歳。実は夏流より年上。

とある事情からバイトをいくつも掛け持ちしており、将来は傭兵家業でガッツリ稼ぐ事を夢見ている。

お気楽な考え方と暑苦しい態度が特徴。リリアの駄目っぷりに惚れているが、それは恋なのかそれとも犬か猫を見るような気持ちなのかは不明。

二対のサーベルを操る剣士で、風を使った高速剣術や特殊な体裁きを得意とする。魔力を放出して敵を切り裂くとかそういうのはとても苦手だが、肌身離さず持ち歩いている剣だけは風で多少操れるようだ。

バイトばかりしてろくにランキング対戦をしていないため順位は低めだが、ゲルトに匹敵する実力を持っている。が、あんまり強さをおおっぴらに見せびらかすのは好きではない。

ゲルトとは何度か戦った縁だが、アクセルのへらへらした態度が気に入らないのかゲルトには妙に嫌われているので、そのうちぶつさされるかもしれない。

リリアに対して、というよりも夏流にとっての兄貴分であってほしいと願う所。

『ロンド 華斬舞』

コマンド：魔力解放 2 3 6 2 3 6 強 2 3 6 弱、中、強で派生。

ゲルト・シュヴァインの必殺技。

フレグランズから放たれる花卉の渦で相手を包み込み、奪われた五感に戸惑っている相手を滅多切りにする。

対アクセル戦で放っていた魔法放出を締めに使うバージンのほかに幾つかバリエーションが存在するが、展開は同じである。

見ている観客には何が起きているのかさっぱりわからないが、花卉が綺麗な必殺技です。

『メイルシュートルーム 渦巻く闇の花卉』

コマンド：魔力解放 4 長押し 6 2 3 強

必殺技の名前が中二すぎて対リリア戦では叫ぶ事を忘れていたゲルトの必殺技。

刃に螺旋状に高速回転する魔力を纏わせ、体ごと敵に突っ込む威力重視の技。

ゲルトが所有する必殺技では今の所最高威力だが、突きの後に幾つか派生技が存在する。リリアに突き刺した直後やつちまったと刃を引っこ抜いてしまったが、きちんと最後まで決まれば文字通りの必殺技。

うっかり刺しちゃって読者にもツツコまれる伝説の技である。

『リインフォース・ベクトラ
反射共鳴剣』

コマンド：ガード中412弱、中、強

リリアがリインフォース解放状態から放つ幾つかのバリエーションのうちの一つ。

とは言うものの、アクセルのアドバイスで急遽使い方だけ覚えただけ焼刃の技で、リインフォースそのものの能力に頼っている部分が大きく、厳密には必殺技ではない。

魔力を切り裂き弾き飛ばし、弾いた魔力に共鳴して力を増幅させるのはリインフォースそのものが元々備えている能力だが、そこから繰り出されるカウンター技。

『リインフォース・ストラス
連続共鳴剣』

コマンド：魔力解放 623強 弱、中、強で派生。

リインフォース開放状態技バリエーションその2。

解放した剣先から放つ光の波動を加速装置に使い、その場で回転しながら敵を切りつける技。リリアは暴走状態時、相手に向かって跳躍しながら放つ事で威力を増幅させていた。

一瞬で多段の攻撃が可能であることが特徴だが、動作は単調で見極めやすい。回転して刃を振り回していると、魔法攻撃は全部弾き返せるので対集団戦闘で有利。

というわけで、一先ず一段落。次からは新しい展開を何か考えたいです。

それではおつかれさまでした。

不吉な予感の日（１）

『原書』。

それは幻想の世界の出来事を記した預言書であり、世界の運命を決定付ける物……俺は勝手にそう解釈していた。

だが、どうだ。リリアをゲルトの剣が貫くというシーンを実際に目の当たりにして、俺はそこに違和感を抱いた。

剣で貫かれたリリアがその後どうなるのか、原書には全く記されていない。だというのに、既に次の物語が薄っすらと浮かびつつある。つまり原書は『物語の主人公が死ななかった』事を前提に話を進めている。

リリアはつまり、あのシーンで死ぬ予定は無かったのだ。ただ剣で貫かれるという事実だけが重要なファクターであり、リリアの生死そのものには関わらない。『リリア・ライトフィールドは死んだ』という明確な表記が無い限り、多少何が起きても結果的に物語りは続くということ。

だがだとすればリリアが大剣で刺されるという致命的なダメージを受けても当たり前のように物語が続いているというこの事実をはどうなるのか。この世界そのものの運命が、リリアの暴走を予期していたと思えない。

しかしその後のリリアの暴走は原書には記されて居ないという矛盾点が発生する。つまりあれば、『リリアは死なない』という未来と同時に、『何故死ななかったのか』という理由はイレギュラーであり、表記されなかったということになる。

原書そのものに記される事が無い、世界の筋書きには存在しない要素。それは物語上多少不自然でも認知され、現実としてこの世界に受け入れられる。しかしあくまでもイレギュラーである為、原書はそれを記さない。

ではイレギュラーとは何か。そう、俺の事だ。俺はこの世界にとつてのイレギュラー要素。この世界の運命を記した原書でさえ、俺の行動を記す事は出来ない。しかし原書は俺の存在を、干渉を認識する。何故ならば俺が介入しなければあの二人の戦いでどちらかは命を落としていたはずだから。

まさに俺が介入したシーンで物語が途切れてしまっている事が証明しているように、俺の干渉はこの世界にイレギュラー要素を盛り込む原因になってしまうということ。

必要以上にこの世界に干渉すれば、筋書きは滅茶苦茶になり原書の内容は崩壊しかねない。それだけはなんとか避けねばならないだろう。

つまり、原書の予知は絶対ではないのだ。しかも内容が書き変わるのには完全に未来が大幅に変更されるのが確定した瞬間のみ。目前に在る未来でさえ、確実な予知が出来るとは言えない。

しかし俺の行動が確実である場合、それを盛り込んだ内容を予知してくるというご丁寧さ……。一体原書の何を信じればいいというのか……。

俺の存在がイレギュラー要素であり、俺の行動がイレギュラーを呼ぶというのであれば、原書に記される事のないリリアの暴走した力は俺の所為だとも言うのか。それとも、俺以外にこの世界にイレギュラーな影響を与える事の出来る人間がいるのか……。

ともかく目の前にある問題はリリアのリインフォースだ。あれがどうして封じられている物なのか、ついでに言えばリリアの暴走した力はなんだったのか……。

わけのわからない事実が続く。一先ず目の前の危機はどうにか乗り越えたものの、リインフォースの謎が解けない限りは安心は出来ない。

ナナシも俺の質問には必要最低限しか答えようとしなが、そもそも奴は何者なのか。使い魔だのなんだのと名乗ってはいるものの、本当に俺の味方なのか？

この世界に俺以外に干渉できる存在が居るとすれば、ナナシかアルセリアしか俺には思いつかない。しかし今の所二人に怪しい動きはないし、ナナシはこの間の事件で俺に鎖を投げ渡してくれもした。となると俺の思い違いなのか。いや、原書に記される事実が確定するよりも前、普段の俺の行動が重要なのだ。いざ問題が起きてからでは全てが遅すぎる。

原書を預言書か何かだと考え過信はしない事。自分自身の行動がイレギュラー効果を持つという事。兎に角この二つを肝に刻まねばならない。

「……………しかし、なあ」

ベッドの上で原書眺める。

この本はそもそも冬香が記したものだ。そもそも原書と呼ばれるだけあり、この世界の元になった本だ。その内容がバシバシ書き換えられているというのは、如何なものなのだろうか。

そもそも俺はこの本を知っているはず。つまりこの世界に起きる大きな事件くらいは事前に理解出来るはずなのだ。だというのに思い出せないのは何故なのか。

ファンタジックな世界観に馴染むのに戸惑って今まで考える余裕も無かったが、いよいよもって俺は自分の役割に疑問を抱くようになっていた。

救世主という言葉の意味。冬香はいつたい、俺にこの世界の何を救わせようとしていたのだろうか。

勇者ご一行様の日（１）

「メリーベル、いるか……………」

メリーベルの研究室を訪れた俺は扉を開いた瞬間啞然としていた。中では相変わらずの様子で猫に囲まれているメリーベルと、その周囲をせつせとモップがけするゲルトの姿があったからである。

ゲルトはモップを両手で抱えたまま目をぱちくりさせている。勿論俺もぱちくりする。何故ならゲルトはその衣装がどう見てもおかしかったからである。

やたらとスカートの丈の短いエプロンドレスを装着し、頭にはネコミミが生えている。所謂ネコミミメイドというやつである。ゲルトとは全く縁の無さそうなその外見……いやそもそも何故ここにゲルトがいるのか。疑問は尽きなかったが、俺はとりあえず腕を組んで口元に手を当てる。

「ち、違うんです……これは……」

「いや、そういう趣味があっても別にいいと思うんだ、俺は……。誰にも言い触らしたりしないからさ……」

「違うと言っているでしょうっ!？」

ゲルトは顔を真っ赤にしながら俺の首筋にモップを突きつける。が、別に剣でもないものを首筋に突きつけられても怖くもなんともない……というか、こいつこれ癖だよな多分……。

メリーベルは俺の疑惑の視線に応えるように腰に手を当て、小さな薬品の入った小瓶をちらつかせる。ゲルトはそれを恨めしそうにじいっと見つめ、黙って掃除に戻った。

「お前、ゲルトに何したんだ……?」

「別に、弁償してもらってるだけ。この間実験を台無しにされたし、

高価な物も派手にぶっ壊してくれたから。本人が頭下げてどうしたら許してくれるかっていうから、一週間ネコミミメイド姿でご奉仕しなさいって言っただけ。正当な取引」

とは言うものの、ゲルトが逃げ出さないようにとネコミミを解除する薬品　俺も見覚えがある　を預かり、わざわざ目の前でちらつかせているらしい。

ゲルトは顔を真っ赤にしながらせっせと床掃除を続けている。ゲルトをメイドとしてこき使っているせいか、研究室は以前より格段に綺麗に片付いていた。

「それで、御用は？」

白衣のポケットに両手をつっ込み、メリーベルは首を傾げる。俺は勝手に借りたままだったルーンナックルをメリーベルに差し出した。

「いや、借りたままだったから返そうと思って」

「んー、別に良かったのに。どうせもう使う予定も無いし……事前」
に魔術を込めないと一般人には使えないから、突然襲撃されたりすると無意味だし」

「……」

何かを抗議するかのようにゲルトがメリーベルを見つめる。これは完全にメリーベルに頭が上がらなくなっているらしい。だからといって性格的に約束を反故にするようなことはしないだろうし、残念ながらゲルトはもう暫くこの格好のままだろう……。

ゲルトを眺めてはニヤニヤしているメリーベル。こいつは本当に性格捻じ曲がってるな……。それにしてもスカートの丈短いな。ああ、

短いとも。

「それで？　ただ返す為だけに来たんじゃないんでしょ？」

流石に鋭い。俺は頷き、ルーンナツクルを手にして言った。

「これ、俺に出来ないか？」

「いいよ」

「ありがとう」

「……ちよつと待ってください。それ、ちよつと高価な代物じゃないんですか？」

余りにもスムーズに話が進みすぎたのが驚きだったのか、ゲルトが態々横から口を挟んできた。スカートの裾が短いのを気にしてか、内股になつてもぞもぞしながら俺たちを見ている。二人して腕を組んでその姿にニヤニヤしていると、泣き出しそうな顔で台所に引込んでしまった。

「面白いなあ」

「面白いでしょ？　まあ、それをあげるのは構わないけど……あくまでそれはあたしのための武器だから、サイズとかも合っていないだろうし……良ければナツルのために作ってあげてもいいけど」

「マジか？　そりゃ助かる」

正直俺は剣とか武器を使うより素手で格闘する方が性に合っている。

だが流石に素手で刃物と渡り合うのは難しいので、ルーンナツクルは俺にとって理想的な武器なのだ。

メリーベルは早速俺の手足のサイズを測定し、それから俺の魔力総量や魔力性質について細かく訊いてきた。一度外に出て魔力解放したところ、目を丸くしていたのは言うまでも無い。

「その魔力総量、普通じゃないけど……でも、興味あるね。作り甲斐があった方が、燃える」

ということと、すっかりやる気になってくれたメリーベルは何やら研究そっちのけで俺のルーンナツクル製作に取り掛かった。ひつついてくる猫たちを引っぺがしながらもてきばきと設計図作りに励んでいた。

こうなるとメリーベルは周りの話が聞こえなくなるらしい。俺は後ろに突っ立っているだけ邪魔そうなので、一先ずお暇することにした。

「ま、待ってください！ この事は他の人には……！」

「……どうしよっかなあ」

俺が視線を反らして笑うと、ゲルトは猛然と駆け寄ってきた。台所にあつた包丁に闇の魔力を込め、俺に突撃してくる。

驚いてその腕を取り、ゲルトの背後に回って腕を固める。ぎりぎりと凄まじい力で暴れるゲルトを押さえつけながら俺は苦笑を浮かべた。

「おい……殺す気かお前……」

「貴方は一度くらい死んだ方が世の為です……そくに違いありません」

ん……」

「ふざけるなよ、包丁だってお前魔力込めたら普通に死ぬじゃねえか……」

「殺す気ですから当然でしょう。手を離してくださいよ……」

二人して笑いながら格闘する。しばらくそうしてジタバタしているとメリーベルが猫を投げつけ、顔面にそれが引付いたゲルトはその場でジタバタもがいていた。

「うるさい」

「……ごめんなさい、帰ります」

「んーっ!! んんんーっ!!……!!」

猫を顔にくっつけたまま何かを抗議するゲルトを放置して部屋出る。とりあえずこれで武器の心配は無さそうだが……さて、どうしたものか。

しかしゲルトも馬鹿正直なやつだ。メリーベルにわざわざ謝りに行ってこき使われているというのもあいづらいといえはあいづらいが、メリーベルも抜け目ないなあ……。

そんなわけで俺はリリアとアクセルが特訓をしている公園に向かった。公園ではリリアとアクセルがアイスを食べながらまったりしていた。

「お前ら修行してるんじゃないのかよ……」

「お、きたきた! いや、修行しようと思ったんだけどさあ……」

さて、リリア・ライトフィールドが俺同様二重の封印で己を制していたのは前回の戦いでわかった。となれば、封印を解放した状態にまずは慣れねばならないだろう。

前回暴走行為に走ってしまったのも恐らくは魔力が制御できていなかったからだ。あれが俺の魔力解放時の爆発と類似するものかどうかはわからないが、とにかく慣れないことには始まらない。

何より封印状態のリリアではどんなに頑張ったところで一般人以下なのだ。封印解放状態をいつでも発動可能に出来なければお話にならない。しかし、

「お前、この間リリアちゃんが剣を開放した時に鎖を封じたんだって？」

「ああ、そうだけど？」

「そうだけど、じゃねえよっ！！　そしたらもうお前にしか封印解除出来ないだろうがっ！！」

あの時俺は思い切り自分の莫大な魔力を流し込んで封印の術式を発動した。術式そのものは元々鎖が所持していたが、そこに流し込まれる魔力の量で封印の密度が変わってくる。

自分で言うのもあれだが、客観的に判断して俺に匹敵する魔力の人間は学園内に数えるほどしかない。そもそも封印の上書きなどそう容易い事ではないのだ。自分の魔力にかまけて何も考えずに思い切り発動してしまったせいで、もう俺以外の人間には封印の上書きも、解除も出来なくなってしまったらしい。

「……ってことは、何？　俺がいないとリリアは聖剣を解放出来ないって事……？」

二人が同時に頷いた。とりあえず事情はわかった。というか、それはそれで都合がいいのかもしれない。

リリアの剣が解放されればまたいつあの時のように暴れだすかわからないわけで。それを制する事が出来る人間が傍にいない状況で解放する事が無いように出来るのなら、まあそれはそれで構わないか。

「じゃあ俺がやるよ。普通に解除すればいいんだろ？」

鎖に手を当て、魔力を流し込む。俺の力そのものが鍵の役割を果たすようになっていくらしく、錠はあっさりと落ちた。その途端にリリアの全身を凄まじい魔力が覆い、アクセルは思い切りのけぞった。

「うげ、マジで！？ 話には聞いてたけど、まるで別人だな……」

白銀の光がリリアを覆っている。とりあえず剣を振ってみようという事でリインフォースを構えたリリア。思い切り剣を振り上げ、『よいしょ』とかいって振り下ろそうとする。その瞬間アクセルが剣を抜き、俺は背後からリリアの腕を押さえ込んだ。

耳を劈くような轟音が鳴り響き、アクセルの剣が風の力でリインフォースを大地に弾く。レンガにざっくりとつきささったリインフォースを前にリリアは目をぱちくりさせていた。

「　　つぶねえっ！！ 街中でそんな思いつきり剣振り上げるやつがあるかっ！！」

「え？ え？ だって、いやあ……リリア、元々一生懸命力を込めないで剣持ち上がらなかったから……つい」

「あのねえ、リリアちゃん……。その威力で普通に振り下ろしたら、

みんなの憩いの場所が消滅しちゃうから……」

俺は慌てて鎖を剣に巻きつけて封印した。リリアの頭を叩き、レングの上に正座させる。

それから自分が以下に強い力の可能性を秘めているのかを延々と説教した。不用意に剣を振れば他の物を大きく傷付けてしまうという事。リリアは常に全力でちっばけな力しか出せなかったせい、剣を解放しても全力でしか振れないらしい。まずはその悪癖を何とかしなければ。

涙目になりながらコクコク頷いて俺の話聞くリリア。もう一度聖剣を解放し、今度は剣を持たせないようにすることにした。

「とにかくお前は封印されてない状態での日常生活に慣れる……。話はそれからだ」

「は、はい……」

自分の身体に違和感を覚えるのか、手を握ったり開いたりしながら眉を潜めているリリア。そもそもこんな修行を始めるきっかけになったのは、意外にもリリア自身の希望からだった。

聖剣の力を封じ続ける事がゲルトの気持ちに裏切る事になるのだと彼女も気づいたのかもしれない。そして何よりも、この間ゲルトに負けたのが相当悔しかったらしい。目を覚ましたその日にリリアは引き攣った笑みを浮かべながら、

「ゲルトちゃん、『必殺技』をリリアに直撃させたんですよ……ふふ、ふふふ……」

「あ、あのー？ リリアさーん……？」

「お見舞いにも来ないし……この借りはいずれ返させてもらうもんね……」

まさか一日四回も見舞いに来てましたよーとは言えないしな……。いや、本人の希望だし、黙っていよう。そのほうがなんか、リリアもやる気出るみたいだし……。

そんなわけでリリアは退院するなりすぐに修行を再開した。そのやる気は以前にもまして燃え上がっているのだが、結局リリアは自分がゲルトを殺しかけた事を覚えていないしかった。

わざわざ言つのもどうかと思い、結局言うタイミングを逃してしまつたまま今になってしまったが、俺が鎖の封印権を持つのなら俺がしっかり管理すればいいだけのことが……。

「あのう、師匠」

「ん？」

「その鎖……師匠が預かっててくれませんか？」

リリアはこれからは封印の鎖に頼らず、解放状態で生活する事にしたらしい。そのほうが早く自分の力に慣れるだろうし、カンも取り戻せるだろう。概ね賛成だが、不安があるとすればリインフォースの事が……。

「じゃあ、鎖ついでにリインフォースも俺に預からせてくれ。どっちみち今のお前が持ち歩いてると、うっかり転んで投擲したりして町が破壊されそうだし」

あながちこれが冗談じゃないのだから笑えない。リリアは乾いた笑顔を浮かべながら視線を反らしていた。うん、やっぱり俺が預かる

う。

リインフォースと鎖を預かる事にした俺はとりあえず鎖を……両腕に巻きつけて袖口に留める事にした。ちよつとした防具代わりというわけではないが、これで身に着けていても違和感はないだろう。鎖を装備しているとリリアが顔を紅くしながら俺を見ている事に気づいた。首を傾げると、リリアは慌てた様子で笑いながら言う。

「いや、なんか、師匠とリリアを結んでる絆みたいですね、その鎖」

「……お前よくそういう恥ずかしい事を平然と言えるな」

「え？ え？」

「はいはい、いいからその状態で走って来い。はい、スタート」

「はい！ って、わ、わわわ……あにやあつ！？」

走り出そうとしたのだが、身体能力が急上昇しているのについていけなかったのか、すかさず自分の右足に左足を引っ掛け、派手に転倒。否、空中を吹っ飛んで行く。頭から木々に激突し、凄まじい轟音が鳴り響いた。

「リリアちゃん！？ ちょ、どんだけ派手に転んでるんだよ！？」

そんなリリアを助けにアクセルが走っていく。折れかけた大木の前で気絶しているリリアを抱き起こし、アクセルが慌てているのを眺めながら鎖を見つめた。これからは俺がリリアの鎖になってやらねばならない。もうあんな事には二度とならないように……。

「先は長そうですが、勇者の強さは順調に上がっているようですね」
頭の上によじ登ったうさがそんな事を言う。確かにリリアは強くなっている……いや、ただ元通りになっただけなのだが。

立派な勇者というものがどんなものなのかはわからないが、ゲルトの存在がリリアに力を与えている。なんだかんだで二人はいいライバルで、お互いの存在がお互いの起爆剤になっているのだ。限度を過ぎた確執は一応消え去ったわけで、これからは正々堂々競い合う事が出来るだろう。

リリアはこのまま行けばゲルトに匹敵するくらいの力を手に入れる。そうなれば大分手がかからなくなるだろう。問題はその分、リリアが強くなったら強くなっただけ俺は彼女を止められるだけの力をつけなければならぬという事だ。

そもそも、何故勇者なんてものが育つ必要があるのか。勇者が育たなければ世界がどうなってしまうのか……。頭の上のうさを抱き下ろし、地面に放り投げる。

「で、結局これから何が起こるんだ？」

「まあ、色々です。今は強くなること、そしてリリアに様々な経験を積ませる事です」

「……ゲルトはどうなんだ？ あいつも勇者なんだろう？」

「お忘れですか？ 勇者はどちらか一人のみ……そしてこの物語の主人公はリリア・ライトフィールドです。ゲルト・シュヴァインに肩入れすれば、それだけ貴方が辛くなるのではないですか？」

全く持つてその通りなのだが……。いや、あまり考えすぎないようにしよう。考えれば考えるだけドツボにはまる。今はリリアの剣を

封じる事だけ考えよう。

「いやあ、見違える程リリアは強くなったようだね。尤も、あの姿こそ彼女の本質なのだろうけど」

「ああ……。って、アイオーン!? いつからそこに!?!」

振り返るとそこにアイオーンが立っていた。こいつ、普通に声をかけてくるって事が出来ないんだろうか。

真紅の髪を揺らし、嫌な笑顔を浮かべながら俺を見つめている。それにしてもこいつも只者じゃないな……。自分でも感覚は鋭くなってきたと思うのだが、こいつの登場だけは一切見抜けない。

「いつからって、ずっとだよ。ボクはね、夏流? 君の事をずっとと見つめているのさ。ふふ、ふふふ」

「おっかない事を言うな……。それで、何か用か?」

「用が無ければ君に会いに来てはいけないのかい?」

胸に手をあて、笑うアイオーン。本当にコイツと話していると疲れる……。

「ボクは君自身に興味があるんだ。だから君ともっと仲良くなりたいただけなんだよ。勇者やら何やらなんてどうでも良くてね……。どうだい? 一緒に食事でも」

「なんか胡散臭くて正直一緒にメシ食う気はしないんだが……。俺の何がそんなに興味をそそるんだ?」

「決まっているじゃないか。全てだよ、夏流。君の存在、君の言葉、君の想い……。今ボクの興味は君一点に注がれている。君も色々知りたいんじゃないかい？ この世界の秘密、とか……」

「何だと？」

俺はこの世界にとってイレギュラーな存在……原書のルールにそぐわない者。だが、それを知っているのは学園長かつさぎだけのはず……。こいつは俺の何を知っているっていうんだ。世界の秘密……？ 何の事を言っているんだ？ 全く判らない。挑発的な笑顔だけがじりじりと俺の疑念を焦がして行く。

「知りたいかい？ 喉から手が出るほど知りたいって顔をしているよ。そんなにがつつかなくても教えてあげるさ。ただし、条件がある」

「……何だ？」

「簡単な事だよ。ボクと戦って欲しいんだ、夏流。闘技場でね」

それそのものは確かに問題ではない。俺たちは同じ学園の生徒……試合という形式ならば間違いもそう起こらないだろう。

だが、確かアイオーンはゲルトと同格のはず。登録さえしていない俺が彼女と戦う事など出来るはずも無い。

「大丈夫だよ。決まった時間に事前申請しておけば、練習試合に使う事も出来るんだ。ランキングは関係なく、ね」

確かにそれもそうだ。一日中ランキングバトルが行われているわけ

ではない。授業も行われるし、勿論練習にも使われるだろう。
だがそこまでして俺と戦いたいという理由はなんなのか。俺の魔力
総量のせいかな？ それとも本当に俺の素性について何かを知ってい
るのか……。

だめだ、考えてもわからない。だが少なくともこの胡散臭い女の本
心を少しでも探っておきたいのは事実。

「……判った、条件を飲む。約束を反故にするなよ、ネクロマンサー死術使い」

「ふふ、心得たよ。それじゃあ連絡は追って。『武器もまだ仕上が
っていない』だろうしね……ふふ」

まさか本当に俺のあとを付回していたとでもいうのか。背筋がぞく
りとする感覚を残し、アイオーンは立ち去っていく。

「なにやら大変な事になりましたね」

うさぎの他人行儀な言葉に溜息を漏らした。
この世界の謎……。やはり、そうなのか？

俺以外にも、この世界に干渉できる存在が……俺の存在を知る人間
が、他にも……。

考えても仕方がない。今はせめて少しでもアイオーンに太刀打ちで
きるように、自分の力をコントロール出来るよう努力するだけだ
。

不吉な予感の日（1）（後書き）

↓ディアノイア劇場↓

明日は休みだ編

『メインヒロイン（笑）』

アクセル「メインヒロインって誰だと思う？」

リリア「うん。まず、その質問を正面から堂々とリリアにする時点でもものすごく失礼だと思うんですけど、それはどうなんですか？」

アクセル「いや、へこたれ勇者様が一応メインヒロインなのはわかるんだけどさ。結局の所ヒロインとして認められているのは誰なのかって話で」

リリア「勿論それはリリアですよ。ツンデレなんて目じゃないですよ。最近の業界は何でもかんでもツンデレにしすぎなんですよ！ 今だからこそアホの子が見直されるべきなんですよ！」

アクセル「まあ確かに……リリアちゃん以外の女の子は全部ツンデレな気もする……っていうかリリアちゃんも意外とツンデレなんじゃない」

リリア「ツンデレとかいうなあっ！ ゲルトちゃんはどうせ同人誌

とかで本がいつぱい出る感じの脇役なんだから、せめてリリアは王道ヒロインなのーっ!」

アクセル「……ああ、いるよね。メインヒロインより明らかに人気のあるサブキャラとか……」

『二人の相性』

アクセル「あ、ゲルト」

ゲルト「うっ……。アクセル・スキッドですか……。何か用ですか？」

アクセル「顔見ただけで嫌そうな顔するなよー」

ゲルト「貴方は何だか苦手なんですよ……。恐らく相性的によくないんでしょう」

アクセル「そんなことはないぞ？ 属性的に一番相性が悪いはずのリリアにデレデレじゃないか、お前」

ゲルト「……うっかりぶっ刺されたいんですか、貴方は」

『二人の相性その2』

メリーベル「あ、ゲルト」

ゲルト「ひいっ!？ め、メリーベル・テオドランド……。何か用

ですか？」

メリーベル「顔を見ただけで悲鳴を上げるとはこれいかに」

ゲルト「貴方だけはもう二度と敵に回したくありません……。とうか、女の子にあんな格好をさせて嬉しいんですか？」

メリーベル「嬉しいし、楽しいし。それに写真は金になるから」

ゲルト「……………あの、その写真は、いくら出せば全て買い取れますか……………」

『中二病（笑）』

メリーベル「ナックルの試着をしてもらおうと思ったら、なんだかナツルすごい格好になってるね」

夏流「ん、この鎖か？ だって他につけるとこないんだもんしょうがないだろ。それに魔力通ってる鎖だから防御力高いんだぞ」

メリーベル「じゃらじゃら鎖ついてると急激に安っぽく見えるのはあたしだけ？ まあしょうがない、鎖に繋げるナックルにしてあげるけどさ」

夏流「ああ、そりやどうも。でもそんな事言ったら聖剣解放とかでパワーアップしたりするへこたれ勇者さまとかのほうか余程中二病じゃないか」

リリア「あのう、リリア十五歳……中三ですよ？ 知ってました

か……？」

『必殺技』

リリア「渦巻く闇の花弁」
マイルシュトローム

ゲルト「……………」

リリア「渦巻く闇の花弁（笑）」
マイルシュトローム

ゲルト「うがああああああつー！！」

リリア「めいるしゅとろーむー」

ゲルト「絶対叫ばないもん！ 絶対叫ばないもんんんっー！！」

『強さ』

アクセル「結局この話、キャラの強さがよくわかんねえよ。もっとわかりやすく例えてくれないかなあ」

夏流「そうだな……。俺がアバン先生だとすると」

アクセル「もう既によくわかんねえじゃねえか」

夏流「リリアは……アムロ・レイくらいか。そうするとゲルトはシヤアくらい……………」

アクセル「俺は？」

夏流「……………DSライトくん？」

不吉な予感の日（２）

もうこちらの世界にきてどれくらい時間が経ったのだろうか。

学園の授業に出席する事も当たり前となり、毎日切磋琢磨しているお陰が大分魔力のコントロールも様になってきた。

ルーンナツクルの完成を待つ間、学園の生徒として色々と学んできたが、俺は自分自身の特性についてようやく理解し始めていた。

まず、俺はアクセル同様魔力を放出する技術が圧倒的に苦手であるということ。そもそも魔力というものを生まれ持って操る事が出来るこの世界の人間と比べ、俺はこの十七歳の冬になるまで全く魔力の存在に触れる事がなかった。以下に体内に膨大な量の魔力を蓄積していたとしても、魔法として放出するのはやはり難しいのだ。

初歩的な魔法でさえ放つ事が出来ない。いや、放つ事が出来ないわけではないが、魔法を撃とうとすると膨大な魔力量が邪魔をし、下手をすると暴発して手元で爆発したりするのである。

自分の中に仮に百万の力が渦巻いているとして、その螺旋の中から正確に放出分の百程度の力を切り分けて放つのが兎に角苦手だった。それに魔法を覚えるのには時間がかかるもの。この学園の生徒たちでさえ年単位の時間を費やして新しい術式を学んでいく。そもそも魔術というやつは一子相伝……親から子へと自然に受け継がれる物。それがない以上、そのそも最初から魔法に対する適正はないと言えるのかもしれない。

魔法の大変な所はそれだけではない。術式を発動させる為の適正。道具、或いは自らの意思による術式の構築。放出に至るまでの魔力の均一化、移動……。何故ゲルトやリリアはあんな簡単に魔法を使えたのか逆に理解出来ない。それこそ天才という事なのだろうか。まあ兎も角俺は天才ではなかったという事らしい。いくら膨大な魔力量があったとしても、それをカタチに出来ないのでは意味が無

い。一先ず自分の身体能力の向上と動作に合わせた精密な力のコントロールを覚える事で、戦士タイプに特化させる方針で行く事にした。

「まあ、戦士だからといって魔法が使えないという訳でもない！」

俺が相談を持ちかけたのは戦士科の教師、ソウル・イグライト先生だった。ムツキムキの筋肉質の男で、やたらと身体にピッチリと合う布地の服装を好む、暑苦しい男だ。ここ数日は先生に色々と師事を仰いでいる。そもそも近場に有能な教師がいるのだから、それに頼らない手はない。

アクセルに相談するのもいいのだが、アクセルはあくまで剣士だ。俺は剣を使わない格闘スタイルに進みたいので、本質がそもそも異なる。もう基本的な魔力がどうこうというレベルではないのだから、教師に聞くのが一番早いだろう。尤もこうして教師の話を聞いて普通に相談できるのはアクセルに基礎を教わったお陰なのだが。

「例えば、武器そのものに術式を刻んだ物を使用するという手がある。剣や槍などの刀身にあらかじめ術式を刻んでおき、魔力を通して発動するだけで即座に術を発動出来るようにする、とかな」

ゲルトの魔剣やリリアの聖剣はそのタイプらしい。刀身に薄っすら刻まれている溝に魔力を通す事で、刃に紋章が浮かび上がり術式が発動するのだ。

「放出だけに使う必要はないぞ！ 他にも自分の身体を強化する術式を刻んでおくのかもアリだ」

それはメリーベルのタイプ。ただしこちらは事前に魔力を込めるなど工夫をしないと、常時自分の力を増幅していてもいずれは枯渇し

てしまう。つまり短期決戦用のドーピング魔法のようなものだ。

「若い内は色々やっておくもんだ。俺も若い頃は、剣やら槍やら斧やら色々使ってみたもんだ。自分に合う武器を探すのが一番だな、ハッハッハ！」

「それで、結局先生はどの武器が最強だと思ったんですか？」

「あん？ そうだな……最強の武器は……ハルバードの先端に刀ついたりしたら強いんじゃない？」

かなり適当な事を言っただけで豪快に笑っているソウル先生。つかそれ、あんたが今言った武器全部くっつけただけじゃねえか。

しかし結局の所彼の結論は『素手が一番つええ』だそうで、あらゆる武器を使いこなせるのは勿論彼は素手が一番強いと信じているらしい。

同じ格闘スタイルの先人としては見習う所もあるのだが、いかんせん若干馬鹿なのがどうにもならない。リリアも確か戦士科だったはずだから、こいつの授業を毎日受けているのか。頭が悪くなりそうだ。

「おや、こんな所に居たんですかソウル。もう次の授業が始まりますよ。魔術学科と戦士学科の合同訓練なんだから、遅刻しないでくださいよ」

「お、ルーファウスじゃねえか！ 相変わらず細いな……メシちゃんと食ってるか！？」

腕を組んだまま豪快に笑うソウル。ルーファウスはその姿に溜息を漏らしている。ふとその視線がこちらに向けられ、彼は俺の前に歩

いてきた。

「こんにちは、本城夏流君。聞いたよ？ 勇者同士の決闘紛いの行為を制止したとか」

一体どこで誰が見ていたのかは知らないが、リリアとゲルトの決闘は既に学園中の噂になりつつあった。勿論それを止めたのが俺だということも、である。

後で知ったことなのだが、生徒同士の決闘行為は基本的にご法度。故に闘技場という正式な決闘の場が用意されている。リリアとゲルトはその学園の法を破り、私利私欲のために力を使ってしまった。当然、何らかの処罰が降されるはずであった。

それを庇ってくれたのがこのルーファウス先生だという事をゲルトから俺は聞いていた。相変わらずメイド服姿のままメリーベルにこき使われているゲルトから事情を聞くのは至難だったが、お陰で恩人の名前を知る事が出来た。

「先生のお陰で二人とも罰せられずに済んだそうですね。俺からも礼を言わせてください」

「いやいや、いいんだよ。この世界の未来の平和を担う二人の経歴に傷をつけるわけにはいかないしね。それに二人とも僕たちの大事な生徒だから」

俺たちが真面目な話をしている背後でソウルが何故か腹筋を鍛え始めていた。俺はもう無視して話を進める。

「それにしても、よく二人の刃を止める事が出来たものだね。君も中々優秀な生徒だと聞き及んではいるものの、一体どうやって阻止を成しえたのか疑問では在るね」

「ああ、たまたま……なんです。結局リアのほうが気絶しちゃって、後は運んだだけです」

咄嗟に嘘を付いた。だが大体間違っではないはずだ。俺はあの時二人の戦いをとめられなかった。問題はその後に起きたのだから。ルーファウスは腕を組み、小さく頷いた。そうして俺たちの足元で懸命に筋トレしている暑苦しい男を足蹴にする。

「いつまでそうしているつもりですか、ソウル。さっさと行きますよ」

「いや、お前らが話している間鍛えてようと思ってな。時間さえあれば筋トレしてるからな、俺は」

「そんな事はどうでもいいんですよ。それじゃあ夏流君、また授業でお会いしましょう。尤も貴方は、魔術学科にはあまり顔を出さないでしようけれどね」
わたしのところ

去っていく二人に会釈する。それにしても学園の教師ってのは随分と若いんだな。二人とも二十代後半くらいにしか見えない。

というか、この学園には全体的に若い人間しか存在しない気がする。それが過去に起きた戦いの所為なのかどうかは判らないが、先生たちも色々大変なのだなあとそんなことだけは考えるのであった。

不吉な予感の日（２）

先生二人を見送り、廊下を歩く。次に受けたい授業までは間がある

ので受付でランキング表でも見てこようかと思ったところ、ロビーに目立つ人の姿があった。

受付の前にメイド服のゲルトが立っている。あいつまさかあの格好で今まで授業に出ていたのかと思うと笑いを堪えきれなくなった。思わず噴出すと地獄耳に反応したゲルトが振り返る。

「ホンジョウナツル!? 何故ここに!？」

「何故って……俺この学園の生徒だけど」

「いや、それはそうなんですが……くうっ! 笑うなっ!」

ゲルトが首筋に箒を突きつける。一体それでどうするつもりなのだろうか。というかこいつ、フレグランスはどうした。

暫くの間ゲルトは箒を見つめて固まっていた。それから箒を手元に手繰り寄せ、真顔で俺を見つめる。

「……フレグランスじゃない!？」

「当たり前だろっ!？ お前それ今まで魔剣だと思って持ち歩いてたのかっ!？」

「くっ……。つい、掃除の途中で学園に来てしまったせいでしょうか。全く忌々しい……」

つてことはこいつ、背中に箒さ担いで悠然とここまで歩いてきたってことか。滅茶苦茶かつこわるいな。

それにしても本当に真面目なやつだなあ。普通メイド服で登校してこないぞ。いくらメリーベルと約束したからってそこまでしなくてもいいものを。

ああ、もしかして本当にそういう趣味なのか。いや、いいんじゃないか。超ミニスカートを履きたくなるお年頃なんだろう。普段のロングスカートは流石に若い女の子にしては露出無さすぎだったもんな。しょうがないしょうがない。

「何を一人で勝手に納得しているんですか……？」

「いやいや、なんでもないよ。まあどっちにしろそんな格好してたら『あの』ゲルト・シュヴァインだとは誰も思わないだろうしな、うん」

腕を組んでそうやって納得していると背後から声が聞こえた。振り返るとリリアが猛然とした勢いでこちらに駆け寄ってくる。

「なーっーるーさーんー」

「おおあああああっ！？ 足速っ！？」

「リリア・ライトファイ……ふぎゅっ！？」

そのまま駆け寄ってきたリリアに跳ね飛ばされ、受付の向こう側にぶっ飛んで行くゲルト。急ブレーキをかけたリリアの足元から焦げ付くような匂いがしている。どんな速さで駆け寄ってきたんだ。

「はあはあ……危ない危ない、また吹っ飛ぶ所でした！」

「いや、今お前人轢いたけど……いやもういいや。とりあえず魔力解放生活には慣れてきたか？」

ゲルトが吹っ飛ばされたのは、まあしょうがない。リリアが猛然と

駆け寄ってくるのを見たら避けるか魔力防御しないといけないという事をそろそろやつも学んだ方がいい。というか、自分の身に危険が迫っている時にうっかり相手の名前をフルネームで叫ぼうとするからだ。

「慣れてきた……つもりなんですけど。ペンはすぐ折れちゃうし、目覚まし時計叩くと木っ端微塵になっちゃうし、なんだかリリア怪力ばかになったみたいですよ」

実際そうだった気がする。それに相変わらず魔力をガンガン消費しているせいですぐへこたれるし……。なんと燃費の悪い勇者戦車なんだこいつ。

瓦礫の山からようやくゲルトが起き上がってきた。そのままふらふらと俺たちのところに戻ってくると、リリアを箒でぶっ叩いた。しかし今のリリアは全身を強烈な魔力が容赦なく覆っているので、へし折れたのは箒の方でリリアは無傷だった。

「何をするんですか貴方は！？ 廊下は走るなという基本的なルールさえ守れないんですか！？」

「あ、ゲルトちゃんだ……。つて、どうしたのその格好？ かわいいねーっ！ お人形さんみたい！」

「……………ああああああああっ！！」

ゲルトはネコミミを抑えながら走り去って行った。途中で何人か生徒をぶっ飛ばしていく。こいつら結局同じレベルなんじゃないのかとリアルに感じる瞬間であった。

「ゲルトちゃん元気だなあ……。？」

「いや多分あれは元気なんじゃなくて、お前に会って恥ずかしかったんだと思うぞ」

「ふえ？　なんでですか？」

何でって……あいつは元々お前の事を物凄く意識しているのにあんな格好で学園をうろろしていると知られたら恥ずかしいに決まっているだろう。

リリアにその辺の気持ちを理解してもらうのは難しいのかもしれない。『ゲルトちゃんかわいかったですねー』とかへらへらしながら言っている時点でどうも状況が把握出来ない。

「お前もランキング表を見に来たのか？」

「えと、それもありますけど……そろそろ課外授業クエストの事も考えておこうと思って」

学園は兵士教育機関であると同時に、クイリアダリア王国から委託される幾つかの厄介ごとを解決する請負組織でもある。

学園はそもそもクイリアダリア王国に存在する聖騎士団直轄の教育機関である。聖騎士団とはクイリアダリアの国教であるヨト信仰の主神ヨトの名の下に平和を誓った騎士の武力組織であり、王国に存在する様々な荒事を武力で制圧する組織……と、授業で習った。

しかしエリート集団である聖騎士団に持ち込まれる市民からのごたごたは一つや二つではない。しかも今や世界最大の国家となったクイリアダリアの民の数は勿論世界一。問題の数も世界一である。そうした聖騎士団に持ち込まれる、しかしわざわざ聖騎士団が動くほどじゃないだろうと判断された依頼が学園に委託される事がある。

これが所謂課外授業クエストである。

学園の生徒の有用性を世に示すと同時に世界で起きている実際の問題に生徒たちを介入させる事で経験を積ませる目的がある。いくら学園内で実践的な授業を行い闘技場で決闘を繰り返したところでつめない経験は山ほどある。生徒たちには授業のほかにもそうした課外授業をいくつか受ける事が義務付けられているのだ。

当然、俺やらリリアやはこの所バタバタしていたせいでそんなものはやっていない。すっかり忘れていたのだが、早めに課外授業に出ないと他の生徒に取り残される事になる。

「師匠は何か受けるんですか？」

「いや、今の今まで完全に忘れてた……。悪い、一緒に探してもいいか？」

リリアと一緒に受付に向かう。クエストボードの方に案内され、一先ず課外授業を物色する事にした。

それにしても殆どのクエストは既に先約が入ってしまったている。それもそうだ、俺たちは後発なくらいだろうから……。確かにクエストは数限りなく毎日毎日増え続けているものの、サクッとやってサクッと終わらせられるようなお手軽なのは当然他の生徒がキープしてしまっている。

となると、面倒くさくてややこしいものばかりが残っているわけ……。俺たちはクエストボードのメモを眺めながら眉を潜めていた。

「ドラゴン討伐してください……。ドラゴンってなんだよ……」

「あ！これ面白そうですね？伝説の聖槍を見つけ出せ！期限無期限だからずっと探せますよー」

「それ一生見つかるまで探し続ける事になるんじゃないのか……」

二人してずっとクエストボードの前をウロウロし続ける。しばらくすると後ろに立っていた女子が俺とリリアを順番に蹴倒した。

「ちょっと!!　いつまでクエストボードの前をウロウロしてんのよ!!　周りの迷惑考えなさいよね!」

俺とリリアは不意打ちで前に吹っ飛び、クエストボードに頭突きしてしまった。リリアは魔力が籠っていたせいで壁に減り込んでいる……。

額を擦りながら振り返るとそこには綺麗な青い髪の少女が立っていた。非常に強気な視線で俺たちをにらみつけるその傍らにはどこかで見覚えの在る雰囲気のメイドが立っていた。

どこで見覚えがあるのか暫く考えていたが、どうもこれは見覚えが在るわけではなく雰囲気が知り合い……どこぞの執事ロボに似ているだけだった。無機質な瞳で俺たちを見つめるメイドを眺めていると、隣に立つお嬢さんが俺の襟首に掴みかかってくる。

「何シカトしてんのよ!?!　殺すわよっ!!!」

「それより先にリリアを引っこ抜いてやってくれないか?　本当に死ぬぞ、あれ」

見るとリリアは壁に頭を突っ込んだままじたばたもがいている。恐らく呼吸が出来ないのだろう、次第にぐったりしてきたところで俺はリリアを引っこ抜いた。

「ううう……。どうしてリリアがこんな目に……」

「ああっ!?!　アタシが受けようと目をつけていたクエストが壁の

中に減り込んで取れなくなってるじゃない!? どうしてくれんのよ、この馬鹿っ!!」

「そんな事言われても、リリアは蹴っ飛ばされただけですよう」

「ただ蹴っ飛ばされて頭突きしただけで壁突き破る馬鹿がどこにいのよ……って、アンタもしかしてへこたれてる方の勇者?」

「がーん!? へこたれてる方の勇者……まあ確かにそうですけどう……」

少女はリリアから身を離すを腕を組んでぎろりとリリアをにらみつける。さて、俺たちには初対面だと思うのだが、何故こつも暴力的なのか。見れば服装は珍しくこの学園の制服らしきものを着用している。殆どの生徒が好き勝手に私服を着用している中で一人だけ制服なその姿は逆に目立っていた。

リリアを鼻で笑った彼女は人差し指を突き出し、リリアはびっくりして背後に飛びのいた。

「アンタ、フェイト・ライトフィールドの娘の癖にろくに戦えない駄目勇者らしいわね? 全く、アンタみたいなのがどうして勇者の資格を持っているのか疑問だわ!」

「ううう……ごめんなさいです」

「こらこら、何故言い返さないんだリリア? そうやってへこたれてたらへこたれ勇者様って言われてもしかたないだろうが」

「だ、だつてえ……」

涙目になってうじうじしているリリア。強くなってもこういう性格的なところは全く変わっていないらしい。とりあえずリリアがへこたれ勇者なのはいいとしても、そんなことを見ず知らずの人間に言われる筋合いはない。

「つーか、あんた誰だ？ 名乗るくらいはしろよ」

「ア、アタシを知らないっていうわけ！？ そう……よく判ったわ。じゃあ一度だけしか名乗らないから、心して聞きなさい！」

少女の足元にメイドが台を設置し、片足をその上に乗せながら少女は片手を振り上げ、びしりと俺たちを指差して言った。

「英雄学園ディアノイア最大の出資者にして理事長を勤めるコンコルディア家の一人娘！ ベルヴェールとはアタシの事よ！！」

背後でメイドが花弁をばら撒いている。きらきら輝く台の上で満足げに笑っている少女に、リリアは小首を傾げて言った。

「だれですか？」

「がくーっ！！ ア、アンタねえ……！！ コンコルディア財閥よ！？ その一人娘、社長令嬢なのよ！？ つーか、ランキングだつて二十二位なんだから、有名人でしょうがっ！！」

「ご、ごめんなさいです……。リリア世間知らずだし、それにゲルトちゃん以外のランキングバトルには興味ないから……」

「き、興味ないいい！？ アンタ、覚悟は出来てんでしょうね……！！ アンタみたいなド田舎出身のへこたれ勇者にバカにされたんじ

やコンコルディアの娘として恥じなのよ!! 徹底的にぶっ潰してあげるから、覚悟しなさいっ!!」

何やら一人でヒートアップしているベルヴェール。完全に呆気に取りられているリリアに彼女が襲いかかるうとした瞬間、スカートの裾を引っ張って阻止するメイドの姿があった。

二人の勢いが余りにも派手すぎてベルヴェールのスカートは完全に敗れてしまう。可愛いフリル付きのおパンツが露出し、俺は無言で目を閉じて背を向けた。何も見てない、何も見てないぞっと……。

「な、ななななな……!?!」

「お嬢様、そろそろ次の授業のお時間です」

メイドは主の足を掴み、ずるずる強引に引き摺っていく。パンツの破けたベルヴェールは引っくり返された屈辱的な姿勢のまま去っていく。

「ちょ、ちよつと!?! まさかこのまま次の教室まで移動するつもり!?! いやあああっ!! 最悪~~~~っ!!」

「……あのう、だ、大丈夫ですかー?」

「この屈辱は千倍返しにしてやるわ!! 覚悟しておきなさい、このへこたれ勇者あああああっ!!」

何やら八つ当たりしながら去っていく二人。リリアは文字通りへこたれながらそれを見送っていた。

「あいつ……頭悪そうだな」

「そんななつるさん、思った事をズバっと言わなくても……」

そんなわけで再びクエストボードに向き合う。リリアが先程派手に頭突きしたせいで穴が開いてしまっているが、これはいいんだろうか……。

しかし素人考えでクエストを眺めていても結局よく判らない。リリアに判断を仰ぐと、リリアは適当に隅っこのほうにあったメモを手に取り、とことこ受付に走っていく。

一体リリアが何を手にしたのか確認できないままクエストを受ける事になってしまった俺。その判断が当然間違いだった事を、俺は直ぐに思い知らされる事になる……。

ちなみに、その後アクセルに会い、

「え！？ クエスト申請しちゃったの！？ 俺まだしてないじゃん！！ 一緒にしなきゃ同じの受けられないだろ！？」

とのことで、アクセルは一人仲間はずれになる事が決定したのであった。

えーと……次回に続く。

「一人ぼっちはいやああああああっ！！」

不吉な予感の日（3）

「はい、お待たせ。拘束術式紋章武具、『かむいそうつい神威双対』……とでも名付けようかな」

メリーベルに手渡されたのは指先から肩近くまで、腕を丸々一本覆うような巨大な手甲だった。布地をベースに紋章を刻み込まれた鉄板をびつしりと組み合わせ、リインフォースの封印の鎖を留めて魔力を流通できるようになっているらしい。

ためにに装備してみると、腕全体に魔力が収束しやすくなっている。逆に無駄な放出を抑える蓋の役割も果たし、なおかつ丈夫で驚くほど軽い。

軽く拳を振ってみると、魔力に反応してばかりと音がなった。雷撃体質の身体に合わせ、武器が雷を帯びているのが判った。

「お気に召した？」

「いや、すごいなこれ……。剣でも一発で押し折れる気がしてならない。武器の有無でこんなにも魔力制御に違いが出るのか……」

「当然でしょ。この世界における武器は剣や斧やらといった物理武装にだって自分の魔力を制御する効果をつける。杖や短剣、書物には術式を安定させる効果を……。その手甲は腕全体を覆う特殊なものだけど、その分ナツルの膨大な魔力総量を上手く扱えるようにしてくれるはず」

正に俺の為を考えてメリーベルが作ってくれた俺専用の武器ということらしい。サイズもぴったり、まるで古くから愛用していたかの

ようなフィット感がある。これはメリーベルに感謝するだけじゃ足りないな。

とは思ったものの、さて本当にそんな事を言っているのか……。結果的にメイド服で校内を出歩く事になった奴の事を知っているだけに、メリーベルとは慎重に会話したほうがいい気もする……。

振り返るとメリーベルは疲れた様子で溜息を漏らしていた。多分何日も無理をして作ってくれたんだろう。わざわざ俺にそこまでしてくれる縁はないはずなのに……。

「ありがとうな、メリーベル。俺に出来る事があつたらなんでも言ってくれ」

やばい、これは拙い事を言ってしまったかと思つたが、メリーベルはこくりと頷いてソファの上に寝転がった。どうやら本当に疲れていたらしい。今はそつとしておいてやるとしよう。

「説明書き、そこにおいておいたから……。ちゃんと、読んでね……」

「わかつた。ありがとう、メリーベル」

メモ書きを手にとって部屋の明かりを消した。外に出てメモ書きを眺める。メリーベルのことだから、ただ術式を制御するだけの武器ではないのだろう。

外で待っていたリリアが駆け寄ってくる。が、今回は避ける必要はなかった。片手でリリアの頭を押さえ込み、ブレーキングさせる。

「はわわわ……？ 師匠、すごいパワーアップしてますね……」

「ん、そうらしい。あんまり気を使わなくても適正威力に魔力を抑

えてくれるみたいだな」

それにしても僅か数日でこんなものをホイホイ作れてしまうメリーベルは一体何者なんだろうか。ただの錬金術師見習いではないと思っ
ていたが、もしかしたら物凄い天才なのかもしれない……。

武器が手に入ったのは本当に大きい一歩だ。力を手に入れた事で俺はよりこの世界に干渉してしまうかもしれない。だが、リリアや皆が傷つくような事にならないためには、力だけは絶対に必要なんだ。拳を強く握り締める。大気に走る電流を見つめ、自分の魔力を強く感じる。今は一刻も早くこの武器に慣れなくては……。

ふと顔を上げるとリリアがじいっと俺を見つめているのに気づいた。何事かと思い首を傾げると、リリアは少しだけ照れくさそうに笑う。

「師匠とはじめて会った時、師匠は草原に寝転がってましたよね」

そういえばそうだったろうか。ああ、その後そのことを散々リリアに引ッ張られたもんだっけ。しかしそれがどうしたのか。

「あの時、師匠は格好も態度も言葉も、まるで他の国の人みたいでした。でも今の師匠はなんか、すっかりこの街に馴染んだなあ、って思っ
て……えへへ」

「何で嬉しそうなんだ？」

「な、なんでもないですよ。それより課外授業、クエスト頑張りましようね！」

リリアは張り切ってスキップしている。そんなに元気良く歩いたら……当然のようにリリアはすっこけ、近くにあった外灯に頭突きしていた。あいつの性質の悪い所は、周りのものを破壊しても自分は

全く傷つかないことではないだろうか……。

押し折れそうな外灯を慌てて強引に直し、リリアは一息ついている。それを見ていた周囲の人たちが完全に引いてリリアを避けて通っている事にあいつはまだ気づいていない。

「……まあ、これでもう少しへこたれないようになればなあ」

一先ず武器は手に入った。課外授業の事も気になるが、俺としてはこれでようやくアイオンととともに戦える事ありがたい。

あいつも武器が手に入った事をどこかで知ることだろう。そうなれば直ぐにでも試合の予定を組んでくるはずだ。課外授業が練習代わりになればいいのだが。

そんな風に気楽に課外授業の事を考えている自分が甘かったのだということを、俺は直ぐに思い知らされる事になるのであった。

不吉な予感の日（3）

課外授業当日。リリアと共に集合場所であるシャングリラの南門に到着した俺を待っていたのは予想外のメンバーだった。

「アイオン……。何故お前がここにいる……」

「嫌だなあ、夏流……？　君がクエスト申請した時、ボクも一緒だったじゃあないか」

もう何も言う気にはならなかった。門に背を預けて笑っているアイオンの背後、リリアを捕まえて何やら騒いでいるこの間の頭の悪そうな女の子の姿があった。

「ここであつたが百年目！ 覚悟しなさい、へこたれ勇者！！」

「えーん！ なんで一緒のクエスト受けてるんですかーっ！！」

追い掛け回されているリリアを眺めながら俺はなんだかのほほんとした気持ちになった。アイオーンと二人でそれを眺めていると、背後から最後のメンバーが遅れて走ってくる。

駆け寄ってきたのはリリアよりも更に年下に見える元気の良さそうな少年だった。俺とアイオーンの前で立ち止まると、元気良く手を挙げて挨拶した。

「いよっ！ アイオーン！ 今日胡散臭いな！」

「やあ、ブレイド。こちらは今日の課外授業で一緒になった本城夏流君」

「漢字名……ってことは、イザラキ出身かい？ まあいいや、おいらブレイド・ブレッド十三歳！ 宜しくな、ニーチャン！」

随分馴れ馴れしい子供だった。いかにも悪ガキといった様子だが、こんな子供まで学園では課外授業に出すというのだろうか。

一先ず少年の手を握り締め、握手に応える。何となく腑に落ちないが、アイオーンに視線を向けると彼女はすぐに説明してくれた。

「彼、今月のランキング二位だから」

「ふうん……そうなん……はあっ！？」

「ちなみに一位はボクだよ。三位がゲルト」

改めて少年を見下ろす。背丈もリリアより低いくらいなのだが、本当にこれが二位なのだろうか。今はリリアとベルヴェールの追いかけっこに参戦して二人の関係を引っ掻き回している。というかあの子、武器はなんだ？ 見た所アイオンは槍、ベルヴェールは弓のようだが、この子は武器を一つも装備している気配が無い。

軽装に紅いマントという見た目だけは強そうな格好だが、一切鎧をつけていない事から後衛タイプにも見える。しかし動作は軽快だし……んー、シーフなのか？

疑問は尽きなかったが、一先ずそれは置いておこう。問題はランキングの上から二人までが同時に参加しているこのクエストの事だ。確かベルヴェールも二十位台と中々の腕の持ち主だったはず。そんな強者が揃うクエストって一体なんだ？

「アイオン、今回の課外授業って何をするんだ？」

「うん？ 魔物の討伐だよ。聖騎士団の手が回らない魔物は学園の生徒が駆逐する……一応、そういうルールだからね」

「魔物……？」

俺は技術だけではなくてもう少しこの世界の歴史やら何やらを授業で学んだ方がいい気がする。

戸惑う俺の肩を抱き、アイオンはにやりと笑う。まるで俺が魔物について何も知らない事を知っているかのような、そんな態度に見えた。何だかいらついたのでその手を振り解く。

「本格的な魔物の討伐は聖騎士団が担う任務だけれどね。まあ、魔物の発生件数は年々増えているし対処が追いつかないのが現実……。見習いであるボクたちにまでそんな依頼が来るのだから、世界の破

滅が噂されてもおかしくはないね」

「世界の破滅？」

「うふふ、知りたいかい？ 知りたいのかい、夏流？」

「あ、ああ……」

「教えてあ~~~~~げない」

うぜえ。こいつうぜえ。

そんなアイオンと暫く話し込んでいると、ベルヴェールがこちらに歩いてくる。どうやら早く出発したいらしい。

「いつまでそうしておしゃべりしているつもりよ？ さつさと出発するわよ！ 目的地は遠いんだから！」

ベルヴェールの仕切りで俺たちは移動を開始した。

しかし彼女たちが向かうのは門の外側ではなかった。何故か門の内側に戻ると、せっせと歩いていく。

どこへ行くのかと思っていたらたどり着いたのは地下にあるトンネルだった。そこには駅が存在し、汽車が停車している。なんでもこの学園の東西南北にはそれぞれの方向にある主要都市まで汽車が出ているらしく、今回もそれで街の外に移動するらしい。

というか何気に俺は学園の外に出るのは相当久しぶりなのではないだろうか。例のプロローグで向かった神殿は兎も角、あそこ以外に俺はこの世界の町を知らないわけ。

学生証を翳すと駅員は無料で俺たちを汽車に乗せてくれた。汽車といえどもどうやら魔力で動いているらしく、石炭燃料で動いているわけではなさそうだった。レトロな雰囲気なのだが、どこか機械的

な車内で生徒専用に使われた専用車輛へと足を踏み入れた。

専用車輛は豪華な作りになっている。本来ならば聖騎士団が利用する為のものであるらしく、中はかなり広い。ふかふかのソファの上をリリアとブレイドが飛び回り、ベルヴェールがそれを注意している。何だかよく判らないが賑やかな旅になってしまった。

「何か飲むかい？ あちらはあちらで楽しくやっているようだし、ボクらはノンビリしていようじゃないか」

「それは賛成だが……その飲み物は毒とか入っていないんだろうな？」

「疑り深い目の男って結構好きなんだけどね、度が過ぎると会話が進まないじゃないか。なんなら、魔法で解毒してから飲めばいいじゃないか、ねえ？」

こいつ、俺が魔法を使えないのを判っていてそんなことをぬけぬけと……。まあいい、どうやら最初から室内に用意されていたもののようにだから、口にした所で行き成り死んだりはしないだろうし……。アイオーンから受け取ったグラスを傾ける。窓の外は草原が延々と続いているようだが、この世界は当たり前だがこんなにも広かったのか。

リリアとブレイドはベルヴェールに正座させられて説教されている。そりゃまあ、あんだけはしゃいでれば怒られもする……。少しへこたれてるくらいが大人しくて丁度いいだろう。ほっとこう。

「それで、夏流は魔物について何も知らないんだったね」

「悪かったな、勉強不足で」

「……というか、ならどうしてこのクエストに応募したんだい？」

言えない。よく判らないからリリアに任せたら適当に隅っこにあったのを受けやがったとは言えない。

「それはどうでもいいだろ。それで、魔物つてのは何なんだよ」

魔物。それは、かつて魔王と呼ばれたザックブルムの皇帝が生み出した存在。

元々この世界には魔力が満ちている。それは生命全てから発せられるものであり、草木や岩でさえ魔力を帯びる。それらは大気の中でそれぞれの性質ごとに変化し、精霊と呼ばれる物に変化する。

精霊は自然物から染み出た魔力にその自然物の意思が宿った物であり、それぞれが魔力で構築された肉体を得るという。

「人間が自分の魔力で精霊を生み出す技術を『召喚』、既に存在する自然精霊を扱うのは『精霊術』。自然物から生み出されるはずの精霊を擬似的に製作するのは『錬金術』……一口に精霊技術といってもこの三種類に分類される。魔物はこの三つの技術を複合させた技術で生み出された」

ザックブルムの帝王、魔王ロギア。魔王は本人が凄まじい腕前の剣士であり、同時に錬金術、魔術、精霊術全てに通ずる稀代の天才だったらしい。

ロギアは自らの技術の粋を結集し、この世界に存在するはずのない精霊を生み出した。それが魔物と呼ばれる第三の生命の誕生だった。魔王ロギアが絶大なる力を誇ったのはこの魔物と呼ばれる存在を量産し、軍隊を作り上げた事に起因する。倒しても倒しても再び湧き出す魔物たちに、どの国の騎士団も太刀打ちできず滅びて行った。それを打ち破ったのが白の勇者フェイト、黒の勇者ゲイン。そしてその勇者の仲間たちであったというわけである。

「魔物は主であるロギアがいなくなった今も世界中に散って今も人間を苦しめているというわけさ」

「……かつての戦争の名残、か」

それはそうだ。この世界に戦うべき敵がいはいはずがない。何かから守りたいからこそ力が必要なのだ。そのための勇者……リリアにとっては避けては通れない問題、ということか。

「それにしても、戦争があつたのは十年以上前なんだろう？ それなのに魔物がまだ残っているのか？」

「聖騎士団がサボっているわけではないのだけれどもね。まあ、都合よく行けばその疑問も解決されるだろうさ。それよりいいのかい？ さつきからリリアが君に助けてサインを送っているようだけれど」

振り返るとリリアがぼろぼろ涙を流しながらベルヴェールに踏まれていた。慌てて駆け寄りベルヴェールの首根っ子を掴み上げ、ソファに放り投げる。

「うええええん！ 師匠！……！」

「お前はどのように言い返さないんだよだから……」

「だって、だって……うわーん！」

泣きながらリリアがすがり付いてくる。こいつ、やっぱり人見知りするタイプなんだろうか。泣きじゃくるリリアの頭をぐりぐりなで

ていると、放り投げられたベルヴェールが走って戻ってきた。

「レディの首根っ子掴んで放り投げるってアンタどういう神経してんのよ、このバカっ!!」

「バカとは失礼だな。なんかお前にバカっていわれても別に痛くも痒くもないが」

「? どういう意味よ?」

貶されている事に気づいていない様子のお嬢様。俺は一人で小首を傾げるベルヴェールを無視してソファに座った。

「ブレイド、とか言ったか? お前もいつまでも正座してないで座ったらどうだ」

「おうよ? そういうニーチャンは夏流だっけ? ニーチャン、そのへこたれ勇者の仲間なのか?」

「仲間と言えば仲間だが……。リリアさん、涙と鼻水で俺の服がスゴイことになってるから、そろそろ勘弁してください」

「ひぐっ……ふええ……っ」

「そんなにピイピイ泣くなよネーチャン……。ほら、ハンカチ貸してやるからさ」

「うん……。ありがとっ、ブレイド君……ぐすん」

二歳年下に慰められるリリア・ライトフィールドことへこたれ勇者

様であつた。

さて、そんなこんなで列車での移動を続けていた俺たちに異変は直ぐに訪れた。駅はまだまだ先、草原の真っ只中だというのに突然汽車が停車したのである。

何事かと首をかしげていると、車掌らしき男性が部屋に入ってきて俺たちに言つた。

「申し訳ないんですが、汽車での移動はここまですりまりました」

「……どうかしたんですか？」

「ええ。それが、この先の街……交易都市ティパンが今全面封鎖されてるらしくて……。聖騎士団が出張ってきているとかで、引き返すようにお達しがあつたんですよ」

「聖騎士団が？」

よくわからないが、兎に角ここから先には汽車で移動出来ないらしい。しかしクエストの目的地に進む為にはティパンを横断しなければならぬ。さてどうしたものかと考え込んでいると、アイオーンは槍を手にして部屋を出る。

「ここで引き返したら課外授業にならないだろう？ さあ、行こうじゃないか。徒歩でも直ぐにつくさ」

確かにアイオーンの言うとおりだ。何か異常事態が起こっているのだとしたら、尚更気になる所だが……ここは首を突っ込まない方がいい気もする。聖騎士団は正規軍だ。俺たち見習いとは違う。それが立ち入るなといっているのだから、立ち入らない方が無難ではある。

「まあ、一先ず様子を伺ってまずそうなら引き返すか……」

ティパンをスルーする迂回路を使えば一応このまま歩いて向かう事も出来る。時間はかかりそうだったが、まあ急げばそれなりに時間をかけてもたどり着けるだろう。

そんなわけで俺たちは汽車から降りる事にした。全員で草原に降り立つと、汽車は元来た道を引き返して行く。そのシルエットが完全に見えなくなつた頃、俺たちは武器をかついで全員で正面を向いた。

「さて、ちょっと遠いが歩くとするか」

「その前にこのパーティーのリーダーを決めておこうじゃない！何事もリーダーの指示に従い行動すること……チームプレイの基本よねっ！」

リーダーか。まあ確かに一理ある。何事も指示を出してくれる人間が居た方が動きやすいのは事実だ。

「そうか。じゃあアイオン、頼んでいいか？」

「ちょちょちょ！？ 待ちなさいよっ！！ ど～～～考えても、リーダーはアタシでしょっ！？」

「お前にやらせるくらいならリアにやらせたほうがまだマシだ」

「わーい……あれ？ 師匠、それどういう意味ですか？ 師匠？ あれえ？」

二人に左右から引つ張られながら俺は溜息を漏らした。ブレイドは

至極どうでもいいのか、他人事のように俺を見て笑っている。結局このメンバーだと、必然的にアイオンが一番使えそうだな。いや、不本意ながら。不本意ながら、だけどね。

アイオンは槍を逆手に持ち、にたりと笑った。ああ、でもこいつにやらせるのなら俺がやったほうがまだましかもしれない。いや、一応ランキング一位だし、なんだかんだでこいつは強いはず。ここはアイオンを信じよう。信じよう。信じるんだ夏流。

「それにしても、聖騎士団が出張ってくるって結構な大事だよな！
？ ニーチャンなんか聞いている？」

聞いているもなにも、俺はこれからどこに何をしに行くのかさえ汽車に乗るまで知らなかったんだが。

先頭をアイオンのんびりと進み、その後ろに俺とブレイドが並ぶ。最後尾ではリリアがベルヴェールに何やらずっと弄られて泣きそうになっているが、もうあの二人はツッコまないほうがいいのかも。もしない。

「そいやニーチャン、始めてみる顔だけど転校生かなんか？」

「いや、まあそんなようなもんだけど」

「ふん……。ま、男同士仲良くしようぜい！ 何か周りが女ばっかで落ち着かないよな」

という割には随分余裕そうに見えるが。あと周りが女ばっかなのは……。俺のせいじゃないよ。

それから数十分徒歩で移動していると、異変は直ぐに俺たちのところにまで響いてきた。遠くに見える交易都市ティパンから、爆発音が断続的に聞こえていたのである。ティパンからは火の手と黒煙が

立ち上り、物騒この上ない様子に見えた。

「ははは。ティパン燃えてるじゃあないか。ご覧よ皆、ティパンが戦場になっているよ」

「ははは〜じゃないですよっ！？ あわわわ……た、大変ですよー！！ 聖騎士団の人たちはどうしちゃったんですか！？」

「兎に角行ってみようぜっ！ なんかヤバい事になってるなら、手を貸すのが男だぜい！」

人の話を聞かないでブレイドは一人走っていく。そのブレイドを制止するためにベルヴェールが追いかけていき、結局腕を組んだまま笑っているアイオンとおろおろしているリリアだけが俺の横に残された。

「とにかく俺たちも行こう。リリア、怖いなら俺の後ろについてこい。ちよつと様子を見るだけだから、落ちついて行動するんだ」

「うううう……。は、はい……」

俺たちもベルヴェールたちの後を追って走り出す。ティパンの入り口あたりに辿りつくと、既にベルヴェールとブレイドが何者かと交戦状態に入っていた。

弓を構えるベルヴェールを後衛にブレイドはいつの間にか手にした巨大な斧を構えている。正面にはいくつも甲冑を装備した騎士の死体が転がっており、そのうちの幾つかが起き上がって血まみれの姿で二人の剣を向けていた。

「ブレイド！ ベルヴェール！！」

「心配しなくても、この程度なら余裕しゃくしゃく　　って、ほいさー!」

近づいてくる騎士を斧で叩き切るブレイド。後方からベルヴェールが死体に矢を放つと、着弾点の周囲が一気に凍りつき、巨大な氷柱が騎士たちを閉じ込めていた。

流石に二人とも場慣れしている。俺やリリアよりもよほど心配は要らないようだった。一先ず合流して街を眺めると、各所から未だに戦闘の音が聞こえてくる。死体の前に屈み、様子を見たアイオーンが振り返り首を横に振った。

「この様子じゃ聖騎士団も危険みたいだね。余程強い化物が街に紛れ込んだのか……」

「アイオーン、さっき騎士が起き上がって襲い掛かってきたんだが……」

「ああ。あれが『魔物』が未だにこの世界からなくなる**リベングデッド**理由だよ。魔物は生き物の死体からも発生するんだ。最初は起き上がり、次第に姿形を化物に近づけて行く。起き上がった**エクセキューター**だけなら対処は容易いけど、浄化出来る人間がいらないから、今は起き上がったのを一々倒すしか無さそうだ」

魔物は死体から発生する……？　意味がよく判らなかったが、それじゃあ魔物が消えなくて当然だ。世界じゃ命が生まれるのと同様に死が蔓延っているはず。そもそも魔物を倒すはずの聖騎士団がやられて魔物になってたんじゃしょうがないだろうに。

「しかし、教会直属の聖騎士団にしちゃ、死体を放置とは手際悪

いぜ？ 余程追い詰められてんのかな。どうする？ アイオーン」

アイオーンは振り返って俺とリリアを見た。リリアは俺の後ろで死体をみて完全に固まってしまっている。無理も無い、初めての戦場……俺だって動揺している。全身甲冑に包まれている騎士だからまだいい。だが、あの中身全部が人間の死体だと考えると、どうにも現実離れしすぎていて気持ちが悪落ち着かない。

それでもまだ冷静にこうやって考えられるのは恐らく俺以上にビビっているリリアのおかげだろう。この子を守る為に、俺はビビっているわけにはいかないんだ。

「二手に分かれて街の中心部を目指そう。途中で魔物がいたら討伐して行く事。それでいいかな？」

「あいよ」

「仕方ないわねえ……ま、どうせ目的地でやるはずだった仕事だし、別に構わないけど」

俺たち以外の三人は慣れた様子で武器を片手に歩き出す。なんというか、全く動じている様子が無い。これがこの世界の現実、この世界の当たり前なのだとでもいうかのように、三人は目の前に在る死にも戦場という異質な空間にも臆してはいなかった。

あのアホの子ベルヴェールでさえこれとは、学園恐るべし。俺は意を決して歩き出した。リリアは俺の後ろにピッタリくっつき、リンフォースを抱くようにして脅えている。

「ベルヴェールとブレイドは相性も良さそうだし左から。ボクはこっちの二人を『守りながら』右から行くよ」

守りながら。それがリーダーであるアイオーンの下した判断だった。俺はリリアの肩を叩き、拳を握り締めて前に出る。

「あんまり舐めるなよ、アイオン。『守る』のはリリアだけで充分だ。俺が前衛を張る。お前は俺に着いて来い、死術^{ネクロマンサー}使い」

こんなところで守ってもらっているわけにはいかない。相手が魔物だろうがなんだろうが、引き返す事も出来ない。

強くなると決めたんだ。もう、二度と間違いを犯さないように。俺が前に出るのを見て他のメンバーは頷き、行動を開始する。俺はリリアをアイオンと自分との間に挟むようにして、死の蔓延る戦場に足を踏み出した。

不吉な予感の日（3）（後書き）

くディアノイア劇場く

へこたれ勇者様編

リリア「ここにこ」

アクセル「どうしたんだ？ そんなにここにこして」

リリア「だって、やっぱりリリア派の人がいるってわかったんですよ！ まだまだゲルトちゃんにメインヒロインの座は渡さないのですよ」

アクセル「まあ、ツンデレが圧倒的人気なのはもう仕方が無いことだしな。それよりへこたれ勇者のへこたれてるんだか知ってる？」

リリア「う？ リリアみたいな人の事をいうんじゃないんですか？」

アクセル「しょんぼりすることらしいぞ。へこたれるってあんまり言わないけど、この小説の登場人物へこたれ勇者って連呼してるからな」。意味は正確に把握しておかないとな」

リリア「え？ リリア、しょんぼりしてましたっけ？」

く設定資料集その3く

アイテム編

『聖剣リインフォース』

聖なる力を宿す勇者にヨト教会より与えられた断罪の剣。

もともとの所有者であるリリアの父、フェイトからリリアへと引き継がれた剣。魔王と戦い戦死したフェイトの唯一の遺品でもある。

『魔を断ち切る』という概念を付与された特殊武装であり、所有者ならびにヨト経典により『魔』と判断されるものを物理的手段で滅する事が出来る。

具体的には魔術的な攻撃、魔術障壁などを意に介せず一撃で粉碎し、魔物や精霊を一撃で断ち切る威力を秘めている。非常に高い退魔効果をもち、魔王討伐に一役買った。

対となる魔剣フレグランスと同等の性能を持つが、フレグランスが術者の力を増幅するのに対し、こちらは術者以外の力を滅却する事を主眼としている。

フレグランスが攻めの剣だとすれば、こちらは守りの剣というスタンス。尤も、魔法を切り裂いて取り込んだりして反射したりするので攻撃力も充分あるが。

謎の力を宿し、封印されている為過去ほどの威力は持たないものの、へこたれ勇者を充分サポートしてくれる伝説の武器である。

『魔剣フレグランス』

暗黒の術式を宿す勇者に魔術教会が与えた契約の剣。

もともとの所有者であるゲルトの父、ゲインからゲルトへと引き継がれた剣。魔王戦から生還したゲインが死の間際にゲルトに継承の儀式を行った。

魔力を込めることで術者の魔法能力を大幅に引き上げる効果、杖と

しての一面も持つ。リインフォース同様魔の波長を消し去る術式を装備しているが、リインフォースほどの障壁貫通効果はない。リインフォースのカラーリングを逆転させるとフレグランスになる。ちなみに片刃の大剣なので、片に乗せてもきれないよ。

華模様が浮かび上がり、花吹雪を煌かせることからゲルトの必殺技はフレグランス頼りと思われるが、力を増幅してはいるものの術式の構築はゲルトが行っているので、リリアとは違いゲルトオリジナルの必殺技である。

尚、所有者は継承で定められているので、夏流が手にしたところで術式は発動出来ない。

『ルーンナックル 紋章武装』

通常の手甲にルーン文字を刻み込んだもの。

ルーン文字とは魔術文字の一種で、紋章のような形状で描く。ルーン文字の名をかたっているが、現実に存在するファンタジーを由縁とするものとは趣が異なる。

メリーベルの場合、自身の魔力総量が少ない事を承知のため、事前に何日かけてルーンナックルに魔力を付与し、事前に高い威力を与えてリリア戦に望んだ。しかし魔力はチャージ式のため、充電が切れればただのナックルに戻ってしまう。

『かむいそつたい 神威双対』

メリーベルにオーダーメイドで作成してもらった夏流専用の双手甲。ルーンナックルに部類されるものの、メリーベルが使用していたものとは全く効果が異なる。主に夏流の魔力制御と魔力蓄積の手助けをする役割を持つ。

当然それそのものが高防御効果を持ち、左右の腕には別々の術式が刻んである。夏流は自身で術式を組む（詠唱を行う、体外で技を繰り出す）のが絶望的に苦手なため、あらかじめ手甲にその術式を仕込み必殺技として繰り出す事が出来る。

夏流だからこそその場で魔力をチャージしてぶっ放す事が可能であるが、一般人ならチャージに一晚以上かかってしまう。夏流専用武装ならではの仕様である。

ちなみに装甲は金色でかなり派手な色をしている。リインフォースの封印の鎖で左右の手甲に流れる魔力総量を均一に保っている。

『ツインサーベル』

アクセルが装備する安物のサーベル。

特にこれといって性能はないただの刃物で、元々は学園に入学する前に聖都オルヴェンブルムの胡散臭い武器屋で購入したもの。

傷だらけになっても丁寧に入れをして使いこんでいるのでアクセルの魔力波長に適正しているものの、やはり上記の特殊武装に比べると見劣りする。

武器がもう少しちゃんとしていれば、ゲルトにも勝てたろうにね。

課外授業の日（１）

「……………それで、どうしてアクセルまでここにいるの？」

夏流たちがクエストに出かけてしまった為、暇をもてあました人々はメリーベルの研究室に集まっていた。椅子の上に座って猫たちの耳を引っ張ったりして遊んでいるアクセルの横顔にメリーベルが問い掛けると、アクセルは当たり前のような顔で言う。

「そりゃあ、寂しい人々で集まって時間を潰すためだ！」

「あたしは別に寂しくないんだけど」

「そりゃそうだよ！ いいよなあ、メイドもいるし猫もいるしさあゝ。それにしてもゲルトは部屋の隅っこで何してんだ？」

「さあ。学園で何か嫌な事でもあったんじゃない？ 最近はそこでうずくまってる事が多いけど」

部屋の隅で膝を抱えて背を向けているゲルトの様子にアクセルは苦笑を浮かべる。膝の上に乗ってきた猫の首元を掴んでポイッと放り投げ、振り返った。

「しっかし猫だらけだなここは。こんなにいると流石に邪魔じゃねえ？ 歩くの辛いし」

「アクセルは猫に対する優しさみたいなものを学んだ方がいい」

「そうか？ 邪魔なんだもんだって……。可愛いけど、俺犬派だし」
猫を軽く蹴散らしながら歩いてくるアクセル。足元で足蹴にされた猫たちは必死にアクセルに襲い掛かるが、高い魔力蓄積能力を持つアクセルの風に吹き飛ばされ床上を転がって行く。

「あはははは、かわいいな！」

「……うちに来た人で最も猫に嫌われてるよ、アクセル」

「そうか？ 俺は好きなだけだなー、動物は」

子猫でお手玉をするアクセル。ゲルトは猫たちに埋もれながら気づけば倒れていた。騒がしい来客がいるせいで研究に没頭できないメリーベルは無言で溜息を漏らした。

「今頃リリアちゃんたちはクエスト頑張ってますかねえ」

「案外ピンチだったりして」

「そうだな。いきなり魔物の集団に襲いかかれて、壊滅しそうになってたりしてな。ま、そんなことあるわけないか！」

大地を素早く駆ける影が宙に舞い、墜落の勢いを乗せた蹴りが騎士^{リヒ}の亡骸の甲冑を木つ端微塵に粉碎し、魔物と化した魂を浄化する。先陣を切り、魔物の巣窟と貸した交易都市ティパンを駆け抜ける救世主。後続のアイオンが近づく敵を槍で迎撃しつつリリアを守って追ってくる。

夏流は敵の魔の手が少しでも後方へと通らぬよう、一匹残らず敵を

排除しようと奮闘する。最早そこに迷いのようなものは消え去っていた。

彼特有の『割り切る力』が敵は敵だと判断する事を後押ししていた。背後から振り下ろされる刃を片手で押し折り、カウンターで拳を叩き付ける。

膨大な魔力を一点に集中させた拳は一撃で甲冑ごと魔物を木っ端微塵に破壊する。わらわらと集まる魔物たちを次々に破壊し、雷撃を迸らせながら前進する。

その鬼神の如き強さを背後から眺め、リリアは戸惑っていた。本城夏流が只者でない事は知っている。それは判っているつもりだった。しかし本当にそんな事があるのだろうか。ここは学園ではなく本物の戦場だというのに、彼はまるで何年も前から覚悟を決めていた戦士のように淀みなく敵を穿つ。その両手が血に染まっても、返り血を浴びても、それでも尚前進は止まらない。

広場を集まるリビングデッドの群れを眺め、少年は両の掌を胸の前で上下に翳す。その手と手の間に雷が迸り、右腕に蓄積した雷を大地に叩き付ける。

大地から目標に向かって正確に放電される雷撃が魔物を一網打尽にしていく。焦げ付くレンガと黒煙の中、夏流は騎士の亡骸を背に佇んでいた。目的地点である街の中央広場へは、別行動している二人よりも早くたどり着いたからである。

「あれが本城夏流だよ、へこたれ勇者様」

リリアを庇うように背後に立ち槍を携えるアイオーンが金縁眼鏡を指先で押ししながら微笑む。

「君と彼とでは、随分と違いすぎるようにボクは思っけね」

「……………」

リリアは黙り込んでいた。遠すぎる。そんな言葉が脳裏を過ぎる。目の前の少年の背中が果てしなく遠く見える。どうしてあんなに迷わずにいられるのだろう。どうしてあんなにも戦えるのだとう。脅え戸惑うだけだったリリアだからこそ思う事。不安と迷いの中、託されたリインフォースをじっと見つめる。

クエスト前、夏流に渡されたリインフォース。しかし結局どんなに強力な武器を持っていたとしても、使えなければ意味がない。悔しさで唇を噛み締める時、気づけば目前に夏流の姿があった。

「先についちまったらしい。少し待つか？」

「ああ、ご苦労様夏流。いい手際だったよ。初めての实战とは思えないくらいにね」

「ああ……。实战、か」

夏流はどこか遠い場所を長めながら呟く。その真意を知らないリリアはますます夏流の気持ち判らなくなった。アイオーンはやりと笑い、二人を置いて進んで行く。

「少し先まで様子を見てくるよ。この様子では、夏流一人居れば場所の確保は問題なさそうだ」

「気をつけるよ、アイオーン」

ゆつくりと去っていくアイオーンを見送る夏流。その少年が見下ろす心配する眼差しに、リリアは曖昧に笑って応えた。

課外授業の日（１）

初めての实戦というアイオンの言葉に俺は少し違う事を考えていた。

俺にとってこの世界での出来事は『現実』ではない。その認識は良くないことなのだろうが、結局俺の根本にはその事実がある。

非現実的な事実^に直面しても直ぐに適応出来るのは良くも悪くも『他人事』だからなのだろう。敵が元々生身の人間だろうがなんだろうが、俺にとってはただの敵でしかない。物語の上でそれ以上でも以下でもないのならば、一々戸惑うだけ無駄だ。

しかもリリアを危険に晒すというのならば、是非もなく破壊する。それが俺の救世主としての役割であり、唯一の存在意義だ。彼女に近づく危険なら、俺が排除しなければならぬ。

メリーベルの作ってくれた神威双対の調子は上々だ。尤も、大した魔術的な行動はとれないが、単純に放出するだけでも俺にとっては武器になる。

拳を握り締め、崩れてしまっている銅像の前で顔を上げる。敵地とはいえども、魔力で全身を覆っていれば何となく周囲の気配は探れるらしい。まあ長距離はまだ難しいが、少なくとも不意打ちされる事はこれではなくなるはずだ。

自分の掌を見つめていると、背後に立っているリリアの事を思い出した。一瞬リリアの事が完全に頭から抜け落ちていたため不安を覚えたが、いたって五体満足そうに見える。リインフォースも落としてきていないようだし、問題はない。

「大丈夫か？ 気分が悪いなら、少し休むか？」

「い、いえ！ 平気です、大丈夫です！ ちょー元気ですっ！ えへ、えへへ」

何故かりリアはへらへら笑っている。俺にとっては非現実だが、彼女にとっては自分の世界の出来事のはず。性格的にもショッキングな映像だと思ったが、大丈夫なのだろうか。

そんな危惧をしていると遅れてやってきたベルヴェールとブレイドが合流してきた。二人も特に外傷はなく、疲れている様子もない。

「それにしてもリビングデッドだらけね！ まったく、聖騎士団ともあるうものが仲間の死体を放置するってどういうことよ！？」

「お陰で魔物だらけだったぜ……。ニーチャン、アイオーンは？」

「アイオーンは少し奥の様子を見てくるそうだ。この辺の目立つやつは粗方片付けたし、ただ待っているだけでは時間の無駄だったかな」

「ふーん。まあ、アイオーンなら問題ないだろうけど。あれ？ 勇者のネーチャン、ぐったりしてるけど平気なの？」

振り返ってリリアを見る。へらへら笑ってはいるが、やはり無理をしているのが判る。腕を組んでしばし考え、振り返って二人に告げた。

「少しここで休憩にしよう。俺はアイオーンを探してくるから、二人はここでリリアと待っていてくれ」

「ん？ 一人で平気なんかい？」

「ああ、問題ない。自分の身くらいは自分で守れそうだ」

二人にリリアを任せ、歩き出す。背後でリリアが何かを言おうとしたが、俺は肩を竦めてその言葉を遮った。

「疲れているならそうちゃんと言え。お前は無理しないでいいから、ここで待ってる」

俺の言葉を聞きリリアは黙って頷いた。三人に背を向け、俺はアイオンが向かった街の北側に向かって行った。

どこも戦闘の痕跡が激しく、市街地はいたる所が破壊されている。やがてしばらく走っていると、アイオンと騎士たちが話し込んでいるのが見えた。

少し離れた場所で立ち止まり様子を見ると、どうやら事情を聞いているだけらしい。アイオンの隣に歩いて並ぶと、先程まで敵として認識していた甲冑の騎士が俺を見て首を傾げた。

「彼は？」

「学園の生徒ですよ。夏流、聖騎士団から事情を説明してもらった。一先ずもうこの街に危険はないようだ」

「そうか。なら良かった」

これで心置きなくこの街を通過できる。そう思っていた矢先の事だった。騎士の背後から何人かの護衛を引き連れた一人の男が歩いてくる。

教会の正装を纏い、手足は鎧で覆われている。武器を手にしていない事からも騎士というよりは神官に近い印象を受ける。歳の瀬は俺よりは若干上……アイオンと同じくらいだろうか。

金髪の美形青年は俺の前で眼鏡を中指で押し上げ、猜疑心を込めた瞳でじつくりと見渡す。それから片手を翳し、護衛を下がらせると

腕を組んで首を傾げた。

「ディアノアの訓練生か。ティパンは現在聖騎士団により封鎖状態にある。勝手な行動は謹んで貰おう」

「それは申し訳なかった。でもあんたらの仲間が蘇って襲ってきたんだ、仕方ないだろう？」

「何だと？ この僅かな時間で既にリビングデッドになつていたとは……解せないな。余りにも早すぎるが……」

口元に手を当てる男。どうやらリビングデッドの事は知らなかったらしい。確かにいくらなんでも長時間放置していたとは思えないし、戦闘はつい先程まで行われていたように見える。戦闘後の慌しい空気が今更ながらに街へ引き返し、死体の処理を始めている騎士たちを見れば大体そのくらいは判る。

だがそうだとすると、随分と進行の早い事だ。なにせ俺たちは巻き込まれた形になるわけだし、確かにこの男の言う通り早めに立ち去るべきだろう。

しかし男は引き返そうとする俺たちを呼び止める。じつくりと再び俺たちを眺め、無愛想な表情で告げた。

「貴様らはリビングデッドを倒してここまで進軍したのか？ たった二人というわけではあるまい」

「後方に仲間が三名待機してる。それがどうかしたのか？」
パーティ

「いや。学園の訓練生にも中々腕の立つ者が居るのだな。貴様、名を何と言う」

「本城夏流……こっちはアイオーン・ケイオス」

「異国の名か。私はマルドゥーク・エルフェリオス。この部隊を任されている者だ。無断行動とは言え、同胞を弔ってくれた事に礼を言おう」

「降りかかる火の粉を払っただけだ。そっちだってそうなんだろう？」

「フン……。まあいい、とにかく残りに処理は聖騎士団が行う。貴様らは即刻この町を立ち去るがいい。無闇にうるつければ残党に出くわすぞ」

マルドゥークと名乗った男は俺たちに背を向け騎士たちの方に歩いて言った。ありがたい忠告も受けたところで広場まで引き返すと、既に三人は騎士たちに取り囲まれ、事情を説明していた。

俺とアイオーンが加わり話を終えると俺たちは元来た道を引き返し、ティパンの敷地から撤退した。ある程度草原を引き返したところで立ち止まり、腕を組んで振り返る。

「さて、これからどうするか」

ティパンは聖騎士団によって封鎖されている。まあ街は迂回していけばいいだけの話だが、さっきの若い騎士の言うとおりこの辺りにはまだ魔物がうろついているかも知れない。

「とりあえず、さっき話を聞いたら目的地であるノックスには行かない方が良さそうだね」

アイオーンが話を聞いたところ、魔物はこのティパンの向こう側に

あるノックスの町から沸いてきたらしい。

俺たちは元々ノックスの炭鉱に出る魔物を討伐する予定だったのだが、その魔物がノックスから溢れ出し、拳句の果て隣の町であるティパンにまで押しかけてきたわけである。

ティパンを守るために防衛線を敷いた聖騎士団の避難誘導により住民は無事だったようだが、他の街に逃がす住民の護衛に戦力の半分を使ってしまい、苦戦を強いられていたらしい。

あの若い騎士は仲間の命より住民の命を優先したと言えば聞こえはいいが、結局仲間を盛大に失うことになってしまった。リビングデッドになんてなりたくてなるわけでもないだろうに。勿論正解が無い事もわかるので、彼が悪いとは思えないが。

「ってことは、何よ？　もしかしてノックスは今魔物だらけって事！？」

「まー、そうなるんじゃないの？　どうするよニーチャン？」

クエスト内容はノックスの魔物討伐のはずだったが、その目的が聖騎士団を苦戦させるほどのものだとなった以上、引き返すべきかも知れない。

そもそも聖騎士団は正規軍だ。学園の生徒とは違う、プロの戦闘集団が苦戦を強いられるとは余程の事態だろう。彼らが体勢を立て直すのにも時間がかかるだろうし、このままノックスに向かえば大物と鉢合わせる事になる。勿論援軍など期待できない。

これだけの大事になっているのだから、学園に指示を仰ぐのが基本的な対応だとは思うのだが、さてどうしたものか……。

「あのう……？　ノックスの住民は、どうなっただんですか……？」

リリアがおずおずと手を挙げて質問する。アイオーンの返答によれ

ば、まだノックスの様子はわかっていないらしい。聖騎士団が調査に向かうのも、恐らくは軍の足並みが整ってからだろう。最優先とされるのはノックスからあふれ出した魔物を他の街に拡大させない事だろうから、当然ノックスそのものへの対処は遅れるだろう。それくらい大事なのだ。

そんな状況でノックスの住民が生き残っているとは考えにくい。俺以外にも全員同じ考えだったのか、気まずい雰囲気パーティーを包みこんだ。

残念だが俺たちだけではどうしようもない。そもそも敵の姿さえ見えないんだ。リビングデッドを倒してわかったが、魔物は死ねば消滅して魔力に帰ってしまう。相手の姿形さえ未知数なのに飛び込むのは危険すぎる。

「リリア、残念だがノックスの事は諦めろ」

俺の口からは普通にそんな言葉が出ていた。リリアは俺の言葉を受け、悲しげに視線を伏せる。

「で、でも……」

「聖騎士団は何十人も居たんだ。それがあれだけやられていた意味を考える。たった五人のパーティーで何が出来る？」

「それは……」

リリアは納得していない様子だった。溜息を漏らし、少しだけ考える。このままノックスに行けば飛んで火にいる夏の虫、だ。

「どう思う？ アイオーン」

「こうなつてはそもそもクエストが成立しないからね。戻って解散……ただ戻るのにも時間はかかりそうだけれどもね」

確かに線路を辿っていけば学園には戻れるだろうが、相当時間がかかるだろう。しかしだからといって立ち止まっただけでも仕方が無い。俺たちはやはり引き返すべきだと判断し、線路沿いを歩き始めた。その間、会話はなかった。あんな戦いの後だ、べらべら喋る気分でもないだろう。そうして暫く歩いていると、不意にリリアが足を止めた。

「あの！ やっぱり、ノックスに行くべきだと思うんですっ！」

全員が足を止めた。リリアは切羽詰った様子で訴えかけてくる。振り返ってじつと見つめると、リリアは俺からふと視線を反らした。

「危険だって事もわかってます……。今更行っても意味なんか無いかも知れない。でも、行きたいんです……。！ だから、反対するな。リリア一人でいきます！ クエストはもう成立しないんだから、リリア一人抜けても問題はないはずですよね？」

「リリア、あのなあ……」

「とにかく、ほっとくなんて駄目です！ 今ならまだ、助けられる命があるかもしれない！ だったら、リリアは……リリアは……」

ぺこりと頭を下げ、リリアは引き返していく。来た道を一生懸命走って遠ざかっていく姿を見送り、俺たちは考え込んだ。

どちらにせよ俺はほっっておくわけにはいかない。リリアをこっちに連れ帰る……一先ずは後を追わなければ。

「悪いみんな！ 俺はリリアを連れに行ってくる！ 先、戻っていいから！」

三人にそう告げてリリアの後を追って走り出した。草原をリリアは猛スピードで走っていく。こっちも全力で走らなければ追いつくのは難しそうだった。

しかし暫くするとスタミナが切れて減速してくる。やがて息切れしながら休んでいるところでようやく追いつく事が出来た。

駆け寄って肩を叩くとリリアは慌てて後退した。まるで俺に捕まったら連れ戻される事をわかっていて、それを拒絶しているかのようだ。

「リリア！ 一人でどうにかなるわけないだろう！？ そもそもお前はさっきビビって一步も動けなかったのに、無茶とかそういう問題じゃねえぞ！」

「それは、わかってますけど……でも……」

リリアは俺の目を見ない。こういう時、大抵リリアは迷っている。今朝会った時はこんな事になるなんて想像もしていなかったのに、随分面倒な事になってしまった。

背を向けて歩き出すリリア。その隣に並び、一先ず歩く。強引に連れ戻そうにも、今のリリアに暴れられたらちょっと厄介である。

「どうしてそこまでノックスに拘るんだ？ お前には関係のない街だろ？」

「その……関係ないとか、そういう言い方はやめてくれませんか……？ この世界で生きてて、普通に生活してて……そういう人の当たり前が壊されてるんですよ？ 関係ないわけ、ないじゃないです

か」

いつになくリリアは頑固だった。俺の態度が気に入らなかったのだろうか？　だが、実際俺たちだけで行っただころでどうにもならない。リリアが死んでしまう可能性があるのならば、その可能性はなるべく避けるようにしなければならない。そんなのは当たり前……原書とかは関係ない。俺自身の気持ちだった。

しかしリリアはこういう時に限って俺の言葉を無視しようとする。いや、むしろこの態度はまるで俺に反抗しているかのようでさえある。一体どうしてしまったのだろうか……。

「何をそんなにへそ曲げてるんだよ。機嫌直せって」

「き、機嫌悪くなんかいいですよーだ。師匠なんか、人でなしのろくでなしなんです！　心のつめたーい人なんですよう！」

「そうかもな」

「そうかもな、って……なんでそんなに他人事なんですか？」

そういわれても、そうだと思ったらそう思うのが当然だと思う。俺は実際、決して優しい人間なんかじゃない。

自分に必要だからリリアを守る。自分に必要だからこの世界に居る。利害が一致しているから共に戦っているだけで、俺は別に仲間ともリリアとも親しいわけじゃない。

この世界に在る謎さえ解き明かす事が出来ればそれでいいのだ。勿論一緒に行動しているこの少女に情は沸いて来たが、自分の命を賭けて守れるかといわれれば胸を張って答えられない。だからこそ出来る限り危険からは遠ざけてあげたいのだが、いまいちリリアにはそういう気持ちは伝わらないようだった。

まあ、もとのうじうじして自分の気持ちをはつきり口にも出来なかった頃と比べればこれも進展なんだろうか。リリアはそっぽを向いたままとことこ草原を歩いていく。俺はその背中を眺め、足を止めた。

「判った。リリアがそこまで言うなら仕方ない。もう止めないから好きにしろ」

「え？」

足を止めたリリアが目を丸くして振り返る。この手は出来れば使いたくなかったが、冬香^{あいつ}に有効だったのだから、恐らくリリアにも通じるはず。

「いやー、仕方ない。リリアは俺の話なんか全然聞いてないんだからな。俺も早く戻って、アクセルやメリーベルと楽しく過ごすしようかな」

「う、うううう……」

リリアがこっちを見ている。じーっと見ている。俺はにやつく顔を隠すために背を向けた。

「じゃあそんなわけだから、一人でがんばってなー」

「……………うーっ！ うううー！ うあーっ！！ ばかー！ ばかー！！ 師匠のばああああかああああつ！！」

リリアは泣きながら走って行ってしまった。振り返ると、見えなくなったはずのリリアが走って戻ってくる。泣きながら俺に突っ込ん

でくるリリアを片手で制しながら俺は溜息を漏らした。

「ほら、一人じゃ不安で戻ってきた。そういう誰かが当たり前についてきてくれると思うのはよくない傾向だぞ？ リリア」

「うわーん！ 師匠のばかー！！ リリアのなりたい勇者になれって師匠がいったんじゃないですかー！！ リリアは困ってる人を見捨てるような勇者にはなりたくないんですーっ！！」

「それでお前が死んでたら割に合わないだろうが」

「ううううう！ わう！ がうう！」

「吼えても駄目。ほら、帰るぞ」

リリアの首根っ子を掴みずるずる引きずって行く。リリアはなにやらぎゃあぎゃあ騒いでいたが、しばらくすると大人しくなった。あんまり大人しいので振り返って見ると、リリアは上着とリインフォースだけ残して遠くを走っていた。いつの間にか変わり身を覚えたらしい。全く、こういうときはかり意地を張るんだから……。仕方が無い……。一人にさせるわけにも行かないし、あとを追うか……。何となく結局こうなる事はわかっていた気がするが、今は後を追いかけよう。

「冗談だよ、冗談。ついて行ってやるから、そんなに怒るなよ」

「……ほんとですか？」

「ほんと、ほんと。ただし様子を見てヤバそうだったら即刻引き返す。これは絶対条件だ」

これだけ粘ったんだ、リリアも譲歩してこの条件を飲まずにはいられないだろう。一先ず安全は確保できた事だし、あとはこのへこたれ勇者様の好きにさせてやるとしよう。

こうして俺とリリアは二人で魔物の巣窟と化したノックスへ向かう事になったのであった。途中、リリアが泣きながら腕にすがり付いて文句を言ってきたのは……まあ、我慢してやるとしよう……。

課外授業の日(2)

ノックスは二つの渓谷に挟まれるようにして存在する鉱山の街だ。世界中にディパンを通して鉱石資源を流通させる鉱山であり、鍛冶師たちの聖地でもある。街は二つの谷に挟まれている為、事実上待ちの外に通じる道はつり橋二本しか存在しない閉鎖的な空間だ。恐らくそれがまずかったのだろう。橋を渡るより前に、気分を害するような独特の死の匂いが漂っていた。橋を渡り、堀の影に隠れて中を覗き込んだ俺たちが見たのは、街中に転がっている無残に散った住民の死体だった。

手足をもがれ、胴体を両断され、暴力的な力に犯され成す術も無く死んで行った人々の死体、死体、死体……見渡す限り広がるその無残な光景を俺はどこか冷めた気持ちで眺めていた。

これは俺には関係のないこと。そんな風にどこかでもう一人の自分が囁いている。兎に角ここは危険以外の何者でもない事が一発で判る。俺は小さく息をつき、振り替えた。

リリアは口元を両手で抑え、身体を震わせていた。自分で望んでやってきたとは言え、流石にここまでの惨状だとは思わなかったのだろうか。いや、これくらい状況になっっている事は想像出来たはずだ。だから俺はこんなにも落ち着いている。

「うっ……ええっ」

蹲り、胃の中の物をぶちまけるリリア。俺はその背中を擦り、より安全な物陰へと誘導する。

リリアは震えながら小声で何かをずっと呟いていた。パニックになるのも仕方ない。この子はこういう事には向いていないんだ。だからといっていつまでもこうして蹲っているわけにもいかない。

いつ俺たちもあそこに転がる死体の仲間入りをするかなんて誰にも判らないのだから。

俺だけはせめて冷静でいなければならない。撤退のルートを探していると、リリアはシャツの袖を掴み、小さな声で俺に言う。

「あの人たちは……どうして殺されなければいけなかったんですか」

「……どうしてだろうな。それは神様にだってわからないだろうさ」

「……あの人たちは、つい昨日まで……ごく普通になんでもなく生きていたはずなのに……！」

リリアの感情は恐らく変化し始めていた。絶望的な暗闇の中から這い上がってきたのは恐らく半端ではない憤り。彼女はリインフォースを強く握り締め、齒軋りする。

「やめておけ」

俺の言葉にリリアが顔を上げる。不安げな、しかしどこか苛立ちを抱えたその視線に俺は強い口調で諭す。

「お前一人で何が出来る。街に魔物の姿がないのはティパンに向かったからだけじゃない。依頼を思い出せ。敵は元々炭鉱に居たんだ。連中の巢穴は街の表層じゃない。この渓谷に続いている膨大な範囲の穴なんだよ」

谷の間には無数の穴が開き、橋が架かっているのが見える。恐らくこの街をとりこ囲む環境全てが鉱山なのだ。街の下層に向かえば向かうほど、道順は困難を極め、一人では戻ってくる事も難しいかもしれない。

闇の穴の中でそこを巣穴としている者を相手に何の知識も準備も無い俺たちが闇雲に突っ込んで勝つ目は薄い。そんな簡単な計算が出来ないほど、リリアは怒っているのだ。

目の前の見ず知らずの人たちが惨殺された景色を見て、その殺意を敵に向けている。優しさから来る反動だろうか。やはりこの子は危うい。

「でも……！」

「でも、じゃない。死にたいのか？」

リリアは悔しそうに視線を反らす。俺も少し冷たく言い過ぎたかも知れない。自分ではそういう認識がないだけで、俺も怒っているのだろうか。

とにかく一先ず立ち上がる。街の様子を窺いながら引き返していると、家の中から子供が一人飛び出してくるのが見えた。

どこかに隠れていたのか、兎に角運良く惨劇を免れたその子供は自分の街の人々が殺されている姿を見てあろうことか街中で叫びだしてしまった。その声にリリアも気づいて振り返る。勿論気づいたのは俺たちだけではない。

炭鉱へと続く穴から不気味な手が地上へと伸びてくる。それはどろどろと渦巻く黒い液体に包み込まれた奇妙な姿だった。

魔物　そう呼ばれるだけの事はある。怖気を誘うその化物は、思いのほか早い歩調で少年に向かって進み、液体の内側にあつた巨大な口をぱっくりと開いた。

「リリアッ……！」

飛び出そうとするリリアの手を取ると、彼女の身体が急停止する。何故といわんばかりに振り返るその姿に俺は説明する時間もなかつ

た。

どちらにせよここからでは間に合わないし、魔物が一匹だけとは限らない。リリア一人で突っ込んで取り囲まれたらどうする？ 頭の中で同時に繰り返し返される『見殺し』の言い訳。しかしリリアは俺の手を振り解き、剣を下段に構えて走っていく。

子供は走って逃げているが、魔物の方が早い。リリアはリインフォースで大地を抉りながら魔力全開で突っ込んで行く。その手が少年に伸ばされる直前、魔物の口が無慈悲に少年の胸から上を噛み千切った。

「おおおまえええええっ！！」

それがリリアの声だというのは多分実際に見ていなかったら俺もわからなかったと思う。憎しみと怒りを込めた剣を振り上げ、魔物の頭に叩き付ける。

感情のせいで制御できていない魔力の塊が魔物の頭に叩きつけられ、魔物は一撃で頭部を吹っ飛ばされて仰け反った。それでもリリアは止まらず、ほうっておけばやがて動かなくなるはずの身体を横に薙ぎ払う。

ばしゃりと嫌な匂いのする体液が飛び散り、リリアは剣を大地に突き刺して子供の死体を見下ろしていた。俺が駆け寄る頃には既に全てが終わっていて、リリアは震える声で呟く。

「……助けられたかも、知れなかったのに……っ」

「リリア！ おいっ！！」

リインフォースを引き抜き、リリアは地下へと続く通路を降りて行く。俺の想像していた通り、街中に潜んでいた魔物たちがそろそろと姿を現し始め、俺は仕方がなく拳を構えた。

こいつらを坑道に行かせるわけには行かない。雷を帯びた力で俺は魔物に向かって走り出した。

課外授業の日（２）

「……………魔物そのものは大した事はないんだがな」

雷撃で焼け焦げる魔物の死体を背に俺は小さく溜息を漏らした。命を失った魔物は解けるように魔力の粒になって空に消えて行く。成る程、これではティパンにも魔物の死体が残っていないわけだ。リリアを追いかけようと振り返ると、街に向かってくるアイオーンたちの姿が見えた。橋を渡ってくる三人に合流するために俺も駆け寄る。

「皆、来てくれたのか」

「そりゃあ、同じ学園の仲間を見殺しには出来ないっしょ？ それより勇者のネーチャンは？ すげえ魔物死んでるけど……」

「リリアは奥に行っちゃった。これから連れ戻す」

「ちょっと！？ あのへこたれ勇者、どんだけ集団行動出来ないのよ！？ ていうか、アンタも一緒だったなら止めなさいよね！」

「……………返す言葉も無い」

三人も街の惨状に流石に驚いているようだった。しかしリリアほど取り乱す様子は無い。アイオーンは先頭に立ち、腕を組んで首を傾

げる。

「魔物がこれだけとは思えないねえ。夏流、どうしてリリアを一人で行かせたんだい？」

「……それは」

一人で行かせようと思ったわけじゃない。結果的にそうなったただけだ。それに今から追いかけて連れ戻す。あの子に死なれるわけにはいかないんだ。しかしアイオーンは俺の考えを否定するかのよう微笑を浮かべる。

「リリアを追いかければ全滅も在り得る……そうは思わないかい？」

「待てよ。リリアを見捨てろって言うのか？」

「一人の命と四人の命、どちらを優先すべきかは君にはわかっていと思うのだけれど。君はそう、客観的な判断で物事を決めるタイプの人間だろう？」

アイオーンの言葉に俺は何故か苛立ちを覚えた。客観的な判断で物事を決める？ そうじゃない。だが何が違うのかは言い返せなかった。

何より今はそんな押し問答をしている場合ではない。一刻も早くリリアを追わなければならないのに。

「リリア・ライトフィールドの感性は君とは違いすぎるんだよ、夏流。だから彼女は君の行動に反発し、一人で突っ込んで行った。君に助けは求めずに、ね」

「……………」

言い返せない。確かにその通りだとは思う。だが、それだけじゃない。俺はリリアを守りたいんだ。リリアを大事にしたい……だからあの子の意思に多少そぐわなくとも、安全な方法を選びたい。その気持ちの間違っているのだろうか。

無茶をして、取り返しのつかないことになるのはもうウンザリだ。だったら俺は出来る限り安全な道を行きたい。自分が傷ついて自分だけ倒れるのとはワケが違う。誰かと一緒に居るという事は、誰かを道連れにする恐怖と隣り合わせだ。

リリアを俺の無茶な判断で死なせるわけにはいかない。だから逆に俺は冷静でいなきゃならないと思う。その考えが間違えているっていうのか？

苛立ちを口にする事はなかった。勿論そんな事をアイオーンに言っても仕方がない。それに何より、コイツは俺の苛立ちを煽っているんだ。何も言わずとも伝わっている事だろう。

「勇者は二人居る。どちらか一人居れば、体制は保てるだろう？リリアのように君のいう事を聞かない子より、ゲルトを守った方が早いんじゃないかい？」

笑うアイオーンの襟首を掴み上げる。俺がどれだけ睨んでもアイオーンは平常心を崩さない。俺は舌打ちし、アイオーンの眼鏡を掴んで片手で握り潰した。

「調子に乗るなよ……俺に意見するなんて百年早い。それに言っ
う事聞かねえ勇者なのは、どっちもどっちだ」

眼鏡を踏み潰し、背を向ける。アイオーンは全く慌てる様子も無い。俺は坑道に向かって歩き出した。

「ちょっと待ちなさいよ!? アンター人で行って死なれても困るでしょうが!!」

結局ブレイドとベルヴェールがついてくる。ブレイドは俺の隣に並んで走りながら生意気な視線で俺を見た。

「ニーチャン、激情家なのか客観的なのかわかんないね」

「……悪かったな。お前ら関係ないやつまで巻き込んで」

「ええ、いい迷惑……きゃあっ!?!」

文句を言いながら突っ込んでくるベルヴェールの足元に小石を投げ込み転倒させるブレイド。悪戯な笑顔を浮かべながらVサインを作っている。

「そんなの気にしないでよ、ニーチャン。困ったときはお互い様って、親父も言ってた」

「……ありがとな、ブレイド。よし、行くぞ!」

「ちょっとお!? 人を転ばせておいて、勝手に話を進めるなあっ!!」

なにやら背後で喚いているアホの子を置いて進んで行く。しかし結局は直ぐに追いつかれる事になった。

坑道内部は予想通り複雑に入り組んでおり、ヘタをすれば自分たちが来た道さえわからなくなりそうだった。リリアがどっちに行ったのかはわからないわ、手分けして探せば迷いそうだわ、兎に角八方

塞である。

どうしたものかと考えていると、背後からベルヴェールが身を乗り出した。目を細め、眉尻を上げながら溜息を漏らす。

「はあゝ。もう、仕方ないわねえ……」

そう言っただけで彼女が手にしたのは矢尻の部分を構成している半透明の鉱石だった。それにポーチから取り出した糸を通し、中指に巻きつけてぶら提げる。

ベルヴェールが魔力を通すと、矢尻は淡く光を放ち始めた。しばらくするとゆっくりと一つの道を指し示し、ベルヴェールはそちらを指差す。

「あつちよ」

「判るのか……？」

「伊達に良質の魔石を矢にしていなわよ。そこらの占いで道具よりは精度高いわ。ほら、モタモタしないで前衛進む！」

背後から蹴り飛ばされ、よろけながら走り出す。何だかんだで二人ともちゃんとリリアを探してくれている。学園の仲間だから、困った時はお互い様、か……。

学園の生徒の結束……。俺は彼らを今の今まで仲間だとは思って居なかった。だが、こうして手を差し伸べてくれている相手に対して、その考えは失礼すぎると思う。

少なくともリリアを救うという目的で利害が一致する以上、彼らの言葉を信じよう。この世界の現実を俺よりも知る彼らの力を借りなければ、成せる物も成せなくなる。

「ありがとう、ベルヴェール」

「な、何よ……？ 急に素直にお礼を言われると何だか背中がむずむずするわ」

「え？ 背中に虫でもいるの？」

「居ないわよ、この子供っ！！」

二人がなにやら言い合っているのを背後に進んで行く。分かれ道はベルヴェールのペンデュラムで道を判別し、ひたすらに潜って行く。そうして行くと、道の奥から戦闘音が聞こえてきた。刃と刃が打ち合うような激しい音……刃と刃が打ち合うような？

疑問は直ぐに払拭された。一際広い空間に出ると、そこには黒い液体に包まれた龍のようなシルエットがリリアに襲い掛かっていた。龍の放つ攻撃は素早く重く、リインフォースで弾いてもまるで金属を打ちつけられたかのような快音が響いている。

攻撃に弾き飛ばされ吹っ飛んでくるリリアを慌てて受け止める。リリアは目を丸くして、それから直ぐに俺の手を離れた。

「うつわー！？ これ何、地龍！？ デケエー！ スゲエー！」

「はしゃいでる場合じゃないわよ！！ ほら、さっさと構える！」

二人が前に出る中、俺はリリアの手を掴んで引き留めていた。リリアは振り返り、苦しげな表情で俺を見つめた。

「一人で無理に戦おうとするな！ そんなに俺の言う通りにはしたくないのか！？」

「師匠は……だって、師匠は……っ！ 離してくださいっ！！ あれを倒せば、全部終わるんですから！！」

リリアは傷だらけだった。まさかここに来るまで俺たちが敵に出くわさなかったのは、リリアが片っ端から出会う相手を倒していたからなのか？

「ニーチャン、連携して戦わないとマズイ！！ こいつ、魔物に侵食されてる！！」

どろどろの黒い液体に身体を蝕まれ、その激痛からかた打ち回る地龍に最早理性は感じられない。近づくものは見境無く迎撃するその牙を受け、ブレイドが叫ぶ。

「左右から攻めよう！！ あと、誰かあの突っ込みすぎの勇者のネーチャンを下がらせて！！」

「リリアッ！！ 前に出すぎだっ！！」

龍がブレイドに襲い掛かっている時、リリアは前進していた。不意を突き、龍に側面から切りかかる。しかし全長20メートル程はある龍は、リインフォースで一太刀切りかかったところでは止まらない。

暴走する尾がリリアの側面からガードを突き破り襲い掛かる。不意を打たれ、ぼきりと嫌な音が響くのが聞こえた。

「アタシが拾いに行くわ！！ ナツル、援護しなさい！！」

「頼むっ！！」

ベルヴェールが外周を走りながら矢を放つ。大気を切り裂き龍に突き刺さった矢は爆発するように一瞬で氷の結晶を龍の身体に生やす。舞い散る血飛沫の中、走りながらベルヴェールは容赦なく矢を連射する。次々と放たれる攻撃を尻尾で弾き飛ばしながら龍は彼女へ狙いを定めた。

注意を免れたブレイドが斧を投擲する。側面から腹部に突き刺さった斧に龍が悲鳴を上げる中、ブレイドはいつの間にか手にしていた蒼い槍掲げ、龍の首筋に突き刺した。

龍の悲鳴が響き渡る。その咆哮と暴れ狂う動きに耐え切れず、坑道の壁や天井から岩が崩れる。俺はその岩を弾き飛ばしてベルヴェールを庇い、そのままの勢いで右腕に魔力を蓄積した。

走っていれば当然集中力は落ちる。降り注ぐ瓦礫と龍の尻尾の迎撃を回避しながら、なおかつ右腕に魔力を集中。実戦での魔力操作がここまで難解だとは。

「訓練通りというわけには、行かないな……！」

振り下ろされる尾を跳躍しながら回避する。右腕に収束した魔力ごと拳を振り上げ、詠唱する。

「謳え、スヴィブダーク　！」

右腕のルーン術式に火を灯す。収束して搾り出した魔力を全て一閃に解き放つイメージ。

ぶつつけ本番。メリーベルの説明書に載っていた、この武器だからこそ放てる俺にも出来る必殺技。

「レーヴァテイン
神討つ一枝の魔剣ッ！」

拳に乗せて放たれた雷撃がまるで光線のように龍の頭部を貫く。直

後、四方八方へと枝分かれする雷は龍の全身を貫き、断末魔の悲鳴が鳴り響く。

空中から着地するよりも早く、ベルヴェールが倒れたリリアを担いで後退するのが見えた。無茶な体勢で技を放ったせいでふらつく着地を手伝い、ブレイドは俺を支えて一緒に走り出す。

「スゲー威力だけども、もうちょっと手加減して撃った方が良かったんじゃない!? この坑道、崩れるじゃんっ!!」

「あんなに滅茶苦茶だとは思わなかったんだよ! いいから走れっ!! ベルヴェール、置いてくぞっ!!」

「ちょ、前衛タイプと同じ移動速度だと思わないでよ!? ていうか、リリア担いでるから重……っ!?」

崩れる坑道。轟音と振動の中、わけもわからず振り返る事もしないで俺たちは走った。

途中でリリアを受け取り、ベルヴェールを前に進ませペンデュラムで進んで行く。背後で何やら叫んでいるブレイドの声が聞こえたが、悪いが振り返っている余裕はなかった。

地上へ続く光が見えたところで俺たちは全力でそっちに向かって飛び込んだ。背後で坑道が崩れ落ち、瓦礫で道が防がれるのを見て、三人同時に座り込んだ。

「はあっ、はあっ、はあ……っ」

「ぎ、ぎりぎりセーフじゃん……つぶねえええ……」

「し、死ぬかと思ったわ……。本気で死ぬかと、思ったわ……」

そうしてぐったりする俺たち三人を見下ろし、アイオーンは笑っていた。もう何も言う気にはならなかった。それより今はリリアだ。リリアは側面から思い切り龍に吹っ飛ばされた。見れば服には血が滲み、リリアは口から血を流しながら気を失っている。しかしこんな時にかけてやれる回復魔法の一つさえ俺は持ち合わせていない。

「誰か……誰か回復出来る奴は!？」

「アタシがやるわ。下がってなさい」

額の汗を拭い、ベルヴェールが薬瓶を取り出す。肌蹴させたリリアの腹部に薬を垂らし、塗れた傷口に手を翳すと蒼い光が傷を覆い、水が渦巻きながら輝いている。

「光属性のヒーリングとまでは行かないけど、これくらいの傷ならなんとかなるわ」

専門的なことはよく判らなかったが、とにかくこれで一安心らしい。ほっと胸を撫で下ろすと疲れがどっと身体に襲い掛かってきた。ブレイドは完全に座り込み、乾いた笑いを浮かべている。俺もどうして生き残れたのか謎だ。まあ、自業自得なんだが……。

「ご苦労様。どうだった？ 地下の様子は」

「ああ……。魔物がいたんだろうけど、リリアが退治したらしい。龍みたいなのがいたが、全員で何とか潰してきたよ。文字通り」

「……地龍、か。恐らく精霊も魔物に侵食されて居たんだろうね」

腑に落ちない様子のアイオーン。口元に手をあて何かを考え込んで

いたが、今はそんなのを気にしている場合ではない。

リリアが無事かどうかが気になり、全く気持ちが落ち着かなかった。食い入るように治療の様子を眺めていると、ベルヴェールが引きながら言った。

「アンタ、このへこたれ勇者の何なの……？ そんなに心配しなくても、死んだりしないわよ」

「そ、そうか。いや……ありがとう、ベルヴェール。本当に助かったよ」

「おいらたち、回復魔法使えないもんな。アイオーンは殺すの専門だし」

さりげなくブレイドが怖い事を言っていたが聞かなかった事にしよう。

何はともあれ、これで一先ず事件は解決した。そう思った矢先だった。

橋を渡り、行軍してくる聖騎士団の一団が見えた。その先頭にはティパンで話したマルドゥークの姿がある。あれから数時間しか経っていないのに、随分とお早い到着だと感心していた所、つれてきている軍勢はかなり少なかった。数えられる程度しかない軍を率い、わざわざやってきたのだろうか。

「貴様らは……ティパンで会った訓練生？ 何故ここに居る！」

「何故も何も、魔物を倒したんだよ。元々そういう依頼だったんだ」
一度は放棄しようとした上に既に依頼など関係ないが、一応言い訳としては一番だと思いそう口にすると、男は不快感を露にする。

「聖騎士団の領分に踏み込む権利は貴様らに無い！ 学園の訓練生だろうがなんだろうが、勝手な行動は謹んで貰いたいな。先刻、忠告もしたはずだが？」

「……それは、素直に申し訳がなかった。別にあんたらの面子を潰そうってわけじゃなかったんだ」

「知ったような口を利くな……！ これ以上街をウロつくな！ 即刻シャングリラに引き返せ！ テイパンで既に汽車の運行も再開されている……直ぐに戻るだろう」

そう告げると騎士たちは街の方々に散って言った。言われるまでも無くリリアを担いで立ち上がると吊り橋を渡ってノックスを後にした。

テイパンの街に引き返す頃にはもうすっかり日が暮れていて、最終列車に乗り込んで俺たちは夜の草原をシャングリラへと戻る事になった。

流石に皆疲れたのか、気絶しっぱなしのリリア含めソファなどで眠っていたのだが、唯一起きていたアイオーンは窓辺に立つ俺の隣に歩み寄り、グラスを傾けた。

「今回の件、どう思う？」

「……何がだ」

相変わらず胡散臭い口調と様子で笑うアイオーン。正直に言うともだ俺はノックスでのコイツの言葉に苛立っている。しかしアイオーンはそれを知った上で平然と話しかけてきた。

「聖騎士団のリビングデッドになる速度……おかしかったとは思わないかい？」

そういえば騎士の男もそんな事を言っていた。言われてみると確かに異常だ。

ノックスにたどり着いた時、死体はまだまだの死体のままだった。だが先に死んだのは間違いなくノックスの住民であり、ノックスの死体は暫くの間雨ざらしになっていたにも関わらず、先にリビングデッド化したのは聖騎士団の方だった。

それに、地龍を倒して鉱山を塞いでしまったからケリがついたかと思っていたが、そもそも何故あそこから魔物が発生したのか。龍は魔物を生んだりしないだろうし、そもそも龍は魔物に襲われて苦しんでいる様子だった。

「……元凶が他にあるとは思わないかい？ 死体を操りリビングデッドにし、魔物と呼び寄せノックスを襲わせた……。そんな事が出来る人間が居たとしたら？」

顔を上げる。アイオーンは不吉な笑いを浮かべている。リビングデッド？ 最悪の考えが脳裏を過ぎった。

アイオーンは通称死術使い……ネクロマンサー 思えば魔物について、製造法まで知っているなんて詳しすぎる気もする。俺の疑いの視線を受け、アイオーンは嬉しそうに目を細めていた。

真実は闇の中。俺は結局眠る事も出来ないまま、ずっとアイオーンとにらめっこをしたまま帰路に着く。疑問はどうせすぐにハッキリする。闘技場でアイオーンを叩きのめし、全て吐かせればそれで済む。

自らの拳を見つめ、そんな事を考える。しかし事態は俺が考えているほど、簡単なものではなかった。

課外授業の日(2) (後書き)

↓ディアノイア劇場↓

第二部は学園の外にも引きこもらないで出たいと思う編

アクセル「問題は学園の外まで考えるのがめんどくさいって事だよな」

リリア「そんなぶっちゃけなくても……」

アクセル「さて、そろそろ読者の方々も世界観になれてきた頃だと思うので、細かい設定とかも出しちゃいましょうか!」

リリア「……めんどくさいって言われたあとに設定出されても気まぐずくないですか?」

↓設定資料集その4↓

虚幻のワールドガイド

『要塞学園都市シャングリラ』

高さ20メートルにも及ぶ巨大な城壁により囲まれる円形の要塞都市。物語の主な舞台であり、英雄学園ディアノイアを有する。中心部に巨大な塔、『ラ・フィリア』を抱き、その周辺に学園、商

業地帯、住宅地と大きく三層に分かれている。ラ・フィリア周辺は丘になっており、街は中心部へ行くには上り坂となる。

そのため街中の人々が毎日坂道を往復しているし街中の建造物が坂道に存在する。街は高度な発展途上にあり、ガンガン増築を繰り返して裏通りは混沌とした模様になっている。

東西南北にそれぞれの学園へと通じるメインストリートが存在する。東に錬金術、魔術の研究エリア、南に戦士ギルドと聖騎士団の駐屯地、西には公園や大型のマーケット通り、北にはヨト信仰の教会地区が広がっている。

主な移動手段は徒歩だが、外周を走る市内列車が存在する。が、街の中心（学園）を行動拠点とする生徒にはあまり人気がない。――街の四方にそれぞれの主要都市へと続く地下ホームが存在し、汽車が出入りしている。余り頻繁に行き来しておらず、一時間に一本くらい方。

学園を有するシャングリラが要塞都市と呼ばれる由縁は強力な術式結界と外周を覆う城壁、そして街全体が防衛戦闘に特化した構造になっている事が理由。

元々は魔王の率いたザックブルム帝国の領土下にあり、ラ・フィリアは魔王ロギアが生み出した魔法塔だといわれている。

『英雄学園ディアノイア』

シャングリラの中心部に存在する英雄を育成するための学園。

ヨト教会並びに聖都オルヴェンブルム所属聖騎士団直轄の兵士養成機関であり、オルヴェンブルム大聖堂騎士でもある学園町アルセリアの元に日々力の在る子供たちを育てている。

各地から才能の在る子供を引き抜いたり、その際生活苦の子供には多額の奨励金を与えたりしている。人材の育成と収集に余念が無く、この世界において間違いなく一番の教育機関であると言える。

ありとあらゆる学問に通じる達人を教師とし、ありとあらゆる武術、魔術を教え込みこれからの世界を導くエリート人材を育成している。尚、先の魔王大戦にて多くの大人が死亡したため、教員は非常に若い者が多い。

施設は三層構造で、上空からみると三つの輪が見える。外周を校舎が並び、その次に広大な中庭、その内側にラ・フィリアの直下にあるロビーとなっている。

様々な学科が存在し、生徒が要望書を提出すれば新たな学科も作成される事がある。『学ぼうとする意思を決して蔑ろにしてはならない』という理念の下、多少わけありの生徒でもきちんと受け入れる。校内ランキング制度というものが存在し、生徒同士で戦う事でお互いの力を磨きあう。同時に聖騎士団やスポンサー、街の人々に対する一種の成果発表の場となっている。

一説にはラ・フィリアを覆い監視する為に学園があるとも言われており、大甲冑姿の学園長は大戦期以前からこの地に住んでいたという噂がある。

『ランキングバトル制度と闘技場』

自主的に登録を行う事で参加出来る校内専用の決闘制度。

登録し、優秀な成績を収めた生徒には聖騎士団からの奨励金、将来の約束などがされ、非常に有利。それ以外の目的（戦うことそのものなど）で参加する事も可能だが、上位に成る程化物じみた強さになって行く為、あくまで成績とステータスのために参加している人が多い。

闘技場における70×70メートルの円形フィールドで戦闘を行う。ちなみに高さは200メートルまで存在し、その形を覆うように不可視の強力な結界でリングを構築される。

結界は触れてもノーダメージだが、たたきつけられるとそれなりに

痛い。壁を使った戦略なども求められる。

基本的より自分の順位より誤差10位以内の生徒としか対戦出来ない。直、戦闘の勝敗が直接のランキングに関係するのではなく、戦闘内容など総合的なポイントにより順位が決定するため、順位差が一つでもその戦闘力が大きく異なる事もままある。

学園祭などのイベントではチームバトルなども行われ、闘技場は通常時は生徒に訓練場として一般解放されている。また学園の施設で唯一外部の人間に解放されている地区でもある。

『魔王大戦』

十五年前、ザックブルム帝国の王、ロギアにより始められた世界侵略とそれに抗う者達の戦いにより、後に呼ばれる事となった単語。大戦中、魔物を生み出す技術で各国へ攻め入り次々と滅ぼした魔王と呼ばれるまでに至ったロギアをリリアの父フェイトが率いる勇者たちが打ち負かす事により終止符が打たれる。

しかしフェイトは魔王と相打ち、仲間たちも皆力尽き倒れ、結果的に勇者たちは命を賭けて魔王を倒し、世界を救ったといわれている。ただ一人生存してしまったゲルトの父ゲインは世界中から『逃げ帰った勇者』と蔑まれ、その後数年間悪意を受け続けた後、短い生涯を終えた。

ロギアの魔物は戦いの後も世界中に散り、今でも人々を苦しめ続けている。小国であったクイリアダリア王国が世界の覇者となる事が出来たのも、魔王が他の国を滅ぼしてしまったからであるとも言える。

また魔物に対する有効な戦闘力を持つのは現在聖騎士団のみであり、戦争で疲弊した他国はクイリアダリアに服従せざるを得ない。

魔王は滅び勇者は死んだといわれているが、その二つの最期を見守った人物は居ない。ただ崩れた魔王の居城の瓦礫の山にリインフォ

ースだけが残されていたという。

『聖クイリアダリア王国』

魔王大戦により世界の覇者になりあがった元小国。

ヨト信仰と呼ばれる、ヨト神を崇める宗教が国教であり、それを世界中に現在では広めている。宗教の自由は一応許してはいるものの、他宗教に対する影の弾圧も怠らない。

強力な魔術概念武装組織、聖騎士団を抱え大魔術を行使する嘗て勇者の仲間でもあった女王の手で統治され、世界中の魔物を討伐しつつ他国を支配している。

多少の他国の小言は聖騎士団の圧力で捻じ伏せ、逆らう組織は反乱分子として抹殺する強引なやり方は一部で批判を浴びているが、元々聖騎士団は暗殺組織でありフェイトやゲインも所謂アサシンであった。

領土内に英雄学園ディアノイアを有するシャングリラを抱き、物語の舞台となる国である。

『聖騎士団と魔物』

聖騎士団とはヨト信仰の信者により構成される聖クイリアダリア王国の正規軍の一種。

この国では正規軍が聖騎士団であり、予備戦力に通常騎士団が存在する。その為発言力は非常に高く、聖騎士団には神官や騎士の家柄の人間が多く存在するエリート組織である。

オルウェナ・イラ

嘗ての大戦で騎士団長であり大聖堂騎士でもあったフェイト・ライトフィールドが率いる聖騎士団は魔王の生み出す魔物やザックブルム軍を破竹の勢いで捻じ伏せ、最終的には魔王ロギアさえ討ち取っ

てみせた。

そのドサクサで他の国家の領土に進軍し、軍を置き、部隊を構築し、あらゆる国を守る名義で侵略を行った。高度な魔術とヨト教の洗礼武装を行使する彼らに歯向かえる組織は存在しない。

彼らが現在でも敵対しているのは魔物と呼ばれる不浄の存在である。魔物は魔王が生み出した存在で、黒くどろどろした液体を纏っている姿である事が多い。

他の精霊や人間を食い殺し感染させる魔物は一匹残っているだけでも爆発的に量を増やし、ロギアという統率者を失い本能のままに暴れまわる。

聖騎士団は現在でも魔物と永遠の闘争を続けているが、それは聖騎士団にとっても都合のいい状況である。

『精霊と魔力』

自然物でも生命を宿すものからは魔力が溢れる。ある程度の趣向性（森なら森、海なら海、地形や環境に左右される）を持つ魔力が一定量集まり、そこに宿り続けると精霊と呼ばれる意思を持つ存在に昇華される事がある。

精霊は自然物の代弁者であり、人間とは基本的に共存している。自然物を犯す人間には抵抗するが、自然と協調しようとする人間には友好的。

しかし魔力をエサとする魔物に狙われやすく、環境と同時に魔物の呪液を浴びせられる事により同じく魔物に変貌してしまう。その為聖騎士団は精霊を事前に討伐したり森を焼き払ったりと些か乱暴な手段も取っている。

高度な技術性長期にある世界観から機械文明が急速に発達しつつあり、精霊と人間の関係は微妙になりつつある。

アクセル「ここまでにてた設定はこんなもんかな？」

リリア「なが！？　こんなにしっかり見る人いないですよ！？」

アクセル「居るかもしれないだろ？　せつかく作つたんだから発表しないと無駄っぽくてやじゃん」

リリア「それはそうですねっ！！」

課外授業の日(3)

「それで、貴方は結局わたしに何を言いたいんですか……」

「そ、それはね……その……こういう時、ゲルトちゃんならどうするかなあ、って……」

アクセルが厨房でフライパンを振っている頃、テーブルを挟んで顔を合わせるリリアとゲルトの姿があった。

身体に包帯を巻いたままのリリアはそこでブラックコーヒーを口にしながら視線を伏せていた。ゲルトとリリアが店の前でもったり遭遇したのは完全なる偶然。しかしこうしてこの場所で共に顔を合わせていることは運命のように感じる。

ゲルトはチョコレートパフェに突き刺さったスプーンをからからとかき回し音を立てる。課外授業で起きた事、その時にリリアが負傷した事、結局何一つ救えなかった事。そして夏流の手を振り解いてしまった事。それらをリリアは一生懸命に拙い言葉でゲルトに伝えた。一度は憎しみあい剣を交えた二人がこうしてあたかも友人であるかのように接しているのは奇妙以外の何者でもなかったが、二人の間にある関係性は友情でも敵でもない、言葉に出来ない複雑な物だった。

リリアの話を聞き、ゲルトは眉を潜めた。結局リリアを守れなかった夏流に対する苛立ち。現実を前に甘えた事を言っているリリアへの戸惑い。しかし何より、こうしてリリアと面をあわせ話をしている事を嬉しく思っている自分自身への呆れ……。様々な感情の最中、溜息だけが零れ落ちた。

「それで、怪我の具合はいいんですか？ 何かある度にそうやって

負傷していたら、お嫁にいけなくなりますよ」

「はう！？ 何気に酷いこと言うよね、ゲルトちゃん……ていうかお嫁って……」

「そもそも、ホンジョウナツルとはどういう関係なんですか？ 貴方たちかなり親しそうに見えましたけど」

ゲルトの問い掛けにリリアは押し黙る。コーヒーを一口飲み、視線を窓の外に向けて肩を竦めた。

「わかんない」

「は？」

「わかんないよ。なつるさんは、時々何を考えているのか……リリアには全然わかんない時があるの。時々凄く怖い顔でリリアを強引に引っ張って……そういう時、まるで別人みたいになっちゃったなつるさんの姿に自分もどうしたらいいのかわかんなくなる」

それはゲルトには想像のつかない事だった。しかしリリアと夏流、二人の関係性が明らかに捻じ曲がっている事はリリア本人にも明らかなことだった。

素性も知れず、何にも属さず、あらゆる思想に染まらない少年。まるで自分一人だけこの世界から切り離されて存在するかのようなその姿に戸惑うことは何度もあった。しかしその度彼の笑顔や優しい言葉、彼が差し伸べる手が戸惑いを払拭してきた。

しかし、恐らくそれらは間違いだった。お互いに疑問さえ口にしないまま触れるだけ触れて暖かさだけを認識して、結局本質は何も理解していない。自らの掌を見つめ、リリアは一週間前の事を思い出

す。あの雨の日、闘技場で離れてしまった指先は今も繋がらないまま、結局それを拒絶し続けてしまっている。

そんな夏流はそれでもリリアを二度救った。ゲルトとの決闘を阻止し、地龍に一人で挑むリリアの代わりに一撃で龍を葬って見せた。わからないのに、信じたくなるような事をする夏流の行いが、矛盾するその感情が胸の中にもやもやしたまま蓄積していた。

「ナツルの事が嫌いになったんですか？」

「そういうわけじゃないけど……」

「じゃあ、どうなんですか？ はっきりしない人ですね、貴方は」

「……………ごめん」

「あ、謝らないで下さい……。別に責めている訳じゃないから……。でもそれで、貴方はこれからどうするんですか？ 嫌いではないなら早く仲直りするなりなんなりすればいいじゃないですか」

「それもそうなんだけど……」

煮え切らない様子のリリア。既に彼女はもう三日は夏流と口を利いていない。会ったとしても、夏流が訊ねてきたとしても、どんな顔をして会えばいいのか判らなかった。

まるで冷たく凍えるような視線で簡単に人間を見殺しにした夏流。自分を助けるために危険を承知で駆けつけた夏流。どちらも同じ夏流であり、だからこそわからなくなる。

マグカップを空にしてリリアは意を決して顔を上げた。少しだけ困った顔で、ゲルトに微笑みかける。

「決めた。リリア、暫く一人で頑張ってみるよ」

「え？」

「夏流さんにも言われちゃった。いつでも誰かが傍に居てくれると思うな、って……。何かリリア、夏流さんに甘えすぎてた……。ううん、期待しすぎてたのかも」

自分自身の中にある理想の勇者の姿。それに限りなく近いと感じたのが、他でもなく彼だったから。

自分の心の中、かなえる事の出来ない願いを勝手に重ね裏切られたかのように感じ、結局触れられない指先に苛立つだけ。そんな自分の甘さが嫌になった。

「もつと強くなって、もつと力を手に入れて……それで」

そこから先は言葉にならなかった。リリアは儚げな笑顔だけを残して店を出て行く。ゲルトはパフェのグラスに移りこんだ自分の霞む姿をじっと見つめたまま、リリアが去っていくのを感じていた。

「力……か」

口に放り込むチョコレートアイスの味。

思っていたよりもそれは甘くて、思っていた以上にそれは冷たかった。

俺は昔から、他人に誤解される事が多かった。

『そうじゃないんだ』って言葉を何度も飲み込んで、出来る限り誰かと摩擦を生まないように生きてきた。

自分の気持ちなんて物は世界の中では何の必要も無く。自分自身の思いさえ破滅に導くような、そんな危うくて魅力的な割れ物だから、どんなに誰かに触れようとしても、自分自身の気持ちと言葉は相手を傷つけ擦れ違う。誰かの言葉を自分の気持ちで判断しても傷つくだけ。だから俺は『誰か』とか『自分』とか、そういう気持ちは要らないと思った。

客観的な判断から齎される言葉や判断が常にベターでありベストだと今も信じている。人間はそう上出来な生き物ではないから、個人的な意見は何かを犠牲にするだけだ。だから俺は自分の言葉なんて要らない。

世界の全てを救う事なんて人間には出来なくて、だから直ぐ傍にあるものだけでも守りたいと思う。そのために沢山沢山犠牲にしなければいけなくて、だから幸せになる事はとても難しいのだと思う。そういう気持ちを抱えいつしか考える事も忘れ、自分の中でその考えがあたかも自分の意見と摩り替わったかのように感じた時、気づけばもうリリアは俺の手を離れていた。

リリアだけではない。俺を慕う人は皆離れて行く。自分の言葉で彼らは繋ぎとめられない。でも客観的な言葉じゃ彼らには届かない。どうすればいいのかわからないまま何年も過ぎ去って、冬香の手を離れた時から未だ俺はその答えを見つけれないままだった。

「で？　だから、なんで一々あたしの部屋に来るのかな、君たちは」

俺はメリーベルの研究室のソファの上に寝転がり、額に手を当てていた。自分で言うのもあれだが、今俺は相当参っている。

リリアともう三日も口を利いてもらえていない。完全に避けられている。ああ、言われるまでも無い。俺が何かしでかしたんだ。わか

っている。だが、それがなんなのかわからなかった。

どうにも八方塞だわ、自分ではどうしようもないわ、リアの機嫌は直らないわで疲れきっていた。元々人付き合いがいい方だとは思ってないし、今はもう誰とも合いたくない気分だった。だが結局は誰かに話をきいてもらいたくて、女々しくこんな所に入り浸っている。

メリーベルは俺がいようがいまいが話していようが話していまいが関係ないといった様子でフラスコを振っている。そういうメリーベルだからこそ今は一緒に居たい。その無頓着さに甘えているだけだというのは判っている。

ゲルトが掃除したらしく綺麗になった天井を眺めながらぼんやりと時間を過ごした。今は何も考えたくない……。どれくらいそうしてバカみたいに時間を浪費しただろう。気づけばメリーベルが傍に立ち、影が顔に差していた。

「場所、空けて。座りたいから」

「ああ、悪い」

寝そべっていたら座るスペースはないだろう。身体を起こし、座りなおす。メリーベルは俺の隣に腰掛け、白衣を脱いで髪を掻きあげた。

その横顔をぼんやりと眺める。こちらを視線だけで捉えたメリーベルと見つめあい、俺は苦笑を浮かべて肩を竦めた。

「何？」

「いや……やっぱお前は楽でいい。多分俺たちは似た物同士だからな」

「勝手に一緒にしない」

「ああ、判ってるよ。俺の主観的な……いや、なんでもない」

額に手を当てる。何が主観的な感想、だ。気にしすぎている。どうかしていると言い換えてもいい。

俺が溜息を漏らす様子を眺め、メリーベルは呆れるように笑った。その笑顔の意味は判らなかったが、彼女はソファの隅っこに移動すると、自らの膝をポンと叩いた。

「どうぞ」

「何が？」

「膝枕してあげる」

「……なんで？」

意味不明すぎて首を傾げる。が、彼女は黙ったまま俺をじっと見詰めていた。仕方が無く膝を乗せ、手摺に足を乗せて寝転がる。思いのほか柔らかい感触に思わず心地よくなっていると、メリーベルは俺の頭を撫でて見下ろしていた。

「……完全に子供扱いだな」

「大人を名乗る人間ほど、本性は幼いもの」

「それは同意するけど……いや、もういいや」

なされるがままに瞳を閉じる。メリーベルはまるで子供をあやすよ

うな優しい手つきで俺に触れる。ここ数日悩みすぎでろくに眠れなかった事も手伝って俺は猛烈に眠くなっていた。

このままだと寝てしまいそうなので起きようとすると、メリーベルは俺の頭を押し戻す。対して強い力ではなく抵抗は難しくはなかったが、抵抗したくない気持ちの方が自分の中で勝っていた。

「それで、何があったの？」

「……何があったんだろうな。俺は……その、自分では良いと思う事をしてきたつもりなんだ。今までずっと……」

でも、結果的に俺は誰かに拒絶される事になる。リリアが俺の手を振り解いた時の瞳が、冬香と完全にダブっていた。その事実が胸に突き刺さり、古傷を抉るように今でも痛み続けている。

「全ては救えない、全ては守れない。だからその為に何かを犠牲にする……。そうしなきゃ後でデカいツケを支払わなければならなくなる。だから俺は、そうやって傷つく事も傷付ける事もしたくないから、それで……」

「リリアに嫌われた、と」

まるで見透かすような言葉がぐさりと突き刺さる。言い返す事も出来ずに溜息を漏らすと、メリーベルは目と鼻の先まで顔を近づけ俺の瞳を覗き込んできた。

「じゃあ、もう会わなければいいじゃない」

「そっいうわけにはいかない」

「でも、そういうものでしょう？ 人間は全ての人間とは解り合えない……。自分の波長と合う人間を探すのは容易じゃないから。自分の中にある何かを隠して犠牲にしながら隣を歩き続けるのは、ただの苦痛でしかない」

いつに無くおしゃべりなメリーベル。その言葉を聞き、俺は全く同じ事を考えていた自分自身に気づいた。

リリアは俺とは違いすぎる。だからリリアは俺の手を跳ね除ける。確かにアイオンの言う通り。俺と彼女は決定的に違っている。だからその手が触れ合う事は無い。繋がる事はないんだ。

それは判っている。判っているけれど、だからって諦めきれないのは自分の弱さなのか。どんなに力があっても守れない、救えない、繋がらない……。人と人の気持ちを知るのは難しくて、俺はいつもバカだから擦れ違う。

メリーベルが手甲の上から俺の手を握り締める。暖かさは伝わらなかった。誰かの温度を拒絶するように手に入れた力が懸命に想いを遮っているかのように感じる。ただ近すぎる距離のまま、嫌な気分はしなかった。俺も出来れば彼女のように生きたい。誰にも関わらない場所で、誰の事も記憶に残さないまま、全て忘れて没頭して。そうやって有り余る時間を消化出来たらいいのに。

どうして自分はここにいるのだろう。結局は冬香への未練を断ち切れて居ないだけなのかもしれない。だから少しでも彼女の痕跡を感じていたくて、幻想的な偽りに頼っているだけなのか。

入り浸るようにこの世界を泳ぐ度、彼女の残り香が目先を通り抜けて行く。虚ろなこの世界の幻の中で、確かに俺はいつでも彼女を近くに感じていた。

でもそれはきつとりリアが近くに居たからで。彼女がいなくなった世界はまるで文字通り主役を失った物語のように俺の中で何の魅力も放たなくなつた。

「妹が　いたんだ。一人……双子だったんだけど」

「うん」

気づけばそんな話を話していた。メリーベルは表情一つ変えず、ただ手を握って話を聞いてくれた。

「あいつが苦しんでいる時、俺は何もしてやれなかった。違う……あいつが苦しむ理由を俺が生み出していたんだ。だから自分が居なくなってしまういいと思った。世界から俺が消えてなくなればあの子を苦しめる物は消えるんだと思い込んだ。でもそうして俺の居なくなつた世界で、あの子は余計に沢山のことを失った。傍に俺が居なかったから、だから守ってあげられなかった」

「矛盾してる」

「そうだな、矛盾してる。でも、その時出来なかった事を、取り返しのつかなかった事を取り返したくてここに来た。なのに俺はまだ、やっぱり何も出来ないままだよ……」

メリーベルは応えなかった。日の光さえ差し込まない薄暗闇の中、俺は目を閉じる。この世界があの子の残した夢だというのなら守りたい。あの子が願った物を自分も感じたい。俺は結局その為にリリアを利用していただけ。利害が一致するから傍に居るだけ……そんな気持ちでは、愛想をつかされても仕方が無い。

だが、どうすればいい？　どんな気持ちなら誰も傷付けなくて済む？　何も求めないでいられる？　何も愛さないでいられる？　それが判らなくて弱気になる。自分が嫌になる。どんどん繰り返す。答えは出ないまま。

「嫌な事を背負って生きるのは、あたしには無理。あたしは自分の為に生まれて、自分の為に死ぬの。何年も前からそう決めて、今でも決意は変わらない」

それが何の事を語っているのかはわからなかった。ただ彼女は自分の胸元に俺の手を誘導し、胸元を肌蹴させる。

そこにあるものを見て俺は目を見開いた。メリーベルは微笑んだまま、表情の読めない瞳のまま言葉続けた。

「自分の結末は自分でしか決められないから。誰かを傷付けてもそれでいいと思えなければ、この世界では生きていけないから」

メリーベルの身体、その首から下には赤黒い模様が浮かび上がっていた。それがおぞましい物である事を俺は直感する。メリーベルは肌蹴た肌を隠し、恐らくグローブやローブ、その全ての下に広がっている犯されたままの肌で俺に触れる。

彼女の温もりは伝わらない。でもきっとそれは俺が拒絶しているだけではないのだと思った。きっとそれはそう、この子も誰かに触れる事を嫌っているのだから。

身体を起こす。メリーベルは普段と変わらぬ様子で白衣を羽織り、微笑を浮かべている。火にかけられたフラスコが小さく音を立てて罅割れるのが、ここからでも見て取れた。

「リリア・ライトフィールドさん？」

学園の中庭のベンチでぼんやりとリインフォースを眺めるリリア。その背後からかった声に振り返ると、そこにはルーファウスが立っていた。

魔術学科の教師であり、リリアとはそれほど面識も無い彼が声をか

けた理由。それは兎も角、突然教師に声をかけられれば緊張するの
も無理はない。リリアは妙に畏まった様子で頭を下げた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。僕は君を叱る為に声をかけ
たわけではないからね」

「は、はい……。あのう、それで……？」

「ああ。この間の課外授業では、随分と悲惨な目に合ったと聞いた
よ。君も負傷したようだし……その後、傷の経過はどうかな？」

「あ、いえ、大丈夫です。病院の医師^{ヒール}さんに念入りに魔法をかけ
てもらったので、もう殆ど完治しましたから」

「そうかい？ それは良かった。丁度昼休みで暇なのだけど、隣に
座ってもいいかな？」

「は、はい！ どうぞ！」

リリアとルーファウスは共にベンチに腰掛ける。暫く二人は黙り込
んでいたが、ルーファウスは沈黙を破り笑顔で声をかける。

「いつも一緒に彼は今日は別行動なのかな？ 確か、夏流君とか言
ったか」

「あ、はい……。えと、ちょっと、わけありで……」

「なんだ、喧嘩でもしたのかい？ それはよくないな。友達は大
事にしなくては」

「け、喧嘩とかそんな大げさなものではないのですよっ！？ まあ、なんだか色々あって今は会いづらいんです。それもこれも、全部リリアが弱い所為なんです」

リリアは判っていた。自分を守りたいと思う夏流の気持ちが本物である事も、それを素直に嬉しく思う事も。しかしその為に一瞬見せる夏流の冷め切った恐ろしい視線が迷いを抱かせる。

それもこれも全ては自分に力がないから。夏流は初めての実戦でも立派に戦って見せた。聖騎士のリビングデッドを蹴散らす夏流の背後、リリアは黙ってそれを眺めている事しか出来なかった。

夏流が微笑んでリリアの肩を叩くその手はリリアを守る為に浴びた血に染まっていて、それが堪らなく寂しかった。まるでそれが当たり前とでも言わんばかりの夏流の歪みが悲しくて、それを変えられる力が欲しかった。

「でも、リリアは弱くて……一人じゃ、どうしたらいいのかわかんなくて……。一生懸命考えてるつもりなんですけど、それでもわかんなくて……。ああ、どうしようって、途方に暮れてたところなのですよ」

「その気持ちは、僕も判るよ」

口元に手を当て、苦笑するルーファウス。リリアが首をかしげていると、ルーファウスは照れくさそうにはにかんだ笑顔を浮かべた。

「僕にもそういう時期があったものさ。自分ではどうにもならない力不足に悩まされた時、いつも僕を救ってくれたのは……リリア、君のお父さんだったんだよ」

「へ？ リリアのお父さん……ですか？」

「僕はこう見えても聖騎士でね。いや、学園の教師の殆どは聖騎士ではあるんだけど。僕は十年前、君のお父さんが死んでしまう直前までその弟子として戦いを教わりながら戦場を転々としていたんだ」

かつての聖騎士団長でもあり、勇者であったフェイトとその仲間たちは何人かの弟子を連れて旅をしていた。そのうちの数人は今でも生き残り、あの日勇者たちに教わった技術や志を教えるために、学園の教師になっている。

「戦士科のソウル、いるだろう？ あれも同期で一緒に旅をした仲間なんだ。僕はどちらかというと言インさんにお世話になっていたけど、あいつはフェイトさんにべったりで、二人は意気投合してたっけ」

「……そう、だったんですか……。何だか、不思議な偶然ってあるんですね」

「ふふふ。その頃は僕らも丁度君くらいの年頃でね。当時は戦争中だったから、まともな教育機関も無かった。僕らは実戦で刃と術を鍛え、いつかはフェイトさんたちのような勇者になれる事を夢見ていたんだ。今は逆の立場になって、誰かに夢を与えられたら良いと思うてる……なんて、ちょっと恥ずかしいな」

照れくさそうに笑うルーファウスの態度は本物だった。本当に過去に想いを馳せ、その頃を楽しげに語る。それがリリアにも伝わり、いつの間にかリリアも緊張が解れて一緒に微笑みながら話を聞いていた。

やがてルーファウスの表情は曇り、どこか寂しげな視線で遠い空を見つめる。それからリリアへ視線を移し、問い掛ける。

「ゲルトとは、分かり合えたのかい？」

「……ゲルトちゃんは……多分、以前よりは仲良しさんになれましたよ？ あっちがどう思っているかは、わかんないですけど」

「そうか。彼女は僕の弟子でね、ゲインさんの死後はずっと面倒を見てきた妹みたいなものなんだ。ただ、彼女はゲインさんの一件でフェイトさんを憎んでいる……。出来れば昔の彼らのように手を取り合って欲しいんだけどね……」

「だ、大丈夫ですよ！ ゲルトちゃんは、とってもいい子なんです！ そりゃ、ちょっとドジでうっかり人に必殺技ぶっ刺したりしますが、でもいい子なんです！ ちゃんと時間が経って話し合えば、わだかまりは解けると思うんです」

「……そうだね。そうでなくては、ゲインさんも浮かばれない。君もそう思うだろう？ 彼の剣は、彼女より君の方が多く受け継いでいるのだから」

リリアは嘗てゲインから直接指導を受けていた過去を持つ。その為戦い方はフェイトよりもどちらかと言うとゲイン寄りである。ゲルトは独自の戦い方を編み出しルーファウスの下で鍛えてきたが、ルーファウスからするとやはりリリアの戦い方には思うところがあるのだろう。

「まあ、何はともあれ今はゲルトの不調が心配だよ」

「え？ ゲルトちゃん、不調なんですか？」

「知らなかったの？ ゲルトは今、ランキング順位を大幅に下げて三十三位なんだ。ここの所連戦負け続けでね」

「ええ~~~~っ!? なんで!? どーしてっ!?」

「それが、どうにも彼女には嫌われてしまっていて理由はわからないんだよ。そうだ、良ければリリアが少し彼女を励ましてやってくれないかな?」

「で、でも……ゲルトちゃん、リリアが励ましたら多分逆に落ち込みますよう?」

「そうだね。だから、君が頑張っているところをゲルトに見せればいいんだよ。あの子は極度の負けず嫌い……特に君を超意識しているからね。君の順位が上がればなくそと追いかけてくるはずだ」

「で、でも……リリア、弱いですよ?」

「大丈夫、君には素質がある。明日から放課後僕の所に来るといい。学科は違っけれど、一応剣も嗜んでいるからね。君に教えられる事もあると思うよ」

「ほ、本当ですかっ!?」

優しく微笑むルーファウスの態度にリリアは目を輝かせた。今自分の力に行き詰っているリリアとしては願ったり叶ったりであった。そうしてルーファウスとリリアが談笑している頃、ゲルトは一人人々が行き交う道の中、外灯に背を預けてフレグランスを見つめていた。

こここのところの負け続きの理由は自分でも判っている。だがその理

由を認められないまま掌を強く握り締める。悔しさに歯を食いしばる視界、顔を上げるとそこには夏流の姿があった。

二人は外灯の下で見詰め合う。そのまま視線を反らし、立ち去ろうとする夏流の手首をゲルトは無意識に掴んでいた。

振り返り首を傾げる夏流。ゲルトは暫く押し黙った後、ゆっくりと顔を上げる。

「その　話が、あるのですが……」

薄暗くなり始めた街。タイミングを見計らったように点灯した外灯の光が二人の影を落としていた。

解けない鎖の日（１）

ゲルトをつれてやってきたのは俺に貸し与えられた寮の部屋だった。家具さえ一切存在しない殺風景な部屋を見渡し、少し緊張した様子でゲルトは部屋の真ん中に突っ立っていた。

ベッドの上に腰掛け、枕元に在った水差しから直接水を飲み干し、溜息を漏らした。大事な話が、しかも二人きりでどうしてもというのでどちらかの部屋という話になったのだが、俺を部屋に上げたくないというゲルトに仕方が無く自室へ移動したわけである。

「それで？ とりあえず、座ったらどうだ」

「どこにですか？」

「どこって、この部屋はベッドと棚しかねえんだから、ベッドしかないだろう。普通に隣に座れよ」

「は、はい。では失礼します」

隣にちょこんと腰掛け、重たいフレグランスをベッドに立てかけるゲルト。緊張した、そして同時に辛そうな横顔に何とも言えない気持ちになる。

正直誰かに話を聞いてもらいたいのは俺の方で、誰かの問題を抱えてやれるほど余裕はない。うんざりした気持ちで押し黙っていると、ゲルトは意を決して顔を上げた。

「単刀直入にお尋ねします……。貴方……。何者ですか？」

ゲルトの視線は疑り深い。よりによってまともに頭が動かない時にその質問か。それがどういう意味なのかは、もう誤魔化しきれないだろう。

思えば今までゲルトが質問してこなかった事の方が不思議……いや、こいつはずっとメイドになっていたから俺とあう事も無かったし、会ったら会ったでリリアが邪魔をしたりして結局真面目な話をする場面はなかった。

リリアの暴走とそれを封じた俺。その時の戦いは恐らくゲルトの目から見ても異常だったのだろう。今となっては両手にごつい武器を装備しているし、格段に俺は強くなり続けている。自分自身でもそう感じるくらいなのだから、ゲルトに言わせれば異常この上ないだろう。

それに俺とリリアの関係も疑問に思わないわけがない。リリアがゲルトを意識し続けていたように、彼女もその逆なのだとしたら突然現れた俺という存在の違和感は誰よりも強いはずだ。

「俺がどこの何者なのか、そんなに気になるか……？」

「はい。リリアに関わる事ですから」

ゲルトの予想外な言葉に俺は思わず顔を上げた。ゲルトは真っ直ぐに俺を見つめ、不安げに唇を噛み締めている。

「貴方はリリアに近い人物です。つまりそれは、彼女に深く関わる事を意味している……。貴方の行動で彼女が苦しんでいる事を、貴方は自覚しているんですか？」

「……………ゲルト」

「何ですか？」

「お前、いい子なんだな」

「なっ!？」

思わず素直にそんな言葉が口に出てしまった。顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせているその表情に思わず苦笑が零れ落ちる。

何だかんだいいつつ、結局ゲルトはリリアの事が大事なんだ。リリアがゲルトを一番尊敬しているように、ゲルトもリリアを信じ、愛している。だからこそ二人はその友愛が擦れ違い、あそこまでのいみ合う事になったのだから。

蟠りというよりは誤解だろうか。それが解れた今、ゲルトはリリアを思う気持ちを確かに取り戻していた。恥ずかしそうに視線を反らし、ゲルトは目を閉じる。

「からかわないで下さい……! それより、どうなんですか? あの子に何をしたんです? あの子があんなに貴方の事で悩む理由は何なんですか?」

「それは俺の方が聞きたいくらいだよ、ゲルト。生憎お前の望むような答えは与えてやれそうにない。今正にそれを考えていた所だからな」

「……貴方がこの街に現れてから、明らかにリリアは変わりました。貴方が現れなければわたしとリリアは今も過去の関係のままだったでしょう。だからその点では感謝しているのですが……」

「ですが?」

「その……リリアを傷付けないで下さい。彼女は決して弱い人間で

はありません。ですがだからこそ、痛みを誰にも吐き出さず抱え込んだままにしまふ。そういうのは、見ていられないんですよ」

「成る程……友達思いの優しい女の子ってわけだ、お前は」

目をぱちくりさせるゲルト。俺はベッドから立ち上がり、自らの腕でじゃらじゃらと音を鳴らす鎖を見つめる。静かに目を閉じ、それから棚から固形の保存食を取り出し一つを齧りながらも一つを袋ごとゲルトに投げ渡した。

突然の事に慌てながらそれを手にするゲルト。俺は黙って保存食を齧る。正直それほど美味しくはないが、冷蔵庫もないこの世界では安くてそこそこ食べる方だと思っている。

ゲルトは保存食など普段食べないのだろう。胡散臭そうにそれをじっと見つめ、しばらくすると掛け声と共にかじりついた。余りお味はお気に召さなかったらしく、しかめっ面でビスケットのような保存食を齧っていた。

「……貴方の出現で、リリアの周囲には仲間と呼べる人が出来ました。あの子はずっと一人だったから、それは嬉しいんですけど……その、リリアはもっと友人を選ぶべきだと思っんです！ 貴方やメリーベルのような胡散臭い人ではなく、もっとこう、由緒正しい血筋の人をですね……」

「由緒正しいって何だそりゃ。お前はあいつの母親か何かかよ……。まともなやつならアクセルがいるじゃないか」

「アクセル・スキッドが一番胡散臭いです！ 彼はその、何だかちよっとおかしいんですよ……。実力を隠しているっていうか、彼は底が知れないんです。信用出来ません」

ぶつぶつ文句を言いながら保存食を一気に食べつくしたゲルトは立ち上がり俺に詰め寄る。なんらか俺の答えを待っているのだろうが、そんなにじろじろ見られても答えなんて簡単には出せないだろうに。

「お前の言う通り、俺たちは確かに胡散臭いかもな。メリーベルや俺なんかは胡散臭さの極みだろう。けどな、別にお前にそれを答えてやる義理もないんだぜ？」

「う……。そ、それは……そうなんですが……」

「第一、敵であるリリアの事なんか心配している場合か？ お前、そんな事じゃそのうちリリアにあっさり追い抜かれるぞ。あいつ怒涛の速度で強くなるからな。リリアの事にかまけてりゃ、そりゃ腕も落ちるし……って、うおおおっ！？」

振り返るとゲルトは泣きそうな顔をしていた。俯きながら肩を震わせ、なにやら大層落ち込んでいるようだ。リリアがこうなっていても別に驚かないが、ゲルトがこうぶるぶるしてれば当然驚く。

慌てて周囲に何かこの状況を打開できそうな物がないか探す俺。しかしそんなもんあるわけない。ていうか理由がわからない。ゲルトは何でこんなに落ち込んでいるんだ？ これじゃダブルへこたれ勇者様じゃねえか。

「ど、どうしたんだよ……？ いきなり泣くな！ 俺が泣かせたみたいでなんか心苦しいだろ！？」

「……確かに、貴方の言う通りです。わたし、弱くなってしまうました……」

「えっ？」

「……魔剣が、動かなくなっただけです……。うんともすんとも言わなくて……。わたし、どうしたらいいのか……。っ」

涙を流してその場に崩れ落ちるゲルト。俺のイメージの中にあつた、相手を威圧するような鋭い眼光を放つ射抜くような敵意を持つ少女はそこにはいなかった。

リリア同様、普通に涙して普通にへこたれる、もう一人のへこたれ勇者の姿が、そこにはあつたのだった。

解けない鎖の日（１）

「少しは落ち着いたか？」

「はい……。すみません、みつともない所を見せてしまつて……」

暫く泣きじゃくっていたゲルトは目を真つ赤にしながらぺこりと俺に頭を下げた。目の前で泣き出されたらそりや当然困るが、まあ理由が理由だけに仕方が無いとも思う。

ゲルト・シュヴァインの強さと美しさの象徴とも言えるのが魔剣フレグランス。彼女と常に共にある伝説の武器であり、勇者の証でもある。その魔剣はゲルトの力を引き出し、舞い散る花卉は相対する者を華麗に捻じ伏せる。

そんな凛々しいゲルト・シュヴァインの象徴であるフレグランスが魔力を発動しなくなったのは、今からもう一週間以上前の話らしい。リリアとの戦いが終わった直後から次第に力が弱り始め、ついには昨日完全にただの鉄の塊に成り下がってしまったというのだ。

フレグランスを床の上に置き、フローリングの上に座布団を敷いて

……えらく現実的な部屋だ……二人して魔剣を覗き込む。

確かに触れても魔力の流れは全く感じられない。その時ふと、俺の脳裏に嫌な想像が過ぎった。俺は確か一度この剣を手にした事がある。

まさか、勇者以外の人間が手にして魔力を流し込むと動かなくなるとか、そういうオチじゃないよな……？ 思わず冷や汗が流れる。一人で乾いた笑みを浮かべていると、ゲルトはじいっと俺の顔を覗き込んでいた。

「ま、魔力の流れは感じられないなあ」

「……ですよね。一体何がどうしてしまったのか、わたしには皆目検討がつかなくて……」

「ど、どうしてだろうなあ」

やばい。もしこれ俺のせいだったらどうなるんだ……？ いや、そんなはずはない。原書にだってそんな事は書いてないんだし、あるはずがない。

ゲルトをその場に残し、原書を手に部屋の隅で中身を確認する。すると在ろう事か、そこには新しい展開が記されていた。

が、それをゆっくりと読み解く前にゲルトの気配を感じ本を閉じてしまった。うさぎの帽子に強引に突っ込み、慌ててもとの場所に戻った。

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない！ それより理由に本当に思い当たる事はないのか？」

「……………何も。あの事件の前と後で変わった事があるとすれば……」

「すれば……?」

「……………り、リリアちゃんの事が、頭から離れない事くらいで……」

顔を真っ赤にして、床で「の」の字を描きながらそんな事を呟くゲルト。俺は完全に冷めた視線で不自然な笑顔を浮かべていた。それに気づいたゲルトが鉄の塊を化した魔剣を振り被る。片手でそれを受け止め、危ないので没収することにした。

「ああつ!?!」

「これはとりあえず預かっておくぞ。室内で振り回すものじゃないからなこれ」

「うぐぐ……。まあ、いいでしょう……。とにかく、理由が思いつかないんです」

「……………んー、スランプか」

「自分で思いつく事は一通りやってみたんです。丸一日素振りしてみたり、丸一日瞑想してみたり、丸一日逆に剣に触れないようにしてみたり……」

「それでも直らない、と」

こくりと頷くゲルト。いつになくしおらしく落ち込んでいるその姿

に俺も理由を考えてみたが、俺の所為であるという最悪の可能性が頭の中でデカすぎて一向に思考はまとまる気配を見せない。

「魔剣が無くなったら、闘技場の勝率がかなり落ちてしまいました……。このままじゃ、リリアちゃんにも会わせる顔がありません」

どうやら本気で悩んでいるらしく、落ち込んだ様子で溜息を漏らしている。こんな自分の事でいっぱいっぽい状態の癖にリリアを気にしているとは、自分で言っておいてなんだが本当に他人に構いすぎだろう。

それだけリリアの事が大事だということなのだろう。ずっと大嫌いだ嫌いと自分に言い聞かせリリアと言葉を交わす事も無かっただけに、反動も大きかったようだ。

何はともあれ完全に魔剣が息を潜めたというのなら、その力無しにリリアを下す事は難しいだろう。そして勇者の象徴であり権利者の証でもある魔剣を失うことにより、ゲルトは自らの存在意義さえ否定されるのだ。

恐らく俺が思うよりずっと追い詰められた気持ちのまま、ここにやってきたのだろう。そう考えると本当に先が思いやられる勇者様だ。

「お前なあ……そんな時にまでリリアや俺がどうこうって言うてる場合じゃないだろ？」

「……返す言葉ありません。わたし、このままだと勇者失格です」

「というか、魔剣がないんじゃ闘技場でもやられっぱなしだろ？」

「いえ、それはまあ、本当に強い相手でなければ魔法だけで何とか……。勝率は五割程度ですが」

それでも五割の相手は蹴散らせるといふことか。恐ろしいやつだ。まあ、それも当然かもしれない。ゲルトとリリア、どちらが強いのかといえば間違いなくゲルトなのだ。ゲルトは感情的に不安定な部分があり、力をいざきつちり発揮出来ない事もあるが、総合的な能力で言えばリリアなど圧倒している。

だがそれも魔剣込みでの話。リリアは魔法を切り裂き消滅させる退魔の術式を刻む聖剣を振り回すのだ。魔法だけでリリアを超える事はまず不可能だろう。相性が悪いにも程がある。

問題はそれだけではない。仮に俺が原因に関わっていると、かなり厄介だ。俺は思い切りゲルトの今後の人生を左右する間違いを犯してしまったわけで……。

「わかったよ……。ゲルト、俺と戦おう」

「はっ？ 何故そうなるんですか？」

「だから、一人じゃ判らない事も誰かと一緒ならわかるかもしれないだろ？ 兎に角剣を振ってみよう。お前が全力で剣を振って、うつかり死なない相手を見ると、一先ず俺しか思いつかない」

「それは……わたしに協力してくれる、ということですか……？」

ゲルトは孤高の少女だ。どうせ他に手を貸してくれる仲間なんていないのだろうし、早めに問題が解決してくれないと俺も寝覚めが悪い。

それに何より 原書に新たに言われた出来事を回避する為には、恐らくこれが一番手っ取り早いと思うから。

一先ず夜の街に引き返し、公園で相對する。夜も深まってきた所為か人気は殆ど無い。ゲルトは噴水を背にフレグランスを構えるのだが、その様子には以前見た時のような鋭さはなかった。

魔剣が放つ圧力が見る者をひきつけて離さない、華麗な姿。初めてその姿を闘技場で見た時の衝撃はもう微塵も感じられない。本人もそれを判っているのか、構えからさえ迷いが感じ取れた。

「……行きます」

構えからゲルトが駆け出す。振り下ろす刃は俺の手甲を打ち、火花を散らす。しかしそれは別に何の圧力もなく、俺は片手を軽く振って魔剣を弾いた。」

ゲルトの手から魔剣が離れ空中をくると踊る。レンガ敷きの大地の上に一度跳ね、魔剣は静かに転がった。たった一瞬で判ってしまふほど、ゲルトの力は衰えていた。

震える手で自分の手を見つめ、今にも泣き出しそうに額を抑えるゲルト。俺はその横顔を眺めながら、何となく昔の事を思い出していた。

リリアとゲルト、二人の勇者。勇者になれるのはどちらか一人だけ。アイオンは言っていた。リリアが駄目ならゲルトで成せばいいとゲルト・シュヴァインというもう一つの存在が勇者になる事は俺がいる限り邪魔され続ける事実。だがそれは正しいのだろうか。勇者には、なりたがっている奴がなるべきで、俺がリリアを勇者にしようとする事は、彼女にとって苦痛以外の何者でもないのかも知れない。

指先を離し、去っていくリリアの背中を今でも鮮明に思いだせる。救おうとしても、守ろうとしても、俺が傍にいないから傷付ける……。結局そこに自分が居ないほうがいいのではないかと本気で思う瞬間がある。

「結局俺は、いるだけで何かを邪魔してる……」

腕を組んで小さな声で呟いた。ゲルトは剣を拾って戻ってくる。そ

の俯いた表情は窺い知る事は出来なかったが、悔しさや絶望、様々な気持ちで渦巻いていることだろう。

「これで判ったでしょう。わたしはもう、魔剣の力を使えなくなりました……わたしが、勇者に相応しくないから……？」

ゲルトが驚きで言葉を止める。俺はその手を取り、強引にゲルトを引き寄せていた。至近距離でその瞳を覗き込み、不安や驚きで揺れる眼差しに多分何かを感じ取ったのだろう。

フレグランスを取り上げ、身体を離れた。勇者、勇者、勇者……か。どうしてそんなものに拘るんだか。俺もお前も……リリアも。

「か、返してくださいっ！」

「魔剣に拘り過ぎだ。こんなもん、言ってしまえばただの剣だろうが」

「……ッ！ お父様の遺品を侮辱するつもりですか！？」

「それだよ、それ。お前はいつになったら『お父様の剣』を自分の剣に出来るんだ？」

フレグランスを突きつける。勿論俺には魔力を通して術式を発動することなんて出来ない。しかしこの魔剣はまだ持ち主を失ったまま、宙ぶらりに存在する所有者の無い剣だ。俺が手にしようがゲルトが手にしようが、そのくすんだままの美しさには差なんて存在しない。

「リリアもそうだ。『親父の剣』だからって封印したり、『親父の術』だからって覚えるのを渋ったり……お前らはいつまで経っても『他人の剣』のままじゃねえか。魔剣だって言う事聞きたくなくな

るだろう、そんな頼りない主じゃ」

「……っ、まるで、剣が意思を持っているかのように言っんですね、貴方は」

「そういうわけじゃないさ。ただ魔剣はただ魔剣、ただの剣なのは変わらない事実だ。どうにかしちまったのは お前の方なんじゃないのか？ ゲルト」

構えにも破棄は無く、こうして相対していても心は別の所にあるかのように感じる。まさに心ここにあらずのゲルトが、魔剣を発動出来ないのは仕方が無いことのようにも思える。

そもそも魔力は命の力、術式は意思の力だ。どちらかが弱まっていれば発動は困難になる。術式が発動できず魔剣が使いこなせなかったというのであれば、それはゲルト本人の問題なのかも知れない。

「わたしは……わたしは、平静です！ どこも変わってなんていない！」

「どこが平静なんだか知らないが、お前もしかして……リリアを刺した事、気にしてんのか？」

ゲルトの瞳が見開かれる。自分でも恐らく意識を反らしていた事実を俺に突きつけられ、ゲルトは悔しげに齒を食いしばって視線を反らした。

やっぱりそうだ。ゲルトはリリアを殺すつもりで戦ったわけではなかったはず。手段を選ばず暴走しても、人の命は奪わない……一種の彼女のプライドのようなものだろう。事実メリーベルはちよっと叩かれて気を失っていただけだった。

だが、リリアとの死闘で彼女は加減をし損ねた。いや、恐らくはリ

リアの技は全力で当たらねば相殺されると踏み、最大火力で突っ込んだのだろう。結果力不足のリアの魔力を貫通し、刃を止める間もなかった。

つまり無慈悲に剣がリアを貫いた時この子は思ったはずなのだ。『どうしてこんなことになった』と。『そんなつもりじゃなかった』と。

「お前それを、魔剣のせいだと思っ たら」

正確には自分の境遇、自分がリアを憎まずにはいられなかった理由を恨んだはずだ。

父親が残した剣。憎しみを一心に受け、自分を勇者の宿命に縛り付ける鎖でもあった剣。その友を貫いた剣を見て、全てをそのせいにしてしまった。容易に想像出来るその状態に思わず溜息が漏れる。

何せ、あの瞬間俺でさえリアは死んだと思ったのだ。大剣でリアを貫いた張本人は間違いなく殺してしまったと確信し、その恐怖に震えたことだろう。結局あの瞬間こいつは一瞬勇者になる目的を見失ってしまった。魔剣が使えないほどに動揺している理由はそんなところではないだろうか。

「リアが眠っている間はまだよかった。だが目を覚まし退院すると心に余裕が出来て、『何故あんな間違いを犯した』のかと考え始める。日を追うごとに集中力は失われ、気づけばそのことで頭が一杯になった。魔剣を操るという意味を自分のどこかで拒絶して」

「判ったような事を言わないでくださいっ!!」

「判るさ」

「何が判るっていうんですか!?! 何がっ!?!」

「後悔しすぎて自分が何も出来なくなつた経験なら、お前より俺の方が豊富だからな」

会話が途切れた。俺たちは互いに視線を反らしたまま、重苦しい空気のままで時間が過ぎて行く。やがてゲルトは俺の手から魔剣を取り返す事を諦め、額に手を当てた。

「……貴方、本当に何者なんですか」

「自称救世主　何て言ったら笑うか？」

「笑えませんよ……」

落ち着いた様子で溜息を漏らすゲルトに魔剣を返す。この様子なら少しは落ち着いて話が出来そうだ。

俺も少しだけ熱くなりすぎたかもしれない。反省しながら二人でベンチに腰掛け、いつかりリアとそうしたように二人で噴水を眺めた。

「……わたしは、魔剣を憎んでいたのかもしれませんが。わたしの十五年の人生は、このたった一振りの剣に全て注がれてきたと言つても過言ではないですから」

フレグランスをじっと見つめ、ゲルトは優しげに微笑んだ。相変わらず力を取り戻す様子は無い魔剣だったが、ゲルトの気持ちは少し余裕が出来たように見えた。

「大好きなりリアを憎み続けるのも、虚勢を張って強く在り続けるのも、本当は苦痛だったのかも知れませんか。いえ、単純にそんな自分に疲れていたのかも知れません」

「だから早く終わらせたくて、強攻策に出たと」

「……貴方はつくづく嫌な人ですね。ですが恐らく正解に限りなく近い問いかけですね、それは」

「リリアは気にしてないんだ、お前も気にする必要はないだろう。そもそも本気でリリアを迎え撃たなければ、今度は昔のあいつみたいに相手を苛立たせる事になるんだぞ」

「う……。それは、そうですが……そう簡単には割り切れません。わたしのした事は、最低の行いですから」

頑固というか、一途というか……。兎に角ゲルトは真面目すぎて一度何かを思うとしばらくそれから抜け出せず、ドツボにハマってグルグルと同じ所を回り続けるらしい。

そのせいでリリアを憎むに至ったり、自虐的なまでに力を求めたり、そんな暴走行為に走ってしまうのだ。誰でもいいからちゃんとこいつを見ていてやる大人がいれば、こんなことにはならなかったろうに。

ゲルトの肩を叩き、何も言わずに息を付いた。ゲルトは顔をあげ、ただ俺を見つめている。

「わかった。お前もう、リリアとちゃんと話して来い」

「へっ！？ む、無理です！！ わたし、あんな事しちゃったのに…… もうリリアには許してもらえない……」

「そうだな。そういえばあいつ、お前がうっかり大剣ぶっ刺したの気にしてたっけ。そのうち借りは返すって言ってたぞ、ははは」

はあっ！？　だから、泣くなっ！！　どうしてそこですぐへこたれるんだ！？」

「だって……！　だって……っ！　うわああああんっ！！」

駄目だ冗談が全く通じない……。見た目は凄くクールなのに、中身はリリアと同等のへこたれ勇者なのかもしれない……。

「リリアに嫌われたら、もう生きていけないよっ！！」

「それが本音か……」

「……………笑いたければ笑えばいいじゃないですか。もういいですよ、貴方を殺してわたしも死にますから」

「意味がわからないからなっ！？　兎に角、リリアに会って話をするのが一番早い！　俺も丁度いい加減このよく判らないわだかまりをなんとかしたかったところだ！　せつかくだから一緒に解決していくぞっ！！」

「い、いいですっ！　遠慮します！　やめて、離してーっ！！　やだやだ！　まだ心の準備が……いやああああっ！！」

暴れ狂うゲルトを担いで強引にリリアの部屋を目指す。兎に角話をしないことには始まらないのは俺もゲルトも同じ事だ。こうなったらもう面倒だから全部纏めて片付けてやる。

ゲルトのアーマーククロークの首根っ子を掴んだままずるずる引き摺って寮の中を進んで行く。ゲルトはまだ子供のようにじたばた暴れて俺を罵っている。人殺しとか物騒な単語もいくつか放たれたが、もう気にもしない。

容赦なくリリアの部屋の扉をノックした瞬間、ゲルトは立ち上がって普段通りの冷静な顔つきに戻った。そこまでしてリリアに情けない姿を見られたくないのか、ゲルトよ……。

「どちら様でしょうか？」

顔を出したのはクロロだった。俺とゲルトを認識すると扉を開き、一先ず玄関に入れてもらう。

「リリアいるか？　ちょっと色々話があるんだが」

「返答します。リリアはまだ帰宅していません」

俺とゲルト、二人で顔を見合わせる。もう大分夜分遅くである。気の早い奴は寝てしまってもおかしくないこの時間に、リリアが戻っていない？

「リリアは最近、学園で放課後特訓をしているようです。学園の教師、ルーファウスなる人物に稽古をつけてもらっていると推測します」

「……ルーファウス先生？　あの人魔術師じゃなかったのか？」

「ルーファウスは魔術だけではなくあらゆる武器にも通じています。ただ魔術が一番の得意分野であるだけで、他が出来ないわけではありません……が、何故ルーファウスがリリアに稽古を……？」

リリアの事になると頭が働くのか、ゲルトは凜々しい仕草で考え込んでいた。その綺麗な横顔を眺め、俺が呆れていると彼女は腰に手を当て、俺に視線を向ける。

「ルーファウスはわたしの父の弟子でした。昔はわたしも剣や術を習っていた師範でもありますから、妥当ではあります。わたしではなくリリア、というのが些か気に障りますが」

「……………いいんじゃないの？ イケメン教師に教わってる方があいつも上達早いだろうし」

「確かにリリアは今まで精力的に授業を受けていたわけではなさそうですから、上達するにはそのほうが……ナツル？ どうかしましたか？」

「いや、別に」

冷静に考えればそのほうがリリアのためだ。俺みたいな胡散臭いやつよりも、せつかく学園という教育機関があるのだから、そこで学んだ方が手っ取り早い。

ますます自分の存在意義がわからなくなってきた。結局リリアは俺の手段が気に入らないから一人で強くなると、そういう意思表示のつもりなのだろうか。遠まわしな拒絶に苛立ちながら舌打ちする。

「……………ゲルト」

「はい？」

「俺とパーティー、組め」

自分でも何故そんな事を言い出したのかはわからない。兎に角今、俺はリリアの事を考えたくない気分だった。

「俺がお前を勇者にしてやるよ……」

「……ど、どうしたんですか？ 何を怒っているんですか？」

「怒ってないぜ？ ハハハハ。ほらいくぞ、特訓だ！！ リリアに
なんぞ遠慮せずまたぶっ刺すつもりでやりやあ魔剣なんて使えるよ
うになるわっ！！」

「ちょ、ナツル！？ また首根っ子を……いやあああつ！？」

こうしてクロロに見送られ、俺たちは夜の街へ逆戻り。結局この日は魔剣の力を取り戻せないまま、朝まで試行錯誤を繰り返して帰宅したのであった。

解けない鎖の日(2)

「それで、お前はリリアちゃんとそれからずっと会ってないわけだ」

「……………悪いかよ？」

学食でばったりとアクセルに遭遇し、一緒に飯を食うことになった。俺の隣には今はリリアも、勿論ゲルトの姿も無い。あの日俺と一緒に朝まで試行錯誤したゲルトは、

「もういいです……！今はわたしより、貴方の方が心に問題を抱えているではありませんか？」

と俺に告げ、去って行った。元々俺とゲルトは行動を共にしていたわけではなく、今こうして翌日一緒に飯を食っていないくてもおかしい事は何も無い。

それにしても昼から学校に来たのに猛烈に眠い。欠伸を浮かべ、水を一気に飲み干す。アクセルはいつも食べているパンをかじりながらにやりといやらしく笑う。

「ははあん、さてはナツル……………ルーフアウス先生に焼餅焼いてるな？」

「そういうのじゃないから。つか、俺も俺で自分の事を考えなきゃいけないんだっとな……………」

アイオンとの試合日時は既に決まっていた。いつの間にかポストに投函されていた決定にイマイチ実感のわかない闘技場に自分が立

つという感覚。浮ついたまま着地しないような腑に落ちない気持ちの焦りは何度経験しても気持ちのいいものではない。

グラスを片手に色々な事に想いを馳せていると、アクセルは水を飲み干してじつと俺の顔を覗き込んでいた。それから溜息を漏らし、腕を組んで首を傾ぐ。

「お前ら課外授業で何かあったんだろ？ リリアちゃんもこの間店に来てそんな事ゲルトと話してたしさあ」

「ゲルト本人に言われたよ。リリアは俺より敵対してたゲルトの方が相談しやすいらしい」

「そこだよ、そこ！ それが焼餅なんじゃないのかい、ナツルちゃん！」

「だから、そうじゃないっていつてるだろ」

「じゃあ何なんだよ！？」

「それは……そうだな。多分自分の力不足が悔しいだけだ」

神威双対を纏う鋼の掌を握り締める。多分俺は、自分が何も出来ない人間なんだって思い知らされるのが怖いだけなんだ。

必要のない存在だって否定されて、大切な物が壊れてしまうのを見ていることしか出来ない……そんなバカなポジションに落ちるのが嫌なんだ。

救いたい、守りたい。そう思えば思うほど遠ざかる気がする未来の絵図に、自分が何を描けばいいのかよく判らなくなる……目的がボヤけるということは、俺にとっては重大な問題だ。

無言で席を立つと、アクセルは慌てて食事を終えて後を追ってくる。

勝手に隣に並んで歩くアクセルは悩んでいる俺を見て苦笑を浮かべた。

「ナツル、お前さあ」

「何だよ」

「そんなにリリアちゃんが大事なのか？」

思わず足を止めてアクセルを見つめ返した。リリアが大事？ そんな事聞かれるまでもなく、大事に決まってる。

いや、大事なのだろうか。結局俺は、あの子に冬香の面影を勝手に重ねているだけなのかもしれない。返答に困っていると、アクセルは笑いながら俺の肩を叩く。

「だからさあ、そうやって一生懸命相手の事を考えている時点で、お前は少なくともリリアちゃんが大事だと思ってるんだよ」

「そう、なのか？ よく、わかんないけど……」

「お前も変わってるよなあ。なんつーか、変な所で鈍いつていうかさ。自分の事、よくわかってねーって顔してんぜ？」

事実だ。俺は自分の事がよく判らない。考えても答えは出ない。腕を組んで考え込んでいるとアクセルは大笑いしながら手を叩いていた。ちよつとむつとする。

「お前、ほんつと真面目だなあ！ そうやって一々考え込まなくても、物事ってのはテキストだって案外上手く行くと思うぜ？」

「適当にして取り返しの付かない事になったらどうするんだ？ 俺はそういう短絡的な思考は出来ないんだよ」

「傷ついた時は、その時はその時だ。人間は無傷では生きられない。みんなどっかに痛みや傷を抱えて、それでも誤魔化しながら生きて行く……あるいはこれを、支えあうなんて言うやつもいるけどな」

腕を組み、歯を見せて笑うアクセル。その場から去って行くその後姿を眺め、俺は理解できないアクセルの言葉を心の中で反芻していた。

傷ついた時はその時はその時。訳の判らない矛盾した言葉。人は誰でも傷を抱えている。それは同意するけれど。出来る限り傷付けたくない……そう思うのは悪い事なのだろうか。

「いや、悪い事、なんだろうな……」

それはきつと相手を信じていないだけだから。

同じ言葉を言って立ち止まっていた少女を、俺は背を圧して歩かせたばかりではないか。

気づいても遅い。それでも守りたい。だったらどうすればいいのだろう？ わからないまま、時間だけが過ぎて行く世界の中で一人溜息を漏らした

解けない鎖の日（2）

「ふむ……。驚くべき上達速度だよ。たったこの数日の間に、初級の術式は殆どマスターしてしまうとはね」

ルーファウスが驚嘆の声を上げる前でリリアは自らの手に魔力を収束させた光を放ち、正面に置いた丸太を吹き飛ばして見せる。指を弾き炎を生み、両手を合わせて雷を生む。光属性に近い属性系統二種類の初歩的な扱いは既にマスターしたと言っても差し支えない。

リリアの上達速度は教師として何年も他の生徒を見てきたルーファウスにしてみても驚くべきものだった。特に疲れた様子も無く、リリアは笑いながら振り返る。

「先生のお陰ですっ！ 魔法って何だか良くわからなくて怖くて覚えなかったんですけど、やってみると案外簡単なんですネ」

「……その君が簡単だという事が出来ずに学園に入れない子や卒業できない子が山ほどいますから、出来るだけ人前でそういうことは言わないように」

「はいです」

口元に手を当て微笑むリリア。その様子にルーファウスは眼鏡を中指で押し上げながら微笑を浮かべた。

こうして二人で訓練をするようになってそろそろ一週間が経過する。リリアは尋常ではない速さで魔力のコントロールと術式の構築を会得していく。かのゲルト・シュヴァインに追いつくにはまだ遠いものの、並の生徒では既に太刀打ち出来ないほどの力を手に入れた。あつた。

「それにしても、リリアは意外と基礎がしっかりしてるね。誰かに教わったのかい？」

「あ、いえ……！ ほら、昔ゲインさんに教わったりしたし、それ

に最近はその……友達と一緒に、練習してたんです」

「友達か。仲間は若いうちに作っておかないと後々苦勞するからね、存分に時間を過ごすといいよ。でも、いいのかい？ 君は最近昼も夜も僕のところにいるようだけど、友達との時間を邪魔しちゃってないかな？」

「平気ですよ。それにその……その友達には、内緒で強くなりたいんです」

口元に手を当て、照れくさそうに呟くりリア。ルーファウスが首を傾げるのを見て、笑いながら答えた。

「その友達に……多分リアは、色々な物を貰ったんです。沢山の仲間や新しい自分、ゲルトちゃんとの明日……でもだからこそ、証明したいんです」

「何をだい？」

「リアでも戦えるんだって事……迷惑かけるだけじゃないんだって事。そうしたらきつと、もっとちゃんと、話し合えると思うんです。だから……」

楽しげに語るリアにルーファウスは小さく息を付く。それからリアの前に立ち、鞆から書類の束を取り出した。それを手渡されたリアは目を丸くして首を傾げる。

「リアは将来、勇者の座を継ぐにせよどうするにせよ生きていかなきゃならないだろう？ 将来の為に、聖騎士団に入るつもりはないかい？」

「聖騎士団、ですか……？」

「僕が知る中では魔王さえ打ち倒した現存する最強の軍隊だ。それに勇者になれば自ずと大聖堂騎士にも就任する事になる。勇者になるのがゲルトだとしても、君は彼女をかつてのゲインさんのように支える事が出来る。逆も在り得るね。兎に角、考えてみてくれないか？」

書類の束を前にリリアは戸惑っていた。既にリリアの實力は通常の聖騎士団員を上回っている。学園にはちらほらそうした聖騎士団さえも匹敵し追い越すような力を持つ生徒が存在する。そうした彼らにとっては聖騎士団への入団を薦められる事はそう珍しい事ではない。

しかしリリアはついこの間まで落ち零れであり、誰からも見向きされなかった存在だった。突然の大出世に本人は事の重大さがいまいち実感できない。

「それに、聖騎士団はこの世界で最強の力だ。その一員になれば、君のお友達にもきつと力を証明出来るんじゃないかな」

「力を……証明する……」

書類を握り締めるリリア。ぱあっとその表情に笑顔が咲き、ぺこりと頭を下げ顔をあげる。

「リリア、ちよつと行って来ますっ！ 今日これで失礼しますっ！」

「うん、行っておいで」

「ありがとうございましたあーっ！」

ぶんぶん手を振りながら跳躍し、学園の柵を華麗に飛び越え、屋根から屋根へと跳んで行くリリアの姿を目で追いながらルーファウスは苦笑を浮かべていた。

「おーい！ 保護者のニーチャーン！」

どこかで聞いた声に振り返ると、背後から駆け寄るブレイドの姿があった。その隣にはゲルトの姿もある。珍しい組み合わせに首を傾げながら近づくと、ゲルトは俺を見るなり視線を反らした。

こいつ、人前だとしっかり他人を拒絶してるな……。まあ俺に心を開いてくれるとは思わんが、まさかの他人のフリとはどういうことだ。

「ニーチャン聞いたぜ！ アイオンとやるんだって？」

「ああ、明日の昼頃だ。何だ、どうして知ってるんだ？ 誰にも言っていないはずなんだが」

「だってアイオンが言ってたもん。学園の強い奴はみんな知ってるんじゃないかな？ だって、あのアイオンが目をつけた男だもんなっ！」

アイオン・ケイオス。常に不動の最強を誇り、ただの一度も誰にも敗北した事のない学園歴代最強の王座に立つ女。

美しいその容姿と中性的な服装、常に絶やさず浮かべるミステリアスな微笑が人気らしい。主に女性から圧倒的な支持を受けるアイオ

「イン・ケイオスに挑む人間は、せいぜいゲルトかブレイドくらいのもらしい。」

「おいらたち上の三人は一応トップ争いしてるんだけど、アイオーンに勝った覚えは一回もないんだよねあゝ。ゲルトもだよな?」

「……………非常に納得行きませんが、彼女はこの学園の生徒で現在最強です。間違いなく、文字通りに」

「なんだかよく判らないが、とんでもなく強いという事は確かだ。アイオーンは既に強すぎてこの二人以外にわざわざ挑む人間がいなくなってしまうたほらしい。」

「そういえばこの間の課外実習でもアイオーンの力だけは完全に未知数だった。どうせならそこで少し力の片鱗でも見せてくれれば少しは対策が組めたものを。」

「しかしそんなに目立つんじゃない、アイオーンの力はもう周知の事なんじゃないか? バトルスタイルとか、能力とか」

「ああ。そこがあいつのスゲーところなんだよ、ニーチャン。アイオーンは何回戦つても、底が知れないっていうか……………なあ?」

「ええ。彼女が最強とされる由縁は……………そうですね。『一度目は何をされたのかわからない』、『二度目は見極められない』、『三度目は手を変えられる』事に在ります」

ゲルトが初めてアイオーンに挑んだ日、開始数秒で何もわからないまま気絶させられてしまったらしい。二度目は戦いにはなった物の何が起きたのかわからないままやはり終了し、三度目こそはと挑めばその時にはアイオーンのバトルスタイルは変化していた。

「つまり、ただの魔術師でも剣士でもなく、彼女は様々な能力に精通しているんです。悔しいですが、外見の年齢の数倍は経験を積んでいると思えません」

「なんだそりゃ？ サバ読んでるってことか？ 見た目的にまだ二十歳前後だと思ったんだが」

「アイオンには色々な噂がついてまわってたんだよ。やれ、吸血鬼だとか。やれ、死者の魂を食らって生きているとか。やれ 魔王の生まれ変わり、とかな」

その言葉に俺は課外実習の出来事を思い返していた。アイオン・ケイオス……いつでも食えない笑顔を浮かべる奇妙な女。その腹の内はずっと戦い続けてきたブレイドやゲルトにさえ判らない程混沌としているのか。

「その魔王の生まれ変わりっていうのは？」

「えーと、魔王ロギアっていたろ？ 前の戦争で勇者のネーチャンの親父が倒した奴。そいつも稀代の魔術師で、剣士で……アイオン同様、限界突破者^{アンリミテッド}だったらしいんだよ」

「限界突破者^{アンリミテッド}……？」

人間は誰でも属性を宿して生まれてくる。それが適正属性になり、本人に扱える限界ともなりえるのだ。

つまり自分とは全く異なる正反対の性質の魔法は使えない。使えたとしても100%の性能は引き出せない。それが属性的限界^{属性的限界}。つまり限界を突破した者とは、属性的限界を超えあらゆる属性、適正の

術式を100%の性能で発揮出来る、そんな化物染みた存在の事である。

「大まかに分けても、彼女の戦闘様式は七つ程度はあると考えて良いでしょう。つまりそれは、相手の得意不得意にあわせて自らを自由に変則出来る、反則的な力に繋がるのです」

「……成る程な。伊達に闘技場の女王ってわけじゃないのか」

「まーな。あれじゃあ人間じゃねえって言いたくなるもん。おいら実際言ったし」

「わたしも言いました。あの人は人間ではないと思いますよ、わたしも」

二人は腕を組んでうんうん頷いている。どうやらゲルトも闘技場つながりで他の生徒とはいくらか仲が良いようだ。実力を認め合える相手なら、自然と思っても交わせるものなのかもしれない。

それにしてもそんな化物染みた奴とこれから戦わなければならないのか。アドバイスを貰おうかと思ったが、戦闘スタイルが毎回違うのではヘタに先入観がないほうが対応しやすいかもしれない。

「……ん？ そんな勝ち負けのハッキリしてる戦いでどうしてお前らは盛り上がってるんだ？」

「……鈍い人ですね」

ゲルトは腕を組んで溜息を漏らしている。彼女の言葉を代弁するように、ブレイドが笑いながら俺の背中を叩いた。

「だーから、そんなアイオーンをニーチャンが倒すかも知れないってんで、盛り上がってんじゃないか！」

「お、俺がか！？」

「そーだよ！　だつてニーチャンの……なんだっけ？　こう、拳から雷つつーか、光の柱みたいなのが敵をズガーンって討ち抜く技？　あれスゴかったもん！　アイオーンの魔力障壁もぶちぬけるんじゃないかな」

あんな付け焼刃の必殺技がアイオーンに通じるのか？　それ以前に俺は別に勝つ必要はないと思うんだが……。あいつの口から疑問を吐かせる条件は戦う事であつて俺が勝利することではないわけで……。

「な！　な！　アイオーン倒してくれよな、ニーチャン！　おいらそしたらニーチャンのファンになっちゃうぜ！」

「お、おおう……」

ブレイドがきらきら輝く子供の目で俺を見上げてくる。なんというか、こういう純粋な眼差しにはどうにも弱い……。

「ブレイド、あまり無理を言わないであげてください。彼では万が一にもアイオーンを下す事など不可能ですから」

「随分な言い様だな、ゲルト……」

「それはそうですよ。貴方なんてただの魔力バカじゃないですか。技術が追いつかない力だけではアイオーンには絶対に勝てませんよ」

「またまたあゝ。ゲルトだってホントはちょっとアイオンが倒されるトコみたいくせに」

「べ、別に見たくありません！ ふん、絶対に在り得ませんが、万が一にも在り得ませんが。もし貴方が勝つような事があれば、一週間メイド服で奉仕してもいいですよ」

自分のトラウマになっている事を平然と賭けに使うとは、よほど俺が負けるといふ確信があるらしい……。

まあ、自分でも勝てるとは思っていないから別に構わないが。だが、アイオンと俺との関係は少々歪み始めている。もう、ただ戦えば良いってもんでもない気がする。

せめてあいつに一泡吹かせてやりたい。あの他人を見下すような、見透かすような紅い瞳が悔しそうに歪むところを見てやりたいと思うのは、俺の性格が捻じ曲がっているからなのだろうか。

「悪いなブレイド。あんまり期待しないで待っててくれ。全力は尽くすよ」

「うおー、カッケー！！ 男はやっぱクールに勝たなきゃな！ な」

君はどうにもクールという言葉とは無縁のように見えるのは俺の気のせいだろうか。

「そっいえばゲルト。お前、調子はどうなったんだ？」

「わ……わたしの事はいいでしょっ！？ それより、無様にやられた時の言い訳でも考えたほうがいいんじゃないですか！？」

「お前もメイド服の用意したほうがいいぞ。案外可愛かったしな、あれ」

「な、なななあつ!？」

今にも斬りかかってきそうなゲルトから距離を置き、ブレイドに手を振って別れを告げた。さてと、随分とおっかない話を聞かされてしまったが、俺もただ何も出来ずに負けるってわけにはいかなかったな。

せめて一矢報いてから　そうだ、メリーベルに神威双対についてちょっと聞きたい事があつたんだが……。

あの日依頼メリーベルには会っていない。あの痣がどんな意味を持っていたのかはわからないし、何故彼女があそこに籠っているのかもわからない。

でも今の俺にはそういうの全部抱える事は出来なくて、ただ目先のアイオンとの決闘の事しか今は考えられない。気になっているのは事実だが……いや、自分を誤魔化しているだけなのか？

「　やめよう。考え過ぎても、どうにもならない」

頭を振って少しだけ気持ちを落ち着ける。そうして通路を歩いていると、ばったり正面からリリアと出くわしてしまった。

リリアは手を振りながら駆け寄ってくる。間違いなくその相手は俺なのだが、俺は何も言わないままリリアが近づいてくるのを見つめていた。

「師匠っ！　聞いてくださいっ！　リリア、聖騎士団に入らないかって誘われたんですよ!」

「そうなのか」

「はいっ！ あ、まだ正式には決まっていなくて……リリア嬉しくて！ えへへ、師匠に一番に聞いてもらいたくて、それで……」

「そっか。良かったな……リリア」

リリアの頭を撫で、俺は微笑を浮かべる。本当は、こうなる事は昨日から知っていたんだ。

原書に映し出されたリリアの未来 それは聖騎士団に入る事が決まっていた。俺がこのまま何も手を出す事をしなければリリアは聖騎士団に入る。この世界で最強の軍隊にして正義そのものである聖騎士団に。

それは親父の後を継ぐことでもあり、世界の平和を守る事でもある。立派な未来だ。それは勇者になれることと直接的に繋がらないものの、リリアにとって良い事なのは充分に俺にも理解できた。

俺と一緒にいた時には描かれなかった未来が、リリアが一人で動き出した途端に開かれた。俺は彼女の可能性を潰してしまっていただけなのかもしれない。昨日はそう考えると寝るにも寝られなかった。リリアは才能もあるし努力も惜しまない。俺なんかだらだこの子と一緒に居るより、この子にとってはもつといい手段は山ほどある。何が立派な勇者にしろ、だ。それがどんなに難しいことなのか、俺はわかっていなかったのだろうか。

「それで……師匠？ どうかしたんですか？」

「いや……なんでもない。それで、いつからなんだ？」

「早ければ来月にはっ！ えへへ、なんだか夢みたいですよね？」

リリアが聖騎士団に入ることになれば、ゲルトだって後を追うだろう。ゲルトが聖騎士団に入らずにこの学園に残っていたのは恐らくリリアのためだ。彼女と同じグラウンドで戦う為ならばゲルトはどこにだって追いかけて行く。

そうなれば二人は聖騎士団という勇者に最も近い力の下で育ち、いずれは勇者になるはずだ。それなのに、俺が見た原書に描かれる未来はそうはいかなかった。

「リリアは……ゲルトの事、どう思ってるんだ？」

「ふえ？　なんですか、急に？」

「いや……あいつ、スランプで悩んでるんだ。少し、話を聞いてやってくれないか？」

「ええ、聞いてますよ？　ルーファウス先生に」

聞いていたのに全く気にしなかったのだろうか？　なんだか以前のリリアとは違う反応にちょっとだけショックを受けている自分があった。

「でも、今は自分の事で手一杯ですし、リリアが強くなればきっとゲルトちゃんも慌てて追いかけてくるはずですよっ」

そうじゃないんだよりリリア。あいつはもう、勇者を諦めかけてるんだ。今お前が彼女の傍を離れたら、あの子はきっと自分を許せないまま、誰にも傷を見せられないまま抱え込んでしまっだろう。

お前しか他にあの子を救える人間はいないんだ。だから声をかけて、君は悪くないんだよって言ってあげなきゃいけないんだよ。そうじ

やなきや、ゲルトは……。

「師匠？ えと……リリアのこと、怒ってるんですか……？」

「どうしてだ……？」

「だって師匠……リリアの目、一度も見えてくれないから……」

言われてから気づいた。俺は一体どこをみているんだ。壁なんか見ていてもしょうがないだろう。

ちゃんとリリアと向き合って、リリアの言葉を聞いて、リリアを見てやらなきやだめじゃないか。なのにどうして、こんなにこの子といるのが辛いんだろう。

押し黙っているリリアも黙り込んでしまった。二人して通路の真ん中で立ち止まり、言葉を失くす。何か言ってあげなきやいけないのに、俺はやっぱ何も出来ない。

「なつるさん……」

「リリア……その、聖騎士団に……そんなに入りたいのか？」

「え？」

俺の言葉にリリアは驚いていた。視線をきちんとリリアに向けるように意識すると、リリアの目は揺れていた。

「別に、まだ聖騎士団に入らなくてもいいじゃないか。リリアはまだ子供なんだし、それにこの学園で学ぶ事もまだ沢山あるだろ？」

「……………それは、そうなんですけど……………」

「せっかく友達も沢山出来たんだし、もう少しゆっくりでもいいじゃないか」

自分でもバカな事を言っているのはわかっている。でも未来を変えられるのは今しかないと思えた。

リリアは俺の言葉を聞き、指先を胸の前で組みながら静かに目を閉じた。それから彼女が小さな言葉で呟いた思いを、多分俺は一生忘れられないだろう。

「……………なつるさんなら、わかってくれると思ったのに……………」

彼女はそう言っただけを向けて走り去っていく。俺は結局何も言わないまま、追いかける事もしないでその場に立ち尽くしていた。

拳を握り締め、齒軋りする。そうじゃないんだ、リリア。ゲルトはもう限界なんだよ。彼女はこのままじゃ 死んでしまうんだ。

原書に描かれた残酷な未来。聖騎士団になったリリアと、死んでしまったゲルト。余りにも無残な二つの結末の格差に俺は動揺していた。

早ければ一ヶ月……………？ 余りにも短い……………短すぎる時間だ。その時間の中で、この未来を変える事なんて俺には出来ない。それに何より、変えてしまっただけなのか？

目的を果たす為には多少の犠牲は必要なのだ。それはわかっている。でもな、リリア……………それでゲルトを忘れて聖騎士団でうまくやっていけるのか……………？

「……………いや、違うのかもな」

俺自身、彼女が離れて行くのがいやなだけだ。

何も出来ない自分。強くなるリリア。自分を見失うゲルト……………。

結局はそうした全てに苛立つて、何も出来ないまま手をこまねいているうちに全ては手遅れになる。そんな未来なんてもうウンザリなはずなのに。

翌日の試合に備え、歩き出す。アイオーンを倒し、それで何が得られる？ 残りのタイムリミットの中、自分に出来る事……。今日もやはり、眠る事は難しそうだった。

解けない鎖の日(2) (後書き)

くディアノイア劇場く

早起きすると暇だね編

『べるべる』

リリア「ベルヴェールさんって、べるべるって感じですよー」

ベルヴェール「ハア？」

リリア「ふぎゅ！？」「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

ベルヴェール「いや、そんなに怖がられても困るけど……。『ベル』
ってのは縁起の良い言葉なのよ？」

リリア「そうなんですか？」

ベルヴェール「アンタの『リア』ってのもそうでしょ？ 『ベル』
は大いなる魔道、リアっていうのは高貴なる血統って意味があるの
よー！」

リリア「そうだったんですかー。でもそれ本編であんまり関係なさ
そうですけどね」

『異世界ウラシマ』

夏流「そういえばもう丸一月くらいこっちにいる気がするんだが、現実はどうなっているんだろうか」

ナナシ「こちらでの時間経過は向こう側とはあまり関係ありませんから、そんなに心配しなくてもいいのでは？」

夏流「それでも気になるし一度戻ってみよう。行くぞ、ナナシ」

〈数分後〉

夏流「現実世界が減んでいる……」

ナナシ「それは、何かのSFですか？」

『ナナシハット』

夏流「そういえばナナシの帽子の中ってどうなってるんだ？」

ナナシ「アイテムボックスになっていますよ？ 原書のほかにも色々な物を入れられるんです」

夏流「中は広いのか？ ちょっと入ってみてもいいか？」

ナナシ「ええ、どうぞ。別に平気ですよ」

夏流「おー、広いなー……。出口があんな上に見える」

ナナシ「そうですねえ」

夏流「……………お前も入ってきたらどうやって出ればいいんだ？」

ナナシ「あ」

『万が一ってこともある』

ゲルト「……………お、お帰りなさいませ、ご主人様……。何か違いますね」

リリア「どうしたのゲルトちゃ……………なぜに鏡の前で、メイド服……………」

ゲルト「こ、コレは違うんです！　そうじゃなくて！！」

リリア「似合ってるからいいと思うけど、誰も居ないところで練習までしてたとは……………」

ゲルト「違うの！！　万が一ってこともあるから！！　万が一ってこともあるからあああっ！！」

『男性キャラは』

アクセル「えー、今日の議題は……………男性キャラがみんな同じ性格じゃないかという件についてー」

ブレイド「え？　そんな事ないよな、ニーチャン？」

夏流「お前らは似てるんじゃないか？ 俺はそんなことないと思うぞ。主人公として立派に頑張ってるから」

アクセル「それはないだろ」

ブレイド「それはないね！」

夏流「……。それにしてもこう、もうちょっと落ち着いた男が仲間にほしいよな」

アクセル「それなら俺がいるじゃんかよ」

ブレイド「それならおいらがいるじゃないか！」

夏流「……………お前らやつば似てるよ」

解けない鎖の日(3)

「双子って不思議だと思わない？」

まだ俺と冬香が一緒にあの古ぼけた洋館で暮らしていた頃、唐突に彼女がそんな事を俺に言い出した事がある。

その頃の俺はただ勉強をして立派な医者か弁護士になる以外の考えは存在しなくて、だからほぼ丸一日を締める勉強時間に声をかけてくる冬香の存在が鬱陶しかった。

明確な未来のビジョンはなかった。ただそうなるものだ、それ以外にはないのだという親や世間の声に従順に従っていた。そんな俺に対し、冬香はどこか自由でいつも俺の予想の斜め上を行くような事をやってのける変わった女の子だった。

「双子はさ、きつと生まれる前までは一つだったんだよ」

「……まあ最後まで聞いてあげるよ。それがどうかしたの？」

「え？ それって凄く不思議じゃない？ だって元々一つだったものが、急に二つになって生まれてくるんだよ？ まるで魂を引き裂かれるみたいに」

「……そういうものなんじゃないかなあ。そんなこと僕に言われても困るよ」

「もー！ なつちゃんはすぐそういうことを言う……」

「ふーちゃんもちゃんと勉強したほうがいいよ……？ お父様もお母様も、成績が悪かったらすごく怒るから」

そういいながら俺は彼女が勉強などしなくても問題ないほどの天才である事を子供心に認識していた。だから彼女にそんな事を言ったところで意味はないのだと、当たり前のように感じていた。

彼女は俺の言葉を受け、俺の書きかけのノートを強引に閉じて引っ手繰る。慌てる俺を笑いながら見つめ、彼女は部屋を飛び出して行く。

たどり着く場所はいつも同じだった。屋根裏部屋にある秘密基地。梯子を上り、屋根裏に顔を出す俺に手を差し伸べ彼女は無邪気に笑うのだ。

「あーそぼっ！」

その手をいつしか握り締める事も無くなり、俺は彼女との絆を失った。

死んでしまった相手を取り戻す事など出来ない。たとえこの世界の救世主とて、神とてそれは同じ事。一度消えてしまったものをやり直す事なんて誰にも出来ないんだ。

だからやり直さなくても済むように、出来るだけ間違えないように正解に限りなく近い道を選んで生きて行きたい。そんな考えが当たり前になっていた。

でもその考え方が限りなく正解に近い間違いだという事は自覚していた。そして俺はあの日と同じように大切な人の悲しむ顔を見る事になった。

一人で考え込む闘技場の控え室。試合開始時間は間もなくだ。椅子の上に座って閉じていた瞳を開き、水を飲み干した。

「……上手くは行かないもんだな」

思わず笑みが零れ落ちた。立ち上がり、試合に備えて移動する。闘

技場の舞台へと続く道を歩いていると、正面で俺を待つブレイドとゲルトの姿があった。

ブレイドは俺にガッツポーズを浮かべ、ゲルトは無言で見送る。二人に軽く手を振って応え、誰も待たない孤独な戦場に足を踏み入れた。

暗い闇の通路から広がる青空の下。眩いその景色の中、俺は静かに息を付く。遠くから聞こえるとはかり思い込んだきた歓声と凄まじい数の観客が俺の世界を取り囲み、想像していなかった状況に思わず足を止めてしまった。

実況も審判もない、自主的なただの生徒の訓練戦闘で何故超満員の客が集まっているのか。いや、恐らくこれこそアイオンが最強といわれるだけの魅力を持つ生徒である事の証明なのだろう。とんでもない舞台に足を踏み入れてしまった……。自分の中で決意を固め、止まっていた足取りを前へと再び進ませる。

舞台上上がると自分で思っていたより広くて狭い空間に思わず息が詰まる。アイオンはステージの真ん中に立ち、俺を待っていた。

「やあ、夏流……。いい天気だ。決闘にはもってこい……。そうは思わないかい？」

「非常に残念だがそれには同意する。何かを始めるにはいい日かもしれないな」

二人して笑いあう。結局俺は何のためにここに居るのかもわからない。今はどうにも何を考えても答えを出せそうにない。だからアイオン……。お前に答えを出してもらおう。

俺のこの一ヶ月の時間がどれだけ俺を変えたのか。今の俺に出来る全てを出し切り最強の存在にどこまで通じるのか。そして彼女が知るこの世界の真実とやらを、確かめる為に。

「それじゃあ始めようか？　女だからといって気遣いは無用だよ、夏流」

「そうさせてもらう。尋常の勝負と行こうじゃないか、アイオーン」
アイオーンが手にした槍をくるりと回し、片手で俺に向ける。俺は両手の拳を突き合わせ稲妻を迸らせながら顔を上げた。
勿論この戦いに望む理由がただの八つ当たりだってことは、重々承知の事だけでも。

解けない鎖の日（3）

「……………擦れ違ってマスねえ」

「へ？　な、何がですか？」

ウェイター姿のアクセルは客としてやってきたリリアの話聞いて思わず苦笑を浮かべた。聖騎士団に入れるかもしれないというリリアとそれを止めようとした夏流、未だ擦れ違ったままの二人の気持ちその両方を知ったアクセルは思わず溜息を漏らす。

リリアはリリアで夏流を想っている。夏流は夏流でリリアを想っている。ただその思いが優しく相手を求める程に二人は何故か離れてしまう。それはまるで運命的に決め付けられた当たり前であるかのように。

落ち込んだ様子でコーヒーを飲むリリア。アクセルはトレイを片手にその姿を見下ろし肩を叩く。近づいたアクセルの顔にリリアは戸惑いながら顔を上げた。

「リリアちゃんはさ、ナツルと離れてみてどうだった？」

「どう……って……。そのう……」

「寂しかっただろ？」

顔を紅くしながらこくりと頷くリリア。アクセルはにっこりと微笑み、それから頷いてみせる。

「リリアちゃんはナツルの足を引っ張りたくなくて強くなりたいたいんじゃないかな」

「そう、なんででしょうか。いえ、多分違うんです。リリアは、なつるさんに……リリアも頑張れるんだって所を見て欲しかったのかもかもしれません」

危機的状況に置いて揺ぎ無く敵を駆逐する夏流の背中。アイオーンの言葉。聖剣を抱き、ただ何もする事が出来なかった自分。感じてしまったのだ。夏流は自分を仲間として見ているのではなく、保護者のような視点ですっと見ていたのだと。

少なくともリリアは今まで夏流の隣に立てるように努力してきたつもりだった。素性の知れない怪しい少年だとしても、その言葉や笑顔や手を引く強さは紛れも無く本物で、夏流はこの僅かな時間の中で沢山のものをリリアに与えてくれた。

そんな恩人であり何よりも大事な仲間として傍に居たい人である夏流が、リリアの事など意にも解さぬように扱った事が恐らく何よりも悔しかったのだろう。自分でもよく判らないわだかまりの根幹はそんなところにあったのだ。

「なつるさんは、リリアの為にって他の物を見殺しにするような、

そんな覚悟の下にリリアを守ろうとしてくれました……。でも、嫌なんです……。っ！ なつるさんがあんなふうのリリアの為に何かを犠牲にするとか、リリアを守るために戦うとか……。そんなのおかしいですよ！ そう思いませんか！？」

「んー……。その時のナツル、おっかなかったか？」

「　　っ。は、い……。まるで別人みたいに、冷たくて……。凄く不安になって、いつか自分の事もそうやって斬り捨てるんじゃないかとか、どんどん悪い方に考えちゃって……」

「成る程ね。でもねリリアちゃん、そりゃ君の勘違いだ」

顔を上げるリリア。アクセルはトレイを机の上に置き、リリアの手を引いて立ち上がらせる。

「ほら、行くぞ」

「え？ え？ ど、どこにですか？」

「ナツルは今アイオンと戦ってる。多分リリアちゃんが一番見なきゃいけないのは、あいつが一生懸命に戦ってる姿だ」

強引にリリアの手を引き、他のウェイトレスに軽く頭を下げ走り出すアクセル。ウェイター姿のアクセルに私服のリリア。二人はアンバランスな格好のまま、ただひたすらに坂道を駆け上って行く。

「あ、アクセルくんっ！？」

「ナツルはさ、不器用なんだよ。言葉とかでちゃんと誰かに気持ち

を伝えるのは得意じゃないんだ。だからいつも斜に構えるような態度してるけど、あいつ本当は結構実直な人間なんだよ。わかるだろ？」

「は、はい……」

「あいつは君の事をちゃんと考えてる。君を傷付けたくなくて、割れ物を触るように扱ってる。それは君を認めていないからじゃないんだ。あいつが時々怖いくらい残酷に見えるなら、それは心の底から君を守りたいと思ってるからなんじゃないかな」

「……………どう、して…………？」

戸惑いを口にするリリアに、アクセルは笑いながら振り返る。

「本当に何かを守りたい時、人間ってのはな、リリアちゃん。怖くて不器用で残酷で、感情を激しく昂ぶらせるものなんだよ」

「……………」

「必死にならなきゃ守れないからだ。そうしなきゃ後悔するって知ってるんだよ、あいつは。そのやり方は強引だったりするかもしれないけど、信じて欲しいなら信じてって声に出さなきゃ伝わらない！ 女の子の気持ちを一々考えて行動できるほど、あいつは器用じゃないから！」

「……………アクセルくん」

「だから間に合わなくなる前に会いに行こう！ そうすれば、何てこと無いただの擦れ違いで終わるさ！ またナツルと一緒に組んで、

バカやりたいじゃん？ リリアちゃんだって、そうだろ？」

アクセルの言葉にリリアは戸惑いながら頷いた。

闘技場では夏流とアイオーンの戦いが既に始まっていた。アイオンの持つ槍は全長一メートル程で決して長くはない。槍というよりは杖に近いそれを片手に構え、夏流へと走り出すアイオン。その指先から炎が生まれ、フィールドの半分以上を焼き尽くすほどの炎が放たれる。

夏流は正面からその炎を受け、両手で切り裂くように薙ぎ払う。分断された炎の奔流は渦巻き夏流の背後で燃え盛る。

「成る程、大した力だ。一応それなりに強い魔法を放ったつもりだったのだけれどもね」

「甘く見られた物だな。生憎こちらは 勇者より強くなきゃならない職業なんでな！」

反撃に駆け出す夏流。しかし焔の影にアイオンの姿は消え去り、直後に背後から突き刺された槍が夏流の腹部を穿っていた。

突然の出来事に何が起きたのかも判らないまま血を吐き片膝を着く夏流。槍を引き抜こうと腹部に触れた時、その異常事態は起こった。確かに刺さっていた槍が綺麗さっぱり消え去っていたのである。傷も残されていない。困惑する夏流の背後。既に詠唱を終えたアイオンが両手を翳し、蓄積された魔力を一気に放出する。

「アグニッシュプレス
天地を焦がせ龍の息吹」

放たれたのは巨大な熱線だった。フィールドを焼き焦がしながら直進するその光線を両手で受け止める夏流。障壁を簡単に貫通して突っ込んでくる光の束を歯を食いしばり上方に弾き飛ばす。龍の息吹

と同等の火力を持つ焔はフィールドを覆う絶対的な硬度を誇る結果を撃ちぬき、観客席の手前にある二重目の結界に衝突し、ようやく消滅した。

崩れ去った硝子の破片のように降り注ぐ結界の残骸。光の粒の中、激しく焼け付く痛みには片目を瞑る夏流の正面、アイオーンは笑いながら既に次の詠唱を終えていた。

再び放たれたダメ押しの一発。熱線は回避を試みる夏流を追いフィールド中を焦がして行く。結界を貫通し飛んで来る閃光に観客席から悲鳴が上がり、それに気を取られた夏流の正面に槍が飛ぶ。

左足を貫いた槍の痛みには体勢を崩す。結界を蹴り空中からアイオーンに迫る夏流に、彼女は微笑み一つと指先の動きだけで結界を展開する。炎の壁が夏流の蹴りを防ぎ、直後夏流の背後から槍が三本胸に突き刺さり、振り返った夏流の顔面をアイオーンの長い足が蹴り飛ばしていた。

何が起きているのかもわからない。アイオーンは確かに一つだけしか槍を持っていなかったはずなのに、身体には三本の槍が突き刺さっている。しかし直後槍は消え去り、ただ痛みだけが体内に残り夏流の身体を蝕んで行く。

ゲルトの言葉を思い返していた。『一度目は何をされたかわからない』。文字通りわからないまま困惑する夏流の正面、アイオーンの放つ炎が迫る。

神威双対でそれを切り裂き、背後から槍が突き刺さるのを意にも介さず正面に突き進む。雄叫びを上げながらアイオーンに手を伸ばすが、その姿は再び炎の揺らめきに消えてしまう。

「不毛な追いかけっこだとは思わないかい？ 夏流」

背後に感じるアイオーンの気配。けらけらと笑いながら夏流の背中に指先が触れた瞬間、爆発がその身体を吹き飛ばす。背中の中も肉も焼け焦げてフィールドの上に無残に倒れこむ夏流の姿に観客は息

を呑む。

アイオーンは武器を使って戦う戦士というよりは術式を使用して高火力で相手を制圧する魔術師タイプである。しかしその欠点であるはずの詠唱時間が呼吸をするが如く簡易に行われ、一撃で城壁さえ砕くような上級魔法を片手で連射する。近づく事も出来ない呪文の弾幕に加え、本人の持つ格闘能力が合わさり、どの間合い^{レンジ}からでも隙の無い戦闘が可能だった。

何よりも今アイオーンは彼女が最も得意である炎以外の術式を使用してはいなかった。まだ手はいくつも残されている。夏流はたった一つの彼女の手段さえ打ち破れぬまま、気絶しそんな意識でよろめきながら立ち上がっていた。

「まだ立てるんだね夏流。普通ならもう死んでいるよ？ 自分の魔力総量に感謝するんだね、ふふふ」

「……アイ、オーン……」

よろめく夏流へ歩み寄り、その首を片手で掴んで吊り上げる。相手を踏みじるという快感に酔いしれながらアイオーンは紅い舌を覗かせ口を開く。

「君は弱いね、夏流。そんな力じゃ何も守れはしないよ？ 大切な人も、大切な過去も、自分の想いさえもね」

「ちか、ら……だと……」

「そう、力さ。君はこの世界について何を知っている？ この世界の何を見てきた？ 君は何も知らないままただ力だけを与えられた。でもそれは君自身の力ではないじゃないか。そうだろう？ 君はただ膨大な、固形化されずに君の周りをフワフワ漂っているその無駄

な魔力で今まで生き残ってきたに他ならない。君は弱いんだよ、夏流」

「……………そう、だ。俺は……………俺は、弱い」

歯を食いしばりながらアイオーンの手首を掴み上げる。手甲の内側、焼け焦げた手の痛みには耐えながらその腕をぎりぎりと締め付ける。

「俺が、弱いから……………何も守れない。何も救えない……………だから、強く……………力を手に入れるんだ……………！」

信じられない程の怪力がアイオーンの手首を締め付ける。それはあつさりと骨を砕き、血飛沫が飛び散った。夏流は半ば意識の途切れた状態でアイオーンの拘束を離れると、倒れそうになる足でゆつくりと前進する。

アイオーンは驚きながら後退する。腕を庇いながら背後に移動しようとしたが、しかしそれよりも夏流の腕が伸びる方が早かった。夏流の拳はアイオーンの障壁を貫通し、その顔面を殴り飛ばした。空中を旋回するアイオーンの顔から割れた眼鏡が吹き飛び、燃えるような真紅の長い髪が揺れた。崩れかけた結界の壁に激突し、アイオーンは口から血を伝わせながら嬉しそうに笑う。

「……………手を抜いていたのかい？　どんどん調子が出てきたじゃないか。そうだね、これからだ。こんな簡単に終わってしまうのでは面白くないよね？」

自らの砕けた腕に手を当てる。一瞬で血飛沫を巻き上げながら健康な状態へと復帰した腕に纏う血を舐めながらアイオーンは眼鏡の向こう側に光っていた狂氣的に渦巻く瞳で夏流を捉える。

夏流は自分が呼吸をしているのか血を吐いているのかその区別も付

かなかった。二つの行動は既に一致するほどに近づいていて、酸素を取り込もうにも炎の術式で燃え上がったフィールドの中では酸素さえも見る見る減っていく。

龍の息吹を受け、両手の皮膚は完全に剥がれ落ちていた。武器が耐え切れても身体が持たない。完全にあの魔法を遮断するには夏流はまだ力不足だった。両手の手甲の装甲の合間から伝い落ちる血を握り締め、口の中の血を吐き出して顔を上げる。

「アイオーン……教えてくれ。俺に弱さと強さを　！　うんざりする程知りたいんだよ！　自分が弱いつて事を　間違っているつて事をつー！」

「ハ　　ッ！！　ハハハハハハハハハッ！！」

アイオーンの身体が燃え上がる。天を焦がすほどの熱量を帯びた焰の魔力が解き放たれ、会場全体を熱気が包み込んで行く。夏流もまた瞳を閉じ、雄叫びと共に体内に秘めた魔力を全て搾り出す。

「アイオオオオオオンッ！！」

激しく迸る電撃がフィールドを伝い結界を感電させる。両手に凝縮された雷を握り締め、夏流は駆け出した。

アイオーンは槍を翳し、投擲の構えを取る。そこに流し込まれた炎の魔力が渦巻きながら巨大な熱の刃を作り出した。

「ブリューナク
眼を貫け灼熱の魔槍　！！」

投擲された瞬間物質にまで具現化された魔力が音の壁を打ち破る轟音が鳴り響いた。秒単位では読みきれぬ速さで近づく槍は一瞬で五つに分裂し、五つの切っ先は回転しながら四方八方から夏流に迫る。

灼熱の魔槍。槍そのものを触媒として放たれる超高位魔法。魔力障壁を貫通する効果を持つ高位の槍型魔法の中でも凶抜けた破壊力を持つその槍に、夏流は己の拳に全ての魔力を込めて迎え撃つ。

「^{レーヴァ}神討つ……！^{ティン} 一枝の魔剣ッ！！」

閃光が迸る。一本の魔槍を貫通し、破壊する金色の魔剣。それは無数に枝分かれし全ての槍を打ち落としながらアイオンへと迫る。その閃光がアイオンの左腕を打ち抜き、完全に両断された腕が空中で蒸発する。それと同時に完全に落とし損ねた魔槍が夏流の肩に叩き込まれ、深々と突き刺さった刃は腕を切断すれの宙ぶらり状態にして消滅した。

完全に言う事を聞かなくなった片腕。アイオンは片手で術式を汲み上げ、魔方阵が浮かび上がる。夏流は倒れそうな意識の中、ゆっくりと瞳を閉じた。

「なつるさああああんっ！！」

その時だった。顔を上げた、アイオンの背後のとある席。そこで叫び声を上げ、夏流を見つめるリリアの姿があった。

隣ではウェイター姿のアクセルが手を振っている。その暢気な姿に思わず笑みが零れ落ちる。そうして顔を挙げ、瞳を開き、炎を灯したその眼差しで駆け出した。

アイオンが三度目のアグニッシュブレスを放つ。今までで最大の熱量を出力を込めて放たれた一撃必殺の閃光を前に、夏流は両腕を覆う鎖を外し、それを龍の息吹に叩き付けた。

聖剣と同等の効果を持つ鎖。その高い能力に気づいたのは先程ブリューナクの直撃を受けた時だった。腕をざっくり両断してもおかしくないはずの攻撃を防いでいたのは、細いただぶら下がっていただけのこの鎖だったのだから。

あらゆる魔術的效果を打ち消し叩き潰す絶対的退魔能力。片鱗しか持たないとしてもそれは夏流の身を守るのには充分過ぎるほどの力を持っていた。

いつだったかリリアは言っていた。この鎖は自分と夏流を繋ぐ絆のようだと。そんな照れくさい言葉を思い出しながら、夏流は腕に巻きついた鎖ごと拳をアグニツシユブレスに叩き込む。

「おおおおおおおおッ！」

鎖が赤熱する。焰の光を切り裂いて、少年は駆け出した。全てを引き裂きながら突き進む右腕の装甲が焼けて碎けても、真っ直ぐに突き進む足取りに迷いはない。

痛めつけられても傷ついてもいい。それでも必死に戦う事にはきつと意味があるはずだと信じている。己の行いが間違ってもそれは構わない。やはり自分が正しいと想うことしか、人間は出来ない不器用な生き物だから。

神威双対の装甲が碎ける音がした。アイオーンの上級魔法を何度も受けて耐えられるほど、今の夏流は頑丈ではなかった。それでも鎖だけは絶対に碎けず夏流の手を守るように淡く輝き、龍の息吹を超えてアイオーンの前に彼を立たせる。

二人は至近距離で見詰め合っていた。というのも、アイオーンは既に次の術式を構成し終えていたし、同時に夏流もアイオーンの首に手をかけていたからである。

相打ち　そう呼んだとしても差し支えの無い状況だった。しかしアイオーンは術式を停止する。焦げた夏流の腕はもうそれ以上動かず、悔しげな表情と共にアイオーンの腕の中に少年は倒れこんだからだ。

会場がざわめく中、アイオーンはまるで愛しい者を愛でるかのよう
に夏流の身体を抱きしめる。結局少年の指先がアイオーンに届く事は無かった。しかしそれは、確かに無意味な戦いというわけでも無

かったのだ。

戦いが終わり、夏流とアイオーンは直ぐに学園の医務室へ運び込まれた。両断された腕を自ら接続し、アイオーンは腕を動かしながらベッドの上で寝転がっていた。

「全く……またあんたかい、アイオーン。そうやって一々戦う度に手足切り落として来るんじゃないよ」

「ふふふ。仕方ないじゃないか、先生。相手が強かったんだからね」
白衣を着た年老いた女性が煙草の煙を眺めながら溜息を漏らした。
アイオーンはたまに戦えばここに出入りする事になる、所謂常習犯だった。

腕程度ならば切れてしまっても再生できる。それだけの術式をアイオーンは所持していた。故に基本的には手足が落とされても自らで修復し、ここへは一応検査の為に顔を出す事になっている。

アイオーンが寝転がるベッドの隣、夏流は気絶したまま焼け焦げた全身に包帯を巻きながら眠っていた。学園が抱える有能な^{ヒール}医師である保険医、デネヴの術式により一応腕はくつつき死は免れた物の、アイオーンの応急処置が無ければ危険なところだった。

戦闘で魔力を大量に消費し、さらに莫大な消費量を誇る^{リザレクション}蘇生魔法を連続で発動したアイオーンは既に自分の傷を全て癒せるほどの魔力は残していなかった。局所的とは言え一度は死んだ腕を再生させたのであるからして、それは当然とも言えるのだが。

「しかし、試合凄かったねえ……。まさかこのぼうや、ドラゴンブレスと同等の威力の呪文を三発受けて生きているとはたまげたものだよ」

「ブリーユナクも弾いてたしね……ふふっ、素敵な男の子だよ」

「あんたの趣味にとやかく言うつもりはないけどね、アイオーン。好きな男にちよっかい出すっていうにも限度つてもんがあるだろうに。普通恋心を抱いたとしても、龍殺しの術式なんて相手にかまさないだろう？」

「それはボクの恋のルールだからね。先生には関係のないことさ」

「そうかい……ま、何でもいいけどね。あんたも無理な生き方して死ぬんじゃないよ。もう長い付き合いなんだ、これ以上昔の知り合いが死んでいくのは見たくないのさ」

カーテンの合間から差し込む光と風に微笑を浮かべるアイオーン。その横顔を眺め、溜息と共にデネヴは医務室を後にした。誰も居なくなつた部屋の中、アイオーンは立ち上がって夏流のベッドを覗き込む。

その包帯まみれの指先が夏流の頬を撫で、アイオーンは優しい笑顔を浮かべた。それは普段の彼女からは想像も付かないほど暖かな慈愛に満ちている。

ベッドに腰掛け、アイオーンは窓の向こうを眺めた。夏流は何の反応もせずただ眠り続けている。そのあどけない寝顔の唇に人差し指を這わせ、囁いた。

「君になら、任せてもいいのかもしれないね。ただ君は少々危なっかし過ぎる。暫くは、誰かが面倒を見て上げなければならぬのかもね……」

アイオーンは立ち上がりコートを羽織って歩き出す。医務室の扉に

手をかけるよりも早く扉が開き、リリアとアクセルとゲルトとベルヴェールとブレイド、一気に五人が医務室に飛び込んできた。

「アイオーンさん！？ も、もう歩けるんですか！？」

「やあ、へこたれ勇者君。ボクは生憎普通じゃなくてね。それより彼の心配をしたほうがいいんじゃないのかい？」

「はうう！？ そ、そうでした！ 師匠！ 師匠しつかりしてくださーいっ！！」

夏流に駆け寄っていく仲間たちの中、アクセルだけがアイオーンの前に立ち止まり腕を組んでニヤニヤと笑っていた。アイオーンが首を傾げると、アクセルはその肩を叩いて振り返る。

「お前でも、手加減してやったりリリアの声が届くように間を置いてやったりなんて、気を使うような事が出来るんだな」

「……………やれやれ、君という人は意外と抜け目無いね」

「はははっ！ まあ、感謝してるぜ。これあの二人もこう……少しは上手いくだろう」

「そうかい？ ボクはただ、彼と約束して戦っただけなのだけども」

腕を組み微笑みながら視線を伏せるアイオーン。アクセルは何も言わずに息を付き、リリアとブレイドに揺さぶられまくってガクガクしている夏流の下に歩いて行った。

「勇者とその仲間たち、か……」

医務室の扉が閉まり、アイオーンは一人で薄暗い通路を歩く。
暖かな日差しが差し込む中庭を眺め、一人静かにその場から立ち去って行った。

解けない鎖の日(3) (後書き)

↓ディアノイア劇場↓

冬に更新するのは本当につらい……編

夏流「寒い……」

リリア「寒いですね……」

アクセル「寒いなあ……」

↓設定資料集その5↓

追加キャラクター設定集

『アイオン・ケイオス』

学園最強の生徒にして謎多き自称二十一歳。

ネクロマンサー

アンリミテッド

死術使いという二つ名と同時に限界突破者の能力も持ち合わせた天才的な魔術師。

圧倒的な強さと戦う相手に対する無慈悲の様相からアイオンと戦いたがるのは本当に最強を目指しているゲルトとブレイドくらいのものである。

燃えるような神と金色の眼鏡、黒い服装が特徴。服は主に男物なので一見すると背丈が高い事も手伝って男のように見える事もある。

本人が先天的に持つ得意属性は炎で、主に炎の術式を好んで使用する。手にしている武器である槍は魔法媒介としての役割が強く、大地に魔方陣を描いたり術式の媒介に杖のような役割を担う事が多い。物理的攻撃手段としては中の下程度の性能しか持たない。

非常に自由人で授業に出るも出ないも気分次第。気配を消すのが得意で他人の後をつけて驚かせるのが趣味。眼鏡は伊達だが大量に同じものをストックしてある。

教師陣からも一目おかれる彼女の過去に何があったのかは不明であり、夏流に対しどんな想いを抱いているのかも不明である。

『ベルヴェール・コンコルディア』

ちよつと頭の悪いお嬢様。十六歳。

財力に物を言わせ、貴重な魔弾（魔術的な効果を持つ鉱石を使用した矢）を使用する後方支援の弓兵。

学園の中では強いほうだが、実際は戦闘能力よりもサポートスキルの方が豊富で得意分野である。所持する属性は水だが、ある程度他の属性魔法も使いこなす。

コンコルディア財閥といわれる魔王大戦時より存在する貴族の一人娘で、かなり自己中心的な考え方をしているが、本人に悪気はなく当たり前だと思っている。

基本的に頭が悪く、物覚えもかなり悪い。よって他人を呼ぶときは大抵『アンタ』で済ませて誤魔化そうとする傾向にある。

実力や容姿は申し分ないのだが、いかんせん頭が悪いので他の生徒からの人気は微妙である。が、逆に頭が悪く自信家なのであらゆる状況で動じずに行動出来る。

コンコルディア当主は当然聖騎士団並びに勇者のパーティーを支持せねばならない宿命にあり、現在の当主でもある彼女の父親はフェイトとも知り合いだった。

『ブレイド・ブレット』

明るく元気な夢見る少年、十三歳。

戦闘方法は戦士に近いが、本人はシーフ希望。盗賊であつた父親の影響で、世界中の宝物を探し回るトレジャーハンターに憧れている。明るく元気でヘコまない。少々間抜けというか天然な部分があるものの、広い世界を知りたくて腕を磨く少年である。

かなりすばしっこく、動きが早いのは軽装のお陰もあるが、彼が先天的に持つ小柄さや身軽さのお陰。同時にリリアやゲルト同様、父親から伝説の武具を受け継いでいる。

彼の父は元々ただの盗賊だったが、フェイトに叩きのめされ強引に勇者のパーティーに参入させられ、魔王の城で命を落とした。

同じく勇者のパーティーに関わりのあつたベルヴェールやゲルトとは通じる物もあるのか、ゲルトやベルヴェールが珍しく気を許す相手でもある。

基本的に他人に警戒心や心の壁などを作らない純粋な気持ちで向き合う為、友人や面倒を見てくれる人は多いようだ。

夏休みの日（１）

シャングリラから出る列車を乗り継ぎ四時間。さらに二時間馬車で移動し、ようやく辿り着いた風景。リリアは窓から身を乗り出し、顔一杯に微笑を湛えてそれを眺めていた。

聖クイリアダリア王国の南にある南国の町、カザネルラ。リリアの故郷であるその街は、海辺に面した小さな小さな田舎町だった。

「わあ……！ 帰って来たなあ……！」

感慨深くそんな事を呟くりリア。俺の正面の席で居眠りしているアクセルと揺れるリリアのお尻を眺めながら眠そうにしているゲルト。俺もやはりこの長旅は流石に疲れた。狭い馬車の中でじっとしているのがこんなに苦痛だとは思わなかった。

俺はもうしばらくかかりそうな旅路の終着点への間、何故こんな事になったのかを思い返す事にした。

話は数日前に遡る。アイオーンとの戦いが終わり、その時に切断された腕も調子が戻ってきた頃。学園に訪れた夏休みを目前に、俺はリリアと一緒に予定を話し合っていた。

あれからリリアは不思議と以前より俺の話を丁寧に聞くようになった。同時に俺の顔を窺いながら、それでも笑いながら声をかけてくれる。俺と彼女の間にあるわだかまりが完全に消え去ったとは思えないが、兎に角お互いにお互いを避けるという状況は打開できていた。

そんな俺との気まずさを解消する狙いもあったのだろう。夏休み直前、リリアは俺の手を握り締めながらこんな事を言い出した。

「あの、夏休みになったら一緒にリリアのお家にきませんか？」

夏休み中は一ヶ月間授業も行われない。生徒たちはこぞつてそれぞれの故郷に一時帰宅し、リリアもその例に漏れず実家に顔を出す事にしたらしい。しかしそんな時に俺がついていっても迷惑なだけではないだろうか。

「リリアの実家は、海沿いの南の町なんですよ？ 遊ぶ所には困らないし、それにおいしい物もいっぱいあるんです！ 師匠にはいつもお世話になってるし、こういうときじゃないとお礼が出来ませんからっ」

との事。結局それを断るわけにもいかず、俺はリリアの招待を謹んでお受けする事にした。

話がそれで済めば特に問題はなかった。しかしその場に居合わせたアクセルが、

「バイトだけで夏休み終わらせたくねーんだよ！！ 頼むっ！！一緒に連れてってくれえっ！！」

と泣きついてきた事に始まり、

「じゃあおいらも一緒に行く！ な、ゲルトも行くだろ？」

「わ、わたしもですか！？ ライバルである勇者の家に遊びに行くなど、正気の沙汰ではありませんよ……」

「そっか……ゲルトちゃんは、リリアのお家には来たくないよね」

「……行きます」

「え？」

「行きますっ！！ 何度も言わせないでください！！」

という事になり、ブレイドとゲルトまでついてくることになった。
まった。

さて、話はどんどん大きくなり、リリアと俺の気持ちは完全にスルーでみんな旅行のような流れになってしまった。メリーベルも誘ったのだが、海に行くという事を聞いて首を横に振った。何でも暑い所は大の苦手らしい。

誘ってもいないベルヴェールまでどこからか話を聞きつけ着いてくることになり、あわや馬車二台での大移動となってしまった。そんなこんなで帰郷ラッシュで込み合う列車の席を予約し、何とか出発の目処が立ったのが昨日。今ようやく長い旅を終え、リリアの故郷カザネルラに到着したのであった。

長い長い旅が終わり、馬車は元来た道を引き返して行く。ずっと座っていたせいで腰が痛い……。アクセルは連日のバイト疲れが残っているのか、グッタリした様子でシャツの襟元から手を突っ込んで肩を掻いている。髪もぼつさばさでかなりやばい事になっているのが窺える。

リリアとブレイドは潮風の香りと果てしなく広がる海の景色を眺め、はしゃいでいた。カザネルラを見下ろす丘の上、ただ一人だけゲルトが辛気臭そうな溜息を漏らしていた。

「よっし！ それじゃあ行くわよー！ リーダーであるアタシの言う事にしたがって、全員まとまりのある行動を……」

「よっしや、おいらー番乗りだっぜー！！」

「あー！ ずるいよ、ブレイドくん！ まってよー！」

「……アンタたちねえ！！ 人の話は聞きなさいよっ！！」

三人が前を走っていく。その騒音で寝ぼけていたアクセルが目覚まし、きよろきよろ周囲を見渡した。その背中を軽く叩くと、目をパツチリあけて俺に振り返る。

「ほら、行っちゃったぞ他の奴は」

「そ、そうなのか？ お、おおーいリリアちゃん！ おいてかないでくれー！」

坂道を下っていくアクセル。一人だけ心ここにあらずなゲルトはまだスランプが続いているらしい。その手を握り締めて歩き出すと、ゲルトは顔を紅くしながら挙動不審なステップを踏んだ。

「な、なにをっ！？」

「いいから行くぞ。リリアの家、どこだかわかんなくなったら今日泊まるとこないんだぞ」

「は、離してください！ 判ってますから！ もう、離してーっ！」

この休暇が一体どんな事になるのか。とりあえず今の俺には全く予想もつかなかった……。

夏休みの日（１）

カザネルラの街はシャングリラと比べると圧倒的に人の数も少なく、ただくるくると回る風車と波の音だけが街全ての音で、人々はのどかに暮らしている……そんな場所だった。

意地の悪そうな顔をした人なんて一人もない。みんなリリアを見て優しげに微笑みながら手を振ってくれる。大人も子供も老人も、誰からもリリアは愛されているように見えた。

それもそのはずだ。この街が生んだ大英雄、勇者フェイトの娘こそリリアなのだから。彼女にとってここは自分を育んでくれた全てが詰まった場所であり、同時に痛みや悲しみの思い出が詰まった場所でもある。

リリアの家は町外れにあった。リリア曰く、彼女の育ての親である祖父は変わり者で、あまり街の人と交流を持ちたがらないという。リリアの案内で砂の大地を歩き、勇者の家というには少々雑な外見だが、それなりに広い一戸建てに辿りついた。

「何度も言わせるなっ！！ 俺は貴様らの言う理想には賛同出来ん！！ 全く、フェイトが生きておったら何と言ったか……！ 兎に角出て行け！！ 二度と来るんじゃないぞぞ！！」

家の前で全員の足が止まった。凄まじい怒鳴り声が聞こえてきたからである。声は当然家の中から聞こえてきた。老人の……恐らくリリアの祖父の声。たった一人しかないはずの家から出てきたのは一組の男女だった。

聖騎士団の甲冑に似た鎧を装備し、顔全体を覆うフェイスガードを装備している男。もう一人はその騎士のような男とは正反対に巫女装束に長大な太刀を携えた美しい女だった。

騎士は俺たちを一瞥し、女に目をやる。女は頷いてそれから笑顔でリリアの肩を叩いた。

「久しいな、リリア・ライトフィールド」

「あなたは……あれっ？　なんでリリアのお家にいるんですか？
鶴来さん」

どうやらリリアとこの女は顔見知りらしい。しかしリリアが小首を傾げているという事はどちらにせよ珍客である事は間違いないようだ。

女は微笑を浮かべながら俺たちを見渡し、それから楽しそうに俺たちに告げた。

「面白いように先代の勇者のパーティーにそっくりな構成だ。足りないピースも何れ揃う……そういうものなのかも知れんな。なあ、二代目？」

「ふえ？」

「コラーツ！！　いつまで人の家の前で……フェンリル、お前たちが連れてきたのか！？」

騎士は首を横に降る。家から飛び出てきたリリアのじいさんは凄まじく筋肉質の長身の男だった。筋骨隆々と行った様子の太い腕でリリアと鶴来を引き離し、家の前に塩をまいて鶴来の足元にツバを吐き飛ばした。

「さっさと出て行け！　この恩知らず共めが！！」

「やれやれ、嫌われたものだ。では失礼するよ、勇者の仲間たち。
また何処で会おう」

二人はそのまま去っていく。俺たちは何がなんだかわからないまま

完全に状況に取り残されていた。

「全く……おう、よく帰ったなりリア。ところで後ろにぞろぞろいる連中はお前の何だ？」

「ただいまおじいちゃんっ！ あのね、こっちの人たちはリアのお友達なの！」

「何言ってるんだリア。お前に友達なんぞいるわけねえだろ」

「ひどいつ！？」

涙目になるリア。どうやらリアに友達がない認識はご家族の方でも共通だったらしい。

リアが暫く友達になった経緯などを説明すると、おじいさんは腕を組んで納得したように顎鬚を指先でいじりながら頷いた。

「ああ、お前がいつも手紙に書いてる……例の男……」

「わあああっ！！ 余計な事言わなくていいから、早く入れてよっ！！ おじーちゃんのバカ！」

「わはははははっ！！ なんだなんだ、テレるこたねえだろが。フエイトなんぞ毎日とつかえひつかえで女を家に入れてたもんだが、どうしてこう控えめな娘が生まれるかねえ。まあ血筋ってもんかもしれねえが……おう、お前らよく来たな！ 出すもんは何もねえが、勇者が生まれ育った家だ。文句が無きゃ上がりな」

「……おじやましーす……」

随分ワイルドなおじいさんなことに。家の中は意外と片付いて高い天井ではいくつものファンがグルグル回転していて外よりかなり涼しい気がする。窓から差し込む木漏れ日は暖かく優しく、旅行気分なのは如何な物かと思うが、リラックス出来る空間だった。

リリアの祖父はヴァルカン・ライトフィールドと言うらしい。彼自身は既に引退してしまっているが嘗ては聖騎士団に所属した一人だという。嘗ての戦争ではリリアが生まれるまでは息子のパーティーに戦士として所属し、存分に腕を揮ったという。

ヴァルカン爺さんは非常に気のいい爺さんだった。何もかも豪快で兎に角図体がデカいので、リリアとは正反対のようにも見える。しかしリリアも爺さんの前では結構豪快で、二人とも血筋なんだなあと実感する。

家は中々広くて俺たちは開いているフェイトの部屋だった場所に寝泊りできる事になった。当然だが女子はリリアの部屋である。部屋一つ一つが俺の世界の部屋の何倍もの広さがあるので、三人で寝泊りしてもなんら問題は無さそうだった。

荷物を降ろして一息つき、一階のリビングに下りるとヴァルカン爺さんがエプロンをつけて料理をしていた。リリアたちは既に一階に降りていたのか、何かお話中のようにだった。

「それにしても、どういつもこいつもデカくなりやがったな。お前コンコルディアんとこの一人娘だろう？」

「あら、知っているの？」

「知ってるもなにも、あいつに商いの秘訣を教え込んだのは俺だぜ」

「え、うそ!？」

「嘘だ! わっはっはっは!! まあ、聖騎士団に武具の発注

を取り付けたのは俺だけだよ」

盛大にずっとけているベルヴェール。リアクションがなんかこう……バカっぽいんだよなあいつ。

「ゲインの娘も久しぶりじゃねえか。色々あったみてえだが、今は元気にやってんだろ？」

「え……？ あ、はい……」

「ま、世の中そんなもんだ。勇者なんてロクな仕事じゃねえよ。博打打ってるほうがまだマシだ。肝心の勇者が死んじまったんじゃ、そりゃ残された仲間は割り切れなくても仕方ねえよな」

爺さんはしみじみしながらそんな事を言った。その後俺たちはじいさんの作った魚料理と大量のフルーツを一気に平らげ、そのまま家の前に広がる海へ繰り出す事にした。

部屋で水着に着替え……ていうか水着あるんだ……ビーチに駆け出す。ビーチというよりはもう既に普通に家の前が全部ビーチなのだが、凄まじく広い空間をたった六人で独占できるのだからこちらの世界はすごいものだ。

どこまでも広がるエメラルドブルーの海。沿岸には漁船が行き、風車の回る羽が生み出す影がくると俺たちの頭上を舞う。カラフルなパラソルを広げるアクセルの音を合図に、ブレイドが一番に海に突っ込んで行く。

続いてベルヴェールとリリアが慌てて走って行き、リリアは全力で転んで激しい水しぶきがあがった。三人が遠くで笑っているのを眺めながら俺はうさを砂の上に下ろした。

「お前、砂とか水とかダメじゃないか？」

「そのようです。あちらのほうで日向ぼっこでもしているので、ナツル様はご自由にどうぞ」

うさぎはぴよこぴよこ砂の上を跳ねて行く。それを見送っているとアクセルは水着姿の女の子をじろじろ眺めながら幸せそうに涙を流していた。

「来てよかったぁ……。俺、今年の夏休みもバイトだけして終わるつらい物なのかと思ってたよ……」

「そりゃよかったな……。でも泣くほどのことか……？」

「お前もバイトだけでひと夏過ごしてみればわかる。他の生徒はみんな楽しそうに夏の思い出を語りながら学校に来るのに自分だけバイトしてた日々を振り返ってみる。涙くらい出るわ!!」

拳を握り締めながら熱弁するアクセルはそのまま雄叫びをあげながらリリアに駆け寄っていく。しかしその様子が怖かったのか、リリアに回し蹴りを貰って水面を何度か跳ねながら海へ墜落していった。いつの間にリリア、あんなに素早く的確に敵を迎撃できるようになったのか。見えないところでも成長しているものだなあなんてしみじみしていると、パラソルの下で膝を抱えているゲルトに視線が行った。

「リリアちゃん……かわいい……」

盛大に転びそうになった。さっきのベルヴェールと同じリアクションだった。

顔を紅くしながら幸せそうに笑みを浮かべ変態チックな言葉を呟い

ているゲルトの背後に立ち、肩を叩く。驚いたのか、ゲルトは目を丸くして振り返った。

「そんなにリリアの水着がいいならもつと近くで遊べいいだろうに」

「いえ、今はちょっとそういう気分じゃないんです」

ゲルトはこんな所にまでフレグランスを持ち出してきていた。砂に突き刺さったフレグランスを指先でなぞりながら、まるで自分の身体の一部のようでさえあるその魔剣をじっと見つめた。

「まだ調子悪いのか？」

「貴方には関係のない事でしょう」

「そういうわけにも行かなくなったんだよ」

「……え？」

原書の予言する未来。残り一カ月後には確実に現実になる世界の実。

リリアが聖騎士団に入ると同時に、ゲルト・シュヴァインは『自殺』するのだ。

その理由も原因もまだわからないままだが、兎に角ゲルトはリリアが騎士になると同時に死ぬ。その理由は今の所このスランプくらいしか俺には思いつかなかった。

リリアが騎士になるかどうかはまだわからないが、兎に角ゲルトのほうだけでも問題を解決しておかなければならない。リリアが騎士になったとしても、ゲルトが自殺したなんて事を知ったらリリアは

それを一生気に病むはずだから。

なんというか、どちらか片方だけが幸せになる事は出来ないのに、この二人はお互いにお互いを鎖でグルグル縛り付けているように俺には思えてならない。お互いの事を憎しみながら、愛しながら、まるで正反対の光と影のように、お互いを消したいと願いながらもお互いが存在しなければ自分もまた存在できないような、そんな関係……。

リリアが必要以上にゲルトを意識するのも、ゲルトが必要以上にリリアを意識するのも、それは多分一言では説明できない様々に絡み合った複雑な思いがそうさせているのだろう。そしてそうである以上、どちらか片方だけを構っておけばそれでいいというわけでもないらしい。

「なんだなんだ？ 人がせつかく保護者として見に来てやったつてのに、お前ら二人だけで何イチャついてんだよ」

振り返るとそこには巨大な影があった。筋肉質の男がアロハシャツを着てウクレレ片手に笑っていたのである。似合いすぎていて逆に怖い。

サングラスの向こう側から覗く鋭い眼光がゲルトを見下ろす。そうして暫く考え込むと、突然ゲルトをひょいと持ち上げた。

「なんでうちの孫はあんなにぺたんこなのに、ゲインの娘はこんなに胸がでかいんだ？」

「な、なな、何を言っているんですか、貴方はーっ！！ 放しなさいっ！！」

持ち上げられたゲルトが放った魔力キック。しかし爺さんはそれを頭に受けても痛くも痒くもないといった様子で豪快に笑い飛ばして

いた。

「わはははは！ 効かん効かん！ 俺の首を飛ばしたかったら滅龍魔法でも持つてくるんだな！」

「くうっ！！」

ゲルトを下ろし、その頭を巨大な手でグリグリなでる爺さん。そうして砂の上にずしりと腰を落とすとウクレレをポロンと鳴らす。

「お前は若い頃のゲインにそっくりだな。喋り方まで似てやがる。今のお前らを見てると、ゲインとフェイトを思い出すぜ」

「……お父様」

「フェイトは自由気ままでな。ゲインはくそ真面目だった。二人は若い頃丁度今のお前らみたいな時期もあったが、結果的には手を取り合い魔王に立ち向かった。何故だかわかるか？」

俺もゲルトも応えられなかった。爺さんはやりと笑ってウクレレをまた掻き鳴らす。

「二人は実はとんでもない似たもの同士だったからだ。お互いを嫌悪するのは同属だから……ってわけだ。お互いの弱さと強さを認め合い、お互いに無い物を信じられた時、二人の絆は魔王に打ち勝ったわけよ」

「……絆が、打ち勝つ……」

「まあ結局その後は二人とも死んじまったわけだからしょうもねえ

けどな！ わははっ！！」

そこでちゃんとまとめてくれればちよつといい話だったかもしれないのに、この爺さんは。

そもそもゲルトにとって父親の死はトラウマのはず。それをこんな軽々しく扱うのは如何なものなんだろうか。

爺さんはゲルトを担ぎ上げ、リリアたちの所に運んで行った。海に投げ込まれて沖の方に落ちたゲルトを救出する為にアクセルが泳いで行き、俺は啞然としながらそれを眺める。

暫くすると爺さんが戻ってきて俺の隣にどっかりと腰を下ろした。そうしてウクレレを鳴らし、俺に語りかける。

「お前、ゲルトとリリアどっちが本命なんだ？」

「はい？」

「だから、どっちの子が好みだ？ 俺は胸がでかい方が好きだ。男の八割はそうだと今でも信じてる。だがお前の考えは違つかもしれねえ。まあ言ってみろ。どっちが好きだ？ ぺたんこか？ 巨乳か？」

「その二択なんですか……？ そうですね……だったら俺は胸の大きさそのものよりも、胸そのものを愛します」

「中途半端な答えだな。だが悪くはない」

「自覚はしています。ですが選ぶ事は難しいのだと思います。自分にとって本当に大切な物は選べない……選びたくはない。そういうものでしょう」

「その通りだ。だが自分でこうだと決めておかなければいざというときに取捨選択出来なくなる。自分はこのバスト……そう胸を張って言える……ダジャレじゃねえぞ？　そういう自分じゃなきゃな」

この人は恐らく胸の話に例えて二人と俺の関係を語っているのだろう。そうだと思いたい。

ウクレレが鳴る。爺さんはいつの間にか立ち上がり、演奏を開始していた。海辺にのどかなウクレレの音が鳴り響き、爺さんは水着で遊ぶ孫を眺めながら微笑んでいた。それが水着だからではないという部分を一応俺は信じたい。

「お前、リリアに対してもゲルトに対しても遠慮しすぎだろ」

「……そう、なんでしょうか」

「さっきもお前、俺がゲインの事を軽々しく語りすぎだと思ったのだがな、ぼうず。過去は過去、今は今……。かつて起きた世界の出来事はどんな悲しみだって笑い話にしなきゃならねえんだよ。それが今生き残った俺たちに出来るたった一つ彼らにしてやれることなんだ」

「……笑い話に？」

「少なくとも、死んだ勇者二人はそれを気に病んで娘に悩んでほしいとはこれっぽっちも思っちゃいなかったろう。そうだろう？　あのくそ真面目なゲインがゲルトを苦しませたいと思うはずがない。あの何も考えてないようなバカのアイトが、リリアを苦しめたいと思ったはずがない。そういう事を、未だにやつの弟子やら仲間やらは理解出来てないんだよな」

「それは、昼に家に来ていた二人ですか？」

爺さんは苦笑を浮かべる。どうやら正解らしい。まあ、確かにそうだろう。あの戦争を引き摺っているのはリリアとゲルトだけではない。沢山の人がまだ忘れられないまま今を生きていて、世界に生きる事を割り切れないまま苦しんでいる。

「勇者のパーティーは全部で十二人居た。そのうち何人かは決戦に参加せずに生き残っている。何故だかわかるか？」

「……何故ですか？」

「フェイトとゲインが、決戦への同行を許さなかったんだ。やつらは二人で魔王に決戦を挑んだ。結果は痛み分け……フェイトは死んだ。奴らは仲間に生きて欲しかったんだ。この世界を。戦いの終わった世界をな。だというのにどういつもこいつもまだそれを引き摺って、もう十年も経つていうのに情けないもんだ」

悲しげなウクレレの音色。俺はこの世界を救うために戦って死んだ二人の男に想いを馳せていた。彼らの意思を継ぐ二人の勇者は今、俺がどうかしなければならぬ相手でもあり、この世界に彼らが残したかった希望でもある。

二人に遠慮しすぎだという爺さんの言葉に俺は反論できなかった。触れれば壊してしまいそうなほど脆くて儚い二人の心にどうやって触れたらいいのか、今の俺にはわからないままだから。

「なつるさーんっ！！」

顔を上げるとリリアが手を振っていた。どうやら来いということらしい。せっかく海に着たのに海辺で爺さんと二人で語っているだけ

と言うのも確かにつまらない話だろう。

俺は爺さんに頭を下げ、リリアの下に向かった。みんなは各々海を満喫していて、リリアに近づく途端にブレイドが横から水をかけてきた。ずぶ濡れになりながら顔を上げると、巨大な津波の上に乗り込んだベルヴェールがどんだん俺たちに迫ってきていた。

そういえばあいつ、水魔法得意なのか……。そんな事を考えながら俺たちは一瞬で津波に飲み込まれたのであった。

夏休みの日(2)

楽しい時間が過ぎて行くのは本当にあつという間だ。

昼間は皆疲れ果てるまで海で遊び、夜になると美味しい飯を食ってまた騒ぐ。そうして夜も遅くならないうちに皆寝付いてしまい、俺は一人で砂浜に立っていた。

傍らには人の姿に戻ったナナシが立っている。うさぎ男はこの世界の書物らしき物を片手に月明かりを頼りに読み物をするという器用な行いをしていた。

海に吸い込まれた月の雫がエメラルドの色を照り返し、夜の闇の中でゆっくりと蠢く。漣の音を耳に、一人でぼんやりと今までの事を考えた。

リリアと出会い、そして沢山の仲間と出会った。ディアノイアという学園の中で俺は他の皆と一緒に様々な事をしてきたつもりだ。リリアを救う為、リリアを守る為……。

でも恐らくそういうのは全部本当の所自分の為で、他の思いは言い訳のようにも感じる。暖かい風の中思い返すのは昼間ヴァルカン爺さんに言われた言葉だ。

「遠慮しすぎ、か……」

言い返す事も出来ない。確かにそう、俺は遠慮をしすぎていたのかもしれない。リリアに触れる事も、みんなと関わる事も、この世界の住人ではない俺にその資格はないように思えた。

俺はもともとの世界でもそこそこ上手くやっていたつもりだった。友達だっていたし、学業もそこそこ優秀。体力は図抜けているし、兎に角日々に不満なんてなかった。もしあるとしたらそのたった一つの不満は、今俺が追いかけている冬香の残像が有しているのだろ

う。

兎に角俺は彼女の虚像以外には不満などなかった。俺は俺の、リリアたちにはリリアたちの世界がある。ここはもう物語の中だけの世界なんかじゃない。本当に存在する、この世界の人間にとっては確かなリアル……。

そんな世界で、俺は永遠に居る事は出来ない。たとえ時の流れが止まってしまっていたとしても、俺はここには永遠に存在できないのだ。どんなに近づいても彼女たちの存在が俺にとってそうであるように、彼女たちにとってもまた、俺の存在は虚像に過ぎないのだから。

「なあ、ナナシ。いつまでこんな事を続ければ、終わりは来るんだろっ」

「エンディングは人の数だけ存在します。物語が人の数だけ存在するように……。貴方の言う『終わり』という言葉は、恐らくそう簡単な答えを導き出せるようなものではないでしょう」

「……そうだな」

終わりとはなんだろう？ 明確な意味での終わりなら、物語には存在しない。それが紙上に描かれた空論だとすれば話は別…… 物語は最後のページを捲った瞬間明確な終わりを向かえ、そこから先に待つものは完全なる無、だ。

だが俺たちはどうだ。生きているのなら、そこに明確な終わりなんてあるのだろうか？ 例えば勇者フェイトの生き様を一つの物語としたとしても、その彼の戦いの後には必ず続くものがある。永遠に繰り返される永久の営みの中、一つの物語が終わればまたそれを継ぐものが何かを語り紡いで行く。

俺は、何を以ってして物語の終わりを定義すればいいのだろうか。

何をすれば『立派な勇者』とリリアを呼べるようになるのか。リリアの死がバッドエンドだとしたら、この世界そのものはどうなるのか。様々な矛盾や疑問が脳裏を過ぎっていく。

勿論答えは出ないしナナシも答えてはくれないだろう。そんな事は判っている。もう長い間現実の世界に戻っていない。いや、現実とはなんだろう。

結局は全てただの俺の主観に他ならない。風を受けるこの感触も潮の香りも、誰かに触れるこの指先さえも。なら現実と幻想の境界線はどこにある……？

「俺は、この世界にある『現実』を……世界を容易に変える、神のような存在でいいのか？」

それはこの世界で懸命に生きる人々に対し、度を越えた行いなのかもしれない。

冬香、お前は どうして俺をこんな世界に巻き込んだんだ？ ここで俺に何を求めている？ 俺に何が出来る？ それぞれが演じる舞台の脚本の下、俺に任された役目が救世主？

違う。俺はそんなものじゃない。何も救えなかったじゃないか。なのお前は俺にそれを求めるのか？ 何も出来なかった俺に、救いを……。

「師匠、こんなとこにいたんですか？」

振り返るとリリアが立っていた。白いシャツに紺色のジーンズを穿く私服のリリアは俺の隣に立つと海に入った時のまま、後ろで纏めた髪をびよこんと揺らしながら俺の顔を覗き込む。

「一人でぼうつとして、どうしたんです？」

「ちょっとな。昔の事とか思い返してたんだ」

「……昔の事？」

小首を傾げるリリア。俺は何も言わずに苦笑を浮かべた。彼女はそれ以上何も俺に問わず、俺の手を両手で握り締め、にっこりと微笑んだ。

「明日、一緒に出かけて欲しい場所があるんですけど……いいですか？」

「ん？ 用事でもあるのか？ 訓練じゃないだろうな？ こんな時くらい、休んでおかないと損だぞ」

「違いますよう！ 何でデフォで訓練なんですかっ！ そうじゃないって…… 兎に角、明日朝早くに待ち合わせですよ？」

楽しげに笑うリリア。俺はその笑顔に仕方なく目を閉じ、約束を取り付ける事にした。
そうして俺たちが向かう先で、あんなことになるなんて、その時は考えもしなかったから。

夏休みの日（２）

朝早く、リリアに起こされて目を覚ました。準備も出来ないままほぼ起きたままの状態で家の外に連れ出されると、そこにはきっちりとした身だしなみのゲルトが立っていた。

二人だけのお出かけだと思っていただけに少し意外だった。ゲル

トは全身を覆うような黒いレースのドレスを着用している。昨日はアーマークロークだったが、流石に今日は私服らしい。

それにしても二人の私服はかなり対照的だ。リリアは俺が思っている以上に活発な格好をしているし、ゲルトは俺の予想斜め上に完全に深窓の令嬢と言った出で立ちである。

二人の私服を交互に眺める。でもこうしてみると確かに二人のイメージにピッタリだ。リリアは多分元々元気で活発な女の子なのだろう。そしてゲルトはどちらかというと内気な女の子……なんでアーマークローク着ると二人の迫力は逆転するのだろう。不思議だ。

俺も今日は私服だ。といつても普段から鎧やら正装を着込んでいるこいつらと比べればいつでも私服みたいなものだが。もともとの世界の服装……初めての魔力解放で破損したがリリアに直してもらった……を着用するのは久しぶりの事で、流石に手甲も置いてきてしまった。そんなもん装備している時間はなかったし。

「う？ なつるさん、何を考え込んでるんですか？ もしかしてまだ寝ぼけてます？」

「いや。そういえばリリアってスカート穿かないなあ、とか思ってた」

「なんかスカートって足がスースーしてやじゃないですか？ リリア、おじいちゃんがあんなだから昔から男の子の格好が好きなんですよ」

「それに引き換えゲルトは完全にいいところのお嬢様だな」

「……実際、没落とは言え貴族の娘ですから。それに……遺憾ながら普段からお洒落な格好をして居ないと、どこでどんな噂が立つか判りませんから」

流石は学園でも有名人。シャングリラじやアイドルみたいな扱いだもんな。にしたってもうちょっとこう、動きやすそうなもんがないのだろうかと思うが。

半ズボンでことこ小走りしていくリリアが向こうで手を振っている。俺とゲルトはそれに続いて早朝の街を歩き出した。

砂と砂利の道は流石にゲルトには歩きにくいようで、時々転びそうになる。そういう時手を取ってやると、ゲルトはばつの悪そうな顔をしてそっぽを向いた。

リリアに案内されて三十分ほど歩き続けると、しばらくして砂の景色から草原へと世界が変わって行く。きつい坂道を登っていくと、海を一望出来る場所に大きな墓があった。

石碑と言ったほうが正確な表現になるそれを前に、リリアは後ろで手を組んで複雑そうな表情を浮かべていた。何も言われずともわかった。それは彼女の父、フェイトの墓だった。

フェイトの墓の前には既に花束が供えられている。つい近い内に供えられたらしいそれは、昨日この街を訪れた彼の仲間がおいで行ったものだろうか。

風が吹き、揺れる木々。完全に昇りきらない朝日が夕焼けのように真っ赤に世界を染め上げて、三人揃って眩しそうに目を細めた。

「えへへ。実は、数年ぶりのお墓参りだったりするのですよ。なんだか一人ではここに立つ勇気が無くて……いつも、遠回りしてたんですね」

リリアは墓の前に腰を落とす。風がリリアの髪を撫で、俺はその後ろで黙ってその姿を眺めていた。朝日を浴びて立ち上がるリリアの背中に一瞬白い翼が見えるような錯覚が俺の中で渦巻く。しかしそれはきつとただの幻ではないのだろう。

光を背に微笑む少女は正に天使のようだった。振り返るとゲルトが目をきらきらさせていたので俺は黙って微笑みながら見なかったこ

とにした。

「ゲルトちゃんにとっては、辛い場所だよね。無理に誘っちゃってごめんね」

「いえ……。わたしももう、この場所から……。世界の事実から逃げられませんか。いつかは一度……。ちゃんと、挨拶に伺わねばならなかったでしょう」

ゲルトはリリアの隣に立つ。黒と白のシルエットは光を浴びて揃って手を合わせ、祈りを捧げていた。神聖な様子のその景色の中に自分という不純物が混じってしまう事が嫌で、俺はずっと離れたところから小さく手を合わせた。

しばらく俺たちはそうしていた。時間が過ぎるのはあつという間で、やがて太陽は昇っていく。振り返ったリリアは複雑そうな表情で照れながら笑う。ゲルトもそれに釣られ、あどけない笑顔を見せた。恐らくその二人が本当の二人の姿で、ずっと昔から変わらないもののように俺には思えた。

「ゲルトちゃん、あのね。リリア、聖騎士団に入れるかもしれないんだ」

「えっ？」

初耳だったのだろう。ゲルトは心底驚いているように見えた。まさかここでそんな話をされるとは俺だっと思って居なかった。だがリリアは遠慮なく言葉を続ける。

「この間の課外実習で魔物と戦うまで、勇者なんてお飾りの存在なんだと思ってたんだ。でも違う……。実際、お父さんが消しきれな

かった悪夢はこの世界をまだ目覚めさせないままで、今も何の罪もない人たちが苦しんでる。突然やってきた終わりに悲しいって感じる暇もなく、命を奪われてる……そんなのダメだと思うんだ。だから聖騎士になって、それから勇者になって……この世界を、守りたい」

リリアの表情は決意に満ちていた。強い、とても強い眼差し。どんなに涙を流してもへこたれても、リリア・ライトフィールドは変わらない。それが彼女の強さであり、ゲルト・シュヴァインが憧れた本当の優しさだった。

しかし今のゲルトにその言葉と姿は酷だった。自分が今何の為に勇者に成りたいのかさえ判らず、魔剣も扱えなくなったというのに、リリアは嘗ての想いの強さを取り戻しつつある。対照的に進退する二人の心の脆さがくつきりと光と影のように浮き彫りになった。

「リリア、勇者になんか成りたくなかった。勇者なんてくだらないって思ってた。勇者になっても何もいい事なんか無い、救えることなんかない、って。でもそうじゃないんだね。勇者かどうかが問題なんじゃない。この世界を守る人間の一人として、どう行動するのか……それがきつと大事なんだと思うんだ」

「……リリア……」

リリアはゲルトの両手を握り締め、につこりと微笑む。

「だから、ゲルトちゃんも一緒に騎士になろうよっ！ 今、リリアは本当に勇者になりたいって思ってる。まだ弱くて力も無くて、まだまだゲルトちゃんには及ばないけど……でも、最初からその座を諦めてゲルトちゃんに全部任せたりしたくない。今はゲルトちゃんに勝ちたい 本当にそう思ってる。だから」

「…………無理、だよ…………」

ゲルトの声がりリアの言葉を遮った。ゲルトは視線を反らし、今にも泣き出しそうな顔でりリアの手を強く握り締めていた。

「わたし、りリアちゃんみたいに強くないよ……。わたし、だめだもん……。勇者になんて、なれるわけないっ!!」

「ゲルトちゃん……?」

「ごめんね、りリアちゃん……っ! ごめん、ごめんなさいっ!!」

ゲルトはりリアの手を振り解き走り去って行く。りリアがゲルトの名前を叫び、後を追いかけてよとした。俺はその手を掴んで引き留める。

「なつるさんっ!? どうして!?!」

「悪い、ちょっとだけ待ってくれ。後で全部話す。今はお前がゲルトの傍に……いない方がいい」

「そんなの関係ないよ!! ゲルトちゃんは大事な友達なんだよ! 大切な勇者仲間なんだよ!? いくらなつるさんがそう言っても、私はゲルトちゃんの手を離したくないッ!」

いつに無く真剣な表情で俺を睨みつけるりリア。俺はもう片方の手もしっかりと掴み、正面からりリアを見つめる。俺の願いを込めた眼差しを受け、りリアは少しだけ落ち着きを取り戻したようだった。

「兎に角、今は任せてくれ……頼む」

「……なつるさん」

「リリアの気持ちは、あいつにちゃんと伝わってる。きっと痛いくらいに……。だから大丈夫だ。あいつはもう平気だよ。だからリリア、少しだけ時間をやってくれないか？」

「……どうしてですか？ リリア……何か酷い事を言っちゃったんでしょうか……？」

リリアまで泣き出しそうな顔で俺を見上げてくる。俺はその頭を撫で、小さな身体をそっと抱きしめた。そうする意外に今自分の気持ちを伝えてやる事は難しいように思えたから。

言葉では伝わらないから、触れる事で伝えたい。リリアは俺の腕の中で静かに涙を拭き、頷いた。

「大丈夫だ。お前らは本当にいい友達だよ。約束する　ゲルトは傷付けない」

「信じても　いいんですか？」

いつだったか同じ質問をされた俺は答える事が出来なかった。今俺はその質問を受け、リリアに背を向けながら笑いながら頷く事が出来る。

「　ああ。俺を信じろ、リリア」

リリアはきつと頷いてくれた。俺はすっかり覚醒してしまった頭で考える。ゲルトがどこへ走り去ったのか。

兎に角探さなければ。しかし恐らく街の方には行っていない。街に向かう道へ向かって見たが、砂の道に足跡は残っていなかった。

「くそ、ゲルト……どこいったんだよ……っ」

草原を走り回り、ゲルトの姿を探す。何が引き金で今のあいつが崩れてしまうのか、俺には想像もつかない。でもきつとあいつの心の多くはリリアが占めていて、だからリリアが遠ざかれば遠ざかるほどあの子は苦しむ事になる。

近づけば近づくだけ傷付けてしまうのに、優しさを分け合いたいの、二人はいつでも擦れ違う。そんな悲しい関係性が今まさに浮き彫りになろうとしている。お互いがどんなに相手を想っても、どんなに相手を認めても、どんなに相手を憎んでも……変わらない。変えられない。そのもどかしさにもがき苦しみ、やがて絡みついた鎖は彼女たちの翼さえ脆く引き千切る。

そうなってしまう前に俺は何かをしなければならぬ。信じろと言ったものの、答えはどうにも出そうになかった。齒軋りし、ゲルトの姿を探す。

「ゲルト……!」

彼女は崖の上にある花畑の中、一人で膝を抱えていた。息つく間も無く駆け寄ると、ゲルトは涙を流しながら振り返った。

「ゲルト……! その……っ!」

「……昔……まだ、わたしたちが小さかった頃……。リリアはわたしの憧れでした」

言葉を遮るように呟くゲルト。膝を抱えたその背中はとても小さく

見える。まるでそう、幼い日に戻ってしまったかのように。

「お父様が生きていた頃からリリアとはずっと一緒に……気が弱くていつもいじめられるわたしを、リリアは庇ってくれました。男の子にだって負けないで喧嘩してやっつけて……わたしにとってリリアは天使だったんです」

「……………ゲルト」

「あの子はどんなに自分が苦しい時でもそれを誰かのせいになんかしない。全て受け止めて、その上で悲しい時は素直に涙を流せる。誰かの為に傷ついて怒って、そういう風に生きられる……。ナツル……勇者って、なんなんでしょうか」

立ち上がったゲルトは振り返る。俯いたまま拳を握り締め、悲痛な表情で俺を見た。

「勇者ってなんなんですか！？ 誰かの為に一生懸命に戦って生きて！ なのに誰からも救われない、報われないっ！！ 世界は変わらないんです！ 結局今でも騎士団の支配は続いていて魔物は人を苦しめ続ける！！ リリアが望む綺麗な現実なんて無いんだってわかってるのに、どうしてっ！！ ねえ、どうしてなの！？」

ゲルトは俺に掴みかかり、胸を弱弱しい拳で叩く。

「傷付けられたら嫌だよ！ 信じられないよ！ 何を守ればいいの！？ わたしはリリアみたいに全てを許せないっ！！ 全部許して背負って守って犠牲になるなんて怖いよっ！！ どうしてあの子はあんなに綺麗に輝いてられるの！？ ねえ、どうしてっ！ どうしてっ！！ どうし」

「もう何も考えるな……。何も、考えなくていい」

ゲルトの身体を強く抱きしめる。腕の中でゲルトは一瞬抗うようにもがき、それから力なく涙を流した。

十五歳　　たかが十七歳の俺が言えたことではないが、こんな子供に何を背負わせているんだろう。そう、リリアは強い。本当に強いんだ。

親の壮絶な最期、もう一人の勇者の報われない過去、手を取り合う事も出来ずに苦悩した幼馴染との今。そういうものの全部ひっくるめて背負って、それでも強くなりたいと笑える。それはどれだけ輝かしいことなのだろう。

それこそがリリアという少女の魅力なのだ。だから彼女が剣を手にする周囲には彼女の仲間たちの姿がある。リリアは元々誰とも関わらないように意識してきただけ。あの子にはきつと、人を惹き付ける才能がある。

リリアもゲルトも同じだけ辛かった。同じだけ悲しかった。でもリリアはそれを飲み込んで強く在ろうと立ち上がった。だがゲルトにはそれが出来なかった。どちらが不幸なわけでも可哀想なわけでもない。どちらも同じなのに、リリアに出来る事がゲルトには出来なかった。それがきつと、彼女にとって一番辛いのだろう。

憎しみだけで彩ってきた今までの日々全てを許す事は出来るはずもなく。リリアとも素直に向き合えるはずもなく。でも本当はそんな自分が嫌で仕方が無いんだ。だから魔剣は　『彼女の心の本当の声』は戦いたくないと叫んでいる。ただそれだけのこと。そしてそれが判るからこそ、彼女は苦しんでいる。

酷いジレンマだ。どうすればいいのかわからないで迷走する日々は本当に辛い。リリアも同じ物を背負っている……。本当に頭が下がる想いだ。あの子はきつと俺よりずっとずっと強い。だからこそ、眩しすぎて時々直視できなくなるけど　。

「嫌われたくないよ……。憎みたくないよ……。傍に居たいよ……。でも、どうしてリリアはあんなに遠いんですか……」

「遠くなんか無い。それはお前があの子を遠ざけているだけだ」

「……判っています、そんなこと。判っているんです、でも……どうしたらいいの……」

「一人で答えを出そうと思うな」

顔を上げるゲルト。まるで全てに見捨てられ迷子になってしまった子犬のような絶る視線に俺は笑って答えてあげる事は出来なかった。でも。

「一人じゃ出せない答えを、リリアと一緒に出せばいい。二人で出せない答えなら、俺と三人で出せばいい。それでも判らないなら、仲間みんなで考えよう。一人で戦うな、ゲルト。俺たちは仲間そうだろう?」

「なか、ま……」

小さな声で呟くゲルトの頭を撫でる。照れくさそうに視線を反らし、それから腕の中でもう一度頬を寄せる。

「仲間……」

ゲルトは幸せそうにそんな言葉を繰り返した。俺はゲルトの言葉に応えるように、同じ二文字を繰り返した。

それはきつと魔法の言葉。一人じゃないと教えてくれる秘密のキー

ワード。だからこそ、俺たちは仲間であり続ける事が出来る。そう思っていた。

『仲間。そんな物、勇者が死んでしまえばただ取り残されるだけだ』

声に振り返る。花畑の中、聖騎士のクロークと甲冑を装備した男が立っている。昨日リリアの実家を訪ねてきた、確か。

「フェンリル……とか言ったか」

『良く覚えていたな。記憶力は悪くないらしい』

成る程、流石は勇者の仲間の生き残りだ。尋常じゃない魔力を感じる。どす黒く、ぐるぐると渦巻く螺旋のような魔力。それは嘗てのゲルトのそれに限りなく近いもの。

フェイスガードの向こう、どんな表情が俺たちを見つめているのか。長身の男は甲冑を鳴らしながら近づいてくる。

『ゲルト・シュヴァイン……単刀直入に言う。オレたちの仲間になれ』

何をいつているんだ、こいつは？ というか、待て……。こんな近づかれるまで俺もゲルトも気づかなかった？ なんなんだこいつは俺たちに向けている気配が。普通じゃない。

咄嗟にゲルトを庇うように構える。が、今は完全に丸腰だ。ゲルトは相変わらず後生大事にフレグランスを持ち歩いているが、魔剣は今使えない。

『そう身構えるな。オレは勇者の。ゲインの仲間だ。少なくとも』

勇者の敵ではない』

「それが一体何の用だよ？ それにさっきからこっちに向けてる殺気をどうにかしろ。身構えない方が無理だ」

『フ。職業病のようなものだ。オレはもう自分の魔力を上手に抑え切れなくてな……。お前に用は無いんだ救世主。そこを退け』

フエンリルの言葉に思わず目を見開いた。救世主？ そんな呼び方で俺を呼べる人間は、ナナシか学園長のアルセリアだけのはず。だが、ナナシはまだここには居ないとはいえ部屋でうさぎの状態が無様に寝転がっているはずだ。ブレイドが気に入ったらしく寝るときに抱いたまま寝ていたから今は恐ろしい事になっているはず。ナナシではない。ではアルセリア？ いや、声は男の物だ。どう考えても違う。

なら何故俺を救世主と呼ぶ？ 何かの偶然の一致か、それともなんにせよ道を空けるわけにはいかない。空けたらまずい。そう身体が感じていた。

『ゲルト、お前がたつた今言っていただろう。世界は変わらなかった……。その通りだ。オレたちの命がけの戦いは全て無意味だった。クイリアダリアを第二のザックブルムに仕立て上げるお膳立てをしただけだ』

「……無、意味……？」

『そうだ。今の世界を見る。聖騎士団に治安を維持させているのはただの侵略の言い訳……。各国には聖騎士団以上の武力を持つ事は許されず、聖騎士団以外に魔物を討伐できる戦力は存在しない。聖騎士団の護衛の力に依存する限り世界はこの国の言うがまま、成す

がまだ。魔王の魔物による恐怖の支配と何が違う』

フェンリルの言う事はどこか正論染みていた。魔王の魔物による世界の侵略と女王の聖騎士による世界の統治　本質は変わらない。力による『脅し』だ。だがソレが今なんだっていうんだ。なんであんたがそんなことを言う？

『オレはこの国を潰す』

男は履き捨てるようにそんな言葉を口にした。

『聖騎士団こそこの世界の悪意の根源だ。あの戦争でオレたちは血を浴び、肉を食らい、獣同然の戦いを強いられた。全ては国の為世界の為……だが結果はどうだ？　英雄と呼ばれても口先だけ。誰も感謝などしてはいない。そうして蔑まれる事になったのは他ならぬお前だろう』

「……………わ、わたしは……………」

「それ以上言うな！　勇者の行いが無意味だったと……………！？　そんなこと、あんたたちこそ一番言っちゃならない事だろうがっ！！」

直後、俺の身体は空中を吹っ飛んでいた。何が起きたのか全く理解出来ないまま全身を痛みが貫き、花畑の上に倒れこむ。

くらくらする頭で顔を上げると、目の前に立つフェンリルが俺の掌を踏み潰した。瞬間、ごきりという奇妙な音が鳴り響き、右の手首が完全に動かなくなつた。

「うぐあっ！？」

『あまりオレを怒らせるな救世主。気は短い方なんだ』

吐き捨てるように呟き、胸を蹴飛ばされる。また嫌な音が鳴り響き、崖の外へと飛ばされそうになる。必死で崖淵に片手で縋りつくと、口から一気に血が溢れてきた。

身体の中のどこかがつぶれてしまっているように感じる。呼吸が出来なくて視界もぼやけている。武器があればもう少し　いや、どっちにしろ同じ事か。あいつは片足しか使っていないんだ。レベルが違いすぎる　。

「ナツルツッ!!」

『お前はこっちだゲルト。いい子だから言う事を聞け』

ゲルトの名前を叫びたいのに声が出なかった。俺は片手に魔力をありったけこめて一気に這い上がる。背後からゲルトを片腕で締め上げるフェンリル目掛けて走り出し、魔力を込めた蹴りを放った。

凄まじい轟音が鳴り響く。しまったと考えるには遅すぎた。岩だろぅがなんだろうが一発でぶっ飛ばすくらいの魔力を込めてしまったのだ。生身の人間なら木っ端微塵……そんな威力の蹴りを男は片手で受け止める。

『大人しくしていろと言ったのが聞こえなかったのか救世主？　それともまだ　痛みが足りないのか？』

片足を掴み上げられ、思い切り大地にたたきつけられる。意識が飛びそうなほどの激痛が何度も繰り返され、いよいよ死ぬんじゃないかと思えてきた。

何でこんなことになってるんだ？　勇者の仲間なんじゃないのか、こいつ……。リリアに、ゲルトは傷付けさせないって誓ったのに…

…。

無様に放り投げられ、今度は木にぶつかって落ちずに助かった。だが身体がもう全く動かない。意地で意識を保っているものの、痛すぎてもうわけがわからなかった。

ゲルトは泣きながら何かを叫んでいる。でも俺にもフェンリルにも届かない。強さの桁が違いすぎる。殺される……本気でそう考えた時だった。

横から飛んで来た何かがフェンリルの顔面を吹っ飛ばした。ゲルトを一瞬で救い出し、俺の前に立って彼女は聖剣を掲げた。

「なつるさん！！　しっかりしてください！　ひ……酷い……っ！
なんて傷……っ」

「り……り、あ……」

「喋らないでください……。ゲルトちゃん、なつるさんを回復してあげて」

「で、でも」

「いいから」

リリアは歯を食いしばり、聖剣を肩に担いで前に出る。その表情は冷め切っていて、怒りで既に感情の振り子が吹っ飛んでいるように見えた。

『リリア・ライトフィールドか……。想像以上に早いな。力もある……』

「五月蠅い黙れ。お前は一体何をしてくれているんだ」

リリアが静かな声で呟く。しかしそれは意識朦朧としている俺にさえはつきり聞こえるほど鋭い声だった。

『お前の大事な大事なお友達の手足を折り、内臓を潰し、命に関わる瀕死の重傷を与えた　と答えれば満足か？』

「……………ああ、そう。もういいよ、おまえ」

リリアが見たことのない構えを取る。直後、信じられないくらいの圧力を帯びた魔力が放出され、リリアの髪が銀色に染め上げられた。

「死んでしまえよ　おまえ」

直後駆け出したリリアの剣が振り下ろされ、耳を劈くような轟音と共に白い魔力が炸裂した……。

夏休みの日(2) (後書き)

くディアノイア劇場く

急展開しか存在しない小説だよ

『どこにいたの?』

フェンリル『オレは……この国を壊す』

夏流「てか、あんた昨日帰ったんじゃないのか?」

ゲルト「まさか一晩この辺ウロウロしてたんですか……? 変質者もいいところですよ……」

夏流「そудだよ仮面つけてるしうさんくさいし……いてててててっ!?!」

フェンリル『オレは気が短いつていってんだろ救世主っ!?!』

『ザ・ビーチサイド』

ブレイド「いやー、海はいいなあニーチャン!」

アクセル「ああ、いいものだ! 女の子の水着ってどうしてこう、やわらかそうなんだろうなあ」

夏流「見てる部分にもよらないか？ 柔らかそうなところだけ見てるからだろ」

ブレイド「やわらかそうなところって？」

アクセル「んー、三箇所くらいあるよな」

夏流「……もういい、少し黙ってくれ」

『ぺたんこ』

ベルヴェール「おーい、ビキニだと可哀想なリリアー」

リリア「ふえっ！？ 可哀想ってなんですか、可哀想って！？ せめて控えめな水着と言ってくださいっ！ー」

ベルヴェール「あーら、ごめんなさい。アタシったらナイスバディすぎてリリアの隣に立つと可哀想だわ！」

リリア「ううー！ がううー！！ わうー！！」

ベルヴェール「きつと男子もさぞかしアタシを見ていることでしょう……って」

リリア「あの人たちも読者もゲルトちゃんしか見てませんよ……うふ、うふふふ……」

ベルヴェール「コラアアア！！ ちょっとは他の水着にも見惚れろおおー！！」

『めっ!』

リリア「死んでしまえよ　お前」

夏流「リリア、めっ!」

リリア「きゃいんっ!?!　な、なんですかー!?!」

夏流「お前キレるとすぐ言葉遣いが荒くなるぞ。女の子なんだからもうちょっとう、気を使いなさい。ゲルトだってそんなにならんぞ」

リリア「いや、髪の毛銀色になったりしてハイパーモード中だから……っていうかそんな血だらけの姿で起き上がってこられても困るんですけど……」

夏流「いや、こういうのはちゃんと躰けないとダメだからな」

リリア「なつるさんはリリアの飼い主か何かなんですかっ!?!」

『リリアの短パン』

アクセル「でも、リリアちゃんは短パンオンリーでいいと思うんだ」

夏流「……まあ聞くだけ聞いてやる。どうしてだ」

アクセル「だって、転ぶ度にパンチラしちゃうじゃないか。それも

チラッ！ 程度じゃなくてこう、グアーツ！ ってパンチラするよ。
もう露出してゐる状態」

夏流「……ん、確かにそれは同意する」

アクセル「チラッ！ じゃないパンチラだったら見えないほうがいいと思うんだよ俺。てか、あの小ぶりなお尻がくつきり見える短パンというのもなかなか悪くないチョイスだと思うんだ」

夏流「俺さ、お前の話は九割くらいスルーするようにしてんだ、はっ！」

『もしもシリーズ、血を色濃く受け継いでいたら』

ヴァルカン「フェイトは超プレイボーイでな、もうとっかえひっかえ家に女を呼び込んでいたもんだ」

夏流「リリアがフェイトに似なくて良かったよ……」

ヴァルカン「はっはっは！ もしリリアがフェイトにそっくりだったら……」

（妄想的な効果音）

リリア「夏流さん……リリア、夏流さんにもっと色々教えてもらいたいな……ね、いいでしょ？ 夏流さんに、鎖で繋いでもらいたいの……」

ヴァルカン「とか」

リリア「ゲルトちゃん、すごく可愛いよ……。そんなに緊張しなくても大丈夫、女の子同士なんだから、何も恥ずかしがらなくてもいいんだから……」

ヴァルカン「というようになるに違いない」

夏流「やめろおおおおっ！！ 勝手にメインヒロインをエロくしないでくれえええ！！ っていうかあんたの孫じゃねえのか!？」

〈ディアノイア劇場番外編〉

ディアノイアが出来るまで

その1：仕事中とかご飯を食べながらその日の更新分を何となく考えます。

その2：執筆します。二時間〜三時間ほど執筆&手直します。

その3：暇だったらディアノイア劇場を十分くらいで書きます。

その4：感想を待ちます。

そんな無計画小説ももうそろそろ三十部です。

二部はリリアだけじゃなくてゲルトや夏流も成長させたいと思う今日この頃。

それにしても読者数SF書いてた時の五倍くらいっていうのはどういふことなんだろう。ファンタジーの力ですか。そうですか。

でもそろそろSFとかロボット書きたくなってきました。さて、どう

したものか……。

夏休みの日(3)

「フェイトの死の真相は、今となつては全て闇の中だ」

古い洋館の一室。錬金術師は語る。

「彼は聖なる者ではなかった。我々もまた然り……。故に我らの行いに正義は無く、この世の中に平穏も無き。その手を血で汚して得られる物など、所詮は限られている。そこに夢や願望を持ち込むのは人間の勝手な理屈だろう？」

「この世界に生きる限り虚幻とは目を反らさずには居られまい。それは拙者も同じ事……君はどうだ？ 君は君の幻想を超えられるのか？」

草原の上、太刀を携え剣士は語る。

「我々の行いは所詮輪廻転生、神の掌の上だ。森羅万象また然り。では我らの行い一つにどんな意味がある？」

「師匠が結局何を求めていたのか、だつて？」

学園の教師、炎の戦士は語る。

「さあな。それを考えるのも、多分俺たちに出された宿題なんだろうぜ」

「では、貴方は世界を壊して満足ですか？」

大聖堂騎士、巨大な鎧の向こうで彼女は語る。

「貴方の望む答えは、そこにあるのですか？」

夏休みの日（3）

勇者の放った剣の輝きは大地を吹き飛ばし木々を吹き飛ばし美しい花畑を吹き飛ばし、一瞬で炎で包み込む。熱に浮かされるような幻想的な景色の中、勇者は聖剣を握り締め鋭い眼差しで騎士を見た。フェンリルはリリアの視線の彼方、肩に手を当て佇んでいた。その手の内側からは血が滲み、折れた甲冑の隙間から痛々しい傷口が露出している。

『……………聖剣の力か』

傷口を癒す回復魔法。フェンリルは腰に携えていたロングソードを抜く。リリアはそれを待たずに駆け出し、銀色の光を帯びた剣を騎士に叩き付けた。

轟音が鳴り響く。突風が吹き荒れる中心地で二人は剣を交えていた。リリアは空中で剣を振り回しながら回転し、体重ごと剣で斬りかかるような猛々しい動きでフェンリルへと怒涛の猛攻を仕掛ける。

その一撃一撃に込められた圧力は半端ではない。以前リリアがゲルトとの決闘の時に見せた力の倍。いや、それ以上の力が込められていた。燃え盛るような魔力の流れを惜しむことなく放出し、衝突する度に閃光する剣戟。しかしフェンリルは片手でそれをいなしていた。

『火力だけは大したものだが……………技術が伴わない』

剣をいなし、無防備になったリリアの腹部を蹴り飛ばす。

『意思が伴わない』

よろめくりリアの顔面を鷲掴みにし、大地に叩き付ける。

『決意が伴わない』

頭部から噴出した血がリリアの顔を伝う。空中に放り投げた小柄な身体を前に、フェンリルは魔力を込めた蹴りを放つ。

『何より』

圧倒的に実力が伴わない』

「うあつ!？」

深々と靴がリリアの胸に突き刺さった刹那、炸裂した力がリリアの身体を遥か彼方へと吹き飛ばす。

空中を旋回し、崖から落ちそうになるリリアをゲルトが抱きとめる。衝撃を殺しきれず二人してもみくちゃになりながら地面を転がり、ぎりぎりのところでかろうじて停止する事が出来た。

血を吐くりリアの髪が銀色から栗毛色に戻り、苦しそうに呼吸を乱す。リリアがあそこまでの力を発揮した事も驚きだったが、何よりもゲルトは目の前の仮面の男が恐ろしかった。

禍々しい、全てを憎しみ食らうような魔力。それはあのリリアでさえ一瞬で撃退し、たった片手に構えた一振りの剣で 魔剣でも聖剣でもない、どこにでも売って居そうなただの剣で、しかもそれさえ使わずに格闘だけでリリアを下したのだ。

力のレベルが違いすぎる。しかし何よりも恐ろしかったのは、その男が放つ殺意にもた魔力に、覚えがあったから。

『　ちっ。安物の剣では持たないか』

フェンリルの手にしていた剣に亀裂が走り、バキンと音を立てて砕け散る。剣を投げ捨て、フェンリルが一步前進する。ただそれだけで怖くて仕方が無くて逃げ出したくなった。

リリアだけは殺させない　決意にも似た心が自然とリリアをぎゅっと抱きしめた。気を失っているリリアに回復魔法をかけるまで気は回らず、しかし動転した状態でもしつかりとその手は離さない。一步一步、騎士はゆつくりと近づいてくる。伸ばした指先が巨大な悪意のように見える。捕まったら殺される　否、それよりももっと、恐ろしい事になる　。

「う……っ！　うっつ！　うわあああああっ！！」

魔剣を手にゲルトは駆け出した。リリアだけは殺させない。リリアだけは傷付けさせない。リリアだけは絶対に守りたい　。願いを込めて振り下ろした剣、しかしそれはなんの防御動作も取らないフェンリルの肩に当たって情けない音を立てて沈黙した。

刃先は一ミリだってフェンリルを傷付ける事はない。甲冑さえ砕けず、ただフェンリルが常時纏っている魔力の障壁に当たってそれで終わりだった。魔剣はうんともすんとも答えない。残ったのはただどうにもならない状況と、激しい自分への絶望だけだった。

『魔剣が使えないのか』

フェンリルは魔剣の刃を握り締める。ゲルトの腕を蹴り飛ばし、魔剣を自らの手で構えた。瞬間、フレグランスに魔力が灯り激しく魔力を渦巻かせ、大気を焼くような闇の魔力が迸った。

契約者でもないはずのフェンリルが手にした魔剣　しかしそれは

ゲルトの知る魔剣よりもずっとずっと激しく昂ぶっている。その事実にはゲルトは涙を流しながらただ震える事しか出来なかった。

「ちっ。下らんガキめ……死んでゲインに詫びる」

魔剣が振り上げられる。ゲルトが悔しげに唇を噛み締めながら目を閉じたその瞬間だった。遙か彼方より飛来した矢が魔剣を弾き、凍てつかせる。

フェンリルは直ぐに継続されている矢による攻撃に気づき、片手で矢を弾き飛ばす。しかし魔剣を大地ごと氷結させる弓矢の攻撃に忌々しげに舌を鳴らした。

「ゲルトオオオオオ ツ!!」

ゲルトの名を叫びながら駆けて来るのはアクセルだった。その後方から断続的に矢を放ち牽制するベルヴェール。先行するアクセルの後方、走るブレイドの姿があった。

氷の壁がゲルトとフェンリルを分断する。片手を翳し、矢を魔力障壁で完全消滅させるフェンリルに、アクセルが斬りかかる。

二対の刃が交互でフェンリルに襲い掛かる。風を帯びた鋭い剣筋をフェンリルは魔剣で受け続ける。

『ほう。ガキにも腕の立つのが居るようだな』

「挟撃するぞニーチャン！ うおおおおっ!!」

切り結ぶアクセルの後方からブレイドが大剣で斬りかかる。その剣を片手で受け止めつつ、フェンリルはアクセルを相手にする。その場から一步も動かず、アクセルの素早い攻撃をすべて片手で弾いていた。

「何やってんのよアクセルッ！！ 片手で遊ばれてるわよっ！！」

「知るか！ こいつ腕が尋常じゃねーんだよっ！！」

大剣ごとブレイドを持ち上げ、それをアクセルに叩き付ける。片手で一瞬で詠唱を終えると、フェンリルの掌には黒い球体が生まれていた。

放たれる闇の弾丸は大地を根こそぎ削りながら全ての物を吸い込み続ける重力球。よるめく戦士二人の前に出たベルヴェールが詠唱を行い、魔術障壁を発生させる。

一枚張った障壁が一瞬で崩れ、もう一度シールドを張りなおす。それもまた時間が過ぎて消滅し、三枚目のシールドを張った時、その壁を破ってフェンリルの蹴りがベルヴェールの顔を捉えていた。

悲鳴と共に吹き飛ぶ少女の背後で守られていた二人に魔剣が迫る。アクセルが剣を十字に構えて魔剣を受けた瞬間、サーベルは二つとも砕け散り二人は吹き飛ばされた。

『こんなものか……今の勇者の仲間は』
パーティー

落胆した声でそんな事を呟き、フェンリルはゲルトに視線を向ける。ゲルトへと歩み寄ろうとその足が動き出した瞬間、電撃がフェンリルに襲い掛かった。

魔剣でそれを相殺するフェンリルの正面、いつの間にか近づいていた夏流の拳が迫る。何の武装もしないただの拳に魔力を込め、フェンリルの鎧に叩き込んだ。

吹き飛ばされ、しかし空中で体勢を立て直し見事着地するフェンリル。回復しきらない血だらけの姿で夏流はゲルトを守ろうと両手を広げた。

『そんなに死にたいか、救世主』

「言ってる……。これ以上もう、一步だってゲルトには近づけさせねえ……っ！」

『力の伴わない言葉はただの虚勢だ。命をもう少し大事にするように生きるべきだったな』

ゲルトを庇い、その身体を抱きしめて背を向ける夏流。しかしフェンリルの繰り出したフレグランスは二人を切り裂く事は無く、制止していた。

『……………いや、或いはお前が……………』

フェンリルは小さな言葉で何かを呟いた。しかしそれは夏流にもゲルトにも聞こえていなかった。フェンリルは剣を引き、鎧を鳴らし、背を向ける。

『その命、次の邂逅まで預ける。お前はお前のやり方で、運命に抗って見せる』

フェンリルは去っていく。夏流はそれを見届け、ゲルトを抱きしめたまま気を失った。ただ一人だけ意識を保ったままその場に残されたゲルトは血だらけの夏流の倒れた姿を見つめ、ただ呆然と立ち尽くす。

「フレグランスが……………」

フェンリルが手にしたまま、この場にもうその魔剣の姿はない。

「フレグランスが……っ」

嘆きの叫びを聞き届ける人間も、この場には最早存在しなかった。

「目が覚めた……？」

意識が戻ると、近くにベルヴェールの顔があった。その頬にはガーゼが当てられていて、女の子だというのにかわいそうに顔は酷く晴れ上がっていた。

恐らく散々泣いたのだろう。目を真っ赤にして萎れた様子のベルヴェールは身体を起こした俺を見て黙り込んでいた。自分がどこに居るのかを確認し、一先ずリリアの実家まで生きて帰る事が出来た事を知る。

俺の身体にはいたるところに包帯が巻かれており、上半身は裸になっていた。それを認識した瞬間現金に全身に痛みが走り、苦痛に齒軋りしながらゆっくりとベッドに倒れこむ。

「無理しないほうがいいわよ。アンタ、一番重傷だったんだから……。ほんと、何されたらあんなボロボロになんのよ……」

「……ははは。笑うしかないな……。ベルヴェールも、無事でよかった……。いや、無事じゃないのか。ごめん」

「……ふ、ふん。まあ別にこんなの痛くも痒くもないけどね！」

強がりながら涙を拭うベルヴェールの様子に苦笑する。それよりも今は状況の確認が優先だった。

「アクセルとブレイドの怪我は大した事ないわよ。本当にずたばろ

にやられたのはあんたくらいのもんね……。リリアは自分で自分に回復魔法かけてあつという間に元気になっちゃったし。あの子何者なの……？ あの回復速度、普通じゃないわよ」

「さあな……。ゲルトは……？ ゲルトはどうしてる？」

ベルヴェールは気まずそうな様子で瞳を閉じ、首を横に振った。まさか、守りきれなかったのか。思わず飛び起きると全身に痛みが走り、慌ててベルヴェールが身体を支えてくれた。

「だから、無理しない！ あの子自身は無事よ！ ただ……」

ベルヴェールの話を聞き、俺は上着だけ羽織って部屋を飛び出した。隣の部屋に籠りきりになっているというゲルトに声をかけドアをノックする。しかし当然返事はなかった。きっと今彼女は勇者の資格を取り上げられ、どうしようもないほどの悲しみに吞まれているはずだから。

何度も彼女の名前を呼んだ。でも答えてくれない。結局守ってやれなかった。俺はまた、ドアをノックするだけなのか。情けない自分自身に苛立ち、拳を握り締める。

「だーかーらーっ！！ 無理すんなって言ってるのがわかんないわけアンタ！？ 丸一日寝てたんだから、急に動かないでよ！！」

「ま、丸一日……？ くそ、他のみんなが倒れてないわけだ。俺はバカか……っ」

「だから、どうしてアンタそうなのよ！？ 皆アンタの心配してたの判んないの！？ 少しは……大人しくしててよ……ばか」

悲しげに呟いたベルヴェールの言葉に冷静さを取り戻し、気まずい空気が流れる。ゲルトは応えてくれない。だが無事なら一先ずはそれでいい。他の皆の事のほうが気になる。

二人で一階に下りると、リビングにはアクセルとブレイドが席に就いていた。流石に二階であれだけ騒いだのだから俺が起きた事は知っていたのか、何とも言えない申し訳なさそうな表情で手を挙げて迎えてくれた。

「二人とも無事か……良かった」

「それお前が言うかね……？　しかしそつちも死にはしなかったみたいで良かったよ」

「ニーチャン、ごめん……。おいらたち、何も出来なかった……」

二人の申し訳無さそうな態度を見て俺も悲しくなった。謝りたいのはこつちのほうだ。俺は二人の一番近くにいたのに何もしてやれなかった。何一つ……。

「リリアは……？」

「リリアちゃんは朝早くにどこかに出かけたまま戻ってきてない。でも、少し一人にしてあげたほうがいいと思って放って置いてる」

「そつか……。そうなんだな……」

椅子に座り、俺は深々と溜息を漏らした。四人揃って暗い表情を浮かべ、そして俺は思った事を素直に口にした。

「俺たち……負けたのか」

その言葉が決定的に俺たちの状況を表していた。俺たちは敗北した。たった一人の騎士相手に何も出来なかった。ただ無様にやられて、ただ見逃してもらっただけ……。ヘタをすれば全員死んでいた。殺されていた。そんなのつてあるのか？

あんな化物染みたやつが勇者の仲間……？　じゃあフェイトやゲインはどのくらい強かったんだよ。いや、そうじゃない。そうじゃないんだ。どうして勇者の仲間が俺たちに剣を向ける？　どうしてそれと戦わなきゃならない？　わからない……わけがわからない。俺は椅子を吹っ飛ばして立ち上がった。じっとしていられなかった。みんなが俺を呼び止めるのも振り切つて家を飛び出し、海に沈む夕日を見て今が夕暮れなのだと初めて気づく。

「リリア……っ」

砂浜を駆け回り、彼女の姿を探した。丘を駆け上がり、草原を走り、フェイトの墓の前へ。そこにも居ないリリアの姿に踵を返し、痛む傷に耐えながらリリアを探した。

リリアは昨日の戦いの痕の前で膝を抱えていた。夕日を浴びながら背を向けるリリアに駆け寄り、俺は背後で呼吸を乱しながらリリアを見つめる。

「リリア……！」

振り返ったリリアは笑っていた。いつもどおりのリリアだった。それに安心している自分とそうじゃないんだって叫んでいる自分、二つの気持ちのごっちゃになる。

リリアは照れくさそうに言葉を無くして胸の前で手を組んでいた。俺はそれを見て、笑い返すべきだったのか。今までの俺ならそうしたかもしれない。でも今の俺はそんな風に問題を先送りにはしたく

なかった。

「泣いていいんだ、リリア」

顔を上げるリリア。夕日を浴びながら、瞳の中に朱色を溶け込ませながら、彼女は俺を見ていた。

近づいてその両肩に手を触れる。震えるその身体を掴み、じっと見つめる。俺は首を横に振り、彼女は身体を震わせながら、笑って泣いていた。

笑いながらただ涙を流し、黙って俺の前に立つ。その身体を強く抱きしめると、リリアは堪えていた物を一気に破綻させるかのように泣きじゃくった。

しばらくの間、俺たちはそうして抱き合っていた。夕焼けを背にリリアは大地に膝を着き、彼女が吹き飛ばした大地を眺めながら語る。

「どうして……お父さんの仲間と戦う事になるんでしょうか」

「……」

「どうして……どうしてなんでしょね。笑っちゃうくらい、弱くて……。リリア、思ってたんですよ。こんなこと……」

悔しそうに拳を握り締め、それを大地に叩き付ける。

「弱いて事が、こんなにも悔しいなんて……ッ！　全然、思ってたんですようううっ！！」

「リリア……」

「弱いから、守れない！　弱いから、何もっ！！　何も……何も、

何もっ！！悔しいよおおっ！！勝ちたいよおおっ！！負けたくない！負けたくない！負けたくない、負けたくないいいっ！！」

何度も何度も拳を叩きつけ、血の滲むそれを気にもせず、リリアは小さな背中を震わせていた。俺はその傍に立ち、リリアの嘆きを聞いてあげることしか出来ない。

零れ落ちる大粒の涙が大地に吸い込まれて染みになって行く。リリアの血もまた同じ。傷跡はじくりと痛み、昨日の痛みを俺に思いださせる。でも何よりも痛いのは、仲間を守れずに無様に倒される自分自身なんだ。

「強くなりたいたいよおおっ！！強くなりたいたい！強く、もっともつと強くなりたいたい！！助けてよなつるさん……ねえ、どうしてこんなにリリアは弱いんですか！？どうして！どうしてっ！」

「お前だけが悪かったわけじゃない……」

「ッ！気休め言わないで下さいっ！！ゲルトちゃんはリリアが守ってあげなきゃいけないのに！あの子はいつも一人ぼっちだから、リリアが救ってあげなきゃいけないのに！！リリアのせいじゃない……！？何言ってるんですか師匠！！」

俺の胸倉に掴みかかり、リリアは俺を激しく揺さぶる。その表情は見るに耐えないほどボロボロで、俺は思わずきつく目を瞑った。

「師匠は、いいですよね……。師匠は、強いから……。師匠はそうやって、いつも！ねえ、そうですね！？師匠はいつも他人事なんだ！師匠はいつも心が痛まないんだっ！！だからそうやって気休めなんか言えるんでしょう！？ねえ、何か答えてよっ！！」

「俺は……」

「どうしてそうじゃないって言うてくれないんですか！ どうしてお前が弱いからだって殴ってくれないんですか！？ ねえ、叱つてよ！ 冷たい言葉でリリアも罵つてよ！！ どうして優しくしたりするんですか！？ どうして……！」

「違う……」

「そうやって師匠はいつも、リリアに触れてくれない……。いつもそうやって遠ざかる……。おかしいですか？ 私がこうやってバカみたいにもがいている姿を見て、笑ってるんでしょう……？」

何も言えないまま、ただリリアは笑いながら泣いていた。夕日がその涙を輝かせ、気づけば俺も泣いていた。

零れ落ちる涙を止める術は何も思いつかなかった。ただリリアは俺の涙を見て力なく手を放し、それから両手をぶらりと垂れ下げて頭を俺の胸に押し当てて黙り込む。

「強く、ないんですよ……。覚悟しても決意しても簡単に碎けちゃう……。大事な物ばかり崩れてしまつて、壊れた硝子を一生懸命集めてるのに、両手ばかり切り裂くんです。どうしたら痛みと一緒に歩けますか……？ ねえ、なつるさん……。教えてよ」

「ごめんな リリア」

俺は今彼女に何もしてやれない。ゲルトもリリアも同じなんだ。何かを堪えて涙を堪えて必死で自分の勇者という立場を演じている。世界が生み出したダンスステージで滑稽に踊り続ける系で吊るされ

た人形のように。ただ顔に笑顔を貼り付けて嘆く事も忘れて、必死に強くなりたいと願っている。

そんなこの子にして上げられる事は何もなくて、俺はただ自分の無力を痛感させられる。守れなくて、届かなくて……。

「俺……もつともつと強くなるから……。お前だけ戦わせたりしないで済むように、強くなる……！ お前に信じてもらえるようになるからっ……！」

リリアは目に一杯の涙を溜めながら俺の言葉を聞いていた。俺はもうこれ以上何も出来ない。ただ今こうやって決意する事くらいしか出来る事はないんだ。

「だから……。だから、お願いだから一人にしないでくれ。一人にならないでくれ……。俺を置いて行かないで……」

両足に力が入らなくてその場に崩れ落ちる。どうしようもないくらいリリアが遠ざかっていくのを感じてそれが怖くて仕方がなかった。リリアは膝を着く俺の頭を抱きしめて泣いていた。俺は彼女の小さな身体に縋るようにして泣いた。

自分の力不足に。この世界にある事に。リリアやゲルトが抱えている絶望に。どうにもならなかった昨日に。

ただ今は何も考えられないくらい悲しくて、ただひたすらに泣いていた。そうしているうちに日が暮れて、星が出て。月を見上げながら二人して倒れ込んでただ時間が過ぎていくのを感じていた。

花畑に倒れこみ、リリアと指を絡めたまま月を見上げる。風車の回る音と漣の音、静かな夜の空気が荒れた心を癒して行く。枯れ果てる暗い涙を流した後に残ったのは、ぽっかりとした喪失感と少しだけ晴れた空だった。

「師匠、あの……ごめんなさい」

「ん？」

「リリアの事……嫌いになりましたよね」

「そんな事はないさ。お前の方こそ俺が実は情け無い奴だと知って幻滅したろ？」

「そ、そんなことはないですっ！ えっと、違っんです……多分、その……師匠はそれでいいんだと思うんです」

「何がいいんだよ」

「その……そういう弱さも師匠の一部で……だからやっと、心に触れられたんですね？」

「……………そうなのかなあ。わかんないや」

深く息をついて目を瞑る。リリアの指先の感覚と風の音だけが世界の全てになる。どうすれば強くなれるんだろう。ただ戦う力だけじゃない。心もそうして強くなれるのだろうか。

「リリア、思ったのですよ。今のリリアがあるのは、師匠のお陰なんです。友達も仲間も、ゲルトちゃんとの事も師匠がいたから乗り越えられた……。だからきつとリリアは、師匠の事が好きなのですよ」

瞳を開くとリリアは涙を流しながら隣で微笑んでいた。身体を起こしてリリアを抱き起こし、微笑みで応える。

「なんだかなつるさんは、リリアのお兄ちゃんみたいです」

「え？」

途端、ハンマーで後頭部をぶつ叩かれたような衝撃が襲いかかった。頭の中が一瞬真っ白になり、身体が震えたのが自分でも判った。喉が渴いた。何か飲みたい。生唾を飲み込みながら視線を反らす。リリアの言った言葉を客観的に判断出来なかった。

「う？　どうかしたんですか？」

「いや、なんでも、ない……」

「えへへ。おにーちゃんって呼んでもいいですか？」

「それはやめてくれ」

自分でも驚くほどの即答、しかも冷え切った声だった。額に手を当てながら肩を振るわせる俺を見て彼女は驚いていた。そりゃそうだろう。自分でもビックリだ。

ああ、意識したくなかったんだ、俺は。きっと君が、彼女にそっくりだってことに。だから、気づきたくなくて……目を反らしたくて。そうか。逃げていたのは俺の方だったんだ。

「……なつるさん、時々そうやってすごく寂しそうな顔をします」

「え？」

「そういう時、『ああ、この人は本当はすごく独りなんだろうなあ』

って思っんです。何かしてあげたいんですよ、リリアだって。守られているだけで居たいわけじゃない」

「リリア……」

「い、いいんです！ 言いたくないことは、言わなくても……これから気が変わるのを、気長に、待ちます……！ だから、せめてありのままの貴方で居てください。ありのままの言葉でリリアに触れてほしいんです。だめ……ですか？」

怯えるような、哀願するような瞳。俺はきつと今までにないくらい優しく笑う事が出来たと思う。

「取り戻そう。フレグランスを」

「はい　！」

二人して立ち上がる。月明かりの下、俺たちは結んだ手を暫く放したくはなかった。

そう、俺たちは仲間なんだ。同じ目的、同じ想いを共有し、共に歩んで行く。今はそれでいいよね？ 冬香。

夏休みの日(3) (後書き)

↓ディアノイア劇場↓

犬は強かった編

『妹属性十二連』

リリア「なつるさんのこと、おにーちゃんって呼んでいいですか？」

夏流「……………まあはつきり言っておくと、俺は妹萌えなんだ」

リリア「ぶっちゃけましたねー……。まあ、明らかにシスコンですもんね」

ゲルト「じゃあわたしもお兄ちゃんと呼びましょう」

ベルヴェール「じゃあお兄様って呼ぶわ」

アイオーン「じゃあ兄君とでも呼ぼうか」

メリーベル「えーと……………あと何があったっけ？」

夏流「数が多ければいいってもんじゃないだろうっていうかアイオーンは年上だろ」

『何小説なの？』

アクセル「しかしこの小説はどの世代狙ってるんだ？」

夏流「……まあ、ラノベだろ多分。狙いは……十代後半から、二十代前半くらいかな」

アクセル「ちなみに何小説なんだ？ バトル？ ラブコメ？」

夏流「え……？ う、うーん……バトコメ」

『主人公の系譜』

アクセル「えー、第一回……。この作者の主人公は何故みんなどっかへタレてるのか、会議ー」

夏流「待て待て待て待て待てっ！！ 何やってんだ！」

アクセル「黙れ策士っ！！」

夏流「……俺が何をしたっていうんだ……」

アクセル「なんか全体的にシスコン率高い気がするんだよね。他の主人公と被ってるんじゃないかっていうのはいつも作者の悩みらしいぞ策士」

夏流「そんな事を俺に言われても……。俺は今までの主人公に比べれば遥かに常識人だと思うんだが……」

アクセル「そんなこといつてー。実はお姉さん殺してたりするんだろー。累計二回あったんだから、お前もそのタイプだろー」

夏流「そついう、ディアノイア以外読んでない読者に判らないネタはどうなんだ」

『悪夢』

夏流「今はこの繋いだ指先を離したくはなかった」

アクセル「させるかーっ！！何をリリアちゃんとイチャイチャしてやがる夏流っ！！くらいな！！」

夏流「ごほっ！！」

アクセル「お前ばかり女の子と仲良くなろうなんてそんなの神様が許そうが俺がゆるさねえ！！ていうか犬はちゃんと夏流を再起不能にしていきやがれええええっ！！」

（なんか妄想的な効果音）

夏流「はっ……夢か……」

ゲルト「いよいよ夢にまで出てくるようになったんですか？」

集う力の日（１）

「お前ら、夏休みで遊びに来たんじゃなかったのか？」

爺さんのいう事は尤もだ。しかし俺たちはもうそんな気分では無くなっていた。

全身汗だけで飲み干す水は喉を潤し身体に染み込んで行く。体中が欲する水分を吸収し、俺は深々と溜息を漏らした。

俺の隣では同じように疲れた様子でアクセルが砂浜に剣を突き刺して休んでいる。俺とリリアはあの日手を取り合った瞬間からもっと強くなることを誓い合った。そうして始めた自主トレーニングは気づけば仲間みんなで行う合同訓練になっていた。

つい先程まで俺もアクセルと手合わせをしていた。全力で向き合う瞬間は一瞬一瞬俺の神経を研ぎ澄まし力を与えてくれる。それでもずっと足りなくて、今はまだもどかしいままだけれど。でも強くなるこの瞬間が嬉しくもある。

爺さんは相変わらずアロハな格好で俺たちを見守っている。砂浜を走るリリアが放つ銀色の矢の魔法が海を叩き割り、盛大に上がる水飛沫の中彼女は凜々しい表情で輝いていた。

リリアの努力具合は普通ではない。休みなくよどみなく、一瞬一瞬で強くなっていく。止まっていた時間が流れ出すように、彼女を縛り付ける不自由さはきつと身体を縛り続ける事は出来ず、見る見る輝きを取り戻して行く。

綺麗な宝石に積もっていた埃を一つ一つ丁寧に拭い去り、何かを思い出すようにリリアは目を開く。輝きを映し出すその横顔が妙に大人っぽく見えて少しだけドキリとして、俺は黙ってタオルで顔を拭いた。

「しかし、見違えたな。うちの孫はあんなに勇者修行に熱心だった

かねえ。お前が何かしたのか、んん？」

「お、俺は何もしてないですよ……いてて」

背後からバシバシ俺の背中をぶつ叩く爺さん。一体なんだっていうんだ。もう少し加減しろよ、骨折れるって。

フェンリルと戦った事を聞き、爺さんは何とも言えない表情を浮かべた。孫娘をボコボコにされたにしては随分と落ち着いていて、その様子は『やりやがった』というよりは『ああ、またか』といった様子である。

彼とフェンリルとの関係はわからないが、少なくとも爺さんは俺たちの味方でもフェンリルの味方でもないらしい。あの男が何をしようとしているのかは教えてくれなかったし、その素振りも見せない。ただ難しそうな顔で腕を組み黙り込むだけだ。

「ま、あいつは色々あるんだ。フェイトの仲間みんなめんどくせえんだよ」

めんどくせえなんて一言で片付けられても困るが、まあ実際そうなのだろう。勇者の戦いというのは、ただ悪を倒せばそれでいいなんて単純なものではないのだから。

「まあフェンリルは勇者のパーティーじゃあそれほど腕の立つ男じゃなかったからな。あいつはなんていうか……そう、魔法剣士でな。あいつの真骨頂はただの白兵戦闘じゃねえ。まともな剣士としては鶴来のほうが圧倒的に上だからな」

「鶴来って……あの巫女装束の剣士ですか？」

「何故カリリアと知り合いだったようだが、まあ偶然だろう。あい

つもまた面倒くさくてな。まあフェンリル程じゃあないが……あいつはホラ、金さえ貰えばなんでもするからな」

勇者のパーティーって一体どんな連中だったんだろう。考えれば考えるほどわからなくなる。

兎に角今は強くなつてゲルトの魔剣を取り返さなきゃならない。今はまだ全然追いつけないけど、絶対に食らい着いてみせる。俺だつて男だ、やられたままで気分が良い訳がない。絶対にアイツの顔面に拳を一発ぶち込んでやる。

拳を握り締め、じつと見つめる。リリアはどんどん強くなる。その背中においていかれないように、俺も精進しなければ。

「しーしょーっ!」

顔を上げるとリリアが両手をブンブン振っていた。そうして当たり前のように、困った表情で首を傾げながら叫んだ。

「あの髪の毛が銀色になるやつ、どうやって出すんですかーっ!」

そんなの俺が知りたいよ。言葉は飲み込んで溜息だけが口から漏れた。

集う力の日(1)

「んあああああつ!」

ぷるぷると震えながら全身に力を込めるリリア。その正面に立ち、俺は黙ってその様子を眺めていた。

アクセルにぶん投げられたお陰で全身が痛む。地面が砂だったからよかった物の、アクセルは全く手加減しないんだな。

というか、あいつの強さは俺が思っている以上なのかもしれない。体術に関しては明らかに俺の数段上を行っている。よくよく思い返すとフェンリルとマトモに切り結んだのはアクセルだけだったか。今は一先ず昼休みということなんで砂浜でバーベキューをしている。爺さんの料理はどれも美味しいのでみんなせつせと平らげている中、リリアだけが串を片手にぶるぶるしていた。

「はあはあはあ……っ！ お、おかしいですねー……？ なんて銀色にならないんですか？ ねえねえ師匠、ねえ師匠。食べてないで見てくださいよー」

「そんな事を言われてもな……っっていうかお前あの時意識あったのか？」

「う？ 意識ありましたよ？ なんか、師匠が倒れてるの見た瞬間頭に血が上って、魔力がどっかーんって！ それでね、全然リリアが知らないような術式とか戦い方がバアアア！ って頭の中に流れ込んできて、ドーン！ って……！」

全然わからん。お前の表現力は小学生以下か。

「とにかく、あの時はまるで別人みたいに強くなれた気がしたんですけど……。あの力を使いこなせるようになれば、あのにつくき犬野郎をぶちのめしてやれる確率があがるんですけど……。って、だから話を聞いてくーだーさーいーっ！ ていうか、なんでみんなリリアの分とっとかないんですか！？ 悪魔ーっ……！」

俺の手から串を奪い去り、一気に肉を口の中に収めるリリア。俺が

独りで奪われた串が空になるのを眺めていると、リリアは口元にソー스をつけながら俺を見て微笑んだ。

「あむあむ……お、おいしいですー！ 師匠、おかわりです！」

「……その前に俺に何かいう事はないのか？ あ？」

立ち上がってリリアの頭を掴んで横に激しく揺さぶる。人の飯を横取りしておいて何がおかわりだ。っていうか異様に食うの早いなお前。

ああ、そういえばこいつ物凄い食べるんだった。焚き火にリリアが走って行き、大量の串を抱えて戻ってくる。口に肉を咥えながらベルヴェールとブレイドに追われているところを見ると、どうやら他の人の分をかつさらったらしい。

悪戯っぽい笑顔を浮かべながらはしゃぐリリアは完全に気持ちを立て直したように見えた。俺はまだこうして気持ちを引き摺ったままだというのに、リリアのあの前向きさには頭が下がる。

それにしてもよく食う女の子だ。あんなに小さい身体にどうしてあれだけの量が入るのか。お行儀の悪い孫娘の様子を流石にまずいと思ったのか、爺さんが果物を片手でリリアに放り投げ、後頭部に直撃して割れた紅い果実と共にリリアは砂浜にぶっ倒れた。

しばらくするとリリアは果汁だらけになってとぼとぼ帰って来た。それから俺の隣に座るとにこにこしながら俺の顔を覗き込む。

「どうした？」

「えへへー。師匠とやっとなんか仲良くなれた気がして、ちょっと嬉しいのですよ」

そんなにあからさまに喜ばれると急に気恥ずかしくなってくる。視

線を反らして肉を齧ると、視線を反らしたその先、至近距離にアクセルの顔があつて俺は思わず肉を吹いた。

「ち、ちけえっ！？　なんだアクセル、どーしたっ！？」

「ナツル……いーなあ。俺もリリアちゃんとイチャイチャしたいなー……」

「だったらこのハラペコ勇者のお守りでもしててくれ……。落ち着いてメシも食えねえ」

「そうか！　さあリリアちゃん、俺の手からならいくらでもごはんをかつさらっていいんだぞーっ！　おいでーおいでーっ！！」

しかしリリアはアクセルの手にしている肉をじーっと見つめ、涎を垂らしながら俺に振り返る。俺が小首を傾げると、リリアはそそくさと俺の後ろに隠れてしまった。

「ガアアアアアッデムツ！？　俺の何が気に入らないんだ、リリアちゃんああああん！！　うおおおおおおおおあああああああっ！！！」

アクセルは頭を抱えて雄叫びを上げ、そのまま砂浜を走り去って言った。海に入って泳いで行くのを見送り、独りトライアスロンでもするつもりなのだろうか？　修行熱心なやつだ、とか考えていた。リリアは俺の背後にしがみ付き、にこにこしながら擦り寄ってくる。この感覚、どつかで覚えがある……。ああ、そうだ。近所の野良犬にエサを上げて懷かれてしまった時によく似ている……。

懐くリリアの頭を片手でグリグリ撫でながら肉を齧っていると、爺さんが近づいてきた。それから皿に盛られた串を俺に手渡し、腕を

組んで語る。

「そら、部屋に引きこもってるゲインの娘にくれてやってこい。あつちの勇者の世話もお前の仕事だろうが」

「……いつの間に俺の仕事は勇者の世話になったんですか？」

「あん？　なんだ、違ったのか？　お前ここに来た時からそんな感じの雰囲気だったけど……違ったんなら別の奴に……」

「い、いえ！　わかった、俺が持つて行きます。リリアも来るだろう？」

何となくゲルトがああなっているのは自分のせいのような気がして他の奴に任せる気にはなれなかった。勿論頷いたリリアと共に皿を受け取り、家の中に引き返す事に。

二階への階段を上り、扉の前に立つ。ゲルトはあれからずっと閉じこもっていて何も口にしていない。それくらいに落ち込んでいるのは当然とも言えるが、だからといってほうっておくわけにもいかない。

「ゲルト、開けてくれ。昼食を持つてきたんだ。何か食べないと持たないぞ」

返事はない。ドアを軽くノックしてみたが、やはり同じ。ふと振り返るとリリアが皿に向かって団扇で扇いでいたので、何をしているのか問いただすように視線を向けると、

「あ、おいしいにおいで出て来るかと思って……」

「お前じゃないんだから出て来るわけないだろ」

「そうですか……。ゲルトちゃん、おいしいよー？ ほらほら、もぐもぐ……。お、おいしいっ！」

「何でお前が食ってんだよっ！ アホかっ！！」

リリアの頭を小突く。漫才のようなやり取りをしていると何故か扉が開き、ゲルトが顔を覗かせた。俺たちがぎょつとしたのは多分無理の無い事だ。ゲルトは一睡もしていないのか、目の下はクマだらけ。泣きはらしたのか目は真っ赤で、髪の毛はボサボサ。本当にボロボロの状態で部屋から出てきたのである。

啞然とする俺とリリアの目の前で串を手に取り肉を齧る。久しぶりに口にする食事が余程美味しかったのか、あっという間にペロリと一本平らげてゲルトは溜息を漏らした。

「ご心配をおかけしました……」

「あ、ああ……。だ、大丈夫か？ その……色々ヤバイぞ？」

「いえ、大丈夫です……はああ……」

頭を抱えて深々と溜息を漏らすゲルト。どう見ても大丈夫そうには見えない。ゲルトは一昨日の服装のままで顔を上げ、俺から一步仰け反った。どうしたのかと首を傾げていると、前髪を指先で弄りながら恥ずかしそうに視線を反らす。

「師匠はあっち行っててください」

「えっ？」

「いいからあつち！ もー、気が利かないんだから！」

「え？ え？ あの、リリアさん？」

リリアに背中を押され、殆ど階段を突き落とされるような状態で退場を求められた。訳もわからずに首を傾げながら家から出る。一先ず部屋から出てきてくれただけ進展だと考えよう……。

外に出ると既に食事は終わっていて片づけが始まっていた。結局俺はロクに食えないままの気がするが、まあこれから激しく動く事を考えれば八分目くらいで丁度良いのか……。

爺さんがバーベキューの片づけをしに去って行くのを見送り、ブレイドとベルヴェール、二人と合流する。アクセルはまだ戻ってきて居ないらしい……大丈夫かあいつ。

「ゲルトの様子、どうだったのよ？」

「ああ、部屋からは出てきてくれたよ。今はリリアが付き添ってる」

「そつかそつか！ いやあ、でもまだ問題は解決してないんだよねー……。なあニーチャン、フェンリルって奴はどこに行けば会えるんだろう？」

ブレイドの言うとおりだ。魔剣を取り戻すなんて事を言っても結局あいつは神出鬼没……。どこに行けば遭遇できるのか全くわからない。そもそも今は何をしているのだろうか。それくらい教えてくれたっていいだろうに、爺さんは俺たちに何も語ろうとはしない。

フェンリルは次の邂逅まで命を預けると言っていた。次の邂逅……つまり近いうちに又どこかで会うことになるのだろうか？ だとしたらとりあえず今のうちに力をつけておくくらいしか対策は思い浮

かばない。

「今は兎に角力をつけないとな……。っていうか、なんだ？ お前
らもフェンリルに再戦を挑むつもりなのか？」

「あつたりまえでしょ！？ あんなにコケにされたの人生初よ！
絶対にぶちのめして土下座させてやるんだから！！」

「おいらも無関係じゃないしね。兎に角、ゲルトの奪われた魔剣は
おいらたちで取り戻してやるぜい！」

二人はかなり気合が入っている。めらめらと燃え上がるやる気で俺
ににじり寄る二人。ヘタしたら俺よりやる気があるんじゃないだろ
うか。

「そつえばあいつ、『この国を壊す』とか言ってたな……」

「この国って、クイリアダリア？ 世界全てを敵に回すような発言
ね。まあ、見た感じかなり自己中心的っていうか、自信過剰って感
じだったけど」

「ネーチャン、それネーチャンが言うことじゃないと思うんだ、お
いら」

「え？ 何が？」

「クイリアダリアを壊すなんて普通の考えじゃないよ……。まあ、
具体的に何をどうするって事は聞かなかったからな。さて、どうし
たものか」

三人して腕を組んで考え込む。しかし考えた所で何も判る事はない。結局考えるのは後回しにし、俺たちは特訓を再開する事にした……。

夏流たちがカザネルラで修行に勤しんでいる頃。フェンリルは聖都オルヴェンブルムより遙か北、国境沿いの雪原に立っていた。

二日間かけたとは言え、長距離の素早い移動にフェンリルは小さく息を付く。予想していなかった戦利品であるフレグランスを腰に携え、雪原の中に立つ鶴来と合流する。

二人は挨拶もそこそこに振り返り、広大に広がる雪原を見渡した。何もない、真っ白な空間。真昼の太陽を受け、きらきらと光を反射する美しい景色の中、フェンリルの声が響く。

『首尾は？』

「問題は何も無い。そちらの方は……成る程、二代目勇者にちよっかいを出してきたか」

『お前には関係のない話だろう』

「ふむ、確かにそのようだ。では仕事の話だけに限定しようか。既に準備は整っている。直にバズノクの騎士も合流するだろう」

『そうか。お前はバズノクの軍勢と合流し、指揮を執ってくれ。聖都オルヴェンブルムに一気に攻め込む』

「勝算は？」

『魔剣とオレがいる。他に説明が必要か？』

フェンリルは魔剣を抜き、それを大地に突き刺した。瞬間、紫色の光が雪原から溢れ出し、巨大な魔方陣を描き出す。

この日の為に彼が時間をかけて構築した特殊な魔法術式。フレランスを通じ火の灯された術式により、雪原より次々にうめき声が溢れ出す。

数多の手が空へと伸ばされていた。黒い甲冑に身を包んだ騎士の軍勢が立ち上がり、呪われた武器を手に整列する。そこに存在するのは全て魔物。額に呪文の刻まれた札を貼られ、今や彼らの行動の決定権は全てフェンリルに収束していた。

『流石の手際だ』

「簡単な召喚術の応用だ。指揮は執るが拙者は戦わんぞ。契約の通りに」

『充分だ。それでは始めようか　世界征服つてやつを』

フェンリルが魔剣を振り上げ、彼方の空を示唆する。呪われた騎士たちは同時に行軍を開始し、槍を鳴らし、足音を響かせ、数百数千の呼吸を一つに、数多進軍する。目指すは聖都オルヴェンブルム、世界の中心。

世界が動き出す音は学園にも届いていた。呪われた軍勢は片方からオルヴェンブルムに攻め入るわけではなかった。西と東からも同時に大量の軍勢が動き出す。その報告を受け、アルセリアは巨大な剣を手に取り立ち上がった。

聖都オルヴェンブルム。そこは聖クイリアダリア王国の首都であり、巨大な城壁に覆われた要塞都市である。シャングリラのモデルにもなったその街には全てのルールが収束し、世界の流れの中心地でもある。その中で聳え立つ城の窓からも黒い軍勢は見渡す事が出来た。

大地を覆う黒の軍隊。迎え撃つ聖騎士団の戦力は圧倒的に不足している。そろそろと歩み寄る大地を揺らすような行軍の音に、実戦経験の無い若い騎士たちは皆脅え竦んでいた。

「オルヴェンブルムを死守する！！　どこの軍隊かは知らんが、聖騎士団に刃を向けたことを後悔させてやれっ！！　恐れるな、私に続け！！」

「し、しかし隊長……！　相手は……ま、魔物です！　武装した、魔物の軍隊ですっ！　これではまるで、魔王の……っ」

「泣き言を言う暇があつたら武器を構えて覚悟を決めろ！　正義は我らが築く物……。突いて破られれば世界が変わるぞ！」

雄叫びを上げ、白い甲冑の軍団が槍を掲げる。黒の群はゆっくりとした足取りでオルヴェンブルムに迫る。その落ち着いた足取りがやがてじわじわと街を囲みだした時、戦の幕は開かれた。

黒の軍勢は聖騎士団目掛けなだれ込むように突撃していく。死の恐怖を知らない木偶の軍隊は槍を構え、命を惜しまずに特攻を仕掛ける。倒しても倒しても切りのない敵に物量で塗りつぶされるように、聖騎士団はその姿を次々と消して行った。

『北のバズノク王国より敵軍が出現。オルヴェンブルムを包囲するように戦力が展開されています。聖騎士団ならびに女王の要請を受け、本日現時刻を以ってシャングリラは戦闘形態に以降します。街の防衛と同時に、聖騎士団を援護すべく生徒を戦場に派遣する事が決定しました』

ディアノイアの会議室では剣を正面に構えて立つアルセリアを囲むように教師たちが肩を並べていた。ディアノイアは聖騎士団直属の

教育機関。『敵』の出現時には臨機応変に出兵を行う。判りきっていた事である。

しかし、教師たちの気持ちは複雑だった。アルセリアだけが凜とした様子で声を張り、教師たちはその言葉をどこか現実として受け入れる事が出来ないまま立ち尽くしていた。

「皆ビビってるねえ……。ま、仕方ないさ。自分らが大事に育ててきた生徒を死んで当然の戦地に送り込むなんて正気の沙汰じゃない。アルセリア、その決定はあんたの意思なのかい？」

保険医のデネヴの声にアルセリアは無言で頷く。そうして剣を振り上げ、教師たちに突きつけた。

『戦闘技能三級以上の学生は全て戦場へ。貴方たちも覚悟を決めてください。戦争が始まりますよ』

「……学園長、正気ですか？ 技能三級程度じゃ、マジな戦争に出してどうにかできる実力じゃ……」

『盾にでもなればそれで構わないのです、ソウル。世界の現実から目を背けて大人にはなれませんよ。死なせたくないのならば、普段から死なないように育てるようになるべきです』

「学園長っ！！」

『決定は覆りません。即刻全ての生徒をディアノシアに招集し、戦地に派遣します。オルヴェンブルムが墮落してからでは話が遅いのです。あの城は、一度落とされたら取り返すのは厄介ですよ』

教師全員がアルセリアの剣の前に跪く。巨大な鎧の中、彼女も又静

かに唇を噛み締めた。

誰も望まない戦いを望む人間が居る。そうである以上、争いは避けられない。その為にこの学園が存在する以上、実戦は避けては通れない。

遠く南の町、カザネルラにもその一報は届いていた。新聞を受け取り、紙面に目を通すヴァルカン。深々と溜息を吐き出し、それを握り潰して顔を上げた。

「とうとうおっぱじめたか……」

振り返った視線の先、夏流たちは修行に打ち込んでいる。何も知らない子供たちを戦場に送り込む痛みは過去も今も変わらない。だがそんな事を考えるだけ意味の無い事。

「そうやって俺たちは、フェイトたちを英雄に仕立て上げたんだからな」

握り潰した新聞を片手に夏流たちに向かって歩き出す。

不吉な戦いの気配は生徒たちへと均等に忍び寄り、夏流にも今、その黒い悪意が届かれようとしていた。

集う力の日(2)

「その……神威双対は、これ以上強くはならないのか？」

「強くなる」

俺の決死の願いにあっさりと応えながらメリーベルは欠伸を浮かべた。

アイオンとの戦いで装甲が砕けてしまった神威双対はボロボロだった。どちらにせよ自分では修理が出来ない以上、メリーベルに頼むしかない。アイオンの術式を受けて砕けてしまったのは俺の不手際もあるのだが、もう少し強くする事は出来ないのか？ そんな風に欲が出てしまった。無理ばかり言っているのに申し訳なかったが、どうしても直ぐにでも強くなりたい理由も出来てしまったから手甲を手に取り砕けた装甲をじろじろと眺めるメリーベル。それからしばらくして溜息を漏らし、『まあこんなもんか』と小さな声で呟いて手甲を作業台に置いた。

「ナツルは、この武器を装備してどう？」

「どう……って、力が増す感じた。実際この武器がなかったらあんなにアイオンとも闘えなかったろうし」

「一つだけ勘違いをしているようだから言っておく。ナツル、この武器はナツルの魔力を上げるような代物じゃない」

首を傾げる。だが実際神威双対を装備すると力があがるのだ。実際素手でフェンリルに殴りかかった時の手ごたえは殆どなかった。手

甲があつてこそ、防御も攻撃も可能になる　それが俺の見解だつた。しかしメリーベル曰くそれは間違つているという。

「神威双対は、あくまで魔力を制御する効果しかないの。むしろ、これを装備すると強引な魔力制御のせいでナツルの魔力そのものは下がってさえいると思う」

「そう……なのか？」

「ナツルは誰にも追いつけないほどの魔力を持っている。でもそれはあんたの周りをふわふわ漂う水蒸気みたいなもの。ふわふわ、そこらじゅうに撒き散らされて形にならない。神威双対はその水蒸気を集めて水にして、それを氷にして腕の周りに留めるだけ。救い切れない魔力は消滅してしまうし、実際それだけでナツルは厳密には強くなつたわけじゃない」

「でも、レーヴァテイン神討つ一枝の魔剣は？」

「それも殆ど何もしてない。ただ集めた魔力を放出できるっていう術式を組み込んであるだけ。必殺技と呼ぶにはちよつと物足りない、ただの魔力パンチだから。それでもあれだけの威力が出るのは、文字通りナツルだから。一般人が装備した所で、この武器はちよつと頑丈な手甲くらいの意味しかもたない」

それを俺はまるで凄まじい武器を手に入れたように思っていたわけか。そう考えるとちよつと恥ずかしいな。しかしそれだけ膨大な魔力を凝固させる力を持つこの武器そのものは高い技術で作られている事は間違いない。

要は俺に足りないのは自らを律する能力なのだ。それが無いから武器に頼って制御するしかない。制御だけに術式を使うから、それ以

上のものは付加出来ない。それがメリーベルの返答だった。

「この武器は魔剣や聖剣の類とは異なる、非常に回りくどくて初歩的な武器。ナツル以外では全く意味がない」

「でもこれを装備してからこう、電気とか出せるようになったんだが」

「あえてこの武器の優良点を上げるとすれば、この武器を装備して魔力制御を常時行っていれば、飛躍的にその技術を高める事が出来るって事。呼吸するように常時身にまよって無意識に制御を行っていればナツルの身体がそれを覚えこむ……。電撃が出せるようになったのは武器の効果ではなく、ナツルが成長したから」

両手を合わせ、ゆっくりと離す。手と手の間に走る電撃は既に意図的に制御できるまでに至っていた。神威双対が無くても出来るのだから、実際その通りなのだろう。

メリーベルは俺の苦手な面と俺の得意な性能を理解してその両方に対処できる武器を作ってくれたということなのか。そう考えるとなんと頭が下がる。全く持って俺向きの、俺以外には意味のない装備だったんだな。

「魔剣、聖剣の類は刀身を魔石や精霊石の類の物で構築しているか、教会で何日もかけて聖儀礼式を行っている洗礼物。通常存在する武器とは格式が違いすぎる。ナツルの言う強化が聖剣、魔剣に匹敵する物に、という意味であるならば、現段階では不可能と返答するしかない」

「そうか……そうだな」

現段階で出来る全力を尽くしてくれたのだ。強くなれる可能性はあっても、そう今すぐ強くする事は難しいだろう。

元々そこまで期待していたわけではないが、落胆は少なくなかった。武器に頼る考えが既に甘いのだろうが、実際に戦争が起きてしまった今となつては少しでも力の底上げがしたかったのだが。

そんな俺を前にメリーベルは部屋の隅にあつたトランクを拾い、それを作業台の上に乗せた。黙って椅子の上に腰掛け、崩れた手甲の修理に取り掛かる。

「そのトランクの中身は夏流にあげる」

「中身は？」

「見てのお楽しみ。修理にとりかかるから、少し外してくれる？」

「ああ。時間はどれくらいかかる？」

「四時間もあれば充分」

俺は頷いてトランクを手取る。重苦しい外見とは異なり、トランクは驚くほど軽かった。

メリーベルの真剣な横顔を眺めてそれに背を向ける。兎に角今は時間がない。俺は彼女に後の事を任せ、研究室を後にした。

集う力の日（２）

『現在の戦況は、正直な所芳しくありません』

学園に急に呼び戻された俺たちを待っていたのは、現実味の無い急激な戦況だった。

南に行っていた俺たちにはあまり自覚の無い事だったが、世界は大きな混乱の中にあった。北の都市では既に何箇所かが反乱軍に占領され、数千単位の死傷者が出ているのは間違いないらしい。

反乱軍というのは急遽名称付けられたもので、実際は北の小国バズノクを先導者とする、幾つかの小国の一斉蜂起である事がわかった。南にあるのは海だけなので、南の方から敵が来ることはないものの、クイリアダリアは完全に戦火に包まれつつある。

元々その傘下に様々な国を加えていたクイリアダリアの国土そのものはそう大きくはないが、自らの国を囲むように無数の支配下にある国を点在させている。その支配下の国が謀反を起こし、尤も、影の支配力は強かったが実際は独立した別国、反乱軍と名づけられた軍隊は聖都オルヴェンブルムへと一斉に進軍を開始した。

各地に点在する騎士団が応戦してはいるものの、突然の戦争に皆浮き足立っている。当然だ。十年もの間、誰もこんな戦乱が起こることを考えてはいなかったのだから。聖騎士団に匹敵する戦力が現れる事など、完全に想定外。

嘗ての血みどろの争いを知っている熟練した騎士の多くは死に絶え、今は学園から排出された人と人との戦争を知らない聖騎士が殆どである。そういう騎士にとって嘗ての魔王と同じ軍隊を相手にするのは余程の苦勞だろう。

そう、敵は魔王と同じ戦略を取っていた。武装した魔物の騎士を軍隊させ侵略し、強引に物量で捻じ伏せる方法……。一体一体の戦力は聖騎士には及ばないものの、数倍の戦力で積みかけ、押し流して行く。

『敵の物量は甚大ですが、一つ一つは所詮魔物です。学園の生徒なら撃退は可能。要するに、こちらで頭数を揃えれば勝利は不可能ではないのです』

実際他の国からの援軍も次々と到着しつつある。この戦乱は時間さえかければクイリアダリアが反乱を鎮火させて幕を閉じるだろう。だが、オルヴェンブルムが堕ちれば話は別だ。

『敵軍は他の主要都市には目もくれず真っ先にオルヴェンブルムに進軍しています。あの城を落とすのは時間がかかるでしょうが、落とされればそれでクイリアダリアの威信は地に落ちる。あの街はただの城下町ではなく、ヨト信仰という神の大義名分を抱く場所でもありますから』

敵の軍勢は未知数。だが、膨大な数の魔兵を用意するのには当然膨大な時間がかかるという。つまりこの戦争は非常に計画的な、時間をかけて練りこまれた『力押し』……。

『魔物そのものは問題ではありませんが、それを指揮する何名か腕の立つ者がいるようです。百戦錬磨の戦闘力。リーダーさえ落とせば群は瓦解するでしょうが、それが問題でしょうか』

「想像以上に厄介な事になってるんだな……」

学園は騒々しさに包まれている。学園だけではない、シャングリラという街そのものが武装状態に入っているような錯覚さえ覚える。各地には武装した生徒たちが出張り、騎士が護衛についている。学園内は忙しそうに戦闘準備を進める生徒たちが行き交い、混乱した状況下、こうしてアルセリアの説明をロビーで受けている俺たちが居る。

巨大な騎士の説明を受け、俺たちは息を呑んだ。実感がわかない……現実味のない言葉。戦争？ 現実の世界で生きていたなら絶対に自分の身に降りかかるはずの無い重さだ。

いや、絶対なんてない。多分きつと、そんなアンバランスな綱渡りをしながら俺も生きている。決して該当しないわけじゃない。誰でもそこから足を踏み外す可能性を持つてる。でも　いや、割り切るんだ。そうするしかないじゃないか。

『本城夏流。貴方には勇者二名を率いてオルヴェンブルムに向かつて貰います。たった今この瞬間より、簡略的ですが階級を設け、貴方を小隊長に任命します』

「お、俺が!？」

『貴方が望むだけの戦力を集め、前線を切り開く特殊部隊としてください。部隊名は　そうですね。勇者部隊、ブレイフクランということ』

「ま、待ってくれアルセリ……いや、学園長！　オルヴェンブルムに向かえって……いや、勇者部隊？　なんでその小隊長が俺なんだ!？　俺はド素人だぞ!」

『決定は覆りませんし、結局勇者を最も効率よく運用出来るのは貴方でしょう、夏流。その為にここに居る事を忘れないでください』

連絡事項だけ淡々と俺に告げてアルセリアは背を向ける。他の生徒たちに呼び止められ、ときばきと指示を下しているようだ。勇者部隊……？　そんな事を言われても、俺が集められる『仲間』なんて　後ろに居るみんなくらいしかないじゃないか。

「その、みんな……話、聞いたら？　何か俺、小隊長になっちゃったみたいなんだ……。力を貸してくれないか？　信じられる仲間っていうと、今の所お前らしか俺にはいないんだ」

「安心しろよ、ナツル。俺たちも付いていく。フェンリルは『国を壊す』って言ってたよな？ 直後この戦争だ……。前線にはあいつも出てるかもしれない」

アクセルの言うとおりだった。それは恐らく全員が共通して思っていたことだろう。故に誰も俺の言葉に反対はしなかった。願ったり敵ったり ヤツに正面から挑めるチャンスなのだから。

「それじゃ、その……みんな準備もあると思うから、出発は明日にしよう。今日は全員疲れを癒して戦闘に備えてくれ。俺は他にもちよっと声をかけられるやつがないか当たってみる」

みんなと別れ、リリアとゲルトだけが俺の前に立っていた。ゲルトは相変わらず浮かない様子で、リリアはそのゲルトの様子を心配そうに見つめている。

「ゲルト、大丈夫だ。魔剣は俺たちが取り戻してみせる。だからそんな顔するなよ」

「……取り戻すって……あのフェンリルともう一度刃を交えるつもりですか？ 実力が違いすぎて、この間は全員でかかってても手も足も出なかったのに……？」

「ああ。次でダメならまた出直すさ。何度でも挑んで必ず取り返してやる」

ゲルトの肩を叩き、リリアに視線を向ける。リリアは優しげに微笑んで応えてくれた。ゲルトは両手を胸に当てながら、辛そうに眉を潜める。

「どうして……そんな事を？ 貴方には、わたしの事なんて関係ないはずなのに……」

「ああ、関係ないな。でもお前はリリアの友達だ。大事な勇者の仲間だ。仲間を助けるのに、理由は要らない」

「……」

「なんてな。本当は俺があいつをぶっ飛ばしてやりたいだけだ。だから別にお前のためなんかじゃない。自惚れるなよ、ゲルト？」

「なっ……！ あ、貴方はっ……！ ああもう、いいですよ！ 好きにすればいいじゃないですか！ 貴方、もう一度殺されてしまえばいいんです……！」

「おお、こわいこわい。その方がゲルトらしいぜ。な、リリア？」

「うんうんっ！ ツンツンデレデレ、ツンデレデレ」

二人してにやにやしていると、ゲルトは顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。リリアがその手を握り締め、俺に振り返る。

「ゲルトちゃんと準備を進めます。師匠、それじゃあまた明日」

「ああ。二人とも、忘れ物しないようにな。今度のは遠足じゃあないんだぞ」

二人の頭を両手で同時にぐりぐり撫でる。二人とも別々の反応を返し、去っていく。一人残った俺はポケットに両手をつっ込み、溜息をついて振り返った。

「いるんだろ、アイオーン」

「おや？ 驚いたね、気づいていたのかい？」

アイオーンは目の前に突然現れた。こいつは多分、気配を消してるとかじゃない。普通に自分の姿を不可視にする魔術を使っているだけだろう……インチキ眼鏡め。

腕を組みながら俺の前に立ち、アイオーンは普段どおりの胡散臭い笑顔を浮かべる。全く、こいつの性格の悪さにもそろそろ慣れてきてしまった。魔力察知能力が上がった自分のお陰かな。

「アイオーンはどうするんだ？ 今回の戦い、参戦するのか？」

「生憎ボクにはお呼びがかかっていないからね。基本的に、教師はボクに指図出来ないのさ。色々と事情があってね、ふふっ」

全く何者なのかわからないがもうこういうもんだと思うことにしよう。考えるだけ無駄だ。

「ていうかお前、この間の約束破ったろ。世界の滅亡がなんとか、世界の秘密だとか……そういうのお前、何も教えてくれないじゃないか」

「ああ、そういえばそんな約束だったね。ふふ、そうだなあ……一緒に食事でもしてくれたら考えてもいいよ」

「お前、この間も同じ事言っただけに煙に巻きやがったろ……。ま、別にいいぞ。一緒に食事、するか？」

アイオーンは鳩が豆鉄砲食らったような顔をしていた。何を驚いているのか知らないが、俺は首を傾げながら続ける。

「お前が嘘つきなのは、見抜けなかった俺にも問題はあるし。それにあの戦いは俺にとつては無意味じゃなかった。だから感謝してアイオーンと一緒に食事してもいいなって思ったんだ」

「　　　　　どういう風の吹き回しだい？　君はボクの事を怪しんでいるはずだ。今回の反乱に何か加担しているのではないか、何て事を疑ったりはしないのかい？」

「しない」

アイオーンはそういう人間じゃない。多分だけど、そう思う。そもそもこの間の課外授業の時、アイオーンが街に着くより前に騎士は魔物になっていた。何かできるわけがないんだ。

だってそれまでアイオーンはずっと俺と一緒に話していて、俺の前を歩いていた。だからアイオーンの姿を見失った瞬間なんてなくて、彼女が何かをする時間もなかった。

今思えばアイオーンは俺に大切な事を気づかせようとしてくれていたのかもしれない。こいつの言葉がなかったら、リアとの間にあった矛盾は今もどっかりと居座って判りあう事を邪魔していたと思うから。

「お前が胡散臭いのはわかってるし、もう一々行き成り現れても驚かない。でも俺はお前の事が嫌いじゃないから、一緒に食事するくらい構わないんだよ。この間は手加減までされちまったしな」

「……………気づいてたんだね」

「当たり前だろ、限界突破者。つーか、そうだな。一緒に食事しよう。自分から誘ったんだ、まさか断らないだろうな？」

「えっ？ いや、ボクはその……夏流、あれは冗談で……」

「うるさいな。強くなりたんだよ、俺は。強くなるコツを教えてください。飯はホラ、奢るからさ」

「な、夏流！ ちょ、ちょっと……！」

アイオーンの手を取り強引に歩き出す。しばらくすると諦めたのか、アイオーンは俺の手を握り返して隣を歩き出した。

「君は少々強引過ぎる」

「なりふり構ってられない理由が出来たんだ。なあアイオーン、実際戦ってみてどうだった？ 俺のその……ダメなところとかさ」

「そんな事を急に言われてもボクは分析者ではないし教師でもない。君の望むような応えは出せないと思うけれど」

「いいんだよそんなのは。ちょっと一人で特訓しても煮詰まってるんだ。ランキング一位の意見ってやつを聞かせてくれよ」

慌しいシャングリラの街。殆どの店が閉まってしまっていて、結局どこでも飯なんて食うところはなかった。

たまたま営業していた公園の小さなカフェでサンドウィッチとコーヒーを購入し、ベンチに腰掛けて齧る。アイオーンと二人で食事というのはどうにも妙な光景だ。

アイオーンは黙っていれば絶世の美女。流石に注目を集めるのか、

道行く人は男も女も全員振り返っている。その視線を受け、アイオンは平然とコーヒーを飲んでいた。

「なんか悪いな。こんなのしか売ってなくて」

「ボクの方こそ年下に奢られるとは思わなかったよ。君、これといって特に経済状況が安定しているわけでもないんだろ？」

「痛いところ突くな……。まあ絶対金はないが、必要分しかもらえないというか……」

「仕送りかい？」

「いや、そうじゃない。まあ色々あるんだよ。アイオンは？」

「ボクは働いているよ。シャングリラの南に、ユーフォニウムっていうバーがあるんだ。そこでピアノを弾いてる」

「……お前が？」

「何だいその顔は……？ こう見えても、歳は君たちよりは上でね。歌も歌ったりするけど、ボクは演奏する方が好きだな」

そう言つて穏やかに微笑むアイオンは普通の女性のように見えた。どこかあどけなく、子供っぽい横顔。何だかこっちも嬉しくなつて笑ってしまった。

コーヒーを飲み干し、立ち上がる。午後の太陽は暖かくて、この世界が戦乱に飲み込まれつつある事なんて信じられなかった。

「戦争になれば、人を殺さなきゃいけないんだよな」

「そうなるだろうね」

「……嫌だな。自分がするのもそうだけど……その」

「リリアが人を殺す姿を見たくない、かい？」

見透かすような言葉に文句を言う為に振り返った瞬間、アイオンの顔が目の前にあった。

アイオンは俺の顔を両手で掴んで押えると、一瞬で唇を重ねる。何が起きたのかさっぱりわからないまま呆けていると、彼女は唇を離して怪しげな笑顔を浮かべた。

「やはりこういうのは性に合わないな。こういう健全な他人との付き合いは、ボク以外の人間にしてあげるといい」

「あ、あいおーん……。お前今、何しやがった……」

「キスだけど？」

口元を押えながらうつろたえると、彼女は満足そうに笑いながら背を向けた。紅い服と髪を棚引かせ、燃えるような色合いだけ残して去っていく影。確かにそうだな、こんな子供っぽい付き合い方はあいつには似合わない。もっと孤高としていて、ぎらぎらしていて、胡散臭くて……。多分そんなアイオンでいいのだと思う。

「って、話し聞きそびれた……。上手い事動揺を誘って逃げたな、あいつ……」

深々と溜息をつき、残りのパンを一気に平らげる。日はまだ高い。

とりあえず、午前中にメリーベルをお願いしておいた神威双対を受け取りに行く事にしよう。

公園を抜けて研究室へ。メリーベルの研究室の扉を開くと、彼女は作業台の上で眠っていた。傍らには修理された神威双対が転がっている。

「……………あちゃー……………。無理言っちゃったかな……………。悪いな、メリーベル」

小さな声で謝ると、メリーベルは机に突っ伏したまま身じろいだ。神威双対を手に取り眺める。ばつちり元通り、もう魔法を無理に受け止めるのは止めるようにしよう……………。毎回壊してちゃメリーベルに申し訳ない。

鎖につながれたそれを作業代に置き、メリーベルを抱きかかえてソファに移動させる。いつだったか一人で悩んでいた時、メリーベルに甘えさせてもらったのを思い出して苦笑が浮かんだ。

何だかんだでいつもこいつには頼りっぱなしだ。武器の事も、それ以外の事も……………。例えば一番最初にリリアと向き合ってくれたのもメリーベルだった。俺たちの最初の仲間……………は、アクセルなのか？
兎に角もうそれなりにいい付き合いだと思う。

ソファの上に転がし、タオルケットをかける。仕方の無いやつだ。部屋を見回すと既に散らかりまくっている。ベルトがメイド解約してからそれほど日にちは経っていないはずなのだが、どうしてこう散らかるのか。

溜息を一つ漏らして片付けることにした。これくらいしてやらなきゃつりあわない。足元をぞろぞろ移動する猫たちが俺を見上げてくる。少しでも静かにしてくれと言い聞かせながら片づけを終え、メリーベルの枕元に立った。

「戦争か……………。なあ、猫たちよ。お前たちはどう思う？」

我ながら馬鹿げた事を口走っている。猫たちは俺を見上げ、わけがわからないといった様子で首を傾げている。まあ当然か。

「お前らのご主人様にもう少し部屋を片付けるように言ってくれないか？ それから昼夜逆転生活をどうにかするように、ってな」

腰を落として猫たちに語りかける。猫はそっぽをむいてあちこちに散って行った。全くつれないやつらだ。

立ち上がって一息つく、メリーベルが寝返りを打った。そうしてタオルケットを掴みながら、寝言を呟く。

「お……に、ちゃん……」

メリーベルは泣いていた。その理由はよく判らない。ただきつとこいつにも色々あるんだろうと思う。

カーテンを閉め切った薄暗い部屋の中、一人でこいつは泣いていたのだろうか。そんな事を考えるとなんだかとても寂しい気がした。自分の手をじつと見つめる。お兄ちゃん、という言葉に何かを思ったのかもしれない。眠っているメリーベルの頬に手を伸ばし、指先が涙を拭った瞬間、メリーベルは目を開いた。

俺が固まった状態でいると、彼女も動かなかった。至近距離で見詰め合ったまま無言で俺は手を引つ込め、それから苦笑いを浮かべる。

「わ、悪いな……。起こしちゃったか？」

「……………別に」

身体を起こし、メリーベルは自分で頬に触れ、涙に気づいた。それから顔をシャツの袖で拭い、深々と溜息を漏らす。

「どうしてここに？」

「武器を受け取りに来たんだよ。寝てたみたいだったから、勝手に移動させた。まずかったか？」

「そんなことはないけど……ふわぁ。今、何時くらい？」

「そろそろ夕暮れだな。疲れてるのか？」

「ん……まあ、少し。ちょっと急ピッチで作業を進めすぎたかな」

隣に腰を落としながら質問すると彼女は頷いて応えた。相変わらず表情の読めない顔。それが少しだけ恥ずかしそうに朱に染まり、メリーベルは目を瞑って問い掛ける。

「……もしかしてあたし、何か言ってた？」

「え？」

「寝言……とか」

しばらく考え込んだ。別に頷いても問題はないのだろう。ただなんとなく、ここは彼女のプライド的に首を横に振るべきだと思った。メリーベルは俺の反応に一安心したのか、立ち上がってカーテンを開いた。斜陽が差し込む中、身体を伸ばして息をつく。

「そっか。なんかよく寝言言ってるから、また言っちゃったかと思っただけだから」

「そうなのか。って、あれ？　そういえば猫たちがいない……」

「気を使ってくれたのかもね」

「何にだよ？」

「二人きりの空間を、ロマンチックに演出。夕日の差し込む研究室で、二人は見詰め合うのであった」

「ないない」

俺が肩を竦めるとメリーベルも笑った。そうして武器を受け取り、部屋を去る事にする。

「例のトランク、開けてみた？」

「ああ。あれなら確かに理論上俺は強くなるな」

「ん。倍になるはずだから。でも、あたしの言ったことを忘れないで」

武器はあくまで制御のみ。俺は武器に自分の魔力を食われている、ということか。

力のコントロールが出来るようになればもっと強くなれる。今はまだこのメリーベルのくれた力がなければ満足に戦う事も出来ないけど、でもフェンリルにもいずれは追いついてみせる。

「そうだ、メリーベル。俺たちオルヴェンブルムに向かう事になったんだ。よかったら手を貸してくれないか？」

「戦闘は専門外だけど？」

「そうだけど、武器とかアイテムを修理したり調達できるやつがい
ると楽だろ？　いつシャングリラに戻ってこられるかもわからない
んだし」

「んー……。まあ、考えとく。でもあんまり頼りにされると重いん
だけだな」

「そう言つと思つたよ……。ったく、感謝の言葉は言わないほうが
いいな」

「なにになに？　言つてご覧？」

「いーわーねーえー」

「照れやさん」

「うるせえよ。じゃ、そういうわけで邪魔者は退散しますよ」

メリーベルが小さく手を振る。アイオンも誘うつもりだったが、
あいつは来ないだろうなあ……。

何はともあれ準備はまだまだ必要だ。出来れば防具も新調したいし。
俺は夕暮れの町を一人歩き始めた。

これから起こるであろう、悲しい現実を覚悟しながら　。

集う力の日(3)

「勇者になる上で、どうしてもリリアが覚悟しなければならない事が、一つだけある」

幼き日、カザネルラの砂浜に立つ黒き勇者は言った。

「勇者とは戦う者だ。戦いとは命の奪い合い。どうしても、仲間や敵の死と向き合わなきゃならない。勇者はね、リリア。凄く難しいんだ」

「……むずかしい？」

「うん、とてもね。僕は勇者としては、ちょっとばかり覚悟が足りなかったらしい。だから今でもこうしておめおめと生き残ってる……君のお父さんを助けもしないで、ね」

リリアの前に腰を落とし、小さな身体に似合わない練習用の剣を握り締める少女の頭を撫でるゲイン。優しい男はにっこりと微笑み、リリアをまるで自分の娘であるかのように扱った。

だからリリアだけはわかっていたのだ。この世界の全ての人が彼を罵っても、彼の優しさを。暖かさを。まるで本当の父親のように思っただけの人の事を、信じていられた。

父を見殺しにしてしまったと何度も語るその人は、悲しげな眼差しでいつも遠くを眺めていた。そこには天国も地獄も無く、ただ世界だけがある。隔たりの前に人に出ることは決して多くない。後悔はその人間が出来る数少ないものの一つでもある。

「仲間が沢山死んだ。沢山沢山死んだ。敵を沢山殺した。数え切れ

ないくらい。そうしているうちに死に慣れて行く……それを勇気と呼んでいいのはわからない。でも僕たちは少なくともそれを覚悟しなければならぬ」

「かくご？」

「そうだよ、リリア。君はいつか仲間を失うかもしれない。その手で誰かの命を奪うかもしれない。そんな時、泣いたらだめだよ？ いいかい、リリア。戦いの中で命を落とした人の事を悲しむのは、後回しにするんだ。嘆いたり悲しんだりしている間に一つまた一つと守れるものが無くなっていく。掌から零れ落ちてしまう。そしてらもつと後悔する」

「……ゲインは、こうかいしてるの？」

「ああ、そうだね。後悔してるのかもしれない。君には同じ想いを味わって欲しくないんだ」

「……リリア、ゲインのこと、すきだよ？ ゲイン、そんな顔しないで」

「ありがとう、リリア。参ったな、子供に心配されてるようじゃ、勇者なんて名乗れないな」

困った顔で笑いながらリリアを抱き上げるゲイン。その優しい微笑みの意味も、その時彼が言っていた言葉も、今のリリアには理解出来る。

でもまだ判らないことはある。どうしてゲルトではなく自分なのか。その疑問にゲインは結局、一度も答えてはくれなかった。

夕闇の中、リインフォースに鎖を巻き、その刃をじっと見つめて悲

しげな表情を浮かべていた黒い勇者の事を、リリアはずっと覚えて
いる。その瞳はきつと今を映してはいなかった。きつと思いは遙か
彼方、今はもう取り戻せない場所に向けられているのだ。

「ゲルトの事を、お願いしてもいいかな」

「う？」

「あの子は引つ込み思案だから。僕に似て、どうにもしゃきつと
しないだろう？ ああ、でも母親に似れば、勝気な性格になるかも。
どっちにせよ、僕はもう長くないと思うんだ。だからゲルトの事を、
君に任せてもいいかな？」

「うん、いーよ。ゲルトちゃんは、リリアがずうつと守ってあげる。
だからゲインもそんな顔しないで？ ゲルトちゃん、寂しがってる
よ」

「……ああ、そうだね。本当に僕は父親失格だ。彼女にもっと、沢
山良い思い出を残して上げられたらいいのに。でも、わからないん
だよ」

「わからない？」

「わからないんだ。もうね、僕たちの両手は汚れすぎていて。
君たちのような、優しい命にどう触れたらいいのか、わからない。
だからゲルトは君が抱きしめてあげてほしい。君の優しい手で、君
の優しい声で、君の無垢な瞳で、その心で。彼女を抱きしめてほし
い」

「うん、いーよ！ リリアね、ゲルトちゃんより、おねえちゃんだ

もん！ ゲルトちゃんはね、リリアがまもってあげる！」

「そうだね。リリアは立派なお姉ちゃんだよ。きっとゲルトも、いつか君と 手を取り合って戦える日が来る」

「うんっ！！ 約束しよ！ 約束っ！」

つないだ指先。満面の笑顔を前に、ゲインは何を思っていたのか。何年経って思い返しても、それはリリアには判らないままだった。

集う力の日（3）

オルヴェンブルムを取り囲むように展開される戦闘は既に何日も継続されていた。騎士たちは皆疲弊し、しかし無限に襲い掛かってくる魔物の群れを街に入れまいと必死に抵抗を試みる。

しかし戦力不足は明らかだった。泥沼試合になりつつある戦闘状況の中、未だ衰えを見せぬ一団の姿がある。

「戦況は！？」

「東が押されているようです！ 確かあつちはまだ新兵ばかりだったかと！」

「ち……っ！ グラン！ ハインケルの隊を連れて東に向かえ！ こっちは私と姉上の部隊で充分だ！」

「しかし、それではこちら側はマルドゥーク様だけで孤立する事に……」

「構わん、私を甘く見るな！ 新兵をむざむざ殺させるわけにもいかんたろう！？ 構わん、行けっ！！」

図体の巨大な甲冑の騎士は斧で近づく魔物を薙ぎ払い、頷く。男が手を翳し合図をするとマルドゥークを取り囲んでいた騎士たちが後退していく。

マルドゥークは魔術書を開き、片手を翳す。正面に放たれた光の魔法が大群を薙ぎ払い、騎士は一人戦地を走り出した。

「姉上っ！！ 姉上ーっ！！」

マルドゥークが目指す先、女騎士数名と共に戦線を維持する一人の美しい女性の姿があった。長い柄の先端に巨大な十字架をあつらえたような特殊な形状の打撃武器を振り回し、華奢な外見からは想像も出来ないほどの怪力で一気に魔物を肉片へと変えて行く。

女騎士は弟の接近に気づき、十字架を一振りして戦線を開ける。指示を出すと女騎士たちが剣を構えて前線に走って行き、二人は合流した。

「どうかしましたか、マルドゥーク？」

「東が押されています！ 部下は援護に向かわせました。私は姉上の部隊の指揮下に入ります」

「あらあら……。そうなの？ とっても大変ねえ……。グランさんは？」

「グランも行かせました。援軍が来るまで南門は我らで守りきりましょう」

悲鳴が上がり、振り返る。女騎士の首が跳ね飛ばされ二人の足元に転がった。巨大な図体の騎士が血まみれになった斧を引き摺りながら騎士たちに迫り、一薙ぎで騎士たちの身体を両断していく。

「エアリオ姉様……！」

「わかってるわ。ちょっとだけ、大ピンチ？」

「ちょっとだけ大ピンチ！？ なんですかその文法は……！ 来ますよ……！」

雄叫びを上げながら大地を震わせ駆けてくる魔兵。振り下ろされる斧が空を切り裂きエアリオに振り下ろされる。十字架でそれを受け、両手で構えて深く股を広げて力を込め、自らの図体の三倍はありそうな巨体を一気に押し返す。

ジャッジメント・ランス
「断罪の槍！ はああつ……！」

詠唱を終えたマルドゥークが怯んだ巨体に貫通呪文を放つ。光の矢は巨体の腹を食い破り、貫通する。悲鳴を上げるその頭上に十字架を振り上げたエアリオが飛翔していた。

「えい」

情けない声と共に振り下ろされた十字架は巨体の頭を叩き割り、身体を胸辺りまで強引に捻じ切った。大量の鮮血が撒き散らされる中、その一滴さえ浴びずにエアリオは踊るように後退する。

二人は背中合わせに構えた。周囲は大量の魔物で囲まれ退路もない。これでは防衛さえ満足に果たせているとは言えないだろう。焦りと

不安が二人の心を曇らせて行く。

「流石に数が多いすぎる……！ 姉上、傷はありませんか？」

「ぴんぴんしてるわ。元気百倍！ とは行かないけど……でもちよっとお姉ちゃんおなか空いちゃったかも」

「生きて戻れたらなんでもご馳走しますよ……ッ」

二人が覚悟を決めた時だった。緊迫した表情のマルドゥークの肩をエアリオが叩き、マルドゥークは振り返る。

「マルドゥーク、列車が来るわ」

「何を言っているんですか姉上……。こんな時に列車なんてくるわけが……」

振り返ったマルドゥークが目にしたのは敵陣を突き進んでくる学園からの列車の姿だった。悲鳴を上げながら姉もろとも横に跳ぶ二人の傍を列車が通りぬけ、魔物を弾き飛ばしながら急停車する。

火花を散らしながら停車する車輪。開かれた座席から一斉に武器を構えた生徒達が戦場に降り立ち、一気に周囲の魔物を駆逐していく。そんな怒涛の乱戦の中、夏流たちの姿もあつた。

列車から降りた夏流が近くに居た魔物を殴り飛ばす。アクセルとブレイドが近くに居た魔物に切りかかり、夏流は周囲の生徒たちを前に手を振り上げた。

「バラバラに行動するなっ！！ 前線を構築する！ 腕に自信がある生徒は前へ！！ 勇者に続けえええっ……！！」

聖剣を構えたリリアが敵陣に切り込んで行く。一振りで数多の敵を駆逐する破魔の刃の煌きは他の生徒を導く灯火となる。右も左も判らないこの戦場の中、生徒たちが信じられるものはそう多くはない。未熟な彼らなりに希望を見出し、泥沼の戦地を切り抜けるために聖剣は格好のシンボルだった。

魔力を込め、リリアが回転しながら大剣で敵を薙ぎ払う。触れただけで木っ端微塵になって行く魔物の群れを前に、リリアは聖剣を翳して声を上げた。

「オルヴェンブルムに近い敵勢力から順次迎撃します！ 御願します、ついてきてくださいっ！！」

リリアを守るように左右にアクセルとブレイドが続く。三人の猛然とした勢いに乗り、次々に武器を構えた生徒達が魔物を押し返して行く。そんな中、ゲルトの隣に立った夏流はベルヴェールとメリーベルの肩を叩き、指示を出す。

「後方支援を頼む。傷ついた生徒が居たら無茶はさせないようにしてくれ。いざとなったら列車で脱出させる。ゲルトも回復と魔法で援護だ。いいな？」

「は、はい！」

「戦士科何人が俺と一緒に来てくれ！ 囲まれてる聖騎士団の救助に向かうっ！！ アーチャー 弓兵と魔術師で戦線作れ！！ 授業でやつたる、急げ！！」

次々に魔物を撃退する勇者に続く戦士科の生徒を弓や杖を構えた生徒が一斉に砲撃を行い援護する。断続的に降り注ぐ大量の矢と攻撃呪文に魔物が後退する中、それを追撃するようにリリアが剣を揮う。

その想像以上に統率された勇敢な戦いぶりにマルドゥークは完全に呆氣にとられていた。彼の近くに居た魔物を蹴り飛ばし、夏流が正面に立つ。

「あんた……確か、マルドゥーク？　元氣そうで良かった」

「貴様は……ノックスの時の！？　ということは、やはり学生部隊か……！」

「正規軍ほど上手くはやれないが、やれるだけやるさ。指揮執れるヤツ、積極的にパーティー組んで行動しろ！　一人で戦ってる馬鹿が居たら混ぜてやれ！　斬り込むぞ、続けえっ……！」

夏流の声に頷き戦士たちが何人か集まって敵を撃退し始める。生徒達の参戦により戦況は明らかに劣勢から救われようとしていた。

何よりも、脅え竦んでいるはずだったリリアが聖剣を翳して率先して前線に立つ事が夏流にとっては驚きだった。しかし勇者は英雄のシンボルであり、この世界の誰でも　学園の生徒ならその言葉の重さを誰もが知っている。リリアの実力が自分たち以下だと思っていた生徒たちも、その力強い戦いぶりを見て一瞬で理解したのだ。

『勇者』とは、己の身を省みず、前線で果敢に戦う彼女のような人間の事を言うのだと。

リリアの事を気にしつつ、夏流は何人かの生徒と一緒に前線へ向かう。斬りかかって来る魔物の剣を拳で碎き、近づく魔物を格闘で次々に撃退していく。

両手の拳から放つ雷が周囲の魔物全てを焼き尽くす。放った神討つヴァテイン
一枝の魔剣が大量に密集した闇の騎士たちを貫き瓦解させ、焼け焦げた大地の上を失踪する。

その背中を眺めながら、マルドゥークは口元に笑みを浮かべた。エアリオも又十字架を構え、頷く。戦況は覆せる。騎士たちも生

徒たちに続き、猛然と雄叫びを上げながら敵へと走って行った……。

「はあ……き、きついな……」

もう何時間も戦った気がする。実際に二時間程度は戦場に居たようだが、一分居るだけでも凄まじく神経をすり減らすあの場での疲労は慣れない限り暫く俺たちの身体を蝕む事だろう。

強固な城壁に守られたオルヴェンブルム城下町。その街は酷い有様だった。傷を負った騎士や兵士、学園の生徒たちで溢れている。各地を忙しそくに医師師が駆け回る中、俺は民家の前の段差に腰掛けていた。

傷は負わなかったが相当な連続戦闘に身も心もクタクタだ。途中リリアたちがどこに行ったのかもわからなくなつて、あとはもうがむしやらだった。いつ終わるのか判らない戦いの中、必死に敵を倒した。数を数える事が出来ないくらいの敵を倒したところで、やっと魔物の群は後退して行った。

何とか一時撃退できた事により、短い休息の時間が与えられた。とは言えいつ再び襲撃が始まるのかもわからない以上、心の底から気を抜く事は許されないが。

泥と血塗れになった両手をじつと見つめ、黙って神威双対を布で拭いた。それにしても、本当に酷い有様だ。優勢だったとは言えこちらも無傷ではない。きつと戦死者も出ただろう。所々、学友の死を嘆いて泣き崩れている生徒の姿が見える。それを見ているのが辛くて俺は目を閉じた。

戦争という言葉を実感した。いや、まだどこか俺は他人事だ。自分の世界じゃないからまともでいられる。でも本当にこの世界の人たちにとって全ての命は在るべくして在り、現実そのものだ。だからその嘆きも本物で、俺はそれを全て見つめる勇気がなかった。

立ち上がって周囲を見渡す。まだ戦いは終わっていない。第二派が

来る前に体制を立て直さないと。一先ずみんなと合流する為に、オルヴェンブルムの街を歩き出した。

オルヴェンブルムはどこかシャングリラに似ている。しかし建造物が全て白一色で染め上げられていたり、学園の代わりに巨大な城と教会があつたりと、物珍しいものは沢山在る。こんな場合じゃなければ、みんなで色々見て回って楽しむ事も出来たのだろうが。

仲間の姿を探していると、リリアの姿を見つける事が出来た。リリアは民家の壁を背にリインフォースを抱くようにして眠っていた。すやすやと泥だらけになって眠るリリアの笑顔は見ているこっちの気が緩む程子供染みていて油断と隙だらけだ。

「まったく、こんな状況でも寝られるとはな。よっぽど疲れたのか……」

リリアの寝顔を眺める。かけてやる布さえここには不足しているのだ、仕方が無い。しかし暫くそこに立っていると、布を持った女生徒が走ってきた。

「あれ？ さっきの戦いで、前線に居た人……ですよね？」

「ああ、そうだけど」

「あの、これリリアちゃんにかけてあげてください。それと奥で教会から食事の配給があるみたいですよ」

「そうなんだ。ありがとう、行つて見るよ」

女の子は頭を下げると走って行った。全く見ず知らずの生徒に声をかけられた事に驚いたが、それから生徒たちはリリアの前を通ると、その様子を心配げに眺めながら通り過ぎて行く。中には足を止

め、自分の着ている服やら何やらをリリアにおいて行く者も居た。あの戦いの中、真っ先に敵陣に躍り出たのはリリアだった。そして誰よりも敵を倒し、誰よりもみんなを導いた。だからリリアの事はきつとみんなが見ていたんだ。傷だらけになりながら戦う小柄の少女と聖剣の導きに、誰もが感謝していた。

もうここにリリアを弱いという人はいないだろう。何となくその力が認められた事が嬉しくあり、寂しくもある。リリアの前に膝をつき、眠る頬にそっと触れる。すやすやと眠るへこたれ勇者様の姿に息をつき、立ち上がった。

「お、ナツル！ やっぱ無事だったか」

「アクセルか。そっちも無事でよかった」

アクセルは俺にパンを投げ渡す。ありがたくそれを受け取りかじりつくど、自分が思っていた以上に空腹状態であった事に気づいた。リリアの隣の腰掛けたアクセルはリリアが布でくるまれている事に目を丸くしていた。俺が事情を説明すると、納得した様子で頷く。

「リリアちゃん、最前線で戦ってたからな。どんどん強くなるよ、この子は。何人もの生徒の命を救ったんだ、感謝してるやつは多いさ」

「そうだな……。アクセル、どれくらいやられたと思う？」

「二、三割つてところか……。死亡は一割くらいだろ。重傷者がこれから戦死者に加わる可能性はあるけど、戦闘未経験者も含むと考えれば上出来すぎる数字だ」

「三割か……。本当にそうか？ 俺たちはもつと何かを守れたんじ

やないか……。もつと仲間を救えたかもしれない。やりきれないよ」
肩を竦める俺の様子にアクセルは溜息を漏らして同意した。二人して傷だらけの生徒達を眺めていると、ふとアクセルが呟く。

「でもお前とリリアちゃんは良くやったよ。勇者部隊ブレイブクランだけじゃなくて、他の生徒もひっぱってた。お前よくあんなに動けたな。正直びっくりしたよ」

「……ああ。浮き足立ってるのはみんな同じだからな。誰かが声を上げないと皆怖いだろうし。騙し騙しだよ、授業でやった事を後はみんながきちんとこなした……。それだけだ」

「そうか……。まあともかく、お前は臨機応変に動いた方がいいのかもな。リリアちゃんの護衛は、俺とブレイド君で充分だ」

「そのブレイドたちはどうしたんだ？」

「ベルヴェールとゲルトは怪我人の手当でだ。ブレイドは飯食ってんじゃないかな。ま、やりきれない気持ちは判るけど、気持ちを切り替えて行こうぜ？　なあ、救世主君」

「お前……。それ、なんだ？」

「フェンリルがそんなこと言ってたろ？　それに勇者部隊を任されるなんて、救世主っぽいじゃん？　つか、お前元々結構救世主っぽかったよな」

「救世主っぽいってなんだよ……。ったく、変な呼び方はやめろよな」

アクセルは俺の言葉に笑っていた。その場でリリアを任せて暫く街を見回る事にした俺は寝ているリリアの頭を優しく撫でてその場を後にした。

騎士も生徒もみんな傷ついた。みんな死んだ。敵が魔物だったからまだ戦えた。これから人間も相手にするかもしれない。そうなたら俺は躊躇無く倒せるのか？

リリアを守る為だと思えばそれも出来るだろう。人間だろうがなんだろうがこの両手で薙ぎ払える。そうしなきゃ守れないからだ。覚悟は決まってる。でも……。

そう、でも。アイオンの言うとおり、俺はリリアが人を殺す所なんて見たくない。それは俺のわがままだ。みんなだつて同じ事を思うだろう。でもちゃんと戦ってる。俺一人だけまだそんな事を考えている事そのものが、裏切りのようでさえあると思う。

でも、それでもいやだ。リリアに返り血なんて似合わない。皆だつてそうだ。本当ならこんな場所俺たちには似合わない。でも居なきゃいけない。やらなきゃいけない。だからやる。リリアは誰かを守る為なら命を賭けるだろう。今日のように敵を薙ぎ払うだろう。でもその度に一步ずつリリアが遠くなつていく気がする。それが不安だったのかもしれない。

「なあ、ナナシ」

「はい？」

「原書には、こんな戦争の事は書いてなかった。それってさ、まるで……この世界にとってこの争いは些細な事みたいに思えるよな」

「実際そうなのでしょう。リリア・ライトフィールドにとって重要なのはこの後にある聖騎士団への就任。この争いが彼女に与える影響は少なくともないでしょうが、だからといって態々歴史として

「記すほどのことではないと」

それはまるでこれからもずっと血みどろの戦いが始まるみたいだった。そんな事にはならないでほしいと今は本気で思う。願えるどうか、リリアを戦いから遠ざけて欲しい。なのに俺は未来の事を考える余裕もなくて、目先の戦いで生き残る事で精一杯。救世主なんていってもフェンリルには勝てなかったし、力不足で毎日悩んでいる。

馬鹿みたいだな、俺。あっちの世界に居た時は、こんなに一生懸命生きてなかったのに。ゲームのつもりで迷い込んだこんな果ての果てで、自分自身の馬鹿馬鹿しさに笑えてくるなんて。

「ゲルトはどうして、『自殺』なんてすることになるんだろっな」

「魔剣の事が関係しているのかもしれませんが、ですが、未来を変えたいのなら今から努力すればいいだけのことです」

「でもリリアもゲルトも両方構ってる余裕がないんだ。自分の事で精一杯だ。こんなこと、お前に言っても仕方ないけど……。世界を変えるのって、難しいよ。すごく……」

うさぎは応えなかった。弱音を吐いている自分が嫌になる。うさぎは俺の肩から飛び降りると、目の前で人の姿に変身した。そうしてじっと俺を見つめると、シルクハットを脱いで頭を下げる。そうして自らの胸に手を当て、真面目な表情で俺に告げた。

「嫌になったのなら戻る事も出来ましょう。貴方が望む、帰るべき場所へ。この世界は確かに貴方にとっては残酷すぎる世界……。大切な人を傷つけずに居る方法はまずないと言ってもいいでしょう。そんな世界に貴方を導いた存在として、ワタクシは貴方の願いをか

なえる義務があります」

「……戻りたくなつたわけじゃないさ。むしろ、今は戻りたくない……。でもさ、ナナシ」

この世界は、冬香が作つたのかな。本当に、あの子がこんな事を望んでいたのだろうか。

俺に望まれた救世主という役割。それは俺が冬香にとって救世主そのものであったことを意味している。彼女を救えなかった俺に、また同じ想いを味あわせて苦しめようというのなら、まだ話はわかる。

「でも、あいつは……優しい女の子だったんだ。こんな傷だらけの世界、あいつが望んだとは俺には思えない」

「……ナツル様」

「悪いな、変な事言っちゃって。お前はただの案内役……俺が何か言つた所で答えられないのは判つてるのにな」

「いえ、構いませんよ。ワタクシは常に貴方の御心の傍に……。それこそトウカの望んだ願い。貴方が一人になつてしまわぬよう、ワタクシは最期の瞬間まで貴方の傍に在り続けます」

「なんかお前にそういわれると気持ち悪いな」

「何気に酷いですね。やれやれ、貴方という人は常に意地が悪い」

うさぎに戻つたナナシは頭の上に飛び乗った。重くなつた頭に溜息を漏らし、歩みを再開する。

しばらく歩いていると給仕が行われている教会前に出た。巨大な聖

堂が立ち並ぶ広場の中、聖騎士たちが慌しく行き交っている。その中で指示を飛ばしている一際若い騎士がこちらへ振り返り、歩み寄ってきた。

「おい、貴様！」

こんな呼び方をするやつは一人しか思い当たらない。魔道書を片手に歩み寄ってきたマルドゥークは俺の前に立つと頭の上に乗っているウサギを凝視した。

「それは、貴様の趣味か？」

「いや……趣味ではない。というか、貴様と呼ばれる筋合いもない。普通に夏流って呼んでくれ」

「ふん、そうか。ではナツル……先の戦いのことだが」

又何か文句でも言うつもりなのだろうかと腹を括っていると、マルドゥークは徐に頭を下げた。

「命を救われたな。騎士を代表して礼を言おう。ありがとう、ナツル」

「……え？ あ、ああ。いや、困ったときはお互い様っていうか……なんだ、変なカンジだな。あんた、学園の生徒が嫌いなんじゃないかったのか？」

「ああ、今でも嫌いだ。お遊び気分で戦場に出てくる子供など、見ている気持ちのいいものではないだろう？ それに……そういう子たちが目の前で死ぬのなど、もっと気持ちのいいものではない」

腕を組み、眼鏡を中指で押し上げるマルドゥーク。それは彼なりのプライドと気遣いだったのだろう。別にただ生徒を毛嫌いしているわけでもただ偉そうなわけでもないらしい。思えばこいつは部隊の足並みが揃っていないというのに、ノックスの人々を助けるために少人数で突撃したりもしていた。見た目はつんけんしているが、そう悪い男ではないのかもしれない。

「学園の生徒、見事な腕前だった。まだまだ鍛錬の余地はあるし、統率も成って無いが 次第点だろう。むしろ正規軍である我らより勝っていたら、それこそ面子が無い」

「はは、そうだな。でも本当によかったよ。間に合って」

優しげに微笑むマルドゥークに釣られて俺も笑った。戦いの中で得られるものは全く無いわけではない。リリアしかり、マルドゥークしかり。知らなかった新たな一面が俺たちの心をつなげていく。

沢山の力や想いがこうして集い、物語を生み出していくのならば 冬香。そうだろ？ この戦いだって無意味なんかじゃない、大切なページなんだ。

「あの勇者の少女 リリア、と言ったか？ 彼女にも伝えて欲しい。恐らく彼女は先の戦闘一番の功労者だ。少しくらい労ってやりたいのだが、生憎席を外せないのだ」

「わかった、伝えとくよ。あんたも大変だな……頑張れよ」

「ふん、言われるまでも無い。貴様の方こそ、慣れぬ戦で首を落とされぬよう、せいぜい気をつける事だ」

マルドゥークはマントを翻し騎士たちの中に戻って行った。てきぱきと指示をくだし、騎士たちが動き出す。あいつはあいつで色々大変なようだ。

それにしても色々あつて疲れた。マルドゥークの言葉じゃないが、少しは休んで気をつけなければ。俺はその場で彼らに背を向け、リアたちの下へ向かい歩き出した……。

集う力の日(3) (後書き)

くディアノイア劇場く

もう30部か……遠い所に来たもんだ編

リリア「さんじゅうぶく　　さんじゅうぶく　　ふんふんふんふん」

ゲルト「早いものですね。連載開始から一ヶ月もたたないうちに三十部も書く事になるうとは全く予想していませんでした」

リリア「更新速度のペースが鬼のようだね！　それだけ作者が暇だって事でも在るんだけどね！」

ゲルト「何はともあれ早くも三十部。読者の皆様本当にありがとうございます」

リリア「わかってないなあゲルトちゃん。そういう時はもっとこう……ね？　あるでしょ？」

ゲルト「……べ、別にいつも読んでくれて嬉しいわけじゃないんだからね！」

リリア「GJ！　これで全国のツンデレ好き読者の心を驚つかみだよー！」

ゲルト「そんな簡単にいけば誰も苦勞はしませんよ」

リリア「よし、じゃあ脱ごつか！」

ゲルト「何が!？」

リリア「この小説に足りないもの……それはラブコメっぽいエロシーンなんだよ！ 下着姿になってるゲルトちゃんにうつかり転んだ夏流さんが倒れこんでおっぱい揉んじやうとかそういうことになれば読者数が行き成り十二倍になったりすることっけあいです!！」

ゲルト「意味不明だし笑えない！ それで人気でも感想やメッセージが全部「おっぱい」になってしまわないですか！ そんな方法でメッセージ増えても嬉しくないでしょう!？」

リリア「それもそうだねー。ちえー」

ゲルト「はあはあ……ところで何だかいつもより長いですね」

リリア「うん、今日は三十部記念特別版！ なんだよー！ というわけで、最近のシリアス展開についてどうなのかなって話をしようか」

ゲルト「……ずっと序盤の緩いノリで行くと思って楽しんでた読者は『対の勇者の日』あたりで『ん？ なんだこれ?』ってなって既に撤退してると思いますよ」

リリア「いよいよ酷い事になってきたもんね……。もうちよつとすればまた学園の日々に戻れると思うけど、暫くは戦争してるわけだし」

ゲルト「ラブコメバトルファンタジーだと思って読んでいたのに裏

切られて絶望した！ という読者がいたならばここでお詫びいたします」

リリア「多分そういうのは作者的に無理があるから割り切ってあげてね！」

ゲルト「ではせめてこういうところでも少しでも明るい話題を話しましょう」

リリア「あ！ ねえねえゲルトちゃん、リリア連載直後に比べると強くなったよね！」

ゲルト「強くなりましたね。もうまるで別人のようですよ」

リリア「えへへ、もうへこたれ勇者なんて言わせないもんねー」

ゲルト「だというのに、わたしは弱くなる一方で……」

リリア「明るくない！？ え、えーと……お後が宜しいようなので、今日はここまでで！ 皆さん、読んでくれてありがとうーっ！」

ゲルト「うつ……。鬱だ、死のう……」

駆け抜ける戦意の日（1）

オルヴェンブルム攻防戦は凡そ三日間続いた。俺たちはその間に六回出撃し、六回とも無事生還する事が出来た。

死傷者の数は数百に昇り、ようやく魔物の攻撃を凌ぎきる事が出来た頃には殆どの生徒が疲弊し、戦線は瓦解寸前まで追い詰められていた。

しかし何とか持ち直した聖騎士団が撤退する魔物の群を追い、バズノク領へ進軍する頃、俺たち生徒には一時の休みが与えられた。この後どうなるのかはまだわからないが、少なくとも少しは気が抜けるというものである。

城下町には結局敵は一匹も入れる事が無かった為、住民に被害はない。俺たちはアルセリアからの指示書を受け取り、このまま暫くオルヴェンブルムに滞在し警備を担当する生徒のうちの一人として行動することになった。そういう事も在り、一先ず街に宿を取り、今は休憩している。

聖騎士団には城と教会という巨大な拠点があり、専属の医術師も山ほど居るので持ち直すのは早かった。俺たちが疲れて休んでいる間にも、戦線は拡大していく……。

バズノクとクイリアダリアの国境周辺は酷い激戦区となり、今この瞬間も戦闘が繰り広げられていることだろう。そんな時に休んでいるといわれても気持ちは落ち着かない。一人でベッドを見上げる時間に終わりを告げ、部屋を後にした。

白い壁、白い床……世界の全てが純白ではないかと思うほど白一色の街、オルヴェンブルム。どこか厳かな雰囲気のある宿の中、階段を下りてフロント前にある談話室に足を踏み入れた。

他の生徒たちがなにやら話しこんでいる横を通過すると、生徒たちが勝手に挨拶してきた。俺は適当にそれに応えて宿を出て、青空を

見上げる。

「空はこんなに青いの……心はどんより、か」

こうしていざ戦地に来ると、なかなか仲間とあっている暇はなかった。皆それぞれ準備で忙しいのだ。それにリリアはまた寝ているし、他の連中も気ままどこかに行ってしまったている。飯くらいは外に出て食べた方が健康的だと判断し外に繰り出してみたものの、戦闘直後の街は当然活気もなかった。

そんな中こちらに歩いてくるブレイドの姿を見つけて声をかける。相変わらずリリア並にちっこい少年は駆け寄ってくると元気良く挨拶を返してくれた。

「おいつす！ ニーチャン、昼飯？」

「ああ。ブレイドもか？」

「うん。あ、聞いた？ それぞれのパーティーで今後の対応を話し合うらしいよ？ ソウル先生がパーティーのリーダーは後で大聖堂に顔を出すようにってさ」

「ああ、わかった。つーか取りまとめてんのあいつかよ……大丈夫かなあ……」

「まあ、あれでも一応教師じゃん？ 平気でしょ。リリアはまだ寝てんの？」

「そうらしい。あいつここのところ暇さえあれば寝てるからな。疲れてるんだろっ、ほっというてやろっ。アクセルは一緒じゃないのか？」

「さっきまで一緒だったけど、また剣が折れそうだからいい武器屋がないか探すってさ。ベルヴェールは相変わらず人助け。メリーベルは……寝てるんじゃない？」

意外と全員の行動を把握していた。ゲルトは多分リリアと同じ部屋に宿泊していたはずだから、一緒に寝ているか何かしているのかもしれない。

まあとにかく今こうして暇そうにしているのは俺とブレイドだけってことか。まあいい、食事しよう。

「一緒に行くか？ 配給食飽きたろ。何か奢ってやるよ」

「マジ！？ やったあ、ニーチャン太っ腹だね！ そうと決まれば善は急げ！ ほらほら、行こうぜ！」

無邪気にはしゃぐブレイドに手を引かれ、オルヴェンブルムの街を歩く。なんというか、俺はいつもこう子供の相手ばかりしているような気がするなあ……なんてことを考えながら。

駆け抜ける戦意の日（１）

「いやあー、食った食ったあ……！ ご馳走さん、ニーチャン」

「そんなちよつとでいいのか？ リリアなんかお前の五倍はぺろりと平らげるぞ」

「それは、あのネーチャンがちよつと普通じゃないだけじゃん……」。

ていうかそれ、胃袋どうなってるの？ 身体の体積的に考えて無理があるんじゃないの……」

身体に入った瞬間消化されて栄養分になって吸収されて代謝されてんじゃないの？ としか俺には言えない……。

何はともあれ一時の平和を取り戻したオルヴェンブルムのカフェテリアで昼食を取り終え、今は食後のティータイム。これまた綺麗な銀色のカップで紅茶を飲みながら街を眺めている。

それにしても流石はヨト信仰の中心、聖職者っぽい外見の人間が目立つ。そうでなくても騎士団が集まっていてヨト教の紋章が目立つというのに、この街はまるで宗教一色と言った感じである。

ブレイドはナプキンを器用に折って花のようなものを作っていた。得意げにそれを量産するブレイドを眺め、ふと沸いた疑問を訊ねる。

「そういえばブレイド、お前って何科なんだ？」

「んー？ 冒険者^{レンジャー}だけど？ あれ、言ってなかった？」

「冒険者って言われてもな。そういえばお前、武器とかどうしてるんだ？」

ノックスで龍と戦った時、こいつは最初は斧を振り回していた。しかし次の瞬間には槍に持ち替えて戦っていたし、気づけばそれも消えていた。

オルヴェンブルム防衛戦闘では剣を使っていたようだし、いまいち何を得物としているのかわからない。そんな俺の疑問に応えるため、ブレイドは手の上にナプキンの華を乗せた。

「空間魔法^{スペース}って知ってる？ おいらが唯一使える魔法で、得意魔法でもあるんだ」

俺の目の前に花を翳し、ブレイドがそこに魔力を込めると手に吸い込まれるように花はどこかへ消えてしまった。そうして目を丸くする俺の目の前でもう片方の手を翳し、そこに魔力を込める。

「空間魔法の中でもちよつとややこしいんだけどさ。おいらの一族に伝わる継承魔術で、物体を出し入れさせる事の出来る特殊な魔法空間を持つてるんだよ」

手に花が現れ、ブレイドはそれを俺に差し出した。それから掌からナイフやナックル、宝石や薬瓶など様々なものを取り出し次々にテーブルに並べて行く。

「勿論、槍とか剣とか斧も収納できる。そこはおいらだけが自由に開閉出来る空間で、自由に出し入れが出来るわけ。弓とか杖とかも入ってるよ、あんまり使わないけど」

「へえー。便利な能力だな。でもそんな沢山の種類の武器を使いこなせるのか？」

「こつ見えても手先は器用だからね！それに、おいらの持つてる武器は皆魔剣や聖剣の類なんだ。それそのものが強い力を持つてるから、腕が未熟でもまあそこそこ戦えるわけ」

「魔剣聖剣の類をいくつも持つてるのか？」

「んー、大体……二百？　くらいはあると思うよ」

「にひゃくう！？」

リインフォースやらフレグランズやら、あんな化物染みた武器が二百個もあるのか！？ そんなのアリか！？

当たり前のような顔をしながらオレンジジュースを飲んでいるブレイド。流石にランキング二位の称号は伊達ではないらしい。

「っていつても、自分で集めたんじゃないんだよ。おいらの親父が世界中から掻き集めたもんでさ。昔勇者と一緒に戦ってた時、敵とかから奪って集めてたらしいんだよね」

「そうなのか？ ってことはお前の親父って……」

「勇者のパーティーの一人だったらいいね。担当は、盗賊！ フェイトにボッコボコにされて手下にされたって聞いたよ。盗賊王ブレイドって言うんだけど、知らない？ おいらその二代目なんだ」

なるほど、ブレイドというのは彼の名前でもあり同時に称号でもあるということか。それにしてもつくづく勇者に縁のあるパーティーだな……。

勇者見習い二人は勇者の娘。ベルヴェールは勇者の協力者だった商人の娘。ブレイドは勇者の仲間の盗賊王の息子、か。ここまで来るとメリーベルやアクセルの親もなんか関係してそうな気がする。いやしてなきや逆に空気読んでないだろ。

流石に英雄の二代目たちは強いのか。学園の中でもずばぬけた実力を持っているのも頷ける。実際、ブレイドは強い。まだ十三歳だというのに、将来の恐ろしいやつだ。

「おいら、将来は盗賊になって親父みたいに世界中の宝物を集めるのが夢なんだ！ でも、盗賊科なんてないじゃん？ だからしょうがない、冒険者名乗ってるんだよ。学園的にも流石に盗賊志望の生徒を育てるのはまずいんだろうし、しょうがないけどね」

「……そ、そうか。立派な盗賊になれるといいな」

「おうっ！ そしたらニーチャンも手下にしてやるっか？ 今のうちに予約しといたほうがいいぜ！ 聖騎士団にも負けない盗賊団を作り上げるんだ！」

立ち上がり、目をきらきらさせながら語るブレイド。時々こいつの純粋な気持ちについていけなくなる時がある……。うん、適当に流していつか幸せになってもらおう。

「あ、そういえば親父はフェイトに負けちゃったんだよな。よし、そのうちリアにリベンジしよう！ 勝ったら勇者を手下にしてブレイド軍団を作るんだぜ！」

「そうか。そうだったら俺は副団長にでもしてもらおうかな、ハハハ」

そんな話をしながら紅茶を飲み干し立ち上がる。会計を済ませてカフェを離れると、やる事が無くなってしまった。

二人してくだらない話をしながら街中を適当に歩いていると、迷路のように入り組んだ街の中で何故か迷子になってしまった。細い通路を二人でしばらく進み、どうにもその事実気づいて振り返る。

「ブレイド、迷子になっちゃだめだろう」

「ええ、おいらのせいっ！？ ニーチャン大人げねえよ、子供のせいにすんなって！」

「うーむ、久しぶりにツツコまれた気がする……。お前みたいなツ

ツコミ型が居てくれると俺の負担が減って助かるよ、うんうん」

うちのパーティー変なのばかりだから疲れるんだ。ありがとうブレイド。君は希望だ。

「変なところでしみじみしてないでよ……。しょうがねえなあ、もう！ ダッシュで戻るか……」

二人して元来た道を引き返して走り出す。俺の前を走るブレイドが曲がり角で突然停止し、俺はその背中に激突した。

「おわっ!?!」

ブレイドが悲鳴を上げる。俺が押し出してしまったせいで止まらなかったらしい。曲がり角で出会い頭、通行人と激突してしまったようだ。倒れこんだ二人の子供　そう、ブレイドがぶつかったのは白いドレスに身を包んだ小さなお嬢さんだった。

年頃はブレイドと同じかそれ以下だろうか。転んだ時に打ったらしいおしりを擦りながら立ち上がり、ブレイドを睨みつける。

「ちょっとお！　何すんのよー！　ちゃんと前見て歩きなさいよ！」

「おいらのせいじゃないんだけど……」

ブレイドが恨めしそうに振り返る。俺は両手を合わせて苦笑しながら頭を下げた。

「やば、モタモタしてたせいで追いつかれた！　ちょっと、匿って！」

「ええ！？ 匿うつて、何が！？」

「いーいーからー！ 奥に入れて！ そこで突っ立ってるのも！」

俺はとりあえず頷く事にした。ブレイドと二人で道に塞がり、女の子が木箱の後ろに隠れたのを確認する。しばらくすると聖騎士の一团が走ってきて目の前を通り過ぎて行った。

聖騎士たちはどうも少女を探していたらしい。あちこちを覗き込みながら走り去っていく。一先ず安全を確認し、振り返って木箱の裏の少女を覗き込んだ。

「もう大丈夫だ」

「……ほんと？ ありがとう、助かったわ」

女の子はドレスの裾についた泥を叩いて落としながら立ち上がる。無邪気な笑顔を浮かべる少女のは俺を見上げ、じっと顔を見つめる。

「見ない顔……。もしかして、ディアノイアの生徒？」

「もしかしくてもそうだが」

「え、ほんと！？ あっちのちびも？」

「ち、ちび！？ ちびってなんだ、ちびって！！ こう見えても毎日牛乳飲んでるんだぞっ！！」

何がこう見えてもなのかわからなかったが、どうも自分の背が低い事は自覚しているらしい。涙ぐましい努力だが、結果はどうなるのか……。

「ちびはちびじゃない。でも、匿ってくれた事に免じてぶつかつた無礼は許してあげるわ、ちび」

「だから、ちびじゃねええっ！！　ニーチャン、こいつ性格ワリーよー！！」

「落ち着けち……ブレイド」

「今ちびって言いそうになつたろ！？　ニーチャンなんでおいらの目をみないんだよ！！　こっちゃんと呼ぶコラアッ！！」

すまんブレイド、ニーチャンお前とちゃんと向き合えそうにないよ。そんな俺たちのやり取りを見て女の子は笑っていた。ブレイドは腕を組んですねた様子でそっぽを向いたが、それほど気にしているわけではないようだ。

「それで、聖騎士に追われてるみたいだつたが」

「そう、そうなの！　だからしばらく一緒に行動して、アリアを守りなさい！　これ、命令だからね！」

「アリア……？」

ブレイドと俺は二人して顔を見合わせる。アリアという少女は白いドレス　かなり高級そうな　を身に着けている。栗毛色の長い髪の毛を背後で括り、ぱつちりと開かれた丸っこい目で俺たちを見ている。どうにもこの見た目と名前がどこぞのへこたれ勇者さんに似ているような。

「えーと、アリア？ 白の勇者って知ってるか？」

「うん？ フェイト・ライトフィールドのこと？」

「いや、そうじゃなくて……うん、多分勘違いだ。変なこと聞いて悪かったな」

アリアは小首を傾げていた。それにしてもよく似ている。リリアがもっと強気な女の子だったらこんな感じになっていただろう。

何はともあれ困った事になった。ブレイドは俺の意見を求めるように見上げてくる。まあ暇だし、特にこれといって異論はないが。聖騎士団に追われているというのが気になるな。まさか犯罪者って風貌でもないが……。

「わかったよ。それで、どこに行きたいんだ？」

「別にどこってわけじゃないの。あのね、ただ学園の生徒がたくさん着てるって聞いたから、それを見たかったの。だから一先ず目標は達成ね」

俺とブレイドとの遭遇でいきなり目標は達成されてしまったらしい。要するに、他の生徒を眺めながら街を歩いて俺たちから話を聞きたいということだろうか。

まあ、悪い子には見えないし、別にそれくらい構わないか。そんな事を考えているうちに、ブレイドの手を取ってアリアは表通りに走っていく。

「に、ニーチャン！ た、助けて！」

「諦めるブレイド。丁度暇だったんだ、別に構わないだろう？」

三人で表通りに出る。流石にアリアの格好は目立つが、この町じゃ俺たちみたいにみすばらしい格好をしているほうが珍しい。聖職者が貴族ばかりのこの街で、逆に浮いているのは俺たちの方だった。アリアは俺たちの前を歩き、街行く学園の生徒に片っ端から声をかけて行った。ただ挨拶するだけで満足なのか、アリアは嬉しそうに町を歩いている。

「それにしても、学園の生徒はみんなみすばらしい装備してるわねー。洗礼済の鎧と槍で武装してる聖騎士団と比べると見劣りするわ」

「あんな、俺たちは正規軍じゃないの。だからみんな貧乏学生だし、基本的には武器も市販のヤツなんだよ」

「ふーん……ねえ、ディアノイアってシャングリラにあるんだよね？ ラ・フィリアには上ったことある？」

「ラ・フィリア？」

それは確か、学園の中心部にある塔の名称だったか。どこかで聞いた覚えはあるが、あそこは基本的に立ち入り禁止だ。学園長の居座っているフロアまでしか階段も続いていないし、そこから上がどうなっているのかは永遠の謎である。

しかしそんな事を知っているとは随分博識な少女だ。とりあえず知らないことを応えると、彼女は不満そうに唇を尖らせた。

「ちええ、つまんないのー。ラ・フィリアって魔王が作った建造物なんでしょ？ 興味あったのになー」

「え、そうなのか？」

「シャングリラに住んでるのに知らないの？」

「ブレイド、聞いた事在るか？」

「ないない。ふーん、あの塔って魔王が作った物だったのかー」

俺たちが関心を示していると、アリアは得意げに両手を腰に当てて笑っていた。どうも俺たちが知らない事を知っていたと言うのが鼻が高いらしい。

「なーんだ、あんたたち何も知らないのね！ 前の戦争の事だったら、お城の前に終戦記念館があるから勉強してったら？」

アリアの言葉に二人して頷いてしまった。そんな事しているとアリアの背後から聖騎士が迫ってくる。

「アリア、後ろから来てるぞ」

「え？ ああっ！ グランにハインケル……め、めんどくさいのがきたー……。は、反対方向に逃げよっ！ いいから早く！」

アリアは俺たちの背中をぐいぐい押しやる。しかし俺の目の前にはマルドゥークが迫っていた。諦めて振り返ると、マルドゥークに気づいたアリアが青い顔をしていた。

騎士三名に囲まれたアリアは流石に諦めたのか、その場で溜息を着いて停止した。マルドゥークがアリアに駆け寄り、俺たちを押しつけてその手を掴む。

「探しましたよ、姫！ 全く、また稽古の時間を抜け出したそうで

すね!」

「ぶー……。マルドウークの真面目バカ。ちょっとくらいいいーじゃん」

「ちょっとではないでしょう、貴方は！　これで私が貴方を捕まえるのは七十二回目です！　全く、戦時中くらい御身の大事さを自覚してください!」

俺とブレイドの目の前で繰り広げられるよく判らない会話。駆け寄ってきた全身甲冑の二人の騎士がアリアを囲み、アリアは諦めて俺たちをみやった。

「捕まっちゃったからお城に戻るね。二人とも、また会ったら一緒にお出かけしようね!」

「……ていうかお前、お姫様だったの……?」

アリアはブレイドにウィンクを残して去って行った。残ったマルドウークが振り返り、俺を見つめて肩を竦めた。

「どうにも姫が捕まらないと思ったら、貴様が隠していたのか……。まあ、貴様が一緒だったのならば危険は無かったとは思うが」

「マルドウーク、あいつって?」

「あいつではない。アリア・ウトピシュトナ王女様だ。次期女王に對して『あいつ』呼ばわりは許さんぞ」

「……本当にお姫様だったのか。それは悪かったな、隠しちまって」

「なんだ、知らなかったのか！？　全く、貴様は戦闘以外にももう少し見識を広めるべきだな……。仕方ない、私がこれからみっちりとクイリアダリアの成り立ちについて説明を……」

「お、俺たち急ぐからまた今度な！　ブレイド逃げろ！」

「おい、ナツル！？　どこへ行くっ！！」

まともに相手をしたら長そうだ……。俺はブレイドの背中を押して一緒に逃げ出す事にした。

しばらく走った後、二人して溜息を漏らした。なんだか疲れた……。マルドゥークが真面目バカなのはアリアに同意するが、アリアがおてんばなのはマルドゥークに同意するよ……。

しかし七十二回城を抜け出す王女っていうのもどうなんだろうな。それをいちいち真面目に捕まえるあいつもあいつだが。ふとブレイドに視線をやると、自分の手を見つめながら顔を紅くしていた。

「どうかしたのか？」

「いや……女の子の手って柔らかいんだなーって思ってた……」

「……………ブレイド、相手は考えた方がいいぞ。一応あれでもお姫様だし……」

「なな、何いってたんだよ！？　そーいうんじゃないって！！　ああもう、ニーチャンと一緒にいると疲れるよ！　おいら戻って休むから、じゃあね！」

そそくさと逃げて行くブレイドを見送り苦笑する。まあ確かに可愛

い女の子だったし、ブレイドは相当やんちゃな男の子っぽいからな…… 同年代の女の子と話す事もないだろうし、無理もないか。

それにしても、ラ・フィリアが魔王の作った塔だとか色々余計な事を聞いてしまったせいで変に気になってしまった。アリアが城の前に記念館があると言っていたのを思い出し、俺は振り返って歩き出した。

城の前にその記念館は存在した。白い景観の中に紛れ、寂しく聳え立つ館……。俺はその門を潜り、中に足を踏み入れた。

そこには様々な国の歴史や先の大戦での出来事が記された書物が並べられ、同時に戦争に纏わるアイテムなどが展示されていた。国の歴史にはそれほど興味がなかったが、今なお厳格な雰囲気を残す武器の類は見ていて興味をそそる。

勇者の一行について詳しく記されている勇者記念スペースに足を踏み入れた時、正面に飾られた肖像画に目が行った。そこには若いアイマーククロークを着た白の勇者フェイトの姿がある。リリアと同じ栗毛色の髪の毛の、なかなかの美形だった。リインフォースを携えて立つ勇者の姿を眺めていると、背後に人の気配を感じ取った。

俺以外誰も存在しないと思っていた静かな記念館の中、振り返るとそこにはゲルトの姿があった。彼女も俺の姿を予想していなかったのか、驚いた様子で歩みを止める。

「……ナツル。どうしてここに？」

「お前こそ……。いや、まあ、以前の勇者に興味があったんだよ。お前もそんな所か？」

「まあ、そんな所です」

二人して並んでフェイトの姿を見上げる。この記念館には人の気配が殆ど無い。戦闘中でオルヴェンブルムへの人の出入りが制限され

ている事も勿論理由の一つだろう。だがこの街の人々にとってすでに勇者への興味、大戦への興味は薄れているのだろう。

展示品にはリインフォースの模造品もあった。本物と比べると流石に見劣りするが、展示品としてはいい作りの剣だ。そうした物を眺めていると、ゲルトが寂しげに呟いた。

「どこにもないんですよね……ここには」

その言葉の意味には俺も気づいていた。

この展示コーナーには、一つとしてゲインの名前が存在しないのだ。取り上げられているのはフェイトばかりで、ゲインの活躍は一つも残っていない。

それがかつて彼が浴びせられた汚名によるものであることは明白であり、俺は何も言えなくなつた。ゲルトが見つめているのは、父の記憶を消された場所……。ただじつとフェイトを見つめ、彼女は拳を握り締めていた。

展示品の中には勇者たちの集合写真も存在していた。そこにはヴァルカンの姿も、あのフェンリルの姿もある。ただ今より十年も前である所為か、二人とも若く見えた。フェンリルはフェイスガードのせいでよく判らなかつたけど。

集合写真の中からゲインを切り抜くのも不自然だと考えたのかもしれない。その一枚の写真にだけは、フェイトの隣に並んで立つゲインの姿が残されていた。ゲイン・シュヴァイン……。どこか優しげな、剣など似合わぬ穏やかな笑顔が印象的な青年だった。ゲルトはその姿を見つめ、辛そうに眉を潜めている。

「……お父様の記憶は、この世界からいつか消えてなくなつてしまふ」

ゲルトの呟きに振り返る。彼女は自分の手をじつと見つめ、そつと

指を握る。

「お母様も、シュヴァイン家を盛り返すのに必死でお父様のことなんて覚えてないから……。この場所からも、世界からも、ゲイン・シュヴァインの記憶が消えてしまふ……。それをつなぎとめる事が出来るのは、自分だけなんだって、そう思ってたんです」

「……そう、なのかもな。お前が勇者になれば、確かに親父さんの不名誉は報われる」

「ええ。だからわたしは勇者になりたかった。勇者になって世界を見返してやりたかったんです。でも……。今は魔剣だってない。お父様とわたしの間にあった絆が消えてしまったみたいで、今はよく判らないんです」

「勇者に成る理由か？」

ゲルトは小さく頷いた。それはフェンリルに魔剣を奪われる前から彼女の悩みだった。でもこうして実際に力を失い、その悩みは加速したようだ。

「リリアの勇敢に戦う姿を見て、どんどんわからなくなるんです。あの子は恐ろしい速さで強くなるのに、わたしは足踏み……。そんな自分に焦って、どんどんダメになる気がして……」

「ゲルト」

顔を上げるゲルトの頭を撫で、首を横に振る。

「そうやって思いつめるな。魔剣は取り戻すって言っただろ？ それ

とも俺の いや、リリアの言葉が信じられないのか？」

「そ、そういうわけじゃっ！」

「……………結局さ、俺やリリアがお前に何を言っても気休めに過ぎない。だから言える事は凄く少ないと思う。でもな、ゲルト」

いつだったか、全く同じ言葉を俺はリリアに口にした。

誰かの望む勇者ではなく、自分自身が望む勇者になればいいと。それが無責任である事も、なんの解決にもなっていないことはわかっている。でもきつとそうするしかないのだ。

それに俺は魔剣を自分の剣にしようとしていないともゲルトに言った。ゲルトは本当はどうしたらいいのかわかっているのだろう。でも、そうできない。心の中にあるリリアへの遠慮や、この世界の中で生きることへの諦めが彼女の答えを遠ざけているのだ。

「だからな、ゲルト。本当にもう嫌だっと思うなら、勇者なんてやめちまえ」

「そんな、簡単には……………」

「いらないか？ でもそうするのが一番だ。お前だったら嫁の貰い手なんていくらでもあるだろ。適当に結婚して子供産んで幸せになるってのもアリだろ」

「……………お嫁、ですか？ 考えた事も、無かったですね……………」

驚いた表情で俺を見つめるゲルト。そう、こいつは考え方が偏りすぎなんだ。色々な可能性や現実があり、取捨選択した未来で俺たちは生きている。辛いなら逃げてもいいんだくらいの気持ちで向かつ

たほうがいいこともある。

「学園の教師になるってのも悪くない。兎に角未来は一つじゃないんだ。勇者にならなきゃいけないとかいう風には考えるな。そんなもん、なりたいたいからなるもんであって、無理になるもんじゃない」

「……………言っている事はわかりますが」

「答えも焦らなくてもいい。無理に今すぐ何とかしようとするな。お前はのんびり構えてれば、あとは俺がフェンリルをぶっ飛ばしてやる。それから答えを出したって遅くはないだろ？」

「……………はい」

ゲルトは浮かない表情で頷いた。どうにも俺が何か言っても聞いてくれるような気がしない。

溜息を漏らし、ゲルトの肩を叩く。見捨てられた子犬のような目をした女の子に別れを告げようと思ったが、どうにもほうつておくわけにもいかないようだ。

帰るのを諦め、俺は再びフェイトの肖像画に目をやった。俺の隣に立ち、ただ黙って考え込むゲルト。そうして俺たちは暫くの間、何をするでもなく人気の無い記念館の中で立ち尽くしていた。

駆け抜ける戦意の日(1) (後書き)

↓ディアノイア劇場↓

アンケート作りました編

リリア「というわけでアンケートを作ってみましたーっ！ もう投票してくれた人、ありがとー！ してない人は早くしやがれ」

ゲルト「行き成りなんですか貴方は……」

リリア「うんっ！ まあちよつと宣伝しとこうと思って……。作ったばかりでも意外と見てくれてる人がいるみたいなんだよ！」

ゲルト「まあ、ユニーク600前後ですから……何人かは投票してくれるんでしょうけど……」

リリア「あ、ちなみに基本的に作者が今後の方針を考えるのに使うから常時結果は公表してないのですよ！ でもまあ纏まったらそのうち発表してもいいかな？」

ゲルト「ご協力感謝いたします」

リリア「アンケートで人気だった人はそのうち番外編か何かで丸々一話使いたいだから、どんどんリリアに組織票&連打票してね！」

ゲルト「……いいんですか？」

リリア「いいの！メインヒロインなんだもん、いいのいいのいいのー！！」

ゲルト「そうですか……。まあ、組織ぐるみになるほどたいした物ではないですからね」

リリア「でもみんな作者にしか見えないからってコメントぶっちゃけすぎだよ　ゲルトちゃんへの投票理由、『ツンデレ』とか」

ゲルト「……一言で済まされた……」

リリア「そんなわけで、アンケートの宣伝でしたー！」

ゲルト「あの、この『犬』ってなんですか？」

リリア「察してね」

駆け抜ける戦意の日(2)

聖神城リア・テイル。

この世界にまだ神が存在した頃、この城には女神が住んでいたと言
う、由緒正しいクイリアダリアの中心地である。

その大きさはもう半端ではなかった。見上げる限り城、城、見渡す
限り城、である。とにかく城だ。サクラダファミリアもビックリで
ある。

神様が住んでいた場所云々というのは事実かどうかは怪しいが、そ
の女神の由縁あってこの国を治めるのは常に女王 女性であるら
しい。聖騎士団に女性の騎士が多いのも、女性社会的な部分の名残
だという。

アリア・ウトピシュトナ……昨日俺が遭遇した女の子はこの城に住
むお姫様であり、女王マリア・ウトピシュトナの一人娘だという。
女王は先の大戦時には自ら戦地に赴き、剣を手に戦った勇敢な女性
だそうだ。

この国で絶対的に女王への信頼が厚いことには、聖騎士団を率いて
実際に戦ったという功績があるからこそ。故に今でもその威信は加
速するばかりで、衰える事を知らない。

そのマリア女王に呼び出しを食らったのが三十分ほど前の事。俺た
ちは慌てて準備を済ませ、城に向かった。というのも、迎えに来た
マルドゥークが異様に急かすのである。

「女王のお手を煩わせるな、うつけ！ 速やかに準備を済ませ、謁
見仕る！！」

とのことで、呼び出しを食らった俺たち 俺とリリアとゲルトの
三名は城にしょっ引かれる事となった。

別に悪い事をした覚えは無いが、女王が用があるというのだから仕

方ない。深々と溜息を漏らし、礼儀作法について五月蠅く説明しながら歩くマルドゥークの言葉に適当に相槌を打ちながら城の門を潜る。

そこは豪華絢爛、まさに神代の城。女神の城というだけはある。紅い絨毯の上を歩き、ひたすらに広すぎて反響しまくる足音と自分たちの声に違和感を覚えながら突き進む。

状態は騎士たちが行き交う異常な空間だった。どこもピリつとした空気に包まれ 戦時中ということもあるのだろうが 出歩く人間全員が偉そうに見えてくる。

城内を数十分歩き続け、ようやく巨大な扉の前に立つ。謁見の間の扉を開こうとしたらマルドゥークにその手を叩き落された。

「阿呆か貴様は。女性を先に行かせるものだろうが」

「……そうなんだ。知らなくてすいません……」

「反省すればいい。いいか、礼の仕方はこうだ、こう。両手の指を組んで、手の甲を上！ 背筋は真っ直ぐに、両手を組んだまま胸の前で固定！ 頭は軽く下げたまま、女王の許しが出るまで頭を垂れるのだ！ 違う、このうつけ！！ 礼の仕方もわからんとは、貴様それでもクイリアダリア国民か！？」

扉の前でマルドゥークにぼろくそに言われながら礼の練習をする俺。何でこんなことしなきゃならないんですか……。くそう、学校じゃこんなん教えてくれなかったぞ……。

リリアとゲルトは余裕らしく、二人とも俺を見ながら各々の反応を浮かべている。何笑ってんですかりリアさん。ゲルトも昨日は泣きそうな顔してたくせに……。くそ、偉そうに。

「そうだ、そう！ 礼だけなら猿でも出来る！ 大切なのは親愛な

る女王陛下に対する心遣いだ！　いいか、礼が終わったなら右膝を着き、左手を大地に着き、うやうやしく女王のご機嫌を伺うのだ。空いている手をぶらぶらさせるな！　言われずとも胸の前でそろえるくらいやってみせろ、木偶が！　貴様の根性はどうなっているんだ！　ヨト神に土下座でもしてこい！！」

「あの、マル様……。そろそろ時間が……」

「……ハインケルか。まあいい、貴様も霊長類ならば勇者二人を見習って行動出来るだろう。ほら、さっさと行け……馬鹿が！　女性が先だと言っただろう！！」

散々な目に合いながらようやく扉が開かれる。俺は女性二人に続き、ゆっくりと歩き出した。女性が先……成程、これなら少しは二人を真似て行動すれば……。

入った直後、広い直進通路に出た。女王の謁見まではまだ遠いらしい。左右に長槍を構えた騎士たちがずらりと並び、一糸乱れぬ動きで槍を打ち鳴らす。それがアーチを描き、俺たちはその間を進んで行った。

女王マリアがどんな人物なのか気になっていたのだが、彼女の周囲には暗幕がかかっていてお姿を拝見する事は出来ないようだった。その傍らに馬鹿でかい十字架のような武器を構えた女性が立ち、俺たちに笑顔で手を振っている。

「リリア・ライトフィールド、ゲルト・シュヴァイン・ホンジョウナツル三名、女王のご拝命によりこの場にお連れ致しました」

「ご苦労様、マルドゥーク」

女王の声にマルドゥークが頭を下げる。十字架の騎士の反対側に立

ち、女王を守るようにして俺たちの前に立ち塞がる。言われたとおりに礼をして俺たちは女王の許しを得て膝を着いた。それにしても流石にリリアとゲルトは慣れてるな……。リリアがずっこけるんじゃないかとヒヤヒヤしたが、どうにか無事辿り着けた。問題はむしろ俺の方か……。緊張してはいないが、居心地の悪さは尋常ではない……。

「リリア、ゲルト。二人とも、戴冠の儀以来ですね。その身の無事を喜ばしく思いますよ」

勝手に話が進んでいる。というか俺は何故呼ばれたんだ。混乱する頭の中、周りで槍を構える騎士の視線が痛い……。そりゃそうだ、どう見ても俺はこの場で浮きに浮きまくっている。

突き刺さる視線の矢の中、俺はひたすらに耐えていた。暫く女王は世間話に近いやり取りを勇者と交わしていたが、本題に入るにつれその声色は優しい物から緊張感のある物へと変化していった。

「黒白の勇者よ。貴方たちを呼び出したのは他ならぬこの戦乱の世の為です。貴方たちも知つての通り、今この世界は大きな混乱の最中にあります」

その声は威圧的というよりは悲しげだった。何となくこの女王は……そう、多分、本当にこの世界の混乱を憂いているのだと思う。姿さえ見えない暗幕の向こう側でも、その気持ちは俺たちにも伝わってきた。

「バズノク王は周辺諸国と一斉に蜂起し、我らの神ヨトを地に貶めんと剣を手にしてしまいました。残念ですが、降りかかる火の粉は払わねば成りません。クイリアダリアは、バズノク王国を駆逐する事を決定しました。これは、長老議会の決定でもあります」

やばいもう何いつてんのか全然わかんない。リリアとゲルトの表情も後ろからじゃわからないし、俺はどんな顔をしてこの話を聞けばいいんだ。

「未だ未熟なその身ですが、良くぞ魔物の軍勢を打ち払ってくれましたね。貴方たちの活躍は、わたしの耳にも届いて居ます。特にそう、貴方。本城夏流の噂はかねがね」

「……え、俺……つと、私でありますか？」

「ふふふ、そう畏まらなくてもいいですよ、夏流。貴方の事情を知る者　アルセリアから話を窺っていると言えば、ご理解いただけますか？」

「……あんたも、俺の事を？」

思わず立ち上がってしまった上にあんた呼ばわりしてしまった。直後、周囲の騎士から槍が突きつけられる。拙い事をしてしまったと反省するよりも早く、マルドゥークの指示で騎士たちが後退する。

「本城夏流。貴方に、バズノク王の討滅を命じます。聖騎士団に同行し、勇者二名と共に見事諸悪を討ち取って見せなさい」

「……お言葉ですが、女王。俺はただの素人です。貴方とてそれはご存知でしょう？」

「だからこそ……いえ、貴方ならば。運命とて変え得るかもしれません。その救世主の力、クイリアダリアのために役立ててはくれませんか？」

女王が救世主という言葉を口にした瞬間、場がざわめいた。厳粛な場であるというのに騎士たちも黙ってられないほどの衝撃がその言葉には秘められていたらしい。

マルドゥークが場を沈めると、残ったのはリリアとゲルトが振り返って俺を見る視線だけ。居心地の悪い中、腰に手を当てて溜息を漏らした。

「本城夏流。貴方をこの瞬間、簡略的ですが救世主メサイアに認定します。今は見習いですが、同じく見習い勇者の二人と共にその力をわたしに示して下さい。良いですね？」

若干強引だが、仕方ない。断るわけにも行かず、俺はマルドゥークに習ったヨト教の礼をして、小さく呟いた。

「御心のままに」

目をぱちくりさせながら俺を見上げる二人の勇者の驚いた様子が、ちよつとばかり滑稽だった。

駆け抜ける戦意の日（2）

「「ナツルが救世主メサイアになった!?」」

声をそろえる我が仲間たちを前に俺は肩を竦めた。

堅苦しい城の謁見の間から開放された俺たちはオルヴェンブルムの宿に戻った。その時の事を色々と説明しているうちに、そんな話になってしまったのだ。尤もそれを口にしたのは俺ではなくリリアだ

ったが。

「ナツル、お前マジで救世主だったのか……」

「おいおい、信じるなよ……。なんだアクセル、フェンリルが言ってたからってお前も知ってたじゃないか」

「敵の戯言と女王陛下のお言葉じゃレベルが違うだろ……。救世主、かあ。救世主っていうと、確か……」

「英雄神ナタル・ナハ……。ヨト神が人の中から選定したと言われる、神話上の人物です」

腕を組んだゲルトが冷静な表情で語る。どうもヨト教の中では救世主とはナタル・ナハの代名詞であり、相当ありがたいもんらしい。この場でナタル・ナハを知らなかったのはブレイドのみ。それ以外は全員　アクセルでさえ知っている事だった。流石にヨト信仰の中心地、クイリアダリアである。

「でも見ての通り俺は別に神様でもなんでもないぞ」

「それはそうでしょう。あくまで女王は貴方に比喻としてナタルの面影を重ねたのですから。ですが、その比喻としてナタルを引き合いに出す事が既に異常なんですよ!」

ゲルトがにじり寄ってくる。俺は適当に苦笑を浮かべながら後退した。そんな風に言われても、困る事しか出来ない。俺はこっちの世界には縁のない人間なんだからな……。

「でもよ、ゲルト?　ナタル・ナハってのは、確か悪鬼魔龍の類だ

「つたる？ 人間じゃあなかつたはずだぜ」

「よくご存知ですね、アクセル・スキッド……意外です。ええ、ナタル・ナハは元々は『この世ならざるもの』……龍や鬼の類だったと言われています。ですが一説にはナタルのその人外というのは、ナタル自身が持つ人の身にあまる魔力総量の為だといわれているんです」

「人外レベルの魔力総量……じー」

全員が俺を見つめた。そんな風にじろつと見られても困る……。

「ナツル、アンタたしか電撃得意だったわよね？ レーヴァティンとかいうあの術式も雷だし……」

「それがどうかしたのか？」

「どうかしたっていうか、ナタル・ナハは雷神なのよ。なるほどね、女王がアンタを救世主と呼んだのも頷けるわ……」

全員が頷いている。だから、そんな揃って納得されても困るんだけど……。

「も、もういいだろ。そんな神話上の人物に俺を例えられても困る……。フェンリルにだって勝てないのに、神様であるわけがないだろが」

そんなこんなで一先ずこの話題は打ち切りになった。気持ちを切り替え、今後の方針について語らなくてはならない。

俺たち勇者部隊はこれからマルドゥーク率いる聖騎士団と共に戦地

に赴き、バズノク王国を攻める事になった。その事をまずは説明しなくてはならない。

「勇者部隊はマルドゥークに同行してバズノクを落とす事になった。現在既に聖騎士団はバズノク国境を押えている状況にある。つまり俺たちはバズノクにトドメを刺す為の増援、というわけだ」

オルヴェンブルムを列車にて移動し、北へ進軍する。途中からは徒歩でバズノク国境を越え、バズノク首都ズエルカルブへと攻め入る。こちらは魔術、武術に長けた聖騎士団五百名による進軍。俺たちの出番があるとは思えないが、命じられた以上は戦わねばならないだろう。

「ズエルカルブは山に囲まれた街らしい。オルヴェンブルムよりも大分小さな拠点だが、周囲の森林地帯や山岳地帯が難所だ。山越えには気をつけないといけないな。それと理不尽な話だが、勇者部隊には他に増援は無し……。他の生徒はオルヴェンブルムの防衛に半分ほど残し、残りはもう撤退するそうだ」

「つまり、ここにいる面子だけで戦ってワケね。ま、アタシたち強いしそんなに問題ないんじゃない？」

確かにこのメンバーはパーティーバランスもなかなか良好だし、何よりももう既に何度か実戦を経験して戦闘にも慣れている。こう何度も乱戦に放り込まれれば、嫌でも慣れるというものだ。

それになにより実力的に他の生徒よりも優秀な事が素晴らしい。特にリリアの成長は目覚しく、この分なら充分主力として運用出来る事だろう。

「基本的に俺たちの役割は聖騎士団のおこぼれ頂戴だ。むしろ今ま

での戦闘と比べれば楽だろうな。フォーメーションはオーソドックスな前衛後衛での分配にする。特に他に目立った決定はないな。質問はあるか？」

「……なあ、ナツル。質問ってわけじゃないんだけどさ。なんつか、敵さんの撤退の速さが気になるんだよな」

アクセルの言うとおり、たった一週間ちよつと攻め込んできただけで、魔物は撤退してしまった。なんというか、戦争と呼ぶには少々お粗末が過ぎる。他の国々も殆ど制圧が進んでいるし、問題は残す所バズノクのみだ。

首謀国を完膚無きまでに叩き潰し見世物にする意味でもこの聖騎士団の行軍は必要だが、正直俺たちが出撃しなければいけないほどの状況には思えない。不意打ちならば兎も角、人数も揃い足並みも万全の今の聖騎士団の敵ではないだろうに。

「まあ、そこは向こうの都合だからな。何とも言えない」

それに気になるのは……この数日の戦いで、敵のリーダーらしき人間とは一度も刃を交えていない事か。

寄ってくるのは魔物ばかりで人間の兵隊は一人もいなかった。各地に時々現れて聖騎士団を抑えていたと言われるリーダーの行方が判らないのが今は不気味ではある。それがもしフェンリルだとしたら……俺たちの前に現れてくれなければ困るのだが。

「兎に角やるだけやってみよう。出発は明日になるそうだから、今日中にみんな準備を進めてくれ」

全員同時に頷いた。さて、これでやるべき事はやった。あとは明日に備えるだけだ……というその時、宿の扉が開いて何名かの騎士が

俺たちの傍に歩み寄ってきた。

そのうち二人　図体のかい中年の騎士とその隣に立つ小柄な青年騎士には見覚えがあった。確か、マルドゥークと行動していた聖騎士二名だ。ついさっきも謁見中にその姿を見受ける事が出来た。それで思い出す事が出来たのだが、二人の前に立つ穏やかな微笑を浮かべている女性にも見覚えがある。マルドゥークの隣に立っていた、確か。

「聖騎士の……エアリオ？」

「あらあら、覚えていてくれて嬉しいわ、夏流ちゃん」

頬に手を当て微笑むエアリオ……さん。さん付けしよう、この人は……。

馬鹿でかい十字架を誂えた鉄槌を片手にするエアリオさん。全身をゴツイ聖甲冑で覆い、顔だけちょこんと鎧の中から出ているようなそんな印象を受ける。そんな彼女は俺たちの姿を見渡し、両手をぽんと叩いて言った。

「あらあら、まあまあ！　なんて素敵な偶然なんでしょう！　まるで運命の巡り合わせね」

「……な、何が？」

「だって、全員わたくしの顔見知りなんですもの」

「「え？」」

俺たちは同時に声を上げた。エアリオさんはずっと閉じていた瞳を開き、きらきらした澄んだ瞳で俺に顔を近づけ、じっと瞳を覗き込

んでくる。

「貴方は変わらないわねえ、夏流……」

「……ど、どこかでお会いしましたか？」

顔が凄まじく近い。なんだかよく判らないが甘い香りが鼻をくすぐる。花……？ 何かの花のような香りだ。どこかで、覚えがあるよ
うな……。

「リリアちゃんに、ゲルトちゃん。ブレイドちゃんに、メリーベルちゃん。貴方は……うん、ベルヴェールちゃんね。それと、懐かし
いわー。アクセルくん」

「……ど、どもッス……」

気まずそうな表情で応えるアクセル。一体どういう関係なのか知らないが、二人は明確に知り合いのようだった。

「夏流ちゃん、あのね。わたくし、今年で二十五歳になるのよ」

いきなり何スか。

「だから、十年前にはもう戦争に参加してたの。うん、この意味
わかってもらえるかしら？ 判ってくれないと、お姉ちゃん泣い
ちやうわ」

「え？ え？」

なんだ？ 十年前の戦争に参加してた……十五歳でか？ まあリリ

アどころかブレイドみたいな子供もいるのだから、俺たちも人の事は言えないんだが。

腕を組んで考え込んでいると、エアリオさんが目に涙を溜めながら唇を噛み締めていた。これはやばいと思って必死に頭を回転させる。

「あ。つまり、フェイトと面識があるんですか？」

「そう、そうなのよ！ うふふ、嬉しいわあ、判ってくれて。リリアちゃんもゲルトちゃんも、わたくしが前に会った時は、こゝろゝんなに小さかったのに」

彼女は人差し指と親指の間に豆粒程度の大きさの隙間を作り、笑顔で語る。そんなに小さかったゲルトとリリアは是非知り合っのを遠慮したい。

「まあ、皆は忙しいから会えなくて寂しいのは我慢できるわ。でも、アクセルはたまに手紙くらいくれたっていいんじゃないかしら？」

「いやあつ！ すいません、なんか俺もバイトとか色々忙しくて！ はは、ははは……！」

いつに無く戸惑っているアクセル。その後暫くエアリオさんはわけのわからない言葉を残し、俺たちに背を向けた。

「明日からは、戦地で一緒に頑張りましょうね。それじゃあみんな、ばいばい」

「ばいばい……」

全員あの人の毒気に当てられてしまった。あほみたいにへらへらし

ながら手を振り返す。騎士二名が頭を下げ、俺たちは二人の普段の気苦労に想いを馳せた。

にしても、綺麗な人だったな。マルドウークの姉だったろうか。戦地でそんなことを言っていた気がするが……。不思議な人だった。

「……師匠？ 何にやにやしてるんです？」

「え？ 別にそんなことはないけど」

「嘘ですね、ナツル。貴方は今、にやにやしていました」

振り返るとリリアとゲルトがじいつと俺を睨んでいた。何で？ 俺が何をしたっていうだリリアさん。ゲルトさーん……。

「そ、そんな事よりアクセル！ お前、エアリオさんと知り合いだったみたいけど」

「ナツル、俺に振って逃げようって魂胆だな……。まあいいや。別に隠すことじゃないからな、うん」

そうしてアクセルは語り出した。エアリオとの接点は、彼が元々この街に住んでいた事に由来する。

「俺は前の戦争で両親を殺されて、自分も魔王軍に殺されかけたんだ。でもまあ、なんつーか……。うん、勇者のパーティーに命を救われたんだよ。それで、この街の孤児院で育ったんだ。エアリオはその時よく俺の面倒を見てくれた、まあ皆のお姉ちゃんみたいなものっていうか」

この世界では魔王戦争による孤児は珍しくはないのだろう。しかし

明るいアクセルの過去にそういう事があったというのはちょっとだけ驚きだった。それにその命を救ったのは、また勇者……。つくづく勇者縁の部隊だなあ。

「エアリオはあんな性格だから、結局こっちが構ってるようになるっていうか、良くわかんない人だろ？　今でも会うつとちょっと苦手なんだよ」

「ふーん……。アンタにも苦手なもんってあったのね」

「ベルヴェール、それどういう意味っすか？」

二人が笑いあっているのを見て一先ず会話は中断する事にした。話すべきことは話したし、あとは準備を進めるだけだ。

支度を整える為に解散するメンバーを眺めていると、一人残ったゲルトが俺の隣に立ち、そっぽ向いたまま何かを言いたげにしている。

「なんだ、何か用か？」

「用、というわけではないのですが……。一応隊長に報告しておこうと思つて」

何でも、ゲルトは新しい剣を調達することにしたらしい。とは言え、このオルヴェンブルムにはゲルトの実家、シュヴァイン家がある。新たに購入するのではなく、シュヴァイン家の武器庫に武器を取りに行くという話である。

「魔剣を取り戻すのを諦めたわけではありませんが、武器が無い事には戦えません。後方支援では、その……。勇者として、戦えませんか」

「あくまで剣を手の前に出たいわけか。まあいいだろ、一人で取ってくればいいじゃないか」

「……それは、そうなんですが」

ゲルトは腕を組み、何だか気まずそうな顔をしている。そういえば昨日の口ぶりだと、ゲルトはシュヴァイン家そのものとは仲がよくないのかもしれない。母親はシュヴァイン家を盛り返すのに必死で、ゲインのことなんて覚えていない。そんなあてつけのような事を俺にも愚痴っていたし。

「自分の実家に戻るのに遠慮なんか要らないだろ？　どうしても気が進まないなら、リリアでも……」

「リリアはだめです！　母は、フェイトを憎んでいますから……」

なるほど、それで俺ってわけか。他のメンバーを誘おうにも、忙しそうだしな。ゲルトの指名をもらえたというのは、他のメンバーより少しは気を許してもらえているのだと自惚れてもいいのだろうか。

「……わかったよ。シュヴァインの武器庫に行つてすぐ戻ってくるだけ、だろ？　しょうがねえなあ」

「貴方と一緒に、というのは、不本意なのです。不本意なのです？　それを誤解されては困ります。本当は、貴方になんて頼りたくはないんですよ？」

「はいはい、わかってるわかってる」

「な、ほ、本当にわかってるんですか！？　なんですかその態度は！　仕方なく貴方なんですよ！　他にいないから！」

「だからそれ、俺だから選んだって言ってるようなもんだぞ」

ゲルトは顔を真っ赤にして仰け反った。襲い掛かるうにも、この場には魔剣もモップもない。拳をわなわなと震わせ、ゲルトは先に宿から飛び出してしまった。

一部始終を遠くで眺めていたリリアが階段を三段飛ばしで下りてくる。そうして俺の隣に立つと、ぐいぐいと宿の外に押し出そうとする。

「師匠、ゲルトちゃんをちゃあんとエスコートするんですよ！　ゲルトちゃんにもしもの事があつたら……その時は……」

リリアさん、髪の毛が銀色になりかかってるんですけど。リリアさん。

そんなわけでリリアに釘を刺されつつ、俺は宿を後にした。外に出るとゲルトは宿に背を預け、腕を組みながらちゃんと俺を待っていてくれた。

かくして二人でシュヴァイン家の館へ向かう事になったのだが……。

「で、でかい……」

見上げる巨大な館に思わず足が止まる。ゲルトは当たり前のように門の前に立っているが、俺の家だってここまでゴージャスじゃないぞ……。

「ほら、急ぎますよナツル」

「あ、うん……ごめん、俺普通の服で着ちゃったんだけど、いいの？」

「何とぼけた事を言ってるんですか貴方は……！　わたしが許可するのですから、いいんです！」

そう言つてゲルトはずんずん歩いて行く。俺は溜息を漏らし、その後についてシュヴァイン家を訪問するのであった……。

駆け抜ける戦意の日(2) (後書き)

↓ディアノイア劇場↓

コンビ二に夜中毎日通ってたらすっかり店員と仲良しで話しこんでしまう編

アイオン「やあ、こんばんは。昼間に読んでいる良い子はこんにちは。好きなものは男性の悲鳴、アイオン・ケイオスです」

ゲルト「え……？ え？ わたしも何か面白い事を言わなければならぬんですか？」

アイオン「いや、構わないんじゃないかな？ 君はそのままでも面白いし」

ゲルト「というか、どうして貴方が？ リリアはどうしたんです？」

アイオン「うん、まあ、アンケートの結果を察してもらえればこの組み合わせも理解してもらえるだろう？ さて、今回から何度かに分けてボクがこの世界の魔法について説明しよう。嫌がっても結構だよ？ その読者の嫌そうな顔がボクには堪らないのさ」

ゲルト「そ、そうですか……え？ わたし、いる意味あるんですか？」

↓設定資料集番外編↓

アイオーン「まず、魔法とは何か。魔法とはこの世界に生きる人間ならば誰でも所持している『魔力』を使って行う神秘の事だ」

『魔法と魔力』

魔力とは生命力でもあり、人間だけではなく命在るものならば究極的な話草木でさえ所持している。魔力の所持容量を魔力総量と呼ぶ。魔法は魔力を消耗し、神秘現象を発生させる事が出来る。魔法には大きく分けて放出型と蓄積型が存在する。

アイオーン「魔力を魔法とした時点で魔力総量を消費してしまう為、魔法を放てる回数は魔力総量に左右される。勿論、どの程度強力な魔法を放てるのかも総量によるのさ」

ゲルト「自らの魔力を上回る魔法の使用は命にかかります。魔法を使う時は自分の限界を把握して行いましょうね」

アイオーン「放出と蓄積は後衛と前衛に例える事が出来るけど、実際に戦地に立つならば両方出来ない^{レーヴァテイン}と厳しいだろうね。例えば夏流の神討つ一枝の魔剣は蓄積の後、放出を行っている。この二つが円滑の行える事が魔法戦闘の勝敗を大きく左右するんだ」

ゲルト「蓄積では主に身体に魔力障壁を発生させたり、武器や自らの身体に魔力を収束させ、攻撃力を上乘せするのに使います。一度放出し、魔法として発動したそれを留めておくのも蓄積技能ですね」

『攻撃力』

魔力を消耗することで物理ダメージを上乗せする事が出来る。魔力を持つ人間による攻撃力の計算は、例えばリリアであれば以下の通り。

聖剣攻撃力＋筋力＋蓄積魔力＝物理攻撃力

逆も然り。これにより、子供でも魔力の才能に恵まれていれば凄まじい怪力を発揮する事が出来るし、大剣だろうがなんだろうが片手で振り回す事も可能である。

直、さらに武器そのものが特殊な効果を持つ場合はそれを上乗せするため、単純に武器の良し悪しは攻撃力に大きく影響すると言える。

アイオン「ちなみに男性より女性の方が魔力総量は多いと言われるんだ。これが女性の騎士でも男性に負けない力を発揮できる理由とされているが、同時に女性に後衛職が多いのも頷けるだろう？」

ゲルト「男性のほうが体格的には圧倒的に有利ですからね」

アイオン「魔力は何時間か休む事により自然と回復する。ただし回復するペースは休む環境や体調などによりある程度前後する。魔法を使った後はちゃんと睡眠をとるようにしよう」

ゲルト「次は魔法の発動についてです」

『詠唱と無詠唱魔法』

詠唱とは魔法を発動するのに使用する特殊な術式発動コードである。自らの中で魔法と成す前に蓄積し、形を形成するに至る魔術工程を補佐する効果を持つのが詠唱であり、本来魔法の発動に必要な『魔法発動に必要な魔力のイメージ及び実体化』を補佐する効果を持つ。炎を発生させる魔法を発動する時、人は魔力によりその炎が発生するという工程を擬似的に生み出し、世界に具現化する。詠唱はその擬似工程をサポートする効果を持つのである。

つまり魔法を発生させるのに明確なイメージと確実な魔力操作を持つ人間は詠唱なしで魔法を発動出来るのである。

直、必殺技も大きく分類させれば魔法であり、強力な魔法であればあるほど術式も難解になり、詠唱が必要となる。詠唱が無くとも術式を発動できたとしても、己のイメージを発動するトリガーとして術式の名前を口にするのは効果的である。

ゲルト「別に意味もなく技名叫んでるわけじゃないんですよ！」

アイオーン「君は渦巻く闇の花弁をリリアに放つ際無詠唱で行ったね。不完全な術式と成ってしまったのも仕方ないことだ」

ゲルト「……うっかりぶっ刺しちゃったのは、それとは関係ないんじゃない……」

アイオーン「どんな大魔術師でも、発動トリガーでもある魔法名くらは口にするものだよ。尤も、魔法名を口にしたところで詠唱の段取りや擬似再現工程が正確であり、なおかつ魔力が足りていなければ発動はしないものだ」

ゲルト「自分に合った魔法の発動スタイルを無理なく選んでくださ

いね」

『今回のまとめ』

魔力は生命力。

魔法には放出と蓄積の二種類がある。

詠唱はしてもしなくても構わないが、したほうがいい。

アイオーン「今回は属性と必殺技について説明する予定だよ」

ゲルト「あの……またわたしなんですか？」

アイオーン「それは読者と神のみぞ知ることさ、フッフ」

駆け抜ける戦意の日(3)

誰かの泣き声が聞こえた。

それが嫌で、見なくてもいいものに目を向けた。

誰もが笑って通り過ぎて行く大通りから外れた袋小路で、その女の子は涙を流していた。

ゴミ山に囲まれた酷く狭い空間。しかし彼女にとってそこは誰にも邪魔される事のない聖域だった。泣いていても誰にも咎められる事も気に掛けられる事も無い世界の果て。そこに、彼女以外の小さな影が差した。

「だいじょうぶ？」

少女は涙を両手で拭いながら顔をあげた。そこに立っていたのはとても綺麗な子だった。綺麗な顔立ち、綺麗な瞳……綺麗な髪。

初めは男の子だと思えた。その子の服装はどう見ても女の子のそれとは違っていたから。オルヴェンブルムの街で、スカートを履いていない女の子など、見た事もなかったから。

「いたいの？」

答えなかった……否、答えられなかった。初対面の他人を酷く怯える傾向にあった彼女にとって、例えそれが天使であろうが悪魔であろうが恐怖の対象でしかない。

この世界にあるすべての命を恐れ、膝を抱えて俯いていた少女。そのゴミだらけの場所に、来客は何の気にも留めず、少女の隣に座って微笑んだ。

「けがしてる。なおしてあげるね」

すりむいた手。そこにもう一つの手を重ね、暖かい光が広がった。
傷は見る見る内に消え去り、少女は目を輝かせた。

「すごい……」

「えへへ、まだ習ったばかりでうまくないけど……。ねえ、ほかにいたいところない？　へいき？」

「へえき……」

「そっか、よかった！　ねえ、きみ、お名前はなんていうの？」

「……………ゲルト」

顔を上げ、涙を拭うゲルト。その顔を覗き込むように、優しく彼女は微笑んでいた。

「リリア」

そう、それが二人の間の始まり。心の中に残っている、消せない記憶。

「リリアっていうんだ。ねえ、お友達になろうよ？　一緒にあそぼう！」

薄暗い闇の中から連れ去るように手を伸ばして微笑む少女。
ゲルトにとって、その姿は天使以外の何者でもなかった。

駆け抜ける戦意の日（3）

シュヴァイン家の武器庫に向かう為には一度屋敷に入らなければならない。何故ならどうやら武器庫は地下にあるらしいからだ。

広々とした庭を抜け、門を潜る。その頃には気づいていたが、どうもシュヴァインの家紋が薔薇の花らしい。庭も様々な薔薇が咲き乱れ、迂闊に立ち入ると傷だらけになってしまいそうだった。

でもその薔薇というのはゲルトに似合っている気もする。そんな余計な事を考えながらゲルトの後に続いた。

家はびつくりするくらい広いのに、中には使用人の一人もいなかった。やたらと静かな空間……。そういえば、ゲルトは扉を開けるのに鍵を使っていた。もしかするとシュヴァイン家そのものには今人が誰も居ないのかもしれない。

「運がよかったな。誰も居ないみたいじゃないか」

「ええ。母は商人で、世界中を駆け回ってるんです。家になんか寄り付くわけありません。わたしの為に屋敷に残っていたメイドも全て解雇したので、家に誰も居なくて当然です」

あのー、それ、誰も居ないのわかってたのに俺を連れてきたってことですか？

まあ、あの様子だともшибったり母と遭遇したら、とか考えていたのかもしれないが。それにここに俺が居る事はさほど無意味ではないのかもしれない。先ほどからゲルトは寂しげな表情を浮かべたまま、ずっと掌を握り締めている。

豪華絢爛な屋敷なのに、人気の無い、埃の積もった屋敷……。これがゲルトの実家。心の中にある彼女の風景なのかもしれない。ふとそんなことを思い、寂しくなった。

リリアの実家にはうさんくさくて豪快な爺さんが一人、アロハ着込んでウクレレ鳴らしているのに、こっちは無音だ。なんだか二人の間にある様々な差を思い知らされる。

「……………お、怒らないんですか？」

「ん？ 何がだ？」

「……………だから、その……………。誰も居ないの、わかってたんだろ、って、思ってたんでしょう…………？ 文句くらいなら、聞きますけど」

「いや、別に。そんなことで一々文句言ってたら勇者部隊なんてやつてられん」

「なら、良いんですが。わたしも少し、どうかしていました…………。誰も居ない家であることなんて、判っていたはずなのに…………」

足を止め、廊下の壁にかけられているゲインの肖像画に目を向けるゲルト。ぼんやりとそれを眺める横顔からはいつものつんけんした態度は読み取れなかった。

「ナツルは、わたしがなりたい勇者になればいいと言いましたね」

「ああ」

「……………わたしは、勇者になんてなりたくなかったです。本当は……………本当は、貴方の言うとおり。将来の夢は、お嫁さんだった。別に特別じゃなくて、貴族じゃなくてもよかった……………。ただ、普通に幸せになりたかった。でもそれじゃいけないんだって思いこんで来ました。今までずっと考えていたけど、答えはまだ見えない……………」

ふと言葉を止め、俺に視線を向けるゲルト。

「魔剣を取り戻せば、少しは答えが見えるのでしょうか……？」

「どうだろうな。魔剣そのものは結局シンボルでしかない。人間の心を変えるのはやっぱり本人の気持ちの変化だろう。ていうかな、ゲルト……。お前はもう少し俺たちを信じたほうがいいぞ？ お前が魔剣が使えないからって、俺たちはお前を仲間はずれにしたりなんかしない」

ゲルトの瞳が揺れた。それは多分、こいつがずっと気にかけていたことだ。ゲルトはいつでも一人を気取る。孤高でいようとす。でも言うほどこいつは強い心をもってるわけじゃない。ただ他人とのかかわり方がわからなくて、それが怖いだけだ。だから心に踏み込まないし踏み込んでこない。って、ああ。俺は人の事を言えないんだ。どうにも俺がゲルトを構ってしまうのは、自分によく似ているからなのかもしれない。

「お前を守れずに無様に倒れた俺を、お前は嫌いになったか？」

「い、いえ。そんなことは」

「じゃありリアは？ 化物みたいな力で敵をガンガン殺しまくる。何だかよくわからんがいつ暴走するかも判らない突撃勇者様だ。おつかないか？」

「そんなことはありません！ リリアを侮辱すると許しませんよ！」

「じゃあお前の事だって俺たちは見捨てたりしないし嫌いにもなら

ない。当たり前だろうが。そのほかのこと考えられない一直線頭脳で少しは考えても見ろ」

「……………」

ゲルトの額を指先で小突く。額に手を当てながら、ゲルトはじつと上目遣いに俺を見上げていた。

「貴方はいつも、判ったような事を言う……。そういう貴方が……わたしは、嫌いです」

「そうですか」

「大嫌いです」

「はいはい」

「本当ですよ？」

「いいよ別に」

「…………でも、不思議と悪い気分ではありません」

頬を緩ませながら踵を返し、歩いていくゲルト。その一瞬見えた横顔が子供染みていて、何だか俺まで笑ってしまいそうだった。

無人のシュヴァイン家の中を散策し、武器を吟味するゲルトに付き合い武器庫へ。魔剣に匹敵する武器は存在しなかったが、揃っているのはどれも豪華な刀剣ばかりだった。

その中から両刃の大剣　片刃がよかったらしいがなかった。あと大剣じゃないと嫌らしい　を装備し、俺たちはシュヴァイン家を

後にした。

剣を入手したゲルトは行きよりも少しは気持ちが落ち着いた様子だった。俺たちは別にそれ以上無駄口は叩かなかった。でも不思議と無言の間でも気分は悪くなかった。

ふとゲルトに視線を向けると、彼女も俺を見ていた。視線がばつちり衝突し、俺が首を傾げるとゲルトは慌てて視線を反らす。そんな事を何度か繰り返しながら歩いていった時だった。

「何だ、この感じ」

足を止めて振り返る。背後には勿論誰もいない。だが、なんだか違和感がある。

「どうかしたのですか？」

「いや……。なんだ、ちょっと待ってくれ。この辺りか……？」

道を逸れ、草むらに入り込む。そこに立っている一本の木に触れると、瞬間何かに弾かれるように閃光する。

「つつう！ ゲルト！ ちょっと来てくれ！！」

ゲルトを呼び出し木を見せる。するとゲルトの表情は見る見る青ざめて行った。

手を翳し、なにやら魔力を放出するゲルト。やがて木にはびっしりと紋章が浮かび上がり、ゲルトが拳を握り締めると押しつぶされるようにして紋章も砕け散った。

「一体何だったんだ……」

「貴方の感知能力は相当優れていますね。わたしは全く気づかなかったというのに……恐ろしい人です」

「それで？ あれはなんだったんだ？」

「今すぐ聖騎士団に報告を。あれは……そうですね。設定された時刻まで潜伏し、時が来たら一斉に連鎖し爆発する、城落としての術式の一つです」

「ってことは、なんだ？ まだこの街に沢山術式が設置されてるってことか！？」

時間が来れば一斉に起爆する時限爆弾。それかなり高度な。街にはこれだけ人が溢れているのに、誰もその存在に気づかないほどの。

冷や汗が流れる。この街に一体どれだけの人が住んでいると思っっているんだ。城落としての術式って……なんでそんなものがここに？ この街敵が入り込んでいるってことなのか？

「兎に角騎士団に報告を！ いくつ仕掛けられているのかわからないんです、二人では対処出来ません！」

「わ、わかってる！ 行くぞ！」

草むらから抜け出し、二人して聖騎士団の総本山である大聖堂へ向かう。そこに居た騎士の一人に話を持ちかけたが、まるで相手にしてもらえなかった。

「あのなあばうず？ この街は特殊な魔術結界で覆われているから飛んでだって入れない。入り口は常に検問があって、学園関係者と

聖騎士団以外は出入りしてないんだ。そもそもそんな大規模な術式だったら、ここにいたって感づくだろう」

「だから、それがすごく巧妙に隠蔽されてるんだよ！ 急がないと手遅れになるぞ！」

「しょうがないな……わかった、手を貸そう。おい、暇そうなの何人かついてこい。人を集めろー」

「待ってください、わたしの話を聞いていなかったんですか？ 余程の魔力探知能力がある人間でなければ発見できないんです！ 人を集めるならせめて神官を！」

「神官なんてそうそういるわけないだろう……。それ、本当にデマじゃないんだろうな？」

キレて暴れ出しそうになるゲルトを背後から取り押さえながら撤退した。術式が発動するまでどれだけ時間があるのかわからないが、これでは間に合わないかもしれない……。

いつ爆発するのかわからない緊張感がじりじりと時間の経過と共に焦りを生んでいく。だというのに聖騎士団は役に立たない。というか、そんなに巧妙に隠されているんだろうか。

「勇者部隊ブレイブクラウンでも、恐らく術式を察知できるのは……ナツル、貴方だけでしょう。こうなったら戻るだけ時間の無駄です。わたしたちで出来る限り術式を見つけてみましょう」

「ああ、戻りながら探して皆にも手伝ってもらえばいいしな。でもまずは探してからだ。もしあれ一つなら事は済むし、無駄にパニックを起こす必要もない」

この街がいつ吹っ飛ぶかわかりませんなんて話して周れパニックになるのは当たり前だ。そうするのは確実にこの街が吹っ飛ぶ事実を認識してからでなければ。

俺たちは頷きあうと直ぐに街中を走り出した。立ち止まる余裕はない。ついさっきまで周りの人間同様のんびりしていたのだが、こうなってしまうてはもう仕方が無い。全力疾走だ。

「ゲルト！ あっちだ！」

俺には消し方がわからない。ゲルトには見つけ方がわからない。俺たちは協力して術式を発見し、駆除していく。

一つ、二つ、三つ……。そう大量に設置されているわけではないが、決して少なくも無い。やはり城落としての術式だけのことはある。この術式一つ一つが爆発したら、恐らくこの街は本当に落ちる。勿論、リア・テイルだって……。

「待った、ゲルト！ リア・テイルだ！」

「っ。迂闊でした。城落としての術式ならば、まずは城に仕掛けるのが定石……。引き返しますか？」

「そうしたほうがいいんだろうが……くそ、どうする。人手が圧倒的に足りない……っ」

立ち止まって考え込んでいると、正面からマルドゥークが走ってくる。俺の姿を見つけると近くに立ち、

「丁度いいところに！ ナツル、姉上を知らないか？ どこかに出かけてしまったまま戻ってこないのだ。心配で心配で……」

「いい所に来たなお前っ!!」

「な、なんだ!? どうした!? 何事だ!?!」

俺とゲルトは手短に事情を説明した。マルドゥークは腕を組みながら説明を受け、力強く頷く。

「お前が嘘を付くとは思えんな。判った、私の方から神官隊に連絡を入れておく。何、気にするな。どうせ私の部隊だ」

そういえばこいつは神官騎士だった。本当にタイミングがいい。城の方の駆除はあいつに任せ、このまま俺たちは街の方をあたろう。

二人して走り出す。マルドゥークはくそ真面目で融通は利かないが律儀なやつだ。ちゃんと聖騎士団を動かしてくれるだろう。あんな俺とあんまり歳の変わらないやつ言葉なら、聖騎士団も動くのか…… なんか空しい。

それにしたってなんなんだ? 昨日出歩いていた時にはなかったはずなのに、これだけの数の術式…… たった一晩で設置したっていうのか?

「…… 相当なやり手です。アイオンだってここまで早く術式は組めませんよ」

「ってことは、あれより上手って事か……?」

二人して術式を破壊しつつ進んで行く。そうして街の外へと続く門が見えてきた頃、ゲルトの足が止まった。

その理由は俺にもわかった。今この瞬間、目の前の通路で魔力が迸り、術式が発生する淀みの様なものを感じ取れたからだ。それは直

ぐに息を潜めてしまったが、間違いない。この先に、この術を仕掛けている敵がいる。

「ゲルト、戻ってリリアたちを呼んで来い！俺は時間を稼ぐ！相手がフェンリル並だったら、多分そう長くは持たない……！」

「い、嫌です！わたしだって勇者なんですから！どうしてそう、貴方はいつもいつも……そんなに不安なら、貴方が仲間を呼びに戻りなさい！」

「お、おい！？ゲルトツ！？」

ダメだ、魔剣もないのに無謀すぎる。俺はゲルトに続いて路地に入り込む。そこには確かに俺たち以外の人間が立っていた。

紫のローブに身を包んだ長髪の男性……。見る限りに既に魔術師タ-ipといった男は振り返り、俺たちの姿を見て微笑んだ。

「ほお……。先ほどから出鱈目に僕の術を解除しているやつが居ると思つたら、君たちみたいな子供とはね……。驚いたな」

ゲルトが無言で剣を構える。男は溜息を漏らし、肩を竦めた。

「威勢がいいのは構わないが、相手の力量を見て行動すべきだね。僕にはまだ仕事があるんだ。こんな術式設置なんてつまらない事よりも、もっと面白い仕事だね」

「戯言を　　！！」

ゲルトが斬りかかる。男は片手を翳し、魔術障壁だけでそれを防いで見せた。

弾かれるゲルトの剣。狭い通路を生かし、ゲルトは後方に跳ぶと同時に壁を蹴って空を舞う大剣を拾って俺の目の前に着地した。こんなに狭い所じゃでかい剣は邪魔になるだけだ。俺はゲルトの前に出て拳を構えた。

「今度は君か。いいよ、かかっておいで」

両手の術式に火を灯す。電撃が流れ出し、進む魔力を集中して拳へ。それを維持したまま前に駆け出した。

男の魔術障壁目掛けて拳を叩き付ける。一撃で砕け散ったそれに驚いている術師。一気に懷に潜り込み、畳み掛ける。

レーヴァテインは撃てない。こんな狭い場所で撃ったら大変な事になる。魔力を込めた連続攻撃をボディに浴びせ、フロントキックで蹴り飛ばす。積んであった木箱の山に突っ込み、砕け散る残骸に埋もれて男は倒れた。

「……呆氣ないな」

そう呟いた直後だった。瓦礫の山の中、影のようなものが揺らめいたと思った瞬間、何かが飛んで来る。咄嗟に回避したものの脇腹を掠って飛んで行ったのは、黒い影のような何かだった。

目にしても何なのかはわからない。ただ、男は影のような物を纏いながら立ち上がった。その瞳には先ほどまでの余裕染みた物が消え去っている。

しかしそれは俺の実力に驚いたからでも怒ったからでもなかった。彼が見ていたのは　そう、俺の武器、神威双対だった。

「その武器……確かめて見るか」

男が両手を広げる。足元の影から無数の影の矢が飛んで来る。その

数は数十……。密集した空間に流れ込んでくる矢の津波を防ぎきる事は出来ず、俺は両手を前にして障壁で防御する。

しかし術式には障壁貫通効果が付与されている。両足を貫く矢……。直後、男はロープの内側から瓶を取り出した。それが何であるか分かってしまった俺は、振り返ってゲルトに叫ぶ。

「逃げるゲルト!! あいつは 錬金術師だっ!!!!!!!!!!」

瓶から光が溢れる。飛び出してきたのは、そう。アイオーンが俺に放った、龍殺しの術式。炎の熱線が俺目掛けて真っ直ぐに突っ込んでくる。

逃げろと言ったのにゲルトは俺の前に飛び出し、庇うように剣に魔力を込める。だが、そんな障壁では防御できないことは直に食らった俺がよく判っている。二人して怒涛の攻撃の前に吹き飛ばされ、大通りにはじき出された。

「ゲルト!!」

俺は無事だったが、ゲルトは手を焼かれ、ボロボロに溶けた剣が空しく道に転がった。一步大通りに出ればそこは人気のある場所。何事かと集まってくる野次馬を目にゲルトは舌打ちした。

「拙い……。こんな状況では……っ」

男が歩み寄ってくる。そうして俺とゲルトを交互に眺めた後、口元に手を当てて呟いた。

「……ゲルト。ゲルト・シュヴァイン? 君がああ噂の勇者か……。そんな事より君……。そう、君。面白い武器つけてるね。それ、誰に仕立ててもらったんだい?」

「あんたには関係ないだろ……っ」

「そういうわけでもないんだけどね。さて、こんなに騒ぎになってしまつては困る……。適当に逃げさせてもらつとしようか」

男がそう口にした時、門の前に人影があつた。それは白い聖剣を両手で構え、低い姿勢から男に斬りかかる。銀色のリインフォースの軌跡が空を切り裂き、男は背後に跳躍した。

「師匠もゲルトちゃんも何やってるんですか！？ この人だれですか！？」

「リリア……いい所に来た！ 手を貸してくれ！ こいつを街から出すな！！」

頷くリリア。聖剣に込められた半端ではない魔力が大気を揮わせる。金色に閃光するリインフォースを構え、リリアは男に突撃する。振り落とした刃は早く、そして重苦しい。一発で男の障壁を貫通し、肩から深く切り込んだ。血が飛び散る中、男は顔色一つ変えないで手を伸ばした。

「聖剣リインフォース……なるほど、そんな強い武器で攻撃されたらひとたまりもない。だから」

男の掌に魔力が集う。直後、光は剣を形作り、それが収まる頃には男の手の中にもう一振りのリインフォースが存在していた。

「こちらと同じ武器で応じさせてもらおう」

リリアの剣を受け止める男。ぶつかり合う二つの聖剣が押し合い、リリアは魔力を込めて男を弾き飛ばす。

ゲルトに回復魔法をかけてもらった足がようやく動くようになり、俺はリリアの背後から男に飛び掛った。リリアを飛び越え回転しながら男の頭部に蹴りかかる。しかし直後、男は両手に一振りずつ、そうリインフォースを二つ手にして俺の攻撃をも防いでいたのである。

「な　っ!？」

「そんな、どうして!？」

わけが判らず混乱する俺とリリアを同時に弾き返し、男はリインフォースを俺たちに投擲する。それは一瞬で姿を変え、細長い槍のような姿になって飛来した。

リリアはリインフォースでそれを切り伏せ、俺は回避する。しかし考えが甘かった。後ろには野次馬が居る事を完全に忘れていた。慌てて槍を掴んで手にし、男に投げ返す。

「駄目じゃないか、投げ返しちゃ。錬金術師の武器は錬金術師には歯向かわない……当然の道理だろう?」

失速し、男の手の中にすっぽりと納まった槍。それをくるりと回転させ、見事な構えで応える男……。一体何なんだ?　錬金術師?　魔術師?　俺たちの知っているそれとは違いすぎる。

いや、考えるな。こいつは決してフェンリルほど強くはない。二人でなら倒せるレベルだ。俺とリリアは頷きあい、互いに雄叫びを上げて襲い掛かる。

しかし男の姿は影の中に吸い込まれるようにして消え去り、俺たちの攻撃は無様に空ぶった。振り返ると男はゲルトを羽交い絞めにし、

俺たちに笑いかけている。

「そこまでだ。僕は戦闘は専門外でね……。君たちみたいに強いのに襲われたらひとたまりもないんだよ。それに、目的の方が自分から来てくれていたようだしね」

「なんだと!？」

「僕のもう一つの目的は、『弱いほうの勇者』を連れ帰ること……。見た所、そっちの白いのは強そうだ。でもこっちの黒いのは、魔力も不安定だし武器も大したことない……。まあ、勇者ならどっちでも同じだろう。残念だけど、ここでさよならだ」

「待てっ!！」

男が瓶を投げる。その中に渦巻いているのが範囲放出系の電撃だと気づいた瞬間、俺はそれを手にとって握り締めていた。

魔力を全て解放し、瓶を包み込む。こんなところで爆発したら、どれだけ人間が死ぬことになるのか！

力で瓶の爆発を押さえ込む。両手で必死にやっているのに相殺出来ない！

「リリア、奴を追え！ こっちは俺で何とかする!！」

「で、でも……」

「いいからっ!! やつらまともじゃないんだぞ!? 捕まったらゲルトが何をされるかわからないっ!! いいから追えっ!」

リリアは頷き、剣を構えて跳躍する。屋根の上に跳んで行った男を

追い、その影が見えなくなるのを確認して、俺は瓶を抱くように自分の身体に押し当てた。

炸裂した電撃の魔力が全身を貫く。だが、俺は電撃には耐性のある身体。死にはしない。その爆発が俺以外の誰も傷付けていない事を確認し、両膝を着く。

「ぐ……っ」

滅龍魔法に比べれば大した事はないが、そのダメージは流石に大きかった。体中がしびれて一步も動けそうにない。

無様に倒れ、石畳を見つめる。それがその時の俺の意識が捉えた最期の景色だった。

覚醒する力の日（１）

聖なる光は穢れを知らない。

夜の闇を切り裂き、昼の影を切り裂く。数多この世に存在する森羅万象その名全てを下し、神の王国を築き上げるその日まで輝きは決して色褪せる事は無い。

聖剣は王の手の中常に一つ、故に全ての存在は虚偽であり、真偽を定めるのも又聖なる剣の役割。触れる者全ての善悪を決定し、その審判の名の下に汝存在の彼方さえ選定されん。

故に無敗、絶対最強の剣を担うのは同様に神の身を持つ者でなければならぬ。ならばその条件は？ 人の身で神をも超える、聖剣の担い手とは？

「あああああつ！！」

屋根の上を疾走する二つの影。ゲルトを腕に抱えた男は後ろ向きに跳びながら片手で風の術式を組み上げ、リリアに放つ。それは屋根を切り裂きながら空中を舞うリリアに迫り、しかし聖剣の一撃で木っ端微塵に砕け散る。

聖剣リインフォース。魔と名の付く存在ならば例外なく叩き伏せる神罰の剣。白の勇者は聖剣を振り上げ、男に斬りかかる。

追いつくのにそれほどの時間は必要なかった。男の足は速くはなかったし、リリアの両足に込められた加速する魔力は爆発的な瞬発力で男を猛追した。男は抱えていたゲルトを放り投げ、目の前でリインフォースを生み出してリリアの剣に応じる。

「そんな偽者　ッ！！　鳴り響けっ！！　リインフォースッ！！」

リリアの叫びに応え、リインフォースが輝きを増して行く。その輝

きに照らされ解けるように男の手の中から虚像は消え去っていく。消えかけた剣を投げ捨て、男は障壁を発生させる。しかしそれさえ食らいつき、今にも破ろうとするリインフォースの怒涛の魔力に目を細め、舌打ちする。

「魔術と名の付くものは全て貫通する。最早それそのものが一つの魔法と言う訳か。噂に名高き聖剣、見事な力だ。だが　っ」

男は一瞬障壁を弱める。力の籠った剣は見事に空振りし、誤って民家に打ち付けられた。白い家が一撃で砕け散り、その崩落するレンガの中、男は手に出現させた鎖を空中で投げつける。その先に居たのはリリアではなくゲルトであった。

鎖はゲルトの首に巻き付き、男が軽く手を引くとゲルトは自らの足で男に駆け寄って行く。術をかけられたゲルトを見てリリアは振り返って剣を振り上げた。

振り下ろす一撃は再び民家を破壊する。崩れた建造物から飛び降りた男は空中で術式を構築し、ゲルトを背後に立たせながら両手を低く構える。

「我が血と肉を代償に、契約の術式を発動せん　！　君と正面からやりあうのは、術師の僕には不向きらしい。茶を濁らせてもらうよ。はあっ！！」

男が魔力を大地に叩き付ける。直後、大地を砕いて巨大な手が出現した。岩で出来た巨大な龍は骨組みのみの翼を広げて咆哮する。訳もわからず周囲に居た民間人を尾で薙ぎ払い、血塗れの舞台上落下してくるリリアを迎え撃つ。

「ゲルトちゃんを　放せえええええっ！！」

男は龍を残し、人ごみに紛れて去っていく。追いかけてやうとするリアに龍の拳が叩きつけられる。咄嗟に横に飛び退き、転がる勢いのままに聖剣を龍の胴体に投げつけた。

突き刺さった聖剣に駆け寄り、抜き去る同時に龍の胴体を通つ二つに叩き切る。しかし元より土から作られた偶像である龍はそれでは怯まず、リアの背後から尾が迫る。

吹き飛ばされた小柄な身体が民家に叩き付けられる。壁を砕いて室内に飛び込んだリアを追い、偶像の龍は頭を突っ込ませた。剣でそれを受け止め、側面から蹴り飛ばし頭を退かす。

「こんな所で手間取ってる場合じゃないのに　！」

聖剣を目の前に突き刺し、両手を左右に突き出す。瞳を閉じ、光の魔力を収束する。

術式の発動に応じて左右には黄金の鎖が出現した。それはリアが手を離すと同時に独りでに伸び出し、龍の首に巻き付き、独りでに大地に突き刺さり龍に頭を垂れさせる。

続いて両手を胸の前で合わせ、術式を構成して頭上に翳す。出現した金色の槍を高々と構え、助走をつけて龍の額に投げつけた。

ジャッジメント・ランス
「断罪の槍ッ！」

頭を垂れた龍の頭を貫き、大地に突き刺さる破魔の槍、身動きがとれずに悶える龍に脇目も振らず、勇者は剣を引き抜いて駆け出した。跳躍し、建造物の上へ。高所から街中を見渡し、しかし男の姿も友の姿も見当たらない。龍を封じるのに時間をかけすぎてしまった。悔しさに歯軋りし、聖剣を屋根の上に突き刺して雄叫びを上げた。その声は確かに呪われし存在にも、そして友であるゲルトにも聞こえていた。城壁を跳び越して草原を走り去るその影は振り返り、リアの声に笑みを見せていた。

覚醒する力の日（１）

「ナツル！　おい、ナツル！　しっかりしろ！！」

「う……っ」

呼び声に目を覚まし、身体を起こす。俺を抱きかかえていたのは血相抱えた様子のアクセルだった。隣にはメリーベルの姿もある。直ぐに俺の身体に回復薬をかけ、メリーベルは溜息を漏らした。

「……何があつたの？　行き成りどうしてこうなるわけ？」

「そんなもん俺が聞きたいよ……っつう！　あ、アクセル……リリアは？」

「は？　一緒に行動してたのか？　お前はゲルトと一緒に武器取りに行つてたんじゃねえのかよ？」

「違うんだよ！　とにかくリリアを探してくれ！　ゲルトが敵に拉致られたっ！！」

「はああっ！？　ここはオルヴェンブルムの城壁の中だぞ！？　世界で一番強固な守りの城塞都市で、なんで敵が……」

そんな事を話していると、頭上からリリアが下りてきた。着地も見事なもので、どうやら相当遠くから跳んできたらしい。足元にブレ―キ痕を残しながら停止し、振り返った。

「リリア、ゲルトは!？」

リリアは答えなかった。代わりにわなわなと拳を震わせ、それを壁に叩き付ける。壁が砕けるのに背を向け、リリアは剣を背にして言った。

「後を追います」

「待て、どっちに行つたのかもわかんないだろうが！」

「ゲルトちゃんのおいで追えます。それに、あいつの魔力はもう覚えましたから」

「ちょ、待てリリア……おい、リリアッ!!」

制止するのも聞かずリリアは門を潜って外に行ってしまった。これはもう何を言つても聞きそうにない。せめてと思ひアクセルに後を追うように指示し、二人の姿が見えなくなる頃ようやく遅れて俺も立ち上がる事が出来た。

「くそ、後を追わないと……か、身体がしびれてるな……」

「……はあ。何を食らったか知らないけど、属性が違っていたら死んでいた」

「わかつてるよ。死なない見込みがあつたからそうしたんだ……悪い、肩貸してくれ」

メリーベルは無言で肩を貸してくれた。そうして門の近くまで移動

してみたが、リリアとアクセルの移動速度は速すぎて追いつけそうにもない。既にその姿はどこにも見えず、どっちに走って行ったのかもわからない。

単独で追いかけて倒せる相手だろうか。いや、確かに今はあいつを取り逃してしまう事のほうが問題か。だがしかし一人で行動しているとは限らない。リリアとアクセルが心配だ。だがどちらにせよゲルトをほうっておくわけにもいかない。

くそ、リーダーなんてやるんじゃないかった。俺にはどっちが大事かなんて決められない……。いや、普段の俺ならゲルトの救出を急がなかっただろう。肩入れしているのか、俺は……。

「まだ無理しないほうがいい。あたしの回復瓶だけじゃ、ダメージは抜けない」

「判ってるよ……。くそ、あの錬金術師……っ！」

「事情、聞かせてくれる？」

俺は今までに起きた短い時間の出来事を出来る限り掻い摘んで説明した。ゲルトと共に城落としを解除したこと。その仕掛け人である錬金術師にゲルトが拉致されたこと。今はそれを追ってリリアが飛び出して行った事、等等。

あいつは明らかにメリーベルと同じタイプの術師だった。ただ、錬度は明らかにこちらの方がずば抜けて上だったが。メリーベルはその話を聞き、暫く何か考え込んでいるようだった。そうして顔をあげ、俺の頬の傷に触れる。

「兎に角今は焦らないで。リリアにはアクセルがついてるから、大丈夫」

「……確かに、アクセルはリアの無茶な性格にも慣れてるしな。悪い、宿まで運んでくれるか？ ベルヴェールと合流できれば、痺れを抜けるはずだ」

こうして一度宿に戻る事になった俺たち。宿に入ると既にベルヴェールとブレイドは揃っていた。事情を説明して治療を受けると、水の術式で身体から痺れが引いて行った。

「それで？ アタシたちはどうするのよ？ ゲルトを追うんでしょ？」

「当然だ。ブレイド、ベルヴェール、直ぐに支度を済ませて集合だ。メリーベルも頼む」

三人は頷く。そのうちブレイドとベルヴェールが部屋に戻っていく中、メリーベルは俺の前に立って何かを口ごもっていた。

「どうかしたのか？」

「……ゲルトを追うんでしょ？ 勝算はあるの？」

「無い。でもほうつておけない。仲間だからな」

「……らしくない決定ね。ナツルは、もっとクールな人だった」

髪をかきあげ、腰に手を当てるメリーベル。何が言いたいのか良くわからなかったが、なにやら今の俺の判断に異論があるらしい。

「明日には聖騎士団の足並みも揃って確実にバズノクに進軍出来る。焦らずとも、明日救出に向かえばいい」

「……ダメだ、そういうわけにはいかない。お前はゲルト救出に反対なのか？」

「そうじゃない。ただ確実ではない戦いは避けるべきだと考えるだけ。ナツルも今までそう考えてきたはず。どうして？ 何を焦っているの？」

「仲間の命が懸かってる！ 焦らない方がおかしいだろ！」

「……そう。それもそう……。確かにナツルは間違ってる。でも……迂闊な考えは身を滅ぼす。忘れないで」

メリーベルはそれだけ俺に告げて部屋に戻っていく。心の中を見透かされている事に溜息が零れた。そうだ。俺は今、ゲルトを見殺しにする選択肢を選ぶとする自分に、必死に反発している。

相手は未知数。腕は立つだろう。俺とゲルトの二人係りで倒せなかった。単独犯かもわからなければどこの所属かも不明。言ってしまったら反乱軍かどうかわからない。街にどうやって入り込んだのかも、城落としを仕込んだ意味も、何もわからない。

追うべきではなかった。それは間違いなく俺の意見だ。だがそれでゲルトを見殺しにしてしまったら、俺は取り返しの付かない事をする事になってしまう気がする。

そうだ、今は追うべきだ。自分に言い聞かせる。これで救えなかったら、また後悔する。そんなのはもう嫌だ。俺は仲間を信じる……ゲルトを救える。きっと俺たちなら。

「ナツル！ ナツルはいるか！？」

扉が開かれ宿にマルドゥークが顔を覗かせた。俺に駆け寄ると、俺

の前で眉を潜めた。

「何があつた！？ 街中が滅茶苦茶だ！ 敵に遭遇したのか！？」

「そういう事だ。悪い、事情を説明してる暇がないんだ」

「待て！ まさか敵を追うつもりか！？ 女王陛下より明日の進軍に参戦せよとの命令を受けているだろう！ 迂闊に単独で行動するな！！」

俺の腕を掴み、律するマルドゥーク。しかし俺はその手を振り解き、マルドゥークを睨み返す。

「女王の命令だかなんだか知らないが、兎に角今はゲルトがやばいんだ！ 仲間を一人拉致られた！ 黙って見殺しに出来ないっ！」

「ゲルト・シュヴァインを……？ だが、決定は覆されない！ ゲルトを追うのは仲間に任せお前は残るべきだ、ナツル！ 救世主^{メサイア}としての役割を果たすのが貴様の義務であり役目なのだ！」

「知るかつ！！ 仲間一人救えない救世主なら俺は願い下げだ！ 女王がどれだけ偉いのか知らないが、勝手に期待を寄せて他人を仕立て上げてんじゃねえ！」

二人して言い争い、にらみ合う不毛な時間が過ぎる。背後から皆が戻ってきて俺たちの前で停止した。仲間に無様な姿を見せるのもどうかと思ひ、気持ちを落ち着かせる。

「悪い、マルドゥーク……兎に角そういうことだから。女王陛下には後で謝る……残りの事は煮るなり焼くなり好きにしてくれて構わ

ない。それじゃ……」

「待て！ 仕方の無い連中だ……これだけ持っていけ」

マルドゥークに手渡されたのは金色のコンパスだった。不思議な輝きを帯びたそれを握り締め、首を傾げる。

「我々聖騎士団本体の位置を指し示すように作られたマジックコンパスだ。要は、明日の総攻撃に間に合えば良いのだろう？ 時間に遅れず追って来い」

「　　つ。ああ、判った。すまん、貸しにしてくれ！」

「総攻撃は明日の正午に行われる！ 急げ救世主！」

弾かれるようにして走り出す。全員で夕暮れの街を駆け抜ける中、隣を走るベルヴェールが溜息を漏らした。

「で？ リリアを追えばいいのね？」

いつぞやの坑道でお世話になったペンデュラムを取り出し、その光の指し示す方向へと駆けるベルヴェール。その背中に続き、俺たちはリリアを追いかけて駆け出した。

草原を走るリリアが目にしたのは森の中へ消えて行く錬金術師の影だった。眉を潜め、加速するリリア。その背後から追いついてきたアクセルが隣に並ぶ。

「リリアちゃん！ 落ち着けて！！ 罠かも知れない、慎重にー

緒に行動するんだ！」

「そんなの関係ない……。あいつ、絶対に倒してやる」

「リリアちゃんっ!!」

加速するリリアの正面、草原の中に一つの影があった。巨大な太刀を構えたその影は近づいてきたリリア目掛けて刃を揮う。しかしそれはリリアからは遥か離れた距離からであった。

全く何の防御もしようとしないリリアの正面の立つアクセルが剣を十字に構える。直後、目には見えない斬撃が二人に襲い掛かった。

「っぐう!？」

「ほう。見たのか、少年」

倒れこみそうになる姿勢を戻し、サーベルを構えるアクセル。何が起きたのかさっぱりわからなかったリリアは二人の離れすぎた距離に目を丸くしていた。

「あなた……確か、鶴来さん!? あなたもフェンリルと同じ目的なんですかつ!？」

「目的? そんな下賤なものは生憎持ち合わせていないな。追いたければ追うが良い、二代目。拙者の相手はどうやらその少年のようだ」

「そういうことだ。先に行け、リリアちゃん。どうせ止めても君は聞かないんだろう? だったら、勇者を送り出すのが剣士の役目だ」

剣を構えるアクセル。その笑顔に頷き、リリアは不安げな瞳で少年を見つめ、走り去った。どうか無事で……そんな思いは確かにアクセルにも伝わっていた。

アクセルはゆっくりと東洋の剣士に近づいて行く。歩みを寄せた二人は広めの間合いの間、互いに剣を構える。鶴来は太刀を上段に独特の構えを展開し、両目を閉じて問い掛ける。

「成る程……君が新たな勇者を守る剣士、というわけだ。尖兵突撃は慣れたもの　剣士の役割、存分に果たすが良い」

「　そういうお姉さんは普通じゃなさそうだ。あーあ、俺はおっぱい大きい女は趣味じゃないんだけどな……」

刃を構えたアクセルが駆け出す。風を纏い、両腕から繰り出される旋風。それは女剣士へと近づき、しかし一瞬で薙ぎ払われる。

接近したアクセルが繰り出す連続攻撃を長大な一振りの刃だけで全ていなす。まるでフェンリル戦の再現。手も足も出ないまま遊ばれるアクセルは距離を離し、その動きを太刀が追う。

踏み込む事はなかった。一步もその場から動く事もなく、しかし斬撃だけがアクセルに迫る。その反則染みた攻撃速度と射程距離に舌打ちし、アクセルは剣でかろうじてそれを受け止めた。

「つつう！　　どういう腕力してるんだよ……！」

「我が剣の一薙ぎは鬼の首を落とす空を断ち大地を割り水を裂く

。手を抜くな少年。ここでなら、拙者以外に君を見る者は誰も居ないのだ。もつと拙者を楽しませてくれ」

「……つとに、年上は趣味じゃないんだよ。その見透かすような態度　困ったもんだ」

一息つき、瞳を開くアクセル。その瞬間には既に雰囲気に変化していた。普段のおどけた態度の少年は既にどこにも居ない。

リリアや夏流でさえ彼ほどの殺気は放てない。それは、既に大量の人間を殺した事の在る人間だけが放つ事が出来る殺意。自分の感情を殺し、命を軽視する視線だった。

「お姉さん強そうだから手加減は無しだ。今はリリアちゃんを追いかけなきゃならないしな」

揺らめく風の中、アクセルは剣を放し、両手を空にする。直後危険を察知し、鶴来は太刀を構えた。

「遠慮は無しだ。行くぜ、傭兵。火花を散らす覚悟はいいか？」

大木を切り倒すリインフォースの一撃。リリアは森の中、錬金術師を追っていた。

背後に残してきたアクセルの事は気にかかる。先ほど、凄まじい剣と剣のぶつかり合う音が聞こえたばかりだ。だがしかし、足は止めない。錬金術師に追いついた今、振り返る事などただの愚行。

「追いついてきたか、勇者。中々足が速い」

「ゲルトちゃん……！ おまえええっ！！」

木から木へと飛び移る術師の影から無数の矢が放たれる。漆黒の矢の群れをリインフォースで薙ぎ払い、突き進むリリア。しかしこの場に触媒となる陰は多すぎる。ありとあらゆる木々の影という影から飛び出す無数の攻撃の雨。三百六十度、逃げ場の無いオールレンジ攻撃を前にリリアは剣を水平に構えた。

「鳴り響け

！
連続共鳴剣つ！！」

ラインフォース・ストラス

超スピードで回転しながら木々ごと薙ぎ払い、光の竜巻を描いて空中を疾走するリリア。文字通り触れる全てを叩き伏せる嵐はあらゆる方向から迫る魔法の矢を片っ端から弾き返し、轟音と共に錬金術師に迫る。

しかし男は焦らなかった。影の中に吸い込まれ、その姿は消えて行く。どこに消えたのかわからないまま停止するリリアに背後から鎖が放たれた。

剣で弾き、しかしどこまでも追跡してくる追尾の鎖。それが一本、また一本と数を増し、やがてそれらが手足に巻きつくとリリアの身体は空中に引き上げられた。

「ぐう……っ！」

「力だけは半端じゃないね。だけど、そんな力押しが通用するのは自分より実力が下の相手に対してだけだ」

リリアの真下、吊り上げられた少女の影より出でた男はゲルトを片腕で引き摺りながら溜息を漏らす。気を失い、口元から血を流しながらぐったりと倒れるゲルトの姿を目の当たりにし、リリアの瞳が激しく揺れた。

「ゲルトちゃんを放せ……」

「君はどうやら自分の置かれた状況が理解出来ていないと見える。さて、どうしたものか……」

空中に浮遊した男の手に剣が現れる。空中に拘束されたリリアの胸

に徐に剣を突き刺し、男は歪んだ笑みを浮かべた。

「う……ぐつつ」

「悲鳴を上げないのは良くないな。まあいい……。僕はね、勇者君。不老不死の法に興味があるんだ。色々なサンプルを見てきたけれど、今思い出してね。そういえば君はどんなに傷を負っても直ぐに回復する能力を持っているんだとか……」

「ど……うして、それを……？」

「ああ、フェンリルに訊いたのさ。さて、実験でもしてみようか？」

リリアに突き刺したままの剣をぐりぐりと力を込め、抜き差しする男。その度に焼けるような痛みが走り、血が零れ落ちる。リリアは歯を食いしばってそれに耐えていたが、男は退屈そうに目を細め、背後にある木の枝の上に立った。

「なんだ、別に超回復能力があるわけじゃあないらしい。もしかして君は刺されたら死ぬ普通の人間なのかい？ それじゃあ興味の対象外だ……せめて、そうだな　これくらいは出来ない」と

生み出した剣を自らの心臓に突き刺し、男は口から大量の血を吐き出した。目の前で行われる凶行に青ざめるリリアを前に、男は次々と剣を手にし自らの身体に突き刺して行く。

胴体に八本の刃を刺したところで男は血まみれの口を拭い、不気味な笑顔を浮かべた。リリアは何とか拘束から逃れようと努力するが、巻きついた鎖は剥がれず魔力も込められない。

「無駄な努力だよ、勇者。それは龍を封じる特別製の術式……解け

るとすればそれは神が大魔術師か……ふ、どちらにせよ君は無理だ。さて、少し趣向を変えようか。先ほどから君は彼女を見ると酷く魔力が上がる……興味深いね」

体中に剣を刺したままの男が片手を翳す。木の下に倒れていたゲルトの鎖が引き上げられ、リリア同様ゲルトは宙に吊り上げられた。

「君はもしかして、彼女を傷付けられたほうが力を発揮するんじゃないかな？」

「やめろっ！！ そんなことは……させないっ！！」

「へえ？ じゃあどうする？ ああ、そうか だったら君がされればいい。そうだろう？ ゲルト」

浮かび上がったゲルトの身体がゆっくりと動く。気を失ったままのゲルトの手に剣が現れ、その刃はリリアの身体を貫いた。

次々と空中に現れる剣、剣、剣。ゲルトはそれを次々にリリアに突き刺し、返り血を浴びながら目を閉じていた。

「う……あ……っ」

リリアの口から小さく悲鳴が漏れた。あまりの痛み感覚は麻痺し、自分がどんな状態にあるのかも理解出来ない。体内から血が逆流し、口から血が零れて止まらない。霞む視界の中、気を失ったゲルトはリリアの頬に両手を沿え、血にぬれた指先でリリアの涙を拭う。

「かわいそうに。ほら、早く傷を癒さないと死んでしまうよ？ 勇者なんだからそれくらいなんとかしないと。ふふ、ふふふ、あははははっ！」

指先一つでゲルトを操る男。リリアは体中に刺さった剣を見つめ、力なくうなだれた。

「なんだ、気を失ったのかい？ 面白くも何ともないな……。まあいい、ついでだからこっちの勇者も連れて帰るとするか。両方連れ帰ればフェンリルも文句はないだろう」

操作魔術を解除され、地面に落ちるゲルト。男は自らの身体に刺さった剣を引き抜き、リリアに手を伸ばす。瞬間、動かないはずのリリアの手が男の手首を掴んでいた。

「薄汚れた手で我が身に触れるな、下種が」

炸裂した。何が起きたのかは誰にも判らない。ただ目の前で串刺しになっていた勇者の全身から光が溢れ、それは拘束の術式を一撃で崩壊させ、近くに居た錬金術師を吹き飛ばし、森を燃やし、空を焼き、体中に突き刺さった剣の傷さえ癒した。

紅に燃え盛る炎の中、勇者は宙に浮かんでいた。手にした聖剣が輝き、そこに青色の紋章が浮かび上がる。やがてその輝きが県全体を埋め尽くすと、銀色の髪 of 勇者は大地に降り立ち、その剣を構える。聖なる光は穢れを知らない。

夜の闇を切り裂き、昼の影を切り裂く。数多この世に存在する森羅万象その名全てを下し、神の王国を築き上げるその日まで輝きは決して色褪せる事は無い。

聖剣は王の手の中常に一つ、故に全ての存在は虚偽であり、真偽を定めるのも又聖なる剣の役割。触れる者全ての善悪を決定し、その審判の名の下に汝存在の彼方さえ選定されん。

故に無敗、絶対最強の剣を担うのは同様に神の身を持つ者でなければならぬ。ならばその条件は？ 人の身で神をも超える、聖剣の担い手とは？

「なんだ……お前は……っ!？」

男は脅えていた。目の前の少女の姿に。薄っすらと笑みを浮かべ、剣を振りかざす化物。

「口にする事を許すぞ、下種。我が身を呼べ。『化物』と」

「う、うわああああああああああっ!？」

森の中に立ち上る閃光。遠く草原を走る夏流たちの目にもそれは映し出されていた。

不安に急かされるように救世主は草原を急ぐ。どうか、何事も起きないようにと、心の中で祈りながら。

覚醒する力の日（２）

死んでしまえばいいと思った。

他人を傷付ける人間なんてこの世界から居なくなってしまう方がいいと思った。

目の前で泣いている女の子を助ける為なら、多少の犠牲は必要だと思った。

死んでしまえばいいと思った。

この世界にある悲しみや憎しみを生み出すものは全て悪だと思った。どうして人を殺し笑ってられる人がこんなに沢山居るのだろうと思った。

死んでしまえばいいと思った。

返り血を浴びて笑っていた父親。戦う事に喜びと意味を見出した勇者たち。

大切な友達を何回注意しても泣かせる子供たち、街の人、世界の法則。

「…………でも、こんなの…………」

幼き日、消し去ってしまいたい記憶。

リリアの足元に転がる今はもう動かない子供たちの亡骸。血にぬれた手。握り締めた聖剣。

何故こうなってしまったのか。悩んでも答えは見えない。ただ首を傾げ、リリアは不思議そうに動かない子供に剣を突き刺した。

「こんなの、リリア…………したくなかったんだよ」

死んでしまえばいいと思った。

でも、殺してしまいたいなんて思わなかった。
思わないままで、いたかったのに。

「な……にが、起きた!? はあ、はあ、はあ……っ! ば、化物
か……化物、ば、化物……ひ、ひひひひ……っ」

炎の森の中、男は悲鳴を上げながら笑う。胸は焼け焦げ、斬りつけられたような傷跡が残る。男は倒れたゲルトを担いだままその場から離れようと走り出す。その正面に聖剣を手にしたりリアが待ち伏せていた。

「どうした? どこへ行く……。逃げ場など存在しない。おまえの
終わりはこの場所だ。潔く死に絶えろ。醜くのた打ち回り、散つて
みせろ……!」

銀色の髪 of 化物は揺らぐ炎の景色の中剣を引き摺り真っ直ぐに歩いて来る。その歩みから逃れる術を男は持たない。目の前に迫る死の恐怖に歯軋りし、男は手にリインフォースを構築する。

「諦めが悪いのは良い事だ。家畜のような悲鳴を上げて私を楽しませろ
」

「す、素晴らしい……! 傷は癒え、今や猛々しく荒れ狂う魔力に
包まれている。不老不死 君は奇跡のような存在だったのじゃないかっ!」

男がリリアに切りかかる。少女は剣の一振りですりインフォースの細かい物を粉碎し、男に剣を突き刺した。しかし刺されたまま男は起き上がり、引き抜いた聖剣をリリアに投げつける。

両手に込めた魔力が紋章を描き、リリアに放たれる閃光。炎の矢を受けしかしリリアは微動だにしない。焼け付く森の中、剣を砕き傷を癒して顔を上げる。その姿は正に人外そのもの。化物と称する以外に術を持たない。

「リリア　ッー！」

少女の視界に入る少年の姿、眉を潜める勇者の脇を抜け、男はゲルトを連れて走り去る。追いかけようとするリリアの手を掴み、夏流は顔を近づける。

「何やってんだお前！！　今　何をするつもりだった！！」

魔力の込められた聖剣を片手で抑え、夏流が叫ぶ。そんな事は言われるまでもない。逃げ去る敵を背後から　聖剣の一撃で森ごと駆逐するつもりだったのだ。

「ゲルトが一緒にいるんだぞ！？　お前、まさか……！」

リリアの空いた手に魔力が込められている事に気づき、飛び退く。放たれた閃光を片手で捻じ伏せ、夏流はその腕に巻かれた鎖を外し構える。

その鎖を目にしてリリアの表情が変わった。剣に魔力を込め、大気を揺らす。しかしその足元にベルヴェールの放った氷の矢が着弾し、リリアの両足を凍結させた。

刹那、夏流の放った鎖が聖剣に巻き付けられる。そのまま聖剣をリリアの手から手繰り寄せ、封印の術式に魔力を流し込んだ。

勇者はそれで停止した。小さく笑みを浮かべ、直後ぱたりと倒れこむ。その身体をベルヴェールが抱きかかえ、無事を確認して振り返る。

「無事よ！ でも、今のなんだったの！？」

「説明は後だ……！ ゲルトを追う！ リリアを任せたぞ……！」

「あ、ちょ……ナツルッ！！ ああもう、どいつもこいつもおっ！！」

夏流がゲルトを追う最中、草原ではアクセルと鶴来が刃を交えていた。

疾風怒濤の攻防戦は刃の軌跡だけを残し二人の間にある大地を切り裂き、大気を震わせて激突する。飛び散る火花の雨の中、二人はまばたきもしないで攻め続ける。

「ふむ……。ブレイドの息子が。どうした、お前もかかって来て構わんぞ？」

「って、言われてもなあ……」

二人の攻防は早すぎてブレイドには全くついていけない類のものではなかった。両手に構えた短剣を空しく握り締め、後退するアクセルと並ぶ。

「夏流たちはどうした？」

「先に行ったよ。それにしてもニーチャンよくあんな剣に対応出来るな……もしかし強かったりするんの？」

「さあ、どうだろうな。とりあえず俺も両手が痺れて来た……ブレイド君、代わってくれない？」

「無理無理！　つか、喋ってる場合じゃないんじゃない？」

二人が刃を構えるのを前に、鶴来は刃を鞘に収めていた。不可思議な行動に首を傾げる二人に背を向け鶴来は片目を開いて微笑む。

「楽しみはまたに取っておこう。給料分の仕事はこなした。後は君たちの好きにするがいい」

風が吹けばその姿は既に消えていた。目を丸くするブレイドとアクセル。すぐに先に進んで行った夏流たちの後を追いつき、走り出す。森を抜けた山岳地帯を夏流は岩から岩へと飛び移っていた。遙か正面にはゲルトを抱えた男が跳んでいる。空中に跳躍しながら両手を翳し、電撃を放つ。男の足元を砕いた雷に敵もまた振り返り、影の矢を夏流に放つ。

「そう何度も同じ手でやられるかよ……！　レーヴァテイン 神討つ一枝の魔剣……それを、正面で　拡散させればっ……！」

手を開いた状態で魔力を込め、放出する。金色の雷の壁が近寄る影を全て打ち落とし、燃やし尽くして行く。術式が発動し、金色に輝く拳を崖に叩き付けると崩落した大地が男を飲み込んだ。

「ゲルトオオオオッ……！」

「ちっ……！　しっこい子たちだ……！」

男が片手で瓶を放つ。しかし夏流は慌てずに両手に魔力を込める。溢れる電撃の力を収束し、両手を左右に突き出した。街で瓶を封じた時に感じた手ごたえ。魔法は魔法であり魔力で

ある以上、同じ魔力を当てれば相殺出来る。自らの頭上から閃光が降り注ぎ、無数の爆発夏流には届かない。電撃を帯びながら加速する少年はついに男に追いつき、その顔面を蹴り飛ばした。

「ぐっ!?　だが、こつちには人質がいる　!」

男が鎖を引く。しかしその鎖は途中で夏流に握り締められていた。魔力を込め、電撃を流すと同時に鎖に輝が入り、それを握り砕く夏流。絶対強固であるはずの鎖を容易に破壊する規格外の魔力に目を疑った。

「ゲルトは返してもらう。あんたが何を目的としているのかは知らないが、これ以上人の仲間に手出しはさせねえ……」

ゲルトを引き寄せ、両手に抱えて夏流は着地する。上下に交錯する二つの視線。男は歯軋りし、舌打ちして自らのロープを投げ捨てた。その様子と装備に夏流は見覚えがあった。軽装に両手を覆う紋章武器^{インナックル}。その術式が漆黒の輝きを描き、男の手の中に杖が出現する。

「　武装構築の術式……それがあんたの能力ってわけだ」

「そういう君のはただ魔力を放つだけのどうでもいい素人術式のようだ。だが　成る程、得心が行ったよ。君の魔力は規格外にも程がある。興味深いな　」

両手で構えた杖をくるりと躍らせ大地に突き刺す。崖の斜面に浮かび上がった巨大な魔法陣から魔力が杖へと収束し、杖の先端に集まった力は光の刃を成す。

長大な刀剣へと姿を変えた魔杖に夏流は身構える。両腕がゲルトの保護に使用され、手出しが出来ない以上今は撤退するしかない。だ

が迂闊に動けば切捨てられる。額を汗が伝い、緊張感で身体が震えた。

「両腕が防がれた状態で僕を相手に出来るかい？ さあ、どこを斬りたい？ 腕か足か、それとも首か！」

男が駆ける。振り上げる光の刃のリーチは長く、受ければ切断される圧縮された力。夏流はそれを横にかわし、岩の上に着地する。近くに掠っただけのはずの右腕が焼けるように痛む。呪いを凝縮した刃は近づく者触れる者に見境なく悪意を振りまく邪悪な刃……。舌打ちし、夏流は諦めたように体の力を抜いた。

「死ぬ覚悟が出来たのかい？」

「違うな。あんたの事を考えていた」

夏流の両足に電撃が流れ込む。溢れる魔力に揺れる髪の間、少年は笑みを浮かべる。

「あんたを倒してしまったら、どここの所属なのか吐かせられなくなる」

「はっ！！ 戯言をオッ！！」

杖を振り上げ迫る男。夏流はその男の刃に対し、自らの足を持って受け止めていた。

何の武装もなく、ただ足で受ける。それは受けるのではなく斬ってくれと自ら願い出るような愚行。しかし夏流の足を切断する所か魔杖の刃は刃こぼれし、光の粒となって空に消えて行く。

「悪いな。あんたは俺の武器が両手だけだと思っていたらしいが　そいつは勘違いだ」

呪いを受けて燃え出したズボン。その下から顔を覗かせたのは、神威双対と同じ紋章を持つ、紋章武具。

爪先の先端から巨大な刃が構築される。両足の正面を覆うように現れた刃は呪いを受け、しかし黄金に輝いて光を放つ。

神威双対と同じく、作者はメリーベル。彼女が夏流の力の増幅を考え手渡したトランクの中、この武具は息を潜めていた。

ただ放つだけの術式しか刻まれていない神威双対とは異なり、『雷を刃と成す』術式を刻まれたこの具足は、高出力の魔力を吸い込んで全てを叩き斬る破壊を生み出す。

足で受けた杖を蹴り飛ばし、身体を捻り、男を蹴り上げる。男が落下してくるのに息を合わせ、両目を閉じて術式を発動する。

「レーヴァテイン神討つ一枝の魔剣その力を我は担う

」

男は落下しながら障壁を作り出す。強固な闇の魔力結界。しかし夏流は瞳を見開き、雷を込めた蹴りを、一息に男目掛けて放つ　！

「ウルス障害を　　ラグナ討ち滅ぼす者ツ！！」

音の壁を貫通する轟音と衝撃。炸裂した電撃は一撃で障壁を貫通し、男の身体に深々と突き刺さる。激しく迸る雷撃は男の身体を遥か彼方に吹き飛ばし、崖を一直線に駆け上って行く。

夏流は振り上げた電撃を帯びた足を下ろし、眠ったままのゲルトの顔を見て安堵の息を付いた。ウルスラグナの直撃を受けた男の軌跡をなぞるよう、壮絶な威力を物語るように黒煙が立ち上っていた。

覚醒する力の日（２）

「つと……。足場が脆いな……」

不安定な姿勢からウルスラグナを放った影響で足場はぐらぐらと崩れかけていた。

焼け付く傾斜を見上げ、眉を潜める夏流。確かに障壁を貫通し、上位魔法に匹敵するだけの破壊を与えたはずだった。木っ端微塵に砕けてもおかしくない身体で、しかし男は立ち上がる。

まるで何の痛みも感じないかのような不気味な笑顔。男の露出した上半身は焼け焦げ、しかし同時に既に回復を始めていた。見下ろす男の視線に夏流は身構える。普通ではない。最早確実となった悪寒にも近い感触が全身を支配していた。

「成る程、大した威力だ……。二、三回は殺されたか。クッ……クッ！ 面白いな君達は……興味深いよ」

「……おいおい、何で生きてんだよ……？ 手加減した覚えはないんだがな……」

男は答える代わりに目を細めて笑う。その手に再び武器が構築されようとした瞬間の事だった。男の背後に立った影がその肩を叩き、行動を制止していた。

「そこまでだ、グリーンヴァ。帰りが遅いから心配したぞ」

「フェン、リル……」

齒軋りする夏流の視線の彼方、男は髪を靡かせながら佇んでいた。

フェンリルの言葉に錬金術師は頷き刃を下げる。魔剣を握り締めたフェンリルは気絶するゲルトを見下ろし、肩を竦める。

「何をしているんだグリーヴァ。オレが必要としているのはあつちの勇者ではない」

「そうなのかい？ でも、確か魔力の低い方だと言っていたと思ったのだけれど」

「ああ、その通りだ と、成る程。短期間でゲルトを上回っていたか、リリア・ライトフィールド」

フェンリルの視線の先、ベルヴェールの肩を借りながら追いついてきたリリアの姿があった。フェンリルを見上げ、敵意をむき出しにする少女。その態度にフェンリルは剣を下ろして首を傾げた。

「どうした？ 既に随分と息が上がっているようだが」

「うるさいっ！！ 魔剣を返せ、この いぬっ！！」

「……犬ではない、フェンリルだ。何だお前は……もう一度痛い目に合わんと判らんと見える」

フェンリルが魔剣を構える。その刀身に渦巻く花卉が浮かび上がり、竜巻のを纏うかのように空を抉り、大地を引き裂き、猛風は夏流たちを襲い掛かる。

「リリアッ！！ 聖剣を ！ ゲルトの使っていたアレだ！！」

「 っ。フレグランスの ！ 相殺します、下がって下さい！」

「馬鹿か？ そんな暇与えるわけないだろうが」

フェンリルの放つ深刻と花の螺旋が崖を削りながら広範囲を巻き込んで夏流に迫る。それを庇うように強引に前に出たリリアの全身を竜巻が切り刻み、血塗れになって吹き飛ばされる。

仮面の騎士は容赦なく迫っていた。ゲルトを抱きかかえたまま技によろける夏流に斬りかかる。ゲルトを切らせまいと背を向けた夏流の身体を刻み、膝を着いた少年を蹴り飛ばしてゲルトの腕を掴み引き上げる。

「どうしたリリア？ お前の大事なお友達は目の前だというのに、また手も足も出ないか」

「……つつつ……っ！ フェンリ……リル……ッ！」

切り刻まれた体で剣を振り上げるリリア。ベルヴェールが制止するよりも早く、リリアはフェンリルに斬りかかった。

ゲルトを片手で担いだまま、フェンリルは魔剣を巧みに操りリリアの剣をいなす。前回の焼き直しのような光景が繰り返られ、リリアがよろめいた瞬間魔剣はリリアの身体を貫いていた。

串刺しになり、持ち上げられるリリア。そのまま剣を揮い、リリアは投げ飛ばされる。傾斜の上で何度も叩きつけられ、血痕を残しながら転がり動かなくなる少女。暫くフェンリルはその様子を見守っていたが、ある事実気づいて舌打ちした。

「救世主……。リインフォースを封じたか」

「ぐ……っ！ リイン、フォース……？ それがお前に何の関係がある……！」

「関係も何も、その剣の重要性を理解していないのは貴様の方だ。仕方ない。その鎖、断ち切ってからもう一度リリアを殺すとしてよ。」

「させ　ねええええっ！！」

背中から血を流しながら立ち上がる夏流。満身創痕の身体で拳を構え、その姿にフェンリルは血に染まった剣を下げる。

「……グリーヴァ、神殿に戻るぞ」

「待ちやがれっ！！　俺と戦え、フェンリルッ！！」

「自分の身体を見てからそういう事を言うんだな、救世主。勇ましさとは無謀な行動とは意味が違う……。取り戻したければ追って来い。日は暮れ世界は闇に支配される。その時こそ逢魔が時に相応しい」

「待てっ！！　フェンリル、てめえっ！！」

背を向け、走り去るフェンリルとグリーヴァ。二人を追いかけるように夏流が膝を着き、流れる血の量に眩暈がし始めた頃ベルヴェールが駆け寄りその身体に回復魔法をかける。

「アンタほんとにバツカじゃないの！？　何回死に掛ければ気が済むわけ！？」

「お、俺のことよりも……先に、リリアを……」

「あっちはメリーベルが行ったわ。アンタを治したら、あっちも直

ぐに診るから！」

ベルヴェールの声を聞かず、夏流は立ち上がる。冷や汗の零れ落ちる額。目を閉じ、片手を身体に押し当てて魔力を解放する。

背中に焼きつくような痛みが走った。電撃が体中を駆け巡る。痛みと同時に背中中の傷は塞がり、血だけは停止する事が出来た。

目の前で起きた出来事にベルヴェールは息を呑む。電撃属性の魔法に、回復する術式は存在しない。だというのに目の前の少年はただ魔力を消費するだけで傷を癒して見せたのだ。それは脅威以外の何者でもない。

しかしそれではまだ傷そのものが消えたわけではないことを彼女は理解していた。立ち上がった夏流は口元の血を拭い、痛みを堪えながら振り返る。

「ベルヴェール、リリアを頼む……。俺は、あいつらを追う……」

「……アンタ、どうしてそこまで……」

「わかんねえよ……。でも、そういうもんじゃないか？ 仲間とか、友達っていうのはさ」

苦笑を浮かべ、走り出す夏流。その姿を見てベルヴェールではなくメリーベルが駆け出した。二人の少女は視線で意思疎通し、夏流を追ったメリーベルに代わり、ベルヴェールがリリアの身体に回復魔法をかける。

胴体到大剣を突き刺され、即死していてもおかしくないはずの重傷である勇者はしか意識を失っただけで生きながらえていた。見れば、魔力を帯びて聖剣が小さく震えている。聖剣の輝きを浴びた傷口は既に塞がりかけていて、放って置いたとしても時間をかければ回復するかのようにさえ思える。

「ホント、規格外ばかりね……うちのパーティーは……っ」

森を抜け、山道を抜け、辿り着く場所は古に撃ち捨てられた古城。

日の沈み夜の闇が世界を包み込む中、今にも消えそうな暮れないに照らされ、城は存在感を誇っている。山々の合間に存在するそれを前に夏流は息を切らし、肩で呼吸をしながら歩いていた。

その背中に追いついたメリーベルが無言で夏流に肩を貸す。それと同時に歩きながら薬瓶を取り出し、片手で手早く治療の準備を進めた。

「お前みたいなのが居てくれると助かるよ……。俺は、戦う事しか出来ないから……」

「少し、痛む。我慢して」

「つつっ！」

背中に薬を塗りこみ、血を拭って手早く手当するメリーベル。その手の動きが止まり、少女は視線を伏せて少年に問い掛ける。

「……本当に、彼らに勝つつもり？」

「……当然だ」

「レーヴァテインもウルスラグナも、まだ彼らを倒せるほどの力を持っていない。並の相手じゃないことは直ぐにわかった。それでも戦うの？」

「ああ」

「死ぬかもしれないのに？」

「そういうもんなんだよ。諦められねえんだよ、俺は……っ」

今までずっと諦めてきた。沢山のものを諦めてきた。でもそうして諦める事を一番嫌っていたのはほかならぬ夏流本人だった。

救いたくて、逃げたくなくて、守りたくて、どうしたらいいのかもわからず迷い、苦しみ、こんな世界の果てにまで来てしまった。それでもまだ救えないまま守れないままで、そんな自分が堪らなく嫌だった。

「だからもう馬鹿になる事にした……。考えても、答えが見つからないから……。あとの事は、やるだけやって考える……。！」

「ナツル……」

「……俺、間違ってるかな？ リーダーとして、役目を果たせてないよな」

「……うつん、それは違う」

首を横に振り、微笑むメリーベル。

「そんな貴方だから、あたしたちは着いてきた。これからも、そう。だからあたしは、貴方を支える」

二人は頷き合い、城を目指す。

巨大な城門を前に足を止めた二人。夏流は身体を支えてもらうのを

止めて自分の両足で大地に立った。ふらつく救世主の足取りを不安げに見つめ、メリーベルはその手を握り締める。

「一つだけ約束して……。一人では戦わないと。何も言わず、あたしと一緒に戦って欲しい」

突然のメリーベルの願いに困惑する夏流。しかし彼女が今まで見た事のないほど真剣な表情を浮かべている事に気づき、少年は頷いた。

「判った。一緒に戦おう。お前が頼みごとをするなんて珍しいしな。それに 借りを少しくらい返しておきたい」

「ありがとう。それじゃあ、あたしの言う通りに」

門を開き、二人は通路を駆ける。メリーベルの言い出した言葉に驚いた夏流だったが、今は彼女を信じる他ない。

城内の広間の中、崩れかけた壁の向こう、顔を見せ出した月が輝いている。その光を浴び、グリーヴァはゲルトの首を背後から抑えながら待ち構えていた。

「やはり来たか……。通すのは勇者だけと言われていてね。君たちをこの先に進ませるわけにはいかないんだよ」

「……グリーヴァ、だったか……？ ゲルトを人質に取る必要はないだろう。正々堂々俺と戦え！」

「そんな馬鹿はいないんだよ、救世主君。ふん、まあいい……君の愚かな目にもこれが見えるだろう？」

グリーヴァの手にしていたのは黒い液体を注がれた小瓶だった。そ

れを気絶しているゲルトの口元に当てる。どろどろと渦巻く魔力の塊を目に、男は口元に笑みを浮かべた。

「ナツル。あれは駄目。あれは、人が飲めば死に至る物……」

「どういう事だ……？」

「あれは、魔物の種。錬金術で生み出された、大量の魔物を凝縮し、液体化した物。飲めば体中で魔物が暴れ狂い、身体を蝕む悪意は呪いとなって身体を蝕む……」

「……お前、どうしてそんな事を？　って、まさか……」

少年の脳裏を過ぎった景色。かつて少女の肌を見た時、そこには漆黒の模様が浮かび上がっていた。蠢くような、その身体を蝕むような黒い泥。目の前にあるものが何であるのか、メリーベルにはわかっていった。その身体を蝕む呪いと、その瓶の中身は同義なのだから。

驚いている余裕はなかった。その泥を飲ませられればゲルトは死に至る。その決定的な事実以身動き一つ取れなくなった。グリーブアは高笑いを上げながら目を見開き、救世主に剣を向けた。

「くははっ！！　こういう戦闘は僕向きじゃあなくてね……！　悪いけど、正々堂々正面から不意打ちさせてもらっよ！」

剣が宙に舞い、夏流に向けられる。その刃が救世主を貫く事が確定した瞬間、ゲルトの小さな声がこだました。

「わたしに構わず、戦ってください……」

誰もがその視線をゲルトに向けた瞬間、少女は自らの手で瓶に手を伸ばし、泥を一気に飲み干した。

そうして微笑を浮かべ、目を閉じる。直後、少女の全身を呪いが襲い、魔力が勝手に暴走して溢れ出す。

「馬鹿が……っ！？ 自分から魔物の呪いを ！？」

「グリーヴァアアアアッ！！！！」

夏流が跳びかかると同時に剣を手に取り受けるグリーヴァ。弾き飛ばされた錬金術師を脇目に夏流はゲルトを抱き寄せる。

勝手に魔力が放出されたまま全身から見る見る力が抜けて行く少女の身体。口元からは血があふれ出し、全身は痙攣して目は虚ろ。猛然とした速さで死に向かっている事が明らかかな状態に、夏流は歯を食いしばり前髪の合間から覗く鋭い眼光で男に殺意を向ける。

「メリーベル、どうすればいい……！！？ ゲルトを救うには！！」
くそ、どうして自分で飲み干しやがったんだ！？

そう口にした瞬間、夏流の脳裏に原書の内容が過ぎる。

ゲルト・シュヴァインの『自殺』。それは、リリア・ライトフイルドが騎士になる事により発生する出来事だと考えていた。

だが一つのページに記されていた出来事の前後は彼には判らない。

もし仮に、この出来事が。ゲルト・シュヴァインの自殺が、リリアを騎士へと導くのだとしたら。

人質を失った今、絶対優勢を崩されたグリーヴァを下す事は不可能ではないだろう。手柄を持ち帰ったリリアはその力を認められ、一人だけになった勇者候補は騎士となり、そして。

「
そういう事なのかよ……！ 俺は……！ 俺はまた、守

れなかったっていうのかよっ！！　くそおおおおおっ！！！！
」

夏流の叫びが城内に響き渡る。剣を構えたグリーヴァが迫り、少年は流れる涙もそのままに立ち上がった。

覚醒する力の日(3)

「いいかい、リリア。聖剣の鎖を解いてはならない。君はこれから一生、この剣と折り合いをつけて生きて行かなければならない。君の一生は、常にこの剣と共にある」

ゲインが死ぬ数日前。リリアの前に現れた彼は彼女にそう言い聞かせた。

「聖剣の封印が解かれた時、君は自分の行いに恐怖するだろう。だから僕は、出来る限りの手段で君を少しでも聖剣に見合う人間に育てたつもりだ。それでもまだ、全然足りない。全く足りない。いいかい、リリア。聖剣を使つてはならないよ。たとえそのせいで勇者に成れなかったとしても、諦めるんだ」

「どうして？ どうして聖剣を使っちゃいけないの？」

「その剣は、人を殺す剣なんだ。剣だから当たり前なんだけどね。でもリリア、君がもしその剣の力を必要とし、解放せざるを得ない時が来たら。その時は見つけなさい。君を縛る鎖と成る人物を。僕はもう、この鎖を封印し続ける事は出来ないから」

疲れた表情でリリアの頭を撫でるゲイン。その身体が既にボロボロであり、見た目とは異なり命が死に瀕しているのだということ、その時のリリアは理解出来なかった。

そうしてある日、使ってしまった。ゲルトを虐める子供たちに勇者の剣を見せて、追い払おうとした。だがそれだけでは済まなかった。一向にゲルトへの虐めを止めようとしない子供たちに、その親に、リリアは思ってしまった。願ってしまったのだ。その瞬間聖剣は主

に問い掛ける。

『 殺してしまいたいかな？ 』

少女の手には収まりきらない程の巨大な刀身。ゲイン無き今、オルヴェンブルムの街で彼女を保護してくれる人などいなかった。

『 殺してしまえばいい。その力がお前にはあるのだから 』

だからそれは必然だった。ゲインが傍に居たからたまたま彼女は普通の人間として生きてこられただけ。短い平穏が終わりを告げ、少女は興味本位で鎖に手を触れてしまった。

『 良いぞ、人間。我が名を呼ぶことを赦す。我が身を呼ぶのだ。 』
『 化物 』と 』

「 行かなくちゃ 」

鎖の落ちる音がした。

夜の闇に沈んだ山道の中、気絶していたリリアが目を覚ます。回復魔法をかけていたベルヴェールの制止も聞かず、よろめきながら歩き出す。

その足取りは不確かで、どこか、何か、誰かにせかされて。力を持った代償として、覚悟をしなければならないこと。一度は約束を破り、聖剣を使ってしまった。その両手が血の赤で真っ赤になったとき、恐怖で慌てて剣を封じた。

ならば探しなさいと。ゲインの言葉を思い返す。自らの鎖となる人物を 。でも、今はそんな事を考える余裕がなかった。今はただ、友達を虐める敵を、叩きのめさなければならぬから 。

古城の中、夏流とグリーヴァの戦いは続いていた。お互いに一歩も

引けを取らない戦闘。あれだけの連戦を繰り返したにも関わらず錬金術師の術式には一部の狂いも無い。夏流はその事実に興りながら、回復しきらない傷の痛みに耐えていた。

倒れたままのゲルトに駆け寄り、メリーベルはロープの内側から薬を取り出す。それは彼女が常時服用してきた、呪いの効果を軟化させる秘薬。完全に治しきれず、毎日のように研究を繰り返し、それでも手にした八年間の成果。

「まさか、仲間を使う事になるなんて。ねえ、ゲルト……」

ゲルトの口に白い液体を含ませる。放出される魔力は一瞬収まった物の、しかし彼女の容態はよくはならなかった。

そこでもうやく結論に至る。やはり自分が受けた呪いとは純度が違いすぎるのだと。それに何より、ゲルトは魔物の力に適応しすぎている。剥離する事が出来ず。薬の拒絶反応で体内の呪いが暴れ狂い、ゲルトは悲鳴を上げて頭を抱えた。

身体を押さえ込み、様々な薬品を投薬する。だがまだ足りない。それでも治せない。判りきっていた事だ。自らの身も救えぬというのに、何を救えるというのか。

「ナツル、時間がない！ 彼を 倒すっ！！」

メリーベルの声に応え、後退する夏流。立ち上がった少女は自らの全身を覆っていたロープを投げ捨て、その両腕を肩まで覆う巨大な紋章武具が姿を現した。

その両腕に漆黒の魔力が宿る。以前夏流が目にしたそれとは違いすぎる。今度こそ真正正銘、少女の本気。

「あたしは自分で戦う事は出来ない。身体は呪いに蝕まれ、魔力総量もそう多くはない。でも あたしは錬金術師。あたしの役割は、

戦う者じゃない」

剣を手に駆け寄るグリーヴァ。その瞬間、メリーベルは手に宿された術式を大地に叩き付ける。炸裂する魔力と同時に、大地からグリーヴァが持つものよりも一回り大きく、より鋭く、破壊的な剣を想像する。

「ホーミングブレイド追尾効果付加 対象の戦闘力より三割上昇させた術式、限定発動」

生み出された刃に光が灯る。同時に剣はその形を変え、岩から生まれた物だとは思えないほどの鋭さを得る。剣を受け取った夏流の手の中、それは何もせずとも勝手に身体を動かし、全く無駄のない動作でグリーヴァの剣を押し折って見せた。

「何っ！？ 限定強化術式付与の 武装構築術式、だっ！？」

「グリーヴァアアッ！！」

夏流が振り上げた巨大な剣が襲い掛かる。障壁で防御を行うグリーヴァの正面、少女が両手を翳して目を閉じる。

「ブレイクブレイド障壁貫通効果付加 。対象の障壁要素を構成し以後その術式を破壊する。限定発動……」

剣が輝きを帯びる。その形状を変化させ、鋭い鎌のような形へと変貌を遂げた。それは一撃で紙でも切り裂くようにグリーヴァの障壁を貫通し、その胴体に深々と突き刺さって見せる。

「が……っ！？ ば、かな……。相手よりも、確実に味方を強くする術式……だと！？ そんな、反則な物があつてたまるか……！！」

「別に、難しくはない」

少年の背後、少女は両手を輝かせながら瞳を開く。

「そのためにこの八年を使い切つて来た。昼も夜も関係なく、ただこの時の為に……。貴方を、殺してあげる為に」

「 気には、なっていた。その、術式……。救世主が腕に装備するのは我がテオドランドの家紋……。やはり、君だったのか。メリーベル 我が妹よ」

鎌を引き抜き、夏流はそれをくるりを回転させて構えた。その背後、メリーベルは眉を潜めて兄をじっと見つめる。兄妹の視線は確かに交錯していた。ただお互いを見つめ合い、そして兄は眼を閉じる。

「八年前に別れてから、君がどれだけ力をつけたのかは知らないが。兄に妹が勝てると思っているのか？」

「思っているわ。言っただしょう？ あたしは戦わない。戦うのは苦手だから。だから、戦うのは彼の仕事。あたしは一人では戦わない。一人では勝てないと知っているから」

「その救世主にそれだけの価値を見出しているとも言うのか……！！？ 忘れたのかメリーベル。君の呪いを解く為に、僕は……！」

「覚えているわ兄さん。だからもうそれを終わらせに来たの。貴方の悪い夢を覚まさせてあげる。あたしの悪夢で」

メリーベルの隣に立った夏流が眉を潜めた。しかしメリーベルは口元に人差し指を当て、小さく微笑んでみせる。

「約束、したでしょ？ 何も言わずに一緒に戦うって」

「……わかってる。そうじゃない。ただ」

鎌を揮う。メリーベルを守るように。月下、夏流の手の中で刃は輝いて殺意が男を映し出す。

「指示をくれ、錬金術師。あいつを確実に倒せる手段を、俺に授けてくれ」

背後から夏流の手に自らの手を重ねる。そうして少女は夏流と身体を絡めるようにして両腕に込めた術式を発動した。

「フォースブレイド
聖剣効果付加」

グリーヴァは不死か否か。答えは否である。

彼は不死ではないからこそ不死の法則を探していた。そう、目の前で死に掛けている実の妹の為に。

ならば殺して殺せないはずはない。ただの回復能力と、事前にかけて継続回復魔法リジェネレーション。そして魔物の力を借りた闇魔法。確かに強固な不死の模造品。ではそれをどうやって駆逐する？

「それが魔法である限り、全てを貫く聖なる剣」

夏流の腕の中にある剣が黄金に輝き始める。形状を変え、巨大な両刃の刀剣へと姿を変えて行く。

「ナツルも力を貸して。リインフォースとまでは行かなくてもいい。あの呪いの障壁を突破し、一撃で彼を貫く剣が欲しい」

夏流もまた目を閉じる。二人は手を重ね、魔力を一つに連ねる。夏流の身体から息苦しくなるほどの魔力がメリーベルへとなだれ込み、一気に術式は加速する。

そう、魔法と名のつくものを一撃で貫く聖剣。あのリインフォースのように。いつか憧れた、嘗ての英雄たちの剣のように。子供の頃、絵本でみたあの物語のように。無いなら作ればいい。錬金術師の八年間を、形にするだけなのだから。

「あんたたち兄妹の間に何があるのかは知らない。だが、悪いな……これは私怨だ。大事な勇者をやられて、黙っていられるほど俺は大人じゃない」

救世主の腕の中、電撃を帯びた巨大な剣が姿を現した。夏流の武具同様、テオドランドの紋章を刻み込まれたその魔剣は光の刀身を持ち、掲げた夏流の腕から補充される魔力を吸い取って黄金に、夜の闇を切り裂き全てを染め上げるほど、ただただ黄金に輝く。

「レーヴァテイン
神討つ一枝の魔剣その力を我は担う」

二人の声が重なる。霹靂の魔剣を手に、救世主は駆け出した。正面に剣を構え、突きの体勢で突撃する。それを迎撃しようと錬金術師の放った呪文は悉く魔剣の前に蒸発した。既に彼の実力を凌駕するだけの魔力が込められているのだ。龍であろうが鬼であろうが、一刺しで殺す事が出来る。魔法を貫き、呪いを焼き尽くし、中途半端な不死なら消し飛ばす。

「それが……君の八年間か、メリーベル……」

男は両手にリインフォースを模造する。二対のリインフォースを前に、霹靂の魔剣は唸りを上げる。

「おおおおおっ！！ 貫けええええええっ！！」

自動追尾が付加された魔剣は一瞬で聖剣を圧し折る。模造されたそれでは今の救世主の剣には敵わない。砕け散る聖剣の残骸の中、嬉しそうにグリーヴァは目を細める。

その身体を貫いた剣は光を放ち、不死を形作っていた術式を一撃で破壊する。突き刺さった剣を握り締めたまま、夏流は雄叫びと共にそれを横に振りぬく！

閃光が城の壁を貫き、夜空を一閃に切り裂いた。炸裂する魔力の中、男は崩れる城と共に落ちて行く。メリーベルは消えて行く男の影を額に手を当てて見送っていた。

「さようなら、兄さん……。良い、夢を……」

生み出された魔剣が空中で光となって霧散し、夏流は男に背を向けて目を閉じた。

覚醒する力の日（3）

焼け焦げた夜空の下、夏流は静かに息を吐いた。既に敵の姿は無く、全身の魔力も殆ど絞りつくした。振り返るとメリーベルは既にゲルトの手当てに移っていた。実の兄を倒したというのに、少女は微塵も動揺してはいなかった。

二人に駆け寄る。メリーベルは様々な薬品を試しながら、額に汗を浮かべて歯を食いしばっていた。必死に救おうと、今までに無いほど真剣な顔でゲルトを見つめている。

「メリーベル……お前」

「黙ってて！ 今は、何も言わないで……。お願い、ナツル……」

泣き出しそうな声に言葉を失った。そう、悲しくないはずが無い。心の中では沢山の感情が渦巻いているのだろう。それでも彼女は知っているのだ。この呪いをほうっておけば死に至る事を。そしてそれを救えるのが今自分しかないことも。

救えるのなら救いたい。誰だって同じ事だ。どんなに冷静を装っても、どんなに冷たく心を冷やしても、それでも救えるなら救いたい。後悔はしたくないのだ。だから目を反らす。痛みを背負いたくないのだ。だから手を離す。でも、それで救えるのなら。救える可能性があるのならば。

「どうして……。あたしの力じゃ、ゲルトを救えないの……！？」

苛立ちながらもあらゆる手段を尽くした。それでもゲルトは苦しみがらただそれを受けるばかりで時間だけが過ぎ去っていく。

泣き出したかった。今のゲルトは昔のメリーベルとなんら変わらない。自分が一番、この地獄の苦しみを理解している。

体中の内側から刃で突き刺されるような。体中の臓物が熱で溶かされていくような。どうにも成らない誰にも救ってもらえない地獄の苦しみ。死んだほうがマシだと思っ夜が何度も繰り返された。それを今、その地獄から今、仲間を救いたい。

「何か……なんでもいい、なにか手段が……！ どうして救えない

のよ……そんなのって無いでしょ。やめてよね、悪い冗談は……！」

「メリーベル……」

「嫌なのよ、救えないなんて……。誰も守れないなんて……。せつかくこうして今まで生きながらえたんだから、誰かに命をつなげなきゃ。そうじゃなきゃ意味がない……。意味、ないよ……」

涙を流し、笑いながらゲルトの手を握り締めるメリーベル。夏流は居た堪れなく立ち上がり、その場をウロウロと歩き回る。落ち着いてなど居られなかった。魔力の抜ける速度は落ちたものの、ゲルトの容態は悪化するばかり。

「兎に角魔力の放出だけでも抑えないと……。それから……。ああ、もうっ！！ 落ち着け、あたし……。冷静になれ、あたし……。っ！！」

「魔力を制御する……。？ め、メリーベル！！ これ！！」

自分の腕を突き出しメリーベルに見せる夏流。慌てた様子で立ち上がり、錬金術師は自らの製作物を取り外し、少女の消えかけた命をそれで包み込む。

「手足だけじゃ足りない！！ 夏流、手伝って！！ 魔力の放出を抑える布か何か……。魔力が足りなくて作れないの！！ お願い！！」

「判った！！」

二人は手を重ね、術式を構築する。夏流が魔力を搾り出し、メリーベルがそれを紡ぐ。そうして出来た白い布束でゲルトの身体を巻き、

苦しげな呼吸が少しだけ落ち着いた事に二人はため息を漏らした。

「まだ、出来る事がある……。夏流、ゲルトを救える方法が一つだけ思いついた」

「本当か！？　今すぐやってくれ！」

「でも、それには夏流の力が必要……。それに、急場しのぎではない。救えたとしても、安定するかどうかは……」

「関係ねえ！　出来るなら今やってくれ！　後悔したくないんだつ！！　お前だって本当はそうなんだろ！？」

夏流の声に頷くメリーベル。その手に短剣を構築し、夏流の掌を深めに切って見せる。血があふれ出し、流れるそれを零さぬように直ぐにゲルトの口元に移し、小さな口の中に垂らして行く。

「お、おい……？」

「いいから！　血が止まったらどこでもいいから切って出して！　今から魔力を転移させる術式を組むから……！！　それに魔物は他の生命体の魔力を食べる事で安定するわ。血を飲めば少しは落ち着く」

「それってゲルトが魔物になったってことか！？　おいっ！」

「いいから落ち着いて！！　今は他に手段がないのっ！！　ナツルの血は大量の魔力を含んだ貴重な源泉……！！　これなら間に合うかも知れない　！」

ゲルトの身体に手を当て、メリーベルは必死で術式を構築する。そ

んな時間が暫く続き、ゲルトの容態は一応の安定を見せた。

二人は安堵し、溜息を漏らす。しかし喜んでいたのは夏流よりもメリーベルの方だった。両目に涙を一杯に溜め込み、縋りつきながら笑っている。その姿に少年もまた微笑み、全身の力を抜いて座り込んだ。

「ありがとう……ナツル」

顔を上げるとメリーベルが笑っていた。今まで見た事が無かったその笑顔に、少年は首を横に振る。

「お礼を言うのは俺のほうだ。お前がいなかったら俺は何も出来なかった。ありがとう、メリーベル」

二人の間、額に汗を浮かべたままのゲルトがいる。一応容態が落ち着いたとは言え、完全な状態には程遠い。まだ安心は出来ない立ち上がった夏流の背後、揺らめく影の姿があった。

『グリーヴァを下したのか、救世主……。意外だな、奴ほどの腕の男、そうそう倒せるはずもないのだが』

振り返った夏流の背後、魔剣を片手に携えたフェンリルが立っていた。メリーベルはゲルトを庇うように身を乗り出し、夏流は拳を構えようとして　　気づく。今の彼に武装はなにもなく、魔力さえも尽き果てた。戦えるはずが無い　　気づくのは遅すぎた。フェンリルの振り上げた剣が、少年の身体を両断しようとしたその時だった。側面から跳んできた小さな影がフェンリルを蹴り飛ばす。体勢を崩さずに着地する男に斬りかかったのは血塗れのリリアだった。聖剣と魔剣が激しく激突し、二人の戦いは一瞬で激化する。

「リリアッ！！」

夏流の声は届かない。リリアは倒れたゲルトに一瞬目をやり。それから聖剣にありったけの魔力を注ぎ込む。振り下ろした一撃は大地を叩き割るほどの威力があったが、それでもフェンリルには及ばない。

『どうした勇者。連続での戦闘には不慣れか？ ならば慣れろ！ お前にはこれから、散々戦い通しになってもらうのだからなっ！』

「っづう！ う ああああっ！！」

剣を受ける度両腕に痛みが走る。それでもリリアは歯を食いしばり痛みに耐えて前進する。足場は平ら、相手は一人。集中すれば直ぐにやられる事はない。自らに言い聞かせ、必死で剣を振る。

激しく火花を散らす黒白の剣。それは嘗ての勇者たちが刃を交える光景さえも彷彿とさせる。先ほどよりも今、今よりも次の刹那にはまた強く。リリア・ライトフィールドはフェンリルの剣技を恐ろしい速さで吸収していた。見開かれた両目はその動きを見極め、覚え、やがては到達する。

『ほう。俺の速さに追いついてきたか。つくづく異常な才能だよ、お前は』

「強くなってみせる……！ お前なんかには負けない！ 負けてやらないっ！！」

剣戟の速さは加速し続け、既にそれを見る者にも見極められない速さにまで到達していた。二つの剣がぶつかり合う度に轟音が鳴り響

き、大地が挟れる。それを片手で受けていたフェンリルが舌打ちし、ようやく両手を使ってフレグランスを握り締める。

『この速さと力……。聖剣を封じられているのにそれか』

「師匠っ！！ 聖剣をつ！！！！」

後退したリリアが叫び声を上げる。夏流は迷っていた。しかし今は他に手段がないのも事実。何より目の前の女の子が、むざむざ殺される所だけは見たくなかった。

夏流の傍に着地したリリアが大地に剣を突き刺す。夏流はその剣に巻きつけられた鎖に力を込め、聖剣を解放する。

「聖剣 解放」

鎖はまた巻けばいい。その考えが甘かった。聖剣の鎖を解放した瞬間、鎖は二つに砕けて大地に落ちた。直後、リリアの全身から膨大な魔力があふれ出し、聖剣はその刀身に大量の紋章を浮かべる。風が渦巻き、光が聖剣を中心に迸っていた。少女の髪は銀色に染まり、開いた瞳はフェンリルを捉え、憎しみの色に染まっている。

『来たか、聖剣 ！ この瞬間をどれだけ待ち望んだか ！
力を解放した今、お前を砕いてしまえば ツー！！』

フェンリルが魔力を解き放つ。今までにないほどの膨大な量の魔力が二つ衝突し、二人は刃を構えて激突した。

その直前、夏流はメリーベルとゲルトを抱えて城の外に飛び出していた。衝突の刹那。城の上部は吹き飛んで消えた。立ち上った光の柱が城を砕き、雲を突き破り月よりも明るく世界を照らす。

眩い閃光の中、リリアは剣を手にする感覚だけでふわふわと浮かん

でいた。体中から力が抜け、全ての感覚が溶けて行くような光の中、少女の目には確かに見えたのだ。

『殺してしまいたいのか？』

光の中、自分の目の前にいた人物。白銀の鎧を纏い、長い銀髪を靡かせて微笑んでいる。

『殺してしまえばいい。その力がお前にはあるのだから』

ゲインの死後、少女はずっとその声を無視し続けてきた。でも、今はその声が堪らなく愛しい。

大切な人を守れないのも、世界が変わらないのも、全ては無力な所為。でも声は言ってくれる。お前にはその力があるのだ、と。

『良いぞ、人間。我が名を呼ぶことを赦す。我が身を呼ぶのだ。』
『化物』と』

両手が差し伸べられる。頭の中に過ぎる映像。夕暮れの空。崩れ去った城。その頂点に立つ、聖剣を携えた男の背中。

それは、剣で貫かれて膝を着いていた。勇者の前に跪いていた。だが、殺しきれなかった。それを殺せなかった勇者は突き刺した聖剣の中に、その存在を閉じ込めた。

『私に身体を寄越せ、勇者の娘よ。代わりに貴様に授けてやろう。
。大地を百万の軍勢で埋め尽くし、数多命を貪る我が術式を』

幻想が消え去った後、リリアの身体には無数の紋章が浮かび上がっていた。少女は顔を上げ、声高らかに笑いながら片手で聖剣を構える。引き攣るような笑顔に対峙するフェンリルは無言で剣を構える。

『 ロギア 』

「ふっ！ ふはっ！ ふはははははははっ！！ 十年ぶりだな、フエンリルッ！！ フェイトについて回っていただだけの餓鬼が、でかくなったものだ！ なあっ！！」

剣先がフレグランスに激突した瞬間、その火力に耐え切れずフエンリルの身体は弾き飛ばされた。城壁を突き破り、空中に魔力で足場を形成し、停止する。フレグランスに残った衝撃の後が刀身を軋ませた。

再び跳躍し、空中から舞い降りながら術式を組み上げる。空に浮かび上がる無数の巨大な槍。それが雨のように城に降り注ぎ、城は一瞬で崩落した。その瓦礫の山に剣を構えながら落下し、当然のように顔を出したリリアに剣を振り下ろす。

聖剣ではなくただ片手でそれを受け止めたりリアが笑い、横に聖剣を振るう。フエンリルの胴体がざっくりと切りつけられ、大量の血が噴出した。

「ん？ なんだ、おまえ……もしかして弱くなったか？」

ふらつきながら着地するフエンリルの胴体に指先を触れるリリア。放たれた魔力の塊が何の術式を形成するでもなくフエンリルに直撃し、その身体が大きく宙を舞った。

血飛沫の中、リリアは舌で唇を舐めながら目を細める。瓦礫の中に混じった聖剣を封じる鎖がきしりと音を立て、小さく砕け散った。

幕間の日（１）

「おーいおい……なんだなんだ、何が起きたんだ……！？」

アクセルとブレイドが城に辿り着いた時、そこには既に城の面影は無かった。瓦礫の山の上、リインフォースを突き刺して月明かりの下で佇むリリアとその周囲に倒れる夏流たち。敵の姿はどこにも無く、ただ吹き抜ける風の中で少女は振り返った。

「リリアちゃん、何があつたんだ？　　すげえ光が見えたけど……」

「うむ。まあ、私が力を貸したのだから当然だ。おい、剣士。そこで無様に転がっているゲインの娘を連れてオルヴェンブルムに引き返せ。メリーベルが対処法を知っている」

「へ？　　り、リリアちゃん？　　どうしちゃったんだ？　　なんか……偉そうだけど？」

「偉そうではない、偉いのだ。一国の王相手に何を戯けた事を……。もう良い、急げ！　　私はこの救世主^{バカ}を連れて行く。聖騎士団との約束の時間に間に合わなければ意味がないからな。さて、どうこいしよ……む、流石にこの身体で男を背負うのは辛い物があるな」

一人で夏流を背負い、森の中へ消えて行くリリア。その足元に転がって気絶しているメリーベルとゲルトを抱きかかえ、アクセルは踵を返した。

月明かりさえ届かぬような闇に包まれた森の中、小さな影は救世主を背負って疾走する。その口元には溜息を浮かべ、しかし嬉しそうに微笑んで。

「世話の焼ける奴だ……。おい、フェイトの娘！ どっちに行けば良いのか判るか？ ……ああ、そうか。ふん、判っている、手荒には扱わないさ。こいつはお前の大事な男なのだろう？ ああ、そう喚くな。私たちは一心同体 目的も常に同じ。そうだろう？ 相棒にして我が主 そして我が奴隷よ」

リリアは大地に足を着き、角度を変えて跳躍する。夜の森を突き抜けた空、月を背に小さな身体は輝きを帯びながら闇に消えて行く。

幕間の日（１）

「……魔王、ロギア？」

「うむ。それが私の名だ。生前はそうだな……。ザックブルムの王をしていた」

俺を森から連れ出したリリアは突然俺にそんな事を口走った。

確かに俺が覚えている記憶はリリアが魔力解放をする瞬間までの物だ。その後何があったのかはわからない。気づいたらリリアに背負われて森の中を走っていた。今は何とか一緒に移動しているが、正直頭がはつきりしない。

そうでなくても連戦でくっつくたなんだ。わけわかんないこと言っ
て俺を困らせないで欲しい……。

「どうした？ ここはもっと盛大に驚くところであろう、救世主」

「……って言われてもなあ」

偉そうな口調で話しているとは言え、ちっこいリリアさんの身体のままだし、顔もそのままだし……。正直、威厳というか迫力に欠けるよな……。

深々と溜息を漏らす。しかしリリア　自称魔王は捻くれた視線を俺に送り、口元に笑みを浮かべて俺の顔を覗き込む。その仕草は確かにリリアとは違って大胆不敵だ。しかし結局身体つきがちっこいままなので迫力はない。ないのだ。

「ふん、まあ構わん。おまえがそういう人間である事は把握している」

「その自称魔王が一体なんでまたリリアの中に入り込んでいるんだ？」

「リリアの中身に入り込んでいるわけではない。私はあの男の剣、リインフォースに封じられているのだ。十年前、私の居城ごと一人で破壊したあの馬鹿は在ろう事が自分の剣に敵の大将である我を封じたのだ。ふん、全く愚かしい」

「ってことは、なんだ？　リリアが背伸びして喋っているのではなく、マジで魔王なのか？」

「おまえは私をなんだと思っているのだ！？　そんな子供みたいなことするか！　ばか！」

いや、だから見た目は子供なんだが……。

「だったらリリアは今どうなってるんだ？　まさか、お前に身体を

乗っ取られたとか言うんじゃないだろうな」

「それは違う。おまえ、何か私を誤解していないか？ 別に私はこの娘をどうこうするつもりはないし、出来る限りこの子の力になりたいと思っているくらいだ」

何を言っているのかちょっとわからない。整理してみよう。腕を組んで考え込む。

えーと、リリアの聖剣リインフォースは、十年前魔王大戦で親父であり勇者であるフェイトが使っていた剣だ。それは今リリアに引き継がれ、リリアは何故か封印されているこの剣を後生大事に持ち歩いていた。

その実、この剣はリリアの力を封じるために存在する。鎖を巻くことによりリリアの高い魔力と才能を剣が封じ込めるのである。つまり聖剣は封印のキーでもある……確かにまあ、筋は通っている。魔王だかなんだか知らないが、リリア以外が封印されている事もありえなくはない。だが問題はその後だ。どうしてその世界を滅ぼそうとまでした魔王が、リリアに協力する？

「疑うのは構わんが、無駄な事だぞ。わたしは嘘は付かん。一国の王であつたのだ、そんな陳腐な真似はせん」

「それじゃあ、えーと……ロギア。リリアはどうなってる？ お前は剣に封じられているんだろう？」

「その通りだ。我が身は十年前にとくに滅んでいる。残っているのは僅かな魔力と私の意識……。リリアは私と常に一つだった。彼女の身体を動かすくらいの魔力は残っているのだ。当の本人は身体を酷使しすぎて気を失ってるよ。さっきまでお前に乱暴するとか無礼を働くなとか頭の中で喚いていたが、ようやく寝静まったところ

だ。子守は疲れる……おまえの心中も察しよう、救世主」

優しい笑顔を俺に向けるロギア。一体全体どうなってるんだ？
なんで世界を滅ぼそうとした魔王と一緒に走ってんだ俺……？
とにかくどうやらリリアは無事らしい。むしろその動けないはずの
リリアの身体を回復し、傷ついた精神を休ませてくれているとのこと。
そのリリアが眠っている時間を使ってロギアは俺に接触を図った。

「おまえは聖剣に鎖を巻けばどうにかなると思っっているようだが、
そういう事ではないのだ。あれは一度破られてしまった以上意味は
成さない。逆にお前が鎖を巻いていると、私がこの娘をサポートで
きなくなり非常に不便だ。是が非でも止めてもらいたいな」

「ちょ、ちよつとまで！？ お前を封じる為の鎖じゃないのか！？」

「それは違う。もっと事情はややこしいのだ。そうやって短絡的に
考えて他人を思いこむな馬鹿者。器が知れるぞ」

ぐっ……。なんだかいい事を言われている気がするのだが、リリア
の顔で言われると妙に納得いかねえ。

それを判っているのか、ロギアは悪戯っぽく笑っていた。二人して
森を抜け山道を登っていく。この分なら余裕でバズノク国境沿いに
到達できそうだった。

「それで……？ 魔王がどうしてリリアを助けるんだ？ リリアの
暴走とリインフォースは関係ないのか？」

「助ける理由などない。この娘が死ねば私も死ぬのだ。一心同体、
言っただろう？ 私はこの娘の魔力総量を食らって生きながらえて

いる。それが封印されているようにも見えるのかもしれないがな。自分の身だ、自分で守るのは当然の理だろう」

「それでフェンリルを倒したっていうのか？」

「ふははっ！ あの小僧一人前に強くなっておったわ！ だが相手がこの娘だったからだろうな、手加減しておった。ふん、舐めおつて……。殺してはおらん。何、そのうちまた出向いてくるだろう」

何なんだ。滅茶苦茶すぎる。まともな人間の考え方じゃない。フェンリルも手加減していた？ だったらアイツの本気は……。だめだ、考えないようにしよう。今は危機を一先ず乗り越えたんだ。それを良しとしなければ。

頭の中が混乱しっぱなしだった。聖剣と中に封じられた魔王？ リリアの暴走と剣は無関係？ フェンリルの目的は？ っていうか魔王はどうしてリリアに加担するのかっていうかなんで聖剣に封印されたのか……。わからない。わからない。わからなすぎて俺は考えるのを止めた。

「……じゃあ、ロギア。お前は俺たちの味方……で、いいんだな？」

「勘違いをするな救世主。私は私の味方であるに過ぎん。おまえらが死にそうになっていようが居まいが、助けるつもりはない」

「でもリリアを救ってくれたんだろ？ 死に掛けたら回復して、ヤバかったら魔力を貸してた。お前がリリアを助けてたんだな。ありがとう」

ロギアは俺の礼を言う言葉に目を細める。それから苛立たしく舌打ちし、それから目を閉じた。

「闇の総大将に礼を言う救世主がどこに居る……。その言葉、高く
つくと覚えておけ」

「そうするよ」

山を駆け上がり、その山頂から見下ろす景色。何時間もロギアに運
ばれていたせいか、既に夜明けは近い。水平線の向こうから日が昇
ってくる景色を眺め、ロギアは腰に手を当てて笑う。

「良い物だ。この世界は美しい。誰にも支配されぬからこそ美
しい物もある。動乱の世もそう悪くは無かるう」

「……お前、案外ロマンチストなんだな？」

「ふん、ほざけ。さて、リリアがそろそろ目を覚ます。この娘の御
身はおまえが責任を持って送り届けろよ。私の身体でもあるのだ、
無礼は赦さぬ」

偉そうに俺を指差して笑う勇者件魔王様。俺はその答えに頷く。そ
うしてロギアが目を閉じると同時にその小さな身体が俺に倒れこみ、
それを抱きとめて溜息を漏らした。

「何がどうなっただよ……。なあ、リリア……」

リリアは答えなかった。そうして暫く朝日を浴びながら俺は小さな
勇者の身体を抱きしめていた。

その時俺はその身体に背負わされた沢山の宿命のうち、たった一つ
にようやく触れる事が出来たのだという事を、まだ知らないままだ
った。

そう、この世界を支配している沢山の誰かの意味や。

冬香が死んでしまわなければならなかった理由や。

俺がこの場所に召喚された意味や。

そして、俺が彼女と出会った先に在る未来の事も。

全員幸福なまま終わる事の出来る物語なんて、現実には在り得ないと判っていたけれど。

それでも、俺は。

虚幻のディアノイア

子供の頃、俺はいつでも冬香と一緒にだった。

なんというか、双子だというのに俺たちは全然似ていなかった。冬香は明るくて元気で、活発な女の子。かくいう俺は……内気で人見知り。外で遊ぶなら読書をしている方が好きなやつだった。

そんな俺たちにはもう一人、幼馴染の男の子が居たが、そいつ以外に俺には友達と呼べる子なんていなかった。そもそも遊んでいる時

間があるなら立派な大人になるために勉強しなさいというのが両親の考えで、その考えに猛反発して家に寄り付かない冬香と言われるがまま成すがままの俺と、その間にあるものはきつととても大きな壁だった。

ある日俺はいつものように日曜の午後、春うららかな日差しが差し込みふわふわと舞うカーテンを横目に勉強をしていた。まだ小学生だというのにご苦労なことだ。日差しの向こうにはいつも森があつて、その森は我が本城家と俗世とを隔てる結界のようでさえあつた。俺はそんな結界の中で一人でぼんやりと考え込んでいた。俺は誰かに想いを伝えるのが苦手極まりない。だから友達もいない。そもそも、生まれる前までは一つだったと豪語する妹とでさえ解り合えないのだ。

そんな妹が突然窓から入り込んできた時、俺は『またか』と思った。頻繁に自分の部屋を抜け出し、廊下を歩いているとメイドに見つかるからと言って壁を移動してくる妹はたなびくカーテンを翼のように輝かせて俺の前に飛び降りる。

「あーそぼつ！」

「……ふーちゃん、勉強しないの？」

「しないの。子供の仕事は遊ぶ事だって、先生も言つてたもん」

そんな事を言われてもどうにもならない。勿論俺がそんな事を言つたところでふーちゃんは聞きもしないのだが。

ふーちゃんこと本城冬香。名前の読み方はトウカなので、とーちゃんが正しい。だがこれを言うと本人は激怒するという事実を認識している俺は、口を滑らせることさえもなかった。

彼女の誘いを断るのはいつものことだった。だが今回はそうは行かなかったのだ。カーテンを乗り越えて来たのは一人だけではなかつ

たから。

「よっと！ 久しぶりだな、ナツル！」

「……シュート。わざわざ来たの？」

「へへ、俺様にとつちゃこんな所、庭みたいなもんだぜ！！ そんな事よりお前また勉強してんのか？ それ楽しいのか？」

そんな事を言いながら笑う少年が居た。彼の名前はシュートこと、如月秋斗^{きんづきあきと}。同い年で、森の向こうに住んでいる一般人であった。常に強気で冬香以上に喧嘩っばやい、所謂不良少年である。しかしなにが楽しいのかたまに俺の部屋に飛び込んできては強引に結界の外側に引き出そうとするのである。

彼らの来場で勉強出来る環境ではなくなってしまった。俺は溜息を漏らしてノートを閉じた。しかし俺は窓から出るなんて事はしたくないし、どうせなら外よりも室内で遊びたい。

「サッカーやろうぜ！ 俺様シュートって呼ばれてるだろ？ サッカーの天才である可能性が極めて高い！！」

「……君、野球少年じゃなかったっけ？」

「手が足の差だろ？ 細かい事は気にすんなって」

そんな事聞いたら全国のサッカー＆野球少年が怒り出しそうだ。

「待ちたまえシュート君！ 彼は外での遊びには慣れてないのだよ。まったくこれだから君は」

「女の癖に偉そうに……。じゃあなんだよ？ 他に何して遊ぶっていうんだよ？」

「それは……じゃーんっ！！ これでーす！」

冬香が手にしたのは先ほどまで俺が勉強をしていたノートだった。二人して顔を見合わせ、俺たちは妹の妙な提案に耳を澄ませる。

「これからお絵かきをしまーす」

「えー！？ そんなの女の遊びだろ……。俺様はサッカーしたいんだよ」

「僕もそれは困るよ……。勉強用のノートだし。それは字を書くものだよ、ふーちゃん」

「ああもう、細かいこと気にしないの！ じゃあなっちゃんは字を書けばいいじゃん」

「字……っていわれても」

「ほら、わたしが絵を書くから、なっちゃんは字、書くの！ ね？ 面白そうでしょ？ ねーねーやろうよー！ ねーってばー！」

冬香が一度こうなるとテコでも動かない事を僕らは知っていた。だから仕方が無く賛同する事にしたのだ。

タイトルの無い、ノートの後ろの方に記された文字と絵。僕らは当時憧れていたのだ。ヒーローとか……。そう、勇者みたいなものに。剣の刺さった丘の上、僕らはそこに自らの英雄を作りこんだ。そこに居たのはそう、魔王を下す勇者の姿。

「ねえ、ふーちゃん。いきなり魔王をやっつけちゃったけど、これ、魔王は何をしたの？」

「え？　そこまで考えてなかった。シュートは？」

「え、俺様かよ。そうだな……あれだ。ほら、あれだよ。愛だよ」

「「愛？」」

二人して声をそろえる。その視線の先、自慢げにシュートは目をきらきらさせて呟いたのだ。
その、死にかけた二人に纏わる物語を　。

「　　っ」

目を覚ました時、ゲルト・シュヴァインが初めて目にしたのは自らの体の上に乗る猫の尻尾だった。
メリーベルの部屋で目を覚まし、猫に乗られた身体を起こす。猫たちは暫くゲルトの膝の上でごろごろしていたが、やがてどこへともなく散っていく。ぼんやりする頭で周囲を見渡すと、無人の研究室の中、自分の姿だけがそこにあった。

「……わたしは……」

記憶が思い出せない。曖昧になったままはつきりしない景色。オルヴェンブルムに勇者部隊として出向いた所までは覚えているが、その街で何かが起きて、急にここに眠っている。
頭を抱える。すぎすぎと痛む感覚に歯を食いしばった。とにかくじ

つとしているわけにも行かず、立ち上がって部屋を出る。シャングリラの街は既に平穏を取り戻しており、街は以前通り、ゲルトの知るシャングリラへと移行していた。

「戦争が……終わってる？」

ぼんやりとそうして一人で立ち尽くし、通り過ぎる人の波を眺めていると肩を叩かれた。そこには買い物袋を片手に担いだメリーベルの姿があった。

二人は一度研究室に戻り、メリーベルの淹れたコーヒーを口にして一息つく。猫たちに餌を食べさせるメリーベルの背中にゲルトは疑問を投げかけた。

「あの……。何がどうなって、わたしはここに？」

「やっぱり前後の記憶が不確かに成ってるか……」

立ち上がったメリーベルはビーカーに注がれたコーヒーを飲み、静かに語る。

突然街中で戦闘になった事。そしてその後、ゲルトはグリーヴァに拉致され、呪いを自ら口にして死に掛けた事。

そうして一つ一つを丁寧なメリーベルに語られ、彼女はようやく記憶を明確にしつつあった。そうなればこそ、余計に疑問は膨らんで行く。

「何故それで、わたしは生きていますか……？」

「理由その一。あたしがその呪いの研究を行う錬金術師であり、作用を軟化させる薬を持っているから。理由その二。ゲルト自身が、闇の魔力に対する強い適正を持っていたから。理由その三は……多

分、あたしの口から言わない方がいいと思う」

「な、なんですかそれは……？」

問い詰めるゲルトの前でメリーベルは台所に向かう。そこから持ち帰ってきたのは、布に巻かれ丁寧に手入れがされた魔剣フレグランズだった。

受け取ったゲルトは懐かしい魔剣の感触に目を細める。あの戦いの後、瓦礫の山からブレイドが拾って持ち帰ったものだった。それを大切に抱き、ゲルトは目を閉じる。

「一つ注意点。まだしばらく魔力は使わない事。一つだけ覚悟をして。これからあなたは、一生をかけてその呪いと付き合っていかなければならない。それは死ぬより辛い事だってあたしが保障してあげる」

「……はい。それでも、わたしは……生きていた方が、いいのだと思います」

ゲルトの言葉に頷くメリーベル。それから彼女は呪いと付き合っていく上で必要な幾つかの決め事をゲルトに伝えた。

まず、メリーベルが調合する薬を定期的に服用する事。次に極力魔力は使わない事。そして三つ目の条件は、ゲルトに大きな衝撃を与えた。

「人を食らう事　です、か？」

「残酷な話だけど、今ゲルトは半分魔物で半分人間　そうね、魔人とも言おうか。いや、うん。『魔女』、かな。兎に角、身体に適応してしまった魔物と折り合いをつけなきゃ成らない。魔物は人

間を食べたがる。その衝動は当然ゲルト……あんたにも襲い掛かるわ」

ごくりと息を呑むゲルト。今までとは全てが違ってしまふ。人ごみに出れば、それを食べてみたいと思ってしまう。そんな残酷すぎる、当然過ぎる欲求。それに耐える為に、これから死に物狂いで努力をしなければならぬ。

それがメリーベルが部屋に一人で居たがる理由。一生をかけて何とかしなければならぬ病を研究しながら、彼女は人ではなく猫と付き合う。もしも猫ならば 衝動に耐え切れずに食らってしまったても、心の傷が浅くて済むから。

「もう、まともな人付き合いは出来ないと思って。これはもう、かわいそうだけど、変えられない。何とかする薬は、これからあたしが作ってみる。でも、いつになるかわからない。いつ直るか判らないこの呪いと向き合うのは……とても、辛い事」

それを体験したからこそ、メリーベルはゲルトにその残酷な宣告をする事が出来る。二人は薄暗い部屋の中、黙り込んでいた。ゲルトは拳を握り締め、眉を潜める。

「……それは、どうしても……食べなければ、ならないんですか？」

「試してみる？ どれだけ長い間我慢できるか。でもね、それはずっと寝るなっていうのと同じ。一生何も口にするなっていうのと同じ。ずっとそれを続ければやがて身体に異常を来す。死に至る……」

「そんな……」

「別に、生きた人間一人を丸ごと食らう必要はない。だからこれから一緒にどうやって生きていけるのか、勉強して。ゲルトを一人にはしない。あたしがついてる」

ゲルトの手を握り締め、メリーベルは優しく囁いた。ゲルトは無言でその手に縋り、ただ黙って俯いていた。

リリアは一人、部屋のベッドの上で眠っていた。静かに一人、ただただ睡眠を貪り続ける。その傍らに座っていた夏流が席を立ち、静かに息をついた。

部屋を出た夏流は暖かい日差しの中、学園へと向かう。門を潜り中庭を抜け校舎へ入りエントランスで上へと伸びる螺旋階段を上る。

学園長　アルセリアの部屋。そこに入った少年は正面に立つ巨大な騎士に臆することなく歩み寄る。

「アルセリア、進展はあったか？」

『いいえ、夏流。相変わらず世界は平和です』

「……そうか。じゃあ　バズノクを滅ぼしたのが誰なのかも、判らず仕舞いって事か」

あの日、聖騎士団と合流した夏流が進軍して見たのは、燃え盛るバズノクという国と、一人一人存在しない街だった。

無残に朽ち果て焼け落ちたその街に死体は一つとして存在しなかった。国はとうの昔に滅び、国民は一人残らず闇に葬られていたのである。

戦争は誰を駆逐するでもなく終結した。中途半端な戦果で引き返した聖騎士団は、不可解な事件を追い行動を継続している。戦争は終

わった……しかし、何者も倒すことなく終わったそれは、不気味な余韻を残して世界を包み込む。

「あの夜、バズノクに何が起きたのか……。誰も居なかった街の意味は何なのか。聖騎士団はまだつかめてないのか？」

「ええ……。一晚にして消え去った街の人々、燃え尽きた王国……。では、戦争を仕掛けてきていたのは誰だったのか。一体何と戦ったのか……」

不可解な事は重なる。その後、夏流はフェンリルとグリーヴァの死体を確かめに古城に引き返した。しかし死体は見つからないまま。倒した確証も得られず、そして彼らの所属も目的もわからないまま。何もかもがわからなかった。そのまま既に半月が経過し、こうして夏流は時々アルセリアに捜査の状況を確認に足を運ぶ日々が続いていた。

「薄気味悪いな。全然終わった気がしないよ」

「結局全ての段取りが狂ってしまったようですね。リリアの騎士就任の儀式も先送り……。貴方もそうなるはずだったでしょうに」

「それは構わないよ。学園での生活は気に入ってるから。でも……」

夏流の脳裏を過ぎる二つの不安要素。今は目前の敵よりも、二人の勇者の事が気かりだった。

魔王を内包する勇者、リリア。そしてその魔王ロギアはリリアと意思を同じくし、あるうことが自らを殺したはずの男の娘に手を貸している。

封印されたリインフォースと過去の戦争での謎……。それは今もフ
エンリルや鶴来を動かし、夏流を翻弄し続けている。

それらを全て知ったりリア自身の気持ち、過去……。何よりもリ
アは眠っている時間が格段に多くなり始めていた。今では二日に一
度程度、殆ど丸々一日寝ている事も珍しくはない。

そして相変わらず魔物の呪いに犯されたままのゲルト。生きるため
に他人を食わねばならないという宿命を得てしまった少女……。

頭を悩ませる理由は一つ二つではなかった。複雑に絡み合う疑問の
断片が繋がりそうに繋がらない。その感覚に苛立ちながら夏流は背
を向ける。

「兎に角何か判ったら知らせてくれ」

『ええ、そうしましょう。話は変わりますが、夏流？』

「ん？ どうした？」

『戦争で皆気持ちはまだ落ち着かないようなのです。学園祭の予定
を一月繰り上げて行う事が決定したようです。貴方も気持ちを少
し入れ替えては？』

「……考えてばっかでもわからないものはわからない、か。ありが
とう学園長。少し肩の力を抜いてみるよ」

そうして部屋を去って行った夏流を見送り、アルセリアは腕を組ん
で世界を見渡す。学園を貫く塔、ラ・フィリア。そこから覗く世界
は、いつでも変わらない。

『……物語は動き出した。貴方の持つ原書が打ち勝つか、それ
とも……』

立ち上がってアルセリアは暖かい日差しを見上げる。鳥が光を遮り影を生み、その景色を彼女は穏やかな心で見守っていた。

幕間の日(1)(後書き)

↓ディアノイア劇場↓

＊いよいよ中盤に差し掛かりそうです編＊

ゲルト「こんばんは。アンケート投票理由『メインヒロインだから』、ゲルト・シュヴァインです」

リリア「……………ゲルトちゃん？」

ゲルト「わ、悪いのはわたしではなくて、投票する人ですから…………」

リリア「…………ゲルトちゃん好きな人はリリアも好きっぽいけど、アイオンさんが好きな人は何故ほぼ全員リリアが嫌いなのかな」

ゲルト「『ぺたんこだから』では？」

リリア「ぺたんこっていうなあああっ!!!」

ゲルト「何はともあれもう第三部です。ここまでがプロローグでした、的な雰囲気次へ進むようです」

リリア「長！ プロローグ読むのに七百分弱かかるって……。あちこちややこしくて全然終わる気配ないもんね。長期連載で七十部以上書くのって初めてじゃない？」

ゲルト「レーヴァテインが続編も含めれば百超えてましたけど。ま

あ、どれだけ続くかは人気次第ですけどね」

リリア「というわけで、In The 魔王とかで色々ごちゃごちゃしててゲルトちゃんもリリアをかじかじする事だし、ひとだんらく着いたから何かぶっちゃけ話でもしましょう！」

ゲルト「アインミッドブレイドワークス無限の剣製」

リリア「うん、そういう一言で既にヤバイのはやめようね。でも今読み返すと似てるね」

ゲルト「ちなみにメリーベルの能力は『相手の武器を上回る武器を模造する』にするのか、『周囲にある物から武装を模造する』のか、ギリギリまで悩んだそうです」

リリア「でも後者は鋼の」

ゲルト「他にぶっちゃけた話ありますか？」

リリア「ギャルゲーみたくなってきたってのは？」

ゲルト「それは別にディアノイアに限った話ではないでしょう。それにもっとギャルゲーっぽいのだたら、異世界ものはいくらでもあるじゃないですか。例えば」

リリア「ぎにやああああ！！ 本当にやばいからそういうのは止めて！！」

ゲルト「ディアノイアは、あくまでも健全です。お父さんお母さん、十八歳未満のお友達にも是非薦めて下さいね」

リリア「でもアンケートと占い意外とやってくれる人がいてびっくりしたよね」

ゲルト「ヘタしたら全く誰も反応しないかと思っていたくらいですから。というか、アンケートとか意外と応援してくれている人が居る事がわかってやる気あがりましたね」

リリア「なーんでかなー？ 他の異世界小説はほいほい感想来るのに、うちは固定読者様だけだもんね。誰とは言わないけど……あくまでも言わないけど」

ゲルト「それは、ほら……。感想書き難い小説だからですよ……。展開滅茶苦茶だし。あるいは単純に不人気」

リリア「でもここまで読んでるマメな読者さんはきつと応援してくれてる人に違いないんだよ！ 愛してるー！ あーいーしーてるー！」

ゲルト「そういえば『死亡フラグ立ちすぎだからもう少し生存させる』って意見がありましたが」

リリア「うん、それさ……。作者のほかの長期連載読んだ人はみんな言う気がするんだけど、どうしてかな……」

ゲルト「皆死ぬのが当たり前みたいになってますね。作者も読者も」

リリア「なんかただのメッセーじ返になってきてるような。まあ無計画にいつもここ書いてるから別にいいか」

ゲルト「そういえば、FaOeよりも参考にしているゲームがありますよね」

リリア「うん。元々この作品のモデルはファイナルファンタジー8なんだよー!」

ゲルト「誰も信じないと思いますけど……。他に参考にしているゲームと言えば」

リリア「デュオールイオーとか、後はガ〇トのアト〇エ系とか」

ゲルト「面白いのでお褒めです。判る人いるかわかりませんが」

リリア「さて、そんなわけで! 何はともあれ次からまた新展開なのです!」

ゲルト「サブキャラメインだそうなので、わたしたちの出番は目立たないかも知れませんが」

リリア「そうだねーってゲルトちゃんそれメインヒロインの発言じゃ……」

ゲルト「では、またどこかで」

リリア「ゲルトちゃん? あれ、ゲルトちゃん?」

幕間の日(2)

「学園祭実行委員？ 俺が？」

話が飛び込んできたのは急だった。尤も、ここの所俺の身に降りかかる出来事は全て唐突だった気もする。

夏休みも終わり、学食で一人昼食を食べていた時だった。駆け寄ってきたベルヴェールとそのメイド……久しぶりに見たな……兎に角二人、いやメイドは後ろに立っているだけだったがじいつと見られているので気になってだな……兎に角突然言われたのだ。

戦争の薄気味悪さはまだ残っているし、色々と疑問は尽きない。だが人は腹が減れば飯は食うし眠くなれば寝るもの。日々を過ごせば少しずつその違和感は消えていくだろうとそんな風に考えていた矢先である。まさか自分自身にお門が回ってくる事になるうとは。

「お前、実行委員なんてやってるのか？」

「ええ、そうよ！ だって他に誰も立候補しないんだもの。隣いいる？ いいわよね」

勝手に返事も聞かずに席に着くベルヴェール。俺は適当に飯を食いながらその話を聞いていた。

何でもディアノイアの学園祭は完全に生徒主導であり、予算も完全に生徒任せ。学園が敷地を解放する日取りは決まっている物の、実際に何をやるのかさえ全て現在未定だという。

「って、ちょっと待て……。学園祭まで一週間だぞ。間に合うのか？」

「間に合わせるのに人数が足りてないから誘ってるんでしょ？ 馬鹿ねー」

お前にだけは言われたくない。

「ま、いいわ！ 兎に角手を貸しなさいよ救世主」

「何で俺なんだよ……。こういうイベントは、アクセルとかのほうに向いてるだろ。俺は騒ぐのはそんなに得意じゃないんだ」

「何言ってるのよ、勇者部隊ブレイブ克蘭のリーダーでしょ？ それに噂の救世主候補が参加してるほうが、盛り上がるに決まってるじゃない！」

そういえばすっかり忘れていた。女王マリアにそんな事を言われたせいで、ちょっとした有名人になりつつあるのだった。今も周囲から視線が浴びせられているが、これはどちらかといえば俺の隣に居る女への視線だろう。

学園祭なんてもの、向こうの世界でやってやったことないのに上手く行くわけがない。俺は基本的に他人と関わるのは苦手なのだ。そんな事を考えながら肩を竦めていると、ベルヴェールは俺の手を握り締めて立ち上がる。

「そうと決まれば善は急げよ！ ほらほら、委員会に顔を出すわよ！」

「ちょっとまで、まだ俺は何も言ってな……」

「ブリュンヒルデ！ こいつを会議室まで連れて行きなさい！」

「畏まりました、お嬢様」

「おい、だからちょ　　どっという力だこいつ！？　　うわあああ
あつ！？」

首根っ子をつかまれ、メイドに引き摺られる。そのまま俺は片手に
スプーンを持ったまま会議室へ連行されるのであった。

思えばこれが、三日間に及び繰り広げられた学園祭での俺の苦難の
始まりだったのではないだろうか。いやまあ、理由を考えるだけ、
無駄なのだろうが。

幕間の日(2)

「……はあ、大変な事になった……」

廊下を歩きながら頭を抱える。強引に役員に決められてしまった拳
句、しかも一つ出し物を考える事になってしまった。

それもこれもベルヴェールのせいだ。どうしてこう、イベント事で
あんなにハキハキした奴が居るんだ？　俺の学校じゃ学園祭なんて
みんなダラダラやってたのに……。つくづく委員長というか。

いや、嘆いても仕方がない。兎に角自分で何かを考えなければいけ
なくなつたのだ。しかも明日まででどうなつてんだよ。くそつ、
引き受けさせられたからにはなんとかせにゃならんのだが……。

「……読書会」

一人でぼそりと呟いてみた。絶対に面白くないイベントだ。ていう
かこれなら一人でも出来る。むしろ家に籠って一人でやった方がい
い気がする。

何をやればいいんだ？ 剣と魔法の世界で学園祭？ そんなもの考えた事もなかった。こんな時自分の社交性の無さに嫌気が差す。でも普通考えないよなあ。

「しかし、ベルヴェールも無責任だな……。俺に任せていなくなるとは」

あいつ、途中まで俺と一緒に企画を練るからという条件でしぶしぶ俺に了承させておいてすかさず居なくなりやがった。ちょっと用事があるから、とか言われても困る。

さてどうしたものか。そもそもこういうのは俺よりも絶対他の面子の方が向いている。というわけで、早速俺はアクセルがバイトをしている喫茶店に顔を出す事にした。

「アクセル先輩ですか？ 今日はお休みですけど？」

店に入って以前リアに水をぶっかけたことのある店員に訊ねてみたが、どうやら留守らしい。俺は礼を言って店を出る事にした。

さて、本格的に困った。心のどこかでアクセルに頼ればいいと思っていた自分が居たのも驚きだが、いざというときいないとは使えない男だ。

こちらの世界での交友関係は狭い。一先ずゲルトの様子を伺う意味も込めてメリーベルの研究室に向かう事にした。

研究室の扉をノックする。暫くすると扉が開き、ゲルトが顔を覗かせた。思った以上に元気そうだったのでそれはよかったのだが、何故かまたメイド服である。

「いや、これは……違うんです……」

「……いや、いいんじゃないか……？ 俺は、いいと思うよ……」

「違っんですっつっつー!!」

俺を突き飛ばし、ダッシュで街へ走り去って行くゲルトを見送り室内へ。メリーベルは俺の来訪に気づき、片手を上げて挨拶した。

「ゲルトがすごい勢いで家出してったが、構わないのか?」

「どうせ行く所も無いし、そのうちすぐ帰ってくる。それでどうかした?」

メリーベルは例の一件以来ずっとゲルトと同居しているらしい。居候させて薬を分け与える代わりに家の中で助手としてこき使っているのだろっ。しかしだからってまたメイドか。多分ゲルトをいじめで楽しんでるんだろっな……。

「あー、どうかしたってわけじゃないんだけど……ちょっと相談が」

「今度は何? 武器? 薬? 何でもあたしに頼らないでよね、もう」

「うぐ……っ! そ、それは感謝してるって……」

慌てる俺の様子にメリーベルは笑顔を浮かべた。あれから少しだけ彼女の態度は軟化したような気がする。その僅かな差に気づいているのは俺だけかも知れないが。

一先ず今自分の置かれている状況を説明する事にした。学園祭の実行委員に選ばれてしまったこと。企画を一つ練らなければ成らない事。それらを伝えるにつれ、メリーベルはニヤニヤと笑い出した。

「なんだよ……?」

「いや。ナツルの困っている心境を察したら楽しくなってきただけ」

「相変わらず性格悪いな……。あんまりゲルト泣かすなよ? ああ見えてリリアと同じくへこたれ勇者なんだから」

「あたしのいじめは飴と鞭。限度は理解しているつもり。それにゲルトはこれから大変だから、少しくらい気丈になってくれないと困る」

「その果てにお前みたいになられても困るぞ? 女の子としてはどうなんだ、その性格は」

腕を組み、メリーベルは両目を閉じて笑っている。気の置けない仲なのはいいが、表情が読めないのは困ったものだ。面白いかどうかで動くという判断基準も、判っていても翻弄されるし。

しかしそんな彼女の性格を決して嫌だとは思わないのは不思議なところだ。結局の所恩人であり、もうこっちでは長い付き合いだ。ゲルトを任せられるのも、やはり彼女しかいないと思っている。

グリーヴァと彼女の関係は俺しか知らない二人だけの秘密になった。その過去に何があったのかはとても気になったが、それを聞いてしまったら今まで通りの関係とはいかなくなる気がするどこか気まずかった。グリーヴァをあれで倒しきれたのなら知らないままも悪くない。でも、もしもう一度戦わねばならなくなったら……その時はちゃんと聞かなきゃいけないんだろうな。

ふとメリーベルに視線を向ける。グローブをつけていない手を見つめ、それから俺はその手を取ってじっと見つめた。以前彼女の身体に浮かび上がっていた痣のようなものは今はきれいさっぱり消えている。

「なあ、お前……呪いに犯されてるんだよね？」

「それがどうかした？」

「どうかするけど、いや……この間見た痣っていうか、模様？ なくなってるからさ」

「あれは魔力を使ったり気持ちが高揚したりすると反応して浮かび上がるの。以前下着姿を覗いた時もなくったでしょ？」

「言われて見ればそうだ。ということはコイツの無表情さは呪いを制御するためでも在るということなのか。なんだか色々大変なんだな……。」

「わかったら手、放してくれる？ あんまりそうやってじっと見られてると、模様浮かぶかもよ」

「ん？ 何でだ？ まあいいや、悪かったな」

手を放す。何故か肩を竦めて眉を潜めているメリーベル。何か粗相でもしたろうか。普通に手を拝借しただけなのだが。

まあ、こいつが何考えてるのかわからないのは今に始まった事ではない。ソファに腰掛け、溜息を漏らした。

「兎に角今は学園祭だ。何をしたらいいのかなんて全然わかんないよ。去年は何をやったんだ？」

「知らない。あたしずっとここに居たし」

ああ、そういえばそういうやつだった……。完全に訊く相手を間違えたな。かといって他に頼れるやつもないし、途方に暮れる。しばらくそうして二人の時間を過ごしていると、慌てた様子でゲルトが走って戻ってきた。メイド服で街中を出歩くのはそりゃあ恥ずかしいだろう。ふりっふりのドレスだもんな、うん。

「……ゲルト。慌てない、焦らない。模様、浮かんでるよ」

「は……っ？ す、すみません。ええと、どうすれば……？」

「気持ちを落ち着けて。まだ慣れてないんだから、無闇に身体を動かさない事。ゆっくり呼吸して」

ゲルトの頬に触れ、メリーベルは指示を出す。ゲルトの首筋には黒い模様が浮かんでいた。メリーベルとは違う形の、しかし確かに同じ呪い……。あの日の出来事がまだ終わっていないのだという事を再認識させられる。

しかしこうしてみると二人は姉妹のようだ。そういえばメリーベルはゲルトより年上だろうし、態度も随分落ち着いている。胸に手をあて深呼吸しているゲルトの様子を見つめ、微笑むメリーベル。案外いいコンビなのかもしれないな。

「……ナツル。その、この間は……」

「ん？ ああ、そういえばそうだったな。勝手な事をしたか？」

「いえ、そんなことはありません。感謝しています……ありがとうございます」

ゲルトは半分魔物の魔女になった。魔女がああ状態から回復するには誰かの血肉が必要となる。しかしメリーベルのように同じく汚染

されたものでは摂取出来ない為、消去法であの場に居た俺が彼女に血肉を与えた事実に辿り着いたのだろう。

今はここでメリーベルと一緒に生活をしながら少しずつ欲求の抑え方を学んでいる。生き物から魔力を摂取出来れば何でもいいらしいが、やはり純度も量も人間が一番らしく、結果人間から摂取するのが被害を最小限にする手段らしい。

こうして見る限りゲルトは以前と変わらないし、メリーベルはずっとそれを隠してこられたのだ。慣れさえすれば以前どおりの生活が出来るかもしれない。俺は密かにそう期待している。

「今はどうしてるんだ？ 食人衝動とかは」

「う……。随分直接的な言い回しですね。まだ慣れないのでそういうデリケートな問題にはあまり口出しをしないでもらいたいのですが……」

「ああ、そっか。でも別に猫を食ってるわけじゃないんだらう？」

俺の質問に二人は笑顔で停止した。猫の数を数える俺。だめだ、増えているのか減っているのかわからない。なんだこの空気……。大丈夫かこの部屋……。

「元々、それほど毎日のように衝動がかかるわけじゃない。あたしだったら何ヶ月かは耐えられるようなもの。でもゲルトはあたしよりずっと純度も適応度も高いから、数日に一度くらいは摂取が必要。我慢できても一週間が限度でしょうね」

成る程、それでか。あれから半月寝たきりだったゲルトに、俺は定期的に血液提供の為にメリーベルに呼び出されていた。何度も体中を斬りつけては回復薬で回復する日々……。ゲルトはそれを知って

いるのだろうか。まあ知らないなら知らないでいいだろう。他人の血を寝ている間にどばどば飲まされていたとは彼女だって思いたくないはずだ。

「それじゃ、適当に補充しなきゃならないのか……」

「元々人間の血液とかは魔法具店には触媒として売っている所もあるし、どうしても生で行きたくなったらその辺の人にお金を払って飲ませてもらうとか、手段は色々ある。あたしもそうしてきたし」

「……そ、そのへんの人の、ですか……？　かなり抵抗があるんですが……」

「だったらナツルに貰えばいい。というか、これがお奨め。色々な血の味を覚える前にナツルだけで我慢していれば、他の人を見ても食べたいとは思わなくなるかも。少なくとも欲求はナツルに向けられて、それ以外に対しては薄れるはず。その為に時間かけてきたんだし」

ということとは、あの半月の間にゲルトに血を分け与え続けた俺の味をゲルトは覚えているから、俺を見ると食べたくなるって事なのか？　ゲルトを見つめる。彼女はさっきから俺の事は全く見ようとしていなかった。視線を反らされたままなのは食べたいからなのか。思わず背筋が寒くなった。

「どちらにせよ魔力の高い人間の方がいい。ナツルは魔女にとってはいこれ以上無いほど最高の餌だから、お奨め。次はリリアとかかな。まあ餌の確保は自分でがんばるべし」

「うっ、が、がんばります……」

肩を落とすゲルト。思っていたよりも元気そうで安心した。もっと落ち込んでいるかと思ったが、以前よりむしろ元気になったような気さえする。

ゲルトは振り返り、ようやく俺と目を合わせた。照れくさそうに顔を赤らめ、眉を潜めながら俺に近づく。

「わたし、色々考えて見たんですが……やっぱり答えは見つかりませんでした。魔剣を手にしても、何かが劇的に変わるわけではない。逆に思っただんです。魔剣や勇者の境遇なんて、本質的にはわたしにあまり関係のないことなんだって」

「……そうだな。自分を創るのは自分自身だ。境遇やモノはただそれだけに過ぎない。自分がどうしたいのかは、これからゆっくりと考えればいいさ」

「……貴方には、色々と借りを作ってしまいましたね」

そう言っただけで笑うゲルトは以前と同じとまでは行かなかったが、強気な彼女だった。その僅かな違和感も何れは溶けて消えるだろう。

「一度死に掛けて理解しました。わたしはもともと強くならなければ。それが仲間を救う事にもなり、そして自分を肯定することにもなる。リリアに追いつけるように……いえ、あの子が背を預けるのに相応しい人間になるために、もう少し試行錯誤してみます」

「そうか。うん、その意気だ。あー、そうだ、そのうちリリアのところにも顔出してやってくれないか？ あいつお前の事一番心配してたから」

「その件ですが、リリアは今どうしているのですか？」

その疑問には一言では答えられない。別にリリアがどうかしたわけではないし、今でもあいつは普通に生活している。ただちよつと魔王の事とかは人には言えないし、あいつは最近寝てばかりで授業にもたまにしか顔を出さなくなった。勿論起こせば普通にリリアなので何とも言えないところだが……。

「兎に角自分で会って話して見てくれ　　つと、ゲルト。そういえば参考までに訊いてもいいか？」

先ほどメリーベルに説明したように学園祭実行委員の事を話す。するとゲルトは目を輝かせ、自らの胸に手を当てて微笑んだ。

「成る程、困っているのであれば初めからそう言ってお下さい。貴方には借りがある……。その仕事、是非手伝わせてください」

「いや、遠慮しとく」

俺が即座に首を横に振るとゲルトは笑顔のままフレグランスを振り上げた。おお、使えるようになってるじゃないか。魔剣に魔力が。

背を向けて一目散に逃げ出した。ゲルトはそもそも魔剣なんて使おうとしちゃだめな身体じゃないか。病み上がりなのに彼女を刺激しては悪い、ここは退散しよう。

背後で何か喚いているゲルトから逃げ出し、街へ到達して一息ついた。ゲルトが提案する学園祭……残念ながらそれは多分面白くはないだろう……俺が言うのもなんだけどさ。

しかしこれでいよいよ頼れる相手が居なくなってきたな。肩を落としてとぼとぼ街を歩いていると、正面に一人迷子が見えた。

何故迷子なのかというと、見慣れない教会のクロークを着用して、地図を片手に人波の中できよきよと挙動不審に周囲を見渡しているからだ。右往左往しながら口元に手をあて、困った様子でうろたえている。

「……どこに行きたいの？」

声をかけると迷子は 教会の少女は顔を上げた。怯えた様子の視線に少しだけ気まづく。やたらと肌の白い、髪の高い少女。シヤングリラの人の多さに戸惑っていた所に行き成り声をかけられたらおびえても仕方はないか。

「あー、こう見えても怪しいもんじゃないんだ。何て言えばいいのかな……」

「……救世主様、ですか？」

「そうそう、人呼んで救世主夏流……って、どうしてそれを？」

「本物、ですか……？ わあっ！ 救世主、本城夏流様！すごい、本物です……」

目をきらきらさせながら飛びついてくる少女。今度は俺がうるたえる番だった。訳もわからずに首を傾げていると、少女は自分ではしゃいでおいて具合悪げに咳き込んだ。

口元を手で押さえ、眉を潜めながら笑う少女。なんだか具合がよくないようだったので通りを抜けて公園に連れて行く事にした。ベンチに腰掛けて少女は咳き込んでいたが、しばらくすると落ち着いたのか顔を上げて頭を下げた。

「すみません、なんだか急に……」

「確かに急だったけど、どうかしたのか？」

「ああ、いえ……その、救世主様を生で見られて感動したというか……すみません、ご迷惑でしたよね」

恭しく頭を下げる少女。そこまで畏まられると困ってしまうのだが……。

「申し遅れてしまいました……。私はレンと言います。オルヴェンブルムに住んでいるシスター見習いです」

「そのシスターがどうしてシャングリラに？」

「ええ……。近々学園祭があるというので、お暇を頂いて遊びに來たんです。でも、まさか憧れの救世主様にこんなに早く出会えるなんて……これも全ては神の思し召し、ですね」

本当に嬉しそうに微笑み、祈りを捧げる少女。なんとというか……リアとはまた違った空気読めなさがあるな。

対応に困っていると、俺の視界に彼女の持っている地図が飛び込んできた。

「その住所に用があるのか？　よかつたら案内するよ」

「宜しいのですか！？」

「そ、そんなビックリすることじゃないだろ。それにこの場所ならすぐ近くだしな……立てるか？」

「はいっ！　ありがとうございます！」

元気良く答える少女。身体が弱いのかもしれない、すこし気を使つてゆつくりと歩く事にした。

そうして彼女の持つ地図の指し示す場所に辿り着いた俺。そこはメリーベルの寮よりも更にボロいアパートだった。啞然としながら階段を上り、地図にメモられた部屋へ向かう。

リリアならうつかりぶち抜きそうな立て付けの悪い扉をノックして待つ事数分。どたどたと慌しく住人が迫る音が聞こえ、扉が開いた時俺は思わず目を丸くした。

「……アクセル？」

「お？　ありや、どうしてナツルがここに　　って、レンッ！？
どうしてここに！？」

「……え？　あの、お知り合いなんですか？」

三者三様の反応をする俺たち。互いに顔を見合わせ、それから一息ついて状況を整理する。

「……えーと、ここはアクセルの部屋？」

「お、おう……。ナツルはレンとどういう関係だ？」

「道端で迷つてたから案内してきたんだよ。お前こそレンの何なんだ？」

「何って……兄貴だよ、兄貴。レンは俺の妹」

「何っ！？」

驚いて仰け反る俺。そういわれてみると……同じく金髪だったり、確かに共通点はある。しかしこのがさつを絵に描いたような男の妹が、この虚弱体質なシスターさんなのか！？

「に、似てねえ……っ！」

「何言つてんだよ！俺にそっくりで可愛い妹じゃないか！！お前レンを馬鹿にするとマジで殺すぞ！！」

「やめてよお兄ちゃん……！救世主様に失礼な事言わないで！は、恥ずかしいでしょ……！」

「救世主様って……。レン、それどこで聞いたんだ？」

「オルヴェンブルムじゃ有名な話だよ……？この間の戦闘で大活躍したんだって。それに噂どおり、凄くかつこいい人だし……」

なにやら目をきらきらさせながら俺を見ているアクセル妹。アクセルは俺をぎろりと睨みつけ、今まで見た事のないような表情で俺に掴みかかった。

「ナツル……まさかお前、この僅かな時間で既にレンに何かしたんじゃないだろうな……」

「何もしてないからっ！！どうやって道端歩きながらするんだよ！？」

「そ、そんな破廉恥な事をレンの前で言うんじゃないっ！！ 馬鹿！！ 教育に悪いだろう！？」

「だからっ！ 何にも言つてねえっ！！！！！」

アクセルに振り回されながら全力で叫ぶ。その俺たちの様子を見かねたレンは背後からアクセルの頭を牛乳瓶で殴りつけた。

その瓶はアクセルが飲んでいるもののなか、廊下に並んでいたもの。それを拾い上げて即兄の後頭部に叩き付けるといふ発想が凄まじい。粉々に砕け散った瓶を投げ捨て、レンはアクセルの首根っ子を掴んで俺から引っぺがす。妹に殴られたアクセルは白目を向いてぐったりしていた。

「本当に申し訳ありません……！ うちの兄はちょっと……頭がちょつと病氣なんです……」

「うーん、それはそれで正解な気もするけど……今は大丈夫なのか？ ピクピクしてるけど……」

「救世主様？ 兄は頑丈な獣みたいなものですから。ちょっと叩いたくらいでは無意味です。背後から即一撃……これ以外に兄にダメージを与える手段はありません。ああ、ヨト神よ……愚かな兄を赦したまえ……」

神に祈りを捧げる妹。気絶したアクセルをずるずる引き摺って部屋の中に押し込み、慌てて戻ってきた。

「あの……ありがとうございました、救世主様。兄が動けないように色々と準備があるので、とりあえず失礼しますね」

「あ、うん……あの、死なないようにしてあげてね……？」

彼女は答えずに笑顔だけ浮かべた。さて、これはどういう返答だと受け取るべきなのか……。

ボタンと閉じられた扉の向こう、アクセルの悲鳴が響き渡ったが俺は何も聞かなかった事にしてボロアパートから走り去った。何も聞いてない。うん。聞いていないとも。

幕間の日(3)

「いい度胸ね、ナツル……。何も考えずに学園に顔を出すなんて……ッ」

結局、あれから考えてみたがいい答えは見つからなかった……。

そもそも学園祭なんて俺には向いていないんだ。しかし役員になってしまった以上は顔を出さざるを得ない。俺は会議室でベルヴェールにこっそり絞られていた。

正座をさせられ、言われるがままに頷く救世主。他の生徒から見てもどうなんだろう、これは……。まあ俺が悪いのは間違いないのだから、ここはちゃんと話を聞こう。

「ったく、しょうがないわねえ……。今日は一緒に行動するわよ。サボってないかチェックしてあげるわ」

「……お手柔らかに御願しますよ」

そんなわけで二人して町に繰り出した俺たち。その背後にはブリュンヒルデと呼ばれていたメイドがとことこ着いてきている。

流石に戦場では一緒にならなかったものの、このメイドはそれ以外では常にベルヴェールと行動を共にしているらしい。背後一定距離を保ち着いてくるのだが、微妙にその視線が気になった。

しかし当の主は気にもかけない。まあ当然か。ベルヴェールにとって、彼女は後ろに突っ立っていて当然の存在なのだから。

「それで、何一つ考えなかったの？」

「色々考えたんだけど……言うだけ無駄だと思うぞ」

「一応聞いてあげるわよ。言ってみなさい？」

「……読書会」

何とも言えない空気が流れた。なんだか照れくさくなって視線を反らす。

「しょうがないだろ、これでも一生懸命考えたんだから……」

「……………アンタ、へこたれ勇者とかいつも楽しそうにしてるから、楽しい人間なんじゃないかと期待してたのに……蓋を開ければこんなもんね」

額に手を当てて溜息を漏らすベルヴェール。自分がそう面白おかしい人間だとは思っていないから仕方ないが、いかんせんちょっと申し訳がない。

「ま、いいわ。どうせなら、アタシたちにしか企画出来ない出し物にしましょう」

「俺たちだけにしか……って、例えば？」

「アンタ判ってないわねえ。ブレイフクラン勇者部隊っていう特殊部隊として一度は共に戦った仲でしょ？ そのコネを利用しない手はないわ！ ほら、行くわよ！ ボサっとしない！」

ベルヴェールに手を引かれ、俺は強引に急かされて歩く。さて、一体どうしたものか。それでも今は、彼女の根拠のない前向きさがありがたかった。

幕間の日(3)

「じゃ〜ん！ どう？ 可愛いでしょ？」

公園で待たされる事数十分。どこかへ行っただけ戻ってこないベルヴェールを待ち続けていると、遠くからどたばたと走ってくる姿が見えた。そんな彼女が袋から取り出したのは、ハンガーに吊るされた無数の水着だった。

色とりどりのそれらを眺め、俺は首を傾げた。確かに可愛い水着だ。でもそれがどうしたっていうんだ？

「学園祭と言えば、ミスコンは定石でしょ？ せっかく勇者部隊には学内でも有名な美少女が揃ってるんだから、それを利用しない手はないわ」

「ミスコン……？ あの連中が参加してくれると思うか？ 個性豊か過ぎて協調性皆無のへこたれパーティーだぞ……？」

「そこを説得するのがリーダーの役目でしょ？ それにアンタ、確かあのアイオーン・ケイオスと仲良かったわよね？ アイオーンも何とか参加させなさい」

「アイオーンッ！？ それこそまず無理だ！ あいつはそういうタイプじゃないだろうっ！？」

あの氷の笑顔を持つ女、炎の魔術師アイオーン・ケイオスがミスコ

ンで水着披露……あ、ありえない……。あーでもだめだ、誘ったら意外とOKしそうで怖い……。

ベルヴェールはまあ、自分に自身があるのだから構わないが、メリーベルは面倒くさがりそうだし、ゲルトはそういう衆目に晒されるのは嫌うタイプだ。リリアは水着着てもしょうがなくねえか？腕を組んで考え込む。だが無理かどうかはやってみないとわからないか。それに他に自分で出来る事もないのだ、手を貸すくらいしなければ意味がない。

「……わかったよ、やるだけやってみる。ただし成功するかどうかわ保障はしないぞ？」

「そうそう、それでいいのよ！ 他の企画は兎も角、『ドキッ！？水着だらけの勇者部隊 ポロリもあるよ』を成功させるのが先決！」

そんな名前のミスコンはねえんだよ。ていうかポロリもあるって聞いたらだれも参加しないだろうが。いやもういいや……馬鹿なんだよコイツ……。

なにやら他の企画もあって忙しいというベルヴェールから水着だけ受け取り、俺は立ち上がった。仕方が無い、一先ず手堅い所から当たるとしよう……。

水着を片手にリリアの部屋に移動する。ノックをするとクロロが扉を開けてくれた。部屋に上がるとリリアは寝ぼけた様子でベッドの上に座っていた。

「よう、お目覚めか？」

「うあい……。あ、師匠……どうしたんですか？」

「どうもこうもないんだが、とりあえずこの水着を着てくれないか？」

「へっ？」

目をぱちくりさせながら身構えるリリア。俺はリリアでも着られそうなサイズの水着を選んで取り出し　スタイル良過ぎる人間がいるから水着もそういうのが混じってる　それをリリアに突きつけた。

「後生だ、着替えてくれ」

「え？　え？　なに？　なにがっ！？」

「いいから着替えてくれ。いいだろちょっとくらい、減るもんじやないし」

「減りはしませんけどっ！？　え、や、やああっ！！　師匠のえっち~~~~っ！~」

こうしてリリアを強引に着替えさせ……別に俺が着替えさせたわけではないが……水着姿のリリアを立たせてじろじろと眺める。

やっぱりリリアは白だろうな……しかし俺には水着の良し悪しが全くわからん。さて、これはどうしたものか。

「し、師匠……？　もういいですか？　は、恥ずかしいですよ」

「いや、待ってくれ。ちょっと外に出よう」

「外！？　これですか！？」

「ああ。周りの人に見てもらわないと意味がないんだ」

「意味！？ 意味ってなんですか！？」

「いいから来い」

「やあああああもうっ！！ 師匠のばああああああああっ！！」

大騒ぎになり外に連れ出すのは断念した。まあ、俺の主観的に言えばそこそこ可愛い……綺麗ではない、あくまでも可愛い……から、問題はないだろう。

そういわれてみるとリリアって可愛かったんだな。何となく今まで気づかなかった真実に到達した気がする。成る程、ミスコンも悪くないか。

「ふえええん、師匠が変態さんになっちゃったよう……！ 鬼畜えろすで十八禁なんですよう……！」

「誰が変態だ誰が……。リリア、お前学園祭でミスコンやらないか？」

目をぱちくりさせるリリア。学園祭での企画に困っていること、ベルヴェールからミスコンの提案を受けた事などを説明する。

「そんなわけで参加してほしいんだが」

「そ、それはもしかして……。あのう？ 師匠が、リリアの事……か、かわいいと思ってるから、ですか？」

「当たり前だろ。可愛くなかったら駄目なんじゃないのか？」

「そ、そうですね！ えへへ、そうなんですか！。師匠ったらもうっ！ そうならそうと早く言ってくださいよっ！」

なにやら身体をくねくねさせながらヘラヘラ笑うリリアさん。首を傾げていると目をきらきらさせながら俺の両手を握り締めた。

「勿論参加しますよ！ リリア・ライトフィールド十五歳！ 師匠のために、優勝を目指しちゃうのですよっ！！ えへへっ」

との事。なにやらとてもやる気になってくれたのだからありがたい。一先ず勇者部隊の目玉である勇者は一人確保できた。というか、勇者が居なかったら勇者部隊のミスコンではなく普通のミスコンになってしまう。別にそれは面白くはないだろうしな。

なにやらダイエットするとの事で、訓練着に着替えて走りこみに出て行ったリリアを見送り踵を返す。さて、お次は メリーベルとゲルトか。

研究室の前の通りを歩いていると、メイド服のままフレグランスを素振りしているゲルトの姿が見えた。真剣な様子で汗を額から流しながら打ち込んでいる。

「おーい、ゲルト」

「ひゃっ！？ ホンジョウナツル……！？ は、背後から声をかけないでください！」

「そんな事より水着を着てくれ」

目を真ん丸くしているゲルト。訓練の途中で声をかけたせいか、顔が真っ赤だった。

「色々あるから好きなの選んでいいぞ。時間がないから早く脱いでくれ」

「え……？ な、にを……貴方が言っているのか、わたしにはさっぱり……」

「兎に角お前の水着が見たいんだよ。そうしなきゃ俺の準備が整わないの」

「俺の、準備……？」

何故か俺の下半身を見て口をぱくぱくさせるゲルト。フレグランスが手から零れ落ち、頭を抱えて視線を反らす。首を傾げているとゲルトは壁にごつごつ頭をぶつけ出した。

「お、おいっ！？ 何やってんだ！？ 魔女化の影響か！？」

「……落ち着け、わたし……落ち着け、わたし……落ち着け、わたし……」

「ゲルト！？ ゲルトオオオオオッ！！」

気を失いかけたゲルトを慌てて研究室に運び込む。額から血を流しながらぶつぶつうわ言を言っているゲルトを見て流石のメリーベルも驚いた様子だった。

「何があつたの？」

「いや、俺はただ水着を着てくれと言っただけなんだが……急に壁に頭をぶつけ出して……」

「何故そうなるのかよくわかんない。とりあえず最初からちゃんと説明してくれる？」

先ほどリリアに説明したのと同じ会話を繰り返す。するとメリーベルは腰に手を当て首を横に振った。

「とりあえずナツルは、自分がどういう立場の人間なのかを理解すべき……」

「え？ あ、うん……？ ごめん？」

「そういう事らしいから、ゲルト？ 別にナツルはゲルトを水着に着替えさせていやらしい事をしようとしていたわけじゃないんだって」

「め、めりーべるっ！！ 余計な事を言わないで下さい！！ 変な勘違いをしていしまつて今激しく自己嫌悪中なんですから……」

「なんだ、そんな事考えていたのかゲルト。うっかりさんだなあ」

「ああああ、貴方にだけはっ！！ そんなことは言われたくありませんっ！！ そもそも、勇者部隊のリーダーとしての自覚が余りにも希薄すぎるっ！！」

そう言われても勇者部隊がこのまま継続して構成されるかはわからないわけだしな。もう戦乱が起こらなければ俺たちが共に戦う事も

ない。というか、行き当たりばったりで急遽リーダーになった奴にそこまで期待されても。

「……はああ。でも、仕方ありませんね……。コンテストには参加します」

「いいのか？」

「ええ。貴方には借りがあると言ったでしょう？ 義には義を以って返す……騎士道を歩む人間として当然の事です」

「ありがとう、助かったよゲルト。メリーベルは、」

「参加するわけないでしょ馬鹿……。他人の見世物になるなんて死んでも嫌」

まあ、そう来るよなあ。こっちのネコミミアルケミストさんは基本的に引きこもり主義だから……。ゲルトだって彼女の言う義理つてものが無ければ参加はしてくれなかっただろうし。

そっぱを向いたままつーんと両目を閉じて腕を組んでいるメリーベル。ゲルトに救いを求めて視線を送ってみたが、彼女がメリーベルにどうこう言える立場でないのはわかってるし、どうしようもない。さてどうしたものか。

「頼むよメリーベル……。俺の為だと思ってさ」

「そうやって直ぐ人に頼み事をしないの。そもそも、あたしの水着姿を見ても誰も喜ばないでしょう」

「そんな事はないだろ。とりあえず着替えてみろよ。お前夏休みも

参加しなかったしな」

「ちょっと……だから、そんな事言われても……」

「頼む！ 引き受けちまったからには何とかしなきゃならないんだよ。学園際中に借りは返すからさ！ な？」

「…………… 本当に、強引なやつ……………」

文句を言い、呆れたような笑顔を浮かべつつもメリーベルは水着を手にして台所に歩いて行った。ほっと一息ついていると、ゲルトが困ったような笑顔を浮かべて近づいてきた。

「貴方はメリーベルに信頼されているんですね」

「え？ どうしてだ？」

「彼女は自分が信じた人間以外には感情を見せません。いえ、それに何より……貴方と居る時のメリーベルは、無理をしていない。気を張らずに自然な態度で貴方に接している……。信頼の証としてはこの上ない事でしょう」

「そう……なのかな。自分じゃあよく判らないが。しかし、そんな事を言うなんて随分丸くなったもんだな、ゲルト」

腕を組み、微笑むゲルト。その仕草は以前からは想像もつかないほど優しいものだった。自然な態度が表に出てきたのはメリーベルだけじゃない。ゲルトも以前は常に肩肘張っていたというか、周り全てを敵だと認識して全てに噛み付いているようだった。けれど、今はもう違う。重い過去を背負っている事は変わらずとも、それと優

しく向き合える女の子になった。

二人でそうしてしばらくメリーベルの水着を待っていた。台所と部屋を隔てている本棚の向こうからひよっこりとメリーベルの顔が覗き、困ったような視線を向けてくる。

「……どうしても出ないと駄目？」

「とりあえず水着を見てから考える」

「はあ……」

水色のパレオの着いた水着を選んだメリーベル。透きぬけるような白い肌とスレンダーな体軀に目を奪われる。こんなに肌を露出させているメリーベルを見るのは……初めてではないが、珍しい。

「へえ……。ほっそいなー」

「食費も研究費につき込んでいるから、ダイエット効果アリ」

腰に手をあてそんな事を呟くメリーベル。ゲルトと俺は頷き合い、メリーベルに駆け寄った。

「充分だよ。もともと顔は綺麗なんだから、全然問題ないって。なあメリーベル、頼む！」

手を握り締めて迫る。メリーベルはいつに無く目をぱっちり開き、それから普段どおりやる気なさげに目を閉じ、小さく頷いた。

「しょうがない。考えてみれば、あたしもナツルには借りがあったし」

ああ、例の兄　グリーヴァの事か。まあ確かに借りといえば借り、口止めされているわけだしな。でもそういう事じゃない。メリーベルと俺は、そういう関係では居たくない。

だからそれはきつと彼女も同じ事で。隣に居るゲルトへのいいわけである事は直ぐに判った。俺が苦笑を浮かべると、メリーベルは片目を開いて俺の手を握り返す。

「ナツルだから出るんだからね。そこ、覚えておくコト」

「うん？　ああ、わかったよ。兎に角これでベルヴェール含め四人……！　あとはアイオーンに駄目元で掛け合ってみる。それじゃ、詳しい事はベルヴェールに聞いてくれ！」

俺は二人に背を向けて研究室を飛び出した。メリーベルも出てくるとなればそれなりに形になってきた。あとはゲストとしてアイオーンが参加するかどうかだ。

しかしアイオーンを探そうにもやつがどこにいるのか全く判らない。一先ずディアノイアに戻った俺は校内を走り回って探してみたものの、アイオーンの姿は見当たらない。

「こういう時、都合よく後ろに立ってるのがアイオーンなのにな……。つたく、どこ行っただか」

結局アイオーンの姿は見つからなかった。とりあえず、勇者部隊プレイフクランに関しては開催出来る事が決まったんだし、今日は良しとするか。

ベルヴェールに報告する為に会議室に顔を出す。その場で作業を進めていた生徒に尋ねてみたが、ベルヴェールの居場所はわからないらかった。

そつえばあいつ、昨日も何してたんだか。サボるなとかいって置

いて本人がサボってやがったら流石に俺も怒るぞ……。

「くそ、携帯電話くらい復旧してほしいよな……。メイドロボいるくらいなんだからさ……。って、メイドロボ？」

思い出した。そういえば、受付に居る機械人形たちは学園内の生徒の居場所を検索できるシステムがあったんだった。

学園の敷地内限定だが、学園にいるのかどうかわかるだけでも充分だ。そんな説明を確か最初にアクセルが言っていたのに、俺はすっかり忘れていた。

受付に走り、ずらりと並ぶメイドロボの一人に声をかける。アイオンとベルヴェールの居場所を検索してもらうと、二人とも校内に居る事がわかった。

「アイオン・ケイオスはラ・フィリアの学園長室に。ベルヴェール・コンコルディアは、実習校舎の屋上にいらっやいます」

「……んん？ 二人とも変なところに居るな……。ありがとう、助かったよ」

学園長に何か用事なのだろうか？ まあ、アイオンの方は後回しにしたほうがよさそうだな。一先ずはベルヴェールだ。

実習校舎まで走って移動し、階段を上って屋上に出る。青空の下、ベルヴェールはフェンスの向こうに見える街並みを眺めていた。

「あいつ、こんなところでサボってたのか……。ベルヴェー」

声をかけようとして慌てて物陰に引っ込んだ。見ればベルヴェールは一人ではなかったのだ。その隣には見知らぬ男子生徒が立っていて、何やら一方的にベルヴェールに話しかけているように見える。

一体何をやっているのか。しかし学校の屋上で男女が二人きりで一方的に男が話していたら、まあなんにせよはいはい邪魔しに行っている状況ではない。俺は二人の様子に首を傾げ、来た道を引き返した。

階段を下りて一階へ。さて、アイオーンが下りてくるのをエントランスで待つべきか。暫く廊下をゆつくりと歩きながらそんな事を考えていると、正面でソウル先生と話しているアイオーンの姿が見えた。

二人は俺の姿に気づき、手を挙げた。駆け寄るとソウルは相変わらず暑苦しい筋肉ムキムキの腕で俺の肩を叩き、白い歯を見せて笑う。

「おう、元気そうだな救世主！！ちゃんと飯食ってるか？」

「その台詞確実に八十年代ですよ……。つと、何かあったんですか？ アイオーンが問題起こしたとか」

「あん？ いや、そういうことじゃあねえよ。そもそもアイオーンが問題起こすのはいつもの事だからな！俺は知らん！ハッハッハ！！」

だからそれでいいのかあんだ。

「んー、まあお前は全くの他人事ってわけでもねえしな。教えておくか」

ソウルの話聞いて少なからず俺は衝撃を受けた。

先の戦争　バズノクからの魔物の軍勢によるオルヴェンブルムへの侵略。その戦闘の中、少なからず生徒の命が落とされた事を俺たちは知っている。その後俺はグリーヴァを倒し、フェンリルを何と

か撃退する現場に立会い、さらに聖騎士団と共に燃える国を見ている。

そうした俺にしてみれば、その話は確かに他人事なんかではなかった。話の内容というのは、あの戦争で俺たちの敵として行動していた人間のことである。

「この学園にはお前たちみたいに腕の立つ生徒も多い。中には現役の聖騎士よりも強い奴も居る　お前らみたいにな。そういうお前らに、教会の査問会から使者が来るらしい」

「……っと、それはどういう……？」

「敵の中に、ディアノイアの生徒だった人間が確認されたんだ」

敵軍には何名か、魔物の軍勢を指揮するリーダーが存在していた。実際の戦闘に関与したのはオルヴェンブルム攻防戦のみだが、実際には他の国の軍が増援としてやってきたりと、オルヴェンブルム以外でも他の部隊が事を構える事は何度もあった。そんな中、彼らからの情報提供で明らかになった事実だった。

「自白したわけじゃなくて、倒した敵の中に生徒が混じっていたらしい。身元を査問会が洗った所、現役のディアノイア生徒だった事が判明した」

「まさか……！？　国に反旗を翻したのが、この学園の生徒だっていうのか……？」

「まだわからねえから誰にも言うなよ？　だが、学園の生徒が密かに謀反に手を貸していたとなれば、事は重大だ。査問会が直ぐにでも執行者を派遣してくるだろうな」

「執行者……？」

「単体で高い戦闘能力を持つ秘密裏に存在する聖騎士だ。ヨト信仰の障害となる存在、あるいは王家の敵となる者を闇討ちするアサシンだよ」

この学園祭でそこらじゅうから人が集まる中、オルヴェンブルムから暗殺者が送り込まれてくる。しかもそいつらは生徒を疑っていて、つまりそれは力のある俺たちを疑っているということなのか、いや、違う。俺たちはずっと戦っていたし、派遣されていた生徒の中に裏切り者が居るとは考え難い。勿論居ないとは言いつれないが、少なくともブレイベ克蘭は全力で戦ったのだ。その後城に招かれた事もあり、信頼されていると見ていいだろう。

だが、そうでないとすれば誰を疑っているのか。俺の視線は隣で黙り込んでいるアイオーンに向けられた。

「まさか……執行者はアイオーンを……？」

「そうなるだろうな。学園の教師に匹敵する戦闘力を持つアイオーンの噂はオルヴェンブルムにも届いているだろう。戦闘に参加しなかった事もあり、執行者に狙われる可能性は高い」

「ちょっと待ってください！ アイオーンはそんな事をする奴じゃないっ……！」

「わーってるから落ち着け！ 兎に角、そういう事になってるのは事実だ。だから学園長と相談して何とかしようって動いてんだろぅが」

確かに一度は俺だつて疑つたくらいだ。アイオーンは闇の魔術にも長けているし、底が知れない魔力の持ち主だ。彼女があゝの魔物の軍勢を操っていたリーダーだったとしても全くおかしくはない。でも……。

アイオーンは俺たちの様子に眉一つ動かさなかった。彼女はこう思っているのだろうか？ 自分に疑いの目が向けられていること……執行者という教義に反する人間を暗殺する人間に目をつけられているという事。

彼女はそんな人間じゃないと信じている。でも、それを証明する事は出来ないんだ。だから困っている……俺に言われるまでもない。熱くなりすぎてくだらないことを口にしてしまった。

「……すいません。でも、学園祭ですよ？ そんな人目のある場所で暗殺なんてそうは起きませんよね？」

「行き成り背後から首をはねるって事はないだろうよ、そりゃな。だが連中は殺す事を何とも思わない神の下僕だ。正直俺は好きじゃねえからな……保障は出来ねえ。衆人觀衆の前だろうがなんだろうが、殺る時は殺るのがルールだ」

何故か忌々しそうに吐き捨てるソウル。彼は俺とアイオーンの肩を叩き、ニツコリ笑って言う。

「ま、大丈夫だ！ 脅して悪かったな。生徒に手出しはさせねえ……少なくとも俺はそのつもりだ。さて、俺は忙しいからもう行くぞ」

「はい。すいません、ソウル先生」

ソウルを見送り、アイオーンに視線を向ける。アイオーンは別に当たり前という様子で俺を見つめ返している。その態度が気に入らず、

俺はその手を握り締めた。

手を引いて中庭に移動する。流れる水路の前に立ち、人氣がないのを確認して俺は振り返った。

「どうして言い返さないんだ？ あんたじゃないんだろ？」

「そうだね。だがしかし言い返した所で話が通用する人間ではないだろう？」

「そういう事じゃない！ 無実の罪で疑われるなんて、そんなのはあっちゃいけないだろうが……」

「……夏流は優しいね。でも、それは愚かだ。ボクを本当に信用できるのか？ その根拠は？ 理由は？ 君には肝心なものが欠けている。信じるべきものは、信じるべき由る者で判断した方がいい。それが君の為だ」

確かに言う事は判る。アイオーンの言っている事は正しい。でも、納得は出来ない。

「……アイオン。俺があんたの身の潔白を証明できないか？ 仮にも救世主なんだ、俺にはそれくらいの力があるはずだ」

「それは余計なお世話というものだよ、夏流。君の言っている事は何でもかんでも自分の我俣で信じて救いたいという事だ。そんな風には行かないんだよ。世界はそこまで優しくないし君の我俣を受け入れてくれるほど甘くも無い……。君はヨト信仰というものをまるで理解していない」

「何……？」

「あれは他の宗教を滅ぼし、踏み潰し、疑わしき者の首を斬り落とし、罰し、罪を背負わせ咎を打ち付け、全てを力づくに神の名の下に滅ぼしてきた究極の軍隊だ。君のその考えは彼らには通用しない」

アイオーンのその言葉はまるで後悔しているかのような口ぶりだった。まるでそう　　そうして命を奪ってきたのが自分であるかのよう

そうして彼女は最後にいつもどおりの微笑を浮かべ、俺の下から去って行った。ミスコンの話なんて完全に忘れていた。今はアイオンもそれどころではない。それに俺も……アイオンの言葉に悩んでいた。

「アイオンを信じたい……。でも、それは俺の甘さなのか……？」

無実を証明する方法も思いつかない。結局俺はこういう時何もしてやれないんだ。

原書にはアイオンのことなんて記されないし　　って、そうだ。最近ページを捲る事もしていなかった。いや、一先ずは目先の事を何とかするか……。

アイオンに追いつくために走り出した。今彼女とちゃんと話をしなきゃいけない気がする。何よりも俺が気に入らない。だってそうだろう？　彼女にはまだ、俺は負けっぱなしなんだから　　。

幕間の日(3)(後書き)

↓ディアノイア劇場↓

もう40部か……。何かの記念事に特別版やってるといつまで立つても普通の解説とかにならないなあ、編

夏流「というわけで、今回はへこたれ勇者二名の出番はなしということだ」

リリア&ゲルド「え？」

↓設定資料集その4↓

久々に人物説明

『本城 夏流 (レーヴァテイン)』

テオドランド家に伝わる術式紋章レーヴァテインを刻まれた武具で武装した夏流。

本来ならば術式の発動に使うはずの紋章を自らの魔力コントロールにあてている。その為これといって強力な術式は発動出来ないが、魔力制御が向上している。

夏流が持つ高すぎる魔力は未だに本人だけでは制御が難しく、武器に頼っている。装備がナツクルなのは本人が素手での格闘に慣れている為。が、剣も使えないわけではない。

過去文学少年だった夏流は家を出た後身体を鍛え、武術を学ぶ。元

々何かに打ち込む性格であり家の中に閉じこもっていた反動か、腕
つ節はかなり強くなっただけらしい。

レーヴァテイン
神討つ一枝の魔剣という自らの魔力を拳に乗せ、電撃を放出する術
式が唯一の放出攻撃だったが、最近では魔力操作により電撃を生む事
も可能になった。

足に装備した神威双対と連携する武器、『天覧双対』は神威双対と
は異なり、敵の防御術式を砕く蹴りを放つ『ウルスラグナ障害を討ち滅ぼす者』
という技の術式が刻まれている。

勇者部隊として戦う事で、他の生徒からの信頼も勝ち取り救世主と
してようやく歩き出した。まだまだ未熟な部分は多く、仲間に頼る
面が大きい、彼の心境も変化してきているようだ。

『メリーベル・テオドランド（レーヴァテイン）』

テオドランド一族に代々伝わる特殊武装構築術式レーヴァテインを
刻んだ武器を装備したメリーベル。

魔物の呪いに犯された身では立ち回りも戦う事も限界があり、彼女
自身が選んだ自分の戦い方は他の人間を強化する一点に尽きる。

戦闘相手を解析し、そのデータを元に最も相手に対して有効な効果
を持つ武器を周囲の魔力から構築し、一時的に相手に対して最強の
武器を生み出せる。

夏流の持つレーヴァテイン術式はメリーベルのものとも共鳴し、高
い相乗効果を生み出す。対グリーヴァ戦では二人の魔力を掛け合わ
せ、聖剣リインフォースを上回る剣を一瞬だけでも創造する事に成
功した。

彼女に呪いを飲ませた本人である兄を追っており、その兄の研究を
止めさせる事、そして彼の呪いを打ち破る事が当面の目標である。
真、同じ呪いを受けたことからゲルトの世話をしており、姉のよう
な気持ちで彼女を抱いている。

『リリア・ライトフィールド（ロギア）』

魔王ロギアを聖剣から引き出し、その身に宿したりリリア。暴走しているのとは違い、この状態ではリリアにも意識は存在する。

ロギアに身を明け渡しているとは言え、その発言や言動はリリアの根本にある意識が元である。つまりリリアのもう一つの人格であり、彼女の根本にある心の代弁者であるロギアが表層に出ている状態。それにより、暴走で仲間を傷付ける事もなく、冷静に敵に対処する事が出来る。その力は暴走状態をさらに上回り、的確な力で敵となる存在を駆逐する。

勇者フェイトにはまだ遠く及ばないものの、その力はフェンリルと互角かそれ以上にまで引き上げられる。文句無しに勇者として堂々たる戦闘力を発揮する。

ロギアにチェンジしている間は髪色が銀色に変色し、リインフォースに浮かび上がる紋章が変化する他、所有属性が変化する。

『マルドゥーク・アトラミリア』

ヨト信仰を守る聖騎士団員にして副団長。十九歳。

美形の青年で、常に神官装束と騎士の甲冑を合わせたような装備を纏っている。基本的に剣術は使わず、神官魔法により戦う。

アトラミリアという代々聖騎士団に強い影響を持つ神官の一族の息子であり、父である大神官はかつては勇者フェイトとも共に戦った過去を持つ。

その才能を引継ぎ、非常に高い魔力を持つ。学園の生徒とは異なり、オルヴェンブルムで騎士に揉まれて育ったせい、か、実力は勇者部隊よりも上である。

非常に固い考え方の持ち主だが、その実市民の事を思っており、命が散る事を良しとしない義理高い男。ただしきっちりするところはないと赦さない。

武器はヨト信仰の教えがつまった聖書。そこに記された魔力術式を発動し、戦闘する。剣と槍も一応使えるが、回復魔法と蘇生魔法を魅力に感じ、神官職についている。

直、極度のシスコンであり姉のエアリオを常に心配している。彼女の面倒を見るのが彼の役目でもあり、夏流同様苦勞人。

『エアリオ・アトラミリア』

聖騎士団戦乙女部隊隊長。二十五歳。
チーム・ヴァルキリー

マルドゥークの実の姉であり、聖騎士団団長であり大神官である男の娘。しかし団長の座はマルドゥークに継がせる気なので彼女は普通の隊長である。

戦乙女部隊と呼ばれる女性騎士のみで構成された部隊を率いる武人であり、長大な戦斧であり十字架でもある特殊な武装を運用する重騎士。

動きは重いが圧倒的な魔力障壁と一撃で大型の魔物を滅する聖戦斧を振り回し、聖騎士団の道を切り開く切り込み隊長でもある。

その勇敢な戦いぶりは聖騎士団だけではなくオルヴェンブルムの街でも有名であり、初代勇者パーティーの英雄たちに戦い方を仕込まれた過去を持つ。

重武装のわりにはおっとりした性格で常に笑顔を絶やさない美女。自主的に孤児などの面倒も見えており、アクセルにとっては育ての親であり、姉であり、複雑な想いを寄せる人物でもある。

極端にとぼけた性格の為、アクセルもマルドゥークも常に気の休まる瞬間がない。そういえばアクセルとマルドゥークはどこか似ている気もする。

リリア「本編でも出番少ない時なのに、ここでも出られないんじゃないや
どうしようもないよ!」

ゲルト「わたしは……そこそこ出番ありましたけど」

リリア「じー……」

夏流「次回に続く」

学園祭の日（１）

「アイオーン、どこ行っただ……？」

アイオーンの姿を探し、学園から飛び出した。他に彼女の行った場所について心当たりもないし、ここで見つけれないと……取り返しが付かない気がする。

だがそんな俺の焦りとは裏腹に、彼女の姿はどこにも見当たらない。一人で肩で息をしながら立ち尽くし、深々と溜息を漏らした。

「どうしてあなんだろうな、アイオーンは……」

一見すれば確かに恐ろしい。凶悪な笑顔が似合う、破壊的な美人だ。近寄り難いし何より彼女が立つ遥か予想も付かない高みには、誰も隣に立てない気がする。

でもだからってどうして一人でいいなんて事になるんだ。そんなわけがない。確かにそれは彼女に似合う。でも、こうなってしまうば話は別だ。

何故自分を肯定しないのか。わざわざ疑われるような行動を取るのか。そのかすかな違和感がどうしても拭い去れない。アイオーンが何を望んでいるのか、俺にはわからなかった。

ディアノイアの丘の上から見下ろすシャングリラ。日はまだ暮れないうだろう。そうして上から街を見下ろしてアイオーンの姿を探していると、物珍しい人物を見つけてしまった。

「……え？ ヴァルカン爺さん？」

カザネルラで漁師をやっているはずのヴァルカン爺さんがどうして

こんな所に？ 疑問に思い、両足に魔力を込めて跳躍する。丁度爺さんの正面当たりに着地するように大きく跳躍し、人々の頭上を飛び越えた。

爺さんは途中で俺に気づいたのか、足を止める。その正面になんとか着地できた俺が顔を上げると、爺さんはソウルそっくりな笑い方で言った。

「おおーう！？ なんだ、夏流じゃねえか。元気そうで何よりだ。飯ちゃんと食ってるか？」

本当に似てるなこいつら……。筋肉ムキムキだし。まあそれはいい。そんな事より今は爺さんの事だ。

「そんな事よりどうしたんですか？ カザネルラから遙々やってくるとは」

「おう、そろそろ学園祭らしいからな。孫娘の顔でも見てやろうかと思って来たんだよ。それに色々他にも用事はあるしな」

見ればヴァルカンには背に巨大な布に包まれた武器のようなものを担いでいた。勇者の親であり祖父でもある男、ヴァルカン・ライトフイールド。その実力がどれ程かは判らないが、ゲルトのキックを受けてノーダメージだったことから技量はかなりのものだと思われる。

その爺さんが武装してわざわざ赴く理由が思いつかない。爺さんは辺鄙な田舎の変わり者の漁師でしかないはずだ。それがどうしてここに来るのか。

「ま、その様子じゃお前にも話は行ってるようだな。他でもない、お前ら生徒の問題についてだ」

「……まさか、執行者との事ですか？」

「それもある。それに、目覚めたんだろ？　うちの孫娘、もう一人がよ」

爺さんの言葉に従い、俺は彼をリリアの寮まで案内する事になった。背の高い爺さんは隣に歩かせているとかなり迫力があるな……。寮に入り、リリアの部屋の扉をノックすると中からクロロが顔を出した。しまったと思った時には既に爺さんが爆笑しながら部屋に上がりこんでいた。この後リリアが男と同棲している理由を説明するのに三十分ほどかったが、何とか事情は理解してもらえた。

「つーかお前、クロムロクシスか？」

というのがクロロを見た爺さんの台詞だった。俺と寝ぼけた様子のリリアはお互いに顔を見合わせて首を傾げた。当のクロロ本人は黙って爺さんの言葉に頷いた。

「そうかそうか、何でお前がここに居るのは知らねえが、馬鹿孫を守ってくれてんのか。ありがとうよ」

「肯定。リリア・ライトフィールドは家主ですから」

「おじいちゃん、クロロ君の知り合いなの？」

「まあちよつとな。それよりリリア、聖剣を見せてみる」

「う、うん……。ていうかおじいちゃんどうしてここに……」

「まあいいから。いいんだよそういうめんどくさい会話は。さつさと話を進めるぞ」

聖剣を手にした爺さんはしばらくそれをじっと見つめていた。それから何やら荷物の中から様々な道具を取り出し、聖剣を光に翳す。

「鎖はやっぱり千切れちゃったか」

「うん……。あ、でも鎖の破片は持ち帰ってるけど」

「いや、そんなもんはもう意味がない。まあゲインもこうなる事は判っていただろうしな……。まあ、その鎖は退魔能力を宿したままだから、武器にするなりお守りにするなり好きにしろ。問題はこっちだ」

リインフォースの刀身には輝が入っていた。爺さんはそこをじっと見つめたため息を漏らす。どうやらリインフォースの刃こぼれが気になっているようだ……。

「リリア、正直に答えな」

爺さんの言葉にベッドに腰掛けたリリアが背筋をぴんと伸ばす。流石に親子のような関係であるからか、リリアは従順だった。

「お前、ロギア存在にいつから気づいていたんだ？」

「……………おじいちゃん、知ってたの…………？」

「当たり前だろう馬鹿が。お前がまだ母親の腹の中にいた時から面倒見てんだ。お前のことでわかんねえことはないんだよ」

リリアは申し訳無さそうに肩を落とす。一瞬俺の存在を気にして視線を送ったが、意を決したように語り始めた。

彼女が魔王　　ロギアの存在が聖剣に宿されている事を自覚したのは、何と六歳の時だという。何やら色々あったらしいが、その事はあまり語ってくれなかった。

ロギアはどんな存在なのか？　まさかそれが魔王だとは思わなかったらしいリリアは、自分のもう一つの人格　つまり二重人格ではないかと疑ったらしい。そんな自分を知られれば周囲から拒絶されるかも知れない……誰にも言わないのは当然の事だった。

ただ、そのロギアという存在が自分の中で大きなもので、振り返れば背中を合わせてピッタリとくっついていて影のようなものであることは気づいていたらしい。そうしてロギアと彼女は時々頭の中で会話をするようになったという。

「ロギアは、この間自分の事を魔王だって言ってた……。ねえおじいちゃん、リリアは魔王なの？」

「それは違う。お前も聞いただろ？　ロギアは聖剣リインフォースに封印された魔王の魂……魔力そのものだと言ってもいい。そして明言しておくが、ロギアはお前の敵ではない。むしろお前を守るために存在する」

「爺さん、それは俺も解せないんだが……。どうして世界を征服しようとしたザックブルムの魔王ロギアがリリアに手を貸すんだ？　自分を殺した男の娘だろう？」

「ロギア自身がお前たちにそれを語ろうとしない限り俺の口から言える事はねえな。まあ、ロギアにはロギアで事情があるんだ。察してやれ」

そう呟いて灰皿もないのに煙草に火をつける爺さん。リリアは落ち込んだ様子でじっと床を見つめていた。

「だがまあ、ロギアの魂の本質はリリアの本質に限りなく近い。二重人格って考えもあながち間違いじゃねえな。ロギアはお前の心の闇そのものだ。お前自身が内側に溜め込んでいるものをそのまま体現する」

「リリアの本質がロギアと同じ？ 冗談だろ？」

「お前は判ってるんじゃないのか？ うちの馬鹿孫の本質を」

そういわれてしまうと言い返す言葉がない。そう、リリアはぼけぼけとした性格やドジな部分からどうにもあほな子のイメージが強いが、その本質は異常なまでに闘争的だ。

他人に心を開かない態度。一度キレたら止まる事が無く、相手を倒すまで絶対に引き下がらない熱さ。仲間を思い、ただ剣を振る強さ。そして何より、この世界にある理不尽な人の不幸を心の底から憎んでいる。

リリアは孤独だ。自ら心を閉ざし、何者も立ち入る事を許さない。一人で荒野に立ち、世界全てを憎んで戦っているような、そんな子なのだ。

「こっからは夏流、お前の方に話がある。ちょっと来い」

「え？ あ、はい」

爺さんに連れられ一人で黙り込むリリアを置いて部屋の外へ。そこで爺さんは壁に背を預け、静かに溜息を漏らした。

「リリアが暴走する事は知ってんだろ？」

「……はい」

「まあ、聖剣を解き放った以上仕方無いことだ。あの鎖はリリアの魔力そのものを全て制御していた。それは知っているな？」

鎖は封印。リインフォースを封じるだけでなく、リリアそのものの魔力を大きく制限していた。それが聖剣の中に居るロギアというリリアの片割れを封じていたからなのは最早言うまでも無い。

「だが鎖は封印の任を終えた。これからあいつは自分自身の力と向き合って折り合いをつけなきゃならん。いいか？ リリアが暴走しそうになったら、ロギアの手を借りろ」

「ロギアの……？」

「あの孫娘の暴走を停止できるのはロギアだけだ。もし本気であいつが暴れ出したら、恐らくお前らにも危害が及ぶだろう。暴走するのはリリアでありロギアではない。ロギアはリリアの予備封印なんだよ」

「ちょ、ちょっとまってくれ……。何がなんだか……」

「リリアが本当にお前を望んでいるのなら、あの子本人がお前に語る日が来るだろう。それまではおあずけだ。さて、話はお仕舞いだが、俺たちにはまだやる事があるな」

俺たちは一度リリアの部屋に戻り、爺さんはこの街に暫く滞在する

事を伝えた。リリアは無理をして笑っていたが、恐らく自分自身の状態を一番気に病んでいるのは彼女だ。その笑顔は心許なく見えた。リリアが眠ってしまう事を訊ねると、爺さんは無言で肩を竦めた。それがどういう意味だったのかはわからない。ただ、よくない傾向である事だけは教えてくれた。

「だからってリリアの眠りを妨げるなよ。寝てる間にあいつは自分の中でごちゃごちゃしている意識を整頓してるんだ。身体も、心も……な」

寮を出て爺さんと共に学園へ移動する。門付近まで付いて行ったら、爺さんはここまででいいと言い、俺はそこで足を止めた。

「もしかしたらお前の手を借りるかも知れねえ。その時は宜しく頼むぜ」

「……はい」

「そう辛気臭い顔をするんじゃないやねえよぼうず。なあに、大丈夫だろ？ あれでも、俺の自慢の孫娘だ」

そう言っただけ爺さんは校舎に消えて行った。振り返れば日が暮れかけている。どうも、俺のやるべき事は山積みらしい。

学園祭の日（１）

さて、いつまでも校門で突っ立っているわけにも行かない。とりあえずアイオンのことか。もう随分時間も経ってしまったし、どこ

に行けばいいやら……。

腕を組んで彼女のいそうな場所を思い返す。すると意外にもすんなりと答えは出た。

「ユーフォニウム、か」

確か彼女は以前こう言っていた。シャングリラの南にあるバーのユーフォニウムで働いている、と。丁度いい、都合よくもうじき日も暮れる。仕事場にまで押しかけるのはどうかとも思ったが、どうしても納得が行かないから仕方ない。謝って許してもらおう。

ユーフォニウムを探す為に坂道を下り出す。そうしていると正面にまた見覚えの在る顔が歩いているのが見えた。見ればアクセルの妹、レンが一人できよろきよると辺りを見渡しながら歩いている。

俺が声をかけるよりも先にレンが手を挙げて俺の名前を呼んだ。無視する事もないので駆け寄ると、彼女は相変わらず嬉しそうに俺の手を取って笑う。

「また会えましたね、救世主様！」

「う、うん……。あれ？ アクセルは一緒じゃないのか？」

「兄はバイトだそうですから。本当は兄のバイト先の様子を見に行きたかったのですが、断られてしまいました。それで暇を潰すのに観光していたんですよ」

観光、というよりは地図と地形を照らし合わせていたように見える。彼女は手にしていた地図をポケットに突っ込み、にっこりと微笑む。

「救世主様は？ ディアノイアに用があっただんですか？」

「ああ、ちよつとな」

日の暮れ具合を眺める。アイオンの職場には何時くらいに行けばいいだろうか。とりあえず今だと早すぎる気がするが、バーなんて気の利いた場所行つた事もない俺にはよくわからない。というかまあ、あつちでお酒は飲めない歳なわけで。

「またどこか行きたいところでもあるのか？ アクセルが相手をしてくれないなら俺が案内するけど」

「い、いえそんな！ 態々救世主様のお手を煩わせる事はありません」

「そう言つなつて。友達の妹なんだ、邪険にはしないよ」

こうしてしばらく時間を潰すついでにレンを案内する事になった俺。彼女に言われるがまま、教会や駅、ディアノイア周辺などを歩いて周った。

レンは楽しそうに歩いていたが、時々歩くのも辛そうな様子になる事がある。そういう時は時間を置いて一先ず休憩を取り、ゆっくりと歩いた。

彼女はシスター、教会から来た人間だ。一瞬執行者の件が頭の中を過ぎつつが、どう見てもそういう雰囲気ではない。そもそもこんなに虚弱体質なのでは、執行者など務まらないだろう。

それに何よりアクセルの妹なのだ。疑いたくは無い。彼女は疲れた様子で歩き、しかしそれでも楽しそうに笑顔を浮かべていた。

「そういえば、救世主様？ 救世主様は勇者候補とも仲が良いと耳にしたのですが」

「ああ。今は二人とも色々あつて別行動してるけど、学園祭までには調子を整えてくると思うよ。そうしたらレンにも紹介するよ」

「本当ですか！？ 私は果報者ですね……これも神の思し召し。感謝いたします、救世主様」

嬉しそうに手を合わせるレン。アクセルの妹か……うん、似てねえ……。

「そうだ！ 救世主様、お願いがあるのですが……宜しいですか？」

「うん？ 何？」

「学園祭期間中、憧れの救世主様と一緒に過ごしたいんです。お忙しいとは思いますが、僅かな時間でもいいので……」

「ああ、全然構わないよ？ どうせ当日は予定ないだろうし、三日間もあるし」

「本当ですか？ これで孤児院の皆にお土産話が増えました！」

そういえば、アクセルは孤児だと言っていた。アクセルの妹であるレンもやはり孤児で、オルヴェンブルムの孤児院で育ったというところか。

成る程、確かに救世主様と一緒に学園祭を見て周った……ちょっとした自慢話になるだろう。アクセルの妹のささやかな願いくらいかなえてやつてもバチは当たらないはずだ。

「でも、兄が救世主様のようなお方と一緒に戦っていたなんて光栄です。いつも足を引っ張ったりしていませんか？」

「それどころか俺の方が助けられてる事は多いよ。学園に入った直後もアクセルくらいしか頼れる奴はいなかったしね」

「そうなんですか？ あんな駄目な兄ですが、今後とも宜しく御願します。もし粗相を働いたら言ってくださいね？ 私が神罰を代行して下しますから」

「そ、そう……。でも死なない程度にしてあげてね……」

明るい性格のいい妹さんだなあ。そんな事をしみじみかんじながら街をおよそ一周し元の坂道に戻ってきた。もう部屋に戻るというレンをアクセルのアパートまで送り届ける。

「今日はありがとうございました、救世主様」

「身体には気をつけてな」

「はいっ！ それでは！」

レンは階段を上って行った。それを見送る頃にはもう日も暮れて暫く経っていた。さて、どうしたものかと考えて背を向けて歩き出す。シャングリラの南という情報だけでユーフォニウムを探すのは難しいだろう。何しろとんでもない広さの街なのだ。迷子になってもおかしくは無い。

一人で夜の街をうろうろ歩いてもユーフォニウムは見つからない。入り組んだ路地や狭い通路など、シャングリラの乱立する建造物の恩恵が搜索を邪魔していた。

「ナツル様、あちらではありませんか？」

肩の上のうさぎが手を伸ばして指差す方向、狭い路地があつた。あんな所に店があるとは思えないのだが、一応覗いてみると確かにそこには地下に続く階段があつた。

「よく判つたなお前」

「何を隠そう、うさぎですから。ピアノの音色が聞こえたのですよ」
そう言つて俺の頭の上によじ登るうさぎ。それを無視して階段を下りる。地下へと続く扉には確かにユーフォニウムの看板が見えた。ここまで近づけば俺にもわかる。ピアノの音色が聞こえてくる。扉を開くと、そこには広い地下空間が広がっていた。薄暗い照明の中、何人かの客が夜の時間を楽しんでいる。そんな中、ステージの上でアイオーンはピアノを弾いていた。いつものような男と間違えてしまふような格好ではなく、今日ははっきりと女性だとわかるドレスを身に纏つて。

眼鏡を外したアイオーンはいつもとは違う髪形でいつもとは違う空間でいつもとは違う表情で鍵盤を叩いている。それが何だか不思議で、とても魅力的に見えた。

と、入った直後呆けてアイオーンを眺めていた自分に気づいて焦る。これからどうすればいいのかわからないで困っていると、頭から飛び降りたうさぎがタキシード姿の男に変身した。

「場に相応しい格好というものがあるでしょう？ 全く、そんな戦闘服で飲みに来る場ではないでしょうに」

正論なんだがお前に言われるのは無性に腹が立つ……。
が、しかしそれっぽい奴が一緒だと緊張も紛れてありがたい。一緒にカウンター席に着くと、ナナシは勝手に注文を進める。俺はその

間アイオーンをずっと見つめていた。

綺麗な音色だった。とても綺麗な音色だ。余計なものが一切感じられない。上手なのかどうか、素人の俺にはわからなかったけど、それはピアノを愛している音だと思った。

アイオーンは好きでここにいる。それは学園にいるときよりもずっと自由に生き生きしていた。だから少しだけ複雑になる。彼女はどうして、あの学園にいるのだろう。

「ナツル、見惚れすぎですよ。そんなにアイオーンのドレス姿が気に入りましたか？」

「う、うるさいな。ったく、お前のキザっぽい格好も今だけは感謝するよ」

「貴方もこういう服装にしていますか？ よければ予備がありますから差し上げますよ」

予備って……着替えてんのかこいつ……？ いつだ？ いつ着替えてんだ？

ナナシは久々の酒が嬉しいのか、幸せそうに頬を染めながらグラスを傾けている。その姿はかなりサマになっていてなんだか腑に落ちない。

俺にもとナナシは酒を奢ってくれた。何も飲まずに座っているわけにもいかないだろうし、仕方が無い。日本国の法律よ、今だけは俺を見逃してください。

「ですが、貴方が聞き惚れるのもわかります。彼女の音色は美しい。彼女自身もまた同じように」

「ああ、そうだな……。でも、普段のあいつは楽しくなさそうだ。

何だか我慢してるみたいに見える。それが判って複雑だよ」

「人の人生は我慢の連続ですよ、ナツル？ 本当に幸福な瞬間など、直ぐに過ぎ去ってしまうもの……。故にそれを愛しく想い、人は幸福に想いを馳せる……。幸せであるが為の努力を施行し、幸福を描くのです」

「何だ？ じゃあ別にアイオーンが学校じゃ楽しく無さそうでもそれはそれでいいっていうのか」

「ええ。彼女にはこうして、自分の心を素直に曝け出せる瞬間がある。例えば短い曲の中だとしても、彼女はその権利を有している……。幸せですよ、彼女は」

そう言つてグラスを傾けるナナシ。酒が入っているからなのかこういう場だからなのか、普段は滅多に口を開かないくせに今日のうさぎはよく喋る。

だが、いう事は確かに間違っていない。確かにそれはそれで幸せだ。少しでも幸福だと感じられる瞬間があれば救われる。

全てが幸せでなくてもいい。完全なハッピーエンドはありえない。でも、僅かな幸せが沢山の悲しみを無かった事にしてくれるとは思えない。そんな事を考えても仕方ないのだろうけど。

「……俺、この世界に入れ込みすぎて……。自分でも判つてる。初めてこの街の大地を踏みしめた時よりも今の方が……。今よりも明日の方が、多分ずっとこの世界を、好きになる……。それでいいんだろうか。全部救いたいと思うのは、俺の傲慢だ。でも、そう願ってしまう。力があるんじゃないかと思ってしまう。俺は、この世界の人間ではないのに」

「この世界で一生を終える、という手もあるでしょう。貴方が望むのなら、この世界で救世主として生きる道もあるのです。そう難しく考えずとも良いのでは？」

「そうはいかないよ。俺は結局この世界のイレギュラーだ。関与してはいけない存在がずっとここに居るわけにはいかない。いつかは帰らなきゃいけない時がくる」

「その時までに来る事をしておきたい、と……成る程、確かにそれは貴方の自己満足でしょうね」

ナナシを見つめる。男は微笑みながらウィンクを浮かべ、言った。

「ですが、それも悪くはないでしょう。ワタクシは貴方の決定を肯定する存在……。たとえそれがどんな結果を生んだとしても、ワタクシは貴方を否定しない」

「ったく、うさぎの分際で偉そうに」

「うさぎを侮辱するものではありませんよ、ナツル？ うさぎは可愛いものです。良いものですよ」

そんな会話をしていると、ピアノが鳴り止むのが聞こえた。どうやらアイオーンの出番は終わりで、他の演奏者が出てくるらしい。手の空いたアイオーンは俺の姿に気づき、驚いた様子で歩いてきた。

「どうしたんだい、ナツル？ こんな所に来るような歳でもないだろっに」

「うっ、うるさいな……。話がまだ終わってないのにあんたがいなく

なるからだ」

「え？ まさかそれでボクを追ってきたのかい？」

無言で頷くとアイオーンは口元に手を当て、盛大に笑った。それから隣の席に腰掛け、金色の瞳で俺を見つめる。

「君は本当に面白いな……。そちらの紳士は君の使い魔かい？」

「わかるのか？ えっと、紹介するよ。うさぎの精霊ナナシだ」

「……若干否定したい部分がありましたが、まあ良いでしょう。ワタクシはナナシ……以後お見知りおきを」

俺とアイオーンの話に気を使っただけ、ナナシは席を外した。別の席に腰掛けたナナシを見送り、隣のアイオーンを見る。

しかし、見ていられない。胸元の大きく肌蹴た派手なドレスも違和感ばりばりだが、眼鏡をかけていないアイオーンは本当に尋常じゃない美人だ。それもこんな慣れない空気の店の中、二人並んで座っているとなんか情けなくてしょうがなくなってくる。

居た堪れない気持ちのまま酒を口にしてしていると、アイオーンは酒を注文する。目の前でバーテンがカクテルを作っている間、ずっとアイオーンは指先でテーブルをそっと叩いていた。それはあのピアノの余韻に浸っているかのようで、どうにも声をかけづらい。

「どうだった？」

「何が？」

「ボクのピアノだよ」

「よかった……と、思う。でも悪い、そこまで詳しくないんだ。専門的なことは、全然……」

「構わないよ。前知識が無ければ感動できない楽曲などボクにとっては意味が無いんだ。君が素直に良いと一瞬でも感じてくれたなら、それはこの上なく幸せなことさ」

そう言って子供のように笑うアイオン。その無邪気な仕草に一々見とれる。ああ、何度でも言っさ。半端じゃない美人だ、こいつは……。

「それで、話があるんだろう？ 時間は嫌というほどあるんだ、聞こうじゃあないか」

「……じゃあ、言っぞ。あのな……」

そこまで言っ言葉は途切れた。正直な所、もうそんなのはどうでもよくなっていた。アイオンはアイオンだし、信じたいなら俺が信じればいい。少なくとも今の彼女は悪意の欠片も無い純粋な人間だ。俺は信じられる。

教会や執行者が無茶を言うなら俺が彼女を守ればいいだけの話だ。口で何か言ってもアイオンにはきつと届かない。だから、行動すればいいだけの話。

俺が黙ってしまった事に首を傾げるアイオン。俺は顔を上げ、その手を取って言った。

「学園祭、俺と一緒に周ってくれ」

「はっ？」

「だから、あんた一人にしとくわけにはいかないんだよ。俺が傍に居れば俺にとつても文句はないし、あんたにとつても文句ないだろう?」

「その、ボクの文句がないという発想がどこから来ているのかよく判らないけど……」

「あ、あつても知らないんだよ、そんなのは。兎に角、いいだろう? 傍に居なきや、何かあつた時あんたを守れない」

その言葉にアイオーンは大層驚いた様子だった。それからまた大笑いして、目尻に涙さえ浮かべて俺を見ていた。

何も爆笑しなくてもいいだろうに。妙に恥ずかしくなつて視線を反らして酒を一気に飲み干す。アイオーンはテーブルの上の俺の手に自分の手を重ね、微笑んだ。

「ボクで良いのかい? 君の事だ、他に先約がありそうなものだけど」

「先約なんて……あ」

すっかり失念していた。そうだ、レンにどこかで時間を割かないといけないんだつた。となると三日間護衛する事は困難だな。くそ、自分で言っておいて忘れているとは馬鹿か俺。

「やれやれ、君は本当に後先考えないな。無茶ばかりしすぎだよ、夏流」

「う、うるさいな! 元を正せば、あんたが素直に人を頼らないか

らだろうが」

「ボクは別にそういうつもりはないんだけどね。君が勝手にそうしたいからそうするんだろう?」

「……やっぱ口で何か言っても無駄だな」

「ああ、無駄だろうね」

そうして互いに視線を反らし、それから何故がおかしくなって笑い合った。

「あ、そうだ。ついでにミスコンにも出てくれないか? ベルヴェールに言われてたのすっかり忘れてた」

「ミスコン……? 別に構わないよ、退屈をどうにかできるならね」
あっさりとOKされてしまった。なんだか拍子抜けしたが、アイオンは楽しそうに笑っていた。

「君といると色々面白い事が起きる。中々退屈しない学園祭になりそうだ」

「出来れば何事も無いといいんだけどな」

「また来るかい? 今度は友達も連れてくるといい。美味しいお酒と出来る限りの演奏でお迎えするよ」

「あ、ああ。それじゃあもう用もないし、俺は帰るよ。邪魔しちゃ悪いしな」

「ああ、夏流」

立ち上がり、背を向けたところを呼び止められる。何かと思って振り返ると、アイオーンの両手が俺を抱きしめていた。

それは僅か数秒の抱擁だった。しかし完全に啞然としてしまった俺は何も言う事も何もする事も出来ず、突然過ぎる彼女の行動に動揺するだけだ。

「それじゃあまた、学園で」

そう言つて微笑んで手を振るアイオン。何故かその辺で女性を口説きながら酒を飲んでいたうさを引き摺って店の外に出て、ようやく人心地付いた気分だった。

まだアイオンの姿に心臓が高鳴っている。なんというか、あいつはもう普通じゃない。色々な意味で……。

「やれやれ、せっかちな人ですね。個人的にはまた来たい場所になつてしまいましたよ」

「お前は一人で勝手に来い……。俺は……なんか無理だ」

「そうですね？ 十分なプレイボーイっぷりではありませんか、ナツル」

そんなふざけた事をぬかすナナシを蹴り飛ばし、夜の街を二人で歩いて帰った。

学園祭……思っていた以上に大変なイベントになりそうだ。そんな事を、考えながら。

学園祭の日（2）

「はああああっ！！」

リリアの振り下ろすリインフォースが猛々しい魔力を帯びて俺目掛けて叩き込まれる。それは回避するだけでも精一杯であり、避けたとしても俺の身体を斬り付けて傍を通り抜けて行く。

大地を砕く程の威力を込めた凄まじい怪力。その一発一発が正に必殺の威力を秘めている。俺はそれをひたすらに避け続ける。リインフォースの攻撃は全て障壁を貫通する特殊効果を以って相手を滅するのだ。防御する選択肢は存在しない。

片手を正面に翳し、電撃で周囲を明るく照らす。その光にリリアが目を細めた瞬間、身体を捻って鋭く蹴りを放つ。聖剣で受けられたその衝撃で高々と金属音が鳴り響き、聖剣は背後へと仰け反った。互いの視線がぶつかり合う。リリアは小さく微笑み、剣を振り下ろす。しかしそれが俺に届くよりも俺の拳の方が早くリリアを吹き飛ばす。そのはずだった。

左右から飛んで来たのはアクセルの刃だった。それは同時に俺に襲い掛かり、左右に手を翳して障壁で弾き飛ばす。直後リリアの剣が振り下ろされ、しまったと思う瞬間には既に刃が俺の身体に触れようとしていた。

それを阻止したのは背後から魔剣を伸ばし、聖剣を受け止めたゲルトだった。その隙に後方へ跳躍し、ゲルトの隣に並んで体勢を立て直す。

「すまん、助かった」

「礼には及びません。全てはチームの勝利の為ですから」

正面で聖剣を構えるリリアの顔立ちからは初めて会った頃の気弱な感じは見取れない。今実際に戦って判る事がある。それは彼女がそう、きつと彼女こそ、俺の最強の敵なのだという事。

刃を構えるアクセルとリリア。二対二のチームバトル。勇者の聖剣に対抗出来るのは同じく勇者の魔剣のみ。ゲルトがフレグランスを片手で構えて前に出る。それに応えるように同じく前に出たリリアが微笑みながら言った。

「こうして剣を交えるのは二度目だね、ゲルトちゃん」

「そうですね。一勝零敗で今はわたしの優勢です」

「点数なら引っくり返して見せるよ！ゲルトちゃんには負けたくないからっ！」

「それはわたしも同じ事です、リリア。正々堂々、正面から貴方を迎え撃つ！」

笑いあう二人の剣に紋章が浮かび上がる。大きな一撃を放とうとしている。俺はゲルトの攻撃を妨害しに出てくるであろうアクセルを迎撃する為に正面に駆け出した。

空中から風を帯び舞い踊るように刃を振り下ろすアクセル。独特の重力を無視するようなふわりとした動きに拳が空ぶる。隙だらけの俺の動作にアクセルは素早く的確に切りかかってくる。やはり技量で言えばアクセルの方が上なのだ。

「ナツル……！今日という今日はお前を倒すっ……！」

「くそ……！だからって、はいそうですかってやられてやるわけ

には行かないんだよっ!!」

ナツクルと剣がぶつかり合い、火花を散らすその背後でリリアとゲルトの必殺剣が放たれようとしていた。

さて、なぜこんな事になってしまったのか。それは今から数日前、まだ学園祭が始まる前に遡る。

学園祭の日(2)

「うおおおおっ!! 死ねえっ!! ナツルウウウウッ!!」

「ひいつ!? な、なんだなんだっ!?」

それは学園祭の準備も大詰めにかかったある日。学園の装飾を手伝っていた俺の背後から風を帯びた剣が飛んで来たのである。

首筋を狙っていた明らかに殺意の在る投擲コースに驚いて慌てて回避する。しかしそれはまるで俺に狙いを定め意思を持つかのようにくるくると空中を旋回し、再び俺目掛け襲い掛かる。

早すぎてキャッチする事は難しそうだったので手甲で弾くと剣は大地に突き刺さった。それを引き抜いて構えているのは涙目になったアクセルだった。

「ナツルウウウ……! 何か言い残す事があれば聞いてやる……!!」

「何がだっ!? ちょっと待て、お前ホントどうかしてるぞ! 仲間に向かって投擲する速度じゃなかったぞ!!」

「五月蠅い黙れ！！ 仲間だったのも昨日までだっ！！ 色々な女子と仲良くしているのはまだいい……だがなナツル！！ レンだけはお前の魔手には渡さないっ！！」

「レン！？ お前の妹がどうしたっていうんだよ！？」

「とぼけるんじゃないっ！！ レンと……レンと、デートする気だろお前あああああっ！！」

両手に構えたサーベルを振り回しながら迫ってくるアクセル。その怒涛の勢いに必死で背を向けて逃げ出した。

「お前が死ねば全てが丸く収まるんだ！！ ここでレンのために死ね！！」

「何がだあああああっ！！ そんな事言っただ覚えはねえええええっ！！」

「この期に及んで言い訳か！？ そうやって女子と誰でもイチャイチャしてるからこうなるんだ！！ お前におにいちゃんと呼ばれる筋合いはねええんだよっ！！」

「俺にもねえよ！！ うわあああああっ！？ ほんっきであつぶねえっ！！ 死ぬ！ 殺されるうっ！！」

周囲の建造物を衝撃波で切り裂きながらアクセルは泣きながら追いかけてくる。本気で自らの死を覚悟していたら正面を眠たげに歩くリリアの姿を発見した。

「リリアアアアアアッ！！！！ 助けてくれえええええっ！

「！」

「あ、ししょー……おああおおおおっ！？ 何がっ！？ 何が起きてんですかあっ！？」

「あああああああああっ！！」

最早わけもわからずリリアに駆け寄る。俺と並んだところで一緒に走り出したリリアの背後、見境無く全てを切り裂きながら迫るアクセルの姿がある。

リリアは完全に目が覚めた様子で、青い顔をしながら苦笑を浮かべてアクセルを見つめている。後ろを見ながら走っているので壁に激突しそうになっているリリアの手を取り、路地を曲がる。

「こっちだっ！！」

「ししし、ししよっ！？ 何をしたんですか！？ 何をすればっ！
ああなるんですかあっ！？」

「知るか！！ 馬鹿なんだよ馬鹿！！ 馬鹿すぎんだよ！！」

「大人しくくたばれやああああ！！」

路地を剣で切り裂きまくりながら迫るアクセル。これはもう笑い事じゃないぞ。リリアを抱きかかえ、足に魔力を込めて跳躍する。路地を上まで抜けて民家の屋根に着地すると、背後から風の魔力を帯びたアクセルが飛ぶように迫ってくる。そういえば空中戦はあいつの得意分野だった……。

「ナアアアアツウウウウルウウウウ……！！」

「リリアー！！ リリアーッ！！ リインフォースだ！！ リインフォースでぶった斬れ！！」

「うえええええっ！？ それ死ぬんじゃないですか！？」

「あいつの障壁見ただろ！！ 並の攻撃じゃ弾かれる！！ お前がやらないなら俺がやるっ！！」

「ひ、人の聖剣を勝手に仲間の血で汚さないでくださいっ！！ 追われてるの師匠だけなんですよ！？ 師匠だけ死ねばいいじゃないですかあー！！」

「そうやって俺を見捨てるんだな！？ そういうんだな！？ あーそういうんだ！！ 勇者として今まで面倒みてやったのにそういうんだー！！」

「知らないですよそんなの！！ そもそも師匠が何かしたのが悪いんでしょう！？ リリアを巻き込まないでくださいっ！！」

とかなんとか言い合っているうちにアクセルが迫ってくる。投げつけられた剣をリリアがリインフォースで吹っ飛ばす。その隙にレーヴァティンを放ってみたが、アクセルは風を集めて雷を吹き飛ばしてしまった。

「うおおおおっ！？ うおおおおおおっ！？」

「……う？ あれ？ 師匠の必殺技、あんな簡単に破られる程度の威力でしたっけ……？」

「そんなわけねーだろっ！！ 余裕でグリーヴァにだって直撃するっのっ！！ うわあああっ！！」

リリアを抱きかかえて跳躍する。腕の中でじたばたもがいているリリアを道連れに屋根から屋根へと飛び移る。

どうすればいい？ どうすればアクセルを停止出来る？ というか、こうして追われて初めて気づいたがやっぱりあいつ普通じゃない！！ 普通じゃないよおお！！

最早神にも祈る気持ちで考える。神にも祈る？ 神にも祈ればいいんだ！！ そうだ、その手があった！！

コースを切り替えて街中に降り立つ。暴風そのものになったアクセルが近くを通過するだけで人々が悲鳴を上げる。そんな中、俺が目指したのはボロアパートの前。アクセルの部屋の前、花壇に水を撒いているレンだった。

「レエエエエッ！！ たっ！ たすけっ！！ 助けてくれえっ！！」

「え？ 救世主様……じゃなくてお兄ちゃんっ！？」

「レン、こいつを使えっ！！」

リリアの手からリインフォースを引ったくり、レンの足元に投擲する。大地に突き刺さった聖剣を引き抜き、まるでバツターのように剣を構えるレン。その横を通りすぎ、アクセルが彼女に迫った時。

「この……っ！！ 馬鹿兄 ツ！！」

文字通りホームランショット。聖剣の刀身でぶっ叩かれたアクセルは口から血を吐いて遙か彼方、シャングリラの空へと飛んでいって

しまった。

それをリリアと二人して目を真ん丸くして見送る。兎に角生存できた……。その安堵感から、へなへなとその場に膝を着いてしまうのであった。

「ほんつとくに、申し訳ありませんでした……！」

完全に気絶して口から血を流しているアクセルの足を掴んでレンが引き摺って戻ってきたのがつい先ほど。アクセルをその辺にポイ捨てして転がし、レンは俺たちに頭を下げた。

俺はもう疲れていて何も言う気にならなかった。リリアは風で髪の毛がボサボサになり、目の下にくまを作ったまま涎を垂らしてボケーっとしていた。相当やばい事になっているが、いきなりあんなればこつもなるだろう……。

「うっ……リリアが何をしたっていうんですかー……」

「それは俺のセリフだ……」

「本当に、本当に申し訳ありません！　ほら、お兄ちゃんもさっさと起きて謝ってー！」

「ひぎいっ」

本当に痛そうな悲鳴を上げるアクセルを何度も蹴り飛ばし、口から泡を吹いている兄を強引に立たせる妹。リリアが口元に手を当てて目を涙ぐませながらそれを眺めていた。

「ほらさっさと起きるー！　その程度で倒れるなんてそれでも剣士ですかおにいちゃんはー！」

「おれは……レンのたを、おもって……」

「誰がそんな事をしてくれと頼んだのよ、この馬鹿っ……！」

更にバケツを投げつけられ、水浸しになってよろけるアクセル。もうやめてー！ アクセルのライフはもうゼロよ！

二人してその壮絶なアクセルの不幸を眺めること数十分。死にそうな顔で立ち上がったアクセルが死にそうな目で俺を見つめていた。

「うっ……レンがあ……。レンがナツルにとられたあ……。うっ、うっうっ……」

「何言っただお前……。そんな事をした覚えはないしそもそもそうだと妹がそうだったくらいで泣くな……」

「妹を嘗めてんじゃねえぞナツル！！ その発言は全国一億五千万人の妹属性の男子に対する侮辱に他ならないっ！！ 血が繋がっている？ そんなの関係ねえ！ がキヤッチコピーのアクセルです！！」

意味不明にも程がある。リリアはもう見ていられないのか両手で目を覆って小さく蹲ってぶるぶる震えていた。余りにも見るに耐えない惨状なのはもはや言うまでもない。いよいよ何を言っているのか自分でもわからなくなってきたことだろう。

「わかったから落ち着け……。兎に角お前の言う事は全部誤解なんだよ」

「それは……何割誤解なんだ？」

「全部誤解つつつてだろポケッ！！ 人の話を聞けっ！！」

「うるさいうるさい！ お前、勇者部隊の女子みたいにレンも侍らすつもりなんだろ！？ そうなんだろ！！ うああああんっ！！」

「……うん、でもその発言についてはリリアも同意します」

「何でここに来てまさかの裏切り！？ え、リリアさん！？」

「そもそも師匠は見境無く女の子と仲良くしすぎなんですよう……。最近全然構ってくれないもん！ かまってかまってー！！」

二人してじたばたし始める。そのどうしようもない状況に頭を抱えてその場でもがいていると、見かねたレンが手を挙げた。

「兎に角、全ては誤解なんです。それは確かに、救世主様と一緒に学園祭を周る約束はしましたけど……」

「誤解零割じゃねえかナツル！！」

「それはデートとは違うだろ！？」

「……なつるさん？ あれ、リリア誘われて無い気がするんですけど、どういう事ですか……？」

しがみ付いてくるアクセルと冷やかな視線で笑いながら迫ってくるリリア。二人にもみくちゃにされながら困っていると、またレンが割って入った。

「兎に角誤解なんです！ 貴方たちも勇者部隊の人間なら、救世主様に迷惑をかけないでください！！」

「がーん！？ ぜ、全然見ず知らずの女の子におこられたー……。うう、へ、へこたれる……。…」

「レンは騙されてるんだっ！！ ナツルてめえ……。！！ 既にレンを丸め込みやがって！ 人として恥を知れ！！」

「恥を知るのはお前らの方だろうが！？ 俺普通に生きてるよ！？ 今までに無いくらい無個性な主人公だよ！？」

「師匠が何を言っているのかはわかりませんが、兎に角リリアはもう怒ったのですよ……。…」

二人が武器を構えて迫ってくる。その様子に完全に気圧された俺は、在ろう事か余計な事を口にしてしまった。

「だ、だったら学園祭までこの勝負はお預けだ！！ 学園祭でチームマッチバトルがあるっ！！ そこでお前ら二人でかかって来い！！」

二人は互いに顔を見合わせ、がっしりと手を取り合って俺を睨んだ。そうして二人は各々捨てセリフを残して去って行く。

「首を洗って待ってろ、ナツル……。！！ レンは俺の手に取り戻して見せる！」

「師匠はそろそろ女性関係で痛い目に会ったほうがいいんです……。リリアがたっぷり虐めてあげるから楽しみにしててくださいね」

こうして取り残された俺は途方に暮れてその場で膝を着いた。変な笑いがこみ上げてきたが、同時に涙も流れてくる。あは、おかしいね。

何故か学園祭のチームマッチに参加する事になってしまった俺。あ、あの二人相手に勝てる気がしないよ……どうしよう。

「あの……本当に兄がすいません。でも、救世主様なら大丈夫ですよね?」

「え?」

立ち上がるとレンが両手を合わせ、目をきらきらさせながら俺を見つめていた。

「例え二人が相手であろうと、勇者であると剣士であろうと、救世主様が負けるはずがありませんから!」

「いや……。あの、俺もまだ、救世主見習い……」

「何も言わなくて結構です! 当日楽しみにしていますね! 兄は多少やりすぎなくらいボッコボコにしていますから! それでは失礼しますねっ!」

「あ、ちよつと……」

やはり兄妹、人の話は全く聞かない。一人取り残された俺はその場で途方に暮れた。涙さえ溢れそうな心境だ。

何故だ……? 俺が何をしたっていうんだ? そりゃ確かにさえない救世主だ。あんまり活躍してませんよねとか言われても仕方が無

いと思う。でもこれはない。こんなのはあんまりだ。

「俺が……俺が何をしたって言うんだあ ツ！！！！！」

空に向かって叫んだのが数日前。結局準備に急かされるようにして時間はあっという間に過ぎ去り、学園祭初日。

学園祭は三日間続けて行われる。この期間中は学園も殆どのエリアが一般解放される、非常に珍しいイベントでもある。シャングリラの街全体がお祭り騒ぎになり、あらゆる場所で騒ぎが起こる。この街にとって学園祭は生徒だけのお楽しみではないのである。

それに伴い観光客が劇的に増加する。それによりタダでさえ人の多いシャングリラは人でごった返していた。右を見ても人、左を見ても人……。こんな状況じゃ、執行者なんて見つかるわけも無い……。学園へと続く門をぞろぞろと人が通過して行く。学園周囲の通りさえここぞとばかりに金を稼ごうと生産職に就いている生徒たちが店を並べている。それこそ学園の教育成果の発表の場であり、生徒にとっては生活のかかった一大イベントでもある。

「うん、なかなかナツルも頑張ったわね！ いい感じの飾り付けになったじゃない！」

そんな出店の中に紛れ、俺はくたびれていた。結局今日の今日までベルヴェールにこき使われてしまったのである。まさか当日までこき使われるとは思わなかった。

あの後アイオンとも会っていないし、彼女がどこにいるのかもわからない。とりあえずは初日の予定を消化しつつ、何とかアイオンを見つけ出さなければ。

初日の予定は……午後にチームマッチバトルか。これには参加しないわけにはいかない。参加しなかったら闇討ちされそうだ。暗殺くらうくらいなら正面から抵抗したほうが大分マシだろう。

「さて、それじゃあ見回りもよろしくね、ナツル」

「はっ？ これで終わりじゃないのか？」

「何言ってるのよ実行委員になったからには学園祭三日間はずっと手伝ってもらわよ？ この時期はハメを外しすぎて暴れる馬鹿とかいるし、外部から人も沢山くるから問題は必ず起こるのよ。そういうのに対処するのもアンタのお仕事」

「ってことは、なんだ？ 俺にこの三日間安らぐ瞬間はないってことか？」

「無責任な事を言っただけで去って行くベルヴェールを恨めしげに見送り、盛大に溜息を漏らす。本当に俺が何をしたっていうんだ……厄日だ。厄日三連続だ……」

「肩を落しながら歩いていると、確かにいつもよりも騒いでいる生徒が目につく。騒ぎすぎれば大問題に発展するのは当然の事だ。何しろ学園の生徒は一人一人がなんらかのスペシャリストなわけ……」

「おいうさぎ、ちょっといいか？」

「はい？」

「お前……アイオンを探しておいてくれ」

「それは構いませんが、貴方はどうするのですか？」

「俺は……とりあえず見回るよ。怪我してる奴とかいたら大変だろ？」

俺の言葉に頷き、うさは人の姿に変身した。タキシード姿のナナシは人ごみの中に走っていく。さて、これで俺は心置きなく学園の平和に貢献できるってわけだ。くそ。

というか、午後になったら俺の寿命がやばいんだった。せめてパートナーくらいは午前中に発見しておかなければ話にならない……と考えていたところ、目の前をゲルト・シュヴァインが通過した。俺は有無を言わずその手を引いて人ごみから抜け出した。

「なな、なんですか急に!？」

「ゲルト、俺と一緒に戦ってくれ」

「はいっ!？」

俺は事情を兎に角説明した。もう頼み込むしかない。リリアの聖剣に対抗できるのは魔剣フレグランスの使い手であるゲルトしかないのだ。

聖剣に対して魔力障壁は無意味……。いくら頑丈な神威双対でもどれくらい持つかわからない。それにまた壊してしまつてはメリーベルに何を言われるか……。八方塞にもほどがあるだろ。

話を聞いてゲルトは呆れたように口元に手を当てて目を閉じていた。しかし呆れられようがなんだろうがこつちだつて命がかかっているんだ。引き下がるわけにはいかない。

「はあ、仕方の無い人ですね……。貴方が殺されてしまつても困るわたしでなければ手を貸しましょう」

「そうか! 恩に着るよ、ゲルト! お礼に何でもするからさ、何でも言ってくれよ!」

「何でも……ですか？」

きよとんと目を丸くするゲルト。それから周囲をきよるきよる眺め、腕を組んで目を閉じる。

「覚えておきましょう。貸し一つ、ということ……」

「よし、じゃあ早速作戦会議だ！ 午後には二人を倒さなければならんだ、時間が惜しい。一緒に行くぞ」

「行ってくてどこにですか!？」

「見回りだよ!! ほら、急げ!!」

ゲルトの手を引っ張って走る。人ごみを抜けて、あちこちを周って中庭は大道芸人や演奏者による楽しい音で満ち溢れていた。そこらじゅうで人々が歌い踊り、それを眺める人たちの笑顔が溢れている。

彼女もやはりそうしたもの珍しいのか、時々足を止めてそれらを眺めては子供のように無邪気に笑っていた。俺がそれを見ている事に気づくと直ぐにそっぽを向いてしまうのだが、それもまたゲルトらしい。

学園祭はシャングリラ全体を盛り上げている。人々が楽しそうに過ごしている。こんな中に執行者が紛れているなんて考えたくもない人々にしてみればディアノイアに立ち入れるのは年に一度、この期間だけ。学園の中の様子を感慨深げに眺める人も居た。

そうして一般人も混じった学園はまた一味違って新鮮だ。何よりも面白いのは、ゲルトと一緒に歩いていると、

「あ！ ゲルト・シュヴァインだ！」

といってゲルトに迫ってくる人々が居る事である。そういえばすっかり忘れていたが、ゲルトはシャングリラの中ではアイドルのような立場。人目に付けば目立つのは当然だった。

それを嫌がって走って逃げるゲルトと手をつなぎ、あちこちを逃げ回る。それもまた俺にとっては新鮮で楽しかった。ゲルトはそんな俺の様子に苦笑を浮かべて無言の抗議をしていた。

あちこちをうろろしているうちに時間はあっという間に過ぎて行く。勿論ただサボっていたわけではない。監視もきちんと言った。

ただ、そんなマナーの悪い客に会う事はなかったが。

昼も近づくと、流石に腹も減ったので一緒に出店で売られているものを食べ歩く事にした。そんな事をしている内に完全に遊びモードになってしまい、午後への緊張感が薄れた頃。

「ナツル様、こちらにいらっしやいましたか」

人の姿の……流石にうさぎモードでは踏まれるだえろ……ナナシが駆け寄ってくる。その姿に足を止めて振り返ると、ナナシは困ったような顔で言った。

「アイオーンの姿が見当たりません。もしかしたら祭りの会場には居ないのかも知れませんか」

「学園に来て無いつてことか？　ったく、あいつどこで何やってんだか……」

「アイオーン・ケイオスを探しているんですか？　どうしてまた……？」

首を傾げるゲルト。そういえば他の誰にも事情を説明していなかった。でもまあ、ゲルトには話してもいいかもしれない。

俺はゲルトに事情を説明するために人気の無い場所へと移動する事にした。まだまだ始まったばかりの学園祭、俺の苦勞はまだまだ続く……。

学園祭の日（3）

「アイオーン・ケイオスですね？ 申し訳ありませんが、少々お話を伺いたいのですが」

シャングリラの町を一人歩くアイオーン。上着のポケットに両手を突っ込んだまま振り返り、声の主を見つめる。

そこに立っていたのは小柄な少女だった。少女であるという判断の由来はその体格と声であり、顔は仮面で覆われている。境界の特殊礼服に身を包んだ少女はアイオーンに歩み寄り、胸から提げた特殊な十字架を掲げる。

「用件は言わずともお分かりでしょう。先のオルヴェンブルム攻防戦時、貴方がどこで何をしていたのか知りたいのです」

「執行者、か。ボクはずっとこの街に居たよ。どこにだって行つてはいない」

「それを証明出来る人間はいますか？」

アイオーンは答えなかった。正直に言えば、アリバイならば存在する。彼女は毎日ユーフォニウムに出入りしていたのだ。夜だけとは言え、オルヴェンブルムは日帰りで戻ってこられるような距離には存在しない。充分なアリバイと成る事を承知の上でアイオーンは黙り続ける。

何故か？ シンプルな事である。既に教会が自分を捕らえる目的でやって来ている事を彼女は理解していた。最初から事情を聞くつもりなどないのだ。そうである以上、『証拠がある』といえれば執行者

はその『証拠』を消しにかかる。大聖堂執行者とはそういう存在なのだ。

溜息を漏らし、目を閉じるアイオーン。その正面、少女は両手に短剣を構え、アイオーンへと歩み寄る。赤髪の女は顔を上げ、手を翳す。

「大人しく大聖堂に連衡されなさい。さすれば神の恩赦が与えられる事でしょう」

「この世界の神にまともなものなんていないんだよ。その事実なら、この身が証明出来る」

拒絶と見なし、少女は片手を上げる。同時に周囲から同様の服装の執行者が飛び出し、アイオーンへと襲い掛かった。

それを特に何をするでもなく、腕を組んだまま待つアイオーン。切りかかった執行者全員が同時に空中で弾き飛ばされ、道端に転がった。

何をされたのかは誰にも理解出来なかった。上着の胸ポケットから煙草を取り出し、火をつける。余裕の態度で煙を吐き出すアイオーンに執行者たちは一度後退し、隊列を整える。

人だらけの学園祭に浮かれた街の中、ぽっかりと彼女たちを避けるように空間が開かれる。人目だらけの中、執行者たちはじっとアイオーンを見つめていた。

「急がなくても良いだろう？ 学園祭は長いんだ。ボクも今すぐ連れて行かれるわけには行かなくてね。約束を交わしてしまったんだ。そうである以上、それを果たすまでこの町を去るわけには行かない」

「……それは大聖堂に齒向かうという意味ですか？」

「最初から大聖堂に頭を垂れた覚えはないよ。立ち去るなら、この身は残り二つの朝を越えればお約束しよう。しかし今事を構えるのであれば、無限の術式がお相手する」

「『龍殺し』、アイオーン。いいでしょう。貴方の過去の大聖堂への貢献に免じて一時の猶予を与えます。ただし、学園祭最終日の夕暮れまでには確実に」

「心得たよ、小さな執行者君。何、こう見えても 約束は守る女だよ、ボクは」

目を細め、ゆっくりと笑うアイオーン。その不適な笑顔に執行者たちは息を呑み、街中へと姿を消して行く。

それを見送り、アイオーンは寂しげに微笑んだ。心の中、どうでもいいと思っていた少年との約束を果たそうとしている自分が酷く馬鹿馬鹿しかった。

学園祭の日(3)

『さあ〜やってまいりました!! 英雄学園ディアノイア学園祭恒例行事、チームマッチバトル〜ッ!! 何だか最近ずっと実況していなかった気がするのですが、実況はお馴染み……? わたくしマイクが勤めさせていただきますっ!!』

青空を花火が彩る中、歓声に包まれた超満員の闘技場は盛り上がりに盛り上がっていた。

ディアノイア闘技場での試合は基本的に一対一であるのがルール。

そのルールを破って戦う事が出来る変則的なマッチバトルが学園祭では許されており、通常のランクを超えた真剣勝負が一つの見せ所となっていた。

闘技場は普段から解放された娯楽として人気があり、今日はそのシヤングリラ名物でも在る闘技場でイベントがあるとなり、席は満席、立ち見は当然と言った大盛況を見せている。

そんな中、大会に参加する事になった生徒たちはフィールドの前に並んでいた。やたらと意気込むアクセルと聖剣を握り締めて何やら笑っているリリアが夏流に視線を送っていたが、本人は知らず存ぜずを通すつもりで無視を決め込んでいた。

『ルールは簡単っ！！ 時間無制限のトーナメントバトル！！ ただし！ 仲間の内片方だけでもやられてしまえば敗北となるので注意が必要です！ それ以外に特に特殊なルールは存在しませんっ！！』

「……は、始まってしまった……」

「そう肩を落とさずとも……。こう成った以上は勝ちに行きましょう。目指すは優勝ですよ、ナツル」

「どうしてそんなにやる気なんだ？ アクセルは兎も角、リインフオースで武装してるリリアはヘタしたら障壁ぶち抜いて殺されるんだぞ……？」

「リリアはそんな事をする子ではありません！ わたしは……リリアを信じていますから」

純粹な眼差しで夏流に微笑むゲルト。しかし夏流にはそんなゲルトの言葉はどうにも信用出来そうになかった。

肩を並べて立つ二人の様子にさらにリリアとアクセルが不機嫌になっ
っているのだが、夏流はそれに気づいていない。冷や汗を流しながら
肩を落とし続ける夏流と気合を入れるゲルト。対照的な二人を他
所に大会は進んでイク。

結局アイオーンを見つける事は出来なかった彼にとつて、とにかく
この予定を切り抜けなければ他の予定がどうにもならない。なんと
しても生存しなければならないのだ。

「ていうか、トーナメントならキリのいいところで負けておけばい
いんじゃない……」

「わざと負けるなど勇者の恥です！ そんな事をするくらいなら、
自殺します！」

「……そうか、そういえば、ゲルトはこういうやつだったんだ……。
誘うならメリーベルあたりにしておくべきだった……」

「片方が敗北すればそれでアウトなのですから、気合を入れてもら
わねば困ります……聞いているんですか？」

「わかってる、わかってるから……くそ、もうやるしかねえ」

真面目な表情で夏流に語りかけるゲルト。自分自身を鼓舞し、何と
か戦いにやる気を見出してみる。

しかし、不毛極まりない争いである事に夏流は気づいてしまってい
た。涙を流しながら笑う夏流の正面、マイクが声を上げる。

『それでは、今回の大会開催に当たってアルセリア学園長と、戦闘
系学科の教師であるソウル先生から一言ずつお言葉を頂戴します！
どうぞ……！』

『お前らああああっ！！　ディアノイア最強が誰なのか知りたいか　ッ！？』

「　　うおおおおおっ！！　」

『お前らああああっ！！　普段では実現できない夢のタッグマッチの結末が知りたいか　ッ！？』

「　　うおおおおおっ！！　」

『お前らああああ……もう後は特にいう事はないが、うおおおおっ！！』

「　　うおおおおおっ！！　」

盛り上がっているのはリリアもアクセルも他の参加者も同じだった。まさかとは思いつと隣を見ると、ゲルトも無邪気に笑いながら手を挙げている。それをじつと冷めた視線で見つめていると、ゲルトはすぐに手を引つ込めた。

夏流の視線を受け、ゲルトは咳払いする。二人がそうして黙っているうちにソウルの挨拶は終了し、マイクは学園長へと手渡された。

『お集まりの皆さん、こんにちば。学園長のアルセリアです。まずは無事、学園祭を開催する事が出来た事に感謝します。これも全ては生徒有志の活動であり、学園側はほぼ全く関与しておりません。生徒の皆さんが自分で努力して生み出したこの忘れられない一瞬一瞬を、どうか胸に刻み楽しんでください』

学園長の真面目な言葉に会場が静まり返る。アルセリアはマイクを

手放すと、どこからかトランプを取り出し、声を上げた。

「では、記念にマジックをします」

「……え……」

突然の出来事に誰もが静まり返る。しかし当の本人は至極真剣である。アルセリアの甲冑から魔力があふれ出し、その閃光は会場を明るく照らし上げる。

手にした小さなトランプを顔の前に掲げるアルセリア。そうして自らの兜に手を伸ばし、それを外してトランプを操った。

「口からトランプがー」

「……古っ!? ……」

そして同時に誰もが驚嘆した。アルセリアの甲冑の中身は 何も無かったのである。

直ぐに兜は元に戻ってしまったものの、謎の学園長の甲冑の中身は空 その事実には会場は騒然としていた。それをマジックの感想だと受け取ったアルセリアは満足げに頷いた。

「それでは、怪我に気をつけて意義ある試合を」

一人で去って行くアルセリアを完全に会場は停止して見送っていた。少々戸惑いの空気が流れる中、大会は催される事となった。

ナツルチームとアクセルチームはそれぞれ別の試合を展開する。彼らの前に立ち塞がれる敵は存在せず、両チーム共に圧倒的な力で試合を制して行った。

そんな中、夏流は常にゲルトの様子を気にかけていた。魔剣の牙え

は戻りつつある。忘れかけていた勇者としての力を思い出すように戦うゲルトだったが、呪いの事もあり心配は耐えない。

夏流の心配はどうあれ、ゲルトは一戦一戦、自らの身体を蝕む呪いについて考えながら戦っていた。確かに感じ取れる事は、魔力総量は以前より上がっているという事。しかしコントロールは難しくなり、今は魔剣を扱うのがやっとである。

呼吸を落ち着け、冷静に戦う。それさえ出来れば以前と同じように戦う事が出来る。魔力を出来る限り消費しないようにというメリーベルの忠告も、今の彼女の心には届かなかった。

「大丈夫か？」

「問題はありません。以前より調子がいいくらいです」

「……ヤバくなったら言うんだぞ？ 無理だけはするな」

「……貴方はわたしの保護者ですか？ 言われなくてもそんな事はわかっています！ 貴方こそ、自分の身を案じたらどうですか？」

強気なゲルトの笑顔に肩を竦める夏流。二人は順調にその後も勝ち進み、そして戦いは運命の時を迎える。

リリアVSゲルト、そしてアクセルVS夏流の様相は激化を極める。聖剣と魔剣がうなりを上げ、会場に風が吹き荒れる。

『さあ！！ 本大会一番の注目試合となっております今回の戦い！！ 言わずもがな、ゲルト・シュヴァインは闘技場では名を馳せた黒の勇者！ 対するリリア・ライトフィールドは以前は『へこたれ勇者』の名称で馬鹿にされていたノーマーク選手！ しかし今回の試合は予想外に面白い展開になってきている ツー！！』

黒白の勇者、黒白の大剣が上下から激突する。その暴風は大気を切り裂き、溢れる魔力は光の帯となって衝突面から溢れ舞う。揺れ動く二つの刃を突き合わせ、二人は真剣な眼差しで相手を瞳に映していた。二人には最早互いの姿しか目には映っては居ない。透明な世界の中、水しぶきを上げながら二人は湖面で踊る。

「……ゲルトちゃんは、師匠の味方をするつもりなの!？」

「そういう事ではありません! あんな男、わたしにとってはどうでもいい!」

「嘘ばっか! ゲルトちゃん……師匠の事実は好きなんですよ?」

ゲルトの剣が押し返され、黒の勇者が弾かれる。それはリリアの突然の発言に同様した為のもの。魔力制御を失いふらつく身体に剣を回転させながら突っ込んでくるリリア。

リインフォース・ストラス
「連続共鳴剣!」

「くっ!？」

回転するリインフォースは光の渦を巻き上げながらゲルトへ襲い掛かる。何度も連続で繰り返される斬撃。独楽のように回転するリリアの力にやがて耐え切れず、ゲルトは吹き飛ばされて壁目掛けて突っ込んで行く。

結界の障壁に着地したゲルトは空中で術式を構成する。その影から放たれる無数の矢をリインフォースで弾き飛ばし、リリアはにやりと笑った。

「ゲルトちゃん照れてる。かわいいなあ、もう」

「あ、貴方は……っ！！　というか、全然好きじゃありませんから！！　ふざけているんですか、リリア！」

「悪く思わないでね、ゲルトちゃん……。リリアはこれから、師匠をとっちめねばならないですよっ！　とあっ！！」

迸る魔力の衝撃を叩き付けるリリア。ゲルトは齒を食いしばり、摩く髪の中リリアを見据えて剣を握り締めていた。

『試合はまさかのリリア・ライトフィールド優勢となっております！！　以前へんてこな試合をした彼女をわたくしも覚えておりますが……いやはや、まるで別人！！　白の勇者恐るべしっ！！』

その事実是谁よりも剣を交えているゲルトが理解していること。そう、リリアは強くなった。これからも強くなるだろう。

それは光の速さで突き抜けて行く衝撃。幼馴染であり、自分を守るうとした少女であり、そして自分が目指したいと思った幻想点。その勇者は今日の前で自分と真剣に戦ってくれている。その事実がゲルトの中の闘争心を大きく煽るのだ。

さあ、刃を交えて舞い踊れと心が叫ぶ。その魂の衝動は以前よりもずっと強く、そしてこれからももっと強くなるだろう。リリアという少女が強くなればなるほど、ゲルトは己を高められる気がする。そう、それは二人の共鳴反応。

「……うれしいです、リリア。貴方とこうして、きちんとやり合いたかった……ずっと！！」

刃を打ち合い、距離を離す二人。互いに必殺の構えを取り、聖剣から迸る金色の閃光と魔剣から舞い散る紅い花弁。その輝きが会場へ

と広がっていく。

二人の側面で刃を交えていたアクセルと夏流もそれに反応し、距離を離す。

「ゲルト……！？ 技を放つつもりなのか！？ そんな魔力を搾り出したら、ヤバいんじゃない……」

「リリアちゃんっ！！ 夏流ごとぶった切るぞっ！！」

リリアの背後に立ったアクセルが風を巻き起こす。それはゲルトの花弁を吹き飛ばし、リリアの光を加速させる。必殺技の前段階を封じられたゲルトは眉を潜め、魔力の渦を剣に纏って構える。

「ゲルトの必殺技なら研究済みだ！ 一度自分の身体で食らったからな ツー！！」

「ゲルトッ！！ 下がれ、俺が先に行く！！」

「夏流……！？」

リリアの光の剣は見る見る巨大化して行く。やがてその刀身の長さはフィールド全体をも超えるほどになり、太く、そして眩く輝く。溢れんばかりの力を込めた聖剣を肩に担ぎ、リリアは目を見開いて前に踏み込む。

「鳴り響け ツ！！ 断罪共鳴剣ッ！！」

「神討つ一枝の魔剣その力を我は担う……」

屈んだ姿勢で詠唱を行う夏流。その足に電撃が进り、全ての障壁を

両断する光の刃が迫る中、あえて前へと突進する。

ゲルトを守るように正面に立ち、リリアの断罪共鳴剣が振り下ろされる瞬間、電撃の魔力を帯びた足を振り抜く。

「ウルスラグナ障害を討ち滅ぼす者ッ！！」

それは、互いの持つ最強の魔術障壁無効化術式。互いの魔力が正面から衝突し、夏流の足は衝撃でずたずたに引き裂かれた。血飛沫を目にしながらも、夏流は雄叫びと共に魔力を迸らせ、そして。

「……………つづつっ！！ 聖剣リインフォースか……………！ 敵に回すと、本当に厄介な武器だ……………！ 行け、ゲルトッ！！」

魔力を迸らせる竜巻の槍が放たれる。ゲルトは引き絞られた弓から放たれた矢のように一直線にリリアへと迫る。しかし聖剣は未だ夏流に押さえ込まれたまま。

黒と赤の渦が煌き、リリアに襲い掛かる。それを阻止しようと正面に出たアクセルが構える剣と激突し、ゲルトはありったけの魔力を込めて目を見開いた。

「メイシルシュトローム渦巻く闇の花弁 はあっ！！」

螺旋が加速し、アクセルの剣を弾き飛ばす。その身体を刺し貫いた魔剣を引き抜き、ゲルトは身体を反転させながら剣を側面に揮う。

その先には、聖剣を振り被ったリリアの姿があった。

白と黒の剣は激突する。互いの必殺技を纏ったままの刃は激しく火花を散らし、二人は同時に弾き飛ばされて障壁に背中を強く打ち付けた。そうして二人が立ち上がり、再び刃を交えようとした時だった。

『ああ　つとおつ！？　これは……！？　お互いのチームの男性側が、同時にダウンしている　ッ！！』

実況の声で我に返り、二人はお互いのパートナーに目をやった。リアの必殺技を受け止めた夏流の身体は焼け焦げ、無様に気を失って倒れている。同時に身体を貫かれたアクセルは血だらけになって完全に動けない状態になっていた。

二人とも重傷であることは明らかであり、二人の勇者は慌ててパートナーに駆け寄る。しかし起き上がれるようなダメージではなく、やむなく試合は引き分けとなった。

『試合終了　ッ！！　こ、これ以上続けると色々危険そうでもありますので、ここで終了です！！　優勝候補のチームが二つ、同時にここで消え去りました！！』

マイクの声は二人には届いていなかった。お互いに顔を上げた勇者は苦笑を浮かべ、歩み寄る。

「ちょっとやりすぎてしまいましたね……」

「うん、そうだね。でも、師匠は少し痛い目に合って丁度良いくらいでしょ？」

「……まあ……そうなのでしょうね」

「……ま、まさかお前まで裏切るとは……ゲルト……さん……がくっ」

「うっ……。レ、レン……。お兄ちゃんは……がくっ」

男性二人が倒れるのを見て慌てて回復魔法をかけながら医務室へと運び込む二人。決着は付かなかったものの、その表情はとても晴れやかだった。

「あーっ、楽しかったあー」

身体を大きく伸ばし、リリアはニツコリと微笑む。闘技場の喧騒も遠い選手控え室の前の通路でリリアとゲルトは壁に背を預けて立ち止まっていた。

当然のように医務室に運び込まれた夏流とアクセル。二人は腕の良い医師の揃うこの会場で無事回復するであろう。しかしお互い負けは負けであり、引き分けは引き分け。それでも全力を尽くした事には変わり無い。

リリアの横顔を眺め、ゲルトは笑う。その優しい視線に込められたものは沢山の思い。ずっとずっと、こうしたかったという願いそのもの。

そう、ずっと。こんな風に、お互いの力をぶつけ合いたかった。心の底からライバルだと思える存在に自分を認めて欲しかった。本当の意味でもう一人の勇者になりたかった。その願いは偶然にも、そしてささやかな結末として叶えられた。

「まさか、取って置きの必殺技が防がれるとは思わなかったよー……。うう、師匠はやっぱり強いなあ」

「アクセル・スキッドも中々の腕前です。あんな平凡な武装であれだけの立ち回りが出来るのですから……。尤も、そういう彼の力を隠すようなやり口は気に食わないのですが」

「あはは、まだアクセル君のこと苦手なんだ？」

「当然です！ あんなふらふらした軟弱男……。そのくせ強いなんて、そんなのは……。その、ずるい」

気まずそうに眉を潜めるゲルト。その表情を眺め、リリアは笑っていた。踊るように正面に立ったリリアはゲルトの手をそつと握り締める。

「まだ、ちゃんとゲルトちゃんに謝って無かったよね。ずっと避けてて、ごめん。辛い時、傍に居て上げられなくて……。ごめんね」

「……そんなことですか。いいんですよ、わたしは別に貴方を頼っているわけではないのですから。それに……。突き放してしまったのは、わたしの方です」

お互いの記憶を手繰り寄せれば、辿り着くのは同じ景色。

ゲインが死に、孤独な世界の中膝を抱えていたゲルト。そんな絶望の淵にいたゲルトを卑怯者の娘と蔑む子供たち。それに仕返しをしようと言ったリリアの手を払い除け、ゲルトは泣きながらリリアに罵声を浴びせた。

それは勿論本人の気持ちではなかった。しかしどうしようもない悲しみや憎しみ、そうした想いを抑えきれず、八つ当たりをしてしまった。そうしてゲルトはリリアに背を向けて走り去り、二人の関係はそれっきりこじれてしまった。

その後、リリア聖剣を持ち出し、子供たちの下に向かったのだが……その事をゲルトは知らない。リリアはその苦い記憶をも同時に思い返し、肩を落とした。

「ゲインと約束したんだ、私……。でも、ゲインが死んじゃって、ゲルトちゃんを助けられなくて……。あの時ほど大人になりたいっ

て思った時もなかった」

「……………リリア」

「ゲルトちゃんの事が好きだったのに、傍に居られなかった……。きっと私も負い目があったんだと思う。だから突き放したのはそっちでも、逃げたのは私」

「では……………おあいこ、ですね」

「うん、そだね。おあいこ、だね」

につこりと微笑むリリア。その笑顔がゲルトの胸を打つ。その無邪気な、優しい、力強く、頼りになる、信じられるヒト。それをずっと求めていたのに、とても遠回りをしてしまった。

「わたしこそ、貴方に謝らなければ……。貴方の想いに、わたしは応え様としなかった。また背を向けようとした。貴方に、とても無礼な事をしてしまった」

「うん、無礼だね。ゲルトちゃんが夏休みに私の事突き放した時、すっごく寂しかったんだよ」

「う……………っ。ご、ごめんなさい……………」

「でも仕方ない、友達だから許してあげるっ！　でも条件があります」

手を放したりリアはゲルトの前で両手を広げる。その様子に首を傾げるゲルト。リリアは昔と変わらない様子で告げた。

「だっ」

「……へっ？」

「だから、はぐはぐさせて？　昔泣いてるゲルトちゃんを良くだっこしてあげたじゃない」

「そ、そんな昔の事は忘れまして……！」

「でもリリアは忘れてないんだなあ。ほらほら、れつつはぐはぐ」

「……………」

しばらくそのリリアの目をじっと見つめていたゲルト。しかし観念したのか、そっとリリアの腕の中に飛び込んだ。

二人はそうしてしばらくの間抱き合っていた。お互いの間にあった溝を埋めるように、長い間止まっていた時計の針を回すように、ゆっくりと、時間をかけて。

「……懐かしいなあ、ゲルトちゃんのおい。うん、そうだった。ゲルトちゃんは、薔薇の香りがするんだ」

目を閉じ、ゲルトの頭を撫でながらリリアは優しく語る。その仕草だけでもう泣いてしまいそうだった。ずっと堪えていたものが崩れてしまいそうで、ゲルトは必死にそれを堪えた。優しい手、優しい温もり、声……。求めていた自分の心にめぐり合えたような気がしていた。

「もう二度と放さない。ゲルトちゃんがどんなに嫌がっても、絶対

に傍に居る。君が泣いていたら直ぐに駆けつける。君を傷付ける物から守ってあげる。約束は今でも変わらないよ、ゲルトちゃん。リアはずっと、ゲルトちゃんの騎士だから」

「では、わたしも誓いましょう。わたしも貴方がそうであるように、貴方を守る騎士になる。貴方が悲しみに暮れている時は、いつでも駆けつける。そう、直ぐに……」

笑いあう二人の影。壁に立てかけられた白と黒の剣が交わり、その様子を見守るように刃を輝かせていた。

学園祭の日(3) (後書き)

くディアノイア劇場く

アンケートの投票内容が若干面白いのでいくつか勝手に返答してみようのコーナー編

リリア「コーナー編ってなに？」

ゲルト「さあ……。とにかく前回の劇場では出番がありませんでしたからね。次回に続くとか言って終わりましたし。今回は何をするんですか？」

夏流「うん。なんだか最近、コメントとかがみんなぶっちゃけた物になりつつあるから、せっくなのでいくつか取り上げて見ようかと思って」

リリア「……師匠、素直にこのコーナーのネタが思いつかないって言ったらどうですか？」

夏流「さて、ちょっとだけ人気投票率について紹介してみようか。ここで何言ってるのかわからない人はアンケートをチェックしてこよう」

くお気に入りのキャラクターは？く

【一位】 投票率 41.7% ゲルト・シュヴァイン

【二位】 投票率 18.8% アイオーン・ケイオス

【三位】 投票率10・4% メリーベル・テオドランド

夏流「というのが、アンケート開始から一週間ちょっと経った現在の投票率だ」

リリア「……あの、師匠？ リリアと師匠、どこにも居ないんですけど……」

夏流「……いないなあ」

ゲルト「で、でも票数同じで四位じゃないですか！ さすが主人公とメインヒロインですね！」

夏流「主人公とか（笑）」

リリア「メインヒロイン（笑）」

ゲルト「ひい……っ」

リリア「よんじゅういちパーって、何？ 二位のアイオンさんでさえ18パーなのに……。ほぼ半分ゲルトちゃんってどういうこと」

夏流「……なんでゲルトこんなに人気なんだ？ ここまで圧倒的である理由がいまいちわからないんだが……」

ゲルト「う、うーん、どうしてなのでしょう」

夏流「というわけで、投票理由で面白かったものを少し取り上げてみよう」

く投票理由く

ツンデレ 【ゲルト】

ツンデレ 【ゲルト】

ツンデレ 【ゲルト】

ツンデレ 【ゲルト】

ツンデレ… 【ゲルト】

ツンツンデレデレ 【ゲルト】

リリア「おまえらそんなにツンデレ好きかつ！！！！ うがあああ
ああっ！！」

夏流「他にもツンデレって単語が入ってる理由はいくつもあつたが、
単純に【ツン】と【デレ】だけで構成されている感想はこれだけあ
つた」

リリア「他にもつと言う事がないんですかね」

夏流「いや、あれじゃないか？ アンケート開始直後に『ツンデレ
一言でまとめられたー』って劇場で言ってたから、皆ノったとか…

…」

リリア「そこまでみんな詳しく読んでないと思いますよ？」

夏流「それが意外とコアなコメントもある。『ツンツンデレデレ』
は本編かどこかでリリアが言っていたセリフだしな。他にはこんな
ものがあつたぞ」

あんりみてっど、まんせー 【アイオーン】
うっかりぶっさされたい 【ゲルト】

夏流「全体的にアイオーンとゲルトのコメントは若干おかしい」

リリア「そうみたいですネ……」

夏流「特にアイオーンは変なコメントが多いんだな、これが。【踏まれたい】的なも来る」

リリア「『小説家になろう』も随分ラフになりましたね」

夏流「さて、特に選択式にはしなかったが嫌いなキャラクターについてのコーナーなんてのもあったな。誰の事を言っているのかよく判らないのも多いのが特徴だ」

「嫌いなキャラクターについて一言」

フェンリルうぜえー 【フェンリル】
犬うざい 【フェンリル】

この犬が！！ 【フェンリル】
犬畜生キライ 【フェンリル】

夏流「フェンリルの不人気具合は異常」

リリア「ぬー……。同じ犬科として笑えない所が……」

夏流「そういえばフェンリルの次に嫌われてるの多分お前だぞ」

リリア「ほえ？」

リリア。バカすぎ 【リリア】

ロリは帰れ 【リリア】

ぺたんこ 【リリア】

夏流のへたれ！ 【夏流】

夏流好きだけどへたれてるから嫌い 【夏流】

救世主活躍してない 【夏流】

リリア「 って、師匠も不人気じゃないですかっ！！」

夏流「……………これに対し、ゲルト嫌いというコメントは一切存在しないのだ、ハハハ」

リリア「バカとかロリとかぺたんこ……。こ、心が折れる……。へこたれざるを得ない……………」

夏流「ほら、あれだ。俺は主人公だから……。これから活躍するか……………多分……………」

ゲルト「ふ、二人とも大丈夫ですか……………？ いくら凶星だからってそんなに落ち込まなくても……………」

リリア「泣くよ？ 泣くよ？」

夏流「本編で入院してるし、丁度いいから少し休暇を貰って現実に帰るわ……………」

リリア「リリアもカザネルラに帰らせてもらいます……………。ロリは帰れっといわれてるし……………」

ゲルト「ちょ、ちょっと二人とも！？　こ、こんなあとがきに一人
で残されてもどうしようもないじゃありませんかっ！！」

ナナシ「仕方が無いですね。せつかく一位だったんですし、ここから
は貴方が話を進めてください。次は一位だったゲルトの投票理由
への特別返答です。名づけてゲルト一問一答」

ゲルト「え？　え？」

「ゲルト一問一答」

何もかも淒く可愛らしいから　【ゲルト】

ゲルト「……どう答えればいいんですか？」

弄られている彼女が可愛　いえ可哀想で……　【ゲル
ト】

良ツンデレ。いじめたいです　【ゲルト】

不幸な所とツンデレな所　【ゲルト】

リリアにいじられて可愛い　【ゲルト】

ゲルト「弄られてるのがそんなにいいんですか……？　というか、
別にそんな言われるほどいじられてません！　あとツンデレってな
んですか？」

メインヒロインっぱいから　【ゲルト】

メインヒロイン　【ゲルト】

リリアよりヒロインらしい　【ゲルト】

ゲルト「……メインヒロインはリリアですっ！！ 彼女を侮辱すると許しませんよー！」

妹ツンデレ属性 【ゲルト】

ゲルト「……属性？ 妹……？」

色々とツボです。ぜひ仲良くなりたい子 【ゲルト】

ゲルト「わたしには別に友人は必要ありませんが……変なコメントじゃないのもあると何だかほっとしますね」

理由はない 【ゲルト】

理由なんていらない！ 【ゲルト】

今更理由が必要であろうか？ いや、ない！！ 【ゲルト】

ゲルト「なんだか怖いんですが……特に最後の人……名前書いてあるし……」

ナナシ「沢山のコメントありがとうございました」

ゲルト「うう……。なんだか票が入っていても、喜ぶべきなのかどうかからですね。リリアを怒らせてしまったし……」

ナナシ「あの二人の不人気具合は凄まじいですね。ワタクシでさえ彼らくらいは票入ってますが」

ゲルト「……出番減多にないのに、ですか？」

ナナシ「そうですね。というわけで、何が人気に繋がるのかわからないディアノイアですが、これからどうぞ宜しく御願します」

ゲルト「特に本編には関係ないけど一言、はいいんですか？」

ナナシ「長いものが多いのでここで解説するのはどうかと。あと勝手にやって怒られたらいやだから」

ゲルト「というわけで、機会があれば続くかもしれません」

ナナシ「それではさよならー！」

ゲルト「……じゃ、わたしカザネルラでリリアと二人きりでビーチを満喫してきますね」

百合 【ゲルト】

ナナシ「……成る程」

邂逅する運命の日（1）

「あんたもつくづく変な男だねえ……。毎度毎度死に掛けて医務室に来るんじゃないよ」

「はい、すみません……」

保険医のデネヴさんにそんな事を言われ、アクセルと共に医務室を出る。くそう、リリアの奴……。仮にも仲間である俺に新技かますとは。俺が何をしたっていうんだ本当に。

まあ、ゲルトにぶつさされたアクセルもかわいそうだが、兎に角あの勇者二人はあまり怒らせないようにしたほうがいいかもしれないという事を再認識した。

「しかし、風穴開いたのにあつという間に塞がったな……。アクセル」

「俺もビックリだよ。こんなに高度な蘇生魔法、オルヴェンブルムの癒し手でもそうは居ないだろうなあ」

ゲルト、直ると判ってて刺したんだよな……。？ そうだよな？ うっかりやったわけじゃないよな？

とは言え傷が完全に治ったわけでも痛みが消え去ったわけでもない。二人して包帯まみれで溜息を漏らし、肩を並べて歩き出す。

なんだかアクセルとは何やら対立していたような気もするが最早既にどうでもいい事だ。これからあのへこたれ勇者二人と一緒にどう生活していくかのほうが余程問題である。

「とは言え、レンの事は誤解だとだけ言っておくぞ？」

「んー？ ああ、もう良いよ……。ナツルの気持ちはもう充分俺に伝わったからな」

「アクセル……わかつてくれたのか」

アクセルは親指を立てて俺に突き出す。そのさわやかな笑顔のまま腕を組み、うんうんと頷いた。

「俺と真剣勝負してまでレンとデートしたいっていうなら、まあ一回くらいは認めてやってもいい。ただし、もしレンの身に何かあった時は……」

「だーかーらー……っ！ ああもう、いいよ何でも……。ありがとうがとレンちゃんワッホイ！」

適当に流す事にした。アクセルのバカに付き合っていたら身がいくつあっても足りないし時間も同じ事。無駄な労力を使うくらいならもう誤解させておこう……。

そうして二人で医務室を出て学園の廊下を歩く。勇者二人は見舞いにも来ていない……。どこで何をしているのか。最近リリアさんの俺に対する態度が変わってきたような……。ああ、どんどん冬香のような凶暴な性格になっていく……。

それにしても、ゲルトはあれで平気だったのだろうか。心配だから様子を見たいのに人ごみでまるで様子が判らない。肩を落としてポケットに手をつっ込んでいると、正面からブレイドが走ってくるのが見えた。

「夏流ニーチャン！ ちょっと！」

「どうしたブレイド？」

「大変なんだよ！ 兎に角ちょっと来てっ！！」

俺の腕をぐいぐい引つ張るブレイド。訳も判らないままとりあえずアクセル共々移動する。ブレイドが俺たちを連れてきたのは学園周辺に展開している出店の列、そのうちの一つだった。

「実はおいら、要らないアイテムを売ってただけどさ……あーほら、親父の遺産とかあるし、おいら生産学科も齧ってるからさ。まあとにかくそれで、ちょっと大変なんだよっ！！」

「ははは、ナツルはブレイド君とも仲いいのな。子供に好かれてていいじゃないか」

他人事のようにほざいているアクセルを無視して出店の一つに向かう。ブレイドの店であるはずのそこで商品売っている少女を見て俺は流石に目を丸くした。

「ありがとうございますっ！」

そこに居たのは栗毛色の髪の毛をした、アリア・ウトピシュトナ姫であった。さすがにありえないだろうと思って目を擦ってみたが、そこにいるのは間違いなくアリア姫である。アクセルは何事かわかつて居ないのか、小首を傾げながら俺に言った。

「何あの口リ。知り合い？」

「いや、知り合いというか何と言うか……いや、ブレイド？」

「店でアクセサリ売ってたらばったり遭遇したんだよ……。そしたら、楽しそうだから一緒に店番させるって聞かないんだよ……。夏兄、何とか言ってやってよ」

そんな事を言われても困る。見ればアリアはあの時のようなドレスを身にまといっているわけではなく、今回はワイシャツにミニスカートという格好だった。ちょっと見ただけではまさかアリア姫だとは誰も思わないだろう。それでも何となく煌びやかな風に見えるのは、お姫様だとわかっていいるからなのだろうか。

溜息を漏らし、三人でアリアに歩み寄る。俺の顔を覚えていたのか、アリアは店先から顔を覗かせ、手を振りながら微笑んだ。

「久しぶりね！ えっと……」

「本城夏流だよ、アリア様」

「ああ、ナツル！ それと、様は要らないわ！ 今のアリアはただの町娘って設定だから」

そんな綺麗な生地シャツとスカートは普通町娘は持ってないと思うが……。長い髪を背後で編んで変装しているつもりなのか、眼鏡をかけている。

元々アリア姫の顔はマリア女王同様民衆には知れ渡っていないはずだからそれほど変装は必要ないのだろうが、オルヴェンブルムにしようっちゅう繰り出している彼女はオルヴェンブルム内では有名なのだろう。シャングリラでの自分の知名度など考えもせず普段どおり変装してきたということか。

「えーと、アリアちゃん？ 始めまして。ナツルの知り合いにはちっちゃい女の子がいっぱいいいていいなあ。アリアちゃん俺の好み

だよ」

「……アクセル？ その発言はどうかと思うぞ……。アリアは何歳だ？」

「十二歳！」

「十二歳はまずいだろ、十二歳は……。いつまで手を握ってるんだ、離れるロリコン」

「ロリコン、シスコン……へっ、褒め言葉以外の何者でもないな」

こいつは本当にどうしようもない。いつかどこか遠いところで幸せになってもらおう。

アリアからアクセルを引っぺがし、一先ず店先で物を売るアリアの様子を窺う。これなら確かにバレはしないだろうし、ブレイドが一緒なら危険もそうないだろう。何しろゲルトでさえ下す程の腕前なのだから。

「ブレイド、せっかくだしいじゃないか。少くらいアリアを遊ばせてやってもさ」

「ニーチャン！？ そんな事言われてもなあ……」

「あら、ナツルは話が早くて助かるわ。別にブレイドにだって迷惑はかけてないでしょ？ アリアはぶんぶりよーどーだもん」

よく判らないが、兎に角自信満々のご様子だ。しかしブレイドはどう見ても動揺している。一人で出店なんて勝手にやってるくらいだ、一人でもてきぱき生きてきたのであろうブレイドにとってアリアの

性格は天敵なのかもしれない。

無邪気な笑顔を浮かべて店先の商品を並べ直すアリア。その揺れるお尻を見ながら真剣な表情を浮かべているアクセルを無視しつつ、ブレイドに耳打ちする。

「オルヴェンブルムの次期女王だぞ？ 仲間にしておけばブレイド盗賊団の将来が約束されたようなもんだろ」

「……な、なるほど……。さすがニーチャンだ。そうか、お姫様が仲間なら捕まらないかもなー」

そんなわけではないが、ブレイド君は単純だった。どうやらその気になったらしく、せっせとアリアに指示を出している。既に団長になったつもりなのだろうか。

二人の楽しい様子を眺めつつ、どうせ街まで探しに来ているだろうマルドゥークにどうやってこの場所を伝えようか、肩を竦めて考えていた。

邂逅する運命の日（１）

「シャングリラってすごいね！ 学園祭中だからなの？ こんなに人がいっっっぱいいるのは」

目を輝かせながら貧乏ゆすりしつつ椅子の上に座って人々を眺めるアリア。その横顔はとても無邪気で可愛い。可愛いすが、俺の横でニヤニヤしているアクセルとは違う意味で可愛い。

ブレイドは小さな屋台スペースの中で指輪などを丁寧に削っていた。先ほど店に訪れた客に合うサイズのもが無かったので、ただ今作

っている最中なのである。

器用に何でもこなすブレイドの周辺に工具は一つもない。全て何も無い空間から引っ張り出し、丁寧に迅速に仕上げて行く。こういう魔法の有効活用っていうのはいいな。

「ブレイドは手先器用だな？」

「そりゃ、盗賊目指してるんだから当然だね。冒険家はみんなこれくらい出来るんじゃない？ 手に職ないと旅先で困るしさ」

成る程、そういうもんなのかーと顔を上げると、アクセルが売り物の剣をジャグリングしていた。それを見たアリアが目をきらきらさせている。アクセルの華麗な剣さばきに人々も足を止め拍手を送っていた。

いつの間にあいつはあんな事を始めたんだ……。俺の周りには器用な奴が多いなあ。リリアも料理できるし。

「アクセル、落として壊すなよー」

「こわさねーよ！ こう見えても、サーカスでバイトしてた事もあるんだぜ？ よっ！」

無数の剣を空中で回転させながら大地に立てた自分のサーベルの上に片足で乗ってみせる。剣は地面に刺さっているわけではなく、レングの大地の上で不安定にぐらぐらと揺れていた。

他の場所でもこうしたパフォーマンスは所々で見えたが、まさか自分の連れが突然やり出すとは思わなかった。しかしそれはちよつとしたもので、アリアはとても楽しそうだった。

「……あのニーチャン、前々から思ってたけど何者なの？」

「俺にもわからん……。ロリコンでシスコンってことくらいしか……」

「アクセル、すごい！　ねえねえ、もっと何かやってよ！」

「うーん、そうだなあ……。道具も場所もないしなー……。あー、どうもどうも」

人々の歓声に応えるアクセル。それを店先で見守っていると、作業を終えたブレイドがアクセルに詰め寄った。

「店の前で大道芸するなよニーチャン！　客入らないだろ！？」

「客は入らないけど、観客が小銭くれるぜ？」

「そうよ！　アクセルはアリアのためにやってくれてるんだから。そういうならブレイドが代わりに何かやって楽しませなさいよ」

アリアに言われ、ブレイドは腕を組んで考え込む。しばらくして両手に剣を取り出し、アクセル同様ジャグリングしてみせた。

「それさっき見たけど」

「うるっさいなあ！　他に思いつかないんだよー！」

「結局ブレイド君もやってんじやーん」

三人がそんなこんなで騒いでいるのでリングを取りに来た客に品物を渡し、代金を受け取る。三人は最早出店の事はどうでもいいのか、

熱くなって大道芸を繰り広げていた。

というか、俺はこんな事をしている場合ではなかったんじゃ……。そうだ、アイオーンを探さなきゃいけないし、レンともどこかで会わないといけない。しかしさっきリリアにボコボコにされたばかりだし、あんまり動きたくないのも事実だ。

まあ、そんな事も言っていられない。この場合はアクセルとブレイドに任せて俺はこっそり退散する事にしよう。人だかりを掻い潜り、学園の周辺を歩き回る。確かアイオーンは校内には居なかったはずとなれば、居るのは町のほうか……。

街へと続く下り坂を歩いていると、一人で出店を眺めているメリーベルの姿が見えた。何をしているのかと思って視線を送っていると気づいたのか振り返り、彼女は俺に歩み寄る。

「こんにちは、ナツル」

「何だ、お前にも学園祭の日は外に出ようなんて気持ちがあるんだな？」

「そうじゃない。ただ、薬の材料が切れたから買出しに來ただけ。今はそのついで」

まあそんなことだろうとは思ったが、メリーベルが手にしている紙袋には怪しげな店のロゴが刻まれている。他に何も持っていないのだから、本当に何も買っていないのだろう。

学園祭という誰もが楽しく行き交う今のシャングリラの中、メリーベルの周りだけ空気が停滞しているような、冷たいような感覚を覚える。それは彼女が人波を眺めながら全く楽しそうではないからなのかも知れない。

「そつえば、試合はどうだったの？ 殺されるゝとか騒いでたけ

ど」

「ああ。結局ゲルトが手伝ってくれて一命は取り留めたよ。見ての通り怪我はしたけどね」

「……はあ。ゲルトはまだ無理出来ない身体なんだから、気を使つてよ？」

「わかつてるよ、反省してる。でも仕方ないだろ？ 他に一緒に出てくれる奴なんて俺には居なかったんだからさ」

俺の言葉にメリーベルは腕を組み、首を横に振る。ウェイブのかかった前髪の合間、困ったような瞳で笑顔を見せた。

「あたし、出ても良かったのに」

「んっ？ なんだ、嫌がると思ったんだけど……。そうだな、メリーベルにしておけばよかった」

「うん、そのほうがよかったですね」

二人で笑いあう。店の前で立ち話もなんなんぞ移動し、いつもより人の多い公園の隅に陣取った。公園に出ている店で飲み物を購入し、メリーベルに持って行った。

「ナツル、一人なの？」

「今はな。さっきまでブレイドとアクセルも一緒だったけど、奴ら大道芸はじめやがってさ。わけわかんないから逃げてきた」

そんなこんなで今までの事を語るとメリーベルは特に何も言わずに頷いて聞いてくれた。そうして話し終わると話す事も無くなり、自然と沈黙が訪れる。

空白の時間の中、メリーベルは飲み物を口にしながら木に背を預けて噴水の飛沫を眺めていた。しばらくすると思い出したように声をあげる。

「そういえば、学園祭中に借りは返すって言ってた」

「ああ、そうだったな。ミスコンの件だろ？ ミスコンそのものは明日だからさ。で、どうする？ 何か欲しいものとか……」

「あれば自分で作るのがあたしなんだけど」

言われて見れば確かにそうだ。欲しいものがあれば自分でどうにかしてしまうのがメリーベルだ。物作りに関しては普通ではない腕前の錬金術師なのは俺だってわかってる。

しかし、メリーベルに返せるものなんて俺は持つてるんだろうか？ いつも手を貸してもらえばかりでしてやれることなんて何もない。

「……メリーベルはすごいよな」

俺の突然の呟きに彼女は首を傾げる。まあ確かにそうなるだろうが、それは俺の本音だった。

「メリーベルは、なんていうか……目標もはっきりしてて、その為に毎日努力してる。グリーヴァと対峙した時も、お前は冷静だった……。同じ年くらいのはずなのに、お前が時々すごく大人に見えるよ」

「別にそんな事はない。やらなければ生きていけないから、やるだけ。時間があるから、覚悟するだけ。そんなに難しい事じゃない」

「でも、俺はそれが出来なくて……まだずっとそれを引き摺ってる。どうすればいいかなんてわかってても出来ないし、覚悟も決まらなかった。全部終わってしまった今でも、取り返しが付かないか諦められなくてもがいてる」

「……それは、いつだったか話していた、妹さんの事？」

頷く。そう、俺は自覚しているんだ。自分が中途半端な奴なんだって事を。

結局昔何も出来なかったから今もがいてる。その今でもどうしたらいいのか時々判らなくなつて判断が出来なくなる。覚悟が決まらなくなる。

リリアを止める時も、ゲルトとわかりあう時も、フェンリルと対峙した時も、女王に救世主と呼ばれた時も、俺はただ流されていただけだ。そういう風に勝手になったに過ぎない。自分で選んで掴み取つたわけじゃない。

原書なんてわけのわからない目先だけしか見えない未来図に翻弄されてそれが嫌だからと言つて慌てふためいて……何も出来なくて。結局変わつてない。俺はまだ、この世界に足を踏み入れた時から、成長なんてしてないんだと思う。

だからメリーベルの事がすごいと思うのは当然の事だと思った。彼女みたくに覚悟して生きられたなら……俺ももう少し変われるんだろうか。

遠くを眺める俺の肩に手を乗せ、メリーベルは肩を寄せて笑った。その仕草の意味が判らずに動じる俺に、彼女は囁く。

「あたしはただ……諦めているだけ。本当にすごいのは、皆の方。

諦めないで毎日生きる事に精一杯で……。この短い時間の中で、色々なものを教わった」

一生懸命に生きて、一生懸命にもがいて。そうして擦れ違ったり刃を交えたりしながらも、フラフラしたバランスの上で俺たちは歩いてきた。訳の判らない戦いや、世界にある宿命に流されつつも、それでも出来るだけ悲しまなくて済むようにと選んできたつもりだ。その日々一つ一つ全てが正解だったとは言えないけれど、それでも懸命に挑んだ過去に揺るぎはない。その事実を俺はこの世界に来て知った。何かを変えたいと必死で歩めば、その足取りは確かなものになる。

「いつか死ぬんだから、出来るだけやろう。もうだめだから、駄目になる時まで何かしていよう……。ただ、それだけ。本当は自分がいつ死ぬのかもわからなくて、そんな現実が怖くて目を背けているだけ。自分自身の悲しみから、ただ目を反らしているだけ」

「……メリーベル」

「でも、皆は違う。みんな、擦れ違って間違っ……でも、前に進もうとしてる。もう駄目だなんて思っ……一生懸命魔女の宿命に逆らおうとしているゲルトを見て、最近は自分が情けなくなるくらい」

俯き、苦笑を浮かべるメリーベル。その仕草は初めて彼女と会った時から考えられない。あのときの本当の意味で何を考えているのかわからなかった少女とは、多分もう違うのだと思う。

リアの明るさやひたむきさ、ゲルトの悲しみやそれに立ち向かう想い。それぞれが抱える明日への夢や希望。そういう物と触れ合っ……て、知ったのだろう。いや、思い出した　という方が正解に近い

か。

「ああ、まだ自分は生きたいし諦めたくないんだ。そう思った途端、怖くて仕方が無くなった……。ゲルトに事実を伝える度に、自分にそれを言い聞かせている気がした。本当はずっと怖くて、どうしてこんな目に合わなきゃならないのかって嘆いてた」

自分の身体を抱きしめるようにしてメリーベルは目を細める。青空の下、木漏れ日に包まれて影を落とした彼女は顔を上げ、俺を見つめる。

「だから、別にナツルとかわからないよ。あたしだって怖い。あたしだってどうにかしたい。しなきゃいけないって思う。それで迷って自分にウソついてる。そういうのみんな一緒に、誰かが優れているわけじゃない。だから……」

「……そうだな。だから、皆で迷いながら何とかしていこう。仲間、なんだからさ」

頷くメリーベル。俺は嬉しくなって思わず笑ってしまった。その様子が不満なのか、彼女は俺をじっと見詰めて眉を潜める。

「どうして笑うの？」

「いやっ、ごめん！　なんかメリーベル、最近人間らしくなってきたというか……。嬉しいんだよ、そういう話を聞かせてくれるのが」

「人間なら悩みや苦しみの一つや二つはある」

「そういうことじゃなくて。俺に言ってくれてるって事が嬉しいんだ。

ゲルトは言ってた。俺の前でなら、メリーベルは素直な気持ちで居られるんだろう、って。その時はそうなんだ、くらいにしか思わなかったけど、でも……そうだな。今は嬉しいって感じる」

「……」

多分それは、俺が彼女の事を大切に思っているから。自分と似ている心を抱えた彼女を救えたのなら、俺は過去の自分さえ救えるからかもしれない。

そんな風に自分を救うプロセスとして傍にるのは間違いないのかも。でも俺はそれでも逃げちゃいけないんだ。誰かの心と、その想いから。

「いつか、聞かせてほしい。どうしてお前がそんな身体になったのか……。そしたら、手伝わせて欲しい。それで借りはチャラってことで」

メリーベルは片方の手を腰にあて、空いた手で俺の肩を小突いた。コートをためかせ、一歩前に出て彼女は振り返らずに言う。

「カッコつけすぎだよ、バカ」

自分でもそう思っていたところなので思わず笑ってしまった。しかし彼女は少しだけ振り返り、笑ってくれていたのだと想う。

「でも、悪くないね。救世主と悪の錬金術師を追う、っていうのもさ」

「ああ。上出来なシチュエーションだろ？」

「ナマイキ」

そう言つて彼女は後ろに手を振りつつ去つて行つた。それを見送り、空を見上げる。いつまでもここにいるわけには行かない。まだやる事は山積みなのだ。

歩き出し、公園を出ようとした時だった。正面からリリアが走つてくるのが見えた。明らかに俺を指している様子で、大きく跳躍して一気に俺の目の前に飛んで来る。

「師匠！！ ゲルトちゃんがっ！！」

「ゲルトがどうした？」

「ゲルトちゃんがなんかそのあの…… 兎に角やばいんです！！ 一緒に来てください！！」

「え？ どこに…… のわあっ！？」

リリアに腕をつかまれ、物凄い勢いで空中にぶん投げられた。慌てふためいている俺に自身も跳躍して追いついたリリアは俺をお姫様だっこしながら学園の壁を跳躍して超え、闘技場に向かっていく。抱きかかえられたままで周囲の目に晒されるといふなんとも恐ろしい罰ゲーム……。必死でリリアに抵抗するが、相当魔力が籠っているのか全く跳ね除ける事が出来ない。全力でやれば突破できそうだが、そんなことのために魔力全開というのもまたバカらしい……。そうして闘技場の中に入り、幾つか存在する選手控え室の一室の前に立たされる俺。そこは見れば先ほど俺が使っていた控え室ではないか。ああ、まあゲルトが居るとしたらここなんだろうが。

「兎に角大変なんです！ なんか、なつるさんと呼んで欲しいって

言われて……」

「わかった。まあ入ってみるか……って、うおっ!？」

入った直後流石の俺も度肝を抜かれた。恐らくリリアが放ったのであるう、拘束系魔法の鎖がゲルトの両手を縛り付けていた。地面に強引に締め付けられるような状態で固定されているゲルトを見てリリアに視線を送る。

「うう、こうしてほしいって本人がいうんだもん……うああああん、ゲルトちゃん!!」

「ゲルト、どうしたんだ!? 何があった!？」

「う。ナツ、ル……」

顔を上げたゲルトは汗びっしょりだった。呼吸を乱し、肩を上下させながら目の前で苦しげに悶えている。

その様子はちよつと只事ではない。振り返ってリリアを見たが、彼女は首を横に振った。

「回復魔法じゃ直らなくて……。うう、師匠……。ゲルトちゃん大丈夫ですよ? 大丈夫ですよー!？」

「ゲルト、どうすればいいのかメリーベルに聞いてるか!？」

ゲルトは苦しげに頷き、それから目を潤ませ物欲しそうな目で俺を見つめた。

「貴方の、血を分けて貰えれば……」

「血？ ああ、そうか……さっき技なんて使うから魔力を消費しすぎたんだ……」

減らしてしまった分補充しないと、身体がもたないんだろう。必然的に衝動に駆られ　だからメリーベルは駄目だと言っていたのか。くそ、本当にバカな事をしてしまった。ゲルトの身体が不安定である事は自分でもわかっていたのに。

誰彼構わず襲ってしまいそうな今の自分の状況を把握して、リリアを襲う前に自分を拘束させたんだ。苦しいのは自分なのに、リリアの事を案じて　いや、違うな。

「リリア、ちょっと席を外してくれるか？」

「え？　ど、どうして……？」

「ちょっとお前にはショッキングな映像なんだよ。それにゲルトはお前に見られたくないんだ……自分のそういう姿を」

だから魔力の源泉であるリリアに頼らず、その無様な姿を晒したくなくて俺を呼ばせた。少なくとも俺はそう判断した。リリアは一先ず納得して部屋を出てくれた。準備を整え、ゲルトのフレグランスの刃で自分の手の平を切り裂く。

そういえば以前、ゲルトにこの魔剣で手を切られた事があった。なんて事を思い出しながら自らの手から零れ落ちる血を眺めていた。

どれくらい与えればいいのか？　どう与えるべきなのか？　考えている間にゲルトは泣きそうな顔でじっと血だけを見つめている。

「……か、噛み付くなよ？」

「努力、します……。もう、いいでしょう？ 早く下さい……！
我慢、出来ないんです……。！！ 貴方を殺してしまうっ！！ 早く
っ……！」

余りにも悲痛な声に手を差し出すと、鎖につながれたままゲルトは
正にむしゃぶりつくとしか表現出来ないような勢いで舌を伸ばして
血を舐め始めた。その様子は正に魔物そのものであり、普段の気高
い彼女の態度からは想像も出来ないほど猥褻みている。

身体を震わせ、喉を鳴らして血液を飲み込むゲルト。すぐに血は乾
いてう。枯渇した傷口を舐めながら。ゲルトは前髪の合間、泣きな
がら俺を見つめていた。

「足りない……。！ ねえ、もっと……。もっとください……。お願い
だから、もっと……」

見ていられなかった。目を閉じたくなるのを我慢して反対側の手を
切る。そうしてまたゲルトに血を舐めさせる作業を続ける。それは
俺にとってはまさに作業だった。そう、ゲルト・シュヴァインに、
『餌』を与えるという。

「はあ……。っ、はあ……。っ！ は あっ、う……。！！！」

そうして血を舐めていたゲルトが突然身を乗り出し、目前にまで迫
る。目と鼻の先、正に吐息のかかる距離で鎖に停止させられた彼女は
鋭い眼差しで俺を見つめ、歯軋りしながら鎖を引く。その迫力に
負けて思わず後退する。

「うっつ……！ うあああ……！！ ああああああああああ……！！
！！！！！！」

鎖を乱暴に引き、拘束から外れようとするゲルト。今にも俺に襲い掛かりそうなその少女をこれ以上見ていたくなくて、俺はその身体を強く抱きしめた。

暴れてしまわないように、その衝動が少しでも制御できるように。全身に魔力を込め、鎖に巻かれたゲルトを強く抱く。ゲルトは腕の中で暴れながら、そうして涙を流しながら……。そう、プライドの高い彼女が、獣のように他人を食べたがるというその辛すぎる事実を受け入れる事は決して容易ではない。打ちのめされているのは俺だけではないのだ。

リリアに見せたくない　そう思って当然だ。ゲルトは子供のよう
に泣きじゃくりながら腕の中で叫んでいた。俺はただ目を閉じ、その身体を抑え付ける。

「放してっ！！　もっと……いいでしょう！？　首を刎ねるくらい
っ！！　それで我慢するから……ねえ、死んでよナツルッ！！　ナ
ツル　　ッッ！！！！」

ヒステリックな叫び声。ゲルトは換わって行く。人間から遠ざかっていく。でもそれは彼女が悪いわけではない。じゃあ誰が悪いのか。救えなかった俺なのか。何も出来なかったのは俺だ。そう、だからこんな彼女を見なければいけないのも、自分のせいなのだ。　。
そうしてずっと泣きじゃくるゲルトの傍に居た。その悲鳴が止むま
では時間がかかり……。その時の事は、自分でもあまり思い返した
くない。

ゲルトが遠くなっていくのを、一番近くで見せ付けられるような気がしたから　　。

邂逅する運命の日（2）

日が暮れて夜になっても、気持ちはざわついたまま落ち着く気配もない。

学園祭の夜は明るかった。中庭に多く配置されたベンチの一つに腰掛けていても、近くを沢山の人が通って行く。その誰もが楽しそうなのに、自分は全く楽しくない事がちよつとしたイレギュラーに感じられた。

夕暮れの街。今から数時間前の事だ。ゲルトの枯渴衝動の悲惨さを目の当たりにした俺は、餌を与えるという作業が終わった後も半ば放心状態にあった。

大人しくなつて気を失ったゲルトは口から涎を垂らしながら汗だくの顔でぐったりと鎖にぶら下がっていて、部屋の外にリリアを呼びに行くと、そこにはメリーベルが立っていた。どうやらリリアが呼んで来てくれていたらしく、俺は力なく道を譲り、彼女に後の事を任せて部屋を出た。

廊下に出て壁に背を預け、ずるずるとその場に座り込む。リリアは俺の前に立ち、小さな声で言った。

「……どうしてあんな事に」

俺は答えなかった。魔女化の影響があることくらいわかってた。でも、今まで全然そんな兆候はなかったじゃないか。

たまに血は上げていたけど、ゲルトは普通だった。つい昼間には一緒に戦って、リリアと手をつないで笑っていたじゃないか。それがどうしてこうなるんだ？ そんなの、俺が聞きたいくらいだ。

わかってたのに、理解していなかった。ヤバいつてわかってたのに、樂觀視していた。ここまでじゃない、それほどじゃない。メリーベ

ルは普通だったからその苦しみも堪えられる程度なのだと思うていた。思いたかった。

でも現実は今俺の目の前に横たわり、気高い勇者を血に貶める。鎖につながれた獣のような姿は今の彼女にはよく似合い、そしてそれを受け入れたくない自分が居る。

「……俺のせい、なのか」

呟きにリリアが眉を潜める。息を呑む。そう、ゲルトはあそこで死ぬはずだったんだ。俺が、あそこに居なければ。

魔物の呪いを飲み干して、しかしそれは身体に適応する前にゲルトの身体を破壊してその命の火は完全に燃え尽きる事になる。そのはずだった。でも、そこに俺は居た。居てしまった。自分の血という、彼女にとっては喉から手が出るほど欲しい物を……命の対価そのものを持つ俺が、それを安易な考えで与えてしまった。

彼女は俺の願いどおりに命を永らえた。しかし命の尊厳は失ってしまったのだ。同時にかけ離れたその二つは俺の手の中で揺らぎ、自分でも何を掴めばいいのかさえ判らない。

魔性の存在に身を竄してまで、ゲルトは生きたいと願っていたのか？ 救いたいなどという安易な考えが呼んだ結末が今。あのまま俺が余計な事をせず、『死なせてあげていれば』良かったのではないか。そんな風にさえ思える。

そう、これから一生あの呪いと向き合って生きて行くというのか。それは……それは、あんまりだ。あんまりにも辛い。俺はそれに、耐え切れるのだろうか。他人の命を救い、生きながらえさせたという事の意味を。

メリーベルはあの時迷っていた。命を一時的に救うことは出来る、しかし。そこから先の言葉を俺は聞かなかった。きつと彼女も俺と同じく樂觀視していたのだろう。彼女にいたってはそれも仕方ないことだ。自分という前例があり、それと長年向き合ってきた。

だから、ゲルトも同じ程度だろうと思っても仕方がない。

俺は何の経験もなく、知識もなく、ただその時救いたいというだけで彼女の尊厳に血を落とした。その一滴がその身体を汚し、プライドを砕いていく事に気づきもしなま。

「……………なつるさん……………」

「俺は、ゲルトを助けたかった……………ただそれだけだった。でも……………そうじゃなかったのか……………」

アイオーンは言った。そんな甘さを許してくれるほど、この世界は優しくはないのだと。

それは俺に対する警告だったのだ。そう、俺の行いは 安易過ぎる。他人を救う？ それがどれだけ難しいことかも判らないまま、この世界に骨を埋める気もない子供の俺が ？

全てを救う事は出来ない。何かを手に取りれば何かを零してしまう。そんな事はわかっていたつもりだった。でも 。

ゆつくりと顔を上げる。リリアは悲しげな表情で俺を見下ろしていた。リリアに心配されているようじゃ、どうしようもない。本当にどうしようも。

「手間をかけさせたな……………。戦いに誘ったのも、安易にあいつに血を与えたのも俺だ。全部今回は…………俺が引き起こした事だ」

「……………」

「恨んでくれて、いい…………。本当に…………悪かったと思ってる」

「それは違うんです、師匠。そうじゃないんです、師匠は……………」

リリアはそう呟いた。その言葉の意味は良くわからなかったが、遮るようにしてメリーベルが扉を開いたことで自然とその続きは俺の意識から消えてしまった。

部屋に入ると鎖から解放されたゲルトがソファの上に寝かされていた。リリアが俺たちを押しつけて駆け寄り、ゲルトの手を取って祈るように頬を寄せる。

俺の隣に立ったメリーベルは溜息を漏らし、前髪をかきあげながら言った。

「……予想以上に適応力が高い。甘く見ていた……。これはもう……勇者として、絶望的過ぎる欠陥と言える」

「そんな……。うそだろ？　じゃあもうゲルトは勇者になれないっていつのか!？」

「……勇者は、ヨト信仰の洗礼を受けた神に選ばれし戦士。教会と女王からの任命を受けねばならない。でも、教会は異端を徹底的に排除する組織……。魔物を宿した魔女である事が発覚すれば、その場で首を落とされる」

余りにも悲惨な事実にも声も出なかった。いや、気づくべきだった……。血を飲ませた時に覚悟すべきだったんだ。どちらにせよ俺は、この子を殺すことになるんだと。その人生を、壊す事になるんだということを。

「ゲルトは様態も良かったし、無理さえしなければ日常生活に支障はない……。戦闘に関しても、魔力を使いすぎない限りは問題ないはずだった」

「じゃあ、使いすぎだったんじゃないか？　必殺技を一応使ったわ

けだし……」

「ゲルトの魔力総量の何割まで消耗すればこうなるのかはわからないけど、多分、二、三割消耗すれば抑え切れなくなる……。そもそも、必殺技を一度も放てない勇者に存在意義があると思う？」

「それは　っ」

「あのっ！！　だったら、教会で洗礼を受ければいいじゃないですかっ！！」

「リアの発言は尤もな事だった。そう、全ての魔を掃う聖剣リインフォース。それを生み出したのは教会であり、同じ洗礼技術を施せば、ゲルトの呪いだって……」

「全て説明すると難解だから簡単に説明するけど、魔物の呪いというのは身体そのものに癒着するものなの。そうしていくうちに人間の身体そのものと置き換わって行く。たとえ魔物だけを浄化する聖剣による攻撃や洗礼儀礼を受けたとしても、魔物化した肉体の大部分は蒸発し、生存に致命的な欠陥を被る」

「……死ぬ、って事……ですか？」

「……それで解決するなら直ぐにリアに斬らせてる。でもそうじゃない。それに仮に教会であたしの知らない儀式や術式があったとしても　救うと思う？　あの大聖堂聖騎士団が、呪われた勇者なんかを」

その事実を口にするメリーベル自身も辛いのだ。言い返すことはただの八つ当たりには過ぎないことはわかっていた。

だから、黙り込む。三人して沈黙する。何とかこのまま騙し騙しやっていけると思っていた。そんな希望を抱いていた。でも、そうじゃない。そうじゃなかったんだ。

「今回の様子を見てみると、まだ身体に完全に魔物が定着してないんだと思う。だから肉体が摩り替わって行くのに多大な魔力を消耗し、より多量の食事を欲する事になる」

「魔力を消耗すれば、魔女化を促進していくって事か？」

「そうなれば最終的に、ゲルト・シュヴァインという人間の概念が消えてなくなつて……『ゲルトの姿をした何か』に成り果てる」

最悪のイメージが現実になった。それも、それは俺たちが考えていたよりもずっとずっとずっと凄まじい速度で発展し、恐ろしい速さで迫っている。

ゲルトがゲルトではなくなってしまう。そんなのって、アリか？ そんな事になるなら、救つたって意味がないじゃないか。っ！！

俺よりもショックを受けていたのはリリアだった。その場にかくりと膝を着き、呆然と虚空を眺めている。そんな姿にメリーベルは首を横に振った。

「……この世界に、魔物の呪いを研究する学術書は存在しないの。そうなった人間は殺すのが基本……。ほうっておけば魔物になる。だから、判らないことの方が圧倒的に多いの。まさかこんなに進行が早いタイプがあるなんて思わなかった……。あたしの判断ミス、ね」

違つとわかっているのにそう言えなかった。ただただ黙り続ける。

多分誰のせいでもないんだ。誰にもよく判らないし、誰にも相談できない。仲間内だけで解決しなければ教会にゲルトは殺されてしまう。でも、俺たちだけじゃどうしようもない。

八方塞の状況に思わず逃げ出したくなる。正面から見つめたら押しつぶされてしまいそうだった。リリアは、特に 物事を斜めに見られないから、重く押し掛かってくるその現実には壊れてしまいそうだった。

声を殺してその場に崩れたまま泣き出したリリアを何とかなだめ、彼女を寮まで送り届けた。リリアは心の底から打ちのめされたように涙を流していた。無理はない。だってようやく、二人は自分たちの夢に向かって手を取り合って歩き出そうとしていた矢先なのだから。

クロロにリリアを任せ、俺は夜の街に繰り出した。でも、もう何もする気が起きなかった。自暴自棄になっっているわけではないと思う。でも 何をすればいいのかわからない。

正しいと思っていた。それで救えると思っていた。でも、そうじゃなかったんだ。俺は自分のエゴで一人の人間の夢を、生きる意味を壊してしまった。それは、許されることなのか？

中庭のベンチに座って長い間そんな事を考え続けていた。どうしようもないくらい何も考えられない真っ白の頭の中、この世界での出来事が過ぎていく。

涙は流れなかった。でも、自分のしてしまった事に脅えていた。目を覚ましたゲルトになんていわれるだろう。どう、許してもらえばいいのだろうか？

何も考えられないまま、俯く。そんな狭い視界の中、誰かの靴が見えた。顔を上げたそこに立っていた黒いアーマークロークの勇者は魔剣も持たずに一人、夜の闇の中で俺を見つめていた。

「先ほどは、お見苦しい姿を晒してしまいました……。申し訳ありません」

「いや、そんな……。でも、もういいのか？」

「はい。さっき沢山血を貰いましたから……。調子はすごくいいんです」

隣に座ったゲルトはそう言って微笑んだ。俺は　どんな顔をしていただろう？　泣いていたのか？　怒っていたのか？　多分どれも正解じゃない。何も考えられず、ごちゃごちゃしたまま、無表情に頷いていたんだと思う。

ゲルトはそれから暫く黙り込んでいた。俺も何も言えなかった。謝らなきゃいけないのに、何も言えない……。謝って済むことじゃないから。

それなのにゲルトは当たり前のように俺の手を握り締め、肩を寄せ、恥ずかしそうに苦笑していた。その香りにも体温にも、嫌というほど先ほど触れたはずなのに、その感触はきつと、全然違っていた。

「あの……。そんな顔をしないでください。こっちまで気が滅入ってしまっじゃないですか」

「……そうだな。ごめん」

「いえ、そうではなくて……。ああ、もう！　だから、そんなに気にしないでください。別にわたしは、気にしてないんですから」

「　　気にするな？　そんなのは無理だ……。っ」

俺は首を横に振り、立ち上がっていた。腕を振るい、歯を食いしばって目を閉じる。

「俺の所為で君をそんな身体にしてしまった……ッ！！ 君を救いたかったのに、俺はただ君の人生を殺してしまったただけだっ！！ 何もしちゃいない、自己満足でただ救った気になって悦に浸っていただけ……！！ 気にするな？ そんなのは無理だっ！！ ゲルトだっでそうだろう！？」

「……ナツル」

「なんでそうやって普通みたいな態度を取るんだよっ！！ 何で気を使っただよ！？ 俺は……っ！ 俺は、君に許されていい人間じゃないんだ……」

肩を落とす。何で俺はゲルトに当たってるんだ？ 馬鹿馬鹿しすぎて泣けてきた。大声を出した所為で滅茶苦茶人に見られているし、ああ、本当に恥ずかしい。

でも、そんなのを気に出来るほど余裕はなかった。それなのにゲルトは俺の手を握り締め、強く強引に引っ張るのだ。

「一緒に来てください。ここでは、人目がありませんから」

逆らう事も出来ずにただついて行く。言われるがままに辿り着いたのは、学園の屋上だった。わざわざこの一番盛り上がっている時にこんな所に来るやつは居なくて、普段から基本的に人の出入りが禁じられている事もあり、見事二人だけの空間が成立した。

ここならみっともなく取り乱しても、俺を罵倒しても誰の目にも着かない。ゲルトは俺に文句を言うためにここまでつれてきたのだと

思っていた。でも彼女は一向にそんな事をする気配も見せず、ただシャングリラの町を眺めるばかり。

「ゲルト……？」

その沈黙に耐え切れずせがむような声を上げると、ゲルトは真剣な表情で俺をじっと見つめ、それから先ほど切ってしまった俺の手を取り、目を細めた。

「わたしは貴方に感謝しています。生き延びる事が出来たのも、こうして自分がいるのも、貴方のお陰なのですから」

「そんなこと……」

「貴方がわたしの事で思い悩み、苦しむ事をわたしは望んでいません。さつき、リリアにも説明してきました。わたしは、まだ勇者を諦めるつもりはありませんから」

真っ直ぐな笑顔で、強気な表情で。いつもどおりのゲルト・シュヴァインで彼女は語る。俺はそれが信じられなかった。今までの彼女からすれば、異常なくらいの 前向きさ。

「正直、この身体の事で思い悩んでいるというのは事実です。でもだからといって全てを諦めたわけではない……。わたしはわたしの魂にかけて誓ったのです。彼女と共にあり、背を預けられる騎士になると。その夢は、こんなことで諦められるほど容易い輝きを放つものではないから」

「……ゲルト」

「だから、そんな顔をしないでください。むしろ、貴方に縋らなければならぬのはわたしの方だから……。謝らなければならぬのは、わたしの方です」

「そんな事はないっ！！ 全然いいんだ、そんなのは！ 俺が君をそんな身体にしまった……だから、君の面倒を見るのは当たり前なんだ。そんなの、当然過ぎる」

ゲルトは照れくさそうにあさつての方向を向きながら頷いた。俺もなんだか気恥ずかしくなつて視線を反らした。

どうして、ゲルトは諦めないんだろう。諦めないでいられるその理由はきつとりリアの姿を見て、そして俺たち仲間と言葉を交わしたからなのだと思う。その答えに辿り着いたとしても、それでもゲルトは頑張っている。必死で自分を変えようと努力し、この状況を打開する見えない希望を探し続けている。

それは荒野でダイヤを探すよりも難しい事。そのたった一粒の輝く希望の欠片を探す旅路を、少女は自ら選択したのだ。

「貴方には失礼な事も沢山言つてしまいましたね……。でも、あれは、その……」

「ああ、いいんだよ。いいんだ。ゲルトの気持ちは俺が受け止める。どんな気持ちも、無理しないで吐き出していい。欲しがって良いんだ。それに応えるくらいしなきゃ、救世主なんて名乗れない」

そうだ、救わなければならぬのはこれからじゃないか。誰かを救える者になりたいなら、絶望的な世界の中で希望を探していかなければ。

じゃなきゃ嘘だ。そんなのは救世主じゃない。俺は別にこの世界を救いたいわけじゃない。でも、手の届く場所くらいは守りたい。守

れるものなら、その全てを。

だから諦めちゃいけないんだ。こんなところでへこたれているわけにはいかないんだ。ゲルトが頑張るっていうのなら、俺はそれを全力で応援しなければならぬ。それが命を救って業を背負わせた俺が果たせる責任なのだから。

「……ありがとうゲルト。本当に、折れそうだった……。君は優しい女の子だな。心配してあげなきゃいけないのは、俺の方なのに……」

「べ、べつに貴方のためではありません。ただ、自分の所為で周りが傷つくのが嫌なだけです」

腕を組んでそんな事を言う少女を俺は心から助けたいと思った。ああ、それでいいのだろう。一度通すと決めた無茶なら、こんな所で挫折なんて笑えない。

「誓うよ。俺は君を汚し続ける。そんな君を受け入れる。君のために出来る努力を惜しまずする。君を救う。その未来を見つ出せるまで」

自分の罪なら背負う。それを見ていてくれるのなら誇る事さえ可能だろう。ならばこのまま生きていこう。この世界で、希望を見出せるまで。

手を差し伸べる。握手のつもりだったその手を取り、ゲルトは何故か口付けをした。そうして自らの胸に手をあて、跪く。

「契約を交わしましょう、ナツル。貴方がわたしの命を永らえさせるのであれば、わたしは貴方のために力を惜しまない。貴方がわたしを受け入れ、その為出来る努力を惜しまないのならば、わたし

も同じ事を貴方に誓う」

「……ゲルト」

「わたしたちは共犯者です、ナツル。教会にも、学園にも、誰にも
そう、仲間さえ裏切つてでも、この罪を背負つて行く。共に悪
鬼羅刹の旅路に行くには少々心許ないですが、一人であるよりは幾
許かましでしょう」

「……ああ、そうだな。その通りだ。嘘でもいい、貫き通そう……。
なに、いつかホントにしちまえばいい。なあ、ゲルト・シュヴァイ
ン」

彼女がそうしたように俺もまた跪いて手に口付けをする。その白い
手を手繰り寄せ、小さな身体を思い切り抱きしめた。

ぐりぐりと頭を撫で、俺は多分泣いていた。笑いながら、泣いてい
た。ゲルトはどうだったろう？ 照れくさそうな顔で、ぶつくさ文
句を言いながら そうだな。

そう、多分きつと 彼女だって、泣いていた 。

「当面の目標は、リリアに迷惑をかけないことです」

屋上に膝を抱えて座ったゲルトはそんな事を呟いた。隣に座った俺
はただ町を眺め、その言葉に苦笑する。

「リリアにあんなみつともない姿は見せられませんから」

「なんだ？ 仲良し勇者になったんじゃないのか？」

「それとこれとは別です！ わたしには勇者としてのプライドがある！ 彼女にだけは、あんな……あんな、恥ずかしい姿は……う、うつつ……っ」

思い出してしまったのか、顔を真っ赤にしながら頭を抱えて蹲るゲルト。なんというか、時々大人っぽく見えても結局子供だな。

まあそんなのは俺も同じことだ。結局こうして誰かと手を取り合わなければ前にも進めない。でもだからこそ、大人になる前にやらなきゃならないことがある。

「リリアだって魔力は高いんだから、リリアから血を貰えばいいだろ？」

「だ、だだ、だめですっ！！ そんな、ふ、不埒な事は……っ！！」

「不埒って……。別にしょうがないだろ。じゃあ俺の血を飲むのは不埒じゃないのか？」

「……………！！！！」

「ああ、わかった、ごめんって……。あ、そういえば昔聞いたんだけど、血を飲むって言うのは性行為の暗喩らしいぞ」

「あ、貴方という人は　っ！！　本当に、どうしようも？」

言葉を遮るように、空に花火が鮮やかに咲き誇った。それらは次々に夜空に輝き、儚い一瞬に全てをかけて燃えて尽きて行く。感慨深くそれを眺めると、ゲルトは子供のように目を輝かせ、うつとりしながら呟いた。

「とても、きれい」

同意はしなかった。声をあげればこの綺麗な少女の横顔は消えてしまふ気がしたから。それはちよつと無粋だし、何より俺は　もう暫く見ていたい。

花火を瞳に写し込み、笑う少女の横顔を。俺が救う事が出来た、たった一つの命を。

勿論そんなことは言わなかった。言えばこの子は照れるだろうから。そんな事を考えながら苦笑を浮かべて時間を過ごした。

さて、翌日　。学園祭二日目。

「うつうつうつ……。ゲルトちゃんが……。ゲルトちゃんがうあうあ……。……」

と、わけのわからない事をぶつぶつ言いながら涙ぼろぼろ流しながら肩を落として歩くリリア。

学園祭二日目　。昼過ぎにはベルヴェールの設定したミスコンがある。その前にリリアの様子を見て置こうと思って顔を出したのだが、想像以上に酷い状態でリリアは部屋から出てきた。

泣きはらしたのか、というか、そもそもまだ泣いているんだが……。目は真っ赤になり、鼻水だらだらで身体をふるふる震わせながらのたた歩いている。時々盛大に転ぶ。転ぶと顔を地面につけたまま死んだかのようにピクリとも動かなくなる。

だんだん鬱陶しくなってきたので首根っ子を掴んで強引に引きずって行く。その間もリリアは『ゲルトちゃんが』といい続けていた。

「いい加減シャキッとしろ！　ゲルトは諦めてないって言ってたん

だろうが!!」

「でも……でも、ゲルトちゃんが可哀想で……うわああああんっ
!! この世界作った奴、出てこおおいっ!!」

ジタバタ暴れながらそんな事をほざく勇者。言えないよなあ、その
創造主の兄ですとも、その創造主はお前そっくりだよ、とも……。
リリアを引き摺ったまま歩いていると、校門あたりでゲルトの姿を
発見した。それに敏感に気づいたのか、突然立ち上がったリリアは
俺が首根っ子を掴んでいるにも関わらず、俺を引き摺って猛ダツシ
ユする。

「ゲルトちゃあああああんっ!!」

「リリア・ライトフィールド……ふぎゅっ!？」

そうしてリリアはゲルトを轢いてぶつとばした。校庭をゴロゴロ転
がって水路に落ちて行くゲルトを見送り、俺は啞然としていた。な
んか前にもこんなことあったような気が……。

「ああああ、ゲルトちゃんがっ!!」

「お前……もう少し加減を覚えろよ」

「ぶはあっ!! な、何をするんですか突然!? 貴方は手加減つ
てモノを知らないんですか!？」

俺と全く同じリアクションを取りながら戻ってくるゲルト。そのま
ま走ってきてリリアの頭に手刀を叩き込もうとしたが、リリアは右
手の人差し指と中指でそれをピタリと停止させ、泣きながらゲルト

に抱きついた。

「うわーん、ゲルトちゃんんっ!!」

「なな、なんですかいきなり!？」

「ゲルトちゃん、ゲルトちゃんゲルトちゃん、ゲルトちゃん~~~~んっ!!」

人だかりが出来てきた。引き摺られたせいで汚れたズボンの土を叩いて落しながら立ち上がり、泣きじゃくるリリアと困った様子でそれを見つめるゲルトを眺める。

うん、この二人は本当に仲いいなあ……。しみじみと思っていると、ゲルトが救いを求めて手を差し伸べてきた。

「た、助けてください! 共犯者でしょう!？」

「それとこれとは別だろ」

「ゲルトちゃん、リリアはゲルトちゃんの味方だよー!! ゲルトちゃんらぶらぶらぶ!! 愛してるからああああっ!!」

「何を言っ……、り、リリアちゃん!! もうやめてえええええっ!!」

完全に参った様子で人だかりの中で泣きそうになっているゲルト。そんな二人を眺めながらやっぱり将来が不安になってきた俺なのであった。

えーと……ミスコンに続く……。

邂逅する運命の日（3）

「ディアノイアの学園祭、か。ふん、つまんねえなオイ」

人ごみの中を歩く一人の少年の姿があった。ウェイブした金色の前髪の間、鋭い視線で世界を覗き見る。

その背後には彼が別に何を言うでもなく続く、白いタキシード姿の女性の姿があった。シルクハットンの影から覗く表情は笑顔を作り、少年は女を振り返り見て歩く。

「シロガネ、あっちの様子は判るか？」

「ええ、勿論わかりますともマスター。彼らつたらとても面白い事をしているようですわ。ワタクシも参加したいくらい」

「へえ。成る程成る程。そいつは 邪魔する甲斐もあるってことだ」

白い歯を見せて笑う少年の正面、彼らの行方を遮るように無数の執行者の姿が現れる。執行者は有無も言わず剣を構え、二人を取り囲んだ。

しかし二人は全く動じる事も無い。取り囲んだ執行者の一人が先走って少年に襲い掛かると、彼はその剣を素手で弾いて蹴りでカウンターを叩き込む。

首筋に直撃した一撃は執行者の首を押し折り、口から血の泡を吹きながら倒れるその頭蓋を踏みつけ少年は片手を翳して笑う。

「ハッ！ 大聖堂に伝えときな！ 雑魚を寄越しても死体を増

やすだけだつてな。ま　誰か一人でも生きて帰れたらの話だけだなあっ!!」

上着の下、太股にくくりつけたホルスターから抜き去ったのは巨大な銀色の拳銃だった。銃身に紋章を浮かべ、銀色の雷を生むそれを手に、少年は執行者に照準を合わせた。

街中でそんな騒動が起こっているとも知らない夏流はその頃学園の校庭に設置された特設ステージの前に立っていた。一応参加者という事で最前列でミスコンを観賞する事が出来たのだが、彼は今自らの位置にひたすら困惑していた。

背後には想像以上の観衆がぞろぞろと集まっていた。生徒だけではなく一般人まで、そして更には男女問わず人が集まっている事が勇者部隊の人気を物語っているのだが、まさかそこまでとは考えていなかった夏流にとって最前列の席で待たされるのは苦痛以外の何者でもなかった。

沢山の視線を受けながら夏流は絶える。隣に座ったブレイドとアリアがポップコーンを食べながらステージの幕が上がるのを待っている。夏流もまた、ポップコーンを片手に溜息を漏らした。

「うーん……そういえばアクセルの奴はどこに行ったんだか」

昨日の今日でこうしたイベントがあるのもどうかと思ったが、以前から決まっていた事でもあり仕方が無いとも考える。その気分は夏流以外も同じ事であったが、リリアは何とかゲルトがなだめ、メリーベルは気持ちを切り替えて望んでいる。自分もそんな彼女たちから逃げてはならないと考え、心して見る事を決意する夏流であった。

「アイオーンもベルヴェールも時間通りに来たしなあ……意外とみんな乗り気なんだろうか」

「見つけましたよ、アリア様……ッ！！　また一人でこんな所に抜け出して！！」

振り返ると背後の席との間を歩いてくるマルドゥークの姿があつた。逃げ出そうとするアリアを背後から捕獲し、席を飛び越えて俺たちの前に出てくる。

「ぎにゃー！　マルドゥークのばかー！！　変態ロリコン！！」

「誰が変態ロリコンですか！？　私はロリコンでは無くシスコンです！」

「いや、その発言もどうなのかと思うんだが……」

「ナツル、またお前か。まあアリア様の御身を守っていてくれたのだろうから、とやかくは言わんが……やれやれ、つくづく奇妙な縁だな」

私服のマルドゥークは眼鏡を指先で押し上げながら溜息を漏らした。アリアは昨晚ブレイドの部屋で夜を明かし、その間もマルドゥークは必死にアリアを探していたのである。一晩中走り回った後だから、グッタリした様子で夏流の隣に腰掛ける。

「ふう……。全く、護衛も着けずにシャングリラまで来るとはどういうおつもりですか？」

「だってえ……。護衛とかついてると、ゼーんぜん楽しくないんだもん。どこに行くにも危ないって言われるしさ」

「当然です。このような人の多い場所に安全な場所など存在しませ

ん

「うっうっ！　　ばか！　マルドゥークのシスコンー！」

「シスコンの何が悪いというのですか！」

「だから、堂々と胸を張って言うことじゃないんじゃないか」

そうして騒ぐアリアたちの様子を遠目に眺める騎士たちの姿があった。その先頭に立つ私服のエアリオが片手を上げると騎士たちは頷き無言で去っていく。せつかくの学園祭なのだから、少しくらいは遊ばせて上げたいというエアリオの計らいであった。

その後、アリアの元に近づくとアリアはマルドゥークの手を離れエアリオに飛びついた。笑顔でその頭を撫でる姉の姿に弟は肩を落とす。

「姉上……。あまりアリア様を甘やかさないでください」

「あらあら、いいじゃない？　たまにしか城の外には出られないんだもの。それに、お姉さんとマルドゥーク、それに救世主ちゃんがいれば、護衛としては充分すぎるでしょう？」

「それは……確かにそうですが」

アリアを膝の上に乗せて座るエアリオ。夏流とブレイドは彼女と挨拶を交わした。

「こんにちは、夏流ちゃん。それで、これはどんなイベントなのかしら？」

「えーと……ミスコン……水着審査アリの……」

「あらあらまあまあ？　とっても楽しそうね。お姉さんも参加しちゃおうかしら？」

「そんな破廉恥な真似はさせませんよ姉上！！　貴方なら、うっかり水着がポロリする可能性が高い！！」

「もー、マルドゥークったら心配性ねえ。そんなことしないわよ」
しかしその言い訳には何一つ信憑性が無い事をその場の誰もが気づいていた。無言で話をスルーしていると、ようやくステージの幕があがろうとしていた。

邂逅する運命の日（3）

『さあ~~~~~やって参りました！！　ミス・ブレイブ克蘭コンテスト！！　実況はこんな時しか出番の無いマイクでお送りいたしますー！』

歓声の中、俺は一人でポップコーンを齧りながらドキドキしていた。それは別に水着を想像して待ちきれずに興奮しているのではなく……そう、この企画そのものの安否を案じているのである……。俺の知る限り、うちのパーティーには普通の女の子というやつが一人として存在しない。全員どこかおかしいというか、集団行動に適さないやつばかりなのだ。

集めてしまったのは俺なので最後まで見届ける責任はあるとは思いますが、あの面子がミスコンなんてマトモに出来るとは思えない……。

頼むから勇者部隊の醜態を晒すような事にはしないでくれ！。

『さてお集まりの皆さんは既に勇者部隊、ブレイブ克蘭についてはご存知の事でしょう！ 女王から救世主と呼ばれた男、本城夏流率いるエリート学生部隊、それがブレイブ克蘭！ 先のオルヴェンブルム攻防戦では先陣を切り他の生徒を導き魔物を撃退する大活躍を見せ、校内でも密かに人気が沸騰しつつある特殊部隊です！！』

そうだったの？

『さて、美しい女性が揃っていることでも有名な勇者部隊に今回はあの『精霊狩り』、『龍殺し』、『不死身』、『死術使い』、『限界突破者』などなど、様々な通り名を持つ紅き魔術師、アイオーン・クロックも参戦している！！ これは一体どういうことなんですかね？ 解説のアクセル・スキッドさん』

思わず転びそうになった。顔を上げてステージを食い入るように見つめると、マイクの反対側には何故かアクセルが立っていた。胸元には『勇者部隊代表解説』というプレートがぶら下がっている。

『えー、うちの部隊のリーダーである救世主はアイオーンとも仲がいいんですよ。以前アイオーンから指名を受けて闘技場で行った決闘がフリーバトルだったにも関わらず満席だった事は記憶に新しい事件ですね』

『成る程、そのコネを使ってアイオーンと呼んだと。いやあ、流石は救世主！ 顔が広いですねえ！』

狭すぎて一部にのみ広まってる気がするのは俺だけか。

『というわけで、早速コンテストを開始しましょう！ 審査は通常審査と水着審査の二回に大きく分かれます！ その通常と水着両方で約五分間のアピールタイム、その他にインタビューなどが行われます！ 投票は客席の皆さんのお手元にあるボタンと、それから特別審査員二名によって行われます！ 特別審査員三名はディアノイア学園の教師陣三名です！！』

見ると、特別審査席にはソウルとルーファウス、更にアルセリアが座っていた。アルセリアだけ大きすぎてスペースに収まらず身体の半分以上はみだしてしまっている。

三人が客席に手を振る中、いよいよコンテストの幕が開かれようとしている。俺はもう心臓が止まりそうなくらい緊張していた。頼むからヘマしないでくれ、特にリリア……。

『それではエントリーナンバー一番！ メリーベル・テオドランド！』

拍手と歓声の中、メリーベルが歩いてくる。一先ずは私服という事で、普段通りの研究服で登場したようだ。歩いてきたステージ上のメリーベルと視線が合った。しかし彼女は直ぐに視線を反らす。まあ、メリーベルなら特にヘマはしないだろう。

『えー、メリーベルさんは錬金術師という事で、普段から怪しい研究をしているという情報があります。チャームポイントは実験失敗でついでしまったネコミミで、普段から猫を引き連れているそうです。今日も足元に猫が集まってますね』

そういう情報はどこで手に入れるんだ？

『メリーベルはあんまり表に出ないから知名度低いですけど意外とマニア受けしててアングラでは有名な美少女っすね。最近はこちらよく外にも出るようになってファンも増加傾向にあるんだなあ。ちなみに性格的にはS方向で、うちの女性陣を虐めて楽しんでます』

アクセル、お前。

『えーというわけで、メリーベルさんにインタビューです！ 今回のミスコンの意気込みを一言！』

「とりあえず、アクセルは後でシメる」

歓声が沸き起る中、アクセルはへらへら笑っていた。うん、捕まらない自信があるんだろうな。あいつ足早いし。

『自分のチャームポイントはここだ！ っていう所ありますか？』

「ねこみみ」

『本日はどういった理由で参加を決めました？』

「ナツルに頼まれたから」

『では最後に、この晴れ舞台を一番見てもらいたい人は？』

淀みなく無表情に返答していたメリーベルが停止した。少し考え込み、それから客席に居る俺を見つめる。

「うちの救世主に」

歓声が沸きあがる。隣に座っているエアリオさんが何か言っていたが俺は聞かなかった事にした。何やら周囲からの視線が痛い……。

『ありがとうございます！ では五分間のアピールタイムです！
！ どうぞ！！』

マイクがステージの端に去って行くと、メリーベルはその場に立つたままポケットから小さな笛を取り出した。一体何事かと思いがちがじつと眺めていると、メリーベルの笛の音に誘われるように猫たちがあちらこちらから飛び出してきたではないか。

口に笛を咥えたままメリーベルは猫たちに指示を出す。笛の音色に沿って猫たちはステージの上で舞い踊り、綺麗に声をそろえて鳴いていた。

「……大道芸じゃねえか」

これはこれで面白い見世物だったが、だからってアピールが出来たとは思えない。自分の両腕を伸ばし、そこにびっしり猫を乗せたメリーベルは案山子のような格好のままステージ裏に帰って行った。みんながどんな顔をしているのが怖くて振り返る事が出来なかった。

『いやあ、メリーベルさん面白いアピールでしたねえ』

『……まあ、メリーベルと言えば猫、猫と言えばメリーベル……本人も猫みたいな奴ですから、ステージの上に立ってるのに飽きたのかもしれないっすけど』

それは俺も同意する。腕を組んだまま苦笑を浮かべていると、次の参加者が姿を現した。

『エントリーナンバー二番！　ベルヴェール・コンコルディア！』

おしとやかにモデル歩きで登場したベルヴェール。なんだかこういう舞台にも慣れた様子で、平然と観客に手を振っている。

『ベルヴェールさんは、コンコルディア財閥の一人娘のお嬢様でもありますね。ジョブは弓兵！　その他にも様々な魔術に精通しているオーソドックスな後衛タイプです』

『あいつは基本的に頭悪いので、自分で企画したのに参加してきちゃいましたね。まあそこがいいという人もいるんでしょうけど。ちなみに学内では有名な話で、出資者である父の恩恵で学園でも悠々自適な生活を送っているとか。あとつれてるメイドは可愛いです』

だからアクセル、お前……。

『ではインタビューに入りましょう！　今回の参加にあたり、意気込みを一言！』

「誰がバカよ、誰がつ！！　アクセルは後で殺すわ！！」

『えー……と、チャームポイントは？』

「アタシという存在全てね！」

『本日参加の理由は？』

「理由？　んー、そんなの考えた事も無かったわ！」

『そうですか。では最後に一番見てもらいたい人は？』

「ナツルね！ 見てなさいナツル！ アタシの企画が見事に成功する様を！！」

思い切り指差されてしまった。恥ずかしくて仕方が無い。俺が冷や汗だらだら流している間にアピールタイムに入り、ベルヴェールが小道具として取り出したのはヴァイオリンだった。

ミスコンの会場で思い切りクラシックな演奏を始めるベルヴェール。育ちのいいお嬢様である事はわかるのだが、だからってここでそれはないと思う。

演奏は五分間続き、拍手の中礼儀正しく頭を下げてベルヴェールは去って行った。なんというか……バカだから仕方ないか。

『演奏はお上手でしたねえ。流石はコンコルディアの一人娘！ 気品の感じられるアピールタイムでした！』

『でも多分ここに集まってる人は気品は求めてないと思うんだなあ。逆にちよつと下品なくらいのお色気がないと意味ないんじゃない？』

うん、同意する。確かに趣旨的にそうだろうな……。

『エントリーナンバー三番！ リリア・ライトフィールド！！』

「はーいつー！！」

元気のいいお返事と共にとことこ走ってくるリリア。ああ、本命がきやがった。心配だ……心配すぎる。

転ぶなよー頼むから転ぶなよーと思っていたら目の前で思い切りずっこけた。ぶつ倒れたリリアに会場から笑いが起こり、俺は頭を抱

えて頂垂れていた。

『だ、大丈夫ですか？』

「あー、平気ですよ？ リリアいつも転んでるから顔面が頑丈なんですよ！」

『そ、そうですか……。リリアさんと言えば、三ヶ月前のメリーベル戦での鮮烈な闘技場戦がわたくしの中では印象的ですね。最近では前線を切り開いた功績やその明るい人柄が密かに人気を呼んでいます』

『ドジっ子天然力ですね。転ばなくなったらもう魅力は半減っすよ。ちなみに男性より女性に人気が高いのが現状です。完全に子供扱いっすねー。でも良く見るとかなり可愛い顔立ちしてるんですよ。いつも怪我してますけど』

……。アクセルは女性陣を良く見てるんだなあ、と感心すべきなんだろうか。

『それではインタビューに入りましょう！ 今回参加の意気込みを聞かせてください！』

「うん、とりあえず、アクセルくんは後でどうにかしなきゃなっと思っただ？」

『あ、あはは……。リリアさんのチャームポイントは？』

「え？ チャームポイントは……。チャームポイントが、ないところっ！ ！ えへへ、ちょっといいこと言っただかも」

『え、ええ？ 本日の参加の理由は……？』

「師匠に誘われたからです！ 師匠く見てますかー！？ リリア、がんばってまーすよーうつー！！」

両手をブンブン振るリリア。俺は泣きたくなりながら手を振り返した。

『何だか皆さん同じようなコメントですね。それでは今回参加にあたり、一番見てもらいたい人は？』

「勿論大好きな師匠ですっ！！」

『ありがとうございます！ それでは五分間のアピールタイムです！』

マイクが下がるとリリアは前に出た。それから当たり前のように俺に微笑みかけ、胸に片手を当てて目を閉じる。

「リリアが一番得意なのはお料理なんですが、ここでは出来ないの
で 歌を歌います」

俺はそれを止めたくて仕方が無かった。リリアの歌？ そんな特技聞いたことねえよ。頼むから変な即興特技を作らないでくれ。

頭を抱えてはらはらしながらそれを見守っていると、リリアの第一声で会場は静まり返った。マイクもスピーカーも通さないただの素の声、青空に鋭く響き渡った。

身体を突き抜けるようなその高らかな歌声は優しく、力強く会場を包みこむ。聞いた事の無い言語の、聞いたことの無い歌。それはこ

の世界でも珍しい物なのか、誰一人人口を開くことなくそれに聞き入っていた。

歌声が聞こえる。それはこの世界の全ての時間を止めるような神々しい時間だった。予想外の完成度に空いた口が塞がらずに居るとあつという間に五分が過ぎ去り、リリアは途中で歌を止めてしまった。

『こ　　れは驚きましたね。聖歌……でしょうか？』

『やっぱりミスコンのアピールとしてはどうかと思いますけど、いやーすごかったっすね。リリアちゃんかわいいなあ』

割れんばかりの拍手の中、リリアは転びながら去って行った。その歌声に驚いて黙り込んでいると隣に座ったマルドゥークが俺の肩を叩く。

「ナツル、彼女はどこであの歌を？」

「どこって……さあ？　お前は知ってるのか？」

「　　創世の聖歌、だよ」

声を上げたのはエアリオの膝の上に座ったアリアだった。何やら真剣な眼差しで立ち去って行くリリアを見つめるアリア。結局あの歌がなんだったのかを確かめる前に会場はまた騒がしくなってしまった。

『イントロリーナンバー四番！　ゲルト・シュヴァインー！』

リリアとは正反対に凜々しい表情で姿を表したゲルト。それは以前と同様、所謂ゲルトの『外面』である。民衆の前では凜としていよ

うとする彼女の覚悟みたいなものだ。

『いや、男女問わず人気がありますゲルト・シュヴァイン。言わずもがな、学園のアイドルであります』

『ゲルトについては多くを語る必要はないっすねー。うちのパーティーの中では恐らくリリア以上のへこたれ勇者で、昨日もナツルと一緒に花火見てましたし、意外と気弱な所があって一説には百合ではないかという話もあります』

『えーと……？ とりあえずインタビュータイムです』

「アクセル・スキッドは後で魔剣の威力をもう一度味わわせてあげましょう」

『まだ何も言っていないのに……。えーと、チャームポイントは？』

「そんなものはありません。わたしは勇者ですから」

『今回参加に至った理由は？』

「恩返しです。それ以上でも以下でもありません」

『そ、そうですね……。それでは最後に、一番見てもらいたい人は？』

「別に見てもらいたい人は居ませんが、一番見たいのはリリアですね」

『はっ？』

「いえ、なんでもありません」

ゲルト、多分かなり緊張してるな。冷静をなんとか装ってはいるものの、自分でももう何を言っているのかわかっていないんだろう。一瞬救いを求めるように俺を見たが、俺は首を横に振った。悪いがゲルト、そこに立ってしまった以上、俺にはどうしようもない。

『それではアピールタイムです！ どうぞ！』

「え？ アピール……？ アピール……アピール……」

腕を組んで考え込むゲルト。暫くそうして悩んだ後、意を決したように魔剣を構えてポーズを取り出した。

何度かポーズを変え、中には中々刺激的な体勢もあった。しかしどうしてまたこんなミスコンっぽくきちんとアピールしてくるのか、ゲルトの性格的に謎ではある。

ウインクしながら魔剣を片手でぐるりと回転させ、肩に担いで去っていくゲルト。舞台の裏に彼女が消えるのを見送り、俺は解説を求めてアクセルを見る。

『いや、ゲルト・シュヴァインさすがですね。撮影には慣れているようです！』

『シュヴァイン家復興のために出来る限り勇者として目立ちたいというのはゲルトの考えにありますからね。ちなみにゲルトは以前から幾つかの雑誌のモデルや校内パンフレット、生徒新聞などで写真撮影を受け付けていますし、現役のモデルでもありますから』

成る程、芸能人パワーってことか。しかしそういわれないと信じら

れないな。俺の中のゲルトのイメージはもうそんなお高いもんじゃないし……意外な一面を垣間見てしまった。

『さてさてエントリーもラストを迎えました！ ナンバー五番！ アイオーン・ケイオス！！』

ステージ上に燃え上がった炎の中からゆっくりと姿を現すアイオーン。その派手な演出に誰もが驚く中、アイオーンはいつもどおりの不適な笑みを観衆に向けた。

盛り上がっていたのは男性よりも女性だった。あちらこちらから黄色い悲鳴が上がる中、マイクはまだ燃え残る小さな炎を避けながらアイオーンに駆け寄る。

『アンリミテッド・アイオーン！ いやあ、素晴らしいですねー！ 男性よりも女性から圧倒的な支持を受ける正にカリスマ参戦であります！』

『アイオーンは一部女性ファンの中では『アイ様』と呼ばれ崇拝されてるそうですよ。ちなみにアイオーンは男性だけではなく女性も普通に好き、という表立った両刀発言も有名です。まあそんな事よりおっぱいデカイですね』

なあアクセル、お前本当に怖い物知らずなんだな。

『それではアイオーンさん、参加の意気込みを一つ！』

「そうだね……。色々と言いたい事はあるけれど、まあそういう事もある。ボクはこう見えても寛大な心の持ち主だからね、フフフ」

『ハ、ハハハ……。ええーと、チャームポイントは？』

「んー……。胸、かな？ 挟むも揺らすも自由自在さ」

『……。えー、参加の理由は？』

「勿論夏流に誘われたからさ。大事な救世主様に誘われたのじゃあ断るわけにもいかないだろう？ それに個人的にボクは彼が好きだからね」

『……………お、おほん。では、勿論一番見てもらいたい人は？』

「夏流だね。そういえばこの後逢引する事になっているんだし、冷静に考えてみれば特にここにいる必要もないのだけれど」

なんだ、背後から複数の殺気を感じる……。気のせいであってくれ。気のせいであってくれ。

『それではアピールタイムです！ どうぞ！』

「んー……。とりあえず魔法でも撃つか。天地を焦がせ龍の息吹でも」
アグニッシュプレス

不吉な事を言い出したアイオンに教師陣が動き、アイオンは笑顔のままずると引き摺られて舞台裏に連れ込まれた。そこまで警戒しなくてもアイオンだって本気で観客席に龍滅魔法は撃たないだろ……。たぶん。たぶん。

そんなこんなで第一幕が終了し、数十分の休憩時間となった。一先ず何事もなく あったけどあれはもう俺の中ではさほど驚くようなことではなくなりつつあるという自分の麻痺した感覚 終了し、皆の様子を窺おうと思って舞台裏に顔を出す事にした。

「おーい皆 ……」

俺はそこから目を反らした。床の上に転がったアクセルを女性陣がボツコボコにしていたのである。もう見ていられない。アクセルは悲鳴を上げながら女性陣に許しを請うが、まるで止める気配は見えなかった。

どうして捕まっただろう？ とか考えていたが、見ればアクセルはベルヴェールに凍らされた上で更にリリアの鎖につながれていた。あんなに逃げられるわけがねえ。

静かに両手を合わせ、アクセルの冥福を祈る。そそくさと舞台裏から去ると、背後から誰かが駆け寄ってきた。そこに居たのは頼に付いた返り血……アクセルの……を拭うリリアだった。

「師匠、どうかしたんですか？」

「俺は何も見えて居ない」

「い、行き成りどうしたんですか……？ それより師匠！ 結局他の人全員師匠が誘ったってどーいう事ですか！？ 師匠はリリアが可愛いからミスコンに参加してほしいって言ったのに……！」

「ん？ それがどうかしたのか？」

とりあえずこの場にいるのはよくないと思い、地獄絵図に背を向けて歩き出す。リリアは俺の隣を歩きながらほっぺたを膨らませて拗ねていた。

「師匠は見境無さすぎですよ。アイオーンさんまで口説いてくるなんて……」

「口説いた覚えはないぞ……？ でも、ちゃんと見てたんだからいいだろ？ リリア、上出来だったよ」

「ほんとですかっ？ えへへー」

時々リリアが出す『ほめてほめてオーラ（俺命名）』を感じ取り、その頭をぐりぐりなでる。満足げに笑うリリアに溜息を漏らした。

「それにしてもあんな歌どこで覚えたんだ？ 何語？」

「う？ それは全然リリアにもわかんないですよ。ずっと昔、どこかで教えてもらったんですけど……。リリア、歌うのとか好きなのです。師匠も今度一緒に歌いましょうよ」

「俺はいいよ……。お前のあれ聞かされた後で一緒に歌いたくなるほど無謀じゃない」

二人してそんな話をしながら歩いていると、俺の視界を何かが横切った。それがなんなのかを判断するよりも前に俺の足はそれに導かれるように方向を変える。

周囲を見渡して影の正体を探る。それは狭い路地の中へ消えて行く、白いシルエット。うさぎ。うさぎだ。うさぎが跳ねている。

「師匠？ どうかしたんですか？」

「……リリア、戻ってる。ちょっと気になる事があるんだ」

「え？ 師匠……あ、ちょっと！」

リリアを振り切って駆け出した。勿論俺の視線は肩の上のうさぎ

黒いうさぎに向けられている。ナナシは何も言わずに俺の肩にしがみ付いたまま、遠ざかっていく白いうさぎを見つめていた。

「ナツル様、あれは」

「ああ。なんなんだ？ 明らかに俺を呼んでる……」

声が聞こえたわけではない。目があったわけでもない。ただ俺に対して発せられる、『ついてこい』というメッセージ。

それに続いて行くと、そこは薄暗い路地の果てだった。どこに出口があるのかも判らない、光も届かないシャングリラの闇。その最中へ消えて行くうさぎを見つめ、足を止める。

「……………誰だ、そこにいるのは」

誰かが倒れている。それに気づいて声をかける。だが返事が無い事に直ぐに気づいた。雲の切れ間から太陽の光が降り注ぎ、闇の中に浮かび上がったのは折り重なった死体、死体、死体。

死の匂いと血の赤の中、そいつは俺に近づいてくる。死体の山を踏み越えて、舞い降りる。俺と同じく、白いうさぎを肩に乗せた、見ず知らずの少年。

「よう、夏流。懐かしいじゃねえか、ん？ 中々どうして素敵な運命の巡り合わせだ」

闇の中から歩いてくる少年。その声には俺は聞き覚えがあった。そう、俺は彼を知っている。見ず知らずなんかじゃない。何故なら、俺は。

「いや、運命なら決まっていた事だ。俺様とお前 二人の救世主

の出会いもな」

自分に銃を向ける少年の顔を見て俺は絶句していた。ありえない
そんな五文字が頭の中でグルグルと渦巻いていた。

「……秋斗、なのか……？」

前髪の間、鋭い視線が俺を射抜く。途端に脳裏を過ぎる、彼と俺
とそして彼女の記憶。

幼き日に別れそれから一度も出会う事もなく、そしてこの世界に存
在するはずもないあちら側の人間。俺の幼馴染。如月秋斗。そ
れが何故か今自分に銃を向けている。

「覚えてたか。まあ、忘れられるわけもねえよな、夏流……。テメ
エが殺してテメエが奪った、冬香の事も……。勿論、俺様の事もよ
おっ……！」

自分の過去が今日の前に追いついてきた。清算しきらなかった罪は
どこかで裁かれる。

頭の中で冷静に考えている自分がいた。そうだ、当たり前じゃない
か。俺が救世主ならば、『こいつだって救世主で当たり前』なんだ。
身構えるより早く放たれた銀色の弾丸が身体を撃ち抜く。自らの身
体から溢れる血を眺めながら、俺は自分の過去に想いを馳せていた
。

邂逅する運命の日（3）（後書き）

↓ディアノイア劇場↓

＊やつと出てきた人編＊

『救世主二人』

秋斗「中々素敵な運命じゃねえか、夏流　！」

夏流「お前はバカかつ！？　いや、バカヤロウツ！！」

秋斗「おぶうつ！？」

夏流「タダでさえ救世主目だつてないとか、出番ないとか、ヘタレとか、色々言われてるのに二人になったら俺の主人公としての存在意義が問われるだろうがあああああつ！！」

秋斗「え？　いや、俺様それでも別にいいんだけど……敵だし……」

夏流「バカヤロウツ！！　このバカヤロウツ！！！！」

秋斗「ぐはあつ！？」

夏流「ただでさえキャラクター多いのに暫く死にそうにもない顔しやがって！！　ここで大人しくくたばっておけつ！！」

秋斗「そんなに目立ちたいのか!? 目立てればいいのかよ、 teme エッ!」

夏流「リリアにも票で置いてかれてるんだよ俺はああああっ!」

『不遇』

アクセル「なあ、どうして俺ってこんなにこの作品の中で不遇なんだろう?」

ブレイド「それをおいらに言われても困るよ……」

アクセル「ほら、ナツルは最近ゲルトとイチャイチャしてるし、他の女の子ともイチャイチャしてるし、なんかここの所戦わないでイチャイチャしてるし、おかしいと思うんだ」

ブレイド「別に主人公なんだからいいんじゃないの?」

アクセル「主人公だからって全然目立たないのに特に救世主っぽいことはしないで女子といちゃいちゃしてるだけってどうなんだよ! ！ ていうかブレイド君だってお姫様と仲いいじゃんか!」

ブレイド「……ニーちゃんにはほら、妹がいるだろ? よかったじゃないか」

アクセル「言われて見るとそうだな」

ブレイド「……バカでよかった」

『フラグいろいろ』

リリア「むむむ……。まさか救世主が二人もいたとは」

秋斗「いや、連載開始時から普通に出る予定だったんだぜ？ 救世主っぽい働きを始めるというか、この世界の事情に慣れるまで引張ってたけどな」

リリア「そういえばどつかでシュート君でたよね」

秋斗「もう読者も覚えてねえようなところでな。ま、読者が覚えてないようなフラグなんて山ほどあるだろうし忘れられてる方がいい事もあるぜ？」

リリア「逆になんで今まで師匠は自分の過去に触れなかったのか謎ですね」

秋斗「順番つてもんがあるのさ！」

リリア「じゃあ信じてもいいんでしょうか？ リリアの順番も、そのうち周ってくるんだって」

『芸能人』

リリア「ゲルトちゃん、そういえば芸能人なんだよねー！」

ゲルト「……なんですか、芸能人って。時々貴方この世界の言葉じゃないものを何故か使いますよね」

リリア「そんな事はどうでもいいんだよっ！　ねえねえ、雑誌の表紙とかにも出てるんでしょ？　そういう雑誌ないの？」

ゲルト「ええ、まあ……そういう関係者から貰ったのがありますけど」

リリア「わー！　かわいいねー！！　ゲルトちゃんは学園のアイドルだねー！！」

ゲルト「ど、どうしたんですか？　今までそんな事全く触れなかったのに……というか、そういう設定なのは初期からですよ。あまり役立ってない設定ですが」

リリア「ゲルトちゃんは学園のアイドルだから、『メインヒロインはゲルト』とか言われてるんだよね？」

ゲルト「え　？」

『悪役の日常』

フェンリル「ただいまー。ふう、疲れたなー。母さん夕飯は出来ているかい？」

鶴来「はいはい、もうすぐ出来ますよ。もうお父さんったら、食事中は仮面をとって下さいっていつも言っているでしょう？」

フェンリル「ああ、すまないねえ。つい仕事の癖で……。こら、グリーヴァ。食事中にテレビなんて見てるもんじゃないぞ」

グリーンヴァ「他の家じゃみんなご飯食べながらテレビ見てるもん！」

鶴来「他所は他所、うちはうちです。そんなに他所がいいなら、他所の子になってしまいなさい」

ベルヴェール「っていう、生活してるんじゃないかしら。どうせ凡人だし騎士団に追われてるわけだし」

リリア「なるほどー！」

ブレイド「いや、ネーチャンたち……？ それ本気で言ってるのか……？」

『中身は？』

リリア「それにしてもびっくりしましたね……。学園長の鎧の中身がからっぽだったなんて」

夏流「じゃあどうやって動いてるんだあれ？ 声も中から聞こえるし……」

リリア「多分、あれは何者かが操る人形なんですよ。遠隔操作している本当の学園長が学園のどこかにいるはずなのですよ！」

アルセリア「わたしの中身がどうかしたのですか？」

リリア「あ、学園長こんにちはー。ちょっと中を覗き込んでもいいですか？」

アルセリア「ええ、構いませんよ」

夏流「いいのかよ！？ あ、リリアずるいつ！！俺も見たい！！」

リリア「ま、まさか中があんな風になっていたなんて……」

夏流「な、何がいたんだ？」

リリア「中に誰も居ませんよ」

始まりの日（４）

覚えているのは、雪が降っている景色。

夜の闇の中、月明かりを浴びて輝く白い絨毯の上、彼女は俺の手を掴んでいた。

恐らくそれは彼女から俺に対する最後のメッセージだった。だとい
うのに俺はその手を振り解き　そして、今　。

「つつつつ！？」

弾丸が胸を穿つ。それがただの銃弾ならば今の俺には何の意味も持
たない攻撃だ。しかしそれは電撃を帯びた、魔力そのものの弾丸。
命中と同時に爆発し、電撃が全身を迸る。

銀色の電流　。それがあいつの持つ属性だというのならば、話は
早い。同じ属性を持つ人間同士ならば、多少のダメージは堪えられ
る。

吹き飛ばされ、しかし足を踏ん張って体勢を立て直す。血が吹き出
る傷も、自己修復で完治させられる。俺は気持ちを切り替え、拳を
構えた。

「ほお」。こつちに来てまだ三ヶ月の癖になかなかやるじゃねえか
？　それに、まさかバトルスタイルが格闘とはな……。暫く見ない
うちに性格まで変わったみてえだな、オイッ！！」

再び放たれる弾丸を拳で受ける。秋斗は引き金を何度も引き、銃弾
を連射しながら駆け寄ってくる。

「秋斗　！　本当にお前なのかっ！？」

「何寝ぼけた事を言ってるやがるっ！！！！俺様が他の人間に見えるのかよ、テメエ！」

銃身で殴りかかってくるその攻撃を腕を十字に構えて防ぐ。銃弾以上の威力の箆った格闘の一撃に眉を潜め、壁を蹴って空へ。

狭い路地から広い屋根の上へと移動する。あんな場所では銃弾を避ける事さえ難しい。今は兎に角逃げられる空間に移動しなければ。

俺を追って来た秋斗は片手に銃を構え、ゆっくりと迫ってくる。一体何がどうなっているのか。本当にあれば、本物の秋斗なのか？

「ナツル様、今は考えている場合ではありません。彼を迎撃しなければ」

「だが……」

「昔のご友人だというのは承知の上です。しかし、ここで何もしなければ 貴方はここで彼に討たれる事になる」

ナナシの真剣な言葉に目を閉じる。そして直ぐに開き、腕の術式に火を灯す。

「秋斗……！！ どうしてお前と戦わなきゃならないんだ！？」

「理由なんて今更問うてんじゃねえよ！！ 身に覚えがねえとはいわせねえよ、夏流っ！！」

放たれる銃弾を手の甲で弾き、駆け出す。銃弾を左右に細かくステップして回避しつつ、一気に懷に潜り込む。

屈んだ姿勢から一気に顎目掛けて足を振り上げる。天に向かって射

抜くような一撃を紙一重で回避し、秋斗の銃口が俺を捉える。

至近距離での攻防戦が繰り広げられた。拳と銃が何度もぶつかりあい、顔面目掛けて放たれる銃弾は時に頬を掠めて行く。秋斗の動きは素早く、拳も蹴りも当たらない。勿論銃弾も俺には当たらないが、一瞬の内に繰り広げられた攻防に確信する。これは幻なんかじゃないのだと。

「やるじゃねえか……嬉しいぜ。直ぐに死なれちゃ張り合いつてもんがねえ」

「……冬香の事が！？ お前もそれでこっち側に居るのかっ!？」

銃身と拳が打ち合う。あいつの銃は至近距離では完全に鈍器扱いか。それにあの銃のデザイン。どこかで見覚えがある。

距離を離れた隙に秋斗は銃身に魔力を込める。危険を察して俺も同様に魔力を備えた。その時お互いの武器に浮かび上がった紋章は同じ。

「 テオドランドの紋章 ？ まさか、グリーヴァの……」

「行くぜオイ？ 上手くかわせよ」

銃身に魔力が収束されていく。銀色の電撃を帯びた銃口が閃光し、光の矢が放たれる。それは一直線に俺目掛けて飛来した。

術式で相殺 レーヴァテインも 撃っている暇がない。とにかく出鱈目に早い。チャージから放出までの隙が 。

「くっ!!」

横に跳んで回避する。しかしそんな俺を追うように太い閃光の線は

街をあちこち破壊しながらついてくる。走る俺を追いかけて横に街を薙ぎ払う閃光を横目に、空中を回転しながら足に術式を込める。

「レイヴァテイン 神討つ一枝の魔剣その力を我は担う　！」

魔力を溜めた常態で民家の屋根を蹴り、一気に秋斗目掛けて跳躍する。当然追尾してくる光線に歯を食いしばり、全身全霊の力を込めた蹴りを放った。

「ウルスラグナ 障害を討ち滅ぼす者ツ！！」

金と銀、二色の雷が交わる。秋斗の閃光を切り裂くように食い込んだ爪先が光線を真つ二つに引き裂きながら秋斗目掛けて繰り出される。

全身全霊、魔力障壁貫通効果付与のキックだ。相手の力がどれ程であろうと、障壁を貫通して直接ダメージを与える。その蹴りを銃身で受け、秋斗は後方へと弾き飛ばされた。

光線の止んだ今、屋根の上は綺麗に抉り取られるようにして焼け焦げていた。俺の脚も同様に焦げ付き、討ち滅ぼし切れなかった衝撃を物語っている。

白い煙を巻き上げる足の痛みに顔を顰めながら前に進む。秋斗はウルスラグナを受けて、しかし平然と正面に立っていた。

「ふん、まあ三ヶ月じゃこんなもんか……。プレイ時間が俺とお前じゃ違いすぎるもんなあ、夏流」

歯を食いしばり、肩膝を着く。秋斗を倒せないのか……。？ いや、そもそも何故秋斗がこんな所に居るのか。

俺に届いた手紙。本は一冊だけだったんじゃないのか？ 一体何がどうなっているのかわからない。このままおめおめと殺されてやる

わけにもいかない。だが。

「師匠　ッ！！」

リリアの声が聞こえて俺は顔を上げた。リリアは屋根の上を跳びながら背後から秋斗に駆け寄っている。秋斗が振り返り、リリアに銃口を向けるのを見て俺は駆け出した。

「来るなりリアッ！！」

俺の制止を振り切り、リリアは秋斗にリインフォースを振り下ろす。だがそれは銃身で受けられ、左に大きくそらされてしまった。リインフォースはリリアの手を離れ空中をくるくると舞い、そして秋斗の手がリリアに伸ばされた。

リインフォースを弾き飛ばした？　リリアはあの怪力で剣を握っているのに、それ以上の力で吹き飛ばしたのか？　沢山の思考が頭の中を駆け巡る中、足を止めずに術式に魔力を込める。

しかし俺の思考は秋斗の意外な行動で完全に真っ白になってしまった。奴は銃を握ったまま、リリアの手首を掴んで強引に引き寄せると、その唇を奪っていたのだ。

何が起きているのか。何も判らなかった。ただリリアの動揺する瞳と、俺を横目に笑う秋斗の瞳が対照的に俺を捉えていた。

始まりの日（４）

「……ん、んんっ！！」

秋斗を突き放し、後退したりリリアは口元に手を当て、眉を潜める。

それは不快感からか、動揺からか。どちらにせよ不適に笑う秋斗を前に俺たちは固まっていた。

「何ビックリしてんだよ、夏流？ お前だって本当はこうしたかったんじゃないのか？」

「何だと」

「図星突かれたからってキレてんじゃねえよ、あ？ テメエだってこいつ見て思ったんじゃないのか？ 『ああ、これで冬香とやりなおせる』ってよ」

少なからずその言葉は衝撃だった。心臓の鼓動が高鳴り、怒りがこみ上げてくる。俺が、リリアを冬香の代用品にしていたっていうのか。

「はん、だから何キレてんだよ。別にいいじゃねえか。こんなもん俺たちが作った架空の世界だろうが？ ゲームの中のキャラクターに何しようが、俺たち異世界人には関係ねえだろ？」

「関係ないだと……？ そんなわけがあるか。リリアはリリアだ、冬香じゃないしこの世界はこの世界だ」

「へえ。世界を作った側の人間がよく言うぜ。お前のやってることは気色悪いおままごとと同じだ。いつまで夢見てんだテメエ。そんな歳じゃねえだろが」

秋斗を鋭く睨みつける。その俺の敵意を心地よく感じているのか、奴は白い歯を見せて笑った。

「しっかし滑稽だよな、夏流……？　どういう因果か知らねえが、
テムエは冬香に救世主として選ばれた。最後までお前に救いを求め
ていたあいつの遺志そのものだろう？　そう、あいつはお前をヒー
ローに見立てていたんだ。自分を救う、そして世界を救う英雄にな
る事を願っていた。あいつの願いがここには詰まってる……お膳立
てされた悲劇！　喜劇！　その全てがお前を英雄にする為のただの
演出なんだよっ！！」

「秋斗……！　それ以上この世界を馬鹿にするのは許さない！　こ
こは俺たちの為の世界じゃない！」

「いいや、違わないね。テムエは趣旨を履き違えてんだよ。まったく、
テムエの方の『うさぎ』は何も教えてくれないみたいだな」

秋斗が腕を伸ばすと、そこを歩いて屋根の上に降りる白いうさぎ。
それはナナシがそうするように人の姿へと変身していく。現れたの
はまるでナナシと色を引っくり返したかのような服装の長身の女性
だった。

ナナシ同様どこか怪しい雰囲気を放ち、シルクハットを片手に恭し
く頭を下げる元・うさぎ。その視線を受け、ナナシも又人の姿へと
変身を遂げた。

「こいつらが何の為に存在するのか、そもそも何者なのかもテムエ
はわかってねえ。まあ仕方ないことだ。こっちの登場人物と仲良
く友達ゴッコしてるテムエには救世主としての役割も意味を成さな
いだろうからな」

「どういう事だ……！？　何が狙いだ秋斗！！　俺への復讐なら、
別にこの世界でなくなっただけいいだろう！？」

「復讐なんて事に興味はねえよ。俺はただ やりなおしたいだけだ。そして冬香の願いを叶える……！ そう、その勇者の小娘を使つてな」

俺たちの視線がリリアに向けられる。リリアは先ほど秋斗を突き飛ばした位置で何故か固まっていた。固唾を吞んで俺たちの会話に耳を傾けていたリリアは、自分が見られている事に気づいて慌てて剣を構えようとするが、それはまだ遠くの屋根に突き刺さっている。

「おい、リリア。お前、俺と一緒に来い」

「え……？」

「勇者に成りたいんだろ？ この世界を救いたいんだろ？ その甘ちゃんと一緒に居てもテメエに未来はない。あいつの持つてる予言の書は未来を大して予知出来ないが 俺の原書は終末までの全てを予言する。俺に付いたほつが得だぜ？」

リリアは後退する。警戒心を見せるその瞳に秋斗は肩を落とし振り返つて俺を見た。

「ま、こうなるだろうとは思つてたけどな。だがな、夏流……。リリアは大事な要素だ。こいつは冬香の生まれ変わりみてえなもんだからな。いずれは俺様が貰つていくが、一先ずはテメエでなんとかしてみろ」

「ま、待て！！ お前は……お前は、リリアを勇者にするつもりなのか！？」

背を向ける秋斗に投げかける疑問。しかしそれは別に返事をする必

要があるような疑問でもなかった。

何故なら俺たちは同じく救世主であり目的は一つ。そして彼女が冬香の生き写しだというのならば 守るのは俺もアイツも当然の事だ。

「 テメエにも役に立つてもらうぜ、夏流。お前のためじゃない。冬香の為に、お前はお前の役割を果たしてもらわなきゃ困る……。直ぐに次の試練はやってくるぜ？ せいぜい足掻いて乗り越えてみせろ」

「秋斗！！ 秋斗っ！！！！」

走り去っていくその姿を追いかける気力は沸かなかった。そんな事より今はリリアだ。リリアに駆け寄り、その身を案じて手を伸ばす。しかし俺の手はリリアに拒絶されていた。無理も無い。あんなわけのわからない話を聞かされて、俺を信じられるはずもない。

だが、それは誤解なんだ。別に俺はリリアは代用品にしようとしていたわけじゃない。それにこの世界の事だって大事だっと思ってる。仲間を守らなきゃ、リリアを勇者にしなきゃいけないと思ってるんだ。

秋斗と俺は違う。この世界をモノだなんて思っていないし、俺はリリアを裏切るつもりもない。なのに、どうしてなんだ……？ どうして俺は、リリアを……。

「師匠、さっきの人は誰ですか……？」

「……リリア」

「さっきのひと師匠、なんのお話してたんですか……？」

「違うんだ、リリア」

「『トウカ』って、誰ですか　？」

答えられなかった。ただ俺は視線を反らし、絶句した。

リリアは黙り込んだまま、悲しげに俯く。それから背を向けて走り去っていくその姿を、俺は黙って立ち尽くして見送っていた。

「違う……。そうじゃない……。でも……」

それは、事実なのか？

この世界の人間ではない俺。そうだ、作った世界で遊んでいるだけだと言われても仕方の無い事だ。

ここでならやりなおせる……。そう思わなかったわけじゃない。こっちにはリリアがいる。リリアがいるんだ。冬香がもう居ない世界とは違う。そう確かに思った。

世界が大事で仲間が大事で、でもそれは自分が大事だからに他ならない。悲劇も喜劇も全ては俺の為に用意されている……。それはきつと事実だ。そう、俺がこの世界に混乱を呼び込んでいる。

どうして秋斗が原書を手にしてうさぎを肩に乗せて救世主を名乗るのか。それはまるで俺と全く同じだ。だというのに、どうしてだ……？　どうしてここまで違う？

いや、驚いているのか。それとも、怒っているのか。判らない……。

「どうなってるんだ……。なあ、ナナシ？　どうして秋斗がこっちに居るんだ……」

振り返り、ナナシに叫ぶ。しかしそんな事をこいつに今言っても仕方が無い。だからこれはただの八つ当たりだ。

「あいつの持つてる原書の方が完璧？ リリアを冬香の代わりにする？ 何なんだよ、どうなってるんだよ！ 何とか言えよてめえっ！！」

「ナツル様……」

「くそ……っ！ どうなってるんだよ……どうなってるんだよ！！ これも冬香が仕組んだことなのかよ……！ 俺とあいつに、戦えって言うのかよっ！！」

絶叫した。混乱が頂点を向かえ、自分でもわけのわからない心境にあった。

でも、なんとなく俺は気づいていたんだ。全てが俺だけの為にあるわけじゃないんだ。この世界の意味も、この世界に俺がいる理由も、最初からわかっていたじゃないか。

なのにどうしてこんなにも入れ込んでしまったんだ。出てくるなら、夢を覚ますならもつと早く出てきてくれよ。そうでなきゃ 割り切れないだろう？

「冬香が 死んだ？」

その電話を受けたのは、俺がこの世界に来る一ヶ月程前の事だった。その電話を受けても俺は暫く信じる事が出来なかった。

何故ならば俺はつい数日前、冬香と会っていたからである。そしてその時彼女は至極普通だったし、特に変わった様子なんてどこにもなかったのだ。

「おいおい、冗談だろ親父？ いくら俺の事が嫌いだからって、ついていい嘘といけない嘘があるぞ」

しかし現実是不変。葬式やらなにやらの日程を事務的に伝え、親父は電話を切った。俺はそれから暫くの間受話器を耳に当てたまま馬鹿みたいに立ち尽くしていた。

「そうか……冬香が逝ったか。明るくてめんこい女子だったのにな」というのは俺が厄介になっっている親戚の家のおっさんであり、同時に俺の師匠でもある男のセリフだった。夕食時、師匠と二人で食卓を囲み、彼は味噌汁を飲みながらしみじみと言った。

「それで夏流、お前は実家に戻るんだろ？」

「……いえ、師範^{せんせい}。まだちよつと、考えているんです」

「考えるって何をだ？ 双子の妹さんが亡くなったんだ、悩むことなからう？」

「師範は知ってるだろ？ 俺は両親の期待が重荷で家を飛び出した馬鹿息子なんだ。それが今更顔を出すっていうのもな……」

「勘当食らわせた息子にわざわざ電話してきたんだ、せめて葬儀には顔だせという事ではないのか？」

「……かも、知れない。でも、冬香の葬式なんて……俺は」

兎に角箸の進まない夕飯だった。師範は溜息を漏らし、あとは無言でいつもどおり全部食事を平らげた。俺は……飯を残すと怒られるという生活習慣から、やっぱり全部平らげた。

夜中まで道場の掃除をしながらずっと考えていた。どうして冬香は

死んだのだろうか？ と。親父は自殺だと言っていたけれど、イマイチ俺にはそれが信じられなかった。

だって冬香はこの間まで笑っていたんだ。わざわざ遠く離れたこの町まで珍しく遊びに来て、丸二日間も一緒に居た。両親には内緒で来たなんて言いながら悪戯っぽく笑って俺の手を取って歩いたんだ。それがどうして自殺する？ いや もしそれが前兆だったとしたら？ 俺は彼女のサインを見逃していたのかも知れない。そもそも冷静に考えてみれば、真面目なあいつが無断でこんな所まで会いに来る事自体、おかしい話だ。

両親の言う、約束された将来を持つエリートになりたくなくて家を飛び出してもうどれくらい経ったか。他に頼る人も居ない俺を快く受け入れてくれた……家事などを俺が担当するのを条件にだが……師範。外に出て、身体を鍛えて、色々な人と会うことで自分は変わったのだと思うしそれなりに充実した日々を送ってきた。

でも遠く離れた故郷で妹が何をやっているかなんて知らなかった。たまにこっそりかけてくるあいつの電話を待つばかりで、俺は自分から電話をかけてやることすらしたこともなかった。

年に一、二回、こっそりとどこかで会うこともあった。そういう時は丸一日喋り続ける冬香に付き合うのが大変で、でも元気にやっているんだって事がわかって嬉しかった。

兄と妹の関係なんて多分そんなもので、遠く離れてしまえば会う事もない。生まれた時は一緒だったとしても、別の人間、別の人格なのだから、双子だっらずと一緒なんかじゃない。

だから当たり前のように離れて、当たり前のように別々の幸せを見つけて、当たり前のように未来に進んで行く。多分俺は、そんな事を漠然と考えていたのだ。

「冬香が自殺、か……」

俺の所為ではないかと考えた。

家を出てきてしまったせいで、彼女に本城家の全ての重荷を押し付けてしまったのだから。自由奔放が存在意義のような彼女を籠に閉じ込めたのは紛れも無く俺だ。

けれどもだからといって死ぬほどのことだろうか？ それなりに彼女はうまくやっていたし、少なくともそれが俺よりも上出来だったことは保障できる。そもそもあいつは優秀なんだ。だから本城家を任せられて親父もお袋も安泰だったはず。

冬香だって、会ってもそれが嫌だなんてことは一言だって漏らさなかった。だから平気だと思ってた。でも、平気じゃなかったのか？ 考えても考えても答えは出ない。思い出すのはついこの間やってきた冬香の事だ。その日は確かそう、丁度クリスマスイブの日だった。クリスマスだっていうのに態々兄貴に会いに来る妹というのもどうかと思うし、相変わらずスカートは履かずにジーンズがお気に入り。冬香は明るい笑顔で俺を驚かせた。

「こんにちはーっ！ なっちゃんいますかー？」

なんてのはいつも突然やってくるあいつの口癖だ。師範も追い返してくれていいのに、わざわざ客間に上げてお茶菓子まで出すご丁寧っぷりだ。なんだか申し訳ない。

「クリスマスくらい、地元で過ごせばいいだろ？ お前モテるんだから、引く手数多だろうが」

「そりゃあモテますとも。でもね、クリスマスを一人で寂しく迎えているかも知れないなっちゃんの事を考えたら、いてもたっても居られなくなっただですよ」

「はいはい、そりゃありがたいこって」

「えへへ、そんな怒らないですよ。突然きちゃったのは謝るからねっ?」

結局そうしていつも付き合わされるのだ。でもそれは決して嫌ではなかった。冬香がこの世界のどっかでまだ生きている……それを信じられる瞬間だったから。

でも始まりは多分この時だった。いや、もっとうつと前かもしれない。でもこの物語の始まりはどこかと聞かれば、恐らくこの時だった。

「ねえ、なっちゃん覚えてる? 昔 秋斗と三人でさ」

それはただの昔話なんかじゃなかった。どうして忘れていたんだろう。

それは、俺に助けを求める彼女の声だったのに。

一人、シャングリラの町を歩いていた。あれだけの騒ぎがあつたのだ、人が集まるのは早かった。しかしそれに構う事も無く俺はその場を立ち去った。

考えたい事が山ほどあつたし、どうにも誰かと話すような気分でもなかったからだ。人ごみに紛れてしまえば俺を見つけ出せる奴なんて居るはずもなく、俺は一人でシャングリラを彷徨い歩く。

冬香の残した世界と俺たちに届けられた原書。二匹のうさぎと二人の救世主。果たすべき役割と、リリアという存在。

のめりこめばのめりこむほど、この世界と自分の存在の矛盾に生まれる摩擦が心を磨耗させていく。どうしようもないジレンマを抱え、一人立ち止まって空を見上げる。

「ナナシは、知っていたのか……?」

肩の上のうさぎに問い掛ける。うさぎは答えなかった。知っていたのかもしれないし、知らなかったのかもしれない。

「どっちにせよ、あいつは俺の敵なのか？ それとも味方なのか？」

「……救世主という同じ立場の人間としては、味方であると言えるでしょう。少なくとも彼の目的は貴方と同じはず」

「俺と同じ、だと？ 俺は……違う。ただ知りたかったただけだ。冬香がどうして死んだのか……その理由を」

「理由を知れば、その結末をどうにかして変えたいと願うのではありませんか？」

うさぎは俺の頭の上によじ登る。そうして語るのだ。

「一つを得れば二つを欲する。二つを手に入れば三つに目が眩む。人は何かを得ればもつともつと次を欲しがる生き物です。貴方がそうであつたとしても何の罪でもなく、そして自然な事」

「理由を知つたら過去を変えなくなる……。やりなおしたくなる、つて言いたいのか？」

「それは貴方の心のみぞ知ることでしょう。今のワタクシを貴方が信じられるかはわかりませんが」

「……ナナシ、教えてくれ。お前の主人は、冬香なんだろう？ 俺をこの世界に呼び寄せたのも、秋斗をこの世界につれて来たのも、全部冬香なんだろう？ なあ、この世界に冬香はいるんじゃないのか？」

実は生きてて、俺に復讐してるんじゃないのか!？」

自分でも荒唐無稽な事を言っているのはわかっている。でも……でも、どうしたらいいのかわからない。

「俺は……俺のしていることって何なんだ……？ 何の為にここに居るんだよ。救世主って、何なんだよ　っ!！」

どんな顔をしてリリアに会えばいい？ それ以前にあんな話を聞かされて、リリアがそれを皆に広めないはずもない。

俺が異世界の住人だと知れ渡れば、どうなってしまうのか。所詮他人事であることは紛れも無い事実、俺はこの世界の住人ではない。この世界の人間に何か言ったところで、その言葉は意味なんて持たないんだ。

そんなことはわかってる。最初からわかってた。いつかはこうなるはずだったんだ、それがただ早まっただけだ。なのに、リリアの遠ざかっていく姿が目には焼きついておて離れない。

「やり直したかったわけじゃない……」

ただ、この世界の皆が……。

「俺は……自分のエゴを押し付けていたつもりじゃなかった……」

でも、それは確かに事実で……。

「ごめん、リリア……」

目を閉じ、振り返る。うさぎは俺の手に原書を手渡す。いつでもどこでもリタイアは出来る。それは始めた時から聞いてい

た。そしてうさぎは言っていた。俺は選択を迫られると。
深呼吸する。現実世界への扉を開く。この世界を見渡し、それから
俺は本の中に吸い込まれるように、この世界を後にした。
。

始まりの日(5)

「ナツル？ ああ、何かミスコンの途中で居なくなっちゃったんだよ。え？ いや、見つかってないよ。それよりリリアちゃん、あの後どうしたの？ 急に居なくなるから皆心配して ちよつと、リリアちゃんっ!？」

走って走って、その姿を探していた。

祭りの夜の中、たった一人の人間を大勢の群集から探し続ける。それは、このまま終わってほしくないという願いからだった。

一人で走り回るリリアは呼吸を乱しながら懸命に夏流の姿を探す。

昼間、彼ともう一人、救世主を名乗る少年と出会ってから、考えていた。

彼らの会話、理解できない内容、そしてトウ力という人物の名前とその時の夏流の悲しげな表情を。

思わず跳ね除けてしまったのは、夏流の事が嫌いだからでも信じられないからでもない。ただ、恐ろしかったのだ。純粹にそれは恐怖だったのだ。

夏流という人物の、救世主の想いに触れる事を恐れてしまった。それは何かを意図したわけではなく、反射的に。そう、今まで自分がそうしてきたからしてしまっただけのこと。

激しい自己嫌悪と混乱の中、リリアは直ぐに引き返した。そして夏流の姿を探したのに、日が暮れても彼の姿は見つからなかった。まるで忽然と、この世界から存在を抹消されてしまったかのように、街のどこにも姿は見つからない。

部屋に行っても、学園も、公園も、駅も、喫茶店も、どこにも居ない。どこに行っても夏流との思い出が脳裏を過ぎるのに、その姿は見つからなかった。

「師匠……」

傷付けてしまったと思う。拒絶してしまったと思う。彼がどんな事情を抱えてるのは知らないが、それでもちゃんと話を聞くべきだった。

聞いた先、自分の傷つく結果が待っていたとしても、想いを反らすべきではなかった。それはもう何度も経験してわかっていたはずなのに。臆病な自分の本質が彼女を間違った方向へ進ませる。それは癖のように染み付いて消えることの無い、怯えた弱い心。

だから話をしたかった。一言でもいい、何か言葉を聞かせてほしい。何でもいいのだ。どうか、微笑んでいる姿を見せて欲しい。

胸を締め付けるような辛い想い。でもそれは彼も同じこと。それを味わわせてしまった。だからこそ伝えなくては。傍に居て欲しいのだと。裏切ったりしないのだと。

信じたいのだ。信じるために出来る事をしたい。なのにどこにも夏流は居なくて、まるで一人取り残されてしまったかのような気持ちになった。

寂しさで押しつぶされそうな心のまま、足を縛れさせて転ぶリリア。人々が振り返る中、齒を食いしばって立ち上がる。

「師匠、どこ行っちゃったんですか……？ いなくなったりしないですよ？ リリアを置いて……消えちゃったり、しないでしょね……？」

少女の心の中に浮かぶ景色。葬儀の列。棺に入って戻ってきた父親。突然姿を消し、死んでしまったゲイン。

大切な人は皆死んでいく。リリアを置き去りにして消えていく。その時と同じ、いやな予感が払拭できないのだ。忘れられないのだ。

「師匠……！ 師匠 つ……！」

人の渦の中、空に向かって叫ぶ。
その悲痛な願いは彼には届かず。その夜の闇はさながら牢獄のよう
でさえあった。

始まりの日（５）

久しぶりに吸う現実世界の空気。冷たい冬の夜の空に白い息が立ち
上っていく。

すっかり現実世界の服装に戻った俺は久々に降り立った屋根裏部屋
から下り、屋敷を後にした。

一度は遭難しかけた雪道を歩き、山を下り森を抜ける。人里に出て
からも暫く歩き続ける俺に、背後でタキシード姿のナナシがいよいよ
我慢できずに言葉を発した。

「あの、ナツル様？ 貴方はどこに向かっているのですか？」

「決まってるだろ。確かめに行くんだよ、色々な事を」

何時間か山道を歩き、それでもまだ日は昇らない。コンビニで飲み
物と弁当を購入し、駐車場で食べる。ナナシには酒をくれてやると、
満足げにちびちび飲んでいた。

田舎の山道風景……それは俺の幼少時代を象徴する景色だ。山と森
と川と、それに隔てられて広がる街の風景。ようやく日が昇り始め、
世界がゆっくりと明るくなる中、俺はかつて秋斗が暮らしていた家
に辿り着いた。

そこは既に空き家になっていた。秋斗の家族も引越してしまった

後で、もう様子を窺う事も出来ない。それが判れば用は無い。俺はそそくさと歩き出した。

「ナツル様？」

「ん？」

「一体何を？」

「……言っただろ？ 確かめてるんだよ。あの秋斗が本物なのか……冬香が本当に死んだのか。それを自分がどう思っているのか」

雪道を歩いているうちに周囲は明るくなってきた。犬の散歩をしているじいさんがナナシの格好をけつたいな目で見ていたが気にしない。もう慣れてしまったが、ナナシはコツチの世界じゃたしかに目立つ。

暫く歩き、駅に到着する。始発が出るまではまだ時間が有り余っていた。ホームで暖かい飲み物を購入し、ナナシにも手渡す。

そうして待ち続け始発に乗り、目をぱちくりさせているナナシを連れて移動した。目指す場所は現在の本城家のある二つ駅を越した場所にある街だ。

そこで下りて街を歩き、通学路を歩く学生たちの波を逆走し、ようやく本城家に辿り着く。俺は家を出てしまったので知らないが、俺が家を出た後にこちらに転居したという話を冬香から少し聞いていた。しかし想像通りというか、巨大な洋館がそこにはどっかりと居座っていた。

街の景観にあわせようとかそういう気は微塵も感じられない自己主張の強すぎる我が両親の家を前にし、門の前に立ちつくす。だが、ここまで来てじっとしているわけにもいかない。

「ここは、トウ力様の？」

「ああ、俺の実家でもある。今の時間なら、健康第一の両親は起きてるだろうよ」

呼び鈴を鳴らす。すると直ぐに召使からの返事が来た。本城夏流を名乗ると、召使は慌てた様子でどたばたと走り去っていく音が聞こえる。

しばらくすると扉が開き、母親が顔を出した。相変わらず冬香に似ない、どうにもヒステリックなお顔だ。しかし流石に久しぶりに見た自分の息子に感慨深いものが会ったのか、笑顔を浮かべて歩み寄る。

「久しぶりねえ、夏流……。今日は、どうしたの？ こんな朝早くに突然……」

「頼みがあるんだ、母さん」

俺の頼みを母は直ぐに聞き入れてくれた。家に上がらせてもらい、冬香の部屋に上げてもらう。冬香の話聞いたかったが、それ以前にまずはこの部屋だ。

死後そのままになっているという部屋を見渡し、ファンシーな内装のそれに思わず苦笑する。昔から男つばいのか女つばいのかわかんなかったが、最近は女の子つばいだったのかもしれない。

「母さん、変な事を聞くけど……冬香は本当に自殺だったんだよね？」

そりゃあ妙な話だっただろう。母は不審そうな顔を浮かべながら頷いた。冬香はある日、突然自殺としか思えない状態で発見されたの

だという。

「冬香は……覚えてる？ 昔住んでいた、山奥の屋敷、あったでしょう？ 今でも別荘になってるんだけど、そこで一人で発見されたの」

発見された当初、冬香はまるで眠っているかのような感じだったという。

しかしその命は既に絶たれており、死因は 原因不明の毒であると判断された。

所謂未知の毒だが、既存の毒素に該当する幾つかの特性を併せ持つ非常に強力な毒で、その毒が検知されたカプセルを幾つか彼女は握り締めていた。

当時は殺人事件の疑いもあったものの、いくら捜査しても犯人どころか人間が出入りしていた痕跡さえ発見できなかった。否、それどころか、冬香の痕跡さえも発見されなかったのである。

奇妙な事件だった。第一発見者は別荘の管理人で、定期的に掃除をしていた所冬香の遺体を発見した。しかしその時館に人が出入りした様子はなく、唐突に死体だけが現れたかのような感じだったという。

「でもまあ、自殺……としか考えられないわね。あの子には色々と背負わせすぎたから……」

それは恐らく俺に対する謝罪の念も込められていたのだろう。だが、今更どうこう言える立場でもない俺はそのまま母の話を聞くことにした。

その後順調に葬儀は進んだ。冬香はあの別荘のある街の近くの墓地に埋葬されているという。眠るように死んだ冬香 その葬儀には秋斗も参加していた。

「秋斗君なら顔を出していたわよ。直ぐに居なくなってしまうだけ

ど……。彼、冬香と仲がよかったから、辛かったんでしょね」

「その秋斗がどこに引越したのか知ってるか？」

「さあ、そこまでは……。でも、冬香なら知ってたんじゃないかしら？」

となれば早速調べるに決まっている。とは言え友人の住所なんていちいちメモってるはずもなく、わからないまま捜査は難航した。結局目がいったのは机の上においてあった冬香の携帯電話だった。見れば電話帳には秋斗の番号も存在した。自分の携帯電話を取り出してその番号にかけてみると、出たのは秋斗の母親だった。何故母親が電話に出たのかわからずに首を傾げていると、興味深い話を窺う事が出来た。

「行方不明？ 秋斗が？」

なんでも秋斗は冬香の葬儀があった日から家に戻っていないのだという。携帯電話は葬儀の日置いて行ったままで、いつか本人から電話が来るのではないかと親が持ち歩いていたそうだ。

秋斗の手がかりはないかと訊ねられたが、まさか異世界に居ますともいえず俺は電話を切った。だが、これで一先ず繋がった。秋斗は本物だ。そして冬香は本当に、死んでいるのだ。

溜息を漏らして振り返ると、急に振り返ったせいで母が気まずそうな顔をしていた。俺は何となく、どうでもいいことを訊ねてみる。

「……父さんは？ どうしてる？」

「……妹の葬儀にも来ない男とあわせる顔はないの一点張りよ」

「相変わらずか……。その様子じゃ当分死にそうにもないな」

苦笑を浮かべ、部屋を出る。それから直ぐに玄関に向かう俺の背中に母は言う。

「夏流は身体に気をつけるのよ。冬香みたいに、自殺なんてされたら……」

「大丈夫、俺は死なないよ。今でも師範と元気にやってるし。それじゃ、朝早くに悪かったね。母さんも、元気で」

母と別れ家の外に出るころにはすっかり昼間になっていた。気を利かせてか外で待っていたナナシと合流し、俺は駅へと歩いた。ホームで電車を待つ。何しろこんな田舎では電車は数十分に一本しかこない。都合悪く電車が出るところを目の前で目撃しながらキップを買った俺はベンチの上でナナシに声をかけた。

「なあ、ナナシ」

「はい」

「冬香は死んでたよ。秋斗は行方不明だそうだ」

「そうですか」

「つまりあいつは、俺より先にあっちの世界に行ったんだ。何らかの方法で……。そして俺より長い間あっちで生活してる」

だから、俺よりも真実に近い場所に居る。そして俺よりも強い。冬香の死を正面から受け止めたあいつと葬儀にも出なかった俺、どち

らが正しいのかは明白だ。

リリアを育てて冬香にする　それは確かに叶わない願いではないだろう。そう、あの子はきつと冬香に良く似ている。外見だけじゃない。内面も、そのすべてが。

わかつていたんだ。リリアを立派な勇者にするということは、彼女を冬香にするということと同義なのだ。でも俺はその事実からずつと目を反らしてきた。都合のいい救世主と、都合のいい世界……それを演じてきた。

「俺さ、逃げないから」

俺の言葉にナナシは振り返る。ただ、これだけはハッキリ言っておこうと思った。

「途中でリタイアなんかしない　。俺は、あの世界で覚悟を決めた。自分の行いが正しいかどうかはわからないけど、でも……もう一度秋斗と会って話さなきゃいけない。多分、それも俺のやるべき事だと思うんだ」

「……安心しましたよ。貴方はもう、ここで降りるのかと思いましたから」

「降りねえよ。降りられるかよ……。俺はまだ、何も判っちゃ居ないんだ。何も……」

ホームに電車が入る風の音で言葉は掻き消された。電車に揺られてまた数十分。雪山に戻ってきた俺は、冬香の墓にやってきていた。そこで彼女の墓に積もった雪を退かし、小さく溜息を漏らす。冬香は死んだ。本当に死んだのだ。俺はその事実からずつと目を反らしてきた。

向き合わなきゃいけなかったのに、向き合わないままで……。冬香の事が好きだったけど、でも彼女はもういない。俺が目を反らしたから。手を跳ね除けてしまったから。

「俺を……恨んでるか？」

目を閉じれば直ぐにでも思い出せる。いつでも明るくて元気で、俺を遊びに誘う彼女の姿を。たった一人の友達で幼馴染だった秋斗の事も。

三人で上手く行っていた。全てが順調だった日々。なのにどうしてもほんの僅かなすれ違いがいつの間にか取り返しの付かない亀裂となり、俺たちの手は離れてしまった。

秋斗もきつとこの場所で俺と同じように過去を思い出したはずだ。

そして俺と同じように、決意したはずなのだ。俺の場合それが少し遅すぎただけで。だから別に、変わりはない。

「お前が俺に救世主という役割を望んでいたのなら、俺は……。せめてそれを演じるよ。お前の気持ちに応えられるように。でもさ、冬香……。お前はホントは、そんなこと望んでなかったんだろ？ 優しかったお前が……。世界をあんなふうに、俺と秋斗をあんなふうにしちまうわけがないんだ」

いつでも優しく、誰よりも泣き虫だった冬香。その姿を思い出すと、どうしてもリリアをダブってしまふ。

でも、そうじゃないんだってわかってる。重ねてしまふのは失礼なんだって。それじゃ意味ないんだって。でも、それでも忘れられないんだ。

だからってリリアへの気持ちが嘘なわけじゃない。ずっと一緒にいたんだ、もうわかってる。俺のリリアに対する気持ちも、信じたいという願いも、それは嘘なんかじゃない。それはそれで俺があつた世

界で確かに培った事実なんだ。

ゲルトは諦めないと言った。どんなに希望の見つからない過酷な旅路でも歩こうと言ってくれた。なのに俺が、旅を止めてしまっわけにはいかないから。

「希望を探す旅路の始まりだ……」

彼女の願いを俺が見つけよう。そうして秋斗とケリをつける。それで俺は　そしたらきつと、冬香の幻想から卒業できるから。

「ナナシ……。お前が何者なのか、何故俺を呼んだのか……。それはもう、訊かない。それがお前の役割なんだろう？　お前は判っていても、俺に未来を教える事も、真実を教える事も出来ない。答えはシンプル、それが物語として当然のルールだからだ」

だが、その限度を超えた存在として秋斗はあの世界に生きている。その存在そのものが世界のルールを大きく捻じ曲げ、あの世界を幻想だと割り切るやつの行動が悲劇を生む事になる。

世界のゆがみはどうしても正せない。だからそうなってしまうまえに止めさせなければならぬ。自分自身もその、矛盾した力を行使せねばならないとしても。

「……ワタクシは、貴方の事を少し誤解していたようです」

振り返るとナナシは苦笑を浮かべていた。

「貴方は苦境を前にしたら逃げ出すと思っていた。ワタクシが世界に関わりのある存在だと知れば、教えるとせがむと思っていた。しかし貴方はそれでも尚、あくまでも救世主としての役割を全うするのですね？」

「ああ」

「それが、誰かの掌の上だったとしても？」

「ああ。そんなのは、関係ないんだ。大事なのはあの世界やあの世界の人々や誰かの意思に流される事じゃない。それでも自分が選んで自分がどうしたいか考えて行動した結果が、大切なんじゃないのか」

正直まだ気持ちは落ち着かないし迷いも疑念も消し去れない。不安も山ほどある。でも それでも望んだんだ。冬香に辿り着くんだと。あの子の遺志を、引き継ぐんだと。

一度そう決めたのだから、偽りの救世主でも役割を貫かねば。これから先何度も覚悟は揺らぐだろう。それでも折れてはいけなし降りるわけにもいかない。

「やりのこした事があるんだ。だから、戻らなくちゃ。ディアノイアに」

ナナシに微笑みかける。そう、ここから始めるんだ。救世主としてもう一度 残酷な世界のルールから目を背けないで。

山道を登り、今度は遭難しないであの館へ。そうして屋根裏部屋に登り、再び原書を開く。そこにはもう 何も写されてはいなかった。

そう、これから先、秋斗という巨大なイレギュラーが俺へ関与するのであれば、予知もへつたくれもあつたものではない。だがナナシは一つだけ教えてくれた。

「原書は『預言書』ではないのです。それはあくまで心を映す書物

……。そのことだけ、ヒントとして覚えておいてください」

こうして俺は再びディアノイアへと戻る事になった。ディアノイアに戻ると、そこはもう既に日が暮れていた。どうやら今回も妙な所に転送された様子だったが、鍛えただけあって見事に着地する事が出来た。

夜の街。学園祭はまだ終わっていないかった。となると、二日目の夜か三日目の夜か……。どちらにせよいくらか時間が経ってしまったらしい。

元の世界に帰ったのと同じ場所に出ただけあり、背後は昼間の戦いの痕がはつきりと残されていた。秋斗はこの世界のどこかにいる。そして今でもこの世界に関与し続けている。

あいつもまた救世主を名乗るのならば、俺は自分の力でそれを阻止することしか出来ない。今この世界の人々出来る誠心誠意の行動は、それしか思いつかないから。

たとえもうリリアに信じてもらえないとしても、それでも俺は秋斗を止める。決着をつける。過去からずっと続く、擦れ違ったままの関係が終わらせる。それだけは、絶対に譲れない。譲ってはいけないと思うから。

心に誓い、眉を潜めて目を閉じる。異世界人、か。なんで俺はこの世界の中ではこんなに孤独なんだろう。誰にも本当の事も言えないで、一人で戦わなければならない。それでもいいと誓ったのに、迷ってしまう。皆に本当の事を言えない、嘘を付かねばならないという事実。そして、リリアにそれを知られてしまった事。

「師匠っ!!」

リリアの事を考えていると、背後からリリアの声が聞こえた。振り返るとそこには少し離れた場所から駆け寄るリリアの姿があった。途中で転び、それでも直ぐに立ち上がって駆け寄るリリア。肩で息

をして、汚れた格好でリリアは顔を上げる。まるで、そう。一日中俺を探し回っていたかのように。

「師匠……」

「……」

「は……」

「は？」

「歯を食いしばれえっ!!」

「おぶうつ!？」

魔力を込めたかなりいいパンチを顔面に貰ってぶっ飛ぶ俺。何故こんな事に……。空中をグルグルときりもみ状に回転しながらそんな事を考える。

民家の壁にたたきつけられて思わず血ヘドを吐きそうになる。そんな俺に駆け寄り、リリアは倒れた俺に馬乗りになって襟首を掴み上げた。

「ちょ、タンマタンマ!! 死ぬ! 死ぬからっ!!」

「どれだけ……っ。どれだけ、心配したか……!! どれだけ、探したかっ!! どれだけ、どれだけ……っ! どれだけ……っ」

頬に零れ落ちた熱い雫。リリアは大粒の涙を流しながらじっと俺を見下ろしていた。それはずっと、きつと俺を探してくれていたから。居なくなってしまうた俺を信じてくれていたから。

「急に、居なくなつて……！ やだよ、そんなの……。 お別れも言えないなんて、絶対にやだよ……っ！ リリアを置いてかないでよ、師匠……。 いい子に……。 いい子にするから……。っ」

一人ぼつちにしないで。

悲痛な呟きに俺はただ倒れたまま目を細めていた。 リリアは子供のよう泣きじゃくりながらひたすらに背中を小さく丸めていた。 まるで迷子になつていた子供が保護者を見つけたような……。 そう、多分それは遠い答えではなかった。 彼女にとって、俺は。

「……ごめんな、リリア……。 怖かつたな……」

片手でリリアの頭を撫でる。 そう、彼女は沢山の物を失つてきたのだ。 何も出来ないまま、別れも告げられぬまま。 だから毎日一生懸命に生きている。 友達の為に必死になれる。 手に入れられたもの全てが掛け替えの無い奇跡だと知っているから、 だからこんなにも涙を流せるんだ。

そんな彼女にとって置き去りにされることだけは怖くて仕方の無いことなのだ。 裏切られたくないのだ。 期待したくないのだ。 その先にある失意を知りたくないから、 だからずっと脅えて笑っていただけの可哀想な女の子なのだ。

「師匠とお別れしたくない……。 時々師匠、いなくなつて……。 でも、ぱつて戻つてきて……。 ほんと怖くて仕方なかった。 師匠いつも消えちゃいそうだから……。 いつもいつも、『いたそう』な顔してるから……。っ」

「……………そっか」

「ごめんなさいって言いたかったのに！ 謝る事も出来ないまま、お別れなんてやだよ！ リリアは……リリアは、師匠と離れ離れになりたくない……」

上半身だけを起こし、リリアの涙を拭う。そうしてそつと抱きしめて、腕の中で泣きじゃくる彼女の大粒の涙を感じていた。

わんわん泣き喚いて、リリアはそうして悲しみを正面からぶつけてくれた。傍に居なきゃいけないのに、少しでも怖い想いをさせてしまった。今はそれが素直に申し訳なかった。

リリアはそれから長い間泣き続け、よろよになるくらいに泣き続け、泣き疲れすぎてグッタリした様子で俺の背中に乗ったまま、首筋に頬を寄せていた。部屋まで送り届けようとする帰り道、リリアは耳元で囁いた。

「師匠の事、信じるって決めたんです……。だから、今日の事は、誰にも言ってませんから」

「そっか。ありがとう、リリア」

「でも……本当は、すごく信じられなくて、すごく怖くて……。だから、せめて嘘でもいいから、傍に居て……。居なくなったりしないって、約束してください」

「ああ。約束するよ」

そつ、それはいつかきつと嘘になる。それでも俺は、嘘をつきながらでも、この世界で生きていく。

それを仕方が無いと言い訳する事は出来ないけど。でも不器用なりに、馬鹿なりに、弱虫なりにやっていかなきゃいけないから。

「だからお休み、リリア。ありがとう」

ぎゅっと首に腕を回し、涙を擦るようにしてリリアは寄り添って目を閉じた。夜の闇の中彼女を部屋まで送り届け、ベッドに寝かせてクロロに後を任せた。

ポケットに両手をつっ込んだままナシと共に歩く。そういえば俺は初めてこの街に来た時、何がなんだか判らずに転んでいたっけ。結局いつでもリリアが傍に居て、皆に助けられてきた。

この世界も全ては嘘にすぎないんだ。幻にすぎない。でも、それでも今ここにある気持ちを信じたい。だから俺はもう少しだけ頑張りたいと思う。

「なあ、ナナシ。俺　秋斗を倒すぞ。文句はないな？」

「ええ、マスター。文句などありませんとも。どうぞ、存分に」

苦笑を浮かべ、それから気持ちを切り替えて空を見上げて手を伸ばす。

星も月も、自分の気持ちだつてつかめない不確かな右手。それでもいつか何かに届くと信じている。そのために出来る事を始めよう。だからそう、ここからがスタートだ。今日が俺の、本当の始まりの日だ。

覚悟をしよう。たとえこの先にどんな辛い結末が待っていたとしても。最後の最後まで、走り抜けるのだと。

決意は直ぐに揺らいでしまいそうなほど頼りない。でも、今はそれでいい。何もしないで諦めるよりは、ずっといい。

夜空の下、暗い雰囲気を景気付けるような祭りの喧騒がありがたい。夜の闇の中、一人で朝まで俺は歩き続けていた。

始まりの日（6）

「……なんじゃこりゃ」

あれから朝まで歩き回ってベッドに飛び込んだのは日が昇ってから。そうして少しの間眠っただけのつもりだったのに、目を覚ましたらすぐ傍にリリアの寝顔があった。

幸せそうに涎を垂らしながら毛布に包まれてぬくぬくしているリリアは勝手に人の腕を枕代わりにしていた。お陰で完全に腕の感覚がない……。

何とも中身の詰まって無さそうな軽い頭だったが、何時間も乗せていればこうなるのは当然の事……。深々と溜息を漏らし、身動きの取れない状態のまま頭だけを動かして部屋の中を見渡す。

普段ならあのうさが枕元辺りに転がっているはずなのだが、今日に限ってその姿は見当たらなかった。何故リリアと一緒に寝ているのか、全く持って謎だが……。

「本当に、幸せそうに寝てやがるなあ……」

「むにゃむにゃ……」

お約束な寝言を言いながらリリアは寝返りを打った。その顔がこれ以上無いほど近づき、深々と溜息を漏らす。

一体何故人のベッドの中に勝手に潜り込むのか。その癖は冬香もそうだった。尤もあいつは大人になるに連れてそんな事はしなくなっただが。

寝ているリリアの前髪に指を伸ばす。さらりとした感触が心地良い。さて、思い切り跳ね除けて起こしてやるのも一興だが、暫くほっと

いてみるのも悪くないかもしれない。

その判断が間違っている事に気づいたのはそれからおよそ一時間が過ぎ去った時だ。一向に目を覚ます気配のないリリアの涎が腕をずるずるにしている。きたねえ……。

「おい、いい加減にしろこのへこたれ勇者！ 人の腕でいつまで寝てんだ、しかもアーマーククロークで寝るな！！」

そんなゴツゴツしたクロークでよくここまで熟睡出来た物だ……。身体を揺さぶってみてもリリアは全く目を覚まさない。参った。一体俺にどうしろというのか。

ふと思い出す。以前、こうしていつまでも人のベッドで寝こけていた我が妹をどうやって起こしていただろうか。思わずニヤリと笑ってしまった。リリアの耳元にギリギリまで口を近づけ、俺はそれこそ自分でも背筋がゾクゾクするくらい、甘い声で囁く。

「リ～リ～ア～」

「うひいやあつ！？」

途端に飛び起きるリリアの肘が顔面を強打する。鼻血は出ていないようだったが相当痛い。パニック状態でベッドの上でジタバタ暴れまわるリリアの頭を両手で掴み、正面から頭突きをかます。

吹っ飛ばされてへたれこむリリアを強引に引っ張り起こし、半開きの目を無理に開いてちゃんと立たせる。

「人のベッドで何してんだ」

「おふあようございます、師匠……。あれ？ リリア、師匠を起こしに来たはずなのに……。師匠、起きてくださいー……」

「寝言は寝て言え。いや本当にお前の場合は言いそうだから遠慮しておく。とにかく起きろホラ、ちゃんとせい」

寝ぼけるリリアの頬の涎をふき取り、洗面台に連れて行って顔を洗わせる。それでもまだ眠いのか、リリアはうとうとした様子で人のベッドに腰掛けえていた。

「まったく、人を起こしに来て一緒に寝てどうする馬鹿。それにお前に起こしてもらわなくても俺は普通に起きられるんだよ……子供じやあるまいし」

リリアが半分寝ている間にてきばきと着替えを済ませる。リリアは俺が着替えている間もぼくくくとしてずっと床を眺めていた。そういえば最近はずっと寝てばかりだというのに、がんばって起きてここまで来ただけでふらふらだったのかもしれない。

そんなになるなら来た所で意味なんかないのだという事に何故気づかないのか。溜息が漏れる。朝から溜息の大バーゲンだ。

「まったく、ナナシはどこ行っただか……。おらリリア起きろ！学園祭三日目でもう昼だぞ？　とにかく飯にしよう、飯」

「うずー……」

何だか良く判らない事を呟きながらリリアは完全に座ったまま寝ていた。ぐらぐら揺れるその小さな身体を背負い上げ、寮を後にした。ぐったりした様子で肩に涎を垂らしながらリリアはすやすや眠っている。魔力を使えるようになった今ではリリアの身体なんて軽いものだ。背中で揺れるへこたれ勇者の体温を感じながら一人で公園まで歩いた。

三日目も学園祭は大盛況だ。シャングリラそのもののお祭り騒ぎは学園祭が終わった後も暫く続くという。こんなに楽しい雰囲気が続くと、逆に飽きてしまいそうだ。

ベンチの上にリリアを降ろして一人で飲み物を購入する。眠っているリリアの頭の上に小鳥が止まり、それでもリリアはぐうぐう寝息を立てていた。その隣にどっかりと座り込み、空を見上げた。

「青いなー……」

寝ているリリアの頭の上、小鳥が俺の言葉に反応するように小首を傾げる。それがまるでリリアそのもののように見えて、小さな勇者の寝顔をしばらく覗き込んでいた。

始まりの日（6）

それは夢だった。何故夢だと判るのか？ それは夢の中を歩くりリア・ライトフィールドは、現実の彼女よりもずっと時を遡った姿だったからだ。

だからそれはリリアが見た夢。その中で、幼い彼女は祖父と一緒に砂浜に立っていた。釣り道具を片手に砂浜を歩く祖父、ヴァルカン・ライトフィールド。その背中にリリアは問い掛けた。

「おじーちゃん」

「んー？」

「おとーさん、どうして死んじゃったの？」

「んー。どうしてだろうなあ」

暢気にそんな事を言うヴァルカン。リリアは小走りで祖父の歩幅に追いつき、顔を覗き込む。祖父は別にどうでもいい世間話をしていくかのような顔をしていた。

「おかーさん、どうして死んじゃったの？」

「んー……。そいつは難しい質問だ。まあ世の中色々あるんだよ」

二人が辿り着いたのはとある岬だった。そこでヴァルカンは長い長い釣竿を海へと投げ込み、どっかりと胡坐をかいてバケツをリリアに手渡す。

「お前の母親がどんな奴だったか知りたいか？」

リリアは無言で頷いた。リリアは自分の母を知らない。それは幼い日に死んでしまったという事だけ。そう、それこそリリアを産んで直ぐに亡くなったという話だけが聞かされていたから。

最近までそれはリリアにとってはどうでもいいことだった。何しろ街の人々は皆良い人で、カザネルラの街がリリアは好きだったから。しかし、戦争が終わり、父であるフェイトが死体になって帰って来た日、思ったのである。知りたいと。興味を持ってしまった。それは子供心に芽生えた疑問だった。

顔さえ見たことのない、記録さえも残っていた母。それはヴァルカンに自分を託し、命を落とした。その話を誰から聞いたのかさえ曖昧で、だからそれくらいリリアは自分の親に無関心だった。

「お前の母親はなあ……。まあ、勇者部隊の女のうちの誰かだろうなあ」

「……？ だれか？ だれかって、なに？」

「んー……。これも難しい話だな。あー、フェイトはだからな、あんまり後先考えないんだよ。だから大体近場の女にはぜーんぶ手を出してた。んで、これまた何故かあいつは異様なくらいにモツテモテだった。いっつもあいつの傍には美女が居た。まああいつ自身顔がよかったし、あの馬鹿さ加減は魅力だったのかもしれないがな」

「……？ どういうこと？」

「だからなあ、リリア。お前の母親は、誰だかわからねえんだわ。すまん、爺ちゃんたち嘘付いてたわ」

その言葉は幼い少女に激しい衝撃を与えた。その場でわなわなと震え出し、祖父を崖から海へと突き落としたリリアは大声で泣き喚きながらその場を走り去った。

自分の手の中にバケツが握られたままだと気づいたのは停止したあとのことで、バケツを海に投げ捨てようとしたリリアは誤って崖から転落してしまった。

かろうじて岩から飛び出していた木の枝に引つかった物の、断崖絶壁真正正銘の死に際で、少女は泣く事もせず、膝を抱えて世界を眺めていた。

空が驚くほど澄んでいる日だった。どこまでもどこまでも、どこまでも続いている海と空。その二つの蒼は確かに違って、水平線の彼方で丁度絵の具が混じるように、一つに重なり合う。

ぼんやりとその景色を眺め、リリアは膝を抱えたまま落ち込んでいた。命の危険よりも、自分の母親が誰なのかも判らない事がショクだった。いや、きっとそれ以上に祖父が自分を騙していた事が辛かったのだ。

ヴァルカンをリリアは純粹無垢な気持ちで全てを信じていた。ヴァ

ルカンのいう事は世界の全てだと思っていた。今まで何度も嘘を付かれ、その旅に祖父を殺しかけてきたリリアだったが、それでもまだ祖父を信じていた。

「おとーさん……。おかーさん……」

そうして青空が茜色に染まっていく様を少女はずっと眺めていた。ずうっと、ずうっと。そうして日が暮れそうになった時、突然リリアの身体を大きな腕が掴んだのだ。顔を上げるとそこには見知らぬ男が居た。絶壁を生身で降り、リリアを抱えて一息に跳躍して戻る男。黒い髪に赤い瞳が特徴的な、優しい笑顔の人だった。

「見つけたよ、リリア。ヴァルカンさんが心配してる。さあ、お家に帰ろう」

リリアは黙ってその男をじっと見つめた。腕に抱かれ、そうしているうちに何故か涙が溢れた。ぽろぽろ涙を零しながら、少女はそれを拭わずに頷いた。

その時リリアが思い返していたのは、同じように迷子になったリリアを見つけ出してくれた父の事だった。金髪の青年、勇者フェイトはリリアを空中に放り投げると、あるうことか『たかいたかい』と口にし、自らの一人娘を上空数十メートルまで思い切り何度も放り投げた。しかしリリアは泣かなかった。そんな父親の態度に彼女は既に慣れつつあったからである。

「よお、リリア！ 迷子になるなんてカッコイじゃねえか、ん？ こんなにちっこい癖にもう冒険者気分か、コノヤロー！」

「おとーさん、むすめの扱いになってない」

「アッハハハハ！ バーカ、子育てなんてのはこれくらいで丁度いいんだよ！ つーか徐々に戦場から戻った父親に言う言葉かそれは？ この馬鹿娘！」

リリアを強く抱きしめ、その場でグルグル回転するフェイト。そうして笑顔のまま家の方向にリリアを投擲し、自らも跳躍して空を飛ぶように天空から娘を抱いて舞い降りる。そんな事が日常茶飯事で、リリアは雲の中から世界を見下ろしていた。

そのすぐ傍で父は大声で楽しそうに笑いながら世界の両手を広げて叫んでいた。『俺様最強すぎるぜー！』……と。

まともな父親ではなかった。でも子供のように笑いかけるその顔は確かに父親だった。その笑顔と同じ物を、全く正反対の性格の男から見出したのは何故なのか。

それは、二人の勇者が実は似たもの同士だったからなのかもしれない。兎に角崖から救われたリリアは、ゲインに抱かれて家に帰った。平然と魚料理を作っていた祖父を背後から熱したフライパンで殴りつけ、大騒ぎに発展する。そんな中、ゲインは口元に手をあて微笑んでいた。

始まりはそんなことだった。出会いというのならばそんなことだった。それでもリリアは鮮明に思いだせる。ゲインの笑顔も、フェイトの笑顔も。

「ねえ、おじさんはしってる？」

「うん？ 何をだい？」

「リリアの、おかーさん」

幼い日、ハッキリと思い出せる。複雑な表情を浮かべ、そうしてた

だりリアを抱き上げたゲイン。その時彼が何を思っていたのかはわからない。

ただ、その時間が大切な物だった事は確かなのだ。ろくでもない親、ろくでもない祖父、親でもないのにしっかりしていたゲイン。子供心に刻まれた記憶。それでもりリアの手を離れ、二人の勇者は居なくなった。

別れも告げず、理由も告げず、ただ再会した時は死体に成っていた。だから気づけばりリアは笑っていた。自分を置いて行った二人の前で、笑っていた。

それは恨みでもあり、泣き言でもあり、強がりでもあり、そしてきつと何より 純粹無垢な、信じることしか知らなかった少女がいた、生まれて始めてのウソだった。

「お、やっと起きた」

りリアの隣で昼食兼朝食を口に運び、しばらくぼんやりと空を眺めていた時だった。突然目を覚ましたりリアは俺を見るなり身体をふるふる震わせ、突然飛びついてきたのである。

「わーん！ おとーさんっ！！」

「何でじゃ！？」

せめてお兄さんだろオイ。

どんな夢を見たのか知らないが、すがり付いてグズグズ泣いているりリア。しばらくほうって置こうと思ったのだが、俺が立ち上がると同時にりリアも立ち上がり、ぎゅうつと俺の手を掴んで放そうとしなかった。

それを振りほどこうとしてりリアの目を見ると、どこかのテレビで

Mで見たような、子犬のようなつぶらな瞳で俺をじっと見上げて来た。もうこうなると断念するしかない。

「俺、これからアクセルン家行かないと……」

「じゃあ、ついてきます……」

「……あ、そう……」

リリアと手を繋いだまま歩き出す。今日は学園祭最終日。約束はまだ二つ　一つは殆ど守れなかったが　残っている。とりあえず約束した手前、アクセルの妹さんを案内してあげなければならない。街中を歩く間もずっとリリアは俺を見ていた。普段どおり、頭の足りなような顔で、いつ転んでもおかしくない危なっかしい足取りで、震える手で。でもその眼差しがどこか普段とは違う、そう、触れれば壊れてしまいそうに見えるのは多分俺の気のせいなんかじゃない。この子はとても不安定なのだ。誰も信じられないし、誰も信じたくない。しかしそれとは真逆の心も持っていて、その二律背反がリリアという少女を蝕んでいる。

勇者の面と魔王の面、光と影をその身体の中に宿すように、彼女の心も同じ事。勇者とはある意味魔王と同義なのかもしれない。彼女は一つで二つで、二つで一つだった。

「なありリア。どんな夢を見たんだ？」

俺の問い掛けにリリアは顔を上げる。それから少しだけ憂鬱そうな顔をして、小さな声で呟いた。

「昔の夢、です。まだ、お父さんが生きてた頃の……ゲインが居た頃の。リリア、二人の事が大好きで、だからリリア、いつつ二人

にべったりでした」

ぼんやりとした口調で語るリリア。その言葉は二人への思いを如実に表している。そして同時に表情が物語っていた。『ねえ、どうして私を置いて行ったの?』と。

「でも、最近急に判らなくなりました。リリアはどうして、ロギアを内包することになったのか……。どうして、リリアなのか……。それはきつと、リリアの大好きな二人の仕業だと思っんです。だから、ああ、いやだなあっと思っんです」

「何がだ?」

「大好きな人を疑わなきゃいけない。疑ってしまう。信じたいのに信じられない。そういうの、嫌なんです。だったら最初から信じられない方がいい。ウソのほうがいい……」

ぎゅっと強くリリアが俺の手を握る。その言葉もきつとウソだ。だからこの子は　そう、うそつきだ。

「ずっとこの世界が大嫌い……今はもつと嫌いになりました。ゲルトちゃんがあんな事になって、自分はあるんで……。勇者の間だったはずの人と戦って、本当に一体何やってるんだろって、不安でしょうがないんです。嫌で仕方ないんです。こんな事、貴方に言っても仕方が無いけど……」

「どうして仕方ないんだ?」

「人はみんな一人だからです。生まれた時から死ぬ瞬間まで……。だから、何も頼れない」

冷たい言葉だった。俯いたリアのその一言は俺の心を鋭く射抜いた。普段から明るく元気良く振舞う彼女が口にするその悲しい言葉は、きつとウソでもあり、そしてやはりウソなのだから。

「師匠の事、好きです」

足は止めなかった。それは全く甘酸っぱさ何てない、乾いた言葉だった。

「好きなんです……」

それは恋や愛なんかとは多分違っていた。

俺にはそれが、『たすけて』といっているように聞こえた。

『裏切らないで』と、必死で頼んでいるように、聞こえていたんだ。

「ああ……」

目を閉じて呟く。

今の俺にはそんなことしか言えないから。

だから代わりにその手を強く握り締めた。

欺き続けられる自身はない。自分自身も、この子の事も、騙され続けてくれる保障はない。リアの事も、俺そのものも。

だからどちらにせよこれは部の悪い賭け。割に合わない嘘。ただ誤魔化して見繕った、はりぼてのような関係。

それでもいい。仕方が無い。自分に言い聞かせる。いつかこの子の目の前から居なくなってしまう自分を知っているから。だから俺は応えない。

決めたのだ。裏切らないと。決めたのだ。信じないと。決めたのだ、

もう。

アクセルのアパートの前で手を離す。リリアはその手を名残惜しうにじっと見つめ、それから背後で手を組んで晴れやかに笑った。

「それじゃあ、また！」

リリアは走り去っていく。その背中を追いかけない。追いかける資格なんて俺にはない。でも 秋斗とケリをつけられたら、その時は……あの子に気の利いた一言を送れるだろうか。

「……考えておかなきゃな。救世主っぽい、決め台詞」

肩を落として前を向く。アクセルの部屋に向かう。扉をノックする。出ない。だから俺は何も考えずに安易に扉を開いた。友達の部屋だからいいと思ったのだ。

それが間違이었다。開いた部屋の中、そこには執行者が フェンリルがつけていたような仮面と、無数の短剣が散らばっていた。

部屋の中に飛び込み、その装備を確認する。それはアクセルのものなんかじゃない。この部屋に滞在していた、もう一人の。

「レン……？ レンが執行者？ だとしたら、アイオーンが……」

慌てて振り返る。そこには部屋の出入り口を塞ぐようにして立つ執行者の姿があった。短剣を手に、執行者は俺に告げる。

「大司祭様が貴方をお呼びです、本城夏流。今すぐにオルヴェンブルムにご同行をお願いします」

窓からも執行者が飛び込んでくる。突然の状況に訳もわからず混乱

する俺の腕に手錠がかけられ、執行者それを引いて歩き出す。まるでそれは罪人のような扱いだった。

「シュートつてのはあんたか？」

シャングリラの四つある駅のうちの一つ。東の駅に立っていた秋斗に声がかかる。背後に立っていたのは、大きな荷物を背負った剣士アクセル・スキッドだった。

秋斗は直ぐに銃を手にする。二人のにらみ合う姿に異変を感じ、周囲の利用客が下がる中、アクセルは鋭い眼差しで秋斗を射抜く。

「この間、執行者があんたを襲撃したろ」

「ああ。雑魚しかいなかったけどな。それがどうした？」

「その雑魚の中に、俺の妹が混じってたんだわ。一命は取り留めたが、今でも病院の中だ」

「それがどうかしたのか？」

アクセルは荷物を空中に放り投げる。そこから飛び出してきた無数の剣がアクセルの周囲に突き刺さった。

風の魔力を帯びたアクセルの剣。それは洗礼儀式を受けた聖剣。今まで彼が扱っていたようなお遊びのような代物とは質が違いすぎる。

落ちた剣のうち二本を引き抜き、構える。特殊な術式が刻まれた剣と尋常ではない殺気に秋斗の表情も一変した。互いに武器を構え、相対する二人。

「恨むなら自分を恨んでくれよ。元はといえばあんたのせいなんだからな。あんたが執行者を倒しちまうから、俺が出なきゃいけないんだ」

「何だデメエ。俺に勝てると思ってるのか？」

「さあな。ただ、執行者の増援が来るまでも時間は稼ぎされる」

剣を振るう。風の刃はアクセルの周囲を切り裂き、見境なく物体を切断しながら広がっていく。その嵐の中心地でアクセルは剣を秋斗に向けた。

秋斗は

深々と溜息を漏らし、肩を竦めて笑う。その周辺を音を立てて電流が流れ、銀色の雷光がホームの中で響き渡る。

「時間稼ぎか……。まあ、こっちとしても丁度いい。どうせ退屈してたんだ。相手をしてやるよ」

二人が戦闘を開始した頃、シャングリラの市街地に倒れるマルドゥークの姿があった。その周辺には数名の聖騎士が彼同様倒れている。マルドゥークの正面に立っていたのは仮面の騎士、フェンリル。その腕には気を失ったアリア・ウトピシュトナを抱えている。

『王女誘拐、か。フン……。こんなくだらない事をオレがせねばならんとはな。恨みますよ……。ゲイン』

「ま、待て……。！ 貴様らは、一体……。？」

倒れたままフェンリルの足に縋りつくマルドゥーク。それを振りほどき、顔面を踏みつけながらフェンリルは語る。

『何者もあつたものか。何者でもないのさ、オレたちは。そう、最初からな。』

背を向けるフェンリル。その背中に手を伸ばしながらマルドゥークは気を失った。

明るい祭りのシャングリラに、新しい戦いの予感が迫っていた。

勇者の資格の日（１）

全て燃えてしまった。

全て朽ち果て、全てが殺された。何もかもがなくなってしまった世界の中、少年は一人で歩いていった。

心の中に渦巻いていたのは後悔の念。ただ一人、生き残ってしまった自分への。そしてもう一人、生き残らせてしまった彼女への。

炎の街を一人で走りぬけた。彼がその破壊を免れたのは単なる偶然だった。そう、普段ならありえないような行動の先に不幸が続いた、なんてことは無いただの偶然。

そうしたものを運命だったのだと定義するのならば、それは紛れも無い運命の結果だった。そのどうしようもない二文字の宿命に準え、彼の世界は燃え落ちた。

「親父……！ お袋っ……！」

燃える我が家の扉を開けば、そこには無残に食い荒らされた両親の姿がある。それはもう判っていたはずなのに、信じたくはなかった。戦争中だから、どんなことがあるかわからない。だから、毎日後悔しないで生きていけるように頑張ろう。それは、彼の父の言葉だった。母はそんな父を信じ、決して裕福ではなかったものの、幸せな暮らしが続いていた。

戦争の足音は遠く、まだ聞こえなかった。だからそれはまるで遠い世界の出来事のようにで現実味もなかった。だが、確かにそれは近づいていたのだ。誰にも気づかれない速さで。

父は母を守るようにして抱きしめて死んでいた。首から上はなかった。両足もなかった。ただ二つの腕がせめて彼女だけはと守ろうとした事を物語っていた。なのに、結局首から上と一緒に貪られ、あ

つけなく命は尽きてしまった。

炎の中、後退する少年。認めたくない現実の中、振り返ったそこには巨大な魔物が立っていた。魔物は少年を捕らえようと腕を伸ばし、弾かれるようにして少年は駆け出した。

まだここで死ぬわけには行かない。まだ死んではいけない。この景色を見せてはいけない。だから走らなければいけない。止まってはいけない。いけない。いけない。

何度も言い聞かせる言葉もむなしく、張り裂けそうな心臓の音さえ凍り付く。周囲をぐるりと取り囲んだのは魔物の群れだった。どこにも逃げられない。そう認識した瞬間、少年は転がっていた棒切れを手にした。

戦うつもりだった。そんなことが無理だということは良くわかっていた。それでも戦うつもりだった。守る為には戦わねばならない事もあると、父は言っていたから。

それを実行して死んだ父に、ここで逃げ出す姿を見せたくなかった。泣き喚いて不幸を叫び、それで無様に死んでいく様など、絶対に見せたくはなかったのだ。

「　　よお、ぼうず。その数の魔物を相手に一人で大立ち回りか？
カッチョイ〜じゃねえか。だが、そいつは待った、だ」

声は上から聞こえた。頭上を見上げ、少年は目を見開いた。

舞い降りてくる男は白いマントを棚引かせ、巨大な剣を片手に降り立つ。ふわりと舞うその白の色彩は翼のようにさえ見える。少年は、そう……『お迎え』が来たのだと思った程に。

しかし男は巨大な剣を肩に寄せ、少年の頭をぐりぐり撫でて笑う。そうして言うのだ。まるで冗談のように。

「お前が今から村の仇討ちしようってえのに、邪魔して悪いな。だが、ここは俺に譲ってくれよ　　な？」

少年が見つめる大剣の刀身に紋章が浮かび上がる。その輝きを片手に男は目にも留まらぬ速さで駆け出した。

一瞬で魔物を両断する力、返り血一つ浴びない優雅さ、そして何よりも 戦いの中で尚、その男は笑顔を絶やさなかった。

全ては瞬く間。数十匹の魔物を切り伏せ、何て事は無い、少し道端に転がっていた石が邪魔だったから蹴ってどかした程度の態度で。男は魔物を皆殺しにして少年の前に片膝を着いた。

「後は任せときな、チビツコ英雄さん。残りの魔物は おっさんの手下がぶっ飛ばしてやつから」

「誰が手下ですか、フェイト……。僕は貴方の手下になった覚えは無い。パーティーに上下関係などあるものか」

少年の背後、そろそろと現れる数人の仲間たち。黒い剣を持った青年が白い剣の青年と並び、少年の前に立つ。

「生存者か……」

「ああ。ゲインはフェンリルと鶴来を連れて左から殲滅してくれ。俺はソウルと右から行く。おい、その見習い騎士」

男の声に呼ばれて走ってきたのは槍を手にした子供の騎士だった。まさに見習いに行った様子で、騎士は少年の傍に立つ。

「お前の担当はこいつな。無闇に動かずここで待機。すぐ行って戻ってくつから、ちよつくら待っててくれ」

「了解です、フェイトさん」

少年はその男が何者なのかを理解していた。少年の前に立ち、炎の海へと歩みを進めて行く者達。勇者とその仲間、通称勇者部隊^{フレイブクリン}。だから、勇者に憧れた。その白い剣を自らも担える存在になりたかった。それが実現できない夢だったとしても。ならばせめてそれを守る英雄になりたかった。その剣と共にありたかった。例えばそれが、どんな方法だったとしても。

勇者の資格の日（１）

「……つつ、流石に一人で救世主相手は辛いもんがあつたな……」

電撃を受け、焼け焦げたホームの中でアクセルは立ち上がった。既に秋斗の姿はどこにもない。ただ、増援部隊が彼を追いかけて行った事だけは確かであり、その点で言えばアクセルは充分に役目を果たしたと言える。

傷だらけの身体で剣を風で手繰り寄せ、纏めて鞘に収める。そんなアクセルの背後から執行者の装備で身を固めたレンが駆け寄った。

「大丈夫！？ お兄ちゃん、いくらなんでも一人では無茶よ！」

「レンか。あー、そうらしかったな……。流石は『原典』を奪取した賊だ。伊達に一年間も聖騎士団から逃げ切ってるわけじゃねえな」
アクセルの傷を回復魔法で癒しながらレンは仮面を外す。傷だらけの兄の横顔はもう遠いどこかを見ていて、自分の事など見ていないように思えた。

「そうだ……。お兄ちゃん、アイオーン・ケイオスとリリア・ライトフィールドが拘束されました。それと状況説明の為に救世主様も……」

「オルヴェンブルムに連衡されたのか！？ アイオーンは兎も角、どうしてリリアちゃんが……」

「時間がないので私はもう行きます。アリア姫が、例の救世主一派に拉致されたんです」

「……さっきの救世主の仲間か……。原典の次はアリア姫……狙いはなんなんだか。わかった、気をつけて行けよ」

レンは頷き、仮面をつけて走り去る。疲れた身体で溜息を漏らし、アクセルは駅の線路の向こうに広がるトンネルの闇を見つめてた。

ヨト信仰はクイリアダリアにとってただの国教では無く、政治にも深く根差している物だ。

正規軍である聖騎士団もヨト信仰の信者で構成され、特にリア・テイルの城の中は信者以外は基本立ち入り禁止されているほどである。女王が統治する国家であると同時に、裏側から国に強力な影響力を持つ組織が存在する。それが通称『大聖堂』。聖騎士よりも上位の存在、聖堂騎士によって構成される組織であり、少数精鋭の特殊戦闘能力を持つ。

聖騎士団が正規軍であるならば、聖堂騎士はそれらの上位に存在する特殊階級であり、厳密には軍ではない。聖騎士団とは異なり、国の為だけではなく世界で延々と続く太古からの神話を伝承する存在である。

女王以上に国に影響力を持つ元老院をトップに、その元老院により

著しくヨト教に対する貢献度の高い騎士を聖堂騎士とし、その中でも凶抜けた能力を持つ存在は大聖堂騎士となる。

それは一応話には聞いていた。だがそれはややこしい政治の世界や宗教的な問題であって俺には関係のないことなのだと考えていた。そう、今日この時までには……。

大聖堂専用列車の一室。窓には鉄格子が付き、部屋そのものが封印素材で組まれた特殊な運送車輛の中、俺とアイオーンは手錠をつけられたまま向かい合っていた。列車の中で向かい合うのはこれで二度目だが、一度目とは様子が違いすぎる。

「君とデートをする予定がとんでもない事になってしまったね」

「……そんな暢気な事言ってる場合か？ 問答無用で捕まっちゃったんだぞ……？」

「そのようだね」

「あのかな……。ていうか、どうして俺まで……」

「ふふ、それはまあ……。色々あるんだろうさ。ただ、ボクはこれで良かったのだと思うよ」

「……どういう意味だ？」

微笑を浮かべたまま目を閉じるアイオーン。俺の質問には答えない。アイオーンは先のオルヴェンブルム攻防戦で敵側についていたかも知れないという容疑がかけられている。だが、俺は一応救世主だ。救世主を問答無用で手錠つけて連衡するっていうのは、ちよつとどうなんだろう。

考えても仕方が無い。一緒に連れて行ってくれるのならばアイオー

ンについても弁解が出来るかもしれないし……そういう事ならこっちもついていく意味はある。結局連れて行かせないようにしようとしたのに、アイオーンは滅多に俺の前に姿を表さなくて一緒になんていられなかったし……。

「……悪かったなアイオーン。結局こういう事になって」

「いや、構わないよ。一応こういう約束にはなっていたしね……こちの話だけでも」

「……何か怒ってます？」

「怒ってはいないさ。君にもなにやら色々あったらしいことはボクも聞いているからね」

「やっぱり怒ってんじゃないか。はあ……。まあいいや、兎に角話は大聖堂についてからだ。」

列車に揺られる事数時間。辿り着いたオルヴェンブルムの駅で執行者たちに連行される俺たち。何となくぼんやりと振り返ると、何故か別の車輛からリリアも連れ出されてきたではないか。

それをリリアだと判断したのは隣に立つ執行者が聖剣を手にしていたからであり、リリアは全身を黒い縄のようなもので縛られ、顔には布を当てられて居た。俺たちよりも余程酷い拘束具合に歯向かいなくなつたが、そんな馬鹿を出来る状況でもない。

「冷静になつたらどうだい、夏流。問題はまだこれからなんだからね」

「……くそ、なんでリリアまで……」

ここまでくると流石になんだかおかしい気がする。アイオーンの件だけでは俺もリリアも捕まるわけがないんだ。なら理由は他に
あるはず。

ヨツンヘイム大聖堂　それは、オルヴェンブルムの街の中に聳え
たつ巨大な教会である。リア・テイルよりは大分小さいものの、そ
こらへんの城にだったら負けない巨大さだ。前回オルヴェンブルム
に来た時には中に入ることはなかったが、俺たちはそこに連衡され
ていった。

中は聖堂というよりは正に城である。その城を地下へ地下へと進ま
され、三人とも同じ部屋に連れて行かれた。それは地下にある礼拝
堂で、闇の中に松明の光が頼りなく揺らいでいる。俺たちの正面、
奥には一人の神官が立っており、俺たちの元へと歩み寄ってきた。

「良く来ましたね、救世主ナツル」

「……誰だ、あんた？」

「これは申し遅れを……。私は大神官ハムラビ……大聖堂元老院の
一人です」

初老の男だった。白髪交じりの金髪をオールバックに固め、眼鏡の
向こうから胡散臭い視線がこちらをのぞきこんでいる。それを胡散
臭いと感じるのは、今こうして自分がわけもわからず拘束されてい
るからなのか。

男を睨み返していると、男はリリアを見つめて目を細めた。軽く手
を挙げてハムラビが合図をすれば執行者たちがリリアの顔の布を取
り払う。

「今回君達を呼びたてたのは、実は私の個人的な判断であり、大聖
堂全体の意向ではない……。まずはその事を肝に銘じてほしい」

「個人的な意向で俺たち三人をしょつ引いたわけか」

「そうなるでしょう。ですがこれは神が与えた君たちへの希望でもあるのです……。勇者リリアよ、顔を上げなさい」

わけのわからない状況にリリアは完全に戸惑っていた。冷や汗を浮かべながら顔を上げたリリアに対し、ハムラビは聖書を片手に問い掛ける。

「私はこんな噂を耳にしました。『勇者リリアの中には、魔王ロギアが宿っている』、と」

絶句した。一体どこからその話が漏れたのか。あの場には勇者部隊しか居なかったはず。その勇者部隊の中でも、魔王の話を知っているのは俺だけのはずだ。

俺は誰にも口にはしていない。ましてや大聖堂になんて報告するわけもない。しかしリリアは驚いた様子で俺を見つめた。そう、彼女だって判っているはずだ。ロギアの話を知っているのは、俺しかないのだという事を。

「嘘偽りなく答えなさい。リリア・ライトフィールド……貴方はその身に魔王を宿す存在なのですか？」

揺れる瞳でリリアは考え込んでいた。唇を噛み締め、それから声もなく小さく頷く。リリアは嘘をつかなかった。嘘は付かない代わりに、自ら夢を手放そうとしていた。

「ちょっと待てっ！！ 何を根拠にそんな話をしているんだ！？ 勇者の中に魔王が入ってるなんて、そんな馬鹿みたいな話あるかつ

「!!」

「証拠はありませんが、洗礼の儀式を行えば邪悪な存在が憑依しているかどうかは判別出来るでしょう。ただし、密接な癒着関係にある物を取り払うには、彼女に強い負担をかけることになるでしょうが」

こいつ……何を言いたい？ 何が目的なのか？ 個人的な意向？ 救い？ いや、ロギアの話はどこから聞いたんだ。どうして俺をここに連れてきた……？

「悲しいことですが、魔王の存在はこの世界に在っては成らない物。それを宿すとなれば勇者は愚か、処刑されるのも必然でしょう」

「何だと……!?!」

「ですが安心なさい。先ほども言ったように、私は個人的な意向で君たちを呼んだのです。リリア・ライトフィールドに救いを与える為に……」

首を傾げる。リリアを救う？ 神官がか？ いや、そんな事はどうでもいい。今はこいつの言うとおりにするしかない。ロギアの話が発覚すれば、リリアはそれで……お終いなだから。

「この噂を払拭する為には、リリア・ライトフィールドが大聖堂からの信頼を得る事が必須です。つまり君たちには大聖堂の抱える幾つかの問題を解決していただきたいのです」

「問題……?」

「ええ。本当は別件で君たちの力を借りるつもりだったのですが
実はお忍びでシャングリラに出かけていたアリア・ウトピシュト
ナ様が賊に拉致されたとの事。君たちにはその奪還をお願いしたい」

「アリアが拉致！？ 騎士が護衛についてたんじゃなかったのか！
？」

「所詮は末端の聖騎士という事でしよう……。救世主ナツル、君は
アイオンを連れて賊を追うのです。君の貢献によっては、この話
をここだけに留めても構いません」

つまり、リリアの事を黙ってやるから大聖堂の為にアリアを奪い
返せということか。まるきり脅されているようなものだが、内容に
は文句はない。アリアが拉致られたなら助けるのは別に当然だし、
それでリリアが救われるなら文句はない。

その条件そのものに全く文句はないのだが……。脅されて、というの
が何ともスッキリしない気分だ。だがそれでリリアが守れるなら、
俺は……。

「ただし、リリア・ライトフィールドは君たちが無事にアリア様を
連れ戻るまで、大聖堂の地下封印室に拘束します」

「何！？」

「まずは貴方たちがリリアをどれだけ信頼しているのかを見せても
らいましょう。それにリリアをそのまま放置するわけには行きませ
ん。魔王を宿す以上、彼女の身体を調べる必要があります」

「く……っ」

確かにその通りだ。大聖堂で調べてもらえるのならそれ以上の場所もないだろう。だが、だからといってリリアをこんなところに一人で置いていくのか……。

「それに大聖堂の術を以ってすれば、その穢れた魂を浄化する方法も見つかるかもしれない」

「……しかし……」

「わかりました。リリア、ここに残ります」

俺とアイオンがリリアへ視線を向けるも彼女はじっと神官の背後にある十字架を眺めていた。すっと目を細め、それから静かに立ち上がる。

「私を封印室へ」

「お、おい！ リリア……！」

「これでいいんです。リリアは……リリアは、師匠のこと、信じてますから。だから……ちょっとだけ、お留守番してますから」

「リリア……」

話は纏まってしまった。しかし、リリアはきつと不安で仕方が無かったに違いない。こんな薄暗いじめじめした地下に押し込められ、魔王を調べられるという。それは彼女の内面そのものを覗き込まれる事に他ならない。それに付け加え、『誰がこの話を大聖堂に持ち込んだのか』という疑念も晴れては居ない。

それも含めてリリアは俺に言ったのだ。信じている、と。待ってい

る、と。だから俺はもうとやかく言うべきではなかった。リリアは邪悪な存在なんかじゃない。だから俺は 彼女の善性を証明してみせる。

「……わかった。俺はアリアを拉致した奴らを追う。それで、アイオーンは？」

「彼女にかけられている嫌疑も、この行いで払拭出来るでしょう。アイオーン・ケイオス……いいですね？ 貴方もクイリアダリアの為に働くのです。そう、昔のように」

アイオーンは全く答えなかった。ただ一度だけ俺に視線を送り、それから諦めるように肩を落とした。

こうして行きは三人で潜ったはずの大聖堂の門をアイオーンと二人で潜る。既に夜の闇が世界を支配していて、手首にまわり付いた手錠の感触だけが奇妙なほどにはつきりと色づいていた。

外に出てしばらく街を歩くとアイオーンは立ち止まり、じっと俺の顔を覗き込んできた。何事かと思い首を傾げると、俺と同じようにアイオーンも自らの手首をぎゅっと握り締めていた。だがしかしそれは俺のように慣れない手錠の感触に違和感を覚えているのではなく、何かもつと違う……大きな見えないものに苛まれているかのようだった。

それがなんであるかはうまく表現出来ないが、しかし普段のアイオーンとも、ユーフォリアでピアノを弾く彼女ともその様子は異なっていた。その様子をじっと見詰めていると、アイオーンは深呼吸を一つついてそれから普段どおりの表情に戻った。

「魔王ロギアとリリアの関係性……ついに大聖堂にもバレてしまったか」

「……って、お前それを知ってたのか!？」

「大分昔からね……。まあ、色々あるんだよ。ちなみに報告したのはボクじゃあない。もっと別のルートさ」

そりやそうだろう。アイオーンはリリアの中のロギアが表に出てきたかどうかさえその場に居なかったのだから知らないはずだ。何故今このタイミングでロギアの情報が外に漏れ出したのかは謎だが、今は一先ず拉致されたアリア姫の救出に専念しなければ。一刻も早く街に戻り、リリアを牢獄から出してやる為にも……。

「くそ、楽しいはずの学園祭がとんでもない事になりやがった……」

「……まあ、そういう時期だったのだろうね。心配せずとも今回はボクも力を貸す……任務は直ぐに終わるさ」

「そうだな……アイオーンが居れば百人力だ。って、そういえばさっきの神官とあんた、知り合いだったのか？ 何かそんな感じだったが……」

「知り合い……まあ、そんな所か。さて、とりあえずは明日の出発に備えよう」

その時アイオーンはまた見た事の無い表情を浮かべた。普段から笑顔を絶やさない、不気味ではあるものの笑っているはずのアイオーン。それが一瞬だけ見せた、本当に背筋も凍り付くような視線。疑念は払拭できないがそれでも今は構っている余裕はない。そうして二人で歩いていると、正面からいくつか見覚えのある顔が走ってくるのが見えた。

「ブレイド……それに、メリーベルとゲルトか」

三人と合流すると、慌てた様子でゲルトとブレイドが同時に話しかけてきた。わけがわからないのでとりあえず落ち着かせ、一人ずつ話を聞く事にする。

「ニーチャン！ アリアが誘拐されたってホントか！？」

「ああ。明日、追撃隊が出る。俺とアイオーンの他、何名か騎士と執行者が同行するらしい」

「リリアは……！？ 彼女はどこに！？」

「……大聖堂地下封印室だ。色々と事情がややこしくてな……」

リリアの中に魔王が居る事を他のメンバーは知らないのだ。だから最も肝心な理由を語る事が出来ない。それを口にしないままゲルトに説明するのは至難の業……。兎に角俺は力押しでゲルトを説得した。

「とにかく、アリアを救出出来ればリリアは解放されるはずだ。だから俺たちが奪い返してくる」

「では、わたしも同行しますっ！」

「駄目だ！ お前、自分がどういう状態なのか分かって無いだろ！？ 執行者も同行するんだ、リリアが助けられてもお前が捕まったんじゃないだろ……！」

「ですが……っ……！」

「勇者のネーチャンはシャングリラで待ってるよ。代わりにおいらが一緒に行く」

ゲルトを押しつけて前に出たブレイド。その表情はいつに無く真剣だった。

「アリアは知らない仲じゃないし、いずれはブレイド盗賊団の団員になるかもしれないヤツなんだ。仲間をほっとくわけにはいかない……。ニーチャンだったら一人くらい増援として連れて行っても問題ないだろ？」

「まあ、一人くらいなら問題ないか……。事情も話せないぞ？」

「理由なんて関係ない！ それでリリアのネーチャンもアリアも助かるんなら全然構わない！」

随分と熱くなっている様子のブレイド。振り返ってアイオーンに視線で問い掛けると、

「腕は保障するよ。もしかしたらこの子は 君よりも強いかもしれないからね」

「マジか……？」

そういえばブレイドはアイオーンに次ぐ学園の実力者だったはず。あまりその能力の全容がわかっていないだけに正直計りがねている部分はあるが アイオーンのお墨付きなら戦闘力は問題ないか。それに何より友達を助けたいといっているんだ、わざわざオルヴェンブルムまで追ってきたのを無下に追い返すのも心苦しい、か。

「わかった。ブレイドはパーティーに入れ。ゲルトはシャングリラに戻るんだ。メリーベル、後頼む」

「で、でも……っ」

「俺たちを信じてくれ、ゲルト。リリアが戻ってきてもお前がいなかったらリリアは同じ事をするぞ。それじゃどっちも助からないだろうが……」

ゲルトの肩を叩き、じつと瞳を覗き込む。しばらくすると諦めてくれたのか、ゲルトは小さく頷いてメリーベルの隣に下がった。

「ナツル……。リリアの事を御願します」

「任せてくれ。メリーベル、悪いな」

「ん、構わない。シャングリラじゃ手に入らない買い物でもして悠々自適に帰るから」

余裕な様子で頷くメリーベル。本当にありがたい性格をしている。さて、あとは……ゲルトの期待を裏切らない為にもアリアを奪還しなければ。

「出発は明朝だ。各員装備の確認、準備を怠るな。状況がややこしいが、一応勇者部隊として行動する」
ブレイブ克蘭

「あいよ、ニーチャン！一緒にまた頑張ろうぜ！」

ブレイドと拳をあわせる。その間もアイオーンは遠い空を眺め、夜

の星に明日を映して憂鬱そうに溜息を漏らしていた。
そしてそのアイオーンが見ていた未来の憂鬱の意味を、俺は直ぐに
思い知らされる事になるのであった。

勇者の資格の日（１）（後書き）

（ディアノイア劇場）

* いよいよ後半に突入するのか編*

夏流「あー……。もう半分かー」

リリア「え？ どうかしたんですか？ アンケートで二十票連打されてゲルトちゃんに追いつきつつある本城夏流さん？」

夏流「おま……。なにその完璧な発音……。『本城夏流』って言えないから馬鹿っぽく『なつるさーん』って言ってたんじゃないのか？」

リリア「そんな事はどうでもいいんですよ師匠！ もう五十部なんですーうっ！！」

夏流「……。え？ こないだ四十部とか言ってたっけ？」

リリア「……。まあ、五十部っていつでもこのペースだと一週間ちょっとで十部更新されるから別にめでたくはないんですけどね」

夏流「はあ。これでさ、週一回とかの更新なら感動も一入なんだろうなあ」

リリア「……。そうですね。何はともあれ、今日は師匠とがつつり朝までおこたつトークをするのですよ。師匠はどうやってコタツ入りますか？ リリアは中までもぐるのが大好きなのですよー」

夏流「俺はコタツには普通に入るから。あと潜って相手の所に顔出したりするのは小学生だけにしろ」

リリア「と、いうわけで。もう二月ですよ（連載当時）。前半のおさらい的に何かまとめ話でもしますか？」

夏流「そうだなー……。今思ったんだが、全然話進んでないよな」

リリア「……言われて見るとそうですね。ほんとちまちまペースですな」

夏流「このペースでやっててもこんなに進まないと、一体どうすれば纏まるのか気が遠くなってくるな」

リリア「てか、ディアノイア劇場でやることがあんまりなくなってきましたよね。技とかキャラとかあんまりホイホイ増えないし、ある程度纏まらないと発表しないし」

夏流「そうだなー……。なんかアンケートに増やすか」

リリア「ディアノイア劇場のネタ募集ですか？」

夏流「んー……。気が向いたらね。しかしこんなに続くとも、こんなハイペースで進むとも思わなかったな」

リリア「読者数が上がってきたり感想もらえるとやる気出ますもんね。単純にキルシュヴァッサーの四倍くらいの読者数なわけで」

夏流「ファンタジーは恐ろしいものだな、リリアさん」

リリア「そうですねー」

（お茶を飲む二人）

リリア「もうここ無計画で書いてるからほんとめっちゃくちゃですね」

夏流「いいんだようせ本編も滅茶苦茶だからな、うん。しかし真面目になんか新しい取り組みを考えないとディアノイア劇場つぶれるな」

リリア「『れーばてっ！』とか」

夏流「それ誰もわかんないと思うぞ」

リリア「あ、ここでTRPG化するとか！」

夏流「見づらいことこの上ないな」

リリア「じゃあブログ化！」

夏流「そこまでマメに更新しないだろ」

リリア「うう……じゃあ師匠がネタ提案してくださいよー」

夏流「そつだな……。読書会……」

リリア「歯あ食いしばれ？」

夏流「……。お前そういうこと言ってるから人気無いんじゃないの

？」

リリア「はう！？　へ、へこたれる……。師匠の心無い一言でリリアは深く傷ついたのですよーう……」

夏流「まあそれは兎も角、ディアノイアも五十部だ。これも全ては見ている人のお陰だな」

リリア「夜中に見に来てる人がすごく多いのがビックリですよ。まあ更新いつも夜中ですけど」

夏流「学生の皆さんも社会人の皆さんも寝坊には気をつけてください」

リリア「開始直後と比べると全体的にキャラも変わってきましたよねー」

夏流「多分一番変わったのはリリアとゲルトだろうな。まあそういう話なんだけどさ」

リリア「そういえばゲルトちゃん可愛いですよー！　ゲルトちゃんって虐めなくなるのはリリアだけですか？」

夏流「そういうさり気無くsな所をスラッと見せるから不人気なんじゃないか？」

リリア「不人気っていうな！　うう、へ、へこたれる……」

夏流「リリアは犬だが、ゲルトはうさぎって感じだな」

リリア「う？ それは師匠の使い魔ってことですか？」

夏流「そうじゃないけどそんなようなもんなのか……」

リリア「うー。結局真面目な話しなかったですね」

夏流「……いやさ、結局コタツでダベってるところならないか？」

リリア「……………なる」

夏流「そんなわけで、ネタ急募です」

リリア「アンケートの下のほうに増やしておくかもなので、お暇な方は協力おねがいします」

夏流「……………毎度才チてねえな、このコーナー」

勇者の資格の日（２）

見上げた空は果てしなく蒼く、逆にそれが恨めしかった。

雪原に一人倒れ、真っ白に塗り替えられていく世界の中、たった一人死に掛けていた。どうすれば助かるのかなんて考えもしない。ただただひたすらに疲れていた。

つい先ほどまで分厚い雲に覆われていたはずの空にぽっかりと空いた青空から光が差し込んでいる。それをただ美しく思い、そしてただ憎たらしかった。

血まみれの手を伸ばす。どうすればそこに届くのだろう？ 願いは口にさえ出来ない。ただ伸ばした手が何もつかめないまま空しく握り締められる。

神の為に戦った。信じる物の為に戦った。どうしようもないくらい戦って戦って、祈るように戦った。そうして手に入れた物はなんだったのか。

足跡だけがぽっかりと残っていた。振り返ればなんて事は無い、全てと戦ってきたから足跡は一つ。何も残らず、何も手に入らない。深く息を付いて口から血を吐く。呼吸はもう長い間止まっているのかもしれない。何時間も何時間も、心臓は動いていないのかも知れない。ただ死んでしまった体の中で意識だけが生きているという矛盾は何度経験しても慣れるものではなかった。

痛い、苦しい、悲しい、辛い、泣きたい。頭の中を過ぎってきた沢山の言葉はむなしく途切れ、今はもう何も感じられない。全ての五感が解けてなくなってしまうえば、後にはこの身に何が残るのだろうか？ 片方は潰され既に機能しなくなった目でただ空を見る。

「……ああ。そうか……。見上げなかっただけで……。世界は綺麗だったんだ」

そつと目を閉じる。体中から血が抜けてもう寒くて仕方が無かった。寒いというその感覚もなくなって、ただ身体が動かなくなった。もう終わってしまいたいと願った。生まれて初めてそれを願った。死んでしまいたい。消えてしまいたい。それでもその願いはきつと叶えられる事はない。判ってはいた。それでも願ってみたのだ。

願いはやはり叶えられなかった。死ぬ事は叶わなかった。全てを振りほどいて歩いてきた雪原に、彼女以外の足跡が一つ。青空から降り注ぐ光を浴び、その人は雪原に倒れた彼女を抱き上げた。

ただ抱き上げ、背負い、そうして歩き出す。誰かの背中に揺られながら少女はゆっくりと瞳を開いた。その大きな背中が自分を救おうとしている事に気づき、ただ目を閉じる。

まだ生きろと神が言っているのだろつか。まだ死ぬべきではないと。だがそれはただの酷使に過ぎない。自分はもう壊れている。死にたい。消えたい。だがやはりそう、その願いは叶えられない。

「死なせはしない」

男は言う。

「絶対に、死なせはしない……」

その声の力強さに悲しくもないのに涙が零れた。

まだ生きなければならぬ。少なくともその時はそう思った。

だが、生きるという事は何かを背負うことに他ならない。その時死に際で彼に背負われた彼女は、気づけば自分では背負いきれない程の荷物を背負ってしまった。それを降ろす事も出来ず、ただ背負い続ける。

終わりはどこにある？ 考えても答えは出ない。果てしなく世界は続く。滅びなど訪れない。ならば常にそこに在り続ける彼女にとつて世界とは果てしなく広がる無限の牢獄に他ならない。

「……死なせない、か」

過去を思い返し、瞳を開く。すぐ隣に腰掛けていた夏流が視線を向けてくる。その視線に応えるように微笑んだ。

北の港へと続く列車の中、近づく過去の思い出を前にアイオンは震える自分の腕を握り締めた。そうすることで何かを留める事は出来たのだろうか。

いや、それはきっとなにも掴む事は出来なかった。それはそう、丁度あの日光の差す場所で伸ばした手が、何一つかむ事が出来なかったように。

アリア救出舞台の目前に、北の大陸が迫っていた。

勇者の資格の日（2）

「ついたぞ。ここからは船で移動する事になる」

マルドゥークの仕切りに乗っ取り列車を降りて歩き出す。潮風の吹きぬける港、北方大陸行きの船が行き交うクイリアダリアに管理された巨大な港に俺たちは到着した。

元々はバズノクの首都、ズエルカルブの西に存在する為バズノクの管理していた港だったが、その国が滅んだ現在はクイリアダリアが北方大陸との唯一の玄関口であるこの港を管理している。

バズノクが管理を一括していたわけではなく元々クイリアダリアの騎士が常駐していたはずだったが、今回のアリア拉致事件でこの港の船が一隻奪われたと言う話である。まあ、腕の立つのが襲ってきたら僻地の騎士程度に何とかできるわけもないのだが。

で、何故ここにマルドゥークが居るのかというと……今朝、集合場

所に向かうと既にマルドゥークが準備万端で待ち構えていたのである。数名の執行者らしき連中に監視されつつ、俺たちは港を歩く。なんでもこいつはアリアが拉致された時すぐ近くに居たらしい。だが一対一で賊に戦いを挑んだ所、真正面から叩きのめされたというマルドゥークが勝てない強さの敵となると、もう本当に並の騎士ではひとたまりもないだろうなあ。

何は兎も角リリアを解放するためにもクイリアダリアのためにもお姫様の救出は必須だ。なんだか急にRPG的な流れになってきたが、事態は想像以上に厄介だ。

「賊はここで船を奪って北方大陸に向かったと思われる。我々も船を借りて追撃する」

「本当に北方大陸に向かったのか？ 違う所に行く可能性もあるだろう？」

「そこは問題ない。アリア様は特殊な魔力の持ち主でな。それを探る道具があれば方角くらいは簡単に割り出せる。経路からしても行き先は北方大陸　ガーグランドで間違いない」

それそのものは大したことではない。ただ、ガーグランドそのものに色々と因縁があり、クイリアダリアの人間の多くは近づきたがらないという。

しかし俺たちはそんな事を気にしている場合でもなく、実際ガーグランドもクイリアダリアの支配下にあるのだ。敵地というわけではないのだから、臆する必要もない。

「では私は船の手配をしてくる。貴様らは少し待っている」

「了解だ」

去っていくマルドゥークを見送る。ブレイドは港町が珍しいのか、あちこちをきよろきよろと見回していた。

「んーと、確かガーグランドって……ザックブルム、魔王の国があった大陸だよな」

「……らしいな」

ザックブルムの魔王ロギア。かつて魔王大戦と呼ばれた壮大な戦乱の世界の中、全てを支配しようと目論んだ国、ザックブルム。

そのザックブルムは北方大陸のさらに北、雪と氷に包まれた大地に存在したという。そして北方大陸は完全にザックブルムに支配され、今でも殆どの場所が魔物だらけで立ち入る事が出来ず、聖騎士団が必死で大陸の大掃除に挑んでいるという。

そんな曰くつきの大地でも嘗て世界最高の反映を果たしたザックブルムの大地である北方大陸は様々な資源が多く、魔王の財宝が各地に眠るといわれるトレジャーハントの聖地であり、同時に立ち入る人間を食い殺す魔界とまでも言われている。兎に角そんな所にアリアが連れ去られたというのだから、これはもう一大事に他ならない。だがその一大事に対して割かれた人材は俺たちだけ。この少人数での追跡は並の騎士では相手にならない戦闘力を持つ相手に対する少数精鋭作戦であると同時に、未だに国民にアリアが拉致された事が伏せられている事も関係している。

出来得る限り被害を出さず、騒ぎにせず、穏便に迅速に事態の収拾を図ることを大聖堂は俺たちに望んでいるのだ。魔界だろうがなんだろうがやるしかない。

「ブレイドはザックブルムに行くのは初めてか」

「そりゃね。普通の人は好き好んでザックブルムには行かないし。行くとしたら商人とかトレジャーハンター、あとは向こうに元々住んでた人じゃないかな」

「クイリアダリアの人間は近づきたがらないわけだしな……当然か」

世界の北の果てでかつてあった戦い、戦争……。それはもう終わってしまつてこの世界には無いはずなのに、まだ世界を二つに分け隔てたまま残されている。

そこでかつて勇者は何を思つて戦つたのだろうか？ この世界の果てで刃を交えた数え切れない無数の命……。それはきつと嘘なんかじゃない。今もこの世界に続いている、列記とした真実なのだから。マルドゥークの声に導かれ港へ走る。ブレイドはブレイドで、俺は俺で。マルドゥークはマルドゥークで、そう……。アイオーンはアイオーンで。俺たちの持つている心は全て嘘なんかじゃない。そしてだからそれぞれきつと過去を背負つて生きているんだ。

船に乗り込み、動き出す世界。まだ見ぬガーグランドの土地は船でも暫く時間がかかる。その間俺はずつと広がる海を眺めていた。潮の香り、空の青さ、流れる雲、跳ねる水しぶき、魚の群れ、それを感じる自分自身。秋斗はそれを所詮作り物だと言つた。でも俺はそんな風には思えない。

ここにあるもの全てが真実だなんて声を大にして言うことなんて出来ない。でもここに自分が存在する以上、それは全てを肯定する事に他ならない。もし彼らが全部消えてしまふ泡沫的一幕だとしても、それでも俺は……。

リリアは俺を疑いながらも信じて微笑んだ。その笑顔を思い返すと頭の中が沸騰しそうになる。自分でも何と言えいいのか判らないが、とにかく不思議な気分だった。リリアにそんな顔をさせてしまふ自分に猛烈に腹が立ち　今は絶望するよりも先に、それをぶつ潰してやりたいと思う。

もうあんな風に笑わせたりしない。俺がさせない。拳を強く握り締める。魔王の大陸だろうがなんだろうが知ったこっちゃない。全部潰して取り戻す。力づくでも。

「君は不安には思わないのかい？」

隣にはいつの間にかアイオーンが経っていた。船の手摺にもたれかかり、風を受けて真紅の髪をなびかせている。俺は顔を上げ、それから空を見上げて眉を潜めた。

「怖いさ。でも、リリアを助けられない自分の方がもっと怖い」

「その勇者に自分が疑われていたとしても、かい？」

「……………信じてくれとは、言えないさ」

俺はこの世界の人間じゃないし、秋斗と俺が話しているところをリリアには見られてしまったのだ。本当ならばガンガン詰め寄られて当然の場所で、リリアは俺に背を向けた。

裏切られる事が怖い女の子はそれを知くらいなら知らない方がいいと言った。俺はそれに甘えて真実を話せないで居る。でもいつか……いつかは話さなきゃいけないんだと思う。

「だから、いつか纏めて話すさ。信じてもらえなくてもいい、本当の事を」

俺の言葉にアイオーンは微笑みながら海を見つめる。時間だけはたつぷりとあった。船から飛び出して探しに行くわけにも行かず、その足踏みする時間だけがもどかしく過ぎて行く。ふとアイオーンに視線を向けると輝く水しぶきを眺めながら彼女は

大人びた視線で世界を眺めていた。ふと、大聖堂での会話が気にかかり、その傍に顔を寄せる。

「……なあ。大聖堂での事だけど……」

「……顔が近いよ夏流」

「いや、他の人に聞かれたらまずいだろ……。向こうでブレイド君がマルドゥークに魚の種類を延々と説明されているうちに済ませたい」

「……ふう。それで？ 言っておくけれど、リリアの中にロギアがいることなら大聖堂はずっと前から知っていたと思うよ」

まだ質問しても居ないのに予想外の返答が帰って来た。俺はアイオンとあの元老院の男との関係性を尋ねようとしたのだが……。

「大聖堂は魔王大戦の時から勇者部隊を常に監視していた。勇者フエイトの聖剣リインフォースの中にロギアが封印されている事なら、十年前から知っていた事だろうさ」

「……なんだそりゃ？　なんで今更……今なんだ？　あの神官、何を考えてやがる……」

「尤もその事実を知っているのは彼だけで、他の元老院は知りもしない事だろうけれどね。ただ前の大戦時、勇者の仲間だった人間なら皆知っているというだけのことさ」

つまりアイオンはこう言いたいのか？　あの神官はフエイトの仲間であり、元勇者部隊の一人なのだと。

しかしだとすればどうしてフェイトの娘であるはずのリリアの中に魔王が封じられている事など元老院に報告しようとするのか。いや、信賴を勝ち取れば今後も黙っているというのだから、逆に元仲間の娘だからこそ恩赦を与えているという事なのか……？

こんがらがる思考の中、口元に手を当てて考え込んでいるとアイオンは何かを思い返すように俺を見つめて微笑んだ。その笑顔が妙に魅力的で視線を反らす。

「何だ？」

「いや。ただ……少し、昔の事を思い出していたのさ」

そう言つて笑うアイオンが何を考えていたのかは結局わからなかった。そしてやっぱり俺の質問は彼女の言葉で遮られてしまったように思う。

船は数時間でガーグランドの港に到着した。南方大陸の港と変わらぬ賑やかな港に降り立ち、マルドゥークを先頭に歩き出す。

港を出ると直ぐに広がっているのが荒野だった。北方大陸に列車など気の利いたものは存在せず、仕方がなく徒歩で移動する事になる。目指すはアリアの反応のある方角だ。

厳密にアリアがどこにいるのかはさっぱりわからないのだ。大まかな方向を見据えて移動するしかない。出来るだけ急いで移動をし、日が暮れてから辿り着いたのは小さな山の麓にある街だった。

山は雪山で、そこから降る雪は街にも積もっている。シャングリラは暖かかったのに、ここまで来るともうまるで冬になってしまったかのようだ。

シャングリラやオルヴェンブルムに比べ、その街はとても寂しげに見えた。雪に包まれ人の通りが少ない事もその理由だったのだろう。しかしそもそもまず人口が少なく、家の数も当然少ない。

吐き出す息は白く染まり、執行者たちと共に街に入る。まずは聞き

込みでも始めようと街の人々に視線を送るが、住人たちはあつという間に家の中に隠れてしまう。

拒絶を示すように力強く占められる扉や窓に思わず眉を潜める。執行者たちは街の方々に散って行き、それを見送りマルドゥークが腕を組んで振り返った。

「やはり現地住民から話を聞くのは無理かもしれないな」

「どういうことだ？　ここの連中、俺らを見ただけで引っ込んだみたいに見えたぞ？」

「……ザックブルムとクイリアダリアの確執はまだ消え去ってはいないのだ。戦争の遺恨は十年やそこらで消え去るほど容易ではないからな」

マルドゥークの口調はどこか寂しげに見えた。だが実際にそうだろう。十年前の戦いがまだこの世界を二つに隔てている……その現実に直面しているのだから。

仕方が無い、何とか話を聞ける家を探すしかない。幾つかの民家の扉をノックして周る。手分けしてあちらこちらを周ってみたが、結局出てきてくれる家は一つもなかった。

何の手がかりも得られずに肩を竦める。マルドゥークの持つアリアの居場所を示すコンパスのような道具は俺たちの見上げる雪山を指し示している。

「……行くだけ行つて見るか」

「この夜の中か？」

「時間がないんだ。それに半端な罠でやられる俺たちじゃないだろ」

マルドゥークもそれ以上反論することはなかった。アリアを一刻も早く取り返したいのはこいつも同じなのだ。多少危険なのは最初から決まっている事。だったら最初からそんなものに構っている余裕はない。

アリアがいるかもしれないならその可能性を全て明かしていけばいいだけのこと。俺たちは夜の闇に包まれた雪山に向かい、歩を進め始めた。

大聖堂地下封印室。そこはありとあらゆる魔の存在を封じる為に古来から存在する聖なる空間。漆黒の闇の中、黄金の術式が輝く祭壇の上でリリアは両手足を鎖に繋がれて宙にぶら下げられていた。白いドレスに着替えさせられ、磔にされるようにただそこに浮かぶ少女はうつすらと瞳を開いたまま何も光の见えない暗闇をぼんやりと見つめ続けていた。

全身から魔力が吸い取られるような、身体に力が入らない、思考することさえ億劫になる封印の術式の中、ただただ頭の中で楽しかった出来事だけを繰り返し繰り返し再生していた。そうすることだけが今の彼女を保つ唯一の手段だったのかも知れない。

疑いたくない、疑いたくないと意識すればするほど救世主を名乗る少年の顔が思い出せなくなる。思い出の中で浮かび上がる沢山の笑顔が全て偽りだったのではないか？ それは考えてしまう事さえ恐ろしくてたまらなかった。

異世界の住人という言葉。作り物の世界。リリアの心では理解出来ない沢山の情報。何よりも本城夏流という少年の不自然なその存在がリリアを苦しめていた。

今までだって信じていたわけじゃない。怪しい所など山ほどあった。それでも信じられると思った。夏流は自分を裏切らないと信じた。彼こそ自分を包み込む鎖なのと思った。明るい未来を見せてくれ

と思った。たとえ魔王が身体の中に居たとしても、それを彼は受け入れてくれると思った。願った。信じようとした。

だが実際はどうだ。現実はこの暗闇の中、戻ってくるかどうか判らない彼を待つ事しか出来ない。信じると口にはしたものの、何となくぼんやりと思っていた。ここで自分は終わってしまうのかもしれない……そんな最悪の可能性を。

「気分はどうかね、リリア」

正面が照らし出された。足元から光る照明の中、大司祭ハムラビはリリアに問い掛ける。リリアはその問い掛けにただ不快感を込めた鋭い眼差しで応えた。

「封印の術式を受けるのは初めてではないのだろうか？ まあ、何度受けても慣れるものではないと思うが、我慢してくれよ。噛みつかれても困るのでな」

「……リリアはそんなことしません」

「君の中にいる魔王がそれをさせるかもしれない。いいかね、リリア？ 自分の存在を肯定したいのであれば君は大聖堂の 元老院の管理下に置かれるべきです。大聖堂以外に、君の中の魔王を収める力を持つ組織はない」

「大聖堂に入れと？」

「そうではない。ただ、勇者に成るべきなのは君だけだと言う話だ。救世主はアリア姫を取り返してくるだろう。そうすれば君は自由の身になり、正式な世界を守る勇者として私が後押ししようではないか」

突然の話にリリアは不審下に眉を潜める。その態度にハムラビは暗闇の中、うつすらと笑いを浮かべて答える。

「なんてことはない。君は魔王の力を使ってこれからこの世界を守ればいい。力は使い方次第だろう？ 勇者として君ほど相応しい人間もいない。勘違いしないでもらいたいな。私は君を高く評価している。その身に正義と同時に悪魔を飼いならす君の存在は、我々にとって極めて理想的な勇者像なのだから」

「だったらどうしてこんな封印式なんて……？」

「封印式 ではないのだがね、実際は。兎に角これは必要な儀式なのだ。なに、君の身に害は与えないと約束しよう。ただ少しばかり身体の中身を調べさせてもらう事になるのだがね」

リリアを取り囲むように仮面をつけた神官たちがぐるりと並ぶ。それぞれが術式を発動すると同時にリリアの身体を熱く滾るような感触が襲った。

意識が朦朧とする中、目を瞑ってただ楽しい事を思い返す。夏流に躓いてしまった出会いの日。何度も彼の言葉に救われてきた事。思い返す沢山の『日』が頭の中でまだ輝いている。

決して忘れられない思い。信じたいという願い。信じられないという焦り。それらをただ思い返し、それでも今思ふ事は一つだけ。

「師匠……」

どうか、もう一度笑いかけて欲しい。
執行者たちの術式でリリアが気を失った頃、大聖堂の前に立つ一人の男の姿があった。

黒い鎧に長大な剣を携えた仮面の騎士は聖堂を見上げて溜息を漏らす。そうして歩き出し、聖堂を護衛していた聖騎士二名を一瞬で昏倒させ、目を見開いた。

『よりによつて大聖堂に捕まるとはな……。やれやれ　世話のかかる小娘だ』

刀身に付いた血を振り払い、その刃に己の顔を映し、フェンリルは一人大聖堂の中へと歩みを進めて行った。

夜の雪山は月明かりで意外なほど明るかった。そんな中、俺たちの前に姿を現したのは巨大な建造物だった。

石で出来たその建造物を見て誰もが思ったことを俺は代弁する。そう、それはまるで。

「　古代遺跡？」

既に朽ち果て、雪に埋もれるようにして存在する不思議な建造物。その出入り口の部分を見ると、そこには篝火が灯っていた。どうにも胡散臭い格好をした男たちが何名か剣を手にして警備を固めているように見える。

「……山賊、か？　まあいい、話が聞けそうだ」

マルドゥークが魔術書を片手に立ち上がる。丁度場所的にもアリアの居場所に限りなく近い。だったらもう胡散臭い物からぶっ潰していくべきだろう。

執行者たちに周囲の警戒を任せ、俺たちは武器を手にして駆け出した。出来るだけ迅速に、一瞬で全員を倒さねば成らない。

結局俺は裏側に回りこみ、背後から三人程居る護衛に襲い掛かった。背後から殴り飛ばすとあつけないほど気を失い、音もなく倒れて行く。隠密行動なら徒手空拳でも戦闘できる俺が最も適役なのだ、当然の結果とも言える。

護衛をあつさりと倒し、入り口を前に立つ。それはどうやら地下に続いているこの建造物の内部へ続く階段の入り口のようなだった。後続のパーティーと合流し、自らの両手を合わせて気合を入れる。

「とつとと倒してとつとと奪い返してとつとと帰るぞ」

勇み足で俺たちは階段を下った。丁度その頃、リリアに何が起きていたのかなんて、当然判るはずもなかったから。

勇者の資格の日(2) (後書き)

「それいけ！ ディアノイア劇場Z」

リニューアルするのだ編

リリア「ディアノイア劇場を少しパワーアップさせてみたのですよ
！！」

夏流「ミスチルの『フェイク』今更聞いてハマった作者はやること
が違うな」

リリア「えー。まあ何はともあれ、本編もカオスつてるところで！
！ ちょっとディアノイア劇場も方向性を変えていこうというわけ
で！」

夏流「なんか『番外編ショートシナリオ』の要望がぶつちぎりなん
だが、これは何をやらばいいんだろうな」

リリア「うーん。何をやらばいいんでしょうねえ？」

夏流「まあ何か考えるか……。人物紹介をあとがきじゃなくて纏め
た奴を一話使ってやって欲しいというのがあったが、それはまあそ
のうちやろう」

リリア「キリのいいところで、というわけで」

夏流「さて、アンケートでディアノイア劇場についての項目を増や
してみたわけだが、何と全員ディアノイア劇場をチェックしていると

いう返答だったのである」

リリア「ここ、あんまり誰も見てないだろうというつもりでただけにビックリですね……」

夏流「あんまり誰も見てないっていう日本語もビックリだが、とにかくネタにしている一言コーナーにちょっと来ているのでために取り上げてみよう」

「今日の一言」

アイオーンさん何歳ですか＜

アイオーンさんじゅうはっさいとかですか？

リリア「アイオーンさんじゅうはっさい（笑）」

夏流「その発想はなかったなあ……。えーと、確かどっかの紹介で二十一歳（自称）って書いてあったよな」

リリア「アイオーン・ケイオス十七歳です。おいおい！　よりはいいじゃないですか」

夏流「……それもまたわかる人いなさそうだなー。というわけで、アイオーンに聞いてみた」

アイオーン「……無茶振りにも程があるんじゃないかな。んー、実年齢か……。多分そのうち本編で出ると思うけど」

夏流「さんじゅうはっさいなのか？」

アイオン「違う。アイオンさん、十八歳だよ」

リリア「さんじゅうはっさいとか（笑）」

「今日の一言」

アクセル×ゲルトにカップリングはどう思う？

リリア「知るか。」

夏流「全くもってその通りなんだが、一応本人に聞いてみた」

ゲルト「在り得ません」

アクセル「そうだそうだ！俺はロリが好きなんだ！ツンデレは
守備範囲外だ！」

リリア「本当にどうでもいい質問ですね……」

夏流「……読者のにどうなんだろうな。ていうかどう思う？って
いう質問がまずなんかおかしい……」

リリア「えー、何はともあれネタにしていというコメントもあつ
てありがたい限りです」

夏流「とりあえず番外編を考えるか……。誰をメインにするかが問

題だな」

リリア「そんなわけで、次回に続くのであった！」

勇者の資格の日（3）

大聖堂の中を駆け抜ける黒い影。それは近づく者を次々に音もなく斬り伏せ一人地下へと向かう。

城のように巨大であり迷宮のように入り組んだ大聖堂の構造を全て知り尽くしたかのような動きで一直線、リリアが囚われている封印室へ向かうフェンリル。階段を下り、長い礼拝堂を抜け、閉ざされた部屋の扉を開け放つ。

そこにはリリアを取り囲み儀式を続ける執行者たちの姿があった。突然の侵入者の存在に呆気にとられている彼ら目掛け、フェンリルは剣を降ろして片手を翳す。

『恨むならお前らの神を恨んでくれよ』

掌から同時に放たれた闇の矢が薄暗い部屋の中を縦横無尽に駆け巡り、十人以上いた術者の頭部を正確に射抜く。一瞬で全員の命を奪い去ったフェンリルは剣でリリアを吊り上げている鎖を断ち切り、その身体が落ちる前にそっと抱き寄せた。

足元の封印の術式は術者を失って尚禍々しく輝いている。それに剣で傷跡を刻み込み、術式を破壊して元来た道を引き返す。

死体を飛び越え、大聖堂の窓から跳躍して飛び出す。見事に闇の中で着地し、リリアを抱えたままオルヴェンブルムの街を駆け出した。夜の市街地を駆け抜けるフェンリルを執行者の影が追う。四方八方、街中は彼らの庭であり、オルヴェンブルムの城壁がフェンリルの脱出を拒んでいた。

『……ちつ。本当に世話の焼ける娘だ』

上空、民家の屋根から屋根へと飛び移る執行者たちが放つ無数の短

剣。それを片手で握った剣で叩き落とし、狭い路地へと身をよじる。壁を蹴って屋根の上に顔を出し、その直ぐ傍にいた執行者の首を刎ねる。

血飛沫が身体にかかる前に反転し、跳躍する。通りを挟んで反対側の屋根に着地し、正面から迫る三人の執行者の放った短剣を剣を納めた手で掴み、すぐさま投げ返す。顔面に短剣を刺されて一人が死に、切りかかった一人の剣を蹴りで押し折り、身体を捻って踵をガードの上から叩き込む。筋肉と骨がちぎれる音が響き渡り、執行者は遙か彼方へ吹き飛んで行った。

『数が多いな』

鞘から再び剣を抜き、魔力を込める。あらゆる場所から迫る執行者目掛けて剣を横に大きく揮う。その刀身から放たれた漆黒の光があらゆる位置の敵を追い続け、串刺しにした。一頻り追っ手を始末すると、フェンリルは悠然とした態度で門の前に立つ。

本来ならばオルヴェンブルムの城壁は執行者や聖騎士団と戦闘行動を行った者を通す事は無い。そうした特殊な結界　リア・テイルから放たれる選定の守護結界により守られている。だがフェンリルは平然とそれを素通りし、門の向こう側に広がる草原を走り出した。特に何か結界破りの術式を發動したわけでも、結界に不備があったわけでもない。ただリア・テイルの選定が彼を外に出す事を許可したというだけの事であった。

月夜の草原を走るフェンリルに抱えられたまま、リアはふと目を覚ました。厳密には目は覚めていたが、封印の術式で意識が朦朧とし続けていたのである。ようやくはつきりとしてきた所、目の前に宿敵の顔があったのだからリアも流石に驚いた。

「フェン、リル……！？　な、何してるんですか！？」

『目が覚めたか。見ての通り、お前を抱えて草原を逃げている』

「な、何からですか!？」

『大聖堂だ。馬鹿かお前は？ 自分が捕まっていた場所も判らなか』

「な……！ は、放せーっ！！ 何勝手に連れ出してるんですか！？ 誘拐ですよ、ゆーかい！！」

『知った事か……。せつかく助けてやったと言っのに随分な言われようだな』

「助けたって……何からですか？」

『大聖堂だ。馬鹿かお前は？ 自分を捕らえていた連中も判らんのか』

「わかります！！ そっじゃなくて、だから、なんで助けた事になるんですか!？」

『もういい加減口を閉じてろ。あんまりぎゃあぎゃあ喚くと捨ててくぞ』

「にゃーっ！！ 師匠ーっ！！ なんてこうなるんですかああああっ！！」

じたばた暴れながら叫ぶリリア。しかしフェンリルは歩みを止める事もせず、リリアを手放す事も無い。

ただ月明かりに照らされながら、執行者たちから逃げ切るために草

原を駆け抜けるのみであった。

勇者の資格の日（3）

「何なんだ、この遺跡みたいな建造物は……？」

薄暗闇を一行に進んで行く。階段は一人一人が通るのがやっとの狭さで、結果的にそうなってしまうのだ。

どこまで続いているのかもわからない闇を下りながら、背後を進むマルドゥークに声をかける。眼鏡の秀才はすぐに俺の疑問に応えてくれた。

「もしかしたら魔王が建造した施設かも知れないな」

「魔王って……ザックブルムのロギアが？」

「ロギアは魔術、特に様々な召喚技術に長けていたと言われている。魔物と呼ばれる化物を生み出したのも魔王の所業だ。ザックブルム国内には、戦時中ロギアが建造させた召喚施設など魔術的な意味を持つ建造物が幾つか存在するという話は聞いている」

「ってことは……ここは魔物の生産プラントかよ……」

「そうとは限らんがな。それに、魔物の巣窟ならば盗賊は根城にしないだろう」

まあ確かにマルドゥークの言うとおりだ。表に居たのは明らかに見張りであり、その先には彼らが危機を警戒しなければならない理由

があるはず。

しばらく階段を下るとようやく明かりのような物が見えてきた。慎重にそこへ進んでいくと、地下に果てしなく広がっている巨大な空間へと繋がっていた。

それこそ地上に出ていた部分はこの埋もれるように崩れ落ちた神殿の一部に過ぎないのだろう。果てなく広がる空洞を風が吹きぬけ、ところどころ陥没した安定しない足場で俺たちはようやく一列ではなくなった。

「何なんだこの広さは……？ この様子じゃ、山の麓にまで繋がっててもおかしくないな……」

「山の麓まで、か。案外貴様の言うとおりかも知れんぞ」

つまり、街の連中はグルかもしれないって事か？ そんな壮大な事になってるようには思えないが……。そもそも街の連中がグルなら、もうとつくに俺たちがここに来るといふ情報は漏れているはず。

「って、マズった……。もしかしたら逃げられたか？」

同じ事を考えていたらしいマルドゥークは頷き、俺たちは全員同時に駆け出した。しかしその悪い予感とは裏腹に、大勢の足音が空洞の奥から聞こえてくる。

全く遮蔽物の無い広々とした空間では隠れる場所も存在しない。俺たちは意を決し、武器を手にして出迎えを待つ。

「そう身構えなくとも、襲い掛かったりはしませんぜ。武器を下ろしてください」

闇の中から姿を現したのは一人の男だった。しかしその背後には仲

間が大勢待機しているのだろう、鋭く尖った殺気のようなものを感じる。しかし見るからに男は無防備と言った様子で両手をあげたままこちらへ歩み寄る。

ダークスーツ姿の細身の男だった。髪をオールバックに固め、大きな傷のある左目を閉じたまま、うつすら片目を開いて俺たちを眺めている。不気味な雰囲気の名だった。勿論警戒を解くわけには行かず、それを男も理解してか、5メートルほどの距離を開いて停止した。尤も、この程度の距離、本気になれば間合いの中も同然だが。

「お兄さんたちはクイリアダリアの聖騎士団絡みとお見受けしやす。目的はアリアの姫さんの事、ですかい？」

「貴様ら……！　やはり賊の根城かつ！！　アリア様を即刻返してもらうつ……！」

「マルドゥーク、落ち着け……。一応人質に取られてるんだぞ」

俺の言葉にマルドゥークは齒軋りし、一步下がった。しかし俺たちの態度とは裏腹に男はポケットに両手をつっ込んだまま、首を横に振った。

「人質なんて滅相もない。あつしらは別にあの姫さんをダシにお兄さんたちを脅したりはしませんよ」

「賊の言う事などに耳を貸すとも思うのか！？」

「だからな、マルドゥーク……。すまんアイオン、ちょっとこいつ抑えといてくれ」

「おい、ナツル貴様……。むぐぐーっ……！」

アイオーンに背後から羽交い絞めにされもがくマルドゥークを放置して話を進める。男は俺を見て何やらニヤニヤ笑いながらゆっくりと間合いを詰めてくる。

「お兄さんは後ろの騎士の兄さんより少しは話が出来そうだ」

「誘拐なんてするからには目的があるんだろう？俺たちはアリアを助けただけだ。別にあんたたちを全滅させなきゃいけないわけじゃない」

「成程、まったくおっしゃる通りで。それじゃあ交渉のテーブルについてもらえると考えてもいいんですかね？」

「誘拐した理由くらいは聞いてやる。ただその後どうなるのかは保障しかねるが」

男を睨みつけるが、向こうは俺の視線を受けてもひよいと交わすように笑う。つかみ所の無い奇妙な男だった。男は踵を返し、闇の中へ進んで行く。どうやらついてこいという意味らしい。

俺たちはその男の案内に続いた。闇に包まれた遺跡の中は俺たちでは全く以って一寸先は闇と言った状況である。ただ男の足音とかな影だけを頼りに歩みを進める。

やがて自分たちがどうやって進んできたのかもわからなくなった頃、辿り着いたのは比較的保存状態のいい地下に存在する街のようなエリアだった。そこには驚くほど沢山の人たちが生活を営んでおり、それは街のような、ではなく街そのものだった。

勿論全体を通してながめても裕福な都市であるとはお世辞にも言えないだろう。崩れかけた建造物に暮らしている時点で既に立派とは言えない。しかし巨大で、とにかく人口の多い街だった。

男は俺たちを案内し、その街の中にある一つの崩れかけた施設の中に足を踏み入れた。中は改装されており、手製感溢れるぼろぼろの家具が陣取っている。そこにある木製の大きなテーブルの周りに並べられた椅子に腰掛け、交渉は開始された。

「申し遅れやした。あつしは八と申しやす。^{ハチ}この街の町長？
みたいなものでしょうか」

「俺は本城夏流。女王より救世主^{メサイア}に任命されてる。以下、俺の部下だ」

厳密には部下ではないが、まあそういう話にしたほうが早いだろう。マルドゥークは何やら反論したがっている様子だったが、アイオーンが見事封じてくれた。

「ほう、成る程。噂に名高き第二次勇者部隊^{フレイフ克蘭}のリーダーさんでやしたか。こいつは失礼。顔くらいは知っとくべきだった」

「……前置きはいいいから本題に入るぞ。アリアを誘拐したのは……あんたたちなのか？」

俺の話によれば、マルドゥークが目撃したのは黒い仮面の騎士外見的特長から判断するにフェンリルだとばかり考えていた。しかし蓋を開けてみればまるで奴とは関係のない謎の都市に来てしまったわけ。

まず、本当にアリアを誘拐した犯人が彼らなのかどうか、その疑問から払拭したかった。男はその質問に恐らく正直に答えてくれた。

「あつしらはただ受け取っただけ。姫さんを拉致したのは、昔の知り合いですね」

「……フェンリルか」

「フェンリル？ んー、いや……ああ、最近はそう名乗ってるんですかねえ。兎に角、実行犯は彼……後はあつしらのお仕事ですわ」

「フェンリルは何でアリアを誘拐したんだ？ というか、あんたはアリアをどうするつもりなんだ？」

何でもフェンリルは港の近くでこの八とかいう胡散臭い男にアリアを任せ、自分はそくさ引き返したのだという。つまり実行犯であるフェンリルはこの大陸にすらないことになる。

全く正反対の方向に来てしまったことになるが、アリアは実際にここにいるというのだから全くの無駄足というわけでもないか……。

「あつしらはただ、お兄さんの言うフェンリルって男に姫さんを丁寧に保護するようにとだけ依頼されてる人間でしてね……。詳しい事はどうにも」

「何だそりゃ……。ってことは、あんたらは別にアリアを誘拐する意味はないのか？」

「意味ならありますぜ？ それがあつしらの仕事ですわ。そんなわけで、力ずくと来られてもあつしらもそう易々返す訳にも行きませんでね。ここはお引き取り願えませんか？」

流石にそれは聞き入れられない。しかし男が指を鳴らすと重武装の怪しい男たちがぞろぞろと部屋に入ってくる。まあ別にだからどうというわけではないが、交渉はやはり当然のように上手くいかなかったらしい。

仕方ない、武力で何とかしようかと考えた時だった。ふと、つい先ほどまで細かった男のキツネのような目がぱつちりと開かれる。その驚きの視線の先には椅子に座ったブレイドの姿があった。

「……坊ちゃん、失礼ですが……あんたもしかして、ブレイドの旦那のせがれさんですかい？」

男の一言に周囲のいかにもごつい男たちが同時にざわめいた。ブレイドは何がなんだかよく判らないまま頷き、八は啞然とした様子で苦笑を浮かべた。

「いやあ、大きくなりやしたね。最後に見たのはまだ坊ちゃんが赤ん坊の頃でしたんで……いや、どこか旦那に似ているとは思ってたんですけどね。こりゃ妙な運命もあつたもんですわ」

「あんた、ブレイドの父親と知り合いなのか？」

「知り合いというか何と云うか……ええ。あつしらは元ブレイド盗賊団　その団員ですわ」

あつけらかんとした態度の男の発言に俺たちは黙り込む。そんな中一人、机を両手で叩いてブレイドが叫んだ。

「なんだそりゃあつー！」

『ここまでくれば、追っ手も振り切れたろう。が、まだ確実とは言えない。しばらくはこの森でやり過ぐす』

リリアを森の中に降ろし、フェンリルはそう告げた。何がなんだか

わからないままここまでつれてこられたリリアはじつとフェンリルを睨みつける。

しかしフェンリルは全くそんな物を意にも介せず倒れた木の幹に腰掛けた。リリアはそれでもじいつとフェンリルを見つめ続ける。しばらくすると仮面の男は溜息を漏らし、肩を竦めた。

『突っ立ってないで座ったらどうだ。休める時に休まなければ後が持たないぞ』

「……後、って……。あの、いい加減教えてくれませんか？ どうしてリリアを攫ったりしたんです？」

『理由などどうでもいいだろう』

「よくないですっ！！ まるでリリアが脱走したみたいになっちゃってるじゃないですか！！」

『……ああ、成る程。そういう考え方もあったか』

「何今気づいたみたいな事言ってるんですか！？ ああもう、兎に角力づくで貴方を倒してリリアは大聖堂に帰りますからっ！！」

リインフォースを構えるリリア。フェンリルはその刃先を見つめ、それから立ち上がる。

『オレを殺す気なら、構えからやり直す事だ。お前は聖剣の力に頼りすぎている。構えるという事は魔力をコントロールするという事だ。お前の一見派手で威圧感のある剣術は我流でその実非常に非効率的だ』

「……うつつ！　こんな時にそんな事を言われても……」

『魔法と剣を別々に使うものだと考えているからそうなる。二つの本質は同じ物だ。考えて使うな。自然と呼吸をするように出来るようになるまで使いこめ。そんな素人構えで襲い掛かれても困る』

森の中に落ちている木材などを拾い集めながらフェンリルが口にする言葉。リリアは最初こそそれに反発するようにそっぽを向いてみたが、いざ自分で試してみるとその指摘の鋭さに息を呑む。まるでずっとリリアを見ていたかのような、的確な意見だった。確かに自分でも認識していた聖剣に頼りすぎているという事実。敵に指摘されるようでは、やはり腕など高が知れている。

落ち込むリリアの前でフェンリルは焚き火を作っていた。しばらくふらりと森の中に消えたと思えば、巨大な肉の塊を担いで戻ってくる。そうして一人で肉を焼き、木の幹に座ったままりリアに言う。

『ここなら光は外まで漏れないだろう。すぐそこに川もある、飲める水だ。今のうちに少しでも休んでおけ』

「……あのー？」

『何だ？』

「貴方、悪い人ですよね？」

『そうだな』

「前の戦争でも、暗躍してたんですよ」

『よく判ったな』

「そりやわかりますよ……。あんなにボコボコにされましたし……」

『手加減はしない主義でな』

「……そういうの大人気ないんじゃないですか。いや、そうじゃないくて……悪い人なのに、何で、その……」

魔法で焼いた肉をリリアに差し出す。封印されていた間からずっと何も口にしていなかったせいか猛烈にリリアは空腹だった。肉の塊を見ただけで口の中が涎でいっぱいになるが、敵の手から食事を受け取るというのにも抵抗があった。

ごくりと生唾を飲み込み、フェンリルの様子を窺うリリア。別に何も毒が盛られている様子はなく、肉もただの肉である。その香ばしいおいに耐え切れず、リリアは肉を受け取って齧りついた。

「……あ、おいしい」

『魔力コントロールが上達すれば火加減などお手の物だ』

フェンリルの隣に座り、焚き火を眺めながらひたすら肉を頬張るリリア。フェンリルは前のめりに腰掛け、ただ焚き火の炎をじっと見つめていた。

それは何かを思い出す作業のようであり、時間を紛らわせる為の儀式でもあり……。不思議なその横顔をじっと眺め、リリアは眉を潜めた。

「あのーっ?」

『何だ』

「どうしても理由は教えてくれないんですか？」

『しつこいガキだな。教えん』

「いいじゃないですか別に減るもんじゃないし……」

『……減るとかそういう問題ではないだろう。まあ、黙っていると五月蠅そうだから……。強いて言うのならば』

「ならば？」

『お前を勇者にしたいくないだけだ』

二人の間に沈黙が流れた。リリアはしばらく考え込み、それからほつぺたを膨らませる。

「それ、ただのいじめじゃないですかああああっ！！」

『うるさいな……』

「うるさいじゃないですよ！！そんなろくでもない子供のイジワルみたいな理由でこんな所まで拉致られてたまるかーっ！！」

『大声を出すな……。完全に巻けたとは思うが、一応警戒中なんだぞ』

「リリアはここですよーっ！！執行者の皆さん、早く助けに来てくださーいー！！」

騒ぎは暫く続いた。フェンリルは座ったまま微動だにせず、ひたすらに炎を眺め続ける。その炎の傍らに座るリリアに無言で毛布を投げ渡す。

毛布を受け取ったりリリアはそれをじっと見つめた。フェンリルはやはり微動だにしない。溜息を漏らし、リリアは毛布に包まって目を閉じた。

フェンリルは許せない敵。それは今でも変わらない。ただ今この瞬間だけは、敵同士という間柄を捨ててもいいのではないかと思えた。

信じられるわけではない。ただ、その行いには僅かな優しさが感じ取れた。理由を話さず、勇者にしたくないからと語るフェンリル。その態度は全くリリアに対して優しくはない。ただ、どこか思い遣りのようなものがあり、それを隠すように男は黙っている。

仮面に覆っているものは顔だけではなく、その思いや言葉もそんなのかもしれない。そんな不思議な事を考えながら、リリアは炎の暖かい光の中でそっと眠りに落ちて行った。

ブレイド盗賊団。それは、まだ魔王大戦が世界中を飲み込んでいた戦乱の時代に生まれたという。

団長である初代ブレイド・ブレットは、元々戦争孤児であり、同じく戦争孤児である子供たちの為に軍相手に戦う義賊だったらしい。それは別にザックブルムやクイリアダリアといった括りに関係なく、ブレイド本人が悪だと判断した物から奪い、それを必要とする人に分け与えるという独善的なものであったらしい。

彼はその筋では有名な日和者と呼ばれ、高価な調度品など目もくれず、ひたすら武器だけを自分のコレクションとし、残りの金銀財宝は全てばら撒いて歩いていたという。

そんな変わり者の盗賊王が人生で初めて敗北した男、それがフェイト・ライトフィールドだった。フェイトはブレイドを倒した後、そ

の彼の持つ洗練された武器コレクションを全て没収しようとしたという。命よりも大事なコレクションを強奪されそうになったブレイドは、止むを得ずフェイトの手下になっただけらしい。

ろくでもない勇者フェイトの手下になってしまった団長に続き、彼らも同じようにフェイトの傘下に付き、戦乱の世を駆け抜けたという。団長である初代ブレイドは死に、現在は副団長であったこの八という男が団を取りまとめているらしい。

そんな昔話が終わると俺たちはもうここに何をしにきたのかよくわからなくなっていた。八という男は話を終えて満足そうに腕を組み頷いている。

「いやあ、坊ちゃん立派になられて……。先代も生きてればさぞ喜んだことでしょう」

「いや、おいらまだ見習いだけど……」

「それにしても、やはり勇者部隊の手下扱いになっているとは、親子揃って運が無い。坊ちゃんも妙な勇者に好かれちゃったクチですかい？ はっはっは！」

明るく笑い飛ばす八。しかし俺たちは全く面白くない。別にそんな昔話をしにきたわけではないし、そもそも敵だと思っていた連中が実はブレイドの父親の部下でしたとなればまた話が一段とややこしくなる。

「えーと、八？ おいら、全然おっさんに見覚えがないんだけど」

「そりゃあ、あつしらは旦那が処刑されてつからすぐに北方大陸に逃げ延びやしたからね。本当は坊ちゃんの傍に居て差し上げたかつたんですがね、こんな筋モンばっか周りを取り囲んだとなっちゃあ、

坊ちゃんの人生によくない影響も出てしまっんじゃないかと」

「どっちみちおいらは盗賊になりたがったと思うけどなー」

「ああ、そうそう。奥方は元気ですかい？ 旦那が処刑された後、女手一つで大変だったでしょうに」

「あー、かーちゃんは死んだよ。なんか普通に過労だったみたい」

「なんと。そいつあ気の利かねえ質問しちまいやしたね」

「別に気にしてないぜ？ かーちゃんは最後までかーちゃんらしく生きたしな。それでハ、アリアの話なんだけど」

「いくら坊ちゃんの頼みでも、あの姫さんを返すわけにや行きませんぜ。一応こちらが仕事でしてね……。それがこの街に住む連中の為でもあるんでさあ」

この街は元ザックブルム領土の地下に存在する、アンダーグラウンドシティと呼ばれる場所らしい。クイラダリア人の近寄りたがらない北方大陸を利用した、無法者の街だそうだ。

街にいる連中はみんな何らかの理由でクイラダリアに追われたり恨みを持つている連中ばかりだという。さらには先代ブレイドがそうしていたように、戦争孤児もここで引き取って育てているという。

「クイラダリア政府ってえのは、ザックブルムの人間をえらく弾圧するんですわ。本当に従順な態度を取っている一部以外は、皆殺しにして当然だと思っている。そういう可哀想な連中は地下に逃げられないですわ。当然、あっしらも同じ事」

先の大戦でブレイド団は勇者と共に魔王と戦った英雄的な存在であるはずだった。しかし今彼らはクイリアダリアには住めない状態にあるという。

「聖騎士団のお尋ね者になつとるんですわ。前の戦争の時は散々手え貸し手やったと言つのに、世知辛い世の中ですから……そうは思いませんか？」

「だからってアリアを拉致つていい理由にはならんだろう」

「腹の中をそのまま出せば、あつしらは正直クイリアダリアってえ国が大嫌いなんですわ。だからそのお姫様も返してやりたくはない……そう、ささやかな嫌がらせみたいなもんです。ですがまあ、坊ちゃんのお願ひでもある。いいでしょう、あの姫さんを帰してやつてもいい」

ただし。八は人差し指を突き出し、そう付け加えた。

「あつしの提案するちよつとしたゲームに参加してもらえるのならば　という条件付で。お兄さんたちにとつてもそう悪い条件じゃあないと思ひやすけどね？」

八はにやりと笑う。それは本当に、そう……長年日の目を浴びずに過ごしてきた人間の不適な笑みだった。

しかしそれを断れる立場に俺たちはない。力づくで　というのも、ブレイドの関係者となると気が引ける。仕方が無い。悪い条件も何も……断る事など出来ないのだから。

かくして俺たちは八　元ブレイド盗賊団副団長と、ゲームをすることになった。勿論その内容など知るべくもなく、俺たちはとんでもない事に巻き込まれる事になるのであった。

交わる時の日（１）

「では、フェイトはロギアに止めを刺さなかった、と……。そういう事ですか？」

魔王大戦の終結はフェイトとリインフォースによって齎された。その最後の戦いの場に同席する事の出来なかった仲間たちにとって、フェイトの真意を知る方法は既にどこにもなかった。

勇者は死んだのだ。残ったのは朽ち果てたその亡骸と、主を失って尚僅かばかりも輝きを失うことの無い聖剣の光だけ。そこにロギアが封じられているという事実は公表される、フェイトの死体を回収しに向かった仲間たちの間だけで密かに囁かれた。

彼らも本当は死体ではなく生きたフェイトを連れ帰りたかった。彼には待っている人々が大勢居る。戦いを共に切り抜けた仲間が居る。それでもフェイトの死という事実は変わらない。だというのに、魔王は聖剣の中に息づいたまま……。若いフェンリルにはそれが我慢ならなかった。

「何故その聖剣を態々封印処理など施し残すのですか！？ ゲイン、貴方なら判るはずだ！ ロギアの力は膨大……封印など生ぬるい物が通用する物ではない事くらい！」

しかしゲインは聖剣を破壊する事はしようとしなかった。勿論剣を破壊したところでロギアの封印がどうなるのかは判らないという事実もあった。しかし何より、親友が最期に残した聖剣を、その死に際に行った最期の行いを無駄にはしたくなかった。

当時、勇者部隊の誰もが辛い気持ちの中にあった。決戦の地での戦い。その中で魔王まで辿り着けたのはフェイトとゲインだけ。逃

げ帰ったのだと糾弾されるゲインと自分たちは何も変わらないのだという事、勇者という立場から一心に国民の悪意をゲインが背負っているのだという事……。様々な事実がフェンリルを苛立たせ、その憎しみの矛先はロギアに向けられる。

詰め寄るフェンリルの声を聞き、それでもゲインはリインフォースに鎖を巻きつける。その様子にフェンリルは拳を握り締め、歯軋りする。

「……オレたちは、結局フェイトの力になる事も出来なかった。戦争が終わっても世界は何も変わらない……。支配者がただ、ザックブルムからクイリアダリアに摩り替わっただけだ」

「確かに君の言う通り、世界はそれほど変わらなかったかもしれない。ただ、フェイトが居なくなつて、ロギアが封印された……。数え切れない命を犠牲にして得た結果は、勇者が魔王を倒すという結末だけだ。それは決して僕らが望んでいた物ではないというのに」

「クイリアダリアは腐っている……。！　魔王が居なくなつた途端、周辺諸国を侵略し始めた！　既にどの国も魔王との戦いに疲れ果て、誰も彼も戦う気力など残つて居ないというのに……。！」

「かつては共に戦った国でさえ、今僕らは倒さなければならぬ。だから僕はね、裏切り者と呼ばれてよかったと思うし、それは間違いないのだと思う」

寂しげに笑うゲイン。そう、彼はもう戦いたくなくなつたのだ。今まではそれでもよかった。それでも明るい未来を信じていられた。それが希望だった。

だが現実は違う。どこまでも闘争を望むのは彼らが信じた国そのものであり、人そのもの……。そして今、自分たちもまたかつての魔

王と同じ所業を求められるのならば。

「僕は裏切り者だから、爵位も勇者も騎士の位も剥奪された。だからもう、誰も僕を戦場に連れ出そうなんて思わないだろう。これでもう、誰も殺さないで済む……」

「……………オレは」

「腑抜けた僕を笑うかい？ 君にはその権利がある。君たち弟子を魔王の城まで連れて行って、戦場で馬鹿みたいに鍛えたのは僕らなんだ。君の人生を変えた僕を、君は恨む権利がある」

「……………後悔ならしていません。しないと決めました。オレたちの行い、その全てが無駄だったとも思いたくはない……。魔王は封じてもいつかは目覚めるのでしょうか？ ならばオレは、次に魔王が目覚めた時に殺せるように強くなって置きます」

「まだ戦いの渦中に身を置くのか。それもいいだろうね。でも、それだけが全てじゃない。聖樹ラ・フィリア……あの周辺に街を作っているらしい。そこで、将来世界を守る子供を育成する兵士養成学校が発足する。ソウルはその教師に志願したそつだよ」

「……………兵士養成学校？ 世界中を支配しようとしておいて、子供に何と戦わせるつもりなんだか……………」

「だが、それも悪くはないと思う。いずれはゲルトも、その学園に入れてやりたいと思うてる。守る為には力が必要だ。僕たち大人は間違った使い道で血を流してしまったけれど……………次の世代はそうではないと信じてみるのも一つの未来だよ」

しかしフェンリルは首を横に振り、背を向ける。それは当然の事であり、ゲインも溜息と共に目を閉じた。

「聖戦……侵略戦争が始まれば、オレたちも狩り出される。オレは御免です。そんなことの為に、生き延びたわけじゃない……」

「……それもいいだろう。君は君の生き方を探すといい。生き残った仲間、皆ばらばらの道を選んだ。君もその自分の信じた道を行けばいいだろう」

ゲインはそう言ってリインフォースを抱いて微笑んでいた。それがフェンリルが人生で唯一師であると認めた男との、最期に交わした言葉となってしまった。

それから何年かの時が流れ、ゲインの訃報をフェンリルも耳にした。だが、悲しむ事はなかった。最早仲間の死程度で涙を流せるほど、彼らは人らしくはなかったから。

戦争の終わり、フェイトの死、ゲインの死……。多くのものを失い、取り残されたのはリリアだけではない。ただ変わってしまった世界の中、どう生きればいいのかも判らず、世界に馴染めず焙れた人間など、いくらでもいる。

『……フェイトの娘、か』

ふと、少し長い間物思いに耽っていた。闇に閉ざされた森の中、焚き火に照らされて眠るリリアに視線を送る。

立ち上がり、その傍に片膝を付く。すやすやと寝息を立てるリリアの髪に触れ、そして静かに手を引いた。

自らの掌をじつと見詰める。フェイトが残し、ゲインが育て、そして学園が鍛えた次世代の勇者。未来を切り開くかもしれない希望。そして彼女が抱く、リインフォース。

『……やり直せるなんて思っていないさ。今更……オレは 』

呟きは闇の中に消えた。握り締める拳の中に、思いさえ巻き込むかのように。

交わる時の日（１）

「こちらがその入り口ですわ」

そう言つて八が指差したのは、何とも場違いな 自動ドアだった。アリア救出の為にやってきた俺たちに対し、アリアを差し出す条件として八が提案したゲーム。それは実に彼らにとって効率的なものだった。

「簡単な事です。ただ、姫さんに匹敵する財宝を、ちょっと取ってきてもらいたいってえだけの話でしてね」

ゲーム……それは所謂トレジャーハントだった。ザックブルム地価空洞は、この大陸全土にかなり広くその根を伸ばしているらしい。彼らの住むアンダーグラウンドシティのように魔物が完全に駆除された施設もあれば、俺たちの期待を裏切らず魔物だらけで人が入れない区域も存在するという。

彼らの多くはこの地価空洞に存在す古代遺跡、あるいは魔王軍の施設から品々を回収し、流通に乗せてクイリアダリアに売りつけることで生活しているという。俺たちに提案されたのは、手付かずになつてゐる遺跡の探索だった。

「ここであつしらの眼鏡に適う品物を回収してこれれば、アリアの姫さんはお返ししやす」

「そのどこがゲームなんだ？」

「まあ、中に入ってみればわかりやすよ。それに、楽しいでしょう？ トレジャーハント」

につこりと笑うハ。まあ要するに返して欲しかったら金になるものをよこせ、っていう事だから脅されているようなものだが……。まあ、正面からやりあうよかマシか。

仕方が無いので扉を前に再びパーティーで集まり作戦会議を開く。事前に八に許可を貰い、全員で探索するのではなく何名かいざという時の為に残しておく事が許されている。

ダンジョン古代遺跡内部は迷宮のように入り組んでいる上にそこらじゅうから魔力が放たれており、魔力コンパスが使えないという。遭難してしまう可能性も考えられるので外に人員を待機させておくのは当然だし、そもそもその間アリアを見張っていてもらわなければならない。約束事を破るような男には見えないが、一応一国の姫でありリリアの事もかかっているのだ。ダンジョンに入っている間に逃げられました、なんてオチは願い下げである。

「執行者数名と……マルドワーク。お前残ってアリア様を見張ってる」

「断る！ 私と一緒に行くぞ、ナツル！！ 貴様らに任せていたら時間がどれだけかかるかわからんし、ダンジョン探索なら経験もある！」

「……意外だな。アリアの見張りのほうをやりたがると思っての配

慮だっただが」

「今はそれより一刻も早くここから姫様を救い出す事が大切だ。見張りならその赤髪の女にでもさせればよからう」

そう言っアアオーンを指差す。しかしまあ、確かにアアオーンなら……一人外においておいても全く問題なさそうだが。

何があってもアアオーンがピンチになる情景が俺には想像出来ない。こいつだつたら賊が襲つてこよーがアリア様が連れて行かれよーが俺たちが遭難しよーが、なんかなんとかなる気がする……。

「……うん、そうだな。スタンバイメンバーはアアオーンで、探索は俺とブレイド、マルドワークの三人で行う……って、あれ？ ブレイド君は？」

「彼ならさつき待ちきれないといった様子で楽しげに中に入って行ったよ、ふふふ」

「いやいや、見てたんなら止めるよ！？ くそ、中どうなってるのかわからないのにあいつは……！ 行くぞマル……！」

「世話の焼ける子供だな……ん？ おい、何勝手に人の名前を略している？ ナツル貴様！ 待てっ……！」

なんだかうるさい眼鏡と共に自動ドアを潜つて迷宮の中へ足を踏み入れる。そこに広がっていたのは……なんというか、世界観にマッチしない風景だった。

機械的な構造のまるでSF世界のような内装の通路が続いている。その床や壁には魔術文字が刻まれ、今でも淡く輝いている。流石に意表を突かれる景色に足を止めて眺めてしまう。

「ここまで保存状態のいいダンジョンは私も初めてだな……」

「……っと、それどころじゃなかった。ブレイドを追わないと……！」

二人で真っ直ぐに続く通路を走り、自動ドアを潜る。そこには何かの機械が大量に蠢く工場のようなスペースが広がっていた。わけのわからない機械に囲まれ、ブレイドは楽しそうにあちこちを見て周っている。

「あ、ニーチャン！ 見ろよこれ、すげえ機械がいっぱいだー！」

「こら、ブレイド！」

近づくなり速攻ブレイドの頭部をチョップする。頑丈な手甲でやられたので痛かったのか、ブレイドは涙目になって両手で頭を抑えていた。

「危険な場所に先行するな……。何かあるかわからないんだ、用心しなさい」

「うぐう……き、気をつけるよ……」

俺たちがそんなやりとりを交わしている間にマルドゥークは機械類を調べているようだった。俺も何かないかと歩き回ってみると、動いている何も運んでいないベルトコンベアの続く先、不思議な武器のようなものが山積みになっているのが見えた。

ベルトコンベアを飛び越えて近づき手に取ってみると、それは機械の剣のようだった。既に年代物でボロボロではあったが、言うなら

ば小型のチェンソーのように見える。

他にも銃のような物など、どうにもこの世界には合わないようなものがごろごろと転がっていた。いや、機械人形なんてものもあるのだから、機械的な生産施設や武装があってもおかしい事はないのだが……。

「んー、ニーチャンそれは駄目だね。完全にぶっ壊れてるし……あんまりいいパーツ使ってないよ」

背後から俺の手元を覗き込むブレイド。流石は冒険家学科だけあり、目利きは鋭いらしい。

「せっかく来たんだから、ドーンとデッカイの持って帰ろうぜ!!
あ、でも一応その辺のも適当に持ってけばいいか」

「持つてくつて、この機械の武器の山をか……? 三人で持ち運べる量じゃないだろうが」

そんな俺の言葉をブレイドは笑って聞き流す。そうして両手を翳すと魔力で生み出された光がまるで掃除機のようにそこにあつた武器の残骸を見る見る吸収していった。

今の今まですっかり失念していた。ブレイドは固有空間を作り出す魔術を使えたはず……。成る程、それならいちいち持ち運ぶ必要はないのか。

「盗賊の基本だよね! ニーチャンもマスターしたら?」

「……どういう仕組みなのかもどうすれば出来るのかもさっぱりわからん。うーん……その辺はブレイドに任せるよ」

「おい！　ちよつと来てくれ！」

マルドゥークの呼び声に応じて二人で駆け寄る。見ればマルドゥークはわけのわからない機械類を手際よく操作しているように見えた。ダンジョンは初めてではないと言っていたが、まさか判るのだろうか。

「この施設の名前がわかった。第三アルカプラントというらしい。地下三階まである、機械人形の生産施設らしい」

「機械人形の……？　お前、その機械いじれるのか？」

「古代文明の遺産なら少しはな。古文書も読めるし、神代の文字も解読可能だ」

神官つてのは頭が良さそうなイメージがあつたが、本当にいいんだな……。と、それは兎も角この施設が機械人形の製造工場だとすると。

「じゃあ、まだ動く機械人形が残っているかも知れないって事か」

「マジ！？　機械人形丸々一体なら、ものすごい高値で取引されてるんだ！　お宝と呼んで間違いない品物だぜ！」

「そうか………だったら話は早いな。まだ動きそうな機械人形を探そう。よし、急ぐぞ」

三人でその場から離れようとした時だった。マルドゥークが操作していた端末から突然警報が鳴り響いた。何だかわからず慌てて振り返る俺たち。同時にブレイド君と一緒に

マルドゥークに視線を送ると、焦った様子で首を横に振った。

「わ、私は何もしていないぞ!？」

「……眼鏡のニーチャン、なんか変なトコいじったんじゃ……」

「……おい神官、本当にわかって操作したんだろうな」

「な……き、貴様ら無礼にも程があるぞ!!　いいか、私は九つの時から古代文明の遺産について研究を……」

腕を組んでマルドゥークがそんな事を語り出した時だった。マルドゥークの背後、大地がせり出し、そこから巨大な八本足の蜘蛛をかたどったような巨大な機械が現れた。

それは正面にガトリング砲にしか見えない何かを装備しており、どうにも友好的には見えない。しかしガトリング砲って……。何でこの世界にそんなもんがあるのか……。

「……により、私の論文が認められ魔術教会からも表彰を受け……」

「……や、やばい!　カウンタートラップだよこれ!　ニーチャン、逃げよう!!!」

「マルドゥークいつまで喋ってんだ馬鹿!!　後ろ後ろ!!」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは……!　後ろって」

マルドゥークが振り返り、機械の塊と目線が合う。そうして俺たちは弾かれるように駆け出した。

蜘蛛は凄まじい勢いで足を動かして猛然と俺たちを追いかけてくる。

地下に格納されていたからか、まるで新品のように綺麗なボディで不具合もなくきちんと追尾してくる。本当にいらんとこばかりしっかりしやがって……。

「ガーディアンマシンだよ!! こういうダンジョンには、決まっ
てあの手の魔物がいるんだっ!!」

「魔物っーかロボットじゃねーかつ!!」

「ロボ……? それがなんだかはわからんが、兎に角来るぞ!!」

ガトリング砲が俺たちを捉える。放たれた弾丸は轟音と共にそこらじゅうをブチ抜きながら俺たちを追ってくる。流石に逃げ切れないと判断して振り返ったマルドゥークが魔力障壁を展開する。

しかし銃弾はマルドゥークの障壁を一気に押し返して行く。まさかの破壊力に思わずうろたえた時、銃弾の雨を掻い潜ってマシンの懷に飛び込むブレイドの姿があった。

「この……! おりゃあっ!!」

マシンの頭部を蹴り飛ばすと照準がずれてマルドゥークは何とか助かった。直後ブレイドは地面に手を当て、魔力の扉を開放する。

「とりあえず 壁っ!!」

直後、俺たちの目の前に巨大な城壁の一部のようなものが飛び出してきた。保存しているのが武器だけだと思っただけに突然現れた城壁に驚きを隠せない。

「ニーチャンこつちだ!!」

ブレイドの声に導かれ、通路を走る。どうも城壁で完全に道が塞がれているからか、ガーディアンはもう追ってこなかった。息を切らしながら停止する。それにしてもなんだったんだ一体……。やっぱりマルドゥークが弄ったせいか……？

「それにしてもまさか壁が出るとは思わなかった……。何でも入ってるんだな、その魔法は……」

「んー、まあ城一つ丸々入ってるからね」

あっさりとなんな事を口にして歩いていくブレイド。にわかには信じられない事実だが……もしかしてマジなんだろうか。

逃げ回っているうちに辿り着いたのは生産プラントの一角だった。部屋の隅にはベルトコンベアが続いていた痕跡があり、壊れたベルトコンベアの先には沢山の機械人形の手足が転がっていた。

歩み寄りそれを手にとって見る。どうもこの手足も別の部屋に運ばれてそこで組み立てられるようだ、この部屋でベルトコンベアが壊れている製で隣の部屋には部品が届いていないらしい。空しく空回りする機械を眺め、立ち上がる。

「ブレイド、この手足とかは？」

「んー、手足もそこそこ値が張るよ。持ち帰つとく？」

「だったら一つ譲ってもらえないか？ そうだな、えーと……この手とか」

手にしたのはそう、リリアの部屋で未だに主人の帰りを待っているであろう某執事ロボの為に見繕ったものだ。たしか結局金も無くて

腕はなくなつたままだつたと思うから。

それにしても、こうして実際に探してみるとクロロがいかに貴重な存在なのかよく判る。メイドロボを平然と何十機も配備している学園の財力も……。

ロボット……機械人形、か。深くは考えなかったが、機械なんてこの世界の文明には過ぎた存在なんじゃないのか？ 確かに列車は存在するが、それは魔力によって動くものだ。他にこれといって機械的なものは街では見かけない。

だというのに、ここには当たり前のように大量の手足が並んでいる。これが全て組みあがつたとしたら、何百体もの機械人形が量産される事になる。それにこの機械製造プラントも、街の景色とは余りに違いすぎる。

「マルドゥーク、ここは古代遺跡だ……そう言つてたよな？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

「いや……こんなに機械があるのに、どうしてシャングリヤやオルヴェンブルムには機械がないんだ？」

「……機械、というのは、基本的には近年まで禁忌とされてきた物でな」

機械は元々ダンジョンの中には存在し、世界各地に点在するその遺跡からは発掘されていたという。しかし単純な話、この世界の人間にはそれがなんなのかも理解出来なかった。

一部の錬金術師たちはその機械の仕組みを解明しようとしたが、結局それを再現して生産する事も出来なかったという。当然何がどうなっているのかわからないものを応用して新しいものを生み出せるはずも無く。

「一般に出回っている機械も存在するが、それは殆ど壊れたものを継ぎ接ぎして修理したものだ。尤も、魔力を原動力としているという事実、おおよその部品程度しか錬金術師にも判らない。機械そのものに自己修復機能があるものもあり、特に技術が無くも勝手に直る場合もある」

「……じゃあ、機械品は殆ど出回ってないし、出回っても数は少なく高価ってことか」

誰にも扱えなかった機械を唯一扱えたという人間が居る。それが魔王ロギア。

魔王は機械を扱い、自らの兵力としていたという。その魔王の所業から、暴走した先ほどのガーディアンマシンのように明らかに機械性の存在も、魔物と呼ぶのが一般的なようだ。

所謂神の世代の遺産であるとされる機械品は基本的に一般人には立ち回らない。クイリアダリアが調査に乗り出したのもここ数年の事で、機械が一般に出回るのはまだまだ先の話だという。

しかしそう話を聞くと、クロロは一体どこから来たんだか……。ヴアルカン爺さんはクロロを知っていたようだし……。

「ニーチャンたち、真面目に探せようっ！　またさっきのやつが追っかけてくるかもしれないだろー！！」

考え込んでいたらブレイドに叱られてしまった。仕方ない、あとで考えよう。

それから俺たちは順調に遺跡内を探索し、金目の物を漁った。そうして階段を下って行き、最下層である地下第三層まで辿り着いた。そこにあったのは巨大な扉だった。勿論自動ドアだったが、動力が入っていないのかはたまた扉そのものが壊れているのか、兎に角扉

は開かなかった。

「構造的にこの辺が武器庫だと思うんだけどなー」

「開かないんじゃないかな」

「いやいや、こういう時こそ盗賊の出番ってね」

ブレイドが片手を翳す。すると扉に小さな輪のようなものが開いた。それは部屋の内側へと通じているようで、ブレイドはそれを潜ってみせる。

「部分的に通りぬけ出来る空間を作ったわけ。ほら、入ろうぜ！」

「……便利だなーその能力……」

感嘆の声を上げながら中に入り込む。そこは真っ暗な闇に包まれた巨大な空間だった。

部屋の中を走る魔力の光だけがぼんやりと部屋を照らし出しているが、殆ど先は見えない。ここに来るまでは暗いなりに照明があったのだが……。

「照らすぞ」

マルドゥークは掌に魔力を収束し、強い光源となる球体を生み出した。一瞬で部屋の中が照らされると、そこに大量に折り重なるようにして倒れた機械人形の残骸が浮き彫りになった。

それらはどうにも手足や首などがはずれてしまっており、完全な状態にあるとはいえない。当然動くようにも見えず、しかし大量の武器や機械人形の山は充分に俺たちを圧倒する迫力を持っていた。

思わずそれらを見上げていると、ブレイドが声をあげた。一番下、残骸の山にもたれかかるようにして腰掛ける一体の機械人形がそこにはあった。その少女型の人形は手足も首も万全な五体満足な状態だった。

「これ動くんじゃない!？」

「さっさと回収して戻らねば……。アリア様もさぞ心細い想いをしておられる事だろう」

「お、おい……。動くかもしれないならあんまり不用意に近づかないほうがいいんじゃない……」

俺の発言を無視して二人は座った人形に近づいていく。二人の手が人形に触れようとした瞬間、どこかで聞いたような警報が鳴り響いた。

「激しくデジャヴュ……」

嫌な予感を覚えて振り返る。俺たちが通ってきた扉の前の床が一斉に開き、そこから夥しい数のガーディアンマシンが姿を表した。流石にあの量はおかしいだろうと思って慌てて二人の所に駆け寄る。どうにも道は行き止まりで、逃げ場もない……。

「やばいな……」

「わ、私は何もしていないぞ!?　ほんとだぞ!？」

「今はそんな事よりこれ何とかする方が先決じゃない!？」

ブレイドの言う通りだ。迫るガーディアンたちを前に武器を構える。

「穏便に済むと思ったんだがな……」

溜息を漏らす。まあ、仕方が無い。人間相手にするよりは、幾分気も楽だ。

俺たちは機械人形の群れに、一斉に襲い掛かった……。

交わる時の日(2)

「……ん、意外とアツサリ片付いたな」

大量に襲い掛かってきたガーディアンマシンの残骸を前に俺は手を叩いて腰に手を当てる。

流石に量が量だけあって苦戦したが、こっちが全滅するとかそういう状況ではなかったらしい。ブレイドもマルドゥークも十分に強い……いや、並外れた戦闘力を持っているのだ。三人揃えばこの程度の状況、特に問題ではなかった。

いかんせん疲れはしたが、ちよつとした怪我ならばマルドゥークが回復魔法で治してくれる。ブレイドの手当てを終え、マルドゥークはいよいよお目当ての機械人形に近づいた。

「やれやれ、酷い目にあつたものだ……。おい、動くかどうかを確かめてみる。少し周りの警戒を頼むぞ」

「了解、了解」

振り返って周囲を見回す。しかしあれだけの数のガーディアンだ、流石にもうこれで頭打ち……だと思いたい。

ブレイドは大量に取り出していた様々な種類の武器を魔法で格納し、疲れた様子で肩を落としていた。俺たちでも疲れるんだ、十三歳のブレイドが疲れないはずもないか。

「しかし、相変わらず便利な能力だよ」

「ん？ おいらにとつちや当たり前なんだけどな。生まれた時からこうだったし」

そういえば魔法の類は一子相伝。親から子へとその扱いと経験を継承するものだという。生まれた時から空間魔法が使えたのは、きつと先代ブレイドから術式を受け継いだからなのだろう。

ゲルトもリリアも当たり前のように魔法を使えるのに、俺は未だに魔法が一つも使えない。親から受け継ぐ物……そういわれても、魔法が使えるような非常識な親は残念ながら俺にはいないわけで。

「自分で勉強するべきなんだろうか……」

「ん？ ブレイド盗賊団の一員であるニーチャンにならやり方教えてやってもいいぜ？」

「マジ？」

「おう！ えつとな、こう……手の間に魔力をグアーッと集めて、グイッとこう、ドーンってやるんだ！！　へへ、簡単だろ？」

うん、学園に戻ったらルーファウス先生あたりに聞いてみよう。そんなくだらない事を考えていると、背後でマルドゥークの呼ぶ声が聞こえた。ブレイドと二人で駆け寄ると、機械人形の身体がぴくりと震える。

「動きそうなのか？」

「電源が切れていただけらしいな。魔力を補充したから、損傷がなければこれで起動するはずだ」

三人でまじまじと少女の機械を見守る。機械人形はゆっくりと目を開き、それから身体の動作を確認するように、肩、腕、指、ゆっくり

りと一つ一つのパーツを動かして見せる。

そうして顔を上げた少女のガラスのような瞳が俺たちを映し、人形は立ち上がるうとして……しかし起動したばかりだからか、それが出来ずに尻餅をつく。

「おおー！ 動いてるよー！！ こりや間違いなくお宝ゲットじゃん！！」

「……おはようございマス。お久しぶりです、マスター」

三人同時に目をぱちくりする。言っている意味がよく判らない。見れば少女は俺を見上げてじっと見つめているではないか。左右に立ったブレイドとマルドワークが同時に俺を見る。

「いやいや、何もしてねーから……。えーと、あんた名前は？」

「はい。ワタシはコードネーム、白蓮^{はくれん}……。どうやら、ワタシが眠りについてから著しく時間が流れてしまったようデス」

「白蓮？ 悪いが俺は君に見覚えはないし、こんな所に来た覚えも無いんだが。君のマスターってやつは、もうとっくに死んでるんじゃないかな」

ちよつとデリカシーのない発言だったかもしれない。だがこれだけ年代ものの遺跡となれば、少なくとも主は生きていないだろう。俺と主を間違えたのは、もしかしたら生まれただかりのヒヨコが初めて見た物を親だと思うのと同じような理屈なのか……。

またそんなくだらないことを考えていると、少女は再び立ち上がった。白い髪、小柄な少女……服装はどこか和服チックで、その辺りに転がっている機械人形のデザインとはかなり雰囲気異なる。

白蓮は相変わらずまだ動きなれていないという様子で、しかし俺をじっと見つめる。その瞳が動き、音を立てて眼球が輝いた。

「魔力波長の一致を確認。マスター、あなたは間違いなくワタシのマスターです」

「いや、だから俺は君のマスターじゃないんだよ」

「……いいえ。ワタシの身体に異常は見られません。マジックスキヤニング能力は通常通りのポテンシャルを発揮しています。貴方は間違いなくマスター……ナタル・ナハ様です」

「……え？」

三人同時に呟いた。そりゃ、驚きもするだろう。一体なんでまた、その名前が出てくるんだ？

ナタル・ナハ。ヨト信仰における救世主にして英雄神。嘗ての世界に存在したと言われる、伝説上の人物である。それが実在するなんて、多分誰も思っちゃいないだろう。

だが目の前の、途方も無い時間を越えて俺たちの目の前に現れた人形は俺をナタルだという。彼女はまるで、ナタルが実在して当たり前という顔で、俺がナタルであって当然という顔で、そう呟いたのだ。

どう答えていいのかもよく判らずに途方に暮れる。ブレイドは何やら目をきらきらさせながら俺を見ていてマルドゥークは口元に手をあてシリアスな顔で考え込んでいた。俺はというと、どちらでもなく。

「……俺の名前は本城夏流だ、白蓮。お前のマスター、ナタルじゃない」

「……改名したのデスか？」

「いや、そうじゃなくて……とにかく、そのナタルってやつとは顔も格好も全然違うだろ？」

「ハイ。ですが、あなたの持つ魔力は紛れもなくナタル・ナハ様……。ワタシは覚えています。あなたが最後にワタシに下した命令を達成するのに、とてもとても長い年月がかかってしまいマシタ」

そう言っただけで白蓮は彼女がもたれかかっていた巨大な山を作っている機械人形の残骸を見上げた。そうして機械とは思えぬ、何とも言えない憂いを帯びた表情で呟く。

「任務は達成しまシタ。マスターの言う通り、戦闘用機械人形、二百二十三機。ご覧の通り、迎撃いたしまシタ」

にわかには信じられない言葉で彼女は頭を下げる。その背後に積みれた、自称二百二十三機撃墜分の残骸。何の武器も持たない少女は、ゆっくりと顔を上げて俺に微笑みかけていた。

交わる時の日（２）

「……はあ、こいつあたまげた。まさか本当に動く機械人形を連れて戻ってくるとは……」

というのは、戻ってきた俺たちを見た八の第一声だった。何でもこのダンジョンはまだ未開の場所で、彼らも中がどうなっているのか

はさっぱりわからなかったらしい。

そもそもこの地下空洞はまだ殆どの部分が未開の地。実際に何があるのかは八たちにも判らないのだ。だから彼も適当にダンジョンを見繕い、適当に俺たちを向かわせた。それで何か儲けになればそれでよし、何も無くて別構わないつもりだったのだという。

ところがどっこい俺たちがまさかのお宝を発掘してしまった為、八とその仲間たちは大騒ぎになっていた。一先ず俺たちはアンダーグラウンドシティにまで戻り、部屋の中で落ち着いて話をする事にした。

ブレイドが別室に大量の機械部品やら発掘品を置きに行っている間、俺は八と白蓮、三人で話をしていた。マルドゥークはどうもアリアの事が心配でさっさと出て行ってしまったらしい。アイオーンと執行者たちもそっちにいるだろうから、ついでに呼んでくるように頼んでおいた。

問題はこの白蓮という機械人形だ。ナタル・ナハという名前を口にした事や、自称二百機以上の機械人形を迎撃したなど、謎が多い。さっさと引き渡してしまうのも可哀想だとは思ったが、何より本人が俺から離れたがらなかった。

「ふーむ……。こりやまた珍しい話ですね……。英雄神ナタル・ナハなら、あつしも少しは聞いた事のある有名人でさあ。それに仕えていたという機械人形、ですかい」

「ナタルは神話上の人物だったんじゃないのか？ まさか本当に神様が実在したってわけじゃないんだろう？」

「いや、何とも言えないところですね。勿論普通ならそんな神話上の出来事や人物を実在すると信じる輩はいないでしょうね。ですが実際、一体誰が、いつ、何のために作ったのか判らない、神代の遺跡から出てきたこの子が言うんですから、全く嘘っぱちってえ事も

ないでしょう」

世界の歴史が始まるよりずっと昔から存在する古代遺跡から、人々はそこに神の世界を想像した。

かつての世界で何が起き、どんな風に世界が生まれたのか。人々はその唯一絶対の神という存在をヨト神と呼び、それに纏わる事柄を神話とした。

ナタルもその神話の登場人物であり、所謂聖書にもその活躍は記されている。ヨト神もそう、その神話の中では実在する人物だった。だが今この世界にヨトという神はいない。それは神話だから当然だと思っていた。

「まあ、この世界の全てを知っている人間なんていやしないでしょ？ 過去に何があっても不思議何て事ありませんがね。しかしこれ、いくらで売れるんですかねえ？」

「……うーん。アリアを返してもらうにはこいつはあんたにやらなきゃいけないしな……」

とりあえず状況が全くわかっていない様子の白蓮が問題だ。彼女は俺が長い間眠っていた彼女を迎えに来たのだと思い込んでいるらしく、俺たちの会話の内容がさっぱり理解出来ない様子だった。しかし、俺は彼女を迎えに来た彼女のマスターでもなんでもない。それに彼女はアリアの代わりに彼らに売り飛ばさねばならないわけで。とにかく俺は自分が彼女のマスターではない事を必死に説明しようとした。だが。

「マスターは、ナタル様ではないのデスか？」

「そうなんだよ。だから、俺は君とは一緒に居られないの。そんな

猫や犬とは違うんだから……」

「……しかし、あなたはナタル様と同じ魔力を持っていマス。そんな人間は、絶対に存在しないのデス。あなたは必ず、ナタル様と何らかの共通項が……」

「うーん、だからな？ ナタルって奴はもうこの世界には居ないんだよ……」

一生懸命説明しているのだが、どうにも空回り感が拭えない。戸惑う俺を見て八は憎らしげに笑う。

「随分と兄さんはその嬢ちゃんに好かれてるみたいですねえ」

「ほつとけ……。ほら、白蓮？ 俺じゃなくてあっちの胡散臭いおっさんに懐こうな？」

「胡散臭いって……酷いな兄さん。でもまあ、どっちみちその子を連れ帰るわけには行かないんでしょう？ 兄さんの言うとおり、犬や猫とは違いやすから」

「……ああ、その通りだ。俺は正直今でも手一杯で、他の女の子の面倒なんて見ている場合じゃないし……」

「他の」というと、兄さん他に女がいるんですかい？ そりゃあ連れ帰っちゃ穏やかじゃあない……。わかりやした、あっしがこの街で預かって置きやしよう」

意外な提案だった。八は何でも元々この子売り払うつもりなどなかったのだという。機械人形は、彼らが取り扱う商品としては不十

分らしい。

「元々、孤児やら行き倒れやら、そんなろくでなしが助け合って成立する町でさあ。たとえ人間じゃなかったとしても、身売りなんて下種な真似はしたかねえんです」

「……そうか。なんかあんた……良くわかんない人だな」

肩を竦めて笑う八。しかしそうになると、俺たちは身代金に匹敵する金を彼に払う事が出来ないのでは？ そう考えている俺の目の前に、部屋に入ってくるアリアたちの姿が。

八に視線を向けると、男は煙草をふかしながら椅子の上に座り、足を組んで首を横に振る。

「意地悪をして申し訳なかったですねえ、兄さん。元々あつしらは、アリアの姫さんを使ってどうこうしようだの、クイリアダリアを困らせるだの、そういうつもりは無いんでさあ」

「……どういう事だ？ クイリアダリアを恨んでるんだろ？」

「恨みがあるから、やられたから……だからやり返してもいいってえのは、ちよいとガキの理屈が過ぎる。あつしらはこれでも義賊を自負してんですわ。それにそんな事をすれば、ここに暮らしている沢山の行き場のねえ連中がお縄になっちまう。いや……掃討作戦、なんてオチでしょうからね」

確かに八の言う通り、その通りだろう。だが逆に判らなくなる。ならばどうしてそこまでして、アリアの誘拐なんて手助けしたんだ？ 八は立ち上がり、それから白蓮の頭をポンと叩いて笑った。

「あつしは、子供が泣いてるのを見るのが何よりも嫌なんですわ。もう長い事この世界で生きてやすが、それだけはどうにも慣れねえ。試すような真似をしちまったが、兄さん……あんたになら教えてやつてもいい。アリアの姫さんを、ここに連れ込んだ理由を」

「……理由、だと？」

「話せば長い事になるんですがねえ。まあ、その話は夕飯でも一緒に食べながらにしましょう。皆さん、晚餐の用意を手伝ってもらえますかね？」

顔を見合わせ、頷く俺たち。すっかりここに来た時の焦燥感や緊張感のようなものは薄れてしまった。リリアの事を忘れたわけではないが、もし理由があるなら……それはちゃんと知っておかなければならないと思った。

もう少しだけ、リリアを待たせる事になる。でも、直ぐに戻って……この事件の、フェンリルの真意に触れる事が出来たなら、俺たちは……。

「リリアが……大聖堂から逃げ出した？」

ディアノイアでもリリアが大聖堂で封印処理を受けていた事を知るのは、ごく一部の人間だけだった。

勇者部隊の中でもゲルトとメリーベル程度しか知れ渡っていなかったその情報が、教師であるソウルの口から聞かされる。それは既に話が学園に伝わっている事を意味していた。

ディアノイアの校舎の中、会議室に集められた勇者部隊のメンバーに告げられる事実。リリア・ライトフィールド　白の勇者は、封印の儀式中に執行者十数名を殺害し、逃亡した、と。

勿論その場に居る誰もがそれを信じてはいなかった。しかし大聖堂から極秘に、しかし正式に通達されたその事実は疑い様もない。何かの間違いであって欲しい……拳を強く握り締め、ゲルトは顔を上げた。

「そもそも、一体どうしてリリアが封印処理なんて受ける事になったんですか！？ そんなのおかしいじゃないですか！！」

「……色々と事情が複雑なんだよ、あの子は……。兎に角、大聖堂から大規模な追撃部隊が出撃しているらしい。事が事だけに、大事になる前に収集をつけたいらしいな。それで学園にもリリアの捕獲命令が出る事になった」

本来ならば生徒全員に通達すべき命令　それを態々先にゲルトたちに伝えたのはソウルの独断だった。ルール違反と言ってもなんら遜色ないその行動は、しかし生徒であるリリアが本格的に反逆者になる前に身内で処理したいという優しさでもあった。

「俺はこれからリリアを探しに行く。シャングリラに戻ってきて居ない事は既に確認済みだ。あとは手当たり次第、周辺地区の搜索になる」

「ちょ、ちよつと待ってください……！ ナツルたちも戻ってきていないのに……？」

「そこまで時間がないんだ。猶予の間にリリアを捕獲できなければ、国総出で反逆者として追う事になる……。奴らは今、北方大陸に行っているらしい。戻るのはどんなに早くても二、三日かかる」

「そんな……。そんなこと……。じゃあ、わたしたちにリリアを追

えって言うんですか……？」

「捕獲は生死を問わず、だ……。生かして捕まえられるのは多分俺たちだけだ。どうしても俺たちが見つけて、リリアを説得しなきゃいけない。これ以上問題が大きくなる前に、だ……！」

ソウルの言うことが正しい事はわかっていた。しかしゲルトはそれでも納得出来なかった。

リリアは優しく、そして強い少女だ。少なくともゲルトはそう信じているし、誰かをそんな簡単に殺してしまうような人間でもない。大聖堂の命令がどれだけ正しいものであるのか重々承知していても、それを易々と受け入れる事は出来なかった。

「せめて……せめて、理由だけでも……。戦う理由だけでも……。教えてもらえませんか？」

ソウルは難色を示した。勿論それは機密事項であるし、ゲルトたちブレイブクランでも知ってはいけない事実。そう、勇者の中に魔王がいるなど、そんな事が知れ渡れば、勇者部隊は瓦解してしまう。

特に同じく勇者であるゲルトにとってその事実は余りにも酷だ。そして魔王の存在がリリアの凶行に信憑性を持たせてしまう。実際ソウルとて、魔王がリリアの中に居る事を知らなければ何かの間違いに過ぎないのだと胸を張って言えただろう。しかしその事実を知ってしまえば、『辻褄』があってしまう。

勇者リリアは、魔王を宿す邪悪な存在であり、その魔王が封印の儀式の際に暴走し、執行者を皆殺しにした。そんな筋書きが簡単に浮かんでしまう。だからこそ、それを伝える事は躊躇われた。

「……駄目だ。何も聞かずにリリアを連れ戻すしかない」

「先生っ!!」

「駄目なんだ! 兎に角、情報が混乱していて俺にも事実はいらない……。実際にリリアにあってみない事には、どうにもならん」

「……つく……」

「……俺はこれから直ぐにシャングリラを出る。リリアは何かして連れ戻してみるつもりだ。事が大きくなる前に収集をつけたい……。無理にとは言わない。手を貸してくれるやつは一緒に来てくれ。一人より人数が多いほうがずっといい」

ソウルの言葉にメリーベルとベルヴェールは頷いた。しかしその場にアクセルの姿はない。

「あの……。アクセル・スキッドは……?」

ゲルトの言葉にソウルは眉を潜める。その態度がゲルトの中に嫌な予感を過ぎらせた。不安と混乱だけがただ積もっていく心の中、ゲルトは目を閉じて齒軋りした。

「リリアちゃんが、そんな事するはずがない……。絶対に、何かの間違い……。そうだよ、リリアちゃん……?」

ゲルトの呟きはリリアには決して届かない。どこまでも続く草原の中、リリアはフェンリルと共に息を切らして走っていた。

背後からは執行者の影が無数に迫ってくる。これで追撃をかわすのは何度目か……。それさえもわからなくなった。もうずっと戦い続けている。休めた時間など、本当に僅かなものだった。

森を焼かれ、燃えるその炎の渦から脱出したのも束の間、執行者たちは執拗なまでに二人を追ってくる。初めはリリアも救助が来たのかと思っていた。しかしそれは甘い考えなのだと直ぐに思い知らされる。

執行者の投げる短剣をリインフォースで弾き、剣を構えながらブレイキをかける。リリアが停止するのを見計らい、三方向から襲い掛かってきた執行者を前にリリアは齒軋りする。

「はあああああつ！！」

大地ごと根こそぎ抉るリインフォースの一閃。それは足元を一撃で吹き飛ばし、執行者たちを退ける。あちらこちらから飛んで来る魔法を障壁で受けつつ、先を走るフェンリルを追って駆け出した。

「どうして襲ってくるんですか……！？ リリア、何にもしてないのにつ……！」

『オレが連れ出したのを切欠に、お前を殺す事にしたんだろうな。いや……元々連中はお前の存在をどうにかしたくて封印なんてしようとしていたんだろうが』

「大聖堂が……！？」

『奴らはお前の勇者としての血筋と魔王の力を使って、また戦争がしたいんだよ。封印の術式なんてただの方便だ。あれは 洗脳術式というものだ』

術をかけられた人間を意のままに操ることの出来る術式。その中で意識は薄れ、やがて限りなく希薄になった自意識は術者の声に従順になっていく。そんな術式がかけられる一歩手前、フェンリル

はリリアを連れ出す事に成功したのだ。

『意のままにならないのなら、特に俺と接触したのなら、今の話を
お前に聞かされる可能性が高いだろう。だからもう奴らにとってお
前は邪魔なんだよ』

「そんな……」

『追っ手は全員お前を殺しにかかってくるぞ。手加減なんてしないで戦え！ 自分の身は自分で守れ！』

「そんな そんなこと、言われたってえっ！！」

剣で切りかかってくる執行者の一撃をリインフォースで受け止める。
魔力を込めてそれを弾き返し、正面から降り注ぐ魔法の雨を聖剣の
力で一蹴する。

その力は追いかける執行者の側にも危機感を抱かせた。魔王という
化物を抱えた勇者 その力は本物で、並の執行者では歯が立たな
い。だから、危険 より危険と、判断する。

弓から放たれる矢がリリアに迫り、それを剣で弾いてフェンリルが
背後からリリアを庇うように身を前に出す。そのマントの中にリリア
が入り込んだ瞬間、音もなく高速で近づいていた一撃がフェンリル
に襲い掛かった。

リリアを庇い、不自然な姿勢で攻撃を受けたフェンリルは無傷とは
行かなかった。脇腹を斬られ、血を流しながらリリアを抱えて後方
に跳躍する。

『……上物が追ってきたか』

「フェンリル……ど、どうして……！？」

どうして、庇ったの？ その言葉は言葉にならなかった。リリアの正面に向かってくる一陣の竜巻。そこから放たれる無数の目にも留まらぬ高速の剣が四方八方から襲い掛かる。

二人は同時に剣を構え、背をあわせてその攻撃を弾いた。疾風の中、風の音を引き連れてリリアの前に姿を現した少年は、その手に二対の剣を手にして顔を上げる。

「……アクセル、くん？」

夜の月の光を浴びて、刀身は銀色に輝く。しかしその剣にリリアは見覚えなどなかった。

アクセル・スキッド。勇者部隊の剣士であり、同時にリリアにとっては掛け替えのない友人であり、兄のような人物……。そのアクセルはリリアの前で見覚えの無い姿で立っていた。

黒い執行者の装束を身に纏い、銀色の剣を手にして何の表情も浮かべずにリリアを見つめるアクセル。二人の間に言葉はなく、時間が停止したようなその情景に執行者たちもアクセルの背後へと後退する。

「どうしてアクセルくんが……？ 聞いてアクセルくんっ！！ リリアね、何にもしてないのっ！！ だからっ」

「リリアちゃんがそんな事をする子じゃないっていうのは、俺が一番よく判ってるよ……」

悲しげなアクセルの呟き。言葉を飲み込み、リリアは瞳を揺らす。アクセルは目を閉じ、風を纏って告げる。

「でも、しょうがないんだ。仕方が無いんだよ、リリアちゃん。俺

は君に隠していた事が、三つある……」

両手に構えた剣を鞘に収めるアクセル。そうして正面からリリアと向き合い、草原の草が光を浴びて光沢を描きながら波打つ。

「俺は、戦争孤児だ。魔王大戦の時、故郷を失った。そんな俺が生きて行くには、大聖堂の執行者に成るしかなかった。知ってるか、リリアちゃん？ 今俺の後ろに居るのも、執行者はみんな……ただの戦争孤児だ……」

戦乱の世界の中、ただの子供が生きていけるほど世界は優しくはなかった。だから、戦うしかなかった。生きるために、やらなければならなかった。

生きるために剣術を学び、生きるために大聖堂の指示の元、どんなに辛い訓練も、任務もこなしてきた。アクセルは生粋の執行者大聖堂の敵を討つ、影の剣に他ならなかった。

「だからリリアちゃん、仕方がないんだ」

「そんな……。でも、アクセルくん……？ リリア、アクセルくんと戦う理由なんて」

「理由ならあるさ……」

アクセルの全身から魔力が解放たれ、風の渦が巻き起こる。その光の中、アクセルは空に手を伸ばす。

「俺たちの家族は、故郷は、魔王に消されたんだ。リリアちゃん、その意味が判るか？ 君はその責任を 魔王という存在を生かす事の意味を、きちんと考えたのか？」

「考えたよ……考えてるもんっ！！ リリアだって、こんなのやだよ！ 魔王なんて知らない！！ なりたくてこうなっただけじゃないっ！！」

「だから仕方ないんだ。誰のせいでもない。でも俺は君と戦わなきゃいけない。君を倒して、大聖堂に連れ帰って……それが、君を生かすたった一つの手段だから……。だから」

黒い装束の内側に手を伸ばし、マントを投げ捨てるアクセル。そのマントの内側に仕込まれていたのは、合計十本の銀色のサーベル。それは空中で風を受けてくるくと回転し、アクセルの周囲に輪を描くように突き刺さる。一つ一つが教会の洗礼儀式を受けた聖剣であり、アクセルが役目を果たす時以外は決して使われる事のなかった十二の刃。

「君にだけは隠し事は無しだ。ずっと黙っていたけどね リリアちゃん。アクセル・スキッドは……『十二刀流』なんだ」

両手を広げるアクセルの周囲を剣が踊る。その内の二つが吸い込まれるようにアクセルの手に収まり、荒れ狂う嵐のような魔力を前にリリアは脅えながら剣を構える。アクセルの放つ殺気は本物だった。今まで感じた事もないような、背筋が寒くなるような、本物の殺意。戦わなければ殺されてしまう。でも戦っても 仲間を殺すことになってしまう。リリアの手は震えていた。震えは止まりそうにもなかった。がくがくと揺れるその剣先は大きくぶれ、アクセルはそれを見て眉を潜める。

「行け、白の勇者 ! 神の代行者にして執行者、アクセル・

スキッド……参る！」

風と共に襲い掛かるアクセル。リリアはただ声にならない声を上げながら、振り上げたリインフォースでそれを迎え撃った。

裏切りの日（１）

出会いの日の事を思い返すと、直ぐに脳裏を過ぎるのは雨の音と独特の土埃のにおい。

声をかけてくる人など、一人や二人ではなかった。当然の事である。リリア・ライトフィールドは、勇者の子だったのだから。

シャングリラに住むようになり、ディアノイアに通うようになり、リリアに近づこうとする人は沢山居た。学園の生徒、教師、教会の神父、大聖堂の神官……。

世界で最も有名な戦士の娘になったことは、彼女にとって決して幸せだけで出来た事実ではなかった。好奇の視線に晒され、近づいてくる人間など信用出来なかった。何よりもゲルトに負い目を感じていた当時のリリアにとって、学園生活は決して楽しいものではなかった。

それでも、なんとかうまくやっていけるようになったのは、リリアが他の生徒よりも劣っているという事実がはつきりと広まったお陰だった。勇者の娘なのに大したことない。そんな言葉が、彼女への興味をゆつくりと人々の中から薄れさせていった。

誰も信じられないから一人だった。学園に行く事を決めたのは自分自身だった。だから誰のせいでもなく、仕方の無いことだと考えていた。

その日は一人、突然の雨に降られて商店街の軒先で雨宿りをしていた。ただただ、静かに振り続ける雨をぼんやりを見上げ、重いリインフォースを引き摺って少女は何をするでもなく立ち尽くす。

「こんにちは」

そんな時だった。ふと、隣を見るといつの間にかそこには一人の少年が立っていた。ウェイター姿の少年はリリアに傘を差し出し、に

っこりと微笑む。

「初めまして！ 見たところお困りのようだけど、大丈夫かい？」

リリアは答えなかった。無邪気な笑顔を浮かべ、悪意の無い言葉をかける少年。しかしその時のリリアにとってこの世界の全ては恐ろしいもので、全ては信じられないものだった。

内気に凝り固まった疑心暗鬼の心は少年に笑顔を返すことすら許さない。視線を反らすリリアに、少年は困ったように笑いかける。

「雨に降られちゃったんだろ？ それとももしかして、一人で雨を見ているのが好きだったのかな」

「……そういうわけじゃ」

「へえ？ ねえ君、名前は？ 俺はアクセル・スキッド。爽やかイケメン学生さ」

握手を求め、手を差し伸べる少年。リリアは戸惑いながらその手に触れ、それが離れてしまう前にアクセルはしっかりとリリアの手を握り締めた。

暖かい手だった。誰かの手に触れるのは酷く久しぶりで、涙が出そうになった。本当は心細くて、故郷に帰りたくて、どうしようもないくらい、逃げ出したかった。

顔を上げる。少年は相変わらずにこにこ笑っている。その笑顔を見ていたら、名を名乗るくらいはしても罰は当たらないんじゃないかと思えてきて。

「……リリア。リリア・ライトフィールド……です」

「リリア？ ああ、勇者の女の子か！ へえ、君みたいなちっこい女の子が勇者ねえ……」

やはり好奇の目で見られるのだろうか？ そんな不安が脳裏を過ぎる。しかし少年はリリアに傘を翳すと、そのまま雨の中に手を引いて躍り出た。

跳ねる水の中、舞うようにくると回り、アクセルは自らは雨に打たれながら、リリアの雨宿りしていた店の正面にある喫茶店を指差した。

「俺、あそこでバイトしてんだ。君があんまり寂しげに雨宿りしてるもんだから、営業したくなっちゃってね。暖かいコーヒーが自慢なんだ。是非飲んで行つてよ」

「……コーヒー？」

「ありや、コーヒー飲めないか？ うーん、じゃあ暖かいミルクとか……」

「いえ！ あの……コーヒー、好きですよ？ 甘くないほうが好きなんです」

「そうなの？ 意外だな、そんな顔して大人気取りかい？ あはははっ！！ まあいいや、兎に角寄ってつてよ。そうじゃなきゃ、君は雨が止むまであそこで一人ぼっちでいそうだから。そういうの、見てられないだろ？」

当たり前のようにそう言って店へとリリアを連れ込むアクセル。そうして差し出された暖かいコーヒーを飲み干し、リリアは目尻に涙を浮かべて俯いた。

アクセルは正面の席に腰掛け、テーブルに頬杖を着き、リリアがゆっくりとコーヒーを飲む様子をじっと見守っていた。シャングリラの街に来て、初めてリリアが心を開けると思った人物……それが、アクセル・スキッド。

裏表の無い、気さくな青年。リリアにとっては兄のような 友達のような。不思議な関係で。それから何度もアクセルの店に通い、何度も言葉を交わした。

アクセルはどんなにくだらない、些細な事も丁寧に聞いてくれた。そうして一緒に喜んで、時には怒ってくれた。そこに困っている人が居るから助けるように、そこにリリアがいるから話を聞いてくれる。そんなアクセルの事が、リリアは大好きだったのだ。

辛い気持ちを抱えたまま、それを誰にも語れずに。でも時に話を聞いてくれる誰かがいるだけで、どれだけ救われたかわからない。シヤングリラで初めての友達、そして最高の友達。

それは、ずっと続くと思っていた。ずっと続けていけるのだと、そう信じていたのに。

「うあつ!？」

アクセルの剣は一撃一撃は確かに軽い。しかしそれはリリアの何倍もの速さで繰り出され、手数でリリアを圧倒する。

防御を貫通し全てを両断する聖剣の一撃も素早いアクセルには命中しない。ただ翻弄され、攻撃を受けるだけでも精一杯で、それでもどんどん押されていく。

友達だと思っていた人が。大切な人が。大切な事を教えてくれた人が。今、自分を殺そうと刃を手にしている。その事実をどう受け止めればいいのか、少女にはまだ判らない。

「無駄だリリアちゃん。君では俺には勝てない」

「アクセル君……やめてよっ！！ リリア、アクセル君を斬る事なんて出来ないよっ！！」

「なら大人しく俺に負けるかい？ 抵抗もせず、友達だからという理由で君は戦わないつもりなのか！？ そんな甘ったれた事が通用するほど、この世界は甘くはない っ！！」

三方向から風を纏った剣が回転しながらリリアに迫る。それをリインフォースで吹き飛ばすが、空を舞う剣を空中で受け取ったアクセルがそれをリリア目掛けて投げつける。

まるで舞うように、踊るように。アクセルは十二本の剣を自由自在に選び、手にし、舞わせ、穿ち、型に嵌らない風のように吹き抜けて斬り抜ける。どんなに防御しても、反撃の糸口が全く見つからない。

剣を手にするアクセル。指と指の間、両手に合計六本の剣を手にし、爪のように振るう。左右から同時に襲い掛かる交差する一撃をリインフォースで受けた瞬間、聖剣の刀身に亀裂が走った。

リインフォースの刀身が折れる……。リリアの脳裏に焦りが過ぎる。その一瞬の隙を突き、アクセルの放った六つの剣が同時にリリアの両手両足を貫いた。

悲鳴を上げる間も、落としてしまった聖剣を拾う間も無い。投げる動作と同時に身体を捻り、あらかじめ呼び寄せていた剣を蹴り飛ばしてリリアの顔目掛けて飛ばす。全く防ぐ手段も無いまま、目を見開くリリア。その剣が勇者の瞳を貫く直前、背後から伸びた黒い腕がその剣を握り締めていた。

『下がっているリリア。どうやらお前の適う相手では無いらしい』

「フエ、フェンリル……」

『戦うつつもりがないならとつと去れ。戦えない勇者なんぞに用は無い。お前は所詮、その程度の人間だという事だ』

「そんなこと、おまえに言われる筋合いはないっ！！ アクセル君はリリアの友達なんだ！ アクセル君と戦うなら、フェンリル！ おまえだつて私の敵だ！！」

リリアの悲痛な叫びを受け、しかしアクセルは微動だにしない。勿論フェンリルもそうだった。リリアはただ、冷や汗を流してぞつとするしかない。

何故こうまで、ただ相手を殺す事だけに集中出来るのか？ もう二人ともリリアの事など眼中にないのだ。どんな言葉も交わす積もりは無く、ただ状況を制する為に敵を殺す事だけを考えている。

その算段を、結末を、そしてそれに至るための術を考える。試行錯誤の先にある物は確実などちらかの死で、まるでそれを当然のように行う二人が余りにも遠く感じられた。

本当はわかっていて。戦わないわけにはいかないのだと。甘いのは自分なのだと。それでもアクセルは斬れない。斬れそうにない。歯を食いしばり、視線を反らす。

「やっぱりそうなるか……。リリアちゃん一人なら問題外だが、あんたも出てくるなら話は別だ。まあ、丁度いい。どうせあんたもお尋ね者だ。執行者の仕事が減るなら 手間をかける理由としては充分だっ！！」

二本剣を構え、駆け出すアクセル。ロングソードを片手にそれと向き合うフェンリル。二人がお互いの間合いに踏み込んだ時、大気は激しい剣戟に震えた。

リリアはただ呆然とその様子を見守っていた。二人が強い事は重々

承知しているつもりだった。しかしアクセルの剣も、フェンリルの剣も、明らかにリリアに向けられていた時とは質が違う。

強くなれたのだと思い込んでいた。もつと強くなるのだと意気込んでいた。だが、違うのだ。二人は既に遙か高み。目で追う事がやっとの打ち合い。それを自分には二人とも向けなかったのだという事実。

手加減をされたという結果が堪らなく悔しかった。自分は、そう。友達だと思っていた人物に、『本気でやりあう価値もない』と判断されたのだから。

「……どうして」

そんな理由は最早この際どうでもいい。誰に問う事も出来ないのならば、それは意味を成さない。

「……どうしてえっ!!」

それでも言葉を繰り返すのならば、それは既に疑問ではない。それはそう、端的に言えば 祈り、だった。

裏切りの日（１）

激しく火花を散らす剣舞。伝説の英雄の一人であるフェンリル相手に、アクセルは全く引けを取らない戦いを繰り広げていた。

いや、むしろ状況はアクセルが有利であるように見える。片手で十二本の剣を全てさばききれはるはずもなく、戦闘はリリアとの焼き直しのようにフェンリルの防戦一方である。

無数に遅い来る祟を靴底や剣で弾き飛ばしながらフェンリルは後退

する、刃に魔力を込め、静かに息を吐いた。

『噂に聞いた事がある……。執行者の中に、妙に強いガキがいると。歴代執行者の中で脈々と受け継がれる特殊剣術の唯一の継承者で
そうか、成る程。お前が噂の大聖堂の切り札 舞い踊る剣士か』
フレイドダンサー

「そんなに大したもんじゃないし、ロクな力でもないけど……。だが、事相手を『殺す』事に関しては一級品の能力だ。魔術は使えないが、その分努力は全てこいつの扱いに注ぎ込んだ……。いくら十年前の英雄だろうが、俺の剣は見境なく踊り狂う」

『魔法は使えない、か。自らの欠点を敵に露呈するとはな。馬鹿が』

後退したフェンリルは掌に魔力を収束させ、無詠唱で術式を発動する。漆黒の魔力の矢が数十本束ねられ、同時にあらゆる方向から剣士に襲い掛かる。

しかし剣士はそこから一步も動く事はなかった。ただ両手に握り締めていた剣を空中に解き放ち、風の魔力を発動する。

超超高速で主の周辺を回転する十二本の剣は魔法の矢を全て打ち落とす。まるで何が起きているのかリリアには判らないその状況下、アクセルは全ての魔法を叩き切って見せた。

「魔法が使えないのは俺にとって別に欠点じゃない。ただちよっと不便なだけ、だ」

『成る程な……。大したものだ。よくぞその歳でそこまで練り上げたものだ』

「英雄のお墨付きとくりゃ俺も大したもんだな。だが、これでもま

「だやるのかい？ 魔法剣士のアンタと俺とじゃあ、ちょっとばかり相性が悪そうだが」

アクセルの指摘通り、フェンリルは接近戦一本で戦うタイプの戦士ではない。言うならば魔法剣士。魔法と剣術を半々でようやく並の戦士と同じ働きが出来る。

剣術も魔法も常人のそれを超越しているとは言え、魔法剣士は中途半端な戦闘スタイル。生粋の剣士とやりあえば打ち負けるし、生粋の魔術師と打ち合えば魔術は瓦解するだろう。

そう、魔法剣士とはパーティーの中で様々な役割を果たすからこそ有意義な戦闘スタイルであり、単独戦闘に向いているとは言えない。自らより格下相手ならば圧倒的に戦えるその能力も、一つを極めた実力者は天敵と呼ばざるを得ないのだ。

勿論、フェンリルはそれを判っていた。ロングソード一本では当然打ち合いには負ける。魔法は聖剣で弾かれ、剣も通じない。生半可な技術の技はアクセルには通じないのだ。

剣士は風を纏いながらゆつくりと前進する。その両手には鋭い刃を構え、一步一步確実に。その姿を前に、フェンリルは僅か、リリアに振り返って剣を収める。

『こんな時、お前ならどうする？』

リリアの戦闘スタイルは、どちらかといえば戦士に近いものの、能力的に魔法剣士。フェンリルに近いと言えるだろう。

足りない剣術と近接戦闘における破壊力は聖剣が補い、魔法もそれなりに扱う事が出来る。しかしフェンリル同様、その二つの能力を持つてしてもアクセルには及ばないだろう。相性が悪すぎるのだ。

魔術師相手ならば絶対的威力を誇る退魔の聖剣で捻じ伏せられる。

どんなに頑丈な敵だとしても、バスターを切るように聖剣は両断するだろう。だが攻撃が当たらない、圧倒的に技術面で劣る相手を前に

したとき、どう戦えばいいのか。

奇しくもブレイドダンサーの異名を誇る執行者は二人の反逆者に対しての切り札であった。相性的に彼以上の適任はいなかったであろう。それほどに最高の、そしてリリアとフェンリルにとっては最悪の追っ手……。

だが逆に言えば、彼以上に相性の悪い敵など存在しない。彼を退ける事が出来れば、いくらでも逃げおおせる事が出来るだろう。このワンシーンはそう、今後の逃亡の可否を問う、大事な一局。その場でフェンリルは問うのだ。勇者よ、お前ならどうする？ と。リリアは答えられなかった。アクセルと戦えないというのもある。だが単純に勝ち目が見つからないのだ。魔法でも剣でもアクセルには適わない。速さだけで言えば軽くフェンリルをも凌駕している。そんな相手に、一体どうやって立ち向かえばいいのか。

ふと、リリアの脳裏をフェンリルとの会話が過ぎる。英雄は言っていた。魔法と剣、二つをまるで別のここのように考えるのが悪いのだ、と。

その答えに至った時、フェンリルは笑ったように見えた。そう、男はまるでそうリリアを導くように、自らの魔力を解放し、そして見せ付ける。

『英雄と呼ばれた人間の力……その片鱗を味あわせてやろう』

身体力を抜いたフェンリルが瞳を見開く。次の瞬間、周囲の大地を根こそぎ吹き飛ばすほどの魔力が解き放たれ、その衝撃はリリアを後方へと大きく吹き飛ばした。

勿論吹き飛ばされたのはリリアだけではない、アクセルもまた風を守られながらその恐ろしい魔力総量に向き合っていた。漆黒の魔力が蠢く中、フェンリルは自らの剣に触れる。

「我が剣は深淵の呼び水……。我が魂は冥府の破戒者。我が身全て

は信を穿ち、万全の命を分け隔て貪り食らう　　！」

フェンリルの持つ剣は確かに上等なものではあるが、魔剣でも聖剣でもない、ただのロングソードである。そのロングソードを指先でなぞり、刀身に魔力を込める。

一筋の光が刀身を行き渡った時、刃は見る見る紫の光に包まれた。ロングソードを覆うのは巨大な魔力の刃。それは夥しい数の魔力を練りこんだ、圧力のある刀身。

今や大剣と化したそれを一振りすると、大地が音を立てて炸裂した。全く理解不能なその破壊力を前に、リリアもアクセルもただ口をぽかんと開けたまま啞然としていた。

『見るのは初めてか？　ならば教えてやろう。これが　魔法剣と
いうものだ』

下段に剣を構えるフェンリル。紫の刀身はぎらぎらと輝き、激しく渦巻く風さえも侵食せんと大気を闇に染めて行く。

必殺の一撃が来る。身構えるアクセルを前に、フェンリルはリリアの制止も聞かず前に踏み込んだ。

『^{メギド}終焉の呼び声……！　　^{エディシア}付加魔法剣　　ッ！！』

下段から空へと振り上げられる闇の刃。その閃光は正面を全て飲み込み、回避する事も出来ない超広範囲を焼き尽くす。

天へと光の柱が立ち上り、轟音と閃光が夜の世界を明るく照らし上げる。大地が根こそぎ焼き尽くされる猛々しい魔力の波動の中、アクセルは全ての剣を防御に回してそれを防いでいた。

たった一瞬で何もかも、遙か彼方まで草原を吹き飛ばした魔法剣は防いだとは言えアクセルの全身を焼き、激しいダメージを与えていた。その一撃が終わる頃、荒野と化した大地にアクセルは膝をつい

ていた。

振り返れば背後に待機していた執行者たちは根こそぎ蒸発し、一人も生き残ってはいなかった。むしろこれが狙いだったのか　そう考えて顔を上げたアクセルは眉を潜め、静かに目を閉じる。

「いや……成る程。ただの、目くらまし……か」

正面には既にフェンリルの姿も、リリアの姿もなかった。しかしそれを追う余力も無く、アクセルはその場にどさりと倒れこんだ。

「さて、何からお話したもんですかねえ……」

夕食を終え、ハはそう切り出した。実際に話を聞いているのは俺とアイオンだけで、残りは別室で休んでいるアリアについていた。というのもちよつと困った事情があるのだが、それは一先ず置いておく。

ご馳走された夕食は決して豪勢とは呼べないものだったが、しかし充分に美味しいものだった。ハはつかみ所の無い男だが根っからの悪人というわけではなく、盗賊だからといって俺たちを騙すような人間ではないと思える。

それでもハの言う事を全て信じるのは難しかった。俺もアイオンも、ただその話に耳を傾け、戸惑いを抱えたまま考え込んでいた。事の発端は、ハの仲間が掴んだ情報であった。元々、大聖堂と王室の仲は睦まじいものとお世辞にも言えなかったのだが、大聖堂による女王の暗殺だなんて、そんな話が持ち上がるのは初めてのことだったという。

大聖堂元老院は、古から一つの大きな目的を持って動いている組織だという。その目的とは　そう、単なる神話でも信仰でもなく、ヨト神と呼ばれた存在の謳歌した時代を再生する事。つまり、この

世界を支配し、そして神代の世界へと作り変えることだという。それがどういう事を指すのかはわからないが、兎に角クイリアダリアの侵略戦争、そして魔王との戦いも全てはその最終目的。神代の復活の為の準備に過ぎないのだという。ヨト信仰の信者を増やし続けているのも、何れ来る神の時代への人類の選定であるらしい。まあその辺がどういふことなのかは俺にはさっぱりわからないし、語る本人である八もよく判って居ない様子だった。兎に角その、神の世界の復活だとかいふわけのわからない目的を本気で信じてしまっているのが、大聖堂元老院という組織なのだ。

「大聖堂は魔王亡き今、世界を支配するのはクイリアダリアであると主張している。このまま周辺国家だけではなく、別大陸の国やまだ独立した国家を全て軍力で捻じ伏せ、齒向かうものは滅ぼすべきだと考えているわけです。ところがどうこい、現女王のマリア・ウトピシュトナはそれに乗り気じゃあない」

大聖堂にとってアリア女王の存在はそもそも目障りなものだったという。聖女とまで言われ、先の魔王大戦時でも勇敢に自らも戦ったと言われるマリアは、簡単に引き摺り下ろせるような間の抜けた人物ではなく、非常に聡明でなおかつ腕も立つ武人……。民衆からも圧倒的な支持を受ける優れた指導者である。

だからこそ、マリアの存在は大きすぎ、そしていふ事を聞かない女王の事は常々疎ましく思っていた大聖堂が、女王を暗殺するという計画を立てているとしても全くおかしい事はなかった。

「とにかく、大聖堂は世界中全てを侵略したいんですあ。ですが、女王陛下はそれを望まない……。出来る限りは平和であるべきだと考えているわけですわ。さて、これで意向の合わないまま両者は十年の時を経てしまい……。そう、そろそろ具合良く育ってきたわけです。アリア姫という、次の女王が」

クイリアダリアの王は常に女でなければならぬというしきたりがある。そして王となる人間は王族の血を引いていなければならない。単純に王族は優れた魔力の継承者であり、膨大な魔力総量を宿す。その上特殊な魔術を受け継いでおり、王族はオルヴェンブルムの城、リア・テイルの結界を管理する役目も持っているらしい。

更には神代より神の血を引くという王族は絶対的に代えの存在しない物……。代用品が存在するとすれば、それは王族の血を引く次世代の少女に他ならない。

「アリアの姫さんの確保は、まず絶対的に大聖堂にとって必要な条件なんですわ。マリアが死ねば、姫さんを女王に仕立て上げる事が出来る……。かつ、まだ幼いアリア様は右も左もわからない政治の世界で、結局元老院を頼らざるを得なくなる」

「影からの支配が簡単になる、ってわけか」

「どこでその話を聞きつけたのかは知りませんが、ある日ぶらりとフェンリルがこのアンダーグラウンドシティに顔を出したんでね。何事かと思ったら、女王暗殺を阻止する手助けをしるというわけです。ですがまあ、女王を守るなんてこたあお尋ね者のあつしらには当然無理な話……」

「だから手っ取り早くアリアを誘拐し、暗殺を阻止する事にしたわけか」

アリアがいなければマリアを殺す事は出来ない。そのアリアを攫ったのが嘗ての勇者の仲間だとくれば、最強を誇った英雄たちを相手にアリアを絶対に取り返せる可能性などわからないのだ。マリアを殺して、アリアが取り戻せませんでしたとなればクイリアダリアは

滅びの道を辿る事になる。そんな安易な行動には、流石の元老院も出ないと踏んだのである。

事実その計画は成功したと言えるのかもしれない。暗殺は実行されず、マリアは今も娘の帰りを心配して待っていることだろう。アリアは無事であり、そして八たちはアリアを預かっているだけで危害を加えるつもりは無い。クイリアダリアから遠く離れた地下のこの街はアリアの保護場所として確かに最適でもある。

「それで、その誘拐した本人であるフェンリルはどこいつちまったんだ？」

「さあ？」

「さあつて……おいおい、知らないのかよ」

「報酬は受け取ってやすから、まあ後はやる事をやるだけでさあ。ただ、フェンリルの奴は恐らくまたオルヴェンブルムに戻ったんじゃないかと思いやす」

「オルヴェンブルムに……？ 一人で元老院と戦う腹積もりなのか？」

「いや、大聖堂には聖騎士団に加え執行者、大聖堂騎士まで居るんですから、いくら元英雄と言えども一人じゃあ無理というもんじゃないよ」

まあ確かにそれもそうか。しかし、色々と解せない事がある。フェンリルはオルヴェンブルム襲撃事件を引き起こした張本人だとばかり俺は考えていた。奴は言っていた。クイリアダリアを壊す、と。

しかし奴の今回の行動はクイリアダリアを守る事になっている。言葉と行動が矛盾しているように感じる。だがしかし、あいつに言っていたクイリアダリアを壊すという事が、もし元老院に対する言葉だったのだとするとどうか。

いや、それでも戦争を仕掛けてきたのだとしたら、無意味に命が奪われる事になると知っていたはずだ。でも、あの戦争は戦争と呼ぶには煮え切らない終焉を迎える事になった。幕引きは誰がしたのかも判らないまま、バズノクという国の人間全てが消えるという結末……。

学園から出たという裏切り者の話。フェンリルがオルヴェンブルムを襲撃した理由。消えたバズノクの民衆、そして女王暗殺計画と、その阻止の為のアリア誘拐事件……。

一つ一つの行動に接点などあるのだろうか？ それに共通する項目を、俺はフェンリルしか知らない。フェンリルは一体何の味方なんだ？ 何を目的として動いている？ 敵ではないのか？ それとも何か理由があつて……？

疑念は尽きなかった。考えても考えても答えが見つからない。腕を組み、溜息を漏らした。どちらにせよ、ここで考え込んでも仕方が無いのだが……。

「フェンリル……あいつ、一体何を企んでやがるんだ」

「まあ、何がどうなろうとあつしには関係ないことですがね。また戦争になるようなことだけは、勘弁してもらいたいですぜ。まあ、そう考えているのはフェンリルも同じことなんでしょうがね」

「……でも、あいつはオルヴェンブルムを襲撃した。俺たちの敵として立ち塞がったんだ。その事実是不変変わらない」

そうだ、フェンリルはゲルトやリリアに襲い掛かった張本人だ。奴

のせいで色々あった。奴のせいで。

ふと、脳裏に過ぎった言葉。しかし俺はそれから意図的に意識をそらした。そう、そんなわけがない。奴のせいで……。

奴のせいで、勇者は強くなり、より立場を強めて行ったなど。
そんな事は。

「……元老院、か」

救世主としてどう行動すべきか。考えさせられる。
慎重に選ばなければならない。己の今後の行動を。
リリアを、勇者にする為に。

裏切りの日（１）（後書き）

大切な物、それが何なのかは、もうずっと前から判っていた。

勇者の休日

わたしが彼の存在をはっきりと意識したのは、恐らくリリアとわたしが始めて刃を交えた時だ。

自分ではどうしようもなかったリリアの剣を止め、彼はわたしと共に戦ってくれた。あの時自分の無力さを呪ったわたしは、同時に彼の存在に疑問を抱いた。

正体不明の救世主。その存在はあれからもう幾つかの季節が過ぎ去った今でも疑問のまま、それは払拭できずにわたしの中で蟠り続けている。

自分自身が魔女と呼ばれる化物に近い存在になって、わたしは彼の事を以前よりずっと気にかけるようになっていた。それは多分、色々な理由があつての事だと思う。

何となく、気づけば視線の先で彼の行動を追っている自分に気づく瞬間がある。それは別に、恐らくは恋とか愛などという物ではなく、単純に興味から来る行動なのだと思う。そう、わたしは不思議だったのだ。

彼の特異性、その全てを知る事は難しいのかも知れない。だが、リリアが笑って信じるという彼の事を、あの少しだけ間の抜けたお気楽な友人に代わって知らねばならないと思うのは、友達として当然の気持ちだと思う。

そんなある日、わたしは街中で見かけた彼の後についていくことに

した。学園祭も間近に迫り、活気付くシャングリラの中、ナツルは独り言を喋りながら歩いている。

「……独り言、多いですね」

しかしよく見れば、彼はどうも頭の上によじ登っているうさぎと話をしているらしい事に気づく。前々から気になっては居たのだが、あのうさぎはなんなのだろう？ もっこもこで、かわいいけど……。というか、ナツルは気づいて居ないのだろうか。あのうさぎそのものが、何やら膨大な魔力の塊のような気がする。いや、気づいているのだとすればこそ、あれは彼の使い魔なのだろうか。よくわかんないけど。

物陰からうさぎと対話しながら歩く奇妙な救世主の後を追う。とここ、一人で歩くわたし。段々自分が何をしているのか判らなくなってきた、急に気恥ずかしくなった。

思えばメリーベルの部屋から出てくる時、メイド服のままでここまで来てしまった。本当はお使いでやってきたというのに、これではまるで意味がない。こんなはずれにまできて一体何をしているのか、わたしは。

ふと、昼下がりの公園でナツルは足を止めた。するとうさぎは人間の姿に変身したではないか。使い魔の中にはそういうものも居るらしいが、そんな高等魔術が使える割には魔法センスが一切感じられないのは何故なのだろう。

二人は何やら雑談を繰り返しているようだった。というか、そもそも何か目的があって歩いているわけではなさそうだった。ひたすらに後をつけてみたものの、得られた情報はうさぎが人間になるってことくらいで……。

「ゲルト？」

「はい……。はいっ？」

ふと少しの間ぼんやりして顔を上げると、そこには直ぐ近くにまで迫ったナツルの顔があった。びっくりして転びそうになるわたしの手を取り、ナツルはわたしを抱き起こした。

「危ないな……。そんな物影で何やってんだ？　しかもそんな格好で……。お前……」

「こ、これは別にいいでしょう！？　こういう仕事なんですから！」

自分でも意味の判らない事を言ってしまった。

まあ、当たらずとも遠からずというものです。メリーベルには恩があるのですから、彼女の要求に応えるのは当然の事……。じ、自分で着たがってるわけではないのに。何故この人はこんな……。笑いを堪えているんだろうか。

「……そういう貴方は何をしていますか？　ようやく戦争が終わったっていうのに」

「ああ……。まあ、少し考え事をな。あ、そうだ。お前あれからリリアのところに顔出したか？」

先日彼がメリーベルの部屋を訪ねてきた際、リリアの部屋に言ってみるよう言われた事を思い出す。勿論、言われずとも会いに行つた。しかしリリアは寝ぼけているのか、欠伸をしながら眠たげに目を擦り、わたしの話は殆ど聞いていなかったように思える。

うう、思い返したら落ち込んできました……。リリアちゃん、わたしの話がつまらなかつたんでしょうか。それともまたわたしは何か彼女の機嫌を損ねるような事を……。あああああっ！！

「おい、大丈夫か……。何一人で急に悶えてるんだ」

「貴方には関係ない事です……。リリアの部屋には行きましたけど、それがどうかしたんですか？」

「どうかした、ってわけじゃないんだけど……。どう思った？
あいつのこと」

「どう、って……。眠そうでしたね。何と云うか、とても疲れているように見えました」

「そっか……。やっぱりな」

何を考えているのだろう、その横顔をじっと見つめる。遠い場所を眺めながら、ナツルは眉を潜めた。

「ゲルト……。お前、リリアのこと、好きか？」

「急にどうしたんですか？」

「いや、まあちよつと真面目な話なんだが……。これからリリアは多分、色々あると思うんだよ。それは俺にはどうしてやる事も出来なくて……。だから、自分でも迷ってる。あいつの傍に居ていいのか、とかな。時々考えるんだよ」

寂しげに、遠くを眺めながらぼんやりとした様子で呟くナツル。その横顔は確かに真剣にリリアの事を思っていた。そういう表情を見せるから、なんというか……。信じてみたくなってしまう。

素性も判らないこんな奴を救世主と認めるのはどうかと思う。でも

救世主かどうかなんて事は多分わたしたちにとってはどうでもいいことなのだ。

彼はわたしにも沢山のものを与えてくれた。乗り越えられなかった沢山の心の壁を一つ一つ越えるために手を差し伸べてくれた。それは多分、とてもすごい事だ。

ナツルはハッキリしないところがある。いつも迷っている。秘密も多いのだろう。それでも迷って、考えて、辛くても少しずつ前に進もうとしている。だから、それはそれでいいのかもしれない。

「わたしは、リリアの傍に居たいと思います。少なくとも、自分ではそう思うんです」

リリアちゃんは、わたしにとって一番大切な人だ。わたしの世界の中で、一番誰より仲良く居たい人。

かつこよくて、可愛くて、時々ドジるけど、そこがまた良い。普段はずっとあんな感じでも、いざとなるととても勇敢で、そこがまた素敵なのだ。

ああ、リリアちゃんへの想いを語り始めれば多分一晩潰すくらいは容易いだろう。だが、今はそんな妄想の世界に浸っている場合ではない。

「彼女はガード、固いですからね。心を開かせるのは、難しいですよ?」

「うーん、どうもそうらしいな……。ガード固いのはあいつだけじゃないけど」

苦笑を浮かべ、ベンチに深々と体重を預けるナツル。そうしてそれからふと思い出したようにわたしを見つめ、頭のカチューシャを摘んで言った。

「そついや、前々から言おうとは思ってたんだけど」

「はい？」

「メイド服、似合ってたな」

そんな、どうでもいいことで笑う彼を馬鹿馬鹿しく思う。

なんというか、まあ、そうだろう。きっとガードが固いと思い込んでいるのは彼だけで、きつと皆、彼に心を開いている。それは多分、わたしも例外ではなく……。

世界で一番大切なのはリリアだ。二番目は多分、お父さん。三番目はきつと自分自身で……その次に大切なものはなんだろう。

それは仲間かもしれない。一人でいてはわからなかったこと、沢山の思い、気づけなかった自分……。そうしたもの気づかせてくれるのは、いつだって仲間の存在だ。

だから例えばそう、その仲間の中から一人を代表して選ぶのならば。四番目に大切な者を、彼であると例えても、別に構わない。

「んー、さて。特訓でもするかな……。もうちょい強くないとどうにもならないし」

「……貴方がどうしてもって言うのなら、稽古の相手をしてあげてもいいですよ？」

「なんじゃそら。別にいーよ、アクセルあたりを誘えば……」

「いえ、アクセル・スキッドはバイドで忙しい身ですから。そうやって仲間に迷惑をかけられては困ります」

「じゃあ、リリアに……」

「リリアは疲れてるんです！ いいからわたしと戦いなさい、ナツル！」

「何故そうなる！？ うわ、やめろっ！ お前のうっかりはマジで冗談じゃないんだからっ！！」

リリアがこれから大変になるかもしれないとナツルは言った。リリアに何か、とんでもない秘密が隠されているかも知れない事は、勿論わたしにもわかってる。

それでも、わたしはたぶんリリアの味方をするだろう。どんなことになっても、どんなに擦れ違っても、彼女の事が好きである事実は変わらないから。

その時彼は、わたしの隣で共に戦ってくれるだろうか？ 本当は一人では心細い。リリアを守りきれ自信はない。でも、もしも彼が隣で一緒に居てくれるなら。

「うっかりっていうなあっ！！」

それはきつと、とても幸せな事だ。

だからもし、リリアとわたしたちをどうしようもない壁が隔てたとしても、わたしは諦めないで居られる。

大切な物はずっと前から変わらない。むしろこれからもきつと、増えて行くことだろうから。

その悲しいときが来るまで、わたしは友達でいよう。これからもずっと。もつと、仲良くなれるように。その対象に……彼を付け加えても、別に構わない。

大事な物であると……そう付け加えても。別に。

裏切りの日(2)

「…… 帰りたくない？」「……」

八が夕飯の支度をしている間に、俺とブレイドとマルドゥーク、三人声を揃えて叫んでしまった。

とりあえずアリア姫は無事だった。怪我一つないし、むしろここに誘拐されてよかったと思っっているくらいだという。その結果が上のセリフに繋がるのであった。

「そ、帰りたくない！」

「ひ、姫……それは、どういう……？」

動揺していたのはマルドゥークだ。救助に来たメンバーの中で一番アリアを心配していたのだ、当然だろう。しかし当の本人は彼の気持ちなど知ったことではない。

腕を組み、そっぽを向くアリア。城の中に閉じ込められていたアリアにとって、この広大なアンダーグラウンドシティは興味深い物だったのかも知れない。元々脱走を繰り返していたくらいなのだ、まあその気持ちはわからないでもない。

しかし、アリアを連れ帰る事が俺たちの任務であり、はいそうですかとアリアを放置していくわけにもいかない。だからといって強引に連れ帰るというのもどうかと思う。困り果てて溜息を漏らすと、アリアは俺たちに向き合って言った。

「この街の人たちを見た？ 皆クイリアダリアに住む場所を追われて仕方がなくここに住んでるの。それなのに、この子供たちは皆前向きで明るくて…… 兎に角、アリアは帰りたくない！ もっとこ

こで皆の手伝いがしたいの！」

「そんな、こんな闇都市の人間の手伝いなど……！」

「だーかーらー！　そういう差別思想が国を汚しているのよマルドゥークー！　この人たちとちゃんと話したの！？　悪い人なんかいないんだからっ……！」

「し、しかし……。ここは無法者の集落で……」

結局この二人の主張は全くかみ合う事はなく、その後俺が八から話を聞いている間もマルドゥークは姫と話を続けていた。

元老院の野望とかなんかそういう大事そうな話をしている横で、マルドゥークに襲い掛かるアリア姫の叫び声がずっと聞こえていたのは内緒である。

何はともあれそんなわけで、マルドゥークは姫様にぼこぼこにされて部屋から出てきた。同席していたブレイドも何やら半笑い状態で俺から視線を反らす。

どうやら説得は失敗したらしい。激しく落ち込んだ様子で肩を落としている神官に溜息を漏らす。さて、いよいよどうしたものか……。リリアを解放してもらうにはアリアを連れ帰らねばならない。しかしアリアは帰りたくないという。この街の人々が悪いやつだとは言いきれないが、クイリアダリアを追われた犯罪者の町だとすれば、大聖堂に報告すればどうなるかは火を見るより明らかで。

つまり八方塞だ。全てを生かす方法はもうないと言えるだろう。自分にとって優先すべきもの……。それを優先しなければならぬ。

こういう方法は取りたくなかったが、仕方が無い。俺は一人で勝手に決意し、部屋の中に入る。アリアは部屋の隅っこに立って枕やら何やらを俺にホイホイ投げつけてきた。

「アリア、悪いがお前の我俣に付き合っている時間はないんだ」

「何よ！！ 救世主だからって、王女であるアリアにそんなこと言う資格あるわけ！？」

「資格とかそういう事じゃない。俺の目的の妨げに成る行為をとるなら、俺はお前を強引にでも連れて帰らねばならないんだよ」

こっちはリリアの処分がかかってるんだ、こんなところで子供の我俣に付き合っている場合じゃない。そうでなくとも時間をかけすぎているのだ、出来るだけ急がねば。

アリアの投げつける物を片手で弾き飛ばし、首根っ子を掴んで持ち上げる。じたばた暴れるアリアを掴んだまま部屋を出ると、俺の前にマルドゥークが立ち塞がった。

「待て！ アリア様が……アリア様が、どうしてもここに残りたいというのならば……私はそのご意思を尊重したいと思う」

一番お堅いはずの奴が言い出した言葉に流石に驚かずには居られなかった。しかしマルドゥーク本人も苦渋の決断だったのだろう。顔色は決してよくはなかった。

「勿論この場所を認めたわけでも、任務を放棄するわけでもない……。だが、アリア様は……アリア様は、国を……世界を背負っているつかは立たねば成らないお方なのだ。その姫がこの街の人々を救いたいというのであれば……私は、その姫の気持ちに応えたい」

「正気か？ ブレイド盗賊団、だぞ？ 盗賊団、だ。仕切っているのが盗賊の町に、一国の王女を置き去りにするつもりか？」

それは別に八やブレイドの事を非難しているわけではない。ただ客観的な事実として、それは問わねばならないことだ。

マルドゥークの立場や、俺たちの任務……そうしたものを考えれば、当然の事だと言える。だから誰も言い返すことはしなかった。マルドゥーク本人、ただ一人を除けば。

「……私は正直、元老院の話も半信半疑だ。女王との仲がよくないのは事実だが、だからといって暗殺に乗り出すほど急ぐ理由も解せない。ナツル、私は一度大聖堂に戻り、ことの真相を聞いた方がいいと思う」

「お前、それは……」

「わかってる。もし事実ならば、私の命は無いかもしれない。だが、それでも……。それでも、なのだ」

騎士はじつと、俺の腕からぶら下がった猫みたいな状態の姫を見つめる。そうして目を閉じ、今度は迷いの無い眼差しを浮かべた。

「私はずっと、女王陛下に仕えてきた聖騎士だ。もしその話が事実だとしたら……否。僅かでも危険性があるのであれば、アリア様をそれに晒すことは避けねばならない。女王の身に危険が迫っているというのであれば、私はそれを取り除かねばならない」

「それが聖騎士としての役割だから、か？」

「……その通りだ。勿論、それだけではない。私情も混じっていると言えるだろう。本音を言えば、信じたくは無い。だが　それでも、だ」

俺がアリアを降ろすと、マルドゥークはアリアの前に跪く。そうしてその小さな手を取り、にっこりと微笑んだ。

「戦争など民は望んで居ない……。我々聖騎士団の力は、何かを守る為の物だと私は信じています。だからこそ、姫……貴方はここに残って下さい」

「……マル。ほんとにいいの？」

「勿論です。マリア様の安否も、私が確かめて参ります。八とやらマルドゥークの騎士道精神たっぷりな動作に何やらうんざりした様子の八。肩を竦めながら呼び声に応える。」

「しばしの間、姫様を預けても良いか？ 貴様を信じるわけではないが……やはり、適任は貴様なのだろう。それにもし元老院の話が事実なら、貴様は姫を守ってくれた事になる」

マルドゥークは眉を潜め、それから意を決して頭を下げた。それは全員驚いた。プライドの高い聖騎士が、しかもその副団長ともある人間が、落ちぶれた盗賊に頭を下げたのだから。

「どういふつもりですかい？」

「姫様の目は硝子よりも透き通っておられる。確かにこの街の人間と私は言葉を交わしたわけではなく、そして貴様は恩人でもあるのだ。貴様に全てを譲り、全面的にこちらの非を認める事は出来ないし、当然貴様らの存在を認める事も出来ない。だが、礼は礼……少なくとも私はそう思う事にした」

「マル……」

「勿論、これは私の我侔だ。だから、貴様らに迷惑をかける事になる……。だが、それでも私は……」

マルドゥークの申し訳なさそうな表情に溜息を漏らす。まあ、そこまで言われては仕方が無い。俺も……できれば強引なやり方などしたくはない。

そもそも、大聖堂のやり口は気に入らなかった。真実を確かめるために、一度連中に発破をかける必要はあるのかもしれない。

「……わかったよ。大聖堂に戻ろう。真実を確かめるんだ」

皆で頷く。そう、兎に角このままにしておくってわけにはいかないんだ。

確かめなければ。そうでなければもう前には進めない。だから確かめに行く……。だが、俺はその時気づいていなかった。

俺たちの中、ただ一人。紅い髪の女だけが、浮かない表情で視線を反らしていた事に……。

裏切りの日（２）

「もう、走れない……」

朝が近づく中、リリアは草原の真っ只中で膝をつき、そう漏らした。フェンリルと共に逃亡し、草原を駆け回って数時間。その間魔力を放出し続け、ずっと高速で動き回っていた所為もあり、リリアは完全に息が上がっていた。

追っ手である執行者たちも、アクセルの姿も見えなくなった。しかしどこまでもどこまでも続く、膨大な大陸の陸路をひたすらに街を迂回して走り続け、自分たちがどの辺りに居るのか、それさえもリリアはわからなくなっていた。

泥に塗れ、埃に塗れ、汗に塗れ、疲労困憊し剣を支えにやっと立ち上がるリリアとは対照的にフェンリルは涼しげに振り返る。

あれだけの膨大な量の魔力を放出しておいて尚、フェンリルは余裕の様子だった。リリアはただ、もう何がなんだかわからないまま我武者羅に走り続け、気づけば両足が動かない。

ただただ疲れ果て、何もかもがどうでもよくなってきた。考える事を放棄した頭のまま、ただぼったりとその場に倒れこむ。

ラインフォースを視界に入れたまま、リリアはずっと様々な事を考えていた。どうしてこんな事になってしまふのだろうか？ 疑念と行き場の無い悲しみだけが頭のなかでリフレインする。

罅割れた刀身に映し出される自らの顔。浮かない表情。ただ溜息を漏らし、そっと目を閉じる。

『諦めたのか？』

フェンリルの問い掛けの声にも答えない。そんな気力はもう残っていないかった。

大切な友人に追われ、帰る場所さえなくなった。自分を助ける為に出て行つた夏流たちも、この事実を知ればきっと自分を見損なうだろう。

様々な考えに取り付かれ、ただ疲れていた。足音が近づき、リリアの腕を掴み、フェンリルは強引にリリアを立たせる。

『立ち上がれ。じっとしていれば追いつかれる』

「……ほつといて、ください……。もう、どうでもいい……。疲れ

……ました」

手を離すフェンリル。リリアはようやく静かになった世界の中、目を閉じた。兎に角眠たかった。眠ってしまいたい。それでも聖剣は朝日を移しこみ、眩く輝いてリリアの目をこじ開けさせる。

風が吹きぬけ、それと同時に草木を揺らして行く。その漣にも似た音に囲まれ、少女はぼんやりと剣に移った朝焼けを見つめた。

『立て。立って歩け』

「……無理です。もう、いいです……。リリアに構わないでください……」

『……………』

フェンリルは暫く黙ってその場に立ち尽くしていた。しかしリリアがもう一度目を閉じようとした時、その小さな身体を両手で抱き上げた。

リリアが驚いていると、フェンリルはリインフォースを引き抜き、リリアを抱えて歩き出す。その不思議な情景に、リリアはただポカンを口をあけて顔を赤らめていた。

「な、何してるんですか？」

『……お前をここで見殺しにするわけにはいかない』

「……リリアは、貴方の敵なんですよ……？」

『その壁は誰が決めた』

フェンリルの問い掛けにリリアは応えられなかった。ただ目を細め、朝焼けの景色に目をやる。

『敵だの、味方だの……。そんなものは主義主張によって異なる。厳密な意味ではこの世に正義も悪も存在しない。あるのはただ人の心と、決め付ける意思だけだ』

「……………」

『オレは……戦争で沢山の命を奪った。数え切れないほどの命だ。倒したのは魔物だけではない。ザックブルムの兵士を、目に付くあたり殺しまわった。その時俺は、何も考えてはいなかった。何も考えないまま……そう、聖騎士として当たり前だと信じて戦った』

魔王は悪魔の化身。魔王は神を冒瀆する存在。故にその軍勢は全てが悪に染まった悪鬼羅刹の群集であり、全て打ち滅ぼして然るべき。大聖堂は世界中の人々に言った。それは、崇高な目的を持った聖戦だった。

悪魔から世界を守る戦争……しかしその実、蓋を開けてみればそこにあったのはなんでもない、ただの人と人との醜い争いだった。ただ主張と主義が異なり、信じるものが違っただけ。相手は魔物でもなければ悪魔でもなく、ただ人間だった。

『正しいと信じていられる内は、まだよかった。だが戦えば戦うほど、返り血を浴びれば浴びるほど、わからなくなっていく。自らの信じる神というものが、本当に正義なのか……。わからなくなっても、それでも殺した。何故だかわかるか？』

「……………どうして、ですか？」

『もうそれ以外の生き方が見つからなかったから、だ。そうして戦う以外に、もう自分のあるべき姿はないと思い込んだ。自分が正義である事を疑いながらも、それ以外の道を模索する事を諦め……ただ、目を閉じた』

もしも。もしも、あの戦争の最中、自らが別の道を選んでいたらと思ひ返す事がある。

過去があるからこそ今があり、今があるからこそ未来は続いている。それはわかっている。でも、今の自分の全てが正しいのだと、何を根拠に信じられるというのか。

そしてそれが信じられないというのであれば 自分は何をよりどころにして生きて行けばいいのか。何を目指し、何の為に……。

『諦めた瞬間、オレの人生は英雄……大量殺戮者として確定した。諦めこそ自らの未来を閉ざし、決められた誰かのレールの上を歩く行為だ。諦めればもう手段は何もなくなる。自らの進路を、他人に託す事になる……』

「……………あのう？　もしかして……その、リリアを励ましてるんですか？」

『……………そういう事になるのかも知れんな』

フェンリルはそれだけ呟き、あとはもう何も口にしなかった。リリアも同様に何も口にせず、ただ朝焼けを眺めていた。

そうしてどれくらい歩き続けたか。時間の流れも分からずに、日が昇り切った頃、リリアはフェンリルに問い掛けた。

「今でも、後悔……してるんですね？」

ふと、フェンリルが足を止めてリリアを見やる。少女は男の腕から降りると自らの手でしっかりとリインフォースを握り締めた。

「どうしてリリアに親切にしてくれるんですか？」

男はリリアと向かい合い、何も答えない。ただじつと勇者の目を見つめ、黙り込む。

「もし、誰かの敷いたレールの上を歩く事が嫌になって、その過去を後悔しているのなら……。今、貴方が手にしたいと願う、自らが歩きたいと願う道は……。一体何なんですか？」

男は目を閉じ、それから草原を見渡す。腰から下げた剣の柄に片手を当て、風を受けて髪を靡かせる。

『オレの歩く道は、今でも昔と変わらない。やはり誰かに敷かれた、レールの上なのだろう』

そうしてゆつくりと息をつき、それから空を見上げる。

『だがそれでも、オレは……。後悔しながらでも、この道を往くと決めた。この道を敷いてくれたのは、一人ではない。フェイトやゲイン、そしてあの時代を共に戦った全てがオレの道となっている』

「だから……。立ち止まれない？」

『……。そうだ。ここで止めてしまえば、それこそ過去の全てを否定する事になってしまう。それは、フェイトやゲイン……。仲間への裏切りに等しい。オレたちは別々の道を選んだ。もう、交わる事は無いかもしれない。それでも今の自分を……。たとえどんな自分でも、

信じる事。それが、仲間と自分を繋げている、唯一の架け橋だ』

風を受け、暫く男はそうして遠くを眺めていた。流れる白い雲、青空、眩しい光、漣のような草木の音色……。紅いマントを棚引かせ、騎士は黙って空を仰ぎ見る。それは、遠い日の彼と何一つ変わる事は無い。

まだ若く理想に燃えていた自分も、信じるべき正義を見失い、迷った自分も。今こうして、リリアの隣を歩く自分も、そのリリアと剣を交える自分も……。矛盾する全てさえ、それは自分自身。

『……オレの話など聞いてどうする？ お前には、関係のない事ではなかったのか？』

「……関係、ないですけど……。でも……。うん、安心したかったのかも知れない」

『……安心？』

勇者は頷き、それからリインフォースを握り締め、フェンリルを見据える。

「私のお父さんの仲間だった人だから……。だから、本当は信じたくなかった。貴方がただ、何も考えずに暴力を振るうだけの人だなんて」

『暴力に善悪などない。力はただ力……。だ。抱いた憎しみを抑える必要は無い。恨むのなら、恨む事が自然なのだ』

「うん。だから別に、貴方を許したわけじゃないよ。今でもゲルトちゃんにしたことや、リリアの仲間にした事……。全部許したりなん

か出来ないよ。そういう気持ちは捨てられないし、捨てるようなものじゃないと思う。でも……」

目を閉じ、風を受けて考える。それでも……それでも、それはいいのではないか。今ではそんな風に思える。

信じられない気持ちも、愛せない気持ちも、許せない気持ちも、自分の中にあるわだかまり全てが、本当は自然で、無駄なことなんて一つとしてない、大切な気持ちだから。

その心に嘘はつけない。人は疑い、そして愛せない物だから。それでも一生懸命に信じようと、愛そうと、ただただ無為だとわかっていても努力する事が……自分のその道を信じる事が、真に美しい行いのだから。

己の中にある迷いを否定してはいけない。大切な人を信じられなかったとしても、その迷いを抱えてそばを歩かねばならない。それはお互いの身体を棘で傷付けあうような、辛いやり方だろう。しかし、それならば……何一つ、嘘など要らない。

「でもね、ホントは誰も憎みたくないんだ。誰も、裏切ったりしたくない。ホントは、みんなみんな笑ってられたらいいなっと思う。憎しみも疑心も消せないけど、でも少しずつ歩み寄る事は出来る。相手を知る事は出来る……。それって当たり前だけど、凄く素敵なことだと思うから。だから」

フェンリルにリインフォースを向け、リリアは微笑んだ。

「貴方はいつか、ぜったいぜったい、リリアがやつつけます。憎しみも恨みも、ぜったいいつか、晴らします。だけど……ただ憎んで、ただ否定する事は、もうやめます」

『……受け入れるというのか？ このオレを』

「受け入れられるかはわからない。それは貴方次第だから。でも、そうするための努力を止めたくは無いから。だから、いっぱい我慢して、いっぱい辛い思いして、それでも諦めたくないから……」

剣を降ろし、青空を見上げる。仲間と戦う事になった事、追われる事になった事……。信じられなかった、夏流の事。でもそういう気持ちは嘘では誤魔化せないから。

少しずつ歩み寄りたい。遠く離れてしまっても、その気持ちは薄れる事はなくむしろ強くなる一方だから。だからこそ、悲しくて、辛くて、それでも諦めずにいられる。

「……ちゃんと話せば、きっと分かり合える。分かり合えないかも知れないけど、それはとても難しいかも知れないけど、でも、それでもそう信じていんです。自分が信じたいと、そう覚悟して決めた事ならば……きっと私は、その結果を受け入れられると思うから」

リリアの微笑を見て、フェンリルは歩き出す。おいていかれまいとそれについていくリリアに、フェンリルは溜息交じりに言った。

『成る程な……。ちゃんと、あの人の娘だ』

「ほえ？　どういう意味ですか？」

『そのままの意味だ。その破天荒な偽善……フェイトそっくりだよ』

「そ、そんなんですか？」

『ああ、そうだ。嫌なところばかり、意味もなく似る』

そうして二人は肩を並べて歩き出した。しばらく草原を歩き、リリアはフェンリルを見上げる。

「それじゃあ、貴方に勝ちたいのでどうやったら勝てるか教えてください」

「……馬鹿か。教えるわけあるか」

「ハンデだと思えばいいじゃないですか。そもそも、十年以上英雄やつてる人に敵うわけないじゃないですか。子供相手に本気にならないでくださいよ」

「……余計なお世話だ」

「いいじゃないですか！　いつかぜーったい、ぜええったい、やっつけてやりますからね！」

「上等だ。また仲間ごと返り討ちにしてやる」

「そしたら魔王モードでやっつけるもん……」

「……魔王モードって、お前……馬鹿だろう」

「うっ！　直ぐに馬鹿っていうな、この犬っ！」

「犬ではないと何度言えばわかる……この馬鹿」

二人の背中はずかしくていく。ただ、太陽の照らす中、青空の下、まだ諦めずに、希望を捨てないままで。

二つの距離は絶対に近づく事はないだろう。しかしそれでも、それ

以上に離れる事もない。憎しみや悲しみをそのまま受け入れた時、新しい景色が見えてくる。

少女はただ、息をして歩く。今はただその事実が、この上なく嬉しく思えたから。

裏切りの日(3)

船を使い、大聖堂に戻る最中、声をかけてきたのはアイオンだった。

既に日は高く昇り、しかし未だオルヴェンブルムは遠い。穏やかな波を眺めながらその言葉に耳を傾ける。

「本気で大聖堂に齒向かうつもりなのかい？」

「別に齒向かうわけじゃない。あいつらが嘘を付いて居ないかどうかを確かめるだけだ」

「一体どうやって確かめるといふのかな？ 君には他人の嘘を見破る術も使えなければ、我々には大聖堂が女王暗殺を目論んでいるという証拠も無いというのに」

アイオンの指摘は全く持つて正しい。もし本当に大聖堂が悪人なら、はいそうです、私たちは悪者です、何て馬鹿なことは言わないだろう。

ではどうすればいいのか。正直そこまで考えていなかった。だからもしかしたらアイオンはそこまで俺の気持ちを見透かしていたのかもしれない。

「どっちみち殴って吐かせるつもりだったのだろう？ 君は」

「……参ったな。確かにあんたの言う通りだ。これじゃあ……そうだな。齒向かう事になるか」

元老院のやり口はそもそも気に入らなかったんだ。どうにかしてリ

リアも奪い返す腹積もりだった。それは元々そういつつもりだったのだ。

アイオーンはそんな俺に尋ねる。大聖堂に齒向かう積もりか、と。潮風を受け、自らの拳をじっと見詰める。

「大聖堂がそんなふざけた事を考えているなら……救世主としてやるべき事は一つ、だ」

しかし俺の言葉を聞き、アイオーンは複雑な表情で眉を潜めた。その意味が判らずに俺は首を傾げる。

「あんたは反対なのか？ 元老院を問い詰める事は」

「……君の決めた事だ、反対はしない。だが、賛成はしかねる。大聖堂は聖騎士団を抱え、単独でも圧倒的な戦闘力を誇る大聖堂騎士をも抱えている。この世界で最も危険な組織だ。それに喧嘩を売ることになれば、君とて無事では済むまい」

確かにアイオーンの言うとおりだ。俺にもそれが危険な事であるというのはわかっていて。そうした結果、どうなるのかはわからなくとも。

『原書』はついに、未来を示さなくなった。完全に次に何が起こるのか、俺には予想がつかなくなった。そうなったのはあの日、秋斗と接触した時から……。二つの原書が接触した瞬間、俺の原書は未来を指し示す事がなくなった。

どういう事なのかはわからない。ただ、この原書には自分が経験した事はあとから現れる。原書に現れる文字と、現実との順序が逆転……いや、奇妙な話だが、現実の速度が加速し、まるで原書を追いついてしまったかのような、そんな印象を受ける。

兎に角、頼りの綱だった原書は意味を失った。元々大して原書の内

容を変えられたわけではないのだから、今更臆する必要もないのだろうか。

「君にとってあの勇者はそこまでするだけの価値がある存在なのかい？」

「……さなあ。でも約束したんだ、裏切らないって。信じてもらいたいんだ。俺が彼女を信じているように。いつか、彼女にも……」

俺の言葉にアイオーンは腕を組み、ただ黙って目を閉じていた。アイオーンの考えている事はわからなかった。でも、それでも構わなかった。

どちらにせよやる事は決まっている。今更引き返す事も出来ない。原書なんて要らない。俺は神様でも英雄でもないし、この世界の人間でもない。

だからこの世界を救う事なんて出来ないかも知れない。でも、一人の女の子くらい 救い出せなければ意味がないじゃないか。

船が港に着くと直ぐに俺たちは駆け出した。草原を駆け抜け、行きよりも何倍も早い速度でオルヴェンブルムを目指した。オルヴェンブルムに到着して直ぐに、俺たちは大聖堂に飛び込んだ。

そこで見たのは、大聖堂に転がる執行者の死体だった。礼拝堂の真ん中で、誰かが戦っていた。その人物に背後から執行者が襲いかかろうとした時、俺は反射的にそいつを庇って背をあわせた。

言葉を交わす事もなく、俺はそこに居るのが誰なのか判った。黒い髪を揺らし、漆黒の魔剣を握るその勇者は少しだけ俺へと振り返り、一瞬視線を交わす。

「ゲルト！？ 何やってんだ、こんな所で！！」

「……ナツル？ 詳しい話は後です！ 手を貸してもらえませんか

！？ リリアを奪取します！！」

一体何がどうなっているのか。わけがわからないが、俺たちを取り囲む敵たちとゲルト、俺がどちらを優先して信じるのかなんてことは決まっている。

強く頷き、拳を構えた。執行者たちはまさかの増援の到着に怯み、一瞬後退する。その瞬間、マルドゥークとアイオンの放った魔法が炸裂し、礼拝堂の長椅子ごと爆風が敵を吹き飛ばした。

「マルドゥーク！ アイオン！！」

「……ああ、くそっ！ やってしまった……！！ こうなってしまうたらもう、とことん真偽を見極めてやる……っ！！」

「ここでおしゃべりをしている余裕はないだろう？ さあ、リリアを救いに行くんだ」

アイオンとマルドゥークは敵の攻撃から俺とゲルトを守るように立ち塞がる。二人の事も心配だが、ちよつとやそつと襲われたくらいでやられる二人ではないだろう。

ゲルトの手を引き、地下へと向かう通路を走る。しかし門は閉じられどうにもこじ開ける事も無理そうだった。レーヴァテインでぶっ壊そうか悩んでいると、背後から手を伸ばしたブレイドが空間魔法で道を作り出す。

「こっちでいいんだろ？ 案内してくれれば、道は作ってやる！ 急ぐぞ、ニーチャン！」

本当に便利な能力だ。三人で地下へと進む道を駆け下りて行く。扉は全てブレイドが文字通り筒抜けにし、すぐに封印室に辿り着く事

が出来た。

「リリアッ！！」

扉を開け放つ。しかしそこには既にリリアの姿はなかった。代わりに立っていたのはハムラビとかいう俺たちを呼び込んだ司祭だった。突然俺たちが部屋に飛び込んだのにも関わらず、司祭は全く動じる様子も無い。むしろ笑みを湛え、ゆっくりと俺たちへと振り返った。

「これはこれは……どうしたのですか？ 一体なんの騒動です？」

「……ハムラビ、リリアを何処にやった？」

「質問しているのは私ですよ、救世主……」

「うるせえっ！！ リリアを何処にやったのか訊いてんだっ！！
てめえに質問する権利なんてねえんだよっ！！ とつとと答える小
太り野郎がっ！！」

突然の怒声にゲルトもブレイドも、勿論俺自身も驚いていた。ついここに来るまで、冷静で居られたはずなのに。

でももう、リリアを封印しようとしていた魔方陣と鎖を見た瞬間、急激にはらわたが煮えくり返るような気持ち湧き上がってきた。こんなじめじめした場所に女の子を鎖に縛り付けて封印するなど、正気の沙汰ではない。

何が司祭だ。コソコソ女王暗殺なんてセコいマネしか出来やしねえくせに、何偉そうに話しているんだこいつは。リリアを隠しやがって、話も違いすぎる。

「いいから喋ってくださいばってろよてめえ……。さつさと答える！
リリアをどこにやった！！」

「……ふん、新しい救世主は口の利き方がなって居ないらしいですね。リリア・ライトフィールドならば、術を発動していた執行者を殺してとつくにここから脱出しましたよ。今は追撃部隊が追っているはずですよ」

「嘘だな」

即答した。こいつが何を言っているのかさっぱりわからないが、とにかく嘘に違いなかった。

「何故そういえるのです？ 証拠は？」

「ない。だが、信じている。リリアはそんな事をする子じゃない。信じているから、信じたいから……。証拠も理由も意味も知った事かよ」

拳を構え、魔力を収束する。そう、リリアはそんなことはしない。だったらしたのはこいつらの方だ。何かこいつらがしたって、リリアは人殺しなんてしない。

目の前で人が死ねば一々落ち込んで人知れず泣くような馬鹿な勇者なんだ、あいつは。だからそんな事をするはずがない。暴走だつてしない。ロギアは悪いやつじゃなかった。あいつが目覚めたなら、もうリリアは人殺しなんてしない！

「逆に墓穴を掘ったな、司祭。リリアをどうしたのか知らないが、その嘘があんたらの不審さを強く後押ししてくれた。早く本当の事を言えよ。でなきゃ力づくで吐かせてやる」

司祭はついに表情を変えた。余りにも俺が一方的にリリアを信じ、大聖堂を信じないのだからそういう顔にもなるだろう。自分でも滅茶苦茶を言っているのはわかっている。それでも……。

この不確かな世界の中で、自分の信じたいもの、守りたいものくらい、俺が好き勝手に決めていいだろう？ 世界全てを守ってやる義理も、理由もない。

リリアを救う為に他の何かと戦わなければならないのなら、俺は魔王にだってなつてやる。一步一步司祭に歩み寄ると、ハムラビは溜息を漏らして聖書を手にした。

「仕方の無い人だ……。やれやれ、確かに私は嘘をつきました。リリアは、忌々しいあの暗黒騎士に奪われたのです」

「暗黒騎士……？」

「ええ。まあ、それももうどうでも良いことでしょう。ここまで立派に大聖堂に攻め入れれば、お前たちの反逆は最早疑うまでも無い……。大聖堂に逆らい、国を転覆させようとした貴様ら謀反者を殺したところで、女王も騒ぎはしないだろう」

男が聖書を翳す。するとそこから眩い光が溢れ、男の身体を包み込んで行く。

眩しすぎるその輝きに手を翳し、堪える。薄っすらと光の中で凝らした瞳が捉えたのは、変色し変形していく男の身体だった。

ハムラビと名乗っていた神官の身体は激しくうねり、まるで粘土のようにぐねぐねと変形する。そうしてやがてたった一つの丸い塊に変化し、もはやそれは人間の形をしていたとは信じがたい。

球体にぼんやりと術式が浮かび上がり、背後で扉が閉じる音が響き渡った。大地に刻まれた魔方陣が光を放ち、男の身体は一つの化物

へと変化した。

そこに神父の面影は既に無かった。神父は巨大な牛のような怪物へと姿を変えていたのだ。二本足で俺たちへと歩み寄り、前のめりの姿勢で四つある角を振るうように、頭を揺さぶりながら大地を足で叩く。

魔方阵から飛び出してきたのは巨大な鉄槌だった。それを両手で構え、男は口から白い息を吐きながらゆっくりと迫ってくる。見た事の無い状態の化物と化したそれに思わず後退する。

「ニーチャン、なんだありや！？ 司祭が魔物になったぞ！？」

「知るか……。しかし、なんだかやばそうだな……」

感じる魔力が普通ではない。特に何をするでもなく普通に歩いているだけだというのに、常に殺気めいた物が全身へと突き刺さる。背後の扉をブレイドが開けようとしてみたが、物理的にも魔術的にも開く事はなかった。

意を決したゲルトが魔剣を構える。俺も溜息を漏らし、拳を構えた。もうこいつを倒すしかない。何となくそれだけはわかる。

『救世主ナツル……。貴方はこの地下で朽ち果てて行くのです。国の反逆者としての汚名を被せられたまま、誰にも真実を知られる事も無く……。』

「……差し詰め、ミノタウロス、という所ですか。伝説上の魔獣と合間見える事になるうとは……っ！」

「うっー、しかも大聖堂の司祭、だもんなあ……。っ！！ 仕方ねえ、上等じゃねーか！ やってやる……。くそうつー！！」

二人が武器を構えて前に出る。俺もそれに続き、鉄槌を振り上げる。ミノタウロスに向かって真っ直ぐに駆け出した。

裏切りの日（１）

初撃、鉄槌は大きく空振り大地に突き刺さった。その衝撃は三人を同時に転倒させる。三人とも、ただ大地が揺れて足を縛れさせただけではない。大地を打った鉄槌には、どうやらそういう術式が込められてらしい。

転んでもしばらく両足は動かない。倒れたまま、一番近い位置に居たゲルトへミノタウロスは身体を回転させ、下段から打ち出すように槌をゲルトに叩き込んだ。

魔剣でそれを受け、障壁で防御もした。しかしゲルトの身体はピンボールのように天井へ激しく叩きつけられ、天井は亀裂が走りみしりと体中が軋む音を立てた。角の魔獣は振り返り、槌を振るう。

巨体に似合わず振り回す槌は恐ろしく早い。それは竜巻のように狭い空間内に風を巻き起こし、俺たちは全員吹き飛ばされた。風に煽られて再び体勢を狂わせる俺たち目掛け、牛は雄叫びを上げて突進する。

かろうじてそれを回避すると、牛は壁を角で鋭く貫き、岩の壁引き剥がし、頭を使って投げつける。岩の塊を俺が蹴り碎き、その背後からブレイドが弓矢を構え、一撃を放つ。

光の矢はミノタウロスに直撃したが、何の防御動作も取らないその怪物の前に碎けて散った。あまりの防御障壁の硬さに啞然とする三人は一度後退し、体勢を立て直す。

「弓きかねえっ！！ 何あの障壁！？」

「貫通効果のある攻撃じゃないとかすり傷も与えられないか……。大丈夫か、ゲルト？」

「……なん、とか……。ですが、もう一度受ければ意識を保っていただける自信は……」

たった一度の接触で三人とも息が上がっていた。それだけミノタウロスは早く、強く、硬い。その屈強な肉体が元々は司祭の太った体だとは誰にも思えないだろう。

「二人とも、障壁貫通効果のある技は持ってるか？」

「んー、武器にもよるなあ。まあ、数打てばなんとかなるかな」

「こうなってしまうては並の攻撃は通じないでしょう。全員同時に仕掛け、滅多打ちにして倒しましょう」

「かなり強引な作戦だな……。いや、最早作戦と呼べるのかそれは」

「手段を選んでいる場合ではないでしょう？　時間をかければ追い詰められるのはこっちの方です……」

確かにゲルトの言う通り、悔しいがあ司祭の力は普通じゃない。最早魔物そのものに成り下がったと言って良いだろう。

リリア以上の怪力に、アクセル並の速さで、グリーンヴァ並の不死身っぷりだ。今まで戦ってきた連中の誰よりも化物染みている。いや、もう化物か。

とにかく倒さない事には話が進まない。長期戦になれば体力的に劣るこちらが不利。ゲルトも負傷しているし、全員あの一撃を食らえば万策尽きる。

「やるしかない、か……！」

三人で頷く。再びミノタウロスが角から突っ込んでくる中、中心に立って俺はあえてそれに身構える。二人は左右に回り込む中、両手両足に全身全霊、ありったけの魔力を込めた。

湧き上がる光が体中だけではなく部屋全体を包み込んで行く中、角で俺の身体を貫こうと迫ってくる怪物のそれを両手で掴み、力を振り絞って受け止める。

「　　んの、野郎おおおおおおおっ！！」

勿論ミノタウロスを止める事は出来なかった。だが、それでも構わない。引き摺られながら、部屋の反対側の壁付近まで移動しつつ、壁にたたきつけられても俺はその角を離さなかった。

化物と力比べをする事になるうとは考えた事もなかったが、とにかく今は停止させるしかない。歯を食いしばり、骨と筋肉が軋むくらい力を込め、一気に押し返す。

「止まったな……！　くらえっ！！」

ブレイドが空間魔法を発動し、両手に斧を二対装備する。空中からミノタウロスへと背後から襲い掛かり、斧を突き刺した状態のまま、直ぐに次の武器を取り出す。

「うおおおおっ！！」

剣で切り裂き、槍を突き刺し、連続で踊るように武器を突き刺して行く。最期に鎖に杭のようなものが付着した不思議な武器を取り出し、壁にそれを突き刺し、ミノタウロスの武器をくるりとくくりつ

け大地に穿つ。

流石に連続で攻撃を受け危険を感じたのか、ミノタウロスは俺を頭にくつつけたまま大きく頭を振り回して振り返る。しかし鎖はただ壁に杭が少し打たれているだけだというのに、ミノタウロスの怪力にも応じない。

空中へ投げ出される俺と後退するブレイドと擦れ違い、花弁を舞い散らせながらゲルトが前へ出る。花吹雪に紛れるようにして姿を消したゲルトは次の瞬間ミノタウロスの腹部を切り裂いていた。

渦巻く花の中でゲルトは何度も何度もミノタウロスを滅多切りにする。滅茶苦茶にこれでもかというくらい斬られているのに、ミノタウロスは倒れる気配がない。

「メイシルシュトローム渦巻く闇の花弁……！ はあっ……！」

削岩機のように全てを木つ端微塵に砕く必殺の突きを、ミノタウロスは片手で受け止めていた。剣は引き抜く事も出来ず、がっしりとミノタウロスにつかまれている。ゲルトが目を見開き、しまったと感じた瞬間、ブレイドが弓矢を放っていた。

ブレイドの放った矢はミノタウロスの瞳を的確に貫いた。しかしそれでも奴は魔剣を放さなかった。ブレイドに目配せし、俺はブレイドが召喚した剣を空中に投げ出し、それを魔力を込めて蹴り飛ばした。

鋭い矢のように放たれた大剣がミノタウロスの腕に突き刺さった瞬間、ゲルトはそれを力いっぱい引き抜いた。左右に魔剣の二刀流を備えたゲルトはその場で跳躍し、思い切り敵を切りつける。

血飛沫が舞い散る中、ゲルトは剣を携えて後退した。あれだけ連続で攻撃を浴びせたのだから少しくらい怯むかと思いきや、奴は全く倒れる様子もなく歩み寄ってくる。

「ば、ばけものですか……っ」

「見ればわかるだろ、化物だ化物……」

「うがー！！ 何であれで死なねーんだよっ！！」

三人してたじろいでいると、ミノタウロスは鼻息荒く笑った。そうして壁に繋がれていた槌をようやく引き抜き、俺たちに向けて構える。

『無駄な事だ……。私は神を敬愛を受けている。ヨト神に授かりしこの神の力、人間風情に破れる等とは思わぬ事だ……』

「ヨト神から授かった力、だと？ その姿のどこが神の力なんだよ。鏡を見て出直してきたほうがいいぜ、魔物が」

『神の使徒と魔物の区別もつかぬとはつくづく哀れな救世主ですね。だが、それももう終わりだ……。無駄な抵抗をすれば、苦しむだけですよ』

言いたい事を言いたいだけ言って牛は雄たけびを上げる。三対……それにこっちは全員相当な腕の持ち主だというのに、どうしてこゝうまでも倒せないのか。

頑丈すぎる。それこそ正に神の守護でも受けているかのようにしか思えない。思わず齒軋りする。一体どうすればいい……。

「……わたしのフレグランスに、リインフォース並の力があればよかったのですが……」

「……絶対障壁貫通能力を持つ聖剣、リインフォースか……。そんな都合のいい反則武器、手元にあるわけもないしな」

ふと、思い出す。いつだったか、同じようにリインフォースの力を必要としたシチュエーションがあった。

その時はどうしたんだろうか。確か、一人では不可能だった。どうやって作ったのか。危機的状況下である事実が思考を鈍らせる。兎に角今は、やれるだけやるしかない……。

「ああもう、しょうがねえなあ……本気出すか、本気……！」

ブレイドの一言で俺たちは苦笑した。そうだな、本気を出そう。こんなところで時間を潰している場合じゃない。リリアを追わねばならないのだから。

「そんなわけだ……。ナナシ、少し本気を出すぞ」

「構わないのですか？」

「一瞬でいい。攻撃する瞬間だけ第二封印　お前の方のセーブを解いてくれ。直ぐに封じれば問題ないだろ」

「……中々難しい事を平然とおっしゃりますね。まあ良いでしょう……ワタクシも手を貸しましょう」

頷き、両手を合わせて魔力を込める。ブレイドは大地に手を当て、空間魔法を使用した。

「開け、キャッスルオブストレイシーフ盗賊王の城……！！」

ずらりと、大地から現れたのは巨大な砲台だった。全てが一斉に砲弾を吐き出し、爆風がミノタウロスの姿を一瞬で覆い隠す。その瞬

間、俺とゲルトは駆け出していた。

ミノタウロスは砲弾で怯みつつも、真っ直ぐに走ってくる。しかし白い煙の中から突然現れたのは、分厚く屈強な城壁の一部だった。ブレイドが召喚した壁に激突し、怯むミノタウロス。瞬間、消え去った壁の向こうからゲルトが現れ、剣を両手に構え、身体を低く構える。

「リリアの見よう見まねですが……。連続暗黒剣！ はあっ！！」

剣先から放つ魔力を加速装置に、ゲルトはその場で回転しながら跳躍する。リリアの力技を真似た強引な剣でまるで回転する一陣の風のようになり、魔獣を滅多斬る。

着地と同時にゲルトが突き刺したフレグランスを背後から突っ込んで蹴り飛ばす。魔獣を貫通して向こうの壁に魔剣が突き刺さると同時に、俺は自らの足に魔力を込めた。

「レーヴァテイン神討つ一枝の魔剣我はその力を担う」

普段なら片足に構築するだけで精一杯だった。だが今この瞬間だけ、一瞬。魔力の全てを解き放つ。両足へと全ての力が流れ込み、弾けるような雷が大気を鳴かせる。

「うおおおおおっ！！」

ウルスラグナは通常、一発放てばそれで全身の魔力を使いきってしまう大技だ。しかし今は通常時の何倍もの魔力を練る事が出来る。それはコントロール未熟な自分自身の身体をも焼き、引き裂きながらも繰り出される。

一撃、二撃、三撃四撃。連続で身体を捻りながらウルスラグナを放ち、これでもかという程に力を込め、魔獣の身体を打ちつける。屈

んだ姿勢から一気に顎を真上に蹴り上げ、自らの腕にこの空間にある魔力全てを込めるように、目を閉じる。

脳裏に浮かぶ物は様々な思い。リリアのリインフォースなら、この魔物を打ち払えるだろうか。それよりも勝るメリーベルの生み出した剣ならば、この魔物を滅せるであろうか。

心の中に思い描く倒す為に必要なプロセス。救世主ならば、英雄の神ならば。この程度の魔獣程度に負けているわけにはいかない。そう、だから。

「ナタル・ナハ……あんたが俺と同じなら、力を貸してくれ！」

至近距離で拳を牛の腹に叩き付ける。刹那、雷撃が迸り、身体が吹っ飛ばされそうなその衝撃を真正面に、拳に、指先に収束し、その綱のような身体を、討ち抜く　っ！！

拳の先から現れたのは巨大な刃だった。魔力で形成された雷の紋章の剣。それは音を立て、出現したと同時にその身体を貫いて吹き飛ばす。その刃が現れたのは一瞬だけで、次の瞬間には光に溶けて消えてしまった。

しかしその剣が貫いた敵の傷は確かに残り続ける。胸を穿たれた牛の獣は悲鳴を上げながら背後へと倒れ、光の中でのた打ち回る。

『馬鹿、な……。神の力を得た、使徒が敗北する事など……ありえ……在り得ぬ……っ！！』

「……馬鹿はお前だ。その神様だって倒すのが救世主だろうが」

『ぬ……！　がああああああっ！！』

司祭は光になって消えて行く。断末魔の叫びを聞きながら、俺は目

を閉じて息をつく。痺れて感覚の無い右手を、ぎゅっと握り締めながら……。

信じる心の日（１）

「……消えちゃった。一体なんだったんだよ、あのおっさん……」

思い切り脱力した様子でブレイドが呟く。戦いの後に残されたのは中身だけがすっぽりと消えてなくなってしまった司祭の服と彼が手にしていた聖書のみ……。

歩み寄り、その聖書を手にした時、俺は一つの事実に気づいてしまった。慌ててそれを上着に仕舞い、立ち上がる。

「大司祭が化物だったなんて事になれば大変な騒ぎになるな……。兎に角、ここにはリリアは居ないらしい。こうなっちゃ問い詰めるも何もあつたもんじゃないな」

「リリアがここに居ないと成ると……。確か、彼は暗黒騎士に奪われたと言っていました。わたしの知る限り、そんな珍しい役職に就いている人間はそう多くはないはずです」

暗黒騎士……そんな役職は実在しない。故に何らかの通り名のようなものなのだろう。闇の騎士という言葉のイントネーションから、どこぞのあの野郎を直ぐに連想してしまうのは俺だけだろうか。

「一先ずここを出よう。外でまだマルドゥークとアイオーンが戦っているはずだ」

三人で同時に部屋を出ようとすると、ばたばたと大人数で騎士たちが中に入ってくるのと鉢合わせてしまった。騎士たちは俺たちの背後に大司祭の抜け殻が落ちている事に気づき、槍を構える。

「貴様ら！　そこで一体何をやっている！！」

「めんどくさいことになったな……。ニーチャン、こっちだ！」

ブレイドはなんでもない天井に穴を開ける。そこを跳躍して飛び抜けると穴はすぐに閉じてしまった。出たのは大聖堂の礼拝堂で、そこには大量の騎士に取り囲まれるマルドゥークとアイオンの姿があった。

二人に駆け寄り、取り囲む騎士たちに武器を向ける。俺達の姿に気づき、二人とも距離を詰めてきた。

「勇者はどうだったのだ！？　司祭は！？」

「リリアはいなかったし、司祭は倒した。ハムラビは化物だったんだよ」

「化物……？　何を言っている！？　どういうことだ、説明しろ！！」

「そんな場合じゃないだろっ！！　来るぞっ！！」

槍を構えた騎士たちが一斉に襲い掛かってくる。戦いは避けられない　そう覚悟した時だった。彼らの背後から漆黒の魔法弾が同時に飛び交い、騎士たちを背後から撃ち抜いて行く。

倒れた騎士の背後に立っていた男に俺は見覚えがあった。若い錬金術師のその男はマントを翻し、俺たちへと歩み寄る。

「あ、貴方は！？　どうして貴方がここに……！？」

剣を構えたゲルトが斬りかかりそうになるのも無理はなかった。その男はゲルトを誘拐し、魔女化させる原因となった張本人　グリーヴァ・テオドランドだった。

グリーヴァは俺達の前に立つと、以前と変わらない不敵な笑みを浮かべる。それから俺の上着の下にある聖書を指差し、眉を潜めた。

「どうやらちゃあんと聖書は奪ってきたようだね……。いいだろう、こちらにも不本意だが、君たちを逃がす手伝いをしてあげよう」

「……一体どういう風の吹き回しだ？　どうしてあんたが俺たちを助ける？」

「勘違いをしないでもらいたいな、救世主。別に僕はお前たちを助けるつもりなんて微塵も無いさ。だが、元々こういう計画だったんだ……予定が狂うのは、僕が何よりも嫌う物だね」

口元に手を当てて笑いながら男はマントを翻す。入り口に迫っていた増援目掛けて複数の魔法瓶を投げつける。爆炎で通路が包み込まれる中、男は背を向けて言った。

「大聖堂から逃げ切りたいのであれば、僕に着いて来い」

「畏でない確信はない」

「だが、逃げ切れる自信もないだろう？　お互い神の怒りを買った大逆の徒、だ。仲良くしようじゃあないか、ふふっ！　ふふふふっ！　」

笑いながら男は炎の中を駆け抜けて行く。迷っている時間はない。少なくとも罔くらいには使えるはずだ。俺は頭を振って振り返った。

「追うぞ。今はあいつの言うとおりにしよう」

「しかしっ！！」

「大聖堂と正面からやりあえばいずれはやられるぞ！！ あの化物みたいな司祭が一人だけとは限らないんだっ！！」

そう、あのミノタウロスだけが大聖堂の魔物とは考え難い。あいつ以外にも同じように魔物の力を持った奴がいるかもしれないんだ。それに取り囲まれてもしたら間違いない俺たちは全滅する。

一体倒すだけでもあの様なのだ。魔獣に取り囲まれるだの追い掛け回されるだの、想像もしたくない。今は一刻も早くここから脱出したいし、オルヴェンブルムを離れねばならないだろう。

そのためにグリーヴァが手を貸してくれるというのなら喜んで借りなければ。何しろ俺たちはここで死ぬわけにはいかない。俺は…

…俺は、リリアを救わねばならないんだ。俺が走り出すのを合図に全員同時に移動する。正面で行動を妨害する騎士を適度に弾き飛ばし、後方から追いかけてくる執行者には後続のマルドゥークたちが魔法で牽制する。

グリーヴァは大聖堂の入り口前を包囲していた騎士たちを剣で切り伏せていた。俺たちが追ってきている事を確認し、グリーヴァも走り出す。しかし錬金術師が目指すのは門ではなく、リア・テイルへと続く階段だった。

「おい！！ そっちは城に続く道だぞ！？」

「言われなくとも判っているよ。全員、リア・テイルの中に入るんだ。理由を訊ねる暇があるなら走る事をおすすめするよ、救世主君」

何だかよく判らないが、策がある様子だった。男の後に続いて城へと続く長い長い階段を駆け上がり、途中で振り返って魔力を込めた蹴りを階段に叩き込む。轟音と共に崩れる階段に足を纏れさせる追っ手を一瞥し、城内へと続く扉を開け放った。

まだ大聖堂の騒動はここまで届いて居ないのか、城内は静けさに包まれていた。グリーヴァは振り返って扉を前に魔力を開放し、その片手を正面に向け、目を瞑る。

「汝は風、大いなる光よ。我らが敵の魔手から我らを守り、その光で傷を癒す。我は望む、予ねてよりの契約の時は来た！ 汝、風にして大いなる光よ！ 我らが居城を守り給え！！」

大地に魔方陣が浮かび上がる。瞬間、俺たちに今まで気づく事も無かった事実を知らしめる。

城の中、至る場所に同じような小さな魔方陣が浮かび上がったのである。それは線と線で結ばれ、城の内側の壁を覆うように光を広げて行く。

一目見ただけでもわかる。素人に俺にも感じ取れる、絶対的な障壁の光……。門は硬く閉じ、それからもう二度と開く事はなかった。あれほど押し寄せていたはずの兵士たちの声も、一切ここには届かなくなつた。

「……そんな。設置型の外界拒絶魔法……。いつ、そんなものを設置したのですか、貴方は」

「おや？ 城落としての術式は見破れたのに、こっちには気づかなかつたのかい？ まあそれも無理の無い事だ。城落としては急ごしらえの術式だったからね。恥ずかしながら、僕の作品の中では不出来極まりなかったのだから」

肩を竦めて笑うグリーヴァ。こいつ、一体どういっつもりだ？ 確かにあの時、城落としての術式を見つけた俺たちは城には行かず、マルドゥークたちに城の事は任せたはずだった。だからそう、城に何があるのかは確認はしていなかった。

だがここにあつたのは城を崩す為の術式ではなく、城を守る為の術式だった。グリーヴァは一体どういっつもりで二つの術を仕掛けたというのか。その疑念には、あっさりと彼本人が答えてくれた。

「本当ならば、外側に設置してあつた城落としてこの城以外は全て焼く予定だったが、君たちのお陰でそれは失敗に終わった。まあ、この城を隔離できただけでも良しとしよう」

「……おい、一体何の話をしているんだ？ そもそも城の中に立てこもっても仕方ないだろうが。城の聖騎士だつて俺たちを追うに決まっているし」

「他に女王のお目にかかる機会もないだろう？ 多少強引で前倒しだが、女王に君たちは事実を告げるべきだ。外の騒ぎなら聡い彼女の事だ、もう気づいているだろうさ」

「貴方は、一体……っ！」

齒軋りするゲルト。確かにこいつは間違いなく俺達の敵だ。だが言っている事は間違つては居ない。こうなつた以上、大聖堂が反乱をたくらんでいるかどうかは兎も角、何かを隠しているのは紛れもない事実だ。そのことだけはせめて女王マリアに伝えねばならない。振り返り、仲間たちの意見を伺う。しかし全員同じ気持ちだったのか、同時に頷いて応えてくれた。もう後戻りは出来ない。女王に直接真実を伝えよう。

「僕はここで待っているよ。あ、ちなみに僕が居ないとここからは出られないから忘れずに声をかけてくれよ？ ふふ、くれぐれも勝手に居なくなったりしようなんて考えないように」

「……わかってるよ」

俺たちは全員で移動を開始した。すると正面に見覚えのある全身甲冑の騎士が二人立っている事に気づいた。

「……グラン、それにハインケルか」

「マル様、任務ご苦労様です！ 外が騒がしかったみたいですけど、どうかしたんですか？」

「……話せば長くなる。グラン、女王陛下は？」

「アリア様をご心配なさっております。して、姫様は？」

マルドゥークは眉を潜め、首を横に降る。まさかあの堅いマルドゥークが任務を果たさぬまま戻ってくるとは思わなかったのだろう、騎士二人は互いに顔を見合わせていた。

「今は時間が惜しい。グラン、ハインケル……お前たちはここに残れ。私は……大聖堂に反旗を翻してしまった」

「何と……。それは確かなのですか？」

「聖堂騎士たちが追っていたのは我々だ。我々と共に居れば、お前たちも謀反者にされてしまうだろう……。せめて道を開けてはくれないか？ 私はお前たちと戦いたくはないのだ」

「そんな！ そんなの当然ですよ、マル様！ あのちょく堅物のマル様のことですから、きつと何か理由があるんでしょう？ 見れば救世主様ご一行も一緒の様子ですし……。女王陛下の謁見の間までご案内します！ 城の者に見つかりさえしなければ、問題はないのでしょうか？」

二人の騎士はあっさりと協力を約束してくれた。マルドゥークが目を閉じ、小さな声で礼を言う。俺たちも互いに顔を見合わせて思いもよらぬ協力者たちに礼を言う事にした……。

信じる心の日（１）

リリアとフェンリル、二人が長い逃亡の果てに辿り着いたのはリリアの故郷、カザネルラであった。

行く宛も無く、たださ迷い歩いているのだと思い込んでいたリリアにとってその結果は意外だった。フェンリルはリリアの問い掛ける視線を無視し、坂道を下っていく。

大きな風車が並ぶ坂道で、リリアは風を受けて夕日を眺めていた。漣の音と風の音が懐かしく、潮の香りが涙を誘った。なんだか突然悲しくなって、寂しくなって、目尻に浮かんだ涙をこしこしと袖で拭う。

夕暮れ時、漁から戻る漁船が水平線の上で踊る景色を背景に二人は町外れにあるヴァルカンの家に到着した。その扉を開き中に入り、無人の家の中でフェンリルは振り返る。

『一先ずオレの役目はここまでだ』

「……え？　それは、どういう？」

『お前をここまで送り届ける事……それが一つの区切りだと言う事だ。流石に丸二日間魔力放出状態で走り続けたのだ、疲れも溜まっているだろう。ここならば少しは休める』

そう告げてフェンリルは出て行こうとする。その手を背後から取り、リリアは首を横に振った。

「それは、貴方も同じはずです。少しくらい休んでいてください」

『……ふん、大人が居なければ不安か？　子供だな』

「そういうことじゃないです！　それに、ほら……ずっと何も食べてなかったから、お腹がすいちゃったんですよ」

『それがどうした』

「ゴハンはひとりより、ふたりのほうがずっと美味しいんです」

首だけ振り返ってリリアを見ていたフェンリルであったが、リリアの言葉を耳にして身体ごと向かい合った。それからじっとリリアを見つめ、黙って席に着く。

リリアは聖剣をテーブルの傍に置き、早速台所に立って料理の支度を始めた。その後姿を眺め、フェンリルは一度席を立ち、それから黙ってもう一度席に着いた。

ここにいるべきではないと考え、しかしそのリリアの料理を食べてみたくもなった。矛盾する自らの心境に溜息を漏らし、窓の向こうを見つめた。

そこにはくるくると回る風車と、ゆったりと動く漁船の影が見える。

南の木々は風に揺れ、並は夕焼けに染まって紅く燃えていた。
美しい景色だと思った。それは何年も前から変わらない。ずっとず
っと、変わらないもの。ここに来ると気持ちが落ち着く。同時に、
寂しくもなる。

感傷だといえばそれまでだろう。だがしかし、そこにある思いは確
かに揺らいでいて、それは決して偽りではなく、自分がまだ人であ
る事を教えてくれる。

「フェンリルは食べられない物とかないんですか？」

『……選り好みはしない』

「うーん、でも魚は新鮮なのがないですよねえ。リリア、とって
こようかなあ……」

『……なら、オレが行こう』

席を立つフェンリルを見てリリアは目をぱちくりさせ、それから口
元に手を当てて笑った。

『……？ 何がおかしい？』

「だって、フェンリル……。魚なんて獲れるんですか？」

『獲れるさ、馬鹿にするな。どれくらいの量があればいい？ 種類
は？』

「何でもいーですよ。この辺のお魚なら、何でも美味しく出来ます
から。食べたいだけ、食べたい物を、で。釣竿とバケツと……必要
なものはセットで家を出て直ぐの倉庫にありますから。リリアはこ

ここで他のお料理の下ごしらえをしていますね」

無言で頷き、フェンリルは家を出る。夕焼けの中、釣竿とバケツを持って騎士は坂道を登る。以前もここで、釣りをしたことがある。その時は確か、勇者部隊の仲間たちと全員で釣り大会を催した。

結局優勝したのは地元民であるフェイトで、大人げも無くそれを自慢していた事を思い出す。ゲインが悔しそうにそれから夜まで釣りを続け、負けず嫌いなメンバーはそれに釣られて一晩中釣りを続けていた事もあった。

『……変わらないな』

苦笑し、竿を振る。崖の上、フェイトから教わった釣りスポットで釣り糸を垂らす。釣りは忍耐でも根性でもなく、才能だとフェイトは言っていた。だが、フェンリルはそうは思わない。才能や直感で物事を片付けるのは、昔から苦手だった。

どちらかといえば待ち続け、忍耐強く……。遠回りなそのやり口では、フェイトには勝てなかった。だがそれでも吊り上げた魚は大きく、決して無意味ではなかった。楽しい思い出も、悔しい気持ちも、まだ鮮明に色づいているのだから。

波間に思い出を浮かべながら釣り糸を垂らし続けるフェンリル。しかし背後に人の気配を感じ、釣りを継続したまま振り返った。片手に竿を持ち、もう片方の手をロングソードに伸ばす奇妙な格好の暗黒騎士の前に立っていたのは、かつての同僚とリリアの仲間たちだった。

『……ソウルか』

ソウル、そしてメリーベルとベルヴェール。三人のうちソウルが真っ先に前に進み、釣りをしているフェンリルの直ぐ傍に立った。

「……リリアはどこだ？」

『良くここがわかったな』

「当然だろ……。俺を誰だと思ってるんだ。俺はお前の……フェイトの仲間だぞ」

二人の男は見詰め合う。それからフェンリルはロングソードへと伸ばしていた手を引っ込め、魚のかかっていた竿を一気に引き上げる。釣り糸の先には元氣よく動く新鮮な魚が食らいついていた。手際よくそれを外し、バケツの中に放り投げるとフェンリルは改めてソウルと向かい合う。

「いや……お前、相変わらずなんかマイペースじゃねえかオイ」

『釣りは釣り、話は話、だ。ふん、そっちには見覚えのある顔もあるな……』

「おかしいとは思ってた。リリア一人で脱出出来たかどうかと言えば、そりゃ難しいだろうからな。誰かが手引きしたんじゃないかと、は、考えてた。まさかお前だとは思わなかったがな ルーフアウス」

ソウルの言葉に生徒二人は目を丸くした。しかしフェンリルはただ黙ってその言葉を受け、自らの顔を覆っていたフェイスガードを外す。

そこから現れたのは確かにディアノイアの職員であり、魔術学科担当である男、ルーフアウスであった。ルーフアウスはゆっくりと目を開き、それからソウルと向かい合う。

紅い風が吹く中、二人は黙ってそうして立ち尽くしていた。ソウルにだけは、絶対に隠しとおす事は出来ない……ルーファウスはそれを理解していた。だからこそ、仮面を外した。

「そんな……！？ フェンリルが……ルーファウス先生っ!？」

「……そうですよ、ベルヴェール君。オレが……私が、フェンリルだ」

「どうして……なんですか？ どうして、リリアを……？」

フェンリルは眉を潜め、それから背を向ける。

「お前たちは、嘗ての勇者の仲間たちがどうなったのかを知っているか……？」

突然の問い掛けに二人は顔を見合わせた。フェンリルはその答えを待たず、言葉を続ける。

「中には、大聖堂に組し、他の国へと戦いを挑んだ者がいた。中には、聖騎士として女王を守る立場へと変わった者も居た。だが、それだけではない。中には逆徒として大陸を追われた者も、オレのように、あの戦争の中で見つけられなかった答えを探してもがいている者も居る……」

「……お前はまだ、クイリアダリアを憎んでいるのか？」

「当然だろう、ソウル？ 魔王の城に増援を送り込むと言っておきながら、やつらはオレたちごと『プロミネンス』を発動した……。増援は結局来なかった。それでもフェイトは戦って、魔王を倒して

……。プロミネンスから俺たちを守ろうと戻ってきたゲインは、結局その炎に焼かれて……」

「ちょ、ちよつとちよつと!?! 何の話してるわけ!?! アンタたち勝手に話を進めないでよ!?! リリアはどこなの!?! アンタは何がしたいわけ!?!」

勿論、それは生徒である二人にはわかるはずもない話だった。フェンリルは鋭い眼差しで剣を抜き、それをソウルに突きつける。

「オレたちは……オレたちは! 散々自分たちの手で斬り殺してきた物こそ、守りたかった! 散々見殺しにしてきた物こそ、救いたかった!?! 得たかったものはこんな未来ではない……! こんな、何も変わらない世界などでは!?!」

「だからってクイリアダリアを壊すのか!?! 世界を支配するクイリアダリアが倒ればまた新たに争いが繰り返される! 結局そんな事をしても何も変わらないんだよ!?! 俺たちが、何の為に生徒を育てているのかを忘れたのか?!?!」

腕を振るい、ソウルは前に出る。生身の拳でロングソードの刀身を握り締め、自らの手に血を滲ませながら眉を潜める。

「俺たちは、次の世代を育てなければならない……! もう二度とあんな戦争が起こらないように、正しい心と力を持つ子供を育てなきゃならないんだ!! デイアノイアは俺たちの希望だ! その生徒を戦争にまで巻き込んで……許されるとでも思ってたのか!?!」

「そのデイアノイアも、所詮アルセリアという大聖堂騎士に監視される組織に過ぎない。あそこには夢など無い……。在るのはただ、
オルウェナ・イラ

生徒を戦争の道具に仕立て上げようという意味だけだ」

風が吹き、決定的に意見を交えることの無い二人を隔てるように間を通り抜けて行く。剣を手放し、ソウルは拳を構える。フェンリルもまた剣を構え、その足元にあったバケツに足が当たって倒れ、せつかく吊り上げた魚も草の上を跳ねる。

二人の間にある想像を絶する殺気と衝突する激しい魔力に生徒は最早立ち入る事は出来なかった。圧倒的な迫力　英雄と呼ばれた人間同士が構えた時、並みの人間は全てそれを固唾を呑んで見つめる事しか出来ない。

今にもぶつかり合いそうな二つの魔力……しかしその間に投げ込まれるものがあつた。大地に深々と突き刺さり、夕日を映して輝くのは白い聖剣、リインフォースだった。

「フェンリル……ルーファウス先生っ！！」

坂道を駆け上がってきたリリアは息を切らし、二人の間に割つてはいる。剣は地面に突き刺されたまま、庇うように両手を広げて向かい合つたのは、ソウルの方だった。

フェンリルは自らの前に立つリリアを動揺しながら見下ろしていた。その少女は首だけで振り返り、フェンリルを見上げる。

「やっぱり、先生だった……。先生、だっただんですね」

「……やっぱり、だと？　気づいていたとでもいうのか？」

「だって、『におい』が似てたから……。それに、昔の話をする時の目……。先生に、そっくりだった」

その言葉はフェンリルに衝撃を与えた。完全に仮面を被り、自らを

偽ってきた。どちらが本当でどちらが嘘なのかもわからなくなるような途方も無い年月が過ぎた。自分でも判らなくなった二つの名前を、勇者はつなげてしまった。

それはあっけなくフェンリルの心を揺さぶった。剣が手から零れ落ち、フェンリルは力なく頂垂れる。その様子にソウルも拳を下げ、悲しげに目を細めた。

「……リリア。お前が大聖堂を裏切り、クイリアダリアに反旗を翻したという話を聞いた」

「……はい」

「お前はフェンリルに連れられ、無理矢理ここまでつれてこられた……そういうことなんだな？」

「はい。でも、違うとも言えます」

首を横に振り、リリアは澄んだ瞳でソウルを見る。

「私は私の意志で歩きました。大聖堂の司祭よりも、この人の方がずっとずっと信じられる……。それは、ソウル先生だって同じ事なんじゃないですか？」

「……リリア」

「本当は、友達なんですよね？ 仲間なんですよね？ だったら！ 一番信じてあげなきゃいけないのは、ソウル先生のはず！ 一番信じたと思っててるのも、先生のはずですっ！！ その気持ちを……偽ったりしないでください」

リリアの叫びを受け、ソウルは目を閉じる。それから溜息を漏らし、リリアの頭を大きな手でくしゃくしゃと撫でた。

「まさか、師匠の娘に説教される事になるとはな……。だがリリア、お前の言う通りだ。俺は……お前たちを信じたい」

「先生……！」

「判っていた事だ。大聖堂がどんなに汚いやり口だって自分たちの為ならば躊躇わず実行する事くらい、前の戦いの時からな……。それでも俺は、生徒が大事だった。子供たちに俺たちのような大人になってもraithたくなかった。だが……それは少し、過保護ってもんだったのかもしれないな」

肩を叩き、それからリリアを押しつけるソウル。フェンリルとソウル、二人は向かい合う。

「どうしてこうなったのか、話してくれないか？俺も学園の教師として、できる事はやらなきゃならねえ。子供たちに、カッコ悪い大人だって指差されるのだけはカンベンだからな」

「……お前は相も変わらず、か。まあ、良いだろう……。確かにお前たちには、知る権利くらいはあるだろうな」

大聖堂が女王を暗殺し、王座をアリアに引き継がせている事、そしてそれに纏わる様々な事情……。フェンリルは知り得た事をその場で話し始めた。

侵略を求める大聖堂と、和平を主張する女王派……。その二つの対立と、そしてその計画が実行される事を何ヶ月も前から知っていたという事……。

「オレはある男と手を組んでいる。その男は……大聖堂から奪われた『原典』のうちの一つを所持している」

「……まさか、『ヨトの預言書』か!？」

「ヨトの……預言書？」

小首を傾げるリリアたち。生徒を前に教鞭をとる教師のように、二人は前に立って説明する。

「古来より存在する古代遺跡より発掘されたといわれる、ヨト神が今後世界に起きる『滅び』までの出来事を記したとされる伝説の聖遺物だ。大聖堂が長年保管をし続けてきたものだが、二年ほど前に何者かの手によって奪われたものだ」

「だが、原典は二つあったんだろ？ ヨトの預言書と……確か……」

「お前はもう少し戦闘以外の能力もわきまえた方がいいな。奪われたもう一つの原典は、『ナタル見聞録』だ」

ヨトの預言書とナタル見聞録。それは、二人の神が記したとされる各々の直筆の書であり、それぞれが得た力や知識を封じた魔術書でもある。

その二つの本を原典と呼び、その原典を書き写した物を新典と呼ぶ。大聖堂の中で最も重要とされるその二つの遺物の損失は、大きな衝撃を与えた。

「だが、犯人は捕まる事はなかった。まるでどこかへ消えてしまったかのように、なんの魔術も使わずにその犯人は人々の目の前から

消え去ったそうさ。そう、まるで……どこか他の世界に消えてしまったかのようさ」

「原典を奪った犯人は未だに大罪人として追われているはずだっただけ。まさか、その原典を持つ人間と接触していたとはな……って、そうか、それで……」

「ああ。ヨトの預言書には、良くない未来が記されている。その未来に立ち向かう……『滅び』を打ち払う力は……リリア、お前に託されている」

「え？ リリア……ですか？」

「お前の持つリインフォースがこの世界を導く光となるだろう。今のオレに、目的と言える目的があるとすれば、それは……」

「リリアを勇者にする事、だろ？」

どこからとも無く聞こえてくる声。それに誰もが戸惑い周囲を見渡していると、フェンリルの背後、崖の下から人影が浮かんでくる。両手をポケットに突っ込んだまま浮かんでくる少年の姿に誰もが仰天した。しかし少年はそのままゆっくりと大地の上に着地すると、銀色の銃を肩の上のうさぎの帽子から取り出し、それをソウルたちに向ける。

「おいフェンリル、ちょっとばかしおしゃべりが過ぎるんじゃないのか？」

「あ、貴方は……」

「よう、久しぶりだな……冬香の器さんよ。何だ、あのヘタレは一緒じゃねえのか？　ったく、相変わらずやる事が手ぬるいっつーか……なんつーか」

リリアは剣を引き抜き、秋斗に向かって構える。殺気を容赦なく放つリリアに対し、秋斗は銃を降ろして肩を竦める。

「はん、勇者の癖に救世主様に歯向かうつもりかよ？　無駄無駄、やめとけて！　お前ら全員纏めてかかってきても俺様には勝てねえよ！」

「ふざけるな……っ！！　何が救世主だっ！！　救世主はナツルさんだ！　お前は救世主なんかじゃない！！」

「ああ？　別にそんなもん、なったモン勝ちだろ？　ったくそれにしてはもつれないやつだな……。俺様はお前の為に、色々と試練を用意してやったり、助けてやったりしてるっつーのによ……ククッ、まああいつと一緒に。平然と恩を仇で返すのはお前らの流儀なんだろう？」

無言で駆け出し、斬りかかるリリア。その刃を銃身で受け止めて片手でリリアを弾き飛ばす。秋斗は空中に再び舞い上がり、フェンリルを一瞥した。

「おい、あとはグリーヴァがうまくやんだろ。俺たちは撤退だ」

「……そうだな。役目は既に終わっている」

「フェンリル！　ルーファウス……先生っ！！」

剣を鞘に収め、フェンリルは背を向ける。それからリリアたちを――
瞥し、静かに目を閉じた。

「大聖堂に気をつける。奴らは……神の力でこの世界を滅ぼすつもりだ」

「神の力……？ フェンリル！ 待って――！」

リリアが手を伸ばした瞬間、フェンリルと秋斗の身体は光に包まれて消え去っていた。高度な空間移動術式を前に、追う手段など誰も持ち合わせてはいない。

残されたリリアたちはただ目の前から消え去ってしまった男の言葉を心の中で反芻し続ける。

「神の、力……？ それに……リインフォースが、立ち向かう力になる……？」

じつと刀身を見つめるリリア。しかし聖剣は答えを映し出すことはない。映し出すものと言えただだ戸惑い、揺れる彼女の瞳だけだった。

信じる心の日(1)(後書き)

↓それいけ！ デイアノイア劇場Z↓

ショートストーリーを書きましよう

リリア「うばぁー」

ゲルト「どうしたんですか？」

リリア「Wiiを買ったんだけど」

ゲルト「はい」

リリア「最初にやったゲームがフラジールでもう死にたくなっちゃった……」

ゲルト「……」

リリア「気を取り直して！ なんだか久しぶりの劇場だなあーとか思ってるその貴方！ 前の話の三回分のあとがきでなんかやるよ！ 多分！」

ゲルト「そうなんですか？」

リリア「そうだよ！ 多分……」

ゲルト「そういえば本編が色々と複雑な事になっているようですが」

リリア「カオス極まりないね。今ならコスモスもやっつけられる気がするよ」

ゲルト「ウボアー」

リリア「うーん、しかしこの妙な展開はなんなんだろうね。ついこの間まで作品内時間的には学園祭とかのんきにやってたのにね」

ゲルト「そういえば水着審査とかはどうなったんでしょうか」

リリア「水着審査なんてなくなればいいと思う」

ゲルト「え？」

リリア「なんでもないよ、ちょっと本音が漏れたただだから」

ゲルト「えーと………そうですか。急展開の連続しか存在しないこの話ももう六十部行きそうですよ」

リリア「キルシュヴァッサー追い越すのはもう近いね！ 読者数的にはもう超えたけどね！」

ゲルト「……………」

リリア「……………」

ゲルト「ま、まあいいじゃないですか、うん」

リリア「そうだね……。でも最近楽しげな事してないからそろそろ

しないと読者の息が詰まる気がする」

ゲルト「じゃあ番外編で明るいのやればいいんじゃないですか？」

リリア「そうだね！　というわけで、なんか追加されてるかもしれないのでたまにチェックしてみてね！」

ゲルト「それではまた来週」

信じる心の日(2)

こうしてこの謁見の間に入るのは二度目の事で、勿論慣れているわけではない。だが緊急事態である事もあり、特に緊張するという事はなかった。

世界が夕闇に包まれ始めた空、ステンドグラスたちから差し込む光を歩き、女王の前に立つ。マルドゥークの仲間の騎士、ハインケルとグランが人払いをしてくれたり、タイミングを見て呼んでくれたお陰で無事誰にも遭遇せずにここまで辿り着く事が出来た。

二人の騎士は一礼して下がり、出入り口を封鎖してくれている。そんな中、白い幾重にも重なるベールに顔を隠した女王は前回とは違い、生身で俺たちの前に姿を現した。

純白のドレスに、身体の幾つかの場所には鎧のような装甲を纏っている。腰には細身の剣を携え、女王というよりは美しい騎士のような印象を受けた。彼女は玉座の前に立ち、それから自ら段差を下り、俺の前に立って見せる。

女王の前だ、流石に頭を下げるべきだろうと思い、全員でそうしようとする。女王は片手で行動を制した。それからベールを脱ぎ、栗毛色の美しい髪を靡かせ静かに微笑んだ。

「良いですよ、楽になさい。長旅、ご苦労様でした。いかに力ある戦士とは言え、この強行軍……さぞ疲れた事でしょう」

「……女王マリア様。突然の訪問を許してください。どうしても貴方に、直接お伝えしなければならぬ事があるんだ」

俺の図太い態度がマルドゥークは気に入らなかったようだが、話がややこしくなるのをわかってか誰も文句は言わなかった。仲間を下げさせ、一人で女王と向かい合う。

素顔を見るのは初めてだが、本当に綺麗な人だ。思わず見惚れてしまった。多分誰も文句は言えないだろう。だが今はそれに感動している場合でもない。

「話とは、アリアの事でしょうか？」

「それもあります。でも最も重要なのは、貴方の命が狙われているかもしれないという事です」

俺たちはアリアを救出に向かったこと、そこでブレイド盗賊団と会ったことまで全て正直に告白した。一つでも嘘を付けば即座に見破られる……そんな力強い目で見られたら、嘘も誤魔化しも出来ないこの人には何より嘘を付きたくなかった。ただ正しい事を、きちんと正義を振りかざしてくれる人だと思える、そんな魅力があった。一見ただけでそんな事を思うのだから、この人は本物なんだろう。だが、結局女王はこの状況になるまで大聖堂を抑え切れなかったというのか。俺に言わせれば、もっと何とかする方法はあったはずだ。自分の娘が拉致られるまでそれに気づかないっていうのも、馬鹿げた話だ。

逆に気になってしまう。何故これほど聡明な人が、今の今まで大聖堂を放置したのか。俺の疑念さえ彼女は話の中で感じ取ったのだろう。申し訳無さそうに視線を伏せ、マリアは全てを聞き終えて囁いた。

「誠に嘆かわしい事です……。これも全てはわたしの力不足が原因……。娘一人さえ守れぬようでは、母としても、王としても失格でしょう」

「……あんたは、大聖堂に命を狙われているかも知れない。これは確実に、とは言えない。でも、大聖堂の司祭が魔物に成ったのは確

かなんだ。この手で倒して……女王、これを」

取り出したのは司祭が手にしていた聖書だった。それを見た瞬間、女王の表情が明らかに曇った。俺からそつとその本を受け取ると、女王は悲しげに目を細めた。

「……これは、ヨトの預言書……その四散したと言われる断片を含む聖書です」

「ヨトの、預言書？」

「……それは、神であり絶対的なるこの世界の創造主と言われたヨト神が記した、『この世界の設計図』とされる物……。救世主夏流、貴方の持つ『ナタル見聞録』と同じく、この世界の理を司る物です」

「ナタル見聞録……？ いや、どうしてあんたがそれを……」

思わずどきりとしてしまう。俺が持つ本と言えば……原書、この世界のオリジナルとなった本だけだ。だが、それは基本的に誰かに見せた事はないし、ましてや女王なんかはその存在を知るはずもないのだが。

が、隠し通す事は出来ないように見えた。仕方が無くナナシの帽子から原書を取り出し、それを女王に差し出す。

「そう、これこそがナタル見聞録……。英雄神ナタル・ナハの記したと言われる、神の書物です」

そうして彼女は二つの神書がどういった存在であるのかを教えてくれた。

ヨト神とは、所謂ヨト信仰により崇拜される絶対神の存在である。

だがその神様が一体どういう存在なのかはさっぱり俺は知らなかった。

そもそもこの神話とはどういった内容であるのか。話は単純にそこまで遡り、そしてそれは一言で纏められる。

「それは、世界創造の神話です」

ヨト神とは、完全なる無であつたこの世界を創造した女神である。それはこの世界に大地を作り空を作り海を作り、そして人を生み出した。

彼女が紡ぐ全ての物語、この世界の基礎、そうしたあらゆる情報を一点に集約させたものがヨトの預言書と呼ばれる物であつた。それが何故預言書と言われるのか？ それは厳密には預言書ではなかったという。

「ヨトは自らの作る世界の構造を全てその本にまず記したのです。ですがヨトの生み出した世界は最後まで紡がれる事はなく、ヨトは残りの世界を人間に託し、この世界を見守る存在になったと言われています」

「つまり、ヨトの預言書は……」

「ええ。神がこの世界にこれから起こすはずだった、あるいは作るはずだった存在、出来事、全てを最後まで記す世界の設計図なのです」

それは必然的に預言に近い効果を持つ事になる。途中までは全て神の手により生み出された完璧な世界だったのだ、それが途中で人間に管理が渡されたとしても、世界という大きな流れはそうそう変わる事はないだろう。

故に預言書。預言書というのはそれそのものの目的ではなく、それと同じ効果を持つからこそそう呼ばれる遺産であった。

「ですが、預言書は二年前に大聖堂より何者かに奪われてしまいました。貴方ならば、それを奪ったのが誰なのかもうお分かりでしょう?」

「……秋斗、か」

「奪われたのは預言書だけではありませんでした。ナタル見聞録……ヨトが人間の中より選定したと言われる英雄の神が文字通りその生涯で見聞きした情報を記した遺物もまた奪われる事になったのです。そしてそのナタル見聞録こそ、この一冊の本」

だが、それはおかしい話だ。俺はこの本を現実世界で発見した。そんなところにこっちの世界の本があったりするものなのか? なによりこれは、この世界で起きる出来事を予見して見せたではないか。ヨトの預言書とも違う、ナタル見聞録……。それが一体どんな意味を持つのか。考えても答えは簡単には出そうにもない。

「預言書と見聞録、一体何が違うっていうんだ?」

「最大の相違点を挙げるとすれば、それは本が何冊存在するか、でしょう」

ヨトの預言書は所謂『聖書』である。この世界の全てを記したとされる預言書は勿論全てを公表される事はないが、一般でも一部を記されたものが市販されているという。

だがその聖遺物を一つだけおいておく事を良しとしなかった大聖堂は、それを全て書き写した書をいくつか用意したのだという。これ

は勿論大聖堂内部のごく一部、神格の高い人物のみが所持する事を許されたという。

「元老院を形成する老師ともなれば、この預言書の複写本ならば持つていてもおかしくはないでしょう。そしてこの本には一部、本物の預言書のページが使われているのです」

この世界の森羅万象を記した聖書。そこには当然正義と悪が存在する。

それはこの世界の全てであるからして、絶対的な正義であるヨトとは対照的に、絶対的な悪も存在した。その悪意を淡々と記した聖書の一部を、大聖堂は切り離したのである。

「聖書から切り離された『悪意』は幾つかの複写本に移植されました。その悪意はこの本の中にも記されているでしょう。古の大聖堂は恐らく悪意を断片とすることで、各々神格の高い人間が浄化する為に持ち続けようとしたのでしょう……しかし、今はそれだけでは済まなくなっているようです」

そういつて彼女は俺が司祭から奪った聖書を開いた。その中の一枚、そこだけ一枚真つ黒な紙に紅い文字で記されている、いかにも禍々しい様子の部分が存在していた。そこから滲んだ文字は聖書全体を汚し、もう完全に乾いているはずのペンキはまだ瑞々しく、不気味に潤っている。

「本に移植された『悪意の断片』はこうして聖書全てを侵食し……持ち主である司祭をも呪う物となったのかも知れません……」

「つまり、こういうことか……？ 聖書に存在したオリジナルの『絶対悪』のページが幾つかに別たれ、そこに記されているはずだっ

た魔獣やら何やらが司祭にとりついた、とか……？」

「詳しい事はわたしにも判りかねます。ですが、貴方達が見た物は恐らく……『^{マリシア}預言されし者』の一つなのでしょう」

思わず全員黙り込んでしまった。何でまたそんなわけの判らない化物が大聖堂の司祭に宿っているんだ……？ 何だかんだ言いつつ、司祭はそのマリシアとかいう化物を使いこなしていたように見えた。無理矢理やらされているという感じではなかったが……。

戸惑う俺たちを見渡し、女王は目を閉じて首を横に振る。そうして小さく息をつき、ナタル見聞録 俺の原書を返してくれた。

「この見聞録は、預言書と違い一冊しか存在しません。この書についてにはあまり多くの情報も無く……。ですが、英雄の記した書、何か貴方にしか判らない意味があるはずですよ。どうか、大切にお持ちなさい」

「……いいんですか？ そうとは知らずに持っていたけど、これは大切なものなんじゃ？」

「いえ、良いですよ。これは貴方が持つに相応しい……。大聖堂の許可は得られませんでしょうが、わたしは貴方にこの書を託したい」

改めて本を持つ俺の手に自らの手を重ね、マリシアは微笑んだ。これで正式に英雄に選抜されてしまったような気がするの俺だけなんだろうか。

何はともあれ、あらためて本の事が少しだけわかった。だが、どうしてこれが現実世界にあったのか、冬香がこれを俺に渡そうとしたのではなかったのか……色々と疑問はあるが、一先ずは目先の事情

だ。

「……それで、わたしの暗殺という話でしたね。少なからずそれは事実なのでしょう。わたしも、そのような噂を耳にした事はありませんから」

「じゃあ、どうして……？」

「……とても、お恥ずかしい話になってしまうのですが、宜しいですか？」

女王は自らの胸に手を当て、それから切なげに目を潤ませて語る。

「わたしは代々この城を守り、この城と共にある民を守るために存在するリアの後継者です。ですが、元々この国はヨト信仰という一つの宗教に支配された国……。古来より、政を司るのは大聖堂、並びに元老院と老師、司祭たちでした。自らの事をこう称するのは余りにも国民に対して無礼な感じが、わたしはまるで『お飾り……。どんなに心で願っても、現実になる事は多くはありませんでした』

マリアはリアの継承者。つまり、リア・テイルを守る存在だという。嘗て神のものであったというこの城は、ヨト神の教えを残す大切な古代遺跡でもあるらしい。

代々政治を行うのは元老院、民を率いて戦争をこなすのは女王と役割は裏で決められてきた。女王は勿論、王であり国を指揮する存在だ。だがその行動の一つ一つに元老院の許しが必要であり、むしろ役割は国民を励ます事、教えを広める事、そして戦線に立ち兵士と共に敵と戦う事。早い話が、求められているのは『カリスマ』なのである。

「わたしの母も、祖母も、リアの継承者としての儀式を受け、そして元老院に見初められて来ました。わたしはもうこの役割を二十年は続けていますが、結局わたしに出来る事など多くはないのです……」

「……そうだったのか」

「ですがだからこそ、ここを離れる事も、民を裏切る事も、絶対にしては成らないとわたしは考えます……。戦場に立ち剣を振るつてから早くも十年の時間が過ぎ去りましたが、国民は皆まだ争いの傷を癒せずに居ます。もしわたしが暗殺されるような事があれば、皆に大きな負担をかけることになるでしょう……」

「だったら早く逃げたほうがいい。それが、護衛を固めるとか……色々手段はあるだろ？」

俺の言葉に女王は申し訳なさそうに微笑む。しかしそれは俺たちにへりくだっているわけではなく、もう決めてしまっているから、絶対的な覚悟を前提としているからこそ、悲しげなのだと思う。

「わたしは城を離れません。この城を守るのがわたしの役目です。アリアが戻らないというのであれば、それはまた一つの方法なのかも知れません。八さんなら、アリアを任せても問題はないでしょうから」

「え？ あのおっさんと知り合いなのか？」

「ええ。勇者の仲間でしたら、顔は皆覚えています。いえ、それだけではなく……戦争の為に死んで逝った人々の事ならば、何一つ忘

れてはならないのですが」

それは流石に無理つてもんだらう。だが気持ちだけでもそうありたいと、理想を語ってくれた。

確かにこの人は甘い。だが、これは彼女の一つの覚悟なのかも知れない。自分で一つ決めたのだから、もう引き返す事は出来ない……。頑固なのだ。きつと。

「わたしが至らぬばかりに、貴方達には要らぬ手間をかけさせてしまいましたね……。元老院の追跡は激しくなり、貴方達を匿う事は、恐らく私にも難しいでしょう」

「……自分で選んでやったことだ、後悔はしてない。それにあんな化物みたいなのにこきつかわれる救世主つてのも締まらないですよ」

「ふふふ……。貴方のその強がりをとても頼もしく思いますよ、夏流。ですが今は、どうか逃げて下さい。国を出さえすれば追跡は弱まるでしょう。貴方達のような力こそ、未来には必要な物なのです」

「……あんたを置いて逃げろっていうのか？　いつ殺されるかも判らないのか？」

「……安心して下さい、わたしが殺される事はまだ、ないでしょう。アリアが捕まってしまえば考えられない事も在りませんが……。少し、時間を下さい。わたしも自分の力で元老院を問い正し、出来る事ならば武力ではなく対話のテーブルで問題を解決したいのです」

そんなの無茶だ。わけもわからない俺たちに行き成り襲い掛かってくるような連中だぞ？　話なんかまともに聞いてくれるはずもない。だがきつと、そんなことはこの人には関係ないのだらう。彼女だっ

てそれはわかっているはずなんだ。それなのに、笑ってそんな事を言うのだ。

それはもう、覚悟なのだろう。だから俺たちが何を言っても無駄なのだろう。この人はあくまでも人を信じる。信じて、裏切られると判っても信じて、そうして相手も自分を信じてくれる事を祈っている。

「……………。判りました。俺たちはリリアを探します。もうディアノイアにも戻れませんから」

「…………その、リリアの事なのですが…………」

何やら言い辛そうにしている女王陛下。その心中を察してか、マルドゥークが他のメンバーを引き連れてぞろぞろと部屋を出て行く。一緒に出て行くこととするゲルトを女王が呼び止めると、結局三人だけが広い空間に残される結果となった。

「リリアが大聖堂に反旗を翻したという事実を、夏流は信じて居ないですね」

「はい。リリアはそんな事をする奴じゃありませんから」

「……………そうですか。貴方の存在に心から感謝を述べましょう。どうか、リリアと共に生き延びて下さい」

強く頷くと、女王の視線はゲルトへと向けられた。それから自らゲルトの元へと歩み寄り、その頭を撫でる。

「ゲルト・シュヴァイン…………ゲインの娘にして黒の勇者よ。こんな時で申し訳ありませんが、ずっとずっと、貴方とは話をしたいと考

えていました」

「は、はい……っ？　な、なんでございましょうか？」

流石に女王になでなでされて焦りまくっているのか、ゲルトは拳動が若干おかしい。そんなゲルトの手を取り、女王は静かに目を瞑る。

「……貴方の父上に対する数々の仕打ち……。謝って済む様な事では無いと存じますが、それでもどうか彼の冥福を祈らせてください。彼は、わたしが殺した様な物ですから……」

「え……？」

「ですが、これだけは信じてください。共にゲインと戦った者ならば、誰一人として彼を臆病だと言う物は居ないでしょう。真に勇敢な、彼は立派な……そう、勇者の名を冠するに相応しい戦士でした」

ゲルトは完全に動揺していた。身体は震え、思いは言葉にならずただ黙り込む。そんなゲルトを見つめ、女王は笑う。

「わたしもまた、彼に幾度と無く救われました。国民の前で彼の擁護をする事は、どうしても……出来なかったのです。彼の思いも、勇敢さも知っていたのに、わたしは何も出来ずに……」

「……いえ、いいんです。平気ですから……。そう、仰っていただけただけで、わたしは……」

「……つくづく痛感するのです。わたしは何故、守りたい物を守れぬのかと……。弱さや未熟さ、きつとわたしがもつともつと聡明ならば、この国を変える事が出来たのでしょうか。悲劇を繰り返さずに、

いられたのでしょうか……。ですが、そうは出来なかった。本当はリリアも貴方も、二人とも勇者に……。以前の二人のように、手を取り合って。この世界に起こる悲しみと戦ってほしかった」

だが、その願いは叶わなかったという。女王は二人とも勇者になれるようにと必死に元老院を説得しようとした。しかし、裏切り者のレッテルを貼られた男の娘に勇者になる資格などないと一蹴されてしまったのである。

それでも彼女は引き下がらなかった。だから、リリアとゲルト、優れている方が勇者になる。そんな風に話が纏まったという。それでも納得するしかなかった。せめてその権利だけは、ゲルトから奪いたくなかったから。

「その結果貴方とリリアがお互いを憎しみ合う様な事になっているのであれば……。わたしは、余計な事をしてしまったのかも知れませんがね」

「いえ！ そんな、違います！ わたし、嬉しかった……。勇者になれるんだって、それだけで……。すごく。すごく、救われたんです……」

ゲルトは目尻に涙を浮かべながら笑っていた。そんなゲルトを優しく抱きしめ、マリアは頬を寄せる。

「わたし……。リリアの事が大好きです。だから、頑張れます……。女王陛下だけでも、判ってくれていると思えば……。頑張れますから」

「ありがとう、ゲルト……。どうか、勇気を捨てないで下さい。貴方が父上から受け継いだ尊く気高いその魂を、どうか忘れないで下

さい」

「はい……。はい……っ」

ゲルトとマリアはしばらくそうして抱き合っていた。長い抱擁が終わるとゲルトは涙を拭い、ふかぶかと頭を下げて背を向ける。俺もこうしてはいられない。さっさと行動しなければ。

「夏流……。二人の勇者、貴方にお任せします。どうか、大切に大切に、扱ってあげてくださいね」

「え？ はい」

「どうにも貴方は何というか……そう、女心には疎そうですから」

「は？」

女王の最後の言葉はよくわからなかったが、兎に角こうして二度目の謁見は終了した。

よく判らない事が山ほど増えてしまったが、得られたものも少なくは無かった。通路を歩きながら嬉しそうに笑い、それから泣いているゲルトの横顔が、多分それを俺に教えてくれたのだと思う……。

信じる心の日（2）

さて、それからどうしたのかというと……。

グリーヴァの元に戻ると、奴は突然俺たちが謁見中に仕掛けていたらしい魔方陣を発動した。それは空間転移魔法だったらしく、一瞬

で俺たちは見覚えのある場所に転送されていた。

他のメンバーがグリーヴァ以外全員転倒する中、俺は見事に着地を決める。流石にこう何度も何度も転送されてりやなれるってもんでお尻を打って涙目になっているゲルトを助け起こし、他のメンバーの様子も見るが一番着地に失敗したのはゲルトだったらしかった。まあ……あれだ。いいけどね。

潮風の中で顔を上げると、どうにもそこは見覚えがあるはずだった。夏休みに来たカザネルラ……リリアの故郷、その砂浜だった。お陰でそれほど皆ダメージはなかったようだ。

「ぐ、グリーヴァ！ もう少し優しく転送出来ないんですか！？」

「うん？ ははは、そんなに怒る事はないじゃないか。ちやあんと砂浜に下ろしただろう？」

「そつだぞゲルト、あんな転送優しいもんだ。逆様じゃなかっただけマシだろう」

「な……。何ですかそのチームワークは……！？ うっー！ うっー！」

「どうでもいいけど、僕の役目はここまでだ。君たちは無事にカザネルラまで送り込んだし……後は救世主君の活躍にお任せするよ」

そう言っって小さく笑い、グリーヴァは俺たちに背を向けて砂浜を歩き出す。その男が作り出す足跡を見つめ、それから俺は顔を上げた。

「グリーヴァ」

男は何も言わずに振り返り、小首を傾げる。その嫌な奴の顔を見て、

俺は頭を下げた。

「ありがとう、助かった」

「……成る程、彼が君を嫌う理由が何となくわかった気がするよ」

と、意味の判らない言葉を残し、錬金術師は風が吹くと消えてしまっていた。本当に神出鬼没な奴だが、実際あいつのお陰でここまで逃げ延びる事が出来たのだ。礼くらい言ってもバチはあたらならないだろう。

だがそれはそれ、これはこれ、である。ゲルトの身体をあんなにしやがった張本人だ、次に会った時はもう敵同士……確実にぶっ倒して……って、しまった……。

「くそ、あいつもしかして魔女化を阻止する薬とか知ってたんじゃない……」

「……！ そう、ですね……。彼以上に詳しい人は居ないでしょうし……。リリアのことはかり考えていて、すっかり失念していました……」

「相変わらずのリリアマニアっぷりだな」

「……貴方には言われたくありませんよ。なんですか、あの地下での憤慨っぷり。そんなにリリアが大好きなんですか？」

「……一人前に言い返すようになったじゃねえか」

「別に言い返してませんよ！ 貴方の事なんてどーでもいいですから！」

「んだとてめえ……！ もうアレやらねーぞ……！」

「アレって……アレとか言わないで下さい！　なんか……なんか嫌ですっ！」

そんな子供染みたやり取りをしていると、呆れて溜息を漏らしながらマルドゥークが間に割って入った。眼鏡を光らせ、俺たちを引き離して睨みつける。

「何を馬鹿なことをやっているのだ……？　子供ではないのだぞ、二人とも」

「だってこいつが……」

「でも、この人が……」

「だってでもでもない！　この危機的状況下で何を声を揃えているのだ、貴様らは！」

ゲルトと顔を見合わせ、溜息を漏らす。全く五月蠅いやつだ……。お前は俺たちの保護者かつつの。

まあ、こんな風にゲルトと言い合えるのも少し心に余裕が出来たからだろう。ゲルトは少し先ほどの幼稚なやり取りが恥ずかしかったのか、顔を赤らめてそっぽむいていた。

「まあ、仲が良い事は悪いことじゃないさ。だが、一応ボクらのリーダーなんだ、君にはしっかりしてもらわないとね」

「……なんだ、リーダーは俺なのか？　こういう状況なら、実際に

騎士団を率いていたマルだかアイオーンのほうがいいんじゃないか？」

「いやあ、マル様がリーダーだと色々口うるさいから止めた方がいっすよ」

全員同時に視線を向ける。砂浜には不似合いな甲冑の騎士がそこには二名立っていた。なぜかそこにいるグランとハインケルにマルドワークはすっかり啞然としていた。

「お前ら、なんで……」

「我らはマル様と常に共にある者……。貴方が大聖堂と戦うというのであれば、我々も手を貸しますぞ」

「そうですよ。どーせマル様一人じゃ騎士団的に浮くんですから！ 側近がいなきゃ、救世主の仲間には馴染めせんって！」

「馬鹿者、余計なお世話だ！ 全く……！ どうなっても知らんぞ！」

頷く二人の騎士。どうやら俺たちに手を貸してくれるらしい。二人の事ならば信用も出来るし、仲間は多いに越した事はない。

二人は俺の前に立つとお互いに兜を外し、微笑んだ。そこでようやく気づいたのだが、ハインケルはどうにも女だったらしい。

「改めて自己紹介っす！ あたしはハインケル・ヴァロー。そっちはグラン・ヴィルヘイム！ 二人とも聖騎士団の部隊長っすね」

「君の噂は我々の耳にも届いているよ、救世主。オルヴェンブルム

攻防戦ではマル様を救ってもらったな。感謝する」

「い、いや……。っていうか、いいのか？ 隊長クラスがマル含め三人も抜けて、聖騎士団はどうなるんだよ……？」

「救世主様、敵の心配してるなんて余裕っすね〜！ ま、マル様のお守りは必要でしょ？ 正直救世主様だって手を焼いてるくせに〜」

「ハインケル、調子に乗るなよ……？」

「わわ、怒られた……。まあいいや、兎に角短い付き合いになるかもしれないけど、宜しくね！」

「あ、ああ……。こちらこそ、宜しく」

二人と順番に握手を交わす。また二人とも兜を被ってしまったので、どうにも中身は想像出来なくなった。うーむ。

とにかくこうして仲間が二人増えてしまった。しかし何でまたこんな辺鄙な所にグリーヴァは俺たちを転送したんだろうか。そんな事を考えていると、背後からぞろぞろとリリアと残りの勇者部隊メンバーが集まってくるではないか。

全員が全員の顔を見渡し、それから声を上げた。勿論お互いに鉢合わせする事なんて考えてもいなかったわけで……。

「なな、なつるさん！？ なんでここに！？」

「おま……何してんだよ！？ ソウル先生も一緒って、どういってだ！？」

「こっちも色々あった。でも、そっちも色々あったみたいね」

「色々ありすぎてもうくたくただぜえ……。なあニーチャン、マリシアの事は話さなくていいのか？」

「ああ、そうだったな……。いや、それ以前に兎に角……。リリア」

皆が静まり返る中、リインフォースを抱いて俺を見つめるリリアの前に進む。そうしてじっとその瞳を覗き込み、俺は確信した。

こいつは反乱なんてやってない。だから無実の罪で追われている事になる。それは、なんとかしなきゃいけない。だから、救世主としてやるべき事はもう決まってる。

「話したい事が沢山あるんだ。聞いてくれるか？」

「リリアも、師匠に聞いてもらいたい事がいっぱいあるですよ……」

俺が微笑むと、リリアもにっこりと笑ってくれた。なんだかついこの間までギクシャクしまくっていた気もするが、なんとというか……離れている間にお互いに心境が変化したのだろうか？

正面からリリアを抱きしめると、リリアもぎゅっと俺の身体を抱きしめた。なんだか久しぶりに会う気がする、その懐かしい感触に思わず溜息を漏らす。

そんなことをしていると背後からゲルトがフレグランスで突き刺してきた。何が起きたのか判らずに倒れる俺を仲間たちが蹴る事蹴る事……。

「貴方はいきなりなにやってんですかー!!」

「ちょ、ま……。俺別に何もしてな……。っ！　うわああああっ!？」

な、なんでこうなるの……？　せつかく仲間と再会できたのに、こんな
のねえよ……。

夕焼けに照らされる波間を逃げる俺、剣を構えて追ってくるゲルト。
うっかり刺されたとかそういうレベルで済む間に、何とか説得する
手段を考えねば。

そうして暫くの間、俺たちは砂浜を駆け回っていた。これから大変
な事が続くかもしれないのだ、少しくらいはこうして　ゆっくり、
時間を使いたいと思う。

そしてその予感の外れる事もなく、俺たちはまた新しい戦いに巻き
込まれていく事になる。そう、それは……俺の持つナタル見聞録も、
無関係ではない戦いに……。

まあ、そんな事は今はどうでもいいのだ。今は兎に角、逃げ切らね
ば……。

夕日が……まぶしいなあ……。

そんな事を考える、夕暮れ時なのであった。

信じる心の日(3)

「ぐうすか……」

というのは、勿論ヤツの……へこたれ勇者様(白)の寝言である。

口元をむにやむにやさせながら気持ち良さそうにリリアはベッドの上に転がっていた。

色々あつて疲れたのだろう。まあだからって合流したとたんに砂浜にぶつ倒れて寝始めるのもどうかと思うが、思えばリリアは最近やたらと眠たげだった。それが無理して何日も起きっぱなしだったのだ。張り詰めていた緊張感が緩み、一気に崩れたのだろう。

カザネルラで合流した俺たちは一先ずリリアの実家で厄介になる事にした。尤も、この主であるヴァルカン爺さんは今はまだシャングリラにいるのか、家は完全に無人だったが。

ベッドの上までリリアを運び、涎を垂らして寝る頭の悪そうな勇者の顔に脱力する。なんというか……うん、まあ、こうなることはわかってただけだね。

元々そこはリリアの部屋だったらしく、部屋のにもきちんと女の子の部屋といった様子だった。あんまりじろじろ見るのも悪いと思い退散すると、二階の廊下から吹き抜けになっている一階の様子を見下ろす事が出来た。

皆一階でお互いの戦闘の傷を癒すやら、食事の用意をするやらではたばたしている。冷静に考えると、リリア以外のメンバーが作る料理に若干寒気がするのだが、これがなんでもないただの気のせいである事を信じたい。

「どうだ、リリアの様子は？」

「……先生。あいつなら大丈夫です。今はムカツクくらい幸せそう

に寝てますよ」

「はっはっは！ まあ、リリアはそれくらいじゃないとな！ ところで、ちとお互いに情報を交換しておくべきだろう」

一人で階段を上がってきたソウルの言葉に同意し、俺たちはお互いの身に起きた事を話し合った。

何でもソウルと一緒にリリアを追うはずだったゲルトは一人で大聖堂に事の真相を確かめに行ってしまったらしい。なんというか、ゲルトらしい行動だ。勿論任務を怠るわけにも行かず、ソウルと残りのメンバーはリリアを追跡したのだという。

この潮風の吹く街で起きた事、フェンリルの正体……そして秋斗の存在と、ヨトの預言書の所有者の話。アクセルが大聖堂の暗殺者で……色々と受け入れるには時間のかかる事もあった。だがそれはこっちの話も同じ事だ。

「そうか、あの八がなあ……生きてやがったのか。流石にしぶといぜ、ブレイドさんの仲間はよ」

「それにしてもこの場所が良くわかりましたね」

「ん？ ああ……まあ、ちょっとな。昔から決まってたんだよ。俺たち、フェイトの仲間たちがもしもはぐれてしまったら……その集合場所は、この街だってな。だからなんじゃねえかって時々思う事がある。ヴァルカンの爺さんが、この街を離れないのは……」

そう語るソウルはいつになく辛気臭い顔をしていた。腕を組み、それから目を閉じ、過去に想いを馳せる。俺は手摺にもたれかかったままそんなソウルの隣で皆を見下ろしていた。

「まあ、色々と大変だが……要は気合と勇気だ！　なんとかなんだろう！」

「楽観的な……。それよりいいんですか？　仮にも逃亡者である俺たちと行動を共にして」

「おう、気にすんな。教師の役目は生徒を助ける事だ。ま、大船に乗ったつもりでどーんと構えてな！」

「うーん、逆に不安になってきた……。どう考えても泥舟じゃないか。ソウルに任せちゃだめだ……。自分で考えて行動せねば。」

「ま、俺は構わないんだが……。全員が全員、そういうわけにも行かねえだろう。正直な話、状況は厳しい。抜きたいと言うやつが現れてもおかしくはないし、幸い今ならまだ顔が知れている面子以外は引き返せるからな。そういう結果も覚悟しておけ」

当然の事だ。何だかんだで、ここにいるメンバーの殆どには罪を共に背負うような必要などないのだから。成り行きで行動を共にしてきた物の、中には立場のある人間も少なくはない。戦力不足は確実なのだが、だからといって皆を巻き込むわけにもいかないだろう。そう考えると、全員で一緒に過ごせるのは今日が最後かもしれない。全員が休んだら、後は次の行動に移らねばならないのだから。今晚、たった一夜だけ……。俺たちが仲間で居られるタイムリミットにしては、短すぎる。

それにしても本当に厄介な事になった。クイリアダリアという国にはもう居られないのかもしれない……。女王の言つとおり、ほとぼりが冷めるまで別の国に逃げる必要があるのだろうか。

「何に先んじてもまずは腹ごしらえだ。勇者部隊には女も多いよう

だし、これは期待してもいいんだろ？」

「……………なんとも言えないっす……………。あの面子の顔ぶれを見てから自分で考えてください」

そうだ、今までだつて本当にギリギリの所を何とかやってきた。たまたまうまくいっただけというシーンだつてあっただろう。

これから先、敵が大聖堂だというのなら、このクイリアダリアという国そのものを相手取る事になる。そんな無謀な戦いに皆を巻き込んでしまつていいのか。

決断しなければならぬことは山積みで、どうにも心の整理が出来そうにもなかった。それに考えたい事も……………当然、山ほど残っていたから。

信じる心の日（１）

案の定悲惨な事になった夕飯を何とか乗り越え、俺は一人で夜の砂浜を歩いていた。理由は当然一人になりたかったからであり……………ある程度リリアの家から離れた岩場で俺はうさぎに問いかける。

「それで、一体どういう事なんだ？ この原書……………ナタル見聞録が、現実の世界にあつたつていうのは」

うさぎは肩から飛び降り、砂の上を何度かぴよこぴよこ跳ねる。それから人間の姿へと変身し、相変わらぬキザな格好で俺と向かい合った。

「秋斗はヨトの預言書を持っている……………それはあいつが持ってたも

う一つ、原書で間違いないだろう。完璧な預言を可能にするあいつの預言書とは違い、俺の原書は預言書ではないとお前は言ったな。それはつまり、ナタル見聞録の存在を知っていたという事なんだろう？

あいつと俺は全く同じ存在というわけではないらしい。まず秋斗の方が先にこちらの世界に来ているという事実があり、そして所持している武器、連れているうさぎの色、そして原書の存在……。似通っているように見えて、俺の持つ見聞録とヤツの預言書は本質的に異なる物だ。

だがとにかく問題は、その二つの原書が一体いつ、どこで、どうして俺たちの手に渡ったのか、という事。二年前まで原書は大聖堂に保管されていたという。それを奪ったのは秋斗だとするのなら、あいつはわざわざ俺の元へ、あの古ぼけた館の屋根裏部屋に見聞録を移動したとも言うのだろうか。

冬香が俺に残したものは、原書ではなかったのか……？ ナタル見聞録、異世界の書物をあの場所に置く事が出来たのは俺以外には秋斗しか存在しない。あの手紙を受け取るより前に、秋斗は秘密基地に立ち入っていた事になる。そこであいつは、何かを見たのだろうか。

こちらの世界では二年前、現実の世界では一月ほど前から異世界で活動していた秋斗。つまり奴も俺と同じく何らかの手段で異世界へと移動した事になる。俺はその手段は、冬香が残していたもう一冊の原書の力が何かではないかと漠然と考えていた。

しかし実際の所、原書そのものに異世界へと渡る力はあるのだろうか？ 何か俺は思い違いをしていたのかも知れない。原書はこの世界の書物……。神の行いを記したものの。それを俺に渡す為に態々あの場所に設置したのは、冬香ではなく秋斗だ。

だとすれば、冬香が俺に伝えようとしていたものっていうのは一体何なんだ……？ 何だかもやもやと胸のうちに引っかかるものがある。

る。この世界に俺を誘ったのは、冬香なのだろうか。それは何よりもこのうさぎの男が知っていることだろう。

「お前は案内人……そうだったな。だが、お前は……ナタル見聞録、つまり原書とは何の関係もないのか？」

「関係がない、というわけではありませんが、直接的には繋がない者です。いえ、それは『意図されていなかった』とでも申し上げましょうか。確かにナツル様の言うとおり、ワタクシは原書とは基本関係のないものです」

「……やっぱりそうか。勘違いしてた。原書の力で俺はこつちの世界に来てるんだとばかり思ってたが……違ってたんだ。この世界とあつちの世界を繋いでいるのは、ナナシ　お前の魔術なのか」

何やらいくつかの誤解があったらしい。原書は本来こいつが意図したものでなければ、こいつの主が置いたものでもなかった。ナタル見聞録をわざわざあの場所にまで送り込んだのは冬香でもナナシでもなく、秋斗なのだ。そして原書の力が異世界への扉ではないのだとすれば、秋斗が急に行方不明になった理由も想像出来る。

例えば……そう。異世界への扉を開くという超高度な魔術を行使できる存在に、『召喚』された、とか。ナナシのやっていることと大して差はないのだ、全く不可能というわけではない。そう、俺だって同じだ。俺はナナシに、召喚されたのだから……。

「ってことは、逆だったのか。お前が俺の使い魔なんじゃなくて……」

「そうでしょうね。貴方がワタクシの、使い魔なのです」

なんということだ。そう、確かにナナシは腰が低い上に……完全に腰が低いとは言えないが……見た目が既に紳士と言った様子であり、うさぎに変身するなど使い魔っぽい部分がある。しかし実際、俺がこの世界に導いたのがこの男だとすれば、この男のいう『主』というものは俺ではないのだという事実と照らし合わせれば、気づくはずだったのだ。

「だったら、俺の質問にお前が答えなければならぬ必要もない、か……。お前の方が立場は上だったわけだ」

「まあ、そこは気にせずとも良いでしょう？　ワタクシの目的はこの世界へご案内した貴方を見守る事ですから」

そう、だからこそその案内人……。こつちの世界のことなんてろくすっぽ説明しやがらねえくせに何が案内人なのかと思えば……。こいつが俺を呼んでいたんだ。

だとすれば、秋斗が二冊の原書を大聖堂から奪った事実も、俺にそれをあいつがわざわざ残したという事実も確定となる。そうなってくると余計に判らなくなるのは……。そう、冬香が本当は何をしようとしていたのか、ということだ。

原書は俺の引き出しに入っていた。だがカラッポだった冬香の引き出しにも、本当は何かが入っていたのだろうか……。？　それを知っているのはもうこの世界には秋斗しかない。冬香が本当に俺に残そうとしたものがなんなのか、あいつから聞き出さねばならないのだ。

「つてことは待てよ、この原書……見聞録はなんでまた俺の手に渡ったんだ？　秋斗は何考えて俺にこいつを残したんだか……？」

「真相は彼に訊くしか確かめる方法はないのでしよう。ですが貴方

ならば少しくらい想像はつくのではありませんか？」

まあ、確かにそうだ。言われずとも俺は何となく考えていた。あいつが俺に、わざわざ見聞録を寄越した理由。

出来る限りフェアな状況を設定しようとしたのだろうか。あいつはそういう、変なところで真面目なのだ。何より正面から俺と力比べをして勝つ事を望んでいるのだろう。恨みを晴らす為ならば卑怯な手を使えばいいだろうに、そういう事が出来ないのだから変なやつである。

つまるところこいつはヤツからの挑戦状とでも受け取ればいいのだろう。一先ず見聞録が意味不明なのは変わらないから、考えるのは後回しだな。

「成る程な……。やっと自分の置かれた境遇が判つて来た。やらなきゃならない事は、思った以上に多そうだ」

「ええ。しかしナツル様はよくがんばっていますね。最初の貴方に比べれば、褒めてあげても良いくらいです」

「余計なお世話だ。それよりお前、つくづく何者なんだ？ 異世界から人間を召喚する……これは口で言うほど簡単じゃないはずだ。秋斗がつれていたうさぎがあいつを呼んだのだとすれば、お前ら一体何なんだ？」

これだけの力を持つ存在であるというのに、どの組織にも、国にも思想にも所属しない中立の存在……。その強大な力は計り知れない。こちらの世界において絶対的な魔力を誇る俺の力を封じているのだ、当然その俺よりも莫大な魔力を持つのだろう。

前々から謎ではあったが、いい加減胡散臭さもヒートアップしてきやがった。まあそれを訊いたところでどうせこいつは教えてはくれ

ないんだろうが。

ここまで俺の頭の中を整理するのを手伝ってくれただけでもありがたいと感じるべきだろう……。うん、そう考えよう。

「ナツル様」

一人で腕を組んで頷いていると、ナナシは腰に手を当て微笑みながら言う。

「貴方は確実にこの世界の真実に迫りつつあります。貴方ならばきっと、自らの手でトウ力様の想いへと辿り着く事が出来るでしょう。ワタクシはそれを信じます」

「……………あのなあ、それでもうちよつとヒントをくれるとか、そういう優しい気持ちはないのか？」

「ええ、ありませんね。ふふふ、ワタクシはただ、貴方を見守る存在ですから」

本当に役に立たないやつだ。だがまあ、ここまで色々あったが常に肩やら頭やら荷物やらに載せて一緒に行動してきたんだ。多分これから、最後まで……一緒に居る事になるんだろう。

こうなると腐れ縁という言葉が正しい気がする。兎に角秋斗に問いただすべき事がまた幾つか増えたようだ。次にあいつと会った時、それが疑問の払拭される日だと信じたい……。

話を終え、うさぎに戻ったナナシを頭の上に乗せて砂浜を歩く。しばらく進んだ所で波打ち際に立ち、ぼんやりと海を眺めているゲルトを見かけた。

「おーい、何してんだ？」

「ひゃあっ！？ 何故貴方はいつも唐突に背後から現れるんですか！？」

「いや、別にそんなことはないと思うんだけど……」

考え事でもしていたのだろう。声をかけられてゲルトは大層驚いた様子だった。気まずそうに顔を紅くしているその隣に立ち、彼女が見ていた物を見る。

穏やかな海辺に映り込んでいたのは淡く輝く白い月だった。きらきらと輝く波間を眺め、思わず息を付く。ゲルトは俺を見上げ、それから向かい合って呟いた。

「……弱音を吐くつもりではないのですが……わたしたちはこれからどうなってしまうのでしょうか」

それは弱音じゃないというのはちょっと辛くないか？ まあ、突っ込むとうるさそうだからほっとくけどさ。

「まあ、今まで通りって訳にはいかないだろうな……。俺はリリアを守りたい。だからあいつを安全な所まで逃がさなきゃならない。ここに居たんじゃ、カザネルラの住人にも迷惑がかかるしな」

「……そうですね。でもわたしが気になるのは、マリア様の事……それにアクセル・スキッドの事もです。何より、リリアが遭遇したという、もう一人の救世主という物について……」

ゲルトの目は戸惑っていた。俺を疑っているのかも知れない。それはそうだろう。俺とあいつは境遇が似すぎている。手にしているものが奪われた二つの原典であるという事も、どこからともなくやつ

てきたという事も。

こいつはうつかりへこたれ勇者だが、それでも頭はキレる。元々俺の事を信用はしていなかったのだろうが、今回の件は流石に看過出来るものではないのだろう。

「貴方は、彼の事を知っているのでしょうか……？ 大聖堂より奪われた二冊の神書、そのひとつを持つ貴方は、充分に異質な存在です」

「そうだな。言われなくても判ってるさ……。確かにお前の言う通り、あいつは俺の……友達だ」

「友達、ですか？」

「あつちがどう思ってるかはわかんないけどな。でも俺は……少なくとも俺にとっては、友達なんだ」

色々な事があって、今はこうして一緒に居られないけれど……。あいつと俺は同じ想いを共有した、たった一人の友達なんだ。俺たちの間にあった大切な物が壊れてしまって、それから多分、何かが狂ってしまった。それは俺のせいなのかもしれない。でも、だからこそ……友達でいたいと思うのは、やはり俺の我侭なのだろうか。

「……友達、ですか。仲間、とは言わないのですね」

「信じてもらえないかもしれないけど、あいつはそんなに悪い奴じゃないよ。でも、今は理由があって敵対してる……。いつかちゃんと話せたらいいと思うけど、今は皆には話せない」

俺が異世界の人間だ、何て事になればただでさえややこしい状況が

更に面倒になることうけあいだ。それに……誰かに知られてはならないっていうのが一応ルールだったしな。

まあ、今となつてはそんなルールをご丁寧を守る意味はないのかもしれないが、やはり異端である自分の存在を皆に明かす事は出来ればしないほうがいいと思う。これは多分、これからも変わらないだろう。

ゲルトは俺をじつと見つめ、それから眉を潜めて溜息を漏らした。そうして腕を組んでそっぽを向くと、月明かりに輝く海を長めながら、

「……貴方の事を、信じています。勿論、全てを容認したわけではありませんが……でも、貴方がリリアの為に戦った事実は消えないわたしは彼女と共にあり続けたい……そして、出来れば貴方も、リリアと共にあつて欲しい。だから今は、これ以上は問いません」

「ゲルト……。悪いな、なんか……」

「いえ、良いのです。言い辛い事の一つや二つ、誰にでもある事ですから。それでも貴方がリリアを裏切ったりしたら、その時は……」

「わかつてるよ。俺にとってあいつは特別だ。だから、最後まで一緒に居る……あいつを守る。約束する」

俺の言葉にゲルトは苦笑を浮かべていた。それから再び俺と向かい合い、正面で手を組んで何やら気恥ずかしそうに俺を見た。

「あの……それは良いのですが、わたしとの約束も忘れては居ませんよね？」

「……あ」

そういえばそうだった。何やらばたばたしていて失念していたが、ゲルトは魔女化の影響を受けている。外部から魔力を摂取しないとイケなかったはずだ。

だが今思い出すまでゲルトは普通にしていたように見えた。なんとなくか、慣れたのだろうか……？ 地下での例の魔獣との戦いの後なのだ、どちらにせよそろそろ摂取しておかないとやばいことになるのだろうか。

「あー、ごめんな気が利かなくて……。でも今度からは素直に言ってもらわないと、忙しいと時々忘れそうになるから……」

「わす……！？ 人が一生懸命我慢してるのに、貴方は何言ってるんですか！」

「え？ 我慢してたのか？」

「あ……。と、兎に角！ 早くしてください……。人が来てしまったら、その……嫌ですから」

もじもじしているゲルト。うん、確かに早めに済ませたほうがよさそうだ。こんな様子のゲルトを見たら……。うん、何か皆色々誤解しそうだ。

とりあえずゲルトの持っている魔剣でどつかざくりしないと駄目だな。なんて事を考えてじっと刃を見てみると、ゲルトは新たな提案を繰り出して来た。

「毎回貴方が自傷行為を繰り返すのを見ているところからも忍びないので……。今回から、方法を変えましょう」

「ん？ 別に回復魔法もあるんだし構わないけど……まあそつちが
気を使うのか。いいぜ、どうするんだ？」

「……口で説明させないでください。あの、とりあえずもう少し屈
んでもらえますか？ 貴方、無駄に背が高いんじゃないですか……」

無駄につてなんだ無駄につて。別にそんな……うーん、まあ確かに
背は高いほうなのかもしれないが……アクセルのほうがでかいよう
な。いや同じくらいか。

そんなどうでもいいことを考えながら砂浜に膝を着き、屈んでみせ
る。ゲルトは何故か俺の肩に手を伸ばし、それから瞳を潤ませなが
ら身体をそつと密着させた。

抱き合っているといつて全く間違いのない状況の中、ゲルトは耳元
で小さく何かを囁いた。直後、鋭い痛みが首筋に走る。まさかとは
思つて耳を済ませると、ゲルトは首に噛み付いて血を啜っているよ
うだった。

所謂吸血鬼式血液摂取方である……。うーん、なんというか。多分、
血を飲んでいる時の顔を見られたくないのだろう。その気持ちは確
かに判るし、この状態なら暴れ出した時拘束しやすい事もあり、考
えてみると意外と効率的である。

背中に爪を立てながら必死に色々な物を我慢して血を啜るゲルト。
その頭を撫でながら俺は目を閉じる。こんな事、本当はしたくない
だろうに……。そう思うと悲しい気持ちがまたぶり返してくる。だ
からといって、落ち込むわけにはいかないのだが。

血を飲んだ後もゲルトはしばらく呼吸を乱してぐったりしていた。
その身体を抱いたまま、砂浜の岩にもたれかかる。血を飲んだ後は
体内の呪いが一瞬活発化するらしく、痛みや衝動が激しくなるらし
い。俺は近くに居ても何もしてやれる事はないので、ただ黙つて身
体を支えていた。

しばらくすると呼吸も落ち着いてきたのか、びっしりと汗をかい

た状態でゲルトは身体を離した。瞳が月明かりを浴びてきらきら光っているようにも見えたが、それも時間の経過と共に落ち着いたようだった。

「……今回は、何とか……。暴れずには、済んだようです」

「大丈夫か？ 汗びっしょりだぞ」

「ええ……。慣れないと、辛いですね……。少し、休んでから……戻ります」

その場にずるずると座り込み、ゲルトはぐったりした様子で小さく息をしていた。どう見てもほうつておける状態ではなかったが……今、彼女の傍に人間が居るのは残酷でしかないのかもしれない。

「……じゃあ、先に戻ってるぞ」

「はい……。すぐ、戻りますから……。ありがとう、ナツル」

俯いたままのゲルトに背を向け、その場を後にする。こればかりは彼女にしかどうにもできない事……。多分今、自分自身を必死で抑えようと努力しているのだろう。

これからずっとあんな事を続けさせるわけにはいかない。幸い、グリーヴァという呪いを生み出した張本人が生存していたという吉報もあるのだ、まだ希望は全て潰えたわけではない。

首筋に手を当て、傷口をなぞる。だが、なんというか……。こっちも慣れないとなあ。

そんな事を考えながら家に戻ると、何やら全員集まって話し合いのようなものが始まっていた。寝ていて夕飯を食い逃したりリアが目をつるうるさせながら一人で自分用の料理を作る中、他のメンバー

は真剣な表情を浮かべている。

まあ、そりゃあそうだろう。今はそういう時期だ。皆でこれから
話を話し合わねばならない時期だろう。だからこれから大事な話を
始めなければならぬ……そう考えていた時だった。

「あ、そうだ。リリア、皆に言わなきゃならないことがあったので
すよ」

エプロンを付け、包丁を片手にリリアは振り返ってけろりとそんな
事を言う。何かと思って全員が視線を向けると、リリアはごく当た
り前と言った様子で、料理の片手間に言った。

「リリアの中には、実は魔王ロギアが同居しているんです」

全員黙り込む。何を言っているのかわからないといった様子だった。
俺もわからない。わからないぞ。

何やら一人で納得してにつこりと微笑み、リリアは料理を再開した。
トントンと小気味良いリズムの包丁の音が静かに響く中、全員同時
にテーブルをぶっ叩いて立ち上がった。

「……」 なんじゃそりゃあっ!？ 「……」

その中には勿論、俺も交じっていた。びっくりした様子で振り返る
リリアに全員の視線が突き刺さる。

こいつ、そんな……。そんな、大事な話を……。料理の片手間に、
するなあああああああああっ!……!!

波乱の予感が、俺の中に迫っていた……。

信じる心の日(3)(後書き)

「それいけ！ デイアノイア劇場Z」

＊六十部だ＊

リリア「ろつく！ じゅう！ ぶっ！！！！！」

ゲルト「……もう六十部ですか。早いものですね」

リリア「早すぎだよ！！ こんなペースで進めてて100部前に終わるのかな……」

ゲルト「うーん、当初の予定では100部行かないはずでしたからね」

リリア「うーん……まあ、なんとかなるでしょう」

ゲルト「そ、そうでしょうか……」

リリア「いやー、それにしても六十部かあ。こんなに長いのにここまで読んでくれる人が居るっていうのがすごいよね」

ゲルト「冷静に考えてみるとそうですね。態々ここまでお疲れ様でした」

リリア「お礼にゲルトちゃんが脱ぎます！」

ゲルト「え!？」

リリア「やだなあ、冗談だよ。あは、あはははは!」

ゲルト「……うん、今後どうなってしまうのでしょうかね」

リリア「明日はどっちだ!」

ゲルト「というわけで、今後とも宜しく御願します」

折れない心の日(1)

「ちょ、ちょっと待ってよ……！ あのアホのアクセルが執行者だったり、大聖堂の司祭がバケモノだったりで既にこっちは一杯一杯なのに……突然何トチ狂った事を言い出してんのよ、このへこたれ勇者は」

困惑した様子でベルヴェールがそう切り出すと、リリアはエプロン姿のままテーブルの傍に寄り、それから真剣な表情で皆を見回す。

「ごめんね。でも、冗談でも嘘でもないんだ。リリアは勇者で、同時に魔王なの。それはずっと前からそうで……だから、皆にはずっと黙ってた事になる」

「勇者で、魔王……？ リリア、貴様の言っている事はどういう事なのだ？ 正直、私たちには何がなんだか……」

「判らないだろうと思う。でも、ホントなんだ。それですごく大事な事だから、ここまで皆を巻き込んで……黙ってる訳には行かないでしょ？ ホントは皆だって気になってたんだよね？ どうしてリリアが追われてたのか……大聖堂に捕まったのか」

リリアはエプロンを外し、椅子にそっとかける。そうして顔を上げた彼女の表情は今まで見た事が無いほど無感情で、とても冷たく見えた。

その背筋がぞつとするような 多分それはそう、強い覚悟のような物だったのだろう。その瞳を前に全員押し黙ってしまった。そんな中、リリアは自らの胸に手を当てて言葉を続けた。

「どう説明すれば皆にわかってもらえるのか、自分でも良く判んない。だってリリアにもそれがどういう事なのか、さっぱりわかんないから。でも、それが原因で大聖堂に捕まったり、そこからフェンリルが連れ出したり……多分そういうの、これからも続くと思うんだ。リリアが勇者で、それでもって魔王である限りは、ずっと……だから隠しておくのはフェアじゃないよね？」

「……勇者のネーチャン……そんな」

「あ、でも勘違いしないでね？ 別にリリアはぜーんぜん、気にしてないんだ。だってもうそういうもんだから、しょうがないでしょ？ だからこれからはこの事実と向き合って生きて行くのだ！ そのためにはまずゴハンを食べて、元気を出すべきなのですよ！」

そう言うてにつこりとリリアは笑った。振り返り、俺たちに背を向けて包丁を手にして。それから……小さな声で呟いた。

「リリアは気にして居ないので、だから……皆は、リリアに付き合ってくれなくても大丈夫。あんまり安易な考えでリリアに手を貸さうとしないで。リリアに手を貸すという事は、世紀の大罪人であるロギアに手を貸すことに他ならないんだから」

それは、彼女なりの俺たちへの思い遣りだった。自分と共にあれば、皆を巻き込む事になる……それはどうしたって変わらない事実なのだ。リリアの中にロギアがいることも、誰が何を言ったって変わらない。大聖堂との戦いも、正直に言って厳しい。希望は多分……目に見えないくらい、小さいものだ。

だからこれ以上、俺たちを巻き込みたくない。それがこの小さな勇者の願いだった。俺たちは全員黙ってその言葉を聞き、静かにその場に立ち尽くしていた。

勿論俺は、そんな事を言われたからといってリリアから離れる積もりはないし、もともと事情を知っていただけに混乱も薄い。だが他の皆はどうだ？ 確かに俺たちは一度は一緒に戦場で戦った仲だ。でもそれだけと言ってしまうと、それだけだ。

勇者部隊なんてものも、肝心の勇者が裏切り者だといわれれば成立しない。だからもう、それだけの関係なのだ。他の皆にはそれぞれ今の生活があるし、将来の夢だってある。そういうものを知っているからこそ、リリアはそれを壊したくないと思っている。

どれだけそれが重く悲しい決意なのか。彼女は本気で考えているのだ。皆はきつと優しいから、それでも手助けしようとするだろう。だが、そんな安易な優しさでは、皆の死や未来まで背負えない。だからこの子は俺たちに選択を迫っているのだ。自分は何も気にしないフリをして。

本当は誰より苦しくて、誰より俺たちに傍に居てほしいはずなのに……。なんでもないフリ。また、フリだ。いつもそうだ。こいつはいつも、一人で我慢してる。

拳を握り締めた。俺一人だけでも、彼女を守らねばならないだろう。でも本音を言えばそれは難しい。大聖堂は預言^{マリシア}されし者を有している。あんなバケモノと一人でやり合えと言われたら、俺にはどうしようもない。

三人だから、勝つ事が出来た。リリアと二人ならどうだろうか？ そもそも彼女は大聖堂と戦うのだろうか？ わからない。今は、リリアの考えさえ、俺には……。

「ゲルトちゃんも、ドアの前で隠れてなくてもいいよ。言いた
い事、あるでしょ……？ 嘘、ついてたんだもん。大事な友達なの
に……そうでしょ？」

リリアの呼びかけが終わった後、少しの時間を置いて扉はゆっくりと開かれた。多分ゲルトは聞いていたのだ。あの後、俺に遅れて戻

つてきて……。

でも、入ってこれなかった。リリアの話が余りにも突然すぎて。そして、重大すぎて……。ゲルトは部屋に入って、それから黙ってリリアを見つめた。その表情は……筆舌に尽くしがたい。

二人はそうしてずっと見詰め合っていた。リリアは寂しげに微笑み、それから努めて明るく言い放つ。

「ごめんね、ゲルトちゃん。一緒に勇者　なれなくなっちゃった」

「……………リリア」

「ごめんね……。ずっとゲルトちゃんを守るって言ったのに……。約束したのに、ごめんね。リリアは、ゲルトちゃんの隣にいていいような人じゃなかったんだよ」

「そんな……！　そんな事は……っ！」

「あるんだよ……。リリアは魔王だから……。だから、ゲルトちゃんは、リリアとは一緒に居られないよ。大聖堂だって、もうリリアの事は判ってるはず。だからもう、勇者はゲルトちゃんて決まりなの」

「……………そんな……そんなのって……」

リリアにとっても、ゲルトにとってもこの事実は余りにも重過ぎる。二人にとって、お互いの存在こそがどんなに辛くとも未来を生きる糧になる。夢があるから生きられる。呪いがその身を蝕もうと、魔王という存在に悩まされようと、二人はお互いに将来一緒に並べる事を夢見て頑張ってきたのだ。だからこそ前に進む事が出来た。でもその夢は今、この上ない困難の前にあった。

それは、リリアだけの問題ではない。リリアの傍にいたいと願って努力していたゲルトの心も平然と押し折ってしまうような、それだけの威力を持つ。呪いに苛まれても立っていられるのは、リリアのため。だからそれがなくなれば、二人とも同時に抛り所ををなくしてしまうのだ。

勿論リリアだってそれはわかっていただろう。それでも黙って騙し騙しに先延ばしにするよりもマシだと考えたのだろう。そりゃそうだ。時間をかければかけるほど　　とりかえしは付かないものになる。

「ゲルトちゃんに謝らなきゃいけない事、もう一つあるんだ」

立ち尽くすゲルトに、リリアは苦笑しながら言い放つ。それは、彼女なりの覚悟の証だった。

「それでもリリア、死にたくないんだ。まだ諦めたくないんだ。だから、ゲルトちゃんに捕まってあげる事は出来ない。ホントはそうするのが一番いいんだけど……それで、ゲルトちゃんが勇者になればいいんだけど……でも、それは嫌なんだ。だって、こんなわけわかんない状態で、負けっぱなしでリタイアなんて絶対にしたくないから」

励まし、だったのだろうか。自分は諦めない。だから、君も諦めないで欲しい……。多分、そんな意味が込められていたのだろう。リリアはそれでいてまた笑う。辛い場面なのに、笑うのだ。それを前に、ゲルトは何やらなんとも言えない表情を浮かべ、それから拳をわなわなと振るわせた。

「……………るす」

「ほえ？」

「……ぶつ殺す……。大聖堂も、元老院も……。ふ、ふふふふ……。ふふふふふふふふふ……」

ゲルトは何やら俯いたまま肩を震わせて低く笑い、物騒な事を呟いていらつしやる……。無意識の内に解放されている魔力がどろどろと渦巻き、全員完全に引いてしまっていた。

慌てた様子でリリアがあたふたしながら俺に助けを求めてくるが、俺にだってどうしようもない。多分これは単純に『キレた』んだろうなあ……。

「心配しないで下さい、リリア。大聖堂なんて 勇者なんてクソくらえです」

そう一言吐き捨てるように呟き、ゲルトは背負った魔剣に手を伸ばしながら振り返り、スタスタと扉に向かって歩いていく。

「ちょ、ちょっと待てゲルト！ どこに行くつもりだ！？」

「わかりきった事を訊ねないで下さい、ナツル。勿論……大聖堂をぶつ潰しに行きます……」

「いや、それは流石にちょっと待てっ！？」

そりゃそうだろう。だってお前……滅茶苦茶泣いてるじゃねえか。

「ああもつ、そんな号泣すんなよ……。大丈夫か……？」

「ひぐ……。っ！ えぐっ！ うわあああんっ！！」

ゲルトは部屋の隅っこで膝を抱えながら大号泣していた。まあ、そりやそうなるだろうけど……。まるで完全に子供に戻ってしまったかのように、それこそ惜しげもなくわんわん泣きじゃくっている。この世の終わりが来たみたいだ……。

確かにゲルトにとって、リリアの事は自分以上に大事なんだろう。今までの関係性もあるし、なんというか　そう、二人とも自分自身の幸せを相手に重ねているところがあるからな。相手が辛い時、相手以上に辛くなるんだ。こいつらが泣いてる時って、思えば自分の事より……。

泣き出してしまったゲルトにどんな声をかければいいのかわからないのか、リリアは手を伸ばしかけては引っ込め、ばつの悪そうな顔をしていた。しかし話を終えるわけにはいかない。ゲルトが完全にぶっ壊れてしまっていたとしても、話は続けねば。

「とにかく、一人で大聖堂に突っ込むとかそういうことは止せ……」

「だつて……。！　だつてえっ！！」

「わかったから、わかったから……。おい、誰かこいつ部屋まで連れてってやれ……」

こんな状態では話し合いには参加出来る訳もないだろう。ベルヴェールに付き添ってもらい、ゲルトは以前引きこもっていた二階の部屋に連れて行かれる事になった。

さて、これで話し合いが再開されるだろう……そう考えていたのだが、見ればなんだか全員もう混乱のようなものも、怒りや嘆きも消えてしまったかのようにすっきりした顔をしていた。

「どうしたんだ皆？ 何そんな、改まった顔してんだ？」

「いやさ、ゲルトのネーチャンがおいらたちの言いたい事全部言ってくれたから」

「あそこまで盛大に泣き喚かれれば……こっちは逆に冷静になる」

「え？ あれ？ 皆、リリアの話ちゃんと聞いてたですか？」

「聞いていたよ、リリア・ライトフィールド。その上でボクたちの答えも、君ならば判っていたんじゃないのかい？」

アイオーンの余裕の表情を見てリリアは息を呑んだ。そうしてそつと視線を反らし、唇を噛み締める。

「……これから、リリアは大聖堂と戦うつもりです。それでも構わないんですか？」

「当然だ！ 我々騎士の役割は、女王マリアを守る事にあるのだからな。大聖堂の陰謀がわかった以上、それを阻止する人間は必要だろう」

仲間たちは皆、当たり前のようにリリアに笑いかけていた。多分その事実が嬉しすぎて、リリアはどんな顔をすればいいのかわからなかったのだろう。隣に立つ俺を見上げ、目を潤ませながら問い掛けてくる。だから俺はそれに答えて、額を小突いた。

「こういつ時こそ笑えよ」

「う……。は、はい」

照れくさそうに、リリアは眉を潜めて笑った。その笑顔は久しぶりに見るリリアの笑い顔のような気がした。だが、だからといって問題は解決しない。

いつまでもここに潜伏しているわけにも行かないし、一体何をどうすればこの野望を阻止できるのかも全くの謎である。問題はここからだ。俺たちは今後、どう動くべきか。

それに皆はこういつてくれてはいるが、本当にそれでいいのかもわからない。皆気持ちは一緒なんだ。でも、何とかしたいと思っではいても、その解決手段は見つからない。先の見通しが悪いからこそ、リリアも迷っている。もし確実に大聖堂をぶっ潰せる手段があれば、声を大にして皆を仲間と呼べるのに……。

「そういう事なら、一度ディアノイアに戻ってみねえか？」

今までずっと黙っていたソウルがそんな提案をした。テーブルの上に両足をどっかりと投げ出した横柄な姿勢のまま、啞えた爪楊枝をびこびこ揺らしながら。

しかしその提案は正直理解に苦しむ。シャングリラはオルヴェンブルムとの交通の利便も良く、この間の学園祭の時だって執行者が大量配備されていた場所だ。その上学園長であるアルセリアは大聖堂ナ・イラ騎士なのだ。大聖堂のマリシアと通じているかもしれない。

「ま、お前らの考えてる事は大体わかるがな、学園長なら恐らく少しはいい案を提案してくれると思うぜ」

「その学園長は大聖堂騎士でしょう？ 先生、わかってるんですか？」

「わかってるって！ でもあの人は基本的に生徒思いだし、シャングリラの統治は全てあの人が一任されてる。あの街は実際、大聖堂も聖騎士団も及ぶ権利を持たない独立した自治都市なんだよ。それにあれだ、あそこにはヴァルカンの爺さんも居るしな」

そういえば確かそうだったな。ヴァルカン爺さんはそういえばどうして学園に呼び出されていたのか。呼び出したのは、誰なのか……。そんな事を考えていると、アイオーンも腕を組みながらソウルに同意する。

「アルセリアは少なくとも大聖堂騎士の中では相当異端だからね。彼女はあの塔からは基本的に一步も外には出ないし、彼女には仮に元老院だとしても関与できない、ラ・フィリアの絶対管理者だ。それに彼女は夏流の事情にも詳しいだろうしね」

「……？ 師匠の事情？」

リリアの丸っこい目に見つめられ、思わずたじろぐ。そういえばそうだった。こんな状況になっちまってすっかり失念していたが、あの学園長は俺の事情を知っていた、ナナシの仲間でもある。って、そうか……。ナナシの仲間なら、色々と聞きたい事もある。アルセリア学園長、か……。確かに会って話を聞くだけの価値はあるのかもしれない。

だが、本当に信用出来るだろうか？ 確かにあの人は大聖堂と通じているとかそういう感じではないが……。ソウルやアイオーンがそこまで彼女を信じる理由はどこにあるのか。まあヴァルカン爺さんと合流して相談に乗ってもらえるだけでも意味はあるか。あれでも先

代勇者の親なわけで。

「どうするか……。シャングリラに戻る……。確かにまあ、ここから行くあてもないんだが」

「アルセリアは信頼の置ける人物だつて事は保障するぜ。あいつは前の戦争の時から色々世話になった人だしな」

「え？ あの人、前の勇者の仲間だつたんですか？」

「仲間というわけじゃあねえが、まあ色々とな。あるだろ、縁つてやつがよ。どうする？ あそこなら俺たちに対する情報も入手しやすいし、動くならそれからでも問題ないだろ？ どうせあそこは四方に向かつて列車も出てるんだ、足もいいぜ」

「……わかりました。じゃあ、リリアは一度シャングリラに戻ります」

リリアが戻るといふのならばついていっただけだが、確かにリリアがそれを望むのも判る。シャングリラまで戻れば、やっぱり皆を巻き込まずに済む方法も　つまり、そこで皆と別れるって手もあるんだろうし。

色々と保留にしつつ、進展が望めるのならばそれに越した事はないだろう。判断を下してしまつにはまだ早い、なんとも言えない微妙な状況だ。ここは焦らずに、というのも一つの手だ。

一先ずはシャングリラを目指す事で決定した。戻るにせよ進むにせよ、それからだ。それならゲルトも付き添って面倒見てるベルヴェールも文句は言わないだろう。

「そうと決まれば、ちつとこの街で準備なり修行なりするでしょう

ぜ！ シャングリラに戻るのは、もう少し時間を空けてからのほうがいいだろ？」

リアの追っ手は完全にフェンリルが撒いたし、俺たちは城から長距離の空間転移を食らったんだ。追っ手もしばらくは追いつきようもないだろう。遠くへ逃げたと向こうが判断すれば、シャングリラもオルヴェンブルムも手薄になる……。特にこんな海沿いの田舎町なんてのは、捜査の手も伸び難いだろう。

いわば勇者たちの秘密基地のような場所であるここは、穴場といって過言ではない。しばしの時間を置き、それからシャングリラへ戻る……。それで一先ずは今後の行動は決定した。

その間に準備を整え、戦いなり逃亡なりに備えなければならない。そんなわけでみんなくたくたに疲れていたその日の晩はお開きとなり、眠りについて翌朝……。

久しぶりにゆっくり休めると思ってごろごろしていたベッドから強引に引っ張り出され、早朝だというのに俺は何故か砂浜に立っていた。正面には既に一人で盛り上がりつつ腹筋を鍛えているソウルの姿が……。

「……………先生、いきなりなんですか？ 今何時だと思ってるんですか？」

「早朝四時半だ！ それがどうかしたのか？」

どうかしねえ理由があるなら逆に教えて欲しい。

「何ボサつとしてんだ！ お前もガンガン腹筋を鍛えろ！ もっと腹筋を割るんだよ！！」

「……………起き抜けに腹筋は厳しいんですが」

「何甘ったれた事言っただ！？ 今日からお前は俺がマンツーマンでみっちり鍛えてやる！ さあ、まずは筋トレからだ！ ふんっ！ ふんっ！！」

えー。何がどうなったらそうなるの……という俺の疑問も受け付けず、行き成り何故かまだ日も出て居ないような薄暗い砂浜で腹筋を鍛える俺。そんな事をしている内に眠気はすっかりどこかへすっ飛んでしまったが、流石に起きたばかりでこれは辛い……。

様々な筋力トレーニングを数百セットこなす頃には既に体力も大幅に減少し、日も昇ってしまっていた。リアルに二時間くらいそんなことをしていただろうか。徐に立ち上がったソウルは汗をかきながら白い歯を見せて言った。

「よし、準備運動終わり！」

「準備運動！？」

「なんだなんだ、いきなり稽古に入るつもりだったのかこのせつかちめ！ トレーニングの前にはまず入念な準備運動が必須だ。平均二時間くらいは準備運動に費やせ」

「準備運動……？ 俺、既にクタクタなんですけど……」

「馬鹿野郎っ！！ お前はそれでも男か！？ 男なら筋肉を鍛えろ！ そして魂を鍛えるんだ！ 体力が足りないのならば気合で補え！ さあ、立て！ 立つんだジョオオオッ！！」

誰だそいつ！？ ていうか、なんだこいつの朝っぱらからのこのテンション……。まさか毎日このテンションでトレーニングしてるん

じゃないだろうな……。

何はともあれここからが訓練開始だという。残念な事にソウルに付き合っただけトレーニングをみっちりやりこんだせいで疲れてはいるが確かに身体はばっちり動く。既に精神的にも臨戦態勢と言ったところか。武器はお互いに装備していないが、砂浜で拳を構えて向かい合う。

「まずは力を見てやろう。さあ、どこからでもかかってこい!!」

そう言っただけでソウルは構える。さて、どうしたものか。こいつ元勇者の仲間なんだよな……そして現役の学園戦闘学科教師。成る程、確かに伊達ではない。張り詰めている魔力の感覚は相当戦闘慣れした印象を受けるし、どこから切り込めばいいのか……隙が見当たらない。

何よりもコイツの『絶対負ける事はない』という自己暗示にも似た強い視線……。一体何がどうなっただけでこんな自信が持てるんだ？ それにさらに魔力を安定させているのだろうか。

まあ、だからといって俺だって今まで遊んでいたわけじゃないんだ。フェンリルとはあれから一度も戦っては居ないが、やつを倒す事を目的として鍛錬を重ねてきた。同じく勇者の仲間のこいつに対して自分の力が試せるのなら……！

「本気でやっていいんですね？」

「おう、どんとこい。先生が受け止めてやるぞあつ!!」

「……だつたら、遠慮なく！ ふっ!!」

とりあえず挨拶代わりに魔力を込めた蹴りを放つ。砂を巻き上げ、疾風と共に確かな手ごたえを感じた。首筋を狙った列記とした戦闘

攻撃……しかし、それをソウルは片手で受け止めていた。

あれだけの手ごたえがあったのに、まるで無傷だ。頑丈すぎる……。思わず足を引いて体勢を立て直すと、ソウルは首をこきこき鳴らしながら腕をまわす。

「ん？ どうした、本気で来ていいんだぞ？ まさかそんな程度って事はないんだろ？」

「……本気で蹴り飛ばしたつもりだったんですけどね。あんたただけ頑丈なんだ」

「そりゃ毎日筋肉を鍛えているからな。筋肉はいいぞ。筋肉は全てだ」

何言ってるのかわからん上に馬鹿としか思えないが、こいつ　やっぱり強いな。

「今度は俺から行くぞ。組み手形式で少し腕を見てやる。隙があれば打ち返して来い！　行くぞっ！！」

と言って踏み込んだ瞬間には拳が眼前に迫っていた。まるで腕が伸びてきたかのように見えるほど、一瞬でここまで飛んできやがった。慌てて腕でガードすると、何も武器をつけて居ないただの拳のはずなのに鉄槌でぶん殴られたかのような衝撃が走った。

腕が折れる　そう感じて衝撃を受け流す。まともに受けたら一発でKOされそうな威力のただのパンチ……。反撃なんてとんでもない。もつと魔力を練って防御を固めなければ……。

「俺式奥義！　熱血パンチ！」

「ぐっ!？」

ふざけた叫びで次々に拳を繰り出すソウル。何とかそれを魔力を込めた拳で捌き、反撃の隙を探す。しかし防御から反撃に持ち込めるほど、ソウルの攻撃は遅くはない。

腕の動作にばかり気を取られていると、何となくやつの放った蹴りが脇腹に直撃した。思い切り何かがへし折れる嫌な音が鳴り響き、口の中に血が逆流してきた。

「あ、やべ」

というのは教師の言葉とは思えない。一応ガードしたのに、魔力障壁の形成が間に合わなかった……。右腕ごと右あばら完全に何個か折れたな―とか考えていると、そのまま衝撃をモロに食らって激しくぶっ飛んだ。

砂浜を転がりまわり、海の中へ……。比較的浅い所で何とか立ち上がると、ソウルが一息に瞬間移動して目の前に立っていた。

「おお、ついうっかり決まっちゃったぜ。だがあのくらいのフェイントは見切れないと話にならないぜ? ん?」

「……………っつうっつうっ!! あんた……っ! いっ! 何考えてんだ! かんっぺきに右腕折れたぞ!？」

なんか変な方向にぶらぶらしてるじゃねえか! 悲惨なことになってんぞ!? とか思っていたら、徐にソウルは俺の折れた腕を掴み、ごきりとはめ込むようにして強引にくつつけた。

勿論信じられないほどの痛みが走る。一人で声にならない声を上げていると、余計な骨が折れる音がした。そんな強引にくつつけようとしてくつつくわきゃねえだろ!

「おかしいな、俺はこれで直るんだが」

「お前と人間である俺と一緒にすんじゃねえ馬鹿っ！！　ぐあああああっ！？　もうあきらめて放せて！！　回復魔法かけてもらうからあああああっ！！」

何故俺は朝っぱらから筋トレしてずぶ濡れになって、腕折れてんだ……？　これのどこが特訓なんだろう　。　これで俺、強くなれるのか？

とりあえず一つ言えることは……　やっぱり元勇者の仲間、恐るべしって事だけだ　。

こうして俺の特訓はその日丸一日続いたのであった……。　続く。

折れない心の日（２）

それから、俺たちの短い旅が始まった。

列車を使っても時間のかかる道程を、人目を避けるために徒歩で行く。それには何日も時間が必要で、シャングリラの修行に引き続き俺はソウルの特訓を受け続けた。

自分で言うのもなんだが、俺は自分自身の戦闘能力にそれなりの自信があった。勿論、ソウルやフェンリルといった連中に敵うとは思って居ない。だが基礎的な部分は毎日怠らずに鍛えてきたという自信がある。

そもそも、現実の世界でだって師範にさんざしごかれたんだ、元々それなりに武術には心得があった。だが、ソウルとの特訓は俺に新しい事をたくさん気づかせてくれた。

自分自身の強さ、力の本質、戦う術、そして何よりも自分よりも数段格上との本気の組み手は実戦に匹敵する密度で休息に俺の力を引き上げる。

現実では怪我をしてしまったら直ぐには治らない。だからどうしても手加減したり、休んだりしなきゃいけない。だがこつちの世界でなら多少無理な鍛え方も出来る。あいにく魔法が使える仲間は何人もいるのだ、疲労もダメージも直ぐに回復してしまうから休む間などない。

皆がノンビリ歩いている間も、俺たちは少し離れた場所で組み手をしながら移動していた。これがまた奇抜な光景なのだが、戦闘中に皆に置いていかれないように気を配りながら戦っていると、戦闘のペースやリズムのようなものが見えてくるのだ。

具体的にソウルに教わった事はそう多くはなかったが、単純に戦闘を繰り返すというこの一瞬一瞬が俺にとっては何よりも必要な経験だ。戦えば戦うほどわかってくる。ソウルは、強い。

「お前はそろそろ武器を変えた方がいいな」

休憩がてら、アイオーンに傷を治してもらいながら歩いているとソウルは水を飲みながらそんな事を口にした。

こっちはもうくたくだっていうのに、ソウルはいつでも余裕の表情だ。まるで相手になっっていないのはわかってのことだが、何だか悔しい。筋肉バカに負けるのはちよつとな……。

「おら、聞いてるか？ お前の武器……あー、なんだっけ？ まあいいや、とにかくこのナツクルは装備品としてはお遊び程度の能力しか持たない。そりやお前が魔力操作がヘタクソなのを補う事しかないからだろ？ お前はそろそろ自分の力をきちんと自分でコントロールして、武器はお前の武器になるものを選んだほうがいい」

「……生身でも魔力をコントロール、か」

確かにここ数日素手での組み手を繰り返し、それにもだいぶ慣れたと思うが神威双対を装備している時ほど上手くやれている自信はない。そう考えると以下にこのナツクルが俺の力を支えていてくれたのか……。

戦う度に無茶な使い方をして毎度壊しそうになってるけど、本当に大事な思いいれのあるナツクルだ。出来ればコイツを生かしてやりたい……そう思っただけでメリーベルを見ると、溜息を漏らしながら片目を瞑っていた。

「……作れと？」

「……だ、だめか？」

「……はあ。まあ、いいよ……。神威双対をベースに改造を施

せばいいんでしょう？ どうせリミッターを外すだけみたいなもんだし……」

「すまん！ 恩に着るっ！！」

両手を合わせて頭を下げる。早速改造の考案をするらしくナツクルを手に一人でぶつぶついながら歩き出すメリーベル。アイオンの回復魔法で傷が完治すると、直ぐに俺は皆から離れ始めた。

ふと、皆を挟んで反対側で剣と剣が交わる甲高い音が聞こえてくるので目をやる。そこでは俺のほかにももう一組、組み手形式で特訓をしているヤツがいた。黒白の大剣を振り回し、大地とかをぶつとばしながら戦っているのはリリアとゲルトだ。

二人の進んできた道にはつきりと戦闘の痕が残ってしまっているのだが、いいんだろうかこれは……。まあ、こんな線路からも大きく外れた広大な大地の上、あの痕跡を発見するのは難しいのだろうが。

「もう少し手加減するように言っただろうがいいかな……」

二人とも疲れるとぼったり倒れこみ、その度にマルドゥークが回復魔法をかけて騎士二人が背負って歩く。そんな事を繰り返しているのを見てると自分の訓練が生ぬるい気がしてくる……。

まあ、こっちは魔力コントロールが第一なんだ。戦闘中でも柔軟にかつ迅速にコントロールできるようにしなければ意味がない。ソウルに教わった術も使えるようにならないと。

「ほらほら、さっさと再開するぞ！ シヤングリラに着くまでにモノにしねえとな！」

「……はいはい、わかってますよ……。筋肉バカだな、ホント」

俺が戦って俺が守らなきゃならないんだ。俺が秋斗を倒さなきゃいけないんだ。
何よりそう、負けたくないのならば。もっともっと、強くならなければ。

折れない心の日（２）

「やっと見えて来たぜえっ！！ シャングリラ……帰って来たなあ！」

というブレイド君のはしゃぐ声で俺たちはようやく目的地に辿り着いた事を知った。しかしその喜びと安心は直ぐに悪い予感に切り替わる事になった。

「シャングリラが……燃えてる？」

ぼんやりとしたその眩きが誰の物だったのかはわからない。ただ、その言葉の意味を俺は目の当たりにしていた。

シャングリラを取り囲む大聖堂の聖堂騎士団……。砲台がずらりと設置され、絶え間なく攻撃が続いている。砲弾はどうやらシャングリラの結界を攻撃しているようで、騎士たちは出入り口から次々と中に押し寄せていた。

「な……！？ どういう事だ！？ なぜ大聖堂がシャングリラに攻め込んでいる！？」

「ま、マル様あれ……！」

見れば出入り口を固めているのは聖堂騎士ではなく聖騎士団のようだった。白い甲冑の聖騎士団と紅い甲冑の聖堂騎士団、本来ならば同じく国を守るはずにある二つの騎士団がシャングリラの門の前で争っているではないか。

ますますわけがわからなくなってくる。ここ数日の間に一体何があったというのか。戸惑う俺たちの中、リリアがリインフォースを担いで前に出た。

「聖堂騎士団を襲撃します。聖騎士団はシャングリラを守ろうとしてる……助けなきゃ」

「……そうだな。シャングリラは学園があるとは言えたあの町だ。住人みんな戦えるわけじゃない……なのに、容赦なくバンバン砲弾ぶちこみやがって……。行くぞリリア、連中を蹴散らしてやる」

気持ちは全員同じだった。全員が全員武器を構え、リリアを見る。先頭に立った俺とリリアはうなずき合い、リリアの掲げる聖剣の輝きに目をやる。

「
行くよ！
ブレイフクラン
勇者部隊……出撃！！」

合図と共に駆け出すリリアに続き、皆も敵目掛けて走っていく。そんな中、ソウルが俺を呼び止めて二人で足を止めた。

「目指すのはディアノイアだ。だが、そこに行くまでに……」

「わかってる。出来るだけ多くの人を助けるんだ」

「それでいい！　今回は俺も付いてるんだ、任せておけ！」

胸板を叩いて笑うソウルに溜息を漏らしながら同時に走り出す。すでに門周辺ではリリアたちが戦っていた。突然現れた俺たちに聖騎士団も戸惑っている様子だったが、共に聖堂騎士団と戦う存在だと気づき、魔法などで援護してくれた。

何だかんだ言っても俺たちは強い。あつという間に門を制圧し、聖堂騎士団のムカツク砲台を破壊して聖騎士団と合流した。

「き、君たちは一体……！？　って、マルドゥーク副団長！？　何故貴方がここに！？」

「事情を訊きたいのはこちらと同じだ！　一体何が起きている！？　何故大聖堂と戦っている！？」

マルドゥークと聖騎士がそんなやり取りをしていると、街中から悲鳴が響き渡った。いち早くそれに反応したリリアが市街地に走っていく。

「何人かリリアについて行ってやれ！　ゲルト、それから……ベルヴェール！　リリアと合流して市街地を奪い返せ！」

「わかりました！」

二人は命令を受けてリリアのあとを追って門を潜っていく。俺たちもぐずぐずしている場合ではない。

「マルドゥークは聖騎士団を纏めてくれ！　この乱戦じゃ他がどうなってるかもわからん……！　ブレイドはマルドゥークと一緒に防衛戦だ。壁を出すのは得意だろ？」

必然的に残りのメンバーは俺と一緒に内部に入る事になる。市街地

の奪還もあるが、状況を把握しないことにはどうにもならない。ブレイド、マルドゥークと分かれ、門を潜った所で学園の生徒たちが倒れているが見えた。

駆け寄ると、どうやら怪我をしているようだが命に別状はないらしい。しかし辺りにはもう手遅れになっている生徒や聖騎士の死体が転がっている。民間人も生徒も騎士も無差別に攻撃を繰り返しているんだ……。

「大丈夫か？」

「……ああ、平気だ。さっき勇者が助けてくれたから……。それより、学園に行ってくれ！ あそこに住人を避難させてるけど、どれくらいもつか……」

腕に傷を負っている剣士の少年は都市の中心部を指差す。成る程、確かに激戦区は中央　ディアノイアのようだ。彼の仲間らしき杖を持った魔術師の少女が駆け寄ってきて傷を見ながら俺に言った。

「あの……勇者部隊、ですよね？」
ブレイブ克蘭

「あ、ああ」

「よかった……。やっぱり来てくれた。みんな、貴方達の帰りを待ってたんです！ 早く行ってあげてください！ 学園内には、まだ戦えない生徒も多いんです！」

二人だって危険な状況だろうに、仲間のために早く行けと言う。確かにこの外側はブレイドとマルドゥークが確保している……。そう危険な場所という事もないだろうが。

だが、ほうつておくわけにも行くまい。背後で待機しているメンバ

―に先に行くように促すと、怪我をしている少年の傍に屈む。

「ここまで良く頑張ったな……。遅れて悪かった。一体何があったんだ？」

「はい、実は――」

そうして魔術師が語ってくれたのはにわかには信じられない事実の連続だった。

大聖堂は昨日シャングリラへと進軍し、ディアノイアとその生徒含む全ての人間に傘下に入るように命令したという。学園長アルセリアはその命令を跳ね除け、結果連中は民間人が残っているにも関わらず攻撃を開始した。

「彼らの狙いは、学園施設と学園が抱える生徒だったようなんですが……。結局、事情も良く判らないまま巻き込まれて」

「そうか……。じゃあ皆、何か命令を受けて戦ったとかそういうわけじゃないんだな」

「はい。みんな自分の身と、友達と……。思い出のあるこの町を守ろうとして自主的に。けど、そのせいで統率が取れていなくて……」

学園長は何をしているんだ？ ソウルとルーファウス、二名も教師が離脱しているのも確かに痛手ではあるうが、指揮を執れる人間も居るはずだ。アルセリア自身が指揮をとってもいいわけで……。それさえもままならないほどの乱戦なのか……。回復が終わって立ち上がった剣士の少年の様子を見て俺も立ち上がる。

「ナツルさん、俺見たんだけど……」

「ん？」

「なんか、わけわかんねーけど……生徒同士で戦ってる奴らがいるんだ。大聖堂側に付いたやつも少なくないみたいで……。だからみんなお互いの仲間、個人のパーティー単位でないと動けてないんだ」

成る程、それで指揮系統が滅茶苦茶なんだ。数名のPTでしか行動できないから、誰が誰にどう指揮を執ればいいのかも明確じゃないんだ。

いや、となるともつと拙い状況が想定出来る。あのリリアのことだ、生徒に襲われたら反撃なんて絶対にしないぞ……。

「大体わかった、ありがとう。二人とも一緒に中央区に避難するか？」

「いえ、私たちは……。はぐれてしまった仲間が居るんです。皆一緒に揃ってから、学園に避難しますから」

「そうか……わかった。気をつけてな」

市街地へ走っていく二人を見送り、俺も仲間の後を追う。どうせ全員目指している場所はシャングリラの中心部。巨大な塔、ラ・フィリアを取り囲むディアノイアのはずだ。

坂道を登って学園に近づけば近づくほど、悲惨すぎる戦況が露になってくる。敵の死体も味方の死体も民間人の死体も、容赦なく道端にバタバタ転がっている。魔法戦闘の痕跡が大地を吹き飛ばし建造物を倒壊させ街中で火の手と黒煙が昇っていた。

ついこの間まで学園祭なんて楽しげな事をやっていたのに、どうしてこうなってしまうのか……。大聖堂は一体どういうつもりなんだ

？ 何が狙いでこんなことをする？

中央部に近づくと、戦闘の音が激しくなってきた。坂道を昇りきった先、ディアノイアの門の前で見たのは信じられない惨状だった。生徒同士が剣をぶつけ合い、魔法が激しく飛び交っている。聖堂騎士と聖騎士もお互いに部隊を組織して激突し、夥しい量の死傷者が発生していた。

その中心部で戦闘を中断させようとリリアたちが戦っているのが見える。しかし俺たちだけでは全く手が足りない。見ればディアノイアを取り囲むこの門全ての前で同じ光景が繰り広げられているのだから。

「リリア！」

背後からリリアに襲いかかろうとしていた聖堂騎士を蹴り倒し、その背中で拳を構える。俺の存在に気づいたリリアは背中合わせに剣を構え、一瞬振り返って言った。

「師匠、これは何がどうなって……っ！？ どうして生徒同士で戦ってるんですか！？」

「わからない……！ でも止めさせなくちゃ！」

二人で頷き合い、周囲の戦闘を中断させていく。戦う意思がない人間は学園の中に避難させればいいのだが、襲い掛かってくる聖堂騎士や生徒はどうにもならない。

かといって同じ学園の生徒を攻撃するのには勿論ためらいがある。聖堂騎士の連中はぶっ飛ばしてやっても問題ないんだが……。いや、贅沢は言っていられないか。

「ナツル！！ 数が多すぎる！ 適当なところで中に逃げ込むぞ！」

「！」

ソウルの叫び声が聞こえた。他のメンバーも承知したのか、全員戦いながら門に向かって移動して行く。門の内側からは魔法や弓で敵を牽制しながら呼んでくれている生徒の姿があり、俺はいつまでも戦っているリリアの手を引いてそこに飛び込んだ。

背後で一斉に魔法戦闘が始まった音が聞こえる中、頭を低くして中庭を進む。そこは既に一種の野戦病院になっており、すぐ傍が戦場だというのに溢れ返る負傷者を手当てする生徒の姿で一杯だった。

「ひどい……。どうしてこんなことを……」

「ぐずぐずしてる暇はないな……。こっちからも少し打って出ないと持ちこたえられないぞ。ブレイドとマルドゥークもまだ門で戦っているだろうし、ほっとくわけにはいかない」

仲間を集合させ、PTの様子を再確認する。特に全員これといって目立つ怪我は無く、幸い五体満足であった。そんな中一人だけ傷を負っていたソウルが俺の前に立ち、深々と溜息を漏らす。

「……どうやらどうにもならない状況らしいな。俺は外に出て市街地で逃げ遅れた連中をどうにかしてみる」

「一人で、ですか？」

「単独行動は得意分野だからな。それよりお前らはここの生徒と協力して戦うんだ。それと……ナツル。学園長と接触して状況を確認しろ。お前がリーダーだ、しっかり頼むぜ」

仕方が無い。大分予定とは異なる状況になってしまったが、まずはアルセリアと接触する事から始めよう。門を飛び越えて外に突っ込んで行くソウルを見送り、振り返って仲間には指示を出す。

「とりあえずは門周辺を奪い返すぞ。アルセリアを探しに行くのは……リリア、俺とお前だ」

リリアは目をぱちくりさせていた。確かにただアルセリアを校内で探しに行くだけならばリリアも一緒に来させる必要はないだろう。だが、この子は……敵になった生徒まで救おうとする。だから、それでは危なすぎる。

「他の皆は外で戦闘だ。ヤバくなったら逃げていい。統率は……アイオーン、頼めるか？」

「いや、ボクもアルセリアに会いに行くよ。色々と野暮用もあるからね。指揮はゲルトあたりに頼んでくれ」

そう言つてアイオーンは俺の隣に並んだ。学園内部の探索に三人……多すぎる気もするが、アルセリアの話を聞いて戻ってくるだけだし、ここは守るだけだ。だったら残りのメンバーだけでもなんとかなるだろう。

心配そうな顔でゲルトを見つめるリリア。そんな視線を受けて少女は魔剣を片手に自らの胸を軽く叩いて微笑んだ。

「こちらは任せてください。他の生徒の協力を募って切り込みますから」

「ゲルトちゃん……気をつけてね？ それから、あの……」

「大丈夫です。出来る限り、生徒は傷つけませんから」

それは難しい注文だとリリアもわかっているのだろう。だが相手を傷付ける事を恐れて手出しが出来なくなるリリアより、ある程度ダメージを与えて行動不能にする意思があるだけゲルトの方がいくらかマシだ。

メリーベル、ベルヴェール、ゲルトとその場で別れ、学園の内部に走っていく。中に入って直ぐにエントランスに並んでいるメイドたちが全部破壊されている事に気づく。彼女たちもどうやら武器を手にして戦ったようだが、ここに残骸が落ちているとなると既に敵には侵入されているのか？

真上を見上げると頭上に聳える螺旋階段が目につく。アルセリアがいる場所はいつも決まってあの学園長室。今は塔を上るしかない。

三人で階段を駆け上がり、学園長室の扉を開け放つ。するとそこには無残にも大量に転がる聖堂騎士や執行者、はたまたエントランスに転がるメイドたちのような機械人形たちの死体が山のように転がっていた。その地獄のような景色の中、鎧を返り血に染めて学園長は巨大すぎる剣を携えて振り返った。

『……貴方達でしたか。話は概ね理解しています。今の学園について ですね？』

「あ、ああ……。しかし、すごいなこりや……。あんた一人でやったのか？」

『はい、一人でやりました。第一波は大体迎撃する事が出来たのですが、大聖堂に組する生徒たちが内部分裂を起こし、今はそちらの方が問題になっているのです』

剣を片手にアルセリアは迫ってくる。相変わらず巨大な身体だ。大聖堂騎士という事もあり、当然大聖堂側だと思っていたのだが、この聖堂騎士の死体の山を見る限りそういう事でもないらしい。

学園長アルセリア……。正体不明の鎧の騎士。全長およそ3メートルの女……。謎が謎を呼ぶ人物ではあったが、いよいよ彼女は何に属する存在なのかわからないな。

特にそのまま彼女は襲い掛かってくる事もなく、巨大すぎる剣を大地に突き立て、鋭い威圧感と共に俺たちを見下ろす。至近距離で見ると本気ででかい……。

『貴方達が大聖堂に反逆し、逃亡したという話も当然聞いています。生徒の中にはその事実をきっかけとして大聖堂に組する者も居るようです』

「……そう、ですか」

落ち込んだ様子で項垂れるリリア。しかしアルセリアは言葉を続けた。

『しかし、多くの生徒は……リリア、貴方がそんなことをするはずがないと信じて今も戦っています。大聖堂の不当な要求にも応えず、自主的に民間人を守って……』

生徒たちは俺たちを守るうとこの中に引き入れてくれた。待っていたくれた。『やっぱり来てくれた』と、魔術師の少女は言っていた。待っていてくれた……。信じてくれた。その事実がどれだけ素晴らしいことか。リリアは拳を握り締め、歯を食いしばりながら目を瞑る。

「どうして……。どうして、信じてくれるんですか……」

「学園の生徒にとって、同じ学園の生徒というのは見過ごせない存在だ」

アルセリアの言葉を代弁するようにアイオーンが腕を組んで語る。

「君は一度、皆の命を救おうと戦った。君が努力する姿を、傷つく姿を、皆知っているから。このシャングリラという街は、宗教国家であるクイリアダリアにおいて尚、『夢』の途切れぬ場所……。この生徒たちは、皆夢を持っている。自分の信じるべきものは、神ではなく自分で選ぶ事が出来る……。生徒たちは、大聖堂という組織からの宣言よりも、自分たちの目で見て確かめた者を信じた。ただ、それだけの事だよ」

アイオーンの言葉にリリアはすっかり打ちのめされたように泣きながら崩れ落ちてしまった。きっと、本当に嬉しかったんだろう。嬉しすぎて……。だから、こんなに辛いんだ。

どうして仲間同士で戦う事になるのか。信じてくれずに誰もが自分に刃をむけるのであれば、まだ割り切れる。でも、そうじゃない。信じてくれる者と信じてくれない者の対立という構図を生み出してしまっている。

それはリリアが望んだ事ではない。俺たちが望んだ事でも、戦ってる連中が望んだ事でもないんだろう。でも今実際にそうなって、それで血が流れているなら……。泣いている暇なんてない。

『夏流、わたしはこの場所を離れる事が出来ません。いざという時この場所を死守出来なければ、生徒達の努力は全て水の泡になってしまいます。故に、貴方たちに指令を下しましょう』

アルセリアの言葉にリリアが顔を上げる。涙を袖で拭い、リリアは

強い瞳を見せた。それは、沢山の事を覚悟して背負っている目……。

『本城夏流。リリア・ライトフィールド並びに勇者部隊、そして学園の生徒と協力し、大聖堂騎士団の攻撃を退けて下さい』

「……了解しました」

リリアは振り返り、それから俺をじつと見つめ、とことこ出口に向かって走っていく。早く戦いたくて仕方が無いんだろう。早く……誰かを助けたくて仕方が無いんだ。

振り返り、アルセリアを見やる。どうやらアイオーンも彼女と話があるらしく、ここは一先ず退散するでしょう。アイオーンとアルセリアを残し、俺はリリアと共に階段を下りた。

その途中、リリアは俺の手を握り締め、嬉しそうに微笑んだ。何が言いたいのかはわかっている。俺もその手を握り返し、笑った。

「信じてくれる人がいる。だから、信じて戦おう」

「はい。何だか少し……。少しだけ、勇気が沸いて来ました。まだリリア、戦ってもいいんですね」

「当たり前だろ。守るんだ、その為の力なんだから」

階段を降りきるとリリアは身体を止め、額を俺の身体に当てて数秒間祈っていた。それから身体を放し、いつもどおりのほんわかした笑顔で笑った後、聖剣を片手に戦場に走っていく。

リリアは戦うだろう。戦って戦って、信じてくれる者が僅かでも居る限り、戦うだろう。それはきつととても勇者として当然の事なのだと思う。俺もきつとそう、誰かを信じて誰かに信じてもらえる限り 心は絶対に折れたりしない。

校庭に出ると沢山の生徒が武器を手に俺たちを待っていてくれた。ずらりと隊列を組んで俺たちを見る傷だらけの生徒達……。皆を戦わせる事なんて、本当はしたくない。でも。

「俺たちだけじゃ聖堂騎士団は追い出せない……。皆、力を貸してくれ！一緒にシャングリラを、取り戻すんだっ！」

全員押し黙っていた。誰も俺の声にわあわあ騒ぐやつは居なかった。でも一人一人が仲間と見つめ合い、覚悟を決めていた。剣を抜き、槍を携え、盾を掲げ、誰もが皆戦う気力に満ちていた。

そう、守るのは学園、自分たちの街。自分たちの仲間……。一緒に夢を追い、一緒に何度も死に掛けた仲間たち。だから戦える。一人じゃないのなら、戦える！

「リリアは……。私は、皆の気持ちに応えられるような勇者じゃないかも知れない。ホントは正しいのは、大聖堂なのかもしれない……。みんなと一緒に戦うなんて、そんなことする権利、無いのかもしれない。でも、一人では戦えないから……。守らせて欲しい。付いてきて欲しい」

リインフォースを掲げ、その輝きの下でリリアは笑う。

「だから皆 死んでも死なないで下さい」

それはリリアの心からの願いだった。しかし余りにも間抜けなそのセリフに失笑がちらほらと浮かぶ。皆笑って、まるでちょっと、そこで面白い物があるから そんな柔らかい表情でリリアを見つめる。その笑顔の中、リリアもまたへらへらと苦笑を浮かべていた。それから気持ちを切り替えるように目を閉じ、再び開く時そこには立派な勇者の姿があった。

「全軍、出陣！ 大聖堂騎士団を迎撃しますっ！！ 私に続けっ！
」

「「「 おおおおおおっ！！ 「「「

俺たちの戦争が、幕を開けた。

折れない心の日(3)

眠りにについている間、リリアは夢を見る。その夢は目覚めてもはっきりと頭の中に残り、水で顔を洗っても拭える事はなかった。

眠れば眠るほど、それを忘れようとすれば忘れるほど、はつきりと……鮮明に。心の中から溢れ出す見覚えの無い景色たちが少女の心を振り潰して行く。

見覚えのある景色もあれば、見覚えのある人も居た。ただ自分自身が忘れていた何かを夢の中で繰り返し繰り返し再現する事で、現実の何かさえ変わっていく気がしていた。

夢の中では少女はとてとても小さな子だった。ぼんやりと揺らぐ景色の中、誰かに手を引かれて歩いていく。

そこはリア・テイル。オルヴェンブルムの白き回廊の中、ふと見上げる繋いだ手の先を歩くのは父であるフェイトだった。

父に手を引かれ、巨大な扉を潜る。そこに立っていたのは見覚えの無い人々。しかし、その顔も名前も一致してしまう。自分の物なのかそれとも他人の物なのか、判断さえできない記憶の中でリリアは理解する。その人の顔を、名前を。

「やはり、ロギアの封印と同時にリリア本人の記憶にも著しい混乱が見られる」

黒衣の男はそう呟き、リリアを見下ろす。その傍らに立つ女王は眉を潜め、リリアへとその細くしなやかな手を伸ばした。

リリアはその手を取り、両手でそっと握り締める。優しく微笑むマリアに頭を撫でられ、リリアは目を細めて微笑んだ。

「そうだとしても、やはりこの子を一人にしておくわけには行かな

いでしよう。何よりロギアは……ええ、『彼ら』に対する力、知識
で言えば、頼りになりますから」

「魔王を守護者にするとはな……。邪道も邪道、禁術を行使した
だけの事はある」

「だが、そうしなけりゃこいつはこいつのままではいられなくなる。
それに……全部の思い出を記憶しているのが幸せとは限らない」

「……そうですね。ええ、きっとそう。何もわからなくとも……わ
からないままでも。それでも幸せになる方法は、いくらでもあるわ」

リリアを抱き上げ、女王は微笑む。何も判らないまま、ただ無邪気
にその笑顔に応える。

夢の中の出来事なのに、それはまるで昨日のことのように脳裏を
過ぎり、今ははっきりと思い出す事が出来る。そうして一つ一つを
思いだして行くうちに、自分のすぐ背後に立ってその夢を懐かしげ
に眺めているもう一人の存在に気づく。

背後に立つ背の高い影。黒と白のローブを纏い、白銀の神を靡かせ
るその人は背後からリリアの頭を撫で、そうして遠くへと誘ってい
く。

だが、リリアにはハッキリと感じ取る事が出来た。恐ろしいのは、
この銀色の影ではない。その向こう側。彼女が遮っている、後
ろのまた『向こう』。

「だれ？」

振り返っても、そこから先を銀色の影は見せようとはしない。立ち
塞がり、遠ざけてしまう。

「だれなの？」

だから、わからなくなる。たとえその影がすぐ傍まで手を伸ばしていたとしても、それはきつとりリアには絶対に判らない事だろう。何故ならリアは守られているから。その、向こうの向こう、闇の中から手招きするその人の存在から。

「だれ　　？」

まるで白昼夢のように脳裏を駆け巡った刹那の中、リアは聖剣を振り翳し、聖堂騎士団の配置した砲台を一刀両断する。

最前線、全ての生徒よりも前に立ち、聖剣を手に敵陣へと斬りこんで行く。その勇猛果敢な姿は敵からすれば恐怖を抱くほどの迫力であった。

どんな魔法も一撃で消し飛ばし、どんなに防御を固めても一撃で吹き飛ばして行く『勇者』。それは、敵として立ち塞がった生徒にも同様に目に映るもの。

勇者……勇敢な者。誰よりも前に立ち、誰よりも果敢に行動する事でその存在は証明される。誰にも出来ない事をやってのける英雄。そう在らねば、誰も勇者とは認めない。

少女はどうだろうか？ 傷一つ負う事も無く前へと突き進むその姿は誰にも止める事が出来ない。勇者が前に居るから誰も立ち止まらない。誰もが付いていける、そんな存在である事こそ、彼女の持つ勇者の資質そのものだった。

リアの正面、突然何人かの聖堂騎士の様子が豹変し、騎士たちはどす黒く燃えるような魔力に包まれ、獣のような乱暴な動きで襲い掛かってきた。リアは剣でそれを受け止めるものの、今までの数倍に跳ね上がった力で吹き飛ばされた。

彼らの持つものは『^{マニプ}預言されし者』を産む『悪意の頁』その複写片、持つ物に力を与える神による禁断の強化術式。その強化騎士数名を

前に、リリアは全く動じる事もなかった。

「ロギア」

小さく息を吸い、その名を呼ぶ。少女の背後、誰にも見えない銀色の影がその呼びかけに応える。

目を閉じたりリリアの髪が銀色に染まっていく。途端、魔力が桁違いに跳ね上がり、迫る強化騎士を一刀の元に切り伏せた。

その動きは早すぎて背後の仲間たちにも見る事は出来なかった。一撃で血飛沫をぶちまけながら断末魔と共に倒れる強化騎士……。勇者はゆつくりと目を開き、剣を構える。

「ごめんなさい。私は下手糞だから 全員殺さず倒す、何てことは約束出来ない。でも」

夏流がそうしたように。アクセルがそうしたように。

願いは願いであり、希望は希望に他ならない。そしてその上で相手を斬り、倒し、その痛みを背負っていく事を覚悟する事……。それもまた、勇者として求められる資質の一つ。

かつて黒の勇者はリリアに告げた。誰かを傷つけ、誰かが傷付けられる事を恐れてはならないと。覚悟せねばならないと。覚悟は、今まで決まっていたのか。

それは甘かったのかもしれない。覚悟を決めたつもりでも、決められていなかったのかもしれない。しかし何かを飲み込み、自らの手を汚す事を厭わず、それでも戦う。その理由ならば、彼女の背後に生まれてしまったのだ。

「仲間を、私を信じてくれる人を傷つけさせる訳には行かないから。だから、貴方たちの事は私の剣が覚えておく。貴方達を斬った事实は 私の剣が連れて逝く」

謝る事はもうしない。嘆く事も意味はない。信じられているのならば、期待に応えねばならない。信じたいのならば、信じる努力をせねばならない。

守りたいのならば、何かを傷付けねばならない。その痛みを背負って歩いていく事を決めた時、少女は勇者として一つ大きな階段を登ったのだ。

迫る魔物にも似た動きの騎士たち。三つの影が同時にリリアに襲い掛かり、しかし少女は銀色に輝く軌跡だけを残し、一瞬で三人を切り伏せて見せる。

それはとても頑丈な装甲を持ち、あらゆる攻撃を軽減するマリシアの術式を一撃で粉碎し、『魔』と所有者が判断する物を一切合財無慈悲に切り伏せる聖剣の力。

背後で見ていた夏流たち、マリシアと戦った事のある者ならば誰もが息を呑んだ。リリア・ライトフィールドは 勇者は、マリシアに対する絶対的な反撃の切り札であるという事実が、目の前で展開されていた。

あつという間に敵となる者を切り伏せ、リリアは聖剣を掲げる。障害となる強化騎士が居なくなった今、リリアの振り下ろした剣は総反撃の狼煙となる。

雄叫びと共に市街地を占拠する聖堂騎士団へとなだれ込む生徒たち。その波の中、リリアは心の中で自分が切り伏せた騎士の顔を一つ一つ思い出し、胸を痛めていた。

折れない心の日（3）

「……………押し返した、のか？」

シャングリラの町が燃えていた。戦闘は終了しても、その痕跡はすぐに消えたりはしない。俺たちの目の前で、俺たちの行動の結果をまざまざと見せ付けるだけだ。

道端に転がる死体、傷だらけの仲間たち……。大地に突き刺さった剣、聞こえてくる人々の小さな声。神威双対をぎゅっと握り締め、周囲を見渡す。でも、そこにはどんな希望も見つからないように思えた。

リリアは一人、死体を前に立ち尽くしていた。リインフォースは今度はもう輝きを失い、聖剣としての役割は鳴りを潜めている。その背中は悲しみに暮れているのだろう。風に吹かれて髪を靡かせ、その背中からは悲しみしか感じ取る事は出来なかった。

「……それにしても、驚きましたね」

隣にゲルトが並び、そう口にした。勿論リリアの力の事だろう。

初めてリリアがあゝの力を発動した時、完全に力に振り回されているように見えたリリアだったが、今ではもう全てを己の意のままに操っているようにさえ見える。ロギアという存在を自らの力にする事が出来たのなら、リリアはそれこそ……。そう、無類の強さを得た事になるのだろう。

だが、心に残る一握の不安……。その正体は何だ？ リリアは自分の意思で剣を取り、自分の意思で人を殺した。俺も……。多分、殺した死んだかどうかなんていちいち確認しない。でも、殺した者も居るだろう。

いつかこうなるかもしれないという覚悟は前から決まっていた。俺は……。いいんだ。この世界の人間じゃない。命の重ささえ、結局俺にとっては嘘になる。でも、リリアたちはこの世界で確かに生きる本物の存在。俺のように、虚像ではないから。

その悲しみを胸のうちに閉じ込め、リリアは今何を思っているのだろう。大地に突き刺した大剣の柄に両手を重ね、静かに風を受ける

勇者……。その構図は絵には成るが、きっとリリアには似合わなかった。

「……マリシア兵、とても呼べばいいのか？ 大聖堂は何を考えているんだ……。あんなバケモノみたいな兵士を量産でもするつもりなのか？」

「リリアがあゝの魔獣に対しても絶対的な攻撃力を持つ事実はわたしたちにとっても学園にとっても朗報でしょう。ですが……素直には喜べませんね」

ゲルトもきつと俺と同じ事を考えていた。二人でリリアを背後から見つめてみると、視線を感じてかりリリアはけろりとした様子で振り返った。

そうしていつもどおりのふにやけた顔でどこそこ駆け寄り、俺たちの前で笑ってみせる。俺はその肩を叩き、そっと目を細めた。

「良く頑張ったな、リリア」

「えへへ、はい。でも、まだですよ」

「……ああ」

大聖堂は一先ずシャングリラの外側にたたき出しただけ。まだこの町が包囲されているという事実は変わらない。

ここから先は籠城戦闘になる。しかしいつまた市街地が戦場になるかわからない。だから、市民の避難も急がせなければならないし、部隊の統率も必要だ。

考え込んでいても仕方が無いが、あまりにも悲惨な状況に身動きも取れなくなる。あんなに平和だったシャングリラが、どうしてこん

な事に……。

「……お前の、せいだ……！」

振り返る。そこには剣を手にした傷だらけの生徒が立っていた。少年はリリアに剣を向け、口元から血を流しながら震える声で言う。

「お前が、大聖堂を裏切ったりしなければ……こんな、ことには……」

俺とゲルトが立ち塞がろうとすると、リリアは俺たちを強い力で押しのけて前に出た。少年の剣を自ら握り締め、血を流しながら喉元に突きつける。

二人して慌てている俺たちを他所に、リリアは鋭い視線で少年を見つめて言った。

「いいよ、殺したいのならば殺しても。でも、その覚悟はある……？ 私を殺せば、貴方も一緒。人殺し……誰かを傷付けて生きる人間になる」

少年はリリアをじっと見つめ、歯を食いしばっていた。リリアが握り締めた剣を片手で押し折ると、少年も背後に仰け反る。

「……やっぱり、だめだよ。こういうの……お奨めしないな。だってそうでしょ？ 誰だってそう、殺したりなんかしないほうがいいに決まってる」

リリアの言葉を最後まで聞き届け、少年は前のめりに倒れて気絶した。倒れる彼を抱きとめ、リリアはただそっと目を閉じていた。駆け寄ってきたせ生徒が気絶した少年を運んで行く。リリアは手の

傷を心配されたが、気にする事は無いと微笑み、何の呼び動作もなく自らの手を完全に治癒してみせた。

回復魔法は元々得意だったようだが、今の様子ではそれもさらに上達したように見える。自らの身体に触れる事もなく、何もせず回復する……。そういう仕組みなのか。

彼女は振り返り、それから悲しげに微笑んだ。今リリアがどんな気持ちなのかは察するにあまる。だが……だからといって、ここで立ち止まるわけにはいかないから。

リリアの肩を叩く。少しでもその気持ちの揺らぎをやわらげてあげる事が出来るのならいいのだが……そうもいかないだろう。ふと振り返ると、勇者部隊の仲間たちが集まってくるのが見えた。

俺たちは一度状況を確認するために校舎の中へと移動した。教室の殆どが避難スペースか救護所になっているらしく、校内は学園祭時に匹敵するような込み具合だった。そんな中、俺たちは学園長室を目指す。

巨大な広間の中、アルセリアはアイオーンと共に居た。二人が同時にこちらを見ると、俺は二人に駆け寄る。

「とりあえず一区切りだ。大聖堂騎士団は外に追い出したよ」

『そのようですね。ご苦労様でした、夏流』

アルセリアの労いの言葉は淡々としていた。俺もまた、淡々と話を進めねばならないだろう。嘆いていても、仕方が無いのだから。

「大聖堂は何を狙っているんだ？ 何故シャングリラを攻撃するような真似をする？ 強硬手段にも程があるだろう」

『彼らは急いでいるのです。時間がないと、そう考えています。彼らが欲しいもの、それは学園の戦力もそうでしょうが、何よりもこ

の塔　　ラ・フィリアにあります』

あっけらかんと答えた学園長にちよつとだけ拍子抜けする。ナナシの知り合いにして謎多き鎧の女、アルセリア学園長……。当然のように俺に簡単に謎は明かさないと思っていたのだが。

『かつてこの塔は魔王の物であつた事はご存知ですか？』

「……ああ。確かにそう聞いた事がある」

『それでは、この世界に点在する古代遺跡ダンジョンの存在については？』

「この間体験したよ」

『結構です。では、この塔は嘗て魔王が管理していたダンジョンの一つであると言えは通じるでしょう』

アルセリアはそういいながら巨大な椅子に腰掛けた。しかし、イマイチ意味はわからない。魔王の管理していたダンジョンの一つ……？　それが大聖堂と何の関係が？

『この塔は魔王の所持していた建造物の中でも特に重要な拠点であるとされていました。デアノイア、及びにシャングリラとは、巨大な古代遺跡の真上に作られた街なのです』

という事は、この街の地下には、北方大陸で見たようなアンダーグラウンド領域が広がっているという事になる。

古代遺跡を手にする利点など何があるだろう？　考えてみる。古代遺跡から発掘されるものは機械……その程度ではないのか。

いや、違う。その機械を魔物として意のままに運用していたのが魔

王ロギアだ。もしもこの建造物、ならびに地下遺跡にロギアのように魔物を操る術があるとすれば話は別だ。

強大な軍勢力……機械兵器と学園が有する生徒達が同時に手に入るのならば、確かに無理をするくらいの意味はあるのかもしれない。だが、どうして今なのか……一体何を急いでいるのか。

『付け加え、ここにリリアが居る事が知られてしまったのならば、彼らは尚の事シャングリラを落としかかるでしょう。リリアは何よりも今彼らが欲している物の一つですから』

「……魔王の力、か？」

『勿論それもあるでしょう。ですがそれだけではありません。ただそれだけ……というわけではないのは、貴方も既に気づいているのでしょうか？』

肝心な事をはぐらかすように彼女はそう語る。まあ確かに、そりゃそうだ。リリアの中にはロギアがいる。でもロギアはリリアを支える陰の人格のようなもの……。しかもロギアは、リリアの中の何かを封じる存在でもあるという。

聖剣リインフォースに纏わる謎は前の勇者であるフェイトしか解き明かす事は出来ないのかもしれないが、何はともあれリリアには謎が多い。格段に強く腕を上げている今だからこそ、その不安は看過出来るものではない。

『マリシア
預言されし者とは既に邂逅を果たしたようですね』

「……マリシアを知っているのか？」

『オルヴェナ・イラ
大聖堂騎士ですから。しかし、マリシアは何も今日急に現れた存

在ではありません。魔王大戦自より、密かに暗躍していたクイリアダリアの兵器なのです』

兵士ではなく、兵器という事場を用いるアルセリア。確かにその言葉の通り、アレはもう人ではない。武器……兵器、そうした類の物だ。

『魔王率いる魔物の軍勢を踏破することに、マリシアは少なからず貢献しました。大聖堂が抱える切り札であり、国を背後から動かしてきた巨大な力でもあります。ですがマリシアの存在は長らく人々に伝わる事も無く、封殺されてきた事実です。本来ならば、簡単に露呈するような事ではありません』

「だったらどうして……？」

『全ては大聖堂の『焦り』が生む事……。預言の時、滅びの戦争が迫っているのです』

そろそろアルセリアが何を言ってるのかさっぱりわからなくなってきた。腕を組んで考え込むが、スケールがどんどんデカくなってる気がするの俺の気のせいなのか？

『……今の貴方達には、少し支離滅裂な話だったかも知れませんが、ですが直に言葉の意味は判る時が来るでしょう。今は目の聖堂騎士団をどうするのが問題です』

「……そ、そうだな。だが、このまま籠城戦ってわけにもいかないだろ？　いくらシャングリラが要塞都市だからって、こっちは殆ど戦闘経験のない素人軍隊だ。本物の騎士団相手にどれだけやれるか……」

全滅するようなことは早々起こらないだろうが、戦えば戦うほど被害は広がってしまう。生徒の中にはまだ学園で何も学べて居ないような素人みたいな子もいるし、実戦経験のない生徒や生産学科のやつもいる。戦闘に巻き込まれれば市民同様ひとたまりもない。

だから、出来れば籠城戦は望まない所……。このままここに籠るよりも、なんとか打開策を探さねばならないだろう。

『……これはわたしの勘ですが』

考え込む俺たちにアルセリアは人差し指を立てて告げる。

『敵はそう長い間は包囲を固めないはずです。少しの間様子を見て、今は身を休める事が大切でしょう』

「……また攻めて来るかもしれない。どうしてそう言いけるんだ？」

『向こうも準備が出来て居ないでしょう。こちらに勇者が居るとなれば戦力不足は確実……。向こうもきちんとした切り札を運用するか、撤退するかを選ぶでしょう。どちらにせよ猶予はあります。浮き足立っている皆を取りまとめ、戦闘に備えてください』

成る程、確かにそうだ。並の戦力では攻めても落とすきれないのを目に見えている。だったらむこうはきちんとしたマリシアを投入するなり増援を呼ぶなりするはずだ。それまでには一応時間がかかるか。

背後の皆と顔をあわせ、一応一時準備のために各自行動という事になった。一先ず前回のオルヴェンブルム戦でそうだったように、パーティーのリーダーを集めて作戦を練る必要があるだろう。

準備のために解散となり、皆が部屋を出て行く中、俺はアルセリアと向かい合って居た。色々と言いたい事はあるが、一先ず一つだけ。

「リリアが狙われたのは、魔王を有するから……それだけじゃないっていうのは、どういう事なんだ？」

『言葉通りの意味です。彼女には魔王を有する以前に、大聖堂に狙われるだけの理由があるのです』

立ち上がったアルセリアは俺の前までのしと歩いてくると、腕を組んで俺を見下ろす。

『大聖堂は来る滅びの戦争に備える為、国を一つに纏めながら戦力を掻き集めねばならないと焦っている。しかし今、国は真つ二つに二分されている状態にあるのはご存知ですね？』

「戦争を好まない女王派……和平派と、その戦争とやらに備えている大聖堂派……その二つだろ？」

『ええ。ですから大聖堂は早々に女王も自らの手中に収めたいと考えている。しかし女王マリアは先の大戦で先陣を切ったほどの剣の腕を持っていますし、魔法にも長けている……。更に彼女を支持する人間も多く、女王を言うがままにするのは余りにも難しい。大聖堂は早い話、女王の代わりを欲しているのです』

それは俺も知っていることだ。だから娘であるアリアを女王に仕立て上げてマリアを暗殺しようという計画さえたてた。それは八はフエンリルの働きで阻止されたわけだが……。

「マリアの身はアリアが見つかるまでは安全のはずだ……確かそう

聞いてる」

『そのはずでした。ですが、大聖堂は現在女王を拘束した状態にあるのです』

流石にそれには耳を疑った。何故そんな事になるのかがまずわからないし、余りにも強硬手段過ぎてどうにもそれは上手い手だとは思えない。

マリアを拘束したりしたら国は内部分裂をを起こし、大聖堂の思う通りになど絶対に動かなくなるだろう。今回のシャングリラの件もそうだ。そこまでして焦っている理由は、先を急ぐのは何故なんだ？

『勿論女王が捕まった事は公表はされていません。ですが代わりが手に入れば直ぐにでも彼らはマリアを殺す事でしよう』

「そんな簡単に行くか？ アリアは北方大陸にいるんだそんな簡単に見つかるとは思えないが……」

『彼らは女王の血を引く人間を発見する特殊な術を知っているのです。女王の血筋の人間は特別ですから、見つかるのは時間の問題でしょう』

そういえば確かにマルドゥークがそんな事を言っていた気がする。だとすれば女王の身に危険が迫っているというのはやはり避けられない事実か。

『それに、代用品はアリア・ウトピシュトナだけではありません。他の代用品を使う事で、彼らは国を取り急ぎ纏める事も厭わないでしょう』

「……他の代用品？」

聞きなれない言葉に首を傾げる。そんな俺を見下ろし、アルセリアははつきりとした口調で告げた。

『時期女王として相応しいのは、アリア・ウトピシュトナよりもむしろ　リリア・ライトフィールド……いえ、リリア・ウトピシュトナであるというのが、大聖堂の考えでしょう』

「……はっ？　今なんつった？」

そう鎧の顔で抑揚も無く淡々と言われるとリアリティってもんがないんだよ……。今完全に俺の考えの斜め上をぶっちぎる単語が放たれた気がしたんだが。

アルセリアは何度でも繰り返すといった様子で俺を見下ろす。そうして小さく息を吸い、それからもう一度、今度はわかりやすく言うてくれた。

『次の女王に、勇者であり魔王であり、そして女王の血筋でもあるリリア姫を使うのは、大聖堂にとって有意義なのです』

「……………リリア、姫？」

勇者であり魔王であり　女王でもある？

なんだそりゃ。設定多すぎだろリリア。

だが、そこで色々なものが繋がった気がした。冗談だと笑い飛ばすシーンかもしれない。でも、今はそんな気分にはなれなかった。

アルセリアは当然のように俺に語る。だからそれは嘘ではなく、当然のようにある自然の摂理。俺がただ知らなかっただけの、当たり前前の事実。

『リリア・ライトフィールドは、フェイト・ライトフィールドとマリア・ウトピシュトナの間に設けられた子なのですから』

頭が痛くなりそうだった。

誰か、このどうしようもない状況をなんとかしてくれ。俺はこっちの世界に来て、初めて神様ってやつに祈りを捧げた。

折れない心の日（3）（後書き）

それは、一つの間違いが起こした奇跡？

犬リリア観察日記

今後、同じような失敗を犯す事の内容、自らへの戒めとしてこの記録を残す。

○月×日（晴）

記録者であるあたし、メリーベル・テオドランドは長年人間の体内を魔物が侵食する呪い、『魔人化』（女性の場合は魔女化）について研究を重ねてきた。

オルヴェンブルムでも随一の錬金術師の家系であるテオドランド家の学術書にも存在しない外法、魔人化の秘薬の秘密については未だに謎が多く、様々な実験を試みた現在でもその解呪法は明らかになつて居ない。

秘薬を作成した兄、グリーヴァであれば何らかの情報を知っているものと推測されるが、彼の行方については不明……。限りなく不死に近づいていたあの肉体強化を見れば、あたしよりも遥かに錬金術の高みに居る事は間違いないのだが、いかんせん生きているのかどうかは微妙なところである。

先日のゲルトの魔女化事件を経て、あたしは今まで以上に呪いの解除に専念している。自分ひとりの問題ではなく、兄の作ってしまった業は妹であるあたしが背負うのが道理。何より、ゲルトの努力する姿を応援したいと思うのは当然である。

兄は魔人化という手段を不死、ないし肉体の強化という目的を持ってアプローチ手段としていたように考えられる。事実、その結果として今のあたしがある。

実際にゲルトの魔力総量を以前と比べると、大幅な能力の向上が見られる。ただし、それは呪いの暴走を伴う危険性がある為、容易に発動する事の無いように注意を促しておく。

今回あたしを取り組んだのは、魔人化を他の薬品の効果で相殺する実験である。以前、人の姿に化ける猫の精霊から採取した素材を元に生み出した魔人化対抗薬を自分に服用した所、魔人化は抑えられなかったどころか猫科動物に好かれてしまうという副作用が発生した。

頭部に残る猫の耳ないし肉体の猫的特長は恐らく化け猫の影響だと思われる。精霊を元にした薬品は人間に奇跡を与えるとされるが基本古くから邪道であるとされてきた。その結果としてがこの耳であるのならば、その罰は甘んじて受けるべきなのかもしれない。

秘薬についての研究を諦めるわけにも行かず、今回は他の精霊薬について実験を行う事にした。擬似的に作成した魔物を濃縮した呪いの小瓶、魔人化薬を作成。ただし、症状は軽度となるように調整。魔人化薬を野良犬一匹に投薬し、犬に魔人化を施す（小動物では耐え切れず即死する）。犬は意外と落ち着いた様子でなんとも無いように見える。

次にゲルト・シュヴァインに買い物に行かせ、そこで精霊薬を入手。いくつかの薬品を独自の知識に基づき配合し、犬に投薬する。経過を見る為、僅かな期間、この実験体を室内で育成する事に。

○月×日（曇）

秘薬相殺の経過を見ていた実験動物の様子が明らかに変化していた。どうやら犬から人間に近づいているように見える。全長凡そ40センチほどの犬が、今や二足歩行までしようとしている。

妖精の秘薬の配合に問題があったのだろうか？ 薬品の素材にリリア・ライトフィールドの物と思われる頭髮が混じっていた可能性を指摘。犬は現在小型のリリア・ライトフィールドと化していた。そのままにしておくのも問題なので、服を着せる。寝坊してソファから起きたゲルトが実験動物を見て大層驚いた様子であたしに言った。

「り、リリアです！ リリアがちっちゃくなってますっ！？」

寝起きなのでどうやら少々頭がぼうつとしているらしい。あたしは実験の事をゲルトに伝えた。

「成る程、実験動物がリリアのようになってしまったのですか……。それにしても、本当にリリアそっくりですね」

ゲルトはリリアのような犬を抱きかかえた。犬そのものは全くの健康らしく、尻尾と耳を元気良く振っている。犬がゲルトの頬をなでると、ゲルトは目を輝かせてあたしに言った。

「この子はたった今より、犬リリアと名づけましょう」

何を言っているのかよくわからなかったが、とにかくこの子は少しおかしい。

「それは実験動物だから」

「でも、しばらく経過をみるのでしょうか？ だったらわたしが世話をします！」

「……ペットじゃなくて、あたしたちの身体に関わる大事な実験……」

…」

「リリアの顔をしたものを実験に使うなど言語道断です！ 犬リリアはわたしが面倒見ます！！ ねー、犬リリア〜？」

犬リリア（仮）にはお擦りするゲルト。どうやら余程犬リリア（仮）が気に入ったらしい。

部屋の中では犬リリアは放し飼いになった。ゲルトが掃除する後につき、犬リリアはとことこ歩いている。二足歩行が容易に出来るとなると、これはこれでちょっとした新生命なのではないかという好奇心が沸いてくる。なんにせよ眠いので、今日は後の事はゲルトに任せて寝る事にする。

○月×日（晴）

「犬リリア〜！ 犬リリア〜っ！」

「わんわんっ」

「きゃーっ！ きゃああああっ！！ 犬リリアーッ！！」

ゲルトの様子が明らかにおかしい。もしかしたらなんかあの犬からおかしなものでも分泌されているのかも知れない。危険性を考慮しゲルトから引き離そうとしたが、ゲルトは応じない。

宿主を生み侵食するタイプの魔物と化した可能性も否めない。非常に危険性が高い。ゲルトは涎を垂らしながらベッドの上で犬リリアと転がりまわっている。非常に危険。

「ゲルト、その犬リリアは危ないかもしれない」

「犬リリアは悪い子じゃないんですっ！！　だめー！！　犬リリアを連れて行かないでーっ！！！！！」

と、引き離そうとすると泣きながらすがり付いてくる。ゲルトの精神状態に何らかの崩壊が発生している事は明らかである。犬リリアを調査する事にした。

犬リリアの身体を調べてみたが、見た目敵には限りなく人間に近いが、中身も頭脳も犬そのものである。精霊に近い存在と成っているようだが、言語を持たぬことから知性は感じられない。となると、原因は犬リリアにはないように思える。少なくとも人間に寄生するようなものではないようだ。

一安心したのも束の間、ゲルトが犬リリアを追いかけて床にはいつくばって移動を始めた。机の下にもぐりこんだ犬リリアを構うためにおしり突き出してふりふりしている。パンチラである。

「ゲルト……」

「なんですか？　今いいところなんです、話しかけないでください」

「……………」

ゲルトの病状は悪化の一途を辿っている。

○月×日（曇）

余りにもゲルトの状態が悪いので、犬リリアを抱いたまま寝ているゲルトの腕からこっそり犬リリアを奪い、犬リリアに解毒薬を飲ませた。しばらくすると順調にただの犬に戻り、それを野に放つ事にした。

目が覚めたゲルトは犬リリアが居ないことを大層悲しみ、部屋の隅

で膝を抱えながらわんわん泣いていた。しかしこれもゲルトのためだと心を鬼にする。

○月×日（雨）

ゲルトが危険だ。ゲルトは昨日から全く食事も喉を通らず、街中を犬リリアを求めて徘徊しているようだ。不眠不休の行動により、流石のゲルトにも疲労が色濃く見える。

状況を打開するためにリリアの部屋を訪ねた。リリアに事情を説明し、翌日に備えて作戦会議を行う。

○月×日（晴）

「ゲールトちゃん」

ゲルトの状態がようやく安定した。リリア・ライトフィールドに頼み込み、犬リリアのぬいぐるみを作ってもらったのである。

ちなみにリリアも同じように猫ゲルトなるものを作成し、持ち歩くようにしているという。おそろいというものの効果か、ゲルトは何とか気持ちを落ち着けたようだ。リリアはゲルトに詳しい。

「犬リリア……。どこかで達者で暮らしているのでしょうか……？」

夜空の星を見上げながらそんな事を言うゲルト。その手の中にはリリア手作りの犬リリアぬいぐるみがしっかりと握り締められていた。今後このようなことにならぬよう、自分自身へと強く戒め、ゲルトの不安定さを考慮した実験を行う予定である。

尚、犬リリア事件については関係者三人だけぞ知る事とし、この記録は金庫の中に保管し、外部への露呈を防ぐ物である。

○月×日 メリーベル・テオドラント 記

ディアノイア劇場出張版（1）

〈ディアノイア劇場出張版（1）〉

＊キャラクター紹介総集編＊

本編更新だと思って見に来た方、申し訳ありません。

以前から要望を幾つか頂いていた『キャラ紹介をあとがきじゃないところで纏めてやってほしい』という要望にお答えして今回は本編一部使う事になりました。

既に紹介されている物のまとめ、加筆、更にはキャラ設計コンセプトなどもちよつと付け加えて行きます。他の作品の話とかも。

別にキャラに興味ないという方や作者の独り言に興味が無い人は読み飛ばしましょう。

準備は宜しいですか？ 即バックするなら今のうちですよ！

『本城 夏流』

読み方は『ほんじょうなつる』。年齢十七歳、高校二年生。新学期からは三年生になる。

キャッチコピーは捻くれものの救世主だが、実際にはそこまでひねくれてはいない。他の作品の主人公たちと比べると大分人格がまとも。

細身だが肉体は筋肉質。とある事情で家庭を離れ、親戚の武術家の家で過ごし道場に通っているのがその理由。

勉強は中の上程度で運動能力は高い。双子の妹の死の理由を知る為に幻想世界への入り口である『原書』を手にした救世主。

基本的に面倒見のいい兄貴分で、リリアを救うという役目に大人しく従事している。基本的に常識人だが、諦めてすっぱりと割り切るのは得意。

今まで自分が作った主人公の中では恐らく今の所一番無個性。その辺を今後物語りに織り交ぜて行きたいところ。

【解説】

〇〇の〇〇というタイトルで連載した長期シリーズの主人公の中では恐らく一番中途半端な奴。

霹靂のリイドがツンデレで銀翼の香澄はヤンデレ、こいつはヘタレと言ったところか。

元々虚幻は銀翼よりも前に構想が存在していたので僕の中では長期シリーズでは二作目の主人公というイメージが強い。

銀翼の香澄はこの夏流を凶暴化させたような性格で、二人に似通った点（家族探しや情緒不安定さ）があるのは、元々香澄の元が夏流だからだったりする。

クールでカッコイイ主人公は僕にはどうやら無理らしい。最初から完成された人格の主人公は書いてて楽しくない。ある程度情緒不安定じゃないと。でも香澄はやりすぎたと思う。

色々あってぶっ飛んだ主人公ではなく、ぶっ飛んだ登場人物の中に紛れる事が出来るような落ち着いた奴を出そうとしたのに、気づけばヘタレてた。

リイドや香澄くらいぶっ飛んでも別に良かった気もするけど、まあこれはこれでそこそこ気に入ってるから別にいいか。

『リリア・ライトフィールド』

年齢十五歳の少女。聖クイリアダリア王国のはずれにある田舎町の出身。いじめらつ子で友達いない引きこもり。

『白の勇者』と呼ばれたかつての戦いで英雄の血族にして娘。二代目勇者として王国の英雄育成機関で鍛錬を積んでいる。

ドジで不幸で泣き虫で、しかし結局負けず嫌いで善人で空回り。ギヤグマンガみたいないなヒロインを作ろうとして生み出された。

自らの背負う『勇者』という役職を本当は嫌っており、どうせならばそんなものはなくなってしまえばいいとも思っている。

戦闘能力はほぼ皆無であり、父の遺品である『聖剣リインフォース』も全く使いこなせないというより振り回せない状態で、使える魔法は回復のみ。

キャッチコピーは泣き虫勇者だが、意外と根性はあるのかもしれない。序盤は夏流よりこっちの成長をメインにしたいところ。

【解説】

メインヒロイン（笑） いつも居るけど時々空気。

僕が書いてきたヒロイン象の中では異色のキャラ。そもそもこの手の奴はそんなに好きじゃない。

ベースとなったのは恐らく久遠の月に出てくるツバキというキャラ。銀翼の響も近いかな。

元々この手のキャラはヒロインにするよりも主人公にしたほうがいいと僕は思っているので、ヒロインというよりはもう一人の主人公なのかもしれない。

それにしてもこいつ、序盤の弱さはどこいったんだろう。

『メリーベル・テオドランド』

年齢十七歳の少女。出身は聖都オルヴェンブルム。捻くれものの猫好き錬金術師。

それなりに地位と名誉を持つ錬金術師一族であるテオドランド一族の末裔であり、同時に一族のつまはじき者でもある。それは性格的に他人と馴染めないからかもしれない。

錬金学科に属しているものの、手広く生産系の技術を学んでいる。自身に戦闘能力は皆無だが、錬金術を駆使した道具を駆使してある程度の戦闘は可能。

その実力は学内でも上位なのが真相だが、戦う為には大量のアイテムを消費する事やそもそも戦いは時間の浪費と考えている事から戦いは好まない。

独自の思考を持ち、他人の言動に流されない性格。冷静で可愛げのない、しかし忌憚の無い意見を述べてくれる友人として作成した。リリアの初めての女友達である。ちなみに錬金学科一年生なのは、何度が留年しているから。学園のシステムの進学は難しいのだがとある事情により研究に没頭するあまり、私生活が滅茶苦茶になってしまっている。

【解説】

自分が付き合うならこれくらいが一番丁度いい、という理想像(?) そっけなくて気さくで物怖じせず、自分には素直になれないタイプ。自分のヒロインという形に一番近い。

初執筆だった久遠の月に出てくるヒロインに似ているけれど、案外こちらはまとも。見た目はすましているけど案外子供っぽい子。それにしてもキャラ作りつてめんどくさいから大体他の作品のキャラを流用したようなものになるんだよね……。

『リリア・ライトフィールド（聖剣解放）』

聖剣リインフォースにかかっている封印を解除した状態のリリア。自分自身に課している魔力の枷と同時にゲインが課したリインフォ

ースの枷を解除する事により、本来持つフェイトから受け継いだ魔力を発揮出来る。

ゲインの死後、封印は一度解放されており、再び鎖を締め直したりリアに解放の権限が委譲されている。この辺はそのうちやる事が出来ればいいなあ。

ゲルト以上の努力家であり、才能にも恵まれていたリリアはゲルトに対する負い目から力を封じて生きてきた。その為長い封印状態の代償で、解放時は上手く戦えない。

リインフォース解放状態では身体能力と魔力総量が大幅に増幅されるが、現段階ではゲルトには及ばない。聖剣の力が凄まじいだけであって、リリア自身の腕はまだそれほど高い練度ではない。

リリアの未熟を補って余りある伝説の武具リインフォースにより、とりあえずは戦う事が出来るようになったようだが、謎の暴走など解明されていないメカニズムの多いリインフォースをリリアも夏流も危険視している。

【解説】

リリアの聖剣とVSゲルトあたりのエピソードが一番良かったんじゃないだろうか。人気のシーンとしても指折りだ。

それまでのぼのぼのした雰囲気だけの非常にライトな雰囲気だったシーンからいきなりドロドロの戦闘シーンに入った時、自分でも『もうほのぼのするのは限界だ』と感じたのを覚えている。

後に明らかになることだが、聖剣の中に魔王というのはどうだったんだろうか。いっぱいフラグ敷き詰めたからそんなにショックはなかったと思うけれど。

ディアノイアは元々そんなに長期連載になる予定は無く、読者数が序盤はそれほど多くも無かったので適当に切り上げる予定だった。個人的には勇者対決くらいで第一部完、で打ち切りでもよかったなあ。

『ゲルト・シュヴァイン』

魔剣フレグランズの担い手、十五歳。リリアの幼馴染。

リリアは田舎町の生まれで育ちも田舎だが、早くに「母親を失いシユヴァイン家の近くに住んでいた過去がある。その頃リリアと知り合い、友達になった。

二人の友情は世界の声に引き裂かれ、いつの間にかリリアを強く敵視するようになっていたが、それは逆にリリアを強く認めているからである。

リリアの煮え切らない態度や怠けている様子、自分に負い目を感じている事が我慢ならず、あれこれやっちゃったおつちよこちよいの人。あと大剣でリリアぶっさす。

黒の勇者と呼ばれるもう一人の勇者だが、一つしかない勇者の席をリリアと争っている。

凄まじい負けず嫌いで努力マニア。学園内でも指折りの実力者だが、アクセルには四回負けている。あとツンデレ。リリアが幼児体系なのに比べ、こちらは……。

【解説】

作者は意図せずともメインヒロインと名高いもう一人の勇者。

レーヴァテイン書いてるときもそうだったのだが、この子はアイリスの系譜だ。アイリスも意図せず方々から人気のキャラだった。僕はこういうキャラをヒロインにすべきなのだろうか。

なんだかこういう子はある限り幸せになれない傾向にある。だから今後もあんまり幸せな展開は待ってない気がする……。

それにしても、最初は大分クールなキャラを作ったつもりだったのに、次々にボロが出て今ではリリアに匹敵するアホの子になってしまった。大誤算である。

そういえばアイリスは妹ツンデレだった。成る程、妹ツンデレか……

…。言いて妙だ。

名前の元は、『ゲルトオオオオオッ!!』の、ゲルト。

『アクセル・スキッド』

無名の剣士ことアクセル・スキッド十八歳。実は夏流より年上。

とある事情からバイトをいくつも掛け持ちしており、将来は傭兵家業でガッツリ稼ぐ事を夢見ている。

お気楽な考え方と暑苦しい態度が特徴。リアの駄目っぷりに惚れているが、それは恋なのかそれとも犬か猫を見るような気持ちなのかは不明。

二対のサーベルを操る剣士で、風を使った高速剣術や特殊な体裁きを得意とする。魔力を放出して敵を切り裂くとかそういうのはとても苦手だが、肌身離さず持ち歩いている剣だけは風で多少操れるようだ。

バイトばかりしていてるくにランキング対戦をしていないため順位は低めだが、ゲルトに匹敵する実力を持っている。が、あんまり強さをおおっぴらに見せびらかすのは好きではない。

ゲルトとは何度か戦った縁だが、アクセルのへらへらした態度が気に入らないのかゲルトには妙に嫌われているので、そのうちぶっさされるかもしれない。

リアに対して、というよりも夏流にとっての兄貴分であってほしいと願う所。

【解説】

兄貴ことアクセル・スキッド。男性キャラの中では夏流より好きなキャラ。

色々あって敵だったり味方だったりハッキリしないやつだが、この手のキャラは昔から死にそうで死ななかつたりする。こいつは死ぬ

のだろうか。

パロディな雰囲気を作るうえで重要で、若干変態チックな発言も多いが、女性からするとどうなのだろうか。結構アクセル好きだという声は多いのだが。

気のいい兄貴分と言う感じで、素直じゃない夏流や自分に自信がないリリアを上手く導いてくれる人。

男女比率は大体同じくらいにするようにしているのに、最近は女性過多の気がする。アクセルに死なれると男性比率的に困るのだ。死ぬな、アクセル。

『アイオン・ケイオス』

学園最強の生徒にして謎多き自称二十一歳。

ネクロマンサー

アンリミテッド

死術使いという二つ名と同時に限界突破者の能力も持ち合わせた天才的な魔術師。

圧倒的な強さと戦う相手に対する無慈悲の様相からアイオンと戦いたがるのは本当に最強を目指しているゲルトとブレイドくらいのものである。

燃えるような神と金色の眼鏡、黒い服装が特徴。服は主に男物なので一見すると背丈が高い事も手伝って男のように見える事もある。

本人が先天的に持つ得意属性は炎で、主に炎の術式を好んで使用する。手にしている武器である槍は魔法媒介としての役割が強く、大地に魔方阵を描いたり術式の媒介。杖のような役割を担う事が多い。物理的攻撃手段としては中の下程度の性能しか持たない。

非常に自由人で授業に出るも出ないも気分次第。気配を消すのが得意で他人の後をつけて驚かせるのが趣味。眼鏡は伊達だが大量に同じものをストックしてある。

教師陣からも一目おかれる彼女の過去に何があったのかは不明であり、夏流に対しどんな想いを抱いているのかも不明である。

【解説】

謎多きお姉さん。アイオンさんじゅうはっさい、じゃないよ。

二十一歳との事だが、我ながらテキストにつけたなあ。二十一歳というとそれほど大人でもない。わりとそのへんに居るねーちゃんは二十一歳くらいだろう。

僕としてはお姉さんというとどんなに若くとも二十四歳、付き合うなら二十六くらいが丁度いい。よって個人的にアイオンはお姉さんキャラではない。

だが主人公が十七歳である事を考慮すれば充分お姉さんだ。四つも上となればお姉さんと呼んでも差し支えないだろう。

アイオンはお姉さんなのだろうか。宝塚みたいなキャラを出そうと思っていたのだが、お姉さんなのだろうか。これはこの作品の永遠のテーマでもある。

『ベルヴェール・コンコルディア』

ちよつと頭の悪いお嬢様。十六歳。

財力に物を言わせ、貴重な魔弾（魔術的な効果を持つ鉱石を使用した矢）を使用する後方支援の弓兵。

学園の中では強いほうだが、実際は戦闘能力よりもサポートスキルの方が豊富で得意分野である。所持する属性は水だが、ある程度他の属性魔法も使いこなす。

コンコルディア財閥といわれる魔王大戦時より存在する貴族の一人娘で、かなり自己中心的な考え方をしているが、本人に悪気はなく当たり前だと思っている。

基本的に頭が悪く、物覚えもかなり悪い。よって他人を呼ぶときは大抵『アンタ』で済ませて誤魔化そうとする傾向にある。

実力や容姿は申し分ないのだが、いかんせん頭が悪いので他の生徒

からの人気は微妙である。が、逆に頭が悪く自信家なのであらゆる状況で動じずに行動出来る。

コンコルディア当主は当然聖騎士団並びに勇者のパーティーを支持せねばならない宿命にあり、現在の当主でもある彼女の父親はフェイトとも知り合いだった。

【解説】

アホの子。出番が基本的に少ない脇役。

そのうち出番も出したいのだが、エピソード的にまだ絡みがあまり無いのでフラグだけ立てて放置されてるなあ。

貴族の娘で馬鹿というのはどういう設定なのか。元々適当に作ったキャラだが、まさか頭が悪い子になってしまうとは思わなかった。いい子だけど馬鹿だからどうにもヒロインにはなれそうにない。そのうち目立つ事が出来るだろう。

どうでもいいけど髪形は縦ロールかウェーブかの二択ですごく迷ってる。未だにきまんない。

『ブレイド・ブレット』

明るく元気な夢見る少年、十三歳。

戦闘方法は戦士に近いが、本人はシーフ希望。盗賊であつた父親の影響で、世界中の宝物を探し回るトレジャーハンターに憧れている。明るく元気でヘコまない。少々間抜けというか天然な部分があるものの、広い世界を知りたくて腕を磨く少年である。

かなりすばしっこく、動きが早いのは軽装のお陰もあるが、彼が先天的に持つ小柄さや身軽さのお陰。同時にリリアやゲルト同様、父親から伝説の武具を受け継いでいる。

彼の父は元々ただの盗賊だったが、フェイトに叩きのめされ強引に勇者のパーティーに参入させられ、魔王の城で命を落とした。

同じく勇者のパーティーに関わりのあったベルヴェールやゲルトとは通じる物もあるのか、ゲルトやベルヴェールが珍しく気を許す相手でもある。

基本的に他人に警戒心や心の壁などを作らない純粋な気持ちで向き合う為、友人や面倒を見てくれる人は多いようだ。

【解説】

シヨタ成分。でも言うほどシヨタではなく、悪ガキというかツッコミというか。

一応勇者部隊の中では最年少の十三歳。ゲルトよりも強く、アイオーンに匹敵するほどのだがイマイチ全力で戦うシーンがない。陽気で前向きな少年だが、意外とツッコミもしてくれるので動かしやすい。夢を追う、みたいなキャラは一人くらい出したかった。フアンタジーだし。

この子も今だあんまり出番ないなあ。でもそのうちブレイド盗賊団を率いる団長になれたらいいな。

それにしてもこいつの能力無茶苦茶便利だな、と思う。大分前の話だが、課外授業の日辺りでこいつが仲間を転送できるのかどうかで悩んだ事があるが、自分自身のレポート能力は不可にした。何故かって？ それは便利すぎて色々不都合だからですよ。

『本城 夏流 (レーヴァテイン)』

テオドランド家に伝わる術式紋章レーヴァテインを刻まれた武具で武装した夏流。

本来ならば術式の発動に使うはずの紋章を自らの魔力コントロールにあてている。その為これといって強力な術式は発動出来ないが、魔力制御が向上している。

夏流が持つ高すぎる魔力は未だに本人だけでは制御が難しく、武器

に頼っている。装備がナツクルなのは本人が素手での格闘に慣れている為。が、剣も使えないわけではない。

過去文学少年だった夏流は家を出た後身体を鍛え、武術を学ぶ。元々何かに打ち込む性格であり家の中に閉じこもっていた反動か、腕っ節はかなり強くなっただけらしい。

レイヴァーティン神討つ一枝の魔剣という自らの魔力を拳に乗せ、電撃を放出する術式が唯一の放電攻撃だったが、最近は魔力操作により電撃を生む事も可能になった。

足に装備した神威双対と連携する武具、『天覧双対』は神威双対とは異なり、敵の防御術式を砕く蹴りを放つ『ウルスラゲナ障害を討ち滅ぼす者』という技の術式が刻まれている。

勇者部隊として戦う事で、他の生徒からの信頼も勝ち取り救世主としてようやく歩き出した。まだまだ未熟な部分は多く、仲間に頼る面が大きい、彼の心境も変化してきているようだ。

【解説】

パワーアップした主人公。というか、これになるまで全く戦えなかったわけだが。

武装については迷わずナツクルを選んだ。剣は勇者の武器という感じだし、僕は剣より槍の方が好きだ。でも、ナツクルさんはもっと好きです（引越しの意味で）

異世界に転送された現代人がいきなり戦えるのか？ その疑問に対する一つの答えとして古来より主人公が元々なんか武道やってる、という設定がある。

ちょっと武道やってるくらいで異世界で現代人がバリバリに戦えるのかどうかは正直怪しいが、永遠のアセ○アとかみたいに最初から主人公がアホ強い能力を異世界で発揮する、見たいなもんならいいかなーと思って……。

オマケ程度に武道を嗜んでいる設定をつけたが、夏流の真面目な子の一面をサポートする設定としてはそこそこ悪くはない。

どちらにせよヘタレなので、救世主という割にはそれほど勝ってなかったりする。思えばフェンリル戦以来ろくなことがないな。

『メリーベル・テオドランド（レーヴァテイン）』

テオドランド一族に代々伝わる特殊武装構築術式レーヴァテインを刻んだ武具を装備したメリーベル。

魔物の呪いに犯された身では立ち回りも戦う事も限界があり、彼女自身が選んだ自分の戦い方は他の人間を強化する一点に尽きる。

戦闘相手を解析し、そのデータを元に最も相手に対して有効な効果を持つ武器を周囲の魔力から構築し、一時的に相手に対して最強の武器を生み出せる。

夏流の持つレーヴァテイン術式はメリーベルのものと共鳴し、高い相乗効果を生み出す。対グリーヴァ戦では二人の魔力を掛け合わせ、聖剣リインフォースを上回る剣を一瞬だけでも創造する事に成功した。

彼女に呪いを飲ませた本人である兄を追っており、その兄の研究を止めさせる事、そして彼の呪いを打ち破る事が当面の目標である。真、同じ呪いを受けたことからゲルトの世話をしており、姉のような気持ちを彼女に抱いている。

【解説】

レーヴァテインというと僕の中ではあのロボットになってしまった。情緒不安定なロボットだ。

テオドランド家に伝わる術式こそレーヴァテインなのだが、夏流がレーヴァテインって武器使ってるなら秋斗にはキルシュヴァッサーって武器持たせるべきなんだろうか。

メリーベルの実力は序盤で既に明らかになっているので、もう一枚上手の能力を考えなければならなかった。自分ひとりでは不

向きな、仲間がいるからこそ真価を発揮するような都合のいい能力はないものかと考えた結果である。

所謂夏流と合体攻撃でグリーヴァを打ち負かしたわけだが、割と錬金術師っぽい能力に仕上がったのでそこそこ気に入ってる。

序盤で【メル】というあだ名で夏流が呼ぶようになる予定だったが、未だにそこまで仲良くなつてねえという。

『リリア・ライトフィールド（ロギア）』

魔王ロギアを聖剣から引き出し、その身に宿したりリリア。暴走しているのとは違い、この状態ではリリアにも意識は存在する。

ロギアに身を明け渡しているとは言え、その発言や言動はリリアの根本にある意識が元である。つまりリリアのもう一つの人格であり、彼女の根本にある心の代弁者であるロギアが表層に出ている状態。それにより、暴走で仲間を傷付ける事もなく、冷静に敵に対処する事が出来る。その力は暴走状態をさらに上回り、的確な力で敵となる存在を駆逐する。

勇者フェイトにはまだ遠く及ばないものの、その力はフェンリルと互角かそれ以上にまで引き上げられる。文句無しに勇者として堂々たる戦闘力を発揮する。

ロギアにチェンジしている間は髪色が銀色に変色し、リインフォースに浮かび上がる紋章が変化する他、所有属性が変化する。

【解説】

それにしてもリリアに付加されている設定は兎に角多い。二重、三重で『一般的な勇者ではない』仕掛けを施したかったのだが、成功してるんだろうか。

勇者だの魔王だのはよく取り上げられているテーマだ。ありきたりなテーマの中で自分らしさをどうすれば出せるだろうかと考えた結

果の策だが、どうなのか。

勇者なのに女の子で泣き虫でへこたれで魔王で、でも実はお姫様……
… どんだけえい。

でも頑張る女の子はそんなに嫌いではない。不幸でも前向きに生きて行くのだ、勇者よ。

『マルドゥーク・アトラミリア』

ヨト信仰を守る聖騎士団員にして副団長。十九歳。

美形の青年で、常に神官装束と騎士の甲冑を合わせたような装備を纏っている。基本的に剣術は使わず、神官魔法により戦う。

アトラミリアという代々聖騎士団に強い影響を持つ神官の一族の息子であり、父である大神官はかつては勇者フェイトとも共に戦った過去を持つ。

その才能を引継ぎ、非常に高い魔力を持つ。学園の生徒とは異なり、オルヴェンブルムで騎士に揉まれて育ったせいか、実力は勇者部隊よりも上である。

非常に固い考え方の持ち主だが、その実市民の事を思っており、命が散る事を良しとしない義理高い男。ただしきっちりするところはないと赦さない。

武器はヨト信仰の教えがつまった聖書。そこに記された魔力術式を発動し、戦闘する。剣と槍も一応使えるが、回復魔法と蘇生魔法を魅力に感じ、神官職についている。

直、極度のシスコンであり姉のエアリオを常に心配している。彼女の面倒を見るのが彼の役目でもあり、夏流同様苦勞人。

【解説】

さて困った、名前が思いつかない……。そういつ時やってしまったのが過去作品からパクることだ。某弓の名前になってしまった。

所謂眼鏡男子。真面目で口うるさくて融通が利かない典型的な委員長タイプ。でもシスコン。本当に非の打ち所がないとちよつとウザいかと思うが、結局馬鹿だと思つと安心する。

聖騎士団副団長にして十九歳という若さ。勿論親のコネである。その辺はそのうちやれたらいいと思う。

それぞれの組織、それぞれの主義、それぞれの人物という構図の中で聖騎士団と夏流たちを結ぶ重要なプロセス。活躍の場はまだ遠い。

『エアリオ・アトラミリア』

聖騎士団戦乙女部隊隊長。二十五歳。

マルドゥークの実の姉であり、聖騎士団団長であり大神官である男の娘。しかし団長の座はマルドゥークに継がせる気なので彼女は普通の隊長である。

戦乙女部隊と呼ばれる女性騎士のみで構成された部隊を率いる武人であり、長大な戦斧であり十字架でもある特殊な武装を運用する重騎士。

動きは重いが圧倒的な魔力障壁と一撃で大型の魔物を滅する聖戦斧を振り回し、聖騎士団の道を切り開く切り込み隊長でもある。

その勇敢な戦いぶりは聖騎士団だけではなくオルヴェンブルムの街でも有名であり、初代勇者パーティーの英雄たちに戦い方を仕込まれた過去を持つ。

重武装のわりにはおっとりした性格で常に笑顔を絶やさない美女。自主的に孤児などの面倒も見えており、アクセルにとっては育ての親であり、姉であり、複雑な想いを寄せる人物でもある。

極端にとぼけた性格の為、アクセルもマルドゥークも常に気の休まる瞬間がない。そういえばアクセルとマルドゥークはどこか似ている気もする。

【解説】

弟がマルドゥークなら、姉はエアリオだろう、という安直な発想。ちなみにアトラミリアというファミリーネームは「ダーククロニクル」というとても古いPS2のゲームに出てくるアイテムで、考えていた時隣で弟がやり直していたという経緯がある。誰もわかんねえな。

所謂お姉さん系キャラなのだが、こいつはリアルお姉さんだ。きつとさぞかし全身女っぽい事だろう。出番はあんまりないが、アイオンより余程お姉さんだ。

でもここまでどうにかなってしまっていると僕の手には負えない。アイオンくらいで丁度いい。これはこの小説の永遠のテーマでもある。

というわけで、今回はここまでで。

これからはキャラは纏めて本編で紹介しようと思います。第二回がいつになるかは未定。

この世界の日（１）

リリアは、マリア・ウトピシュトナ……女王の娘である。その事実は何となく言われれば納得する事だった。

何しろ、マリアにせよアリアにせよ、リリアと外見的に似通った部分がある。何よりも二人とも『リア』を有する名前であり、そっくりな部分は多い。

栗毛色の髪、柔らかくも凛々しい顔立ち……何より三人とも美人である。いや、何が何よりなんだ？ 混乱しているのかよくわからないが、兎に角似ているのだ。

「しかし、お姫様が……」

リリアは勇者で魔王でお姫様で……。一体どれが本当のリリアに近いのだろうか。どれも正解のようで、どれも間違った肩書きだ。

どんな肩書きがあの子に似合うのか、少し考えてみる。それはそう……多分ちよつと可愛い田舎娘、くらいでいいのだろう。

カザネルラの海辺を歩く普通の女の子くらいであの子には丁度いい。なのに、背負っている肩書きの大きさが彼女を押しつぶして行くような、そんな気がしている。

勇者だけでも重いのに、どれだけのものがあの子に背負わされているのか。それでもそれを何とか背負おうとしてあの子は頑張るのだろう。俺よりもずっと前向きで、俺よりずっと勇気のある女の子だ。これまで長い間色々なシーンのリリアを見てきた。それこそ、彼女は物語の主人公と呼べる存在なのだろう。でもいつもリリアは思えば誰かの中に居ても、何故か一人だった。理由はきつと、俺が傍に居たからだ。

リリアは俺を信じていた。今も信じようとしてくれている。あの子

の心の支えに、俺はなれているのだろうか？ 誰からも距離を離すその姿に自分を重ね、同時に冬香の姿も重ねてしまう。

独りぼっちであることを強いられるわけではなく、リリアは進んでそれを選ぶだろう。そんな一つ一つ、彼女の行いには確かに勇気があった。

へこたれ勇者の名をほしのままにしていた頃の彼女と出会い、少しずつ、知りたくない事も知って行った。

この世界にかつてあった戦争の事。勇者の話……。リリア自身の事、リリアの友達、仲間の事。敵の事、味方の事、沢山の思い出、忘れられない物。

ここで経験した、悲しみや喜び……。それが俺にとってはまやかしでしかないとわかっていても、それでもこの身体で、この自分で感じた事。それは、きっと本物だ。

リリアは、この辛い現実がある世界の中でそれでも懸命だ。躓いたリヘこたれたり、時々泣いたりしながらも笑って生きている。笑っているようにと努力している。たまに擦れ違い、気持ちも治まらず、人は幾度と無く傷付けあう。それでもリリアは笑おうとする。

それは悲しいことで、それでもすごい事だ。きっとそれは勇気であると言い換えても良いだろう。少なくとも俺はそう思う。

大きな剣を背負い、ひたすらに前へと進むリリアを誰より近くで見てきた。自分自身でもあり、冬香でもあり……。そう、でもリリアはリリアだ。肩書きは、関係ない。

暫くの間そうして壁に背を預け、俺はリリアの事を考えていた。リリア、リリア、リリア……。犬みたいで、泣き虫の女の子。それでも涙を拭いて歯を食いしばってなんとかへこたれないように頑張っている。

泥だらけでも傷だらけでも、それ故に人は美しい。自分自身の手をじっと見つめる。俺はそう、時々こうして自分の手を見つめる。

俺の手は汚れているのだろうか。きつとりリアの手は泥だらけだろう。『がんばりやさん』の手をしているだろう。でも俺の手は昔か

ら……きれいなまだ。

幼かった頃から、俺の手はペンくらいしか握った事がなかった。その手も汚れる事はなかった。本気で何かに取り組んだことなんてないから。

ぎゅっと握り締めて、綺麗な手を覆い隠す。俺は何かを変えようと、叶え様と努力したのだろうか。リリアや、冬香のように……。

「へこたれなのは俺の方、か」

目を瞑る。学園から見上げる空は青い。空だけ見ていれば、この町が今や戦場になっていることさえ忘れられそうだ。

でも、現実是不変ではない。俺は何をどうするべきなのだろう？ 原書に記されているから？ ナナシに導かれたから？ 冬香の願いだから？ リリアの為だから？

理由ばかり外に探して、俺は自分の言葉で、自分の気持ちで何かをする事をしなかったのかも知れない。救世主として、俺自身がした事……。

空はきれいだけど、そればかり見ているわけにも行かない。これ以上、リリアに何かを背負わせたくない。出来る事ならば……代わってあげたい。

歩き出す。このいつ戦いが始まるか判らない街の中で、俺はずっと生きてきた。この数ヶ月間のこの世界での生活を振り返りながら、それでも思い出すのはリリアの事ばかりだ。

結局いつも俺はあの子の傍にいた。あの子は俺の傍にいた。だから俺たちは一緒に進むのが自然で、当然なのだと思う。

だけと思うのだ。いつか俺が居なくなったら、リリアはどうなってしまうのだろうか？ こっちの世界に残るなんて選択肢は俺の中に存在しない。でも、そうになったら、どうなる。

そう、あの子がいつか居なくなってしまうたら、俺はどうなってしまうのか。わからない。考えても答えは出ない。だから。

「リリア、ちょっといいか？」

見知らぬ生徒達と話をしているリリアに背後から声をかける。へこたれ勇者様は目を丸くして小首を傾げていた。

この世界の日（１）

「うう、せつかくの思い出の場所なのにすっかりめっちゃめっちゃになつてますね……」

そんな事を言いながら壊れたベンチに駆け寄り、残念そうに指先でそれを撫でるリリア。俺は周囲を見渡し、静かに息をついた。
この世界に来て直ぐにこの場所　シャングリラの公園を訪れた。
広大な敷地は各所で発生した戦闘のせいか、見事に破壊の痕跡が残されている。あらぬ方向に噴出されている噴水を横目にリリアは振り返る。

「綺麗な公園だったのに……何だか残念ですね」

「そうだな」

「……ほんとーに残念だと思ってます？　師匠の同意の言葉はいまいち信用ならないのですよ？」

人差し指をびしりと突きつけて眉を潜めるリリア。まあ、確かに俺は結構テキトーに返事してる節があるから……。でも、残念なのは本当だ。

ここで色々な事があった。リリアと話したりゲルトと話したりアイ
オンと話したりメリーベルと話したり……んっ？ 女の子と話し
てばっかじゃねえか、俺……？

余計な事を考え込んでいると、リリアはじつと俺を見つめていた。
丸くて大きな目がそれこそじーっと俺を映しこんでいる。

「師匠、何かお話があつたんじゃないですか？」

「ああ、そうだったな」

ポケットに突っ込んでいた手を抜き、リリアと向かい合う。真剣な
俺の雰囲気を感じたのか、リリアはごくりと息を飲んで構えていた。
その緊張した様子がどうにも間抜けで思わず笑ってしまう。

俺がリリアの事を鼻で笑ったのが分かったのだろっ、リリアは顔を
紅くして睨み返してきた。なんとも気合の入らないシチュエーショ
ンだが、まあこれくらいの方が俺たちらしいか。

「リリアに聞いてもらいたい事があつてな」

「……な、なんですか？ もしかしてリリア、何か師匠のご機嫌を
損ねるような事を……」

「何故そうなる」

「何か師匠いっつも怒ってないですか……？ 眉間にしわ寄せて、
こっ、ぐーって顔してるので」

何だその顔は。お前は俺に喧嘩売ってんのか。

まあいい、こいつがバカなのは今に始まった事ではない。バカなの
は分かりきっているんだ、落ち着いて対応しなければ。このバカ。

「その……話っていうのは、ちょっと大事な事なんだが」

「え？ 大事な話ですか？」

「ああ……。なんだその顔は？ 俺が大事な話をすると何かおかしいのか？」

「いえ、なんか師匠が大事な話してくれる事って初めてだな〜と思つて」

確かに言われて見ると、俺自身の事で何か大事な話をしようという事は今まで一度も無かつたかもしれない。個人的な話はしてこなかつたしな。

リリアはそんなことまで一々覚えているのか。俺なんか最初の方はリリアがどんなだったか記憶が曖昧になってきてんだが……。

まあ、そんな性格だからこそリリアは優しいんだろうな。何かを捨てたり出来ないから、苦しんだりしてる。そういうリリアだから、俺も……。

「じゃあ記念すべき第一回の大事な話が自分自身の事って事か。何だか調子狂うな」

「えーっ！？ じ、自分の事なんですか！？ なんか作戦とかじゃなくてですか！？」

「だから、何をそんなに驚いてるんだお前」

「だって師匠自分の事なんかひとつもリリアにしてくれた事ないですよ！？ 今冷静に考えると、リリア師匠の何を知ってるんです

か!？」

そんなもん俺が聞きてえよ。

まあいい、こいつがバカなのは分かりきっていることだ、このバカ。話の腰を折られまくりだが、話を続けよう。少しだけ緊張している自分が居て、何だかおかしかった。

「それでな、リリア……」

「は、はい……」

「俺、この世界の人間じゃないんだ」

「は、はい……。はいっ?」

頭の上のうさが俺を見る。勿論これが間違っているって事は分かっている。でも、少なくとも……俺はこうしたい。

リリアにだけは黙って居なくなかった。それはフェアじゃないと思うから。リリアの事を沢山知れば知るほど、俺が彼女につく嘘が増えて行く。

この世界に、俺の存在を知ったからって破綻するようなルールなんて存在しない。みだりに言い触らすことは確かに混乱を齎すだろう。だが、それだけだ。何故ならば俺は救世主と呼ばれはしているものの、ただの人間。ただ魔法で別世界から召喚されただけの、ただの人間なのだから。

その事実を俺はこれまでの出来事から推測した。そしてリリアだけに伝えるのであれば何の問題もないと判断した。ナナシももう、俺を制するような事はしなかった。当然だ。そうする必要性は、今や無いのだから。

リリアとじつと見詰め合う。冗談みたいな話だ。俺にとってもそう

だった。リリアにとっては……多分、もつとそうだろう。

目をぱちくりさせながら混乱した様子で黙り込むリリア。俺はその姿をじっと見つめていた。視線を反らすことはしない。もう、してはならない。

「師匠……何のお話をしてるんですか？ この世界の人間じゃない、って……まさか、神様だとしても言うんですか？」

「……似たようなものかもな。少なくとも俺は、神様みたいな気持ちでこの世界を見ていたのかも知れない。お前たちに偉そうな事を言う側面で、俺はこの世界そのものを見下して来た……」

自分の世界とは違うから そんな気持ちがあるから、最初から相手にしなかった。マジにはならなかった。それが俺のスタンスだった。

入れ込むことはしなかった。全て犠牲にしても構わなかった。でも、次第に俺はこの世界を知り、世界に生きる人の事を知った。

今はもう、全てどうでもいいとも、自分の思い通りになるとも思わない。俺がこの世界を救う救世主になれる手段があるのだとすれば、それは誰かの手を借りる以外にない。

俺は無力だ。神ではなく、救世主ですらない。そんな肩書きはもう要らない。信じてもらいたいのなら……信じたいのならば。もつと誠実にならねばならない。

「この間会ったろ？ 秋斗は俺の友達だ。あいつもこの世界の人間じゃない。この世界にはない力を持つてる……。だから、あいつは原典を奪う事が出来た」

「え……？ え？ え、師匠……え？」

「だから、俺はずっとお前たちに嘘を付いてきた。多分これからも……嘘を重ねて行く。でもリリア、お前にだけは嘘を付きたく無かったんだ」

本当の事を語る方が、ずっと悲しい事もある。ずっとずっと残酷な事もある。

でも、リリアに信じてもらいたかった。何より俺は救われたかったのかもしれない。仲間に嘘を付き、生きていかなければならない自分……。それをリリアなら、許してくれると思ったのだろうか？

なんにせよ身勝手な行動であることに変わりはない。リリアにそれを押し付けているのも事実だ。だからどんな事を言われても受け入れる覚悟は出来ていた。

リリアはじっと俺を見つめ、それから眉を潜め、悲しげな表情を浮かべる。そりゃまあ、当然だろう。裏切られたようなものなのだから……。そう、思った直後だった。

「師匠はずっと、それを言いたくて仕方が無かったんですね」

俺は考えているだけで、想いを言葉にする事は苦手な人種だ。

「本当はずっと……嘘を付く事が辛かったんですね」

だから、本当の気持ちを誰かに伝えるのは苦手だった。

「誰かに、許してもらいたかったんですね」

でも。リリアは何も言わずとも、俺の表情から、普段の俺の態度から、何もかもを合致させるように理解してくれていた。解ってくれて居たのだ。誰よりずっと俺を見ていてくれた。傍に居てくれた……。だから、当たり前のように信じてくれた。

それがどれだけ難しいことなのか俺にもわかる。誰かを信じる事も、心を知る事も……とても難しい。なのにリリアは当たり前のように、俺の気持ちを汲んでくれた。

そうして俺の手をそつと握り締めると、優しく微笑んでくれる。一言も俺を責める様な事は言わなかった。沢山言いたい事があるだろうに。それだけの事をしてきたのに。

どうしてそんなに簡単に誰かを許せるのだろうか。俺は、許せるのだろうか。同じように誰かの罪の告白を受けた時、その人を許せるだろうか。

許せるようになるう。信じられるようになるう。それはきつと痛々しいほどの強さなのだ。俺はきつと、リリアのように強くなりたい。

「師匠……やつと、自分の事、話してくれましたね」

「……………そうだな。やつと、言えたよ」

リリアも、秘密を抱えてきた。だからその辛さは誰より身近な物だったのかも知れない。そういう意味でも俺たちは似た者同士だった。一度口にしてしまうと、もう全部言ってしまうようになった。俺たちは公園の芝生の上に腰を降ろし、俺は矢継ぎ早に話を進めた。この世界に来る事になった経緯、この世界でしてきた事、あつちの世界のこと……。話すことは山ほどあった。でも、この世界が冬香が作った物だとはいえなかった。

今となつては俺にとつては疑問だった。冬香は本当にこの世界を作ったのだろうか？　もしかしたら創造主は冬香ではなく、ただ俺たちがこの世界になんらかの切欠で召喚されただけなのかもしれない。わからないことだらけで、きちんと説明する事は難しかった。取り留めなく現れる話したいことを乱雑に言葉にする俺の隣で、リリアはずつと相槌を打ってくれた。

話が終わり、沈黙が訪れる。なんだか居た堪れない気持ちになり、

思わず溜息を漏らした。リリアはそんな俺を見て笑っていた。

「師匠はやっぱり不器用さんですね」

「……そう、なんだろうな。あんまり自覚は無いけど」

「もっと自分の気持ち、誰かに伝えてもいいと思います。もっと解って欲しいって言うてもいいんですよ？ 人間はきつと、皆そうして誰かに助けを求めている。求める権利を、最初から許されているから」

「……………お前、たまに偉そうなこと言うよな」

「そ、そうですか？」

「そうだよ」

目を閉じて笑う。何だか肩の荷が下りたような気がする。現実は何一つ変わって居ないのに、気持ちの持ち方でこんなに違うものなのかと驚く。

どうしてこんなに今まで思いつめていたのだろう。話してしまえば、伝えようと思えば、それは本当に簡単に誰かと繋がって行く。それはきつと、この世界で彼女と出会わなかったら気づけなかった大切な事。

俺はこの世界で何を得て何を失ったのだろう。きつと失う物よりも得る物の方が多いのだろう。少しは変わる事が出来たのだろうか。ふと、リリアが手を伸ばし、恐る恐る俺の頭を撫でていた。流石に驚いていると、リリアは照れくさそうに微笑んだ。俺はその手を取ってリリアを抱き寄せた。

この世界で過ごした事、絶対に忘れない。忘れたくない……………今は強

くそう思う。風の事、草の事、光の事、人の事、この世界のあらゆる物、一つ一つが大切だから。

「ありがとう、リリア……」

「はうつ！？ ど、どういたしまして……？」

「そんな顔するなよ。今はなんだかとても気分がいいんだ」

「……うん。師匠って、笑うと……そんな顔するんですね」

俺の顔を見つめ、リリアは柔らかく微笑んだ。こちらまで幸せな気分になる。本当にこの子は凄い。何と言うか……まるでそう、光のような子だ。

「よし。今日からもう俺を師匠とは呼ぶな」

「ふえ！？ 破門ですか！？」

「違う違う。もうお前に教えるような立場じゃないだろ？ まあ、もう結構前からお前の方が強い気もするが……」

「そんなことないですよーう。師匠は充分強い……」

「そこ！ 師匠と呼ぶの禁止！ 今日からは、夏流と呼びなさい」

びしりと指差すとリリアはきょどりながら頷いた。そうして小さく声を上げる。

「なつる……さん」

「呼び捨てで良いって。上下の関係何かない、ただの『仲間』なんだから」

「……うう、でも……」

「でもない！ はい、呼び捨て！」

「はわっ！？ な、なっ 夏流？」

「夏流だ」

「……夏流ですね」

「そうだな」

「……夏流」

「ああ」

「夏流………夏流、いい名前ですね」

何度も俺の名前を心の中で反芻させるようにしてリリアは顔を上げた。

リリアに呼び捨てにされるのは少しこそばゆいが、思えば同い年であるはずのゲルトはバリバリ呼び捨てだしな。別にそんなこたねえか。

恥ずかしそうに俺の名前を連呼するリリア。段々うざったくなってきたが、何がそんなに嬉しいのか頬を緩ませながら俺を呼ぶ。

「何だか女の子の名前みたいですわね」

「……デジャヴか？ 何か、前に同じような事を言われた気がする」

「そうですね。確か会ったばかりの頃、一回言いました。その時は怒られちゃいましたね」

「そうだったわけ？」

「そうですね。あの時は怒ってたけど、今はどうですか？」

笑うリリア。俺は少しだけ考えて、それからその頭を小突いた。

「うつせえ、バカ」

「うなあつ！？ 何で直ぐそうやって叩くんですかー！ バカになっちゃったらどうするんですか！？」

「もう既に大分バカだと思っただが」

「だーかーらー！ もっとバカになっちゃったらどうするんですか！？」

それは自分がバカだって認めてんのか？

白い歯を見せて悪戯っぽく笑うリリアに釣られて俺も笑う。いつ戦闘が始まるかも判らないのに、我ながら暢気なものだ。

それからしばらくリリアと肩を並べてのんびり空を見上げていた。

雲の切れ間、木漏れ日の最中に見える日の光に手を翳し、時間を無為に過ごす。

無為な事さえも愛しく思えるようになったのは、きっとこの世界に

来たお陰だ。俺はこれからも変われるのだろうか。もっと、何かを救えるように。

時が過ぎ去り、俺は立ち上がった。ずっとこうしていたいけど、やらなきゃならないことはまだまだ多い。静かな時間はもう終わりだ。次はいつになるかもわからない。

リリアを救う為、仲間を守る為……自分に出来る事を全てやろう。歯を食いしばって泥だらけになる事も厭わない。俺はそうやって、彼女のようになれたら最高だ。

勇気という言葉に刻もう。それは全てに通じている。きっと光と同義、輝かしい言葉だ。

「あ、あのうつ」

立ち去ろうとする俺の背中目掛け、リリアが声をかけていた。芝生から飛び出し、レンガ敷きの大地をよるめきながら走り、リリアは少し離れたところで俺の背中を見ていた。

「仲間……仲間になったって事は、夏流はリリアを対等な人間だとして認めてくれたんですね？」

「……ああ、そうだな。お前は俺と対等だ」

「だったら……だったら、リリアにも権利、ありますよねっ!？」

胸に手を当て、リリアが叫ぶ。その表情は何と言うか……とても複雑だった。悲しげな、嬉しげな……ああ、そうだ。多分同じ顔をした女の子の事を一人だけ俺は知っている。

全く同じ動作で、全く同じ言葉選びで、彼女は叫ぶ。次に続く言葉を俺が思い出すよりも早く、リリアは顔を真っ赤にして叫んでいた。

「リリアにも、夏流を好きになる権利……ありますよね　　っ!？」

『私にも、夏流を好きになる権利……あるよね　　?』

ある夏の日の景色が脳裏を過ぎる。その言葉を思い返した時、俺はどんな顔をしていただろう。

不安げにじつと俺を見つめるリリア。どんな言葉を返せばいいのか、今でもわからない。どうすればよかったのか、なんて……多分一生わからない。

でも、あの時と同じではいけないと思った。そのまま繰り返すなんて事はしたくなかった。だから俺はリリアに歩み寄り、その頬を撫でる。

リリアは目を潤ませながらじつと俺を見ていた。瑞々しい唇から吐息が漏れ、熱い頬は冷たい指先を暖めてくれる。

「俺は……あの時……。どうすべきだったと思う?」

何を自分で口走っているのか。リリアは俺の言葉を聞き、理解できないという顔をしていた。当然の事だ。彼女には関係ない。

でも、俺は判っていた。あの時本当はどうすべきだったのか。自分がどうしたかったのか。だからもう、あの時見たいにはしかなかった。俺はリリアの顎に手を当て、リリアと見詰め合う。

答える言葉は持たなかった。過去、同じ事を言った彼女とその姿が大きくダブる。幻影　虚幻のその姿にリリアを重ね、唇を重ねた。それはあの時俺が出せなかった答えであり、きつと正解だった。でも、自分でもわかっている。これは、『虚幻』だ。

嘘　そして幻に過ぎない。この気持ちも、この愛情も、真実ではない。間違いだとかわかっていて。でも　俺はそうしたかった。その誘惑に抗えなかった。

思えばそれが全ての破綻の始まりだったのかもしれない。でも、そ

の瞬間は何も考えられなかった。ただリリアの唇の感触と、思い出だけを貪りたかった。

きつとりリアは全てを見透かしていた。それでも俺を抱きしめてくれた。お互いに嘘だとわかってそれを信じるなら、そこにあるものはなんだろう。

それもきつと虚幻……。真実ではない。真実ではない俺が求める真実。矛盾した二つのもの。この世界の事。

冬香の事。

目を反らせないその全ての事、俺は受け入れて行かなければならない。

沢山のものを、裏切って。

「大好きです、夏流」

そう囁いたリリアの顔を、俺は覚えていなかった。

この世界の日（１）（後書き）

「それいけ！ デイアノイア劇場Z」

＊終わらない…… 100部で終わる気がしない…… 編＊

夏流「というわけで、100部以上行くかもしれない」

ゲルト「行けばいいじゃないですか」

夏流「だが、七十部くらいで長期連載をやってきた作者としてはそんなに続けるだけの気力がないのだ」

ゲルト「気力とかそういう問題なんですか？」

夏流「そういう問題だ。これから過去編とかも丁寧にやる予定だったが、そんな事を悠長にやってる場合じゃないな。何とか九十七部くらいで終わるようにしないとだろ」

ゲルト「三桁は行きたくないんですね……」

夏流「思い切り全て書ききる為に気力を使い果たすか、適当に纏まりそうところで妥協するか……これが長期連載する上で毎回悩むことだ」

ゲルト「……それ、駄目なんじゃないですか？」

夏流「ほら、二部構成にして続編に任せて終わるとか……」

ゲルト「投げっぱなしってコメが来て叩かれるからやめてください！」

夏流「どうしろっていうんだよ!？」

ゲルト「……なるようになるんじゃないですか？」

夏流「それで毎回オチてない気がするの俺だけか？」

ゲルト「……。でも、長期連載の旧作とか未だに評価とか来ると何だか悲しくなりますよね」

夏流「後で読み返すと恥ずかしいことこの上ないな」

ゲルト「他の長期連載を読んでくれた数少ない読者様たちにこの場を借りてお詫びします」

夏流「本当にお疲れ様でした」

ゲルト「……でも、ディアノイアもそのうち他の長期連載で謝られる作品になるんですね」

夏流「そういうこといわないでくれる？」

この世界の日(2)

この世界の事を、どんな風に思えばいいのだろう。

この世界の事を幻だと、虚幻だと思うのは、きっと俺がこの世界の事を本当は知っているからだ。

あの日、ナナシと出会った日。冬香の手紙と、原書。いくつもの思いが交差する場所で俺は一度本を手に取り開いた。

けれど気づけばその内容は頭からすっぱり抜け落ちて、それ以外の事も忘れてしまったのだろうか。

リリアは可愛い。一生懸命で、一緒に居れば俺も強くなれるようなそんな気がする。いつも笑って頑張っているのが素敵なのは、リリアだけに限る話ではない。

あの子は似ている。冬香にそっくりだ。言動や顔だけではなく、その魂というか、根本的な部分で酷似している。

その姿を自分の都合よく解釈し、他人の影を重ねる事はただの侮辱に他ならない。誰かの代用品……秋斗に言われた通りの行動を、俺はただ行っていただけなのかもしれない。

秋斗や冬香はきっと俺の事を誤解していた。冬香の傍に俺が居なきやいけなかったんじゃない。俺の傍に、あの子が居てくれなきゃ駄目だったんだ。

駄目だったのはあいつらの方じゃない。俺の方だ。一人では生きていけない。一人では頑張れない。一人でそこに居る事に、どんな意味があるというのか。

子供の頃、まだずっと幼かった頃、俺の傍には当たり前のように双子の妹である冬香の姿があった。

冬香はどちらかというと男の子のような元気な子で、彼女はいつも俺を導いてくれた。幼い頃、秋斗と俺を引き合わせてくれたのも彼女。全部彼女だ。

でも多分、それが当たり前だった俺はだんだんと自分が嫌に成っていったのだろう。中学生になった頃には、彼女と一緒に居る事に疑問を覚えるようになっていた。

冬香は優れた人間だ。そこを行けば俺は凡人で、彼女とはつりあわない。彼女は俺を置いて行けばどんな高い所へでも飛べるのに、何度何度も振り返って俺の所に走ってくるから、先に進めない。

俺のペースに巻き込んでしまう。それでどこにも冬香が行かないのだと思うと安心する自分が居て余計に嫌になった。何をしているのだろう。自問自答を繰り返した。

「何だ、そんなチンケな事で悩んでんのかてめえ？ 相変わらずくだんねえこと気にする奴だな」

というのは、相談を持ちかけた秋斗の言葉だ。秋斗は俺がどれだけ深く悩んでいるのかわからなかったのだろうか。無神経なその態度にイラついたのを覚えている。

「誰かと誰かが一緒に居る事に意味とか理由とかそういうモンを求めようと持ってくるからゴチャゴチャすんだよ。てめえが冬香と一緒に居たくて、冬香がてめえと一緒に居てえっつーんならそれでいいだろが」

「……………だけど、俺たちは一生一緒に居られるわけじゃない」

俺の言葉に教室の机の上に両足を投げ出して漫画を読んでいた秋斗も顔を上げる。そう、俺たちは永遠に一緒に居られるわけじゃない。二人は兄妹だ。双子とは言え、今はもう全く別の命。だからいつかは全く別の道を歩かなければならない。それが自然なんだ。いや、それはもう始まっていて当然なのに、あの子は一向に俺から離れようとしな

不自然なんだ、それは。俺たちは一緒に居られないんだ。なのにどうして冬香は俺から離れない？　俺が彼女の限界を作ってしまったているのではないか。足枷なのではないか。

「確かに、永遠なんてモンはない。だからいつかどうしても対立したり擦れ違ったりする。人間なら当然の事だ。いつかそれが来るのが解ってるなら、今はそうじゃないってだけで別にいいんじゃないのか」

「そんないつくるのかどうかも判らない終わりなんて俺は嫌だ。終わらせるなら自分でちゃんと終わらせたい……」

「はー、本当にめんどくせーなお前。あのな、人間の一生なんて予測不能でエキサイティングなくらいが丁度いいんだよ。そもそも何でも思い通りになるわけじゃねえし、思い通りになることの方が少ないんだよ。お前、相当我侭言ってるの解ってるか？」

秋斗の言うとおりだ。だが……。それでも……。いや……。違うのだろうか。

「夏流、秋斗！　一緒にかーえろっ！」

振り返ると渦中の人物が駆け寄ってくるのが見えた。秋斗は漫画を鞆に突っ込んで立ち上がり、俺の肩をたたく。

「別にいいじゃねえか。人間の一生なんて幻みたいなものだ。永遠はない、なんていったけど……お前たちは例外。続けようと思うなら、ずっと続けられる。夢もみられる」

「それが間違っていたとしても、か？」

「はっ！ 間違いとか正解とか、人間の行動にそんなもんをつけてる時点でお前は温いんだよ。男ならてめえの采配を信じる」

「う？ 何二人で内緒話してんの？ なになに、なんか私に関係のある事？」

「あーん？ てめえがイチヤイチヤしすぎっからコイツが困惑してるっただけの話だよ。な？」

「ちがつ！ 何言ってんだてめえ！」

「ひやははははっ！ そんなキレんなよ ダチだろ俺様たちはよ」

「それとコレとは別問題だっ！！」

身軽な動作で俺の手を掻い潜り教室の中を駆け回る秋斗。振り返ると冬香が柔らかい笑顔で俺たちを見ていた。

なんだか悩んでいる事も馬鹿馬鹿しくなってくる。溜息を漏らし、二人と一緒に帰り道を歩く。毎回こうやって三人で肩を並べても、話しているのは冬香がメインだ。

冬香はよくしゃべる。一日学校であつたことをこれでもかというくらい俺たちに聞かせる。お陰で俺も秋斗も立派な聞き上手になってしまった。

「それでね、国語の伊藤が女子の胸元ちらちら見てたからね、先生！ 女子の胸ばっかり見ないでください！ って言っってたんだ」

「……伊藤、悲惨だな」

「胸くらい俺様だつて見るぞ？ ほら、今擦れ違った女結構デカかったし」

「秋斗が変態なのは別にもういいかな」

「何がいいのか俺にはわかんないが、まあ言っても無駄なことだけは明らかだ」

「おうよ！ んで、伊藤はそれでどうなったんだ？ まさかそれで終わりってわけじゃねえんだろ？」

「うん。どうしても見たいなら私を見なさいって言つといた」

二人してずっこけた。そして同時に立ち上がり、同時に左右から冬香の頭を叩く。

「阿呆！」

「ボケ！」

「いったあゝい……！？ ひどい！ なんで同時に叩くの！？ 馬鹿になっちゃったらどうするの！？」

「お前は最初から馬鹿だ！ ああ、馬鹿馬鹿、馬鹿すぎる！」

「つーかてめーホント馬鹿だな。アホだな……ホント馬鹿だな」

「なーんでそんなこといわれなきゃなんないのさーっ！！ 他の女

子の胸元見られるくらいなら、私の胸元見て満足してくれればそれで解決するじゃん！ 誰も傷つかない、唯一の素敵な解決方法なんだよ」

「普通はお前が傷つくんじゃないのかそれは……」

「……………あー、くだんねえ。伊藤は後でシメとこうぜ、夏流。駄目だあいつ。人間として駄目だ」

「やめてよーっ！！ 二人が番長みたいな事するから、冬香が一生けんめいに庇ってるんだよ！？ 今時中学生で番長とか流行らないんだよーっ！！」

冬香と秋斗と俺と三人、多分この頃は最高に仲が良かった。別に何を言うでもなく一緒だったし、それはこれからもずっと続くと思っていた。

多分それは俺だけではない。冬香も、秋斗も、同じ事を考えていたのだろう。でも、やっぱり秋斗の言う通り永遠なんてものはなかった。

それは誰か一人でも『続けよう』という気持ちをなくしてしまえば、当たり前のように崩壊する。そう、それこそ正に、虚幻のようなものだから。

この世界の日（2）

「学園の地下にある古代遺跡の起動プログラム？」

部隊の準備も整いきらない最中、アルセリアに呼び出された俺たち

に告げられたのは不思議な単語だった。

ラ・フィリアの学園長室の中、先頭に立つ俺にアルセリアは古ぼけた短剣を差し出した。洋風の所謂両刃の短剣だが、そこには俺にも見て取れる漢字が記されていた。

「……『天照』……？」

『それは、プロミネンス・キーと呼ばれる物です。この学園都市デ・イアノイアのプロミネンスシステムを起動するのに必要となります』

何でもこの剣のようなものの中に起動プログラム他この学園の古代遺跡を動かす為に必要な物が全て詰まっているという。

アルセリアの話は単純だった。この鍵、プロミネンス・キーをラ・フィリアの地下に持って行き、学園が本来備え持つ防衛システムを起動してほしいとの事であった。

『元々シャングリラは要塞都市として建造されました。本来のシャングリラのシステムが起動すれば、生徒や一般人に犠牲を出さずとも持ちこたえる事が可能になるでしょう』

防衛に戦力を割かず済む事、それは即ち攻めに転じる足がかりともなるだろう。成程、確かに理に敵っている。出来れば生徒だって戦わせたくはないのだから。

未だに大規模な攻撃は行われて居ないが、聖堂騎士団もいつ痺れを切らして攻め込んでくるかわからない。皆脅えているし、不安がつている。戦闘経験がなければ、一般人なら尚更だ。

勿論俺はそれを引き受ける事にした。この剣一つでこの学園を守れるのならばやってみるだけの価値はあるだろう。

しかし、マルドゥークだけはあまり賛成しない様子だった。プロミネンスシステムという単語を耳にして眉を潜めている。他の連中は

プロミネンスシステムに詳しくはないのか、皆きよんとしていた。

『キーの修復にはアイオーンの手を借りました。封印の解除に時間がかかってしまいました。今なら問題無いでしょう。それと、地下のシステムに不備が無いように、数日前からヴァルカン・ライトフィールドが地下システムの修復作業に当たっています』

「え？ おじいちゃんが、ですか？」

『地下でヴァルカンと合流し、プロミネンスシステムを起動させてください。詳しい話はアイオーンから』

「わかった。それじゃあ早速システム起動に向かう」

『あ、ちょっと待ってください』

何だか可愛い声で呼びとめられてしまった。威厳ある態度にすぐに戻ったが、多分言い忘れたことが何かがあって慌ててたんだろ……。

『地下には修復技能のある人間を連れて行ってください。それと、地下では魔物や防衛システムが暴走している可能性もあり危険です』

「成る程……。それじゃあ俺とアイオーンと……メリーベル、頼めるか？」

二人とも同時に無言で頷いてくれた。残りのメンバーはいざ地上で何かあった時のためにも残しておくべきだろう。この間のダンジョンと同程度の警備なら、三人も居ればなんとかなる。

とりあえず俺が離れるとなると、現場の指揮を誰かに託さないと。

アイオーンは一緒に行ってしまうだろうから、マルドゥーク……いや、こいつはこいつで騎士団を纏めるのに忙しいのか。じゃあ……。

「んー……リリア、ゲルト。勇者部隊ならびに生徒部隊のまとめ役を頼めるか？」

「解りました。貴方は気にせずその……ぶろみねんす？ というものを起動してきてください。わたしとリリアが居れば大丈夫です……
……リリア？」

リリアを見やる。リリアは俺と目があうと見る見る顔を真っ赤にしてゲルトの後ろに隠れてしまった。小首を傾げる皆。俺は無言でリリアに近づく。

俺が近づくとリリアはゲルトの影に隠れる。リリアを追いかけて俺もゲルトの周りを回る。リリアは逃げる。俺は追う。ゲルトは目を丸くして周囲をうろろする俺たちを見ていた。

「……ニーチャンたち、リアルに何してんの？」

「いや、何だかよくわからないんだがリリアが逃げるんだよ」

最終的には逃げ切れないと踏んだのか、ゲルトの胸にしがみ付いて顔を押し付けてぶるぶるしていた。でもぶるぶるしているのはゲルトもで、まさかのリリア突然の抱きつき行為に顔を紅くして目をきらきらさせていた。大丈夫かこいつら。

「おいリリア、作戦聴いてたか？ 現場の指揮はお前らになるんだぞ？ おーい？」

「夏流、リリアに何か嫌われるような事をしたんじゃないですか？」

「してねえよ……。して、ねえはずだ。してねえよな？」

腕を組んで考え込む。うーん、気づかないところで怒らせてしまったんだろうか。良く判らないが、リリアの様子が変な事だけは確かだ。

「……いや、あのう。どうしてついさっきあんな事した後なのにそんな平然としてるのかリリアには謎なんですけど」

「あ、あんなこと……？」

ゲルトが俺を見る。何を考えているのかわからんが、なんかこう……変な誤解を受けている気がする。

しばらくゲルトは俺を見たまま固まっていた。そうしてだんだんわなわなと震え出し、魔剣に無言で手を伸ばす。

「待て待て待て！ 何が起きたっ！？」

「貴方は一度、死んだ方がいい……」

「なんもしてねえからっ！ ただちょっとキスしただけじゃんっ！？」

場が静まり返ってしまった。我ながら墓穴を掘った。

全員固まっているうちに行動しよう。腹を抱えて笑っているアイオンと遠いところを見ているメリーベルの手を引き、部屋の外に向かって走る。

学園長室の扉が閉まった瞬間、背後でゲルトが魔力解放したような気がしたので全力で螺旋階段を駆け下り、地下の入り口を気合でこ

じ開けてそこに飛び込んだ。

「はあはあはあはあ……危なかった」

「あははっ！ あははははははははははっ！」

「笑うなー！」

「……………もうあたし、夏流が何をしても驚かない事にするわ」

二人とも各々の態度で俺を見ている。くそう、今更さっきのは冗談ですとも言えないしなあ……。

とりあえず気を取り直して地下に続く階段を見下ろす。狭い通路だから一人ずつしか通れそうにもない階段……。長年誰も通って居ないのか、手摺も崩れかけている。

ヴァルカンはこの下に居る。冷たい風が吹き上げてくる学園の地下目指し、俺たちは移動を開始した。

地下へと続く階段を下りるとやはり前回同様広い空間が広がっていた。しかし例に北方大陸の地下ほどではなく、進むべき道もはっきりしている。一本道で向かい側に見える扉の左右、様々な機械が転がる通路が続いている。

三人でそこを歩きながら左右を眺めると、やはり北方大陸の遺跡に近いものを感じる。だがあそこよりもなんというかこう……もっと最近まで動いていたような、そんな印象を受ける。最近とは言え年代のスケールが違いすぎるのだが、少なくとも何年、何十年か前にはここには人が居たような、そんな感じである。

「ところでアイオン、お前はプロミネンス・キーってやつについて詳しいのか？」

「うん？ さあ、詳しいと言えば詳しいのかも知れないね。ボクは様々な術に精通しているから、今回は封印の解除作業を手伝っただけだとしても」

「そもそもこの古代遺跡のプロミネンスシステムってのは何なんだろう？」

ネーミング的に何かの機械のような気がするが、この世界に機械的な文明能力はさほど存在しない。だとすると、そのプロミネンスシステムもやはり嘗ての世界の遺産なのだろう。

だが、学園の地下に存在する防衛システム、プロミネンスとは一体何なのか。それが有用である事はわかるが、どんなものなのか想像がつかない。

俺の隣を歩きながらアイオーンは上着のポケットに両手をつっ込み、目を細めて笑いながら答える。

「この学園都市が建造される前、十数年前。ここには魔王ロギアに対抗する為の一つの遺産があった。それがプロミネンスシステム……ラ・フィリアに隠されたもう一つの力だ」

「……この建造物は魔王が建築したんじゃないのか？」

「元々この世界にあったものさ。ただその扱いの方法を見出したのは魔王ロギアだった。勇者フェイトたちによってこの施設はクイリアダリアに奪還され、以後は魔王大戦でも高い効果を発揮したのさ」

「……噂に聞いた事がある。確か、魔王が扱うのと同じ魔物……機械の軍隊を制御する機能があるとか」

メリーベルの発言にアイオーンが頷く。成る程、プロミネンスとい

うのはこの地下に眠る機械の軍隊を操作するものなのだろうか。確かに地下遺跡のガーディアンマシンが仲間になってくれればシャングリラの防御は容易くなる。

「だったら最初から機能させときゃよかったんじゃないか？ 鍵に封印施して放置して……。つーか、ヴァルカン爺さんが修理してるってことは、一度壊れたのか？」

「壊された、というのが正確だね。大戦が終了した直後、この地下のプロミネンスシステムは一度破壊されたんだ。勇者ゲインの手によってね」

予想していなかった名前に驚く。勇者ゲイン　ゲルトの父によって破壊された？ 何故勇者であるはずのゲインがプロミネンスシステムを破壊するんだ？

「その後、プロミネンス・キーはアルセリアの手によって嚴重に保管されてきた。今回この判断を下すのも彼女にとっては余程の覚悟を必要としただろうね」

「……プロミネンスシステムはそんなに危険な物なのか？」

「それは君が見て判断すれば良い事じゃあないかな？ それに物とは、扱う人間によってその意味を変える。君がその鍵を正しく使う事が出来れば、プロミネンスシステムは人々の脅威にはならない」

そうは言うが、危険な物は危険だ。成る程、プロミネンスが危険な存在の手に渡れば当然危険は降り注ぐ。故に封印……。ゲインが破壊したという言葉がいまいち引かかるが、その気持ちもわからないでもない。

もしこの戦争に使われた強力な防御システムが起動したら、この町を守るのだろうか。だが、それは同時に戦争の時代へと世界を休息に引き戻すような行為だ。戦乱の世が、広がって行く……。そんな不安を覚える。

他に打開策がないのもわかってる。だがアルセリアのいう『滅びの戦争』というものが近づいているような、そんな形にならない予感。プロミネンスシステムを起動させる事は正しい行動なのだろうか。

「……考えている場合じゃないか」

今だって地上では戦闘が発生しているかも知れない。仲間でありまだ子供である学園の生徒たちが戦っているかも知れない。俺がここでうだうだ言っている場合ではないんだ。

三人で通路の最奥に辿り着く。その部屋には何も無く、床に巨大な魔方陣が描かれていた。全くどうしようもない状況に道を間違えたのかと悩んでいると、手の中のプロミネンス・キーが反応を示していた。

淡く紅く輝くそれを魔方陣に翳すと、床が同時に四方に開き、地下へと通じる隔壁が次々に開いて行く。まるで嚴重に封印されていたものの鍵を開けてしまったような、そんな不安が過ぎる。

「……これは、梯子で降りろってことなのか？」

「そのようだね」

「そうか……。じゃあ、俺が一番最初、につ！？」

背後からメリーベルに頭部を叩かれてしまった。俺が痛がっている間に二人はサクサク梯子を降りて行く。何が……。なんだ？ リー

ダーだから最初に降りたほうがいいと思ったのに、なんだこいつら。三人でそろそろと長い階段を下りると、そこにはさらに異質な空間が広がっていた。壁や床に果てしなく描かれた魔術文字、刻印……。薄く輝くそれらは今でも魔力を通し、解き放たれるのを時遅しと待っているかのようだ。

激しい威圧感のようなものを感じる。だが見ると壁などに併設されているびっしりと魔術文字が記されたコードなどの配線は一度断裂し、修理した痕跡があった。ヴァルカンに近いのだろう。

「しかし、なんだこの施設全体を覆っている莫大な魔力量は……。一体どこから供給されてるんだ」

これだけの巨大な施設全体の魔力を供給するなんて並大抵の事じゃない。一体何がどうなっているのか……見当も付かないほどの建造物だ。

ラ・フィリアは雲をつきぬけ遙か彼方まで延びている塔だ。その全体に魔力を供給する何かがこの地下に存在するのか。そう考えると思わず息を呑む。

何の障害も無く、ただ不思議な回廊を抜ける。すると通路の道端で大掛かりな工具を脇において修理をしているヴァルカンと遭遇した。どうやらいじっているのは扉らしく、俺たちの気配に気づいて振り返る。

「やあつときやがったか。大方修理は終えちまったぜ」

「爺さん、一人でここに籠ってたのか？」

「ん？ ああ、ここ何日かはここにずっとな。外はどうなってるんだ？ アルセリアのヤツが、近いうちに戦闘になるだろうとか言ってたが」

この爺さん何も知らないでここにいたのか。仕方が無いので外の状況を伝えると、特に驚く様子も無く頷いた。どうやら予想済だったらしい。

「それでお前がキーを預かってきたわけか。まあ、お前だからこそって事もあるんだろうけどな」

「……？ それで爺さん、何か他に手伝う事はあるか？」

そんな会話をしていると背後から人の気配を感じて振り返った。するとそこには意外な人物の姿があった。

ヴァルカン同様、全身を汚した格好で歩いてきたのは何とクロロだった。相変わらず腕のないクロロは俺たちを見てぺこりと一礼した。

「クロロ！？ なんでお前が！？」

「やっぱり知らなかったのか？ クロムロクシスはラ・フィリアのコントロールガーディアンだ。前の戦争の時、ゲインに引き取られたわけだったんだがな」

「クロロがラ・フィリアのコントロールガーディアン？ その、コントロールガーディアンっていうのは……？」

「ああ。この塔の管理システムの一部だ。尤も、この塔が封印された時に大半のクロムナンバーズは廃棄されたんだがな」

クロロが塔の管理システムの一部……？ 何だか妙なめぐり合わせだが、イマイチ信じられないな。だってこいつ、道端で転がってたような駄目ロボットだぞ……？

話題の中心にいるクロロは機材をヴァルカンの傍に置き、俺に歩み寄った。相変わらず無表情な少年だが、そういえばもう暫く顔を見ていなかったつけ。

「久しぶりだな。お前まさか、ここんと爺さんと一緒にここにいたのか？」

「肯定します。クロロはここで修理を行っていました。ヴァルカンは信頼できる人物です。プロミネンスシステムの修理作業を共にする事を許可出来ると判断しました」

「……お前、プロミネンスシステムにかかわりがあったのか。全然そんな風には見えないけどな」

そういえばこいつ、なんで腕をなくしたんだったか。中々思い出せないが……もしかして、こいつはプロミネンスシステムにかかわりがあるから腕を失ったのか？

そしてゲインとも関わりのあるリリアの傍にいた……そう考えるのは俺の都合が良すぎる妄想だろうか。いや、だが今実際こいつはヴァルカンとも知り合いで……。うーむ。

まあ、詳しい話は後回しだ。二人が扉を修理する作業を終えると先ほど鍵で開いたものと同じ魔方陣が扉に浮かび上がった。キーを翳すと扉は四方に開き、次々に隔壁が上がって行く。

「うし、丁度いいタイミングだったな。おら、システム本体に会いに行くぞ。いい機会だろ、丁度いい」

「……うん？ ああ、わかった」

良くわからなかったが、長い長い通路を前に進んで行く。その最深

部にある扉を鍵で開くと、眼前に広がる巨大すぎる空洞に思わず圧倒された。

壁中にびっしりと浮かぶ魔術文字、大量のモニター画面に映される学園全域の様子。まるでSFのような光景に圧倒される中、部屋の中心部にある巨大な機械の塊が目に残る。

「あれがプロミネンスシステム……？」

「の、中核だ。言わばクロロの真上に位置する上位システムってところか。お前の持つ鍵で封印は解除される。ほれ、行け」

「お、おすなよ……。鍵で、開ければいいんだな」

機械の塊の正面には『天照』という文字の下に、『PROMINE NCE』と記されている。

プロミネンスシステム、その中核となる機械にはきちんと鍵穴が存在した。その鍵穴にキーを差し込むと、眩い光が部屋中を奔る。

轟音と共に蒸気が放たれ、部屋を満たして行く。そうして開かれた場所に在ったのは、一つの椅子だった。

「これが……プロミネンスシステム？」

困惑する俺たちの中、前に出たアイオンが両手をポケットに突っ込んだままにそれを見上げる。

「……さて、懐かしい席だ。久しぶりに役目を果たすでしょう」

その台座へと続く階段を昇り、アイオンは機械に手を翳す。その指先が空をなぞると、そこには光の鍵盤が出現した。幾重にも折り重なるその光は交わり、楽器のような形を形成する。

光の中、アイオーンは指先で鍵盤へと触れる。まるで共鳴するようにアイオーンの真紅の髪が輝き出し、部屋全体の魔力が通って行く。

「アイオーン……！？ 一体何が……っ！？」

「アイオーン・ケイオスってのは、ある男が名づけた名前だな。あいつには元々名前ってモンが無かった」

なにやら懐かしげにそんな事を語るヴァルカン。訳がわからず混乱する俺を見やり、男は言った。

「あいつが長年、教師でもないのにこの学園の中で高い自由と発言力を持っていたのか疑問に思った事はないか？」

「……それが、どうしたんだ？」

「だから、簡単な話だ。いっちなまえばこの学園は、あいつそのものなんだよ。『プロミネンスシステム』の 制御ユニットのな」

爺さんの言っている言葉の意味がイマイチわからなかった。

アイオーンがプロミネンスシステムの制御ユニット？ なんだ、そりゃ……。

光の鍵盤に手を伸ばし、アイオーンが戦慄を奏でる。学園全てに響き渡るかのように振動したその衝撃は、シャングリラに眠る力を目覚めさせる、まるで序曲だった。

この世界の日（3）

ディアノイアをぐるりと囲む門の外、武装した生徒たちの先頭に立つリリアの姿があつた。

聖堂騎士団を警戒していた仲間から、いよいよ攻撃が始まるかもしれないという報告を受けた生徒達は各々守るべき物の為に戦いを始めようとしていた。

誰もが子供であり、不安は隠せない。緊張の色も濃い。そんな中、リリアとゲルトは落ち着いた様子で先頭で肩を並べる。

「シャングリラがこうまで広いと全域は防御出来ませんね」

「うん。やっぱりディアノイアだけでも守らないと。街は壊れたらまた作り直せばいいけど、人はそうはいかないから」

「……ええ。こんな馬鹿げた事で、誰かの命が失われるような事があつてはならない」

魔剣を握り締めるゲルト。そう、戦争など誰も望んではない。仕方が無くおきてしまうから、仕方が無く戦わなければならないから。しかし生徒達の多くは今己の人生に後悔などは抱いて居ないだろう。むしろ感謝……これでよかったのだという自己への肯定が昂ぶっている。

そう、力があるから、己を鍛えてきたから今こうして守る為の戦いが出る。それがどれだけ素晴らしい事か。今正にこの瞬間の為に、彼らはこの町で生きてきたのだから。

それはリリアもゲルトも同じだった。学園に存在する二人の勇者、最愛の友。背後を預けるのにこれ以上に相応しい相手など存在しない。故に、二人に不安はなかった。

隣に、後ろに、彼女がいてくれるのならば負ける気などしない。
そんな絶対的な、無根拠でも関係なく相手を思える純粋な気持ちが
二人の力と成っていた。

「……リリアは、本当に強くなりましたね」

「へっ？ き、急にどしたの？」

「いえ……。貴方と出会う事が出来て、本当によかったと今思っていた所です」

「そうなの？ だったらリリアとゲルトちゃんの気持ちは繋がってるね。リリアもおんなじこと考えてたもん」

柔らかに笑うリリアの笑顔に顔を赤らめるゲルト。それから目を閉じ、気を取り直して正面を見据える。

戦闘開始までもう時間も無い。出来るならば一人でも多くの仲間を救いたい。一人でも多く、犠牲を出したくない。

誰もがそう願い、覚悟を決めた時だった。ふと、どこから聞こえてくるのだろう。耳にした事のない不思議な旋律が街を包み込み始めていた。

「……なんだろう？ 何の音？」

リリアがそう呟き、振り返った時だった。大地が激しく振動し、生徒たちの間に動揺が広がって行く。リリアとゲルトは顔を見合わせ、同時に地面を見つめた。

その二人が見つめる先、遙か地中ではアイオンが今正にプロミネンスシステムを起動させようとしていた。学園……いや、シャングリラという街そのものが激しく躍動する最中、夏流はよるめくメリ

ーベルを抱きとめ、眉を潜める。

「爺さん、何が起きてるんだ!？」

「プロミネンスシステムが発動しようとしてんじゃないか」

「そもそもそのプロミネンスシステムってなんなんだ!？」

「あん？ まあ、見てれば解るだろ」

アイオーンの演奏に伴い、管理室の中に無数の映像が映し出される。それは外の映像を無数に映し出し、その中にはリリアたちの姿もあった。

学園真上からの映像を目にして夏流はその目を疑った。シャングリラ全域が激しく振動し、今正に突撃をかけようとしていた聖堂騎士団たちも不意を突かれ慌てふためいていた。

その騎士たちの足元に魔方阵が浮かび上がり、そこへ巨大な塔が大地から伸びて行く。それは一箇所だけではなく、学園の各所に巨大な塔は天を目指して伸びて言った。

魔術文字をびつしりと刻まれたそれらは高々と聳え立つと、同時に光を発して全ての柱を繋げて行く。眩い閃光はシャングリラ全体を包み込み、そして同時に学園もまたその形を変えようとしていた。

「わ、わ、わっ!？ ゲルトちゃん、が、学園の中に避難っ! みんな、撤退ー! にーげーてー……わにゃあああああっ!？」

「リリアッ!？ 何故そこに引つかかるのですか、貴方は!？」

仲間に指示を出していたリリアの足元の床が競り上がり、凄まじい勢いで上へ上へと伸びて行く。果てしなく伸び続けるその柱にゲル

トも飛び乗り、服が引つかかってどこまでも連れ去られて行くリリアを追う。

学園の大地が開き、城壁は競りあがり、大地に無数の出入り口が解放される。そこから全方向に数え切れぬほどの砲台が顔を出し、同時に無数の機動兵器が顔を出す。

周囲の坂道は幾重ものバリケードで封鎖され、学園の校舎も変形し、ラ・フィリアの塔の周囲に展開して行く。その大きな流れの中、ゲルトはリリアを救出して動いている校舎の屋根の上に着地する。

柱は光の結界を展開し、シャングリラを覆いつくして行く。ラ・フィリアの周囲に光の輪が浮かび上がり、膨大な魔力を展開するその光は二重、三重の結界となって街を覆って行く。

光の粒が雪のように降り注ぐ幻想的な風景を生徒達は啞然として眺めていた。変形した学園は一つの巨大な要塞となり、何人たりとも立ち入る事を許さない絶対防御都市となった。

その変形の様子を一部始終眺めていた夏流たちは完全に啞然としていた。アイオンの演奏が終了すると、地下管理室はエレベーターで地上へと引き上げられ、学園長室の隣に競り上がる。シャングリラを一望する場所に登ってきた管理室に屋根から屋根へと飛び移ったゲルトが飛び込み、夏流たちと視線が交わった。

「ナツル、これは一体……!？」

「よ、よう……。なんか、スゲー事になったな……」

『ご苦労様でした、ナツル。これで学園は暫く安全でしょう』

アイオンが台座を階段で降りてくる。不敵な笑みを浮かべるアイオンに夏流もゲルトもリリアもただ呆けていた。

「プロミネンスシステム、四割程度解放しておいたよ。これからは

このシステムを発動するのはこの奏操席からに成るから、よろしく」

「……いや、何が？ 何がよろしく？」

困惑する夏流を見つめ、アイオーンは楽しそうに笑っていた。

この世界の日（3）

シャングリラの超変形が終了し、俺は今や学園の一番下から一番上へと位置を変えた奏操席の傍に立っていた。

見下ろすシャングリラはもう何だか凄い事になっていた。シャングリラを防御する結界魔法柱と防御障壁の列はまだわかるが、ディアノイアはもう元の面影が感じられなくらいに変形してしまった。魔法砲台の列に結界障壁、更には数体の大型ガーディアンマシン……。これは確かに学園の生徒が何もしなくても安全そうだ。というかこんなところに攻め込むのは余程勇気が要るだろうなあ……。俺なら絶対に相手にしたくない超要塞へと変形したディアノイアの学園長室に集まり、俺たちは今後の話をする事にした。とはいえ、ここも学園長室の裏側に繋がってるから学園長室みたいなものなんだが。

「それで……これがプロミネンスシステムってやつなのか？」

『これはシステムの一部に過ぎませんが、プロミネンスの力の一端ですね。かつてはロギアが使用した拠点であり、一度はフェイトに落された城でもあります』

フェイトはこの要塞を攻撃したのか……。が、がんばったなあ。と

「問題はこれからどうするか、だ。とりあえず俺は……女王マリアを救出すべきだと思う」

そういえばこの話はまだ皆知らなかったんだっとな。女王マリアは今、大聖堂に捕らえられているという。

このまま長くほうっておけば、アリアも捕まってしまうだろう。ブレイド盗賊団の連中がそんなにヤワだとは思えないが、兎に角急ぐに越した事はない。

リリアをこの中に閉じ込めておけば確かに安全だ。だが、状況は好転しないだろう。兎に角今は攻める時だ。連中がシャングリラの変形にビビってる間に行動しなければ。

「腕の立つ生徒で大聖堂を強襲、オルヴェンブルムからマリアを奪還するしかない」

「強襲、奪還、か……。果てしなく力任せだな」

マルドゥークの突っ込みは痛かった。だが、もう他に方法もない。この混乱を利用しなければこっちに動くタイミングはもう無いし、何より大聖堂を攻め落とすわけじゃない。腕の立つメンバーなら行って帰ってくるくらいは不可能じゃないはずだ。

こっちにはオルヴェンブルムに詳しい聖騎士のマルドゥークもいるし……確かに力任せなのは解るが、どうしようもない。

「それに確か、聖堂騎士団と聖騎士団はオルヴェンブルムの中で内部分裂して市街地が戦場になってるんだろ？」

それはこの場所に聖騎士たちが居たことから伝わった情報だ。

元々彼らはオルヴェンブルム内部の戦闘に関わっていたらしいのだ

が、聖堂騎士団が学園を攻撃する事を知り、生徒を守るためにきてくれたのだという。

「市街地が戦場になっているなら、混乱に乗じて突破も出来るはずだ。それにマルドゥークたちだって加勢に行くつもりだったんだろ？」

「ん……。まあ、そうだが」

そうなれば、突入はやりやすくなるだろう。どうせ連中がマリアを捕らえている場所とくれば、リリアと同じく封印術式のある部屋のはず。マリアは強力な戦士でもあったはずだ。だとすれば普通の部屋に閉じ込めておくとは思えない。

だが、封印術式はこの間の突入時、部屋ごと俺たちが滅茶苦茶にしまったはず。とすれば、他の封印室を使うか、それか修理をしているのか……。

「どっちにしろ、同じような部屋を探せばいいんだろ？」

「マリアを救出するのは構いませんが、帰りはどうするのですか？ 相手には足の速い執行者も多い。ここまで無事に戻れなければ意味がありません」

腕を組んでそんな事を言うゲルトの背後、アイオーンが手を挙げた。

「だったら学園にあるヴィークルを使うといいよ。地上に出しておくから、それならばすぐに行けるはずだ」

「ヴィークル？」

「馬、みたいなものかな。何機か動くものがあつたはずだから、それを使えば直ぐに戻つてこられる」

そんなわけで実際にそれを見てみないと話にならないので、アイオーンを残して皆で螺旋階段を降り、武装したメイドロボが並ぶホールを抜けて中庭……だった場所、階段と障壁が織り交じるバトルフィールドに降りた。

どうも中庭は移動して学園の中に格納されたらしい。まあそっちのほうが安全だからいいんだが……一瞬自分がどこ歩いてんのかわかんなくなるなこれ。

「これがヴィークル……？」

そこにはすでにアイオーンが出してくれていたのか、黒光りする鋼鉄の……三輪バイク、があつた。

どうやら魔力的な力で動いているようだが、三輪バイクだ。しかも結構な大型である。二人くらいなら余裕で乗る事が出来そうなそれが、十二機ほど並んでいた。

「魔力で操作する乗り物です。動かし方は簡単で、速度は馬よりも速いでしょう」

というアルセリア。まあ確かにバイクかつとせば人間じゃ普通は追いつけないと思うが、俺たちくらいの魔力の人間なら走ってもバイクくらいの速さは出るような。

それより早い速度が出るんだろうか。まあ、アルセリアとアイオーンが言うんだから相当なもんなんだろう。突入はこれでいいか……。

「……よし、それじゃあ早速出発しよう。さっきまで戦闘準備してたんだ、直ぐに戦えるだろ？ 何人か腕の立ちそうな生徒を集めて

くれ。協力してくれそんなメンバーで出撃する」

皆が準備に取り掛かる中、ヴィークルを見ていたリリアの肩を叩いた。

「それからリリア」

「はい？」

「今回はお前は留守番だ」

多分、俺が何を言っているのか一瞬理解出来なかったんだろう。リリアは目をぱちくりさせながら小首を傾げている。

「何故ですか？」

「何故って……。とにかくお前は今回は留守番なの」

うつかりこいつが捕まってしまったら余計に大変な事になってしまふ。それこそ本末転倒だ。

リリアは勇者で魔王でお姫様、なんだから……。それじゃあコッチの作戦は失敗になる。本人にその自覚がないのが一番厄介だが、説明するのも面倒だな。

それにそれは俺が教えるようなことなんだろうかと考えてしまふ。今はまあこんな時期だし、伝えるのは後でゆっくりでもいいだろう。

「今回の出撃にはゲルトを同行させるから、お前は学園内で待機な」

「……り、リリア要らない子になってしまったですか！？ 戦力外通知ですかっ！？」

「ナツル、その命令にはわたしも賛成しかねます。リリアのラインフォースは預言^{マリシア}されし者に絶対的な威力を誇る切り札……。ラインフォース無しでは作戦成功率も大きく低下してしまう」

ううむ、ゲルトは正論だ。だけど連れて行ったらリリアがやばいと知ったらこいつも俺に賛成するんだろうな……。まあ、知らないんじゃない仕方ない。

だがどうだろう。確かにマリシアが出てきたら俺たちだけでは手に余る。ラインフォースがあれば、圧倒的な退魔能力で連中も叩きのめせるだろうが、俺たちの攻撃は殆ど通用しない敵だ。

「うわーん、リリアがんばって夏流の足引っ張らないようにするか
らつれてってーっ！ 一人で仲間はずれとか寂しくて死んじやうよ
ーっ！」

「こら、ひつつくな！ ああもう……っ！ わかったよ、わかった
！ 連れてきやいいんだろがっ！」

「わあい、ありがとー！ やっぱり夏流は優しいのですよ〜すりす
り」

すりよってくるリリアをひっぺがしポイツと投げる。まあ、正直俺たちの中で一番強くなりつつあるリリアはそう簡単にやられはしないだろうし、マリシアもリリアなら叩きのめせる。万が一リリアがやばかった時は、それは俺が守ればいいだけのことだ。

出撃できるのが嬉しかったのか、リリアはヴィーケルの周りをうろ
うろしていた。暫く笑顔で腕を組んでそれを眺めていたゲルトが急
に振り返り、俺に駆け寄ってくる。

「いいい、今っ、リリアが貴方呼び捨てにしていますでしたか！？」

「え？ ああ、してたな」

「えっ！？ な、何故っ！？ 何がっ！？」

いやお前が何を動揺しているんだよ。

「うっうっうっ……っ！ リリアちゃんが……リリアちゃんが、ナツルにとられたあああゝっ！！」

何だかどこかで聞いた事のあるセリフを残してゲルトは走り去って言った。あー、なんていうか……作戦時刻には戻ってきてね。

そんなこんなでバタバタしているうちに作戦準備は整った。俺はヴィークルに跨り、背後にリリアを乗せてバイザーを装備する。

魔力を注ぎ込むとエンジンがかかり、成る程確かに簡単に動かせるらしい。ヴィークルを乗せたリフトが地下へと移動し、列車が止まっているはずの線路へと移動する。

『聞こえるかい、夏流』

各ヴィークルの正面部分にアイオンの映像が移りこむ。こんな機能もあるのか……便利だな。

『オルヴェンブルムの座標はセットしておいたから、迷う事はないだろう。これから外部に続く列車用の出入り口を解放する。長く開けておくわけには行かないから、素早く駆け抜けてほしい』

「了解した。アイオン、学園の事は任せるぞ」

『こちらも了解。武運を祈るよ、夏流』

「そうしてくれ。勇者部隊、出るぞッ！！」

プレイブ克蘭

合図と共にヴィークルを加速させる。すると異常なまでの急加速で動き出し、一瞬狭い線路の中壁に激突しそうになる。

しかし、円形の壁をヴィークルは難なく走り、ぐるりと上下左右を一周して線路に戻る。それだというのに加速の重さも風も感じない。何の壁もないのに、どうやら魔力障壁で守られているらしい。

これならば多少の無茶は押し通せる。さらに加速し、僅かに開いた地上への出入り口を目指し、一気に突き抜けた。

急に飛び出してきた俺たちに驚く聖堂騎士団の連中の頭上を跳び越え、草原に着地する。そのまま障害物の無い草原を走りぬけ、一息にオルヴェンブルムを目指す。

「わああ、すっごい早いっ！！ 馬車よりも列車よりも、全然早いんですねーっ！」

「早すぎて事故ったら死にそうだけだな……この分ならオルヴェンブルムまで直ぐだ。心の準備はもう整えておけよ」

後ろからしつかりとしがみ付くりリアの体温を感じながら走り抜ける。僅かな時間ですで見えてきたオルヴェンブルムの出入り口目指し、一気に飛び込んで行く。

門は閉じられている。が、問題はない。街を覆う巨大な防壁、その段差を前にヴィークルを回転させ、壁にタイヤをあわせて駆け上る。垂直だろうがなんだろうが、ヴィークルはしつかりと吸い付くようにして俺たちを進ませてくれる。

全てのヴィークルが壁を走る中、それを確認して一気に門を跳び越

える。遙か上空に投げ出されたヴィークルにしがみ付き、眼下で騎士たちが戦うのを見下ろしながら大聖堂の巨大なステンドグラスを突き破り、礼拝堂に着地する。

焦げ付くタイヤの匂いが鼻を突く中、すでにリリアは飛び降りて内部で混乱している聖堂騎士たちと戦っていた。次々と各所からヴィークルが礼拝堂に突入し、仲間たちが聖堂騎士を倒して行く。

「全員無事か!？」

「貴方ほど無茶なルートで突入したメンバーは他には居ませんでしたがからね」

ヴィークルを降りたゲルトがバイザーを外して走ってくる。突入のメインメンバーは俺とゲルトとリリア……。残りのメンバーはマルドゥークの指揮の下に聖騎士団を援護する手筈になっている。何人かの生徒を引き連れ、俺たちはリリアの後を追う。リリアは既に礼拝堂の敵を殲滅しており、余裕の表情で振り返った。

「夏流、こっちは大丈夫だよ!」

「よし、マリシアが出てくる前に突入するぞ! 地下を探索し、マリアを見つけ次第脱出する!」

リリアとゲルトの大剣は狭い通路だと効果を發揮できない。故に先陣は俺が斬り、迎撃に出てくる聖堂騎士を倒して行く。

だが、やはり外での聖騎士団との戦いにてこずっているのか、護衛の数は決して多くはない。以前リリアが封じられていた封印室に飛び込むが、やはりそこは壊れたままで放置されていた。

「こっちじゃない……! 同じような部屋が他にもあるはずだ!」

リリアとゲルトを引きつれ、地下を移動する。やがてその地下が一階だけではなく、遙か下まで続いている事に気づく。相当巨大な地下構造が大聖堂には存在するのだ。

三人で移動を続け、辿り着いたのは地下に存在する地上のものよりもさらに巨大な礼拝堂だった。冷たい空気が頬を撫で、不気味な雰囲気広がっている。明かりは乏しく、部屋の各所に灯る不思議な松明の光のみ……。そんな部屋の正面に、誰かが立っていた。

「あら？　こんな所にまで侵入者が辿り着くなんてビックリ……。地上の騎士たちは何をしていたのかしらねえ」

振り返ったその姿は女だった。豪勢な赤い司祭の服装に身を包んだ若い女だ。だが、見た目は若そうだがなんというか……不思議と威厳のような物を感じる。

俺が反応するよりも早く勇者二人が剣を構えた。俺にもわかる。あの女の持つ力は凄まじい。疑い様も無い事実、思わず齒軋りする。

「^{マリンシア}預言されし者が……」

「よくその名前を知ってるわねえ？　あら、もしかしてそっちのちいさい女の子……お姫さんだったりするのかしらあ？」

ぞくりと、背筋が凍るような笑顔だった。俺は咄嗟に二人を庇うように前に出る。

「ゲルト、リリアを連れて先に行け！　あいつは俺が何とかするっ
！！」

「え？　し、しかし……」

「俺たちの目的はマリシアの救出であってマリシア殲滅ではないっ！
大丈夫だ、適当に相手をして逃げればいい……っ！」

そんな甘い考えが通じるような相手ではないのだろうが、仕方ない
こうでも言わなければゲルトもリリアも動こうとはしないだろう。
二人は顔を見合わせる。しかし、リリアは俺を見て微笑んだ。リリ
アは信じてくれている。俺のこんな強がりでも、この子は信じよう
としてくれる。

「いこう、ゲルトちゃん」

「……はい。ナツル、必ず戻ります」

「ああ、気をつけてな」

二人が地下へと走って行くのを女は普通に素通りさせてしまった。
不自然なその態度に思わず眉を潜めると、女は台座から階段を下り
て近づいてくる。

「どうして行かせたのか不思議、って顔してるわねえ。どうしてだ
か教えてあげましょうか？」

「……………」

「ふふ、だってあの下にもマリシアはいるもの。それにねえ　ア
タシ、女の子より男の子の方が好きなのよ。貴方見れば結構イケて
るじゃない？　だから　アタシがここで一生奴隷にしてあげるわ
っ……！」

女の周囲に魔方陣が浮かび上がり、炎が揺らめく。圧倒的な魔力に既に部屋全体が高温に熱され、肌を焼くような痛みが全身を襲う。魔力を研ぎ澄まし、自分の力にするんだ。障壁を厚く、正確に……。相手がマリシアなら、マトモにやりあっても勝ち目はない。どうする？

「大聖堂の司祭ってのはみんなそうなのか？　どいつもこいつも趣味悪そうで……最悪だ」

「うふふっ！　さあ、燃やしてあげるわ……アナタの恋心を！　『元老院』大司祭、ナイアーラ・レグリス！　アタシの美しい名前を魂に刻んで死になさい！」

激しい熱風の中笑う女。俺は両腕に魔力を点火し、電撃を帯びた拳を固く握り締めた。

覚醒する力の日（４）

「ナツル……一人でマリシアを相手に無事で済むとでも思っているのでしょうか」

リリアと肩を並べて階段を下り続けるゲルトが呟いた。薄暗い通路、神殿というよりは迷宮に近いその建造物の中、リリアは表情を変えずに答える。

「大丈夫じゃないと思う。でも、夏流が行けっというなら行くし、大丈夫っというなら信じるよ。だって、信じなきゃ始まらないもん……」

そう語る物の、リリアの拳は固く握り締められ震えていた。心中は誰でも同じ。だが確かに、目的を果たす為に信じなければ始まらない事もある。

あの場で議論をしている余裕も無く、夏流はむしろ素早く決断を下しただけ上出来であったと思える。ゲルトは気持ちを切り替え、階段から続く大広間へと飛び込んだ。

広大な地下の空間、しかしそこには水路があった。土に埋もれた巨大な神殿……。流れる水は魔力を帯び、淡く蒼く輝いている。

中央の置くに配置された祭壇の上、マリアは身体を鎖に繋がれて立っていた。既に疲労困憊した様子で、息も絶え絶えにただ目を閉じている。

「女王陛下っ！！」

ゲルトの叫びが空洞に響き渡る。封印堂にはマリアだけではなく、他に二つの人影があった。正面に立ち、マリアに術をかけているの

は全身を包帯で覆い、顔も姿も判らないような細身の男性、その傍らには巨大な剣を持った騎士が控えていた。

二人の侵入に気づき、振り返る二人の男。そのうちの片方、眉を潜めた悪人面の男が祭壇から降りる。古ぼけた蒼い甲冑が室内を照らす松明の炎で照らされ、騎士は剣を片手に二人を見下ろす。

「ほお……。確かに似てやがる。ってことは……おい、包帯ジジイ！ こいつで間違いないんだな！？」

「ア……。アアア……」

枯れ果てて声にはならないような、喉から搾り出すような音……。不気味なその音は、しかし確かにリリアに向けられている。

夏流はマリシアと一対一でリリアが戦うような状況にならないようにと救出を任せたつもりだったが、その判断は万全ではなかった。マリリアに術をかけている最中に突入してしまった事もあり、強力な敵を相手にしなければならぬ状況を強いられるしまう。

二人の勇者が剣を構える。男は剣を片手に振り返り、背後で術をかけている男に叫んだ。

「オイ！ そっち早くなんとかしろよ！ 女王だかなんだかしらねーが、そいつから継承の儀式をしなきゃ意味ねえらしいじゃねえか！ そしたら殺しちまえばいいんだ、楽な仕事だぜジジイ！」

「そんな事はさせない。私たちが女王陛下は連れて帰るから」

リインフォースに魔力を込め、風を起こすリリア。しかしそのリリアの声と魔力が呼び覚ましたのは力だけではなかった。微かに耳に届くリリアの声に、マリヤもまた意識を取り戻していた。

そうして彼女が目にしたのは最も恐れていた状況。リリアと自分、

二人がこの大聖堂の奥深くにある封印堂に存在してしまっているという事実。その危険性に気づき、マリアは力を振り絞って叫ぶ。

「逃げなさい、リリア！ 貴方はここに来てはいけないっ！！」

「心配しないでください！ 今助けます！」

「そうじゃないの！ わたしの事はいいのです、リリア！ ゲルト、リリアを連れて逃げて！」

「……そうは行きません！ わたしにとっても貴方は……！ 貴方は、掛け替えのない人です！ 失いたくない……わたしはっ！！」

二人にマリアの想いは届かない。二人がマリアを思えばこそ、その気持ちは届かないのである。致し方なく事情を全て曝け出そうとしたマリアの首に包帯の男の手がかかる。

呼吸が出来ずに苦しむマリアを見てリリアは一直線に駆け出した。迎え撃つ騎士の振り下ろした大剣を軽々と弾き飛ばし、祭壇を駆け上がる。

包帯男がリリアの接近に気づき、魔法を発動する。リリアの足元から伸びる無数の手が勇者の進軍を一瞬遮ろうとしたものの、リインフォースの一振りで幻影は全て打ち消されてしまった。その危険な聖剣の存在に気づき、男は大きく跳躍する。

リインフォースを空振り、しかし女王を取り巻く封印術は聖剣の光で消滅する。騎士の隣に降りた包帯男は首を鳴らし、声にならない声で鳴く。

「アレが噂に聞く聖剣リインフォースってやつか。面白そうじゃねえか……相手をしてやるぜ」

「させるかあつ!!」

背後から斬りかかるゲルトの剣を受け、騎士は体ごとゲルトに当たり、吹き飛ばす。体躯で劣る小柄なゲルトはよろめきながら制動し、剣を構えなおした。

「小娘勇者が二匹か……。ちつ、殺し合いってのは一対一の決闘が一番上等だと決まってるもんだが、仕方がねえ」

男が取り出したのは『ヨトの預言書』の複写本だった。それは黒く炎を渦巻かせ、男の身体を影で覆いつくして行く。

「マリシア……!!」

『ほお! その名前を知って生きてるって事は、少しは期待してもいいんだろうな……。勇者の小娘!!』

闇の中から伸びる鋼鉄の手から逃れるゲルト。しかし次の瞬間繰り出されたのは超巨大な鉄の塊にしか見えない、マリシアの剣だった。それは乱立する石柱を砕きながらゲルトに迫り、魔剣で受け止めたゲルトを吹き飛ばして脊柱ごと水路に吹き飛ばす。刀身5メートルはある巨大な剣を携え、姿を現した男は全身を装甲のような鱗で覆われた蛇の姿に変化していた。

「ゲルトちゃんっ!!」

『仲間の心配をしている場合か、白い方の小娘……。! 一応名前を聞いておいてやる! 殺し合いには名乗り口上くらいは必須だぜ!』

「……っ！ リリア・ライトフィールド……！ フェイト・ライト
フィールドの娘、白の勇者！」

『やっぱりてめえがリリアか！ ひひひ、こりゃあ解りやすくしてい
いぜ……！！ 俺は^{オルウェナ・イラ}大聖堂騎士！ ハシエム・ロイドだ！！』

凄まじい重量で一步一步大理石の大地を砕きながら迫るハシエムの
蛇。大して距離も詰めぬままに揮う長い腕から繰り出される大剣は
マリアを抱えて回避したりリアたちのいた祭壇を一撃で木っ端微塵
に砕いてしまう。

斬るというよりは潰す、砕くと言った威力の大剣を振り回し、ハシ
エムは長い舌を揺らしながらリリアを見つめる。その背後、水路か
らゲルトが陸に上がり、傷を回復魔法で癒しながらリリアと肩を並
べる。

「あれがマリシア……。すごい魔力を感じるね」

「……っはい。思いの他早いうえに、力は見ての通りです……。女
王は救出したのですし、ここは撤退を……」

「だめだよ。あっちの包帯のおじいさん、多分リリアたちを逃がさ
ないようにあそこで見張ってるんだろうから」

ふと、ゲルトは自分の視界から包帯の男が居なくなっている事に気
づいた。リリアの視線を追い、ぞっとする。出入り口付近の石柱に
両手足でしがみ付く不気味な影がじつと自分たちを見ていた事に気
づいたからである。

「術を使っていたし、あっちは後衛かな。こっちのおじいさんは見た
とおりみたいだし……。やっぱり夏流に迷惑をかけたくないし、こ

「こで何とかやつつけよう」

確かに逃げ切れるかどうかはわからない。マリアは気を失い危険な状態にある。早く連れ帰り、きちんとした手当ても必要としている。しかしこの場所から確実に逃げ出す方法も見つからない。

結局、あの二人は追いかけてくるであろう事は目に見えている。背後から攻撃を受ければマリアを連れて身動きが取れない以上、致命傷になりかねない。

「難しいだろうけど、何とか頑張ってみるよ。大丈夫、リリアとゲルトちゃん……二人居れば勝てない敵なんて居ない」

「そう、ですね。そう、でした。わたしたちは、勇者……。肩を並べて戦えば、負ける道理など有りはしない」

「うん、その意気だよ！　まずは厄介なおじさんをやつつけよう。包帯のおじいさんもいつ攻撃してくるかわからないから気をつけて」

マリアを部屋の隅、石柱の裏に残し二人は前に出た。白と黒の大剣を構えた勇者二名が前に出た時、既に二人の目は逃げる目ではなく戦う目へと切り替わっていた。

飛び散る石柱の残骸に囲まれ、ハシエムは嬉しそうに舌を鳴らす。お互い何を語り合うでもなく戦う事を悟った時、三つの刃は交わる事を始めようとしていた。

覚醒する力の日（４）

「ホラホラ、逃げてるだけじゃアタシの美しい肌に指一本触れるこ

とは出来ないわよ！」

地下礼拝堂は炎に包まれていた。大司祭、ナイアーラの放つ炎の術式は一発一発の威力は確かに微弱だ。しかし休む間もなく放たれるそれは狭い空間も相まって夏流を充分に追い詰める威力を持つ。

炎の弾丸が椅子を、机を、装飾品を砕き、燃やし、部屋の中は火の海と化そうとしている。その燃える大気は夏流から充分に体力を奪い、呼吸さえも困難になって行く。

汗を流し、火傷をし、服を焦がしている夏流とは対照的にナイアーラは炎の海の中でもまるで弱る気配はない。むしろ炎に取り囲まれれば取り囲まれるほどより強く、美しく姿を保っているように見えた。

長期戦になれば不利になるのは必死。夏流は意を決し突撃する。正面から殴りかかる夏流の前に炎の渦が浮かび上がり、火柱は夏流の全身を燃やしながら猛る。

「駄目よう、せっかちなえ。そんなアプローチじゃ女は口説けないわよ？」

「ぐ……あ……っ!？」

炎が止み、夏流は全身に傷を負って膝を着いていた。肩の上に乗っていたナナシが夏流の服の中からひょっこり顔を出し、息苦しそうに帽子を傾ける。

「ナツル様！ このままではワタクシ、焼きうさぎになってしまいます!!」

「そんなどうでもいいことで話しかけんな……」

「どうでもいいって……ひどい。え？ 何をするのですかナツル様……ま、まさか……いやあつ！？」

肩の上のうさぎの耳を掴み、ナイアーラへと投擲する夏流。するとうさぎが近づいた瞬間、自動的に女の足元から火柱が吹き上がりうさぎを真っ黒焦げにしてしまった。

「やっぱり自動発動式のカウンター魔法かよ……！」

「あらあら、自分の使い魔は大事にしたほうがいいんじゃないかしら？」

「そいつはそのくらいじゃ死なねえ。今までだって俺が死にそうになる攻撃の中平然としてたからな」

「だからって……炎が出るのがわかってて投げ込むなんて……」

涙を流しながら部屋の隅で耳をばたばたさせるうさぎを横目に二人は見詰め合う。夏流にとってナイアーラは絶対的に苦手とする、完全な魔術師タイプの能力者である。

格闘能力に特化し、しかし魔術には疎い夏流。それは逆に言えば魔術に対する防御能力にも疎い事に他ならない。炎を防ぐのにも効果的なレジスト魔法が存在するが、それを夏流は唱えられないのだ。ただ物理攻撃に対する障壁を練っているだけで、身体は確かに頑丈になるもののダメージは軽減できない。炎の渦の中それは決定的な欠点となり、夏流を追い詰める。

「どうやらアナタはアタシとは相性が悪いみたいねえ……。どう？ このくらいで諦めない？ あんまり抵抗しなければ可愛がってあげるわよ？」

「……抵抗しなかったらどう可愛がってくれるんだ？」

「勿論 綺麗な形で灰にしてあげるわっ！！」

両手から放たれる炎を背後に跳んで回避し、夏流は舌打ちした。

「どつちにしろ燃えるんじゃないかよ」

「人間燃えてなくちゃ意味がないわ。アタシを見なさい？ アタシは常に燃えているからこんなに美しいのよ……。ああ、燃え〜！」

火柱がナイアラを覆いつくす。自らが生み出した炎を浴びてうっとりとした表情を浮かべる女に夏流は眉を潜めた。

「大司祭だのなんだの、大聖堂の人間はみんなどっかおかしいんじゃないのか……！？」

「^{マリシア}預言されし者の力に取り込まれているのかもしれないね。あれはそもそも人間が封じられるようなものではないのですから」

夏流の肩に飛び乗り、煤を後ろ足で落すうさぎ。正面からナイアラと対峙する夏流は呼吸を整え、体の力を抜いて構えを解く。

「……どういふつもり？ 大人しく燃え燃えになる気になったのかしら？」

しかし、救世主は答えない。静かに目を閉じ、体の中、心の中、魂の中に刻まれた自らの力を静かに呼び覚ます。それは幾重にも施された扉をひとつひとつ開いて行くかのようなイ

メージ。セーブしている魔力を解放し、己の力とし操作する事。それは、彼が決定的に苦手としてきた技術だった。

「俺が勝ちたいのは、マリシアだけじゃない……。強く、強く……。そう、相手が俺と同じ救世主の力を持っていたとしても、勝てなきゃいけない」

同じ魔力をもつ存在が相手だとすれば、勝敗を決する物は何か。

武器？ 仲間？ 相性？ それらもあるだろう。だが決定的に必要な物はそんなものではない。

そう、技術と気概である。夏流は己にそれを課していた。力を上手く扱う為の力。そして、もう逃げたりするような思考はしない。勇気の二文字で己を制する。

目を開いた夏流の全身から黄金の光が溢れ出す。それは周囲の炎を吹き消して尚余りある力でナイアーラの周囲で進む。触れるもの全てを痺れさせる貫く雷の魔力が部屋を覆い、それを夏流は己の手足に収束していく。

「何なの、この馬鹿げた魔力総量は……。まさか……。!?」

夏流目掛けて魔法を放つナイアーラ。炎は触れることの出来ない痛みとなつて夏流を蝕むはずだった。しかし少年は拳を振るい、その魔法を貫いてみせる。

拳で弾き飛ばされた魔法を見てナイアーラは思わず後退した。夏流の拳は確かに魔法を砕いたが、別段何か対抗する術を唱えたわけではない。いうなれば己の拳に込めた『気』のようなもので炎を吹き消したのである。

ゆっくりと、少年が構えを取り直す。それは今までの夏流の構えとは違う。つい最近、彼の数歩先に行く武術の達人より託された新たな力。

心の中で思い出す。新たな師匠となった紅い髪の男は己の拳を突き出して夏流に言った。

『魔法が使えないんなら、別に無理して使う必要はない。魔法のように形に出来なくても、その力を扱う方法は一つじゃない。魔力でどうにかできないんだったら、身体でそれを覚えるんだ』

魔力を両足に込め、両足を同時に大地から放す。一瞬ふわりと浮き上がったその体は緩急をつけた動作で急加速し、まるで瞬間移動したかのようにしてナイアーラの目の前に迫っていた。

勿論、炎の障壁は間に合わず夏流が通り抜けた後に発動する。至近距離の中、夏流はナイアーラの胸に軽く拳を当て、魔力を全てそこに収束させる。

「崩雷拳……！」

拳に乗せた魔力の塊を挟りこませるようにして拳を振りぬく。防御できずに吹き飛んだナイアーラの後方、既に移動を済ませた夏流が拳を握り締めて目を閉じる。

「レーヴァテイン神討つ一枝の魔剣 コールライトニング！ その力を我は担う！」

背後に昂ぶる魔力の存在を感じ取り、ナイアーラは障壁を作ろうと片手を突き出す。しかしそれを擦れ違うようにして放たれた夏流の足が交差し、ナイアーラの顔面に食い込んでいた。

「ウルスラグナ障害を討ち滅ぼす者 ！」

両足に込めた魔力で連続でナイアーラの体を蹴り飛ばし、宙に跳んだその体を蹴り飛ばす。障壁ごと貫き、吹き飛ばす蹴りが放たれ雷

撃が部屋を焦がしながらナイアーラは反対側の壁へと減り込む。

確かな手ごたえに手を止める夏流。しかし直ぐにナイアーラは起き上がり、傷だらけの自らの体を見てにやりと笑う。

「無駄よ、無駄。だってアタシったら燃え燃えでフォーエヴァーなんだもの……！」

自らの顔に手をあて、あろうことか顔を燃やし出すナイアーラ。しかし次の瞬間には全ての傷が癒え、完全に回復した姿を夏流に晒すのであった。

「なんだと……！？」

「ああー！ 燃えるのって快感……。アナタ確かに強いわあ。でも、アタシを怒らせちゃったからもう駄目ね……。うふ、この部屋ごと思いい切り燃やし尽くしてあげるんだから！」

女の懷から黒い影がその姿を飲み込んで行く。すかさず放ったレーヴァテインも漆黒の炎で弾き飛ばされてしまった。

暗黒の炎の中から姿を現したのは炎のドレスと翼を携えたナイアーラの姿だった。空中で炎に座し、足を組んで長い爪を夏流に伸ばしている。

「ああーん、えくすたしいーっ！！ もう我慢なんて出来ないわ……。全部燃やし尽くして食べてあげる……。うふ、うふふふっ！……！」

「こいつもやっぱりマリシアかつー！」

夏流が構えるより早く、その足元から炎の手が夏流にしがみ付く。

炎の羽ばたきにより舞い散る羽の一つ一つが大地に触れると同時に燃え上がり、炎の魔物を産み落として行く。それは凄まじい速さで増殖し、既に部屋全体を覆いつくすまでになっていた。

炎に取り囲まれ、飲み込まれ押しつぶされるように消えて行く夏流の影を見下ろしながらナイアーラは声高らかに笑っていた。

同じ頃、地下ではリリアとゲルトがハシエムと戦闘を繰り広げていた。前後から同時に斬りかかる二人を相手に巨大な剣を振り回し対応するハシエム。

その剣圧は凄まじく、触れれば体を千切るだけでは済まされないだろう。その威力を前に攻撃のテンポがつかめず二人は苦戦を強いられていた。

石柱の影に隠れながら小柄な体を生かし、何度も奇襲を仕掛ける。しかし刃はハシエムの鱗を通る事もなく、弾かれた刃の後に空しい身を隠す行動の繰り返しが続いていた。

『どうしたどうしたあつ！？ 弱すぎんぜお前ら！ それでも勇者なのか、ああん！？』

石柱から石柱へと飛び移り、上空からリリアが斬りかかる。空中でリインフォースとハシエムの大剣がぶつかり合い、激しい衝撃を伴って二人は弾かれた。

びりびりと痺れる掌を強く握り締め、リリアは剣を構える。真正面から斬りあえば恐ろしい力を持つ敵であることは既にわかりきっている。リリアは静かに呼吸を正し、魔王の力と呼び覚まそうとする。しかし正面から突撃してくるハシエムの牙が迫り、結局それが出来ずに居た。ゲルトに側面から助けられ、ハシエムの動乱な刃からなんとか逃れる。

「ご、ごめん……！ あれ、おかしいな……。この間は直ぐに魔王モードになれたのに……」

「無理をしてやらなくても構いません！ 訳の判らない力に頼りすぎるのはよくない傾向です！」

正面から振り下ろされるハシエムの剣を二人は互いの剣を交差させるようにして受け止める。ぎりぎりとし押し合う二人の勇者と蛇であったが、二人の力をあわせてもハシエムには力負けしてしまう。防戦一方、なおかつ容赦なく暴れるハシエムのせいで部屋全体がいつ崩れるのかも判らない状況が続いていた。迫る焦りと剣への恐怖、二人の心は乱れていた。

「つ、強い……！ 全く反撃の糸口がつかめない……っ！」

「うん、強いね……。うう、どうして魔王モードが出ないんだろう？ ロギア聞いてる？ ロギアー！」

「幻に話しかけないで下さい！ 今はそんな事をしている場合ではないでしょう！？」

「そうだけど……うわっつつ！？」

横一闪、ハシエムの刃が水路を吹き飛ばしながら迫ってくる。跳躍して背後の瓦礫の山に降り立った二人だったが、状況は好転しない。二人は肩を並べ、剣に魔力を込める。どんなに最悪な戦況でも、お互いが居れば諦めない。くじけない。そんなパートナーがいるからこそ、冷静に考えられる。

どうすれば勝てるのか。どうすれば勝利できるのか。自分より明らかに各上の相手を、どう倒すのか。

「……リリア、わたしが囹になります」

「……お願いしていい？ あれを一発で倒せるのって、やっぱりインフォースしかないと思うから」

頷き合い、二人は駆け出す。石柱を蹴って飛び移り姿をくらましたリリアを見上げているハシエムの背後、低い姿勢からゲルトが遅いかかる。

しかしハシエムはそれに気づいていた。振り返ると同時にゲルトの胴体を真つ二つに両断する。その死体が地面に落ちるのを見届けた刹那、ハシエムの背後から痛みが走った。

見れば今斬ったものは花弁の塊……。ゲルトの幻影は無数にハシエムを取り囲み、全員同じ構えで同じ言葉を口にする。

マスカレード
「偽りの舞踏会」

幻影が全方向から同時に斬りかかる。それを腕を振るって薙ぎ払うハシエムだったが、幻影に紛れ、ゲルトは剣に魔力を帯びさせ、必殺の突きを放つ。

腕を串刺しにしたその一撃を引き抜き、ゲルトは後退する。

「今ですっ！！」

声をあげ、ゲルトが呼びかける方向を向くハシエム。しかしそれはフェイントだった。ゲルトの背後、剣を構えたリリアが思い切り刃を振り上げていた。

「鳴り響け！！」
ジャッジメント
断罪……ッ！！
フォース
共鳴剣
ッ！！」

光の剣が振り返っている無防備なハシエムにたたきつけられる。それは魔物の装甲を打ち砕き、一撃でハシエムを両断するほどの威力を持っていた。

破壊することのみ特化した必殺の一撃は惜しみなく効果を発揮する。迸る閃光と魔力の波の中、歯を食いしばりリリアが止めを刺そうとした瞬間だった。

『がああああああっ!!』

獣のような叫び声と共に、ハシエムの瞳が輝いた。次の瞬間リリアの攻撃は停止し、思わず飛び退いたリリアの手の中、聖剣にありえない事態が発生しようとしていた。

「り……リインフォースが……?」

見ればリインフォースの白い刃はひび割れ、石のように変質してしまっている。いや、それは石のようになったのではない。本当に石となってしまったのである。

それが強力な呪詛の類である事に気づいたゲルトが咄嗟にリリアを抱えて石柱の影にもぐりこむ。ハシエムの瞳が輝いた瞬間、周囲は全て灰色の石と化してしまったのである。

「石化の呪詛……。バジリスクですか、あれは……っ」

「げ、げげ、ゲルトちゃん……。リインフォースが……石にっ!!」

「落ち着いて下さいリリア……。リインフォースを持っていなかったら今頃貴方が石になっていました。リインフォースの魔法無効化能力を持っても防ぎきれなかったほどの呪い……。なんて恐ろしい」

ぼろぼろと崩れるリインフォースの刃に涙を浮かべるリリア。勇者の証でもある聖剣が今や半分以上石になってしまったのだ、それは泣くのも無理はなかった。

「本当に厄介です……！ 恐らく視界に入っただけで石化させられるような呪詛……。もう、手の打ちようが……」

放心状態に陥っているリリアを連れ、ゲルトは音もなく走る。石柱の影に隠れたマリアの傍に腰を下ろし、剣を構えて影からハシエム様子を窺う。

乱立する石柱と広すぎる空間にハシエムは二人を見失っているように見えた。だがしかし見つかるのは時間の問題……。舌打ちするゲルトの傍、目を覚ましたマリアが二人の頬に手を伸ばしていた。

「……リリア、ゲルト。わたしのことはもついいから……。早く、ここから逃げるのです」

「女王陛下……」

「うっ、ぐすん……。リインフォースがあゝ」

「……こら、リリア。こんな時に泣いている場合ではないでしょう？ それは聖剣とはいえただの剣……。勇者に必要な物は、剣ではなく勇気なのですから」

そう囁いてリリアの頭を優しく撫でるマリア。二人を抱き寄せ、マリアはゆっくりと体を起こす。

「わたしも、手を貸しましょう……。大事な大事なわたしたちの娘

を、こんな穴倉で潰えさせるわけにはいかないから……」

傷だらけの体に鞭を打ち、必死で立ち上がるマリア。力を振り絞り、ゲルトとリリアに支えられながらも凜々しく微笑んで見せる。

その美しい姿に二人は思わず放心してしまった。そうなるのも無理ないほど、マリアは美しく、そして気高かった。

「いいですか？ 貴方たちにはこれから、大変な戦いが待っているかもしれません……。ですが、決して心の中の勇気を消さないで。必ず……生きなさい」

二人をぎゅっと抱きしめ、マリアは目を閉じる。僅かな時間の抱擁が終わり、二人は何故か自然とマリアのいう事を素直に聞いて行動していた。

「良いですか？ リインフォースを信じるのです、リリア。その剣は……今だ本当の力を眠らせたままです。わたしが合図をしたら、一息にあのマリシアを倒すのです」

「……うん、わかりました。あの……マリア様？」

「なんですか？」

剣を片手にリリアは振り返り、じっとマリアを見つめる。

「マリア様のおい……優しくてあったかくて、大好きです。なんだかお母さんに会えたみたいで……少し、リリア嬉しいです」

その言葉にマリアは一瞬悲しげな表情を浮かべ、それから満面の笑みを浮かべた。リリアも同じように笑い、二人は別々の方向へと歩

き出す。

マリアはその時どんな気持ちでリリアを見ていたのか。子を思う気持ちで自らの限界を超えた体を突き動かし、自らハシエムの前に姿を晒す。

「バジリスクの魔獣よ！ わたしはここです！！ クイリアダリアの女王、マリア・ウトピシュトナは逃げも隠れもしない　っ！！」

ハシエムの視線がマリアを捕らえた瞬間、マリアは片手で障壁を展開する。高い鍊度で展開された結界障壁の影、もう片方の手を翳し、拘束呪文を発動する。

無数の鎖が石化しながらもハシエムへと撒きつき、ひび割れ脆くも崩れながら何とかその動きを拘束する。それと同時にマリアの両足が石化を初めていく。

「ゲルト！ リリア！！　行きなさいッ！！」

マリアの叫び声。ゲルトは剣を振るい、花卉の嵐を巻き起こす。それをハシエムが片腕を振るって吹き飛ばすよりも早く、リリアは石化した聖剣をハシエムにたたきつけていた。

その腕と剣が激突し、衝撃が走る。マリアは聖剣を信じると言った。だからリリアは信じる。それはとても自然なことのように思えた。聖剣とハシエムの拳とが激突し、見る見るリンフォースは石化した部分から崩れて行く。それでも信じる。聖剣は折れたりはいしなと。聖剣は、常にリリアと共にあるのだと。

花の嵐の中、光が溢れた。崩れ去った聖剣の刃、石化して無残に破壊されたその刃の下、輝く何かがそこで解放されるのを長い間待っていたのである。

「あ……あああああああッ！！」

全力の魔力を込め、振りぬくリリア。その光の刃はまるでバターを裂くようにあっさりと腕と胴体を両断し、ハシエムを切り伏せてみせる。

光の溢れるその剣は風を巻き起こし、周囲の花弁を吹き飛ばしながら輝く。聖剣の刃の下から出てきた物　それは、刃の下に隠れた本当の刃だった。

黄金の魔術文字が浮かび上がるその聖剣にリリアもゲルトも目を奪われていた。青白く輝く光の刃を展開するリインフォースに浮かび上がる文字。

「……神剣、フェイム・リア・フォース　？」

聖剣の輝きはゆっくりと静まって行く。それが正常な状態に戻った時、リリアもゲルトもようやく振り返った。

背後、両足を石化され、衝撃で両足が砕けて倒れこむマリアの姿があった。そのマリアとリリア、二人の視線が交わりあい、地下に叫び声が響き渡った。

覚醒する力の日（４）（後書き）

～それゆけ！ デイアノイア劇場～

＊最近読者数が増えてるのか減ってんのかマヒしてわかんなくなってきた編＊

リリア「だってなんかもう、良くわかんなくなってきたんだもん……」

ゲルト「……いきなりなんですか」

リリア「それはともかく、そろそろアンケートの受付を停止するのですよ。近日中に消滅するのです！」

ゲルト「思いのほか多数の貴重なご意見ありがとうございました。中には本当に参考になる意見も多くて励みになりました」

リリア「もっと改行しろ、とかね！」

ゲルト「……でも、アンケートなくなったらこのネタに困る気もします」

リリア「いいんじゃない？ ネタ切れたら失くす方向で」

ゲルト「うつ……。で、でもここは何だか読者との貴重なコミュニケーション空間のような気が……」

リリア「そうだねー。お客様は神様だもんねー」

ゲルト「何だか嫌な言い方ですね……。あ、あのう、ちゃんと皆感謝してるから見捨てないでくださいねっ」

リリア「それにしてもさ、大聖堂のキャラの色物っぷりはどうにか
なんないのかな」

ゲルト「作者、多分あの手の変態染みたのを書いてるのが一番楽しいんですよ」

リリア「倒しても心が痛まないしね！……！」

ゲルト「またぶっちゃけた話を……。それにしても本編は本当に滅茶苦茶ですね」

リリア「学園が変形したり、聖剣の中から剣出てきたり」

ゲルト「大聖堂編はそろそろクライマックスです。いよいよあらすじにしか登場しなかった魔王軍が動き出しますよ」

リリア「前々から思ってたけど、あらすじが殆ど次回予告っていうアレ」

ゲルト「あってるようなあってないような予告ですけどね。意外ときちんとしている人も居るので気をつけたほうがいいと思うんですが」

リリア「てか、新規の人には意味不明だよね！……！」

ゲルト「……リアルタイムであらすじを見て意味が判る人、ちょっとだけ他の読者よりもこの小説を楽しめていますよ」

リリア「そして、リリアと夏流にはなんとグラフィックがつきそうです！ 思い切って掲示板でイラスト依頼してしまったのですよ！

ゲルト「『みてみん』にて掲示依頼中なので、興味のある方は要チェックです」

リリア「……まあ、ここであんまり騒ぐとプレッシャーだから少しだまってよっか」

ゲルト「え！？ 貴方から話振ったのにですか！？」

リリア「次回に続くっ！」

覚醒する力の日（5）

「あらあ？　何かしら、なんだか地下のほうで騒がしいけれど……」

炎で埋め尽くされた夏流を見下ろしながら欠伸をするナイアーラ。地下から響き渡る激しい振動とここまではつきりと伝わってくる強力な魔力の波動に思わず眉を潜めた。

リリアの放った神剣の一撃はマリシアと言えども両断するほどの力を秘めていた。その圧倒的な光の力はナイアーラは勿論の事、炎に埋もれた夏流にも届く。

もつと下で頑張っている奴らがいる。その事実が夏流の心を振るわせる。魔力を解き放ち、炎を吹き飛ばしながら夏流はもう一度立ち上がった。どんなに勝ち目の無い相手だとしても、ここで諦めるわけにはいかないから。

「あら、まだまだ元気そうねえ？　やっぱりそうでなくちゃ面白くないわ」

「無事ですか、ナツル様……？　今までに無いほどのダメージが蓄積されています。これ以上は危険かと」

「そんなことは、言われなくても自分が一番判ってる……。だけど……なあ。ここで俺がコイツを倒せなかったら、かつこ悪いだろうが……！」

「うふふつ、健気ねえ！　そんなぼろぼろの身体で一生懸命立ち上がったらしちゃって……そういうのすつごく可哀想でいいわあ！

安心なさい、アナタだけじゃなくて他の小娘もみいんな燃やして灰にしてあげるからっ!!」

溢れる紅蓮の炎の翼を羽ばたかせ、焰の嵐を巻き起こす。それは正面に立つ夏流へと容赦なく襲い掛かり、既に部屋の中にあった物は全て灰になり、障壁で防御する夏流の身体も燃え始めていた。

逃げられる空間も無いほど、部屋全体を一気に焼き尽くす炎の中齒を食いしばってそれに耐える夏流。戦況は圧倒的に不利……しかし、少年には負けられない理由があった。

一方その頃地下ではリリアの叫び声が響き渡っていた。両足が石化し、立つ事もままならなくなったマリアがゆっくりと倒れていく。慌ててそれを抱きとめたリリアの腕の中、マリアの身体は徐々に石化しながら朽ちて行く。

美しい白い肌が灰色に固まり、罅割れて崩れて行く様子をリリアは瞳を震わせてじっと見詰めていた。マリアはそんなリリアの手を握り締め、優しく微笑む。

「……さあ、こんな所で立ち止まっている暇はないでしょう？ 早くここから立ち去りなさい……。仲間を連れて……大切な人の所に」

「……女王陛下……」

リリアは齒を食いしばり、瞳を瞑る。それからマリアを背負い、ゆっくりと歩き出す。

「まだ、間に合うかも知れない！ 助けられるかもしれないっ!! 学園には、凄く腕のいい医師さんだっているんです！ こんな、石化くらい……っ!!」

しかし、ゲルトはその場で立ち尽くし動こうとはしなかった。振り

返るリリアの視線を見詰め返す事はなく、ゲルトは首を横に振る。石化は見る見る進行していく。あのリインフォースでさえ一瞬で破壊したほどの呪いを受け、未だに意識を保っている事が既に奇跡だった。下半身は既に石となり、いつ砕けてもおかしくない様子に成り果てている。

「リリア……もう、良いのです。ありがとうございます。その気持ちだけで、充分です」

「……………くっ！…！ だったら、リリアが治しますっ！…！」

床にマリアをそつと寝かせ、石化した部分に手を当てる。しかしマリアはそのリリアの手を取り、首を横に振った。

「その力をみだりに使ってはなりません。貴方の力は人の命の重さを軽くしてしまう……。その力は、人の身には過ぎた代物なのです」

「え……？ 力？」

「今は何も判らずとも良いのです、リリア……。わたしはもう、充分長く生きました。満足の行く恋もしましたし、出来うる限りの力で自分の世界を変えようと努力しました。そして未来を託す事が出来る、素晴らしい子供たちにめぐり合えた……」

目を閉じたマリアの脳裏に浮かぶ景色。マリアはそう、既にこの時の事を知っていた。

思い返すのはかつての戦乱の日々。死んでしまったほうがマシだと思える地獄のような世の中で、姫が出会った一人の勇者の姿……。白銀の剣を担ぎ、一人荒野に立つその青年は沢山の物を背負い、そしてマリアさえも背負ってくれていた。その背中に憧れ、強くなる

うと努力した。全ての夢の終わりは今、既に心安らかに始まっていた。

身体が朽ち果てる事に恐怖はない。心残りがあるとすれば、過酷な運命を娘に残してしまう事。何も知らない、出来れば平凡に生きて欲しかった自分の娘が今、こうして泣きそうな顔をしながら手握ってくれている。それがどれだけ嬉しい事か。

「……リリア、貴方にもいつかきつとわかる日が来る……。己の人生に悔いが無いと思えるのなら、全ては恐ろしくなどありません」

「陛下……」

「だから、大丈夫です。後悔せぬよう、貴方は貴方の物語を生きるのです。わたしはもう、充分にわたしの物語を生きました。貴方たちには申し訳ないけれど……ここで、お別れです」

石化が胴体にまで及べば生命活動の停止は避けられない。マリアは風前の灯と成った命で微笑み、二人の勇者の少女の頭を撫でた。

「ゲルト……。リリアの事を、御願します。かつてのゲインのように、彼女を……この子を、支えてあげて……」

「……はい。必ず……必ず、果たします」

「貴方には本当に申し訳の無いことばかり押し付けて……本当に、駄目な女でしたね。でも、ゲルト……貴方も貴方の幸せを探すのですよ。貴方もまた、そうなる権利を持つ一人の女の子なのですから」

「……………はいっ」

マリアの手を握り締め、ゲルトは目を瞑る。そうしてマリアはリリアを見詰め、苦しみを堪えながら微笑む。

「それじゃあ、元気でね……。愛しているわ、リリア」

その瞬間、マリアは二人を突き放した。突き放された二人の頭上、電撃の魔法が降り注ぎ、石になりかけたマリアの身体を砕いて散らした。

「え……。っ？」

二人とも何が起きたのかその瞬間理解出来なかった。振り返ったその先、天井に張り付いて呪文を詠唱する包帯男の姿があった。

砕け散り、既に胸から上しか残らないマリアの死体を見詰め、リリアの身体が震える。振り返った少女は神剣を振り上げ、空中へと跳躍していた。

「うわあああああああつ!!」

振られた神剣から放たれた光は地下深くから地上へと、積層する大地を貫いて飛び出していく。

空に立ち上る閃光の柱に誰もが目を奪われた。そしてまたその光は上の階層で戦う夏流にも届いていた。

「リリア……。？」

「ちょ、ちょっとちょっとお!? 崩れるんじゃないの、大聖堂!」

激しく振動し、崩壊していく大聖堂。空へと突き抜けた穴を見上げ、

ナイアーラは空へと羽ばたいて行く。

「悪いけどこんな穴倉で心中なんてお断りだわ。それじゃあせいぜいがんばってね、ぼうや」

空へと消えて行くナイアーラを見送り、夏流はその場に膝を着く。最早満身創痍ではあったが、ここで立ち止まるわけには行かない。地下でまだ、戦っている仲間がいる。

「あの馬鹿……。何、大聖堂壊そうとしてんだ……っ」

よろめく足取りで壁にぶつかるようにして立ち上がり、ゆっくりと階段を下りて行く。地下から響く、激しい魔力の源を目指して……。

覚醒する力の日（５）

リリアの放った閃光の一撃は地下深くから地上へと続く巨大な縦穴を生み出してしまった。

攻撃を紙一重で回避した男はその威力に驚嘆し、縦穴をよじ登って行く。それを追いかけようとするリリアだったが、突然両足に力が入らず、何の受身も取れずに正面に倒れこんだ。

「り、リリア!？」

「は……う……？ あれ、身体に、力が入らない……」

手から神剣が零れ落ちる。音を立てて大地をはねた剣は静かに帯びた魔力を収めて行く。

リリアを抱き上げるゲルトであつたが、見たところリリアに外的なダメージは存在しない。となると、極端に魔力を放出した事による一種の衰弱状態だと推測出来た。

それも無理の無いことだ。あれだけの攻撃を　術として放つたのではなく、夏流のようにただ我武者羅に魔力を放出しただけで放つたのだから。夏流よりも大きく魔力総量で劣るリリアにとってそれは自殺行為にも等しい。

「何て無茶を……！　リリア、しっかりしてくださいっ！！」

「う……あ……」

虚ろな瞳で口を小さく開けたまま返事をしないリリア。明らかに危険な状態に陥ってしまっているリリアに気が動転してしまう。

そんなゲルトを冷静に諭す声があつた。それはその場に存在しないはずの、第三者の声　。

『落ち着け小娘。ただの魔力失調だ。落ち着いて休ませればそのうち治るが、少々極端に放出しすぎたようだ。私を手にして魔力を送り込め。それでリリアの命は助かるだろう』

おそるおそる振り返るゲルト。しかしそこには人の姿は存在しない。ふと足元を見下ろすと、そこにはリリアが落してしまつた神剣が転がっていた。

声はほかならぬその神剣、フェイム・リア・フォースから聞こえてきていたのである。耳を疑うゲルトであつたが、しかし事実である以上仕方が無い。

剣を手に取り、じっと見詰めるゲルト。言われたとおりに魔力を流し込むと、剣を通じてリリアの身体に生命力が戻って行くのが感じ取れた。

「こ、これは……!？」

『私とリリアは魂で繋がった存在だ。故に剣と心は常に共にある。端的に言えば、私がリリアとおまえを結ぶパスと成っただけの事よ』

「は、はあ。そうなんですか……。それより貴方は一体……?」

『ん? ははあ、成る程……。おまえはどうやら何も知らないらしいな。まあいい、兎に角今はここから脱出するのが先決だ。リリアを担いで縦穴を上れるか?』

頭上に広がる縦穴は半径5メートルはありそんな円形のトンネルを地上まで続けている。しかしどうも今のゲルトの体力では縦穴を一気に蹴り上げるような事は難しそうであった。

かといって、飛行系の能力も持ち合わせては居ない。となると走って戻るしかないわけだが、地下を支える石柱を殆ど破壊してしまつた上にあの衝撃である。いつ大聖堂が崩れ落ちてもおかしくない状況下にあった。

「わたしの能力では無理ですね……。リリアを抱えて地上まで戻りましょう」

『情けないな、飛行くらい会得しておけ　と、ちょっと待て』

「な、なんですか?」

剣は静かに黙り込んだ。しばらくすると、溜息を漏らすような声が聞こえる。

『……ライバルとして争った相手だ、黙祷くらいは捧げてやらんな。何より気高い女であった。貴重な人間を失ったな、この国は』

「……マリア様のことですか？　ライバルって一体……？」

『そんな事よりも今は脱出を優先だ。ここで死んでしまつては私の話を聞いたところで全て無意味になってしまうだろう？　さあ急げ、地上へ走るのだ』

「は、はいっ！」

石柱が倒れてくるのを見てゲルトは弾かれるようにして駆け出した。リリアを背負って階段を駆け上り、剣を引き摺りながら地上を目指す。

『こら！　もう少し丁寧に運ばんか！！』

「そんな事を言われても、この剣重いし大きいんですから仕方がないじゃないですか！」

剣と言い争っていると、階段の途中で夏流と合流した。傷だらけの様子の夏流はゲルトがリリアを抱えて地上に走っているのを見て、苦痛に耐えながら階段を昇り始める。

「ゲルト……マリアは？」

「……マリア様は」

ゲルトの表情から夏流は全てを察した。だが、悔やんでいる暇はない。今は一刻も早くこの場所から立ち去らねばならないのだから。

崩れて行く神殿の中、夏流は力を振り絞り走り抜ける。ふと、ゲルトが持っている剣が以前とは姿をかえていることに気づいて首を傾げる。

「その剣は……？」

『うむ、久しいな救世主。いつぞやおまえを助けてやった恩、まさか忘れては居まいな？』

「は？ 恩って……まさか、お前ロギアか！？ でも声が……」

「え、ろ、ロギア？ 今貴方、ロギアと言いましたか！？」

『おまえら案外余裕だな。正面から柱が来るぞ』

「うおっ!？」

倒れてきた石柱を回避し、回廊を急ぐ。確かに今それを議論している場合ではなかった。

地上の礼拝堂まで飛び込むと、既に仲間たちはヴィークルで脱出を始めている最中であった。最後に残ったヴィークルに飛び乗り、夏流はヴィークルを急発進させる。

「くそ、間に合え……っ!」

背後で次々と地下へと陥没していく大地。そこから逃れるように必死で加速を続ける。長い長い礼拝堂へと続く通路を付きぬけ、大聖堂の崩壊に慌てふためいている聖堂騎士団の頭上を跳び越え、オルヴェンブルムの街を駆け抜ける。

しばらく進んだ所で急ブレーキをかける夏流。既に魔力が付きかけ、

疲労の為上手く操縦する事が出来ずに居た。スピンしながら壁に激突するヴィークルが民家の壁を大破させつつ停止する。

「いってえ……！ ぎ、ぎりぎりか……」

「あ、貴方という人は……！ ヴィークルに障壁魔法が備わっていないかったら今頃どうなっていたか！」

「じゃあ運転変わってくれよ……！ つーか後ろから聖堂騎士団の連中が追ってきてるぞ！！ ほらゲルト、発進させろ！！」

「わ、わたしですか！？ え、ええと……ここがこうで、こうやって……うつつ、えーと……」

急に話を振られたゲルトは夏流と操縦を交代する。しかしいざ席に座ってみると混乱してしまい操作が出来ない。

「何やってんだ！ 来るぞ！！」

「わわ、わかってますっ！！ ええと……こうですかっ！？」

間違っバツクに急発進するゲルト。近づいてきていた騎士たちを数名跳ね飛ばしながら進行し、慌てて前進を開始する。

追っ手から逃れ、オルヴェンブルムの街をとりかこむ城壁を乗り越えて草原を進む。その最中、ゲルトはほっと胸を撫で下ろしながら生唾を飲み込んだ。

「びつくりした……。後ろにも進むんですね、これ……」

「……意味もなく轢かれた騎士には同情するな」

後部座席に座り、リリアを抱きかかえた夏流。その背後からヴィークルが次々に追いついてきて隊列を構成する。

遠く、オルヴェンブルムから上る土煙を眺めながら深く息を付いた。全員無事とは行かなかった上に、作戦は失敗……。しかし何とか生きて帰ってくる事が出来た。

『マリアの事を気に病んでいるのか？』

夏流の足元、ヴィークルのブレードホルダーに装備された神剣が語りかける。

『奴は奴で充分に出来る事をやり遂げた。おまえもそうであるのであれば、後悔する必要などあるまい』

「……………そういうわけにはいかないさ。俺は……………リリアに、何て言えればいいか」

夏流の言葉の意味を汲み、神剣はそれ以上何も語ろうとはしなかった。空しい胸の痛みだけを抱え、夏流たちはディアノイアへと帰還した……………。

それから、俺たちがどうなったのかというと……………。

マリアの救出に失敗した俺たちは無念を抱えたまま休息を取る事になった。意図せずとも大聖堂本部を潰してしまった俺たちは、それなりに一定の戦果を上げる事が出来た、とも言えるのかもしれない。だがそれはリリアのいわば暴走が引き起こした結果……………。リリアは過度の魔力放出で意識不明の重体……………。突撃したメンバーは全員奇跡的に無事だったが、誰もが傷つき疲れていた。

大聖堂本部崩落の知らせを受けてか、学園を取り囲んでいた聖堂騎士団は撤退していった。その後、戦場はシャングリラからオルヴェンブルムへと移行し、聖堂騎士団と聖騎士団、ならびに学園生徒の混成部隊が戦闘に望んだ。

その戦闘には俺も参戦する事になったが、戦闘はそれほど長引く事もなかった。本部を失った聖堂騎士団は、一同西へと撤退して行く。しかし、本部を崩落させただけであり、大陸各所にいくつも拠点を持つ聖堂騎士団ならびに大聖堂元老院を追い詰めたわけではなく、ただ聖都から追い出す事が出来た、程度の戦果である。

それでもその勝利は僅かな安らぎと希望を人々に与えた。オルヴェンブルムにも一時的な平和が戻り、女王の死は大々的に発表された。聖騎士団と大聖堂元老院は完全に決別。ディアノイアは新生聖騎士団に協力する形となったが、全てがそう丸く収まるわけではなかった。

学園内部で何度か勃発した生徒同士の争いの火種はやはり学園がどちらに所属するのかという点である。元々学園はどこかの軍属、というわけではない。新生聖騎士団に協力することを良く思わない大聖堂派の生徒も居るのだから、まとまるわけもなかった。

結局ディアノイアもクイリアダリアも、広い意味で言えば世界そのものが二分される結末を向かえ、俺たちは結局この国を守る事は出来なかった。勿論、それでも得られた物はあったのだが……。

少なくとも味方に対して、リリアや俺たちの裏切りの汚名は漱ぐ事が出来たようだ。だが、結局はどちらが裏切り者で、どちらが正しいのかはもうわからなくなってしまった。国が二つに割れ、近隣諸国も動き出す。大きな戦争を予感させる事態に、誰も明るい気持ちになどなれるはずもなく……。

「どうしたんだい、こんな所で。一人ではんやりするのもまあ、悪いとは言わないけれど」

「……アイオーンか」

変形した学園は、当分元に戻る事もなさそうだった。学園全体が実戦という状況に慣れようと、少しずつ雰囲気を変えて行くのが解る。この奏操席から見下ろす学園で、生徒もそうでない人も、皆戦いの中で自分出来る事を探している。平和はたったの十年しか持たなかった。また同じように、過ちを繰り返してしまう。

本物の戦いに慣れようと、生徒達はみんな一生懸命にやっている。魔法で回復する者、生産技術で武器を作る者……。それぞれが様々な力を生かし、この街を守ろうとしている。

シャングリラ、そしてディアノイアというこの学園を、皆守りたいから。仲間と過ごしたこの学園で、皆それぞれ自分の生きる意味を探している。そしてそれを消されたくなくて、何が正しいのかはわからなくても頑張ってるんだ。

そんな事を思うと、自分の責任の重さに押しつぶされそうになる。それと同時に、皆の小さな力が合わさって、何とか成立しているこの学園が愛しくなった。街を一望するバルコニーのようになっている最短部に並び、アイオーンは溜息を漏らして俺の肩に手を乗せた。

「マリアの事、まだ悔やんでいるのかい？」

「……それもある。でも何より、この世界はやっぱり戦いに向かっているって事が悲しいんだ。俺は……世界を救う力何て無い」

結局マリシアを相手にして、俺に出来たのは時間稼ぎだけ。たまたま運良く生き残れたが、あのままではやられていただろう。

情けないことこの上ないな。皆を守りたいのに、救世主なのに……俺より強いやつがうじゃうじゃいる。この世界の中で、一体何を守り、何を救えるのか……。それさえも解らなくなりそうだ。

「……気休めを言うつもりはないよ。けれどね、夏流……。君たちは素晴らしいものだ。人間とは、間違いながらも歴史を積み重ね、学び、営み、生きて行く。それはとても素敵な事なんだ。たとえ間違えても君が歩む足を止めないのであれば、その先に必ず今より良い未来派待っている」

「……そりゃ気休めじゃないか？」

「受け取り方にもよるだろうね。けれどもボクは少なくとも気休めのつもりはないよ。ただの……。そう、本気さ」

肩を竦めるアイオンと向かい合う。風が吹き、それを気持ち良さそうに受けて目を細めるアイオン。俺はずっと疑問に思っていた事を投げかける事にした。

「お前は……人間じゃないのか？」

俺の突然の言葉にアイオンは目を閉じてあさつての方向を向く。答えを待つ間、風に靡く美しい紅い髪を見詰めていた。

「確かに、ボクは人間とは異なる生き物なのかも知れない。長い長い間、この世界で生きてきた。それこそ、君たちが生まれるよりずっと前から……。ね。この世界で人の営みを見詰めてきた。時には絶望し、時には希望を抱き……。夢見るように、眠るように。ただ世界の中に在り続けた」

「……お前は、どうして俺を助けてくれるんだ？」

アイオンは学園を司る存在……。ディアノイアそのものと言ってもいいだろう。

そのアイオーンは、長い間この学園の中で過ごしてきた。外に出る事は可能なだろうが、しかし彼女の役目はプロミネンスシステムを守る事にある。この地に値を宿すのも当然の事だといえるだろう。日々過ぎ去って行く時の中、沢山の生徒と出会ってきたアイオーン。そのくせ自分も生徒して学園に関わったり、闘技場に参加してみたり……。夜はバーでピアニスト、その実本職はプロミネンスシステムの奏者。ふらふらとした彼女の生き方の中、それでもはつきりと自分に対する優しさ……。思い遣りのようなものを感じ取る事が出来る。

アイオーンはこの学園の中で生きている時、いつも笑っている。微笑を絶やさない。だが、それは彼女が本当は楽しくないからなのではないかと思つた事がある。ピアノを弾いている時だけ、のびのびと羽を伸ばしているような気がしていた。

「お前は、本当は……奏者なんかになりたくはなかったんだろ」

「……どうしてそう思ふんだい？」

「さあ、どうしてだろうな。何となくそんな気がただけだ」

彼女は腕を組み、困つたような顔をする。それから少しだけ歩き、空を見上げて。

「それでも自分の人生は楽しんでるつもりさ。ただ……君には少し、期待を寄せては居るからね。それで君を少し鼻屑してしまっているのかもしれないかな」

「期待？」

「この退屈な世界を……閉塞されたこの物語を打ち壊す、型に嵌ら

ない異世界からの来訪者。本城夏流……君がボクの退屈を紛らわせてくれるんじゃないか、そう思っていた」

やはりこいつは俺が異世界から来た人間だって事を知っていたのか。まあ、ある意味学園長であるアルセリアと同等の人間なのだから、知っていてもおかしくはないが。

「でも君はそうじゃなかった。君は普通の……いや、少し変わった男の子、かな」

「何だそりゃ」

「ふふ、褒めているんだよ。君は面白いからね。そういう意味では、やっぱり退屈を紛らわせてくれると期待しているよ。でも、君に世界をどうこうしてほしいなんてことは、もう望んではないさ」

振り返ったアイオーンは微笑を浮かべ、俺の隣に立つ。そうして街を共に見下ろした。

「ボクはね、この学園で十年、色々な生徒を見てきた。旅立って行く子を見送ってきた……。その前は戦争で、軍隊で、国で……。沢山沢山、別れを経験して来た。そのどれもが大切に、誰もが幸せになつてほしいのに……世界はそうは優しくないのさ」

「……………」

「君だけじゃない、この学園に居る全ての生徒がボクにとっては大切な子供たちなんだ。でもね、好かれて別れるのは、辛いんだ。大好きな人と、何度も別れなければならない……。皆は年老いて普通に死んでいくのに、ボクはそうは行かない。こんなに若くて、綺麗

なままさ」

自分の胸に手をあて、アイオーンは無邪気に笑う。しかしそれはとても寂しそうにも見えた。

「誰からも好かれない存在で居なければならない。でも同時に、誰かに嫌われる時はきっとプロミネンスシステムとしての役割を果たす時だ。だからボクは空気のようにでなければいけない。神出鬼没で、何を考えているのかわからない……出来れば係わり合いになりたくない、そんな存在でなければね」

「……俺は、そうは思わないけどな」

「……だろうね。いつだったか君がユーフォニウムにまで押しかけてきた時は、柄にもなく嬉しくなってしまったよ。君は予想斜め上で、いつも面白いんだ」

子供みたいに笑うアイオーン。思わずこっちまで苦笑してしまう。彼女は俺の手を取り、それから優しく微笑んだ。

「いつだったか、君のようにボクを追いかけてくれた人が居た。その人とは、もう一緒に居られないけれど……少し、昔の事を思い出せる。幸せな時間を繰り返し返せる。それだけで、君に優しくする理由としては充分じゃないかな」

「自分のためだから、か……。結局気を使ってもらってるな、俺は」

「ははは、そう思うのならば、全て背負えるように……いつか、誰かを守ってあげられるように、強くなればいいだけの話じゃあないか」

そういつてアイオーンは俺の頭を撫でながら隣で笑う。優しい、儂げな笑顔……。その綺麗な横顔に何となく脱力する。

コイツは多分、一生こうなんだろうなあ……。そんな事を思いながら、俺は溜息を漏らした。

「あんた、別に変わんないよ……」

「ん？」

「別に、普通にどこにでもいる、ちょっとキレーだからって調子乗ってるネーチャンだわ」

俺の言葉を聞き、アイオーンは暫く黙り込んだ。それから思い出したように腹を抱えて笑い出した。

しばらくそうしていたが、じっとしているわけにもいかない。オルヴェンブルムではマリアの死を弔う儀式が行われるという。俺もそれに出席しなければならない。

未だに眠ったままのリリアを残し、オルヴェンブルムに向かい……。そして、リリアにどんな風に伝えればいいのだろう。偉大な女王が、彼女の母であったことを。

そしてこれからリリアは背負わねばならない。女王マリアが背負っていたこの国を、全て……。

「なんだか、遠くなっていくよ」

俺の呟きを聞き、アイオーンは背中を叩いた。そうして何も言わずに目を閉じて首を横に振る。

「追いつけるさ、君なら」

そのどつでもいいかにも胡散臭い一言が、今の俺には必要だった。

覚醒する力の日(5)(後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

もう七十部いつてしまふよ編

アクセル「出番がねえ……」

夏流「うっかり敵になったりすっからだよ」

アクセル「まあそれは兎も角、アンケート終了のお知らせだ！ 協力してくれた皆さん、ありがとうございました！」

夏流「そろそろ物語も新章に突入し、いよいよ勇者としての最後の戦いが始まるわけだ」

アクセル「え、最後のの？」

夏流「んー、リリアが勇者になるまでの話は次で終わる予定。その次からは俺がメインになるのだ」

アクセル「……夏流、俺たち友達だよな？」

夏流「おま……すりよって来んな！！ 気持ち悪いなっ！！」

アクセル「つーか俺いつ仲間に復帰できんの？」

夏流「え、復帰前提？」

アクセル「んー、だって俺が居ないとなんかほら、全体的に暗くねえ？」

夏流「……まあ、確かに」

アクセル「そんなわけで、近々登場するぜ！ 多分！ 俺様のファンは要チェックだ！ アイラビユー！！」

夏流「……お前と戦う時までには俺強くなっておくよ」

覚醒する力の日（6）

「つまり、どうやらリリアはクイリアダリアのお姫様、らしいんだ」

「……………ほえ？ そうなんですか」

「……リアクション薄っ！？」「……」

オルヴェンブルムへと向かう列車の中、俺は意を決してリリアにそれを語る事にした。

フェイトとリリア、二人の娘であること。つまりそれは、クイリアダリアのお姫様であること。色々としりあのお事については謎の事も多いが、とにかくこの二点は直ぐにでも必要になってくる事実だった。

差し当たり、魔王であることは先延ばしにするとしても、マリアが死んだ以上この問題は避けては通れないだろう。目を覚ましたリリアを強引に列車に押し込み、そこで俺は仲間たちに全てを話し……………それで、シリアスな展開になるはずだった。

それがどうしたとか、リリアは事実を知っても特に驚いている様子が見えなかった。そのためビクリした連中は全員同時にツッコんでしまったのである。

逆にそれに驚いたのか、リリアは目をぱちくりさせている。別に寝ぼけているというわけではなさそうだが、一体どうしたことが……………。

「えーと、皆のリアクションが大きすぎるだけじゃなくてですか？」

「いやっ、それはそうなんだが……………。お前、自分の母親がマリアなんだぞ？ そこわかってるか？」

「え？ いや、わかつてるかって……そんな事言われても……。リリアのお母さんがマリア様だっていわれても、正直ピンとこないっていうか」

まあ、確かにそりゃあそうだろうな。でもだからってそんな不思議そうな顔をしている場合か？　だってマリアは……もう、死んでしまったんだぞ？

それから俺たちはいかにそれが重大な事であるのかをリリアに説明したが、彼女は結局理解しているのかしていないのか良く判らないままだった。列車は俺たちを容赦なくオルヴェンブルムへと運び、女王の葬儀ムードで暗い聖都へと足を踏み入れる。

リリア・テイルを見上げても尚リリアはぼんやりした顔をしていた。リリアはマリアの娘であり、アリアよりも確実に年上だ。つまりそれは……この国を背負う義務を持つ事に他ならない。

他の人間を女王に仕立て上げるのはどうやら無理らしい。代々女王は女王の一族のみ……。血を分けた娘はリリアとアリアしかないのだから、あんなに小さな女の子であるアリアに全てを押し付けるわけにもいかない。リリアは率先して自分でやると言い出すとばかり思っていたのだが、この様子ではどうもはつきりしない。

「……どちらにせよ、葬儀は明後日だ。色々あって大分遅くなってしまったが……国を挙げて盛大に行われるらしい。俺たちもそれに参加し、警護を受け持つ事になった。勇者部隊はオルヴェンブルムにて待機、集合の合図があるまで自由行動だ」

命令を下すと全員同時に頷いた。リリアは一人、ふらふらと街の中を歩いて行く。その背中を追いかけようとする俺の手を取り、首を横に振るマルドゥーク。

「今は、少し気持ちの整理が必要な時期だろう」

「……でもな」

「気持ちは察する。だが、私もこれからはリリア……女王を守る立場になる。気持ちは同じだ。しかし、今のあの子にその責務を果たすのは難しいだろう。余りにも、重すぎる課題だ」

腕を組み、マルドゥークは俯いた。俺にもわかっている。放って置くわけにはいかないし、はいそうですかと受け入れられるような軽いことでもない。今はリリアが、どうにかして気持ちを決めるべき時なのだろう。

リリアにはもちろん、女王となる事を拒否する権利もある。アリアという正当な後継者もいるのだ。むしろそれが自然なのかもしれない。だが、リリアは何をどう願うのだろうか。

結局はあの子の気持ち次第、か……。そこで俺たちがつべこべ口出しするのはやはりおかしいのかも知れない。

マルドゥークの手を振り解き、俺はもうリリアを追いかけようとはしなかった。マルドゥークは俺たちを振り返り、一礼する。

「今回の件では世話になったな。これから聖騎士団として共に戦う事もあるだろうが、今は騎士団も忙しくてな。一先ず失礼する」

「また直ぐ嫌でも会うことになんだろ。それまでしっかり仕事しろよ、副団長」

マルドゥークとは数名の聖騎士と共に去って行く。その背中を見送り、俺も振り返った。

「兎に角解散だ。明後日の集合にはちゃんと来いよ」

こうして俺たちはオルヴェンブルムの中別々に行動することになった。リリアに声をかけるつもりはない。だが、心配になった俺は彼女の後を追いかける事にした。

色々と話したい事もある。一人にしておくのは、忍びない。勿論それが、自分勝手な甘さなのだという事はわかっているのだが。

覚醒する力の日（6）

リリアの後をつけていると、オルヴェンブルムの街にあるとある路地に辿り着いた。

ちよつとした広場のようになっていてそこでリリアは積まれた大きな木箱の山に昇り、一番上に腰掛けて剣を傍らに空を見上げていた。何をするでもなく、ぼんやりとそうしている姿を俺は物陰からじつと見詰める。やがて見えている事がだんだん申し訳ない気がしてきて視線を反らすと、リリアの独り言が聞こえてきた。

「ロギアは、知ってたんだよね。マリア様の事」

『……当然だな。私を剣に封じる術式を考案したのはあの女だった。フェイトに余計な物を託しおって』

「……………マリア様がお母さん、なんてさ。急に言われても、実感ないよ」

ラインフォースの刃が零れ、その内側から出てきたという剣。光り輝くその刀身を太陽に透かす様に両手で掲げ、リリアはぼんやりと呟く。

「聖剣の中にこんな剣があったって事も、リリア知らなかった。ねえロギア、あなたが急に喋れるようになったのと関係あるの？」

『ふむ。まあ、その通りだな。封印は鎖だけではなく、あの偽りの刃もそうだった。この剣の力を封じると同時に、私の声も妨げていたのだ。喜べ、これでもうおまえは独り言を言っているとは周りに思われんぞ』

「そういう問題じゃないと思うけどなあ……。でも、よかったね。ロギアの声、皆に届くようになって」

『……全く、つくづく緊張感のない小娘だ』

それには俺も同意する。どこの勇者なら、魔王にあんな風に微笑みかけられるのだろう。美しく光を弾く刀身に自分を写し、リリアは悲しげにたそがれていた。

リリアは、母親が居なくて寂しくなかったのだろうか。物心付く頃には母は無く、父もしばらくして死んでしまった。誰も帰らない家で一人、ずっと帰りを待っていたリリア。ヴァルカン爺さんが傍に居たから寂しくなかったとか、そういう事ではないのだろうか。

俺は、両親に恵まれた。金持ちだったし生活に困った事も無い。確かにちよつとばかり口うるさくて頑固で俺に苦手意識を抱いている物の、ちゃんとした、大事な両親だ。

妹にも友達にも恵まれていた俺に、リリアの気持ちを理解してやる事は難しいだろう。一人ぼっち、戦争の最中、親を待っていたリリア。その求めていた母親の影は、あっさりと彼女の手をすり抜けてしまった。

ゲルトから話は聞いた。リリアは目の前でマリアを失った。自分の母親だという事も判らないまま、何も伝え合う事も出来ないまま、

ただ失ってしまった。彼女はリリアを確かに守り、そして未来に希望を残し、この世を去った。だが、残されたリリアはどうなるのだろうか。

母親だったと言われても理解できなくて同然だ。リリアはマリアを母だとは思って居なかったし、これから母と娘の時間を取り戻す事も出来ない。何よりもリリアは己の無力さを嘆いている事だろう。彼女は母を守れなかった……。それは、どうしようもない事実だから。

「お母さん、かあ……。何か、不思議だね。あんまり悲しくないんだ。何だか良く判ってないって言うのが正しいのかな？ マリア様が死んだのに……。泣けないんだ」

『……だろうな。お前は剣を封じられると同時に、過去の記憶も封じられてきた。だが、受け入れる準備だけはしておく事だ』

「受け入れる準備？ 過去の記憶？」

『おまえの中に、私が封じられる以前の記憶だ。剣の封印が解けた以上、おまえは自分と向き合わねばならない時が来る。そうすれば解るさ。おまえがどれだけ、両親に愛されていたのかがな』

リリアはその言葉に眉を潜めた。剣を降ろし、溜息を漏らす。そんな事を言われても、覚悟のしようがない。

「リリア、ずっとお母さんに会いたかった。お母さんって呼んで見たかった。でも、お母さんが誰なのか判っても、もう呼べないし、そんな気にもなれない。お母さんってなんなんだろう。どうしてお母さんは……。リリアをこんな子にしたの？」

『……それは誰かの所為、というわけではない。ヤツはヤツなりにおまえを愛そうとしていた』

「嘘だよ、そんなの……」

ロギアの言葉を遮るようにリリアは呟く。そうして木箱の山から飛び降りると、剣を地面に突き立てて振り返る。

「本当に愛してるんなら、もっと早く教えてくれたっていいでしょ？ 本当にお母さんなら、一回くらいリリアに会いに来てくれたっていいでしょ？ お母さんってそういうものじゃないの？」

『……リリア』

「お母さんってなに？ リリア、もっとお母さんって、あったかくて優しくて……リリアのこと、好きだって言ってくれる人だと思ってた。でもあの人はそうじゃないよ。リリアと会っても、事務的なことしか言わない。何回も今まで会ってきたけど、一度だって優しい言葉をかけてくれたことなんかなかったっ！！」

自らの剣にそう辛く言い放つリリア。肩を震わせ、呼吸を荒くしながらリリアは齒を食いしばり俯く。

「何でもっと早く、リリアの事……」

『……おまえのいう事も尤もだ。あの女は確かに良い母ではなかったらうな』

ゆっくりと顔を上げるリリア。その視線の先、剣は光を弾きながら静かに語る。

『だが、あの女が背負っている物はお前だけではなかった。普通の母が自らの子にだけ愛を注げるというのなら、ヤツはそうではなかった。自分の娘だけを特別扱いするような女王が、立派な王とおまえは思うのか？』

「……………」

『あの女にとって、子はこの国そのものだ。おまえだけではなかった。それでもおまえの事を想っていた。私におまえを預けた。敵である私に、だ。全てを投げ出して、体裁など気にもせず形振り構わず娘を守りたかった。だからこそ私だ、リリア』

「……………わかってるよ」

『本当か？』

「ほんとだよ。わかってるよ。ごめんねロギア……………八つ当たりして」

『わかってるのなら良い。私はおまえの味方だ。おまえは一人ではない。忘れるな、リリア』

「うん……………。ありがとう、ロギア」

剣を手に、リリア寂しげに微笑む。何と言うか、まるで二人は兄弟……………あるいは親子のように見えた。同じ魂を共有する剣と勇者……………姫と魔王。なんとも言えない複雑な関係だが、それは俺が想うほど劣悪なものではないらしい。

きちんと二人は互いを思いあっている。だから、リリアはほうつておいても一人なんかじゃない。剣が共にある限り、リリアはきっと

……。

そう考えるとここで見ているのも馬鹿らしくなってきた。俺は溜息を一つ残し、その場を後にすることにした。

ふと振り返って路地を歩いていると、壁を背にゲルトが立っていた。彼女も話を聞いていたのか、俺と視線を合わせると眉を潜めてしかし微笑んだ。

「……あの剣が魔王ロギア……。でもわたし、何故かあの剣を嫌いになれそうもありません」

「リリアにとっては辛い事になった。でも、もしかしたら……。本当の家族はずっと傍にいたのかもな」

「……少し、複雑な気持ちですが。父の敵だった相手が、リリアの大切な人だというのは」

二人して路地を出て通りを歩く。ゲルトは優しく笑いながら自らの魔剣をじつと見詰め、指先で強くそれを握り締めていた。

「マリア様は……。わたしの痛みを知ってくれていました」

「……そうだな」

「苦しい事も悲しい事も……。自分の娘であるリリアと同じように、わたしを見詰めてくれた。本当に優しい人で……。でも少し、自分に厳しすぎたのかも知れませんか」

そう呟くゲルトは悲しそうだった。ふと足を止め、俺たちはオルヴエンブルムの街を歩く人々に目を向ける。

「彼女が残した物、伝えたかった物……それを全て受け止める事が出来るのでしょうか」

「それは難しいんだろうな。でも……あの人の持ってた誇りのような物は、リリアやゲルト、お前らに受け継がれているんじゃないかと思う」

「……おだてているんですか？」

「そうじゃないさ。これからそうならなきゃならない……むしろ、プレッシャーかな」

そうふざけた調子で言うと、ゲルトは困ったように笑った。それから俺たちは暫く黙り込み……。俺はゲルトもまたリリアと同じように、悲しみに暮れている事を知った。

ゲルトは表情を変えず、立ち尽くしたまま瞳から涙を流していた。ただ淡々と流れる涙は彼女が抑え切れなかった悲しみそのものなのだろう。俺がその肩を叩くと、ゲルトは涙を流しながら顔を上げた。

「リリアの悲しみは、きっとこんな物ではないのでしょうか……。そう考えると、胸が苦しくて……」

自らの胸に爪を立て、ゲルトは声を振るわせた。何と言つか、本当にリリアにべったりなやつだ。その頭にボンと手を乗せ、そつと撫でる。

「皆悲しいんだろ、きっと」

「解っています……」

「解ってないだろ。お前だって泣いて喚いて落ち込む権利くらい、持ち合わせてるんだから」

しばらくそうして頭を撫でていると、ゲルトは俺の手を振り解き視線を反らす。

「……………しないでください」

「……………ん？」

「……………あんまり優しく、しないでください……………。貴方の優しさは……………少し、無責任です」

涙を拭い、ゲルトはそっぽを向く。無責任な優しさ、か。確かにそうかもしれない。ただの、甘さみたいなものなんだろうか。ポケットに手を入れ、壁に背を預ける。なんだか少し疲れてしまった。色々な事がありすぎて……………この世界には、心が休まる瞬間がない。

そうしてぼんやりと空を見上げる俺の隣でゲルトは少しずつ距離を寄せて行く。触れる事はない、でもきつと離れる事も無い距離。それが俺と彼女の関係のような気がして少しおかしかった。

「貴方は……………リリアの大切な人、ですね」

「藪から棒になんだ？」

「ただの事実確認です。貴方はリリアにとって大切な人なんです」

「俺に言ってるのか？」

「いえ、違います。多分それは 自分に言ってるのだと思います」

そう言っただけでゲルトはなんとも言えない表情で目を閉じた。その言葉の意味は判らずとも、俺は彼女に容易に触れてはならないような気だけはしていた。

しばらくして俺たちは別れる事になった。別々の道を行き、違う時間を過ごす。そんなゲルトを見送り、一度だけ振り返ってはにかむような笑顔を見せたその背中は何を思っただろう。

背を向け、俺も歩き出す。いつまでもくよくよしているわけにはいかない。とにかく目的は無くとも歩きたかった。どこかに進みたかった。この場でじっとしていることだけは、どうしてもしたくなかったから。

「……どこに進んでいるんだろうな、俺は」

呟いた言葉は雑踏に消えてしまう。

勿論、誰かが応えてくれる等と期待もしていなかった。

その二日後、葬儀は盛大に執り行われた。

葬儀の事を語るのは、少しだけ辛い。だが俺はその景色を忘れる事はないだろう。

更にその三日後、リリア・ライトフィールド いや、リリア・ウ

トピシュトナが次期女王となる事が決定した。

その事については……多分、もっと語りたくない。

「ナツにーちゃん、いつまでそんな所でごろごろしてんだよ？」

学園に戻り、平穏な日々が続いていた。リリアが女王になるまではまだ時間があり、国民への発表も迫ってはいるもののまだ先だ。全てが極秘裏に動き、リリアはオルヴェンブルムへ滞在し、リア・テイルに缶詰になっている。ゲルトはそれに付き添うらしく、しばらく出かけたまま戻って居ない。

学園も人々も世界もクイリアダリアも皆皆変わって行く。その変化の中に取り残されるように俺は学園の屋上で寝転がっていた。肌寒い季節になってきたが、まだ今日は暖かい。そんな俺のまどろみを遮り、影を落したブレイドが唇をとんがらせる。

「救世主なんだからもつとちゃんと働けよ。勇者のねーちゃん、女王になるんだろ？ ニーチャン傍に居なくていいのかよ？」

「俺が傍に居ても今は邪魔な時期なんだよ。なにやらあいつ、政治とか国の事で色々勉強せにやらなららしい」

結局あの日、マリアの葬儀以来リリアとは一度もあつて居ない。顔をあわせる機会がそもそも無いし、そうする理由もなくなった。毎日マルドゥークやらゲルトやらに政治の事を詰め込まれ、女王らしい立ち振る舞いを学んでいるリリアに教えられる事は俺にはないわけで。むしろ、俺はお邪魔なわけで。

こうしてリリアと離れると、自分のやる事がボヤけた気がしてなんだが気が抜けてしまう。暢気に流れて行く雲を見送る俺に、もう一つの影が差した。

「や、どうもお久しぶりで」

「……ハ？　こんなところで何やってんだ？」

「いえね、アリア姫様を匿ってたのが評価されて正式に指名手配をとってもらえたんですわ。それで学園の方に顔を出してみたわけさあ」

腕を組み、ハは相変わらず胡散臭い様子で笑う。立ち上がった俺は首を鳴らしながら欠伸を一つ。

「そいつは良かったな。それじゃあブレイド盗賊団も再結成すりゃいいだろが」

「そいつはまだちょっと時間がかかりそうですわ。それより今日は救世主の旦那にも用件がありやして」

「俺に？」

首を傾げる俺にハは隠す事も無く告げる。

「大聖堂は西の宗教都市ケルゲイブルムに居を構え、反撃の機会を窺っている。その上北の方では良くない噂が蔓延ってやしてね。ちよいとその調査を頼みたいんですわ」

「北方の調査？　よくない噂ってなんだ？」

「ああ、詳しい内容はクライアントのほうから聞いてくださいませ」

そう言っただけで肩を竦め、ハは俺の背後を指差した。慌てて振り返ると、そこには居るはずもない人間の顔が二つ揃っていた。

そこに居たのは、どこからどう見ても真正銘フェンリル……それ

に確か、鶴来とかいう異国の剣士だった。いつの間にここに立っていたのか……。困惑する俺を前にフェンリルは何故か仮面を外して俺を見る。

勿論そこに見覚えのある顔があるのは既に分かっていることだ。しかしそれでも驚きはあった。フェンリル……学園教師ルーファウスは俺と向かい合い、表情のない瞳で俺を見詰めた。

「久しぶりだな、救世主」

「あんた……あんたがクライアントなのか？ そりゃ一体どういう……」

「単純な話だ。北で戦うべき時が来た。全てはヨトの預言の通りに……だ」

その単語に思わず眉を潜める。まさかという予感が過ぎたが、それが本当に現実の物になるうとは。

「こちらの救世主がお前と共に北に向かいたいと言っている。答えは明日までに決めておけ」

用件だけ告げて二人は立ち去ろうとする。その背中に声をかけ、俺は追いかけた。

「おい、待てって！ どういう事なんだ！？ 秋斗は何を企んでいる！？」

「別に何も企んではないさ。救世主ならば、目的は同じ……違うか？」

ヤツの言っていた目的　それを思い出し、俺は首を横に振った。
思い返す事さえ嫌気が刺す、秋斗の目的……。

確かにそう、俺たちは同じだ。リリアを勇者にすること……世界を救う事。でもその果てに見えているものが俺とあいつとでは違いすぎる。どちらにせよ、協力は出来ない関係だと言えるだろう。

秋斗だってそれはわかってはいるはず。なのに何故、そんな事を持ちかけてくるのか。理解が出来ないまま戸惑う俺を一瞥し、二人は去って行く。

「……なんか、すごいのかから誘われたなニーチャン」

「……本当だよ。困ったもんだ」

ふと、マリアの葬儀の後リリアに言われた事を思い返して胸がざわついた。

確かにそう、俺たちの目的は同じ事。だがその目的を果たした時、俺たちはどうなる？

考えたくない事が多すぎて俺は目を閉じた。本当に空は青いのに……この世界は行方さえわからない。

「仕方ない、か」

一言漏らして歩き出す。背後でブレイドが何か言っていたが俺はそれを聞かずにその場を後にした。

リリアが女王になる。ゲルトは騎士になる。俺たちの間にある壁は大きくなる。世界はどんどん変わって行く。

俺はどうするべきなのか。変わっていく世界の中で、まだ昔と同じものを求めているのか。それは正しいことなのか。わからない。

答えの見つからない世界。少しずつ歩き出す。俺は俺で、自分の答えを見つけないといけないのだろう。リリアやゲルトが、そうし

たように。

そうして、この世界に別れを告げる日が近づいていることを、心の
中で俺は理解していた。

忘らるる日（１）

この世界に永遠に居る事は出来ない。俺はこの世界の人間では無いから。

理由はそれだけではない。勿論、人には居るべき場所という物があるというのも事実だ。けれど、俺は俺の人生を生きなければならぬのは明らかだった。

皆と一緒に過ごした日々は掛け替えのない物だ。でも、それを永遠にすることなんて出来ない。勿論、俺だけじゃない。それはリリアだってわかつていることだ。

もしも俺がこの世界の中に何かを残せるというのであれば、それは俺の行動の結果だけに他ならない。そう、自分の決着をつける事こそこの世界の為に俺が出来る事なのだ。

秋斗、そして俺という異世界の存在を排除する……。そうすることで世界は本来の在るべき姿へと戻って行くだろう。長い時間をかけ、ゆっくりと……。

それは俺が絶対にしなければならぬことであり、唯一成せる事でもある。そう、俺はいわば秋斗を止めるためにこの世界に召喚されたのも同義である。

冬香^{トウカ}が俺に何を伝えたかったのか。今となつては、彼女からの手紙さえその信じるに値しない。薬物自殺したと言われる冬香、その彼女から差し出された手紙……。あの秘密基地に赴いた意味。全てに意味などあったのだろうか。

ナタル見聞録、ヨトの預言書　マリシアを生み出す悪意の断片、大聖堂の恐れる『終末』とマリアが守ったリア・テイル。女王になるリリアと、動き出した世界の流れ。

リリアはリリアで、あいつはあいつで。やるべき事をやっている彼女たちがいるというのに、俺だけだらけているわけにはいかない。

俺も、やるべき事をやらねばならない。

港から船に乗り込み、前回とは違い今度は急がない旅路。北方大陸まで三日ほどかけて移動する。もくもくと蒸気を立ち込めさせる汽船の煙突を眺めながらぼんやりと海の景色を眺めていた。

今回は誰も傍には居ない一人旅。救世主の秘密のお仕事なのだから仕方が無い。秋斗と俺、二人の異端が一堂に会する場面はそうある話ではない。このチャンスを放り出すわけにも行かず、俺は北方大陸の固い土を踏みしめていた。

クイリアダリアの内乱とも言える事件の所為か、北方大陸に移民する人も少なくはなかった。人の流れが盛んになっているのは、誰もが大きな戦を予見しているからだろう。

新たな女王リリアは若すぎる。それに脅威であった大聖堂元老院が居なくなつた今、主権を主張する国家が次々と名乗りを上げるのは必須。支配体制をどう移行させていくのか、リリアには重すぎる課題が待っている。

「……今は自分の事、か」

北方大陸の冷えた空気。曇った空……そのうち雪が降るかもしれない。

俺は目的地に向かって一人で歩き始めた。自分自身の物語、リリアのためではなく、俺たちの戦いをするために。

忘らるる日(1)

「と、言うわけで 本日からリリア様には様々な実務を執り行つて頂きます」

そう言つてリリアの机の目の前にどつさりと書類を積み重ねるマルドゥークの言葉でリリアの一日は始まった。

女王就任から数日、ここまで様々な儀式やらなにやらで毎日寝る間も惜しんで行動してきたリリアにはにはわかには信じられない量の仕事が目の前に並んでいる。冷や汗を流しながら少女は顔を上げ、傍らに立つマルドゥークを見詰めた。

「……マルドゥークさん、まさかこれ全部リリアに関係あることですか？」

「当然です陛下」

「でもでも、マリア様は全然人前に出てこなかったし……」

「まさか、人前に出て居ない間遊んでいるとも思っていたのですか？ マリア様も毎日きちんと彼女の役目を果たしていました」

「……………ううう。女王のお仕事って、書類の処理なの……？」

「一先ずはサインだけいただければ結構です。さあ、この書類凡そ二千枚に全てサインを御願します」

目尻に涙を浮かべながらリリアは黙々とペンを走らせる。それは難しいことではなかったが、膨大な時間と労力を必要とした。勿論マルドゥークも仕事は選んでいる。今のリリアにも出来そうな事を持ち込んでいるのだから、彼に非はないと言える。

生前、マリアはリリア以上の仕事をリリア以上の速さで仕上げていた。それは彼女が優れた人間であつた事の証であり、リリアの両肩にずっしりと押し掛かるノルマでもあつた。

聖都オルヴェンブルム、女王の居城リア・テイル城。その奥まつた

場所に存在する女王の離宮での生活も早くも数日が経過したのだが、リリアはその城での生活をあまり快く思っていない。

思えば以前のリリアの生活は勇者とは言え殆どただの学生と変わらなかった。その上勉強に秀でていなくてもなく、むしろ他の生徒と比べて見劣りする成績の持ち主であつたわけだから、急に城の仕事などできるはずもなく。

「うえええん、マルドゥークさんの意地悪ーっ！」

「意地悪では在りません陛下。私はこれでも、貴方に出来そうな仕事を選んで持ち寄っているのですよ」

「それはわかるけど……ね、眠くてよだれが……」

思えばろくに睡眠もとって居ない。ふらふらしながら手だけ動かすリリアの背後、マルドゥークが指を鳴らすとずらりとメイドたちが現れリリアの涎を丁寧につき取り、背中をマッサージする。

「はうああああ……っ！ き、きもちいい……」

「仕事の能率が上がるのであれば何でもするのが私の騎士道です。やる気が出たならサクッと仕事を終わらせてください、女王陛下」

「き、きもちよすぎて逆によだれが……」

「ノープロブレム。よだれなど気にせずどんどん垂らしなさい。全て処理致します」

そうして事務処理は実に三時間に及んだ。二千枚近くあつた物を三時間で処理するという人生初の行いにリリアは机の上に突っ伏して

ぐったりとしていた。

マウドークがメイドたちに書類を運び出させる頃にはリリアは既にウトウトしていた。眠りかけているリリアの背後に回り、マルドワークがその首筋に一撃入れる。

「はぐうつ!？」

「シャキつとしてください陛下。やることはまだ山積みですよ」

「い、今どこ叩いたの……？ 何か強制的に目が覚めたんだけど……」

「秘伝のツボです。さあ、次は市街を視察……もとい、新女王としての顔を売りに行きますよ。貴方はまだまだ女王として無名なので、すから、早いうちに民衆の支持を得なければ」

「……なんか最近、色々な所にお出かけしすぎてなんだか人と会うのがいやになってきたよ」

「女王がそんな弱音を吐いてはいけませんよ陛下。明るく元気よくスマイル！ そしておしとやかに手を振る!!」

「……す、すまいる……へ、へへへ……」

「引き攣っていますよ。おい、誰か陛下の顔をマッサージして差し上げる」

「いや、別にそんな必要は……にゃああああっ!？」

数名のメイドに群がられ、顔周辺をマッサージされる。一瞬で散っ

て行くメイドたちの立ち去った後、残されたのは爽やかな笑顔のリアだった。

執務室でリアがマルドゥークに絞られている頃、部屋の外には書類を片手に立つゲルトの姿があった。中でリアがどたばた騒いでいるのを聞きながら思わず苦笑を浮かべる。

警備の人間はゲルト一人であり、他には人気のない長い回廊を歩いてくるエアリオの姿があった。おっとりとした様子で微笑むエアリオにゲルトは一礼する。

「リア様のご様子はどうかしら？」

「色々と四苦八苦しているようです。尤も、四苦八苦しているのは陛下ではなくマルドゥークかもしれません」

「あらあら、まあまあ。でも、マルドゥークはあれで人に物を教えるのは好きだから、きっと張り切っちゃってるわよ」

「……そのようですね」

中から聞こえてくるマルドゥークの張りのある声とリアの泣きそうな悲鳴が交互に繰り返されるのをBGMにここに立っていたゲルトは笑うしかない。

リアの女王宣言から数日、ゲルトは常にリアの傍に居た。今では正式に聖騎士団近衛騎士に取り込まれ、女王の傍で常に身を守る女王騎士として立ち振る舞っていた。

その僅かな間でゲルトは見る見る仕事を覚え、今もリアにはどうしようもなさそうな仕事をいくつも引き受けている。尚且つリアの警護まで努めているのだから、疲労もいつそのものだろうと思われた。

エアリオもゲルトの事を気遣い様子を見に来たのだが、思いのほか

元氣そうに見える。新しい鎧と装備も馴染み、既に風格のようなものさえ感じられるゲルトを前にエアリオは笑いながら紙袋を差し出した。

「これ、差し入れよ。朝からずっとここに立ちっぱなしで疲れるでしょう?」

「いえ、そんな事は。わたしはこの仕事を誇りに思っていますから。何よりリリアを守る為です。これ以上、わたしに望みなどありません」

「あらあら、陛下が大好きなのね」

「……あつ。す、すみません……つい、昔のクセで呼び捨てにしてみました。リリア……様、でしたね」

「あら、いいじゃない? 陛下とゲルトちゃんは友達なのでしょう? いくらクイリアダリアの女王だからって、一人も友達が居ないんじゃない? あ可哀想よう」

「……そういうものなのでしょうか? いえ、しかしそれでは規律が……」

「あなたもなんだかマルドゥークみたいなことを言うのね」

腕を組み、苦悩するゲルト。その様子に微笑み、エアリオは紙袋からクッキーやビスケットなどが詰められたバスケットを取り出した。そうして中から一つを取り出しゲルトに差し出す。

「はい、おひとつどうぞ」

「い、今は警護の最中ですので……」

「……しくしく……。お姉さん、ゲルトちゃんが喜ぶと思って、せっかく家で焼いてきたのに……」

「うつ！？ わ、わかりました……。お一つだけ、ということだ」

泣き真似をするエンリルの様子にゲルトも折れて一口クッキーを齧る。それは彼女が想像していたよりも余程美味しかったのか、思わず冷静な顔に笑顔が浮かんだ。

「お、美味しいですね……。本当に手作りなんですか？」

「あらあら、女の子なら何でも出来た方がいいわよ？ 尤も、こんなお嫁に行きそびれてる私がわたくしが言った所で、説得力はないけれど」

「い、いえ、そんな事は……。しかし、少々驚きました。貴方は武術や魔術だけではなく、こんなことまで達者なのですね」

「うふふ！ ええ、お料理にお裁縫に……。後は、野生動物の狩り方とか」

「……それは女性らしいのでしょうか」

「まあまあ？ それじゃあ、このクッキーを陛下にもおすすそ分けしてくるわね」

「そうですか、どうぞ」

おいしいクッキーを齧りながら頬を緩ませるゲルトの隣を通過するエアリオ。しばらくして我に返ったゲルトが振り返り、室内に飛び込むとクッキーを与えられたリリアが幸せそうに笑っていた。

「姉上困ります！ 今は仕事であつてですね！」

「エアリオさん、貴方という人は！ リリアに無闇に餌を上げてはいけないと、わたしが何度も言っているのに……！」

二人の真面目な人間が同時に声を上げたが、暢気な二人はまるで聞いていなかった。仲良く一緒に紅茶の注がれたカップを傾けながらクッキーを齧っている。

「あらあら、女王陛下だつて息抜きは必要だわ。それに、マリヤ様だつて時々こうしてわたくしとお茶していたのよ」

「てゆうか、ゲルトちゃんさつき餌付けて……」

「姉上の仰る事はわかりますが、今は国を纏める大事な時期！ 多少厳しくとも、強行軍であろうとも、リリア陛下を立派な女王に育て上げる事こそ急務ではありませんか！」

「い、いえ……別にリリアが犬っぱいとかそういうことではなくてですね……っ」

「わかりました。そんなに意地悪を言うのであれば、もうマルドゥークにもクッキー焼いてあげません」

「ええ、解りました。そのくらいの覚悟は私もとつくに……えっ！

？ あ、姉上……今なんとっ！？」

「ゲルトちゃん、そーいう意地悪ばっか言っただったら出て行きなさい。リリアは優しいエアリオおねーさんとお茶するからいーもん。もう呼んであげないもん」

「お茶会など、そんな事をしている場合では……えっ！？ リリア、い、今なんて！？」

その場に崩れ落ちたマルドゥークとゲルトがエアリオに首根っ子をつかまれ、部屋の外に放り出される。ボタンと音を立ててしまった扉を振り返り、二人は互いの顔を見合わせて肩を落した。

「ね、姉さんのクッキーがもう食べられない……だと……？」

「リリアとお茶出来ないなんて……そんな……」

二人は同時に頭を抱え、それから同時に叫び声を上げた。誰も居ない回廊に声は響き渡り、それを無視して中では和やかなティータイムが繰り広げられていた……。

「よお、久しぶりじゃねえか 夏流」

それが俺を見つけた秋斗の第一声だった。

北方大陸の田舎町であり、以前俺たちがアリアを追ってやってきた街の入り口、外灯の下で俺を待っていた秋斗は肩に白いうさを乗せ、俺同様こちらの世界の服装に着替えていた。傍から見れば俺たちはこちら側の人間にしか見えない事だろう。

雪が降り、風はいつの間にか穏やかに成っていた。静かな闇に包ま

れ始めた世界の中、秋斗は以前と変わらない余裕と不敵をさを湛え、笑う。背を向けた秋斗に続き、俺も歩き出す。

二人で潜ったのは街の中にある飲食店だった。シャングリラと比べ大幅に魔術的にも機械的にも技術に劣るその店の中を照らすのはランプの頼りない明かりだけ。俺たちはカウンター席に肩を並べて座る。

暖炉では薪が音を立てて折れ、暖かな室内で客の数はまばらだった。一先ず飲み物を注文し、木製の椅子に深く腰掛ける。

「こうして肩を並べて店に入るのは何年ぶりかねえ……」

「……俺が地元を出て依頼だから……もう、二、三年になる」

二人してそうして暫く黙り込む、その沈黙に耐えかねて俺は話題を振る事にした。

「そんな思い出話をしに来たわけじゃないんだろ？」

「はっ！ まあ、いいじゃねえかよ。こうしてゆつくり話す機会はそうないぜ？ 救国の救世主と滅国の救世主、二人肩を並べる事なんてよ」

しばらくするとコーヒーが二つ出された。砂糖を山ほどぶちこむ秋斗の横顔に思わず眉を潜める。以前からこうだったが、こいつの味覚は大丈夫なのか。

「まあいい、どっちにしろ teme と語るような事はねえからな。俺様たちが今更語りあった所で、時間は元には戻らねえ。それだけが事実だ」

「……………それで？　俺に用件があると呼びつけたのはそっちだろ？」

「ああ。用つつーほどの事でもねえ。お前にとっても俺様にとっても、至極当然の事だからな」

まだ熱いのか、コーヒーをちびちび飲みながら語る秋斗。それにあわせ俺もカップを傾けた。

「夏流、テメエはどこまでこの世界の成り立ちに気づいている？」

「……………成り立ち？」

「この世界が『何』なのか……。俺様とテメエが召喚されたのは全く無関係な二人だからじゃねえ。この世界がどんな物なのか、テメエにだって解ってるはずだ」

眉を潜める。俺がわかっている事……。そもそもそれは、秋斗が俺の行動をゆがめているから混乱しているのだ。

こいつがわざわざナタル見聞録をあっちの世界の屋敷、俺たちの秘密基地の引き出しに入れたりするから俺は混乱している。そこにあるはずだった、俺が本当に手にするはずだった『冬香の遺言』にも等しい物を、こいつは持ち去ったはずだ。

だが、俺はそれを直ぐに問い詰める事はしなかった。まずは秋斗の言った言葉の意味を考えてみる。

「この世界は、子供の頃俺たちが遊びで作った絵本に似ている」

勿論、似通っているだけであって、それそのものというわけではない。そもそもあれはまだ俺たちが小学生低学年だった頃の話……。も

う、十年近く前の事だ。明白に覚えているわけでもない。

ただ、確か昔にそんな絵本を遊びで作った覚えはある。なぜかといえば、その絵本のシナリオを書いたのはほかならぬ当時の俺であり、絵を描いていたのが冬香だったからだ。

しかし薄らぼんやりと記憶されている思い出の中にあるその絵本はこの世界の内容とは違う部分が多すぎる。確かあれば、『勇者と魔王の戦い』の本だったはずだ。

だが、その本に出てくる勇者は『男』だった。勿論当時は名前もなく、ただの『ゆうしゃ』で、魔王はただの『まおう』だった。二人の戦いとその結末を描いた、夢見がちな子供だからこそそのファンタジーだったはず。

「……あとは、この世界に冬香が関わっているかもしれないと、それくらいか」

「まあそんなこつたろうと思ったぜ。だが　あの絵本の事を覚えていたのは褒めてやってもいい。そう、確かにこの世界のベースになったのはあの俺様たちのガキの頃の遊びだ」

「この世界のベース……？」

「この世界と俺たちの絵本とでは、内容が沿わない部分が多すぎる。そりゃ当然だ。この世界の時間軸は、あの絵本から十年後　つまり、この世界はあの絵本の続編、ってわけだ」

絵本を書いたのが丁度十年ほど前。そして今はその続編だという。いや、待て。冬香が残したという本をもう一つ俺は知っている。

そう、俺が持つ原書　ナタル見聞録だ。俺が始めて屋敷に入った日、そこには冬香の丸っこい手書きの文字で物語が記されていた。

俺はそれを読み　読んでいる途中で、寝てしまって……。気づけ

ば本はまっさらだった。

「じゃあ、この世界もやっぱり冬香が作った本がベースだったのか？」

「と、言うよりはその本の中の世界、とでも言うのかな。まあハッキリとしたことは言えないが、ヤツが書いた小説　それが元になっているのは間違いない」

「……やっぱりそうだったのか。でも、何と云うか……この見聞録は彼女が書いた物ではないんだろう？　ナタル・ナ八とかいう英雄が記した物、だったはずだ」

「その通り。何故ならヤツが記した書物はこつちの世界では『ヨトの預言書』と呼ばれているつまり　俺が持つてるコイツだ」

そう言つて秋斗がうさぎの帽子から取り出したのは俺の物とは違うハードカバーの本……しかし、それには見覚えがある。そう、秋斗が持つているほうが、俺が一度だけ読んだ、冬香の残した本　！

「待て、なんでお前がそれを持つてる！？　俺は確かにあの日、それを手にとって、それで　！？」

それで、どうした？　全く記憶がない。何も思い出せない……いや、そんなことってあるのか？

そもそもどうして俺は本を読みながら寝てしまったんだ？　普通、読みながら寝るか？　そしてその内容完全に忘れるか？　当たり前のようにすっかり失念していたが、そもそもあの日、始まりのあの日から全てはおかしかったんだ。

説明の出来ない事が多すぎる。それに何より、どうして俺は代わり

に見聞録を持っていたんだ……？　どうして俺が読んでいたはずの預言書を秋斗が持っている？

「あの日何があったんだ……？　俺が寝ている間に……」

俺の質問に秋斗は不快そうに眉を潜めた。何か俺が気に障るような事を発言したようだが、それが何なのか俺にはわからない。

「やっぱり何も覚えてねえ、か……。俺から一つだけ言える事があるとすれば、『テメエはその本を一度全部読んだ』って事だけだ。後は自分で考えな」

そういえば、初めてナナシと出会った日にナナシにも同じ事を言われた気がする。一度預言書を読んだ……？　どういう事だ？

「まあ、それをお前が覚えていようが覚えて居まいが俺様にとってはどうでもいい。お前に用っているのはな、夏流　。俺様と手を組まないか？」

「何？」

コーヒーを飲み干し、秋斗は真剣な表情で俺を見る。どうやら冗談、というわけではなさそうだ。

「俺たちの目的は同じはずだ。俺様も、テメエも、リリアを勇者にする事を目的としている。それは何故か？　テメエは何の理由もなくリリアをここまで仕立て上げたわけじゃねえんだろうな？」

「目的なんてない。強いて言うなら、俺自身があの子を助けたいと思ったただけだ。それに、俺が何かをしたわけじゃない。あの子が自

分で頑張った結果だ」

「じゃあそういう事にしといてやる。どうせ teme と俺様の意見は平行線だからな。だが、これだけは譲れねえ。この世界に來た目的は 冬香を殺したヤツを見つけ出す事、だろ？」

「冬香を 殺した？」

衝撃が走る。冬香が殺された。自殺ではなく、他殺……。充分考えられた、むしろそう考えるのが当たり前前の立場に居て尚、俺はその考えを失念していた。

いや、目を反らしていたのかもしれない。未知の毒物で死亡したという冬香。しかしそんな毒薬はどこから手に入れたのか、どこにあったのか……。簡単だ。こっちの世界の人間ならば、あちらでは理解不能な方法を以ってして人間を殺す事が出来る。

だが、だからといって冬香を殺したのがこちらの世界の人間だと考えるのは些か早計ではないだろうか。単なる自殺の可能性、それを捨てきれない。それに異世界の人間が態々冬香を殺す理由など……。

「冬香は世界の創造主だ。その創造主を殺そうとするヤツの考えはシンプルだろうよ。創造主、つまり本の執筆を続ける冬香は世界を拡大し続ける存在だ。それが死ねば世界は潰える」

「まさか、この世界を『終らせ』たい人間が、執筆者である冬香を殺したとでもいうのか？」

そんな事があるのか？ ありえるのか？ いや、こんな魔法の世界にやってきておいてありえるだのありえないだのそんな考えは遅いのかもしれないが。

仮に何らかの理由でこの世界の人間が滅びを祈ったとして、その滅

びを祈った人間が冬香を　異世界の、自らの手の届かぬ場所の、神にも等しい存在を殺めるなど、そんな事が……。

「冬香を殺したヤツはこの世界の終わり　つまり、預言書の記述が途切れている空白の日が訪れるのを待っている。それまでは表舞台には出てくるつもりが無い、そういうヤツだ。俺はそいつを追っている……。見つけ次第、確実にこの手でブチ殺す」

拳を強く握り締める秋斗。秋斗はその犯人が誰なのか知っているのか……。激しい怒りを隠そうともせず、齒軋りしながらはき捨てるように言った。

「こんな作り物の、クソくだらねえ世界の……！　俺たちに作られただけの架空の存在が、現実の冬香を殺したんだ。そんな事は許されねえんだよ、夏流。絶対に許しちゃならねえんだ、こんな世界は……ッ！」

「冬香を殺した人間が居る……。この世界に……」

俺も他人事ではない。もし秋斗の言葉が事実であれば、協力することを断る理由がない。むしろ進んで手を貸したい。そう思えることだ。

だが、それだけにしては秋斗の行動は余りにも無駄が多すぎる。こいつの狙いは『犯人』を捕まえること、それだけなのか？

「秋斗、一ついいか？」

「あん？　なんだ」

「もしその……『空白の日』が訪れた時、この世界はどうなる？」

この世界がもし本の世界で、執筆者である冬香が完結させる前に終わってしまった世界だとしたら、必ず終わりという物が存在する。いや、本である以上必ず終わりは存在しなければならぬ。未完の物語など意味を持たない。だが、この世界は中途な部分で投げ出されてしまったまま、空に浮いているのだ。

「空白の日が訪れた時、世界は滅ぶ……そうなんだな？ 犯人はそれを待ってるんだろ？」

「ああ、その通りだ。だから空白の日が来る前にそいつをブチのめす必要がある。可及的速やかに、だ」

「ちょっと待てっ！！ その空白の日が来たら、この世界が終わるんだぞっ！？」

「それがどうした！ 言っただろ、夏流！ この世界は所詮作り手を 神を殺すような世界なんだよっ！ こんなクソ世界、何万回滅ぼうが俺様には関係ねえっ！！ むしろ滅べばそれでいい……そうだろうが！！」

強い、この世界に対する憎しみを感じた。そりゃあそうだろう。幼馴染だった冬香が、この世界のせいで死んだのだとしたら……。

俺も、きっとそうだった。この世界に来たばかりの時、その話を聞いていればこうは思わなかっただろう。この世界を、終わらせたくない。

冬香を殺した犯人は憎い。勿論憎い。だが、この世界が終わると聞いた時、俺は犯人を殺す方法よりも世界を守る方法が欲しいと思っってしまった。

俺は冬香ではなくこの世界を選んだのか……？ 違う。俺にはやら

なければならぬことがあるはずだ。冬香を殺したヤツを殺す……でも、それでどうなるっていうんだ。

殺したり殺されたり、そんなことばかり繰り返しているこの世界の中で知ったはずなんだ。そんなのは意味のないことで、悲しみを増やすだけなんだって。犯人を殺しても、この世界は戻らない。

「そんな事をして……冬香は戻ってこない」

力なく呟き、俯く。しかし秋斗は力強い口調で言う。

「冬香を取り戻す方法ならあるぜ」

思わず顔を上げた。秋斗は俺をじつとみつめ、眼を細めながら告げる。

「リリアを冬香の代用品にすればいい。肉体も精神も魂も、アレは限りなく冬香に近い存在だ。何しろ あいつが自分自身を登場させたくて練りに練って生み出した存在だ。リリアは、冬香とイコールで結んでも問題のねえ存在なんだよ」

「……またそれが。リリアはリリア、冬香にはならない。何度も言っただろう」

「本気でそう思ってるのか？ テメエはそうやって表面だけでヤツを守ろうとしている。本当は傍に居て守られてんのは、勝手に罪を償った気になってんのはテメエの方だろうが」

その言葉は胸に深々と突き刺さった。だが、言い返す事は出来ない。それは全て事実だからだ。

そんなことは言われなくなっただけでわかってる。だからこうやって、ど

うすればいいのか考えて……。迷って……。必死に自分の道を探しているんだ。

「リリアを冬香にする方法ならある。冬香にしたリリアを現実につれて帰ることだって出来る。それでこの世界が滅ぼうがどうなるうが、知ったこっちゃねえ。また三人で、世界をやり直せるんだ。俺たちの世界を……。その何がいけないって言うんだ？ 何が間違ってるっていうんだっ！！ こんな作り物の世界、消えて当然なんだよオッ！！」

「秋斗っ！！」

大声を上げる秋斗の肩を掴み諭す。周囲の視線を完全に浴びてしまっている俺たちは代金を支払い、店を後にした。

雪の積もる道を歩き、町外れに移動した。秋斗は俺と少し距離を離れた場所で上着のポケットに両手をつ込んで振り返った。

「……俺様は、冬香を絶対に取り戻す。そして冬香を殺したこの世界を絶対に許さねえ。取り戻すんだ、俺たちの本当の幸せを……」

「…………お前は、間違ってない。間違ってないさ。でも…………」

この世界を捨てれば、過去を取り戻せるのだろうか。

全てを忘れて……。また、三人で。嫌な事はなかった事にして、やりなおせるのだろうか。

そんな選択が出来るのであればどれだけ幸せだろう。人間が誰でも思う夢のような事を実現できる。この、魔法の世界なら。

「改めて言っぜ、夏流。俺様と一緒に来い…………！ この世界をぶっ潰し、冬香を取り戻すんだ！」

秋斗の差し伸べる手。それを取りたい気持ちが大きくなっていく。そうだ、この世界でどんなに努力しても、いつかは別れを告げねばならない。空白の日を止める手段もわからない。でも、冬香を取り戻す方法だけは確実なんだ。それを実行すればいいだけ。未来はなくとも、過去は手に入る。

迷う心の中、結局決める事が出来ずに歯を食いしばる。秋斗はゆっくりと手を引き、舌打ちして背を向けた。

「テメエが迷ってるうちに俺様はどんどん先に行くぜ。テメエが追いつけない高みにまで昇り詰めて、この世界の神だつて殺してやる。俺はリリアを神にする。この世界から連れ出し、世界をやり直す…。夏流がそれを邪魔するなら、次はもう手加減はしねえ」

「秋斗……」

「テメエのしたことは許せねえ。だが、心のどつかでテメエをまだ信じてるんだ。だから……これ以上、俺様を裏切るな」

そう残り、秋斗は雪の中へ去って言った。残されたのは俺と、どうしようもない空しさだけ。

膝を着き、ぼんやりと雪を眺める。身体が震えているのは寒さのせいだけではない。きっと……自分が許せないから。

「本当に、取り戻せるのか……？」

自分で拒絶してしまった、あの幸せな日々を。

「リリアを……冬香にする……？」

そんな事が出来るのか？ いや、そんな事を俺はしたいのか？

「世界を……救う……？」

空白の日。神を殺した何者かの存在。俺の救世主としての役割。何をすべきで、何を守るべきなんだ。

この世界が終わる日が来る。そんな時、俺に何が出来る？ その時俺は、何を選べばいい？

結果、貴方は『選択』する事になる……ということを、心の片隅に残して置いてください。

いつだったかナナシが言っていた言葉を思い出す。

単刀直入に申し上げましょう。貴方が手にしているその名も無き本……それを、完成させて欲しいのです。

本の完成とは何か？ 物語を終わらせる事とは、何を意味する？俺にとっての完成とはなんだ？ 俺が望む結末は……？

「冬香の為に……この世界に生きる全てを犠牲にするのか……？」

それが、俺に課せられた『選択』なのだろうか。

「もし、そうだとしたら……俺は……っ」

答えは見つからない。ただ降り積もる雪の中、全て何もかも白く染まってしまえばいいのに。そんな事を、考えていた。

忘らるる日(1)(後書き)

くそれゆけ！ ディアノイア劇場Z

リネージュ2にログインできない編

ゲルト「ど、どんどん本編に関係ない事が上に書かれていきますね……」

リリア「無料化したのに……」

ゲルト「それはともかく、もう四部なんでしょうか」

リリア「うん。また新しい展開があるからね。色々な人の戦いの決着とかも付いて行く予定」

ゲルト「うーん……100部行きますかね」

リリア「120はいかないと思う……多分」

ゲルト「何はともあれ女王で勇者で魔王でおめでとございます」

リリア「わーいありがとー！ メインヒロインじゃなくてもこれだけ設定あれば目立つんだよ！」

ゲルト「そうですね　って、え？　メインヒロインじゃないって！？」

リリア「うん、メインヒロインはゲルトちゃんに譲るよ」

ゲルト「ど、どうしたんですか？ 珍しい事を言いますね……」

リリア「メインヒロインになった途端、人氣が急下降していくんだよ！ アハハハハハハハハハハ！」

ゲルト「……リリア？ リリアー？」

ロギア『気にするな。劇場ではあいつ壊れてるから』

ゲルト「うう……。リリアが遠くなってゆく……」

ロギア『メインヒロイン……なのか？ あれは』

リリア「アハハのハ~~~~~！」

忘らるる日（２）

冬香の存在が自分の中で余りにも大きくなっていったのだと気づいたのは、地元から遠く離れた地の高校に一人で通うようになってからだった。

当時の俺は、ただ兎に角早く一人前になりたくて焦っていた。中学生という義務教育が終わる頃、自分も早く何とか一人立ちできるようになりたかったのかもしれない。

俺は、冬香に余りにも頼りすぎていた。彼女は才能に溢れ、あらゆる意味で俺よりも出来た子供だった。両親の関心も次第に彼女に向けられていき、そして俺はその呪縛から解放された。

冬香に熱心に教育を施す両親と、それを快く思わない冬香。きつと俺の存在意義を奪ってしまったかのようなそんな罪悪感に苛まれていたに違いない。

だが当の俺は清々した気持ちだった。これでようやく、この街に、この屋敷に、囚われた生活が終わる。冬香とは、いつか別れの時がやってくる。俺も彼女も一人の人間であり、別々の存在なのだから、いずれは別々の道を歩み出す。

だから、というわけではなかったが、兎に角その頃の俺は一刻も早く一人前に成りたかったのだ。あれからまだ経ったの二年程度だというのに、当時の気持ちは自分でもよく判らない。多分……そういうものだろう。

街を飛び出し、一人で生きようになり、師範せんせいの家で厄介になり、身体を鍛え、勉強し、部活に打ち込み、所謂充実した高校生活を送った。

しかし……心のどこかで、離れ離れになってしまった、置いてきぼりにしてしまった妹の事が、脳裏から離れなかった。

でも、彼女は暇がある時師範の家に遊びにやって来た。その時は別

に、なんてことはなかった。俺には普通にしか見えなかった。だから全く気づかなかった。二年もの歳月をかけて、彼女がゆつくりと壊れて行っていた事に。

誰にも心を開かなくなった冬香。笑わなくなった冬香。俺の前では普通だった冬香。冷たくなって行く想い、重力を増して行く身体、取り戻せない時間……。突き放し、強引に一人を選んだのは、俺の方だ。

自分はずっと彼女の傍には居られないと考えていた。当然の事だ。居てはならない。否、俺がそれに耐えられそうになかった。

何故なら、俺は彼女の事が好きだったから。彼女の事を愛していたから。双子の妹であり、限りなく自分に近い存在を、俺は愛してしまっていた。

愛なんて語れるほど真っ直ぐに誰かを好きになったことなんかない。でも、俺は冬香が好きだった。少なくとも、それが危険であると認識し、離れなければならないと行動に移すくらいには。

その結果、彼女は壊れて行った。俺の知っていた冬香は居なくなつた。自殺したという連絡が寄越された時、俺はどんな顔をしていただろう。

俺が殺したも同然だ。忘れていいはずがない。俺が殺したも同然なのだ。そう思っていた。でも、違うのか？ 彼女を殺したのは、俺ではないのか？

安心するわけにはいかない。そんな権利は持たない。だが、彼女が自殺ではなかった事に安堵している自分が居るのもまた事実。だが、犯人が居るのならば、それは殺さねばならない。何故なら冬香は死んだのだから。それだというのに殺した犯人が生きているのは、不自然というものだろう。

「……………俺のやるべき事、か」

秋斗は間違っ居ない。恐らく迷っているのは俺の方で、間違えて

いるのも俺の方だ。

何かを信じ、それを貫き通せる強さを秋斗は持っている。でも、俺は何も信じられない。この世界も俺自身も、冬香も秋斗さえも。だったら確かな事を一つずつ行っていくしかない。信じられないのなら、信じられるものを探り当てなければならぬ。

雪の降る景色に背を向け、溜息を漏らす。犯人がいるのなら、『空白の日』を望んでいるのなら、その日が来るまで俺は戦う。

戦って　そしてどうなる。その先は、意図して考えようとはしなかった。

忘らるる日(2)

「……出来た、つと」

長時間向かい合っていた作業台の上に両腕を投げ出し、背筋を伸ばす。昼も夜も作業に取り掛かっていた為、すっかり身体が凝り固まっていた。つと。

作業を終えたメリーベル・テオドランドは深々と息を吸い、ゆっくりと吐き出す。身体の中に溜まっていた疲労が排出されるような、そんな錯覚を覚える。

椅子を引き、窓辺に移動する。カーテンを開くと太陽の光が差し込んできた。眩しいそれに目を細め、それからカーテンを閉じる。

作業台の上に乗せられていたのは夏流の手甲、神威双対であった。しかしそれは既に大幅な改良が施され、新たに施された無数の紋章が輝きを放っている。

本城夏流が彼女に武器の改造を依頼したのは、ディアノイア攻防戦の後の事であった。預かってから既に一週間、自分にしては時間をかけすぎた物だと少女は首を鳴らす。

何せ世界は一時の平和の中にある。戦乱も今は息を潜め、文字通り裏方で様々なやり取りが交錯していることだろう。だが、結局表の事情にしか関係のない彼女にとって今の世界は平和そのものだった。机の上にある薬瓶の蓋を開け、中身の液体を一気に飲み干す。美味とはお世辞にも言えない薬品は身体に染み渡り、呪いを抑制する事だろう。ゲルトには大量に持たせた物の、無事にやっているのかは心配だった。

部屋の中に閉じこもっているのは嫌いではなかったが、今は光を浴びたい気分だった。何より彼の 救世主の喜ぶ顔が見たかった。専用の鞆に武器を収め、扉を開け放ち裏路地に出る。

既に昼下がりである事にメリーベルはそこでようやく気づいた。遙か遠く、通りを行き交う人の多さは午後のそれである。人気が多いのは好きではなかったが、仕方がないと割り切った。

眩しい日差しの中を歩く。しかし今日はそこまでいい天気というわけではない。ただ、メリーベルが日の光を浴びるのが久しぶりだったというだけの事。

目指す場所はディアノイア。夏流はディアノイアの変形以降、ずっと学園に滞在している。文字通り様々な動きがあった学園だが、ようやく人々はそれにも慣れ様としはじめていた。

戦闘中以外はシャングリラの町が大きく変化する事も無く、避難誘導も今は疎通し始めている。壊された街が数日で元通りになる事は無かったが、人々は手を取り合い、被害と向き合っていた。生徒の協力もあり、街が元通りになるのはそう遠い日のことではないだろう。

学園へと辿り着いたメリーベルの視界に入ってきたのは八と話をするブレイドだった。流石に知り合いを無視するのมどうかと思いつ、しかし声をかけるのも億劫。その場に立ち暫く考え込んでいると、彼女を見つけたブレイドが声をあげた。

「いよっ！ ネコのネーチャン！」

「……いよっ」

一応同じように挨拶を試みる。ブレイドは苦笑を浮かべていた。

「学園に来るなんて珍しいじゃん？　どうかしたの？」

「ん……夏流に頼まれていた武器が出来たから、渡しに来た。夏流は？」

「あー、残念、擦れ違ったかな？　ニーチャンなら今は北方大陸に行ってるはずだよ」

「北方大陸？」

予想していなかった行き先に困惑するメリーベル。そんなメリーベルの背後に立ち、ハが両肩に手を乗せて笑った。

「救世主の旦那は色々忙しいんでさあ。どれ、ここは一つあつしがその品物を預かりやしょうか？」

「……遠慮しとく。盗まれそうだし……あとセクハラ」

「おや、こいつあ失敬。いやしかし、あのメフィス・テオドランドの娘さんとは思えない綺麗な娘さんだ」

「……知り合いなの？」

「こう見えても、第一次勇者部隊のメンバーでやったからねえ。お父上は元気ですかい？」

メフィス・テオドランド。テオドランド家の当主であり、錬金術の権威であり、そしてメリーベルの父親でもある。

現在は魔術教会の所在地でもある交易都市ティパンに住み、研究を続けている父。メフィスとは、もう何年も顔をあわせてはいなかった。故に現住所は不明だが、彼の性格を考慮すれば巨大な図書館があるティパンを離れるとは考え難かった。

メフィスは勇者部隊のメンバーに様々な武器を提供したという。ゲルトの持つ魔剣フレグランスを始め、彼が生み出した特殊武装は数え切れない。そんな男でさえ『これ以上のものは人には作れない』と言わしめたのが、かの聖剣リインフォースであった。

偉大なる父の技術を確かに受け継いだメリーベルではあったが、父とは折り合いが悪く、既に勘当を食らってから長い。父親が元氣かどうかは判らないが、恐らくは元氣でやっているのだろう。そんな返答をした。

「まあ、お嬢さんはお嬢さんで色々ありそうですね……。ま、あつしはそろそろ放浪の旅に戻りやすから、そんな怖い顔をしなくとも大丈夫でさあ」

あまり訊ねられたくない事を訊ねられた所為か、メリーベルの表情は険しかった。八は低く笑い声を上げ、二人に背を向ける。

「八、もうどっかいつちゃうのか？」

「ええ。方々に散った、亡き団長の財宝を集めるのを一先ずの目標に活動中ですわ。聖騎士団が足踏みしている今、魔物を討伐するのもあつしらの役目ですし」

「そっか……。なあ八、今度はいつ来るんだ？」

「さて、それはどうでしょうねえ。あつしらは所詮根無し草……。まあ、縁があればまた直ぐにでも、という事でしょうか。坊ちゃんもどうかお元気で」

「ああ、それは任せとけ！　せいぜいハマして死んだりすんなよ、ハ」

ハはブレイドとメリーベルに一礼し、その場を去って行く。学園へと続く坂道を下って行くその背中が見えなくなると、ブレイドは顔を上げた。

「んで、ニーチャンは留守だけどどうすんだ？」

「それより、夏流はどうして北方大陸に？」

「んー、これ言っちゃっていいのかな？　まあいつか。ニーチャン、シユートとかいう友達の所に行つたみたいだぜ」

「……それ、もしかして……」

「ああ。もう一人の救世主、とか言つてたやつかな？　なんでも友達らしいけど……ネーチャン？」

何故、夏流は武器も持たずに出かけたのだろう。もう少し急いで仕上げればよかった……そんな風に後悔する。

しかし、今更想つても遅すぎる。夏流は誰もつけずに一人で行ってしまった。勿論、誰にも話してはいないだろう。リアもゲルトも今は大事な時期……一人で戦わねばならないと考えているのだ。

「そんな深刻そうな顔してどうしたんだよ？　ちょっとやさつとじやあのニーチャンはくたばんねーと思うぜ？」

「……その夏流の武器がここにあるんだけど」

「へえ、武器が……ほっ！？　まさか、丸腰で出かけたのか！？」

二人して顔を見合わせる。まさかの緊急事態である。今更慌てても意味はないのだが、送り出してしまったブレイドとしては少々混乱するのは無理もない。

「いや、まさかそんなことになってとは思わなかったぜ……。来るなって言われたから大人しく付いていかなかったけど、多少強引にでもついていくべきだったな……」

「夏流がどこに向かったのか、わかる？」

「それはちよつと……。まあ、北方大陸で機能している都市っていうと大分限られると思うけど……。どつかの街で待ち合わせ、見たいな事は言ってたかな……。って、ちよつとちよつと！？　まさか、追っかけるつもりか！？」

話を聞くなり踵を返すメリーベル。ブレイドが呼び止めると、首だけ振り返って少女は頷いた。

「いやいや、えー？　いや、そんな危ない事にはなっていないだろ……た、たぶん……」

「シュートはフェンリルとも通じてるのに？」

「……いやあ、それを言われるともうぐうの音も出ないけどさ……。ああもう、わかったよ！ おいらも一緒に行く！ それでいいだろ？」

「別に一人でもいいけど」

「前衛じゃないネーチャン一人じゃ北方大陸は危ないって。治安こつちよりも大分悪いんだから……。確か、今からならオルヴェンブルムに行く列車があるはずだから、一先ずそこまで行こう」

そういつてメリーベルの前を歩き出すブレイド。メリーベルもまた、その背中を追いかけて歩き出した。

「ふう……っ」

大きく溜息を漏らし、ベッドの上に横たわるリリア。

日が暮れ、一日が終わる。そうしてようやく一人になる事が出来た。傍には必ず誰かがいる生活がもうずっと続いている。

夜寝る間も傍にはゲルトが居て警護に付くというサイクルが繰り返されて、もうじきゲルトもやってくるだろう。だからこの僅かな時間だけが、ゆっくりと一人で考え事の出来る時間だった。

天蓋の付いた大きなベッドはかつての女王、マリアが使っていた物でもある。一人で寝そべるには余りにも大きすぎるベッドの上、思うのは母のことだった。

マリアは自分たちの為に命を投げ出したと言っても過言ではない

そう、リリアは考えていた。砕け散ったマリアの身体を見た時の怒りと悲しみは、今でも夢に出てくるほどに鮮明に焼きついている。大聖堂を憎む気持ち、マリアを失ったという事実……。複雑な気持ち少しづつリリアの身体でリアリティを帯び、長年求めていた母

を失ったという事実には悲しみがこみ上げる。

もつと沢山の事を話したかった。もつと触れたかった。しかし現実には彼女の身体を石として砕き、棺には身体の半分もまともな状態では納められなかった。

償い。その気持ちは何よりも強かった。自分が強くなり、女王となる事をマリアは望んでいたはずだから。そして自分が立派に国を纏め上げれば……きっと、夏流も安心出来る。

異世界の人間だという夏流を突き放してしまった日からもう何日か時間が経過している。突き放したといっても、それほど大した事はしていない。だが、女王として名乗りを上げた事が既に、彼に対する拒絶の意味を持っていたのかもしれない。

目を閉じ、額に手を当てる。疲れているのは当たり前、この疲労と向き合っていかなければならない。この、複雑な心境とも……。

戦争は直ぐにでも始まるだろう。平和は長くは持たない。人々の平穏を奪ってしまったのは、大聖堂の存在をはじき出してしまったのは、リリア本人なのだ。ならば、その責任は取らねばならない。

女王となり、勇者となり、世界を救う……。出来るのだろうか？ この国を守るだろうか？ だが、他にやれる人間はいないのだ。どうしようもないことだった。

「アリアちゃんとも、仲良くならなきゃいけないのになあ……」

母の死を知ったアリアはもうずっと塞ぎこんでいた。世話はエアリオが引き受けてくれているものの、リリアが女王となる事をアリアは快く思わなかった。

「お姉ちゃんなのになあ……」

横になり、膝を抱える。寒くはなかった。だが、どこか冷たい。それが寂しいからだという事に気づき、もつと寂しくなった。

「マリア様は……リリアをどうしたかったんだろう。お父さんは……リリアを、どうして……」

呟きと同時に扉が開き、ゲルトが姿を見せた。赤いマントを揺らしながらリリアのベッドの傍に立ち、薄暗闇の中のリリアを見詰める。

「……お疲れのようですね、陛下」

「陛下ゆーな！ 二人の時は『リリア』でいいじゃん！」

「そうでしたね。いえ、つい……」

ベッドに腰を下ろし、ゲルトは振り返る。リリアは枕元に座ったまま、膝を抱えて俯いていた。

「……大丈夫ですか？」

「うん、平気。ごめんね、なんか心配かけちゃって」

「いえ、心配くらいはさせてください。他に貴方にして上げられる事など、そう多くはありませんから」

「そんな事は無いよ！ ゲルトちゃんがいてくれて凄く助かってるもん。きっとリリア一人じゃ、どうしようもなかった」

リリアが明るく微笑みかけるとゲルトは照れくさそうに笑った。二人はどちらからとも無く、シーツの上で手を重ねる。

「本当に、良かったのですか？ ナツルと離れ離れになって」

「……んー、何故にここで夏流さんの名前が出ますかね、ゲルトちゃん」

「い、いえ……。ただ、リリアは……ナツルに好意を寄せているのでしょう?」

「ん、そうだね。夏流の事は大好きだよ」

「では、リア・テイルに招いた方が……」

「それは駄目」

はつきりとした口調で断り、そしてリリアは寂しげに笑う。

「夏流はね、いつかは故郷に帰っちゃうんだって」

「……故郷?」

「でもね、リリアが駄目駄目なままだと、安心して帰れないでしょう? この国が不安定なままじゃ、夏流は帰れないの。だから、夏流が笑って、安心して帰れるように……私が頑張らなきゃ」

「……………ナツルの事が、好きなのに……ですか?」

「好きだからこそ、だよ。夏流は帰らなきゃならないから。だから、リリアが頑張るの」

「リリア……」

思わずリリアを強く抱きしめてしまったゲルト。少々驚いた様子であつたが、リリアもそつとゲルトの背に手を回す。

「リリア……貴方という人はっ」

「な、なんでゲルトちゃんが泣いてるの!？」

「貴方が泣かないから……わたしが泣いてるんですよ……!」

「そ、そういわれてもなあ……。よしよし、いい子いい子」

ゲルトの頭を優しく撫でるリリア。しばらくすると落ち着いたので、鼻をすすりながら立ち上がり、ゲルトは剣を手にする。

「リリアの為に、もっともつと強くならねば……っ!」

「えーと、熱血しているところ悪いんだけど、室内であんまり魔剣振り回さないでね……?」

二人がそうして室内で騒いでいると、突然部屋の扉を叩く音が聞こえた。ゲルトが一瞬で態度を切り替え、騎士の顔になって問い掛ける。

「何事ですか?」

「マルドゥーク・アトラミリアです。失礼します」

扉を開き、部屋に入ってきたマルドゥークの表情は険しい。何かの緊急事態であることを察し、リリアはベッドを降りた。

「どうしたの？ マルドウークさん」

「お休みの所大変申し訳ございません陛下。まずは非礼をお詫び致します」

「いいよそういうのは。どうせゲルトちゃんといちやいちやしてただけだし」

「いちや……！？　そ、それで何が起きたんですか？」

「……ええ。それが、にわかには信じられないことなのですが……」
歯切り悪く口元に手を当てるマルドウーク。リリアがじっと見詰めると、マルドウークは気を取り直して話を進めた。

「先ほど、『魔王』を名乗る人物が突如として城内に現れたのです。数名の騎士を付け、今は客間に通してあります」

「魔王……？」

互いに顔を見合わせるリリアとゲルト。魔王、そんなものはもうこの世界には存在しないはずであった。何故ならば魔王ロギアは既に神剣フェイム・リア・フォースに取り込まれ形ない存在となっているのだから。

「魔王、ね……。解った、直ぐに着替えて向かうから、その人には無礼を働かないように」

「客人として相手をするおつもりですか？」

「正々堂々訊ねてきたのだから、こちらが慌てる必要は一切ありません。通常通りの対応を願います」

「……御心のままに」

頭を下げ、マルドゥークは部屋を後にする。不安そうな表情のゲルトが振り返り、リリアは余裕の笑顔でそれに応えた。

「着替え、持ってきてくれるかな？」

「リリア……良いのですか？」

「問題ないよ。魔王だろうがなんだろうが　私はクイリアダリアの女王なんだから」

ゲルトの用意した女王の装束に着替え、片手に神剣を携えて歩き出す。長い回廊を歩きながら髪を纏めるリリアの傍ら、不安を隠せないままのゲルトが並んで歩く。

客間の扉を自らの両手で開け放ったリリアの視界に飛び込んできたのは、銀色の髪を持つ少年だった。歳の瀬はリリアよりも五つは下に見える。

アリアと同程度の年齢の少年が、魔王を名乗る人物なのか。見れば左右には護衛と思しき人物が少年を守るように立ち、その中には見覚えのある顔もあった。

「……成る程。突然城内に現れたのは貴方の所為ですか？　グリーン
ヴァ」

不敵な笑みを浮かべながら仰々しく頭を下げるグリーンヴァ。顔を上げた男は目を細め、静かに答える。

「流石は勇者王リリア・ウトピシュトナ様ですね。僕の事もご存知のようだ」

「以前、この城の中に転送魔法の術式を刻んだそうですね。放置したつもりはありませんでしたが、一度消滅しても復活する類のものでしたか」

「お察しの通りでございます。ですが、今は我らの主と話を進めて頂きたい」

「それもそうだな。して、貴方が？」

椅子に座りながらリリアが問い掛ける先、少年は頷いた。そうして何の感情も浮かべないような冷めた視線をリリアに向け、しかし直後には無邪気に笑ってみせる。

「お初御目にかかる、勇者王。余がザックブルムの王。二代目魔王、レプレキアである」

「……失礼。私の聞き間違えかも知れませんが、貴方は今こう仰りましたか？ 『自分は魔王である』、と」

「その通りだ、勇者王。余は魔王……。貴殿の国に滅ぼされた亡国、ザックブルムの正当なる継承者である」

不敵な笑みを湛え、呟くレプレキア。その威厳のある口調にリリアもまた、微笑で返す。

「して、ご用件は？」

「単純な事だ。一つだけ忠告に赴いた次第」

「忠告とは？」

「余がこれから起こす『終末の戦争』を、黙って見ていると言つ、良心的な忠告だ」

レプレキアの言葉に衝撃が走る。戸惑いに包まれる客間の中、リリアは一人覚めた瞳でレプレキアを見詰めていた。

忘らるる日(3)

「何だ？」

外が何やら騒がしくなっている事に気づき、俺は宿を出た。そうしてそこで誰もが呆けた表情で空を見上げている奇妙な光景に直面した。

人々の視線を追って、俺もまた空へと目を向ける。雪の降り注ぐ分厚い雲の向こう側、何か巨大な影がゆっくりと動いているのが見えた。

「……なん、だ……？」

秋斗と別れたその日、俺は北方大陸の出入り口とも言われている最も南部に位置する街、ラーサイオに宿を取っていた。

勿論、帰りの足が無い事も理由だったが、一人で色々と考えたかったのも事実だ。そうして一晚を過ごし、翌日……。昼近くになり昼食を食べようと宿の一階にあるレストランに下りたところ、この事態に直面する流れとなった。

雲の向こう側に見える何かはゆっくりと、しかし確実に動いていた。それが何なのかは俺にも勿論街の人にもわからない。人々は口々に不安を告げ、どよめきが広がって行く。

そんな最中、肩の上に乗ったうさぎが背を伸ばし、空の彼方をじっと見詰めた。どうやらうさぎはあれに見覚えがあるらしかった。

「あれは……まさか、パンデモニウム？」

「……パンデモ、ニウム？」

俺がその言葉を繰り返した時だった。俺たちの正面にやってきた一人の老人が他の住人に聞こえるよう、大きな声で空に向かって叫んだ。

「おお……！ 魔王様が復活なされた！ ログア様の目覚めの時がやってきたのじゃ！」

その老人の言葉を聞き、住人たちは皆空を見て祈るような仕草を見せた。それはクイリアダリアの祈りとは異なり、そして祈る対象も異なるのだらう。

人々は皆大地にひれ伏し、涙を流しながら空に祈りを捧げる。その奇妙な光景に俺は思わずたじろいってしまった。異常　そう呼ぶのに相応しい事態が目の前で繰り広げられている。

「貴様ら、何をしている！！ 許可無き集会は禁じられている！ 散れ！ 散れえっ！！」

そこにすかさずやってきたのは聖騎士らしき数名の男たちだった。人々を鞭で打ち、強制的に散らせていく。余りにも強引なやり口に口出しをしたくなかったが、それはこの街では恐らく当然の事なのだらう。

街の人たちは皆普通の人間だった。特に悪いところがあるわけではない。貧しく、生活は苦しくとも何とか生きていこうと前向きに頑張っている。そんな人々を、鞭で打って散らせるなんて　。だが、だからこそなのか。老人が口にしたように、人々はいつも祈りを捧げている。この世界を打開してくれる何か　。この、偏見と差別に満ちた世界を変えてくれる存在を。

俺たちが学園やクイリアダリアでマトモな生活を送っている裏ではこの街のような惨状がある。敗戦国とは言え、ザックブルムの人々

がこんな仕打ちを受けるのは果たして正しいのだろうか……。いや、今はそれよりも空の影のほうに気になる。再びうさぎに視線を送ると、なにやらいつになく深刻な表情で俺の頭の上によじ登った。

「……パンデモニウムが再び空を舞う日が来るとは。こうなつては、本当に滅びの戦が起きてしまう……」

「だから、そのパンデモニウムってのは何なんだよ？」

目を凝らしてもどうにも見えそうも無い。しかし、それは着実にこちらに近づいてきている。そのうちほうっておけば見えてくるのかもしれないが。

「パンデモニウムってのは、魔王の城の事だ。それが空飛んでんだからそりゃみんな驚くだろ？」

「魔王の城……！？ そんな物がどうして空を　　つてえ、あ、アクセルッ！？　てめえ何平然と横に並んでやがるっ！？」

ふと声の聞こえた方に視線を向けると、そこには黒いマントを羽織ったアクセルの姿があった。片手を上げて軽く挨拶するその腕を掴み、強引に路地裏に連れ込んだ。

「てめえ、何普通に挨拶してんだよ！？」

「うおお、ナツル……相変わらずアクティブな子だな。別にコソコソしなくても、北方大陸じゃ俺の顔はバレてないから大丈夫だぜ？」

「お前の心配をしてるんじゃないやねえんだよっ！！　なんで普通に居る

んだって話をしてんだっ!!」

襟首を掴んでぶんぶん振り回すと、アクセルは苦しそうにもがいた。思い切り突き放して壁に叩き付けるとヤツはゆっくりと身体を起こした。

「つてえ……。別におかしい話じゃあないだろ？ 俺は元々、索敵やら内偵やら、単独行動の方が向いてるんだ。一人でここにパンデモニウムが見える場所に来てたつておかしいことはないんだよ」

大聖堂。敵側の人間であつたというアクセル。俺は実際にアクセルと戦ったわけではないので、こう緊張感の無い対応をされると憎む事は難しかった。

しかしアクセルは大聖堂側の人間。ブレードダンサーの異名を持つ暗殺者だ。お互いにふざけているわけにも行かず、真剣な表情で向かい合う。

「つまり、パンデモニウムを調べに来たのか」

「……厳密には北方大陸の状況を、だな」

「……………良いのか？ それを俺にべらべら話して」

「ああ、別にいいんだよ。俺、大聖堂嫌いだし」

あつけらかんとそんな事を言うアクセル。俺が首を傾げているとアクセルは路地を出て行く。

「お、おい!!」

流石にこのままほうっておくわけにも行かず後を追う。アクセルの隣に並び、共に空を見上げた。

白い雪が降り注ぐ灰色の世界。アクセルは眉を潜め、パンデモニウムと呼ばれる城に何か想いを馳せているようだった。

「お前、大聖堂嫌いってどういう事だよ？」

「文字通りだよ。あそこにはろくな思い出がない……。戦争孤児を暗殺者に仕立て上げるような組織だぞ？ そんなもん俺が好き好んで所属するわけないだろ」

全く以ってその通りなのだが、本人にそういわれるとムカつく。

「だったらどうしてそんな格好をしている」

「……言っただろ？ 孤児が沢山暗殺者に仕立て上げられて 洗脳されて、ヤバい仕事押し付けられてんだ。その負担を少しでも軽く出来るのは、力のある俺くらいのもんだ。それに、妹のレンも人質に取られてるようなもんだしな」

「……おい、アクセルお前」

「俺の事は今いいだろ？ その話も後ですから、今はあれを見ろって」

肩を竦めて空を指差すアクセル。分厚い雲を突き抜けて現れたその物体に俺は思わず我が目を疑った。

空に浮かぶ超巨大な城。城、というよりは城を含む大地そのものが移動している。宙に浮かんで、だ。それは巨大な森に包まれた、

巨大な要塞だった。

城が見えた所為か、街のあちこちで歓声があがった。同時に駐留する聖騎士たちは慌てふためいているようだった。魔王城パндеモニウム。その巨大な物体は俺たちの頭上へと飛来する事は無く、途中で進路を買って離れて行く。だがその圧倒的な存在感は確かに心に刻まれた。

「なん　だ、あれは……。街が一つ、浮いているのか……？」

「十年前、俺の村を滅ぼした城だ。十年経っても、何も変わらないな……」

アクセルはそう無感情に呟き、しかし強く拳を握り締めた。パндеモニウムが見えなくなるとアクセルは視線を俺に向け、それから寂しげな笑顔を見せる。

「色々と話したい事があるんだ。付き合ってくれないか、ナツル」

「……アクセル」

敵同士だというのにこうして言葉を交わせるのは、統治の行き届かない北方大陸故……。奇妙な偶然だが、ここでこうして出会う事が出来たのは無意味ではないと思う。

「宿に部屋を取ってる。丁度メシ時だし、食いながらでもいいか？」

「おう、構わないぜ。ありがとな……ナツル」

申し訳なさそうに呟くアクセル。そのしょぼくれた顔が見ていられなくて俺は目を閉じてそっぽを向いた。

「……似合ってないぜ」

「ん？」

「お前にそういう顔は……似合ってねえよ」

呟いて宿に向かって歩き出す。背後でアクセルが笑いながら「そうだな」と言った気がした。

忘らるる日（3）

「終末の戦争　ですか？」

「我々はそれを、^{マトリクス}創世と呼んでいる」

客間の中、冷静さを保っているのは魔王レプレキアとその軍勢、そしてリリアだけであった。

魔王を名乗る少年の存在、そして彼の口から当然の如く語られる言葉の一つ一つが人々にとって多大な衝撃を与えるに値する事実であり、それはリリアも理解している。

素早く護衛の騎士を下がらせ、代わりに右側にゲルト、左にエアリオを立たせる。出入り口はマルドゥークが押さえ、護衛にはこれで充分だと判断した。

「……良い判断を感謝するぞ。愚者を交えた対話など余は望まない」

「彼らには緘口令を。して、その創世とは^{マトリクス}具体的に何を意味するの

ですか？」

「その質問に答える必要はない。ただ、現実となるであろう事実と約束事を理解してもらえればそれで構わん」

テーブルに置かれた美しい装飾の施されたグラスを片手にレプレキアは目を細める。

「クイリアダリアには散々煮え湯を吞まされた。だが、再びの大戦など誰も望みはせんだろう？ 故に、貴殿らには協力も、敵対も望まぬ。ただ、『黙って見届ける』……これのみを要求する」

「見返りは何ですか？ その要求、吞むのであれば当然取引なのでしょう？」

「創世が完了するまでこの国は滅びから見逃してやる。今の所、この国と戦う理由は無いのでな」

「それでは見返りと呼ぶには少々不足ですね」

「不足、とは心外だな勇者王」

少年の姿をした魔王は指先のグラスを微かに揺らし、にっこりと微笑んでみせる。その笑顔には何か底知れない悪意のようなものが感じ取れた。

「例えば、このグラス一つ割る事無く この街を滅ぼす事だつて出来る」

「貴様……っ」

剣に手を伸ばそうとするゲルトを片手で制し、リリアはレプレキアを睨んだ。

「何を企んでいるのですか？」

「この世界の変革……そして、今は亡き母ロギアの遺志を継ぎ、願いを成就する事。貴様らクイリアダリアの耐えがたき裏切りと愚かなる行いには目を伏せてやるといっているのだ。黙って受けるのが道理というものであるう」

「ロギアの……子？」

「如何にも。我が身が戦に耐えられるようになるまでに十年も時間を要してしまった。だが、これで願いは成就される。貴様らの言う神は死に、世界は真に人の手へと戻されるのだ」

「要するに復讐、ですか？ 子供の考えそうなことだね、レプレキア」

レプレキアの護衛の騎士、そしてリリアの護衛の騎士が同時に武器を手にし、互いの王の首筋にそれを突きつけた。一瞬の出来事だったが二人の王は全く動じず、騎士たちも緊張の中膠着状態を続ける。

「やはり良い物だな、リリア・ライトフィールド。貴様も余も、結局は故人の遺志を継ぎ、同じ過ちを繰り返す……。余はそういう未来を回避したかったのだがな」

「だったら大人しく仲良く手を取り合いませんか？ 今ならおいしいクッキーもご用意出来ますし、お茶会などいかが？」

「ふ……っ。まあ、いずれゆっくりとな。そういう日が来る事も祈っている……余は、な」

ロギアが立ち上がり片手を翳す。次の瞬間虚空に浮かび上がった鈍い光がゲルトとエアリオを遙か後方へと吹き飛ばした。

丸腰の状態で座ったまま微動だにしないリリアに騎士たちは慌てたが、レプレキアの騎士はリリアを襲う事はしなかった。そうして魔王は立ち上がり、リリアに背を向ける。

「我らに手を出す事は望まない。勇者よ、いずれは貴様とも決着はつけよう。だが今は……あの忌々しき邪神崇拜者どもを葬らねばならん」

「……邪神崇拜者？」

「いずれまた彼方で会おう。ではな、リリア・ウトピシュトナ」

「待てっ!!」

剣を構えたゲルトが駆け寄り、魔王に大剣を振り下ろす。しかし傍らに立っていた騎士が槍でそれを受け止め、軽々と弾き飛ばした。その一瞬でグリーヴァが発動した転送魔方阵が輝き、レプレキアたちの姿は消えて行く。薄れて行くその姿を正面から見据え、リリアは深々と溜息を漏らした。

「魔王の息子、レプレキア　か」

『どうやら面倒な事になったな』

声と共にリリアの傍らにどこからとも無く現れた神剣がくるりと宙を舞い、主の手の中に納まった。リリアはフェイム・リア・フォースを軽く掲げ、ロギアへ問い掛ける。

「あの子、知り合い？」

『ああ。私の一人息子だ』

「そっか……。やりにくい、ね」

寂しげに呟くリリアの傍ら、ロギアは応えようとはしなかった。王は目を閉じ、直後には既に凜々しい姿へと戻っていた。

「ゲルト、エアリオ、マルドゥーク。三名の騎士に命じます。直ぐに騎士団を戦闘可能状態に編成し、大聖堂の拠点と成ったケルゲイブルムに進軍します」

「ケルゲイブルムに……？」

「魔王が動くのならばこちらも出来る事はしなくちゃ。多分、魔王が最初に狙うのは、大聖堂元老院だと思うから」

リリアの直感的なその言葉は、しかしゲルトたちには信じるだけの価値のあるものだった。十五歳の女王の指揮する下、新たな聖騎士団としての初めての戦いが始まるうとしていた。

「ほんのちよつと前まで皆で一緒に学園に居たのに、なんだかもう懐かしいなあ」

そんな事を呟きながらアクセルはパンを食う。パンばかり毎回食ってる気がするが、好きなんだろうか。そういうところは変わらない。

いや、アクセルは多分俺の知っているアクセル・スキッドのまま、何も変わってなどいないのだろう。心も、気持ちも、その在り方もただその両立に苦しんでいたこいつの気持ちに俺たちが気づかなかっただけで。

宿の一階にあるレストランで俺たちは向かい合って昼食を摂っていた。暖かいお茶を口にしながらアクセルの言葉に応える。

「懐かしいな。覚えてるか？ 学園で俺が一番に知り合ったのはお前だった。何も判らない俺に案内をしてくれた」

「ああ、あつたあつた！ 懐かしいなあ、それもまた……。そいや、あの頃は打倒ゲルトに燃えてたっけ」

「今じゃすっかり仲良しだけだな、あいつら……くくっ」

「あー、そうだなあ。なんだかんだでラブラブなんだよあの二人は」
二人して過去の事に想いを馳せる。だがもう、何だかんだで春から夏を超え、秋を向かえ、今はもう冬だ。もう直俺がこちらに来て一年になる。

一年もこんな所で馬鹿みたいに戦ったり遊んだりしていると、向こうの世界に戻った時に反動が大きそうだ。でも……こっちにきて大きかった衝撃、わからなかったこと、そういうものから俺を救ってくれたのは、多分アクセルだった。

こいつはいつも本当に仲間思いで、リリアの事も俺の事も大切にしてくれていた。仲間が増えてもそれは変わらなくて……。だから、俺にはアクセルを憎む事は出来そうにもなかった。

「……何だか歳食ったみたいだな、俺たち」

「まだギリギリ十代だって」

「はは、そうだな……。それで……。まあ、何から話せばいいのか」

お茶を飲み、アクセルはそんな事を呟いた。アクセルの言葉を待ち、俺は黙り込む。

「実は……ナツル、お前に頼みがあるんだ」

「頼み？」

「ああ……。本当ならこんな事は頼める立場じゃないんだが……」

「とりあえず言ってみろって。お前が頼みごとなんて珍しい」

パンを齧りながらアクセルの言葉を待つ、彼は少しだけ言うのを躊躇し、それから意を決して口を開いた。

「……リリアちゃんが、女王に就任したのは聞いた。いや、あの子がマリアの娘だってことは、俺も知ってたから驚きはなかったんだが……。ナツル、リリアちゃんに頼んでくれないか？　もし、俺たちが……大聖堂の子供たちが、無条件で降伏したら、受け入れてくれるように、って」

机に両手を突き、身を乗り出すようにしてアクセルは懇願する。その姿は真摯であり、それが畏の類でない事は信じられた。

「俺は、別にいいんだ。どんなキツイ仕事でも引き受ける。でも……でも、戦争で親を失った子供たちには何の罪も無いんだ！ あんな死と隣り合わせの世界で生きて行くのは間違ってる！ 俺は弟や妹たちを助きたい……。皆は俺にとって大事な家族なんだ。だから……頼む！ あの子たちが戦わなくても済むようにしてやってくれっ……！」

頭を机にこすり付けるようにして下げるアクセル。俺はその姿に何だか逆に笑えてきてしまった。俺の笑い声が聞こえたのか、アクセルは困ったような顔で俺を見詰める。

「いや、笑ってないでさ……俺結構真面目に頼んでんだけど……」

「いや、悪い！ そういうことじゃなくて……変わんないな、お前は」

「は？」

「結局また、誰かの為か……。お前、相手はあのリリアだぜ？ そんなもん二言返事でOKするに決まってんじゃないか」

「ほ、ほんとか……？ いや、そうだよ……。あのリリアちゃんだもんな……。そうだよな……」

「ああ、そうだ。あいつは馬鹿だし、誰かを憎んだり差別したりするようないやしない」

「はは、そうだよな。リリアちゃんは、優しくて……いい子なんだ。俺、それを知ってたはずなのに……一番解ってたはずなのにな」

辛そうに目を伏せ、アクセルは呟く。やっぱりこいつは自分の意思でリリアと戦ったんじゃないんだ。こいつは自らリリアの相手を買って出ただろう。だがそれは、自分以外の人間にリリアの相手が務まらないという事がわかっていたからだ。

リリアは強くなった。へたな執行者では相手にもならないだろう。そうすればこいつの家族は殺されてしまうかもしれない。家族が、リリアを殺してしまうかもしれない。

仲間と家族二つの絆の間に挟まれ、選んだのは両方の代わりに傷つく事だった。それがアクセル・スキッドという男の生き方なのだ。アクセルは何もかわつちやいない。あの時リリアを捕まえたとしても、どうにかして逃がしていたんじゃない。そんな風にさえ思えてくる。

「……アクセル、もういいんだ。仲間を連れてオルヴェンブルムに来い。なんなら俺が手を貸してやる。大丈夫だ、リリアなら笑って許してくれる」

「ああ、そうだろうな。だが、だからこそ俺は戻れないんだ」

先ほどまでとは打って変わってアクセルは強い眼差しで言う。

「仕方が無かった……俺はずっとそう自分に言い聞かせてきた。仕方が無い、仕方が無いってな。リリアちゃんと戦うのも仕方がない、仲間が死ぬのも仕方が無い……。でも、そんな生き方を自分に許してきたのは、やっぱり俺自身なんだ」

「アクセル……」

「俺は今までの自分にケリをつけなくちゃならない……。それがせめてもの仲間に対する償いだと思うてる。俺はもう少し、大聖堂の

中で自分にも出来る事を探してみるよ」

「だけど、ただの執行者じゃ出来ることなんて……」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 俺、オルヴェナ・イラ大聖堂騎士なんだぜ？ ヒ
ラの聖堂騎士と一緒にすんなよ」

また唐突に驚きの新事実をさらりと言ったのけるアクセル。強く拳を握り締め、そうして窓の向こうを見る。

「それに、レンは俺と一緒に逃げるとは言わないだろう。あいつは心の中まで全部大聖堂の理念に教育されている。あいつと一緒にじゃなきゃ、俺が逃げる理由なんてないからな」

「だったらやっぱり俺も手を貸すよ。レンは俺だって知り合いなんだ、無関係じゃない。友達の妹を助けるのに、理由なんて要らない」

俺の言葉を聞き、アクセルは何故か素っ頓狂な表情を浮かべた。俺は真面目に話しているのに何事かと思つて眉を潜めると、アクセルは笑いながら謝った。

「いや、ごめん！ だつてお前、俺のこと自分で初めて『友達』つて言つんだもんさ」

「……………あ」

そういえば、そうだったか。いや、でも……友達、か。なんだか正々堂々と言つと気恥ずかしい言葉だな……。

「そんなどうでもいいことで話の腰を折るな」

「どうでもよかねえだろ！　へへ、これで俺はやっぱりお前のダチ一号だな！」

「図に乗るな馬鹿」

二人して笑いあう。なんだかこういう時間も凄く懐かしい。もう、前みたいには戻れないんだろうか。

皆で一生懸命で、目標に向かって頑張ってた……。世界は暗くて悲しくても、夢があるから戦えた。あの頃の気持ちを、取り戻す事が出来れば……。

「そんじゃ、俺はもう行くわ。生憎、割と忙しくてな。長居は出来ないんだわ」

「おい、アクセル」

「悪いな、ナツル……。これは俺の問題　いや、俺の意地の問題なんだ。自分でやらなきゃ、これから先皆の仲間だつて胸を張って言えねえ。だからやるよ。お前には、リリアちゃんに話を通す事だけ頼むわ」

「…………意地、か……。わかったよ。でも、本当にどうしようもなかったら」

「そんな時はお前らを頼らせてもらうよ。大聖堂の事は、任せとけ。じゃあな」

背を向けて去って行くアクセル。俺はその背中に声をかけた。

「アクセルッ!!」

遠くでアクセルが振り返り、首を傾げる。

「死ぬなよ」

俺の言葉にアクセルは頷き、背を向けたまま軽く手を振って消えて言った。レストランの中、一人で席についてお茶を飲む。

温くなったお茶。窓の向こうにはしんと雪が降り積もっている。アクセルはきつと一人で戦うだろう。俺は、何も出来ないのだろうか。

「……あいつは、全然変わってなかったな」

俺はどうだろう？ 俺は変わってしまったのだろうか？ 少なくとも気持ちは、初めてこの世界の大地を踏みしめた時とは違うと思う。沢山の事実を知り、沢山の戦いをした。その最中、変わらずには要られなかった事も多いだろう。

いつかはこの世界に別れを告げなければならない。それは解っている。でも 俺はきつと忘れていたんだ。

「友達、か……」

その言葉に、その想いに、真実も偽りもあるものか。

この世界に仲間がいる。友達がいる。だから滅んで欲しくない。小難しい理由なんていらぬ。俺にはそれだけで充分だ。

死にたくないし死なせたくない。消させたくないんだ、この想いを……。いつかきつと消えてしまおうとしても、それでも心は世界に残したいから。

「自分のやるべきこと……やらなくちゃ、な」

自らの拳をじつと見詰めて強く握り締める。アクセルは死なない。あいつは強いし、なんだかんだでひよいひよいと逃げおおせるやつだ。大丈夫に決まっている。

そう、自分に言い聞かせてメシを食う。部屋に戻り、チェックアウトの準備を進め、宿を後にした。もう立ち止まってなんかいられない。早くクイリアダリアに戻って、リリアにこの事実を伝えなければ。

「あゝっ！！ いたいた、いたっ！ いたよネーチャン！！」

ふと、街を出ようと歩いていると正面の雪道を見覚えのある人影が二つ、歩いてくるのが見えた。そのうちの小さい方 ブレイド君が俺の足元に駆け寄り、疲れた様子で振り返る。

「ネーチャンはやくっ！！ 居たよ、ナツ兄！！」

「……メリーベルも一緒なのか？」

顔を上げると、メリーベルが疲れた様子で駆け寄ってきた。それから俺の正面に立つなり、いきなりビンタをかましてきた。

別にそれほど痛いわけではないが、流石にちよつと傷つく。俺が一体何をしたっていうんだ……。

「……はあ、はあ……。こんな、雪道を……歩かせるな」

「……いや、なんで来たんだ？ 引きこもりのお前にしては珍しい？ ふぐっ！？」

ボディに結構いいパンチを貰ってしまった。今度のは魔力アリだから結構効く……。痛みにも悶え、よろめく俺の様子を無視してメリーベルはトランクを差し出した。

「……忘れ物」

「……つつうつう！？ ああ！？ 忘れ物って あ、神威双対か。完全に忘れてたな」

「ばか」

最後に頭を小突かれてしまった。疲れていたのか、今度はそれほど威力はなかった。にしてもわざわざここまで届けてくれたのか……。ありがたく受け取っておこう。

「ニーチャン感謝しろよ？ 錬金術師のニーチャン、ニーチャンを心配してわざわざここまで来たんだからな……。って、いってえっ！？ なんで蹴るんだよ！？」

「余計な事言わなくていいの」

照れているのか？ 少しだけ顔を赤らめながらメリーベルはそっぽ向く。なんというか……。変わってるなあ、こいつも。

「いや、武器を忘れて行ったのは完全に俺の不注意だ。どうかしてたと言いかねない……。ありがとう、メリーベル」

「ん……。まあ、解ればいいわ」

「心配してくれたのか？」

「してない」

「ほお、してないのにわざわざ大陸越えて来てくれたのか」

「むづ……」

本当に恥ずかしいのか、見た事も無いような顔をして涙ぐむメリーベル。それがおかしくて暫くからかっていると、足元で忘れ去られていたブレイドが声を上げた。

「あのさあ、仲がいいのはわかるけど、ちょお寒いんだけど……。どっか入らない？」

「俺は帰るトコなんだが」

「うつそ、マジかよ！？ もう一泊くらいしてけよ、寒いなあ！！来た道戻るなんて考えらんねーよ！ ニーチャンほら、もう一泊するよ！」

「いや、俺はリリアに用事があつてだな……」

「いいから早く！ ネーチャンもそんなとこ突っ立ってると風邪引くぞー！」

強引に宿に押し返してくるブレイド君。まあ、長旅で速攻帰らせるのも可哀相か。仕方が無く諦め、俺は宿へともう一泊する事になった……。

忘らるる日(3) (後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

＊クライマックスに向けて動き出そう＊

リリア「というわけで、アクセル君が久しぶりに本編に出てきました〜！」

アクセル「ファンの皆さんお待たせ！ 皆のアイドル、アクセル・スキッドだぜ！」

夏流「そもそもここに出てくるのも珍しくなってきたな」

アクセル「最近リリアちゃんとゲルトと一緒にるのがメインに成ってきたからな」

リリア「と、いうわけで。アクセル君の事はおいておいて、今日は話数削減の為にボツられた本編シナリオを紹介するよ〜！」

アクセル「……また偉いぶっちゃけた話ツスね」

夏流「俺はもう、最近ではリリアには逆らわない方がいいと思ってる」

リリア「何かあったかな？ それでは一本目！ 『ゲルトちゃん吸血鬼になる』の巻！」

『ゲルトちゃん吸血鬼になる』の巻とは？

グリーヴァに魔物化の呪いを吞まされて魔女になったゲルト、というエピソードがあったよね！ あれはざっくり削り取られたゲルトちゃんシナリオを簡略化したシーンなんだよ！

スランプから脱出できずに思い悩むゲルトちゃんが単身学園のクエストを受けて吸血鬼討伐に乗り出すというお話。一人で戦うゲルトちゃんをしつしゅが助けてちよつと好感度が上がったちゃう？ 的なイベントなんだよ！

リリア「でも、キャラ増えると面倒くさいし話数短く纏める為になかった事になりましたっ！！」

アクセル「それで吸血鬼から魔女になったのね」

夏流「まあ、吸血鬼ってちよつとありきたりすぎる気もするしな」

リリア「それ、勇者で魔王でお姫様だったリリアの前でよく言えますね」

夏流「お前くらいまで来ると何かもう気にならない」

リリア「そうですか？ にしても、このイベントがあればゲルトちゃんと夏流さんはもう少し親密になってた気もしますね。さて、お次は『リリア、現実世界へ行く』です！」

『リリア、現実世界へ行く』の巻とは？

対大聖堂戦が一区切りし、リリアが女王になるまでの間にあるはずだったシナリオですよー。

現実世界を見たいというリリアを現実世界につれて行き、そこで少しいいカンジになるはずのイベントだったんだよ！

そこでリリアと夏流さんはちょっとケンカをしちゃって、ケンカ別れしたまま次へってなるはずだったんだけど、本編ではリリアが現実に行くイベントは丸々カットされてるね！

アクセル「そういえば女王就任の時に何があったんだ？ 何か微妙な空気になってるけど」

リリア「まあ、それはまたあとでということだ」

夏流「意外性もあって面白いイベントに見えるけどな、俺は」

リリア「何事も、時間削減のためなのですよ！」

夏流「……そうっすか。まあどっかで焼き直しでやるかもしれないしな」

リリア「はいはい、そうですねー。まあ今日はこんなところで！おさらばですっー！」

アクセル「まあ、結構ボツになったのあるよね……」

夏流「だな……」

リリア「それではまた来週！ ばいばーいっ！」

決戦の日（１）

「それでは、リリアは大聖堂と決着を付けるつもりなのだね」

ディアノイアの艦橋、要塞の全てを管理する場所に立ち、アイオーンは報告を受けていた。

腕を組んで立つアイオーンの隣にはソウル、そしてアルセリアの姿がある。三人に報告を行った数名の生徒は不安げに教師陣の反応を窺っていた。

パンデモニウムの出現は既にディアノイアにある広域調査を行う事の出来るレーダー装置により感知していた彼らにとって、来たるべく争いは魔王軍との物であると考えていた。しかし、リリアは今大聖堂へと兵を進めるつもりである。

「こいつは俺のカンだが、リリアは大聖堂を助ける積もりなんじゃないか？」

「大聖堂を、かい？」

『彼女の性格を考慮すれば在り得ない可能性ではないでしょう。そう上手く事が運ぶとも思えません、その素直さは彼女の財産ですから』

「努力は認めるが、結果は保証できない。中々手厳しいね、アルセリア」

三人の間にある意見は同じだった。だが、確かに今まで通りの保守的なやり方でも何も救えないのは確かである。不安要素があるとす

れば、今よりももっと悲劇が起きてしまう事に他ならない。

リリアが兵を率いて大聖堂と対峙すれば、今度こそ総力戦になるだろう。この不安定な状況下にあるクイリアダリアでそれだけの戦が起これるという事は様々な意味を持つ。周辺国家も黙ってはいないだろう。

しかし、パンデモニウムが目指す場所は確かにケルゲイブルム大聖堂の拠点である。とすれば、魔王軍は真つ先に大聖堂を攻め落とすつもりである事は明確である。何もそれは唐突に決まったことではない。彼らの立場からすれば至極当然であると言える事柄である。

「十年前から魔王は大聖堂を潰したがってたからね。まあ、十年越しの決着を付けるつもりなのだろうが」

「もう一度、あの戦争を繰り返す積もりなのか？ それにしたって報告にあった『新しい魔王』ってのも、どうにも解せないが……」

魔王ロギアが神剣に封じられている事は彼らも知っている、故にまだ魔王と名乗る者が居るとすれば、それはロギア以外の何者かという事になる。

元々魔王という呼び名はザックブルムの王に人々が名づけたものであり、特定の人物が名乗りを上げたわけではない。とすれば、ザックブルムは滅び国も存在しない今、新しい魔王というのも妙な話であつた。

「魔王の息子、レプレキアか……。子供が居るようには見えなかったがな」

「おや、人を外見で判断してはいけないよ？ 魔王だって、何も怪物ってわけではないのだから。人の子なら、子くらい作りたくもな

るさ」

『現在の問題点は魔王が何者かという事ではなく、現実にはパンデモニウムが飛行しているという事でしょう。どちらにせよ、あれは看過出来ない代物です』

「神代の航空要塞パンデモニウム、か……。確かにあれは破壊したはずだったのだけれどね。この、プロミネンスシステムで」

過去の戦争を思い、三人は同様に口を噤む。プロミネンスシステムによるパンデモニウムの撃墜。それが、争いの幕引きとなった。だが、二つの存在がまた同時に世界に存在する以上、争いは終わらない。

「どうするんだい、アルセリア？ 学園はリリアを援護するのかい？」

『いいえ。いざパンデモニウムが本当の力を発揮してからでは遅すぎます。プロミネンスシステムの修復と再起動を急ぎつつ、学園と周辺都市の護衛。それが主な任務になるでしょう。聖騎士団が留守にする間、誰かが世を見ねばなりませんから』

「文字通りの総力戦になるだろうからね。世界の命運を分ける一戦だ」

『修復が間に合えば、即座にプロミネンスを起動します。その後、パンデモニウム破壊行動に移りましょう』

「国の指示は待たないのかい？」

『プロミネンスの本当の力を知っている人間は多くはありませんから。ディアノイアのコントロールと護衛はアイオーン、貴方に任せます。相手が大聖堂ならば、私は聖騎士団に合流しケルゲイブルムに進軍します』

その場に居る全員が思わず振り返ってアルセリアを見やる。それは、彼女の口から発せられた異例そのものであった。

学園長アルセリア・バフラム。一度としてこのラ・フィリアを出た事のない巨体の騎士が今、自らの意思で出撃を伝えたのである。

「……やれやれ、今回はボクは留守番か」

『……そうであれば良いのですが』

アルセリアの呟きには誰も気づかなかった。学園長は巨大な手を振るい、伝令役に伝える。

『女王に伝令を。学園からの出兵はしません。しかし、代わりに私が出ます。周辺警護の任は生徒間で行いますので、心置きなくと』

伝令を確かに受領し、部屋を後にする生徒たち。その姿を見送り、アルセリアは自らの巨大すぎる剣を肩に乗せ、物鬱げに溜息を漏らす。

「残念だよ。君の活躍を見られなくて」

『私が戦う事など出来れば無い方が良いですよ、アイオーン。貴方が本気を出す事が無いのと一緒にです』

溜息混じりに返答するアルセリアの視線の先、アイオーンは腕を組

んだまま無邪気に微笑んでいた。

決戦の日（１）

「魔王の空飛ぶ城、パンデモニウム？」

結局余計に一泊してしまった帰り道、俺たちは船の甲板で話を進めていた。

冬の海はかなり寒いが、他に落ち着いて仲間だけで話が出来そうな場所もない。それに早く戻ってリリアにアクセルの話を伝えなければと、俺も焦っていたのかもしれない。甲板に立った所で、到着する早さになんら変わりもないのだが。

コートを着込んだメリーベルとブレイドは俺の話を聞いて小首を傾げていた。この話を切り出すには少々遅すぎる気もしたが、アクセルの話を先にと考え、さらにメリーベルとは別室だった事もあり、中々話を切り出すタイミングが無かった。

結局こんな寒い所で話をする事になってしまったわけだが……。雪まで降る最中、俺は昨日見た事を二人に伝えた。

「何でも十年前に魔王が使っていた城らしいんだが……。移動型の大型拠点らしい。何だか嫌な予感しかないよ」

魔王はリリアに友好的な家族のような存在だ。だが、魔王の城は一人歩きしている……。ロギアがあれを復活させたとは思えないし、さてどうした事なのか。

「……魔王の城、パンデモニウム……。聞いた事ならある。でも、それは勇者フェイトと魔王ロギアの決戦の時、完全に破壊されたっ

て」

「そのはず、だよな……。一体どうすりゃあれだけ巨大な城を大地ごと浮かせるなんて事が出来るんだか」

ディアノイアの変形システムもそうだったが、一体アレだけのものをどうやって動かしているのか。この世界にはもう伝えられて居ない未知の技術が使われているとしか思えない。

現実の世界の俺たちが齎した影響　ではないはずだ。あんなもの、現実でだって実現出来ない。巨大な　巨大な航空要塞など。

「魔王の城には興味があるけど、今の問題はそこじゃない」

「ああ……。北の方は魔王復活の噂が蔓延ってやがる。ただの噂にしたってあれだけの速さで広まれば、何かしら影響も出てくるだろうな」

それに北の惨状は見てのとおりだ。以前俺たちがアリアを探して向かった時も、誰一口を利いてもくれなかった。それに無法者は野放しになり、聖騎士団による残党狩りが横行し、地下に暮らさねば生きていけない人々も多い。

その現実を俺たちは知っていたはずなのに、何も出来なかった。勿論そこまで何もかもリリアにどうにかしろとは言わないが、もう少しなんとかならないのだろうか。

「あれじゃあ自主的に一般人が反乱を起こしてもおかしくない。クイリアダリアが今までどれだけ強引なやり口で世界を支配していたのかがまるわかりだな……」

「……そもそも、政治的なことは大聖堂が仕切っていたはず。女王

は飾り程度だった。その女王側に政治の権利が戻っても、直ぐには対応出来ないはず」

それもそうだ。大聖堂は今いない。政治体系は滅茶苦茶になり、城内はてんでこ舞いだろう。それに付け加え、一般市民には伝えられていなかった他国への横暴な侵略、差別行為から成るこの世界の平和の意味をいきなりおしつけられてしまったのだ。大聖堂が居なくなり他国への弾効は弱まっただろうが、その分彼らは今のクイリアダリアにここぞとばかりに恨みを晴らしたがるに違いない。

大聖堂を跳ね除けてしまったことで、奇しくもこの世界のバランスを大きく崩してしまったのだ。尤も、それはバランスとは名ばかりの影の弾圧の連続であつたわけだが。

なんにせよ、何も知らなかったクイリアダリア市民はその状況を快くは思わないだろう。何とかしろとリリアに迫るはずだ。自国民と他国民、両方を納得させる方法なんてリリアに見つけられるのか……？

「くそ、ややこしい事になってきやがったな……。なんだって今、こんな時にパンデモニウムが動き出すんだ」

「……なあ、もしかしてパンデモニウムはこの世界に混乱を齎すために現れたんじゃない？」

ブレイドの発言に俺とメリーベルは視線を向ける。

「だって、わざわざウロウロしながら街に姿を現す意味って他にないじゃんか。さっきニーチャンはいつたろ？ 『自主的に反乱を起こす市民も現れかねない』……つまり、クイリアダリアに対する決起を呼びかけてるんじゃないの？」

最悪の可能性だが、考えなかったわけではない。だとすれば、パンデモニウムを動かしている人間はクイリアダリアを滅ぼそうとしているのか？

パンデモニウムの復活はイコールで魔王復活を印象付ける。風の噂で聞くよりもパンデモニウムを見た方がよほど信憑性もあるだろう。世界に混乱を齎す存在を、わざわざウロつかせる理由……。確かに他に考えられない。

「パンデモニウムの事もリリアに直接報告した方が良さそうだな」

「何だか世の中やなカンジだぜ……。空気が重いつて言うかさ。ニーチャン、おいらたちにも出来る事があつたら言ってくれよ？ 何でも手を貸すからさ」

「やる気だな、ブレイド」

「おうっ！ ブレイブ克蘭 勇者部隊は解散しちゃったけど、仲間なんだから勇者のネーチャンに全部押し付けるわけにはいかないだろ？」

ブレイドの言うとおりだ。俺も俺に出来る事をやろう。リリアにその全ての責任を押し付けてしまわないように。少しでも彼女の業を軽くしてあげられるように。

三人でそうして船に揺られ、ようやく港に到着した。そこで船を下りると直ぐに落ち着かない空気を肌で感じられた。何かが起きている……そんな雰囲気である。

「少し、急いだ方が良さそうだな」

俺の言葉に二人は頷いた。疲れているが、港にまで線路は続いて居ない。帰りは馬か いや、走った方がこの場合は速い。足の遅い

メリーベルを背負い、俺とブレイドは魔力を足に込めて全力で草原を駆け出した。

出兵の準備で慌しいリア・テイルの中、リリアは自室の窓から世界を眺めていた。

傍には誰も立つてはいない。ただ一人、静けさに包まれた離宮でぼんやりと考え込む。

『どうした？ そろそろおまえも準備をした方がいいのではないかな？』

窓辺に立てかけられた剣が問い掛ける。リリアは目を閉じ、それから剣に向かい合った。

「ねえ、ロギア……。ロギアはどうして、この世界を相手に戦いを挑んだの？」

それは生まれて初めての質問だった。ロギアの生前に関する事を、彼女は質問した事は一度としてなかった。その暗黙のルールをついに破り、リリアの問い掛けは魔王へと向けられる。

「……ロギアは、強いね。リリアは一人でこの世界に戦いなんて挑めないよ。ロギアは……勇気があったんだね」

『どうした？ らしくない質問だな』

「うん……ごめん」

『謝る必要はない。むしろ、自然な事だ。そうだな……一体何から

語れば良いのか判らないし、それほど今は時間も無い。完結におまえの質問に答えるのならば　こつだな　』

剣は一呼吸間を置き、そして。

『この世界を変えたかったのだ』

「世界を……変える？」

『我ながら大それた願いだ。だが、あの頃私はそれを本気で信じていた。元々、王として他国を侵略するのに理由など要らなかった。だが　私自身の願いがあるとすれば、その一言に尽きる』

「ロギアが変えたかった世界って……何？」

リリアの質問と同時に窓から風が吹き込んだ。純白のカーテンとリリアの栗色の髪が靡き、剣は光を弾いて淡く輝く。

神剣は、魔王は、その質問には答えなかった。しばらくの沈黙が続き、逆に剣は主に問いかける。

『おまえが変えたい世界はなんだ、リリア』

「えっ？」

『隠すな。私にはおまえの気持ちなど手に取るように解る。おまえも変えたいのだろう？　この世界を』

「……………。そう、だね……。あのね、ロギア」

『ん？』

「リリア、これからすつごく馬鹿なこと言うけど、笑わないでね？」

『それは内容にも寄るがな……。ふん、そんな顔をするな。解ったよ、覚悟くらいはしておいてやる』

いじけた表情を浮かべた後、リリアは深呼吸する。そうして自らの胸に手をあて、光を浴びながら呟いた。

「この世界を……誰も傷つかない世界にしたい」

『ふははっ』

「だーかーらー！ 笑うなって言ったのにいつ！」

『いや、なんだ今更そんな事かと思ってな。おまえの願いなど、幼き日より変わらぬだろう』

「……そうだね。ねえ、ロギア？ リリア、強くなつたよね？」

『なつたな』

「偉くもなつたよ」

『ああ、なつた』

「でもね……。こんなにも、救えない物の方が多いんだ。……。こんなにも、届かないものばかり……」

窓の向こうに両手を伸ばし、光を掴むかのように少女は指先をそつ

と握り締める。しかし、全てのものは所詮幻……。この場所からつかめる物など何もない。

「大聖堂もクイリアダリアもそうでない国も魔王も、どうして戦うのかな……。どうして、分かり合えないんだろう」

「分かり合えないわけではないさ。だが、人が戦いに望む理由は心の相違だけではない。誇りや意地……。下らぬ理由も多い」

「どうしてそういうものに囚われるのかな。自分や誰かの血を流して、それで得られる物って……。何？」

「ふん、難しい質問だな。答えは恐らく存在しないだろう。得られる物など無いのかも知れないし、人間によつてはあるのかも知れん。だが、今お前が戦う事で得られるものがあるのであれば、迷う必要はない」

「……それでロギア、貴方の子供を殺す事になったとしても？」

神剣は一瞬言葉を失った。リリアは剣に向かい合い、それを手に取る。

「……出来ないよ、そんなの。あんな子供を斬るなんて。貴方の子供を、斬るなんて……」

応えは無かった。だが、ロギアは溜息交じりにリリアを見詰めていた。それはリリアにも良くわかった。たとえ姿など見えなくとも伝わるものが確かにある。

「……そうだな。おまえは、きっとそう言うだろうと思っていたよ」

「……ロギア」

『構う事はない。人には己の選んだ道というものがある。遠慮なく叩き斬ってやれ。おまえの道を阻むのならばな』

「……うそつき。意地張ってるのはロギアも一緒だよ。ロギア、こんなに優しいのに……自分の子供、殺したいわけないよ」

『……………』

「……私はリリアで、そしてロギアでもある。だから、話せばきつと解ってもらえるよ。だからそのために……あの子何かを傷付けるのを、黙ってみているわけにはいかないから」

『リリア……………』

「大丈夫だよ？　きっと、愛が世界を救うんだから！」

無根拠に無邪気に笑うリリア。その姿にロギアは何も言葉を返す事は無かった。その代わり、リリアの背後にいつの間にか立っていたゲルトが一步步を進める。

「……そろそろお時間です、陛下。いつまでも剣と話しこまないで頂きたいのですが」

「はう！？　い、いつのまに！？」

「ええ、アイオンに気配を消すコツを少々。そんな事よりいつまでドレス姿で居るつもりですか？　戦闘用のアーマークロークに着

替えてください、陛下」

「うっ……ゲルトちゃんが怒ってる」

「怒っていません。ただ……魔王と仲よさげに話すのはどうかと思います」

「もしかして焼餅？」

笑うリリアにゲルトはアーマークロークを突き出した。そうして腕を組み、黙って背を向ける。

『ふん、嫉妬はよくないぞゲインの娘よ』

「黙りなさい！ 兎に角、時間には遅れぬように！ 失礼します！」

早足で部屋を去り、扉が大きな音を立てて閉じられた。取り残された部屋の中、二人は顔を見合わせて苦笑していた。

「戻っていたのか。思いの他早かったな」

ケルゲイブルムを見下ろす山中に、秋斗たちが潜伏する隠れ家がある。その付近の木の上に立ち、もう一人の救世主はケルゲイブルムを見下ろしていた。

北方大陸から戻って直ぐに彼はその場所に立ち寄り、大聖堂の様子を窺っていた。背後から気配も無く近づいたフェンリルは仮面を外した私服のまま同じように木にもたれかかり腕を組む。

「成果はあったか？」

「……さあな。だが、どちらにせよ次に会う時には決着をつけるさ。あいつがどんな答えを出そうとも、もう同じ過ちは繰り返さない」

どこか決意を秘めたその言葉にフェンリルは黙り込む。そうして同じようにケルゲイブルムを眺め、静かに視線を伏せた。

「愚かしい事だ。この世界は変わらない……。何度も同じ過ちを繰り返す。貴様らはそうならないといいな」

「別に、奴ができねえなら俺様がやるまでだ。俺様は救世主。アイツの仇は俺様が討って見せる」

拳を握り締める秋斗。その肩の上に乗った白いうさが秋斗の頭によじ登り遠くを眺めた。うさぎの見詰める視線の先、大空の彼方から雲を切り裂いて巨大な影が近づいてくる。

「……パンデモニウム」

忌々しくその言葉を呟くフェンリル。秋斗は木から飛び降りると愛用の拳銃を取り出した。

「仕掛けるのか？」

「ああ。大聖堂はどちらにせよ俺様にとっては邪魔な存在だ。どさくさ紛れに頭を潰す」

弾薬を確認し、ホルスターに銃を収める秋斗。その傍らに飛び降りた白いうさは白いタキシードの女性へと姿を変えた。

「手を貸した方が良いか？」

「いや、別にかまわねーよ。どうせやる事は決まってる。それに
お前が一緒だからな、サイファー」

秋斗が優しく微笑みながら手を伸ばすその先、白い女性は髪を撫でられながら微笑んでいた。サイファーと呼ばれた女が山道を下って行くと、秋斗も振り返りフェンリルを見る。

「お前はお前でやる事があるんじゃないかねえのか？」

「……………」

「後悔しないうちにやっとけ。何、俺様の事は気にすることないぜ。別に仲間ってわけじゃねえんだ。お互い、好き勝手にやる約束だろっ？」

肩を竦める秋斗にフェンリルは目を閉じ、溜息を漏らした。それだけで二人のやり取りは終了し、救世主は森の中へと姿を消して行く。一人残されたフェンリルは腰に刺した剣を抜き、それを一振りして動きを止める。構えた刃に移りこんだ自らの姿を見つめ、そうして振り返り隠れ家へと向かって行った。

それぞれの思い、それぞれの戦い、それぞれの目指す物、それぞれの望み……。西の大地でそれら全ては激突の時を迎えようとしていた。

出兵を行った聖騎士団の先頭、馬に揺られてリリアが見たのは雪の降り注ぐ草原の彼方、空に浮かぶパンデモニウムの姿だった。黒い影が次々にケルゲイブルムへと落下し、街では火の手が上がってい

た。

「あれは……!?!」

「あらあら……。魔王城パндеモニウム……こんな所にまで来ていたのね」

馬ごと前に乗り出したエアリオの言葉にリリアは眉を潜める。あの城にあの魔王を名乗る少年は居るのだろうか？ 滅びの戦 マトリクス 創世の先駆けとなる一戦。それは既に幕を開けていた。

出遅れた。そんな後悔が過ぎる。しかし、ここで立ち止まるわけには行かない。純白のマントをはためかせ、リリアは遠く戦場へと剣を向ける。

「皆さん、聞いて下さい！ 我々聖騎士団はこれよりケルゲイブルムに突撃し、大聖堂を鎮圧！ 同時に魔王軍と交戦、これを撃退します！ 出来うる限り人の命を奪わぬよう、それぞれが心がけてくださいっ!!」

リリアの叫び、その最後に付け加えられた一言が兵の間に疑問を浮かべさせていた。騎士たちにとってケルゲイブルムに潜む大聖堂は女王を殺した組織であり、恨みはあれども助ける謂われない。リリアの言葉は、両方とも出来れば傷付けず 戦闘を中断させるというものだった。

そんな命令に従えるはずもない。騎士たちの間に動揺が走る中、リリアは凜とした表情で声を上げる。

「怒りや憎しみで敵を倒すというのであれば、この場で引き返さない！ 正義を成すという強い覚悟のある人間だけ、私に続きなさい!! ここで退いても私は決して責めません！ 皆さんの心の中

にある勇氣と正義、それにのみ従い刃を構える者のみ、私の騎士として共に戦場に参りましょう！」

馬を走らせ、後方に隊列を成す数百の聖騎士団の精鋭たちに声をかけるリリア。そうして祈るように、願うようにして叫び続ける。

「成すべき事は憎しみで誰かを殺すことではありません！　聖なるヨトの導きを　命を守る輝きを信じる者よ！！　我に続き給えっ！！　真実の愛を示し給えっ！！　我らが神に捧げ給え！！　我が剣に集い給え！！　我が名はリリア・ウトピシュトナツ！！　神の国の女王であるっ！！　覚悟と愛を併せ持つ騎士よ！！　我に続けええええっ！！」

剣を振り下ろし、リリアは一人で走り出す。それは無謀な行為だった。突然の事に誰もがうろたえる中、ゲルトやエアリオ、一部の騎士たちがリリアを追って走り出す。

するとあとはなだれるようにして白き甲冑の騎士たちは戦地目掛けて駆け出した。引き返すものは誰一人としていなかった。幼く未熟な女王の背中に、彼らはマリアの姿を重ねていた。

争いを望まず、民の平和を一番に考えていた強き乙女。揺れる白いマントと輝きを放つ神剣が道しるべとなる。その瞬間、彼女を認めていなかった騎士たちも突き動かされていた。

認めざるを得なかった。それを考えるよりもはやく感じ取っていたのだ。誰よりも前へ、誰よりも強く、誰よりも勇氣を持ったその背中が、代々受け継がれしクイリアダリアの誇る王のものであることを。

そして知ったのだ。その背中を守る事こそ、自分たちの役目である事を。誰かを守る戦いをする事こそ、彼女の願いであつた事を。それを夢見て、自分たちが騎士となつた事を。

怒涛の勢いで駆け出す騎士たちに既に迷いはなかった。呼吸を一つ

にあわせ、まるで一個の命であるかのように雄叫びと共に戦場へとまっしぐらに駆けて行く。

先行するリリアは一度として振り返る事はしなかった。背後に皆が着いてくれることを信じていた。その左右からゲルトとエアリオ、そしてマルドゥークがリリアを追い抜いて行く。

「貴方を死なせはしませんよ、陛下！」

「初めての戦いには、上出来な鼓舞だったわね」

「行きましょう、リリア。貴方の守りたいものを守る為に」

三人の声にリリアは頷いた。神剣を握り締めた純白の勇者は馬から飛び降りると同時に付近で戦闘を行っていた聖堂騎士と魔物の間に割って入って行く。

白い閃光が迸り、混乱が広がって行く。勇者は白いフェイスガードを降ろし、栗色の髪を靡かせながら突き進む。

「邪魔をしないでくださいっ！！ 私は貴方たちと戦うつもりはありませんっ！！」

叫びながら進むリリアに聖堂騎士が襲い掛かる。一瞬、リリアは足を止めた。次の刹那、白銀の閃光が騎士たちの合間を通り抜け、彼らの手にしていた武器を木っ端微塵に砕いていた。

「死にたくなければ刃を向けなさい！！ 魔物の軍勢を打倒するのが先ですっ！！ 人間同士で争っている場合ではないでしょう！？」

「我らの神を侮辱する者め……！！ 神罰を！」

背後から切りかかる聖堂騎士の刃を片手で受け止め、リリアは振り返ると同時に蹴りを放つ。男の腹部に突き刺さった鋭い蹴りは騎士を大きく吹き飛ばした。

「本当に神様が居るのなら、貴方たちに死なんて求めない！ どうしてそれが、わからないんですか　　っ!？」

リリアの叫びも空しく、聖騎士団と聖堂騎士団、そして魔王の率いる魔物の軍勢と三つの勢力がぶつかり合う。戦闘が始まると同時に、リリアの叫び声も聞こえなくなっていく。

終末を呼び込む地獄のような景色の中、少女は懸命に何かを助けようと叫んでいた。しかしその声は誰にも届く事は無く、王に課せられた責務を果たせと世界は彼女を追い立てる。

混迷を極める戦場の中、リリアは涙を流した。白銀の仮面に覆われたその瞳から流れた涙は大地に落ちる事も無く、誰かに届く事も無かった。

決戦の日（2）

魔王城パンデモニウム。その城から放たれた六つの巨大な楔が大地へと穿たれ、ケルゲイブルムに大きな衝撃が走った。

空を揺れる鎖を見下ろし、城の最上階でレプレキアは大地を見下ろしていた。その傍ら、紅い甲冑を纏った老騎士が巨大な槍を携え歩み寄る。

「パンデモニウムの固定が完了しました、閣下。これより不死者をケルゲイブルムへと進軍させます」

「騎兵は既に展開しているのであろう？」

「は……。竜騎兵は既に展開完了しております。機械人形も続けて出撃予定で御座います」

「そうか。なら問題ないな」

「クイリアダリアの女王が聖騎士団を率いて進軍してきている模様ですが」

「捨て置いて構わないだろう。それよりも今はマリシアを全滅させる事が重要だ。あんな呪わしき者。この世に在ってはならん」

「仰る通りで御座います」

胸に手を当て深々と頭を下げる騎士。レプレキアは振り返り、その傍らに歩み寄る。そうしてそっと老人の枯れた頬に手を伸ばすと優

しく微笑んだ。

「お前にも今まで苦勞をかけたな……ジルベストリ」

「勿体無きお言葉……。我が命は先王ロギア様と共に散るはずで御座いました。この価値無き身体に命を吹き込んでくれたのはお坊ちやまでしたからな。充分、我輩は感謝しておりますよ」

「坊ちやまはやめろって。ジルベストリ、例の錬金術師の様子はどうだ？」

「何やら無断に出撃したようですな。キメラを一匹借りたいと申し出があつたようですが……」

「キメラか……。何をたくらんでいるのやら、あの男」

腕を組み、背を向けるレプレキア。ジルベストリは目を細め、険しい表情で王に告げる。

「閣下、過ぎた言葉となりましたが……あの男、信用成りませぬ。平静を装っているかのように見えますが、その目に狂気を宿しております」

「わかつているよジルベストリ。こちらの技術をあの男に渡すと同時に、こちらも色々な物を得られた。もうあの男が何をしようが構わないさ」

「しかし……」

「大丈夫だよ。あんなくだらない錬金術師一匹、ぼくの障害には成

り得ない。ジルベストリもそれは解ってるんだろう?」

魔王レプレキア。この世には既に存在しない、神代の魔術を用いた大魔術師にして魔王と呼ばれたロギアの一人息子。彼はその親の才能を余す事無く継承していた。

その力は十歳にして常人を遥かに超越し、圧倒的な魔力総量と技術力を持ち、嘗ての魔王さえ追い抜かんという勢いで成長を続けてきた。その力と才能を側近として見詰めてきたジルベストリこそ、圧倒的な魔王の貫禄を最も理解している。

だがそれでも心配に思ってしまうのはやはり幼き日より彼の傍に居た所為だろう。既にジルベストリを圧倒的に上回る力をつけた少年でさえ、どうにも気にかかってしまふのだった。

「……我輩も出撃し、マリシアを討伐して参ります。閣下はどうぞ、此方にて吉報をお待ち下さい」

頭を下げその場を引き返すジルベストリ。その背中に声をかけ呼びとめ、魔王と呼ばれた少年は寂しげに微笑む。

「死ぬなよ、ジルベストリ」

孫のように可愛がつてきた魔王がそう呟くと、ジルベストリもまた優しい笑顔を浮かべた。

「勿論ですとも、坊ちゃま」

「ケルゲイブルムを脱出する、だと……っ!？」

戦火の直前、滑り込むようにして帰還をはたしたアクセルが耳にし

たのは信じられない言葉であつた。

ケルゲイブルム大聖堂の奥、オルヴェンブルムを命からがら逃げ出した元老院の老人たちが避難する一室があつた。帰還を果たしたアクセルは大聖堂騎士として元老院にそれを報告しに顔を出しに行ったところ、その凄惨な事実を伝えられた。

「パンデモニウムが出てきているだけでもどうしようもないというのに、リリア・ウトピシュトナまで……。これでは我らに勝ち目などない……！ 大聖堂騎士を集め、撤退の準備をするのだ！」

「し、しかし……っ！ この街は後方に魔王軍、正面には聖騎士団と囲まれた状態にあります！ 脱出する道なんてもう……っ！」

「こんな時の為に、地下に抜け道を作つてある……。何のためにこの街を拠点に選んだと思つている」

「で、ですが……っ！ 外ではまだ騎士たちが戦っています！」

「それがどうした！」

「皆、貴方達が説いた神の国の為に戦っているんですよ！？」

「それがどうしたと言つている！ アクセル・スキッド……貴様、自分の立場を忘れたのか！」

円卓を囲む仮面をつけた老人の一人が机を叩き、怒声を上げる。アクセルは肩を震わせ、拳を握り締めながらその言葉に耳を傾けていた。

「貴様は元老院を守るのが役目であらう！ 我らを守る為の存在な

のだ、それを履き違えるな！」

「慈善事業で貴様のような物を養ってきたわけではないのだよ。礼儀というものを弁え給え」

「し……しかしっ」

「貴様はリリアの捕獲にも暗殺にも失敗しているのだぞ？　そう何度も失敗を容認する我らではない」

「く……っ」

肩を震わせ齒を食いしぼり、アクセルは言葉に耐えていた。それは自分が今までこの状況を打開できなかったツケであり、誰かを責める事は出来そうにもなかった。

誰も救えないまま、外で仲間たちが散って行くのを見ていることしか出来ない。大聖堂の騎士たちは皆熱心なヨト教の信者であり、神に仕える位の高い存在である司祭や元老院を崇拜している。その言葉をも神の言葉であるかのように受け取り、誰もが心を囚われていた。

他国に対する非道な行いも、彼ら自身の過ちも、全ての判断は元老院が行い、司祭たちが指示を出す。故にその行いに間違いは無く、彼らの言うとおりに動けば神に愛されると信じて皆刃を手に行っている。

考える事を放棄し、誰かに心を預けたのは彼らである。だが、アクセルは知っている。誰もがあの戦争で大切な物を失った。そしてそこに何か救いを求めていた。神だろうがなんであろうが、己を許してくれる存在を求めていたのだ。

心に傷を負い、空しさを抱え、信仰に縋るしかなかった人々をアクセルは責めようとは思わない。それを仕方が無かったという言葉で

片付ける事は出来ないだろう。だが、それでも。

「彼らは……あんたたちに使い捨てられる為に、戦ってきたわけじゃない……っ」

「何か言ったかね、スキッド」

「兎に角、わしらは地下に逃げる。足止めは何も言わずとも騎士たちが勝手にするだろう。マリシア連中は最早我らの手にも負えんし、ここで身代わりになってもらおうではないか」

「まったくだ……。マリシアに成ったものは皆気が狂っておる……。言動が些かおかしくて見るに耐えんよ」

最早言葉はなかった。アクセルはただ沈黙し、拳を握り締める。そうして顔を上げると、意を決して語り出した。

「……俺はこの場所を最後まで死守します。元老院の護衛には、他の者をお使い下さい」

「何だと？ 他に我らの身を守る実力者などおらんではないか！」

「俺は最後まで仲間を見捨てない……。あんたたちには、本当に世話になった。あんたたちが居なかったら、俺たちは皆のたれ死んでいただろう。だから、あんたたちは逃げればいい。それを止めたりしない。だが」

剣を抜いたアクセルの周囲に風が舞う。怒りと悲しみに震えた鋭い眼差しが老人たちを射抜き、その背筋を奮わせた。

「もう二度と、俺たちの前にその面を見せるな……っ！！俺はもうあんたたちを頼らない！俺の力で皆を救って見せる！」

「わ、若造が……っ！後悔しても遅いぞ！」

「……………ああ。後悔だったら今　　している所だよ」

アクセルがそう呟いて剣を収めると、老人たちは口々に愚痴を漏らしながら地下への隠し階段を下りて言った。無人になった円卓の中、取り残されたアクセルは一人やりきれない思いを両手の拳に乗せ、円形の机へと叩き付けた。

決戦の日（２）

街中は既に地獄のような景色に変わっていた。そこでは民間人も容赦なく殺戮され、死体が街を覆っている。紅くぶちまけられたペンキのような大量の血液が世界を染め上げ、目に染み込み痛むような錯覚さえ覚える真紅の景色にリリアは思わず齒軋りした。

市街地では空から襲ってくる龍に跨った亡霊の騎士が聖堂騎士と刃を交えていた。魔王軍の騎兵は腐った翼の龍を駆り、錆付いた槍を携えた騎兵を送り込んでくる。倒しても倒してもきりのないその魔物の群れに大聖堂は完全に疲弊していた。

正面で交戦する聖堂騎士へと襲い掛かる龍目掛けて魔法を放つリリア。光が激突しよるめく龍の首を一瞬で刎ね飛ばし、亡霊の鎧を蹴り碎いてみせる。

空中を舞い、華麗に着地したりリアの横顔を見て背後に力なく倒れこんだ聖堂騎士は怯えた目でリリアを見ていた。それはまだ若く、リリアとそれほど歳も変わらないような少年だった。リリアが声を

かけようと手を伸ばした時、少年は自らの首を剣で斬り、その場にゆっくりと倒れこんだ。

勇者は齒軋りする。聖堂騎士たちは皆そうだ。助けようとすれば自害してしまう。一体どんな教えを仕込まれればこうなってしまったのか。どうすればこんなにも、命を軽く出来るのか。

「……………助けて上げられなくて、ごめんなさい」

一言だけ祈りを込めて囁き、少年騎士の瞼を閉じる。振り返り剣を振るい、リリアは再び駆け出した。近づく龍騎兵を切り伏せ、襲い掛かってくる聖堂騎士には拘束魔法をかける。リリアの足元から溢れ返るようにして放たれた無数の銀の鎖が騎士たちに絡みつき、次々に身動きを奪って行く。

街の入り口周辺を粗方片付けてしまったリリアの背後、駆け寄るゲルトの姿があった。余りにも早く、そして圧倒的に敵陣を切り開いて単身ここまで突き進んでいくリリアについて行くのはゲルトにも相当困難な事であった。

「リリア、無事ですか!？」

「うん……。早く、こんなの終わらせなきゃ」

無傷の姿で血の海の中に立つ白い姿にゲルトは一瞬見惚れてしまった。美しい。単純にそう思う。地獄のような景色の中、圧倒的な存在感を誇るリリアにゲルトが見入るのも無理はなかった。

一瞬の間を置き、ゲルトは頷く。背後から接近する龍騎兵の放った火炎を片手で障壁を編み防ぎ、影の矢を放ちそれを打ち落とす。光の粒になり消えて行く魔物でさえ、リリアは悲しげに見詰めていた。

「あの騎士の亡霊は、誰かの死の証なんだよね」

「……リリア」

「これだけの死が、クイリアダリアを恨んでるんだよね……。それでも……討たれてあげるわけには行かないから」

降り注ぐ雪の中、リリアの白い姿は霞み、時々見失いそうになる。ゲルトはリリアの肩を叩き、優しく微笑んだ。

「一人で背負わないでください。一緒に行きましょう。悲しみを広げてしまわぬように」

頷きあう二人の正面、空より急速に落下する影が一つあった。それは二人の正面に轟音と共に落下し、仁王立ちの構えのまま大地を砕き、二人を睨みつけていた。真紅の重鎧を身に纏った老騎士。ジルベストリは二人の前に立ち塞がる。遥か彼方、大空に浮かぶパンデモニウムから単身落下してきた男はリリアに問い掛ける。

「先日ぶりだな、勇者王」

「貴方は……レプレキア君の護衛のおじいさん！」

「……成るほど、母親に良く似ている。だがしかしその格好、父の面影もある……。あの男の遺志、そして母の力を継いだ姫か」

蓄えた髭を片手で撫でながらジルベストリは笑う。老人が片手を側面に伸ばすと、遅れて落下してきた巨大な槍がその手にすっぽりと収まった。

「我輩はジルベストリ。魔王レプレキアが腹心、闇の騎士であるっ！！ 貴殿の母と父の残した業と責務、貴様に果たしてもらっぞっ！！」

ジルベストリの全身から放たれる猛々しい魔力。それは二人の肌に鋭く突き刺さるような迫力を持っている。手にした槍も魔槍の類である事は間違いなく、圧倒的な力と揺ぎ無い意思がひしひしと伝わってくる。

魔王の腹心を名乗る騎士は間違いなく大きな力を持っている。二人は同時に剣を構え、リリアはその老人を悲しげに見詰める。

「貴方もまだ、十年前の過去に囚われているんですか……？」

「ほう、戦の中で敵に問うとは笑止。知り得る事ならば剣戟の狭間にて垣間見よ、勇者王。我輩は手加減をするつもりは無いぞ？」

槍を高速で振り回し、腰の背後に構えるジルベストリ。ピンと張り詰めた緊張感の中、焦りを感じながらもリリアはそれに向き合った。

「行つて下さい、リリア。彼はわたしが引き受けます」

「ゲルトちゃん……」

「良いのです。貴方の為に戦うと誓ったのですから。さあ、リリアは聖堂へ！ 元老院を抑えれば、少なくとも大聖堂との争いは終わるのですから！」

事態はそんなに単純なものではなく、なっているのは二人ともわかっていて。これはもう、心の戦い。戦いを止めようと思えるかどうか

は、一人一人の兵士にかかっていると見える。

だからもう、何かすべてを纏めて引っくり返せるような手段は存在しないのだ。だから、一つ一つを何とかしていかなければならないのだ。

それでもここは自分の役目だと、リリアの手を煩わせないようにとゲルトは剣を構える。そのリリアへ少しでも余裕を与えてあげたいというゲルトの優しさが何よりも今は痛いほど嬉しかった。

「貴方の相手はわたしが勤めます！ わたしは女王の騎士、ゲルト・シュヴァイン！ 魔王の騎士よ、相応の決闘を望みます！」

「ほう……。そう言われては武人として断る訳には行かぬな。同じ、王を守る騎士としても……。良いだろう。見逃してやる、リリア・ウトピシュトナ」

「え？」

「見逃してやると言っているのだ。我輩はそもそもマリシアの殲滅が任務……。貴様の相手をするようには命じられておらぬ。尤もこちらの小娘はマリシアに近い者のようだがな」

ジルベストリの鋭い視線を浴び、ゲルトはたじろいだ。その身に宿す魔性の力。それを老兵は見抜いていたのである。リリアが不安げに一度振り返り、しかし彼女は立ち止まらなかった。

「ごめん、ゲルトちゃん……！」

「謝る必要などありませんよ、リリア……。わたしは、こんな所で死にはしないのだからっ……！」

「来るが良い、黒き勇者の末裔よ！」

黒と赤のシルエツトが刃を交える。その轟音と火花を背後に感じながらリリアはきつく目を瞑り、そして前だけを見て走り出した。不安と嫌な予感だけが胸の中にわだかまっている。それでも走らねばならなかった。立ち止まってしまえば、また何かを失ってしまうような、そんな気がしていたから。

「くそっ、来るのが遅すぎたか……っ！」

ケルゲイブルムを望む草原の最中、夏流ははき捨てるようにしてそう呟いた。

遙か彼方、パンデモニウムから穿たれた鎖が大地へと続く道を作っている。火の手があがり、戦場と化したケルゲイブルムの景色に想うのは、友であるアクセルの事だった。

魔王の行動は迅速だった。素早く、そして確実に重要な拠点を攻略してくる。魔王復活の連絡を受けていなかった夏流ではあったが、オルヴェンブルムに戻りリリアたちが出撃したという連絡を受け慌てて急行したのである。

これ以上ない程に急いできたつもりではあったが、実際戦闘には間に合わなかった。リリアが自分に何の声もかけずに戦いを始めてしまった事が解せない上に、決戦の地に乗り遅れてしまった事が悔やまれる。

「パンデモニウムが……っ！？　おいニーチャン、どうなってんだよ！？」

「わからないが……兎に角ヤバそうだ。リリアたちも来ているはずだ、早く合流しなけりゃ……」

夏流がそう呟いた時だった。上空より放たれた氷の攻撃魔法が夏流に襲い掛かる。一早くそれを察知したブレイドが壁を召喚し、攻撃を防御した。

放たれた小さな氷の結晶は着弾すると同時に周囲を全で一瞬で凍結させた。壁に守られたその背後だけ、不自然に氷結の影響を免れている。

「誰だ!？」

夏流の叫び声と同時に舞い降りてきたのは翼を持つ獅子であった。その背中に立ち、マントをはためかせながら降りてきたのは彼らも見覚えのある男だった。

「グリーヴァ……」

錬金術師の男はキメラの背に立つたまま夏流たちを見下ろして薄っすらと微笑を浮かべる。そうしてキメラから飛び降りると両腕を広げて声を上げた。

「やあ、救世主君！ 相変わらずうちの妹が世話になっているようだね？」

「……？ 妹？」

一人会話が飲み込めずに首を傾げるブレイド。しかしメリーベルと夏流はその言葉の意味を重々承知していた。

黒い長髪を束ね、その合間から笑みを覗かせるグリーヴァ。一度は完全に倒したのではないかと思っていた二人だったが、目の前の男の底知れない存在感に恐怖を覚える。以前出会った時とは何かが異

なるような　　そんな微かな違和感が付きまとっていた。

「ククク……ッ！　いやね……。不老不死について、色々とわかった事があったね。やはり魔王に付いたのは間違いではなかったよ。彼らは神代の魔術まで継承しているのだからね……。っ」

「……ブレイド、先に行け。ここは俺とメリーベルで相手をする」

「で、でもニーチャン……！？」

「いいから行けっ！！　リリアに合流して話を伝えてくれ！　こいつは一度倒した事がある……。倒し方なら心得ているさ」

勿論それは強がり過ぎなかった。実際に倒せて居ないからこそ目の前にこうして錬金術師は再び立っているのだから。

だがしかし、ここにブレイドが居た所で仕方が無い。むしろ早くリリアに話を伝えねばならない。こうなってしまった以上、一刻も早く　アクセルに戦意は無いという事、そして彼らの中にも戦いを降りたいと考えているものが居る事を。

それに、他の人間に事情を知られたくないというメリーベルの気持ちも汲み取っているつもりだった。メリーベルはそんな夏流の横顔に切なげに視線を伏せる。

「わ、わかった……。ニーチャンが言うんなら、問題ないだろ。先いってるから、早く追いつけよ！」

「わかってるよ、団長」

ブレイドはグリーヴァを一瞥し走り去って行く。最早少年の姿は眼中に無いのか、グリーヴァは低く笑い続けながらただ二人だけを見

詰めていた。

少年が完全に走り去ると、夏流は拳を構えて前に出る。グリーヴァはその様子に眉を潜め、問い掛けた。

「全く君というやつは……。僕ら兄妹に気でも使ったつもりかい？」

「かもしれない……。邪魔をするって言うなら相手になるぜ、グリーヴァ。仲間がピンチで急いでるんだ。今度こそ息の根を止めてやる」

「息の根を止める……？ 君如き存在が？ この僕のっ？」

途端、狂ったように笑い声を上げるグリーヴァ。その奇妙な声は充分嫌悪感と恐怖を植えつけるのに値する。変わり果てた兄の異様な拳動にメリーベルは思わず後退した。

「おかしいことを言うんだね、救世主……！ 僕は！ 不老不死の法を手に入れたんだっ！！ 死ぬことの無い僕を、君如きが殺せるわけがないじゃあないかつ！！」

「グリーヴァ……？」

「さあ……メル。やっと君を呪いから解放してあげられるんだよ……？ 僕と一緒に行く……？ 君に永遠の命をプレゼントしたいんだよ、メル」

優しい微笑を浮かべメリーベルへと手を伸ばし歩み寄るグリーヴァ。しかしメリーベルは首を横に振りながら後退し、そっと夏流の影に隠れた。

それがグリーヴァにとっては許しがたい事だった。途端に形相を浮

かべ、血が滲むほどに拳を握り締める。

「メル……！ どうして逃げるんだい！？ 全ては君の為にやってきたことじゃあないかっ！？ 君を呪いから解放するために無数の命を削り、捧げ、潰し、汚し、魂さえ塗り潰してようやく手に入れた不老不死の法だというのに……っ！！ どうして君は僕を受け入れないんだっ！？」

「……兄さん………」

「……やめろ。どうして僕をそんな目で見るんだ……？ 僕は君の兄なんだぞ？ 君を助けるために研究を重ねてきたんじゃないか……」

震えながら手を伸ばすグリーヴァ。その二人の間に割って入り、夏流は兄の腕を掴んで捻り上げる。

「どうしちゃったんだグリーヴァ！？ あんた、ちょっとおかしいぞ！？」

夏流の記憶の中にあるグリーヴァはこれほどまでに狂った男ではなかった。確かに残酷な男ではあったが、もっと理知的な男であった。一度は命を救われた事もある、恩人だ。その背中に礼を言った事は忘れてはいない。

グリーヴァは話せば言葉の伝わる男だった。故に次に会った時は戦うだけではなく話し合い、呪いの解除について聞き出せるのではないかと夏流は考えていた。しかし。以前彼が出会ったのが今のグリーヴァであつたのならば、そんな希望はきつと抱かなかったであらう。

「放せ……」

男が小さく呟く。夏流が手を放すと、グリーヴァは身体を揺らしながらふらりと仰け反った。

「メル……。呪いを解くんだ……。君は不老不死になって……。そして、僕は罪から解き放たれるんだ……」

「兄さん……。もう止めてっ！！ あたし、そんな事望んでない！望んでないよっ！！」

「うるさあああいいっ！！ メルは……。この僕が助けるんだあっ！！」

頭を抱えて叫ぶグリーヴァ。その全身から漆黒の魔力があふれ出し、渦を巻いて行く。その光景に見覚えのあった夏流はメリーベルを抱いて後方へと跳躍した。

「下がってるメリーベル！ あれは マリシアの……。っ！」

雄叫びと共に光に包まれるグリーヴァ。光はやがて卵のような形を形成し、グリーヴァを内部に取り込んで静まり返る。その奇妙な静寂の最中、夏流は確かに感じ取っていた。

黒い卵の内側、恐ろしい力を持った存在が蠢いている。グリーヴァという肉を食らい、何かが生まれようとしている。その予感はずぐに現実の物となった。

亀裂が入る卵。ぴしりと音を立て、それは滑稽なまでにあっさりと砕けて行く。卵の内側から黒く血に塗れた腕が伸び、殻を破って現れたのは人の形をした魔物だった。

黒い肉に異形の姿。二足歩行の形態を取ってはいるものの、姿

は限りなく魔物そのものに近づいている。黒い翼を広げ、かつて錬金術師だった男は頭を抱えて咆哮する。

「にい……さん？」

「なん、だ……あれは……っ！？ マリシア、なのか……！？」

「多分、違う……。あれが……兄さんが辿り着いた力の答えなの……？」

異形の存在が瞳を開く。金色の獣のような瞳が二人を捉えた。三つに増えた目はぎよろりと周囲を見渡し、首を捻り、音を鳴らしながら白い息を吐き出す。

獣。いや、魔物と言葉が似合う怪物。生まれたばかり、羊水のような血の海に浸っていた翼をゆくりと羽ばたかせ、グリーヴァだった者は声を上げる。

『さあ、メル……帰ろう。僕たちの家に……。君がまだ、あの白いベッドに囚われていた日々に……』

夏流は無言でメリーベルの前に立つ。黒い魔物は腕を伸ばし、小首を傾げて夏流を見る。

『君は邪魔なんだよ救世主。そこに居ていいのは僕だけだ。そうメルを守るのは、僕の役目なんだっ……！』

羽ばたきと共に風を斬り襲い掛かるグリーヴァ。その拳が夏流の放った拳と正面から衝突し、電撃が迸る。

「あんたがどういっつもりでメリーベルに会いに来たのかは知らない

い……っ！　だが、そんなバケモノにまで身を賣したあんたにっ！
！　仲間は渡せないっ！！」

『メルは僕のものだ……っ！！　メルは……！！　メルを救うのは、僕でなければならぬんだああああああっ！！』

「兄さん止めてっ！！　グリーヴァ兄さんっ！！」

メリーベルの叫び声は兄には届かない。魔物の放った魔力の塊と夏流のレーヴァテインが正面から激突し、争いの火蓋が切って落された。

決戦の日（3）

少年は、偉大な錬金術師の家系に生まれた長男であった。

その才能を漏れなく受け継ぎ、力を目覚めさせるのに長い時間は必要なかった。少年は魔術教会でも期待の星であり、誰からも将来を有望視される存在だった。

少年の世界は、巨大な屋敷の中だけだった。特に、その中でも書庫はお気に入りであった。父はいつも研究室に閉じこもっているか出かけているかで、家の事をするのは使用人たちだった。母は、魔王大戦で命を落としたと聞いた。

特にそれを嘆く事はなかった。使用人は皆優しく、大人たちも彼を褒め、期待を寄せていた。それに彼には一人、血の繋がった妹が居たのである。

妹は生まれた時から虚弱体質で、常に何らかの病気を患っていた。寝込みがちで外にも出られない妹……。たった一人の家族を少年はとても大事に扱っていた。

しかしその一方で、名家に生まれたというのに将来を期待できず、いつ死んでもおかしくない妹に対する人々の態度は冷やかだった。何かをするわけではない。だが、既に死んでいる者を扱うかのように淡泊だった。

必然少女は言葉を失い、直に誰とも言葉を交わしたがらなくなった。それでも兄にだけは心を開いていた。少年は毎日少女の見舞いに向かった。同じ屋敷の中、書庫や研究室に向かう道すがら彼女の様子を見て行くのは日課となっていた。

数々の華々しい賞を受賞し、才能を認められた少年はいくらかの年月を経て一人前の錬金術師となった。むしろ他の者より頭一つ秀でただけの実力を持つ彼は、いよいよ妹の病を克服する薬の製作に取り掛かったのである。

「メルは、病気が治ったらまず何をしたい？」

少年が學術書を片手にそう問い掛けると、窓辺に座った少女は少しだけ思案し、それからこう答えた。

「兄さんの……お手伝いがしたい」

「え？ 僕の？」

「……うん。兄さんの事、手伝ってあげたい。兄さん……最近ずっと疲れた顔しているもの。あたしの為に、毎日大変なんでしょう？」

不安げに顔を覗き込む妹に兄は勤めて明るいい態度で首を横に振った。本当は日々徹夜の連続で身体はつかれきっていた。しかし、妹の為に努力できる事が彼は何よりも嬉しく、それを苦に感じる事はなかった。

研究の為に少しずつ、妹の部屋を訪れる回数は減って行った。疲れた顔を見せるのはまずいと思い、会いに行く前には必ず少しの睡眠をとった。お陰でいつも寝ぼけた表情で訪れるものだから、妹には笑われてしまった。

妹の病はただの病ではなく体質であった。故にそれを根本的に打開する薬を作り出すのは困難を極めた。それでも少年は諦める事を知らなかった。毎日研究に打ち込んで妹の笑顔を夢見る日々が続いた。

ある日少年は研究を強引に中断させられた。それは父の意向だった。魔術教会は彼に様々な研究を求めていた。いつまでも成果の出ない研究など、誰も望んではいなかったのだ。

それでも少年は研究を再開した。その頃には既に研究者たちも彼から目を背けていた。妹は自分の事はほうっておいていいからと、兄

に何度も申し出た。それでも少年が首を縦に振る事は無かった。

しかし、成果の出ない研究に少年は心身共に疲れきっていた。そんな兄を見かねた妹はある日少しずつ錬金術を覚えたいと兄に申し出た。

彼女の一日の大半はベッドの上である。妹はそこで本を読みふけた。兄が休んでいる僅かな間だけ、体調を考慮しながら腕を磨いた。そうして何年かが経ったある日、兄は妹の実験の成果を見て我が目を疑った。そこから感じ取れたのは 自分以上に深い、彼女の才能だったから。

兄は嬉しい反面、複雑な心境であった。妹の病気が治れば、自分を超えた錬金術師になる日は遠くはないだろう。少年は全てをなげうって少女の為に尽くしたというのに、少女はあっさりと少年を越えて行く……。

それがどうしたと自分に言い聞かせた。最早少女を救う事だけが彼に残された目標だった。偏執とも呼べるその執念の研究は続き、ある日少年は家を飛び出した。

狭い屋敷の中ではもう研究を続ける事は不可能だった。少年は世界を旅し、様々な術を学んだ。錬金術だけではない、魔術や呪術の類も会得して行った。

そうして、全ての病以前に体質を変化させ、異常を克服してしまう秘薬を完成させた。それは呪いと紙一重の禁断の薬であり、精製には魔王の残した文献を必要とした。

魔物を生み出すように、命を変化させる薬物を作り出したのだ。それは妹の体質を変化させ、命を救う薬になるはずであった。

少年は喜び勇んで薬を片手に屋敷に戻った。髪伸びた妹は兄の帰りを大層喜んだ。そうして渡された薬を何の躊躇する事も無く、一息に飲み干してしまった。

それが全ての悲劇の始まりだった。少女の体質は変化し、病にはかからなくなった。しかし同時に、少女の身体は別の呪いに蝕まれるようになった。

適応できず、作り変えられていく体の激痛に少女は何日も悶え、嘆き、血を吐き続けた。その悲痛な叫び声を聞きながら少年はあらゆる薬を少女に施した。しかし、それを直す事は出来なかった。

「僕は……僕はただ、メルを助けたかっただけなのに……っ」

夜中になってもうなされ続け、もう何日も眠る事の出来ない妹。球の様な汗を顔に浮かべ、涙を流しながら苦しむその様に少年はただぎゅっと妹の手を握り締めた。

そうしてふと顔を上げた視線の先、妹がいつも眺めていた窓ガラスがあった。少年は言葉を失った。鏡に映りこんだ自分自身の顔は、歪な笑顔を浮かべていた。

偏執的な自らの愛情と目的と才能への嫉妬。様々な感情に揺れ動き、少年の中で何かが音を立てて崩れてしまった。

わざとではなかった。それは確かだった。だが心のどこかで、このまま少女が白い部屋の中に閉じ込められたままである事を祈る自分が居たのも事実だった。哀れ部屋から出られぬか弱い妹を救う事。

。それは未来を絶たれた少年に唯一存在した夢だったから。

このまま永遠に彼女が自分だけを見ていればいいと感じていた。心のどこかでそれを願っていた。歪な願いは叶えられた。少女はいつ消えてしまいかも判らない命のまま、自由を手に入れた。

少年は既に青年になっていた。彼は無言で家を飛び出し、それから妹の前には姿を現さないと誓った。そう、彼女を救い、自らの罪を償う手段を見つけ出すまでは。

それもまた偏執的な愛となって彼の心を蝕んで行く。様々な禁術に手を出したかつて優しく微笑んでいた少年は想う。何故、こんな事になってしまったのかと。

心の中に立ち尽くす幼き日の幻影。それさえも砕く魔物の腕は今、妹を守ろうとする救世主を殺そうと殺意を湛えて居た。

決戦の日（3）

「グリーヴァアアツ！！」

夏流の放った魔力を乗せた拳は魔物の腕に簡単に遮られてしまう。長く、しなやかに伸びる拳を持つ魔性の存在は猛攻を仕掛け、夏流を手数で圧倒する。

戦闘が始まって直ぐに放たれた二人の必殺の一撃は互いに激突し、目標を大きくそれて炸裂した。雪の振る大地の中、決れた草原の凄惨な光景が二つ。その中心で踊る二人の男は何度も拳を交え、火花を散らす。

「なんだってそんなになっちまったんだ！？ あんたは あんたはっ！！」

拳をかわし、夏流が小さく宙を舞う。素早く繰り出された蹴りは大気を穿ち、魔物の頭部へと突き刺さる。しかしグリーヴァは怯まず、夏流の脇腹を殴り飛ばした。

激しく吹き飛ばされて草原を転がり周る夏流を目で追いながらもメリーベルは身動き一つとる事が出来なかった。兄がここまで変貌を遂げてしまった理由は自分にある事を、彼女は認識していた。

「兄さん……っ！ 兄さんっ！！」

『メル……。やっと君を治してあげられるんだよ』

振り返り、そっと手を伸ばすグリーヴァ。しかしメリーベルは首を横に振る。

「あたしは、治らなくなつていい！ あの高い部屋の中で、ずっと兄さんと二人だけでも良かったっ！！ 治りたくなかった……っ！！ 兄さんにそんな風になつて欲しくなかったっ！！」

『メ、メル……？ 何を、言うんだい……？』

「お願い、元の優しい兄さんに戻つて……っ！ 兄さんは世界でただ一人、あたしの事を見てくれたっ！ 兄さんが居てくれればそれで良かった！！ 兄さんはどうしてそんなに成ってしまったの！？ あたしの所為なんでしょう！？ ねえ、兄さんっ！！」

『違うよメル、君は何も悪くないんだ。僕はね、ただ君を助けてあげただけなんだ。わざとなんかじゃなかった。だからホラ、その証拠に僕は今でも薬を作っているじゃないか……！』

長く伸びた魔物の両腕がメリーベルの細い両腕を掴む。激しい力で万力のように締め付けるその指先のせいで少女の身体に激しい痛みが走る。しかしメリーベルは兄から目を反らそうとはしなかった。

『さあ、一緒に帰るんだメリーベル……』

「ろ、して……」

『……なんだって？』

首を傾げ、聞きなおすグリーヴァ。異形の姿に変わってしまった兄を眼前に、メリーベルは涙を流しながら目を閉じていた。

「もう、殺して……っ！ もう、耐えられない……っ！ そんな……」

…そんな姿になった兄さんを……見て、居られない……っ」

『何を言っているんだ、メル……』

「兄さん……ごめんなさい。あたしの所為で……あなたを苦しめてしまった。追い詰めて、しまった……。だからせめて、一緒に死んで上げるから……。だからもう、これ以上　もう、自分を責めないで」

折れかけた腕を伸ばし、メリーベルは微笑んでみせる。苦痛に必死に耐え、球のような汗を浮かべながら笑うその姿に、男は嘗ての少女の姿を思い出していた。

苦しみに耐えて懸命に笑おうとしていた愛しい妹　それが何故こんなにも苦しげな顔をしているのか理解出来なかった。少年は少女を手放し、自らの両腕をふと眺めた。

『僕は……』

そこにあつたのは最早妹を優しく抱きしめられる腕ではなかった。そう、彼は妹を握り潰すつもりなどなかったのだ。だというのに、ほんの僅かに力を込めただけで、彼の腕は勝手に小さな少女の身体を捻り潰そうとしてしまった。

それは、身体がもう変わってしまい原型を留めて居ないということ。少年はそんな事を望んではいなかった。また昔のように、妹と一緒に　ただ、微笑んで暮らしたかっただけだというのに。

『僕の……僕の身体が……！？』

頭を抱え、魔物は後退する。身を振り、絶望にうめき声を上げる。大地に解放されたメリーベルは痛む腕を押さえながらそつと顔を上

げた。

その濡れた瞳に移りこむのはバケモノになってしまった自分自身の姿。その異形の光景に、グリーヴァは悲しみの悲鳴を上げた。

「ア
アアアアアアアアアアアアアアアッ！！
アアアア」

「ア
！？ アアアアアアアアアアアアッ！！
ツ！！！！！」

聖堂の中に銃声が響き渡った。

力なく崩れ落ちた黒衣の子供たちが膝を折り、大地へ伏す。その正面、銀色の葉莢が転がり落ち、銃の持ち主である少年は得物をホルスターに収めた。

彼の周辺には大量の死体が転がっていた。この世界の住人を殺す事に何の迷いもない。全ては幻。自分とは関係のないことであると秋斗は割り切っていた。

ここに来るまでに邪魔をしてきた魔王軍も聖騎士団も聖堂騎士も民間人も一人残らず容赦なく区別無く弾丸を撃ち込んできた。それは彼なりの礼儀であつた。この世界の全てに背くと決めた以上、これは守るがあれは守らないなどと甘つたれた事を言つつもりは毛頭なかつた。

全て薙ぎ倒し、殲滅して進む事。それが彼がこの世界に対して抱く、たった一つの矜持であった。故に彼の弾丸は区別無く、敵と認識した存在を貫いて行く。

「ここにはマリシアはいない、か……。仕方ねえな、元老院連中を皆殺しにして帰るとするか」

そう囁いた少年の背後、立ち上がった一人の執行者が刃を構えて襲い掛かるうとしていた。その少女の接近を振り返らずに認識した秋斗は背後に銃を向け、容赦なく発砲する。

銀色の弾丸は正確に少女の額を討ち抜く　はずであつた。しかし、弾丸は阻まれる。どこからとも無く飛来した剣によって。風が吹き荒れ、少女の背後にはいつの間にかアクセルが立っていた。気を失いかけてよろめく少女を腕の中に抱きかかえ、アクセルは眉を潜める。

「おにい……ちゃん……？」

罅割れて半壊した仮面が大地に落ちて真つ二つに砕け散つた。妹の身体を抱きしめ、それからアクセルは正面を見据える。

容赦なく振り返つた瞬間に銃弾を連射する秋斗の攻撃を全て風に踊る剣で叩き伏せ、アクセルは後退する。秋斗の周辺に転がる無差別な死体の群れに執行者は嫌悪感を隠さずに行つた。

「お前は何を目的としている……！？　そんなに殺したいのか！？」

「　ああ。どつかで聞いた覚えのある声だと思えば、あの時の時間稼ぎか。ハッ！　くだんねえ質問してんじゃねえよ」

答える事も無く、秋斗は引き金を引き続ける。一撃一撃が上級攻撃魔法に匹敵する光の弾丸　。それを踊るように回避し、物陰に傷ついたレンを寝かせてアクセルは壁を蹴り、空中から秋斗に襲い掛かる。

十二本の踊る刃のうち二つを両手に構え、空中から×字に斬りかかる。秋斗は後方に跳んでそれをかわし、アクセル同様壁を蹴って空中で上下逆様の体制で銃を構え、何度も魔弾を発射する。

それは一度弾いても息を吹き返し、後方から襲い掛かる自動追尾する一撃　。それが合計六発同時に放出され、アクセルはその全てに剣を投擲して貫き、防御に成功していた。

「ほ。まるで曲芸だな」

「まだ答えを聞いて居ない……！ 答える！ 何の為に前は
っ！」

「いちいちうるせえんだよ、幻想の住人が……っ！ とりあえずお
前強そうだし 元老院の居場所も知ってんだろ？ 俺様に教える
や」

「お前みたいな奴に教えるわけにはいかない……。あの爺さんた
ちを庇うわけじゃないが お前を野放しには出来ないっ！！」

例え無抵抗な子供であろうとも秋斗は容赦なく命を奪うだろう。そ
れが解ってしまった以上、もうその存在を看過する事は出来なかつ
た。

駆け出したアクセルの刃と秋斗の銃が正面から衝突する。二人はお
互いに魔力を解放し、礼拝堂に激しい地鳴りが巻き起こった。

「ぬうんっ！！」

「はあっ！！」

二人の呼吸が同時に交わり、刃が火花を散らす。

市街地にて何度もぶつかり合う二人の王に仕える騎士の戦いは激し
さを増していた。何度も槍と大剣がぶつかり合い、迸る魔力が炸裂
する。

周囲でも戦闘は繰り広げられていた。それは攻め込んできた聖騎士
であったり、防衛の為に命をなげうって戦う聖堂騎士でもある。は
たまたそれらに襲い掛かる魔物であろうか。混迷を極める戦場、し

かしその最中でも二人の決闘は充分に成立していた。

誰も二人の間に割って入る事は出来なかった。それほどまでに高度な技術と高い錬度の魔力がぶつかり合っているのだ。二人の間に割って入る事は死を意味する。誰もその戦いの邪魔は出来ない。

「ふん、小娘にしてはやりおる！　だが、まだまだ黒の勇者を名乗るには生ぬるいわっ！！」

「ぐっ！？」

重い力を込めた槍の一突きが繰り出される。等身で何とか受け止めたゲルトであつたが、力を相殺する事が出来ずに吹き飛ばされる。よろめくゲルト相手にジルベストリは手加減をしない。大地に槍を突き刺すと同時に発動した魔力が術式を形成し、大地より無数に突起する岩の刃がゲルトへと迫る。

乱立する剣山のような蜂起する大地を飛び越え、刃で受け流し、岩の嵐を抜けて上空から剣を叩き込む。槍で受け止めるジルベストリを前に、身体を空へと捻り回転しながら等身から魔力を放つ。

漆黒の魔力の刃がジルベストリに襲い掛かるが、老騎士もまた槍に魔力を込めてそれを一蹴する。二人の間合いが開き、互いに得物を構えなおす時間が訪れた。

「貴方は父を知っているのですか？」

「知っているも何も、奴らとは何度も刃を交えた身よ……。我らが主を卑劣な手段で討ち取った勇者の名を忘れる訳も無かるっ」

「卑劣……？　世界に混乱を齎し、幾千の命を大地に染み込ませた大罪の者に卑劣などと言われる筋合いはない！」

「何も知らずに己の正義を信じて疑わぬゲインの娘よ……。貴様らは十年前の戦の何を知っていると言うのだ」

「……………っ」

沈黙するゲルト。悔しげなその表情を前に落ち着いた様子で騎士は槍を構える。

「少女よ、貴様は己の目で見、耳で聞いた訳でもない事を単純に信じすぎていると何故気づかぬ。それは幸福ではあるが、決して賢い事であるとは言えぬ」

「何が言いたいのですか……！？」

「戦などする人間は全て卑劣よ。騎士道精神や誇りなど、勝利の美酒を前にすれば霞む……。故に貴様らを責める事はせん。だが小娘、己を正当化し、さも悪は他にあるかのような物言い。余りにも滑稽！」

駆け出したジルベストリはその勢いを殺さずゲルトへと一撃を叩き込む。紙一重でそれを見切り回避したゲルトの頬を血が赤く染め、反撃で斬り返したゲルトの刃は確かにジルベストリの身体を貫いていた。

しかし、違和感は直ぐにゲルトにも伝わった。巨大な剣で貫かれたというのに、ジルベストリは顔色一つ変えてはいなかったのである。慌てて剣を引き抜き未知の恐怖に後退するゲルト。そして自らの剣が全く血に染まって居ないという奇妙な事実を認識する。

「……言っただであらう、小娘。正義や誇りなど、勝利の前には意味を成さぬ。故に我輩はそれらを捨ててここに立っている。己の命さ

え、投げ捨てて　だ」

ジルベストリは槍を大地に突き刺し、己の腕を覆っていた鎧を外してみせる。その合間から見えた物、それは　。

「……ジルベストリ、貴方は……！？」

「そう、我が身はとうの昔に朽ち果てておる。我が主である、レプレキア様の死術^{ネクロマンシー}が、我が身を復讐の幽鬼としてこの世に再び導いたのよっ！！」

再び攻防が始まった。大剣を振り回し、ゲルトは叫ぶ。

「そこまでして、貴方は何を　っ！　何を求めているのですっ！？」

老兵は最早答える事はしなかった。少女もそれに応え、全力で魔剣を振り下ろした　。

理性を失った獣と化した兄の腕は妹の首へと伸ばされる。それは万力のような握力で細く白い首を握り潰そうとしていた。

少女は逆らおうとはしなかった。苦痛に顔を歪め、しかしその腕にそつと手を添える。ずっと、彼の事を探していた。彼を止めてあげたくて、許してあげたくて、長い時間を過ごしてきた。

自らで呪いを克服する事さえ出来ればもう彼を苦しめずに済む。その一心で研究を続けてきた。生きたいなどとは考えなかった。ただ、全ては自分の所為だから。

あのまま白いベッドの上、存在感も無い透明なままの自分で居られたのであれば、誰も苦しむ事など無かった。そのような運命の元に

生まれたのであれば、その運命を受け入れて居ればよかったのに。

「う……ううっ」

身体が呪いに蝕まれても兄を恨んだことなど一瞬たりともなかった。だというのに兄は変わってしまった。罪悪感と研究への偏執は彼の心を蝕んでいった。それも全ては自分の所為。

だから、旅に出てしまった兄を探して自らも家を出た。研究を続けるには固定した場所で、そして情報を得る為には大都市である必要があった。学園にはあらゆる依頼が世界中から舞い込んで来るだろう。クエストボードの前をうろつく日々が続いた。

そうして二年間彼女は時を費やした。自分の為に生きる選択肢などなかった。ただ、兄を救いたい一心で生きてきた。そしてもしも兄がもう後戻りの出来ないところまで壊れてしまっていたとしたら、その命を奪い魂を解放してやることこそ自分に出来る償いであると考えていた。

だが、そんなことは出来そうにもなかった。あの優しかった兄は、こんなになってしまうまで自分を思っていたのだから。手にかけるはずもなかった。だからであろう。かつて必殺の一撃を討ち込んだはずだというのに、その術式に綻びがあったからこそ、彼はまだ生きていた。

「にい、さん……」

思い返すのはあの色の無かった日々だけ。思い残すことなど何も無い。そのはずだった。

なのに、何故だろう？ 心の中に湧き上がる思い出は、もう何も無いわけではなかった。そう、色づいた記憶が。あの時からメリーベルの中にも現れ始めた。

突然研究室の扉を叩いた一組の男女。勇者を名乗る気弱な少女と、

不機嫌そうな顔の少年。二人と出会ったあの日から、迷いが心に生まれてしまった。

死ぬために生きているのに、殺すために生きているのに、もっと生きて見たいと想ってしまった。仲間と共にありたいと願ってしまった。それは、許されないと知っていたのに。

今まで誰とも関われなかった少女を仲間と呼んでくれる人たちが居た。それがどれだけ嬉しかったのか今になってようやく理解する。そうして気づけば涙が止められなかった。

「メ……ル……」

強く力が込められる。全てが折れて壊れてしまうと思った瞬間であった。怪物の背後から黄金の電撃が放たれ、激しい衝撃がグリーンヴァを吹き飛ばす。

腕から解放されたメリーベルは大地に落ち、途端に必死で空気を取り込んで噎せ返った。自分がまだ生きようとしている事実に嫌気が差し、しかし同時に嬉しくなる。

掌から電撃を放った少年は立ち上がり、ゆっくりと歩いてくる。その腕に纏う黄金の爪こそ、彼女が作り与えし物。黄金の光を放ち、進む魔力は大気を振動させているかのようでさえある。

立ち上がった怪物は翼を広げ、振り返る。救世主は一人怪物と向かい合い、拳を真っ直ぐに突き出して握り締めた。

「おい、メリーベル……。何勝手に諦めてんだよ」

「……ナツル」

「約束しただろ？ 今度はお前を助けるって。まだ返しきってない借りが山ほどあるんだ。勝手に諦めんなよ……馬鹿野郎」

夏流の言葉を耳にした瞬間、少女は涙を止められなくなっていた。嬉しくて仕方が無かったのかも知れない。悲しくて仕方が無かったのかも知れない。それでも立ち上がり、バケモノを間に挟み二人は向かい合う。

「兄さん、ごめんなさい……。あたし……。あたし、やっぱりまだ生きたいよ　　！　　まだ、生きて居たいよっ！！」

『ガアアアアアアッ！！』

獣の咆哮が響き渡る。少女の声はもう届かない。だが、それでも叫び続ける。

「兄さんと一緒にいてあげたかった……。っ！　兄さんがどんなに歪んでいても良かった！　でももう、兄さんは兄さんじゃなくなってしまったからっ！！　だからもう　　っ！！　貴方を許してあげるからっ！！」

メリーベルが魔力を解放し、七色の光が広がって行く。巨大な魔方陣が大地に浮かび上がり、空を舞う雪の花を光で染め上げて輝かせて見せる。

溢れ出す膨大な力を全て両手の間に構築し、両手を広げると同時に展開する。それは魔方陣上空から無数に降り注ぐ巨大な剣の羅列であつた。

塔のようなそれは四方八方から降り注ぎ、大地を円形に括って行く。大規模な結界が展開されると同時に剣に記された紋章が輝きを増して行く。

術を形成するメリーベルを本能的に危険だと判断したのか、獣は低い姿勢から一気に妹に襲い掛かる。しかし少女と獣の間に次の瞬間割り込んだ救世主は獣の拳を蹴り飛ばし、少女とバケモノの間に立

ち塞がる。

「メリーベルッ！！」

「……うん。ナツル、お願い　兄さんを」

「何言つてんだ。今更そんなこと言われなくてもわかってるよ。さあ、力を貸してくれメリーベル！　お前の因果をここで断ち切るっ！！」

「レーヴァテイン神討つ一枝の魔剣その力を我は担う」

メリーベルの詠唱に答え、神威双対は輝きを増して行く。電撃の魔力が迸り、ナツルにも理解出来なかった輝きが曇った空を突き抜けて行く。

「これは　！？」

「貴方に新しい力を授けて上げる。大丈夫、武器を信じて。ナツルの為に、ナツルの事を想って、ナツルと一緒に作り上げた武器だから。だから　それは必ずナツルに伝えてくれる」

夏流が正面に腕を伸ばす。次の瞬間指先に浮かび上がった魔方陣がグリーヴァの身体を大きく吹き飛ばした。

魔方陣は指先から肩へとゆっくりと移動を開始する。まるで武器を再構築するように、ゆっくりと。指先に巨大な爪が現れ、黄金の手甲は姿形を変えて行く。

そうして現れた刃に夏流は見覚えがあった。かつて彼が無意識に放っていた魔力で構築された光の剣。紋章のような形をした巨大な刃は腕の外側に装備され、今も輝きながら強い力を放っている。

膨大な力をコントロールするのは難しい。だが、夏流はそれをやつてのけていた。今日まで練習は欠かさなかった。そして今、メリーベルの補佐を受ける夏流にそれが成せないはずもなかった。少年の腕に背後から少女が指を重ねる。近づいた二人の顔は視線を合わせ、それから同時にグリーヴァを見詰めていた。

草原の中、頭を抱えて苦しむ魔物。かつては兄だった人物。仲間になれたかも知れなかった人。それを今、討たねばならない。他に手段は無い。解放する術は無い。ならば最早、迷う事さえ意味を成さない。

「……いいんだな？ 本当に」

問い掛ける声に少女はゆっくりと頷いた。

「……兄さんをお願い、夏流」

怪物が救世主を睨みつける。少年はゆっくりと歩み出す。その両腕に携えた刃を正面で十字に交差させ、静かに呼吸を整える。

負ける気はしなかった。相手がどんなバケモノであろうと、容赦なく両断するだけの圧力を持つこの刃があるから。これは自分だけの力ではない。メリーベルが 仲間が授けてくれた祈りそのものなのだから。

「来いよ、グリーヴァ。冥土の土産に 妹があんたにどれだけの想いを抱いていたのか、じっくりと味わって逝けっ！！」

翼を羽ばたかせ獣は飛翔する。正面から猛スピードで突進してくるその怪物を夏流は正面から受け止めていた。

獣の腕に手を伸ばし、大地に両足を踏ん張って受け止める。グリーヴァは空中から猛攻を仕掛けた。両腕を振り回し、一撃一撃が鬼神

の如き威力を放つ拳。しかし少年はそれを全て同じく拳で相殺していた。

避ける事はしようとしなかった。あくまでも正面から、正々堂々ねじ伏せる。そうでなければ意味がない。自分は自分だけで戦っているわけではない。彼と決着をつけねばならないのは夏流ではない。今自分の背後で祈っている少女なのだ。

だから、彼女の力で勝利しなければ意味がない。それを超えなければ意味がない。少年は歯を食いしばり、怪物と殴りあう。

「グリーヴァアアアアアアアッ！！」

高圧力の魔力同士が何度も何度もぶつかり合い、衝撃が発生する。降り注ぐ白い光の中、救世主と魔物は全力で打ち合った。

互いの拳が互いの身体を傷付けても止まる事は無い。最早獣に帰るべき場所も引き返す意味も無く、そして少年には振り返る事も引き返す事も出来ないだけの意味があった。

やがて獣の攻撃を正面から拳で受けた少年は反対の腕で獣の腕を両断してみせる。あっさりと黒い肉を切り裂いたのは少女が授けた黄金の刃だった。

拳から伸びた刃。それは紋章で編みこまれた光の剣。幻の剣。少年はそれを正面に構え、腕を失い怯んだグリーヴァを見やる。

獣のように変化してしまったとしても、それはきつと彼の意味ではなかった。それを殺すという事は心が痛む。だが、それでも。

「行くぞ、メリーベル」

「うん」

「その力を我は担う」
コールライトニング

右腕を後方に大きく振り被り、全ての魔力を拳の剣に乗せて。

「じゃあな、グリーンヴァ」

ゆつくりと、拳を放つ。それは怪物の胸に突き刺さり、そして術式が発動する。

「ラグナレク
黄昏を齎す者」

光の剣が怪物を貫く。そしてその一撃は魔物の身を焼き、全ての魂を滅ぼす閃光。

グリーンヴァの身体は黄金の炎に焼かれ、しかし苦しむ様子はなく全てが光に包まれていく。やがて何もかもが解けてなくなった頃、そこには胸から血を流す青年の姿があった。

人の姿に戻った兄がゆつくりと倒れる中、それを抱きとめたのは夏流であった。すぐさまメリーベルが駆け寄り、兄の血に濡れた手を握り締める。

「兄さん……」

「……メ、ル？ 僕は……どうして……」

「兄さん、ごめんなさい……！ ごめんなさいっ！ あたしなんか居たから……っ！ あたしなんかの所為でえっ！」

涙を流しながら必死に謝罪の言葉を並べるメリーベル。しかし少年は微笑みながらその頬を撫でた。

「何、言ってるんだ……？ 当たり前、だろ……。だって僕たちは…… たった一人の、兄妹なんだから……」

兄の言葉に泣き崩れるメリーベル。その頭を撫で、少年は満足げに息をついた。まるで長い間悪夢に取り付かれていたかのような心は晴れ渡り、雪景色の中で本来の輝きを取り戻したかのようなだった。子供のように泣きじゃくるメリーベルを抱きしめ、グリーヴァは口から血を流し、自らを倒した少年を見詰める。

「救世主……。お人よしな君の事だ……。メルとは、仲良くやって
いるんだろう……？」

「……ああ」

「くく、そうか……。じゃあ、僕はもう……… 必要ないだろう？」

「……そうだな。もう、必要ない。あんたはもう……… いいんだ」

グリーヴァは寂しげに微笑み、それからメリーベルを見詰めた。血に濡れた指先では妹の白い肌を朱に染めてしまう。それが今は何よりも悲しかった。

「……不老不死の法は、見つからなかったよ……。でもね、メル……。君の呪いを解く薬は……う、ぐっ」

「兄さんっ！！」

「……あの、白い部屋に……。戻りたいな、メル……。君と一緒に……」

「うん……。うん……。っ！ 帰れるよ……。？ また、いつでも会えるから……」

「…………メル、君は……幸せ、に」

手が力なく大地に落ち、二人は事実を理解した。メリーベルは事切れた兄の身体を強く抱きしめて泣いていた。それを止める事は夏流にも出来なかった。最早動かなくなったグリーヴアの瞼をそつと閉じ、ゆつくりと立ち上がった。

「兄さんは、あたしの病気を治す為に……」

「…………ああ」

「なのに、あたしは……兄さんに何もしてあげられなかった」

「…………でも、これから出来る事はあるだろ？」

涙を流しながら顔を上げるメリーベル。その雫を指先で掬い取り、少年は笑う事は無く、しかし真剣な表情で言った。

「こいつは幸せになれと言った。それがきつと本音だったんだ。何もかも投げ捨ててまで、お前を守りたかった……。きつと最初は、それだけの　ただ、兄貴なら誰でも思うような事だったんだ」

「……………なれるのかな、あたし…………」

「……………なれるさ」

目を閉じ、少女は祈る。瞼の裏に描くのは、あの幼かった日々。まだ笑顔で、まだ無邪気で、まだ無垢で居られた、あの優しかった日々。

光の中、少年は微笑んでいた。今と何も変わらぬ、妹思いな気弱な少年は、光の中で、確かに微笑んでいた。

決戦の日（3）（後書き）

くそれゆけ！ ディアノイア劇場Zく

リリア編は最早クライマックス

リリア「え！？ 何か不穏なサブタイ付いてるよっ！？」

ゲルト「最近は毎日更新ではなくなりつつありますから進行速度が落ちてますね。書き溜め分&休みの日ラッシュで書き上げた怒涛更新でお茶を濁すのでした」

リリア「ナチュラルスルーッ！？ ゲルトさん！？」

ゲルト「何はともあれ『決戦の日』は一日で丸々更新されたわけですが」

リリア「なにに？ 何か問題でもあるの？」

ゲルト「序盤のほのぼの感はどこ行っただけでしょうね」

リリア「そんな今に始まったことじゃないじゃん」

ゲルト「まあ、そうなんですけど……。最近は戦闘ラッシュで……」

リリア「もう少ししたらほのぼののパートになるから安心してね！」

ゲルト「にしても、随分長く連載していますね……」

リリア「あと30部くらいで完結にしたいけど、30部って冷静に考えると長いようで短いよね」

ゲルト「纏まるんですか？」

リリア「まとめ……ないとね」

ゲルト「何はともあれ、毎日更新されてると信じて夜中にもチエツクしに来てくれていた読者の方々。申し訳ございませんでした」

リリア「これからは『可能な限り』毎日更新でがんばるよー！そして、暇な時に遅れた分は取り返す！」

ゲルト「ところでどうして更新しなかった日があるんですか？夜中は暇なのに」

リリア「え？スターオーシャン4やってたから？」

ゲルト「え？」

嘆く魂の日（1）

「アイオーン、こっちの修理は終わったぞ。いつでもプロミネンスカノンを発動出来る」

泥だらけの姿で制御室に姿を現したヴァルカン。その背後に続いていたクロロが頬に付いた汚れを拭いながらアイオーンへと歩み寄る。

「プロミネンスカノンの発射トリガーは……アイオーン、貴方に預けられている」

「……ふむ。まあ、準備くらいはしておいても構わない、か」

奏操席に腰掛けたアイオーンが両手を左右に伸ばす。光が集い、そこに彼女が奏でるためだけに存在する鍵盤が現れる。

それはこの巨大な魔道要塞をたった一人で操る為の特殊操縦機関

。アイオーンの行動をサポートする為、クロロがアイオーンの傍らに立ち、同じように操作パネルに手を伸ばす。

「プロミネンスカノン、発射準備。シャングリラはカノン発射形態に移行します」

クロロの言葉と同時に学園全体に光が走る。全ての建造物の間に光が迸り、街中に居た全ての人々は空を見上げた。

天高く聳え立つ巨大な塔、ラ・フィリア。どこまでも伸びるその塔は今、ゆっくりと倒れようとしていた。

それは崩落しているわけではない。『傾いて』いるのである。ゆっくりと、学園全体が変形し、巨大な塔を真横に支えて行く。

「シャングリラ、目標捕捉の為に横回転を開始。座標補正開始。ラ・フィリア、砲身モードに変形完了」

アイオーンは自らの両手に紋章の描かれた手袋を嵌めた。そうして一呼吸間を置き、鍵盤を一気に指先で叩く。

激しいメロディラインが学園、そしてシャングリラの町を包み込んで行く。何が起きているのか全く理解出来ずに誰もが呆然とその景色を見上げる中、アイオーンは演奏する指を止める事はなかった。塔は傾き、巨大な砲身へと変化する。学園はシャングリラの基盤ごと回転し、西へと方針を向ける。危険区域に立っていた住民たちの足元に転送魔方陣が浮かび上がり、人々は次々に学園内部に転送されて行った。

その最中も常にアイオーンは演奏する手を止める事は無い。彼女の演奏そのものが学園を異形へと変える力を持つ。光の鍵盤が螺旋を描き、その中心でアイオーンは黙々と作業を続けていた。

長すぎる砲身を支える為、草原には光の支柱が無数に出現する。それらに支えられ、ラ・フィリア全体に魔力が充填されていく。

「プロミネンスカノンに魔力チャージを開始します」

「アイオーン！ 修理が完了しているとは言え、動力機関が不安定なままだ！ 出力はせいぜい30%が限界だ！」

一人でノンビリと変形の様子を眺めていたヴァルカンが声を上げる。アイオーンもその事実には既に気づいていた。だが、30%。その威力だけで充分すぎる。

「目標、魔王城パンデモニウム。ディアノイア、プロミネンスカノン発射用意。魔力チャージ状況10%……20%……30%……」

プロミネンスカノン、発射準備完了」

その瞬間、アイオーンの手は停止した。発射するかどうか　それは重要な問題である。チャージをするまでならば問題はない。だが、引き金を引いてしまえば悲劇の繰り返しとなりかねない。

「プロミネンスカノンの威力を考えれば、聖騎士団が撤退するまで待つべきだろうね。ケルゲイブルムごと蒸発しかねない」

「んー……。まあ、パンデモニウムも撤退するだろうからな。動きがあつたら狙撃すればいいだろ」

「そうだね」

軽い口調でやりとりを交わすアイオンとヴァルカン。その砲身が狙いを定める先、パンデモニウムの奏操席ではレプレキアが忌々しげにその反応に眉を潜めていた。

「……ディアノイアのプロミネンスカノンか。まさか『また』、自軍もろとも吹き飛ばす積もりなのか……？」

レプレキアの周囲に浮かび上がる黒い光の鍵盤の螺旋。そこに少年は手を伸ばす。旋律が奏でられた瞬間、パンデモニウム全体の魔力の輝きが行き渡って行く。

膨大な闇の力がパンデモニウムに収束する様子は地上からでも充分に見て取る事が出来た。その輝きを見上げながら一人、返り血に染められた銀の鎧の合間からアルセリアはそれを見上げていた。

元老院の老人たちが使用した秘密の脱出通路　それは当然アルセリアも知っていた。先回りし、街から離れた岩山から通路に強引に潜入し、逃げてくる元老院を皆殺しにしてアルセリアはケルゲイブ

ルの正殿の窓からパンデモニウムを見上げていた。

闇の光は全てを焼き払う滅びの力と成りかねない。しかし十年前の戦争で、ロギアは一度としてパンデモニウムをそのように使った事はなかった。使うべきではない力というものがある。その封印を解き、人道に反する力を発動したのは魔王ではなくクイリアダリアであった。

『パンデモニウム……。レプレキア、貴方なのですね……』

「　　っ！？　アナタは、アルセリア……？　　どうしてアナタがここに……」

背後からの声に振り返る。巨大な鎧の騎士の前に立っていたのは全身を炎のような紅い衣装で包み込んだ女　　ナイアーラであった。元老院の一人でありながらこの地にまだ彼女が残っていたのは単なる偶然に過ぎなかった。真紅の魔術師はすぐさま片手を挙げ、魔術を編みこむ。

放たれた紅蓮の炎。しかしアルセリアはなんら防御をする事もなく、全ての焰を弾き飛ばして見せる。何が起きたのか、ナイアーラにも理解は出来なかった。騎士は巨大すぎる剣を肩に寄せ、一歩、また一歩と歩み寄る。

「パンデモニウムが出現した以上、時間が無いわ！　　預言の時……空白の日が迫っているのよお！？　　それなのに、どうしてアナタは……っ」

鎧は無言で剣を突きつける。ナイアーラは完全におびえていた。目の前に居る巨大な鎧の中身　　。それは、いかにマリシアの力を持つ人間であろうとも恐怖するに値する絶対的な力　　。

『貴方とも数百年に及ぶ付き合いでしたが、どうやらそれも今日までのようです』

「……ふ、ふふふっ！！　ア、アタシが負けるはずがないじゃあない！！？　だってアタシは　不死身なんだものっ！！」

漆黒の炎がナイアーラの身体を変化させていく。美しい炎のドレスを身に纏い、焰の翼を広げるナイアーラ。不死鳥のマリシアは再び炎の術式を練り上げ、アルセリア目掛けて放った。

「フェル・エクスプロード
蜂起する煉獄　！！」

一瞬で収束した小さな光の球。指先から放たれたそれはアルセリアの鎧に直撃すると同時に炸裂し、城の壁も、部屋も、何もかもを巻き込み爆ぜて吹き飛ばす。
燃え盛る紅蓮の炎に包まれ、アルセリアの胴体から上は吹き飛んでいた。圧倒的強固を誇るどんな防御であろうと、貫通効果を強力に練りこんだ術式ならば無傷で耐えられるはずも無い。

「アハ！　アハハハハッ！！　アンタがヨト神の何を知っていたのかは知らないけどっ！！　結局アタシが最高に燃えているのよっ！！」

「鎧を砕いたくらいで何をいい気になっているのですか、ナイアーラ？」

「な　っ！？　い、ぎっ！？」

気づいた時には何もかもが遅かった。ナイアーラの口は真つ二つに裂けていた。口だけではない。そこより上は完全に切断され、哀れ

肉片となった頭部が転がり落ち、切断面より地飛沫が上がる。

燃え盛り焦げ付いた鎧の中、小さな小さな手が伸びていた。一陣の風が吹きぬけ、煉獄の炎は一瞬で消滅する。

焦げ付いた鎧の中から伸びたのは小さな手。幼い少女の手。巨大すぎる鎧の中からゆっくりと姿を現したのは、純白のドレスを身に纏った少女だった。

その腕から放り投げられた鎧の全長を遥かに超える巨大すぎる剣はナイアーラの頭部をすりつぶし、石柱に突き刺さっていた。ふわりと揺れる白くウェーブした髪を指先で弄り、無表情な少女はナイーラに歩み寄る。

「……死ねない身体とは不便なものですね、ナイアーラ。そんなに成ってもまだ生きているなんて」

「……………」

ナイアーラは残された口半分から血の泡を噴出しながら身体を震わせていた。少女は小さく跳躍し、細い手でナイアーラの切断面を驚づかみにするとそのまま大地に叩き付けた。

完全に首から上は砕け散り、ナイアーラの肉体は激しく痙攣した。同時に大地に亀裂が走り、砕けた石の破片が虚空へと同時に浮かび上がる。

「死なないのなら、死ぬまで殺して差し上げましょう。貴方に死を与える事で、神の許しとしましょうか」

大地に三度、激しい怪力でナイアーラを叩き付ける。上半身はつぶれていた。その肉体を素手で引き千切り、四肢を放り投げ、臓腑を引きずり出し、それでも尚死ぬことの無いナイアーラの心臓を握り潰し、血塗れの姿でアルセリアは顔を上げた。

「うつかりしていました。別に死なずとも、行動不能になっていれば問題はなさそうですね。尤も、思考を司る脳を碎いてしまったのですから……私の言葉はもう届いてはいないのでしょうが」

肉片を手から放し、床に落す。頬に付いた血液をそのままにアルセリアは窓の向こう、パンデモニウムの光を見上げた。

「問題なら在りませんよ、ナイアーラ。空白の日が来たならば、再び約束の地で合間見えるのですから。心と、記憶をそのままに……」
黒い光が広がる空。それを見上げる血まみれの少女は確かに美しかった。

嘆く魂の日（１）

「な　！？　あ、あれは一体……！？」

空を見上げたゲルトは膨大な魔力がパンデモニウムから放出されている事に気づき顔色を青ざめた。それは、魔法なんて生易しい物が発動するのではない。もっともつと、おぞましい　爆発的な力の発動を意味している。

余所見をしてしまったゲルト目掛け、ジルベストリの槍が襲い掛かる。繰り出された槍はゲルトの腕から魔剣を弾き飛ばした。

「戦闘中に余所見とは！　笑止！」

「ぐあああつ！？」

槍を回転させ、石突でゲルトの顔面を強打し、よろめいた所で少女の腕に槍を突き刺した。ジルベストリが腕を捻った瞬間、鎧の継ぎ目に正確に突き刺さった槍は少女の細腕をあっけなく切断してしまった。

肘から下、自らの腕が宙を舞い、壁に当たって落ちる様子を血の気の引いた様子でゲルトは見送っていた。遅れて激痛が走り、しかしそれに屈するわけにはいかなかった。

雄叫びを上げながら魔剣を拾い上げ、繰り出された止めの攻撃を弾き返す。力を込めた所為で切断面からは血があふれ出し、少女は苦痛に脂汗を浮かべながらふらつく体でジルベストリを睨んでいた。

「片腕失い尚且つその闘志……女子にしては良い眼をしている」

「う……っ！　ぐう……っ！！」

「しかし、片腕だけで勝機があると考えているのであれば些か滑稽。選ばせてやろう、小娘」

槍を頭上で回転させ、ゲルトの前に構える。突きつけられた血に染められた刃に少女の顔が映りこむ。

「次に刎ね飛ばされたいのはどこだ？　腕か？　足か？　それとも慈悲を以って一思いに首と行こうか！！」

魔力のコントロール、力の制御は精神状態に強い影響を受ける。高い集中力で魔力を練りこみ、初めて力を発揮できるのである。

腕を失った動揺と焦り、そして激しい痛みはゲルトの心を確実に追い詰めていた。少女相手でもジルベストリの猛攻は止む事は無い。

四方八方から繰り出される槍独特の間合いからの重い一撃は、片手

で受け止めるには不足している。

手足が痺れ、呼吸もままならない。もう長い間酸素を吸って居ない気さえしてくる。血を流しすぎた所為か、それとも呼吸困難の所為か、意識も薄れてくる。

視界に曇りが生まれれば余計に死は近づいてくる。自分は殺されるのか。そんな恐怖がゲルトの心の中にふつつと湧き上がって行く。

「リリア……わた、しは……っ」

「ふん！ 戦いの最中他者の名前を呼ぶなど、半人前の証拠よ！
ぜえええいっ……！」

「ううっ！？」

懇親の一撃がゲルトを防御の上から吹き飛ばす。完全に息が上がっているゲルトとは対照的にジルベストリは落ち着いた様子で倒れたゲルトの首筋に刃を当てていた。

「忠義の為に散る騎士の心意気は確かに見事。しかして今だその身は未熟……。何か言い残す事はあるか？」

「……………ジルベストリ……………」

「同じく王に尽くす心を持つ人間としての最期の心意気よ。貴様の王を殺す時に伝えてやろうではないか。何、案ずる事はない。冥土で直ぐに出会えるのだからな」

その言葉を受けた瞬間、ゲルトの瞳に強い闘志が戻った。首筋に刃を当てられているというのに、ジルベストリが反応できないほどの

速さで大剣を繰り出し、その首を狙う。

二人の攻撃は同時に不発に終わった。互いの首筋に傷を残し、血を流しつつも後退する。目を見張るゲルトの動きにジルベストリが笑いを浮かべた。しかし、その喜びの表情は直ぐに驚きに変化した。背後から何かが飛んできていた。それは闇の攻撃魔法。しかし、背後に敵など居るはずもなく。振り返ったジルベストリは己が何と戦っていたのかを知る。

転がっていたのは切断されたゲルトの腕だった。開かれたその手の正面には魔方阵が浮かび上がっている。次々に魔法を放ちながら切断された腕はジルベストリ目掛けて飛来したのである。

「何とっ!？」

槍を回転させ魔法を弾き飛ばすジルベストリ。その背後、剣を振り上げたゲルトの姿があった。

大剣を片手で振り下ろしたゲルト。その一撃はジルベストリの肩口から袈裟に斬りこみ、深手を負わせていた。しかし同時に槍はゲルトの喉を貫き、少女の口からは鮮血が溢れ出した。

だというのに、ゲルトはじつと無表情にジルベストリを見た。そうして背筋が凍るような冷たい。残虐な笑顔を浮かべた少女は剣を捻り、ジルベストリの半身をずたずたに引き裂いた。

「ぬああっ!？」

ジルベストリもまた、首を刎ねようと槍を捻る。しかしゲルトの首は既に槍から離れ、少女の身体は地に付いていた。音を立てて大地に零れ落ちる血を指先に、少女は喉を押さえて身体を揺らす。

「面妖な……。貴様、死が恐ろしくはないのか!？」

喉を潰されたゲルトが声で答える事は無かった。しかし、ジルベストリは感じていた。今までの少女と、今日の前に居る少女とでは力の本質が異なる事に。

切断された腕を拾い上げ、腕の切断面に押さえつけるゲルト。腕が激しく痙攣し、血飛沫が渦を巻く。そうして次の瞬間には切断された腕は機能を回復していた。

「回復呪文？ いや、これは まさか、我輩と同じ不死者ネクロライザー！？」

それは正解ではなかった。だが、限りなくそれに近い『何か』であることは間違いない。

少女に呪いを飲ませた男は不老不死の法を研究していた。妹の身体に宿る呪いを打ち消し、同時にあらゆる病と傷から少女を救うそんな神にも等しい力を欲していたのである。

ゲルト・シュヴァインは飲み干したのだ。神を作る素材となる毒薬を。平らげればその身を滅ぼし、しかしあらゆる死を跳ね除ける絶対的な力を。

痛みの中、ゲルトは既に正気を失っていたのかもしれない。熱く零れ落ちる己の血液ですら今は心地よい物にしか見えない。少女は己の血を酌んだ掌から真紅の美酒を啜り、口元を真っ赤にして笑って見せた。

それは誰の笑顔だったのか。彼女の中に眠る獣がそうさせたのか。誰もそれはわからない。ただ、ゲルトの目的は一つだった。

「
」

声にはならなかった。だが、当然のように願う事。

リリアを殺させない。リリアを傷付けさせない。そのためであるならば どんな事にでも耐える事が出来る 。

魔剣を両手で構える。自らの肉体からあふれ出した血液は飛沫となつて渦を巻き、魔剣の刃を覆つて行く。血から生まれた禍々しい真紅の刃を振るい、少女はジルベストリ目掛けて走り出した。

礼拝堂ではアクセルと秋斗の戦いが続いていた。お互いの実力は一見拮抗しているように見えたが、それは秋斗が全力で戦つて居ないだけに過ぎなかった。

しかしアクセルも救世主の力を持つ存在に必死で食らい付いていた。十二の剣を巧みに扱い、あらゆる攻防を実現する。事実、秋斗にとつてアクセルは今までの戦闘経験の中で最強を名乗るに相応しい実力を持っていた。

「シュウウウトオオオツ！！」

「ハッ！」

銃弾の雨を掻い潜り、アクセルは刃を振るう。両手に構えた六つの刃を連続で繰り出すが、しかしそれは秋斗には届かない。

攻撃を見切り、回避し、時には銃身で受け流す。逆にアクセルの回避行動は全て先読みされ、的確な位置に銃弾をねじ込んでくる。もしもこの風で刃を操る技術が欠けていたのならばアクセルは物の数秒で敗北していたことだろう。

剣と銃、二つの攻防は続く。風を載せた刃で遅いかかるが、秋斗は目にも留まらぬ速さで背後に回りこみ、距離を離して跳躍する。

「ハハハハハハッ！！」

空中から連続で引き金を引く秋斗。その弾丸の一発一発が銀色に雷を帯び、膨大な破壊力を持ってアクセルに襲い掛かる。ついに防御

の手が緩み、一撃の弾丸が身体を穿つ。途端に雷撃が迸り、アクセルは一瞬意識を失った。

その隙にこれでもかと放たれた弾丸は倒れたアクセルの身体を滅茶苦茶に撃ちぬいて行く。着地した秋斗は指先で銃身を回転させ、倒れたアクセルの額に銃口を突きつけた。

「じゃあな、ブレイドダンサー。少しは楽しめたぜ」

止めを刺そうと引き金を引こうとしたその時だった。正面から巨大な光の槍が飛来し、秋斗は障壁を展開して攻撃を防ぐ。しかしそれが障壁貫通効果を持つ魔法である事にいち早く気づき、銃弾を打ち込んで相殺した。

迸る銀色の雷撃の中を付きぬけ、何かが進んできていた。それは一瞬で秋斗の眼前に近づき、光の軌跡を描いて剣が振り下ろされる。救世主の前髪を切り裂いた剣の持ち主は美しい白銀の鎧を輝かせ、アクセルを抱きかかえ背後に跳躍した。

「王が単身こんな所に突撃か？ 少々間抜けだな」

「どうせリリアには指揮官なんて向いてないんですよ。だから、先頭に立つて壁を切り開く。それが私の、リリア・ウトピシュトナの戦いです」

有無を言わず秋斗は弾丸を発射した。リリアはそれを避ける事はしなかった。銃弾は少女の額と顔半分を覆っていたフェイスガードに命中し、銀の仮面は大地に碎けて落ちた。

額から血を流し、しかし動じる事もなく真っ直ぐに秋斗を見詰めるリリア。片手で素早くアクセルの傷を癒し、神剣を片手に救世主と相対する。

「 いいツラだ。 そうでなきゃ、 お前を王にした意味がねえ」

「 …… さも貴方が私を女王にしたかのような物言いですね」

「 そんなようなもんだろ？ お前の為に色々とお膳立てをしてやったんだ。 クク…… ツ！ そういや、 マリアは救えなかったようだな？ 俺様が手を貸してやらなけりゃあ、 母親一人守れない 。 それがお前の実力なんだよ、 リリア」

勇者は無言で剣を構える。 秋斗はそれに構わず語り続けた。

「 まあ、 安心しろ。 あれは運命だった。 お前がどれだけ力をつけていようが、 変えようのない運命……。 そう、 世界の意味が！ お前の母親を殺したただけなんだからな！！」

「 貴方はっ！！」

魔力が解き放たれる。 身体の外側に力を放出しただけで長椅子は吹き飛び、 ステンドグラスが音を立てて砕け散った。 虹色の硝子の破片が飛び散る中、 リリアは雄叫びと共に突撃する。

「 運命なんて言葉で……！ 人の命を決め付けるなんてっ！！」

「 ハッ！ 作り物の世界には運命の筋書きくらいで丁度いいんだよ おっ！！」

放たれた雷を剣で切り伏せ、 秋斗に襲い掛かるリリア。 銀の剣と銀の銃が衝突し、 拮抗した魔力に二人の身体は弾き飛ばされる。 壁を蹴り、 パイプオルガンの上に飛び降りる秋斗。 リリアは身体を回転させ衝撃を殺しながら下段に剣を構えて敵を見上げる。

「強くなったなあ、リリア！ 夏流と会ったばかりは泣き虫のへこたれ勇者だったお前が、良くぞここまで強くなったもんだよ！」

「貴方の口から夏流の名前が出ると、私は虫唾が走ります……」

「へえ？ そんなに好きか？ あのヘタレ野郎が」

「……っ」

感情的になり、一直線に突き進むリリア。パイプオルガンから跳躍し、リリアの頭上を跨ぎながら銃弾を放つ。

剣で弾かれた雷撃はオルガンを焦がし、礼拝堂を炎で包み込んで行く。大きくなって行く炎を背景に二人は何度も攻防を繰り返す。

「夏流はお前に優しいもんなあ！？ でもな、リリア それは所詮、お前本人の気持ちじゃねえんだよ！」

「何を……っ」

「夏流を好きで好きで仕方が無いのはお前じゃなかない。お前の中にある、お前を生み出した女の心だ！ 他人の心に左右され、さも己の気持ちであるかのように感じるお前が本当に運命に左右されていないと言えるのか！？」

「違うっ！！ リリアは リリアは、自分で っ！！」

「自分で決めてここに居るのか？ 親に魔王を宿され都合よく勇者に仕立て上げられ女王に祭り上げられ誰にも支配されて居ないと言えるのか！？ 教えてやるよりリリア……！ この世界の終焉はお前

の存在が巻き起こす！ お前が世界を滅ぼすんだよっ！！」

リリアの神剣を銃身で受け、秋斗は蹴りを放つ。それを回避し、リリアは剣を一瞬手放し、逆手に持ち替えて下段から一気に振り上げた。秋斗の頬を切り裂き、空に振り上げられた剣を再び放し、両手で掴んで振り下ろす。

「はああああああああっ！！
断罪する神意の音 ！！」

フェイム・エクス・フォース

輝きを纏い、振り下ろされる魔力の巨大な剣。それは聖堂の天井を切り裂きながら振り下ろされ、秋斗の銃へと叩き付けられる。

「運命なんて言葉で全てを許す事なんて出来ないッ！！ そんな陳腐な言葉で世界は括れはしないッ！！ たとえ誰かが望んだ世界でもッ！！ この剣で全て切り開いて見せる ッ！！」

「 ナメた口をおおおっ！！」

「斬り裂けええええええええええッ！！ ログアアアアアアアアアアアッ！！！！」

膨大な二つの魔力が正面からぶつかり合い、炸裂する。銀色の光が大聖堂の上部を吹き飛ばし、蒸発した天井から降り注ぐ雪の中リリアは肩膝を着いていた。

全身全霊、全ての力を絞りつくして放った神剣の一撃 。聖堂を破壊するほどの威力を持つ剣を放った。だというのに 勇者は齒を食いしばる。

正面には傷だらけになり、しかしそれでも尚立っているもう一人の救世主の姿があった。銀の銃を降ろし、秋斗は不快さを隠しもしない瞳でリリアを見下ろした。

「……………てめえ」

「……………くっ」

秋斗の腕がリアの髪を掴み、力の入らぬ身体を強引に引き起こす。憎しみを渦巻かせた瞳でリアを睨む救世主を少女は必死で睨み返していた。

ただ、睨み返すこと……それくらいしか今のリアに出来る事はなかった。健気に、懸命に心だけは折れずに救世主に齒向かう勇者。その姿に秋斗が歪な笑みを見せたその時。

「秋斗おおおおおおおっ！！」

背後から放たれた電撃の力を片手で相殺し、秋斗は振り返りながら銃を構える。その正面、猛スピードで駆け寄るもう一人の救世主を視界に居れ、秋斗は笑った。

二人が正面から激突する。お互いの攻撃は空振りし、二人の救世主は至近距離、額をぶつけ合い睨み合う。

二人の間にそれ以上の言葉は無かった。金と銀、二つの電撃が迸りケルゲイブルムの空へと舞い上がって行く。

嘆く魂の日（１）（後書き）

くそれゆけ！　ディアノイア劇場Zく

* 思えばこの作品あんまり叫ぶシーンないね *

リリア「キルシュヴァッサーとかウザイくらいに叫びまくりだったのね」

ゲルト「そういうこと言わなくていいですから」

リリア「でもなんか最終回っぽい雰囲気になってきてない？」

ゲルト「まあそうですが、残念ながらもうひとひねりあるのでご安心ください」

リリア「まだ終わんないの……？　ロボット書きたいって作者が言ってたよ」

ゲルト「変形合体する学園で我慢しなさい」

リリア「学園変形とかパンデモニウムとかは最早ネタだよね」

ゲルト「……書いてる間は楽しかったですけど、あまりに馬鹿設定過ぎて読者がどう受け取っているのか心配ですね」

リリア「まあ元々ノリとテンションで押し切る小説だからいいーんだ

よっ！！ ノリについてこられない人はもうここまで来る前に止めてるから！」

ゲルト「いえだから、更に引くくらい凄まじい設定ではないかと言うことで」

リリア「そんな事より、今日は作者の作業用BGMについて！」

ゲルト「……はあ。作業用BGM、ですか？」

リリア「執筆してる間音楽聞いたりしない？ もしも作者の作業用BGMに覚えがある人が居れば、よりディアノイアを楽しめるかもよ」

ゲルト「音楽は大事ですからね」

リリア「えーと、じゃあまず普通のBGMだね。作者はゲームのRPGのサウンドトラックCDを聞きながら書くのが多いみたいだよ」

ゲルト「主に『ファイナルファンタジーシリーズ』、『ゼノサーガ』あたりですか」

リリア「ほのぼのしてる場所は『マナケミア』とか『アルトネリコ』とかかな」

ゲルト「FFは8がBGM神だと思います」

リリア「光田さんのBGMはうまうまなんだよ」

ゲルト「歌とかは聞かないんですか？」

リリア「んー、あんま聞かない。でもディアノイアに限って言えば
missionoの『二人三脚』」

ゲルト「……え？ 何ですか？」

リリア「え？ あのねー、ディアノイアの基本を構想している時間
いていたから多分イメージ的に影響受けてると思う」

ゲルト「成る程」

リリア「あくまで作業用BGMだからね！ ちなみに殆ど友達に借
りた物で経費零円なんだよ！」

ゲルト「じゃあ普段は何聞してるんですか？」

リリア「え？ 相対性理論」

ゲルト「……………」

嘆く魂の日（2）

「プロミネンスカノン……。まさか、また……。同じ過ちを繰り返す積もりなのか……」

山の上から一人、フェンリルはパンデモニウムを見上げていた。

パンデモニウムが展開しようとしているのは超広域に作用する強力な結界魔法である。しかし結界魔法とは名ばかりに、その術が発動すればケルゲイブルムは跡形も無く消滅するであろう事はわかっていた。

魔王城周辺数十キロ範囲に超高圧の空間湾曲を発生させ、外部からの攻撃を次元的に隔絶し、弾き飛ばす防御魔法。それが発動すればパンデモニウムの真下にあるケルゲイブルムで戦う全ての者が跡形も無く消滅する。

それは、十年前にも見た光景だった。パンデモニウムを討つ為に使用されたプロミネンスカノン。その一撃は北方大陸に直撃し、大陸全土に強い影響を齎した。

北方大陸の冷たく固い大地を砕き、地形を変化させ、国を焼き、大気を汚染し、ザックブルムは人の住めぬ地となった。そのプロミネンスの一撃を浴びたのは魔王軍だけではなかった。その戦地に向かっていた聖騎士団、そして勇者部隊でさえ巻き込み、全てを焼き尽くした。

その恐怖、そして目の前で滅ばされていく仲間たちの姿はフェンリルの臉にくっきりと焼き付いている。今でも震える肩を抱き、男は冷や汗を流しながら過去に想いを馳せていた。

一人戦い続けたフェイト。そしてそのフェイトが守ろうとしたものは自軍だけではなかった。プロミネンスカノンの脅威からザックブルムの兵士たちも守ろうとしたのである。

しかし、その大陸の半分以上を焼き尽くす炎から誰一人逃れる事は出来ず、その場に居た命は全て灰燼と化した。一人で魔王と決着をつけに走るフェイトを止める事は誰にも出来なかった。

あの日、フェンリル　ルーファウスという男に出来たことと言えば、ただその炎に焼かれて身を滅ぼす事しかなかった。パンデモニウムは結界魔法を発動しようとはしなかった。自国の軍ごと全て薙ぎ払う魔法を発動するくらいならば、自らもまた炎に焼かれて命を絶つ　。それが魔王の選んだ最期であった。

ゲインの叫び声を覚えている。聖騎士団、魔王軍全てが同時に防御魔法を展開した。ゲインもフェイトも炎に立ち向かった。しかし、全ては手遅れだった。

魔王と勇者が決着を付ける中、ゲインは一人引き返し、プロミネンスシステムから彼らを守ろうとした。しかし皮肉にも守られたのはゲインと一握りの人間だけ　。気づいた時フェンリルが見たのは、駆逐された魔王城だけであった。

「オレは……っ。オレは、また……っ」

震える男の背後、異国の剣士が立っていた。長い黒髪を揺らし、フェンリルの背を叩く。

「……行かないのか？」

「……鶴来」

「君は強くなった。あの頃の君とは違う。ゲインの死を見届ける事しか出来なかった君と、今の君は。ならば、今の君になれば出来る事があるはずだ」

振り返るフェンリル。鶴来は眠たげに欠伸を一つ、それから髪をか

きあげパンデモニウムを見上げた。

「君が恨んでいるのはクイリアダリアか？ それとも、大聖堂？
あるいはあのディアノイアという要塞か。だが、君は守りたかつたはずだ。君の師を……君の仲間を」

鶴来がフェンリルの胸に押し付けたのは黒い装束と仮面であった。それを見詰め、フェンリルは顔を上げる。

「今の君はルーファウスか？ それとも、フェンリル？」

「……………オレは」

黒装束を見詰め、フェンリルは目を閉じる。それを一息に纏い、仮面を片手に男は鶴来に背を向けた。

市街地では空に集う黒い力を背景にゲルトとジルベルトが決闘を続けていた。人間の肉体を捨てた二人の戦闘は熾烈を極め、お互いの肉を引き裂き血をぶちまけながらも闘争を止める事はない。

少女の振り下ろす血の剣はジルベストリの槍を超え、今までとは比較にならないほどの圧力で迫る。ジルベストリの身体が吹き飛ばされると同時、ゲルトは自らの血を宙に振るう。

血を触媒に発動した真紅の渦巻く光は鋭い槍のようにジルベストリの身体に迫る。不死者と成った騎士は瞳を見開き、一閃で魔法を切り伏せた。

「ふん、面白いつ！ これぞ正に血沸き肉踊る末路の決闘よ！ 最早女子とは呼ぶまい！ 魔騎士よ、存分に終焉を演じようではないかっ！！」

男が吼える。その肉体から放出された魔力は大地を蜂起させ、街の

地形を変えて行く。地割れを伴い街を破壊する男の叫びを前にゲルトは臆する事無く進撃する。

それは自らの意思か、或いは別の何かか。その真偽に最早意味などない。戦って勝利しなければ全ては意味を失ってしまう。大切な物を失ってしまう。

親友を、愛する人を守るためにはいつだって力が必要だ。それが出来ないのであれば涙を流し膝を抱える他に無い。そんな過去は、そんな未来は、もう沢山だから。

嘆く事はしない。涙も今は止めよう。全てを背負い、生きようと歩き続ける彼女の背中を守るといっているのであれば、それくらいの事が出来ずに何が勇者か。

脈動する大地が背後からゲルトの背を強打する。背の骨が軋む痛みと逆流する血液の中、途切れそうな意識を支えているものは思い出全てを憎み生きることしか出来なかった過去の自分。責め立てられるようにただひたすら許しを乞うように生きていた日々。それを変えてくれた。仲間がいた。

一人ではないと思えるから命を捨てても戦える。死んでも生きて帰ると思える。守りたいと思える。だから、前に進める。

あらゆる方向から突き出す細い岩の刃に全身を貫かれてもゲルトは止まらない。停止という言葉忘れてしまったかのようにただ前へ。身体に突き刺さる岩ならば引き千切り、流れる血もそのままに。

リリアは言っていた。夏流はいつか故郷に帰ってしまうと。別れの時が来るのだと。だから一人で立派にやらねば行けないのだと。そうでなければ彼は安心して帰れないのだと。

それは、ゲルトにも言える事だった。夏流には沢山の借りがある。まだ、それらを返しきれて居ない。彼が居なくなるのを邪魔は出来ない。二人の決意を濁す事だけはあつてはならない。だから。

「やはりこの程度では止まらぬか、勇者！　ならば我輩がこの手で引導を渡してくれるっ！！」

「　　ッ！！」

魔剣を片手で構え、低い姿勢で駆け出す。その刃で螺旋を描く朱と紅の魔力を殺意に変え、ジルベストリ目掛けて放出した。

竜巻のような形を描きながら猛然と全てを砕き直進する光。ジルベストリはその破壊力に一瞬反応が遅れ、結果防御を選択してしまった。

大地から蜂起した巨大な岩の壁が螺旋を二分する。両断された竜巻は街を破壊しながら突き進み、閉ざされた岩の視界を貫き、ゲルトの魔剣は迫っていた。

障壁を砕き、魔剣ごと突っ込むゲルトの一撃がジルベストリに迫る。反応が遅れた男の額にその刃先が突きつけられ、男が死を覚悟した刹那。

「　　なんと」

ゲルト・シュヴァインは停止していた。その指先から魔剣が零れ落ち乾いた音を立てる。仰向けに倒れたゲルトの視界に飛び込んできた自らの体は血に塗れ、身体は穴だらけ、腕は骨折しあらぬ方向を向いていた。

本当ならばもうずっと前に停止していてもおかしくなかった身体は限界を向かえ、ついに刃を零した。痙攣し、動く事のままならない身体にゲルトは眉を潜め、歯を食いしばる。

「勇者の名に相応しき勇猛果敢な戦いであつた。この我輩とここまですり合つたのだ、誇るが良い」

喉を潰されたままのゲルトには言い返すことすら出来ない。ただ動かぬ拳を見詰め、目を閉じる。

負けた。死ぬ。そんな考えが脳裏を過ぎり、ただ申し訳ない気持ちだけが全身を支配していた。

もう、リリアの隣にいる事は出来ない。そう考えると涙が零れそうになった。果たせない約束と、それから 死の間際に思い出したのは一人の少年の背中だった。

思えばあの日からずっと、その背中に憧れていたのかもしれない。

そう 白と黒の勇者が戦った日、その場に颯爽と現れた一人の少年の背中に。

名前を呼ぶことも敵わぬその人の事を思い返し、血に濡れた唇だけが動く。その首を切り離そうとジルベストリは槍を振り上げ、そして。

「 貴様 ！？ 何奴っ！？ 」

死を覚悟し目を閉じたゲルトの前には誰かの背中があった。ゲルト同様の黒衣に身を纏ったその男はロングソードで槍を受け止め、そして仮面越しに輝く瞳で告げた。

「 通りすがりの、ただの犬だ 」

ロングソードの刀身に魔力が灯り魔法剣が発動する。闇の力を込めた一閃はジスベストリを槍ごと切り裂き、男の黒い髪が風に靡いた。

嘆く魂の日（２）

「 リリアアアアアアアア ツー！！ 」

叫びと共に秋斗を殴りつけ、吹き飛ばす夏流。救世主二人は互いの

最高の魔力を同時に解放し、その圧力に耐え切れずリリアは吹き飛ばされてしまった。

息苦しささえ感じるような密度の濃い魔力の中、風に飛ばされころころ転がったリリアは倒れた長椅子に激突して停止する。痛みを無視して直ぐに顔を上げると、そこでは二色の電撃がぶつかり合っていた。

「夏流……？」

「 テメエはいつも……ッ！！ それがテメエの答え
 かつ！！ 夏流ウウウウウッ！！」

秋斗の構える銃口に今までのものとは比較にならないほど濃密な魔力が収束する。雷の魔方阵が幾重にも正面に浮かび上がり、放たれた弾丸は魔方阵を潜るたびに加速し圧力を増し、光の一閃となって夏流に襲い掛かる。

夏流は正面からそれを迎え撃つ。右足に魔力を込め、身体を捻って放つ懇親の障害を討ち滅ぼす者が銀の閃光と衝突し、それを切り裂いて行く。

四方に散らされた閃光は大地と空を引き裂き全てを焼き尽くしながら爆ぜる。光が止む頃、秋斗と夏流二人の救世主は同時に武器に魔力を込めていた。

「レーヴァテイン コールライトニング
 神討つ一枝の魔剣その力を我は担う ！」

「ラインカーネーション セツトライトニング
 輪廻せよ転生の輪汝我が支配に応えよ……ッ！！」

夏流の拳と秋斗の拳、互いの腕に紋章が浮かび上がる。それはテオランド一族が受け継ぐ秘術を用いた特殊兵装を機動する鍵となる言葉。

メリーベル・テオドランドの生み出した救世主の拳、グリーヴァ・テオドランドが作り上げた救世主の銃。二つの武器に込められた膨大な魔力が解放され、二人の救世主の間で拮抗する。

「穿てッ！！ラグナレク 黄昏を齎す者 ツ！！」

「撃ち抜けエッ！キルシュヴァッサー 銀翼の魔弾 ！！」

秋斗の銃口から放たれた閃光する光の弾丸、それを夏流の拳に浮かび上がる巨大な魔力の剣が迎え撃つ。

電撃を撒き散らし全てを破壊しながら激突する二つの力が同時に消滅し、しかし救世主たちは動きを止める事はない。同じ威力を持った弾丸が連射され、一撃一撃が聖堂の外に貫かれ、街を破壊しつくしていく。

二人は至近距離で激しく打ち合う。剣と銃、二つの光が交錯する。やがて二人は同時に互いの首に得物を突きつけ、一瞬停止した。

その刹那、二人は見詰め合う。秋斗は憎しみを湛えた瞳で。そして夏流は怒りを秘めた瞳で。二人は距離を離し、既に原型を留めないほどに破壊しつくされた礼拝堂に降り注ぐ雪を背景に立ち尽くす。

「夏流、テメエ……」

「もう以前のようにには行かない。お前がどれだけ強かろうが俺は追いついてみせる。何度でも……何度でも、だ」

「テメエには俺様と冬香に詫びようって気持ちはねえのか……！？やり直したくはねエのかよっ！！過去をッ！！！！幸せだったあの頃をッ！！！！」

「やり直したいさ……！！やり直せる事ならやり直したいさ……っ

「！！ だけどな秋斗！ リリアはあいつじゃないっ！！ あいつと
リリアはどんなに似ていても別の物だっ！！ 一度失った命を何か
で代用してやり直す事に意味なんて無いっ！！」

「まだそんな事ほざいてんのかよテメエッ！！ こんなクソ世界：
…滅んで当然の世界！ 最初からあつてねえようなもんだ！ 全て
は幻なんだよ！！ だったらそこから現実を生み出して何が悪い！
？ 俺たちは選ばれたんだよ！ 神に！ この世界の神に！！ 冬
香は俺たちを選んだ！！ 俺たちはあいつを蘇らせ、そして世界を
やり直すんだよオッ！！ 何でアイツの気持ちを判つてやらねええ
んだ、テメエはあああああああっ！！！！」

秋斗が空に手を伸ばす。するとそこに召喚されたのはもう一丁、彼
が既に装備しているものと同じ拳銃であった。同じモデルの拳銃を
二丁構え、秋斗は銃口をかつての友に向ける。

「一度は逃げ出したテメエに何がわかるっ！！ 好きな女一人守れ
ない俺様の何が判るっ！！ 本物が偽者かなんてどうでもいいっ！
！ 俺は取り戻す……っ！！ テメエに出来なかった事を成し遂げ
て見せるッ！！ 俺様がっ！！ 冬香を救って見せるッ！！」

「秋斗……っ！！ 馬鹿野郎おおおおおおおっ！！」

二丁構えられた拳銃から怒涛の勢いで攻撃が放たれる。一撃一撃が
あまりの威力に何もかもを灰にしてしまう電撃。それを夏流は
両腕に浮かび上がる剣で両断して行く。

光の中で踊る救世主の背中をただ呆然とリリアは眺めていた。その
美しく、そして儚い二人の間にある様々な物を示すかのように、そ
の戦いは可憐……。舞い散る光の中、二人は叫び声と同時にぶつか
り合う。

「この瞬間テメエは敵になった！！　テメエはもう滅ぼすべき対象だっ！　そんなにこの世界が好きなら、この世界と一緒に滅んで死ねエツ！！」

「世界は守る！　リリアも守る！　誰も死なせない！　誰も失わせない！　何も狂わせない……！　俺はっ！　この世界に召喚された意味を自分で見つける！！　自分の手で、この世界で生きた証を見出してみせるっ！！」

「　　糞野郎があああああああっ！！」

剣と銃が光と共に交わる。二人の熾烈な白兵戦闘の最中、気を取り戻したアクセルが頭を抑えながら身体を起こした。

「つつつ……！　あれ、俺何故か生きてる……って、うおおっ！？　なんじゃこりゃあっ！？」

「あ、アクセル君……おはよう」

「ああ、リリアちゃんおはよう　じゃ、なくてっ！！　何だこの馬鹿みたいな魔力は……！？　あれが救世主の全力全開なのか……！？」

風と光の嵐の中心部を必死に見詰めるアクセル。その傍ら、リリアは尻餅を着いたまま呆然と二人を見詰めていた。

夏流の背中を見詰めていた。それは何かを守ろうと必死に戦っていた。もう、この世界に着たばかりの夏流は居ない。この世界をどうでもいいと、自分自身もどうでもいいと、熱意を持たずに生きていた彼は居ない。

彼は変わった。この世界に来て変わった。もう、現実世界で無為に迷いながら時を過ごしていた彼はいない。その事実が何故か、リリアはとても嬉しかった。

「何ぼんやりしてるんだリリアちゃん！ 早く離れないと巻き沿い食らって死ぬぞ！？」

「う、うん……。怪我してる人たちを連れて逃げないと」

「殆どはもう死んでるだろうな……。だが、一応確認していいこう。そうだ、奥にレンもいるんだ！ 回復してやってくれないか！？」

「うん、わかった。ここは……夏流に任せよう」

「……？ こんな状況なのに何か嬉しそうだな、リリアちゃん」

「え？ そうかな……。ううん、そうかもしれない。だって、夏流なら……。きつと、負けたりしないから」

「……貴様、その技には見覚えがある。確か、黒の勇者の……」

「当然だ。この技は師である彼からオレが受け継いだ物だ。扱いは難しくてな……。今の所、秘伝の技と言った所か」

黒いマントが風に靡く。朦朧とする意識の中、ゲルトはぼんやりとその背中を眺めていた。幼い日、同じように黒い装束を身に纏い、ゲルトに背を向けていた父の姿をそこに重ねる。

声にはならない声でその名前を呼ぶ。振り返ったフェンリルは仮面を外し、ゲルトをそっと抱きかかえた。

「背を向けるか、黒衣の騎士」

「斬りかかって来たければ来ればいい。オレは、隙なんぞ作っている積もりは毛頭無い」

「……ふんっ！」

背後からジルベストリの槍が迫る。フェンリルは側面を向け、逆手にロングソードを鞘から抜き、その槍を視認もせずを受けて見せた。驚きを隠せないジルベストリは一気に攻撃を畳み掛ける。しかしフェンリルはただ片手で全ての攻撃をいなし、ゲルトを片手で抱えた状態のまま身体を捻ってジルベストリを蹴り飛ばす。

「何とオツ!？」

剣を逆手に握ったまま、指先でゲルトに回復魔法をかける。傷は直ぐに全快出来る程生易しいものではなかったが、それでも諦めずに魔法をかけ続けた。

「貴様!」

持ち直したジルベストリが猛然と迫る。槍の石突を大地に叩き付けると、蜂起する岩の刃がフェンリル目掛けて襲い掛かる。

しかし騎士は剣を大地に突き刺し、片手を翳す。男の周囲を取り囲むように黒い光が輪を作り、岩の刃はそれ以上先に進む事はなかった。

その間も休まず回復魔法をかけ続ける。腰のベルトポシェットから回復薬を取り出し、ゲルトの頭からそれを浴びせ、さらに魔法を練りこんで行く。

「助ける気か！？　だが、そこまでの傷　間違いなく致命傷よ！
その女は命を燃やして戦っていた！　燃え尽きた『燃えカス』な
どに意味はないっ！！」

「……どうやらそうらしいな。オレの力ではゲルトは癒せない。だ
が」

背後から振り下ろされた槍の刃を指二本で掴み、停止させる。フェ
ンリルは怒りを隠そうともせず、剣でジルベストリの胴体を切り裂
いた。

「その言葉は撤回してもらおう。『燃えカス』は『燃えカス』でも
あの人が命を燃やして残した物だ。壊す権利など、お前は所持
していない」

「無駄だ騎士よ。貴様の剣では我輩は打ち滅ぼせぬ！　我輩は忠義
によって蘇ったのだからなっ！！」

剣で斬られつつ尚ジルベストリは猛進する。ゲルトを抱えたまま、
片手でその攻撃を受け流し、フェンリルは背後に跳躍した。

瓦礫の山を何度か跳んで移動し、建造物の屋根の上にゲルトを下ろ
す。そうして両手を開けたフェンリルは高所から魔法剣を発動する。

「　自ら弱点をバラしてどうする。いつぞやの剣士のガキといい、
どいつもこいつも馬鹿極まる」

フェンリルが刃に乗せる魔法は破壊する攻撃魔法ではない。浄化の
意味を込めた、洗礼魔法　。死者の肉を砕き、死体を不死者から
ただの屍に返す、エグゼキューターの魔法であった。

その光を前にジルベストリは一瞬躊躇する。フェンリルはその隙を見逃さずに飛び降り、上空から切りかかった。剣を槍で受け、次の瞬間には剣戟が始まっていた。

「浄化の魔法剣であろうと、当たらねばどうという事は無い！」

「そうだろうな。だが……貴様を倒す手段は何も魔法『剣』だけではない」

至近距離で剣を手放し、フェンリルは槍の内側に潜り込む。その一瞬で拳に乗せた浄化魔法をジルベストリの腹に叩き込んだ。

「ぬぐうつ！」

大きく吹き飛ばされてよろけるその身体に、手放した剣を足先で受け止め蹴り飛ばす。浄化魔法を載せた剣はジルベストリの胸を一撃で貫き、光の閃光を爆ぜさせながら炸裂する。

「何とおおおおつ！？」

無言で走り出したフェンリルはジルベストリの身体を殴り、蹴り、最後に両手に込めた浄化魔法の拳で顎を打ち抜いた。光の余韻が広がり、ジルベストリの鎧は碎け、老兵は大地に倒れた。

「……き、さま……。一体、何者……」

「犬、だそうだ。あの人の娘が言うにはな。まあ、そのようなものだろうな、オレは。失った主を求めて彷徨う 哀れな犬だ」

起き上がり、ジルベストリは後退する。フェンリルはそれを追う事

はしなかった。ただ冷やかな目で逃亡するジルベストリを見送り、そっと目を閉じる。

「ゲイン……。貴方の魂に、オレは少しでも報いる事が出来るのだろうか……」

眉を潜め、無言で剣を腰の鞘に収めるフェンリル。振り返り一息で跳躍し、ゲルトの元へ駆けつける。回復魔法をかけようとしたフェンリルは無言で齒軋りした。

屋根を伝う大量の血は止まる事が無く、ゲルトの目は薄く開かれたまま光を失っている。呼吸はとうに停止し。それはもう、生きた者とは言えなかった。

命を失い後はただ屍になるだけの少女の身体を抱きかかえ、フェンリルはきつく目を瞑る。

「オレは……オレはまた、何も守れずに……っ!」

男は空に慟哭した。男の叫びが響き渡る先、パンデモニムには魔方阵が浮かびはじめていた。

嘆く魂の日（3）

「撤退命令！？ 一体どこから……！？」

近づく魔物に魔法を連射し一掃しながらマルドゥークが振り返る。背後では大型の龍の首を一撃で刎ね飛ばしたエアリオが回転しながら着地していた。

「恐らく、女王の判断ね。でもきつと間違っではないわ。この場所にこれ以上長く居るのは危険性を上げるだけだもの」

二人は同時に上空のパンデモニウムを見上げる。水平線の彼方には真紅の輝きが集い、プロミネンスの炎はこの地へと向けられている。トリガーを握っているのがアイオンである以上、先の大戦時のように味方を巻き込むような扱いはしないだろう。しかし上空のパンデモニウムの力は未知数。収束する膨大な魔力はよくない未来を想像させるには充分過ぎた。

周辺では魔物と聖騎士団の戦いが続いている。戦力の稼働能力は半分以下にまで落ち、既に聖堂騎士団は壊滅状態。生き残った聖騎士団と魔物の戦いとなりつつあったが、パンデモニウムより飛来する魔物の数は一向に衰える気配が無い。

大地に穿たれた巨大な鎖を橋渡ししに魔物は次々に降りてくる。倒しても倒してもキリがない、終わりの見えない戦いに誰もが疲弊しきっていた。

「さあ、生き残った聖堂騎士を連れて撤退しましょう。マルドゥークは撤退の指揮を執って」

「姉上は！？」

「わたくしは魔物の足止めを引き受けるわ。大丈夫よ、無理はしないし……それに」

背後から近づく暴走したマリシア兵目掛け、エアリオの十字架がたたきつけられる。哀れな肉片となったマリシア兵を蹴り飛ばし、十字架の槍を頭上でぐるりと回転させた。

「まだまだ若い子には負けないもの」

「……流石ですね、姉さん。では、殿は御願します」

エアリオに背を向け、後退して行くマルドゥーク。それを振り返って見送り、エアリオは額の汗を拭って振り返った。鎖から降りてきた魔物の群れが正面に迫っていた。数百の黒い群像を眺め、騎士はにっこりと微笑む。

「十年前に比べたら大したことないわね。せめて鎖の一本や二本は、貰っていかなくちゃ割に合わないもの」

十字架を頭上から大地目掛けて振り下ろす。光の魔力が収束し、十字架の先端部分三方向に巨大な光の刃を構築する。超巨大な十字架となった槍を肩に乗せ、騎士は一人笑顔で魔物を迎え撃つ……。

その時だった。パンデモニウムが大地に繋いでいた鎖が激しい地鳴りと共に引き抜かれて空を舞う。その鎖は引き抜かれた衝撃でエアリオに迫ったが、飛んで来た巨大な鎖を槍で打ち返して碎き騎士は空を見上げた。

「パンデモニウム……撤退するつもりかしら？」

大量の魔物の襲来、大聖堂と聖騎士団の戦闘……。激しい戦いの影響でケルゲイブルムには最早民間人の姿はなかった。

それだけではない。撤退が一斉に始まり、命ある存在は次々に街を出て行く。アクセルは妹のレンを背負って走り、リリアは騎士や執行者などを背負ったり両脇に抱えたりしながら走っていた。

「リリアちゃん、一体何往復するつもりなんだ!？」

「生きてる人を全部ケルゲイブルムから出すまでだよ!」

「全く、君ってやつは……! 解ったよ、最期まで付き合ってやる! 女の子にばかり力仕事させるわけにもいかないだろ!？」

「アクセル君……。あ、でも今と成ってはリリアの方が力持ちだと思っよう?」

「そういう悲しい事言わないでくれる……? ほら、俺は風で運べるしさ……君より効率いいと思っよう」

「あ、そっか! アクセル君、頭いいね。よし、それじゃあもうひとふんばりだよ! 少しでも多くの命を助けなくちゃ!」

二人が街の外に走る最中であつた。屋根の上から黒い影が飛び降りてくるのが見えた。正面に見据えたその姿に二人は見覚えがあり、急ブレーキをかけて停止した。

振り返った男は冷たい表情で二人を見詰める。リリアは剣を抜こうとはしなかった。男……フェンリルも剣を抜く事はしなかった。

三人は必然的に無言で見詰め合う。リリアは抱えていた騎士たちをアクセルに預け、前に出る。

「フェンリル……？ この街は今なんだか危険なんです！ 早く逃げてください！」

「……………ああ、解っている。だが……………」

フェンリルは齒切れ悪く視線を反らす。見ればフェンリルの両手は血に濡れていた。彼が負傷しているわけではなかった。彼が抱えている者が血塗れであるだけで。

リリアは彼が抱き上げているものがなんであるのか一瞬理解出来なかった。立ち尽くし、そして弾かれるように駆け出した。フェンリルが抱えていたのは死体だった。体中から生気を失い、冷たくなっていく友だった者に駆け寄り、その手を握り締めてリリアは理解する。

その手は急速に冷たくなりつつあった。瞳を閉じ、眠っているようにしか見えない綺麗な顔立ちの直ぐ下、喉は切り裂かれ全身の黒い鎧は血に染まっていた。手足は妙な方向へと傾き、結われていた髪は解かれ血を滴らせながら揺れていた。

顔を上げる。フェンリルは何も言わずに目を閉じた。リリアは何の表情も浮かばせなかった。ゲルト・シュヴァインは死んでいた。その事実だけはもう絶対に変わらない事を彼女は知っていたから。

「……………リリアちゃん」

「走ってください」

背後にいるアクセルに少女はただ告げた。戸惑うアクセルにもう一度同じ言葉を叫ぶと少年は頷いて街の外へと駆けて行く。

残されたリリアはフェンリルの腕からゲルトの身体を受け取った。そうしてゆっくりとその場に膝を着くと、眠るゲルトの頬に自らの

頬を止せ、涙を流した。

「ゲルトちゃん……」

「……………謝るつもりは無い。だが、オレがもっと早く駆けつけていれば救えたのは事実だ。お前には、オレを恨む権利がある」

フェンリルの言葉を聞きもせず、リリアは神剣を大地に突き刺し空いた両手をゲルトの身体に当てた。そうして齒を食いしぼり、全身全霊全ての力をそこに収束させた。

それは回復魔法のようであった。しかしそれが無駄であることをフェンリルは知っている。瀕死の人間とは異なるのだ。もう完全に生命活動が停止している命を蘇らせる回復魔法などこの世には存在しない。

「……………無駄だ。失った命を蘇らせる事は出来ない」

「少し黙ってて下さいッ！！ 私は……ッ！！ 私はッ！ 貴方みたいに簡単に諦めたりなんかしないッ！！」

何度も何度も魔法をかけ直す。繰り返される癒しの光は周囲を明るく照らし上げ、しかし無慈悲にもゲルトが目覚ます事はない。

その姿にフェンリルは目を瞑り、そして片膝を着く。そうして自らもゲルトに手を当てると回復魔法を発動した。

「……………フェンリル？」

「無駄だと解っている賭けに乗りたくなる事もある」

「……………っ！！」

目を閉じる。リリアの中を流れるのは様々な思い出。何も、相手を必要としているのはゲルトに限ったことではない。

ゲルトと同じだけリリアはゲルトを思ってた。いつでも二人は一人だった。同じ目的を持ち、同じ魂を分かち合ってきた無二の存在。

もしも二人が互いの背をあわせたのならその魂の形はピッタリと一つに重なり合う形をしているだろう。指を重ね、温もりは共有されるだろう。そういう形、心、姿で生きてきた。

だから絶対に失うわけには行かなかった。運命などという言葉で全てを投げ出したりしない。自分の生きる世界は、自分自身で選び抜いてみせると。

「駄目だ……。こんなじゃ足りない……。っ！　こんなじゃ救えない！　守れない！！　何もかも　　！！」

自らの両手を見詰める。ゲルトを守れないのならば何も守れないのと同じ事だ。どんな事をしてでも絶対に救いたい　　！　強い願いを心の中に描く。

もう、何も出来ずに涙を流すのはうんざりだ。もう、何かを守れずに嘆くのはうんざりだ。同じ嘆くのなら、同じ涙を流すのなら、一人ではなく二人がいい。

だから、どんな事をしてでも救わねばならない。それがたとえ神の意思に反するような、禍々しい行いだとしても。それがたとえ誰にも認められない事でも。

「私は　　ッ！！　ゲルト、貴方を守りたい！　貴方を救いたいッ！！　だから　　だからっ！！　お願い、死なないでっ！！　ゲルトオオオオオオオオッ！！」

空に慟哭が響き渡る時、リリアの身体は光を放った。その輝きの最中、フェンリルは後退する。リリアを中心に凄まじいエネルギーが収束しているのがはつきりと感じ取れた。

「これは……！？ パンデモニウムの集めた魔力まで吸収している、だと　！？」

光は集い、リリアの神を銀に染め上げて行く。大地に魔方阵が浮かび上がり、少女の背には光の翼が広がって行く。

神々しいその光景の中、フェンリルは眩い光に目を細めながら耐えていた。膨大な魔力は周辺物を吹き飛ばし、フェンリルもその煽りを受けて倒れてしまいそうだった。

空に光の柱が立ち上る。それはこの戦いの終わりを告げる合図のように雲を切り裂き雪を吹き飛ばして行く。渦を巻く風は光の柱を舞い、雪の欠片は輝きを受けて光ながら導かれ、渦を描きながら飛び散って行く。

「何だ、この魔力は！？」

この戦場にて唯一、最後の最後まで決闘を続けていた二人の救世主も街から立ち上った光の柱に同時に振り返った。その隙に秋斗は背後に跳躍し、壊れた外壁の上に飛び乗る。

「夏流……勝負は預ける。今はリリアの所に行け」

「何だと？」

「勘違いするんじゃないよ。アレは新しい冬香の器になる大事な存在だ……！　俺様は嫌われてるらしいからな。テメエが守りやがれ」

「待て秋斗っ！！ おいつ！！」

「今度は守りぬけよ、夏流！　それがテメエの義務だっ！　俺様はそのテメエの想いを砕きに行く！　お前が守るリリアを奪って初めて意味を成す……！　じゃあな、夏流！　次に会う時は　容赦しねえっ！！」

「秋斗っ！！」

夏流の声に背を向けて走り出す秋斗。上空ではパンデモニウムが移動を開始していた。夏流は背後の光の柱を目指して走り出し、聖堂はついに空となった。

移動するパンデモニウムの存在を察知し、ディアノイアではアイオーンたちがその映像を眺めていた。アイオーンが小さく欠伸をしていると彼女たちの背後に転送魔方陣が浮かび上がり、鎧を脱いだ姿のアルセリアが姿を現した。

「おや？　君が鎧を脱いでいるのを見るのはいつぶりかな」

「アイオーン、パンデモニウムが移動を開始しました。プロミネンスカノンで狙撃します」

「　　良いのかい？　無許可でパンデモニウムを撃墜して」

アルセリアという名の少女は小さな体で浮かび上がり、アイオーンの傍らで足を組んで無表情に告げる。

「許可など誰に取れと言うのですか、アイオーン？　やるべき事は明白なので、後は成すのみです。十年前もそうしたので、か

「後は、あれが滅べば全ては終わる」

アイオンが鍵盤に触れて居ないというのに鍵盤は勝手に旋律を奏で始める。アイオンが眉を潜め振り返る視線の先、アルセリアは無表情にプロミネンスカノンの狙いが定めるモノを見詰めていた。

「……プロミネンスカノン発射準備完了。いつでも砲撃可能です」

「仕方が無いな。目標、魔王城パンデモニウム！！ プロミネンスカノン 発射！！」

アイオンが鍵盤を叩くと同時に巨大な塔の砲身に蓄積されていた力が一斉に放出される。それは津波のように何もかもを押し流し、物体と言う物体全てを瓦解させながら光の矢を描き飛んで行く。

パンデモニウムではレプレキアが瞳を揺らしていた。プロミネンスカノンは発射された。仲間の撤退を待たずに。

結界魔方阵を発動する事は出来ない。まだ、周囲には自軍が残っている。それだけではない。このような大量破壊兵器で戦いに決着を付けることなど、レプレキアは望まなかった。

障壁魔法が展開される。しかしそれはプロミネンスカノン同様に低出力によるものだった。大空を切り裂いて空を朱に染めながら飛来する閃光の刃がパンデモニウムに命中した時、膨大なエネルギー量が四散して空を、大地を、海を砕いて行く。

ケルゲイブルムの街は燃え、その最中を走る夏流の叫び声も轟音に掻き消されていく。光の柱に辿り着いた救世主の傍、剣を携えたりリアが駆け寄ってくるのが見えた。

「ッ！！」

リアの名を叫ぶ。少女は光の翼を広げて剣を振るう。結界に弾き

飛ばされて街に突き進んできたプロミネンスの光を神剣で両断し、叩き伏せて少女は振り返った。

「夏流！！ 走ってっ！！」

至近距離、息がかかりそうな距離にまで顔を近づけてようやく声は届いた。二人はそれ以上言葉は交わさなかった。リリアが背後で街を焼き尽くすプロミネンスの光を神剣で引き裂きながら後退する中、夏流は前を走るフェンリルを追いかけて行く。

フェンリルの腕の中にはゲルトの姿があった。状況が飲み込めていた夏流であったが、今は立ち止まる余裕も無い。何度もリリアを振り返り、少女が剣を振るう姿に拳を握り締める。

リリアの背中にはぼろぼろだった。傷つき今にも倒れそうな少女は自ら最後尾に立ち、おぞましい破壊から仲間を守ろうとしていた。救世主は振り返る。よろけるリリアの身体を背後から支え、神剣に自らの手を添えた。

二人は見詰めあい、それから剣を空に掲げた。光の結界は勇者と救世主だけではなく、町から逃げ草原を走る騎士たちにも効果を齎す。全ての命を守る大防衛結界が地上で展開する中、パンデモニウムはプロミネンスの攻撃を受けて後退していく。撃墜する事はままならなかったが、パンデモニウムには甚大な被害を与えていた。

揺れる城の中で叫ぶレプレキア。その叫びの対象となる者はディアノイアの中、遠ざかるパンデモニウムの姿にただ目を閉じて時を受け入れていた。

嘆く魂の日（3）

「うっ」

全身が痛い……。

一体何がどうなったんだ？ 確か、何だか良くわからんがビームみたいなのが飛んできて、パンデモニウムが後退して……。それで。

「リリアッ！？ いたっ！？」

「はうつ！？」

どうやら意識を失っていたらしい。慌てて飛び起きると、そこには何故かリリアの顔があって俺はリリアの額に思い切り頭突きをかましてしまった。

二人して悶えていると、ようやく自分の状況を知る。そこは草原の最中だった。だが、周囲では傷ついた騎士たちが休息を取っているように見えた。

戦いは終わったらしい。横を向けば、草原を切り裂いて燃やしながら突き進んできた何かの痕跡がはつきりと見て取れた。パンデモニウムの姿も無い……。ケルゲイブルムの街も、原型をとどめてはいなかった。

決着はついた。だがしかし、得られた者はなんだったのか。考えれば考える程解らなくなりそうで俺はもう一度目を閉じた。

「はうつうつ……。何故に頭突きするんですかぁ……。？ 不良さんですか……。？」

「何故そうなる……。というか、お前は何故俺を覗き込んでいる」

「何故って……。それは、膝枕しているからですよ？」

一気に意識が覚醒した。膝枕、だと……？ 何故そんな事をリリアにされねばならんのだ。

思わず飛び起きると、再びリリアに頭突きをかましてしまった。額を抑えて泣きそうになっているリリアの表情を見ると流石に悪い事をしたような気がしてくる。

「何でいじめるんですか！？ DVですか！？」

「違う！ なんだDVって！？ お前意味知ってんのか！？」

そんなやりとりが暫く続き、流石にもう意識もはつきりしたので起きる事にした。リリアのお膝から解放されて立ち上がるが、余りにも全身が痛くてやはり座る事にした。

俺たちが居るのは大きな木の下だった。他の木の下でも騎士たちが休んでいるので目立たないが、冷静に考えれば女王と二人きりでこんな所にいるとは本来ならありえない事だ。

ふとりリアに視線を向けると俺を見詰めて微笑んでいた。何だかその大人びた表情が妙に腹立たしく、額を小突いた。

「俺たちは助かったのか？」

「うん。聖騎士団の半分近くは戦闘不能だけど、皆頑張ってくれたから死者はそこまで多くないよ。それに 聖堂騎士団の人も結構助けられたし」

そういえば、聖堂騎士団と聖騎士団、両方の甲冑の姿が見える。勿論聖堂のほうは少なかったが、それでもよくここまで救えた物だ。しかし、一体何をぶっぱなされたんだ……？ あんな大魔法、そう簡単に撃てるものではないだろうし……。よくわからない。魔王軍もどうして撤退したんだ？ いや、そもそもどうして魔王軍はここ

を攻めたんだ？

ああ、そういえば俺成り行きで参戦したけど全然戦う意味とかわか
ってなかったんだ。これじゃあ流石に何も解らなくても仕方が無い、
か……。少し、でしゃばった事をしてしまっただろうか。

「リリア、信じてたよ」

「……ん？」

立ち上がり、リリアは俺に背を向ける。風と光を浴びて輝く銀の甲
冑は美しく、俺は思わず眩しさに目を細めた。

「夏流はやっぱりすごいよ。リリアが困つてると、いつでも助けに
来てくれる……。うん、やっぱり救世主様なんだね」

「そんな事はないさ。たまたま間に合ったただけだ。それに……お前
には負けるよ、リリア。大したもんだよ、お前は」

振り返ったリリアは嬉しそうに笑っていた。大地に突き刺したまま
の剣を引き抜き、リリアは息を付いた。

「さて！ 女王様のお仕事をしなきゃね。騎士団の様子を見てきま
す！ ごめんね、傍にいてあげられなくて」

「傷は大したことないから気にするな。秋斗^{ヤッ}の攻撃なんぞ痛くも痒
くもねえよ」

「……それって男の子の意地ですか？」

「。いいからとつと行っちまえ、あほ」

リリアは口元に手を当てて笑い　それから駆け出した。遠くでリリアがすつころぶと周囲の騎士たちが慌てて起こしに行っていた。なんだかんだでいいバランスで女王やつてるのかもしれない……。遠ざかって行く彼女の姿を見送り、木に背を預けて溜息を漏らした。なんだか疲れた……。もう休んだら俺も仲間の様子を見に行かなければな。リリアばかりにやらせるわけにはいかない。まあ、怪我人見つけても役に立たない、魔法の才能がない俺なのだが。そういやあいつ、最近敬語抜けてきたな……。そんな事をぼんやりと考えながら青空を眺める。暫く休んだ後、俺は草原を歩き出した。しばらく歩いていると嫌でも目立つ奴を視界に見つけて駆け寄った。フェンリル　。仮面はもうつけて居ないようだったが、一応俺たちの敵である男は眠るゲルトの傍らで何やら難しそうな顔をしていた。

「あんたも参戦していたとはな。意外だったよ」

振り返ったフェンリルは俺を見るなり近づいてくると、誰にも声が漏れないような至近距離で囁いた。

「リリアのあの力はなんだ？」

「……あの力？」

「……あれは、人間の領域を凌駕している。お前は……リリアの力の意味を知っているのか？」

訳が判らない事を言われ、俺は身体を離した。力？　人間の領域を凌駕……？　一体何の話をしている？

「……ゲルトの身体を見てみる」

俺は言われたとおりゲルトに歩み寄った。疲れて寝ているのだろうか？ 怪我している様子は特に見られないが アーマークロークが酷い事になってるな。返り血だろうか？ 凄まじい量の血が染み込んで赤黒く変色している。

すやすやと寝息を立てているゲルトの額に触れる。特に問題はないようだ。これがどうしたっていうんだ？

「お前にはどう見える」

「どう、って……ドロドロに汚れてるな……いや、無傷？ かすり傷一つないな」

「……ああ、その通りだ。かすり傷一つ無いまでに回復したのだ。死に掛けた いや、あれは確かに死んでいたというのに」

振り返る。一体何を言っているのかは良くわからなかったが、何やら一人で考え事をしているようだ。ほっとくのが一番かもしれない。

「あんた、ゲルトを助けてくれたんだろう？ 感謝するよ。正直、あの時はゲルトにまで手が回りそうにもなかったしな」

「……ふん。助けたわけではない。だが もう少し面倒は見てやる。個人的に、少し経過に興味があるのでな」

何だか変な奴だ。考え事の所為か、妙に大人しいし俺のことなど眼中にないと言った様子か。にしても、無傷で勝利してくるとは流石ゲルトというところか。

そういえば、リリアのやつも完全に無傷だったな。あいつは確か秋

斗に少しボコられたはずだったが……。まあ、ご自慢の超回復で治してって事だろうか。

「っかだったら俺も治してくればよかったじゃねえかあの野郎……。まさか、俺が氣絶してるのを見ていたくてわざとかけなかったんだろうか……？」

まあ、そのへんはどうでもいいか。実際大した怪我はないのだから。俺も秋斗も実力は拮抗していた。お互い決め手を出す事が出来なかったのだから、大ダメージは無くて当然だ。

「それじゃ、ゲルトの事は任せていいんだな？」

「ああ。任せよう」

「……拉致るなよ？」

「そんな事はしない。もうそんな必要もないしな」

どういふ心境の変化なのか……。まあ、リリアがゲルトを預けている以上信頼は出来るのかもしれない。リリアはなんというか、そういう洞察力は鋭いからな。

動物的な勘とでもいうのか……。犬力というか。ああ、そういえばこいつも犬呼ばわりされていたか。どうでもいい事を考えながらその場を後にする。

次に向かったのはマルドゥークのところだった。傍にはエアリオ、それにブレイドとメリーベルの姿もあった。俺の姿を見つけると彼らは同時に手を挙げて俺に応えた。

「おー！ ニーチャン無事だったか！」

「お前どこで何やってたんだ、ブレイド？」

「んー？ 魔物と戦ってたけど、ぶっちゃけすげえ乱戦で自分がどこにいるのかもわかんなかったよ。でも、マルニーちゃんに拾われて何とか助かったけどね」

「その、マルというのはどうにかならんのか」

「あらあら？ 可愛いじゃない、マルちゃん」

「姉上！！」

何やらまた一人で熱くなっているマルドゥークを他所に俺はメリーベルの肩を叩いた。どうやらまだ気持ちには沈んでいるようだったが、俺の顔を見てメリーベルは笑ってくれた。

「…………大丈夫か？」

「うん、平気。泣いていても、仕方ないからね。それより…………ありがとう、ナツル。お陰で少し、前に進めると思う」

「そうか」

グリーヴァ・テオドランド…………メリーベルの兄貴を俺は倒したんだ。残念だけでも彼は蘇らない。今度こそ本当にお別れだ。

それはメリーベルにとって特別な意味を持つのだろう。彼女の人生の目標は一つ消えてしまった。俺はそれを補ってあげる事は出来ないし、あとは彼女がどうやって自分の問題を処理していくかだ。

「…………ナツル、後で付き合ってもらいたい所があるんだけど」

「どこだ？」

「……オルヴェンブルムの実家。兄さんの口ぶりでは、多分……」

「多分？」

「うっん、行けば解ると思うから。一人で行くべきなんだろうけど…… 勇気が無くて」

俯き加減にそう呟くメリーベルの頭を撫で、俺は精一杯明るく笑ってみせる。

「大丈夫だよ、一緒についてってやるから」

メリーベルはくすぐったそうに片目を閉じ、それから明るく笑ってくれた。

戦いは終わった。でもそれは一つの戦いが終わったに過ぎなかった。これからやらねばならないことは山積みだ。まだ、終わったわけではない。

未来に起こるであろう『空白の日』……。俺は、俺に出来る事をやらねばならない。リリアと、この世界を救う為に。

たとえその所為で……かつての友達と戦う事になったとしても。仲間たちと話していると、遠くからアクセルが手を振っているのが見えた。どうやら俺がリリアに何も言わずとも問題は解決したらしい。アホ面のアクセルに手を振り替えし、駆け寄る奴とハイタッチをして俺はこの戦いの区切りとした。

ディアノイア劇場出張版（2）

〈ディアノイア劇場主張版（2）〉

キャラクター紹介編その2

ええ、本編じゃありません。本編じゃないのに本編上げするなって？ コツチのほうが見やすいつて人がいるんですよ！ 僕は悪くないもん！！

えーというわけで、本編ではないのでどうでもいい人は読み飛ばしましょう。

今回は敵キャラとか紹介漏れのあったもの中心で。まあ、全員はないますが主要キャラで。

能力未公開、設定未公開キャラクターはまだ後でつてことで。それではれつつごう！

『本城 冬香』

読みは「ほんじょうとうか」。「ふゆか」ではないが、昔は「ふーちゃん」と呼ばれていた。本人は気にして居ない。

夏流の双子の妹であり、明るく微妙に天然な少女。夏流が異世界へ召喚されるきっかけとなった人物。

幼い頃から夏流と常に共にあり、夏流にとっては自分自身にも等しい存在であり、彼女にとってもそうであった。しかし、ある日突然死亡する。

毒による自殺と言う線が濃厚であったものの、他に考えられないというだけで不審な点が多い。夏流は彼女の死に疑問を抱いており、それがこの物語の発端に繋がっている。

過去に夏流に距離を置かれ拒絶された経歴を持ち、離れて暮らしていたものの時々会っては普通に接していた。しかし、内面ではここがズレ始めていた。

リリアに酷似した性格、外見をしており、異世界における自分自身の存在を投影したものがリリアであるとされる。異世界の創造主であり、絶対的な神でもある。

秋斗は彼女を殺したのが異世界の人間であると推測しているが……。

【解説】

後半のキーキャラクターにして前半からちびちび名前は出ていた人夏流の物語を語る上で避けては通れず、異世界を語る上でも欠かせない存在。

リリアと非常に良く似ていると言う設定だが、日本人なら髪の色や目の色があれですね。

あと重要すぎてあんまり解説できないのでやりづらいですね。

『如月 秋斗』

読みは「きさらぎしゅうと」。現実世界出身の十七歳、夏流の幼馴染にして救世主。

世界の全てを記すとされる『ヨトの預言書』を所持し、異世界の裏に蠢く『冬香を殺した滅びを望む者』を探している。

リリアを冬香にし、現実世界に連れ戻り過去をやり直す事が目的であり、異世界がどうなったところでどうでもいいという考えを根本に持つ。

行動や発言に一貫性が無く、ぐらぐらと揺れ動く精神状態は夏流に近いものがある。冬香の死と自分を責める心から非常に不安定になっている。

夏流同様、テオドランドの武装を持ち、銀色の銃と銀色の雷を扱う。夏流の金の武装とは対照的だが、似たような能力を持っている。夏流以上に救世主の力を使いこなし、肩には白いうさを乗せている。旧勇者部隊の面子とも交流があるが、仲間というわけではないらしい。

所謂不良生徒ではあったものの、夏流や冬香とは幼馴染だけあり非常に仲が良かった。しかし今は目的の相違から夏流とは敵対している。

【解説】

主人公のライバル。中盤より登場した事もあり微妙に影は薄い。

登場回数が少ないのは夏流と何度も遭遇すれば決着を付けるのが早まる為。相応しい舞台が来るまでは出番がすくなめ。

過去編や夏流の回想で登場するしかないのは冬香も同じだが、こっちは更に扱いが悪い気もする。

夏流も知らない異世界の真実なども知っている設定だが、そんなに何もかもわかつているのにやっている事が不安定なように若干情緒不安定な性格にしてある。

色々執着が多く、正々堂々しているのかヘタレなのか判らない。

『フェンリル』

通称犬。アンケート不人気ぶっちぎりナンバーワン。本名ルーファウス・ヴァインベルグ。現在二十六歳。

十年前、リリアやゲルトと同年代の頃に魔王大戦に巻き込まれ勇者たちと共に戦った天才。

過去の戦いの結末とゲインに対する仕打ちからクイリアダリアを憎んでいる。同時に国に潜む悪意の根源である大聖堂とも戦いを繰り返している。

広げていた。

強い憎しみを原動力にただ目的もなく復讐を繰り返すだけの日々を送ると同時に身を隠す為に学園の教師としても働いていた。

極度のツンデレでたまにデレてリリアたちを助けるが、基本的にはツンツンしている。恐らくこの物語で一番のツンデレは彼である。

登場人物の中でも図抜けた戦闘能力を持つかつての英雄の一人であり、ゲインより受け継いだ魔法剣の威力は絶大である。

趣味は料理、特技はサバイバル。

【解説】

犬である。他に言うべき事は無いかも知れない。

ゲルトの兄弟子だけありツンデレ。本当はゲルトやリリアが気になるって仕方がないくせに気にならないフリをしている。

嘆く魂の日ではいよいよ自分で犬を名乗らせてみたが、どうでしょう。色々ネタにしやすいくて好きなんです、この人。

『ソウル・ブーストナツコオ』

通称筋肉。全身ムキムキで腹筋を鍛えるのが大好きな二十六歳。断じて言うが、名前を考えたのは作者ではない。

フェンリルと同期であり、彼がゲインの弟子であったのに対しソウルはフェイトの弟子であった。二人の弟子は師匠から性格的なものも継承している。

過去の戦いを引きずるフェンリルとは対照的に前向きで、いつかこの世界が同じような危機に陥った時世界を守る力を育てるために学園教師に立候補した。

まともな戦闘シーンはないが、戦闘力はフェンリルと肩を並べる達人であり、ありとあらゆる武装を使いこなす戦士学科教師でもある。

が、本人は素手志望である。

魔法の才能は皆無であつたが肉弾戦だけであればフェンリルは手も足も出ないほど実力差がある。が、当然フェンリルは魔法を使うので一度も勝利できたことはない。

思い込んだら一直線の性格だが、意外と考えて行動しているキレ者生徒第一の熱血先生である。

尚、毎日筋トレに忙しく授業は気合で理解しろと言つたため人気はあまりない。

【解説】

筋肉筋肉うー！

学園の教師つてロクなのがない。

物凄く強い設定だが、あまり前線に出るシーンがない。ネタにしか見えない。

『アルセリア・バフラム』

ディアノイア学園長にして巨大な鎧の大聖堂騎士。が、その中身は幼女という不思議な組み合わせ。

実年齢不明、正体不明の学園長。基本的に真面目だが、天然なのか時々ツツコンでいいのかツツコンではいけないのかわからないボケをかます。

初期から居るキャラクターであつたが後半に入りようやく活動開始。鎧は実は殆ど中身は空洞で、アルセリアは鎧の中で浮いているような状態である。

あまりにも小さく、外見年齢は10に満たないほど。しかし生身でも恐ろしい怪力を発揮し、顔色一つ変えずに敵を殲滅する冷酷な一面を持つ。

マリシア相手であろうが瞬殺するという反則染みた戦闘力の源は不明。ディアノイア学園長になった経緯も、大聖堂の中での立場も不明である。

ただ一つ確かな事は嘗ての戦争において勇者たちと友好的な関係に会ったこと、そして決戦の日プロミネンスカノンによりパンデモニウムを破壊した張本人であるという事だけである。

趣味はガーデニングとマジック。食の好き嫌が多く、よくフェイトに怒られていた。

【解説】

一昔前にロリ校長ってスレッドあったよね。

夏流が苦戦したナイアーラを瞬殺しちゃったので凄く強いはず。後半のキーキャラクターなので解説しづらいですね！

『グリーヴァ・テオドランド』

メリーベルの兄にして天才錬金術師と言われた男。しかし周囲の期待には応えずメリーベルのことだけを考え続けた。二十二歳。

錬金術の名門、テオドランドの才能を受け継いだ天才であったが、病気がちで家から出られないメリーベルを自由にするために薬を探して旅に出た。

秘薬とされていた魔女化の薬をメリーベルに与えてしまった事を契機に自身の妹への執着と暗い感情に気づき、壊れてしまった。

家を出てからもメリーベルの魔女化を治すための薬を捜し求め、やがて不老不死を求めるようになる。その頃、クイリアダリアから追われているフェンリルや秋斗と出会った。

錬金術だけではなく魔術、呪術、剣術など様々な能力に長けた非常に高い戦闘力を持つ術師ではあったが、不老不死の法を求め魔王に

組し、その後異形の存在となつて夏流に討たれた。
非常に妹思いのいい兄であつたはずが、いつの間にか妹に追われる立場になり、最後には妹が幸せになれることを確信して逝つた。

【解説】

珍しく死者となつた人。数少ないメガネ男子だったのに……まあ、マルがいるからいいか。
メリーベルのお話の重要人物だけど、まだメリーベル話はもうちょっと残っているのである。
不死身つぷりと素早さか、神出鬼没つぷりからゴキブリのようであると言われた男。最後はまともになつて死んだ。
それにしてもこの小説、お兄ちゃんにはまともなやつがない。

『マリア・ウトピシュトナ』

リリアの母親でありクイリアダリア女王。三十一歳。
所謂隠し子としてリリアを生んだのだが、何歳の時に生んだのかはあまり考えたくない。
フェイトにずっと片思いであり、結婚はしていない。子供はフェイトに預ける事になったのでリリアのファミリーネームはライトフィールドだった。

勇者部隊とは常に行動を共にしていたわけではないが、嘗ての戦争では自らも剣を手に取り戦つた。魔王ロギアとは顔見知りであり、幾度と無く刃を交えたライバルでもある。

非常に聡明な人物ではあつたが、大聖堂元老院が政治を牛耳る中、お飾りの女王という立場から出来る事はそう多くはなかった。その境遇を嘆き、せめてもと思ひ剣を手にした。

フェイトは剣や魔法の師匠でもあり、その頃恋に落ちてしまった。

女垂らしのフェイトに振り回されながらも最後まで勇者を愛した。
リリア出産の後、アリアを授かるがフェイトは魔王戦で死亡。アリアを姫として育てる一方、リリアはゲインに預ける事になる。

【解説】

リリアのお母さん。

フェイトは女なら誰にでも手を出してしまうようなどうしようもない駄目男であり、相当世話を焼いたと思われる。

子供の頃からフェイトとアレな事になっていたようだが、誘ったのはマリアの方からである。フェイトは断らなかっただけで。

リリアを生んだ歳の事もあり、当時は女王ではなく姫であったという立場もあり、リリアは手放さないわけにはいかなかった。

ゲインの妻でありゲルトの母親とは親友であり、ゲルトの事は娘のように思っていたようです。

リリア「……お父さん、何やってんだろホント」

ゲルト「……」

リリア「えっと、リリアは今度十六歳になるのでえ……。マリア様が三十一歳ってことは……」

ゲルト「駄目です!! それ以上考えてはっ!!」

リリア「……あ、でも逆に考えれば既にリリアも子供産んでもOKって事ですか?」

ゲルト「………………。」

約束の日（１）

リリアと別れたのは、リア・テイル城門前で的事だった。

何故か一向に目覚める気配が無く、すやすや寝息を立てながら涎を垂らすゲルトを背負い、リリアは城の中に姿を消した。

別れたのが城門前とは言ったものの、結局あの時リリアが草原を歩いて行く背中を見送ったきり、彼女と言葉を交わすシーンはなかった。

当然の事だろう。相手は女王なのだから。いや、それを言えば俺は救世主のはず……。まあ、これといってリリアと話す事も無かったし良いのだが。

「ちよつとちよつとおっ！？ 何であたしだけ仲間はずれなわけっ！？ イジメ！？ これイジメ！？」

というのは、戻ってきた俺たちに対するベルヴェールの発言だ。そんなん知るかとしか言い様がないのだが……。

問題はここからだ。オルヴェンブルムから列車でシャングリラに戻ろうと進んでいると、何やらありえない景色が見えてきたではないか。ラ・フィリアとかいう巨大な塔が傾き、砲台に成っていたのだ。

プロミネンスカノン その名前を知ったのは、俺たちが慌ててアイオンたちに会いに行った時の事だ。何故かその場に見知らぬ小さい女の子が居たので外に放り出すと、しばらくするとアルセリアが相変わらずでかい図体で入ってきた。

説明によると、このディアノイアに眠る真の力こそプロミネンスカノン。所謂超広域破壊用大魔法放出砲台であるらしい事が判明した。

解った事といえばそれくらいで、後の事は良く判らないままだ。兎に角戻ったばかりで疲れていた俺たちは一度解散となり、学園もその日の内に元通りの姿へと戻っていった。

物理的に変形がどうもおかしいとは思えないのだが、まあ実際にちゃってるんだからしょうがない。学園の変形には呆れるしかないが、まあ今はなんでもいい。

仲間たちの手前強がってはいたものの、秋斗は尋常な強さではなかった。正面から殴りあう事になり、そもそもその前に俺はグリーンヴァと戦っていたわけで……。当然、ダメージも疲労も大きかった。丸一日学園の寮で休み、一日ぼけーっと過ごした翌日。見覚えのある顔が俺の部屋の中にあった。

「へえ、ここがナツルの部屋か！　そっいや、お前の部屋に入るの初めてだな」

「貧相な部屋ね……。家具も何にも無いし。ほんとにここで生活してるの？」

「五月蠅いな……。余計なお世話だ。嫌なら帰れ」

ベッドの上に腰掛けたまま溜息を漏らす俺。部屋の中では何故かベルヴェールとアクセルがうるうるしていた。

一体何をしに来たのか……。まあ、話があるから訪問してきたのだろうが、だったらさっさと本題に入れと言いたい。

「大聖堂の今後の処遇について決まったから、一応報告しとこうと思っでさ」

女王　リリア・ウトピシュトナは大聖堂の生き残りを快く迎え入れると言う。元老院の人間も含め、全てを許すと彼女は言った。

とはいえリリアは正に鋼鉄の乙女となりつつあった。反乱をたくらむ人間には容赦しない。 。 実際、聖堂騎士の一人が彼女に襲い掛かったらしいのだが、リリアは素手でそれを組み伏せ、倒れた騎士の頭を踏みつけながら宣言したという。

「共に生きる意志のある者は受け入れましょう。しかし、平和を乱す存在は斬って捨てます。 ってな。 あれは本気の目だった……。 リリアちゃん、いつのまにかおつかねえ女の子になっちまったな」

「そうか？ 元々キレると何するかわからんやつだったろ、あいつ」

「まあそんなわけで、逆らう者には多少強引なやり方でも従わせる方針らしい。 まあ、そうまでしなきゃならないだけの理由があるんだけどな」

大聖堂の連中は、皆神の存在に魅入られている。 それは正当なヨト信仰だけではなく、歪んだ願いや心の傷も神の言葉で許しを得ていたらしい。

十年前の戦争で心に傷を負い、様々な物を人々は失った。 その心の穴を埋めるために信じていた在りし日の大聖堂を失い、彼らは完全に放心状態だという。 中には希望を見失い、自ら死を選ぶ者も少なくない。

「元々、戦争で傷ついて一人じゃ歩けなくなつた連中が集まった組織だからな。 皆どうしたらいいのかわかんねえのさ……。 これから的人生、何に縋って生きていけばいいのか、な」

なんとも言えない後味の悪さが残る結果となつたが、とりあえず女王は大聖堂を取り込む事に成功した事になる。 クイリアダリアの内乱そのものは一応の落ち着きを見せたと言えるだろう。

だが課題はこれからも多く残り続ける。人々の心の傷を癒し、リリアが神の代わりに彼らが信じられる存在にならねば意味はないのだから。

「あゝそうそう、ディアノイアにも大聖堂の子供たちを受け入れる事になったのよ。大聖堂にはなんていうか……暗殺者見習いみたいな子が沢山いるのよね」

その話はアクセルにも聞いている。大聖堂は戦争孤児。その存在が世界の中で希薄になっていった者を使い、暗殺者を生み出そうとしていた。聖堂騎士も同様である。子供であるのに戦う事以外を教えてこられなかった子供たちを受け入れる先は、確かにディアノイアを置いて他にないだろう。

ディアノイアでならば、正しい力の使い道を知る事が出来る。魔物や敵意を持つ存在から人々を守る事が出来れば、世界の安定につながり同時に彼らも一人で生活していけるようになるだろう。力はただ力だ。正しい使い方さえ解れば、彼らの過去は無駄になったりなんかしない。

「お陰で武器やら防具やら、生活必需品やらの納入で物凄く忙しいのよ、パパの財閥……！ 信じられる？ あたしその準備と手伝いずっつと続けてたのよ？」

「ああ、それで近頃見なかったのか　　って、じゃありリアはずっと前からその積みりだったのか？」

「そうみたいね。あの子大したもんよ……。ま、あたしは努力が無駄になんなかったから良いんだけどね。準備を前もって進めていたお陰で受け入れは順調、文句なしの進行具合よ」

そう言つて苦笑するベルヴェール。こいつも両親の手伝いで忙しかつたんだな。コンコルディア財閥　たしか、嘗ての勇者部隊を支えたスポンサーでもあつたはずだが。

「洗脳が行き届いて居ない子はまだいいんだけど、完全に大聖堂の思想に染まつている子は受け入れには時間がかかりそうよ。問題はまだ山積みね」

「……………時間がかかっても、なんとかするさ！　俺たちにはまだ、未来があるんだ。リリアちゃんならそれを信じられる。少しずつ……皆にわかつてもらうさ」

そう言つてアクセルは強く頷いた。俺とベルヴェールは同時に顔を見合わせ、それから笑う。

「ああ、そうだな。がんばれよアクセル。手伝える事があれば何でも言つてくれ」

「そうよアクセル！　ナツルはあたしと違ってぜんぜん働いてないんだからっ！！　もうガンガンこき使いなさい！」

「おい、俺だつて結構戦つたり戦つたりしてるんだぞ？」

アクセルは特に複雑な心境だろう。だが、これからも前向きに生きていこうとしている。それは皆で応援しなきゃならない。もう、あんな悲劇は起こさないように。

「あ、そうだ。ナツル、ヴァルカンの爺さんが呼んでたぞ？　何でもお前に用があるとか」

「ヴァルカン爺さんが？　ディアノイアか？」

「いや、今度はオルヴェンブルムだってさ。丁度リリアもお前に話したい事があるらしいから、リア・テイルで待ってるらしい」

何で爺さんがオルヴェンブルムで俺を待つんだ？　まあ、リリアの話というのも気になるし、メリーベルとの約束もある。どちらにせよオルヴェンブルムに向かうのだから、ついでに会って行くか。

「俺とメリーベルはこっちに残るよ。俺が居ればガキ連中も安心して学園に入れるだろうしな」

「……あたし、仕事が山積みなんだけど」

「頑張れよ、コンコルディア財閥次期当主」

「……なんかあなたにそういわれると無性に腹立つわね」

そんな事を言いながら俺を睨みつけるベルヴェール。まあそれはそれで……平和で良い事じゃあないか。

約束の日（１）

「　　っ！？」

目を覚ましたゲルトが一番見たのは窓辺に立つフェンリルの姿だった。

混乱する頭を抱えながらフェンリルを指差し首を傾げるゲルト。そ

のゲルトに歩み寄り、フェンリルは腕を組み溜息を漏らしながら言った。

「……君は相変わらず無茶ばかりするようですね、ゲルト」

「ルーファウ。フェンリル」

「ふん。まあ、好きな呼び方で構わないがな。具合はどうだ？」

「へっ？ 具合っ？」

フェンリルの長い腕がゲルトの頭を掴む。そうして額を覆う前髪をかきあげるとゲルトは顔を真っ赤にしてじただけ暴れ出した。

「何をするんですか!？」

「ガキの頃は良く面倒見てやったのに恩知らずなやつだな」

「ああああ、貴方がそれを言うんですかっ!？」

飛び起きて魔剣を手にしようとしたゲルトであつたが魔剣は見当たらない。慌てて周囲をきよきよ見渡していると、気づけば既に魔剣はフェンリルの手の中に納まっていた。

何やら過去の嫌な思い出が頭の中で再び再生され、ゲルトは涙目になりながらフェンリルに跳びかかる。しかしフェンリルはあっさりとゲルトの特攻を回避し、少女は無様に床の上にへたりこんだ。

「少し落ち着け。一度死んで蘇ったばかりだというのに張り切りすぎだ、阿呆」

「ぐぬぬ……！　って　蘇った？」

その言葉を耳にした瞬間ゲルトは自分の身に何が起きたのかを思い出した。ジルベストリとの戦いの中、身体に力が入らなくなり、突然寒気が襲ってきて強制的に意識が途切れてしまった事を。

それをゲルトは気絶したのだと思っていた。だがしかし、少しだけ気絶とは違った気がした。あれはそう、もっと寒くて　もっと寂しい感覚。

思い返すと背筋がぞくりと震えた。そうして冷や汗を流しているゲルトをフェンリルは抱きかかえ、ベッドの上に放り投げる。

「だから、大人しくしているとやっている」

「あ、貴方はどうしてそれを……？」

「　覚えて居ないか。まあ、オレが駆けつけたのはお前がくたばった後だったからな。無理も無い」

「　……助けに来てくれたんですか？」

「結果的にはそうなる」

「……………」

二人の間に沈黙が流れた。ゲルトは目を細め、複雑な表情でフェンリルを見詰めていた。かつてゲインを失い孤独の中でただ力だけを求めていたゲルトの傍に居てくれたたった一人の人物　。兄のよくな存在であるルーファウスこそが黒き猟犬の正体であったのだから、それも無理はない。

ゲルトに剣術を仕込んだのも魔法を仕込んだのも全てはフェンリルであった。ゲインは死に、ゲルトは父の力を直々に受け継ぐ事は敵わなかった。故に父の弟子であったフェンリルに教えを乞うのは至極自然な流れであった。

フェンリルはゲインに様々な事を教えてくれた。世界を憎んでいたゲルトは彼に甘える事はなかったが、常に傍で見守ってくれている存在として認めていた以上、それは頼っていた事に他ならない。

「……助けて、くれたんですね。ありがとうございます」

「……………。それより今はお前の体だ。ゲルト、お前は確かに一度死んで蘇った……。異常はないか？」

「死んで、蘇ったって……そんな当たり前のように前提されても困ります。死者を蘇らせるなど、それこそ魔王の秘術、死術ネクロマンシーくらいのものでしょうし」

しかし、死術は発動しても完全に人間を蘇らせるわけではない。その人間の魂を術者の魔力で拘束し、朽ちた肉体に再び強制的に宿すだけの呪文である。死術により復活した存在は術者からの魔力供給に命を任せ、その身は死したまま活動し続けることになる。

ゲルトは自らの胸に手を当てる。心臓は確かに鼓動を刻み続けている。生きている。体温も暖かい。そう、間違いなく生きている。死術では死者は蘇らない。回復魔法でも一度命が尽きた存在を蘇らせる事は出来ない。死者の蘇生などそれこそ神の奇跡でも起きぬ限り絶対にありえないのである。

「だが、お前は死んだ。オレは確認したからな」

「……。それが事実なら、わたしは一体……！？ え、なっ！？

これはっ!？」

自らの異変に気づいたのはその直後であつた。身体を蝕んでいた呪いがその息を潜めているのである。魔力を込め、あえて呪いが暴れまわるように力を与えてみせる。すると身体に呪いの模様が浮かび上がった物の、傷みも負担もなくなった呪いの力だけが発現した。

ベッドから飛び起きたゲルトは自らの指先を噛み切り、血の雫を零す。それは紅い絨毯にしみこむよりも早く空中で霧散し、光となつてゲルトの掌の上で紅い結晶を成した。

「……力が」

ジルベストリ戦でゲルトは呪いの力を戦闘に流用する事に成功した。それは無意識のことであり、彼女はそれを狙つて行つたわけではなかった。

しかし今、自らの意思で呪いをコントロールし、更にはその力さえも自在に扱う事が出来たのである。指先に魔力を込め、傷口から流れる血を固めて傷を塞ぐ。自らの異様な力にゲルトは思わず息を呑んだ。

「リリアから話は聞いている。お前が目覚めたら、これを渡すようにと言つていたな」

フェンリルがゲルトに投げ渡したのはワインボトルだった。それを受け取り、蓋を開けた瞬間気づいた。その中身はなみなみと満たされた血液であると。

その血の匂いを嗅いだ瞬間、頭の中で何かが切れてしまったかのような気がした。一気に呷って飲み干してしまいたい。そんな激しい衝動を抑え、ごくりと生唾を飲み込む。

「別に気にする必要はないぞ。お前の症状は聞いている。リリアが特殊な容器　魔力を外に逃さないボトルを作ったらしい。中身もあいつの血液だ。純度としては夏流には劣るが、それだけの量があれば十分だろう」

フェンリルの話を最後まで聞き届けるよりも早くゲルトは貪るように血を一気に飲み干していた。その味はこの世にあるどんな美酒よりも勝るように感じられる。ただひたすら血を貪り、飲み干した後はその余韻に浸った。

暫くぼんやりと濃厚な味わいに浸っていたが、直ぐにリリアの血を飲んでしまった事を思い出し、真っ青になる。それからリリアの血を飲むと言っ行為そのものを思い返して顔が真っ赤になり、一気に噎せ返った。

「お前、何だか見ていて面白いな」

「よ、余計なお世話です……！　り、リリアの血……。リリアの血を……うつつ」

「頭を抱えて悶えている場合ではないぞ。兎に角一度死んで蘇ったとはいえ異常があるかも知れん。早めに検査を受けるべきだ」

「……い、いえ。多分、大丈夫だと思います。それよりも……わたしが蘇った理由について何か心当たりはないのですか？」

ゲルトの問い掛けにフェンリルが思い返したのはリリアが放った光の術であった。

白い翼を広げ、神々しい輝きと共に空を切り裂いて光を集めたりリア。その膨大な魔力がゲルトに流れ込んだ次の瞬間、ゲルトは死者から生者へと流転していた。

原因があるとすれば、考えられるのはあのリリアの大魔法。しかしあんな魔法は存在しない。リリアの魔法のルーツは学園でフェンリルが教えたものと授業で伝授されていたもの、更には勇者秘伝の書。フェイトが残した書物にあるものだけのはず。

しかしあれはどの魔法とも異なる、何かもつと高位の行いであった。魔法。その呼び方さえ適切ではないのかも知れない。『奇跡』とでも呼べばいいのか。なんにせよ、人の身には余る偉業である。

「あ、あの土壇場だったからな。原因までは検討が付かない」

咄嗟にフェンリルは嘘をついた。しかしゲルトは当然のようにそれを信じた。まさか、奇跡の理由になど彼女も思い当たる事はなかったのだらう。

男は腕を組み、溜息を漏らす。この事は誰かに広めるべきではないと考えた。だが、リリアには問い詰めねばならないだらう。その力は余りにも。人の領分を逸脱しすぎている。

「お前がなんともないのであれば俺はもう行くぞ。ここにいる理由もない」

背を向けて歩き出すフェンリル。その姿を見てゲルトは慌てて呼び止めた。

「待ってください!」

「何か用か?」

「あの……その」

歯切り悪く言葉を詰まらせ俯くゲルト。しかし意を決し、顔を上げ

てフェンリルに叫んだ。

「わたしに、戦闘を指南してくれませんか!？」

「はっ？」

「はあ。何度来ても気が重いな、この城は」

「そうばやくな。貴様も救世主なら、いい加減慣れるべきだろう」

「救世主……ねえ」

聖都オルヴェンブルム、リア・テイル城内。謁見の間へと続く長い長い回廊を俺はマルドゥークと肩を並べて歩いていった。

今日は女性が同行していないので、女性云々うだうだ言われる事はなかった。本当にありがたい。

さて、俺はただ爺さんに会いに来ただけなのだが、その爺さんがリアと話しこんでいるらしいので俺も来いと城に着くなり呼ばれてしまったのである。マルドゥークも忙しい立場だろうに、こんな下っ端みたいな仕事させられてかわいそうに。

謁見の間に入ると広々としたスペースの奥、ちょこんとリアと爺さんだけが並んでいる。二人は俺の姿を認めると何やら元気よく手を振っていた。なんとという血筋……。

「よぉーぼっず！ 良く来たなあ！」

「爺さん、ここ謁見の間な。それとあんたの城じゃないからここ」

「孫が女王なんだから俺は超王みてえなもんじゃねえのか」

勝手に役職増やさないでくれ。

爺さんのはた迷惑な元氣さに溜息を漏らしているとリリアは昔と変わらない子供っぽい笑顔で俺を迎えてくれた。何だかんだでこうしてリリアと会うのも例の戦闘以来。まともに会うのは大分久しぶりになる。

「急に呼び出しちゃってごめんなさい、夏流」

「いや、どうせ暇人だからな。それより爺さん、ここで話があるってことは……」

「ああ。今後の対魔王戦について話があるんだよ。まあここで立ち話もなんだし、客間に移動しようぜ」

「……それは賛成だが、だからリリアの許可を……いででっ！？」

「ごちゃごちゃ言っ
てねーで行くぞ！
おら、
付いて来いリリア！」

ジジイは俺の頭を鷲づかみにするとずるずると引き摺って強制的に客間に連れて行く。というか　どんな怪力だこいつ。　つーか手え
デケエツ！？

じんじん痛む頭を抑えながら客間の円卓に着く。それにしてもどこ行ってもアホほど広いため、少人数で会話しているのになんだか落ち着かない。

「回りくどいのは苦手だからサクッと本題に入るぞ。魔王の城パンデモニウムが機動し続けている限り、正直こちらの勝ち目は薄い」

それは俺も考えていた事だった。パンデモニウムは現在でも活動を

続けており、北方大陸を中心に移動を続けている。

プロミネンスカノン とかいったか。あの超砲台も、遠距離であれば遠距離であるほど照準を合わせるのは難しいという。まあ当然だな。離れていれば僅かな誤差でまるで見当違いの方向に攻撃が着弾しかねない。

パンデモニウムそのものが移動し続けているのはプロミネンスカノン対策でもあるのだろうか、それ以前に根本的に移動要塞としての能力が非常に優れている。なにせ、こっちは空を飛んでいるパンデモニウムに攻撃する有効的な手段が存在しないのだから。

「パンデモニウムそのものに武装はないが、無限とも思えるあの魔物の軍隊を引き連れてくる。あらゆる要塞、都市、何でもかんでもやつらは先手を撃つ事が出来る上に拠点から増援は出し放題……。一箇所ずつ確実にこちらの拠点を潰してくるだろうな。そして有効な反撃手段は存在しねえ」

「つまり、長期戦になればなるほどクイリアダリアは消耗する。そういうことだろ？」

「話が早くて助かるぜ。つまり、パンデモニウム相手にこつちがちまちま準備するだの軍を纏めるだのしている時間はねえってことだ。先手必勝、まずはパンデモニウムを撃墜する事が先決だ」

そりゃあそうなんだろうが その方法がないから困ってるんじゃないか。こっちは空飛ぶ乗り物なんかねえし、パンデモニウムがどこを移動しているのかもわからないんだ。戦いようがない。

「確かに短期決戦は俺も賛成だが、それはこっちに同じ空飛ぶ城でもない限りは無理だろ」

「その、空飛ぶ城があるといったらどうする？」

……何となく嫌な予感はしてたんだよ。まあ、そうだよな。そうでなきゃわざわざそんな話はしないよな……。

しかも、空飛ぶ『城』だと？ そんなもん、飛ぶとしたら いや、まさかな。まさかだろ？」

「この城、リア・テイルには変形機能が存在する。大型飛行艦に変形するシステムがな」

「やっぱりかよ！ この世界の建造物はどーなってたんだよっ！？」

「ディアノイア然り、パンデモニウム然り、これらは過去の時代神々が存在していたといわれる時代より人間に受け継がれた神器だ。ディアノイア、リア・テイル、パンデモニウム……。どれも変形能力を持つ大型要塞であり、その中でも飛行能力を持つのはパンデモニウムとリア・テイルのみ。それぞれの国の王は古代兵器でもある要塞を今でも操る力を持っている」

どうやらそのリア・テイルを操る資格というのがそのまま女王の資格になっていいるらしい。リア・テイルの奏者の資格はそれぞれのリアを受け継ぐ者 つまり、女王の血筋にあるらしい。これが女王の血筋に大聖堂が拘っていた理由でもある。

「リア・テイルはパンデモニウムと同じ強大な力を持つ古代兵器だ。大聖堂はそれを操るためにもリアの血筋を狙っていたわけだ」

「……今となつては大聖堂の事はどうでもいいがな。つまり、俺たちにはリリアがいる。リリアならばリア・テイルを変形させる事が出来る そうなんだな？」

「変形したリア・テイルならば広域レーダーでパンデモニウムを発見するのも容易いだろう。それに乗り付ければ白兵戦闘に持ち込む事も可能だ。だがしかしここで問題が二つ」

「……一つは、リリアがまだリア・テイルを操る方法をわかってないって事。もう一つは、破壊されたリア・テイルのコアを修復しなければならぬって事なの」

俺たちの会話に割り込み、リリアが告げる。まあそりゃそうだろう、リリアがリア・テイルを普通に飛ばせたらびつくりだ。アイオーンのような複雑な操作が必要になるのだろうし、当然練習が必要だ。リリアが操る飛行艦に乗り込むのだから、それこそ墜落でもしたらクイリアダリア終焉の日が訪れるだろう……。それだけはなんとか避けなければならない。

まあ、リア・テイルについてはリリアに任せるしかない。となると俺がここに呼び出された理由は残りのもう一つの方。

「リア・テイルコアを修復する為には現代の技術じゃ足りない上に、古代の素材が必要になる。そのコア修復をお前に任せたいんだが……いいか？」

「ああ。リリアに全部押し付けるわけにはいかないだろ。俺にやらせてくれ。何を集めればいい？」

騎士団じゃなくて俺に任せるって事は何かワケアリなんだろう。リリアは俺の言葉に嬉しそうに目をきらきら輝かせている……。あんまり期待されると困るんだがな……。

「集める素材については後で詳しい情報を記した書類を持たせる。

技術者に関しては　太古、神の時代から生きているやつに手を借りるしかねえな」

「アイオーンはどうなんだ？　ディアノイアの管理者なんだろ？」

「それはそうなんだが、基本的にそれぞれの要塞の管理ユニットにしか修理は不可能なんだよ。なんで、お前にはこの要塞　リア・テイルの管理ユニットをつれてきて欲しい」

そう言つてヴァルカンが俺に手渡したのはある人物の似顔絵だった。俺はそれを見て爺さんの絵心とその人物に見覚えがある事と、二つの事に同時に驚いた。

「リア・テイル管理ユニット、通称『ミッドナイト白夜華蓮』　。見覚えあるだろ？　こいつはお前にしか付いてこないし、お前のいう事しか聞かない。多分　な」

そこに映し出されていたのは和装の少女　。いつだったか、リア奪還の為に北方大陸に向かった俺たちが発掘した、白い機械人形だった。

約束の日(1)(後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

大変なことになってきた

リリア「は、お茶が美味しいよ」

ゲルト「何を飲んでいるんですか？」

リリア「え？ 梅昆布茶」

ゲルト「……なんという渋いチョイス」

アクセル「たたた、大変だっ！っ！」

リリア「うつさいよう！ 人がお茶飲んだときくらい静かにしなよ、ばかあっ！」

アクセル「熱ウツ！？ お茶をぶっかけるならまだしも、お湯沸かしたやかんからダイレクトに熱湯かけるとか悪意しか感じられねえ！」

ゲルト「それで、何が大変なんですか？」

アクセル「俺の皮膚が火傷で大変だけど……。ああ、そうそう。虚幻のデイアノイア……。なんか予定よりもちょっと続くかもしれない」

リリア&ゲルト「な、なんだってーっ!？」

ゲルト「……って、それもう聞きましたけど。110部くらいですよね?」

アクセル「いやあ……下手すると130くらい行くかもしれない」

リリア「ちょ……続きすぎ」

ゲルト「何でそんなに計算狂っちゃったんですか?」

アクセル「いやあ……。何か思っていた以上に話が進まないというか、戦いに時間かけすぎたというか……。まあ、VS魔王編はあと十話しないで終わると思うんだけどさ」

ゲルト「そっからそんなに長いんですか!？」

アクセル「拾ってない伏線いっぱいあるしなあ……。でもそうなるかと2、3ヶ月書かないと終わらないな」

リリア「いや、それでも連載ペース滅茶苦茶速くない?」

アクセル「あんまり何も考えずにプロットもなくテキト〜に書いてるからな」

ゲルト「それわざわざ言わなくてもいいのに……」

アクセル「あ、そうだ。もしかしたらディアノイアTRPG化するかもしれないから」

リリア「ふーん……ってえ、何か一部の人にしか判らないような事をまたサラっと……」

ゲルト「えーと、また来週……」

約束の日（2）

「はああああっ！！」

リア・テイル内部にある演習場にゲルトの声が響き渡る。土の大地を蹴り、騎士はマントをはためかせながら大剣を振り被った。体重を乗せるように振り下ろした魔剣は大地を目標を空振り、大地を打ち付ける。避けられた。しかし、それでいい。

大地に命中した刀身は影から無数の黒い刃を出現させ、目標へと迫る。しかし対峙する男は剣を素早く振り回し、その全てを切り伏せていた。

「どうした？　こんなものか」

「く……っ！」

「格上相手に防御に回ったら積むぞ。今は攻撃を続けるべきだったな」

ゲルトが一瞬後退したのを合図にフェンリルは駆け出した。片手で繰り出される剣戟の嵐を大剣で防ぎ、なんとか対応して行く。

「そもそも、その巨大すぎる剣は懷で打ち合うには向いて居ない。リーチを意識しろ。普通の剣と同じように振るうのではただの剣と変わらん」

空いている片手で魔法を練り、それを大剣に叩き付ける。衝撃は剣をゲルトの腕ごと弾き上げ、ガードは完全に崩されてしまった。防御不能の状態にロングソードが迫る。その一撃を魔力解放でフェ

ンリルごと吹き飛ばし、ゲルトは宙を舞う大剣を受け止めて旋回する。

「間合いを詰められたら弾き返すことを意識するのは正解だ。だが一々そうやって力を大量に放出するのでは直ぐに底を尽きるぞ」

「……言われずとも解っています！ 次はもう、近づかせません！」

フェンリルを睨み剣を構えるゲルト。正直な所を言えば、あの太剣はゲルトが持つには大きすぎる。フェンリルは剣を構えながら心の中で溜息を漏らした。

ゲルトはそもそもパワータイプの騎士ではない。どちらかといえば小技などを挟み、必殺の一撃を狙って行くテクニカルタイプである。あれだけ巨大な魔剣、対人では持て余してしまうだろう。

相手が魔物である事が当然であり、自分より巨大な相手を倒す為に魔剣を必要としたゲインの世代とは用途が異なるのだ。勿論、マリシアのようなバケモノを相手にする場合や魔物を討伐する時に魔剣の巨大さは役立つだろう。普通の剣では押し折られて終わりである。だが、こと人間と戦う事においては不向きである事は確かだった。

ゲインの力を継いでいるフェンリルでさえ、好き好んであのような魔剣を使いたいとは思わない。使いこなす事は不可能ではないが

どちらかと言えばただの刀剣の類で充分である戦闘が多いのだから。

特にこのように一対一の白兵戦闘において、ゲルトの持つ魔剣はあまり役に立つとは言えない。効果はある。だが皮肉にも相性が悪いのである。

片手で剣を構え、ゲルトはフェンリルに迫る。その剣をロングソードで受け止め、フェンリルは至近距離でゲルトと視線を合わせた。

「……止めた、ゲルト。問題点は見えてきた」

「……問題点、ですか？」

無理をして頑張っていたのか、ゲルトは剣を下ろしたとたんに呼吸を乱しながら顔を上げた。無理も無いことである。もう何時間も模擬戦を続けていたのだから。

確かにただの模擬戦闘でも効果はあるだろう。フェンリルほどの実力者と戦う事は一分一秒単位で力を成長させていく。だが同様に疲労も蓄積するのだ。動きは後半に入り、雑になっていった。

「お前の問題点は二点。まず、剣より魔法の方が得意なくせに魔法をあまり使おうとしない。次にスタミナ不足……。尤も、スタミナ温存の為に大掛かりな魔法は温存しているのだろうがな」

「流石に、良く見ている……。その通り、ですね。それに大して貴方は自在に魔法を操り、疲れる様子も無い……」

「当然だ。オレの得物は軽いからな。その辺の武器屋で売っているような安物のロングソードだ。持ってみろ」

ゲルトに剣を渡すフェンリル。少女は大地に魔剣を突き刺し、ロングソードを振るう。

「軽いですね」

「だろうな」

「……軽いですね」

「ああ」

二人の間にしばしの沈黙が続いた。そうしてフェンリルは剣を受け取り、鞘に収めて告げた。

「つまり、簡単に要約すると、お前にその大剣は向いてない」

「……………」

「つまり、お前に勇者は向いてない。残念だったな、ゲルト」

「……………そ……………っ！ そんな……………ハッキリ言わなくても……………いいのに……………」

ゲルトはその場に膝を着いて倒れた。落ち込んだ様子でがっくりと沈み、一人でぶつぶつ何かを呟いている。

「冷静に考えても見る。先代の勇者は両方男だったからこそその大剣だ。マリアはそんなデカブツ振り回してはいなかったぞ。まあ、リリアの方はあからさまなパワー特化の前衛タイプだからこの剣でも充分使いこなせるんだろうが……………お前は剣に振り回されている力ンジだな」

「はうつ！？」

「リリアは天才的にデカブツを使いこなすセンスがある。体ごと回転して敵を叩き切る動作とかは誰かに教えられたわけではなく、小柄な肉体でパワーを発揮するために本能的に悟ったんだろうな。リリアは大剣の一番のメリットである攻撃範囲、破壊力を充分活用している。が、お前は確か……………大剣で突き在必殺だったな。それが悪いとは言わんが、その剣は重さと破壊力で敵を両断する為のもので

あつて、刺すだけなら剣でも槍でも変わらんぞ」

「はっはっはっ……っ」

「つまり、お前にゲインと同じバトルスタイルは無理だ。お前はどちらかというと剣より魔術の才能の方があるんだからな。勇者は止めて魔術師にでもなったらどうだ」

最早ゲルトは反応しなかった。うつ伏せに大地に倒れ、しくしく涙を流していた。フェンリルがそれを見下ろしながら腕を組んでいると、遠くから鋭い殺気が迫ってきた。

「フェンリル……ッ！！ ゲルトちゃんをいじめたなああああッ！！」

「ッ！？」

背後から走ってきたリリアが空中を縦に回転しつつ神剣をフェンリルに叩き付ける。防御に使用した剣が一撃で碎け、フェンリルは土の大地に両足を減り込ませた。

「もう少し手加減して教えてあげてよッ！！ ゲルトちゃんは繊細な女の子なんだからッ！！ ちよつとしたことですぐへこたれちゃうんだよ！？」

「……ゲルト、見ての通りだ。大剣はああやって使うもんだ」

「うわああああああんッ！！ リリアちゃんの……リリアちゃんの、ばああああああッ！！」

「え！？ 何で！？ ちょ、げ、ゲルトちゃん！？」

泣きながら走り去って行くゲルトを見送りフェンリルは溜息を漏らした後、腕を組んだまま口から血を吐いて倒れた。

「え！？ 平気だったんじゃないの！？」

「平気なわけあるか、馬鹿が……。そんな火力で背後から斬りかかって来る……な……」

「き、気絶しちゃった……。お、おい、犬く！ やーいやーい、犬！ 犬犬！ 犬く……きゃあっ！？」

リアの足首を掴み、起き上がったフェンリルが首をこきこき鳴らしながらリアを見下ろす。上下逆様にぶら下がったリアはしばらくジタバタもがいていたが、フェンリルが壁に投げつけると一撃で気絶してしまった。

「……犬ではない、フェンリルだ」

口元の血を拭い、回復魔法をかける。男は大きく溜息を漏らし、大地に突き刺さった白と黒の剣を眺めていた。

約束の日（2）

「……で、何でこっいつ面子になるんだ？」

パンデモニウムとの決戦の為に、リア・テイルを空に飛ばす必要が

ある俺たちであつたが、リア・テイルのコアと呼ばれるものが破損しているらしく、リア・テイルを操る事は出来ない状態だった。

リア・テイルを動かすリリア本人は城の中で操縦をお勉強中であるとして、俺は数名の仲間を連れてリア・テイルのコア修復の為に素材集めをする事になっていた。今日はその集合の日で、リリアが俺の為に付き添いのメンバーを選抜してくれるはずだったのだが……。オルヴェンブルムの城門前で俺を待っていたのは涙目のゲルトだった。何やら鬼気迫る雰囲気である。その背後には腕を組んで立つフエンリル　ルーファウス先生が立っており、その隣ではリリアとアクセルが話しこんでいた。

「あ、夏流さん！　こつちこつち！」

お手をぶんぶん振り回して俺を呼ぶ女王様。なんだかなあ……。とりあえずゲルトとフエンリルには異様に話しかけづらいので、リリアの方に向かう。とりあえず今回集めるべき物とか話も聞かないとだしな。

「おはよう夏流さん。はい、じゃあこれ、女王様命令の伝令書です！　そこに必要な詳しいものは書いてあるから宜しくですよー」

「お、おう……。それでまさか、今回俺と一緒に行動するのは……？」

「うん、ゲルトちゃんとフエンリルだね！」

俺は笑顔で頷き、それからリリアの首根っ子を掴んで門の影に引っ張り込む。リリアは目を丸くして首を傾げていたのだが、その『なにかあつたんですか？』みたいな顔はやめろ。無性に腹が立つ。

「お前、ゲルトとフェンリルってどういう組み合わせだよ。明らかに人選ミスだろ」

「でも、今は二人は師弟関係に戻ったんだよ？ フェンリルに鍛えてもらってるんだって。あとこれリリアの人選じゃなくてフェンリルが自ら志願してきたんだもん」

「フェンリルが、自ら……？ じゃ、じゃあゲルトはなんで泣いてるんだ？ この人選に不満があっていじけてるんじゃないのか？」

「あれは色々あって、なんかへこたれちゃったっていうか……」

その色々ってのが怖いんだろうが。わかってくださーい。

「とにかく、二人ともついでに一緒に行くらしいから。あ、詳しい話はフェンリルが知ってるから彼から聞いてね。あと何かあったらゲルトちゃんを守ってあげてね」

そんなことをほざくりリアと一緒に皆の所に戻る。相変わらずなんとも息苦しい雰囲気だ。

「アクセルは何してんだよ？ お前も一緒に行くのか？」

「いんや、俺は俺で別任務だ。ちょっと北方大陸の方に情報収集にな。今世界各地で色々変わった事が起きているらしいから まあ、情報が纏まったら後で話すよ」

そうしてもらったほうがいいだろう。素人の俺には錯綜する情報や混乱した情勢を見極められない。アクセルは確かに適任だ。こういう活動に関してはプロだし。

そんな話をしながらアクセルと別れる。アクセルは風でふわりと浮かび上がり、屋根から屋根へと器用に渡っていく。うん、適任だな。

「こんな所に！ 陛下、自重してください！ まだやる事は山積み、リア・テイルのメロディも覚えてもらわねばならないのですからっ！」

「う！？ マルさん……！？ あにゃあ！！」

扉を開けて城から出てきたマルドゥークがリアの首根っ子を掴んで引き摺って行く。俺は腕を組み、黙ってそれを見送った。

「マルドゥーク……苦勞してそうだな」

振り返れば重い空気の二人……。だが、今回はもう一人同行者がいる。そいつは一番最後、集合時間に少々遅れてやってきた。

「遅かったな、メリーベル」

「ん……。ごめん」

ついさっきまで寝ていた様子のメリーベルは寝癖を片手で直しながら歩いてきた。なんとというフランクさ……。だが、お陰で助かった。こんな重苦しい空気の中というのは困る。

メリーベルもすぐにその事実気づいたのか、欠伸をしながら俺の方によってくる。流石にあちらの二人には近づきたくない様子だ。こいつとは一緒にオルヴェンブルムの実家に行つてやる約束をしていたが、急にこんな任務が入ってしまったので仕方が無い。申し訳ないが、任務が終わってからにしてみよう。

「悪いなメリーベル。こっちのことまで付き合わせる形になっちま
って」

「平気。リリアからも、同行を頼まれてる。どうも、そういう任務
みたい」

リリアからも、となると話は別になってくる。メリーベルが必要だ
から呼んだ　　ということになると、今回の一件に関わってくるの
か。

「それじゃあ、話を進めよう。フェンリル、俺たちが集めるこの材
料は　　」

「ああ。それについては交易都市ティパンにある魔術教会に協力を
要請してあるそうだ。オレたちの任務は現地からの輸送、およびそ
の護衛になる」

「そうか……。にしても、あんたがそれに付き合ってくれるとは思
わなかったよ。なんか城にいついてるみたいだし」

「オレも好きでここに居るわけではないのだがな。まあ、魔術教会
には別の目的もある。メリーベル・テオドランド　　お前の父親に
な　　」

名前を呼ばれるとは思わなかったのか、メリーベルが寝ぼけた様子
で顔を上げる。こいつ……今立ったまま寝てたな。

「話は一先ず列車に乗り込んでからだ。救世主、ゲルトを連れて来
い」

「あ、おい！？ 行っちゃったよ……集団行動出来ないやつだな。ほらゲルト、行くぞ！」

「はううう……」

何かショックな事でもあったのだろうか。完全に放心状態になっているゲルトの手を引いて歩いていると、隣を進むメリーベルが口元を抑えて笑っていた。確かにこれは妙な光景に違いないだろう……。全員でティパンへと向かう列車に乗り込んだ。そういえばティパンに列車で向かうのは二度目になる。以前のケースでは、現地に着くと魔物が暴れていたりしたわけだが……。

四人で相向かいの席に座る。今回、極秘任務であることも手伝って専用車輛は用意されなかった。結果、狭い個室に四人で押し込まれてしまった。

メリーベルは率先して俺の隣に座りたがったが、これは俺でも同じだっただろう。正面に座る大小の黒衣の影は肩を並べて沈黙している。や、やりづれえ……。

「……あ、あ。ゲルト？ そういえば、この間ティパンであった魔物の襲撃事件の時、魔術教会は何してたんだろっな？ 強い魔術師がいっぱいいるんじゃないのか？」

「……わたし、その時一緒に行きませんでしたけど」

「そ、そうだったか……」

墓穴掘っちゃった。もう黙ってよう。

「今回必要になるのはどれも特殊な鉱石、素材になる。魔術教会で

あればストックがあるかも知れないが大人しく渡してもらえるかどうかだな」

「……国の一大事なんだぞ？ 流石に渡すだろ。それともストックがないのか？」

「ストックがない可能性もあるが、あの教会の会長は偏屈で有名な男でな。名をメフィス・テオドランドという。その小娘の父親というわけだ」

メリーベルは特に何の反応も示さなかった。腕を組み、眠いのか目を瞑っている。まあ、こいつは夜型人間だから眠いのだろうが、父親はそんなに偉い人だったのか。

確かに兄のグリーヴァも相当の術の使い手だったし、メリーベル本人も俺の武器を作ってくれたりと色々世話になっている。父親が魔術教会の代表……まあ、それだけのことはあるんだろうな。

「お前がさっき言っていたように、魔術教会には強力な戦闘術式を使いこなす者も多い。が、連中は外部の事 この世界の人間のことになど興味はないのだ。あるのはそれぞれの術師の心の中にある興味の対象のみ……。つまり、連中は外で何があっても決して干渉はしてこないし、こちらからも出来ない」

「……それで、例の事件の時も」

「連中は世界が滅んでも国が滅んでも魔術教会さえあれば良いという考え方だからな。尤も、魔術教会は大聖堂教会から派生したものであり、大本の大聖堂が事実上解体された今、特別的な権限は失われているのだがな」

成るほど……流石先生だ。説明上手でありがたい。お陰でようやくこのメンバーである理由が少し見えてきた。

血縁者であるメリーベルに頼つての構成、か。だがメリーベルは親とは仲がよくないとも言っていた。あまり意味はないような気もするが……さて。

そんなことで沈黙の時間は続き、すっかり心が磨り減った頃、列車はティパンの駅に着いていた。駅を出るなりオルヴェンブルム以上の賑やかさが目に付く。

交易都市の名は伊達ではないらしい。むしろオルヴェンブルムなんかは宗教都市でもあり、かなり静かな印象を受ける。俺は静かな方が好みだが、たまにはこういう明るい街も悪くはない。

人ごみがいやなのか、メリーベルは眉を潜めて溜息を漏らしていた。ゲルトも流石に少しは元気が出てきたのか、肩を落としながらも自分で歩いてくる。

「魔術教会本部は街の東にある。そこまでは徒歩で行くぞ」

そう告げるなりフェンリルは歩き出す。俺たちははぐれないように後に続き慌てて歩き出した。

あちこちで人の声が聞こえてくる各機のある街の中、人ごみに飲み込まれながら歩くという感覚を久しぶりに思い出した。現実世界の街とかはこんな感じだったな……。人多っ！と思わず言いたくなる。

気を抜くと直ぐに流されていきそうになるやる気の無い女子二名の手をしっかりと掴み、俺は一人で奮闘する。フェンリルがどっちか担当してくれればいいのに、やつは一度も振り返らずに進んで行く。

「フェンリ……フェンリルッ！！　せめてゲルトはあんたつれてけよっ……！」

「……………」

ガン無視ですか。そうですね、そつたれ。

あちこちから聞こえてくる呼び込みの声を振りほどき、必死で突き進む。そうして悪戦苦闘が続き、ようやく魔術教会に辿り着く頃には俺一人だけ何故かぐったりしていた。

「大丈夫か？」

「あんたがいうなあんたがっ！！」

フェンリルの心の籠らない一言に盛大に突っ込んだ後、俺たちは教会内に移動した。そこは正に教会という言葉に相応しく、礼拝堂のような肅々とした空気が漂っていた。

外観からでも十分に想像出来たが、黒塗りの建造物の内側はやはり全体的に黒い。モノトーンで揃えられた教会内の全ては静かな空気と相まってどこか停滞した雰囲気を生み出している。

が、教会とは違い入って直ぐにエントランスホールがあり、奥には受付の姿がある。黒衣の研究者たちがエントランスを行き交い、俺たちの前を通り過ぎて行く。

「話はつけてある。お前が行って来い」

「だから、そこはあんたがいけよ……。仕切ってるのあんたなんだから」

「正直、メフィスは十年前から苦手だ。魔術教会も出来れば立ち入りたい部類の場所ではないからな」

腕を組みながらそんな事を言うフェンリル。相変わらずつれないや

つだ。仕方が無い、全員を代表して俺が受付に声をかけた。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

メガネをかけたスーツの男が作り笑いと共に話しかけてくる。何だか微妙に気分の悪い話し方だ。

とりあえずディアノイアからリア・テイルのコア修復パーツを受け取りに来たという事、事前に話は通してある事を告げた。受付の男は何やら電話の受話器のようなものを手に取り、誰かと言葉を交わしているようだ。

「電話……？ この施設には電話があるのか」

「お待ちせいたしました。最上階、メフィス・テオドランド代表の部屋でお話を窺うそうです。右手にある四番のエレベータで最上階に向かってください」

男の指し示す方向を見ると、そこにはちゃんとエレベータの形をしたものがあつた。デザインはどうにもファンタジーチックだが、間違いなく機械で動くアレ荷しか見えない。

「それと、こちらのゲストカードを身に着けてください。こちらがなくなりますと、監視カメラが反応し侵入者を迎撃する仕組みになっております」

胸にピンで取り付けけるタイプのゲストカードを受け取り、俺たちは全員それを装備した。そのあとさらに『中で見聞きした事を外部に漏らさない』とか『死んでも保障しない』みたいな書類凡そ二十種類にサインをし、ようやくエレベータに向かう事が出来た。

もうこの時点で俺としては結構気分がげんなりしていた。何だか嫌

な雰囲気の施設だ……。おどろおどろしい印象は無く、むしろ綺麗な所なのだが、なんだか生きた心地がしないというか……。

エレベータに乗り込みゲストカードを翳すと最上階に勝手に動き出した。どうも、他の階には降りられないようになっていているらしい。ゲストカードにあらかじめ目的地がセットされているわけか。

「はあ……。ここ、何度来ても肩が凝る」

「肩が凝る、程度で済むお前は充分立派だよ」

「言っただろう？ 出来れば入りたくない類の施設だと」

三人でそんな事を語っている間にもゲルトは落ち込んでいた。一体何がそこまでゲルトを落ち込ませているのかわからないが……。うーむ。

最上階に到達すると、そこには短い直進通路があり、直ぐに大きな両開きの扉が構えていた。勿論白黒である。扉をノックすると中から枯れた男の声が聞こえてくる。仕方が無い、立ち尽くすわけにも行かないので扉を開いて中に入ることにした。

そこに広がっていたのは巨大な図書館のような何かだった。しかし同時に研究施設でもあるらしく、研究資材が乱立している。とかいはいや、待て。ここはどこだ？ こんなに巨大だったかこの建造物？ この部屋だけで図書館一つ分くらいあるんじゃないのか？

物理的に無理があるだろうこれ。

「……ふむ。君たちが現代の勇者部隊。何やら見覚えのある顔もあるようだ。懐かしさを覚えずには居られないな」

奥まった場所に在る執務机にかけていた初老の男は立ち上がりこちらに近づいてくる。成るほど、確かにグリーヴァに似ている。白髪

交じりの黒髪をオールバックに固め、メリーベルのものにも似た黒い装束を身に纏っている。この男が錬金術師にして魔術教会代表、メフィス・テオドランド。

「ルーファウスか。懐かしいな。何年ぶりかね？ 君が学園の教師になると言って出て行った頃だから……八年ぶり、か」

「……ご無沙汰しております、メフィス。今日は彼らの付き添いと個人的な用件が一件」

「君が個人的な用件で私を頼る時はろくな事が無いのだが……。ふむ、まあ良いだろう。女王マリアの死、そして新たな女王にリリア・ライトフィールドが就任した事ならば耳にしている。あの小さな少女だったリリアが女王とは、時の流れは速いものだな」

「そのリリアと同年、ゲインの娘ゲルトが彼女です」

フェンリルが肩を叩くとゲルトが顔を上げる。近づいてその顔を覗き込み、メフィスは口元を僅かに緩めて笑った。

「ほう。確かに両親の面影があるが……君は母親似だな。ミユリア君は元気かね？」

「え？ あ、は、はい……恐らくは、ですが」

何故かその名前を耳にしてゲルトの表情に影が差した。良くわからずにただ話を聞いている俺とは違い、それだけでメフィスは何かを感じ取ったようだ。

「その話は置いておくとしよう。さて、確かりア・テイルコアの修

理の件だったな。かけたまえ。立ち話にするには少々長引く」

挨拶もまだだというのに一人で勝手に納得して一人で話を進めてしまっている。完全にメフィスのペースだ。まあ、話が進むのは悪い事じゃないんだが。

にしたって自分の娘を完全無視とはこの人どういう性格してるんだ。メリーベルも気にしない様子で普段通りの態度のまま椅子に座っている。

「さて、リア・テイルコアの修復には様々なものがようになるが……単刀直入に言おう。全てが現時点で揃っているわけではない」

「……足りないものがあるんですか？」

「そうなるな。ん？ 君、どこかで会った事がある気がするのだが……名はなんと？」

「あ、申し送れました。本城夏流と言います」

「ホンジョウナツル……？ さて、どこかで聞いた名だが……まあ良いだろう。君の様子から察するに君と私は初対面のようにだ。君も気にしないでくれたまえ」

「は、はあ」

本当に自己完結の早い人だな。

「足りない素材というのは、コアそのものの情報集積体と同時にボディも成す、『オリハルコン鉱石』。さらには情報の伝達回路と同時にエネルギーの出力強化に使用する『ミスリル結晶』。飛行推進

エネルギーを無限発生させる永久機関、『ドラゴンオーブ』。それと最後にこれは素材ではないが、リア・テイルを動かす為の『白夜の鍵』というものが必要になってくる」

な、なんか色々足りないんだな。鍵っていうのは、プロミネンスシステムを起動するのに使ったあの『天照の鍵』と同じようなものと推測できるが、残りのものは全然なんだかわからん。

「オリハルコン鉱石、ミスリル結晶はこちらのほうでも時間をかければ用意は出来る。しかし『ドラゴンオーブ』だけは入手難だと考えられる。あれはそもそもこの大陸には既に存在しない代物だからな」

「それじゃあ、一体どうすれば……」

「結論を急ぐな、本城夏流。私はまだ不可能であるとは口にしていない。ただ『難しい』だけでな。手段がないわけではないが、もう暫く準備には時間がかかる。魔術教会が抱えている宿屋があるので、君たちはそこで少し待っていて欲しい」

まあ、そういうことならば急いでも仕方が無い。こっちがどうにかできる問題でない以上、メフィスを頼るしかないのだし。

そんなわけで撤退になるかと思いきや、何故か突然ゲルトが立ち上がりメフィスに詰め寄った。

「あ、あの……っ！　お願いがあるんです！」

「ふむ……何だね？　ゲルト・シュヴァイン」

「あの……。その……。この、魔剣……フレグランス、なんです」

ゲルトが軽く掲げたのは魔剣フレグランス　彼女の愛用の大剣だ。
勇者ゲイン、亡き父より受け継いだ高い能力を持つ特殊武装。

「このフレグランス　打ち直して貰えませんか！？　大剣ではなく……その、扱いやすい大きさに……」

ゲルトの表情は真剣だったが、俺たちは完全においてけぼりをくらっていた。フレグランスを扱いやすい大きさに打ち直す……。一体どういう流れでそうなるんだ？

というか、ゲルトはあの魔剣にかなり拘っていたと思ったのだが、彼女はそれでいいのだろうか？　思わず息を呑んで様子を見守っていると、メフィスは剣を手に取り、何やらじっと刀身を眺めていた。

「これは私の過去最高傑作の魔剣だ。打ち直すと言う風に簡単には行かないな。それに私は自らの製作物に愛着と誇りを持っている。定めた形を歪めるなど、自分の道に対する冒瀆に他ならない」

「……………そう、ですか」

ゲルトはしょんぼりと肩を落してしまった。まさかずっとここにくるまで魔剣の事を考えていたのか？　いや、ゲルトなら在りうる……ずつと魔剣を打ち直しているのかどうか、悩んでいたのだろう。だが製作者が無理だと言っている以上無理なのだろう。というかこいつがフレグランス作ったのか。そんな事を俺が一人で考えている時だった。

「……………だつたらあたしが打ち直す」

俺の隣に座って黙り込んでいたメリーベルが魔剣を手に取り、鋭い

目つきで父親を睨みつけていた。

「あんたには頼らない……。あんたの力を借りずとも、あたしがこの魔剣を超えてみせる」

「……メリーベル？」

どうも俺の声は聞こえて居ない様子だった。腕を組み娘を睨む男、メフィス。二人の錬金術師はにらみ合い、お互いに一歩も引こうとはしなかった。

約束の日(2)(後書き)

「それゆけ！ ディアナノイア劇場Z」

* なんとか卒業シーズンまでには仕上げたいのだけれど*

ゲルト「あれ？ 誰もスタジオにきていませんが……今はディアノイア劇場の収録中では……？」

ゲルト「……………リリアが来ませんね。まあ、わたしも遅刻したのですが」

ゲルト「……………」

ゲルト「……………」

ゲルト「リリアが来ない……え？ リリアから手紙を預かっている？ 何何……。ゲルトちゃん、今日は一人で頑張ってるね。本編で色々忙しいので、今日は帰ります……。って、来ないんですか！？」

ゲルト「えーと……その、えーと……」

ゲルト「次回に続く！」

約束の日(3)

「……良かったのか？ あんな大見得切って……。せっかく久々の親子の再会だったんだろ？」

というのは、勿論俺にとっても建前に過ぎなかった。魔術教会の施設内部にある研究室を一つ借り、メリーベルが魔剣フレグランズの打ち直しに取り掛かったのが昨日の事。丸一日経過したというのに、未だにメリーベルの機嫌は直って居ないようだ。

メリーベルの研究室に限りなく近い環境を作る事から始め、シャングリラにいるのではないかと錯覚するほど精巧なメリーベルの部屋を生み出す事にかかること半日。剣の打ち直しプランに苦慮するに半日。メリーベルは一睡もせず目の下には隈が出来ていた。

「……あんなの父親だと思ってるもん」

拗ねた様子でそんな事を口走るメリーベル。しかし、父親だと思ってる居ないんだつたらそこまで強情になることもあるまいに。

あのおっさんもおっさんである。最初はメリーベルには無理だとかなんだ言ってたくせに、突然会話の途中で自己完結してコロリと態度を変え、メリーベルに魔剣を託してしまった。そこであいつが渋っていいばいものを、これでメリーベルは心置きなく作業にとりかかっちゃうじゃねーか。

「親父さんにグリーヴァの事も報告しなきゃなんじゃないのか？俺たちだけだろ、グリーヴァの最期を知ってるのは」

振り返ったメリーベルは腕を組んだまぎろりと俺を睨みつけた。正直怖い……。俺も基本的にはメリーベルには頭が上がらないわけ

だが、そういうレベルではない。

「あいつ、あたしを見ても何も言わなかったでしょ」

「あ、ああ……。お互いに意地張ってたんだろ」

「違う！ あれは、本気であたしの事を忘れてたの！ 途中で急に『お前に任せる』なんて言い出したのは、会話しててあたしを思い出したからなのっ！！」

ま、まじで？ そんなことってあるのか？ 一応実の父親なわけでは……いや、ありえる気がする。なんというか、流石元ブレイブクラシオン。普通じゃない。

あのおっさんもまたフェイトやゲインの仲間であり、フェンリルとも顔見知りだという。勇者部隊が解散してからは自分の研究にだけ没頭していたようだが、だからって娘の顔を忘れんでもいいのに……。

「あいつを正面からいくら罵っても無駄よ……。あいつが唯一心に傷を負うのは自らの作品が汚された時だけ。あいつが唯一プライドに傷を負うのは、自らを超える作品が現れた時だけ。これがあいつに文句を言う一番の近道なの」

「そ、そうか……。何か手伝えることあるか？」

「邪魔だから出て行ってくればそれで助かる」

取り付く島もない。

今のメリーベルに何か言っても無駄だろう。だが、なんというか……そういう親子間の関わり方しか出来ないのは俺も一緒か。現実に

戻ったら今度こそ親父と話し合ってみるべきかもしれないなあ……
うん。

「メリーベル」

まだいたの？　とでも言いたげな目で振り返るメリーベル。その頭に手を乗せ、髪をそつと撫でる。

「頑張れよ。こっちも時間はかかりそうだから、急ぐ必要はないんだ。納得行くまでじっくりやれ」

流石に調子に乗りすぎたかと思ったが、メリーベルは俯いて小さく頷いた。急に大人しくなった気がするが、まあ多分俺は関係ないんだろう。

一人で廊下に出る。この施設、魔術教会総本山　通称、くじらの腹トスは、外見こそ通常の建造物だが、内部には複雑に左様して増築が繰り返された異空間が広がっている。

つまり物理的には内部は無限の広さを持つにも等しい建物であり、無事に戻るには最寄の空間エレベータに乗り込みエントランスに戻るしかない。

自分の空間座標を管理するのはゲストカード、或いは教会に認められた会員カードによって行われる。このカードをなくすと警備に引つかかるだけではなく、エントランスの空間座標が把握できなくなり、現実世界に戻れなくなるそうだ。

まあ現実世界といっても俺にとつての現実ではないのだが、この大陸では最も早く空間魔法の扱いに乗り出した魔術教会のこの技術はディアノイアやオルヴェンブルムにもない超魔術であると言える。

メフィスの研究室も実際に最上階にあるわけではなく、異空間の最上階に存在するという。つまり、この施設そのものの最上階にはないのだ。

エレベーターで上下に移動しているだけに見えて、ちゃんと現実のエントランスに繋がっている。逆にこの施設はこのエレベーターがないとどこにもいけないのである。

「さて、どうしたものか」

エントランスに下りた物の、ここで出来る事など待っている事くらいである。

必要素材のオリハルコン鉱石、そしてミスリル結晶は既に回収の為に教会が動いてくれている。ドラゴンオーブに関しては国内には存在しないとのことで、場所と入手方法はリリアに手紙を送る事になった。

あとは一先ずオリハルコンとミスリルを回収し、オルヴェンブルムに移送する事が俺の任務になる。白夜の鍵とかいう代物がどこにあるのかはわからないが、もしかしたらリリアが既に持っているのかもしれない。となると、問題は残り一つ。

「……ミッドナイト、だっけか。あの白い機械人形……」

北方大陸のアンダーグラウンドに残してきた機械人形……。確か、俺をナタルだと言い張って聞かなかった女の子だ。

俺にはどうにもできないのでブレイド盗賊団の八に預けたが、そういえばその後音沙汰が無い。で、その当の八はどこかへ行ってしまったらしくて行方不明……。

唯一八とやり取りが出来そうなブレイドも彼の連絡先は知らないらしいし、さてどうしたものか。一応騎士団の方で八の行方を調べているそうだが、見つかるだろうか。

ブレイド盗賊団は戦力の傾いた聖騎士団に変わり地方の魔物を討伐したり、他国の内情を偵察したりしているらしい、所謂隠密集団だ。連絡をつけるのも難しいだろう。

エントランスをふらふら歩き、ふかふかのソファに腰掛ける。ヤバイな、ありえないくらいヒマだ。出来る事が何もない……。全部連絡待ちだの結果待ちだので、俺に出来る事なんてないじゃないか。これ人選ミスじゃねえのか？ 俺こっちきてもやることねーよりリア……。くそう、ただの護衛とかそういう事なのか？ あーもう、どうしろってんだ！

「あゝれえ？ あんたこんなトコで何してんのよ？」

「ん……？ ベルヴェール！ いやあ、丁度いい所に来たな！ その荷物運んでるのか？ 俺が持ってやるよ、ホラ」

「え？ あ、ありがと……。何、気持ち悪いくらい爽やかなね……？」

眉を潜めながらもベルヴェールは木箱を渡してくれた。それなりに重いが何もしていないよりはました。正直暇は堪えるぜ……。

見るとベルヴェールはスーツ姿だった。背後には同じくスーツ姿の男たちが荷物を運び込んでいる。全員コンコルディア財閥の関係者なのだろうか？

ベルヴェールは残りのメンバーに先に行くように伝えると俺の前で腰に手を当てて微笑む。仕事中に呼び止めては悪いと思ったが、暇つぶしになるなら何でもいいか。

「もしかしてあんた？ リリアからの遣い、って。ミスリルとオリハルコン、持ってきたけど」

「お前が仕入れてくれたのか？」

「西の方からね。とはいえ、ミスリルとオリハルコンは採掘場がいくつも潰されているから流通量が非常に落ちてる貴重な金属なのよ。」

まとまった量掻き集めるのは苦労したわ」

何やら色々大変だったのだろう、溜息を漏らすベルヴェール。なんだこいつ、ちゃんと仕事してたのか。

「知ってた？ ほら、一度魔物の襲撃で全滅してるノックス。あそこはこの大陸じゃ一番の採掘場だったのよ。ミスリルとオリハルコンの採掘量であそこ以上の場所は無かったわ」

「そうだったのか？ 確かにここからも近いし、魔術教会としてはノックスに頼ってた所が大きいんだろうな」

「在庫切れを起こした理由は多分それだけじゃないわね。大陸全土、クイリアダリア以外の国の採掘場も同様の襲撃を受けている事がわかったのよ」

「……何だと？」

何やら雲行きが怪しくなってきた。立ち話するようなことでもないの、俺たちは荷物を魔術教会に納品して客間を一つ借りる事にした。どうせバテンカイトスの中には部屋が腐るほどあまっているわけで、一つ借りたいといっても誰も嫌な顔はしなかった。

「それで、採掘場の襲撃事件ってのはどういうことなんだ？」

「詳しい話はあたしも聞いたただだから判らないんだけど、総合的に見て手口はノックスのケースに酷似してる。それともう一つ解った事……。ノックス襲撃の前に、ティパンも魔物に襲われていたでしょう？」

確か俺たちが初めて課外授業　つまり実戦に出撃した時の事だ。
あの時は色々あったし衝撃的だったから覚えている。

魔物に埋め尽くされた街……。リリアが暴走して一人で突っ走ってしまっていたが、あの頃は俺もこの街そのものに興味は持っていなかった。

「目的も無いただの魔物の自然発生ではなかったみたいね。この街は流通の街　。倉庫にはミスリル、オリハルコンを始めとした古代素材のストックがあったそうよ。それも、魔物の襲撃時に奪われた」

「……おい、それって」

「誰かが古代素材を回収しているみたいね。流通を止めるのが目的なのかしら？　ほんと頭にくるわ！　お陰でこっちはとんだとばかりよ！」

一人で盛り上がっているベルヴェールを他所に俺は全く別のことを考えていた。流通を阻止する目的　メリットなんて何がある？　いや、考えすぎなのか？　貴重な素材を奪えば高値で売れるはずいやまで、だったら流通しているはずだ。それに奪うのが目的なら街ごと破壊する必要はどこにある？

やはり流通の阻止……？　わからないな。何かが引つかかる。そもそも、どうしてここの在庫を奪ったりしたんだ……？

「いや、そもそもここを襲撃したのは魔物じゃなくて意思のある人間だったって事になる。つまり、ティパンをあんなにしたのも……」

「……火事場泥棒、じゃなくて？　魔物を操る能力なんてそれこそ魔王でなきゃ持って居ないはずだけど」

「それだよ。これは仮定だが、あの事件は魔王が引き起こしていたとすれば？　そうすればミスリルの行き先も検討が着く」

「行き先って……あ、そっか」

「　パンデモニウム、だ」

一度はプロミネンスカノンによって吹き飛んだはずのパンデモニウムを修理するには一体どれだけのミスリルが必要だったのか検討も付かない。あの大戦から十年……それだけの時間を要したのも十分頷ける。

そしてそのためには莫大な量の古代素材が必要だったはずだ。それこそ、市場の流通が滞ってしまうほどに。そして、同じく古代素材を必要とする人間を牽制する為に、採掘場を襲撃したとしたら……。

「それは面白い仮説だが、根拠に欠けるな、少年」

背後からの声に振り返る。そこにはここの代表、メフィスが立っていた。何でも納品書を受け取り忘れたとかで、ベルヴェールを追いかけてきたらしい。いや、一声くらいかけてもらいたいもんだが。

「パンデモニウムの修復に使ったというのは恐らく的確ではないな。何故ならパンデモニウムの修復に使うには余りにも量が少なすぎるからだ」

「……パンデモニウムの修理じゃないのか」

「そもそもあれはほぼ木っ端微塵　無に限りなく近い状態にまで吹き飛んだのだから、修理というよりは創造になるだろう。となれ

ば、あの城全体を全てミスリル素材で構築している以上必要とする量も莫大なものになる。理論上、この世界において十年間であれを修復する事は不可能なのだよ」

「……え？　じゃあ、あれは……？」

「パンデモニウムではないのだろうか。恐らく、パンデモニウムと能力を同じくする、限りなく類似したパンデモニウムのような何かだろう」

腕を組み、一人で頷いて納得しているメフィス。だが、こっちは余計に混乱してきた。パンデモニウムのような何か、だ……？

「だが、君の何かを修理する為に鉱石を集めていたという発想は中々良い。パンデモニウムではないのであれば、もっと別の物を修復していたと考えるべきだろう」

「別の物って言われても……なんだよ、そりゃ？」

「それは、修理可能な程度に破損している。現状流通が停止している以上、未だにそれは修理状態にある。最後にそれは、古代兵器である。ふむ、さてどのようなものかね」

「あら、そんなの簡単じゃない」

俺とメフィスが同時にベルヴェールを見る。ベルヴェールは誇らしげに胸を張り、両目を閉じて答えた。

「リア・テイルよ！」

俺もメフィスも沈黙していた。ベルヴェールは目を開けた後、固ま
っている俺とメフィスを交互に見やり、それから頭を掻いた。

「……あたし、またなんか変な事言っただけ？」

「い、いや……その通りだ。リア・テイル……お前の言つとおり、
確かに条件を満たしてる」

「非常に興味深い考察だ。成る程、とすれば一連の事件の首謀者は
国内にいるのだろうな。コンコルディア嬢の話に寄れば、一連の事
件はこの大陸　つまりクイリアダリア支配下で起きている。クイ
リアダリアが首謀者であれば、今までそれほど話題にならなかった
事も頷ける」

「つまり……犯人はクイリアダリアの誰か……。あの事件は、この
国の人間が起こしていた……？」

俺たちが二人して考え込んでしまっているのを見てベルヴェールは
時間をもてあました様子で椅子に座っていた。

「それで……えーと、どういう意味？」

やっぱりこいつは閃いているようで、馬鹿だった。

約束の日（3）

客間での会話は不透明なまま終了した。エントランスにベルヴェー
ルと共に戻ってきた俺だったが、どうにも腑に落ちない感触だけが

残っている。

パндеモニウムではなく、パндеモニウムに限りなく類似した何か。
。流通を阻止しようとし、同時に鉱石を回収していた何物かと
周辺で起きた魔物発生事件……。国内の何者かによる犯行……。
どうして今まで見落としていたのか判らないくらい、濃厚な疑問が
次々に浮かんでくる。だがこの状態ではまだ何も判らない。確定は
して居ない。ただの俺たちの妄想の域を出ないのだから。

「それじゃ、あたしはパパとか社員を街に待たせてるからもう行くけど」

「ああ。悪かったな、引き留めちゃって」

「……ナツル、あたしはあんたの言うとおり、あんまり頭はよくないわ。でも、仲間が困っているのならいつでも手を貸すから。それだけ覚えていて」

そう言っベルヴェールは握手を求めてきた。心強い仲間が居る……
…そうだな、一人で考え込んでも仕方が無い。
俺が手を握り返すと彼女は満足そうに白い歯を見せて無邪気に笑った。なんというか……こいつ、最初は俺たちの事恨んでなかったか？
いつの間に仲間になっただろう。

「それじゃ、一足先に戻ってリリアに宜しく言っておくわ。頑張っ
てね、ナツル！」

「おう。じゃあ、またな」

手を振って去って行くベルヴェールは一見すればデキる女なのだが……
……おつむも外見に似合うだけになっていればよかったのになあ。

さて、さっきまで暇をもてあましてもがいていた俺だが、こういう暇な時間だからこそ時間をかけて推理できる事もある。そういえば一つ、ずっと頭の片隅に引っかかっていた事があったんだ。

俺は疑問を解決する為に街に繰り出した。メリーベルとメフィスは魔術教会に入り浸りだから、残りの同行者 フェンリルとゲルトのところへ向かう。

ゲルトはなんでもフェンリルに戦いを教えてもらっているらしい。まあ、二人のバトルスタイルは似ているしフェンリルは相当な実力者だ。今戦っても勝てるかどうか判らないくらいだし……。いや、無理そうだなあ。

まあそんな二人は修行の真っ最中で、町から少し離れた草原に居た。二人に背後から声をかけると修行は一時中断となった。

丁度昼過ぎであったこともあり、昼食を買って行ってやったので二人とも喜んでくれた。特にゲルトはよほどハラペコだったのか、おなかを鳴らして顔を真っ赤にしていた。

「それで二人ともちよつと話があるんだけど、いいか？」

「……まあ、ただ食事を差し入れに来たわけではないのだろうからな。用件はなんだ？」

俺は先ほどベルヴェールから聞いた話とそれに纏わる嫌な推測を語る事にした。二人は俺の話を黙って聞いていたが、二人とも食事の手だけは休めなかった。おなかすいてたのね……。

全て話し終えても会話は始まらなかった。ゲルトは動揺している様子だったし、フェンリルも何かを考えているのか上の空だ。俺は既になくなりつつあるサンドウィッチを手に取り齧る。

「それでフェンリル。あんた、以前この国を相手に戦いを挑んだ事があつただろ？ リリアを拉致しようとした、例の古城での戦いだ

よ」

あれも忘れようとしても忘れられない。リリアの中の魔王が覚醒し、恐ろしい力が目覚めた時だ。同時にゲルトが魔女化したり、何やら色々あった。

「そもそもあの時、オルヴェンブルムを襲撃してきた魔物の軍団のリーダーはあんたたちだったのか？」

「……ナツル、それは一体どういう……」

「仮に！ あんたたちが魔物を操っていたのだとしたならば……どうしてだ？ どうしてバズノクは燃えた？ どうしてバズノクの人々は一夜にして消え去った？ 誰一人残さず……まるで誰も居なかったように」

そう、あの戦争の終結は不可解なものだった。その理由は結局わからず仕舞いで、ずっと引っかかっていた。

フェンリルたちはあの戦争を仕掛けちゃ張本人のはず。こいつがこうして友好的な位置になることがなければこの疑問は一生払拭出来なかったかもしれない。でも。

「あんたはあの反乱の全てを知っているはずだ。あれに関わっていたのは秋斗なのか？ バズノクをやったのは、あんたたちなのか？」

俺の問い掛けをフェンリルは黙って聞いていた。暫くすると深く溜息を漏らし、それから真剣な眼差しで俺たちを見た。

「……あの反乱を企てたのはオレたちだ。だが、バズノクという国はかねてよりオレたち反乱分子にとっては親交のある国だった。ク

イリアダリアに恨みを持っていたからな。だが、実際に反乱行動を起こすまでには様々な要因が重なったのが事実だ」

そうしてフェンリルが語り出したのは例の反乱の真相だった。

今から既に半年前になるあの反乱は、当時彼らと友好的であったバズノクの協力の下に行われた。

目的はクイリアダリアの崩壊。つまり、政治体系、そして悪意に満ちた大聖堂の抹殺であった。フェンリルたちはあの戦いで大聖堂を相手取り潜入し、相打ちに成ってでも大聖堂を抹殺するつもりだったらしい。

「そのために一度侵入し、騎士団をひきつけてからグリーヴァの転送魔法で移動する予定だった。いざとなればオルヴェンブルムごと爆破してでも大聖堂は破壊せねばならないと思っていた。しかしそのオレたちの予定は、お前とゲルトによって狂わされる事になった」

あの日フェンリルとグリーヴァは城壁内部に侵入し、オルヴェンブルム城壁の結界への細工と街への術式設置、そして大聖堂とリア・テイルに転送魔方阵を仕込んでいた。

だが、城落としての術式は俺とゲルトによって破壊されてしまった。それは彼らにとっては予定外ではあったが、計画そのものに実害はなかった。本来なら転送魔法からの白兵戦闘、並びに施設そのものを魔術により外界と隔絶する事による少数精鋭戦闘を想定していたのだから。

その名残がリア・テイルに仕掛けられていた転送魔方阵と、リア・テイルから騎士団をはじき出した隔絶結界である。同様のものは大聖堂にも仕掛けられていたらしいのだが、どうもあの戦闘のあとマリシアの誰かに気づかれたらしい。尤も、予備であるリア・テイルの術式は無事だったようだ。

「無関係な人間を巻き込む積もりはなかった。だが、聖騎士団が詰めているオルヴェンブルムを襲撃するのはあまりに無謀だ。マリシアという強敵を相手にしなければならぬのに体力の消耗は極力抑えたかった」

「つまり、あの反乱そのものは陽動。オルヴェンブルムから騎士団を外に出す為の物だったのか」

「勿論他にも目的はあった。ディアノイアが戦闘に干渉してくるこ
とだ。そうなればお前たちは戦場に出てくる。それはお前たちに実
戦を経験させ、成長を促す……。尤も、こちらは秋斗の目的だった
がな」

その意味で彼らは目的と共にし、一時的に結託した。秋斗の目的は
リリアの成長、及び魔王覚醒。彼は前線には姿を現さず、地方
を転々として陽動を行っていたという。

「さつきも言ったが、戦争を起こすのは容易ではない。そもそもあ
の魔物の軍勢はオレたちの能力ではなかった」

「じゃあ、一体誰の……？」

「『召喚』の代用者となったのは鶴来だった。ヤツは精霊交霊術、
召喚術、式神とかいう東洋の良くわからん術に長けていてな。オン
ミヨードーとか言ったか……。とにかく召喚術に関してはプロフェ
ッショナルだった」

「その鶴来でも、魔物は召喚出来なかった……？」

頷くフェンリル。段々雲行きが怪しくなってきた。

「元々オンミョードーというヤツには死者の魂を扱う術も存在するらしい。が、それとは全く異なるものだといつは言っていたな。あの術について詳しい事は鶴来に聞くのが手っ取り早いだろう。オレはあの術に関しては専門外だからな。ただ」

「……ただ？」

「あの術の出所は、確かバズノクだったはずだ。バズノクの国王から同盟の証にと寄越されたものだったが……。あの時は大聖堂に復讐さえ出来ればそれでよかった。何も考えず、オレはそれを受け取ってしまった」

「じゃあ、魔物を扱う術を持っていたのはバズノクの国王なのか？」

「……わからん。何故ならオレたちは、一度として実際にバズノクに行った事がないからだ」

俺もゲルトも流石に目を丸くした。つまり話しはこうだ。

同盟国ではあるし、同時に決起するものの、情報のやり取りのみでお互いに接触は極力控える事が向こうの条件だったらしい。そんなものを信頼できないという話になっていた所、魔王の禁術を記した書物とそこに封印された数千のアンデッドナイトの魔法具が送られてきたらしい。

そこまで価値のあるものは滅多にお目にかかれるものではなく、それをあつさり手渡すという事はそのままイコールでクイリアダリアに恨みがあるという事であるとフェンリルたちは受け取ったらしい。だが……。

「お前たちとの戦闘のあと反乱は続く予定だった。しかし実際に

戦場になっているであろうバズノクに駆けつけたオレが見たのは……」

「 無人の街、燃える大地……」

そして戦争は双方理解不能な状況のまま中断 。フェンリルはそれ以上戦闘続行は不可能と判断し、仕掛けた術式により好機を窺っていた。

俺たちは終結した戦争にただただ安堵していた。当然だ。あんなの初めてだった。終わってくれた事に安心して、それ以上考えなかった。

何とか暗い雰囲気や打倒しようとして明るく振舞った。皆で一生懸命学園祭もした。だが、その結果大事な事を見落としていたのかもしれない。

「……確かにあれは不自然だった。だが、あれが何者の仕業なのかはわからない。いや、そもそもバズノクという国は、いつからあんなになっていたのかも……」

「それはつまり……フェンリル、あんたたちが取引していたのは、バズノク国王を名乗る別人だったってことか？」

そいつは一つ国を滅ぼすほどの圧倒的な力を持っていた。そして魔王の禁術さえも手にし、フェンリルたちを戦わせた。その目的は？ ああ戦争で得をしたヤツがどこにいる？ あんなもの、ただ傷つけあってみんな辛かっただけの、悲しい出来事じゃないか。

戦争が起きれば国のバランスが傾く。大聖堂もそれで黙っていられなくなった。周辺国も動き出した。世界に変革を与えるきっかけになった 。それが、目的だったというのか？

いやまで、あの戦争そのものが目的だったやつが一人居る。秋斗
あいつはリアの覚醒を望んでいた。それも理由になるのか？
だとすれば仕組んだ黒幕は秋斗　？

「お前の考えは読めている。秋斗を疑っているのだろう？」

「……あいつは関係ないっていうのか？」

「だろうな。だが、あの決戦の最中、やつは何者かと単身で交戦していたようだ」

「……？　何者かって、なんだ？」

「あいつは知っていたのかもしれないな。あの事件の黒幕を……。あの秋斗を限界まで追い詰め、敗北させたような相手がまだこの国に居るのかも知れない」

秋斗があの時俺たちの前に姿を現さなかったのは、陽動の為に各地を転々としていて何かに気づいたから？　黒幕に会ったから？
そしてやつは救世主の力でそいつを倒そうとした。でも、そいつに勝利する事は出来なかった。敗北した。秋斗ならどうする？　そのあとアイツなら、どうする　？

冬香は世界の創造主だ。その創造主を殺そうとするヤツの考えはシンプルだろうよ。創造主、つまり本の執筆を続ける冬香は世界を拡大し続ける存在だ。それが死ねば世界は潰える。

何故かそんな言葉を思い出した。そうだ、秋斗だったら絶対に追いかける。負けたら勝つまでやるのがあいつだ。秋斗は……何を知っていた？

冬香を殺したヤツはこの世界の終わり　つまり、預言書の記述が途切れている空白の日が訪れるのを待っている。それまでは表舞台には出てくるつもりが無い、そういうヤツだ。俺はそいつを追っている……。見つけ次第、確実にこの手でブチ殺す。

待て。こじつけすぎじゃないのか。だが、不思議と納得できる。秋斗が追いかけているその人物　『世界の終わりを望んでいる人物』と、今回の件……関係があるのか？

秋斗が追いかける、『空白の日』を望む者　。冬香を殺した人物。ノックスを襲撃し、戦争を引き起こし、世界を混乱に貶め、変革を齎す何者か……。

魔王？　違う。そいつは国内にいる。クイリアダリアにいる誰かだ。もう少しで何かがわかる気がする。思い出せ……何か、引つかかっている事があるはずだ。

敵の中に、ディアノイアの生徒だった人間が確認されたんだ。

「……あ」

自白したわけじゃなくて、倒した敵の中に生徒が混じっていたらしい。身元を査問会が洗った所、現役のディアノイア生徒だった事が判明した。

思い出した……。これは、まさか……繋がってるのか？　全部……。

反乱に何故か参加していた生徒。しかしフェンリルは生徒を巻き込むような男じゃない。そんなことは問い詰めなくてもわかる。

だったらなんであの戦場に生徒がいた？　そんなの決まっている……。理由なんか、一つしかない　。

「……ディアノイアだ」

「えっ？」

思わず口元を手で押さえながら呟いた。何てこった。もしこの考えが正解なら……もしも俺の予感が当たっていれば、とんでもない事実がある。

そうだよ、もうひとつあったじゃないか。当時修理中だった古代兵器が。あんなに身近な所に、馬鹿でかく聳え立ってた……。

「一連の事件には、ディアノイアが絡んでいる可能性がある……」

俺の言葉に二人は完全に沈黙していた。俺もそれ以上何も話せなかった。

あの学園にこれ以上何があるって言うんだ。あの学園の中の誰かが……あの事件を起こしたのか？

わからない。まだこれは推測の域を出て居ない。でもどこか、当たり前のように納得している自分がいる。

そんな気はしていな。そう、心の中で頷いている自分がいた……。

約束の日(3) (後書き)

〽それゆけ！ デイアノイア劇場Z〽

＊古過ぎる伏線を皆覚えているのだろうか＊

リリア「というわけで、謎の推理パートだよ！」

ゲルト「皆さんもこの物語の大筋がそろそろ見えてきたのではない
でしょうか」

リリア「いや、しかし名探偵夏流ってカンジでまる一話つかっちゃ
ったね」

ゲルト「伏線を覚えていなかった方々、回収が遅すぎて申し訳あり
ません」

リリア「わかんなかったら読み返すといいよ！ そしてPV増やす
といいよ！」

ゲルト「こ、こら！ そんな事を言っではだめです！」

リリア「そんなわけで、ここからいよいよラストスパート！ 魔王
との決戦、そしてリリアが立派な勇者になれるのか皆見届けてね
！」

ゲルト「……なんか急にちゃんと予告みたいなセリフ言われると違
和感ありますね」

リリア「それリリアも思った」

約束の日(4)

ミスリルとオリハルコンの納品が終了し、後は俺たちがそれをディ
アノイアまで運ぶだけと成った。

例の疑惑についてはまだ解決していないが、このティパンに留まっ
ている以上その続きは見えそうにもない。俺たちは一先ず物資を輸
送する事になったのだが。

「あたしは魔剣の打ち直しが完成するまでは戻らないから」

と、メリーベルは帰還を拒否……。それに伴い、ゲルトも魔剣の調
整に付き合う為に魔術教会の残る事になった。

尤も、時間もうそう長くはかからないという事で、数日後にはオル
ヴェンブルムで合流する手筈となった。こちらは他にもやるべき事
が残っているので一先ずそれを了承し、俺はフェンリルと共にオル
ヴェンブルムへ向かう列車に乗り込んだ。

オルヴェンブルムに戻るとすぐに城に鉱石を納品し、リリアの元へ
向かう。客間でリリアと合流する頃には既にこちらの事情は伝わっ
ているようだった。

「……さて、問題はドラゴンオーブをどうするか、だな」

メフィスの話ではこの大陸にはドラゴンオーブは無いと言う。とな
ると、ドラゴンオーブは一体どこにあるのか。

しかし俺が考えるまでもなく情報は伝わっていたらしい。魔術教会
によれば、ドラゴンオーブは東の島国　イザラキに存在する希少
な鉱石らしい。こちらの大大陸では飛行石などと呼ばれているそうだ
が、とにかくオーブは大陸を渡った海の向こうだという。

「イザラキか……。行つて帰つてくるとどれだけ時間がかかるやら」

「オーブの事ならば問題ない。鶴来にオレからコンタクトを取つておいた。あいつはイザラキ出身だからな……。何とか手配してくれるだろう」

「……いいのかフェンリル？　そこまでされると本当に仲間みたいだぞ」

「パンデモニウムには恨みがある。ただそれだけだ」

腕を組み、そっぽを向くフェンリル。何だかんだで手伝つてくれる当たり、こいつもそんな悪いやつじゃあないんだろうな。

「それじゃあ、オーブの回収はフェンリルに任せるね！　ありがとう、フェンリル」

フェンリルの手を握り締め、微笑むリリア。それを見たフェンリルは暫く眉を潜め、やがてリリアの手を振り解いて部屋から出て行つてしまった。

「照れてんのか、あれは」

「なんで？」

「いや、何でつていわれてもな……」

まあ、あんまり細かい事は気にしない方が良さそうだ。

さて、残りの問題は白夜の鍵とコントロールユニットである白蓮

ミッドナイトだが……。こちらはどうしたものか。

一先ず白夜の鍵の話をリリアにしてみたところ、どうやらそれらしき物には心当たりがあるというので一先ず鍵の事は置いておくとして。

「あとはミッドナイトか。八がつれまわしてると思っただが、行方はわからないのか？」

「擦れ違っ形になっちゃったから……。でも、連絡役にブレイド君を向かわせたから、直ぐに戻ってくると思うよ」

そうになると、また今ここで出来る事はなくなってしまった……。暇をもてあました空気の中、ふとリリアに問い掛ける。

「そういえばリア・テイルの動かし方はいいのか？」

「うん、大体は把握したよ？ 難しいけど、ロギアがサポートしてくればなんとかなると思う」

そうか……。魔王の城パンデモニウムを動かしているのがレプレキアだとすれば、同じ魔王の血筋であるロギアは古代兵器に精通している。リリアが多少知識不足でもロギアの技術で補えるわけか。

ふと、リリアを見ると俺と同じように何やら暇そうに後ろで手を組んでぼんやり窓の向こうを眺めていた。色々忙しかったはずなのだが、こんな所で油を売ってる余裕があるのだろうか？

「リリア」

「な、なんですか？」

「お前仕事はどうしたんだ？　アホほど仕事が溜まってて大変だつて言ってただろ」

「う、うん。なんか今日は皆が変わりにやってくれて言うから……。というか、リリアのやるべき事は殆ど他の人が代用できる事で、だからリリアはずっとリア・テイルの動かし方を勉強できたんだけどね」

まあそうだろうな。事実上政治なんぞリリアには無理な話だし、大聖堂を吸収してより組織の構築も正しい形に戻りつつあるこの城においてリリアがどうしてもやらねばならない仕事など高が知れている。

何より今は決戦を控えた重要な時期だ。リリアに無理をさせるわけにも行かないだろうし……。そうか。せつかく皆がリリアに与えた休日^レを俺が邪魔しては悪い。

「だったら今日はゆっくり休むといい。悪かったな、休みの所を邪魔しちまって」

「はう？　え、いや……。あのう」

「俺も一人で考えたい事があるし、シャングリラに戻って　うごっ！？」

振り返った瞬間誰かに正面衝突してしまった。何やら柔らかいものに当たったようだが、慌てて顔を上げるとそこにはエアリオの巨大な胸が聳え立っていた。

「エアリオ……こんな所で何を　おわっ！？」

「あらあら、二人とも暇そうね？　だったら今日はお休みなんだから、どこかにお出かけしてきなさい」

「え、エアリオさん！？」

リリアと俺の首根っこを掴み、ずるずる引き摺るエアリオ。こいつ
　　「……という怪力だ！？　リリアよりも数段上の馬鹿力だぞ！？」

そのままずるずる引つ張られ、城の外にポイされてしまった。二人
　　して階段を転げ落ちる俺たち……。エアリオはそんな俺たちを見下
　　ろし、いつものとぼけた笑顔で言った。

「今日は帰ってこなくていいですからね。夏流ちゃんは、ちゃん
　　と女王陛下をお守りすること。ばいばい」

「あ、ちょ……エアリオッ！？　おいっ！！」

「……いつちゃった」

扉が閉まり、完全に途方に暮れる。確かに暇といえば暇なんだが……
　　「……いや、やるべき事はまだ何かあるはずだ。何か……」

隣で尻餅ついているリリアを引き起こす。リリアは昔からずっと変
　　わらない無邪気な笑顔で俺を見詰め、手を握り締めた。

「せっかくだから、シャングリラに行きませんか？」

「……いいのか？」

「……こういう時は、多分男の人が率先して誘ってくれるべきなんです
　　よう……」

「あ、ああ？　そうなのか？　じゃあ、行くか……？」

どっちにしろシャングリラには一度戻るつもりだったんだ。それにリリアとこうして二人というのも随分と久しぶりの事だ。

何となく懐かしい気持ちに導かれるように俺たちはシャングリラ行きの列車に乗り込んだ。空が青い　戦争なんて嘘みたいな日の事だった。

約束の日（４）

「はーっ！　なんだか淒く懐かしいなあー！」

シャングリラに到着するなりリリアはそんな事を言った。そうしてリリアは派手な勇者王の新しいアーマークロークのまま駅を飛び出して行く。

しょうがないやつだな本当に……。後について駅を出ると、リリアが手を振って俺を呼んでいた。まあ……楽しそうだからいいか。

近づいてまず俺はリリアの頭を小突いた。街中で女王がうろろしてたら拙いに決まっている。一先ず着替えを何とかしなければならないので、リリアの部屋に行く事にしたのだが　。

「おう？　よお、なんだこっちに戻ってきてたのか」

「おじいちゃん！？　なんでリリアの部屋に！？」

「まあ、間借りしてるっていうか……住んでるって言うか……」

「占領だよ、もおーっ！！　おじいちゃんの、ばかあっ！！」

というわけで、顔に張り手の後をくつきりと残したヴァルカンと一緒にリリアの部屋を出る。流石に中でお着替えしているのだから出ざるを得ない。

しばらくそこで立ち尽くしていると、食料品などが詰まった紙袋を持ったクロロが歩いてくるのが見えた。どうやら以前に渡した腕のスペアも無事接続できたようで、今回は両腕がある状態だった。

「お久しぶりです、ナツル」

「ああ、久しぶりだなクロロ。最近どうしてんだ？」

「返答します。プロミネンスのメンテナンス及びシステム復旧作業に従事しています」

そういえばこの二人はプロミネンスの修理に携わった人物だ。まさか、例の事件に絡んでいるのではないだろうか。

そんな疑念が一瞬心の中からわきあがったが、俺は考えるのを止めた。必要な時になれば、いやでもそれを問う時が来るだろう。まずはパンデモニウムを落してから……それに、今はせつかくこうしてリリアと戻ってきたんだ。あんまりそういう殺伐とした事は考えられなかった。

と、俺が一人で考えているとクロロが容赦なく室内に入って行った。数秒後、ボツボコにされたクロロが出てきたが、この空気読めない感には相変わらずらしい……。

待つ事さらに数分。部屋から出てきたリリアは。昔の服装に戻っていた。この街で初めて出会った時のリリアがそこに居た。それだけで俺はなんだか懐かしくなって、思わずその髪に触れていた。

「な、なんですか？」

「いや、何かお前のその格好見るの久しぶりだと思つてさ」

「まだ一月经つてないですよ……？ それじゃおじいちゃん、クロ口君、行ってくるね」

二人ともリリアにボコされた後だから心なしか元気がない。まあ、それは二人が悪い……自業自得なのだから、俺は何も言うまい。さて、こうして街に出たわけだが……特にすることはない。やるべき事はこの街にはないのだから当然だ。シャングリラ、そして英雄学園ディアノイア。思えば俺たちの物語はここから始まったんだ。

「懐かしいね。あそこ、覚えてますか？ リリアと夏流さんが再会したところ」

リリアが走って行って俺を手招きする場所。勿論、忘れるわけがない。あの頃は結構頻繁に現実とこつちを行き来していた。そう、転送も大変だったんだ。

ここで俺はリリアに出会った。勇者就任の儀式から数えて二度目の邂逅。リリアはおびえていて、でも俺に声をかけてくれた。

あの……？ 一ヶ月くらい前に、戴冠の儀式の時、勇者の指輪を拾ってくれた人……ですよ？

「夏流、いっつも転んでたよね？ あれってどうしてだったんですか？」

「……異世界からの転送に慣れてなかったんだよ。昔の事をいつまでも根に持つな、ばか」

「えへへ……っ！ あ、そうだ！ せっかくだから、色々な所に行こうよ！ 思い出の詰まった場所……いっぱいあるから」

そう言うとりリアは微笑み、それから走って行く。俺もその背中を見失わないように追いかけた。

物語をなぞるように、まずは学園へ。そこで俺はこの学園に初めて足を踏み入れ、その異様な雰囲気圧倒された。

ファンタジーばっちりの世界観……異世界という存在。受け入れがたい事実ばかりで、どこか気持ちも落ち着かなかった。

この場所で俺はアクセルに出会い、そして仲間たちと出会った。全てはここで始まったんだ。英雄学園ディアノイア……。変形しまつて外見は変わってしまったけど、それは決して変わらない。

「覚えてるか、リリア？ ゲルトの試合のチケットを風に飛ばされて、一緒に校庭探し回った事」

「あ、あれは……。うう、今思い出してもへこたれざるを得ないですよう……」

大好きっていうか、憧れっていうか……えへへ。ゲルト・シュヴァインの観戦チケットって、結構手に入らないんですよ！ はい！

大好きなゲルトの試合を見たくてここまでやって来たのに、俺と話していたらそれを風に攫われて……。そう、結局確か、水路の中に落ちてたんだよな。

それでリリアは躊躇なくそこに飛び込んで……。今思うと馬鹿だなこいつ。でも、楽しそうだった。ゲルトの試合を見られて、嬉しそうだった。

自分の事みたいにゲルトの事を語って、目をキラキラさせて……。そうだな。ゲルトとリリアの絆は、結局一度だって断ち切れなかったんだ。二人はいつも相手を想っていた。それがどんな形であれ、思いは繋がっていたんだ。

「びしょぬれになって、それでチケット売り場のおじさん、怒らせちゃったんですね」

「しかも俺はタダ見たっただけ」

「そ、そうだったんですか！？ 師匠、悪い子ですね」

「その師匠ってのも何か……懐かしいな」

今聞くと馬鹿らしい呼び名だ。確か俺が、半ばやけくそにリリアを鼓舞したとき、そんな話に成ってしまったんだっけ。

師匠、か。その呼び方、そんなに嫌いじゃなかった。リリアにそう呼ばれていると頑張れる気がした。カッコつけられる気がした。だから俺はその呼び方が嫌いじゃなかった。

リリアは俺よりも立派だ。女王にもなった。きっと最強の勇者になれるだろう。だから師匠なんて相応しくないし、そんな風に呼ばれる資格は俺にはないけど。

「……ありがとな、リリア」

「え？」

「俺の事を信じて付いてきてくれて……。師匠って呼んでくれて、ありがとう」

そう呟くと、リリアは少しだけ寂しそうに笑った。そう、俺たちはもう師弟関係ではない。仲間……なのだろうか？ いつかは別れが来る事を知っているから。俺たちは素直に笑えなかった。

「それで、まずはランキング最下位を抜け出そうって！ えへへ、なんだか今思うと……打倒ゲルトなんて夢のまた夢だったよね……」

それでもリリアは戦った。勇者になんか成りたくなかったというリリア。それでもリリアは戦ったんだ。

初めての戦いはメリーベルだった。そこで俺はリリアの信じられない根性を目の当たりにした。血まみれになり、何度も意識を失いながらもリリアは絶対に引き下がろうとはしなかった。

遠慮、せず……かかってきて、ください……ッ！ リリアは……逃げも、隠れもしませんからっ！！

もう見ていられなくて心中まともじゃなかったのを今でもはつきり覚えている。もう、直ぐにでも助けてやりたくて。でも、誰もそれを望んでいなかった。

あの頃から既にそうだったのかもしれない。俺がリリアにしてやれることなんて何もなかった。あの子はいつでも一人で立派に戦っていた。そして、今でも……。

「メリーベルにボコボコにされたよな」

「あれはすつごく、すつごく痛かったよ……。気絶とか初めてしたもん」

「……ゲルトも試合見に来てたよ。あいつ、きっと何だかんだで前の事が気になってたんだろうな」

「そ、そうだったんですか……。あの頃はゲルトちゃんとも、上手く行ってなくて……。擦れ違ってばかりでしたね」

リリアがゲルトにぶん殴られた事もあった。今にして思えばあのときのリリアの態度はゲルトにしてみれば侮辱以外の何者でもなかったのだろう。

それも仕方無いことだった。ゲルトはそれだけリリアに執着していたし、リリアはそれだけゲルトに罪悪感を覚えていたのだから。その二人のお互いを思う気持ちは擦れ違い、あの出来事が起きた。勇者同士の戦い……。黒白の勇者は雨の中激突した。どうしようもない悲しみと擦れ違い、心から湧き上がる衝動を隠そうともせず、二人は戦った。

リリアはそこでゲルトと正々堂々本気で争った。二人は真剣に力を競い、そして全てが終わる頃にはすっかり打ち解けてしまっていた。まあ、当然の事だ。本当はこれ以上ないくらいの親友だった二人の間にあつた誤解が解かれただけなのだから。だが、それは予想もしなかった力を呼び覚ました。

魔王ロギアの力の覚醒。だが、それはリリアの中に眠る力を呼び覚ます事件の発端に過ぎなかった。

「思えばあの時、ゲルトちゃんと戦って魔王の力に目覚めたんですね」

「お前は気を失ってたから知らないだろうけどな。そりゃもう、苦労してお前を倒したもんだ」

「うう……ごめんなさい」

「謝るのはまだ早いぜ？ 確かに俺たちの物語は、お前に謝っても

らわなきゃならないシーンが多々あった。例えば　」

初めての課外実習で俺たちは始めて学園の外に出た。列車なんて近代的なものがあって、課外実習では新たな仲間も出来た。

ブレイド、アイオン、ベルヴェール……。ノックスでの魔物発生事件ではマルドゥークとも邂逅を果たした。そして俺たちはそこで初めて死とリアルな戦いを肌で感じたんだ。

リリアは恐怖と何かを実際に殺さねばならないという事実に完全に震えてしまっていた。俺はあの時何を感じただろう？　現実味のないうリアル……。俺はこの世界をまだ一つの現実だと考えてはいなかった。

人の死や目的よりも、リリアを守る事が全てだった。多分それは冬香のこととかも関わってきていたのだろう。でも、リリアはそんな俺に反発を示した。

……助けられたかも、知れなかったのに……。っ。

目の前で子供が魔物に殺された時のあのリリアの横顔は今でも覚えている。きつとあの時、リリアは俺さえも憎んでいただろう。

当然といえば当然か。だがあの頃の俺たちにはまだ大した力もなく、救える物と救えない物があつた。何かを選ばなきゃいけないくなつたとき、俺はリリアを選んだんだ。

「ノックスの坑道の戦い……。お前、一人で突っ走りやがって。ベルヴェールがいなかったら間に合わなかった」

「あれは……。だって、夏流が戦っちゃだめっていうから」

「……だから、無茶すんなって言ってんだろ？　お前の事を心配して言ってるんだから」

「リリアはリリアのことよりも周りの人のほうが大事なんです！
自分が傷ついてもそれで何かを守れるならそれでいいじゃないですか！」

「……未だにそんな事を言ってるのかお前は」

そういえば、こうして心は擦れ違ったまま、俺はアイオンと戦う事になった。

リリアはルーファウス……フェンリルに術を教わるようになったわけ。あの時点で既に俺たちの師弟関係は崩れていたのかも知れない。そうそう、ゲルトがスランプになったのもこの辺だった。あいつはあいつで苦勞させられたつけ。まあ、何はともあれ……俺はその時強くなる事に躍起だった。

兎に角強くなることで何かが変わるような気がしていた。守れる気がしていた。そんな時、アイオンは俺に教えてくれたんだ。戦う事、強くなる事、立ち止まらない事……。多分、俺の気持ちを見透かしていたあいつには、その後も色々世話になることになった。ちまつた。

なつるさあああああんっ！！

そういえば、リリアが大声で叫んでいたわけ。あの一瞬だけ闘技場が静まり返って……。意地でも勝たなきゃって思えたんだ。でも結局、アイオンには届かなかった。
夏休みになって、俺たちはリリアの家にも行った。あそこでは短期間に色々な事があったな……。

リリア、勇者になんか成りたくなかった。勇者なんてくだらないうって思ってた。勇者になっても何もいい事なんか無い、救えるこ

となんかない、って。でもそうじゃないんだね。勇者かどうかが問題なんじゃない。この世界を守る人間の一人として、どう行動するのか……それがきつと大事なんだと思うんだ。

少し成長した、大人びた表情を見せたリリア。ゲルトはスランプが深まる一方で、リリアと折り合いがつけられずに苦しんでいた。

リリアはゲルトの事を心から思っていた。だからゲルトを追いかけるなどと言った俺にも食って掛かってきた。リリアは大人しそうに見えて意外と根性がある女の子だ。男だろうが目上だろうがなんだろうが、大切な物を守ろうとする時、彼女はいつでも強い目をしていた。

まだ子供であることも手伝って時々その行動は短絡的で幼いものだったが、それでも真つ直ぐ前だけ見ていた。そんなリリアとゲルトの間を引き裂いたのが、犬ことフェンリルだ。

やつは突然現れ、ゲルトの魔剣を奪って行った。全員でかかっていたのに、あっさりと俺たちは敗北してしまった。フェンリルの強さは出鱈目だ。多分追いつけるのは当分先だろうな……。

カザネルラではちょっと恥ずかしい思い出も多かった。リリアと一緒に手を繋いで寝転んだ花畑や、リリアが心の中に抱えていたどうしようもない気持ちを吐露したり……。俺は、それを今でも受け入れられているのか怪しい。

リリアは表面上は明るく元気で誰にも心配をかけないようにしている。転んでも泣いても直ぐに立ち直って笑おうとする。でも心の中ではその境遇からして他人を信用せず、強固な心の壁を作っている。彼女は俺を信用しなかったのだろう。でも、出来なかった。そのジレンマがどうしようもなく心を蝕んでいた。

俺もきつとそうだった。俺たちは同じだった。だからそれから少しずつ、時間を重ねて俺たちは分かり合って行く。少しずつ、少しずつ。

オルヴェンブルムに近い敵勢力から順次迎撃します！ 御願します、ついてきてくださいっ！！

オルヴェンブルムでの戦闘が起きたのはそれから間もなくの事だった。フェンリル率いる魔物の軍勢はオルヴェンブルムを襲撃し、学園も参戦せざるを得ない状況に追い詰められた。

ディアノイアから優秀な生徒を集め、戦場へ送り込む。実戦が始まった。あの時の息が詰まるような緊張は忘れられない。無理に自分を鼓舞しようと、大声をあげた。

リリアは勇敢に戦った。今思えばあれがリリアの勇者デビューだった。聖剣を手に敵陣に切り込む勇猛果敢なその姿はどれだけの仲間を救ったかわからない。

一生懸命に頑張るリリアはいつも疲れていた。でも、いつの間にか誰からも好かれるようになって……。俺たち勇者部隊は仲間から特別な意味を込めて呼ばれるようになっていった。
プレイブ克蘭

「あの時は、本当に辛かったです。自分が辛いんじゃない。仲間が……同じ学園の生徒が死んでいくのが」

「皆、守れるものは少なかった。どうすればいいのかもわからなかった。一生懸命で……無我夢中で。だから仕方が無かったのは確かなんだが」

「うん。それでも多分、胸の痛みは一生赦される事はないんだよね……」

俺たちはそこでグリーヴァに遭遇した。ゲルトを拉致られてマジギレしたリリアの所為で色々と大変な目にもあった。

グリーヴァとの戦いはリリアの中の勇者の力をさらに覚醒へと導いて行く。そして俺たちはフェンリルとの戦いをロギアの力に頼りな

んとか切り抜ける事が出来た。あの時ロギアの力が無かったら……俺たちはどうなっていたかわからない。

「グリーヴァは、死んだんだよね？」

「ああ」

「……それでも、赦せないかな。ゲルトちゃんをあんな身体にしたんだから……」

「赦す必要はないさ。いつかそうなれた時、それでいいだろ」

「……戦争の所為でみんな暗くなつてたよね。だから、気持ちを盛り上げたくて皆で学園祭、やったよね」

そうそう、ミスコンなんて馬鹿なこともやった。

リリアが一番得意なのは料理なんです、ここでは出来ない
ので 歌を歌います。

あの時リリアが聞かせてくれた歌は素晴らしかった。いつか機会があったらもう一度聞きたいと思う。

でも学園祭はそれだけでは済まなかった。秋斗との遭遇……。それはまた俺とリリアをすれ違わせて行く。

秋斗との戦いは俺にとって望ましい物ではなかった。リリアの事を構っている余裕が無かったのも事実だ。俺は現実に戻り、覚悟を固めた。

人はみんな一人だからです。生まれた時から死ぬ瞬間まで……。だから、何も頼れない。

リリアとは仲直りできたわけではなかったと思う。でもリリアは俺を一生懸命に探してくれた。見捨てられた子犬みたいなあの目だったっけ。

俺たちはそれから少しギクシャクした。思えばずっとギクシャクしっぱなしだった気もする。でも、俺たちの間にあった壁は目に見えるほどに薄っすらと浮かび上がり始めていた。

そして、例の大聖堂事件に発展する。リリアは大聖堂に捉えられ、俺は北方大陸に向かう事になった。

リリアはフェンリルに救出され、そこでアクセルと戦うことになった。様々な暗い感情に支配され倒れそうになるリリアを、フェンリルはずっと支えてくれた。

俺もまた、幾つかの戦いや出会いを経てリリアに伝えたい事を思い出していた。すれ違ったままだった俺たちは再会した時にはまるで何事もなかったみたいに話す事が出来た。

「ディアノイアに戻ってきたら、学園が変形して……。大聖堂に潜入して……。それで、マリア様は、リリアたちを守る為に……」

マリアの死は大きな事件だった。俺は直接親しかったわけではないが、後にリリアの母であった事が発覚し、そしてゲルトにとっては大切な忠義の対象でもあった。

そこでリリアは聖剣リインフォースの刃の中に眠っていた真の姿、神剣フェイム・リア・フォースを覚醒させる。それは同時にロギアの封印の解放をも意味していた。

魔王の力を完全に目覚めさせたりリアは驚異的な力を手に入れた。しかしその代償にマリアはこの世を去る。マリシアとの戦いは熾烈を極め、そしてリリアはマリアの死をきっかけに女王へと就任する。

「リリアが女王に就任した時……夏流、寂しかった？」

ふと、そんな事をリリアに言われた。俺は考えを中断し、その事実へと想いを馳せる。

リリアが就任の儀式を受けている最中、俺は式典会場を抜け出した。女王になるための階段を一步ずつリリアが登るのを見て、彼女が遠ざかって行く気がしていた。

彼女には俺がこの世界の人間でないことを話してある。俺はいつかは元の世界に帰るだろう。だから、一緒には居られない。いつかは別れが来る……それが辛くて恐ろしくて仕方が無かった。

これ以上親しくなることはないようにと願った。リリアは俺を好きだと笑ってくれた。彼女の唇の感触ははつきり覚えている。それは多分、冬香のものと良く似ていた。

彼女に彼女の面影を重ねる瞬間が増えて行く。その度に俺は恐怖を覚えた。心は苛まれ、どうすればいいのかわからなくなった。そんな俺の気持ちを汲み取ってか、リリアは俺を自ら遠ざけた。彼女はオルヴェンブルムへ、俺はディアノイアへ……。

「リリアは、すごく寂しかったですよ？ 夏流さんが傍に居るって事が、どれだけ当たり前になって…… どれだけ大事だったのか、思い知った」

「……リリア」

「でも、しょうがないんですね？ 師匠は、別の世界の人だから……。 帰らなきゃいけない場所があるから……。 だから、頑張って女王になって、頑張って一人前になって……。 頑張って、師匠が帰れるように、安心させてあげなきゃ」

きっとリリアは頑張っていた。慣れない仕事にも取り組んだ。女王として皆を率い、悲しみの無い世界を目指して剣を振った。

俺たちは気づけば違う道を歩いていた。でも、目指していた場所はきっと同じだった。リリアがリア・テイルから眺める空と、俺がデアノイアから見上げる空は同じものだった。

でも、いつかは終わってしまう。この世界が俺にとって幻であり、俺がこの世界のとつての夢であるように。いつかは終わってしまう。

どんなに胸躍らせる冒険も、どんなに心高鳴らせる愛の物語も、それがただの物語である以上いつかは終わりを迎えてしまう。それは『空白の日』がくれば終わるんじゃない。明確な終わりはきつと、いつかどこかに待っている。

俺はそうなった時また歩き出せるのだろうか。それがわからなくなる。俺はこの世界を知り、真実に近づく度にこの世界を好きになつた。もう、忘れることなんかできない。

こんなにも思い出が胸の中で渦巻いている。こんなにもこの世界が好きだ。こんなにも、リリアを失いたくないと願っている。

「ケルゲイブルムでの戦い、夏流がきてくれて本当に嬉しかった。夏流はリリアのヒーローだから……。いつだって助けに来てくれる心を守ってくれる、いつも不機嫌そうな顔しておでこにしわ作ってるけど、ホントは優しくて……。っ！ だから、リリアは……」

「……………リリア」

顔を上げたリリアは泣いていた。泣きながら笑っていた。俺は目を閉じる。どうして俺はいつもこうして、誰かを泣かせることしか出来ないのだろう。

「楽しい事、幸せだった事……いっぱい、いっぱいあったよね……っ」

「ああ……」

「悲しい事も辛い事も……皆で一緒に乗り越えてきたよね……っ」

「ああ……」

「リリア、頑張ったよ……。頑張って頑張って、これからも頑張っていくよ。だから、夏流なんか、いなくなっただって、平気なんだよ……っ」

「ああ……」

「だから……っ！！ だから、夏流が居なくなっても、リリアちゃんと一人で頑張れるから……っ！！ だから……っ！！」

泣きながら笑おうとするリリア。俺は見えていられなくなり、その顔を隠すように自分の胸に押し当てた。

少しだけ力を込めて抱きしめる。リリアは俺の胸に爪を立て、大声を出して泣いた。思い出の詰まったこの学園の校庭の中、リリアは子供みたいに泣いた。

沢山の涙を零し、声にならない声をあげ、何度も俺の胸を叩いて泣いた。その全てが自分の中に染み込んで、心を奮わせるのが良かった。

リリアはちつとも泣き止みそうにもなかった。心の底から悲しくて、どうしようもないほど悲しくて、それをずっと我慢して、だから止まらなかったのだと思う。

俺が異世界の人間だと告げたとき、リリアは笑ってくれた。赦してあげると言ってくれた。俺の頭を撫でて、それから抱きしめてくれた。

もつと自分の気持ち、誰かに伝えてもいいと思います。もつと解って欲しいって言ってもいいんですよ？ 人間はきっと、皆そうして誰かに助けを求めている。求める権利を、最初から許されているから。

それはこの子の言葉だった。でも、それを一番出来て居ないのはきつとこの子自身だ。

もつともつと、俺を頼って欲しかった。いつか来る別れの日までの間、ずっと君を守りたかった。心も身体も、何もかも。この世界の全てと共に。

いつか終わってしまうとしても、ここに誰かが居たんだってことだけは忘れたくない。ここに俺が居たって、声を大にして叫びたいんだ。いつか誰かの心から俺が居なくなっても、俺はきつとそれを忘れない。

この小さな勇者に出会う事が出来た一つの奇跡を、きつとずっと忘れない。

「帰っちゃやだ……。帰らないで……。行かないで……」

「……リリア」

「貴方がいない明日なんて……。っ！ 夏流が傍に居てくれない今日なんてっ！ ただ、思い出になっってしまうだけの昨日なんて！

そんなの要らないよ！ そんなの意味ないよおっ！！ 『そこ』に夏流が居ないのに、どうやって笑えばいいの！？ ねえ、教えてよ……。！ 教えてよ、なつるさんっ！！」

それは、俺も同じことだ。君が居ない、明日の僕を想像出来ないよ。僕は、いつでも彼女を求めている。傍に居てくれない、居てあげられなかった過去のことばかりを後悔した。

でも僕はまた君出会う事が出来た。君は冬香じゃないから、冬香のように思う事はきつと間違えているんだろう。

だから、ずっと傍には居られない。いつかは終わってしまう。それは、自分自身で決めた事だから。自分で自分を強くする事だから。きつと僕は 俺は。それでも明日に進んでいける。悲しみを置き去りに、未来を信じなきゃならない。そうして乗り越えて、前へ。

「一人で頑張るなんて、無理だよ……っ。なつるさんが居ない未来なんて……そんなの、守る意味、あるの……？」

「……………ごめんな」

「貴方はいつも自分勝手にそうやって……っ！ そうやって……っ！……」

暴れるリリアを放すことはしなかった。そうしてしまっただらもう、二度とお互いの存在が触れ合う事は出来ない気がした。

「だったらどうして優しくしたりするんですか！？ どうして守るとか言うんですか！？ どうして救うとか…… どうして人の心に勝手に入り込んでくるんですかっ！？」

「……………」

「貴方なんて好きになりたくなかったっ！！ 貴方なんて、出会わなければ良かった……っ！ 貴方さえ居なければ、私は……っ！ 私はずっと、明日が見えないまま……一人で暗い気持ちを引き摺ってた……」

静まり返ったリリアは涙を流しながら俯き、齒を食いしぼる。そうして　本当に心のまま、素直な悲しい表情で俺を見上げる。いつもの間抜けな笑顔はそこにはなくて、代わりに大人びた悲しい瞳が俺を映していた。

「嫌いになんてなれるわけじゃないですか……。毎日毎日、貴方の事を忘れようと、嫌いになろうと考える度、もっともつと好きになる……。そんなの、忘れて生きていけるわけじゃないじゃないですか……」

「……ごめん」

リリアはもう何も語ろうとはしなかった。目を閉じ、ただ彼女を抱きしめる。

この世界で出会ったこのへこたれ勇者様の事を、俺も一生忘れない。忘れる事なんて出来るはずがない。そう、これから一生、ずっとずっと　ずっつと覚えてる。

小さな女の子が必死に齒を食いしばって頑張っていた事。俺が好きだと言ってくれたこと。

遠く離れてしまっても、決して　。

決して、そう　。俺は、リリアを忘れない　。

風が吹く中、俺たちはお互いの瞳に映った自分を見つめていた。その虚幻を掻き消すように目を瞑り、いつかのように俺たちは唇を重ねた　。

約束の日(4)(後書き)

くそれゆけ！　ディアノイア劇場Z

そして最終決戦へ！

リリア「あにゃーっ！」

ゲルト「ど、どうしたんですか急に」

リリア「えっと、本編がなんか恥ずかしい事になってるので少しでも気分を紛らわせようと思って……」

ゲルト「そ、そうですか……。何はともあれあと六話くらいで魔王と決着が付きますよ」

リリア「問題はその後なんだけどね……」

ゲルト「にしても、いつもより長い一話になってしまいましたね」

リリア「皆きつと感情移入してうるうるしてる頃だと思うよ！」

ゲルト「いや、それはどうでしょうか……」

リリア「皆存分につるつるして、このあとがきで気分ぶち壊しになるといいよ……」

ゲルト「……。まあ、もう皆ここ読んでる人はぶち壊しになるの前提で読んでると思いますけど」

約束の日(5)

「必要な物はこれで全部か……」

決戦の日を間近に控え、俺たちはリア・テイルの奏操席の前に集まっていた。

俺の背後には皆が揃っている。この戦いの賭ける思いは、恐らくそれぞれ違っただろう。だが、一人一人の願いは違っても、全ての光は同じ場所に続いていると信じている。

だから……俺は胸を張って前に進める。皆と一緒に、この世界の敵と戦える。たとえこの身が異世界の存在……彼らにとっての虚幻だったとしても、それでも共に行ける。

「それじゃあ、始めるぞ白蓮。リア・テイルを　ミッドナイトシステムを起動させる」

「了解しまシタ、マスター」

台座の前に白蓮が立ち、その傍らにリリアが立つ。白蓮がミッドナイトシステムに干渉すると、台座の前に鍵の差込口が現れた。

リリアは迷う事無く神剣を掲げ、それを鍵穴に差し込んだ。神剣は眩い輝きを放ち、リア・テイルに本来在るべき光が戻って行く。

「……これで、ミッドナイトシステムは再起動した。あとは出撃の時にいつでも飛べるよ」

振り返ったリリアはそう言って俺たち全員を見渡した。俺たちは全員彼女と視線を交わし、そしてそれぞれ胸の中の想いを確かめる。あの日、リリアは俺の腕の中で泣きじゃくっていた。しかし今はも

うあの時の子供のような面影はリリアにはない。リリアは女王として立派に勤めを果たそうとしている。そのリリアの行いを俺には邪魔出来ない。

出来る事があるとすれば、残せる事があるとすれば、ここで悲しむ事じゃない。彼女の道となり、彼女の願いを叶え、彼女の世界を守る盾となる事。救世主である事。それが、俺に出来る最後の優しさなのだ。

「出撃は、明朝……。明日にはパンデモニウムとの決着を付けることになります。これで真正正銘、最期の戦いになると思う」

ここにいる皆は、俺たちと一緒に昔からずっと戦ってきた勇者部隊の仲間たち。そして、その戦いの中で出会い、時には刃を交え、分り合い、共に戦ってきた。

各々の望む未来の為に、それぞれの願う想いを胸に……。リリアや俺だけじゃない。この世界に生きる皆の希望を背負って俺たちは戦うんだ。

魔王との戦いを決着させ、そしてこの国は、世界は、再び平和を取り戻せるのだろうか？ 勿論それはわからない。でも、誰かがやらなきゃいけないことだから。

それをやるんだ。俺たちで。仲間たちで。この世界で出会えた奇跡の力、その全てを出し切って闇を振り払う。

「全員生きて帰って来る事が私の願いです。でも、もしかしたら途中で誰かが力尽き、倒れてしまうかも知れない。仲間の命が次々とむごたらしく失われていくかもしれない。それでも……。それでも、皆で誓おう？ 約束しよう。ここで」

リリアは神剣を引き抜き、それを俺たちに向けた。俺たちは自然と輪を描いていた。仲間たちは各々武器を手に取り、神剣に重ねる。

幾重の武器が、俺たちの歩いてきた道の象徴が、今ひとつに重なり合う。音を立て、皆でそれを分かち合う。そう、ここに誓いを立てる為に。

「決して振り返らず、皆自分の願いの為に、明日の為に戦って欲しい。たとえ誰かを失う事になったとしても、決して振り返らず、明日だけを見て……。前に進み続けなければ、この戦いに意味はなくなるから。全てを終わりにには出来ないから。だから 私はそれを願う」

全員で武器を掲げ、そしてその影の中、リリアは光と共に微笑んでいた。

「どうか、全ての英雄の魂が我が剣と共に在らん事を！ 導きの神韻は、我らが魂と共にツ！！」

甲高い音が響き渡り、俺たちは武器を納めた。リリアは背を向け、それ以上何も語ろうとはしなかった。

最後の夜がやってくる。決戦を前に、思い残す事がないように……。俺は目を閉じ、歩み寄ってきた白蓮と共にその場を後にした。

約束の日（5）

新たな魔剣を手にしたゲルトたちと再会したのは、今よりも数日前に遡る。

どうやら打ち直しには成功したらしく、ゲルトは上機嫌だった。しかし同時にこの戦いの先を憂い、色々と考えたい事もあったらしい。ゲルトと別れ、俺はメリーベルと彼女の実家だった屋敷に向かった。

そこは今でも使用人たちによって整備されていたものの、住人の姿はなかった。

彼女の母はとくに病死しており、その病気がちな体質をメリーベルも受け継いでしまったのだという。そして俺たちは予定通り、かつてメリーベルが暮らしていた部屋に足を踏み入れた。

まるで病室のような部屋だった。窓から見下ろす庭園、限りある世界……。白いカーテンが風にはためいて、きらきらと輝く。俺たちはそこでグリーヴァの遺志を見つけた。

遺されていたのは小さな小瓶だった。そこには手紙も添えられていた。メリーベルはその手紙を読むと、一気に瓶の中身を飲み干した。苦しみ出し、そして気を失ったメリーベルをベッドの上に寝かせ、俺はしばらく様子を見ていた。様子を見る間にグリーヴァの手紙を読み、俺は彼の思いを知った。

メリーベルの魔女化を解除する薬を、彼はとくに作り出していたのだ。そして正気を失いつつある心と身体でこの場所を訪れ、過去の記憶に一瞬だけ彼は自分を取り戻していた。

妹への謝罪の言葉が述べられた手紙……。そして、その小さな瓶の中身が聖なる薬であるという事、その二つの事実だけが肩に重く圧し掛かった。

目を覚ましたメリーベルはすっかり魔女の呪いから解放されていた。しかし同時にメリーベルは魔女化の影響で抑制されていた虚弱体質が再発し、一気に体調を崩していた。

夜までベッドの上で休む彼女を看病し、俺はようやくグリーヴァの気持ちを理解した。メリーベルの病、そしてそれを見ていることが出来ない気持ちを……。

「……これで、パンデモニウムには一緒に行けなくなったかな」

「……そうだな」

「ゲルトにも薬を分けてあげればよかったと思った？」

「……………」

「安心して。昔ほど弱いわけじゃないから。ゲルトはあたしが一生かけて治して行くつもり。大丈夫、兄さんには出来たんだから……あたしに出来ないはずがないから」

メリーベルは立ち上がり、元気そうに微笑んだ。これは結果論になるのだが、グリーヴァは結局妹の病をある程度押さえ込み、そして呪いを解くことにも成功していた。

彼女は体調が回復するなり、すぐさま兄の研究室に籠ると言い出した。パンデモニウムに行っても足手纏いであるのなら、せめてそこでゲルトを治す手がかりを探すという。

それは確かに正しいことだと思う。あの薬はグリーヴァがメリーベルに送ったものだ。それ以外の誰かのものではない。メリーベルがゲルトを治したいと思うのであれば、世界中を駆けずり回ってでも自分の力で治すべきなのだ。

そうすることこそ兄のたった一つの善行を肯定する事であり、自らの道を進む事でもある。メリーベルは何も言わなくてもちゃんとわかっていた。

「……………ありがとね、ナツル」

「俺は何もしてないよ。ただ、見てただけだ」

「それでも、嬉しかった。安心した……。ついでだから、一つ約束して」

頬を赤らめ、いつもとは異なる子供っぽい笑顔ではにかみながらメ

リーベルは小指を俺に差し出す。

「魔王を倒して、戻ってきて。そしたら……ナツルの事、お兄ちゃんって呼んであげてもいいよ」

「なんだそりゃ」

「妹属性萌え　　なんでしょ？　それだったらあたしにも……チャンス、あるかもしれないし」

「は？」

「……いいから約束……ね？」

彼女は強引に俺の手を取り、指を絡める。約束を交わす指と指の絡まりが解けると、メリーベルはいつも通りのクールな表情に戻った。俺はメリーベルの頭を撫で、それからその肩を叩く。これから、メリーベルはきつとゲルトの為に戦い続けるのだろう。兄の傷を、受け継いで。

きつともう、メリーベルは一人で部屋に籠って研究を続けたりしない。仲間と一緒にいれば、きつと新しい方法が見つかる。一つの目では見えなくても、仲間と一緒に見えるものもある。それに彼女は気づけたから。

「ああ。これからも頑張れよ　　メル」

その呼び声に彼女はきつと心の中で燦らせていた悲しみを一気に崩壊させた。俺の胸に額をあて、メリーベルは暫くの間声も無く泣いていた。

彼女と別れ、屋敷を出たところで何故かメフィスに遭遇した。一人

で煙草の煙を吐き出していた彼の前に立ち、俺は首を傾げる。

「どうしたんですか、こんな所で」

「……何、もう何年も戻って居ない我が家にホームシックという奴だ。私の時代はもう終わったよ。これから若者の時代だ」

「何言ってるんですか。娘に追い抜かれたのがそんなにショックなんですか？」

「ショックではないさ。素晴らしい事だよ。この歳になって、また『追いかけられる』……。目指す物があれば人は躍進を遂げる。何度でも、何度でも」

彼はそう俺に告げて歩き出す。家には寄っていかないようだった。ふとその背中が立ち止まり、振り返る事は無く声だけが飛ぶ。

「君には感謝しているよ、本城夏流君。出来ればこれからも、メリーベルを見守ってくれとありがたい」

「……………ええ、きっと」

俺は嘘をついた。もう、彼女に迷惑をかけることもないだろう。俺はもう直ぐこの世界から居なくなる。メルを見守ってやる事はもう出来ない。

不器用で人付き合いが苦手で、でも本当は優しくて臆病で、誰かを救う為に熱くなれる女の子……メリーベル。何度も無茶を言っ、無茶をさせて、ここまでずっと付き合わせてしまった。

これからは俺以外の誰かの力になっていくだろう。そして彼女は錬金術師として大成する。兄も、いずれは父も超えて、魔術教会の代

表にでもなるだろう。

それが彼女の物語なら、俺の関わる余地はここまでだ。目を閉じ、小さく息を付く。再び顔を上げるとそこにはもうメフィスはいなかった。

メリーベルにお兄ちゃんと呼ばれている自分を想像してみる。成る程、確かに可愛いかもしれない。多分メリーベルは兄にべったりだったんだろう。その代わりになってやることは出来ないけど……。

「ありがとな、メリーベル。親父さんと素直になって仲良くしろよ」

妹のレンと一緒に壊れた大聖堂の前にいるアクセルを見かけたのは、その帰り道だった。

レンは酷い有様だった。髪は乱れ、目は虚ろに廃墟を写している。その肩に腕を回し、アクセルはずっと何かを話しかけているように見えた。

そつと近づき、レンの肩を叩く。彼女は俺の姿を見ても何の反応も示さなかった。まるで壊れてしまった、人間に良く似た人形を見ているかのようだ。

「……ナツルか。はは、悪いな……。レンの奴、まだ持ち直してなくて」

「いや、仕方ないさ……」

大聖堂との戦いは、誰も結局幸せになんかならなかった。

同じ未来を信じて、ただ傷を癒したくて、皆必死だった。信じたかった。守りたかった。沢山の思い出を、未来を……。

それ以外に生きる道が無くて、仕方が無く闇に身を落していた。誰が喜び勇んでそんな事を望んだだろう。誰もきつと、それは望まない。俺でも、彼でも、彼女でも。

上着をレンの肩に掛けるアクセル。寒い寒いと思っていたら、どうやら雪が降り出したようだった。春はもうすぐのはずなのに、どこかとても遠く感じる。

「ディアノイアが孤児を受け入れてくれて良かったよ。レンはまだ、皆と一緒に訳にはいかないけど……。他にも結構まだ、塞ぎこんでる子は多いからな」

「……そうか」

「……俺さ、学園の教師になろうかと思ってるんだ」

突然のアクセルの言葉に流石に驚く。だが、それはどうも彼の中ではずっと前から決まっていたことらしい。

「力を正しく導く事の難しさ、その必要性を嫌って程俺は味わった。そついう痛みを抱えているからこそ救える物もあると思うんだ。だから……難しいだろうけど、チャレンジして行く」

「……なんでそれを俺に話したんだ？」

「んー、気合を入れる為に、か？ はは、お前頑張ってるからさ。負けてらんねーだろ？ それに お前に聞いて欲しかったんだよ」

白い雪の中アクセルは空を見上げる。空は雲に覆われていて、白い雪が視界を遮る。それでも何かを求めるように、ゆっくりと手を伸ばす。

「今はまだ光は見えない。皆暗闇の中だ。でも俺たちを導いてくれる光がある限り、諦めずに居られる。やっぱ、リリアちゃんはい

な。俺が惚れただけの事はあるよ」

どうやら今回は本気らしく、アクセルは大人びた笑顔を浮かべて俺の肩を叩いた。俺はそれに笑顔で返す。多分そう、コイツとはそういう関係で充分だから。

「リリアちゃんを守らなきゃな。俺とお前で　パンデモニウムからだって、相手が魔王だって、あの子を守るんだ。ナツルが一緒に負ける気がしないぜ。なあ、相棒！」

「都合のいいときだけ調子いいこと言ってんじゃねえよ、馬鹿」

「照れんなって、コノコノ〜！」

「あーうぜえっ！！　お前そんなこと言ってる暇があつたら自分のやるべきことやれよっ！！　ほら、レンが見てるだろうが！！」

二人して取っ組み合いになりながら叫ぶ。二人同時にレンへと視線を向け、それから俺たちは言葉を失った。

レンが俺たちのやり取りを見て笑っていたのだ。くすりと、小さく。笑顔は直ぐに消えてしまった。でも、アクセルの声はレンにちゃんと届いている。

「……ナツルが変な事言うから、笑われちまつたろ」

「……………そうだな」

「はは……。ああ、馬鹿みてえだな、俺たち。そっぴや、学園じゃずうつとこうだったよな。馬鹿ばかりしてた……。レンもあの輪の中に、混ぜてあげたかったな……………」

アクセルは膝を着き、寒空の下レンを強く抱きしめていた。泣いていたのかもしれない。肩を震わせ、ぎゅっとレンの服を握り締める。俺はあえてアクセルを見なかった。多分、泣いているのだとしたら、そんな姿を俺には見られたくないと思うはずだから。だから俺は、友達の泣き顔は見ないようにした。

「俺……俺、これから頑張るよ。何回だって諦めずにやってやる……。もう、こんな事は……こんな悲劇は、絶対に起こしちゃいけない。だから魔王は倒す……。もう、誰も悲しませない為に……」

「アクセル……」

「これからの子供たちを、俺たちで守るんだ。なあ、ナツル……。良かったら、一緒に学園の教師、目指さないか？」

立ち上がったアクセルの目に涙は無かった。その代わりに、強い輝きにも似た決意があった。アクセルの言葉に俺は目を閉じ、それから応える。

「……ああ。悪くないな」

「だろ？ きつと俺とお前なら、ルーファウス先生とソウル先生みたいないい関係になれるぜ」

「それはいい関係なのか？ というか、ソウルポジションはお前だよな？ 俺は絶対いやだぞ……」

「ははっ！ ……ありがとな、ナツル。この戦争が終わっても、宜しく頼むぜ」

アクセルの求める握手に俺は握手で応えた。しっかりと互いの手を握り締め、思いを重ねる。

二人して笑いあいながら握手なんかしていると、背後から誰かに肩を叩かれた。振り返るとそこにはマルドゥークとエアリオが立っていた。

「こんな所で何をしているんだ。全く……。学園の教師になる前に、妹に風邪を引かせるような兄ではろくでもないだろう」

「……………今戻ろうと思ってたところだったの。ったく、マルは五月蠅いな」

「何だと貴様……。？ 大聖堂の残党の分際で、偉そうな口を お
ごおっ!？」

マルドゥークの目玉が飛び出しそうに成っているのを見て俺たちは思わず啞然としてしまった。背後から弟の後頭部にチョップを叩き込んだエアリオは笑顔のままマルドゥークを押し付け前に出る。

「アクセルくん、戻りましょう？ 暖かいスープもあるわよ。レンちゃんにも、食べさせてあげましょう」

「……………エアリオさん」

「一人では守れないのならば、皆で守っていけばいいのよ。一人だけじゃ寒いなら、皆で暖めあえばあったかいわ。ね？」

アクセルの頭を撫で、微笑むエアリオ。アクセルは照れくさそうに視線を反らしたまま黙り込んでいたが、間にマルドゥークが割り込

んでアクセルをぎろりと睨みつける。

「貴様……！　いくら姉上の昔の知り合いだからといって馴れ馴れしすぎるんじゃないのか？」

「何言ってるんだ、俺は別にエアリオさんに何かしたつもりはないぞ。お前こそ、実の姉に対してべったりしすぎたるシスコンめ」

「ほざけ！　貴様こそシスコンではないか！！　このシスコン男！　シスコンダンサー！」

「うるせえシスコンメガネ！　シスコンシスコンシスコン！」

「シスコンメガネだとおっ！？　このマルドゥーク・アトラミリア、生まれてこの方一度としてそのような侮辱受けた事は無い！！　シスコンをまるで悪い事のように叫ぶんじゃない！！　ただちよっと姉上が好きすぎるだけだ！！」

「俺だってレンが好きすぎるだけだっつーの！　シスコンは悪いことじゃあーりーまーせーんー！！」

二人は暫くにらみ合い、それから突然手を取り合った。

「シスコンは悪い事ではない……。確かにその通りだ。貴様は気に入らんが、アクセル・スキッド……その心意気や良し」

「お前もなかなかわかってるじゃねえか。大事なのはシスコンかどうかじゃない。どれだけその事実に関心を張れるか……そうだろ？」

肩を抱き合う二人。何だかもう付いていけない状態になっていた。

その様子を姉と妹が小さく笑い、そしてエアリオがマルドゥークとアクセル、そしてレンを包み込むように腕を伸ばして抱き寄せる。

「そんなに仲がいいのなら、わたくしたちで家族にでもなっつてしまえばいいのよ。アクセルくんと、わたくしが結婚すればそれで丸く収まるわ」

「「収まらないからっ!？」」

「おおお、俺にはリリアちゃんという心に決めた人がだな……!？」

「姉上、悪ふざけも大概にしてください! このような男を兄と呼ぶなど、私には耐えられない!」

「俺だつてお前を弟にしたくないからっ!」

「「なんだとおっ!？」」

顔を突き合わせ、二人のシスコンが争う。仲がいいのか悪いのか……。まあ、なんにせよアクセルはもう一人じゃない。帰る場所もある。見ていてくれる人も居る。

俺は巻き込まれないようにそつとその場を後にした。振り返るといつまでも賑やかな声が聞こえてきている。その情景に苦笑し、小さく呟く。

「……ありがとな、アクセル。マルドゥークやエアリオとも仲良くやれよ」

大聖堂の崩落跡を過ぎ去り、リア・テイルへと戻ってきた。そんな俺の正面で白蓮とブレイド、それに八が何やら話しこんでいるのが

見えた。

俺の姿を見つけるとブレイドは相変わらず元気な様子で手を振った。流石に無視するわけにも行かず、彼らの元へと向かう。

「三人で何を話してるんだ？」

「おうっ！ ブレイド盗賊団の今後についてだよ。ほら、魔王を倒せば世界の脅威は残り魔物だけだし、色々な物を見て周ろうと思つてさ」

「そうか……。いよいよ夢をかなえる為に一步を踏み出すんだな。でも、お前にはまだちょっと早いんじゃないか？」

「坊ちゃんは、アリアの姫さんを元気付けてやりたいんですわ」

「は、ハ！ 余計な事言つなよ！！」

何やらちよつと話が読めてきた。拗ねてしまったブレイドを放置し、ハは嬉しそうに語る。

「アリアの姫さん、マリア女王を亡くしてからずっと塞ぎこんでいるでしょう？ 正直なところ、リリアの姫さんが女王になった以上アリアの姫さんは暇ですからねえ。一緒に旅でもどうかって話なんですわ」

「はは、そりゃいいな。アリアは超が付くおてんば姫だから、ちよつとした冒険じゃきつと満足しないぜ」

「……ニーチャン。おいら、ニーチャンたちと一緒に戦つて色々な事を知つたよ。世界には色々な事があつて、色々な人が居て……」。

上手く言えないけどさ、この世界って、スッゲー広いんだって知ってたんだ。それだけで胸がワクワクして、どこにだっていけるって思えた。でも……」

ブレイドは少しだけ憂鬱そうな表情を浮かべた。振り返り、リア・テイルを見上げる。彼はそこに何を見ているのだろうか？

「沢山の辛いしがらみがあつて、悲しい事があつて……。この世界は曇ってる。皆、この世界がキラキラしてることを忘れてるんだ。だからおいらは、この世界の楽しさを、幸せを、誰かに伝えられる人間になりたい。夢を叶えるだけじゃだめだ。魔物と戦って、人を守って……。そして、いつかニーチャンたちの事を語り継げる男になるよ！」

「お、俺たちか？ そんな大層な事はしなくてもいいだろ」

「へへ、そんなことないよ！ おいら、ニーチャンのこと好きだぜ？ ニーチャンがリーダーでよかったって思う。やっぱりニーチャンの言うとおり、おいらにはまだリーダーは無理かも知れない。でも、誰かを守るために、ニーチャンみたいなカッコイイ男になるために、これからも頑張るぜ！」

ブレイドはどこまでも真っ直ぐに俺に笑いかけている。なんだかこいつはずっとこんな調子だ。でも、今まで俺たちと一緒に戦ってきた、それなりに学んだ事もあったのだろう。

虐げられている人々のこと、ブレイド盗賊団のこと、嘗ての父親の偉業……。世界の現実を知って、ブレイドは一回り大きくなった。まだまだ保護者がついてなきゃ安心は出来ないけど、でもブレイドはきつといつか凄い大物になる気がする。

「なあ、約束しただろ？ ニーチャンもブレイド盗賊団の一員になるって。なんなら、ナツル盗賊団にしてもいいぜ？」

「おいおい、それはちょっと……」

「まだまだニーチャンと一緒にやりたい事が一杯あるんだ！ それにおいら一人じゃ、アリアはきつともてあますしな……」

そんな事はないさ。ブレイドはきつとアリアとも上手くやっていく。アリアだけじゃない、きつと誰とでも上手くやれる。それがブレイドの凄いところなんだ。

「でも、本当にお姫様と旅をするつもりなのか？」

「おう！ いざとなったら、攫うっていうのも手だろ？ 盗賊がお姫様を攫って冒険する……！ そういうのも、中々カッコイイじゃん？ やっぱ『姫』は必要だって、『姫』は！」

まあ、とりあえずそういう事しておこう。でもブレイドだったらきつと大丈夫だ。アリアも……うん、きつと自分の幸せだった時間を思い出せると思う。

「そのためにまずはパンデモニウムだ！ 魔王をやっつけて、国の英雄に成り上がってやる！ へへ、そしたらきつと、もっと沢山を守るよな？」

「その意気で一気にぶっ潰そうぜ！ パンデモニウムだろうが魔王だろうが、俺たちの敵じゃない！」

「おうっ！ー！」

ブレイドと拳を合わせ、笑いあう。俺たちの様子に八は何やら嬉しそうに笑いながら何度も頷いていた。

八とブレイドの二人が何やら今後の事を話し合っている間、俺は白蓮と二人で階段に座っていた。八と共に各地を転々としていたそうだが、こうしてまた出会う事になるうとは。

「……八との旅はどうだった？」

「はい。八はよいものデス。マスター程ではありませんが、腕も立ちマス」

「そうか……。でも、相変わらずそのマスターってのは止めてくれないんだな」

「はい。マスターはマスターなのですカラ」

白蓮は相変わらずだ。ミッドナイトの管理システムとしての役目を果たしたら、彼女は解放される手筈になっている。いや、彼女だけではない。パンデモニウムを破壊したら、もう全ての古代兵器は眠らせるべきなんだ。

プロミネンスシステムもミッドナイトシステムも、パンデモニウムも全てを終わらせる。そうなったら白蓮は自由だ。もう、居ないマスターを待ち続ける必要もない。

「……白蓮、お前のマスターはいつか戻ってくるって行っただのか？」

「……ハイ？」

「いや、お前はマスターを待ってたみたいだったからな」

「いいえ、そのような約束は交わしていません。ただ」

「ただ？」

「マスターを、信じていマシタ。だから、待つていられマス。またマスターのお役に立てる事が、ワタシはとても嬉しい」

なんというか、一途なやつだ。こないいロボットを待たせているなんて、ナタルってやつも駄目なやつだなあ。でも、もうマスターはいない。それが事実だ。そして俺はもうこの世界には居られない。だから、白蓮は新しい生き方を見つけなければならぬ。

「今度、プロミネンスの管理者を紹介してやるよ。アイオーンっていうんだけどさ」

「あいおーん？」

「なんだ、面識ないのか。かなり変わった いや、相当変なやつなんだけどな。同じ境遇だし、面倒見はいいからきつとよくしてくれるさ」

「マスターは、よくしてくれないのデスカ？」

「……ああ。俺は君のマスターじゃないからな。仮にマスターだったとしても、傍には居られない」

「……そう、デスカ」

心なしか声のトーンが落ち込んだように聞こえた。仕方なく俺は白蓮の肩を叩き、一つ命令を下す事にした。

「じゃあ、マスターとして最初で最後の命令だ」

「なんなりトモ」

「この世界で、もう二度と古代兵器が動き出さないように見守ってほしい。そして人と共に行き、お前の判断で未来を歩け」

「……複雑すぎる命令デス。抽象的な概念の具体的説明を要求します」

「そこは自分で考えろ。宿題だ」

「しゅくだい？」

「ああ、そうだ。宿題、だ」

白蓮の頭を撫で、それから立ち上がる。後についてこようとする白蓮をひっpegし、ハとブレイドに一先ず預ける。

決戦が終わればもう空飛ぶ城も馬鹿でかい砲台も必要なくなる。だからもう、これでお仕舞いだ。

結局ナタルってのがなんだったのかはよくわからなかったが……多分何かの思い違いだろう。俺は彼らに背を向けて歩き出した。

「ブレイド、元気だな。捻くれないで真っ直ぐ、夢を追いかけるよ」

そうして俺は彼らの横を潜り抜け、リア・テイルの城内に足を踏み入れた。暫く紅い絨毯を踏み進み歩いて行くと、離宮へと続く回廊

で壁に背を預けて俺を待っている奴がいた。

黒いアーマークロークに黒い長髪……。どう見ても俺を待っていたらしいゲルトは俺の前に立ち塞がり、リリアのいる離宮へと続く道を遮断する。

「……ナツル」

俺は立ち止まり、応えなかった。ゲルトはじっと俺を見詰め、恐らくずっと俺を待っていたのだろう。何度も心の中で練習したかのようなその言葉を口にした。

「少し、話があります。付き合って……もらえますか？」

断る理由はなかった。俺は頷き、ゲルトに連れられるまま、離宮から遠ざかるように歩き出した。

約束の日（6）

「貴方にこれを渡すようにと、リリアから頼まれています。それと……もう、別れは済ませたと言付けてくれと」

「これは……」

ゲルトの手から俺に渡された物、それはどこかで見覚えのある鎖のブレスレットだった。

そう、これには見覚えがある。聖剣リインフォースを封印していた聖なる鎖……。俺とリリアの繋がりの特徴でもあり、ある意味俺たちの物語の始まりでもあった。

ブレスレットを腕に付ける。何か、きらりと光る宝石のような物が括られていた。アクセサリというには少々強引な代物だが、着け心地はそう悪くはない。

俺がそうしている間、ゲルトは黙って俺を見ていた。二人きりの中庭の中、俺たちは黙ったまま見詰めあう。ゲルトはなんとも言えない、複雑な視線で俺を捉えていた。

「……リリアから、話は聞いています。貴方は……故郷へ帰るそうですね」

俺は答えなかった。リリアはきっと、俺が異世界の人間である事は一言も告げて居ないのだろう。一番の友達にだって、内緒の事。俺とリリアだけが知る、たった一つ共有した秘密なのだから。

ゲルトの言うとおり。俺は、いつか現実の世界に帰る。そしてそれはもう間近にまで迫っている。目と鼻の先……。俺はこの戦いが終わったら、どのような結末を迎えても皆の前から姿を消すつもりだ

った。

この大陸に平和が訪れれば、俺のやるべき事はリリアの傍にはなくなる。救世主として秋斗と決着を付けるとしても、冬香を殺した人間の手がかりを追うとしても、それは両方この世界には関わり無い、所謂神の領域の話になる。

外部の存在、この世界のイレギュラー……。未来を知り、そして並外れた力を持ちこの世界を闊歩する存在。俺たちは異端分子以外の何者でもない。この世界の人間とは本来相容れない、会うことさえなかった存在だ。

故に、俺は役目を終えたならばもう、皆と一緒にはいないつもりだった。それが俺なりのけじめだった。この世界に居るのは楽しくて幸せで、皆と一緒に居たい。でも、それじゃあ駄目だと思うから。

「本気、なのですか……？」

「……ああ」

「……誰にも告げずに、一人で居なくなるつもりなんですか？」

「そうだ」

ゲルトは眉を潜め、肩を震わせていた。俺は正面からゲルトの瞳を見詰め返す。ゲルトの瞳は揺れていた。多分、様々な思いがあるのだろう。

俺を……恨んでいるのかもしれない。当然の事だ。俺は結局皆を裏切る。その結末だけは最初から決まっっていて、絶対に変える事は出来ない。

リリアの気持ちを裏切り、仲間の気持ちを裏切り、俺はこの世界から消えねばならない。それが自然な事であり、正しい事なのだから。

「貴方はいつも勝手ですね……。本当にそれで……。それで、いいんですか？」

「もう決めた事なんだ。それに俺は、まだやらなきゃならないこともある」

「それを……。わたしたちと一緒にには出来ないのですか？」

それも考えられる。確かに皆の手を借りた方が确实だし、格段にはかどるだろう。

でも、それは駄目だ。この世界の外の理に皆を巻き込むわけにはいかない。俺と秋斗の戦いに、皆を巻き込んでも意味なんかない。黙って俺が首を横に振るとゲルトは齒を食いしぼり、俺の胸倉に掴みかかってきた。

「……。それで、リリアを一人にするんですか？」

「一人じゃない。お前が居る」

「そうじゃない……。そういう事じゃないんですよ、ナツル！ 貴方は……。貴方は、自分が仲間にとってどれだけ大事な存在であるのかまるで解って居ないっ！！」

「……。なんだ、寂しがってくれるのか？」

「っ！ 茶化さないで下さいっ！！ わたしは、本気でっ
！！」

「だったら、俺も本気だ」

ゲルトの腕を掴み、振りほどく。突き放されたゲルトは戸惑っているようだった。二人の間の距離が離れ……ゲルトは自らの手を握り締め、泣きそうな顔で俺を見詰める。

「そんな顔するなよ、ゲルト……。もう、お前だって一人じゃない。リリアと一緒に居る。仲間がいる……。もう、何かにおびえなくてもいい。恐れなくてもいい。お前たちの悲しみは、最後まで俺が連れて行く」

ゲルトに歩み寄り、その両肩に手を乗せる。彼女はそっと顔を上げ、今にも泣きそうな顔でじっと俺を見る。

「……………今までありがとな、ゲルト。最後の戦いも、宜しく頼むよ。これでも俺、お前の事……頼りにしてるんだぜ？」

「……………ナツル」

「俺の事なんか、嫌いなんじゃなかったのか？」

「……………ええ、嫌いです。大嫌いです」

「そうか」

ゲルトの肩から手を放す。一步身を引くと、彼女は俺に背を向けた。

「……………わたし、貴方の事……一生、赦しませんから」

「……………ああ」

「一生……一生、赦しませんから……っ」

肩を震わせ、ゲルトは走り去って行った。少し、あつけない別れだった。でも、別れだと解っていて済ませる以上、仕方の無いことだ。ゲルトは思いを飲み込んで俺を嫌いだと言ってくれた。一生赦さないと 忘れないと言ってくれた。それだけで上出来だ。俺みたいな幻には、過ぎた別れだ。

一人で歩き、中庭のベンチに腰掛ける。雪が降り積もる中、ふと、ブレスレットを翳す。

「……そうだな。お前とのお別れは、一番最初に……一番時間をかけて、済ませたもんな」

きらりと、光を弾いて輝く鎖。目を閉じ、彼女の事を思い返す。

「これで最後だ」

その笑顔を守る為に。この気持ちを失わない為に。

「これで、終わりにする……。だから、さようなら……。さようなら、リア・テイル。さようなら、オルヴェンブルム。さようなら……ディアノイア」

独り言と共に目を瞑る。降り積もる雪は冷たく肌を濡らす。涙は流さない。別れは悲しまない。そう、リアと決めたから。

あの日涙を流して俺の腕の中で震えていた彼女の温もりを思い出しながら、冷たい世界に小さく別れを告げた。

「システムオールグリーン。ミッドナイトシステム起動。リア・テイル、飛翔形態に変形しマス」

「リア・テイル発進！ 目標、北方大陸上空、魔王城パンデモニウム！」

リリアの声と共にリア・テイル全域に魔力の光が走る。リア・テイルという城そのものが大きく浮かび上がり、ふわりふわりと空へ舞い上がって行く。

その過程で城は姿かたちを変え、白い翼を広げる船となった。大空に光の翼を広げて羽ばたくリア・テイルを、オルヴェンブルムの人々は黙して見上げていた。

多くの人々がそこに平和への祈りを込めていた。そうして手を合わせ彼らの神であるヨトに祈りを捧げる影の中、空を見上げるメリーベルの姿があった。

メリーベルだけではない。何人もの学園の生徒、今回の決戦には適さないと判断された者たちが旅立ちを見送っていた。その中には一人酒を呷る鶴来の姿もある。

「……さて、この決戦は吉と出るか凶と出るか……。十年前の戦いの再現になるかどうか、それは全て救世主次第、か」

遠く離れた地、シャングリラでも沢山の人々が祈りを捧げていた。カノン形態に既に移行したプロミネンスシステムを操りつつ、アイオーンもその旅立ちを見送る。

その傍らでは鎧に身を包んだアルセリアが立ち、無言で遠く空で輝く白き翼を見詰めていた。二人は何も語ることは無く、アイオーンは静かに息を付いて目を閉じた。

白い光の翼がはためき、淡い光の残像を残しながら空を舞う。雲を

切り裂き、青空を突き進む美しい景色の中、それを始めてみる全ての者は感嘆に声をなくしていた。

「綺麗な空」

王が一言呟いた。目標地点へは既に移動が始まっている。全面青空を望む場所に立ち、リリアは振り返って背後に並ぶ兵たちを見詰めた。

聖騎士団凡そ千名を主戦力とし、そこに協力を申し出てくれた大聖堂騎士、更には学園の生徒を加え、決戦の地へ赴く軍団は構成されていた。

誰もがパンデモニウムとの戦いの備え、そして空の美しさに見惚れている。リリアは光の鍵盤に囲まれた台座の上、剣を掲げる。

「私たちはこれから最後の決戦に赴きます。そこでは恐らく、沢山の物がその両手から零れ落ちて行く事でしょう。しかしもう、誰も引き返す事は出来ません。私もまた、もう戻る事は出来ないのです」

リリアは目を閉じ、そして心の中に思い描く。沢山の思い出、沢山の言葉、沢山の色……。そこにあった一人の少年の姿。それを求めた自分の心。

軍団の中から一人の誰かを見つけ出す事は出来ない。それでもリリアは目を閉じ、声高らかに告げる。

「どんな別れが待っていたとしても、それがどんなに辛い、身を引き裂くような物だったとしても……。明日へと進む心だけは失っては成らない。この戦乱を、悲しい動乱の時代を生き抜き、そしてこの出来事を後世に伝える為に……。もう、このような悲しみを繰り返さない為に……。全てを思い出しに風化させてしまわない為に」

剣を振り下ろし、リリアは腕を振るう。少女の機敏な動きに誰もが身を引き締め、その強い瞳に勇気を与えられた。

「私に出来る事は、貴方たちと共に在る事のみ。この剣で、王国の敵を叩き伏せる事のみ！ 我、汝らの道となり壁となり剣となり、魔王を撃ち滅ぼす事をここに誓うつ！！ 騎士よ！ 英雄の子らよ！！ 全ての悲しみを振り払う力を、我に与え給え　！！」

剣を台座に刺し、リリアは両手を広げる。そうして高らかに奏で始めたのは、一つの旋律だった。

それは、古くより女王の一族に伝えられてきた創世の歌。幼き日、まだゆりかごに揺られていた少女の心の中の記憶、母が何度も繰り返して聞かせてくれたもの。

大人になるにつれ、沢山のものを掌から零していく。封印された記憶は過去を消し去り、今さえも不確かにする。だが、少女は確かに覚えている。

母が教えてくれた歌。祖父が聞かせてくれた歌。父が口ずさんでいた歌。その歌が、音色が、旋律が　思い出を引き連れて今、未来へと光を繋いで行く。

美しい音色に誰もが聞き惚れる中、リア・テイルは飛翔を始める。より早く、よりの確に、より遠くへ。光を切り裂き、前進する。遙か彼方、天空に聳える戦地へと赴く為に。

騎士も、生徒も、誰もが歌の中に自分の源泉を見出した。それは太古の記憶。自分が祝福されて生まれてきたことの証。思い出の中、己の戦うべき理由を見出し、戦士たちは心昂ぶらせる。

勇者王が歌声と共に導く世界の彼方。もう、迷いは消えていた。誰もが武器を手に取り、決戦の為に歩き出す。戦地まで後何分？

誰もが言葉を発する事も無く、理解しあう。歌声に、導かれ。白い翼の船は空を切り裂き、音速で飛び交う。遙か彼方、雲を突き抜けて現れたパンデモニウムを視界に捕らえ、リリアはリア・テイ

ルを減速させる。

二つの巨大な城が擦れ違ふ。進行を止めないパンデモニウムに反転し、低速で近づいて行くリア・テイル。二つの城は空中を同じ速度で移動しながらゆつくりとその間にある距離を詰めて行く。

肌を切り裂くような強い風の中、パンデモニウムより無数に放たれた黒い影は蠢きながらリア・テイルに迫る。それは一粒一粒が恐るべき力を持った魔物。リア・テイルへと群がる蟲のように蠢き、戦闘は開始された。

リア・テイルの甲板　中庭であつた場所に騎士たちの姿があつた。先頭に立つ神官部隊が同時に魔法を放ち、空を舞う魔物を打ち落として行く。激しい魔法撃の嵐の中、魔物も同時に口から炎や雷を放ち、凄まじい量の弾幕が飛び交う。

そんな中、リア・テイルの装甲の下部に動きがあつた。開かれた出入り口にはずらりと並ぶ、騎士の跨つたヴィークルが待機している。城上方で魔法戦が始まつた事を合図にヴィークルたちは同時に走り出す。

空中を跳躍し、ヴィークルは次々にパンデモニウムに乗り移つて行く。中には魔物に迎撃され空の彼方へ消えて行く者、着地に失敗して爆発する者も居た。だが、誰も立ち止まる事はしなかった。

あらゆる場所で、あらゆる戦いが巻き起こつていた。夏流の乗るヴィークルも第一陣、第二陣に続き発進を控えていた。正面には迎撃の為に溢れる翼を持つ魔物の群れ。しかし、少年は臆する事無くエンジンを唸らせる。

飛び出したヴィークルは翼を持つ龍の背中をレール代わりに駆け抜け、空中で夏流は飛び降りてパンデモニウムの甲板へと辿り着く。壁をよじ登り、少年が見たのは想像を絶する大空の戦場であつた。あちこちで騎士や生徒たちが武器を手に魔物と対峙している。頭上を魔法が飛び交い、一歩間違えれば理不尽に命を奪われかねない。その戦場の中、子供も大人も皆関係なく必死にそれぞれの戦いを始めていた。

「もう引き返せない……。ここで全てを終わりにするんだ」

夏流の振り返る視線の先には彼の仲間たちの姿がある。ブレイブクラン勇者部隊と呼ばれた者たち、そして彼らを信じる生徒たち。

「パンデモニウム中枢部を一気に制圧する！ 皆、頼む……！ 一緒に戦ってくれ！」

夏流の声に真つ先に応えたのはゲルトだった。寂しげな表情で夏流の隣に立ち、小さく微笑みながら魔剣を手にする。

それは、腰に並んだ二つの鞘から引き抜かれる漆黒の刃。ゲルト・シュヴァインとメリーベル・テオドランドが選んだ新しい魔剣の形。ゲインのためではなく、ゲルトのために打ち直された、この世にたった一つの魔剣。

二対の剣を構え、ゲルトは夏流より前を一人歩いて行く。そのゲルトの足並みに続き、生徒達も次々に夏流を追い越して行く。誰もが戦っている。救世主を、先に進ませる為に。

「行つて来るよ、リリア」

救世主は駆け出す。パンデモニウムの周囲、渦巻く死の戦場の中へ。女王は今だ歌い続けていた。その歌はリリア・テイル周辺に結界を生み出し、側面に配備された砲台から魔法を放ちパンデモニウムを攻撃する。周辺を何度か付かず離れずの距離で旋回しつつ、リリア・テイルはついにパンデモニウムに正面から突撃する。

巨大な城と城がぶつかり合い、リリア・テイルの艦首はパンデモニウムの森に載りつけたまま停止する。待機していた騎士団が一斉に黒い森の中に駆け出して行く中、剣を片手に歩き出すリリアの姿もあった。

聳え立つ漆黒の城を見上げ、勇者は目を細める。この戦いが終われば、全てが終わる……。魔王が居なくなる。そして、本城夏流も。

剣を強く握り締めた。この城に生きている者はたった一人しかない。それをリリアは理解していた。だから、魔王はリリアの手で倒さねばならなかった。魔王を　殺さない為に。

「さあ、行こうロギア。貴方の物語を、私の物語を終わらせる為に」

「魔王を殺さない……ですか？」

出撃前夜、リリアが突然言い出した事にゲルトは思わず聞き返してしまった。

夜の月を見上げ、リリアは暫く黙り込む。ゲルトはその背中に歩み寄り、隣に立ってリリアの顔を覗き込んだ。

リリアは泣いてはいなかったし、笑ってもいなかった。ただ月を見上げ、静かに佇んでいた。それ以上はなかったし、それ以下もない。ただ、月を見上げていた。

しかしゲルトにはそれが逆に不安を駆り立てる要因となった。今までに無い最大の戦いを前に、不安になるのが当然。それに付け加え、大切な人が居なくなるのだ。だというのに、これほどまでに冷静なのは何故なのか？　まさか、少しおかしくなってしまったのか？　多少行き過ぎた思考が脳裏を過ぎる。

「魔王レプレキアは、ロギアの息子さんなんだって。だから、リリアにとっても他人じゃないし、それに　」

「……それに？」

「出来れば、助けてあげたいよ。勇者とか、魔王とか女王とか……。そういうの背負って生きて行くの、一人きりで頑張る辛さ、よくわかってるから」

「リリア……」

「むずかしい、かな……。多分、むずかしいよね。誰かと心を交わす事、凄く大変なんだもん。一人きりの方が、ラクだって思える時もある。それでも誰かと必死になってお互いを傷つけあって分かり合えた時、嬉しくて嬉しくて……。その気持ちを、教えてあげたいんだ」

ゲルトは思わず黙り込んでしまった。リリアが考えている事は、とても優しく甘い事だった。だが彼女と同じ境遇で生きてきたゲルトには、その気持ちは痛いほど理解できた。

「貴方は、自分が大変だというこんな時に他人の事ばかり……」

「心配してくれるゲルトちゃんがいるからだよ。ゲルトちゃんの方こそ、いいの？」

「何がですか？」

「夏流さん、いなくなっちゃうんだよ？ もつと言う事とか……話したいことあるでしょ？」

「別にないです」

「夏流さんの事、好きなのにな？」

ゲルトは口をぽかんと開けたまま暫く放心状態を続けていた。それから思い返したように挙動不審になり、そっぽを向いて目を瞑る。

「何いつてるんですか貴方は……っ」

「あれ？ 違った？」

「違いますよ！ はずれもはずれ、大はずれです！ そもそも、ナツルはリリアの大事な人なのであって……」

「ゲルトちゃんだってほら、自分が大変なのに他人の事気にしてる」

振り返ったゲルトが見たのは大人びた笑顔を浮かべるリリアの姿だった。そこに悲しみや後悔といった感情は見出せない。あるのは強い覚悟 決意だけであつた。

「魔王との戦いを決着させても、まだ世界は終わらない。リリアも、ゲルトちゃんも死なない。だから、終わりなんかない……。やらなきゃいけないことは永遠に積もっていて、リリアたちはこれから長い時間を生きて行く。そうして行く中で、何かを守って何かを手放して……。それでも、忘れたくない事があるから」

「……だから、魔王を救いたいんですか？」

「まだ、子供だからね。沢山のものを見て、手に入れて失って……。後悔したり擦れ違ったり、それでも誰かと分かり合える。だから、レプレキアを救いたい」

「……魔王を救いたい勇者というのも前代未聞でしょうね」

「うん、そうだろうね」

二人は笑いあい、それから肩を寄せて一つの窓から空を見上げた。昼間降っていた雪が嘘のように、綺麗に晴れた夜空だった。月明かりは降り積もった雪に反射して世界を薄明るく照らし出し、二人は今までの思い出に思いを馳せた。

「明日、ゲルトちゃんは夏流さんに付いててあげて」

「……しかし、それでは貴方が」

「リリアは一人で、正々堂々と魔王と戦いたい。そうでなきゃ、意味がないから……。一応、誠意って事かな」

「……」

「夏流さん……どうだった？」

徐にリリアが問い掛ける。ゲルトは答えなかった。答えられなかった。

「別れは済ませた……。本当に、それでよかったですか？」

「うん。いっぱいお話して、いっぱい泣いて……。だからもう、じゅーぶんしあわせ。リリアには勿体無いくらい……。幸せだったから」

そんな事を言われてはゲルトはもう居ても立っても居られなかった。リリアの手を握り締め、訴えかけるように叫ぶ。

「もう一度、会いに行きましょう！　もう、今しかチャンスはないんですよ！？　もう　会えなくなるんですよ！？」

ゲルトの激しい訴えにリリアは困ったように微笑み、首を横に振る。ゲルトは震える拳を握り締め、片手を壁に叩き付けた。

「納得出来ません、こんなの……っ！　こんな……っ！　こんな、身勝手な結末なんてっ！！」

「ゲルトちゃん……」

「リリアがどれだけ彼を好きでいるのか、彼は判っているのに！！　なのに、どうしてっ！！」

リリアは黙ってゲルトを見詰めていた。それから握り締めた拳に手を伸ばし、優しくそっと、ゆっくりと指を解いて行く。

「ねえ、ゲルトちゃん。それでも、夏流はこの世界に居たんだよ。この街に、私たちの傍に……。それって凄いいことなんだよ？　奇跡みたいな確率の、信じられないくらい偶然の出会い……。だからもう、それだけで充分だよ」

「充分なわけ、ないじゃないですか！　もつと傍に居たいに決まっているじゃないですか！　なのに……なのにっ！！」

歯を食いしばり、ゲルトは泣いていた。涙を流す親友の頬に触れ、リリアは困ったように笑う。

「どうしてゲルトちゃんが泣くかなあ」

「貴方が泣かないから……だから、代わりに泣いてるんです……」

「……そっか。じゃあ、そういうことにしておこっか」

ゲルトをそつと抱き寄せ、リリアはその頭を撫でながら目を閉じる。リリアの腕の中、縋りつくように背に手を伸ばし、ゲルトは静かに涙を流していた。

「……ここが、魔王の場所に行く回廊」

リリアは一人、広い巨大な回廊の中にいた。まるで時空をゆがめるようにしてねじれた回廊は重力を無視して中心部へと伸びている。

障害となる魔物は一匹として配置されていなかった。リリアは一人、神剣と共にねじれた回廊を進んで行く。

共に歩むものは一人も居ない。たった一人、勇者は単身で魔王の元へと向かう。歩みの中、心の中で沢山の思いを溶かし、固め、何度も何度もそれを繰り返し心を落ち着かせようとした。

しかし魂のざわめきは抑えきれない。この先には何もなかった。無限の回廊。その先にあるものは、まるで自分の未来のよう。

夏流の居ない明日へと続く歪んだ道。しかし、その先に進まねばならない。どんな事があっても、己の過去を否定することだけはしてはならない。今までの思い出を裏切れば、途端に世界は掌を返すだろう。

全てが夏流と共にあったのなら、この世界で生きてきた自分を信じなければ成らない。そう、共にあった時間が、これから共に歩くはずだった時間がある限り、リリアは前へと進まねばならない。

それがちいさな少女が己に課した業であり、己の決意であり、己に求められた立場でもある。少女は足音を響かせながら歩く。壁を、

天井を、床を。

やがて巨大な扉が眼前に現れてもリリアは足を止めなかった。むしろそれは先を急ぐかのように歩調を速め、呼吸を荒らげ、齒を食いしばり少女は進む。

両手で扉を開け放つとそこにはリア・テイルの謁見の間に良く似た部屋が広がっていた。青い絨毯の先、王座に座る魔王の姿がある。リリアは涙を堪え、神剣を片手に前に進んで行く。

「……一人で来るとは思わなかったな、勇者王。たった一人で余に敵うとも考えているのか？」

魔王の言葉も聞かず、リリアは前進する。ただ神剣を揺らし、一步前へ。脅迫観念にも近い思いに急かされ、立ち止る事は出来ない。

ようやくリリアが足を止めたのはレプレキアから5メートルほどの位置にまで近づいた時だった。少女は神剣を掲げ、その切っ先をレプレキアへと向ける。

「……………貴方を、助けに来たの」

世迷言としか受け取れないそんな第一声にレプレキアは眉を潜める。しかし、リリアは心の底からそれを願っていた。

この戦いの帰結に意味があるのであれば、どうか最後はハッピーエンドで終わらせて。せめて最後に、誰かを救わせて。少女は願った。かつてからの願い。王の、勇者の、魔王の願い。その全てを切っ先に乗せ今、勇者は辿り着いた。

遙か天空の彼方、魔王の元へ。二つのシルエットは光の中で影を伸ばし、今正に激突しようとしていた。

黄昏の日（１）

「救う　だと？　問答無用に乗り込んで来て置いて勝手な言い分だな、リリア」

青いマントをはためかせ魔王は立ち上がる。魔王の歩みに合わせ、彼の立つ玉座から下る階段の左右、構えた灯籠に火が灯って行く。蒼炎に囲まれた巨大な王座を前に二人の王は向かい合う。二人の視線が交錯し、張り詰めた空気の中、レプレキアは両手を広げて声を上げる。

「お前たちは何の為に戦っている……？　何の為に剣を手にする？　何の為にこの地に降り立った？」

「貴方はこの世界を滅ぼす戦を始めると言った。貴方のその言葉を正直私は信じて居ない。でも、貴方がその言葉を口にしなければ成らないというのであれば、クイリアダリアを継ぐ者としてそれに応える義務がある」

「義務　か。余も同じだ。余も同じ、義によってここに立っている。クイリアダリアに滅ぼされ、怨嗟の言葉を飲み死に滅んで行った数多の同胞の魂に報いる為に……。リリア・ウトピシュトナ勇者の娘であるお前に、その責務を果たせるか！？」

「果たす。その為にここに立っているのだから」

リリアが目を開き、力を解放する。神剣が眩く輝き、光の中に沈むシルエットが再浮上する頃にはリリアの髪は銀色に染まっていた。

大気が震える程の膨大な力が肌を刺す。勇者の絶大なる力を前にレブレキアは目を細め、眉を潜めて拳を正面に出す。

「つくづく呪わしい存在だ、僕もお前も……。一度は見逃してやったというのに、死に急ぐとはな……」

魔王の掌の周辺に白い光が集って行く。その中に手を差し込んだ魔王は光の中より細身の剣を取り出して構える。

「この世界を滅ぼす存在め……！ 余はお前を打ち滅ぼす事に、何の躊躇いも持たんぞ！」

「貴方の行動はこの世界を混乱に陥れる……。これ以上もう、誰かが戦う理由を作ってはいけない！」

「その動乱を操って成長した国の王が何を語るか！ 何も知らないお前のような存在が、余と対等だなどと思うなよっ！！」

「抵抗しないで……。殺したくないの」

「舐められた物だな……。神剣フェイム・リア・フォース、その力は確かに驚異的だ。嘗てこの世の神が司った力そのものだけの事はあるだろう。だが、その力 対抗する手段が皆無だと思っているのなら、それは貴様の死に直結するぞ！ 勇者王！」

「解ってるよ。だから油断はないし、予断も赦さない。だから魔王、貴方と戦う覚悟ならばもうとうに決めてきた」

二人が同時に剣を構え、魔力を解き放つ。人間離れしたその力が天空の城そのものを揺らすかのように張り詰め、二人の髪を揺らして

いく。

嘗て、この空を飛ぶ蒼穹の城にて同じ景色を生み出した者たちがいた。それは勇者と魔王、決して相容れない宿命を抱えて生まれてきた二人の人物。

二人はこの地にて互いに刃を構え、決して生半可な結末の赦されない死闘を演じた。そこに慈悲は無く、容赦は無く、恐らくは心さえも無かった。

刃を交えた二人は共に倒れ、永遠にその戦いは決着をつけられぬままになるはずだった。しかし今、その二人の因果を受け継ぐ二人が同じように刃を構えている。

勇者フェイトがそうしたように、少女は己の悲しみではなく誰かの為に犠牲になろうと剣を手に。そして魔王もまた、たった一人孤独な戦いを貫く為にその運命に抗っている。

どちらかに正義があるわけではない。だが、そう仕組まれた、定められた因果がこの場を設定したのであれば、それは運命と呼ぶに相応しい悲しき宿命。

或いは二人がもっと大人であつたのならば、結末は違ったのかも知れない。もっと他の手段があつたのかもしれない。だが二人は今の時、この場で出会ってしまった。それはもう変えられない、どうしようもない出来事。

仮にそれを、もしもそれを、変えてしまう事が出来る存在が居るとしたならば。それは、神以外の何者でもない。

二人は何も言葉を発さないまま互いに踏み出し、刃をぶつけ合う。踊るように、舞うように、ただ孤独な戦場の中に刃の音色を響かせて。二つのシルエットは何度もぶつかり合う。

十年前と同じように、あの頃と同じように、あの運命と同じように、しかし互いの運命を知らないまま、何も受け入れられないまま、ただ刃に思いを乗せて。

「この戦い、どちらが勝利しても君は関係ないんだろう？」

遠く離れた地、ディアノイア。プロミネンスカノンの引き金を任された赤毛の女は振り返り、背後に立つアルセリアに問い掛ける。

アルセリアは鎧の巨体のまま、両手を正面に差し出すようにして剣を大地に構えていた。鎧の顔を僅かに揺らし、それから騎士は何も応えずにアイオーンを見詰める。

「解っているさ。別に、人間に肩入れしているわけじゃない。自分が彼らと同じ時間を生きられない事をボクは知っているのだからね。ただ」

「……ただ？」

「ただ　そう。いつになったらこの世界は、この輪廻から脱する事が出来るのか……ふと、そう思ってたね」

『正しき未来に辿り着ける日まで何度でも、何度でも……。かつて誓ったあの日から私の考えは変わりません。アイオーン、貴方は少々人間に感化され安すぎる……。その不安定さを評価はしますが、危惧もしないわけには行きませんね』

「ボクは君とは違うさ。何百回同じ時を繰り返しても、君はあの頃から何も変わらないね。そうだろう？　アルセリア・ウトピシュトナ姫」

鎧の中から鋭く覗く眼光がアイオーンを射抜く。常人ならば足腰が立たなくなるほどの殺気にもアイオーンは全く動揺しない。そう、殺す事になど価値は無い。そもそも己の存在に意味などない。あるとすればただ、情性で続く世界の輪廻のみ。

「終わらせたい……。そう願う彼女の気持ちも今なら判るよ」

『軽率な発言は控えなさい、アイオーン。たかが私の使い魔程度の存在で、知ったような口を利かない事です。貴方など、いくらでも代えは居るのですから』

プロミネンスカノンの引き金となる鍵盤を眺め、アイオーンは悲しげに目を瞑る。かつてこの力を手にした時と今の自分、どちらの気持ちの方が正しいのだろう。

もう、思い出すことは出来ない。彼方の時に消え去ってしまった純粹な気持ちなど、何一つ……。

「思い出せる気がしたんだ……。君と居れば。そうだろう？ 夏流

」

指先でなぞる鍵盤はもうあの頃のような熱を持ってはいない。ただ純粹に、何かを救いたいと願った少女の姿はそこにはもう存在しなかった。

黄昏の日（１）

「……ここからパンデモニウム内部に侵入出来そうか」

甲板での凄まじい乱戦の中、夏流は内部へと続く鋼鉄の扉を発見し、それを蹴破って飛び込んで行く。内部には果てしなく広がる回廊が続き、その様子はディアノイアの地下に酷似している。

夏流に続き勇者部隊のメンバーが次々に着地する。全員既に凄まじ

い乱戦を抜けた後であり、軽傷や疲労が見られる。全員無事についてきた事を確認し、夏流は彼らを前に周囲を見渡した。

「さて、どっちに行けばいいのやら……。広すぎて道なんてさっぱりだな」

「一応、ペンデュラムで探知してみたけど……。大雑把な事しかわからないわね」

ペンデュラムを揺らしていた指を停止させ、魔石を手にしてベルヴェールが溜息を漏らす。ここは道一本の道中……。左右へと闇は続いている。

「下層の方に大きい魔力反応があるわ。多分そこが動力源か制御システムなんだと思う。それと城の上の方にディアノイアと同じような奏操席があると思うわ」

「構造的には大体同じって事か……。奏操席にはリリアが向かっている。俺たちは他のエリアを制圧するぞ」

大まかな目的は制御システムと動力源にある。ディアノイアの地下やリア・テイルの地下にそれがあったように、制御ユニットは最下層に存在するという推測は容易である。問題はどうかやってそこまで辿り着くか。

「少々危険だが、メンバーを二手に分けるとしよう。手分けして探索するんだ。こっちは俺が指揮する。あっちは　ゲルト、お前が指揮を執ってくれ」

「……お断りします」

まさか断られるとは思って居なかった夏流が目丸くする。黒い勇者は真剣な表情で夏流の正面に立ち、吐息のかかりそうな距離まで顔を近づける。

「リリアに貴方を任された以上、貴方から離れる事はしません……。絶対に、です」

至近距離で夏流の瞳を覗き込み、それから一步身を離して腕を組むゲルト。既に話す事は無いとでも言うように目を瞑り、背を向ける。断られてしまつては仕方が無い。夏流はゲルトを自らに同行させ、班員を二分する。結果夏流とゲルト、別行動にはアクセル、ブレイド、ベルヴェールという構成になった。

「こつちは前衛、万能、探知サポートか……。まあ無難な構成だけど、そつちは大丈夫か？」

「こつ見えても探知は得意な前衛でな。サポートも頭数もゲルトなら任せられる。そつちのリーダーはアクセル、お前で頼む」

「了解。じゃあお互い、やるべき事をやって最下層で合流しようぜ」

「ああ」

夏流とアクセルは互いの拳を打ち合わせ、それから互いに背を向けて走り出す。ゲルトは夏流の隣を走りながらずっと憂鬱そうな表情を浮かべていた。

その事実には夏流は気づいていた。しかしそれを言及する事はなかった。言葉にしてしまえば全ては崩れてしまいそうなほど危ういバランスに他ならない。たった一人、ゲルトだけを同行させたのは、ゲ

ルトが余計な事を口走るのではないかという危惧もあった。

ゲルトがそうしないことを夏流は信じている。しかし、そうなってしまったとしても責める事は出来ないとも考えていた。刻一刻と迫る裏切りのカウントダウンの中、夏流は目を細め、ただ回廊に行く。

「……リリアは、一人で魔王と対峙しているでしょう。貴方にも、わたしにも助けを求めずに」

「……ああ」

「彼女がそれを望むのならば、わたしはせめて彼女の願いを叶えたい……。彼女が貴方を心置き無く帰したいと願うのであれば、わたしは最後の最後まで貴方を守り抜く……。それが、わたしが彼女に出来る、貴方に出来る最後の事です」

ゲルトはそれ以上何も口にしようとはしなかった。俯き加減な少女の言葉に、少年は黙って頷いた。応える事すら、今は無粋なように思えたから。

二人の走る先、巨大な広間が広がっていた。無数の石柱が宙に浮かぶ不思議な光景の中、光の海が走る大地全てに魔力の網が通っている。

「この下、巨大な魔力パイプになっているようですね。伝っていけば動力炉に辿り着けるかもしれません」

「……落ちたら膨大な魔力で一瞬で灰になる、か……。長居は無用だな。先を急ぐぞ、ゲルト」

石柱で出来た通路の真下、光が渦巻く回廊を進む二人。しかし二人は同時に足を止める事になる。その正面に、行方を阻む存在が待つ

ていたから。

「パンデモニウムを止めるつもりか、夏流……？」

「……秋斗。今お前の相手をしている場合じゃないんだがな」

空中に浮かぶ石柱の一つ、腰掛ける秋斗の姿があった。二人の救世主は正面からにらみ合い、秋斗は飛び降りて夏流の正面に降り立った。

二人の真下から浮かび上がる無数の光の粒の中、秋斗の視線と夏流の視線がぶつかり合う。衝突は避けられない。そう、お互いの眼が語っていた。

「ゲルト、先に行け」

「えっ？」

「秋斗とはどうせいつかケリをつけなきゃならなかったんだ。俺は俺の戦いをする。お前はお前の。ああ、お前の戦いをするんだ」

「しかし……っ！」

首を振るゲルトの肩に手を乗せ、夏流は微笑む。その笑顔はこれ以上無いほどにゲルト・シュヴァインの心を揺さぶった。

普段から笑顔を見せることの無い少年が心から笑うその姿は自分への信頼に他ならない。たった一人、この先の戦いを任せるに値する人物であると、彼の笑顔は全てを物語る。

ゲルトは齒を食いしぼり、それから秋斗を見詰める。秋斗は腕を組み、目を瞑ってそっぽを向いていた。それは二人の会話の終了を待っているように見える。再び夏流へと向かい合い、ゲルトは息を吞

む。

「でも……」

「僕は、この世界で君たちに会えて良かった」

いつに無く素直な言葉と気持ちを込める夏流の声。

「だから最後まで　この世界でやるべき事をやらせてくれ。無意味だったなんて、思わせないでくれ」

それは最早反論の赦されない言葉。夏流の決意にも似た思い。或いはそれは運命と呼べる物だったのかもしれない。

拳を握り締め、ゲルトは前へと歩み出る。夏流と擦れ違う肩、そして顔はもう二度と向かい合う事はない。

秋斗はゲルトの顔を見て眉を潜める。少女は涙を堪え、必死に前へと進んでいた。その悲しい表情に再び目を瞑り、前へと歩む。

秋斗とゲルト、二人の肩が擦れ違いゲルトの姿は闇の中へと消えて行く。二人の救世主が正面から向かい合い、秋とはポケットに両手をつ突っ込んだまま笑う。

「テメエ、女泣かせてばっかいるんじゃないよ。少しは自重しろこの野郎が！」

「……それ、お前が言うのか？　というか、一体どうやってここまで辿り着いたんだよ」

「ハッ！　教えると思うか？」

「いや……。それに、今となってはどうでもいいことだな」

互いの視線を絡ませて二人は同時に構える。秋斗の両手に拳銃が浮かび上がり、夏流の周囲に電撃が舞う。

「リリアはどうした」

「魔王と戦ってるだろうな」

「結局テメエはまた一人にして立ち去るんだ……そうだろう？ 背負いきれないからテメエは逃げるんだ」

「だからって自分の為に全てを犠牲にする事は出来ない」

「わからねえやつだな。テメエのその偽善ぶった善人主義が冬香を殺したんだ。テメエさえ冬香の傍に居れば……あいつが苦しむ事はなかった」

「守れなかった事を俺の所為にするんじゃないやねえよ、秋斗。俺はお前を超えて行く……。ここでいい加減白黒つけようぜ。もう、言葉で主張するのは無意味だろ」

「……テメエにはいい事を言うじゃねえか。そうだな。後腐れなく、こいつで敗北したほうはこの世界を去るってのはどうだ？」

二人は同時に魔力を解き放つ。光の剣を腕に纏う夏流と銀色の電撃を銃に纏わせる秋斗、二人の昂ぶる光が周囲の暗闇を照らし出して行く。

互いの事ならば誰よりもわかっている。そう、二人は唯一無二の親友にして幼馴染だったのだから。故に何度もぶつかり合い、そしてどちらが正しいのかを証明しなければならぬ。

力で、言葉で、思いで……。そうしなければどちらも前には進めないから。そうしなければ、どちらも過去を断ち切れないから。どちらとも無く跳躍する。足場の心許ない光の空間の上、二人は空中で激突する。至近距離で笑う秋斗に釣られ、夏流も微笑を浮かべながらその全ての力を戦いに収束させる。

「魔法を全て無力化する絶対なる神剣……か。それに付け加え強力な一撃の破壊力に膨大な魔力。成る程、勇者の名は伊達ではない」

王座の前に交わる二つの剣。リリアの怪力に吹き飛ばされた小柄な魔王は空中で制止し、剣を振るってリリアを見下ろす。

「なら、こういう趣向はどうかない？」

魔王が片手を翳す。空中には無数の光が浮かび上がり、リリアへと降り注ぐ。しかし魔力で構成された光ならば神剣は全て吹き飛ばす。素早く無駄の無い動きで全てを切り伏せるリリアの正面、既に次の詠唱を終えたレプレキアの姿があった。

指先で素早く魔方陣を描き、指を横に振るう。魔方陣から放たれた数え切れない氷の刃がリリア目掛けて襲い掛かる。

「様々な方向からの見切る事の出来ない連撃……」

リリアは後退し、片手を大地に着け神剣を背後で掲げる。その姿勢から一気に駆け出し、低い姿勢から切り上げるように回転しながら剣を振るう。

眩い光の風が全ての魔法を掻き消し無力化して行く中、レプレキアは笑いながら大地に手を突く。

「ならば 消滅に時間を要する大魔法の連打はどうだい？」

レプレキアが大地に手を着いた瞬間、部屋中の壁から光の紋章が浮かび上がる。そこから降り注ぐのは全て龍さえも一撃で滅するといわれる大魔法。

「
無限の虹を紡ぐ者！」

火、水、雷、風、地、闇、光。七つの属性の大魔法が一斉に発動してリリアへと襲い掛かる。アインミッド・プリズマ限界突破者と呼ばれる一部の限られた才能を持つ存在にしか実現不可能な滅亡の虹の中、リリアは一気に駆け出す。炎の海を切り裂き、あらゆる方向から迫る魔法を次々に切り裂いて行く。

その全てを切り刻みながら壁を走り、その刀身には今までに無いほどの昂ぶる魔力が収束しようとしていた。魔法を斬る事によって力を蓄えるという聖剣の力は神剣に姿を変えても健在であり、七種類の光を浴びたリインフォースを構え勇者は壁から跳躍し魔王へと迫る。

「大魔法も文字通り一刀両断か。反則染みた剣だ」

「
フェイム・フォース・ベクトラ
反射神鳴剣ツ！！」

切っ先から放たれた七色の光の螺旋は回避行動を取るレプレキアの側面を一気に貫通し、大地を穿ち、遙か下層まで全てを貫いて大穴を空ける。

塵の舞い散る中二人は大穴を挟んで対岸に佇んでいた。お互いに無傷……余力も充分に残している。所謂様子見とも言える戦いの幕開けの中、想像を絶する力の衝突にパンデモニウムは揺れていた。

「恐れ入ったよその力。流石神の血を引くだけの事はある」

「……神の血？」

「君達ウトピシュトナは神と人の混血……。君たちがヨトと呼ぶ存在は人と神との間にウトピシュトナを生み出した。そして混血は真に神の血を継ぐ存在を……。我々を魔王と呼び恐れ、滅ぼそうとした」

切っ先を下ろすりリア。レプレキアは小さく微笑みを湛え、腰に手を当ててレイピアを収める。

「クイリアダリアのように歴史の浅い国が何故今日までの発展を遂げる事が出来たのか、君は疑問に思わなかったのかい？ 若き国が栄える事が出来たのは、本当にただ神の恩恵だと？」

「……何が言いたいのか？」

「単純な話さ。そう。クイリアダリアはただ移民の民たちが辿り着いた新天地に過ぎないというね。故郷より技術と力を持ち出し、人の野に下った神の混血……。そう、クイリアダリアとは、ザックブルムの人間が開拓を行った国なんだよ……！」

北の固く凍った大地は決して豊かな大地であるとは言えなかった。故に人々は南に楽園を求めて旅に出た。その先に見つけた約束の地こそ、クイリアダリア王国。

「機械の文明も、宗教も！ 全てはザックブルムより持ち出された盗品！！ それをお前たちはザックブルムから与えられた事を忘れ、あるうことか進軍してきたっ！！ 忌まわしき古代兵器まで持ち出してー！」

「進軍……？ それは、魔王が世界を滅ぼそうとしたからじゃ……！？」

「お前たちに世界の何がわかるっ！？ 自分の信じる事だけを信じて、聞きたい事だけを選んで聞く！ お前たちはそうやって何度も真実を歪め己の都合よく改竄してきた……！信じられないのならば見る……！これがお前たちが崇め恐れる、『ヨト』の力だ　っ！！」

レプレキアが魔力を解放すると同時にその足元に巨大な魔方陣が浮かび上がって行く。レプレキアの全身に魔術紋章が浮かび上がり、その力は今までとは比較にならないほどに跳ね上がって行く。光の渦は天井を貫き、レプレキアの背後に翼を纏わせる。宙に浮かび上がり、光の鎧を纏ってリリアを見下ろすレプレキアは両手を広げ、その片手ずつに莫大な魔力を込める。

「これは誇りを賭けた戦いなのだ、勇者よ！ 世界を担うに相応しいのはこの世界を救うのに相応しいのは誰なのか！？ 余か……貴様か！ そのどちらかがこの世界を一つにする存在となるだろう！ お前の紛い物の神の力が勝るか……。或いは、余の真実の力が貴様を駆逐するか！ 抗って見せろ、混血！ 人の野に下ったその意味を、僕に証明してみせろっ……！」

「レプレキア……！ 貴方は……！？」

「我が神の契約に縛られし下僕よ！ 我が呼びかけに答え死の国より汝らを今召喚せん……！ 神の鞭に打たれ目先の全てを喰らい尽くせ……！ 冥龍王ニヴルヘイム　……！」

漆黒の光が空を覆い、その光の柱が左右に開いて行く。まるで世界に生じた亀裂のような、扉のようなその場所から伸びる巨大な黒い腕。

後退するリリアの正面、顔を覗かせたのは腐った身体を引き摺る巨大な龍であった。龍王は溶けた瞳でリリアを見詰め、空に大きく口を開く。

全てを腐食させる毒の霧を口から撒き散らしながら上半身を乗り出し、リリアへと蛇の舌を伸ばすニヴルヘイム。その奥、レイピアを手にしたレプレキアが空中で足を組み二つの存在を見下ろしていた。

「さあ、持てる力の全てで抗って見せろ！ 大魔道の名に相応しき千の魔術で相手をしてやろう！ 来い！ リリア・ウトピシュトナッ！――」

毒の煙と共に空に雄叫びを上げる冥龍王。その叫び声の前にリリアは立ち、真剣を構えて駆け出した。

黄昏の日（2）

何故、何の為に戦ったのか。

何時、誰の為に戦ったのか。

理由無き存在、無限に繰り返される世界の歴史、終わる事の無い苦痛、永遠の責め苦……。

魔王と呼ばれたその者は両手を血に染めて何を望んでいたのか。何を指していたのか。

それは果たして狂気であつたのだろうか。理由無き虐殺、無意味な反乱。それがたとえ物語の中だとしても、無意味な狂気は存在しない。

魔王という言葉に託された呪い。この世界の悪として存在し、いずれは英雄によつて打ち倒される存在。しかし魔王そのものがそれを望み、その名を名乗つたのであれば、それは世界に対する反逆になるのだろうか。

かつて白き勇者は剣を手己の役目を果たした。英雄となり、世界を救うという名目の下魔王に剣を突きつけた。魔王は微笑みながらその剣を受け入れるだろう。そうすることでしか救えないのであれば、そうすることに意味があるのであれば。

願いを叶えたくとも叶えられないのであれば人はそこに何を求めれば良いのか。自分に叶えられない願いならば誰かが叶えてくれると信じて託すその先に、果たして希望は輝いているのか。

「……俺は勇者だ。俺は正義を義務付けられて世界に生み出された。けど……ロギア。俺たちの戦いは、正しかったのか？」

一人丘の上に立ち、荒野と化した世界を見下ろす勇者。その足元に突き刺さった剣は確かに魔王の胸を貫いていた。

大地に倒れるその魔王を見下ろす勇者の瞳から小さな雫が零れ落ちる。空からは白い雪が降り注ぎ、薄く微笑みながら力尽きた魔王の頬へと染みて行く。

魔王は涙を流さない。しかし頬に落ちた雫はゆっくりと伝い、大地へと染みる。それはまるで冷酷の二文字に心を染めた者が最後に見せた涙の雫のようでもあった。

勇者は剣を引き抜き、血に染まったそれを空に掲げる。神の意思を受け入れたその刃を光に翳し、そして 自らに向けて振るってしまった。

激しく飛び散る血液はまるで零れ落ちて行く悲しみのように。大地を汚して行く赤は世界に溶ける悪意のように。ただそれはそうなる為選ばれた結末 。

かつて悲劇の運命を辿った勇者がいた。その娘は今、雄叫びと共に冥界より召喚されし龍と戦っていた。吹き付けられる毒の霧に口から血を吐き出しながら黄金に輝く剣を振り上げる。

龍の顔を切り裂く神剣の一撃。悲鳴を上げて空に叫ぶニヴルヘイムの頭部に飛び乗り、同時に神剣を深々と突き刺す。放たれた黄金の光を空に引き抜き、龍の背を一刀両断にして勇者は跳躍する。

身体を侵す毒は神剣が浄化して行く。神に愛された存在である勇者は何者にも汚される事は無く何者にも傷付けられる事はない。宙に舞う魔王はレイピアを手に勇者を迎え撃つ。

「お前たちが全てを奪った……っ！ この世界の全てを！！ ただ剣を振るい敵を滅ぼすだけのお前に、一体何がわかる！？」

「わかんないよ！ でも ただ剣を振る事だけでも出来るのならっ！！ 今の自分に出来る事をやらなきゃいけないっ！！ もうへこたれ勇者なんかじゃ居られないからっ！！ もうっ！！ 泣いてなんか居られないからっ！！」

光がレプレキアを弾き飛ばす。空を舞う魔王の両手から放たれる無数の漆黒の弾丸を剣で弾きながらリリアは落ちて行く。消えて行く龍の死骸の背に降り立ち脊髄をレール代わりに駆けて行く。次々と放たれる強大な威力を誇る大魔法を全て真正面から神剣で捻じ伏せて行くその様は最早何者にも阻止出来ない。真正面から雄叫びと共に駆け寄るリリアにレプレキアもまた叫びで応える。

「リリア・ライトフィールド……っ!!」

「はあああああっ!!」

二つの影が空中で激突する。迸る魔力の衝突は周囲の構造を破壊し光となって広がって行く。

「確かに貴方の言う通り、私たちは正しくは無いのかも知れない……!! でも、正しく無いとしても! 間違っているとしても! それでもやり遂げなきゃ意味がないの!」

「やり遂げる意味……だと」

「絶対に負けられない……。この戦いだけは絶対に、圧倒的な勝利で飾らなければいけない! だってそうでしょう!? そうでなきゃ、誰が私をこの世界の王だと認めてくれるの!?」

炸裂する魔力に二人が再び距離を置く。リリアは回転しながら着地し、剣に魔力を込めて顔を上げる。

「この世界の全てを守る……! この世界、全ての人を傷つけない為に! だからもう、貴方みたいな子が戦ったりしないように! 私がこの世界を変えるっ!!」

「世迷言を……っ！ 世界の改変を阻止しようと動いてきたのはクイリアダリアの方だろう！」

「そんな昔の話なんて関係ない……。これから私はこの世界を守って行く。これからずっと！ だからレプレキア……！ 君に負けてあげるわけには行かないんだよっ……！」

リリアの言葉にレプレキアは俯き加減に舌打ちする。ゆっくりと高く舞い上がり、その両腕を左右に広げた。

「お前の馬鹿げた話に付き合うのはもう沢山だ……。！ せっかくお前は見逃してやろうと思っていたのに……。もういい。パンデモニウムで跡形も無く消し去ってやる　！」

広げた両手を胸の前で組み上げ、魔力を収束する。それはレプレキア本人の力だけではない。周囲から収束する光はパンデモニウムそのものの莫大な動力エネルギーをも吸収している。

空前絶後、一つの大陸を飛ばすほどの力を持つ魔力がレプレキアへと収束して行く。空間がよじれ、空から降り注ぐ光さえも屈折する奇妙な闇の中レプレキアは眉を潜めリリアを見下ろす。

「消え去ってしまった……。！ 忌まわしき過去と共に！ お前のその思いと共に！！ 何もかも虚無の光に帰れ！ リリアアアアアアアアアアッ……！」

放たれた白銀の光の柱がリリアに迫る。触れた瞬間気化するようなその光を前にリリアは片手で剣を構え、それから薄っすらと微笑を浮かべた。

それは覚悟であり、同時に勝利を確信した姿でもある。そうして少

女は目を細め、冷たく笑いながら剣を両手で真上に振り上げた。

黄昏の日（２）

パンデモニウム全体を揺らす衝撃に夏流と秋斗も気づいていた。地鳴りの中、空を真上へと一瞬視線を送った夏流に秋斗が蹴りかかる。

「上でも派手にやってるみてえだな」

「魔王相手ならリアだって苦戦するだろうさ」

「ハッ……。魔王ねえ。知ってるか、夏流？　ロールプレイングゲームじゃ、勇者に倒されない魔王ってのは一人も居ないんだぜ？」

腕で蹴りを防いだ夏流。秋斗はその腕を蹴って背後に跳び、空中から銃弾を連打する。夏流はその全てを拳で迎撃し、魔力の刃を纏う一撃を放つ。

その刃を紙一重で回避し、秋斗は銃を構える。二人は同時に互いの眼前に得物を突きつけ停止していた。

「テメエの原書　ナタル見聞録は既に未来を予知できなくなっている。それがどうしてだか考えた事があるか？」

「……考えたさ。だが答えは出なかった」

「なら教えてやる。簡単なことだ。預言書に映る未来　。つまり、本来の未来よりも今この世界が格段に加速しているってだけのことだ」

事実、ナタル見聞録は遅れながらも事実を預言している。それは最早預言とは呼べない代物であり、ただ事実が後から記されるという形になりつつあるが。

しかし、見聞録が機能しなくなったという事ではない。ただ、この世界の時の流れが速まっているだけの事。本来ならば三日かかる工程を一日で。三年かかる工程を一年で……。世界は格段に変革の速度を上げ、そしてこの決戦もまた早められた代物。

「この世界が終わりに向かって加速し続けているという事実がそこにある。夏流、結局テメエはこの世界の崩壊を足止め出来てねえんだよ」

「リリアが止めるさ。あの子は俺よりも随分と立派な救世主だ」

「解ってねえな、夏流。そのリリア・ライトフィールドこそ、この世界の崩壊を加速させる原因なんだろうが」

「リリアが……？ 一体どういうことだ ！」

二人は同時に距離を離す。背後に跳んだ直後、正面に向かって真っ直ぐに移動する夏流の姿があった。電撃の残像を残しながら一瞬で移動し、夏流の蹴りが秋斗目掛けて繰り出される。

ハイキックを屈んで回避した秋斗は銃を十字に構えて防御の体制を取る。回転しながら夏流も同時に屈み、大地に手を着け両足で秋斗を蹴り飛ばした。

「簡単なことだ！ この世界はリリアを中心に回っている！ だからリリアの物語が進めば進むほど！ リリアの物語が大筋どおりに進めば進むほど！ この世界は『空白の日』に向けて加速する！」

「まさか、そんな」

「驚くような事じゃねえだろ？ 俺の目的もお前の目的も『リリアを勇者にする事』……確かにそうだ。俺は空白の日と共に現れるヤツを殺すんだからな。だが、お前は何か明確な目的があつてリリアを勇者にしようとしたのか？ そもそも勇者ってなんだ？」

「それは……」

「テメエはどうせ、そのうさぎか何かに言われたまんま行動してきただけだろ！？ 結局自分の戦いなんかしてねえんだよ、テメエはっ！！」

秋斗の周囲に魔力の光が無数に収束していく。その光の粒一つ一つが小さな球体を構成し、瞳のような形のそれらが一斉に夏流を見詰める。

「リインカーネーション 輪廻せよセツトライトニング 転生の輪 汝我が支配に応えよ……！
ファンネル・アイ 穿つ瞳！ 食らえっ！！」

秋斗の指し示す方向へ移動を始める光の瞳。それはぐるぐると回転し、夏流の周囲を巡りながら不規則に動いて行く。

そこから一斉に放たれた光の光線が夏流の全身へと襲い掛かる。咄嗟に跳んで回避したものあらゆる方向から放たれる光の閃光はどこまで逃げてても夏流を追いかけてくる。

「逃げてても無駄だぜ！ ファンネルはどこまでもテメエを追いかけて行く！ オラオラオラオラオラアアアッ！！」

両手に構えた拳銃を逃げ回る夏流目掛けて連射する秋斗。銀色の光の雨の中、夏流は踊るようにそれを回避しながら跳躍し、壁を走って天井を蹴る。

空中から秋斗目掛けて落下し、襲い掛かる。至近距離に近づいてしまえば迂闊にファンネルは発動出来ない。細かいステップを刻みながら接近して拳を放つ夏流の一撃を防いでいたのは、やはりファンネルだった。

カウンターで放たれた弾丸が腕に命中し、血が飛び散る。激しい痛みの中立ち止まらずに後退するが、ファンネルは夏流を追い詰めるように逃げる方逃げる方から執拗な追撃を繰り返す。

「この足場の悪い空間でよくもまあそんなに逃げられるもんだな！だが、逃げてるだけじゃあ俺様には指一本触れられねえぜ！」

夏流の周囲を高速で旋回するファンネルの全てが光を蓄えて攻撃の準備を整える。秋斗は空に手を翳し指を鳴らした。

「終わりだ！」

あらゆる方向から同時に放出された光の雨は球体を作り炸裂する。その中心で攻撃の直撃を受けた夏流は倒れ　最早身動きは取れないはずであった。

しかし秋斗が見たのは意外な光景だった。全てのファンネルが同時に動きを停止していたのである。それはファンネルの操作を誤ったわけではない。全てのファンネルはそう、半透明な金色の刃によって貫かれていたのである。

レーヴァテイン
「神討つ一枝の魔剣その力を我は担う……」
コールライトニング

夏流の全身から放たれていた無数の刃　。それはまるで剣山のよ

うに近づく物全てを貫き射抜いていた。光の中心、夏流が顔を上げると同時に全ての光の剣は碎けて散って行く。

「錬金術か？ 違うな、何かもつと特別な能力だ。何時の間にそんなもん会得しやがったんだ？」

「仲間から貰った力だ。俺の力なんて救世主のわりに大した事はないからな。こうしてここでお前と渡り合えるのも……全ては仲間のお陰だよ」

「仲間のお陰、ねえ……。テメエが言っても説得力ないぜ」

「……だろうな。だからとことんこうしてやりあってる。お互いの言葉に、お互いの思いに説得力を持たせる為に」

二人は笑いながら向かい合う。宿敵にして親友にして同じ運命を共にする者……。二人は互いに否定しつつ、どこかで受け入れていた。だからこそ、こうして正々堂々戦う事でしか証明出来ない。

正しさを。思いを。未来を、過去を、そして今を……。二人が決着をつけようと決めた時、互いの魔力が際限なく膨れ上がって行く。膨大な力の渦、その二つの中心で二人は睨みあう。

互いの力全てをぶつけようと二人が駆け出し、その中心で力をぶつけようとしたその時。全く予期せぬ、異形の存在が二人の間に割って入って居た。

秋斗と夏流、二人は同時に停止してそれを見詰める。どこからやってきたのか？ 全く不可思議なそれは、まるで最初からそこに居たかのように立っていた。

白い、天使のような翼。美しいドレスを身に纏い、胸の前で手を組んで祈りを捧げる目を瞑る女。夏流はその美しさに息を呑み、そして余りにも不自然なその存在に眉を潜めた。

いつ？　どうやって？　どこから？　二人の間に割り込み、その攻撃が直撃すればひとたまりも無いだろう。だが、それさえも恐れる事無く平然と割って入ってきた異様な存在……。

それを前に、直ぐに反応を示したのは秋斗であった。震える手で銀色の拳銃を向け、天使のような姿の何者かに語りかける。

「……………何をしに来やがった。『空白の日』はまだ遠いぜ　ヨト」

「ヨト……？　一体、何が……？」

祈りを終えた天使は顔を上げる。しかしその両目が開かれる事は無い。目は瞑られたまま、二人を交互に眺め、それからヨトは両手を広げて優しく微笑んだ。

「　救世主夏流。そして救世主秋斗。貴方達二人の役目は既に終わりました……。よって、貴方達の存在を元の世界にお返ししましょう」

「……………何を言ってるんだこいつは」

「夏流、ヨトから離れろっ！！　そいつが冬香を殺した　ッ！！
俺が追っている『仇』だ！！」

「何だと……！？」

夏流が瞬時に移動し、秋斗の隣に立つ。二人が移動したというのに、ヨトは二人に背を向けたまま天を見上げる。
魔力の胎動の鳴り止まぬ光に包まれた部屋の中、ヨトは光に照らし出され翼を輝かせながらゆっくりと振り返る。瞳を開かぬその表情

はどこか不気味で、そして神々しさを湛えている。

「一体どうなってる……？ その仇がどうしていきなり現れる？ ヨトってどういう事だ？」

「たった今、魔王と勇者の決闘に決着が付きしました。この世界は空白の日に向かい歩む事を確定させた……。未来が定まった今、不確定要素である貴方達二人は危険な存在なのです。故にこの世界より貴方達を排除します」

「いきなり何言ってた、あいつ……！？」

「知るかよ！ イカれてんのは今に始まったことじゃねえ……っ！」

「何も命を奪うつもりはありません。ただ在るべき世界へと帰って頂きたいだけなのです。それ以上の事は望みませんし、それ以上の事をする必要ありません……」

二人は互いを見詰めあい、それから同時に頷いて武器を構える。二人の敵意丸出しの行動にヨトは小さく首を傾げた。

「ああ……。何故、貴方達はそうして悪意ばかりを撒き散らすのですか？ 世界を変え、救いを与え、安寧を齎す者として、その行動は些か不適格ではありませんか……？」

「こっちはまだ戦いの最中だったって言うのに邪魔しやがって……！ テメエが代わりに相手すんのは当然だろうが！ 邪魔するんじやねえぞ夏流！」

「お前こそ邪魔をするなよ。何だかわからんが……まだここで終わりにするわけにはいかないからな。簡単に頷いて帰るわけには行かない……っ!!」

二人の態度を見てヨトは悲しげに頬に涙を伝わせる。それから胸の前で両手を組み、翼を広げて微笑んだ。

「わたくしは今、とても悲しい……。ですが、安心してください。貴方達の居なくなった世界で、彼女は幸福を手に入れるのです。そう、今度こそ、本当の。永遠に続く、たった一人の幸せを！」

二人の救世主が背後に跳躍する。ヨトは翼をためかせ飛翔すると、光を纏った姿で両手を広げて力を収束させていく。

「くそ……っ！ 一体何がどうなってるんだ！？ 何で神様が俺たちを襲う!？」

「だからテメエは何も解つてねえんだよ！ この戦いも この物語も！ 全部連中が仕組んだ事だつてよっ!!」

「さあ、せめて祈りなさい……。痛みを感じる間も無く、その命に安息を与えましょう」

両手から放たれた黒く歪んだ光がゆっくりと二人に迫る。二人は同時に左右に移動してそれを回避したが、光は進行方向を変えて二人の後を追跡していく。

「貴方達の存在は、やはり異端……。この世界に在っては成らない存在。貴方達が何度でも諦めずに向かってくるというのであれば、わたくしは何度でも神としてお相手しましょう」

「この電波野郎が！！　くたばりやがれっ！！」

走りながら秋斗が弾丸を連打する。しかし目には見えない壁のようなもので攻撃は全て弾き飛ばされてしまう。その様子を見た夏流が背後から跳躍し、空中を旋回しながら蹴りを放つ。

「ウルスラグナ障害を討ち滅ぼす者　はあっ！！」

「……無駄だという事がお分かりにならないようですね」

防御結界を貫通する効果を付加された魔力の蹴りはしかし完全に防御されていた。まるで手ごたえも無く、しかししっかりと威力を吸収されて『ねじまげられた』ような感覚　。違和感を覚えるよりも早く、次の瞬間夏流の足は有らぬ方向に折れ曲がって拉げていた。

「な　っ！？」

「馬鹿野郎、だから近づくなって言ったろうがっ！！」

「愚かしいのは貴方も同じですよ、秋斗。仲間の心配をしている場合ですか？」

「しま　っ！？」

背後に迫っていた黒く歪んだ光が秋斗の背中に命中した瞬間、大爆発が巻き起こる。秋斗の身体は無残に傷だらけになり、激しく吹き飛ばされて壁に減り込んでいた。

ぐしゃぐしゃに折れ曲がった足では着地もままならず、空中からよろけたまま落ちて行く夏流。下に流れるパンデモニウムの魔力の海

目掛けて真っ直ぐに落下して行く中、何とか空中に浮かぶ石柱に片手だけがみ付いた。

「く……っ！？ 魔力が……練れない……っ！？」

「貴方の魔力は既にわたくしが全て頂きました。今の貴方では、そこから這い上がる事さえも敵わないでしょう」

「嘘だろ、くそ……っ」

「いずれは落ちて魔力の海に消えて行くその命……止めを刺す事でせめて苦しみを与えず慈悲としましょう……」

身体に力が入らず、離れて行く指先。下を見下ろせば莫大な量の魔力が渦を巻き、触れる全てを溶かしてエネルギーへと変えて行く。熱ささえ感じるその光の真上、何の支えも無くぶら下がったままの夏流の上空からヨトがゆっくりと舞い降りる。齒を食いしぼり、何とか抵抗しようともがいてみるものの、魔力を失ってはただの人間と何も変わらない。齒向かう術は何一つ残されていなかった。あっさりと　こんなにも簡単に、成す術も無く敗北してしまった。震える指先が完全に離れ、身体が重力に沿って落ちていくとした時だった。

「　夏流ッ！！」

その腕を掴むぼろぼろの手があった。傷だらけになり頭から血を流しながら、しかし秋斗は駆けつけて夏流の腕を握り締めていた。二人の手だけが夏流の命を繋いでいる……。その状況に二人は最早同時に訳がわからなくなっていた。つい先ほどまで、あれほどまでに戦っていたというのに。

「デメエ……くそっ！ もうちょっと気合で何とか出来ねえのかよ……！」

「秋斗……。お前こそ、さっさと引き上げられないのか？」

「こっちはあちこちズタボロで、腕千切れそうなくれえ痛いんだよ……！ くそっ！ 力が入らねえ……っ……！」

浮かんだ石柱の上、二人が必至でもがく背後に白き翼が降り立つ。ヨトは何をするでもなく、ただ二人の様子を見下ろしていた。

「くそおおおおっ！！ 引き上げられねええええ……っ！！」

「秋斗……。やめろ！ 本当に腕が千切れるぞ！ それにもうヨトが来てるっ……！」

「うるせええ、ド畜生ッ！！ 俺は……戻るんだっ！！ やり直すんだ……全てを！ そこに、お前がいなきゃ……俺は誰を超えて冬香を奪えばいい！？ デメエがいなきゃ……冬香が戻ってきてても、意味ねえだろがっ……！」

「秋斗……」

夏流の手甲を必至で掴む秋斗ではあったが、腕を伝う血がすべり、ゆっくりと夏流の身体が離れて行く。歯を食いしばり凄まじい形相で痛みに耐えて自分を引き上げようとする秋斗を見上げ、夏流はゆっくりと微笑んだ。

「お前は充分凄いよ。だからもう、やめろ……。お前まで殺される……！」

「まだ決着がついてねえっ！！ テメエのためのおきめの必殺技が……んがあっ！！ まだいくつも残ってんだよオッ！！」

「俺だってそうだ……。でも、ここで両方倒れたら意味がない……。せめてどっちかだけでも、目的を果たさなきゃ……」

「テメエをぶっ倒すのが俺の目的だって……言っただろがああああっ！！」

指先に滴る血がゆっくりと夏流と秋斗の手を離して行く。それは嘗ての日、二人の間で繋がれていた手が離されていくように、ゆっくりと。

「ヨトを倒せ、秋斗……！！ 『空白の日』を起こさせるな……！！
リリアを……頼む……っ！」

するりと。血の雫が舞い上がり、夏流の身体が落ちて行く。

二人は見詰めあいながら言葉を失っていた。ゆっくりと、スローモーションのように……光の海の中へと夏流は消えて行く。

しかし、少年は穏やかに微笑んでいた。手を秋斗へと伸ばし、落ちて行く。どこまでも遙か彼方……命の存在できない渦中へと。

秋斗はただそれを言葉を失って見詰めていた。手を伸ばしてももう届かない。どんなに願っても、取り戻そうとしても、戻る事は出来ない……。

「……夏流

ッッー！！」

光の中へと消え去った救世主。その姿は浮かび上がってくる事は無い。

ただ秋斗の指先から零れた血の雫が光の中で燃え上がり、鮮やかに消えて行く様を少年は見詰めていた。

その背後。翼を折りたたんだヨトの足元に魔方陣が浮かび上がり、その姿が消えて行く。一人だけ取り残された秋斗は拳を岩に叩きつけ、空に叫んだ。

涙を流しながら叫ぶ思いの果て……。その景色の中では、幼馴染三人が手を繋ぎ、仲良く笑いあっていた。

黄昏の日(3)

落ちて行く光の中、目前に迫る死という概念は実感の沸かない幻想だ。

そう、何故自分がこの場所に居るのか、それさえも判らないままに死んでいく……。俺という存在の意味を、理由を、何一つ理解できないまま、消えてしまう。

秋斗の伸ばしてくれた手も離れ、血は俺たちの間をすり抜けて行く。その全てがまるで自分の過去を嘲笑するかのようにどこか滑稽だ。突然現れた神と余りにもあっけない物語の終焉……。気がかりなのはリリアの事だった。リリアは魔王に勝利したのだろうか？ あの子はこれから……。一人できちんとやっていけるだろうか。

秋斗は俺に言った。結局傍に居られないから逃げるんだろう、と。それは確かにその通りなのかもしれない。俺は焦っていた。これ以上この世界に関わってはならないと。しかしそれは……。この世界の為だけではない。

多分そう、俺は自分自身を守りたかったのだ。これ以上、幻想の世界に浸って心を落ち着かせてしまう前に……。全て忘れてなかった事にしたかったのだ。

ああ、そうか。最初からやり直したかったのは、俺も同じだったんだ。そんな事に今になって気づくなんて　なんて馬鹿馬鹿しい、ふざけた話だろう。

落ちて行く。青い光の中へ。身体が燃えて行く。全てがなくなってしまう。俺は目を閉じ、秋斗の叫びさえも届かなくなる光の中で意識を失った。

何もかも失って流れて行く……。地獄や天国なんて物を信じているわけではないが、きっとそれに近い場所に解けて行く……。自分の心の中、意識の底へ……。

「待つてよ、なっちゃーん！」

目を開く。そこに広がる景色に俺は思わず息を呑んだ。自分自身の姿が全て空白になってしまったかのような世界の中、俺はもう一人の俺と共に町を眺めていた。

故郷、現実の世界の俺の町……。山間にある、交通の便の悪い田舎町。山沿いの道路から見下ろす町に沈んで行くかのような夕暮れの真紅の光……。ランドセルを背負った俺。そしてそんな俺に駆け寄る妹の姿。

それはリリアに良く似ていた。でもリリアとは確かに違う笑顔で駆け寄り、小さな俺の手を握り締める。彼女に俺は認識出来ないのだから。もう一人の俺と冬香は手を繋ぎ、夕暮れの光を浴びながら並ぶ。

「何も置いて行かなくてもいいと思わない！？」

「……給食が食べられなくて放課後まで残されてるやつに付き合ってる程僕は暇じゃないんだよ」

つれない態度で俺が語る。冬香はほっぺたを膨らませて強引に俺の手を引いて歩き出す。

「全然優しくないお兄ちゃん……。超いじわる」

「給食が食べられなくて残される君の方がどうかと思うけど……」

「もーっ！そこはお兄ちゃんが颯爽と食べてくれたりすればいいじゃない！もう、いじわるいじわるいじわるっ……！」

「僕は家に帰って勉強しなきゃ。そりゃ、ふーちゃんは勉強しなくても成績いいからいいけどさ……。テストの点数が悪いと、お父さんもお母さんも凄く怒るんだ。だから僕は勉強しなきゃ」

思い出す過去の事。天才肌で自由奔放な生き方をする冬香と違い俺はいつも様々なものにがんじがらめにされていた。世間体や親の期待……。兄貴だということもあつたのだろう。冬香と俺と、二人に対する態度の違いは驚くほどハッキリとしていた。

別にそれほど珍しい話ではない。それに冬香は俺よりもよほど頭も良かったし、人付き合いも得意だった。俺は基本的に誰かと関わるのは苦手だったし、彼女と同じようにはなれないという思い込みとコンプレックスは余計にそれを加速させていた。

そんな暗い性格だった俺の手を握り締め、冬香はいつでも走っていた。まるで立ち止まる事を忘れてしまった長距離ランナーのようだ。どこまでも、どこまでも走り続ける。

止まってしまったら呼吸が出来なくなつて死んでしまふ魚のように彼女はいつでも真っ直ぐどこかへ進んでいた。その手に引かれているだけの自分が嫌で、何度も何度も嫌気が差した事を覚えている。二つの小さな影が遠ざかつて行くのを見送り、俺は一人両手をポケットに突っ込んで立ち尽くした。俺は……。どうも、死んだらしい。そうでなければこんな光景を見るはずもない。幻と呼ぶには余りにもリアルな、夢の群像……。

夕焼けの景色を見下ろしながら溜息を漏らした。結局俺は何を成す事が出来たのか。意味も理由もなく、ただ無駄に死んだだけ……。そんな風に考えるとやりきれない気持ちで一杯になった。

ガードレースを乗り越えて急斜面のブロック塀の上、両足を投げ出して息を付く。錆付いたガードレールに背を預け、両目を閉じて風を受ける。気持ちのいい風だ。前髪を梳いて行く風を感じながらただぼんやりと時間を過ごしていた時だった。

「懐かしいね。いつも二人で歩いた道も……こんなにも鮮やかに心に残ってる」

背後から誰かの腕が俺を抱き寄せていた。ゆっくりと目を開き、その白い手に自らの手を重ねる。顔を上げるとそこには見慣れた……とても懐かしい横顔があった。

白いセーターに包まれた腕は柔らかく俺を締め付ける。ガードレールから身を乗り出すようにして背後から頬を寄せていたその人の姿に俺は眉を潜め、それから考える事を諦めた。

「俺は……やっぱり死んだらしいな。お前が……こんな所に居るなんて」

リリアもきつと、成長したのならばこんな顔になる。優しくて、大人びていて、でもどこか無邪気で……。掴み所の無い、不思議な魅力を持つ笑顔。

五つの指に絡まる小さな鎖のシルバーが音を立て目の前で夕日を弾いて輝く。風を受けて黒い髪を揺らしながら本城冬香は俺の背後で微笑んでいた。

黄昏の日（3）

「そんな事、もうどっちでもいいんじゃない？ 夏流は今ここに居て……私もここに居る。それでもう、望む物は無いじゃない」

俺は死んだのか？ その言葉に彼女はそう応えた。優しく微笑むその笑顔を見ていると本当にそう思えてくるから不思議だ。

手を握り締め、助け起こされるようにして俺はガードレールの内側

へと戻った。冬香は自らのジーンズを軽く叩き　　錆付いたガード
レールに背を向けた。

「久しぶり……とても言えがいいのか？」

「私はずっと夏流の傍に居たよ。夏流を見てた……。いつも、どんな時でもね」

「……そうか。そうだろうな……。お前はいつも、俺にべったりだったから」

俺の言葉に振り返り、冬香は楽しげに笑う。その笑顔だけを残して彼女は歩き出した。下り坂をゆつくりと、俺から遠ざかるように。置いてきぼりにされるのが嫌で俺も自然と歩き出す。釣られるように歩き出して俺は思い返した。そう、俺はいつも彼女から離れる事を怖がっていた。べったりだったのは……俺だって同じだった。

彼女を置き去りにするのは、きっと彼女がちゃんと俺を追いかけてきてくれるのかどうか不安だったからだ。そして追いかけて追いついて、手を繋いでくれるかどうかを確かめたかったから。

彼女が先を歩くとついに行きたくなるのはきつと同じ理由なんだ。彼女がそれを望んでいるから……俺がそれを望んでいるから。離れてはいけないと知っているから。だから……。

「ねえ……どうして？　どうして私を受け入れてくれなかったの？」

歩きながら語る冬香。俺は同じく歩きながら肩を並べて思案する。考えるまでもない……。今までの人生、ずっとそればかり考えていたのだから。

それでも俺は考えるふりをした。一種の意地だったのかもしれない。照れ隠し、とも言っのだろうか。兎も角俺は少しだけ思案し、それ

から答えた。

「それじゃあ駄目だと思ったんだ」

「どうして？」

「どうしてもこうしても……当然だろう？ 俺とお前は一つじゃない。同じじゃない。でも、別の物でもない……。俺たちは家族だ。だからそれ以上には親密になれない」

「……家族、か。どうして双子なんか生まれて来ちゃったんだろうね……。そうでなかったら、全てが上手く行ってたのに。夏流が苦しむ事も……家庭のジレンマに思い悩む事も無かった」

確かに双子としてこの世界に生まれなければ、もう少し他の道があったのかもしれない。

人間が別の存在である以上、限りなく同じに近いカタチで生まれてきたとしても平等には出来ない。或いは俺たちが同性だったら違ったのだろうか。男と女である以上、その全ては大きく違ってくる。俺は長男で、彼女は長女だ。だが長男、次男だったのならばまた違っただろう。長女、次女だったのならば、また……。だが俺たちはお互いに限りなく同じに生まれてきた。でもそれは全く別のものだった。

傍には居られない。別である以上人は常にどこか別の場所を目指さねばならない。帰る場所が同じだったとしても、同じ道は歩めない……。人は生まれた時からずっと一人で、死んでしまう瞬間までそれは変わらないのだから。

誰かと一つになることなど出来ない。心も身体も一つの自己という器に守られ殻の内側に居る自分にとって、外側の事は全て殻を通した事実には過ぎない。殻は割れれば何かが壊れ、何かと混ざり合うこ

とは永遠にない。

考え事をしていたのは恐らく一瞬だった。だが、冬香の姿は遠い場所に移動していた。小さな影になってしまった冬香はまだ小さく見える我が家の門を潜って行く。俺は駆け足気味にその場所へと急いだ。

夕暮れの景色の中自らの家に飛び込む。森を抜けた場所に在るあの古めかしい洋館ではなく、引越し先の新館……。俺がここに住んでいたのはほんの僅かな時間だけで、たった数ヶ月で家を出てしまった俺にしてみればこの新館はまるで他人の家のような感想しか浮かんでこない。

妙に小奇麗な、しかしやっぱり古めかしいデザインの洋館……。門は片方空きっぱなしになっていた。両開きの扉も、片方だけ。俺は両方とも、まるで自分の痕跡を残すように空いているとは別側の扉を開いて進んだ。

靴を履いたまま廊下を歩いて行くと、自然と冬香の部屋に辿り着いた。その扉をそつと開くと、そこでは今よりも少しだけ子供の冬香が机に向かって勉強していた。

ドアノブを掴んだまま俺はその姿に呆然とする。冬香が、あの冬香が勉強をしている……。それは当然のことなのだが、俺にしてみればちよつとしたショックだった。

冬香は勉強を繰り返していた。窓の向こうで太陽が沈み夜になり、日が昇って朝になり、何度も何度もそれを繰り返して行く。冬香は一人で勉強をしていた。文句も愚痴も一言も零さなかった。誰も、彼女に近づく事はなかった。

子供の冬香が振り返って俺を見る。その表情からは何も感じられない。何もない、のっぺらぼうのような顔……。目も鼻も口も確かにあるのに、そこにはまるでなにもなかった。

彼女が何を思っていたのか俺には良くわかる。彼女は俺の代わりになろうとしていたのだ。医者だか弁護士だか知らないが、そのどっちかにはなれといわれていた、そうなるのが当然だと考えている両

親の考えを押し付けられ、そこから逃げ出した俺の代用品。

それを彼女は苦に思っていただろうか？ 恐らく答えは否だ。冬香はそれを嫌がっていなかった。ただ。俺の代わりをするという事は、俺の居場所を奪う事だ。俺の存在を否定する事だ。俺の思い出を塗り替えて行く事だ。それが彼女には激しい苦痛だった。

「……私が私じゃなくなつて、なっちゃんになつてしまったら……なっちゃん、君はどこにいるの？」

机に腰掛けた冬香が問い掛ける。俺は何も答えられずに歩み寄る。

「どうして……なっちゃんは居なくなつたの？ どうして、私に何も言ってくれなかったの？」

恨んでいるのだろうか。それとも信じられなかったのだろうか。単純に、そう。まるで当たり前だと思っていたものがあっさりと崩れた時人が現実味を失ってしまうように。夢見心地のような気持ちのまま、彼女は時を繰り返したのかもしれない。

「どうして？」

無感情な瞳が俺を見上げる。その視線はこの世界にある百万の言葉よりも俺の心を切り刻む。

「どうして……？」

せめて大声で罵倒してくれたのならば、もっと気が楽だったろう。でも、冬香はそんな風に感情的に成れるほど、状況を理解できていなかった。

だから誰も止められなかった。異変は本当にかすかなもので、誰も

気づけなかった。たった一人……そう、恐らくこの俺一人を除いては。

子供の冬香に手を伸ばす。指が頬に触れる直前に彼女の姿は消えてしまった。勉強中のノートの上、びっしりと数式の書き詰められた左のページとは対照的に真っさらな右側に記された、たった一言の言葉を指先でなぞる。

「どうして……か」

置いてきぼりにされる悲しさも寂しさも不安も知っていたはずなのに。俺は同じ事を繰り返す。

もうこんな事はしないって、もう同じ間違いはしないんだって、何回も何回も後悔を重ねて、何度も何度も決意を重ねて、それでもまた間違えて行く……。

まるで正解の存在しない迷路の中、一人で何度も彷徨い続けているかのようだ。人生とは恐らくそういうもののだろう。まだまだ先は見えなくて……出口も終わりもゴールもない。ただ、迷いだけが続いている。そこに答えという二文字を見つけ出す事は、一生かけても難しい。

それでもどうしてもこれだけはやり直したいと、どうしてもこれだけはなんとかしたかったのだと、心の中で思い悩む事がある。それをやり直せるはずもないのに、思い描いてしまふ。何度も何度も……。あの時、ああしていればと。

彼女もそうだったのだろうか。白いノートの上に記された一言は、その言葉に出来ない苦悩を表しているかのようで俺の心を激しく締め付けた。

背後に人の気配を感じて振り返る。白い影が階段を下りて行くのが見えて俺はそれを追いかけた。自分が開きっぱなしで通ってきたはずの扉は固く閉ざされ、ドアノブを捻って開かれた世界は全く別の場所に通じていた。

そこは今俺が住んでいる町だった。この故郷とは遠く離れた場所に在る町……。乱立するビルの隙間に立ち、その影を眺める。黄昏時の光に包まれたまま俺はゆっくりと歩き出した。

無人の世界、音の無い町……。現実離れた感覚の中を俺は進む。辿り着いたのは、ビルに影を落された廃れた小さな公園だった。

遊具といえばブランコと滑り台、それに小さな砂場だけの誰も利用しないような小さな公園……。そのブランコの上に腰掛け、冬香は揺れていた。傍に歩み寄り、冬香を見下ろす。彼女は微笑みながら顔を上げた。

「私……夏流の事が好きだよ」

「……冬香」

「夏流はどう？ 私の事、好き？ それとも……嫌い？」

「俺は……」

「ねえ、どうして？ どうしていつもはぐらかすの……？ 夏流が一言好きだと言ってくれば、もうそれで私は満足だったのに……」

言えるはずがない。そんな無責任な事は……。いや、違う。俺は怖かったんだ。これ以上彼女を好きになるのが怖かったんだ。

それを言葉にすることで自分が認めてしまうのも、それを彼女が認めてしまうのも、心を受け入れてしまうのも……。俺には彼女を幸せにする資格が無い。だってしょうがないじゃないか。俺たちはそういう風に生まれてきたんだ。それはもう、運命と言い換えてしまってもいい。

俺だって冬香と離れたくなかった。大事な大事な俺の半身……。でもそれじゃ駄目だから、前に進まなきゃならないから、だか

ら俺は……。

「……あの時もそうだったよね。私が君に会いに来て……この場所と同じように向かい合った。あの時も夏流は……同じ事をしたね」

立ち上がり、俺の両肩に手を伸ばす冬香。そうして首に腕を絡め、顔を近づける。

「ただ、キスしてくれればそれでよかったのに。それだけで私は私を肯定出来たのに……。君は私を拒絶した。君は私を突き飛ばした。こうやって」

冬香が俺を突き放す。それは決して強い力ではなかった。けれども俺は逆らえず、力の赴くままに背後へと倒れこむ。

両足に力が入らないのも、どん底に突き落とされるような深くて暗い絶望を味わうのも、きつと彼女の指で、彼女の手で、突き放されるからだ。ただ、その指が離れたただけなのに……。まるで殺されてしまったかのような気持ちに陥った。

受身も取れずに砂の上に倒れこむ。夕焼けを背に影を落とし、彼女は俺を見下ろしていた。表情は見えない。黒い影はそれでも笑っているように見えた。

「夏流は私を殺した。こうやって、指先一つで。だから私も夏流を殺した……。こうして、指先一つで。ねえ、夏流？ 殺された気分はどう？ 目の前で失われていく気分は……。どう？」

彼女は俺の胸の上に跨り、白い指を俺の首に伸ばす。両手が首にまとわりつき、じわりじわりと呼吸が難しくなっていく。

「君はいつも黙ってる……。君が故郷を離れる時も、私は何回も問

い掛けたよね？ どうして？ どうして？ っ……。君は黙ってた。俯いたまま何も言わなかった。私は一生懸命考えたよ？ 自分が悪いのかなって。何かが間違ってたのかなって。でも君は答えてくれなかった。今も、昔も……ずっと！」

力任せに俺の首を絞めて彼女は肩を震わせる。夕暮れの光を浴びた雫が自分の頬に零れて初めて俺は彼女が泣いている事に気づいた。

「どうしたら君が戻ってこられるのか考えたよ……？ がんばったよ？ でも君は戻ってこなかった。私を置き去りにしたまま遠くへ行ってしまった……。何の言葉も無く別れもなく突き放された人間はどこへ行けばいいの？ どうやって前に進めばいいの？ 清算したつもりで君は全てを犠牲にして行く……。過去の全てをまるでなかった事にするみたいに……。私 の 存在 を な かつ た 事 に す る み た い に……。！」

「とう、か……。っ」

「貴方は毎晩毎晩私を殺して行くっ！ 繰り返し繰り返し殺して行くっ！ 貴方の所為で心が無くなって磨り減って、帰る場所も進む場所も無くなっていく！ 自分が傷つくのが怖いから逃げて、言葉にする事も恐れて、ただただ逃げて逃げて……。それで前に進んだつもり？ 仕方が無かったなんて笑わせないで！ 貴方はただ自分が傷つかないようにするのに精一杯なだけ！ なんにも最初からっ！ 私の事なんか見てなかっただけっ！！」

呼吸が出来なくなり息も絶え絶えに悶える俺を見下ろし、彼女はそっと腕を引く。呼吸を荒く肩を揺らすその表情は悲しみに満ち溢れていた。満ち満ちて溢れて行く雫は俺の頬に落ち、それでも彼女は笑っていた。

「……無かった事になんかせせない。絶対に貴方の中から消えてあげたりしない……。そうでしょう？ 貴方が私の心の中から消えてくれないのなら、貴方を忘れてあげない。忘れさせてあげない。何回でも繰り返し繰り返して……。何度でもこんな世界、終らせてあげる」

「冬香……」

「秋斗と三人で作った絵本を覚えてる？」

突然、彼女の声色が変化した。ゆっくりと上体を起こし、冬香の顔を覗き込む。彼女は昔と変わらない笑顔で涙を流しながら語っていた。

「私が無理矢理、なっちゃんを巻き込んで作らせて……。私が絵を描いて、なっちゃんが物語を書いた」

「……覚えてるよ。覚えてる……」

「物語の結末を……。なっちゃんは覚えてる？」

「物語の、結末……」

それは、勇者が魔王を倒す物語。魔王は完全な悪役で、勇者は絶対的な正義だった。

「でも、それは可哀相だって君は言った」

どうして魔王は必ず悪で、倒されなければならない存在なんだ？

幼い頃の俺はそう疑問を口にした。

「だから魔王は、勇者に救われる物語にしなければならなかった」

倒される魔王には必ず何かの意味がある。そしてその存在が倒れた時、勇者は魔王を救うのだと。

「倒れた魔王とそれを救った勇者に未来がないのはどうしてなのかと君は言っ たね」

物語には必ず終わりがある。それがどんなに長く続くものでも、それは当然の事だ。終わりの無い物語は破綻している。まるで途中でレールのなくなっ てしまっ た列車のように。

「希望を残したいと君は言っ たね」

勇者と魔王の物語が続けられたらいいのにと俺は笑っ た。でも、それは出来なかつ た。物語はそれで終わりだっ たから。

それでも冬香は作っ てしまっ た。その物語に 俺たちの過去を投影して。そう、それを終わらせたくなかつ た。俺も彼女も、彼女も俺も……。同じように、終焉を望まなかつ た。

「お話の中でなら、私は貴方に巡り合える。あの物語には貴方の息吹がある。貴方の遺志がある……。だから、作っ た」

自分にとって都合のいい、自分にとって永遠に続くエンディングを紡ぐ為に。

「貴方が救世主で、私は救いを待っている勇者の女の子」

もしももう一度やり直せるのなら。人間は誰でもそう考える。
そしてそれを実現できる力が彼女にはあった。

「貴方は私を何度でも否定する……。私は何度でも、貴方を求める。
貴方は何度でも私から逃げて行く……。だから私は何度でも世界を
壊す」

音が弾け、世界の全てが破片となって砕け散った。真っ白い空間の
中、俺たちは二人だけで向かい合っていた。

彼女はそれ以上何も語ろうとはしなかった。ただ俺は、何となくそ
の時彼女の心を少しだけ理解できた気がしていた。

この世界に彼女が何を望んでいたのか……。何のためにあの世界が
あったのか……。虚幻の世界の中に込めた、冬香の意志を感じ取る
事が出来た時、俺は自分の行いに深く絶望した。

そして同時にもう冬香が俺の知っている冬香が世界のどこにも
居ない事を知った。そこにあったのは誰かにゆがめられた彼女の願
いだけだった。

この世界の終わりなんて彼女が本当に望んでいたのだろうか。きっ
とその願いは誰かに擦じ曲げられ、今もずっと正されるのを待つて
いる。

冬香は言っていたんだ。俺の言っていた事が正しかったのだと。彼
女はもつと何か別の願いを俺に託していた。俺はそれを知って……
知って、どうするといふのか。

「俺はもう……死んじまったんじゃないか」

今更気づいたところで遅すぎる。後悔する事も振り返る事も全ては
意味を持たない。

冬香の姿が消えて行く。それは世界の中に残っていた微かな残滓だ
ったのだろうか。泡のように消えて行く虚幻の姿を見送り、俺は静

かに目を瞑る。

俺はリリアに何をして上げられたのだろう。一人で何かを待っていた少女。彼女は言ったじゃないか。忘れる事なんか出来ない。嫌いになんかなれない、って。

俺はそれに何を答えた。何も答えなかった。前にも後ろにも進むことの出来なくなった人間がどれだけ苦しむ事になるのか俺は知っていたのに、終わらせてしまうのを恐れていた。

そう、出来れば終わって欲しくなんかない。でも終わらせなきゃならないって分かっているのなら、自分の手を血で怪我したとしても、どんなにそこが汚れた道でも、自分で進んで進まねばならないのだ。誰かを裏切り傷付けて行く穢れた自分自身の存在を肯定出来ずに彷徨うだけの俺はあの世界の中で虚幻に過ぎない。嘘と偽りを撒き散らす硝子の華のように、見る者をひきつけて傷付けて行く。

どうする事が正しかったのかわからない。でも一つだけ、リリアにちゃんといわなきゃならない事がある。それを伝えるまではまだ死ねない。死んでしまつては彼女は一生鎖に繋がれたまま死と転生を繰り返す事になる。

何度でも彼女を殺してしまうだろう。そんな事はもうしてはいけな
いんだ。どんなに辛い過去でも、どんなに醜い自分でも、そこから逃げる事は出来ない。自分自身がそうであるように、影はどこまで行っても付きまとう。

「俺は
」

まだ、遣り残した事がある。

だから。

頬に触れる冷たい感触で俺は目を覚ました。目を覚ました……という事は、夢を見ていたのかもしれない。

俺はどこかに倒れていた。そこが雪原である事に気づくのにそれほど時間は必要なかった。何かの残骸の上、大の字に倒れこんだ自分自身の身体を首を動かして眺める。

「……………」

声は出なかった。喉もつぶれている。体中のあちこちがあまり直視できないくらいにずたばろになり、生きているのも不思議なくらいだった。

首を動かして肩の上のうさぎを探す。うさぎはどこにもいなかった。しばらく周囲を見渡し、雪の上に黒いうさぎが一羽ぐったりと転がっているのが見えた。

あの頑丈なうさぎがあんなところで倒れている……。死んでいるのだろうか。まあ、俺も死んでいるようなものだが。体の感覚がないのは多分寒いからじゃない。ただ……もう、動かないだけだ。

パンデモニウムに居たはずなのに、どうして俺はこんな所に倒れているのか。考えながら空を見上げる。曇った空からは絶え間なく白い雪が降り注いでいる。

身体に積もった雪はやがて俺の存在を時間をかけて白く上塗りしていくだろう。そうして何もなくなつて、身体も心も世界に朽ちる……。まだ、遣り残した事があるのに。

「……………」

あの子の名前を口にしようとしたけれど声にはならなかった。代わりに血反吐が口から飛び出し、もうどうしようもなく感じた。なんだか酷く疲れている……。そういえば、秋斗と全力でやりあっ

た直後でもあるのか。あいつは逃げ切れただろうか。死んではいないだろうか……。

どうせなら死ぬ前にもう一度あの子の姿が見たい。あの子にちゃんと伝えなきゃならない事があるんだ。それを伝えられないままに死ぬんなら……ああ。俺は恨むだろうな。自分自身を……。

「おい、珍しいな。こんな所に行き倒れだ。しかも超瀕死の」

全てを諦めて目を瞑った時だった。どこからか声が聞こえた。だがもう目を開ける事も億劫でただ耳だけをその音に傾ける。

「ちょっと来てくれ。流石にこのままほうつておくんじゃ可哀相だろう？」

「……そんな寄り道をしている場合じゃないんだけどな。まあ、君は言い出したら聞かないからね。仕方ない……。マリアを呼んでくるよ。応急処置はお願いするね」

「ああ、ダッシュでな！ 死んじまったら流石に治せねーしな」

複数の声が頭の上でやり取りしている。その声の主が気になって俺は懸命に目を開いた。眼前には誰かの顔があり、俺の顔を覗き込んでいるようだった。

「お、生きてる生きてる。もう少しの辛抱だからな。勝手にくたばったりするんじゃないぞ」

「……………」

「俺が見えるか？ まあいいや、兎に角落ち着け。とりあえずその

溶けてる喉を治してやつから」

男が喉に手を当てると焼け付くような鋭い痛みが走る。痛みが戻ってきたという事が皮肉にも自分の身体に生気が戻っている事の証でもあった。

激しく噎せ返りる俺に男は回復魔法を当て続ける。ゆっくりと酸素を取り込みながら一度は失ってしまった枯れた声で問い掛ける。

「あんた……は？」

「あん？ 俺か？ 俺は」

男は白いアーマークロークを纏い、人懐っこい笑顔で言った。

「フェイト・ライトフィールド。人呼んで、『白の勇者』だ」

それが、俺とフェイトの出会いだった。

黄昏の日(3) (後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

まさかの過去編へ

フェイト「おーっす！ 女の子ならなんでもいい、がモットー！
人呼んで白の勇者フェイトとは俺の事だぜ！」

リリア「……………お父さん？」

フェイト「おお、我が娘よ……………しばらく見ないうちに大きくなったなあ」

リリア「おとうさん!!」

フェイト「我が娘よ……！」

リリア「しねっ!!」

フェイト「おぶっつ!!」

リリア「何でいきなり過去編になってるの!? そしてなんでいきなりリリアの貴重な出番でもある劇場に出てくるの!?」

フェイト「なかなかいいパンチだが俺には通用しないぜ。まあ、貴重な出番ってわけでもないだろ？ むしろ最近リリアとゲルトばかりで他のキャラ出てないとかいうメッセージも来てるわけで」

リリア「だからってこの貴重な劇場スペースを侵食しないでよ！」

フェイト「安心してくれよ読者の皆！　これから暫くリリアの出番もゲルトの出番もないからな！」

ゲルト「え？　わたしもですか？」

フェイト「一体どこへ進んでいるのか謎のこの小説だが、どうせあと一月二月くらいの連載で終わるから安心してくれ！　じゃあな！」

ゲルト「え？　だから、わたしも出番ないんですか？」

リリア「にゃあああああつ！！　もう帰れええええええええええつ！！」

交わる時の日(3)

夢を見ていた。

その夢の中では、リリアが一人で立っていた。真剣を片手に少女は世界を見下ろしていた。

天空に浮かぶその場所には誰も近づく事は出来ない。絶対なる高み……。その世界は彼女にとっての孤独であり、永遠でもあった。

眼下に広がる世界は燃えていた。リリアは振り返る事も見下ろす事もしなかった。ただ空を見上げ……黙って月を瞳に映しこんだ。

やがて雲の切れ間から金色の光が世界に降り注ぐと、彼女の本当の姿を映し出す。リリアの銀の装束は返り血で赤く染まり、彼女の立つ場所も真紅の台座となっていた。

背後には無数の死体が山を成し、人がまるで瓦礫のように折り重なって朽ちていた。少女はようやく振り返り、自らの作ったいくつ物山を見渡し、一つ一つに涙を流した。

俺はそこにいるのに、リリアに近づく事が出来なかった。両足はまるで大地に杭を打たれたかのようにぴくりとも動かず、腕は伸びないし声も届かない。

それでもどうしてもリリアに伝えたくて俺は必至で両足を動かした。やがて足首が千切れて大地に落ち、歩けなくなつて這いずり回る。

彼女はそんな俺を見下ろしていた。冷たく凍った瞳で、両足を失った俺を。無様に這いずる俺を見て、彼女は嬉しそうに笑顔を浮かべる。それが、悪夢の終わりだった。

「大丈夫？ 目が、覚めた……？」

薄暗い部屋だった。それも無理は無い。その場所が部屋ではなくテントの中だという事、そして外が夜である事に同時に俺は気づいた。

テントの外には焚き火でもあるのだろうか。揺れる紅い光は薄い布地を透けてこのテントの中も照らしている。暗い闇の中、俺の手を握り締める誰かへと視線を移し、思わず飛び起きる。

「リリア……っ！？　ぐ……っ」

「無理しないで！　貴方は死に掛けていたんですから……無理をすれば死んでしまいます。傷を治すことは出来ても、命を蘇らせる事は出来ないですよ」

「……………うつっ」

彼女に支えられながらゆっくりと薄い布で出来た寝床の上に横たわる。全身を激しく切り刻むような鋭い痛みの中、そっと彼女を見詰める。

そこに座っていたのはリリアだった。正確にはリリアではなく、リリアによく似た誰かだ。歳は……俺よりも上だろう。大人になったリリアと言う感じで、その仕草や態度にもどこか大人びた物がある。やがてそれがリリアが成長した姿ではなく、マリアが若い頃の姿なのだと気づいた時、俺の中で何かが合致した。深く息をつき、体の力を抜いてリラックスする。

「ここは……」

「北方大陸の大雪原を抜けた場所に在る遺跡です。自分の名前は何かりますか？」

「本城夏流……」

「ホンジョウ、ナツル……？　不思議な名前ですね。イザラキの出

身にしては、服装はクイリアダリアの物に近いようですが……」

マリアは俺をじろじろ見詰めながら不思議そうな顔をしていた。そりゃあそうだろうな。異世界の名前に、クイリアダリア聖騎士団が作った専用の戦闘服……オマケに武器はテオドランドの一品だ。クイリアダリアに近しい存在である事は間違いないのにここは北方大陸ときているらしい。

身体が痛くてよくわからなかったが、今冷静に考えるとここはとても寒い……。身体は指先一つ動かしただけでも苦痛で、起き上がる事は出来そうにない。

「どうして俺は助かったんだ……」

わけがわからない。だが、俺は確かにフェイト・ライトフィールドと名乗る男に遭遇した。彼に命を救われたんだ。

オルヴェンブルムの勇者記念館で見たフェイトの姿を思い起こし、確かにそれが一致する。何よりあの剣はフェイム・リア・フォース……。服装もサイズや細部が異なるが、リリアの纏っていたアーマークロークで間違いない。

それに彼女は確かにリリアの母、マリアだろう。つまりここは過去だ。つまりええと……。俺の頭がおかしいのか？

俺は確か、ヨトにいきなり襲われたんだ。訳の判らない魔法を使うバケモノみたいな強さの天使……。そう、羽が生えていた天使のようなやつだった。それで秋斗と一緒に立ち向かったけど、負けて……。…。

「秋斗……！ 秋斗はどうなったんだ！？ いつつうつっ！」

「ああっ！ だから、安静にしてください！ もう……困った人ですね」

「何で俺は生きてるんだよ……くそっ」

秋斗が俺を助けようとしてくれたのに……パンデモニウムの魔力回路の中に落ちたんだ。

それで、全身を超密度の魔力が焼いて、そこに溶けて俺も死ぬはずだった。それがいきなり夢みてるうちにこんな所に　過去に飛ばされていた。

場所はどこなんだ。なんでこうなった。どうしてフェイトがいる。頭の中がこんがらがっている……。誰か、説明してくれ……。

「生きている事が不幸であるような物言いは止めなさい、ナツル？　貴方はこうして生きている……。それはとても素晴らしいことなのですから」

そう微笑んで彼女は俺の手を握り締めてくれた。とても柔らかくて暖かい手……。リリアに似ていて、でももっと優しい手。

何だかそれが疲れた身体に猛烈に効いて気づけば俺は泣いてしまっていた。マリアは涙する俺の手を握り締め、ずっと傍に居てくれた俺はリリアを守れなかったのか……。秋斗もヨトに殺されただろうか……。パンデモニウムは？　世界はどうなったんだ？　何で俺はここにいる。何一つ、成し遂げられないまま……。

「……泣きたい時は、心の底から涙を流した方がいいですよ。そうしてそこでへこたれず、明日は笑って過ごすんです。涙を流すのは、過去を悔やむからじゃない……。明日に進む為なんだって。そう思えば、貴方の明日はきつと今日より素敵になるわ」

「……マリア……」

「はい……って、あれ？ どうして私の名前をご存知なのですか？ それに貴方、さっきうわ言で何度も何度も『リリア』って……。どうして貴方がその名前を……」

彼女がそう口にした時だった。テントに光が漏れ、誰かが入ってきたのが解った。足音の方向に視線を向けるとそこにはフェイトが立っていた。

「お？ 目が覚めたみたいだな、少年。具合はどうだ？ 寒いかな？」

「……フェイト」

「おう、フェイトだぜ？ 寒いんだったら……マリア、ほら！一緒に寝てやれよ。女の裸ほど心温まるものもないぞ……ひいっ！？」

いつ、抜いたんだ？ マリアの腰に携えられていたレイピアの鋭い刃がフェイトの喉元に突きつけられていた。

「フェイト……？」

「じょじょっ！？ 冗談だろ……。ちょっと、刺さってる……！ちよっと血が出ちゃってるから！」

「あら、刺してるんですよ？」

「わかった落ち着け……！ ほら、少年にトラウマ作ったらまずいだろ！？ なっ！？」

「……それもそうですね」

マリアは不機嫌そうに片目を閉じながら鞘に剣を収める。それにしても……これがあの伝説の勇者、フェイトか。なんか……威厳ないな。

「遺跡の調査の結果、やっぱり地下に続いている事がわかったぜ。とりあえず今日はここでキャンプだ。明日以降、地下の探査に乗り出す……っと、業務報告はこんなもんにしてだな。少年にやあ色々聞かねば成らん事があるんだよ」

そりやまあそうだろう。俺は得体の知れない瀕死の男……。それも雪原のど真ん中にぶっ倒れていたんだからな。

フェイトからどんな尋問を受けるのか……。そう考えていた矢先だった。彼は一度テントの外に出て食事を運んでくると携帯用のボトルに移し変えられた酒のような物を掲げ、ウインクした。

「ハラあ減ってんだろ？ 一杯やりながらと洒落込もうぜ。男が会ったらまずは飲む。理解しあうのはそれだけで充分だ」

若いのおっさんのような事を語るフェイト。その前向きで明るい姿勢にリリアの姿を見出し、俺はまた少しだけ泣きなくなった。

交わる時の日(3)

「ほー。つまりあれか、お前は未来から来た異世界人で、未来での戦いで死に掛けたと思ったら何故かここにいたと」

「……………あんまりにも荒唐無稽な話になってしまっただけだ」

「そりや大変だったな。いや、しかしお前は本当によく生きてたな。パンデモニウムの魔力回路に落ちたら俺でも十秒と持たずに蒸発するだろうに」

「え？ し、信じてくれるんですか？」

「は？ 嘘なのか？」

「いや、事実なんだけど……」

「なんだよ変なこというなよ。嘘かとおもっちゃったろ」

そう言つてフェイトは残っていた酒を飲み干して笑った。

まず俺は自分自身の事を全て偽らずに話す事にした。ここには心境の変化というものがあつたのだろう。俺はもう、誰かに嘘を付きたくなかつた。

この世界に対する影響とか、この世界の未来とか正しさとか、そんな事よりもまず第一はリリアに会うことだ。あの子に……元の時代に戻つて会うには、絶対に彼らの協力が必要になるだろう。

俺は兎に角信じてもらえるように全てを最初から話した。それこそ何時間にも及ぶ長話になつてしまつたが、フェイトは俺の話をあっさりと信じてくれた。しかも特に驚いている様子はなかつた。

「随分難儀な設定抱えてるじゃねえか、救世主ボーイ。おいマリア、話を聞いてたか？」

「……聞いてはいましたが、あまりにも突拍子もない話で……。でも、どうやらリリアは元気に育っているようで安心しました」

「だな！ いや、流石俺の娘だぜ！」

「その自覚、少しは父親らしさと節制には繋がらないのかしら……？」

「……………いやっ、だから……。例の件はもういいだろ？ カンベンしてくれよ……………」

「貴方がオルヴェンブルムを出てからここに来るまで、一体何人の女性と寝ようとしたか……。六人ですよ、六人！」

「それは間違っているぞマリア。途中二人同時に美味しく頂くと思ったから七人だ」

「だからどうしたっていうんですか、この馬鹿っ！！」

女王の口から飛び出した馬鹿という単語に絶句する俺であったが、二人の喧嘩は収まる気配を見せない。マリアに襟首をつかまれながらフェイトは何やら必至に弁明していた。だがその内容はどれも呆れるような事ばかりだった。

なんというか、これがリリアの親父か……。大雑把なところは似てるが、リリアがこういう男に似なくて本当によかったと思う……。いやでも冷静に考えるとあいつは結構モテたような気もする。ゲルトとか、アクセルとか。

そんな余計な事を考えているとテントに新たな人物が登場した。それがゲルトの父ゲインであることに一発で気づく事が出来たのはフェイトの時と同じ理由だ。

「何やってるんだ二人とも……。彼が完全に固まってしまっているじゃないか。勇者部隊の恥を晒さないでくれないか」

「いててっ！　だったらマリアを何とかしてくれ！」

「……………君が陛下にボコボコにされるのは仕方が無いし僕はむしろ歓迎だけど、時と場合というものがあると思うよ」

「……………むう。まあ、ゲインがそういうのなら……………」

「おいっ！　なんで俺がやめろっつってもやめねえくせにゲインがいうとやめんだよ！？」

「貴方はただ自分が助かりたいだけの命乞いではないですか」

「俺だって客の事を考えてたっつーの！　……………なあんだよその目はっ！？　お前ら二人して勇者に向かって失礼だとは思わないのか！？」

「姫です」

「僕も勇者だけど何か？」

二人の冷静な態度にフェイトは納得行かない様子で振り返った。完全に勘ねてしまったフェイトの代わりに前に出たのはゲインだった。

「失礼を赦して欲しい。僕は、ゲイン・ノーステライト……………いや、今はゲイン・シュヴァインだったね。彼と同じく勇者を背任している」

「……………本城夏流です。よろしく、ゲイン」

彼の求める握手に応える。握手を終えるとゲインは一步身を引き腕

を組みながら立ち上がった。

「話は大体テント越しに聞かせてもらったよ。時間跳躍とは少し飛躍した発想だけど、そうでなければ説明の付かない事が多すぎる」

彼はボロボロになり、脱がされたのであろう俺の上着取り出してきてフェイトとマリアに見せた。

「この襟首にクイリアダリア聖騎士団の紋章がある。けど、この紋章は僕たちのものとは少し異なるようだ。それに反対側には……」

「勇者部隊のエンブレムじゃねえか。ほー、未来じゃこうなってるのか」

「当然ながら彼は僕らの仲間じゃない。となると、未来のブレイブ克蘭であると考えるべきだろう。それと、彼が装備していた武装はテオドランドの技術で作られているが 僕らの知らない術式兵装、つまり未知の技術で強化されている」

「ほほ。メフィスのおっさんがやったんじゃないかと……やっぱりそういうことになるのか」

「以上の点を根拠に君が未来からの来訪者である事を僕は信じようと思う……ん？ 何かおかしかったかい？」

「いえ……なんでもないです」

やっぱりゲルトの父だけあってしっかりしているというか……。何となく委員長つばさがあるというか……。仕草や言葉の抑揚まで似ていて何だか笑えてしまう。

彼は大層不思議そうに小首を傾げていた。悪い事をしてしまったが、まさか娘さんにそっくりですねと言うのもなんだかおかしい話だ。話を流して進める事にした。

「話によれば、君はナナシといううさぎの力で空間を越えていたらしいね。だったら、同じようにうさぎの力でどうにかならないのかい？」

「……確かにそうだ」

言われてみれば、別にナナシのやつだったら普通に現実世界に戻れるかも知れない。が、そういえばあのうさぎ君はどこいったんだか。

「うさぎの彼なら別のテントで休ませているよ。君以上に外傷が酷かったものだからね……。君も歩けるようになるにはまだ日数がかかるだろう。僕らは暫くこのあたりに滞在しているから、時間は気にせずまずは身体を治すといい。落ち着いたらもう一度話を窺うとするよ」

「……何だか何から何まですみません」

「構わないさ。正直に言えば、君の存在に少しばかり興味があるからね。まだまだ話し足りないのさ。ほら、マリアは兎も角フェイトは回復魔法も使えないんだから、邪魔しないでとっと出て行くんだ」

ゲインに首根っ子をつかまれて引き摺られていくフェイト。二人がテントから居なくなるのを見送り、俺はマリアと二人きりになってしまった。

マリアは未来でも相当な美人だったが、こつちだと若返ってさらに美人というか……。リリアに近くなったせいか、何だか緊張する。

「それじゃあ、遠慮なく休んでください。とりあえず、包帯を換えた方が良さそうですね」

「いや、自分でやります……」

「ええっ？ 駄目ですよ、無理をしちゃ。ほら、脱いでください……！」

「いや、自分でやりますからっ！ いったえええっ!？」

「もう、だから私がやるって言ってるのに……」

『ついでに、マリアに色々マッサージしてもらうといいぞ。白い指先がこう……君の数日間ぶっ倒れっぱなしの一物をだな……。胸も無駄に大きいからはさんでもらうと最高に ひぎいっ!？』

布の向こうにマリアが投げつけたレイピアが確実に何かを貫いていた。テントの布に血が染み込み、レイピアを引き抜いて彼女は笑顔を作った。

ああ、急所に刺さらなかった事を祈ろう。あの人今見ないで投げたもんな。どこ刺さってもいいっていう考えなんだろうな。ああ、怖いな。怖いな。

「さあ、脱ぎましようね？」

「……………ハイ」

基本、逆らわない方がいいような気がした。

リリアそっくりの人に裸を拭かれたり包帯を巻かれたりするのには正直かなりしんどかったが、何とか耐え切ると急激に眠くなってきた。俺はそのままリリアが見守る中一気に眠りへと落ちて行った。

そうしてマリヤに看病されながら眠ること数日間……。瀕死の状態からこの短期間で回復出来たのはマリヤの類まれなる回復能力のお陰だといえるだろう。

何とか歩く事が出来るまでに回復した俺ではあったが、うさぎのほうは相変わらず眠り続けていた。外傷は最早問題ないレベルにまで回復した様子だったが、魔力の枯渇から意識が戻るにはまだ時間がかかるという。

俺が倒れている間にもフェイトたちは遺跡の探索を行っていた。テントから出て初めて俺はその場所が八とであったあの遺跡の入り口であった事に気づいた。

時は俺がパンデモニウムの中で意識を失った十二年前。正に魔王大戦末期、世界は混乱と戦乱の中に飲み込まれていた。

どこまでも広がる雪原の彼方、たとどこまで進んでも戻る事が出来ないかつて俺が見た世界……。そこに戻る手段が見つかるまでの間、俺はフェイトたちの世話になる事になった。

事情を理解してくれた彼らとは接しやすかったし、何よりそうすることが正しいことのように思えた。ここで彼らに会えた事は偶然ではない。運命的な何かを感じるといったら、少し考えすぎだろうか。遺跡の探索。それが今の俺の役目だった。今日も俺は地下に潜り、遺跡の中を塞いでいる壁や岩を壊したり何か貴重な資料がないか探したりを繰り返している。

フェイトたちは何やら独自の行動を行っているらしく、今でも戦争は続いているという。この大陸は激戦区であり、付近に増援は無いが敵の脅威も少ないらしい。

彼らがこの遺跡をウルトキア遺跡と呼んでいる事に習い、俺もこの遺跡をウルトキアと呼ぶ事にした。彼らはウルトキアにどんな目的

があるのかまでは教えてくれなかったが、助けてもらった恩返しという事もあり俺は彼らについて遺跡を探索した。

「しかし、アホみてえに広い遺跡だな……。迷宮と呼ぶにもサイズが大きすぎる。こんなことなら少人数の極秘任務なんかじゃなくて大部隊を率いてくるんだったぜ」

「そういうわけにもいかないだろう。最近は目に余る行動ばかりで大聖堂に睨まれている君がそんな大掛かりに動けば波風が立つ……。何より現場に僕らより階級が上のものが居なかったお陰でナツルを隠す事が出来る。むしろいい結果に繋がったと思うけどね」

二人は俺の前を歩きながらそんな事を語り合う。黒と白の勇者、ゲインとフェイト。その並ぶ姿はそのままリリアとゲルトを彷彿とさせる。

彼らの姿は、意思も関係性も含めて子供に受け継がれている……。なんだかとても不思議な、そして嬉しくなる事実だ。

遺跡の中を歩いて行くと、巨大な空洞に出た。そこには嘗ての古き町並みが並んでいる。地下に沈んだその町を誰かがアンダーグラウンドシティと呼び、それは未来にも存在し続ける事になる。

かつて八が使っていた家を通り過ぎ、そこがまだただの廃墟である事を認識してここが過去である事を噛み締める。

彼らは合計二十人にも満たない少人数で行動していた。この旧居住区が確保できた事を契機に地上の施設と装備は全て移動し、今はこのシティで寝泊りしている。

うさぎのやつも今はこっちのほうで休んでいる。俺たちは一先ず今日の探索を終え、マリアの待つ家へと戻る事にした。家に入ると火にかけられた鍋をかきまぜるエプロン姿のマリアが俺たちを迎えてくれる。

「お疲れ様。今お夕飯にしますから、もう少し我慢してくださいね」

「ナツル、先に今日の収穫物を倉庫に移動しておこう。フェイト、手くらい洗え」

「つまみぐいつまみぐい……つと！　おお、うまい……ひぎいつ！？」

料理に手を伸ばしたフェイトの指と指の間に包丁がつきたてられる。びよーんとかいう音が鳴って包丁がコミカルに揺れている……。

「おお怖……っ！　あんなお姫様誰が嫁に貰うんだよ……」

「え……？　フェイト、あんたマリアと結婚してないのか？」

「何で俺がマリアと結婚するんだ？」

いや、そんなごく自然と不思議そうな顔をされても困る。ここが十二年前だとすると、既にリリアは三歳……。あんたマリアとの間に子供設けてんじゃねえかよ。

その俺の言葉は口に出される事は無かった。口笛を吹きながら出て言ったフェイトを見送りながら俺とゲインは同時に溜息を漏らす。あいつは本当にどうにかしないとだめだ……。

「……ナツル、彼の非常識さにはそろそろ慣れて行った方がいい。プレイヤー
勇者部隊としてやっていくには、それが最低条件だ」

「……でも、ゲインさん」

「何も言わないでくれ……。あいつの子供がリリアだけとは限らな

いだろう？ あんまり深く考えたくないんだよ、僕は……ははは」

乾いた笑いを浮かべているゲイン。なんだかこの人は本当に苦労人のようだ。フェイトは敬語を使う気にはならないが、ゲインはなんだか尊敬できる気がする。

どうしてこっちのほうが後に勇者として伝えられないのか、なんだか腹立たしくなってきた。兎に角二人で今日発掘した機械部品やらなにやらを倉庫へ運搬し、待機していた技術者たちに引き渡す。

掘り起こされる遺跡の殆どはまだこの時点では殆どが土の中らしく、まるで土木作業をしに着たかのような有様だ。機械的な動力も生きて居ないのか、自動ドアも開かない。力づくで道を切り開く作業の繰り返しは流石にこたえる……。

「それにしても、この遺跡は広いな……。ナツルの時代ではここに人が暮らしているんだったね」

「はい。あんまり未来の事を話すのは、良くないのかも知れませんが……」

「……未来を知ったところで人の運命は変わらないさ。基本君が未来から来た事は他言無用だしね。万が一話が漏れても、ここの仲間には信頼できる。昔からの騎士仲間だからね」

「そうですか……。だったらいいんですが」

「……にしても、せめてブレイドくらいはつれてくるんだった。こう肉体労働ばかりだと僕はきついな。見ての通り、力は大したことないんだ」

苦笑しながらそう語るゲインは確かに線の細い男性だ。どちらかと

いうと中世的な顔立ちで美形なのだが、こういう労働には向いていないようには見えない。

ブレイドというと、この時代では先代のブレイドになるのか。となるとブレイドの親父……。うーん、かなり力がありそうだ。

「ゲイン、夏流」

そんな事を考えていると背後から声が聞こえた。振り返ると小さな和装の女の子が大きな刀を抱えながら小走りで近づいてくるのが見えた。

彼女は八代鶴来。未来でも何度か顔を合わせた事がある、ブレイクランでは年少の方に入る女の子だ。未来では大分大人になっていたが、こちらではまだブレイド君（新）と同じ年くらいではない。

とことこ走ってきたツインタールの黒髪少女は俺とゲインを交互に眺め、それからちよつと生意気な笑顔を浮かべた。

「ふむ……。二人して男同士の熱い会話でも交わしていたのかね？」

「ただの雑談だけど、まあそう言えない事もないのかな？」

「夏流はちゃんと働いているかい？ 死に掛けの新入りだから、へまをして瓦礫に埋もれて居ないか拙者は心配だよ」

「余計なお世話だ、このちび子め」

揺れている鶴来の髪を両方掴み、ぷらぷらさせる。鶴来は何やら無表情に抗議してきた。

「君は拙者より年上なのだから、もう少し言動には気をつけた方が

いい」

「ご忠告どうも」

「それで鶴来、もしかして何か見つかったのかな？」

「ご期待に応えられるかどうかは判らないが、他の調査班が活動停止状態の機械人形を発掘したらしい。拙者はこれからそれを見に行く所だよ」

「……機械人形」

何となく、未来での出来事を思い返す。いやいや、そんなはずはないか。まさかあいつがまたここで眠ってるって事もないだろう……うん。

「夕飯までまだ少し時間があるし、ついでに様子を見ていこうか」

「そうですね」

「……夏流、君はゲインには従順だな」

「尊敬してる人には素直なんだよ、俺は」

「ほう。拙者はそうでないと言いたいらしいな」

「そういつてるんだが」

「……君たち、仲がいいのはわかったから。置いて行くよ」

ゲインの言葉に俺たちは同時に反論しようとして同時に口を閉じた。ちび子はとことこ俺の前を小走りに歩いて行く。俺もそれを追い掛け、見つかったという機械人形の元へと急いだ。

交わる時の日(3)(後書き)

くそれゆけ！ ディアノイア劇場Z

その頃……

リリア「……」

ゲルト「……」

リリア「……え？ 何かマップ上の方に増援出てきたんだけど……。下まで防衛行ってるのにどうやってダンナーベースに戻れと……」

ゲルト「あ、それ詰んでますよ」

リリア「……え……。意味がわからないよ……」

ゲルト「このゲーム拠点防衛がめんどくさすぎますよね」

リリア「でもガン×ソード出てるから最後までやりたいじゃん……」

ゲルト「そっいえばカオスヘッドやらないんですか？ せっかく借りたのに……」

リリア「そんなんやってる時間ないよ……あっ」

ゲルト「どうしたんですか？」

リリア「カメラ回ってる」

ゲルト「え？ ええっ！？」

リリア「あわわ……！ リリアまだパジャマのまんまなんですけど！」

ゲルト「わたしも髪がかなりテキトーなことに……っ」

リリア「えと、えと、あれ？ なんで？ 過去に行っただんじやなかったの？」

ゲルト「わ、わたしに訊かないで下さいよう！ ううっ！ 寝癖が、寝癖がー！」

リリア「油断してコタツで寝たりするからだよ」

ゲルト「昼過ぎになってもパジャマの貴方に言われたくありませんっ！！」

リリア「えーとえーと……スパロボKが出たからってガン×ソードとファフナー全部レンタルしてた人はどうかと思うよっ！！」

ゲルト「何の話してるんですか！？」

リリア「えと、えっと……」

ゲルト「少し落ち着きましょう……。みかんでもたべて」

リリア「う、うん……。でもDSしながらみかんとかカオス……」

ゲルト「ポテトチップス食べながらスマブラよりはいいんじゃないですか」

リリア「えーと、とりあえず……なんでカメラ回ってるのって話ね？」

ゲルト「え？ 何々……。本編に出番がないから、せめて劇場では出してあげようと思って……って、余計な事を！」

リリア「うわーん、せつかくこたつでごろごろしてたのに……」

ゲルト「始めてしまったからには何か有意義な事をしましょう」

リリア「この格好でも全くシリアスさがないんだけど」

ゲルト「そんなものは元から在りませんから」

リリア「えーっと、『空想科学祭』の第二段の企画がスタートしたみたいだよ！」

ゲルト「……。レーヴァテインやキルシュヴァッサーなら兎も角、長期ファンタジーでその告知はどうなんですか？ 『異界アルバム』とかにしたほうが……」

リリア「そ、そだね。なんか文字制限が厳しくなったみたいなので今回は参加しないみたいだしね」

ゲルト「何か他にないんですか、話題」

リリア「話題話題……。えーと、ペルソナがPSPでリメイク」

ゲルト「……」

リリア「わかってるよう、もーっ！！ えっと、物語も架橋！ あと一ヶ月くらいで連載終了の予定なのですっ！！ 桜の舞い散る景色と共に惜しみながら終了するといいですよっ！！」

ゲルト「長らくお付き合いいただきありがとうございます。つて、一月から初めてもう四月になるんですか。早いものですね」

リリア「うんうん。この長期が終わったら暫くは未完の完結と修正にかかる予定だから、暫く読者の皆様とはお別れなんだよ」

ゲルト「中々有意義な事が話せましたね」

リリア「パジャマと寝癖だけだね」

ゲルト「そういうことは思い出させないでください」

リリア「あ！ ねえねえ、リリアも企画小説考えたよ！」

ゲルト「……なんですか？」

リリア「名づけて！ 『小説家になろうロボット大戦』！」

ゲルト「誰かが書いてくれるといいですね、そういうの」

リリア「その際は是非レーヴァティンかキルシュヴァッサーを出してねっ！……」

ゲルト「あんな扱いづらい鬱卒みたいなのも使いたがらないと思いますけど」

リリア「是非お気に入り作品にいれて改造限界突破していったね！」

ゲルト「……なんかカメラずっと回ってますね」

リリア「そろそろ限界だから　壊しておこっか」

ゲルト「賛成です。では　」

交わる時の日(4)

「……ああ。まあ、そんな気はしてたんだけどさ」

それが、ガラクタの山の中に紛れた白蓮を見た俺の第一声だった。十二年後の俺が体感するのと全く同じ現象である。しかしこいつがここで発掘されるなんて事は過去にあっただろうか。俺がこいつを見つける十二年後まで、まだ白蓮は眠り続けているはずだが……。

「……機械人形か。他のタイプとは少し趣向の異なる個体のようなね」

興味深げに調べるゲインに本当の事を話すべきだろうか。流石にこいつの事まではハッキリ話したわけではない……というか、そこまですべて細かく話す余裕も無かったのだが。

しかし、どうして見つかってしまったんだ？ まさか、俺が作業を手伝ったからか……？ ほんの僅かな手心で過去が変化してしまうのなら、俺は行動をもっと自重すべきなのかもしれない。とは言え何もしないわけにはいかないし……さてどうしたものか。

「この機械人形についてはまたあとで専門家に調査してもらおうとしよう。一先ず今は夕飯だ」

振り返り先に去って行くゲインを見送り、俺は白蓮の傍に腰を落す。彼女は魔力センサーで俺とナタルを同一人物だと言っていた。実際俺はナタルではないのだから、彼女のセンサーの信頼度は低いのかも知れない。だが、目覚めた彼女が俺の存在を認識すれば……未来は変わってしまうのだろうか。

そう考えると心の中に良くない考えばかりが浮かび上がってくる。

『もしももう一度やり直せるのなら』。何度も考えた事だ。俺は過去の世界に来て今まで一度もそれを考えなかった事を疑問に思った。

むしろ一番に願うはずだ。この過去の世界なら　魔王との決戦を控えた今の彼らならば、俺は救えるのではないか？　少なくとも、未来を知る俺は未来を変える事が出来る。最悪の可能性は回避出来る。そう、今までだって　原書の力でそうしてきた。

ナナシが傍に居ないので原書は手に取る事は出来ない。だが、その本の力を頼りに俺は嘗て未来を変えようとした。その結果最悪の未来を回避し、正しい未来へと修正してきた……その積もりだった。今こうして過去にいるのならば、フェイトたちと行動を共にすることで未来を変える事が出来るかもしれない。そうすればそもそも、あんな戦いは起こらなかつたかもしれない。俺は……必要なかつたのかもしれない。

そう、コレはラストチャンスではないか？　未来でリリアと近づき、そしてそこで別れを絶対的に選択せねばならない俺。彼女にとってもしも俺と出会わない未来があるとすれば、それは限りなくきつと正解に近づいている。

「……俺は、やり直せるのか？」

自分の存在を抹消することで、彼女の存在を傷付けずに済む……。そんな事が出来るのか？

いや、可能なんだ。俺は実際にここでの調査に参加し、結果未来は変わった。俺の存在が過去の世界で白蓮を目覚めさせた。ならば俺は……。

「……いつまでそうしているんだい、夏流。その機械人形にそんなに興味があるのかね？」

振り返ると背後で鶴来が俺を待っていた。俺は怪しまれないよう、白蓮へと伸ばしかけていた指をそっと引っ込めた。

「いや、何でもない。マリアが待ってる。早く戻ろう」

「……ああ」

ちび子はそれだけ言っただけでとこ歩いて行った。そう、まだ判断するには早すぎる。未来を変えるか、否か。それがこの指に任されているというのならば。

見極めねば成らないかも知れない。自分自身がこの世界で成すべき事を。そして、何が正しかったのかを……。

鶴来とゲインは先に食卓に着いていた。だが俺はそれどころではない心境だった。未来を変えられる……やり直せる。その考えに気づいてしまった以上、もう目を反らすことは出来ない。

フェイトたちと共に食事を摂っているマリアへ視線を移す。彼女は未来に行けば死んでしまう。今から十二年後、彼女は娘を守る為に命を落とす……。娘とロクに言葉を交わせないまま、あっけなく。俺はその未来を知っている。マリアは今、多分俺とそう変わらない年頃だ。彼女がこれから女王になり、大人になり、そして死んでしまう……そんな未来を今回避出来るのならば、俺は……。

「ん？ どうしたナツル、食わないのか？」

「いや……。フェイト、俺の分も食べる？ ちょっと疲れてるみたいなんだ……。先に休んでるよ」

「おお！？ そりゃ名案だ！ 任せろ、お前の食事は俺がちゃんと片付けといてやる……もぐもぐ！」

し、しかし食う量がハンパじゃねえなこいつ……。これがもしかしてリリアのはらぺこ勇者の由縁なんだろうか。何もここが似なくてもいいのに……。可哀相にリリア。

フェイトたちを残し一人で建造物を後にする。乱立する廃墟の古代都市の中、特に部屋割りには決められていなかった。冷たい地下の空気が闇の中、一人でふらりと歩き出す。

「……リリア」

腕に輝くブレスレットをじっと見詰める。俺は、彼女と出会った事を無かった事にしたいのだろうか。

何かリリアに伝えたい言葉があったはずなのに、今はそれさえ希薄になってしまった。やり直せるなら……。俺は、やり直したいよ。

リリアは俺が居なくなったら悲しむだろう。皆だつてそうだ。俺は皆を裏切りたくない。嘘を付いた歴史をやり直したい。

過去なら可能なんだ。未来の誰も傷付けず、全ての問題を解放して誰かに引き継がせる事なんてしない……。そんな正しい道を選ぶ事だつて。

俺が救世主なら、未来を救える存在なら……。やらなきゃ成らない事がある。でもそれが本当に正しいのかどうか、それがずっと引つかかっている。

夢の中で冬香は俺に何を伝えたかったのだろう。やり直せるのならばやり直せばいい。冬香のその想いは正しかったのだろうか。

最初から全てを、もう一度……。秋斗の願いでもあるそれを俺は一度は否定した。でも、あれは。あれは、他の全てを救えなくなるから否定したんだ。

誰も犠牲にせず正しい未来を選ぶ事、そんな奇跡みたいな、神の業としか思えないような事が今の俺には出来るかもしれない……。なら、俺は……。

「リリア……。君は俺が居ない世界で生きる。だったら……。俺は、この世界で君に出会わない方が良かったのか……？」

一人で呟いた言葉は闇の中に消えて行く。俺の迷いも、思いも……。全てはきつと、答えの出ない物だったから。

交わる時の日（４）

遺跡に探索が突然に終了したのはそれから二日後の事だった。

本国より届いた伝令によれば、魔王軍の攻撃用要塞、通称『プロミネンス』への総攻撃が開始されるらしい。

この十二年前の世界にディアノイアもシャングリラもない。ただ、彼の地には魔王がパンデモニウムと古代技術を使用して生み出した天高く聳える塔があった。

何故あの地なのか、何故今なのか……。解っている事は少ない。だが、魔王があのに莫大な魔力を持つ謎の建造物を構築していることだけは確かだった。

プロミネンスは後にディアノイアに取り込まれ、それに蓋をするように、封印するようにシャングリラが作られた。だが、プロミネンスそのものはパンデモニウムにより運搬されてきた古代兵器なのだ。そのプロミネンスになんらかの改造を施し、魔王軍が駐留するようになってから既に一年近く。プロミネンスそのものが持つ防衛機能により難攻不落の拠点と成っていたその地ではあったが、聖騎士団もそれを放置するわけにはいかなかった。

「……だから最初から俺たち勇者部隊に任せておけばよかったのによ」

「僕たちに命令が下るほど切羽詰った状況だという事なのだろうね」というのは、帰りの徒歩中の会話の一つである。元々勇者部隊は聖騎士団の中でもかなり移植の存在であり、女王の名の下に独立行動を赦された特殊遊撃部隊であった。

圧倒的戦闘力を持つ勇者部隊ではあったが、リーダーであるフェイトの破天荒な行動もあり大聖堂はその扱いに手を焼いていた。仕方が無くメンバーをばらばらに分けて行動させたり前線に送り込みっぱなしにしたりなど、勇者部隊がよからぬ考えを持たぬように対応してきたらしい。

この良からぬ考えというのは、同時から侵略と変革に躍起になり、敵国への差別を続ける大聖堂に反感を示す姫マリアと近い勇者部隊が彼女と共に大聖堂に謀反を企てるのではないかという事だが、コレは後に立派にフェンリルが成し遂げる事になる。

何はともあれ、圧倒的戦力でありながら運用は難しい危険な独立部隊……それが彼らの評価でもあった。そんな彼らに召集がかかり、今回のプロミネンス襲撃作戦に編入されたのは異例中の異例である。

「それほどまでに彼らは魔王の建造する『塔』を危険視しているのだろう。或いはもう丸一年手をこまねいていたものだから、面子の問題で意地でも落したくなったのか」

「ま、久しぶりに別働隊と作戦行動出来るチャンスだしな。弟子の成長ぶりが楽しみだぜ」

「君はいつでも楽観的だな。難攻不落の要塞と名高いプロミネンス、油断は禁物だよ」

「お前はいつでもマイナス思考だな。いいんだよ、俺一人でだって充分落せる。俺を誰だと思ってやがるって話よ！」

「……………そう簡単に行けばいいのだけでもね」

勿論それが簡単な事ではないことは俺も判っている。魔王の作った塔、プロミネンス……。いや、塔そのものはラ・フィリアと呼ばれる事になるのだが。

一度未来でその話を聞いた事がある。あれは確か、初めてオルヴェンブルムに来た頃……。アリアに教わって、だったか。深く調べた事はないが、未来の結果からこの作戦が成功するのは間違いない。だが、俺はさらに進んだ未来へと皆を導く事が出来るかもしれない。余計な事をするべきではないという事はわかっている。だが……。

「ずっと考え込んでいるな、夏流」

「え？ あ、ああ」

「何を思い悩んでいるのかね？」

俺の隣を歩く鶴来がそんな事を訊ねてくる。俺はその質問を曖昧に濁した。

「……………ごめんなさいね、ナツル。オルヴェンブルムについたら、ちゃんとあのうさぎさんもお休みできるようにしますから」

そう言われながらオルヴェンブルムへと小さな船で移動する。暫く歩き……。流石に未来と比べると不便な交通を我慢して進む。

その間俺はずっと考え事をしていた。どうするべきか……。オルヴェンブルムまでの道のりはあつという間だった。時間はかかったが、体感時間は大した事はない。

出来ればこのままオルヴェンブルムに辿り着く事が無ければいいと

思っていた。そこに着けば決断しなければならなくなる。そうしたら俺はまた間違えるのかも知れない。

答えを出す事が恐ろしかった。けれど嫌だと、遠まわしにしたいと思えば思うほど時は素早く過ぎて行く。オルヴェンブルムの城門の前に俺は深く溜息を漏らし、考える事を諦めた。

オルヴェンブルムもその周辺も戦時中だけかなりピリピリしていた。全体的に緊張した空気が漂う中、俺とナナシは城の中の一室を貸し与えられる事になった。

ナナシは相変わらず目覚めない。だが俺の魔力そのもののセーフティとしての役割は果たしている以上、俺とナナシを繋いでいる魔力は健在なのだろう。彼が目覚まさないと話が進まないわけだが、今はそれでも構わない。

「あの機械人形を……ですか？」

「俺に預けて欲しいんだ。理由は今はまだ言えないんだけど……」

「……そうですか。いえ、貴方がそういうのであれば信じましょう。直ぐに手配しますので、待っていてください」

マリアは俺の願いを直ぐに聞き届けてくれた。部屋に運び込まれてきた白蓮は相変わらず眠っていたが、それを起こすのは二度目だけありそれほど苦労はしなかった。

俺も未来で過ごした一年何もしなかったわけじゃない。未来の世界では言語だって学んだし、機械も操作できるようになった。白蓮はただのエネルギー不足で機能停止していただけだから、俺の魔力を分け与える事で目を覚ます事は容易だった。

目覚めた白蓮は十二年後と同じ事を俺に語り出した。俺は同じように自分はナタルではないことを語り否定した。だがここから先は、未来とは違う。

「……白蓮、俺に力を貸してくれないか？」

そう、未来とは違う。俺は……未来とは違う道を生きる。

過去を変えるとかそういうことはまだわからない。でも、今フエイトたちと共に居る事でより正しい未来に近づける気がするから。

プロミネンス攻略作戦。それは後の歴史にも名高く語られる事になる魔王大戦時でも有数の決戦である。

その戦いを勝利へと導くのは勇者と彼が率いる勇者部隊　ブレイブ克蘭であった。そして彼らの活躍により、大戦は末期へと収束して行く。

全ての戦いの節目となるべく運命に導かれ開幕したプロミネンス攻略作戦。それに当たり各地に出兵されていた勇者部隊は今大聖堂前に集結しようとしていた。

白の勇者、フェイト・ライトフィールド。並びに彼を支えるもう一人の勇者、ゲイン・シュヴァイン。彼らをサポートし、時には同行して作戦行動をフォローして来た現体制女王の娘であり姫、マリア・ウトピシュトナ。

三人を筆頭に構成される勇者部隊は一枚岩とは言えない特殊部隊であった。全員が何らかのエキスパートであり、単騎でも軍団に匹敵する能力を秘めていることから上下の指揮関係が存在せず、全員が自由に行動する事を認められていた事がその理由の一つでもある。しかし何よりその構成員の全員がなんらか性格的に問題を持ち、この戦争の最中信じるものを別々に戦っていたのが最大の理由であった。そう、彼らは全員の為などという理由では戦っていなかった。あるとすれば、それぞれの願いを叶える為に。

「いや、久しぶりにオルヴェンブルムに戻ってこられたってもん

だぜえ……。遙々遠く、一人で西の方まで飛ばされてたんだもんよ……泣けるぜえ」

「君は素性が素性だからな、まあそういう扱いを受けても致し方あるまい」

「たはー、言ってくれるじゃん、おっさん！　そういうあんただって禁術の研究で魔術教会に絞られてたんだろ？　よくバテンカイトスから出てこられたな」

「私の頭脳の必要性を大聖堂が認めたというだけの話だよ、ブレイド・ブレット君。魔術教会本部など私には狭すぎる」

勇者の待つ地に階段を昇り迫る二つの影があつた。長い金髪を揺らしながら歩く長身の男、通称盗賊王ブレイド・ブレット。その隣を歩くタキシードの男は錬金術師の名門、レーヴァティンを受け継ぎし者、稀代の天才錬金術師メフィス・テオドランド。

その背後に続き、二人の少年が階段を登ってくる。全身傷だらけで両腕に包帯を巻いた薄着のフェイトの弟子、ソウル。そして同じくゲインの弟子、少年時代のルーファウスである。

四人と合流した勇者たちは一先ずお互いの再会を祝った。全員が全員一騎当千の実力を持つ特殊部隊、そのメンバーがこれだけ揃う時点で既に奇跡のような話である。

「旦那あー！　おいらの話を聞いてくださいよあー！　せつかく敵軍から奪った魔剣、また大聖堂の真面目サンが掻っ攫っていつちまつてよあー！」

「えー？　そんな俺が知るかよ。つーかまだそのコレクション続けてたのか？」

「ひでえよ旦那……これ、おいらの唯一の生き甲斐なんすよ？ 旦那だってそれは許可するって約束だったじゃないすか！」

「いや、盗賊だったお前を捕まえて極刑にしないで使ってやってる時点で感謝しろって」

「そりゃそうなんすけど……！ はああ……っ！ 超レア物にやつとお目にかかれたと思ったのに、とほほ……！」

「そんなに魔剣が欲しいのならば私が作ろうかね？」

「わかってねえな、わかってねえよおっさん。そういう新品に価値はねえの。伝説の武器と呼ばれるようなレトロな品物だけがおいらのコレクションに加わる資格を持つんだよ。最新鋭のテク全開の魔剣なんてお呼びじゃないぜ」

「……日々進歩する錬金術の技術を甘く見ないで貰いたいな。旧式を集めるなど君の方こそ理解が足りないようだ。一度バテンカイトスで講義を受ける事をお奨めするよ、ブレイド・ブレット」

盗賊王と錬金術師が言い争っているのもいつもの話であった。元々ブレイドは義賊として行動していたものの、大聖堂の秘法である伝説の書物、ヨトの預言書に手を出してしまった事から順調に進んでいたコレクト人生は転落の一途を辿る。

追撃してきた勇者部隊のフェイトに決闘で敗北し、聖騎士団に身柄を引き渡される手筈となった。極刑は間違いないと思われていたのだが、フェイトの熱烈な勧誘があり勇者部隊として活動することで執行猶予とする事が決定したのである。

故にブレイドはフェイトに頭の上がない関係であり、フェイトの

為に戦っているとも言える立場であつた。しかし彼は戦乱の時代、自慢のコレクションを増やす手段としてその関係性を前向きに捉えていた。

メフィスはバテンカイトスへの使者　所謂魔術教会への監視者としての役割も果たす聖騎士団お抱えの錬金術師であり、勇者部隊に参加することへの見返りとして禁術の研究許可、並びに莫大な研究資金を大聖堂より峯り取っていた。ビジネスライクな関係性ではあつたものの、彼の齎した技術はクイリアダリアの勝利へと少なからず結びついているのは言うまでもない。

「あら、大体集まっているようね。集合時間前にこれだけ面子が揃っているのは奇跡としか言い様がないわね」

「皆さん、お帰りなさい！　長旅ご苦労様です！　」

更に階段を登ってくる二つの影に全員が振り向いた。その先には巨大なロッドを携えた魔術師とその隣を歩くフルアーマーの聖騎士の姿があつた。

「そついう君も時間通りとは珍しいね、ミュリア」

「……久しぶりに会つた妻に対してその態度はどうなの？　ゲイン、もつと他にあたしに言うことないのかしら？」

「え、ええと……。そつだ、北方大陸で咲く珍しい花を摘んだんだ。押し花にしてあるから、君にプレゼントするよ」

「お金にならないものに興味はないっていつも言ってるでしょう？　シュヴァイン家の婿養子になつたんだから、貴方もそついう素朴な趣味は止めたら？」

黒衣の魔術師は苦笑を浮かべながらゲインに寄り添う。完全に困り果ててしまっている様子のゲインの表情を楽しげに覗きこみ、魔術師ミュリア・シュヴァインは振り返った。

「久しぶりに国に戻ってきたと思ったら忙しいわね、マリア」

「ミュリア！ ごめんね、忙しいのに呼び出して……」

嬉しそうに手を振るマリアに歩み寄り、ミュリアは優しく微笑んだ。それが夫であるゲインに対するものより何倍も柔らかいものであることに既に全員が気づいている。

マリアの手を取り、笑顔で握り締める。ミュリアはそうしてマリアの額にキスをすると頬に触れて小首を傾げた。

「北は寒かったでしょう？ うちの夫は役に立ったかしら？ 肉体労働はてんで駄目だから、ゲインは」

「そんな事はなかったわよ、ちゃんと働いてたわよ……！ もう、あんまり意地悪いうとゲインが可哀相よ？」

「うう、僕だって働いてたのに……。酷いよ、ミュリア……」

「……お前の奥さん相変わらずおっかねえな。俺絶対結婚したくないって思うわ」

「あんたはしっかり責任取りなさいよね！ この最低男っ……！」

ロッドに魔力を込めてフェイトの股間に叩き付けるミュリア。フェイトは笑顔のままその場に倒れ、仲間たちが全員同時にミュリアか

ら引き下がって行く。

「ふん……。子種ばら撒く為だけに股間にタマつけてるんならつぶれた方がマシね。男のタマは女を幸せにするためについてるのよ、この下種！」

「ミュ、ミュリア……。あんまり女の子はそういう事言わない方がいいよ……」

恐る恐る声をかけるマリアにミュリアは微笑を返す。

ミュリア・シュヴァイン。宮廷魔術師であり代々女王の一族に仕え魔術と呪術を司る最高位の大魔術師の一族の現当主であり、ゲインの妻でもある女。

マリアとは幼い頃からの幼馴染であり、マリアにとっては姉のような人物でもある。ゲインと結婚してはいるものの、この乱世の時では共に過ごせる時間は限りなく少なく、別々の戦地に派遣される事の方が多いほどである。

「皆さん、相変わらずお元気そうで何よりです」

「おっす！ エアリオちゃん！ エアリオちゃんは、姉御みたいにならないようにしような」

「何か言ったかしら、ブレイド」

「何でもないっす！！ あ、姉御は今日もお美しい……へ、へへへ……」

「本当に、ミュリアさんは綺麗なお人ですよ」

素でそう微笑んでいるのはエアリオだけである。周囲の男たちは全員乾いた笑いを浮かべ、全員ロッドの有効範囲からは離れていた。

「あー股間が炸裂するかと思った……。俺にゲイン、マリア……。ブレイドとメフィス、それにミユリアとエアリオそして弟子二人。んー、となると残りは二人だけか」

「……二人ですか？」

「師匠、残りつて鶴来だけだよな？　じゃああと一人じゃねえのか？」

ソウルとルーファウスが互いの顔を見合わせる。フェイトは二人の肩を叩き、階段の方を指差した。

「新入りのクセに遅れてくるとは度胸があるな。ほれ、あいつだ」

階段を登ってくる影の傍らには身の丈よりも巨大な太刀を抱いた八代鶴来の姿があった。和装の少女が先に仲間たちの輪の中に溶け込むと、必然的に追従していた男は取り残される形になった。

男へと勇者部隊全員の視線が収束する。彼の存在を認識しているのはこの場ではフェイトたちだけであり、大半のメンバーは首を傾げるしかない。

「旦那、あいつは？」

「あー。今回の作戦から一時的に勇者部隊に参入してもらう事になった。出所はいえないが、それなりに腕は立つ。名前は」

フェイトの言葉を遮るように伸びた手。フェイトは言葉を引っ込め、

代わりに笑いを浮かべた。

男は黒いマントに身を纏っていた。金色の手甲がその間から覗き
仮面をつけたその顔を上げる。

男の背後には白い和装の機械人形が控えていた。まるで彼に付き従
うかのように立ち尽くす機械人形をマントで遮り、男はその名を名
乗った。

「……初めまして、プレイブ克蘭勇者部隊。俺の名前は ナタル」

全員その名前に眉を潜めた。当然である。何故ならばその名前は
。

「ナタル・ナハ……。それが今日から貴方達と行動を共にする俺の
名前だ」

伝説上の救世主が持つ名前だったのだから。

全員がナタルと名乗る男とフェイトを交互に見やる。フェイトが指
を鳴らし、全員の動きが中断された。

「さあ、行くぜ。魔王の作った城をぶん取りに！」

後の歴史に名を残す戦いの幕開けはそんな一つの音だったのかも知
れない。

過去の世界での夏流 ナタルの戦いはそこから始まった。

交わる時の日(5)

オルヴェンブルムより南に位置するプロミネンスと建造中のラ・フイリアの周辺は静まり返っていた。

見渡しのいい草原に人の姿はない。周囲を警戒して固めているザックブルムの騎士たちの気持ちも緩まないはずがなく、ここ一年間プロミネンスの防衛戦を勝利だけで飾ってきた彼らにとって今日のような日は警戒に値しないものだったのかもしれない。

仮に騎士が気を抜いていたとしても常に警戒しセンサーを張り巡らせているガードマシンや動物的に反応を示す調教された魔物が幾重にも防衛ラインを敷き警護に当たっているのだから、問題など起こり得ない。それは敵味方双方の見解だった。

晴れ渡る空を時々小さな雲が流れて行く、風が少しだけ強い昼下がりであった。槍を携えた騎士の一人が小さく欠伸を浮かべた時、異変は発生した。

「……なんだ？」

欠伸をした騎士が顔を上げる先、そこには全長3メートルほどの多脚式のガードマシンが待機していた。いくつものガードマシンが突然起動し、一斉に同じ地点を睨み始めたのである。

魔物たちも次々に立ち上がり、そこに居る何かに対して強い警戒の意志を示している。騎士たちの目、魔力を探知する能力には何も感じられる事はない。しかしより制度の高い機械センサーや魔物の直感に従い槍を構える。

騎士たちが固唾を呑んで見守る中、草原の中に一つの魔方陣が浮かび上がった。青白く光る紋章のが眩く輝きを空に放つと、次の瞬間そこには二つの人影があった。

何者かが土煙を払うように長いロッドを奮う。風を受け黒髪を靡かせるミュリアは全身から魔力を進らせながら天高く聳える塔を見上げる。

「ん……。座標特定しないで転送したわりには結構いい所に飛べたわね。近すぎず遠すぎず……。そろそろ転送魔法、極めたかしら？」

「まあまあ、大きい塔ですね？ あれを上げればお空の上まで行けるんじゃないか？」

とぼけた事を呟きながら白銀の鎧を身に纏った少女が語る。騎士は巨大な十字架を頭上で振り回し、塔目掛けて構える。

「ホント、何の為にあんなもん建造してるんだか……。ま、細かい事はどうでもいいわ。全て奪ってそれからゆっくり調べればいいだけのことだもの」

二人がゆっくりと前進を始める。決して急ぐでもなく、走る事も無く、ただゆっくりと。一步一步近づいてくる脅威に騎士たちは固まっていた。

その噂は彼らも耳にした事がある。作戦行動中は基本的に二人組で戦闘を行い、他の部隊を率いずに独立して遊撃を行うクイリアダリア聖騎士団の中でも移植の部隊があると。

構成する隊員のその全てが何らかの技術を極めた天才であり、それらと相対する時、全ての魔物も武器も魔法も意味を失うとまで呼ばれた、絶滅のシンボル。

「……ぶ、ブレイブ克蘭……！？」

口にすればその悪夢を認める事になる。故に全員その名を脳裏に浮かべ固まり、しかし口にする事は出来ずにいた。だが一人の騎士が思わず口走ってしまった時、悪夢は明確な現実となつて彼らの身に降り注いだ。

まるで凍てついていた時の流れから解放されたかのように全ての存在が動き出す。ガードマシンたちが同時に銃器を構え、魔物が雄叫びを上げながら突進を開始する。騎士たちは魔法を詠唱し、二人の正面からは大部隊の迎撃が放たれようとしていた。

矢と銃弾と魔法が放たれ、その全てが二人に収束する。無数の光は一点に集中し、アーチを描いて行く。その着弾店でエアリオは十字架を前に祈りを捧げていた。

「今日も頑張つて救いの為に戦いましょう」

言葉を最後まで聞き取れた者はいなかっただろう。着弾した魔法と銃弾が二人の姿も音も全てを掻き消してしまった。大地が抉れ、何もかもが吹き飛ばされていく。土煙だけが派手に舞い上がり、攻撃の手は一度止められた。

だが彼らは直ぐにそれを再開する事になる。土煙を切り裂き、銀色の騎士が身を乗り出したから。その全身、頭为天辺から爪先までを巨大な鎧で多い尽くし、エアリオは重苦しい足音を立てて前進する。

「ヴァルキリーメール
戦乙女の鎧」

それは鎧であり同時に鎧ではなかった。鎧を強化魔法で強化した、特殊な目に見え触れる事も出来る、顕現された結界装甲。

全ての魔法を弾き飛ばし、物理攻撃を遮断する絶対防御壁……。それが彼女が得意とする魔法であつた。

攻撃的な能力は一つとして覚えたがらなかったエアリオが極めた、徹底的な守る能力。十字架を詠えた長物を手に一息に駆け出し

た。

動きは鈍重。お世辞にも素早いとはいえない。目で追う事も出来るし、魔法を命中させる事も容易である。しかしそれはエアリオにとっては何の意味を成さない行為に過ぎない。

魔法を、矢を、弾丸を弾き。炎を、水を、雷を弾き。全てを力で捻じ伏せながら進軍するその姿に恐怖以外の物を覚えるだろうか？

絶対に勝てないという事は絶対に負けるという事でもある。近づく魔物の群れを槍の一振りで強引に埒を開け、血飛沫さえ弾きながら鎧は輝く。頭部の羽飾りが風に揺れ、不似合いなほど可憐に煌いた。

「そうそう、その調子で全部引き付けちゃってね。あたしが一気に片付けてあげるから　！」

どんな攻撃も弾き返す騎士の後方、両手で槍を構えたミュリアが目を閉じる。大地に魔方阵が浮かび上がり、大気中から収束した莫大な量の魔力がロッドに流し込まれていく。

危険だと察知した時にはもう遅い。仮に気づけたとしてもエアリオがそれを妨害するだろう。大魔術師が目を開き、杖の先端を大地に叩き付ける。

「ダイタルウェイヴ 遍く全てを飲み干す波ッ！！」

杖で打たれた場所からあふれ出したのは大量の水だった。それは魔物も機械も騎士も全て押し流して行く。

しかし、前線には仲間であるはずのエアリオの姿があった。エアリオもまた背後から襲い来る超広範囲の魔法の直撃を受けていたのである。だが、それは彼女にとっては問題ない。

上空に跳躍したミュリアが浮遊した杖の上に立ち、両手を空に翳す。両腕に魔力を収束し、その収束した進む魔力の全てを大地目掛けて振り下ろした。

「
轟^{サンダー}け雷鳴炸裂せよ大地！ さあ、纏めてぶっ飛びなさいッ！
」

大地に叩き付けられた電撃の大魔法は火柱を巻き上げながら水を伝い、波に乗って全ての機械、魔物、騎士を巻き沿いにしていく。何もかもが押し流され燃え尽き焦げ付き全てが存在しなくなった草原の中、全ての魔法の直撃を受けながら何事もなかったかのように立ち上がるエアリオの姿があった、エアリオの傍に着地したミュリアが身体を気遣って頬を寄せる。エアリオは全くの無傷で魔法装甲を解除した。

「本当に頑丈ねえ、あんた」

「ミュリアさんも、もう少し手加減してくれないと……。いくら頑丈でも、限度がありますよ？」

「はいはい、次からは気をつけるわよ。でもまあ 相変わらず無敵に反則よね、このコンボ」

溜息混じりに顔を上げるミュリア。目前に構えていた数百の兵力は今は一つ残らず壊滅に陥っていた。

二人が攻撃を開始した頃、別のエリアでも戦闘が開始されていた。東西南北、四方から同時に転送による奇襲を仕掛ける手筈になっていた勇者部隊のメンバーたちはそれぞれ少数で組み、行動を開始する。

「 っと、大体このへんかな」と思って開いてみたけど、案外イケたぜゲインの旦那」

「上出来だよ、ブレイド。ここなら問題ない」

ブレイドが開いた空間の亀裂からゲインとブレイドの二人が姿を現した。当然即座に迎撃に移ろうとする敵軍に対し、ブレイドは片手を大地に着いてそれらを防ぐ。

正面に出現したのは巨大な城壁だった。魔法、物理攻撃、全てを受け止める巨大な壁……。攻撃をいくらしたところで無駄だと手を引いた直後、の向こう側から高速で飛来した何かが一人の騎士の身体に突き刺さる。

城壁の向こう側、何かが起こっている。危険を察知したもののそれが何なのかは理解出来なかった。何故ならば城壁を上から飛び越え、不自然な軌道を描いて急速に飛来したのは魔法ではなく一振りの剣であつたのだから。

「制度は問題無さそうだ。ブレイド、君のコレクションを借りるよ」

「あいよおっ！好きなだけ持っていきな、旦那あつー！」

ブレイドの背後、開かれた異空間から数え切れないほどの武器が姿を現した。それらが無造作に手に取り、その全てを次々に空中に向かって軽く投げ放つゲイン。

それら全てに遠隔で魔力を込める。すると武器たち全てが黒い魔力を帯び、まるでゲインに服従するなんらかの生命であるかのように大人しく空中で静止を始める。

「エディシア
魔法剣、操作開始　！」

全ての武器に闇の光が連鎖した時、城壁は一瞬で姿を消した。代わりに現れた数百の浮かぶ剣をそれらを片手で操るゲインに誰もが絶句する。

一斉に放たれた武器の雨あられが敵陣を破壊して行く。その攻撃を回避する者も確かに存在した。直線的に遠距離より飛来する剣をかわすことはそう難しくはなかった。

しかし回避して自らの脇をすり抜けたはずの剣は突然空中に現れた門に吸い込まれ、全く別の死角から再び獲物目掛けて襲い掛かるのだ。ゲインとブレイドは背をあわせ、互いの腕を敵目掛けて突きつける。

魔法の威力を付加された魔法剣と化した剣たちは一撃で鉄も、魔物の鱗も貫いて行く。騎士の鎧はその威力の前では紙のようなもので、縦横無尽に降り注ぐ剣の嵐に見舞われて全てが通り過ぎた後には屍の山だけが積み重なっていた。

「西エリア、殲滅完了　　つてな！」

次々と防衛ラインが突破されていく中、北側から一直線に敵陣を切り抜ける一団の姿があった。白き勇者フェイトと夏流、そしてその従者となった白蓮と彼らを転送術で送り届けた鶴来である。

本来ならばフェイトと鶴来の二人で十分な構成であったが、新入りは新入りらしく一番強いやつについていけ　　というフェイトの言葉もあり、夏流も彼の背中を追い掛けていた。

フェイトは近づくものは全て強引に剣一つで叩きのめして行く。鶴来も術を使う様子はなく、身の丈以上もある長大な太刀を自在に振るい、全てを一刀の元に切り伏せていた。

近接戦闘で絶対的戦闘力を誇る二人は傷一つ追う事も無く全てを切り伏せて行く。二人に負けじと奮闘する夏流の活躍もあり、フェイトたちはプロミネンスの内部へと侵入することに成功していた。

「よし、準備運動にしちゃあ物足りないが、こんなもんだらう。鶴来、いくつ斬ったよ？」

「四十七」

「六十三だ。まだまだ俺を超える日は遠いな、ハハハハ！」

二人は昔からずっと敵の撃墜数を数え競い合っていた。残念な結果に不満が残るのか、鶴来は何も言わずにフェイトの先に行く。

薄暗い通路が続いていた。そこが施設の中心部、ラ・フィリアに続いている事は間違いない。他のエリアでも勇者部隊による襲撃が続いているだろう。内部を制圧するのはフェイトたちこのチームの役目である。

「どうした新入り！ 強いくせになに呆けてんだ？」

「……いや。あんたたちがあんまりにも強いんでな。少し……見くびっていたらしい」

言葉を交わしながら夏流とフェイトは同時に歩き出す。先を行きながら近づく者を切り伏せ道を作っている鶴来に視線を向け、夏流は眉を潜めた。

その力は未来の勇者部隊の比ではなかった。圧倒的な戦闘能力とコンビネーション……。潜り抜けてきた戦場も、生きた時代も違う。だが違うといえはその程度の事……。だがそれだけの事実が大きく力の差を生み出している。

全員覚悟というものが違いすぎる。己を知り、己の為に戦い、そこに迷いはない。戦闘に余計な気持ちは持ち込まないし、全ては既に割り切つてある。戦う彼らの表情からは戦闘に対する躊躇のようなものは微塵も感じられなかった。

「新入り。お前は人を殺すのは苦手か」

「……………」

夏流は応えられなかった。戦争をしているというのに、自分の答えは余りにも情けの無いものだと思覚しているから。しかしフェイトは特にそれを咎めるわけではなく、ただ淡々と告げた。

「それはそれで悪くはねえさ。だが、それは難しい生き方だ。自分で選んでそうするのなら、覚悟はしておけ」

「……覚悟？」

「人間は何かを守る時、何かを奪う時、何かを守る事もあるだろう。人の行いは表裏一体、全てを救う事は出来ねえ。両手を綺麗なままで居たいのならば、その手を洗う為に自分の何かを切り詰めて漱ぐしかないんだからな」

鶴来に合流し、ガードマシンを蹴り壊すフェイト。その背中を見詰め一瞬迷い、それを振り払うように夏流も彼らの後を追いつけた。

交わる時の日（５）

「これは……？」

四人が辿り着いたのは巨大な神殿の内部を髣髴とさせる部屋だった。その空間は後にディアノイアのエントランスとなる場所であり、何も無い空間にただ塔の上へと続く階段が存在する。

しかし階段は途中である部屋に繋がっており、遙か上、最上階まで続いているようには見えなかった。故に彼らが目指したのは階段の

続く部屋。後にディアノイアの学園長室となる場所であった。広々とした空から地上を見渡すその部屋の奥、そこには一つの椅子があった。来訪者に背を向けるようにしてその椅子に座る何者かは直接その姿を見ずともはつきりとわかるほど、肌を刺すような強い魔力を秘めている。

フェイトも鶴来もその圧倒的な力に負けずとも劣らないだけの力を持ち合わせている。拮抗はしていない。待ち受ける者のほうが力は一枚上手であろう。だが、フェイトも鶴来も慌てる様子はなかった。ただ一人だけ動じている夏流に鶴来が歩み寄り、微笑みかける。勇者は神剣を片手にゆつくりと待ち受ける者へと歩み寄る。

「　　よお。こうして対するのはこれで何回目だよ？　不死身の魔王　　ロギアさんよ」

勇者の呼びかけに応えるようにゆつくりと椅子が回転する。しかし回転した椅子には誰も座っては居なかった。先ほどまでそこからハッキリと感じられた恐ろしい力も今は完全に息を潜めている。そう思った直後。

「　　これは誰だ？　新入りか？」

声は夏流の真後ろから聞こえてきた。夏流は振り返るよりも早く身体を硬直させた。首筋に細身の剣が当てられていたのである。

それが首に押し当てられ僅かな傷が血を流してもまだ気づかず、声を上げられてようやくその存在を認知する事が出来た。冷や汗の流れる夏流が視線を正面に戻す頃には既にフェイトが夏流の背後に立つ人物に聖剣を突きつけていた。この二つの出来事を夏流が認識するまでにかかったのは十八秒。その間には既に一つの攻防が終了し、夏流の認識が終了した十八秒後には椅子の上に主は戻っていた。

「せっかちな男だ。久しぶりの再会だというのに　そう急ぐ事もあるまい？」

豪華な装飾の施された紅い椅子の上に立ち、魔王は薄ら笑いを浮かべながらそう告げた。その様子からは敵意は感じられず、あるう事かフェイトまで神剣を降ろす始末である。

だがそんなことよりも夏流は魔王の姿に驚いていた。唇から放たれた力強い言葉は確かに王の名に相応しい。だがしかし、その外見は。

ウェイブした銀色の長髪を風に揺らし、黒いドレスに身を包んだ長身の女は腕を組んで四人を見下ろしていた。銀色の瞳が暗く輝き、紅い唇が不敵に笑みを湛えている。

魔王ロギア　。大魔道と呼ばれ、魔物を召喚し世界全てをその手中に収めようとした残虐な王　。その正体である美しい女を前に夏流は完全に固まってしまっていた。

勿論、ある程度の予想はついていた。リリアの言葉を借りて口を利いていた聖剣に封じられていたロギアならばまだわからなかったかもしれない。だがあの日、聖剣が解き放たれ本来の神の力を取り戻した時、ロギアは自らの声で話す力を取り戻した。

そう、大聖堂崩壊の時地下から脱出しようとする夏流にかけられた声は目の前の魔王が発するそれと同一であった。予想はついていたが　それは少々衝撃的な光景だった。

「おまえとこうして面を合わせるのはこれで八度目だ、フェイト。何度遣り合っても決着が付かないものだな」

「そりゃあ、お前は全然本気で戦おうとしないからだろ」

「ふん。それはおまえとて同じ事だろう？　討伐する気になればいつでも私の首を獲れたはずだ。それをしないのはおまえの手心だろ

うに」

ロギアの外見も驚きであったが、魔王と勇者の様子も衝撃的であった。二人はまるで旧知の友人であるかのように語り合い、傍に歩み寄っているではないか。互いに武器を手に取る様子も、魔力を解き放つ予兆も見当たらない。

宿敵であるはずの魔王と勇者。その二人が至近距離で接触する。あまりの動揺に完全に混乱してしまった夏流が説明を求めて鶴来を見詰めると、少女は困ったような表情で応えた。

「見てのとおり、『あの二人は決着を付ける積もりがない』のだよ、少年」

「……え？ な、なんで？」

「……何故って それは」

鶴来が呆れた様子で指差す先、夏流は衝撃的な物を見た。

魔王が勇者に顔を寄せ、口付けを交わしていたのである。風を受けて重なる二つのシルエットに夏流は空いた口が塞がらなかった。

「魔王ロギアは、勇者フェイトに惚れているから……そんな理由だと言ったら君は怒るだろう？」

「当たり前じゃボケエエエツッ!!」

思わず仮面をつけた救世主ナタル・ナハである事も忘れ夏流は雄叫びを上げた。一目散にフェイトに駆け寄り、魔王に寄り添われている勇者の襟首を掴み上げる。

「何をやってんだフェイト！！　少しは真面目にやれえっ！！」

「おい、ちょっとまって！？　俺は常に真面目だっ！！」

「どこが真面目だ！？　魔王が女なのは百歩譲って赦すとする！！　薄々感づいてたしな！　だけどお前の行動はどうなんだ！？」

「お、お前が何にブチ切れているのか俺には全くわからんのだが……。とりあえず今は戦闘中だから落ち着け、ナタル」

「テメエにだけは言われたくねええんだよおおおおおおおっ！！！！！！」

「おい、見知らぬ新入り……。魔王を前にその油断だらけの態度、私を侮辱しているのか？」

背後から魔王にそんな指摘をされ、夏流の中で何かがキレた音がした。バチバチと音を立てて電撃が迸る中、背後から白蓮と鶴来が同時に夏流を押さえ込む。

「マスター、ここは抑えたほうが宜しいカト」

「おちつけ少年、ツツコんだ方が負けだ」

「俺は……っ！　俺はああああああっ！！」

暴れ狂う夏流がずるずると二人に引き摺られて下がって行くのを見送り、魔王は腕を組んだまま笑っていた。勇者と魔王は再び向かい合う。今度は先ほどより少しは真剣な表情であった。

「さて、本題に入るか。俺がここに来た以上、目的はわかっているんだろう？」

「ああ？ このプロミネンス いや、ラ・フィリアの事か。特に攻撃用の拠点でもないというのに、奪ってどうするというのだ？」

「そりゃあ大聖堂元老院に聞いてくれよ。俺みたいな末端の騎士には何も伝わってこねえんだからな。お前こそわざわざ敵国領土のど真ん中に遺跡を建造するのは遠慮しておけよ」

「はっはっはっ！ まあ、それもその通りだな！ 成る程、これからは自重するでしょう」

腕を組んだまま高笑いし、それから魔王は勇者の後方に控える夏流へと目をやる。

「面白い魔力を持っているな。中々興味深い新入りを手に入れたか、フェイト」

「あん？ まあ、どうやらそうらしいな……。それより今は塔の事だ。何で元老院のジジいどもがこんな塔を欲しがる？ 何故お前はここにわざわざ塔を建てる？」

「理由はどうでもいいだろう？ それよりも さて、武力行使で塔を奪うか？ 白き勇者よ」

「大人しく渡してくればお前と戦わずに済むんだがな」

「それは断るしかないな。私も一国の王だ、ひれ伏す事など出来はしまい？ フェイト、おまえが私の夫になると決めたのであれば話

は別だがな」

困った様子でフェイトは溜息を漏らした。そう、魔王に求婚を申し込まれたのは今が初めてではない。もう何年も前　彼と彼女が出会ったその日からロギアはフェイトに婚約を求めていた。

しかし誰かの夫となる事を拒んでいたフェイトとそれを諦めようとしないロギアとの関係は戦争が始まってからもややこしくこんがらがったまま現在なお続いてしまっている。

「俺は生涯誰とも結婚しないの！　何度も言ってるんだろ！」

「なら愛人ではどうだ？」

「愛人もだめ！　お前は敵国の王様なんだから、そんなのと関係持ったら何言われるかわからんだろう！」

「……じゃあ、バレなければいいだろう？」

「そういう問題じゃねえの！！　ああもう、話が進まねえっ！！」

頭を掻き乱すフェイト。それを楽しそうに眺め、それからロギアは空中へとふわりと舞い上がる。

「おまえと戦うくらいならこの塔は引き渡そう。何、どうせわたしがやらずとも元老院が塔を活かすだろう。使い道など一つしかないのだから、わたしがわざわざ最後まで責任を持ってやり遂げる意味もない。それに　外の軍は既に壊滅したようだしな」

既に戦闘の音も聞こえなくなっている。ロギアは不満げに溜息を漏らし、ふがない部下たちに舌打ちした。

「フェイト。その男、お前にとって転機となるだろう。全てを伝え、存在を活かせ」

まるで助言のような言葉を残し、ロギアは魔方陣に包まれて光の中に姿を消して行く。特に何も戦闘をする事もなくあっけらかんと塔を手に入れたフェイトは呆れた様子で振り返った。

しかしそこには肩透かしをくらい、呆れたところではなく脱力している夏流の姿がある。魔王が指差し笑ったその未来から来た男の存在に、フェイトは腕を組んで眉を潜める。

「なんつーか……あー。悪かったな？」

「……………フェイトッ！！」

「は、はい？」

「全部話せっ！ この戦争がなんなのかつ！ 魔王がなんなのかつ！！　そうでなきゃ　納得いかねえっ！！」

完全に怒り心頭となっっている様子の夏流に思わず返事が裏返ってしまふ。仲間たちが合流するまでそう時間はかからないだろう。どうせ一先ずここに集まるのだからと、フェイトも僅かな時間に覚悟を決めた。

「で？ 何から聞きたいんだ？」

フェイトの言葉に夏流が前に出る。白の勇者が語る過去、それは十三年前よりも更に過去へと遡って行く……。

交わる時の日(6)

「ねえ、ふーちゃん。いきなり魔王をやっつけちゃったけど、これ、魔王は何をしたの?」

「え? そこまで考えてなかった。シュートは?」

「え、俺様かよ。そうだな……あれだ。ほら、あれだよ。愛だよ」

「「愛?」」

俺たちが作った魔王と勇者の戦いの結末。そこに至るまでの物語を秋斗はそんな言葉で表現した。

外見は悪ぶっているくせに実は一番正義感が強くて真面目な秋斗らしい言葉だったと今思い返すと納得する。だがたかだか小学生の俺たちにとって『愛』なんて言葉は余りにも現実離れしていたが。

魔王はどうして勇者に倒されたの? その素朴な疑問は確信を射ている。勇者は最終的に魔王を倒すだろう。魔王に負けてしまう勇者なんてありえない。魔王はなにかとても悪い事をして、世界の危機に立ち上がった勇者が魔王を下すのだ。

だが、俺たちの物語には魔王の『悪性』が圧倒的に不足していた。物語の見せ場である魔王を勇者が討伐するシーンばかりに拘って、そこに至る理由が圧倒的に不足していたのだ。

理由を考えた時、愛という単語を閃いた秋斗は今思ってもかなり不思議なセンスを持っている。普通は世界征服とか、もっとわかりやすい理由を取り出すだろうに。

「愛情の繚れ……それこそ魔王の死因なのだ」

「……君、それ自分で言ってる意味本当にわかってる？」

俺的的確なツツコミに秋斗は半ば笑いながら応えた。それが冗談であつた事は今ならよくわかる。だが、冗談が通じない奴というのはいつでも一人くらいいるもので。

「愛……そう、愛だよ！」

「「はあ？」」

言いだしつぺである秋斗でさえ首を傾げる。呆氣にとられる僕らを他所に、冬香は画用紙に絵を書き込んで行く。

そこに描かれたのは白い勇者と、それに相對する白い魔王だった。しかしそれは魔王というよりは、もつと的確な表現がある。

「これじゃあまるで お姫様だよ？」

俺の言葉に冬香は満足そうに微笑んだ。その時から魔王はお姫様になった。

「勇者と魔王は運命の相手だったんだよ。でもね、魔王は魔王だから、勇者とは結婚出来なかったの。だから魔王はね、最後は自ら勇者に倒される事を選ぶの」

「お、おお……」

「……なんだか、物凄く悲しい終わり方だね」

「そうかな？ でも、どうしても結婚出来ないのに好きな人がいて……。だったら私は、最後は好きな人に殺して欲しいかなあ……。な

んて」

照れくさそうにそう笑う冬香は余りにも俺たちよりも大人びていた。そう、まだ子供の彼女がそう言ってそれをヒロインとしたことの意味に、俺たちが気づくはずもなかった。

本城冬香。それは、もう一人の俺の名前。もう一人の自分……。彼女はどんな物を見ていたのだろうか？ 僕がノートと鉛筆を見ている間、彼女は外の広い世界で何を見つけたのだろうか？

どんな経験をして、どんな思いを紡いで……。知りたかった。冬香の知っている物、彼女の心を……。冬香はいつでも俺の予想斜め上に行く。それはきつと、俺の心が彼女に届いて居ないからだ。

お姫様なのに魔王で、勇者に叶わぬ恋をした。そんな白い髪の魔王の存在を心に浮かべ、彼女は何をそこに思い描いていたのだろうか。

俺と彼女は同じだ。なのに同一人物じゃない。どんなに俺が彼女を思っても、その心の焦がれる痛みは彼女には届かない。

同じなのに全く別であるという紛れも無い事実が俺の心を苛んで行く。どんなに彼女に手を伸ばそうと願っても……。彼女の心には届かないんだ。

だからそれを理解したかった。一つの物語を紡ぐ行為は二つの心を織り交ぜる事に良く似ていた。彼女が思い描くストーリーを俺は解釈し、物語として形にして行く。

それはとても拙く、見るに耐えない幼稚な作業。けれどもそこに交わる心は、二人で手を重ねて膨らませた想像は、決して誰にも馬鹿にされる謂れのない、確かな一つの世界。

「マスター？ こんな所にいらっしやいマシたか」

背後からの声に意識を現実に取り戻される。リア・テイルの中庭、薔薇に囲まれた小さなスペースでゆっくりと振り返る。

俺を探していたらしい白蓮が隣に立つ。彼女はじつと俺を見詰めている。少しかだけ居心地が悪くなり、俺は溜息を漏らしながら白蓮の額を小突いた。

「……どうした？ 何か用事があるんじゃないかったのか？」

「……いえ。マスターが何やら思い悩んでいるように見えまシタので」

他人の心の動きまで敏感に察知するとは、本当によく出来たロボットだ。思わず苦笑を浮かべてしまう。

「少し……フェイトの話を考えていたんだ」

あの日、リア・テイルの中で見た景色……。勇者と魔王が対峙するその絵を俺はどこかで見た事があった。

そのルーツを思い返した時、何かばらばらになっていたパズルのピースが正しく収まるべき場所を求めて動き出したような気がする。息苦しい仮面を外して深呼吸する。誰も入り込む事の無い薔薇園の真っ只中、俺は忘れてしまった物語を思い出していた。

交わる時の日（6）

白き勇者がまだ勇者と呼ばれるよりも前、彼が聖騎士団の一員になるよりも更に時を遡れば勇者と魔王の接点は露呈する。

フェイト・ライトフィールドと呼ばれた男がまだ北方大陸の軍事国家ザックブルムを根城にしていた頃。彼はどこにでもいるようなただの仕事の無い少年だった。

元々はクイリアダリアの出身であつたフェイトが難民としてザックブルムに辿り着くのは紆余曲折があつた。しかし残された結果はシンプルに、ただ仕事も無く、親も無く、世界中から見放されたように生き続ける小汚い人生だけだつた。

毎日裏路地の隅で膝を丸くして眠り、物乞いをし、ゴミを漁つて生きた。同じようなストリートチルドレンは沢山居た。時代がそうさせていたのだ。

戦争が無くとも世界から貧富の差は消え去る事はない。発展途上の歪んだ歴史を再現するその世界において、彼らのような闇の子供は絶対的に発生するものだつた。

それでも彼は必至に生きながらえていた。彼の人生が大きく変化したのは、共に町で生きていた一人の少女が病で死んだ時だつた。家族も居ないフェイトにとって身近な存在である少女の死は余りにも重かつた。

友人の死　だがそれは自分の死でもある。同じ境遇に置かれた人間がすぐ隣で息絶えていた時、目前に迫つたりリアルな死にフェイトの中の何かが壊れた。

生きたい。ただそれだけだつた。死にたくないから必至だつた。初めて人の命を奪つたのは十二歳の時だつた。迂闊にも裏路地の世界に足を踏み入れた貴族を一人、空き瓶で殴り殺したのだ。どの程度暴行すれば殺す事が出来るのかわからなかつた少年は瓶が割れても何度も殴り続けた。割れた瓶を太った男の腹部に何度も突き立て、突き立て、突き立て、死が間違いの無い物になつた時、ようやく得物を降ろす事が出来た。

その時少年が感じたのは殺人という背徳に対する恐れではなく、『これで生き延びられる』という歓喜であつた。彼は貴族から金品をせしめ　そうして金を溜め込んだ。

他にも同じように飢えた目をした子供たちがいた。中には品物を横取りしようとする子も居た。だがフェイトはそれらを容赦なく殺した。やがて彼に近づく者はいなくなつた。

奪った金で服を手に入れ宿を手に入れ食を手に入れ、そして武器を手に入れた。割れた空き瓶よりも速やかに確実に人間を殺せる刃物を手に、少年は嬉しそうに目を細め微笑んだ。

盗賊として町から町へと渡りながら金品を無差別に略奪する生活が安定したのは十五歳の頃だった。皮肉にも彼は類まれなる努力家であり、同時に天武の才も持ち合わせていた。

旅をしながら金を奪い、生活し、同時に剣の腕を鍛え続けた。誰かに教わる事はなかったが、腕はめきめきと上達した。やがて名が挙がり騎士に追われるようになったが、彼は騎士を返り討ちに続けた。

その時の彼にとって金が全てだった。金さえあれば死なずに済む。生きる事が出来ればそれで構わなかった。

少年はある日一つの馬車を襲撃した。護衛の騎士六人を瞬殺し、馬車の扉を開く。中に乗っていた人物を強引に引き摺り下ろし、首に刃を押し当てて少年は目を見開いた。

自らが殺めようとしていたのは一人の美しい少女であった。その真っ直ぐで邪気のない眼差しにかつて共に暮らし、惨たらしく死んで行った少女の姿を重ね、フェイトは戸惑う。

「……………おまえが護衛を全滅させたのか？」

少女が言葉を発する。力強い言葉だった。

「何が目的だ？」

恐れる様子の全くない少女。こんな事は初めてだった。誰でも首に刃を突きつけば皆取り乱し、命乞いをし、涙を流しながら喚くのだ。その囁きを止めてしまいたくて直ぐに命を奪ってしまう少年だったが、少女は違う。

「……金だよ。他に何か理由があるのか？」

「そうか。では金ならいくらでもやろう。その代わりに私を城まで送り届ける」

「……はあ？」

「お忍びで街に出てみたが、おまえのせいで護衛がいなくなった。城に戻るまで護衛が必要だ。その報酬としておまえに金をやろう。それで文句はないだろう？ 快楽殺人者ではないというのならば

悪くない取引だ」

それがフェイトとロギアの出会いだった。

今まで散々人を殺し続けてきた少年はあろうことか姫の言うとおり、ザックブルムの城まで姫を送り届けた。その奇妙な縁の所為で二人はその後何度か町で出会う事になる。

ロギアはたびたびお忍びで城を抜け出しては少ない護衛と共に町から町へと旅をしていた。その範囲は勿論ごく限られたものであったが、二人が出会うには充分な行動範囲であった。

二人がそうして何度か言葉を交わし、思いを交わし、フェイトは少しずつロギアという少女に心を開いて行つた。余りにも暗すぎる闇を歩いてきた少年はロギアに何時しか心を赦し、微笑みさえも取り戻そうとしていた。

その交流が続いたのはたった一年間の事であった。本格的な討伐組織が聖騎士団に発生し、名を売りすぎたフェイトはザックブルムを去らねばなくなつたからである。二人はきちんとした別れも告げられないまま、離れ離れになつてしまった。

少年が流れ流れてオルヴェンブルムに辿り着き、そこで質素な生活を送るようになって間もなく戦争は起きた。ザックブルムが侵略戦争を開始したのである。

その脅威もまだ遠く、クイリアダリアに関係のない時代だったのは僅か無い間だけであった。直ぐに聖騎士団の軍備拡大が開始され、少年は安定した仕事を求めて聖騎士に志願する。

大聖堂の下、その剣の才能と『殺し』の実力を充分に見せ付けて聖騎士に就任するのはほとんど拍子だった。しかしその身元も知れない殺しのプロにいい思いをしない騎士も多かった。

その中には嘗て彼と対立した後の勇者であるゲインの姿もあった。野蛮な戦いを好むフェイトと殺しを好まないゲイン、徹底的に趣の異なる二人が対立したのは必然でもあったのだろう。

それでもフェイトはそこで初めての仲間を得て、姫の護衛、教育という大役さえも任されるようになった。戦争の足音はオルヴェンブルムにも近づき、いよいよ彼らは戦争の真っ只中に投げ込まれて行く。

フェイトがロギアと再会を果たしたのは戦場だった。屍の山を乗り越え、二人は戦場の中心で対峙した。直ぐにお互いの存在を認識し、そして。

「気づけばなんだかよくわからん関係になっていたんだよ」

プロミネンス攻略作戦が終了し、オルヴェンブルムへと戻る馬車の中フェイトは長話をそう括った。

全ての話を聞き届け、夏流は複雑な表情を見せていた。フェイトと白蓮、そして鶴来しかいない個室の中、仮面を外して話に耳を傾けていた夏流はなんともいえない様子で視線を落す。

「な、なんかいえよ！ 過去の話なんか本当なら恥ずかしいやらねえところをお前がどうしてもっていうからなあ……」

「……いや。そうか……。もしかして、それで……」

夏流の頭の中で再生される未来……。勇者の剣の中に封じられた魔王。ロギアのリリアに対する態度。その疑問が少しだけ解けたような気がしていた。

だがしかしその事実は何れにも異様で、驚きに満ちていた。フェイト自身の過去もそうであり、勇者と魔王の関係性も……。

長い長い話のお陰でオルヴェンブルムへの帰還の道程はあつという間だった。夏流たちは街の前で馬車を降りる。

「お前、これからどうするんだ？」

「……え？」

「何トボけてんだよ。未来の世界に戻りたいとか……色々あんだろ？　どうやら、未来のブレイブクランとも浅からぬ関係のようだしな」

「……まだ、正直言うて迷ってる。自分がどうすればいいのか、何の為にここに居るのか……。でも、その答えはもう直ぐ見つけれられると思うんだ。だから……」

「もう少し待って欲しい、か？　ま、別に俺たちの時間は俺たちが流している。お前がいても居なくても別に変わりやしねえさ。世界ってのはそういうもんだ。答えを急がずとも、暫くは勇者部隊においてやる。安心して悩めよ、少年」

明るくそう告げて去って行くフェイト。その背中に背負われた沢山の傷や思いを感じ取り、夏流は複雑な心のまま仮面で全てを覆い隠した。

フェイトがどんな思いで勇者になったのか。どんな思いでロギアと戦っているのか……。それは恐らく自分には理解の出来ない、とて

も複雑なものなのだろう。そう夏流は解釈した。

あの戦いから数日が経った今でも思い返す。そして考えるのだ。この戦争は何なのか……。勇者と魔王、そして後の世代……。未来では同じ事が繰り返されるといふ寂しい事実に関胸を痛める。

薔薇に囲まれた庭で白蓮と二人、ぼんやりと花を見詰めながら考えていた。そうしていくらかの時間が経ち……。

「こんな所に居たんですか!? ナタル、一緒に来てくださいつ!」

「マリア……? つと、おい、何だ!? そんなに慌てて……?」

マリアに手を引かれ、走り出す夏流。当然白蓮も後に続き走ってくる。白い回廊を走り抜け、マリアが辿り着いたのは夏流に与えられた部屋だった。

その扉を開き、中に入り込む。そこには意識を取り戻しベッドに腰掛けるナナシの姿があった。

「ナナシ! 気が付いたのか!？」

「つい、さっき……。まだ万全じゃないかもしれないけど、一応貴方にも知らせておこうと思って……」

「ありがとうマリア。少し二人で話をしても構わないか？」

「ええ、勿論ですよ。それじゃあ私はこれで」

気を使ってマリアが部屋をそつと後にする。まだ目覚めたばかりで顔色のよくないナナシに駆け寄ろうとする夏流よりも早く、ナナシに縋りつく白蓮の姿があった。

「は？ 白蓮……？」

ナナシは何も言わず、白蓮の髪を撫でる。つい先ほどまでうさぎの姿で眠っていたナナシ故に、彼女がそれに気づくのにには時間がかかってしまった。

震える腕でナナシの身体を飛びつき、離れようとしないうちに白蓮。それを優しい目で見詰め、それからナナシは顔を上げて夏流を見た。

「……もう、大丈夫なのか？」

「ええ、お陰様で何とか……。如何せん、まだ万全とは言えませんが……」

「無理はしなくていい。それより……ええと、これはどういう事だ？」

夏流が首を傾げながら指差す先、白蓮を見やりナナシは困ったように眉を潜めた。

「……この人は、マスターです」

「はい？」

よく聞こえなかったという様子で眉を潜め夏流が聞き返す。耳を澄ませた夏流に、今度ははっきりと聞こえてしまった。

「この人は、ワタシのマスター……。ナタル・ナハ様です」

「……ええ。まあ、実はそういう事なんです」

「ほー。ナナシがナタル・ナハなのか」

「はい」

「……………なんじゃそりゃあああああつ!？」

「おぶうつ!？」

ナナシの顔面を蹴り飛ばし、ベッドの上にダウンさせる夏流。二人になってしまったマスターのどちらを擁護すればいいのか判らずにフリーズする白蓮を無視し、口から血を、目からは涙を流しながらダウンしたナナシの胸倉を掴んで引き摺り起こす夏流。

「おいっ！ テメエ、なんだそれは!？ 聞いてねーぞっ!？」

「それは言ってますでしたからね……………って、や、やめてえっ!!
怪我人を容赦なく殴り飛ばそうとしないでくださいっ!! 貴方は鬼ですか!？」

「救世主だこのクソ野郎何か文句あるか!？」

「文句というか、命乞いはさせてくださいっ!！」

拳を振り上げたまま眉をひくつかせながら笑う夏流。その恐ろしい魔力に冷や汗を流しながらひたすらに謝り続けるナナシ。やがて夏流は拳を下ろし、椅子の上に溜息を共に座り込んだ。

「うつ……。マスターが、二人……。ワタシは、どうすレバ……?」

「……………知るか。それより本当なのか？ お前が……ナナシがナタル・

ナハだつていうのは」

「……ええ。本当は、わたくしの口から貴方にお伝えする積もりでしたが……順序が逆転してしまいましたね。改めて　わたくしは貴方に自己紹介をしなければなりません」

ナナシは包帯の巻かれた胸元を肌蹴させながらふらつく足取りで立ち上がる。そうして自らの胸に手を当て、深々と頭を下げた。

「わたくしは、名も無き英雄神　^{ナタル・ナハ}。かつては貴方の妹君、冬香様にお仕えしていました」

ふてくされた様子で夏流はその言葉にもう一度溜息を漏らした。
異世界人である夏流には魔力というものが存在しない。だが救世主としての力は存在する。それは一体どこから来るものなのか。
全くの無からは生まれず、そして夏流が生まれ持った物でもない。
異世界に来て覚醒し、しかしそれをコントロールし力を与えていたのはこの男であった。

「つまり、俺の魔力がナタルと同じつていうのは……」

「はい。貴方の魔力はわたくしから供給される物でしたので……。ほぼ、同一の物だと言えるでしょうね」

「それでこいつは俺とナタルを思い違えていたのか」

相変わらず混乱した様子の白蓮はとりあえずといった様子で二人の中間地点に腰を下ろした。膝を抱えて二人の会話の顛末を見守る事にしたようだ。

「こんな形で貴方に伝わるのは、不本意なのですが……。どちらにせよ、ヨトが出てきた以上お話せねばならない事でしたから。まあ、切り出す手間が省けたと思いますしょう」

「前向きというよりは無理矢理だな……。お前がナタルで、神話上の人物がこうして実在しているとなると」

「ええ。あのヨトは 本物のヨト神です。クイリアダリアの国教、ヨト信仰により奉られた神。それがあの翼を持つ者の正体です」

十二年後の世界、パンデモニウムでの決戦を妨害するように現れた白い翼の女。それを秋斗はヨトと呼び、何一つ解らぬまま夏流は敗北する事になった。

パンデモニウムの魔力回路へと落ちて行く最中、彼が生きながらえた理由は単純な転送であった。肩の上に乗っていた黒いうさが、急遽異世界への扉を開こうとしたのである。

「本来ならば、現実の世界へ……。あの洋館へ貴方を送り込むつもりでした。ですがヨトの妨害に合い、わたくしの転送魔法は正常に作 use しませんでした」

転送を封じられた彼に出来る事はそう多くはなかった。強引に門を開けばどのようなことになるのか解って居ないはずもない。だがしかし、彼は異世界へと転送する力を過去に向けて解放したのである。現時点より少し過去に跳躍するだけでは無意味だった。パンデモニウムがまだそこに無かった時間軸へと移動を果たす必要がある。だがその最低目標を達成する事は容易でも、正確に時をコントロールすることは彼の力では不可能であった。

結果、必要以上に過去へと遡り力尽き、倒れてしまった。何とか魔力の海で燃え尽きるよりも前に脱出する事には成功したものの、こ

うしてありえない時間軸へと転送されてしまっている。

「……申し訳ありません、ナツル様。このようなことになるとは、正直予想していませんでした」

「……そりゃ、別にいいさ。お前は俺を助けようとしてくれたんだろ？ 実際俺たちは二人ともこうして生きてる……。それだけでとりあえずは上出来だ」

「確かに、死んでしまつては元も子もないですからね」

二人はどこか安らかな様子で笑いあふ。様々な事実があり、それでもそれが二人の信頼を傷つける事はなかった。

この世界では様々な出来事があつた。出会い、笑い、悲しみ、それを取り越えてきた。その全ての経験を、二人は共有してきたのだ。言葉を交わす事は少なかった。だが、ナナシはずっと彼を見詰めてきた。彼の成長を、戦いを、生きる様を……。だからこそ、どうしても殺したくはなかった。たとえ禁じられていたとしても、どのような結果を迎えるか解らなかったとしても、それでも力を使って彼を助けようとした。

夏流もその事実は理解している。はつきりと言葉にしたわけではない。だが、それは分かり合っていた。魔力を通わせ、常に同じものを見てきたからかもしれない。二人の間には確かに通じ合う絆のようなものがあった。

「……結論から申し上げますと、今の状態ではわたくしは未来へ貴方に戻す事は出来ません」

それは予想出来る現実だった。イレギュラーな存在をイレギュラーな方法でイレギュラーな場所へと送り届けてしまった。ここに落ち

る事は容易でも、未来の同じ時間に戻る事は難しい。

「元々、この転送する力はわたくしそのものが持つ力ではなく、ある人物から貸し与えられた物でしたから」

「……じゃあ、強引に過去に戻る事は出来ても、歪んだ方法でねじれた場所に来ている以上、それを正確に戻して戻る事は難しいって事か」

「それに未来のヨトがわたくしたちの動きを封じようとしているのでしよう。時間同士のつながり、元々貴方が存在した世界への道が閉ざされているのを感じます。彼女が気まぐれでも起こさない限りは元の世界に戻る事も、未来に戻る事も叶わないでしょう」

「……そうか」

深々と息を付き、重苦しい現実を受け入れる。 現実に戻れない。

それは、夏流にとっては予想外の事態だった。

充分に考え得る事だ。だが、現実に戻れない。その言葉は言葉以上に重く、非現実的である。もう、元の世界に戻れない……。それは現実の全てを否定し、虚幻を現実とする言葉だから。

だが今の夏流ならばそれを混乱無く受け止める事が出来た。帰る事を諦めたわけではない。投げ出したわけではない。だが、どうにもならない……。それが今の現実ならば受け入れるしかない。

その上でどうすればいいのかを考えなければならぬ。ここで足を止めているわけにはいかない。自分に出来る事を、自分が成すべき事を……。見つけなければならぬ。

「ナナシ……教えてくれ。ヨトってのは何なんだ？ どうして俺と秋斗を狙った？」

「ヨトはわたくし同様、トウ力様の中から生まれ出る存在……。この虚幻の世界の中に一番最初に産み落とされた『命』。それがヨトなのです」

「……すまん、どういう事だ？」

「そうですね……。ではこうしましょう。まず、この世界とい大きな画用紙がありました。そしてその世界にトウ力様が呼び込まれたのです」

世界の始まりは虚無だった。何も無い、空想という名の幻想空間。冬香はそこに、まず一つの命を生み出した。

「この世界がただ物語を模した物……貴方がそう考えているのなら、それは間違いです」

世界とは、数限りない蠢く無数の自立した意思が織り成す奇跡の連続体である。

例えば彼らが生み出した勇者と魔王の戦いという物語の大筋があったでしょう。だがそれだけでは世界は成立しない。それは世界ではなく、特定の人物の叙事詩に過ぎないのだ。

世界とは何か？ 例え大筋が勇者と魔王の戦いだとしても、そのお互いの国には名前も顔も持つ数え切れぬ人々がいる。命を落として死んでいく者がいる。その家族がいる。子供がいる。友人が居る。命と命の連続体、自然環境、偶然の生み出す螺旋。世界というものを構成するありとあらゆる物。それは人間一人程度では決して想像することの出来ないものだ。

「『世界』に成りたいと画用紙は叫んでいました。ですがその空白

を『世界』にする事はトウ力様の手には余る行いです。故に彼女は『世界を作る者』を生み出した」

それは神と呼ばれる者たち。複数存在したそれらは各々が担当し、冬香の幻想を形にする。例えば人を、運命を、時を、自然を……。世界というものが生み出す調和と混沌、偶然と運命が独立して稼働し続ける永遠機関……。世界という名のプログラムを作らせて行った。

「その際、世界を創造した者……神のうちの一人がヨトです。つまり……トウ力様が最初に『この世界』の願いをかなえて生み出したのが彼女なのです」

「ちょっと待て……。俺は物凄く当たり前の事を訊くが、いいか？」

「どうぞ？」

「じゃあ、この世界を作ったのは冬香じゃないのか？」

「……難しい質問ですね。この世界という空白の意味が彼女を必要とし、空白の世界を必要とする彼女がそれに応えたのです。きっかけがどのようなものだったのかは誰にもわかりません。それこそこの世界そのもの……まだ何の色も形もなかった世界と、今は亡きトウ力様にしか」

「召喚、されたのか……？ あいつも、俺と同じように……。この、『世界』に……」

そこで冬香は己の心の赴くままに世界に現実を与えて行った。世界は冬香の空想を餌に爆発的な成長を遂げた。そして創造主 否、

想像主となつた冬香の心、イメージ、世界に在るべき形を物質という形で再現したものが生み出された。

「それが、ヨトの預言書」

世界を構築する未来を想像する想像主、冬香。しかし彼女の全てを理解する事はやがて難しくなっていた。

空白の、無の世界はただそこにいる冬香の空想その全てを受け入れる事が出来た。声を上げる事も触れ合う事もなく、ただ空想を汲み取るという原理を持っていた世界そのものとは違い、作業用に生み出された神には想像主の意思を汲み取る能力が存在しなかった。

世界はやがて独立した無数の意思に支配され、『世界そのものの意思』はどこかに紛れて消えてしまった。故に続きの管理は初めに生み出された神の手に委ねられたのだ。

だが彼女たちは『世界』のように無色透明ではなかった。各々が意思と肉体を持つ『色』だった。故に冬香の色を浴びせられたとしても、それをそのまま現実にする事は難しかった。

故に書物という形を取り、そこに未来の出来事を『大雑把に』記す事にした。そこから神が独自に解釈を重ね、世界を動かして行く。そんなシステムが構築された。

「トウカ様の手から筆は離れ、画用紙の上に描かれた登場人物が世界を担うようになりました。それにより、想像主である彼女は役割を終えた」

「だから殺したっていうのか……？」

「……それはまた別の話になります。兎に角現時点で重要なのは、ヨトは世界の管理を『世界』そのものに任された絶対的な神だという事です」

それは世界という画用紙を手に取り眺める立場へと今や昇り詰めている。この世界そのものを手中に置く存在に対し出来る事など何も無い。

「ヨトが我々を否定する限り、世界の壁を越える事は不可能でしょう」

「……くそっ！　じゃあ、どうすればいいんだ！　お前も神なら何とか出来ないのか！？」

「残念ながら、わたくしは神は神でもトウ力様に直接生み出されたのではなく、ヨトに作られた神です。より根源に近い彼女の力に対抗する事は不可能です」

「じゃあ、八方塞じゃねえか……っ！！」

立ち上がり、苛立ちテーブルを拳で叩く夏流。その背後、浮かない様子でナナシが呟く。

「一つだけ……まだ、可能性が残されているかもしれません。彼女ならば或いは……元の時代に我々を戻す事が出来るかもしれない」

「本当か！？　それで、その彼女っていうのは……！？」

「すぐ近くにいるはずですよ。まずは大聖堂に向かいましょう。運がよければそこで、帰還の目処が立つはずですよ」

そうと決まれば行動するしかない。怪我をしたナナシを気遣い肩を貸し、夏流は部屋を出る。

白い回廊を肩を並べて歩く二人。そのどちらをマスターとするべきなのか悩んだままの白蓮はとりあえず二人の後に続いて歩き始めた。

忘らるる日(4)

「……で、いいのか？」

ナナシに肩を貸しながら大聖堂前へと辿り着く。そこは十二年後リリアによって大破壊されてしまうわけだが……今はまだ美しい作りのまま残っている。

指示に従い中に入る。礼拝堂までは誰でも立ち入る事が出来るが、ここより奥となると話は別だろう。こんな胡散臭い俺たちを聖堂騎士が通してくれるはずもない。

ここでもめるのも問題なのでさてどうしたものかと頭を悩ませているとお目当ての人物は自らこちらに出向いてくれた。

『……強い神の力を察知して出向いてみれば……貴方でしたか』

姿を見せたのはアルセリア。未来では学園長になる人物だが、この時点ではただの大聖堂騎士に過ぎない。彼女がここに控えていてもおかしいことは何もなかった。

だが彼女が姿を見せた時点で、やはりこの二人には接点があったのだと認識させられる。こつちの世界に来てまず会わされたのが彼女だったのだから、当然といえば当然なのだが。

巨大な甲冑の騎士は俺たちの目前にまで近づくと真っ先に俺を見た。それから暫くの間沈黙し、俺たちを導くように大聖堂の外へと歩いて行く。

彼女に続いて大聖堂を立ち去り、そのまま暫く歩いて移動した。迷路のように入り組んでいる白い街並みを歩き、辿り着いたのは狭い袋小路だった。

『安心は出来ませんが……小さな結界を形成して置きました。話を誰かに聞かれてしまう心配はありませんし、この空間程度の小規模ならば察知されにくいでしょう』

そう語りながら振り返り、アルセリアは徐に自らの兜に手を伸ばした。そうして頭をはずすのだが、以前学園祭で見たようにそこには中身という物が存在しなかった。

ごくりと息を呑み、その一部始終を見続ける。暫くすると、徐に頭のあった空洞から白い手が飛び出し、中からは小さな女の子が飛び出してきた。

ここの所びつくりの連続でイマイチどう驚けばいいのかわからないが、兎に角俺は驚いていた。いや、最近びつくりの連続だから、それほどではなかったが。

当然のように鎧から出てきたアルセリア本体　少女は大地の上に素足で降り立ち、俺たちを不思議な瞳で見上げていた。

鎧は自らの頭を元の位置に戻し、まるで自意識を持つかのように大人しく背後に控えた。話の邪魔をする気はないようだが、だからって勝手に動くのはどうなんだ。

「先日、世界の揺らぎを感知してはいましたが……どうやらイレギユラーな事態に陥っているようですね」

声は確かにアルセリアのものだ。ああ、本当に声の通りの中身だ……。だが、まさか本当にこんなに小さいとは思わなかった。

「……この場合、貴方をナタルと呼ぶ事に問題はありませんね？」

「ええ。彼には一応触りは話してありますからね」

そうして俺の肩から腕を下ろし、ナナシはアルセリアに歩み寄る。

「話というのは他でもありません。我々は現在ヨトの妨害を受け、元の時間軸に戻れない状態にあるのです。つきましては是非、貴方の力をお借りしたいと思ひまして」

「ヨトが……。それはつまり、貴方達が神の怒りに触れるような行いをしたと解釈出来ますが」

「未来ではそういう事にもなってるのです」

「そうですね……。私はヨトと争う積もりはないのですが……。そのような事になっている未来もあるのでしょう」

二人の会話にどう口を挟めばいいのか判らず俺はただ話が終わるのを待つて立ち尽くしていた。二人の話は何度かの言葉のやり取りで終了したらしく、アルセリアの中身が俺に歩み寄る。

「未来に戻る手伝いをするのは構いません。元々ナタルは魔術に優れた神ではなかったので、貴方の召喚には常に私の力が必要でしたから」

「それはつまり、俺をこっちに召喚したのはあんたって事なのか？」

「結果的に見ればそうであると言えるでしょう。しかし私一人の願いであるかと言えば答えは曖昧な領域へと踏み込みます」

状況が良く判らない。アルセリアが俺を呼んだ……？ いや、アルセリアの力を借りて、ナナシが俺を呼んだのか？ でも、どうして……？

ナナシは腕を組んで黙り込む。アルセリアは片目を瞑ったままナナ

シへと視線を向け、それから何かを理解したのか俺に向き合い語り始めた。

「この世界がヨトという神の管理下に在る事はご存知ですね？」

「……ああ。世界の始まりは冬香だが、あいつが一番に作った世界を創造する存在　それがヨトなんだろう？」

「厳密には創造ではなく、想像主である冬香の指示に従い世界を作る中間的な存在……。極端な話、世界を作る為の道具のようなものです」

世界を作る為に冬香が必要とした作成ツール……それがヨト。後に神としてそれが伝えられたのは、実際に世界をその手で生み出したのは彼女だからなのかもしれない。

「神と呼ばれる存在の中でも、ヨトは創造者と呼ばれる者に分類されます。ナタルは監視者^{ゲイザー}……。ヨトの作った世界を見守る存在です。そして私もまた、彼と同じく監視者^{ゲイザー}という存在に分類されます」

「つまりあんたも神様の一人って事か？」

「本城冬香が生み出したオリジナルの神と呼ばれる存在に比べれば私たちは見劣りするものです。何故ならば我々はヨトによって選別され、神の力を擬似的に与えられた存在だからです。直接的に冬香の意志で生み出された神とは根本的に成り立ちが異なる」

ヨトは無から生み出された空想の産物だ。その身は人の存在領域を遥かに凌駕している。

人間と同じ形をしているものの、その中身まで人間と同じではない。

彼女は人間の姿を形作つてはいるものの、本来ならば無そのものであり　人間の概念では説明出来ないような高位な者だとアルセリアは語った。

そもそもこの世界も始まりは無　。つまりは空白だった。空想から生まれ出たこの世界は無限の可能性を持っている。同様に存在は無限……。ヨトも無限という言葉と解釈が該当する。

ヨトは生き物ではなく、世界そのものの意思とも言える存在となった。唯一無二の絶対神　。その神に人間の中から選ばれ、神の従者としての力を得たのが監視者ゲイザーなのだという。

そういえばナタルは元々は人間だったものを神が選定し、神になったという話をどこかで聞いた覚えがある。成る程、その神話はそのまま彼らの成り立ちを再現しているわけだ。

「監視者わねは当然創造者ヨトには劣る存在です。時間、空間、世界と行った概念を全く無視して存在を確立させるヨトの力の一部は人の身でも余るものですが、お陰で時を跳躍する、歳を取らない、世界の壁を越える等様々な非現実的な力を行使出来ます」

「お前らはヨトに選ばれた存在……。そのお前らに選ばれた俺でさえ常人離れた力を持つてる。単純に考えてヨトは俺より二段階上の存在って事か……」

その上にはさらに冬香が君臨していたのだから驚きだ。つまりあいつは俺より三段階上の存在……。確かにそうなんだろうな。あいつの見ていたものは、俺よりも三段階は上だった。

「貴方を呼んだ理由は実にシンプルです。しかしその理由を貴方に最初から教えてしまう事に我々は抵抗があります」

「……？　どうしてだ？」

「今の貴方の様子ならば、この事実を受け止められるかも知れませんが……」

相談するようにアルセリアはナナシを見やる。彼は自分の口で伝えたいと願ったのか、アルセリアを静止して前に出た。

「ナツル様、わたくしは貴方と常に共にあり、貴方の成長を見詰めてきました」

「……な、なんだよ今更」

「今更……ええ、確かに今更なのです。ですが今度こそ貴方を信じてい。『今度の貴方』は 悲しい現実から逃げ出したりはしないと」

今度の貴方。

その言葉が重く胸に押し掛かる。なにか、とんでもない事実を告げられた気がした。

次の瞬間頭の中で何かがはじけた。自分でも訳の判らない情報の羅列が一瞬だけ呼び覚まされ、刹那に消えて行く。

意味不明な現象に困惑する俺を他所にナナシは語り続ける。

「貴方とこうしてヨトに立ち向かうのはこれで三度目となります」

「三度目……?」

「そう、三度目。今までにわたくしは二回貴方を召喚し、今回の貴方がそうしてきたように世界の脅威と戦い、そして世界の真実に触れた」

一体こいつは何を言っているんだ……？　これが三度目……？　今までに二回、同じ事があった……？

「そして貴方は二回ともその事実を受け止めきれずに壊れてしまった。貴方は泣き叫んだ。『俺の記憶を消してくれ』と。『全てをなかった事にしてくれ』……と」

ナナシの言葉に反論する事が出来ない。俺は気づけば何故か冷や汗を流しながら後退していた。

背後の壁に激突し、ずるずるとその場に座り込む。俺が望んだ事……？　俺が、記憶を消してくれと……なかった事にしてくれと、頼んだ……？

「貴方が戦えなくなった所為でそれ以上先に進む事が出来ないまま、わたくしは三度目の物語を刻み始めた。今回は気が遠くなるほど遠回りを繰り返しました。この世界に來たばかりの貴方に全ての事実を受け入れるだけの力はなかった。ですが今　かつての二度には無かったコトそのものとの早すぎる接触を経験した貴方ならば、また共に戦えるかもしれない」

座り込む俺の前に腰を落とし、ナナシは俺に手を差し伸べる。

「貴方の力を借りたいのです、救世主。今度こそ、全ての願いを叶える為に」

ナナシがそつと差し伸べた手。それを取った瞬間、俺は絶対に過去

からは逃れられなくなる。

自分自身の弱さ、未熟さ……甘さ。迷いや混乱、その全てと向き合わねばならない。

それが怖くて仕方が無い。だが、どうしてだろう？ その手を取る事に抵抗はなかった。何かが自分の背中を押していた。

振り返る事はしなかった。だが必然的に俺はそれに気づいた。

俺の背中を押していた。皆との思い出が、この世界に対する愛情が、俺の背中を押していた。

だから俺はその手を取って立ち上がった。体の震えは、もう止まっていた。

忘らるる日（４）

「これで三度目っていうのは、どういう事なんだ……？」

俺の問い掛ける言葉は短いものだったが、それに答える為には様々なプロセスを必要とした。

彼らはそうしてこの世界そのものが一体どういうものなのかを語りだした。その半分くらいはすでに俺も理解している。

この世界は本の中の世界ではない。あくまでも世界という一つの空間に存在している。その空間に召喚され、全ての元になった冬香が過去に俺たちが生み出した物語に近い物をベースにしたのである。

空白の世界に冬香は神を作り、神は世界を作った。そしてこの世界は神の手により運営され、神はその運営を補助する存在、監視者^{ゲイザー}を選定した。

様々な存在に見守られながらこの世界は存在している。その名も無き世界の均衡が崩れてしまったのは想像主である冬香の死がきっかけであった。

「そもそも、ヨトには世界を作り出す力はあっても、その先を想像する能力はないのです。つまりヨトに出来る事は『作る』だけ。設計書を編み出すのが冬香であるというのに、冬香が居なくなってしまうえばヨトは作る物を失ってしまう」

世界を永遠に運営する為には世界を永遠に拡大する存在である冬香は絶対的に必要な存在だ。だが彼女は居なくなった。故にこの世界の拡大は停止し、時も、世界という概念も限界を持つ存在となってしまった。

「それが、空白の日^{リ・ヴァース}。世界の終わりの日です」

そこから先をどう運営したらいいのかわからないヨトにとってそれは世界の終焉を意味する。時を刻一刻と刻み続ける世界である限りそれがいずれ訪れる事を阻止することは神であるヨトでさえ不可能だった。

ヨトは空白の日を避ける簡単な方法を考案した。神は空白の日が訪れた瞬間、世界をリセットすることを考え付いたのである。それは彼女が世界を構築するという工程を繰り返す事により世界を補完する方法でもあった。

「ヨトは空白の日が訪れる旅に世界を始まりの瞬間に巻き戻した。想像主である冬香は既に居なくとも、そこには彼女が記したヨトの^{せい}預言書^{けいす}が存在していた。ヨトはその預言書に従い、世界を何度でも再構築しました」

何度も世界を作り直すうちにヨトは何とかその先に続く、空白を超えた世界を見出そうとした。しかし答えは見つからなかった。当然である。いわば作ることだけをプログラミングされたヨトに、世界

を設計する能力など備わって居ないのだから。

そもそもヨトには考えるという行動が存在しない。ヨトという人格のその全ては生み出された瞬間から全く誤差なく同一であると言えるだろう。時の流れにも影響を受けず、衰えずしかし成長しない絶対的な完成した存在。それが神であるヨトなのだから。

「彼女は人間の成長する力が自分にもあると信じ、この世界を何度も作り直すことで自らの成長、進化を願いました。しかしそれが訪れる事はなかった。やがて彼女は成長する人間という存在に目を付けた。彼女は世界を作り出す工程を　ナタルと私に任せただのです」

そうして生み出されたのがヨトに対する世界創造の報告書　『ナタル見聞録』。それは文字通り、世界創造という任を任されたナタルが書き記したもう一つの預言書だった。

ヨトの預言書がただの設計図だとすればナタル見聞録はその設計図にナタルの意識を施した物である。ヨトはその繰り返し　人間という成長し考える事が出来る存在に世界の未来を生み出させる事を決めた。

「……まるでヨトは出来の悪い機械みたいに聞こえるな」

「事実彼女は機械のような存在です。彼女は考えない。感情は持ち合わせて居ないし、迷う事も無く、成長する事も無い……。空白の日のその先を見出せない彼女は空白の日を何度も再現し、そこに至るまでの工程を人間に任せて観察を続けました」

そのためにヨトはわざと預言書　設計図を人間の世界に落した。それは人々の手の中に入り、神を信じる者達によって実行に移される事になる。

神を信じる者　つまりは大聖堂は空白の日の存在を知り、それを

打開せよという神の試練に乗っ取り行動を開始した。まずは神の教えと力を広めるために預言書を複製し、より神に近い存在になろうと画策した。

「大聖堂の話は一先ず置いておきましょう。ヨトは人間たちに未来への回答を見出そうとしました。しかしそれらが想像主である冬香に届く事はなかった。人の手に任された世界は醜く荒れ果て、ヨトが命じられた平和な世界とは程遠い物でした。そもそも、全ての問題の根源は冬香の死にあります。つまり、冬香がいればいいのです。ヨトは人間の世界に冬香の転生体を生み出す事を画策しました」

「冬香の……生まれ変わり？」

「勿論厳密に生まれ変わっているわけではありません。ヨトが持つ本城冬香という人物の人格的な情報を魂に折込み、記憶と心を再現するだけの存在です。厳密には冬香とは全くの別人となりますが、同じ記憶、心をヨトの力で再構成した者です」

「……まさか」

「貴方も気づいている通り、ヨトの生み出した想像主の転生体……。本城冬香の人格、記憶、思想データを織り交ぜて生み出されたのがリリア・ウトピシュトナなのです」

つまり、リリアは冬香の記憶と心を持った存在……。人為的身生み出された彼女の映し身という事になる。だが、リリアはリリアだ。リリアの人格を持ち、きちんとリリアとして行動している。

だが今はその事は黙っていた。つまり問題はヨトが再び想像主である冬香を生み出そうとしているという事だ。だがしかし、矛盾が発生する。

「俺は秋斗……あ、もう一人の救世主なんだが……」

「知っています。彼もまた、貴方と同じく何度目かのループを乗り越えた存在ですから」

「そ、そうだったのか……。とにかくあいつはヨトが冬香を殺したと言っていた。ループしているなら尚更あいつが間違った事を言うのはおかしいだろう」

「確かにそれは事実と言えるでしょう。しかし実際にヨトが手を下したわけではありません。冬香に死なれて一番困るのはヨトですから」

まあ、そりゃあそうだろう。そういう話の流れだし、ちゃんと理解もしている。だが、だったらどうして……？

「兎に角、ヨトは冬香を殺してしまったのです。ですが冬香が居なくては何も出来ない。だから冬香を作ろうとしている……それは理解しましたね？」

「ああ」

「ヨトは同時に、冬香に近い存在をこの世界に呼び込もうとしました。彼女の代理の想像主を生み出そうとしたのです。それが貴方と如月秋斗……。どうやら幼馴染だったようですね？」

つまり、俺と秋斗にも同じ事をやらせようとしたのか。かつてこの世界そのものが冬香を呼び出したように。

しかしさっきから聞いているとヨトってやつはきちんと考えている

のか考えられないのかよくわからないな。一応、問題をどうにかしようとして前向きに行動しているのだが、その根本にある『設計図にないことは出来ない』と思い込んでいる』部分が問題なのだが、気づいて居ないのだろうか。

この世界は既に人の手で運営されている。神なんていなくても、設計図なんかなくなつてきちんと皆の手で動いていける。なのに予測出来ない未来を恐れてヨトは世界を人の手に預ける事を拒んでいる。それは……確かに気持ちはわかるが、それじゃあ前に進まない。

それで何回も同じ事の繰り返しになっていくのだとしたら、誰かがいい加減ヨトに教えてやらねばならないだろう。この世界は人の手に預けるべきなのだと……。

「前の俺はヨトに召喚されて……それでどうしたんだ？」

「一度目の貴方はヨトの望んだ世界を叶えられず、結局は自らその役目を降りました。そこで貴方を解放しておけば貴方の運命はそこで日常に戻るはずだったのかもしれないかった」

ヨトは俺と秋斗を元の世界に戻す時に記憶を全て消したらしい。俺はそれで現実の世界に戻ったのだが、秋斗はそれを何故か忘れずにある日突然思い出してしまったのだという。

そうして秋斗は自ら異世界へと召喚される事を願ってあの場所思い出の中の洋館に向かった。それでどうしてヤツがこちらにいられたのかは二人にもわからないそうだが、兎に角それで秋斗は二度目のチャレンジを始めた。

「彼の介入を受け、私たちは貴方呼び戻す事にした。一度目の貴方とは違い、二度目の貴方は現在の貴方と似た境遇に在りました。しかし我々は行動を急ぐあまり、貴方に直ぐに全ての真実を話してしまつた」

それが間違いだったらいい。この世界に来たばかりの俺は今回のように考えて行動はしなかったらしい。冬香を蘇らせる事 元の世界に戻ることに。つまり現在の秋斗と同じ考えに取り付かれ、同じように行動したという。

「結果、リリアは冬香に成り掛けた。しかしそのリリアが冬香になろうとした瞬間 貴方は自らの手でリリアを殺めたのです」

「な つ!?」

「結果、貴方は元の世界に戻りたいと、記憶を消し去りたいと願いました。見るに耐えない程壊れてしまった貴方を救う為に我々は貴方の記憶を奪い、そして 三度目をスタートさせた」

こちらの世界で時間がいくら経過しようとも俺たち異世界の人間の時間は止まったままだ。

魔力を操作は上達するし、肉体は鍛えれば強くなる。だが時という意味での概念は停止したまま。こちらの世界に何万年いようが、俺たちの時間が進む事はないという。

つまりこちらの世界で何年すごしても、向こうの世界に戻ればただか僅かな時間しか経過していない。その理屈で言えば、僅か一日の内にこの世界の歴史を何度も繰り返す事が可能なのだ。

そして俺は全てを忘れ 三度ナナシと巡り合った。俺は屋敷について本を読んだつもりだった。だがその時既に二度目の召喚を行われ そして、俺は椅子の上で目覚めた。まるで僅かな間夢を見ていたかのよう……。

「そこで貴方を解放すればよかったのかもしれませんが。しかし我々には最早貴方しか頼れる人間はいなかった。正直、前回の戦いを最

後まで見届けたわけではない我々にはどうすればヨトを止めることが出来るのか検討も付かないのです」

実際にそこまで漕ぎ着けた俺だけが世界の空白を回避する可能性

アルセリアはそう話を括った。だがそんな事を言われても……混乱は鳴り止まない。

俺が、リリアを殺した……？ どうしてだ？ 俺は、二度目の俺は、リリアを冬香にしたかったんじゃないのか……？

わからない。わかった事もある。でも、余計にわからなくなった事の方が圧倒的に多い。どうして？ なぜ？ 疑問の言葉ばかり繰り返す。

そんな事よりも俺は兎に角腹立たしかった。拳を握り締め、肩を震わせる。俺は……。俺は……！

「何て、馬鹿だったんだ……っ」

リリアを冬香にする？ そんな馬鹿な話があるか！ リリアはリリアだ！ リリア以外の何者でもない、リリアなんだ！

そのリリアを、大切なリリアを、何があつたか知らないが！ 何があつたつて殺すような事があつてたまるか！ そんな事もわからなかったのか、俺は！

「くそっ！！ 馬鹿だ、俺は……っ！！ 馬鹿すぎるっ！！」

「……ナツル様」

「俺はっ！ 俺はなんでそんな馬鹿なことしやがったんだ！ 救えたじゃねえかつ！ 救えたはずなんだよ、俺には……！ リリアも……世界もっ！ なのにどうして俺は……！ 俺はああああっ！！」

その場に膝を着き、大地に拳を叩き付ける。魔力の籠った一撃が大地を砕き、それでも怒りは収まらなかった。

皆と一緒にこの世界で生きて、そうして学んだんだ……。沢山沢山大切な事を思い知ったんだ。忘れそうになっていた沢山の心を取り戻せた。

この世界に来る前の俺はただ生きていただけだった。何事からも逃げ出して全てを斜めに見ていた。でも それじゃ駄目なんだって、それじゃ誰にも思いは伝わらないんだって、気づけたんだ。

皆が俺にそれを教えてくれた。皆と一緒に駆け抜けた一年間、その全てが俺の宝物だ。大切な大切な、絶対に失いたくない光なんだ。それを俺は壊してしまった。あるうことが自分の意思で、そうしてしまった。そんな過去があることが認めたくなかった。逃げ出したいくらい、目を反らしたいくらい、俺はそれが悲しかった。

「俺は……。リリアを守りたかった。この世界を救いたかった……。でも」

パンデモニウムでの決戦の時、考えていた事はなんだ？

ただリリアとこれ以上一緒にいたら辛くなるとか、元の世界に戻りづらくなるとか、皆を悲しませるとか……。そんな、自分の事ばかりだった。

俺は自分の事ばかり、自分が辛くないようにすることばかり考えて、結局パンデモニウムの中でも自分の事だけを考えていた。俺が居なくなっただ後の世界の事なんか……。考えちゃいなかったんだ。

でも、どうしてそうなってしまったのだろう。俺はこの世界を大事に思っている。でも ああ。そうか。そこには、俺の心の中には

目には見えない大きな壁があったんだ。

その壁は傷つく事を恐れて俺自身が生み出した壁……。それはこっちの世界に来るずっと前からそこにあっただ。

いつか別れる事になるからと、冬香から逃げ出した壁。彼女に何も言わず苦しめた壁。そしてこんな事になるまでほったらかしだった自分の弱さ……

「でも……俺は世界よりリリアより何よりも自分が大事だった。傷つく事ばかり恐れて何もしようとしなかった。やろうと思えば出来た事が……選べた未来があつたのに」

拳を握り締める。俺は何度も何度も伸ばしたいと願う手を引っ込めてきた。冬香を抱きしめたかった。冬香に好きだと言いたかった。妹だとか双子だとかそんな事は関係ねえんだ。好きならそれでよかったんだ。後の事なんか。知ったこっちゃ、なかった　ッ！！

「俺は……冬香が好きだったんだ」

立ち上がる。自然と心は晴れ渡っていた。何十年かぶりに太陽を浴びたかのような晴れやかな気持ちだった。

深く息を吸い込みゆっくりと吐き出す。心の中にわだかまっていた全てを吐き出すように。

そう、ここからもう一度始めるんだ。弱かった自分を捨てて、強く生きて行く為に。

「冬香が好きだ。愛していたんだ。今でも好きだ。今でも在り得ないくらい好きだ。滅茶苦茶引き摺ってる。何回だってやり直したい。何度でも抱きしめたい。でも、それはもう出来ないんだ。もう、終わってしまったんだ。だから　！」

拳を握りしめ、顔を上げる。

「リリアが好きだ。冬香と同じくらい好きだ。中途半端だけど、そ

れでも好きだ。大好きだ。まだ一度も彼女にそれを言っ居なかった。愛してるって叫んでなかった。そうしなきゃ傷つかないで済むと思っていた。でも、違ってたんだ！」

空を見上げる。ああ、こんなに気分がいいのは久しぶりだ。

「リリアが好きだ！！ リリアに会いたいッ！！ あの身体を抱きしめたい！！ 唇を奪いたい！！ ああ、好きだ！ 愛してる！！ リリア、好きだあああああああああああああああああ！！！！」

大声で馬鹿みたいに叫んでみた。在り得ないくらいに勇気が沸いてきた。何かもう、恐れるものは何もなかった。

俺の前で神様二人が完全に目を丸くして放心状態になっていた。背後では白蓮がなにやら拍手をしていた。強く拳を開き、もう一度握り締める。

戻るんだ、未来へ……。もう何があっても構わない。まずはリリアに告白しよう。全部はそれからだ。そうしなきゃ気がすまない。そうするべきなんだ。そうしよう。

「……未来に戻ってリリアを助ける。その為に強くなる。その為に戦う……。なんだ、目的なんて簡単だ。自分の心の赴くままに舵を取ればそれでいい」

「……なんというか。貴方は……ちょっと不思議な人ですね、ナツル様」

苦笑を浮かべているナナシに微笑みかける。それは自分でもわかる

くらい、それくらい

迷いの無い笑顔だった。

忘らるる日(4) (後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

迫るエンディング

ゲルト「さて、本編では様々な謎が解けて終わりに向かって行くわけですが……あれ？ リリア？ リリアがいませんね」

アクセル「リリアちゃんだったらさっき顔を真っ赤にして何か叫びながら逃げたけど……」

ゲルト「ああ……。本編がまあ、あれでしたからね……」

アクセル「いよいよ夏流も壊れてきたな。まあ主人公としてどうか今までの主人公と比べるとマトモすぎたから丁度良くなったんじゃないか？」

ゲルト「……そういう問題なんですか？」

アクセル「おや？ ゲルトは納得行かない様子だな」

ゲルト「ななな……っ！？ ち、違いますよう！ そういう事言つとっつかりぶっ刺しますよ！？」

アクセル「……それはやめてください」

ゲルト「何はともあれもう直ぐまさかの三桁突入なのです」

アクセル「百部まで続くとか作者史上最長だな。レーヴァテインですら分けたところを一つで行くという……」

ゲルト「読者の方々はここまで本当にお疲れ様でした。ラストまでもう少しです！ がんばって！」

アクセル「皆のお陰でここまで来る事が出来たぜ！ 本当にありがとう！」

ゲルト「物語の結末が皆さんの満足行くものかはわかりませんが」

アクセル「最後まで頑張るから応援宜しく！」

ゲルト「……あ、なんか今すごく久しぶりに普通に宣伝した気がします」

アクセル「リリアちゃんいないからな！」

忘らるる日(5)

その町は、白い想いに包まれている。

壁も、床も、空さえも白く感じられるその世界の中、人々の心もまた白く染まつている事だろう。それは純潔の象徴であると同時に虚無さえも形作ってしまう。

人の心の中から全ての闇を振りほどく事など出来るはずはない。光が何かに当たれば必ず世界に影を落す。影は必要なものののだ。光を浴びる為に。

光を浴び続ける為に、心を清らかに保つ為に……。その白い街に落ちた黒い影は一体どこに居ればいいのだろうか？ 少女はふとそんな事を考える。

決して高くはない建造物はしかし小さな少女がどれだけ一生懸命に手を伸ばしても届くものではなかった。ただ高く高く空を遠ざけようとするようなその街の景色に時々意味もなく泣き出したくなる。

膝を抱えて一人誰からも忘れられたような袋小路で空を見上げる少女。黒い髪を吹き込む風に攫われながら静かに瞳を細め、空の景色を削り取る。

黒いフリルの付いたワンピースを着用した少女は髪の色も相まってこの白い街にはどこか似合わない。まるで一面真っ白のカーペットに零れたコーヒーマグの雫の一滴見たいに、誰から見ても浮き彫りに成ってしまうような。

それは勿論人の心の問題で、だからそれは世界の全てなんかじゃないのに。誰もがそれを黒だと呼ぶから、指を指された少女さえそうなのだと思ってしまう。

一人ぼっちだ。心の中で小さく呟く。寂しくなつて涙があふれ出してくる。唇を噛み締めて顔をくしゃくしゃにしながら笑おうとしてみる。

でもそれは無理だった。大切な、たった一人の友達を喧嘩をしてし

まったから。ただそれだけのことなのにまるで世界が終わるカウントダウンのようにさえ聞こえてくる。

鼻を嚙り、手の甲でごしごしと涙を拭ってみせる。そうしてずっと俯いていたからだろうか。少女は自らに差し込む影に気づかなかった。

「　　こんな所でどうしたんだい？」

声が聞こえた。慌てて顔を上げる。太陽の光を受け、そこに立っていたのは黒い影だった。

黒い少女は顔を上げる。自分と同じだ　そう思った。それは別の色が黒かったからではない。ただ子供ながらに直感を得たのである。そう、彼もまたきつとこの白いカーペットの上に落ちてしまったコーヒーの雫なのだと。染みになつて落ちなくて、誰もが嫌な顔をするような、そんな世界から弾かれてしまった存在。

自分と同じなのに、声を上げる事は出来なかった。少女は極端な対人恐怖症であった。初対面の男に伝えることなど出来るはずもない。それなのに彼は腰を落とし、大きな手で少女の頭を撫でるのだ。金色の装甲に包まれた、大きな手　。固くて冷たくて、でもそれはとても優しくかった。

自分の力が強いから、乱暴に何かに触れれば壊してしまう……そんな悲しみを知っている手だった。少女が涙の雫を拭って顔を上げる。

「　……おにいさん、だあれ？」

男は仮面をつけていた。でもその声や、体格や、そんなものから年頃は判別できた。男は仮面を片手で外し、優しく微笑む。

光を背中から浴びるその人の顔ははつきりとは見て取れなかった。しかし膝を抱えた少女にはまるで自分を助けにきてくれた天使か何かのように見えた。

男は少女の身体を優しく抱き寄せる。そうして泣いてもいいのだと小さく囁いた。少女は涙を流す事はなかった。当然の事だった。だってこんなにも優しい誰かに抱きしめてもらえるのだから。それが自分の夢である事にゲルト・シュヴァインは直ぐに気づいた。自分が気を失っていた事を認識したのはその直後であった。意識を取り戻して直ぐにゲルトは魔剣を探した。それはきちんと自分の傍に転がっていた。慌てて身体を起こす。ここ数日彼女は不眠不休で活動が続けていた。その所為だろう。珍しく原型を留めている巨大な木の下で一休みしようとした瞬間、ブレーカーが落ちるように意識を失ってしまった。

「……夢？ でも、これは……とても現実的で……まるで今、体感した事のように……」

血に染まった自らの腕をじっと見詰める。血は乾き、ぱりぱりと音を立てて甲冑から零れ落ちる。

その全てが世界を染め上げている白い雪の景色の中に溶け込んで血の赤は消えて行く。寒さの中、ゲルトは齒を食いしばり立ち上がった。

ツインテールに結んだ長い黒髪が風に揺れる。寒さの余り身震いし、それから深々と息を吐き出した。大地に剣を刺し、目を閉じて意識を覚醒させる。

そう、より正常な状態へと回帰せねばならない。ここから先、ぼんやりしている暇などあるはずも無い。見渡す白い景色はまるでオルヴェンブルムの街並みのようだ。そんなくだらない事を考えた。ゲルトの周囲には大量の魔物の死骸が転がっていた。どれも既に息絶えているというのに中々消えてしまいう心配がない。魔力で構成された魔物は本来ならば息絶えればやがて消えて行くものだ。だがそのうなる様子はなかった。

魔物の密度があがってきているのだ。より強力な、より源泉に近い

魔物が地表へと溢れている。白く雪に染まってしまった。かつては美しい草原の広がっていた景色を見渡しゲルトは口元を拭う。寝ぼけて涎を垂らしたわけではなかった。ゲルトの体には無数の傷が残されていた。背中には巨大な魔物の角が突き刺さったままで、それに気づいてようやく片手で角を引き抜く。

大量の出血をする前に血をコントロールして体力の消耗を最小限に抑える。それでも身体はよろめいた。背中に空いた半径20センチ程の大穴を塞がねばこのままでは行き倒れてしまうだろう。

「……はあっ！……はあ……っ！」

呼吸を繰り返しているのに酸素を取り込んでいる気がしない。ただ冷気だけが身体に染み込んで鋭く刺すような痛みが広がって行く。

「はあ　っ！！」

空を見上げる。雪はもう降り止んだ。クイリアダリア王国の滅んだ世界で、ゲルトは空を見上げる。

その視線の先、雲の切れ間から姿を現して神々しく輝きを放つリア・テイルを悲しみに満ち溢れた瞳で眺める。それは幻のように雲の間にまた消えて行く。

膝を着き、口から血を吐き出した。這いずるように近くの魔物へと縋りつく。まだ消えていなくて助かった。少女は心の中でそう呟いた。

そうして魔物の身体に刃を突き立て肉を刻む。千切った肉を片手に少女は目をきつく瞑る。

あとはいつものように。生きながらえる為に、肉を食らうだけだ。

白い雪と魔物に覆われた嘗ての草原の中、滅んだ国に思いを馳せな

がら少女は生きる。

本城夏流がパンデモニウムで消息を経ってから、既に二年が経過しようとしていた。

忘らるる日（５）

墜落していくパンデモニウムの中、夏流を探して走り回った時の事をゲルトは今でもはつきりと思い出す事が出来る。

パンデモニウムの主動力が停止するよりも早く、操り主であった魔王レプレキアが倒れた事により世界は転覆した。

ゆっくりと海目掛けて落ちて行くパンデモニウムの中で一体何があったのか、覚えている者は少ない。敵味方入り乱れた乱戦に加え、空から落ちるという激しい衝撃の中で出来る事などそう多くはなかった。

気が付けばパンデモニウムの半分は海に沈んでいた。落下の衝撃で一度気を失ったゲルトが再び身体を起こした時、パンデモニウムの中は洪水状態だった。

命からがら何とか逃げ出し、仲間の姿を探す。信じていた。誰もが全員、生きて帰ってくる事を。しかし……事態はそう甘くはなかった。

海に浮かぶ死体、死体、死体……。敵も味方も死に絶えた地獄の海でゲルトは走った。リリアがいる小高い丘にある離宮目掛けて走った。

そこで見たものが現実だったのかあるいは幻想だったのか、ゲルトには判断できない。だが確かに見たと言えるのは 魔王を下し、レプレキアの頭を踏みつけて高笑いするリリアの姿であった。

異様な雰囲気をかもし出すまるで別人のようなリリアにゲルトは声

をかけることを躊躇した。直後、天から光が差し込み、何者かがリリアの傍に降り立ちそして。

気づけばそこにはレプレキアが倒れているだけであつた。リリアの姿はどこにもなかった。パンデモニウムの魔力回路に海水が流れ込み、爆発を巻き起こす。その激しい地鳴りと衝撃の中、ゲルトは逃げ出すだけで精一杯だつた。

ゲルトだけではなかつた。誰もが逃げるだけで精一杯だつたのだ。その事を責める事は誰にも出来ない。命からがら逃げ出した仲間たちはパンデモニウムが膨大な魔力を暴走させ、海を割りながら光を放ち消えて行くのを放心状態で眺めていた。

海岸に何とか漕ぎ着けたゲルトはしぶ濡れのまま呆然と天を裂く光を見詰めていた。仲間がどうなつたのかはわからなかつた。ただ

少なくとも魔王との戦いの決着はその瞬間着いたと言えるだろう。しかし問題はそこで留まる事はなかつた。その日を境に 世界は一変する。

異変の兆候は些細な事であつた。空を雲が覆い、何日も太陽が姿を現さなくなつたのだ。

ただそれだけの事。しかし、クイリアダリアはそれどころではなかつた。女王であるリリアが行方不明になり、魔王と相打ちになつたのではないかという噂が流れ始めたのである。

魔王軍の脅威は消え去つた物の、人々の心の支えとなりはじめていたリリアが失踪した事は国に大きな影響を与えた。直ぐにリリア捜索部隊が組織され、パンデモニウムの落下した海域から流れ着きそんなエリアを搜索する事が決まつた。

ゲルト・シュヴァインもまたその搜索部隊の一人として行動をしていた。そのため彼女はオルヴェンブルム崩壊の日を免れる事になる。異変の第二段階は急速に世界を飲み込み始めた。分厚い雲からは白い雪が降り注ぎ、世界は凍えるような寒さに飲み込まれていく。

本来ならば季節が巡り春。もう暖かくなり、とても過ごしやすい季節がやってきたはずだつた。それが真冬に逆戻りするところか

更に更にと寒さを増して行く。

クイリアダリアの国土はあつという間に雪に覆われてしまった。在り得ないほどの大豪雪に埋もれてしまう町もあった。そんな中、天変地異とも言える現象は悪化して行く。

海は常に嵐のように荒れ狂い、届かない太陽の光は世界を枯らして行く。どこまでもどこまでも世界をすっぽりと覆いつくした巨大な雲はまるで世界の終焉を呼び込むかのようなだった。

そして世界の滅亡が始まった。雲から次々と舞い降りてきたのは白い翼を持つ魔物であった。今までの魔物とは違いそれらは白く、美しい外見をしていた。しかしそれらは例外なく人の住む世界を破壊し始めた。

女王と聖騎士団不在のまま真つ先に魔物の襲撃を受けたオルヴェンブルムは数時間で壊滅し、残されたのは無残に破壊された残骸のみ。魔物の攻撃は留まる事を知らず、僅か一週間の間に近隣諸国を次々に侵略、壊滅させていく。

それらには何の目的もなかった。シンプルな殺戮と破壊のみを繰り返し、奪うわけでも得るわけでもなく、ただ滅ぼして行く。世界の終焉を導いた悪魔という呼び声もあれば、神罰の代行者。天使ではないかという声もあがった。

人々はその空から舞い降りる神々しい魔物に恐れ、次々に避難を繰り返し、今やクイリアダリア周辺は無人の地となっていた。

混乱し錯綜する情報の中、リリア捜索隊も魔物に対抗する為に戦場へと借り出される事となる。そこで情報がいくつか統一され、信じられない目撃情報が上げられたのである。

天使たちの拠点と成っているのは、リア・テイル。パンデモニウムと共に海に墜落し、爆発に巻き込まれたと思われていた城だという情報が出てきたのである。それはにわかには信じられない事実だった。

理由は二点。そもそもリア・テイルが無事だったとしても海中から引き上げる技術などこの世界には存在しないし、それほどの大掛か

りな行動が出来る組織も今は存在しない。

そして何より、リア・テイルを飛ばす事が出来るのはかの女王リリア・ウトピシュトナだけなのである。リア・テイルが人々を攻撃するのなら、その主はリリアという事になる。

だが、それがゲルトには信じられなかった。しかし彼女は神に導かれるリリアの姿を一瞬だけ目撃している。まさか。そんな。在り得ない。心の中でそんな言葉を繰り返しつつ、それでも戦闘は止まることはなかった。

戦域は無限に拡大し、聖騎士団は壊滅し解散となり、クイリアダリアは事実上滅亡した。クイリアダリアが完全に消滅するまでに一月もかからなかった。

ゲルトは最後まで天使と戦った。リリアが不在である以上、自分が戦わねばならないと魂を震わせて傷だらけの身体を引き摺って……。しかし、共に戦っていた勇者部隊のメンバーも次々に混戦の中行方が途切れ、気づけばゲルトは一人で逃亡を続けていた。

帰る場所もなく、ひたすら生きる為に何度も戦闘を繰り返しながら逃げ続ける日々……。それにも疲れ、やがて雪の中でゲルトは倒れてしまった。

それが恐らく、クイリアダリアが倒れた日でもあった。最後の最後まで戦うのだと決めていた少女の心が折れた時、聖なる王国は音を立てて死んだのだ。

そしてそれから　長いようで短い時間が流れた。

クイリアダリアがほぼ全土を締める南方大陸の更に南　。カザネルラの海を越えたどこかに、小さな島国があると言われている。

名は『イザラキ』。異国と言えばイザラキの同義語と扱われるほどのその国の文明は他の国と比べて独自の発展を遂げている。尤も、イザラキは他の国家とは交流をしない閉鎖的な国の為その情報や物資が世界に漏れ出す事はごく稀である。

イザラキの住人は基本的に社交的ではない。お世辞にも他の国の人間と仲良く出来るようなタイプではないと言える。しかし中には見識を広げる為、或いは商業の為、イザラキを出て旅をする者たちが居る。

かつてイザラキの出身であった八代鶴来もまた己の見識を広め武術の腕を磨く為に旅に出た一人である。そうした修行の旅に出た者は時々気に入った人間をイザラキに招待する事がある。

まさに幻想世界とも呼ぶべきその国がどんな人間にも侵される事無く、関わる事も無くを一貫していられるのには理由がある。イザラキの人間に招待を受けねば立ち入る事が出来ない理由もそこだ。

イザラキは特殊な不可視化結界により守られている移動する島なのである。それはつまり古代の文明　神の技術で生み出された物であると言える。

パンデモニウムが大陸の一部ごと飛翔していたように、イザラキという国は巨大な土の船であると言える。それはカザネルラの南にあるといわれてはいるものの、一体どれほどの規模でどこにあるのかは謎に包まれている。

探そうとしても常に場所を変えているイザラキに遭遇する事は難しい。海が荒れ果ててしまった天変地異のこの世界ではそれは尚の事である。

大陸からイザラキに戻る事は出来ない。その手段は存在しない。では大陸に出たイザラキの人間は一体どのようにしてイザラキへと戻るのか？

空間跳躍、あるいは空間転移魔法と呼ばれる類の術が存在する。これは術者が設定した座標に対象物をテレポーテーションさせる技術であり、大本は神の力　古代遺跡より掘り起こされた魔術でもある。

それと同様のものをイザラキでは日常的に誰もが使用できる形へと変換していた。これを『転術符』と呼ぶ。

所謂空間転移魔法を擬似的に再現する札である。これを使用するこ

と、あるいは誰かに託す事を『招待する』と呼ぶのだ。

転術符は使用した人物の使用元の座標を記憶し、再び同じ場所に転送する機能も持ち合わせている非常に高度で便利な道具であった。それを、ゲルト・シュヴァインもいくつか携帯している。

クイリアダリアが滅んでからもう直二年……。世界のどこかでまだ滅亡に抵抗しようとしている人々はいいるのだろうか？ ゲルトは時々そんな事を考える。

もしかして戦っているのはもう自分だけで、もう……。仲間なんてどこにも居ないのではないか？ そう考えると不安で押しつぶされそうになった。

どうしようもない不安を心の中に残しながら雪原を走る。そうしてゲルトは大陸中を巡り、様々な場所で生き残っている人間を探した。そうして誰も居なくなつた町などを転術符に記憶し、次の場所へと走る。そうした事を暫く繰り返し、もう限界だと、これ以上は動けないと心が折れそうになった時初めてそれを起動する。

転術符に魔力を込めるとゲルトの身体を光が覆って行く。次の瞬間にはゲルトは南の封印されし幻影の国へと跳躍を遂げていた。

イザラキにはゲートポートと呼ばれるエリアが存在する。外部からイザラキに転術符を発動しようとする自動的に転送先座標がこのゲートポートに設定されるのである。

そこでは簡易な検閲などが存在しているが、傷だらけのゲルトを見て衛兵は何も言わずに門を通した。既に顔なじみであり、彼らはゲルトがどんな活動を行っているのか知っているからだ。

門を潜ると光に満ち溢れた世界へと辿り着く。作り物の青空が透き通るように空を突き抜けている。町を歩く人々は皆和装であり、ゲルトたち他国の人間からすると少々不思議な雰囲気だった。

ゲートポートを出て直ぐ沸きにある『壱郷』と記されているゲートに入る。この町ではどこでも転術符を使えるわけではない。転術符を使用出来るのは壱郷から九郷までのゲート同士を繋ぐ場合のみである。

ゲートを使用し、七郷ゲートへと転移する。そこには賑わう商店街が広がっていた。そのうちの一つ、飲食店を経営する店に入るなりゲルトは力尽きてその場に倒れこんだ。

「……戻ってきたと思ったら、またぶつ倒れるわけ？ 自分の体力のペース配分くらいきちんとしてできるようにないかね」

和装にエプロンを付けた黒髪の女性が倒れたゲルトに歩み寄る。当の本人は床の上に倒れて既に寝息を立てている。疲労と緊張の限界、それが家に辿り着いた事で途切れ一気に気を失ってしまったのである。

女は深々と溜息を漏らしゲルトを抱き上げる。細い腕ではあったが魔力のコントロールが緻密で強力なのか苦労する様子は全く見られなかった。

それもそのはずである。彼女はかの勇者部隊に所属した大魔術師
プレイフ克蘭。
。ゲルトの母、ミュリア・シュヴァインなのだから。

ゲルトを抱えたまま客を待たせて二階へ続く階段を上がる。狭い部屋ではあったが少なくともふかふかのベッドがあるだけゲルトにとってはお気に入りの彼女の部屋がそこにはあった。

ベッドの上に無造作に娘を放り込み、剣を壁に立てかけてミュリアは溜息を漏らす。ゲルトは本当に疲れているようで、ドロドロのボロボロだった。

「風呂くらい入りなさいよねえ、もう……」

一人でそう漏らし、ミュリアは階段を下りて行く。一階に戻ると客の一人がゲルトを心配して声をかけてくれた。ミュリアは明るくいつものことだと笑い飛ばした。

このイザラキでの暮らしが始まってからもう暫く時が経過する。命からがら逃げようとした人々をイザラキからの援軍が迎え入れてく

れたのである。大陸で生き残れた人間は、全員イザラキの世話になっていた。

ゲルトもミュリアもその例外ではなかった。ミュリアは元々世界中を点々とする商人であったが、天使の攻撃により商売上がったりになり、旅先で知り合ったイザラキ人に招待を受けた。その招待先で偶然にも生き別れていた娘と遭遇したのである。

生き別れとは言え、ゲルトはミュリアを嫌って家を出たのだ。会おうと思えば会えないことはなかった。だがミュリアはそれに気づいていながらもゲルトを放置し続けてきた。

二人の仲は決して良いとは言えない。だがいくつもの家を同時に占有するわけにも行かず、二人は同じ屋根の下で再び暮らす事になっ

てしまった。

ミュリアは飲食店を経営し、少しでも恩を返そうと努力している。殆どのクイリアダリア人は皆イザラキに何とか溶け込もうと努力していた。天使が蔓延るあの故郷に、最早帰る事は出来ないのだから。そんな中ただ一人だけゲルトはゲリラ的な戦闘を繰り返していた。単身危険を顧みずにクイリアダリアに転送し、そこで生き残りを探しつつ天使を討伐する日々……。

ゲルトの無謀な行動をミュリアが快く思うはずはない。だが、ゲルトはミュリアとは基本的に口を利こうとはせず、ミュリアもまたゲルトに強く出る事が出来ないでいた。

そうして世界の終焉は刻一刻と迫ってくる。イザラキは絶対的な結界で守られた箱舟。この中まではまだ滅びは浸食しては来ない。だが、それも時間の問題だ。

「　　っ！？」

突然ゲルトはベッドから飛び起きた。何日も雪の中、天使を警戒しながら仮眠を繰り返していた緊張感を引き摺り熟睡する事は出来ない。

そこが自分のベッドだと気づき深く安堵する。しかし全身が傷だらけで血塗れのアーマークロークであることに気づき、ベッドのシートを見て溜息を漏らした。

直ぐに着替える事にした。戦闘中で無ければこんな服装は御免被る。何よりも兎に角こんな格好で出歩くわけにはいかない。ゲルトは直ぐにこの町では当たり前のように流通している着物に着替えた。

そうして深々と溜息を漏らす。結局生き残りは今回も一人も見つける事が出来なかった。階段を下り、何か言おうとするミュリアを無視して街に出る。

行きつけの温泉は三郷ポートの近くにあった。転送して歩いて五分町にはいくつも存在する温泉、銭湯のうちの一つに辿り着く。

いつものように番台の老人に小銭を支払い、脱衣所で着物を脱ぐ。肌蹴た背中にはその歳と外見からは信じられないような惨たらしい傷跡が大量に残されていた。

先日受けた背中への傷は既に塞がったものの、ただ塞がっただけだった。傷跡は確に残る……。身体を洗い、湯船に肩まで使ってゲルトは気を失いそうになるくらい癒された。

「……何をやっているんだろう、わたしは」

全身が痺れるような熱さにも慣れた。当たり前のように複数の人間が裸で湯船に浸かるといふこの異様な風習にも慣れてしまった。

二年……それだけの長さはあった。イザラキに命を救われ、当たり前のように戦ってきた。でも、考えれば考えるほど不安になる。

一人膝を抱えて口元まで湯船に浸かる。こんな事を続けていて、世界を救えるのだろうか？

仲間のいない世界がこんなにも不安で寂しいものだとは思わなかった。リリアや夏流に出会うまでは　ずっと一人ぼっちの戦いを続けていたのに。

それがこんなにも寂しくなるのなら、仲間なんていないほうがよ

かったのかもしれない。そんな風に後ろ向きに考えてしまうほどゲルトは追い詰めていた。

暫くそうして使っていたが、呼吸が止まっている事に気づいて慌てて顔を出す。疲れすぎている所為か、目を閉じれば一瞬で眠りに落ちる事が出来そうだった。

湯船の端に陣取り、ゲルトは背中を預けてゆっくりと目を瞑る。あとどれくらい戦えばいいのだろうか？ 気の遠くなるような現実逃げ出したくなる。

「……貴方は……死んでしまったのですか？ ナツル……」

小さな呟きは直ぐに聞こえなくなった。代わりに疲れた少女の寝息が聞こえてくる。

白濁する湯船の中、ゲルトはそうしてほんの僅かな眠りに着いた。その時見た昔の夢の事を、多分少女は一生忘れることはないだろう。そうして目を覚ませばまた一人きりの戦いが始まる。そんな生活に心底嫌気が差していた。

誰でもいい。隣で一緒に戦ってほしい。大丈夫だって言っただけいい。そんな惨めな自分の心に嫌気が差した。

どうしてこんなにも思い出すのかわからなかった。居なくなってしまうた救世主の姿を夢見たリリアよりも、少女は居なくなってしまうた救世主の姿を夢に思い描いていた。

忘らるる日（6）

迸る光と風の乱舞は全ての白を切り裂いて弧を描く。

そこで何が起きているのか、一般人には理解する事も不可能だった。ただ彼らは自らの身に降り注いだ不幸を恨みながら消えて行くだけの哀れな命に過ぎなかったのだから。

北方大陸の雪道で逃亡を繰り返していたとある国の一団はついに天使に追い詰められ全滅の危機を迎えていた。数名の騎士が天使に戦いを挑んだのだが圧倒的な物量、そして今までの魔物を遙かに上回る個々の戦闘能力に抵抗も出来ずに朽ち果てて行く。

族長でもある老人が子供たちを庇うように天使の前に杖を構えて立つ。彼は簡単な攻撃魔法ならば会得していたが勿論天使に歯向かえるはずもない。

それでも守りたい物があるから、守りたい未来があるから、彼らは死を覚悟して天使に挑んで行く。人間の可能性を貪り食らうそれらに対する反撃。ただ一噛み、せめて痛みだけでも残さねば気がすまない。

死を覚悟した子供たちと老人の前で槍を片手にバケモノが白い息を吐き出しながら瞳を紅く光らせる。魔物が老人目掛けて容赦なく槍を振り下ろそうとした時、この幻想は始まった。

そう幻想。現実的にそんな事は在り得ない。ここに逃げ延びるまでの間、何度も何度も天使の襲撃を受け仲間を失ってきた。だといふのに何故。自分たちだけが、ここで救われるのか？

飛来した銀色の弾丸が天使の額を撃ち抜く。踊るように回転する無数の剣が天使たちを次々に切り裂いて行く。

「おいジジイ。何固まってやがる？ とつとと逃げねえか、邪魔だろうが」

背後から声が聞こえて老人は振り返った。そこには二つの人影があった。

銀色の景色の中を進んでくる二人の青年。腰のベルトに通常ならば在り得ないほどの剣の鞘をぶら下げた金髪の青年が老人に駆け寄り、その背中を叩いて力強く笑う。

「よく頑張ったな、爺さん。後の事は俺達に任せてくれ」

「……あ、貴方達は……？」

聞き返す老人を無視して態度の悪い少年は前に出る。口元には鋭く切り裂くような笑みを浮かべ、腰のホルスターから二丁の拳銃を引き抜いた。

指先でぐるりとそれを二回転させ、近づく魔物目掛けて容赦なく銀の弾丸を撃ち込んで行く。強固な天使の肉体を貫き電撃を迸らせながら弾丸は白い世界を切り裂いて行く。

あれほど自分たちが恐れ逃げ回っていた存在をあっけなく滅ぼして行く。それが幻想で無ければなんだというのか？ 老人は震えながらその景色を眺めていた。

二人の男は背を合わせて武器を構える。十二の剣を持つ男と二丁の銃を持つ男。アクセル・スキッドと如月秋斗。かつては敵対し二度にわたり決闘を経た二人は今、奇しくも同じ目的の為に戦いを続けていた。

「こいつらもただのザコだ。くそ……っ！ いつになったらリア・テイルにいるヨトが降りてくるんだよ！」

「まあ、そのうち来るだろ？ とりあえず今は目先の人助けの方が優先だ」

「俺様は人助けなんて　してるつもりはねえんだよっ！　ボケツ
！！」

「そうツンツンするなって。もう一年もこうして戦ってたんだ、そろそろ素直になっただろうだい？」

「うつせえボケツ！　第一、テメエがどこに行っても俺様についてくるから仕方が無くだな　！」

二人が口論している間に天使たちは雄叫びを上げながら接近してくる。老人が思わず顔を手で覆う瞬間、銃声が鳴り響いた。

天使を見る事も無く、片手で剣を投擲するアクセル。同時に秋斗も銃弾を天使に発射していた。二人が同時に視線を怪物に向け、声を揃える。

「　」　今は話中だ、馬鹿野郎　　！　　「　」

「ブレイドー！　ブレイド、終わったっ！？」

山岳地帯、雪山と化した景色の中一人の少女が岩陰からひょっこりと顔を出した。

白銀のアーマーククロークを身に纏ったその姿はリリア・ライトフィールドに酷似している。実際彼女が着用しているアーマーククロークはリリアが学園で着用していた愛用品だった。

銀色の鎖を腰からじゃらじゃらと音を立てながら吊り下げ、アリア・ウトピシュトナは雪原に足跡を刻んで行く。彼女が岩陰に隠れてから数分、すっかりと周囲は静けさに包まれている。

降り注ぐ静かな雪が積もる栗毛色の髪を揺らしながらアリアは歩き

出す。そこには大量の天使の死骸が転がっていた。その全ての死骸に無数の槍、剣、斧。信じられない事にその全ては伝説の武器とも呼べる一級品ばかりであった。

死体と武器の山に囲まれ少年は立っていた。獣の革で出来たファークートを揺らし、死体の上で大きく伸びをして振り返る。

「おう、終わったぜ。こんなトコにまで天使が来るなんてなあ。ビツクリだぜ！」

死体の山を飛び降りてブレイドが片手を空に翳すと全ての武器は光の粒となってそこに吸い込まれていく。武器の格納を終えた少年は手を叩いて鳴らし、雪を払い落として行く。

ブレイドに駆け寄ったアリアは彼に怪我がない事を確認すると満足げに微笑んだ。それからブレイドの手を取りそそくさと歩き出す。

「もう、一々全部と戦ってたらいつまで経っても山越えられないでしょ！ 次からは無視して行く事！」

「そりゃそうだけど……ほっとくわけにもいかないじゃん」

「こんな辺鄙なとこ、アリアとあんたくらいしかないでしょ！！」

「いやいや！ 八の情報に寄ればこの辺に隠居してるはずなんだよ」

「本当に居るの……？ 八ってなあんか胡散臭いんだもん。わざわざ北方大陸の端の端まで来て何もありませんでしたとかいうオチだったらぶつとばしてやるんだから」

かつてのリリアとは違い攻撃的な笑顔を浮かべながら拳を虚空に繰り出している。そんなアクティブなお姫様を横目にブレイドは冷や

汗を流しながら乾いた笑いを浮かべる。

アリアはやると言ったらやる子である。その上リリアに似て馬鹿力の為真面目に殴られるとそれなりの威力なのだ。小さな女の子に殴られる程度ならと甘く見て以前ブレイドはクリティカルヒットを貰って瀕死になった事もある。

寒そうな格好をしているアリアを見かねてブレイドは自分のコートをアリアの肩にかける。素直に心配しての紳士的な態度であったが、アリアは何か気が入らないのかブレイドの足を思い切り踏みつけた。

「痛えええええ ツ!？」

「何勝手にこんな薄汚いもんかけてるのよ!」

「そ、そんなあ……。返り血だって少ないと思うんだけどさ……」

「うつさい、ばか! もういいからさっさと歩きなさいよ!」

「いや……。だったらそれ返してよ。汚れてるんだから、おいらが着るし 痛えええええ ツ!？」

再び足を思い切り踏みつけアリアは走り去って行く。両足を襲う激痛に涙目になりながら頭上にクエスチョンマークを躍らせるブレイド。

「お……。女の子ってわかんねえよ……。夏流ニーチャン……。っ」

かつて同じ格好のお姫様と仲良くしていた男の事を思い出す。ブレイドは彼が死んだとは思って居なかった。気を取り直し、両足首を軽く振ってからアリアの後を追って駆け出した。

二人の視線の先にあつたのは小さな山小屋であつた。それがただの山小屋であるのは明確なのだが、ただ一点だけ異常な事があつた。山小屋は無傷だった。周囲には、天使の死骸が無数に転がっているというのに……。それは山小屋の主が並外れた実力を持つ使い手である事を意味していた。

「当たり前かしら」

「行ってみればわかるじゃん？」

「ま、それもそうね。ほら、早く行きなさいよ」

「え！？ おいら一人で行くの！？」

「当然でしょ！ 何か危ない事があつたらどうすんのよ！？」

「そんな時はおいらがアリアを守るよ」

ブレイドの真つ直ぐな笑顔にアリアは一瞬呆気にとられ、それからブレイドの背中を蹴り飛ばした。

「いいからさっさと行け！ ばかつー！」

「な、何で！？ に、ニーチャン……。どうすればお姫様と仲良く出来ますか……」

「ぶつぶつ言つてんな、きもい！ 行っちゃえばかーっ！」

顔を真つ赤にして叫ぶアリア。ブレイドは小首を傾げながら一人山小屋へと歩いて行くのであつた。

忘らるる日(6)

「……これ、何ですか？」

「決まってるでしょ？ あんた用の制服よ」

朝一番に母から渡された可愛らしいミニスカートのメイド服を両手で握り締めゲルトは無表情に震えていた。

イザラキでの生活が始まってからというもののろくなことがないとい人心の中で毒づくゲルト。顔を上げると母は紅い着物を着て煙管を片手に真面目な顔でゲルトを見ていた。

何故母は着物で、自分は他国の衣装であるメイド服なのか。納得の行かない感覚に首を傾げる。

「どうしてわたしだけメイド服なんですか……？ それにこのメイド服、スカートの丈が明らかにおかしいんですが」

「そりゃ、見えるようにしてあるからね」

「何で見えるようにするんですか！？」

「その方がお客が喜ぶでしょ？ あんたはせっかくあたしに似て超美人なんだし、もう十七歳になってかなり色っぽくなってきてるんだから今のうちにお店に貢献しなさいよ。歳とってからじゃ出来ないわよ、こういう刺激的な格好は」

「スケスケネグリジエのあなたに言われたくありません！！」

「スケないネグリジエなんてあるの？」

「~~~~ツ！！ 兎に角ツ！！ こんな格好でお店なんて絶対に手伝いませんからっ！！」

メイド服をそのまま丸めてくずかごに投げ込むゲルト。早朝の為客は一人も居ない。その所為かゲルトは寝癖もそのままに疲れた様子でカウンター席に腰掛ける。

「あら残念……。それよりあんた、いつまで一人でゲリラ活動なんかしてるつもり？」

そうやって諦めたようにまるで熱する事も無く冷静にコーヒーをカップに注ぐ母の横顔が堪らなく嫌いだった。苛立ちが止められずゲルトはもう無視を決め込む事にした。

本当ならば部屋に引きこもれば良いのだろうが、数日振りに戻ってきた所為か誰か人と言葉を交わしたかった。正確には自分に声をかけて欲しかった。傍に誰かが居ればそれでよかった。寂しかったのだ。

母は鬱陶しく苛立たしい存在だが少なくとも寂しさなど忘れさせてくれる。怒りや苛立ちでさえ今は自分が人間性を維持する為に必要な感情だとゲルトは素直に割り切っていた。

湯気を昇らせながらマグカップがカウンターに小さく音を立てて出される。和食に未だになれないゲルトは朝食は自分で何とかする日々が続いていたが、母が淹れるコーヒーだけはそこそこ気に入っていた。

ミルクと砂糖をたっぷり入れて甘くしたコーヒーを喉を鳴らして飲み干すと生き返ったような気がしてくる。死んでいたわけではないが、ようやく心地ついたような、そんな気がした。

「まだクイリアダリアを取り返せるのか思ってるわけ？　だったら諦めた方が身の為よ。連中はもうバケモノってレベルじゃないんだから……。あんた一人ですらにかできる領分はとくに越えてるのよ」

「世界のどこかでまだ仲間が戦っているはずです……」

「それを何を根拠に言っているのか全く謎ね。ずっと前から言っていることだけど、戦いなんかするヤツにろくなのはいないわ。あんたの父親だって自分の正義がどうかんとかほざいて、結局は皆に石投げられて死んでったじゃない」

その言葉を聞いた瞬間我慢が出来なくなつてゲルトはカウンターを両手で強く叩いて立ち上がった。憎しみを込めた視線を母に向けると彼女はやはり怒る様子も無く冷静にゲルトから視線を反らして朝食の支度を進めた。

「いつまで引き摺ってんのよ。子供じゃあるまいし」

「……そうやって貴方は、いつもいつも……っ」

「何回だって言つてやるわ。戦いなんてしてるヤツは馬鹿よ。人間一人に出来る事なんて高が知れてるの。勇者とか英雄とか……くだらないわ。そんな名声なんて何の意味もない。死んでしまえば全てが無よ」

「お父様の事をこれ以上悪く言わないでください……！　いくら貴方でも、そんな事を言う資格なんてない……！」

「資格ならあるわよ。あたしが誰よりあいつの傍に居たんだもの。そのあたしもあの後散々だったし……まあ、家から出て学園に行ってたあんたにはわかんないことでしょうけどね」

「わたしは逃げたわけじゃない！ わたしは……強くなって、世界を見返す為に……！」

「でも結局マリアの娘と仲良くなってへらへらしてただけでしょ？ あんたの言う世界を見返すっていうのは、そうやって一人でボロボロになって戦う事なわけ？」

「……………うるさい。うるさい、うるさいうるさい、うるさいっ……」

叫ぶと同時にコーヒーマグが倒れてカウンターを汚して行く。ゲルトは泣き出しそんな表情で母に背を向けて店の出口目掛けて走り出す。

「逃げるのね」

母が背後で呟いた一言は聞かなかった事にした。靴を鳴らして走り去り、ひたすらにイザラキの街を駆け抜けた。

息を切らし、涙を流し、汗を浮かべ、歯を食いしばり、心の中で何度もくじけそうになる自分を否定しながら走り続けた。やがて一人、河川を渡る大きな橋の上で足を縛れさせて無様に転ぶ。

頬をすりむき、足を挫き、それでも走った。立ち止まった瞬間全部を投げ出したくなる気がして怖かった。どこに向かっているのかも解らず、ひたすらに走り続ける。

そうしてどこまでも走り続け、辿り着いたのは海辺だった。海は確かに現実のものだが、その先に見える青空や穏やかな海は全てが偽

者。結界に描かれた鏡面映像に過ぎない。

「はあ……はあ……はあ……」

疲れ果て、砂浜に座り込む。額の汗を拭い、立ち上がる。

既に疲れて走れるような状態ではなかった。だが停止した瞬間心も停止する気がしてうろろと歩き続けた。兎に角気持ちが悪く落ち着かなかった。

砂浜に降りて行く階段まで戻り、その石の段差の上に腰掛ける。思い切り走って更に少しうろろしたお陰で心は落ち着いたように思える。深々と呼吸をして生きている事を確認する。

「はあ……」

作り物の青空はいつでも綺麗で一定だ。それを見ていると晴れやかな気持ちになっていいのか、それとも作り物だからと冷めるべきなのかわからなくなる。

母の言う事が正しい事は自分でも良くわかっていた。だがそれを認めてしまったら今の自分の人生全てを否定してしまうことになる。それで怖かった。

父が大変だった時、父が死んでしまった時、母は特に悲しむわけでも怒るわけでもなく朝のように冷静な調子だった。正直な所母が感情的に成っている所を一度も見ただ覚えはない。

母に反抗しても、どんなに噛み付いても彼女はあっさりとゲルトをスルーしてしまう。やがて反抗するだけ無駄だと、語り合うだけ無駄だと決め付けて家を飛び出した。

学園に行けば強くなれると思っていた。家出同然、身元の保証も無く学園に入学できたのはルーファウスが身元保証人になってくれたのが大きい。何はともあれ家を出た十四の日からずっとゲルトとミユリアは音信不通だった。

実際にはそれよりも随分と前から母と娘のやり取りなど消滅していたのだが、物理的に全く居場所が見当つかなくなったのはここ数年の事。ゲルトは溜息を漏らし、それから頭を抱えて落ち込んだ。

「くそう……っ」

言われずとも解っている事を他人に指摘され、なんとも言えない悔しさに苛まれる。

一人きりで戦って、戦って戦って、そうしてその繰り返しだけで時間が流れて行く。天使は倒しても、倒しても倒しても、次々に増殖して世界を壊して行く。まるで終わりの無いイタチゴッコ……。

傷だらけになって一人で頑張っているのは何故？ リリアに会いたいから？ 世界を救いたいから？ 様々な理由が脳裏を過ぎる。恐らく理由ならいくつでもあるのだろう。

だが何よりも第一に心の中にあるのは『忘れたくない』という気持ちだった。ぼんやりとした何も映さないような瞳で空を見上げる。

たった三年前まで ゲルトの世界はくすんでいた。そしてそのくすんだ世界の中、虹色の輝きを描く少女に出会った。

どんな時でも前へ前へ、間違いないがらでもくじけながらもそれでも前へと進み続けようとする少女……。真っ直ぐに真っ直ぐに、屈折した自分の心を抱えてそれでも進もうと努力していた少女。

自分が誇れる、胸を張って一番の友達と言える少女は今ももうゲルトの傍にはいない。彼女の傍に居る時は世界は虹色だった。そこには沢山の色を持った仲間がいて、彼らが織り成す虹は眩く輝いていたから。

プレイブ克蘭

勇者部隊と呼ばれる部隊に入り、学園から様々な戦いに介入してきた。そこには恐らく強制される世界は無く、ただ各々が望むように世界を生きていた。

皆が皆傷つかず平和な世界ではなかっただろう。でも間違いながら擦れ違いながら少しでもより良い未来へと進もうと努力をしていた。

充実していた。

今だからこそ思う。あの日々全てがきらきら輝いていた事を。自分ひとりでは何も出来ない事を。どうしようもなく、孤独だという事を。

「……くっ」

思わず泣いてしまいそうになって身体を強く抱きしめた。泣くなんてみっともない。でも、昔は素直に涙を流せた気がする。

あの頃と今とは違う。涙を流しても、それは前に進む為の大切な一歩だった。でも今涙を流してしまったら　もっと大切な何かを流してしまう気がする。

「うつ……っ。何なんですか、わたしは……っ」

頭を掻き乱し、俯いて耐える。

「流すな……流れるな……流しちゃだめだ……消えるな……忘れるな……っ」

堪えようとしているのに昔の事を思い出せば思い出すほど辛くなってしまう。

「耐えろ……我慢しろ……頑張れ……頑張れ……がんば……」

何を？

心の中でそう呟いた。

これ以上何を頑張ればいい？　頑張っている。頑張ってきた。でも何も変えられなかった。一人じゃ何も出来ない……それが、現実。

「あ
」

一粒零れたら後はもう堪える事は出来なかった。

砂と石に吸い込まれていく涙の雫。視界がぐちゃぐちゃになって笑おうとしても笑えなかった。

何故こうなってしまったのだろう？ 何故ばらばらになってしまうのだろう？ 全て忘れてしまふのだろうか？ 頭の中がぐちゃぐちゃになって叫び出したくなる。

どうしようもない衝動。不安で仕方が無かった。あんな言い方をしなくてもいいではないか。自分がもうつぶれそうなのは、自分自身が一番よくわかってる。

戦う事に空しさを覚え全てを投げ出したくなる。誰も傍に居ない。誰も居なくなつた……。想像してみる未来の事。そこには誰も居なくて、ただ誰にも見られずに死んでいくのだろうか。

死ぬのが恐ろしいわけではない。ただ忘れて、忘れられてしまふ事が堪らなく恐ろしいのだ。戦って死ぬことよりも、死んで自分の存在が誰かの中から消えるのが怖かった。

そうしていつか誰も自分の事を見てくれなくなつたなら、心も全て消えてしまふのだろうか。そんな事を考え、必至に涙を拭つた。

「もう……やめようかな」

戦うのが馬鹿らしくなる。痛くて辛くて悲しくて必至になつてどうしてそんなことを進んでやっているのか判らない。

体中傷だらけボロボロで限界でとくに死んでいてもおかしくなくてでも身体がバケモノだから結局死ねなくてたらなら生きながらえているだけ。

力が抜ける。目は虚ろだった。もう全てに疲れてしまった。もう何も考えたくない。終わってしまったえばいいのに……。どうして？ どうしてまだ世界は続いているの？

滅ぶなら滅んでしまえばいい。もう誰も自分を見てくれない世界なら、とっとと消えてなくなればいい。自分という物語はエンディングの後も続く。それがどれだけ悲しいことか。

投げ出したい逃げ出したい。投げ出したい逃げ出したい……。ぶつぶつと一人で口ずさむ。どうしようもない孤独を抱えたまま立ち上がり、呆然と風を受けて立ち尽くす。

「……帰ろう」

一人で肩を落したまま歩き出す。涙を片手で拭いながら。

家までとぼとぼ歩いて戻り、既に客の入っている店と扉を開く。無言でくずかごに突っ込んだメイド服を取り出し二階の自室で着替えて店に下りる。

「何？ 急にどうしたの？」

「……………気分転換。このままだと本当に……つぶれるから」

自分をもっと痛めつけよう。こんなわけのわからない服装でパンツ見せながらへらへら笑って馬鹿みたいに仕事をして男性客にじろじろみられながら頭おかしいくらい華やかに働くのだ。

そうすれば今の自分が間違えているんだって自覚する。在り得ないくらい恥ずかしくて馬鹿馬鹿しくて後でベッドの上で頭を抱えて悶える事になろうとも、ここでの生活がイヤになる。

だからそうすれば、そうすればここで安穩と暮らす事を否定できる……。顔を上げ、ゲルトはその場でターンしながら客に微笑みかけた。

「いらっしゃいませっっ！！」

壊れたように可愛らしい笑顔を振りまく娘に若干引き攣る母の顔。しかしゲルトは仕事をてきぱきとこなす。

そうしているうちに空しさは消えて行く気がした。いや、消える事はないだろう。だが少なくとも紛らわせる事は出来る。

「いらつしゃいませ〜！　ありがとうございます〜！」

段々自分が馬鹿みたいに思えてくる。パンツが見えている。客もスカートが珍しいのか食い入るように見ている。でもそれがどうした自分にはお似合いだろう。馬鹿で無力でどうしようもないヘタレで勇者失格で友達も守れずに一人で戦ってこんな所でへらへら生きている自分には丁度いい罰なのだ。

心の中で何かがガラガラと音を立てて崩れ去ってく。踊るようにホールを舞うゲルト・シュヴァイン元黒の勇者二代目。そんな彼女に会いに新たな来客が扉を開く。

「いらつしゃいませ〜！　お一人様ですか〜っ!？」

小走りで駆け寄りその男の手を握り締めて笑う。ゲルトが顔を上げると、男は仮面を着けたまま何故か固まっていた。

「…………お客様？」

黒い布で全身をスッポリと覆った男。　黒衣に仮面の様相は嘗てのフェンリルを彷彿とさせる。しかし男は彼とは違う声色で呟いた。

「ゲルト…………それは、イメチェンしたのか？」

「えっ？」

男が金色の手で自らの仮面を外してみせる。その顔を見た瞬間、ゲルトの心の中で何かが音を立てて崩れ去った。

見覚えのある、懐かしい顔。かつて自分が共に戦い、そして共にリリアを守った戦友。そして恐らくそれ以上の関係だった人。

「似合ってるけど、その……。パンツ見えてるぞ」

「。ナツ、ル……。？」

男は少々照れくさそうにゲルトの肩を叩いて店の中に進む。カウンターまで進んだ夏流を見てミュリアは溜息を漏らしながら苦笑する。

「来ちゃったのね、ナツル」

「ええ。また少し、世話になります」

「……。まあ、いいけどね。一先ず。お帰りなさい、救世主」

何故か母と親しげに話し握手を交わす夏流。意味が判らずに混乱するゲルトは一先ず自らのスカートをきつく抑えて顔を真っ赤にした。少年は以前と同じ、変わらない十七歳の姿で振り返った。でもその笑顔は過去のそれとは違う。どこかとても大人びている、決意に満ちた男の顔で。だから見違えてしまう。

「背　伸びたか？　ゲルト」

その当たり前のような言葉に怒りと喜びと様々な感情がごっちゃになり、ゲルトは夏流の身体にしがみ付いていた。ぎゅっと、もう絶対に放さないといわんばかりにくっついて胸に顔を押し当てる。ぼろぼろと零れ落ちる涙も嗚咽も隠して今はただ

彼の存在を証明したかった。

ゲルトの肩をそつと抱き、夏流は苦笑しながらその頭を撫でる。まるで子ども扱いだった。しかしそれでも別に構わなかった。

これで自分は一人じゃない。それが何よりも、嬉しくて仕方が無かったから。

空白の日（１）

世界を見下ろす天空に浮かぶ城。かつてリア・テイルと呼ばれたその城は美しい翼を広げて大空を舞う。

雲の向こう、『世界』と呼ばれるエリアに含まれない限界を突破した場所。神の住処。真つ白い光に包まれた空間の中、リリアは眠り続けていた。

巨大な白い結晶の中に閉じ込められ眠り続けるリリアの前には翼を折りたたみ目を瞑ったまま微笑むヨトの姿がある。神はそつと結晶に触れ、頬を擦りつける。

「ああ……。もう少し。もう少しで、この世界の続きを夢見る事が出来る……。誰にも邪魔の出来ない、絶対正解の世界。貴方さえ傍に居れば、わたくしに恐れるような物は何もありません」

そつと涙を流し、頬を伝う雫を拭う事もなく流れるままにする。それは喜びの涙であり、決して拭い去らねばならないようなものではないのだから。

この世界は非常に不安定な存在。人間によって管理されている。その世界は常に争いが絶えず、繰り返される世界の歴史の中でも正しい答えなど見つかるはずもなかった。

もつといい未来があつたのでは？ もつとどうにか出来たのでは？ ヨトは心の中で何度もその想いを反芻してきた。しかし答えなど出るはずもない。

あと何回同じ世界を繰り返せば答えは見えるのか？ 同じ過ちを、繰り返すのか。世界は何度真つ白に生まれ変わっても醜いままで、神の意思とは無関係に進んでイク。

だから全てがどうにかしてやり直せればと、どうにかして正しい未

来を選択出来ればと願った。だがそれは最早自分の手には余る事であつた。

そう、まるで母親に縋る娘のようにヨトは自らを産み落とした空想を再現しようとしていた。きっと神を生み出した存在ならば……世界の答えを知っているはず。

正しい世界になど導いてくれなくとも良かった。ただ、彼女がそうしろと言うのであれば全ては正義となる。彼女の思いの軌跡こそ世界を導く輝きなのだと。

ヨトは最早考える事を放棄していた。ただ眠りから覚めた世界を救う存在を待ち望んでいた。そう、救世主とも呼べるであろう、その神を産み落とした人の事を。

「わたくしはもう、この世界の痛みを導く事が出来ません……。貴方ならば、わたくしを導いてくれるのでしょうか？　わたくしを産み落とし、そして見捨ててしまった『世界』とは違って……」

二年の月日を経て大人びたリリアは結晶の中でゆっくりと瞳を開く。外の世界に出るにはまだ早く、リリアと呼ぶには遅すぎる。

神の卵のようなその結晶の中、リリアと呼ばれた少女は小さく微笑みを浮かべた。

「今まで……どこで、何をしていたんですか？」

時間の流れとは残酷で常にタイミングを見計らつてとは行かない。何かを成すには早すぎて、何かを残すには遅すぎる。そんなどうしようもない時の中、人の心は移ろいながらも命を刻む。

「死んだと……思っていました」

ゲルトに与えられた部屋の中、夏流とゲルトは向かい合っていた。

夏流は仮面と己の姿を覆っていた黒いマントを脱ぎ片腕で抱えてゲルトを見下ろす。

夏流は何も答えようとはしなかった。ただ感情の読み取れない瞳でゲルトをじっと見詰め続けている。ゲルトはそれが不思議と不快だった。

何度も何度も彼の姿を求めていたはずだった。だが、実際はどうだ？　彼が目の前に現れたことでどうしようもない苛立ちと嫌悪感だけがふつつつと湧き上がってくる。

何よりも納得が行かない事。それは、何故彼が彼女の母と同じように冷たくなんの色も映さない瞳をしているのかという事。夏流は以前とは雰囲気が変わったように思えたし、実際に彼は変わっていた。

「二年も経って今更……。今更、どうして会いに来たんですか？」

感情を押し殺して冷静な声で問い掛ける。しかし声が少しだけ上ずってしまっている事に本人も気づいていた。夏流は目を細め、呟く。

「リリアを助ける為だ。俺一人ではリリアを助けられない。だから、力を貸して欲しい」

「……今更都合よくノコノコ出てきて言う事はそれですか？」

何故か腹立たしく、いよいよ感情を押し殺すなどという事は不可能になり始めていた。

夏流の胸倉につかみかかり、両手で襟首を締めながら震える声で問い詰める。

「貴方はいつもそう言って結局何も守ろうとしないじゃないですか……！？　貴方が居なくなっただ後の世界の事を考えたんですか！？　貴方が守ると言った物はもうこの世界の何処にも無いっ！！　何

処にも！ 何処にもおっ！！」

それは自分自身に投げかけるのと同義。

故に胸が引き裂かれるような痛みに包まれるのも必然。

成らばその言葉に込められたどうしようもない意味。

願いや苦痛、約束や思い出……。どうしようもない世界の中の悲しみをぶつけるという甘え。

自分の苦しみを解って欲しいのだと、心が叫んでいた。それに気づいてゲルトは余計に自分が嫌いになった。

「……………わたし……………わたしは……………」

夏流の首を絞める腕も、縋りつく指先も、泣きそうな声も。

全ては零れ落ちてしまう。地べたに這い蹲る。ゆっくりと、額を彼に押し当てたまま。ゲルトは歯を食いしばり、泣きながら呟いた。

「たすけて……………。たすけて…………… ナツル……………」

少年は何も答えなかった。崩れ落ちて脱力するゲルトを前に少年は無言で俯き、それから自らも大地に膝を着き、少女の身体をそっと抱き寄せた。

「ごめんな……………」

そんな言葉は、勿論二人のどちらも望んではいなかった。

それでも他にかけるべき言葉もなく。ただ時間だけが過ぎ去って行く。

取り返しのつかない、世界の嘆きを象徴するかのよう。

空白の日（１）

過去と未来を繋ぐ物がある。例えばそれは、物理的な障害さえも簡単に飛び越えて明日へと全てを伝えて行く。

「俺はふと思うんだ。この戦いは無意味なものなんじゃねえかって……。こんな事をしても、明日には何も届けられないんじゃないかってよ」

勇者と呼ばれた男は折り重なる死の荒野を前に大地に神剣を突き刺して小さく息を漏らす。彼の身体は返り血に赤く染まり、世界もまた同様であった。

背後に立つナタルを名乗る仮面をつけた少年もまた血みどろでその場に立ち尽くしていた。もうこんな死地をいくつも渡り歩いてきた十二年前の世界に戻り、元の時代へと戻ろうとする夏流には幾つかの問題があった。まずそもそも、元の時間、パンデモニウムが崩壊する直前の時には戻れないということだった。

ヨトの支配が最も強く、しかしそれゆえに確実に時の座標を確定できる『本当の今』だけが彼の辿り着ける未来だったから。

そして何よりも、今の自分ではヨトと戦うだけの力がないと少年は考えていた。十二年前の未来。二年の月日を経て、世界を覆っていた魔王の脅威は勇者の剣で払われるだろう。

その瞬間までせめて彼は勇者の仲間で居たかった。未来を変えようなんて考えはもはや脳裏には微塵も残されてはいなかった。

未来は変えられる。だが、過去は変えられない。自分が歩いてきた道を覆し掘り返すというのであれば、それは心の奥底に続く大切なものへと続いている道を砕く事に他ならない。

確かに今の全てを満足は出来ない。人は皆後悔しながら今日を生きている。だがやり直す事なんて絶対に出来ない。ただ全ては明日へ

と向かう新しい息吹の中へと続いている。

過去の自分を無かった事にした瞬間、人はその痛みさえもなかった事にしてしまう。痛みがこうしてここまで自分を連れてきた。辛く苦しく、しかしその痛みは現実をよりリアルな形へとコンバートする。

明日を生きる力も、今日を耐え抜く勇氣も、過去を信じる強さも、全ては過ちも含めた自分の過去の全てが与えてくれる希望の光……。故に、過去を変えようとは思ってはならない。

たとえ勇者部隊と呼ばれたものがなくなっても。彼らが悲惨な最期を迎えるとしても。それは彼らが己の一生を賭けて明日へと残した確かな光の軌跡だから。

「世界は痛みを忘れない。全てをまっさらにしちまったら……痛みも忘れちまう。痛みも恐怖も後悔も、人の明日を明るくするのに必要な事だ。間違わないヤツは、絶対に『正しくなかなれない』んだよ」

どつかりと岩の上に座り込み、傷だらけの体でフェイトは遠く空を見上げる。

「この戦争は確かに間違ってる。ヨトの願う通り……いや、厳密にはお前の言う俺たちの想像主が願う通りってか。結局は俺とロギアが戦う為にあるような、そんな戦争だ」

そう、それは最後のワンシーンを再現する為だけに存在する物語。そこから先のことなど誰も考えて居ない。ただ悲劇的で、残すものの無い戦い。

「だがそれでも 受け継ぐ人間が居れば物語りは終わらない」

主人公が死んでも。主人公が生きても。物語は終わる。エンディングを迎えれば、世界は閉じる。

閉じてしまった世界の先、未来はあるのか？ その答えは難しいだろう。それが本当にただの『本の中の物語』ならば、先は無いかも知れない。

「でもな、俺たちはここにいる」

確かに生きている。考え、苦しみ、後悔し、それでも明日へと向かう。

「くだらない世界だ。でもそこで生きてる。生きて、生きた証を残して行く……。ガキとか剣とか、或いは武勇伝とか。そういうものに願いを込めて、物語の続く明日を夢見るんだ」

終わりなんて存在しない。現実も夢も、終わらせようと願わない限りは絶対に終わらないのだ。

終わらせる権利を持つのは物語の主人公だけ。そう 全ての生きる命一つ一つが歩む事を諦めた時だけ、世界は滅ぶだろう。

「この世界の全ての勇者と全ての魔王と全ての救世主が。登場人物の一人一人、世界の全てが生きる事を諦めない限り……。たとえ神の設計図にその先が無かったとしても、俺たちは空白を埋めて行く明日を信じられる」

剣を引き抜き、フェイトは振り返る。そうして仮面をつけた、この世界にもこの時代にも本来あるはずのない少年の肩を叩く。

「伝えてくれるんだろう？ 続けさせてくれよ。俺のガキにもガキのガキにも……。皆明日がほしいんだ。だから戦う。どんな茶

番でも……終わりになんかしたくねえんだ」

明日が見えずにもがいてあがいて、それでも何も見つからなかった時……どうすればいいの？

「……………過去に、行っていた？」

「ああ」

「……………ナツル、それは冗談とかではなく？」

「マジだ。ついでに俺は異世界人だ」

「……………」

ついでというには余りにも重過ぎる現実、ゲルトは完全に放心状態に陥っていた。

夏流は容赦なく一方的にゲルトに己の経験したことを捲くし立てた。パンデモニウムで神に殺されかけた事、時を超える力で助かった事。十二年前の世界でフェイトたちに会い、そこで二年間を過ごした事。自分はヨトを倒し、空白の日から世界を救おうとしている事。そしてリリアを奪い返す事。

その全てにゲルトは全く口を挟まなかった。聞き入っていたわけではない。余りにも馬鹿馬鹿しい話の連続に最早ついていけなくなっただけであった。

「……………貴方の話は、正直信じられません」

「……ま、まあそうだろうな……。自分で一気に語っておいてなんだが、もう少し段階を踏んで説明すべきだった」

「そういう事ではなくて……。じゃあ、なんだっていうんですか？ この世界は神様が滅ぼそうとしているんですか？ ヨト神が……？ 貴方は世界を生み出した人の兄で、リリアはその人の魂を持っていて……。一体何がなんだか……」

「混乱するのも無理はない。正直俺も完全に把握しているかどうか怪しいんだ。ただハッキリしている事は　。ヨトを倒さないと、この世界が終わってしまうって事だけだ」

「……………」

ベッドに腰掛けたまま頭を抱えて黙り込むゲルト。その傍らに立ち夏流は黙り込む。

自分でも都合の良すぎる話だと考えていた。少しばかり寂しげに笑顔を浮かべ、それからゲルトに背を向ける。

「……変な話をして悪かったな。他を当たるよ」

「……ナツル」

「こんな世界になった責任は多分俺にある。だから俺は命を賭けてこの世界に応えなきゃならない。もう……無事に元の世界に戻れなくてもいい。この世界で死んでも……それでも自分の罪を償うよ」

決して悲観的になつたわけではない。それは強い決意　。どんな事になろうとも絶対に諦めず戦い抜くのだという確固たる思い。それが今の彼の全てでもあった。

ふと、自分の知る彼と今の彼との違いに気づく。彼はいつかの日とは違い迷いも不安定さも感じさせる事は無い。背中になにかを背負った人の顔……それを思い知らせる。

「また都合よくお前を巻き込むなんて、確かに調子が良かったな。もうここには来ないよ。それじゃあ」

「ま　っ！？　ま、待ってくださいっ！！」

叫び声に振り返る夏流。ゲルトは立ち上がり、夏流に駆け寄った。しかしかけるべき言葉は思いつかなかった。ただ無言で夏流の手を取り、ひたすらに瞳を覗き込む。二人の視線が交錯し、時が止まったかのような錯覚さえ覚える。

「一人でも……貴方は戦うのでしょうかね」

「……もう決めた事だからな」

「勝手ですよ……。だったらどうしてわたしの前に現れたんですか」

「……………そうだな。悪かったよ。だからもう、ここには……………」

「そうではなくて！　もっと、別の……………違う考え方は無いんですかっ！？」

「ち、違う考え方といわれてもな……………」

「わたしがこの二年間、どんな気持ちで過ごしてきたか……………！　少しくらい、話を聞いてくれたっていいじゃないですかっ！」

「あ、ああ？ うん、そうかもな……。ごめん」

頬を掻きながら夏流は困惑した様子で振り返る。ようやく部屋を出て行く事を諦めたのかベッドに腰掛けてゲルトを見やる。

「そういえばまだゲルトが今までどうしていたのかって話を聞いていなかったな」

「そうですよ……。大変な状況である事は理解しますが、そんなに慌てて出て行こうとしなくても……」

「そうだな……。少し冷静さを失っているのかもしれない。悪かった」

「わ、わかればいいんです」

とは言ったものの、どんな言葉を交わせばいいのかはわからなかった。何よりまず自分の頭の中が整理出来ていないままだったし、隣に夏流が座っているという実感もなかった。

もしかしたらそれは本当は夢で、気づけばベッドの上で見ていた不思議な夢の事を思い返して顔を紅くするのかもしれない。

それでも隣に座った夏流はどこかここではない遠くを見詰めて憂いを抱えた瞳を輝かせている。その彼がベッドのシーツの上に乗せている手に自分の手を重ねてみる。

何故そうしたのかはゲルトにもわからなかった。ただシーツがくしやりと皺を作り、二人の視線が衝突する。

拮抗した時間の中、必至に言葉を紡ごうと努力する。だが、結局何一つ思いは伝えられない。昔からそうだった。素直になって誰かと触れ合う事など、一度もした事がなかった。

言葉にすれば、口にすれば、悲しい未来は現実になってしまふ気が

する。弱音を吐けば心は折れて、悪い予感自分を掻き消して行く。だから誰かと触れ合う事は弱さを吐露することに他ならず。悪い予感を引き寄せるきっかけになるような気もしていた。

「……………神に打ち勝てば、この世界は救われるんでしょうか」

問い掛ける言葉。それは恐らく本音とは違う。

「戦って戦って……………それで、世界は未来に進めるのでしょうか？」

嘗て世界を二分するほどの大きな戦があった。

その忌まわしい悲しみを乗り越えて世界は前へと進んできた。少なくともゲルトはそのつもりだった。

悲しみがあり、憎しみがあり、しかしそれを糧に生きてきた。リリアと出会い、憎しみ以外の心で明日へ進む事を知った。

共に戦った。その全てが正しく世界を導いたのだとは胸を張って断言出来ない。だが、それでも痛みを胸に歩んできた。

その思い出の全てが否定されようとしている。明日は結局こんなものだ。魔王と勇者の対決。パндеモニウムの決戦が、物語のエンディングならただけよかっただろう。

エピソード

今なんて必要なかった。こんな寂しい未来は見たくなかった。なのに世界は続いて行く。きっと、この悲しみを乗り越えてもまた……………。

「急に、怖くなったんです。自分が、どれだけ頑張っても報われない気がした……………。夢は、もう覚めてしまったのだと。気づけば自分の腕の中には何もない。何も……………終わってしまったって」

両手を見詰める。そこには何も無い。でも、かつてはそこに沢山のものを見出す事が出来た。

夢とか明日とか勇氣とか。信じられる友達が居て、その友達と

一緒に進む事が幸せだった。でも。

「夢を捨てれば楽になれるのに、捨てられずに今日まで二年間もがいて来ました。早く捨てれば、諦めれば楽になれる……。心の中で何度も呟いて。それでも、どうしようもなくて……。やり直したい、戻りたいって、何回も何回も」

出来るだけ、リリアの笑顔を思い返さないようにしていた。

しかし、もうそれは無理だった。心の中に溢れる沢山の思い出。リリアは死んだのだろうか？ そんな事は 関係ない。

心の中にこんなにも思い出が溢れている。失ってしまったても、置き去りにされても、それだけではどうしようもない。助けなきゃ。探さなきゃ。それでも怖くて仕方が無い。

「でも、もしも全てが終わってしまっていたら！？ リリアはもう、この世界の何処にも居なくて……。！ わたしと同じ『夢』を追う人はっ！ この世界の何処にも居なくてっ！ 一人きり夢を信じて走る事の辛さが貴方に判りますか！？ 判ってください！ 判ってよッー！」

不安定になる心をそのままに立ち上がる。頭を抱え、止まる事を知らない体の震えに絶望しかける。

心が折れる。不安に押しつぶされる。現実はいつだって残酷だ。夢は覚める。その後に残るのは 暗くて悲しい過去だけ。

「わたしは……。わたしは、こわい……。っ！ こわくてこわくて、仕方が無いんです……。っ！ もう、戦えない……。！ もう、走れない」

その場に膝を着き、頭を抱えて頂垂れる。夏流は何も言わずに立ち

上がった。それから静かに足音を立て、部屋から出て行ってしまった。

当然だと思った。戦えないのなら自分に価値などない。仲間ではない。仲間は信じる関係だ。絆がその二つの文字を形成する。明日を信じる力を、共に前へと進む夢を失ってしまえば仲間は仲間では居られなくなるだろう。何より彼は最後の戦いに赴こうという時なのに。自分は、一緒にはいけないのだ。

なのにどこにも行つて欲しくなくて、一人にされるのを怖がって、自分の事ばかりを考えている、自分ばかりを可愛がる臆病者。肩を抱き、涙を流しながら目を瞑る。結局何がしたいのだろう。もう、終わりにしたい……。死んでしまう事が出来れば、楽なのに。

「おい、ゲルト」

「ふええ……？」

顔を上げた。そこには何故か、再び夏流の姿があった。

少年は少女の手を掴み、引っ張り起こす。信じられないくらい軽々と持ち上げられてしまったゲルトが目丸くしていると少年はまるで子供のような笑顔で行った。

「行こう」

「……………え？」

手を引き、強引に少年は歩き出す。部屋を出て階段を下り店を飛び出しイザラキの街へ。

「どこ、どこに行くんですか!？」

「イザラキの王の所だよ。色々と話したい事があるんだ。作戦会議
というか」

「そんな　！　わたしの話を聞いていなかったんですか！？　わ
たしはもう、戦うのなんて　！」

「でも、今まで一人で戦ってきたんだろ？」

立ち止まり、夏流が振り返る。真剣な表情で、けれども楽しそうに。

「俺は……今に後悔なんてしてないよ。皆と一緒にこの世界で過
した事……学園で馬鹿やった事も、皆で同じ目的の為に戦った事も、
この世界に來た事もこうして世界が終わろうとしている事も全て
。なかった事になんかしたくない。それだけは絶対に赦せない」

「……………夏流」

「何回だって言う。俺は今に後悔なんかしてない！　今もうしてゲ
ルトの手を握り締める事が出来るのも、こうしてまた何かの為に歩
き出せるのも、全ては無意味なんかじゃなかった過去のお陰なんだ。
だから俺は、後悔なんかしてない　！　まだこんな所で、止まっ
たりなんかしない」

自らの両手でゲルトの両手をしっかりと掴む。絡み合う指と指　。
ふと、昔もこんな風に誰かと手を繋いだような気がする。

顔を上げる。夏流は笑っていた。とても強くて輝く笑顔だった。初
めて彼に会った時はこんな顔はしていなかった。もっと歪んで捻れ
て……。壁を持った笑顔だった。

ゲルトは二年の月日で背が伸びた。夏流は成長していなくて、見詰

め合う視線は随分と差が縮まった気がした。でも、彼の心に流れた時間は今まで一瞬たりとも止まったりなんかしていない。

「覚悟を決めるよ、黒の勇者。お前の勇氣はそんなものだったのか？」

「ッ！ 言われ、なくても……やりますよ！ 責任はわたしにだって、ありますから……って、あれっ？」

いつだったか、同じ言葉をかけられた。

自然と言葉は口から出ていた。考える事なんてなかった。その必要もなかった。

思えば思うほど、心は素直に言葉をはじき出す。回答ならば既にある。問題は解決出来る。まだ、諦めてなんかいない。

「……いい返事だ」

そう言つて夏流はゲルトの頭を撫でる。心の底から何かが震えて競り上がるのが判った。

それが多分、『勇氣』という陳腐な言葉で表現できるようなものと気づいた時、ゲルトは泣きながら笑っていた。

「リリアを取り戻すんだ。手伝ってくれるだろ？
黒の勇者」

ゲルト・シュヴァイン

「わたしで……いいんですか？」

「お前じゃなきゃ駄目なんだ」

「わたしでも……まだ、期待してもいいんですか」

「ごちゃごちゃ言わずに行こう。皆の夢なら、俺が絶対に終わらせない」

ゲルトの手首を引き寄せ、夏流は息のかかるような距離まで顔を近づけて頷いた。本人はいたって本気である。それがストレートに判って逆に笑ってしまった。

「あは……。あははっ」

「……ちと待て。俺は本気だぞ？」

「あははっ！ あはははははっ！！」

「……何だかよく判らんがえらく馬鹿にされた気分だ」

「いえ、そういうわけではなくて……。ああ、よく判りました」

「何が？」

「貴方の事が大好きです」

ゲルトの笑顔と共に放たれた言葉に二人は同時に停止する。

爽やかな笑顔と共にドラマのワンシーンを切り取ったかのような状態で固まるゲルト。その正面で眉を潜めて小首を傾げる夏流。

二人とも予期せぬ言葉と展開に同時に頭の中が真っ白になっていた。何よりも自らその言葉を口にした少女は冷や汗を流しながら笑顔のまま首を傾げる。

「……………えっ？」

ごちゃごちゃ考えず、思った事を全てそのまま口にすればいい。
そんなこと、考えなければよかったのに。
時が止まる事はない。人々が行き交う中、手を取り合ったまま二人
は正面から見詰めあい静止し続けていた。

空白の日（2）

世界が白い闇に包まれた世界の中、しかしそれでも確に残る物はあった。

天空を突き抜けて聳え立つ塔、ラ・フィリア。シャングリラと呼ばれたその街は世界全てが破壊し尽くされ様と言うこの時代において確かに原型を留めていた。

何者も生きる事の出来なくなつた氷河の世界の中、シャングリラへと足を踏み入れる一つの影があった。その人物は全身をすっぽりとマントで覆い、吹雪の中身を震わせながら街を歩いて行く。

混乱により崩壊した秩序は世界を飲み込んで行く。すべての街が無残な終わりを迎える中、まるで時さえも白き冷氣に居て尽くされたかのようにその街だけはあるのまま、二年前から何一つ変わらぬまままでそこに存在していた。

「……天使がここを攻撃しない理由ってなんなのかしら？」

この学園に居た頃は何度も何度も上り下りを繰り返した恨めしい坂道を昇り、嘗ては彼女たちが学び舎としていたディアノイアへと辿り着く。

要塞形態のまままで停止する学園の中へと足を踏み入れる。不気味な程に静かだった。そこに人の気配は一つも 否、人だけではない。命の気配は全て無かった。

白い雪に掻き消され、吹雪の風に晒され、視界さえも覆われて行く。何とか建造物の中に入りフードを外し、凍りついた前髪に眉を潜めた。

ベルヴェール・コンコルディアはそうして望まぬ形での帰還を果たした。白いマントを羽織つたまま、振り返ってエントランスを見渡

す。

嘗ては生徒で賑わったディアノイアにも今は何の音も響かない。溜息と共にベルヴェールの踏み込む靴の音が回廊に響き渡る。それはまるで異質な存在であるかのように……命ある物を憎むかのように反響する。

少女は眉を潜め、それから不安を掻き消すように靴音を鳴らしながら歩いた。勿論、この場所に天使が居ないことは事前に調査済みである。

「居るとしたら、亡霊って所かしらね」

彼女は幽霊や亡霊の類を基本的には信じて居ない。精霊になってしまった魂というものは存在するらしいが、それも自分の目で見て確かめたわけではない。

そう、彼女は自分の目で見た者だけを信じる性質であると言えた。わざわざ一人、仲間の反対も押し切ってこんな場所に足を踏み入れたのもそれが理由であると言える。

屋内だというのに吹き込む風は絶え間なく体温を奪い去って行く。凍りついた世界の中、白く息を吐き出す。体力の消耗は激しいが、この程度ならばまだ耐えられる。

命を迎え入れる事を拒むかのようなディアノイアの中、少女は一人靴音を鳴らす。氷を踏み砕き、吹き込み蓄積した雪に足跡を残し、凍てついた壁を蹴破って。

教室を。講堂を。倉庫を。食堂を。闘技場を。屋上を。学園の全てを。

全てを見て周り、生き残りや逃げ遅れが居ないことに安堵する。それは当然、既に二年前に破棄されて以来、ここに人が訪れた形跡はない。

それでもまだ誰かが戦っているのではないか？ まだ誰かが踏みとどまっているのではないか？ もしかしたら助けを求めているので

はないか？ 様々な思いが彼女をそう突き動かしたのだ。
御節介であると言えるであろうその感情。しかし、学園の中においてそれを発揮せずには居られなかった感傷も理解出来る。

「どつちにせよ馬鹿ね」

鼻で笑い飛ばす。最大の目的地を最後に回したのは　その感傷が原因だったのかも知れない。

目的は地下にあった。厳密には、地下のプロミネンスシステム。今も動いているのかそれとも停止してしまっているのかは判らないが、兎に角その力が必要だった。

エントランスにまで戻り、螺旋階段を見上げる。靴音を鳴らしながら凍てついた階段を昇り、学園長室であつた場所へと足を踏み入れた。

扉を開いたその先も当然のように凍てついていた。だが見ただけで直ぐに判る。プロミネンスシステムはまだ生きている。

稼働が続いている。魔力の胎動を感じる。奏操席と呼ばれた場所に歩み寄り、機械仕掛けのインターフェイスに手を伸ばす。

「……プロミネンスシステムが生きているなら、まだ　」

指先を伸ばそうとしたその時。背後に存在しないはずの足音を察知し、ベルヴェールは振り返る。

そこにはつい先ほどまで姿を見せることの無かつた番人が立っていた。全身に包帯をぐるぐると巻きつけ、素顔どころか地肌さえも全く見る事の出来ない謎の男　。

ベルヴェールは眉を潜める。まるでミイラ　成る程、亡霊の類である。無言で腰に折りたたんで格納してあつた弓を取り出し、それを構える。

「アンタ何者？　こんな所に居る時点で普通じゃないわよね」

男は答える事はしなかった。故にベルヴェールは問答無用で矢を放つ。

答えぬのならば敵。敵ならば倒す。シンプルな思考と直感的な判断を理由に攻撃を開始する。放たれた矢は魔力を帯び螺旋を描きながら男に突き刺さる。

火を噴き燃え上がる魔矢。ベルヴェールは弓を下ろし、その効果の程を見詰める。男は燃え上がり、そのまま反撃するでもなく進むでも戻るでもなく、ただ立ち尽くす。

自殺志願者？　無抵抗主義？　そんな疑問が脳裏を過ぎる。もう一撃射れば判る事だ。それで判らなければもう一度。それでハッキリさせる。

三つの矢を同時に束ねる。炎、雷、氷の魔力を込めた三種の矢を束ねて再び放つ。三色の光が渦巻きながら目標に直撃し、盛大な爆発を巻き起こす。

爆風の中、弓をゆっくりと降ろすベルヴェール。霧散した氷の結晶は霧のように室内を覆って行く。その派手な攻撃が失態であった事は直ぐに思い知らされる事となった。

光の粒を切り裂き、何かがベルヴェールに襲い掛かった。見切る事に失敗し、弓でそれを防ごうとする。しかし攻撃は容赦なく弓を両断し、ベルヴェールの肩口に深く突き刺さった。

「ぐ　っ！？」

後退する。危険な状態にあることは明らかだった。武器を失い、反撃の手段は無い。その上相手は正体不明。最悪と称してなんら問題の無い状況。

背後に弾かれるようにして跳躍する。矢尻だけがストックされたポーチに手を伸ばし、魔力をこめた宝石同然のそれを盛大にばら撒い

た。

炎、雷、風……。各々が勝って赴くままに役割を果たして魔力の嵐が巻き起こる。その騒動に乗じてベルヴェールは学園を見下ろす場所に在るエレベータへと走り出した。

地下の機関ブロックに続くそのエレベータに滑り込み、下降スイッチに手を伸ばす。その掌に何かが突き刺さり、衝撃に引き摺られるようにして少女の身体は吹き飛ばされた。

「うあつ!？」

掌を貫通したまま壁に突き刺さっていたのは黒い影だった。靄とも言える。兎に角両方の性質を併せ持つ何か。

どんなに努力してもそれを引き抜く事は出来なかった。串刺しにされた腕。正面にはヒトガタの影。ゆつくりと、歩み寄る。

ひとり、ひとりと音を立てるそれは靴の者ではなかった。素足、否その姿を目視した瞬間、背筋に悪寒が走る。見る者を呪うような禍々しい姿……。全身を影で覆われ、塗りつぶされるように真っ黒なその身体に無数の瞳が浮かび上がっている。

それら全てがまるで一つ一つ独自の意思を持つかのように蠢き、やがて息をそろえたようにぴたりと調子を合わせてベルヴェールを射抜く。

「ひ　っ!？」

男の体からは無数の手足が生えていた。左右に四本ずつ、合計八本。まるでその這い蹲る姿は蜘蛛のようだった。

口だと思われる部分から真っ赤な舌が覗く。その上には禍々しい黒い光を放つ小さな聖書の姿があった。預言^{マリシア}されし者。気づいた時には既に少女は腕を強引に引き抜いていた。

悲鳴に等しい雄叫びと共に串刺しにされた左手を強引に引き抜く。手が半分切断された状態に陥り、大量の血が白い床を染めて行く。痛みに歯を食いしばり呼吸を荒らげながらも冷静に逃げる手段を探す。男の体から生えた手足は自在に長さも形も変えて襲い掛かってくるだろう。思わず舌打ちする。

「バケモノ……ッ！」

背を向ける事は出来ない。そんな事は自殺行為以外の何者でもない。だが、どうすれば逃げられる？ 考える。痛みで鈍る思考を必至で研ぎ澄ます。

呼吸が苦しい。冷たいのか痛いのかも判らなくなりそうだった。無事な手で傷口に包帯を巻きつける。止血は充分とはいえない。だが、今はそれ以上の事は出来そうもなかった。

魔法戦に持ち込むか？ だが、魔法戦に入るよりも前に圧倒的な物理攻撃性能の前に瞬殺されかねない。舌打ちする。答えが見つからない。

やがて男は前進を始めた。考える時間ならたつぷりくれてやっただろう？ そんな意図さえ感じる。反射的にベルヴェールは宝石の格納されたポシエットに手を突っ込んだ。

しかしそれよりも早く、一瞬で影の腕がベルヴェールへと伸びる。

それは一撃で少女の喉を貫き、腕を、肩を、胸を、足を、全てを貫いて壁に磔にする。

信じられないほどあっけなく一瞬で戦闘不能になってしまった。喉を貫いた一撃のせいで熱いものがこみ上げてくる。霞む視界の中、化物が立ち上がるのが見えた。

八本の腕が乱舞する。壁に串刺しに去れたまま、ベルヴェールの身体は滅多刺しにされてしまった。意識は既になかった。目を薄っすらと開いたまま、ベルヴェールは息絶えていた。

やがて乱舞が終了し少女の死体はずるりと壁に寄りかかって崩れ落

ちる、血の池と化した景色の中、少女の体から溢れた熱がゆっくりと冷めて行くのを感じる。

散らばった宝石が血を浴びても直輝きを放つ。美しい景色だった。一つのオブジェのようでさえある。だがそれは命が燃え尽きてしまった証。直に美しさを失い、無残な死という事実だけを見る者に突きつけるだろう。

死を前に男は再び全身を包帯で覆いつくして行く。ゆっくりと丁寧に自らの腕で。そうして振り返り天井へと跳躍する。部屋の中には死体だけが残された。

美しい金色の髪が解け、毛先が血に染まって行く。吹き込む白い雪はやがて血さえも凍えさせる。魂さえも、思いさえも、その形さえも……。

空白の日（２）

夏流とゲルトが辿り着いたのはイザラキという国の中心部に存在する宮殿であった。

イザラキに移住してから一年以上を過ごしたゲルトもこの場所には近づいた事がない。しかしそれは冷静に考えてみると少々不思議な事でもある。

ゲルトたち難民となった人々を救い、住む場所や仕事の面倒まで見ているイザラキの王の姿も話も聞いた覚えがなかった。勿論、戦う事以外に興味関心が向いていなかったのも理由の一つに上げられるだろう。だがそれだけではないとも言える。

そもそもイザラキという国そのものが謎めいているのだ。結界により鎖国された島国。移動する国家……。高難易度であり魔術師でも一部の才能ある人間しか会得出来ないといわれる転送魔法を容易に扱う人々。むしろその技術力からは古代文明の名残を強く感じさせ

る。

奉龍殿と呼ばれるその場所は巨大な塔のような建造物であった。夏流は何故か迷う事無くその場所に足を踏み入れるのだが、先ほどから二人の間に会話が存在しない所為で彼の狙いがつかめないままであった。

うつかり口を滑らせてしまった直後、なんとか気を取り直して歩みを再開したものの最早ゲルトの頭の中は真っ白であった。かろうじて反射的に夏流に続いて歩いているが、夏流が何を考えているのかを想像すると怖かった。

故に真っ白。カラツポの頭のままぼんやりと奉龍殿に足を踏み入れる。意外にも内装は質素。木造作りの何てことは無い建造物である。内部には上に向かう螺旋階段が見えた。ふと思いつくようにその構造にラ・フィリアを重ね合わせる。二つの塔は外見や内装こそ違えど、形そのものは良く似ているように思えた。

そんな中、夏流は地下へ向かう階段を下りて行く。空へと続く階段に比べ、それは少々みすばらしく見えた。

石造りの古めかしい階段。実際それは地下の洞窟へと繋がっていた。湿った空気が競りあがってくる。ディアノイアの地下などにあつた遺跡とは全く性質が異なるように感じる。

階段を下りた先にあつたのは予想通り巨大な空洞であった。周囲には大地を削り水路が流れている。遙か彼方には水路が合流し波打つ海のようなものが見える。鉱石に包まれた小さな秘密の海岸……そんな印象であった。

二人の正面には巨大な垂れ幕がかかっていた。幾重にも折り重なる赤や黒や蒼、カラフルな布の向こう側にただならぬ気配を感じる。

『……………お前たちがここに来る事は判っていた……。世に満ちる同胞はお前の存在を歓迎している』

大きな声が聞こえた。しかしそれは囁くような、それでいて威厳の

ある声……。二人は同時に顔を見合わせる。

『驚くのも無理は無い……。人の身では感じ取れぬ世界の様相も在ると言うだけの事……。理解出来ぬ事を恥じる必要は無い。ただありのままに受け入れるのだ』

低い声が空洞に響き渡る。ゲルトは意味が判らずに首を傾げた。

そもそもこの声の主が王だというのだろうか。それにしてはここに来るまでにあまりにもあつさりとしすぎている。まるで警備など素通りだ。誰一人この場所に下りる二人を呼び止めることさえしなかった。

考えるとますます意味がわからなくなりそうでゲルトは考える事を止めた。夏流が自分で率先してここに来ると言い出した以上、彼には何か考えがあるのだろうか。

しかし期待とは裏腹に夏流も困惑した様子だった。それに気づき、ゲルトは冷や汗を流す。

「あの……もしかしてここに来るの、初めてですか？」

「当たり前だろう。イザラキなんか普通こないだろ」

「じゃあどうしてあんなに自信満々にここに来たんですかつ！？」

食って掛かるゲルト。夏流は苦笑を浮かべながら視線を反らす。その反らした視線の先、彼は目当ての人物を見つけて声を上げた。

「……よお、ちび子」

「ふむ、君は変わらないようだ。相も変わらずと言った様子で安心したような、不安になったような……。複雑な心境だよ、君」

二人の背後、階段を下りてくる鶴来の姿があつた。夏流は『ちび子』と彼女を呼称したが、実際の彼女は長身でゲルトよりも一回りは大きい。

長大な刀を片手に二人に歩み寄る。ゲルトも当然見覚えはあつた。しかし二人の様子はなにやら予想以上に親密そうである。

「昔の姿を知つてるとお前の成長ぶりが良く判るよ」

「これでも一応、拙者は年上なのだがね……。こちらとしては、何も知らない君とは何度か顔を合わせていたのだが」

「あー、まあそうなるんだろうな。とりあえず言つとおりここに来ただけ」

「うむ。君にしては上出来だ。さて、それではこの世界の今後について話し合つわけだが　君」

鶴来の切れ長な視線がゲルトを捕らえる。何故か背筋を伸ばして言葉を待つゲルトを見て鶴来は失笑する。

「そんなに畏まらずとも良いだろう？　君とも何度か面識はあるはずだが」

「え、ええ……。いえ、大丈夫です。話を続けてください……」

少しだけ落ち込んだ様子でおずおずと引き下がる。話の途中で判らない事があつたら後で夏流に訊こう……。そんな事を考えながら。

夏流の後ろに引つ込んだゲルトを見て鶴来は笑う。それから二人の視界、垂れ幕の前に立ち腰に片手を当てた。

「さて、まずはこの時代に無事戻れた事を祝おうか」

「まさかこつちがこんなになってるとは思わなかったからな……。鶴来が助けてくれなかったら俺もどうなってたか」

十二年前の世界。実際には十四年前なのだが、その時代から戻ってきた夏流は当然のようにパンデモニウム墜落地点に出現した。ヨトの影響もあり、兎に角元の場所、出来うるだけ元の時の流れに自然に帰還を果たす為にそれは必要な事であった。結果、夏流は突然海の中に放り込まれたのである。

慌てて海岸まで泳ぎ陸に上がるも世界は冷氣に包まれた天変地異の時代……。凍えそうな夏流の目の前に現れたのが鶴来であった。

「事前に君の出現する場所は予測が出来た事だからな。尤も、かなり長い時間君を待つ事に成ってしまったが」

「頼んだ覚えはないんだけどな」

「拙者も頼まれた覚えは無いし、覚えていた積もりも無かった。まあ……偶然の産物という事だろう」

そんな事は有り得ないとゲルトは突っ込みを入れたかったのだが、何故か二人の様子を見てると余計な茶々を入れるのは憚られた。兎に角帰還後直ぐに鶴来に救助された夏流はイザラキにやって来た。その後、この場所で合流する事を約束し一度鶴来とは別れ、ゲルトの家に向かったのである。

「勇者部隊で居場所がハッキリしているのは君だけだったからね。取り合えずという事で伝えたら、夏流は直ぐに向かってしまったら

しい」

「そうだったんですか……」

「そんな事より今はどうやってヨトをぶっ倒すかだ。大体の状況は聞いているが、これが空白の日って事なんだろう？」

「如何にも。ヨトは物理的な手段で世界を滅ぼす積もりらしい。その気になれば時を逆行させる事も可能なはずなのだが……。こればかりは本人に訊いて見ないことには判らない」

「理由はどうあれ物理的手段で世界を滅ぼすにはまだ時間がかかるんだろ？ だったらその分やり様があつてこちらとしてはありがたいが」

「ところがどうやらそう気楽にも行かないようだ」

夏流がこの世界に戻ってきた事を鶴来が察知する事が出来た様に、この世界を見下ろす存在であるヨトもまた帰還の事実を知った事だろう。

これまで物理的な手段においてのみこの世界を駆逐しようとしてきたヨトの考えは誰にも判らないのだ。夏流の帰還を契機に新たな行動を起こす可能性も充分に考えられる。

「それにどちらにせよヨトを倒したところで世界が終わってしまっている意味がないのだろうか？」

「結局猶予はそんなに無いって事か」

腕を組み、静かに呟く夏流。どちらにせよ悠長に構えている積もり

はなかったのだから問題はない。予定に変更も。

「問題はどうかやってヨトのいるリア・テイルに行くか……か」

「ちょっと待ってください！ 本当にその……リア・テイルが？」

割っては行ったゲルトの言葉に二人は同時に視線を向ける。辛い現実だが、それは特に難しい話でもなかった。

「元々リア・テイルは神の居城の一部だったと言われている。リア・テイルだけではなく、パンデモニウムやディアノイアも」

「じゃあ、操っているのはリアじゃないんですね……！？」

「それはまだなんともいえない答えだろう。だが少なくとも希望が無くなったわけではないさ」

腕を組んだまま微笑む鶴来。ゲルトはそれに頷き返す。

「ヨトはリアを生かしているはずだ。リアを殺したら目的がひっくり返るからな……。とりあえずリア・テイルに直接乗り込む手段はないのか？」

「難しい話だが、やって出来ない事はない。ただしそれには『彼の協力が必要だ』」

そうして鶴来は振り返り、垂れ幕の向こうへと視線を向ける。来客二人は同時に顔を見合わせ、それから同じく垂れ幕の向こうに目を凝らした。

そもそもこの場所は王の居るべき場所である。だとしたらやはり居

るのは王なのであろうか？　こんな岩肌が露出し放題の洞窟の中、王の居る景色が想像出来ない。

二人の想像は一瞬で碎かれる事になる。垂れ幕はどこからともなく吹いた風で捲れあがり、その向こう側に鎮座する存在が姿を現したのである。

初見、二人はそれが『蛇』であるように感じた。しかしそれは蛇などではない。巨大な、とぐろを巻いた白い『龍』。それこそが隠された声の主の正体であった。

龍は金色の瞳で二人を見下ろしている。その凄まじい威圧感に思わず息を呑む。しかし鶴来だけは龍に親しげに歩み寄り微笑んだ。

「そう怯える事はない。むしろ名誉な事だ。『彼』は人前には姿を現さないものだからね……。実際にお目にかかれる人間はごく僅かだ」

「あ、ああ……。えっと、『彼』は？」

「『彼』は『彼』だよ。名も無き精霊の王。イザラキを今まで守ってきた者だ」

精霊と呼ばれる存在が居る。

それは自然の中に存在する世界という言葉に調和する者。魔力を持ち、魔力で身体を構成し、空白なその身に意思を宿した存在。

亡霊の類である事もある。時には物に憑依することもあり、形を成して人の前に姿を現す事もある。そして時にそれは『龍』と呼ばれる。

龍は精霊の中では最高位に君臨する。自然の化身でもあり、人前には姿を現さない。自然のバランスを司り、世界を影から支える存在なのだ。

その龍さえも浸食するのが魔物の呪い。その結果を夏流も一度

体感している。呪いは全てを飲み干して掻き消して行く。それが例え、龍^{セカイ}だとしても。

『いつぞやは『我々』が世話になったようだ。暗き呪いの海に囚われし意思を解き放ってくれた事に礼を言わせてほしい……』

「あ、いや……。あの時は、ただ無我夢中に戦っただけだ。それに敵として俺たちは龍を処理した」

『それでも構わぬ。『我々』は『個にして全』……。塵に変えれば新たな命を育み世界を構築する者……。真に恐るべき物とは輪廻の停止……。死とは一時的な現象に過ぎない……』

「つまり、魔物になつてくるくらいなら死んだ方がマシってことか」

『空白の日を……。ヨトを止める事を願うと聞く……』

「ああ。あんたがその方法を知っているのか？」

『手段は至らぬ……。所詮『我々』は世界の一部に過ぎぬ塵芥……。神であるヨトを超える存在ではない』

「だが、彼らはヨトに匹敵するとも言える」

『彼』の言葉を遮り鶴来がそう口にする。続けてその根拠を説明した。

「この世界には一つの根源から二つのルーツが産み落とされた。一つはヨト、もう一つが『彼ら』だ」

想像主トウカを呼び込んだものは全くの空白。いわば世界そのものの『生まれたいと願う意思』であった。

それは願いが叶えられた瞬間に消滅し、同時に別の二つの存在へと分岐した。『想像主の代弁者』と、それとは別に世界を構成して行く『自立性』である。

人為的に想像主の願いを叶え、世界を構築する神ヨトとは異なり自立性かれらは各々勝手に世界そのものに融和する。否、彼らそのものが世界から産み落とされたのである。

世界が構成される過程で自然に発生し、この世界に存在する理を支える自立性……。この星そのものとも言える集合意識。神の意思に匹敵する、調和した自立性。

「つまり彼らにはヨトに匹敵するだけの力があるという事になる」

「そ、そうなのか！？ だったらあんたが力を貸してくれれば……」

『それは罷り通らぬ事……。『我々』は世界に手を加える事はしない。滅びると言うのであればあるがままにそれを受け入れよう。我々は世界の自立性……。この世界の総意は、運命に大して歯向かう事を望まない』

「だったらヨトの事はほうっておくっていうのか？」

『如何にも……。『我々』にとって消滅は死ではない。終焉の後も世界が残るのであればそれは世界の存続であると判断する。地上でどれだけの命が失われようとも……。『我々』は大きな変革を望まない』

「じゃあ、俺たちには手を貸さない」と

龍は静かに目を瞑る。大きく吐き出した息が三人の髪を揺らして行く。龍は暫くの間沈黙し、それからゆっくりと瞳を開いた。

『世界の紡ぎ手が目覚めようとしているのを感じる……』

「紡ぎ手……？」

『この世界を産み落とした存在が目を覚ますだろう。そうならば、この世界は彼女の意思で存在を抹消される……。『我々』は世界の防衛能力として彼女の目覚めを妨害する義務がある』

「滅びと抹消は違うのか？」

『完全なる無への回帰……。『我々』だけではなく全ての存続が赦されなくなる。全ては無かった事に……。虚幻へと姿を変えるだろう』

その言葉に夏流は静かに世界の滅亡と同時に冬香の覚醒を予感する。それはもうずっと前から判っていたことだ。出来ればそうなってしまいう前に決着をつけたかった。まだ間に合うというのであればそうしなければならない。そうする為にここに居るのだから。

『回帰を『我々』は望まない……。世界の可能性が完全に食いつぶされる事だけは拒まねば成らない』

世界なりの自衛本能に近い反応……。それが尤も世界に近い言葉だろう。だがしかし完全に彼らの正解を導き出す事は出来ない。当然夏流にも理解しきれるような事ではなかった。

『結論、『我々』は答えをお前に託す事にした……』

「……俺に？」

『お前は生み出す存在と同義……。この世界をただの虚幻ではなく現実へと昇華させた力を持つ者と同じ段位に立つ。『我々』はお前の行動に世界の可能性を委託する。故に……お前をリア・テイルへと導く事に同意した』

三人は顔を見合わせて笑う。夏流は前に進み、龍の目の前で顔を上げた。

「期待には応えられるように努力するよ」

『……『我々』はお前に期待はしない。世界の総意がお前を選んだのだ。間違いは無い……』

「そうかい。だったら俺も、賭けた事には後悔させねえよ」

夏流の言葉に龍は目を瞑る。まるでその口元が笑ったかのように見えたのは目の錯覚だったのだろうか。

三人は奉龍殿を後にする。一先ずは準備を整える必要があるだろう。奉龍殿の前の広場で鶴来が立ち止まり話を切り出した。

「さて、では決戦の前に　ヨトに勝利する為の算段をつけるとしようか」

「勝利する為の算段、ねえ……」

ふと思い返す。ヨトの圧倒的な力は夏流も実際に体験している。得体の知れない魔法に相手の魔力を消し去る能力。力をつけた今

でも正面からまともにやりあえば勝ち目は薄い。

「ヨトの力ほどの属性にも該当しない特殊な物だ。その名を『虚属性』と呼ぶ」

「虚……？」

「属性……？」

夏流とゲルトが言葉を半分にして繰り返す。二人の驚く様子を見て鶴来は歩き出した。

「詳しい話はまた後にしよう。今は兎に角足並みを整える事が必要だからな」

そう言つて止まらずに歩いて行く鶴来。二人は顔を見合わせ、それから一先ず鶴来を追い掛ける事にした……。

空白の日(3)

「丁度来客がそろそろ到着する頃合だ。どれ、このあたりに居るはずだが……」

ゲートポートまで夏流とゲルトを導いた鶴来は周囲をきよろきよろと見渡した。目当ての人物はそう苦勞する事もなく発見に至る。二人の男は何が起きたのか判らないという様子で呆然とイザラキの街を見渡していた。その二人の姿に見覚えがあり夏流とゲルトが駆け寄って行く。

「アクセル！ それに……秋斗！」

「夏流……！？ テメエ、生きてやがったのか」

四人は同時に駆け寄る。アクセルはゲルトの頭をわしわしと撫で回し、秋斗と夏流は正面から見詰め合った。

「とつくにくたばったかと思ってたぜ」

「悪かったな。生憎悪運だけは強くてな」

「素直になれよ、シュート。夏流は絶対に生きてるっていつも言ってたじゃんかよお」

「アクセル、てめ……っ！ 余計な事口走ってんじゃねえよ!!」

秋斗が文字通りアクセルにシュートを決める。思い切り蹴飛ばされ

たアクセルが吹っ飛んでいくの見送りベルトが振り返った。

「それは兎も角、どうして二人がここに……？」

「拙者が呼びつけたのだよ。アクセル・スキッドに持たせた転術符を使ってな」

水路に落ちて流れて行くアクセル。その状況から彼が実際に転術符を持ち合わせているのかは確認できなかったが、確かにそれ以外に考えられる可能性もない。

アクセルが鶴来と接触したのは数ヶ月前の事であった。その後アクセルは秋斗と共にイザラキに向かう積もりだったのだが、秋斗はアクセルに同行しようとしなかった。

仕方がなくそのまま各地を転々としていたのだがつい先ほど鶴来の強制召喚に応じてこの地に二人とも送り込まれる事と成った流れである。

勿論何も聞かされて居ない秋斗は不機嫌そうである。しかしそれでも予期せぬ夏流との再会の所為かどこか安堵したような表情に見る事も出来た。

「まだ、戦っている人……居たんですね」

「ハ……ッ！ ヨトのヤツをぶっ倒すのは救世主の役目だ。俺様はあいつを潰してリリアを取り返さなきゃならねえからな。当然だ」

「お前まだそんな事を……」

「まだ何も、俺とテメエは平行線なんだよ！ テメーこそ行き成り出てきて偉そうな口利いてんじゃねえよ！」

「はいはい、わかったわかった」

「テメツ！？　おい、何だその態度は！？　何シカトしてんだコラ
アアアアッ！！」

夏流に食って掛かる秋斗の背後から長大な太刀の鞘が頭部に直撃する。あまりの衝撃に思わず頭を抑えて膝を着く秋斗。太刀の主は腕を組んだまま溜息を漏らした。

「君は少し落ち着いてまずは話を聞こうとか考えた方がいいと思うぞ」

「……………ってんめえ！？」

「少し落ち着け秋斗。そもそもここがどこなのかとかそういう所に疑問はわからないのか？」

「はあ？　どこだっていーつつの。こんな世界どこでもおんなじだろーがよ…………ちっ」

片手をポケットに突っ込み面倒くさそうに舌打ちする秋斗。もう暴れるつもりは無くなったのか、不機嫌そうな視線で街を眺めている。

「それは兎も角、君もヨトを倒したいのだろう？」

「…………あ？　それがどうしたっつーんだよ」

「ヨトを倒す手助けをしようじゃないか。拙者ではなく　その
彼が」

そう言つて指差したのは夏流だった。まさかそう来るとは思つて居なかつた夏流は慌てた様子で秋斗を見やる。

「ヨトを倒す積もりならば救世主の力が必要になる。それがヨトの『リヴァイヴ虚幻魔法』に対抗する唯一の手段なのだよ」

「リヴァイヴ虚幻魔法……？」

その言葉には誰一人として聞き覚えはなかつた。ふと、秋斗は自らの頭の上に乗つた白いうさぎに問い掛けるような視線を向ける。うさぎは耳をぱたぱたと上下させながら鼻を鳴らした。

「虚幻魔法……それは、この世界の存在そのものに干渉する能力を持つ究極魔法」

白いうさぎ、サイファアと呼ばれるそれはか細い声でそう答えた。サイファアの発言からそれが嘘でない事を確認すると秋斗はしぶしぶ鶴来に視線を向ける。

「……その虚幻魔法つてのは、ヨトの使う魔力無効化やらあのブラツクホールみたいな球体を打ち出す魔法の事か？」

「その通り。彼女の扱う魔法は所謂七属性、火、水、雷、地、風、光、闇の何れにも属さない、七つの頂点の丁度中心部に存在する『無』を司る魔法だ。それは一撃でこの世界の存在に干渉し、存在の構築を分解して捻じ曲げ、『なかつたこと』にしてしまう」

そう聞かされただけではその恐ろしさに実感はわかなかつた。だがそれは救世主、異世界の人間以外が受けければその瞬間消滅してしまう最悪の攻撃魔法である。

虚属性と呼ばれる属性がある。それは存在するとは言われているもののその存在がどのようなものなのか詳しく解明した人間は一人も存在しない。

歴史上数々の人物がその属性の謎に迫った。しかし誰にも解き明かす事は出来ず、しかし確かにそこにある幻のような魔法属性。全ての属性の性質を併せ持ち、同時に全ての属性とは異なる能力。故にそれは虚幻と呼ばれた。^{リウファイウ}破壊と再生の魔法。存在という不確かなものに物理的に干渉する能力。それはまるで夢物語である。

「虚幻魔法の直撃を受けた人間は一撃でこの世界から存在を抹消される。命を吹き消されてしまうのだ。そうなれば全ての人間の心の中から記憶が消え去り、その人間が生きてきたという事実さえも消滅してしまう」

かつて夏流も秋斗もその攻撃を受けた事がある。その時彼らの中にあった魔力は跡形もなく消し飛んでしまった。

虚幻が飲み込む事が出来るものと出来ないもの。それが勝負の明暗を分ける切り札にも成り得る。そう、ヨトが存在を抹消できるのは『この世界の全て』……。逆に言えば、『この世界のものではない』のならばヨトの虚幻魔法は効果を発揮しない。

存在を抹消しようとする莫大なエネルギーによる物理ダメージはあれども、『存在抹消』という最強の能力は効果を発揮しないのである。つまり、虚幻魔法を受けて生存していられる可能性があるのは二人の救世主のみ。

「君たち二人だけがヨトと渡り合う事が出来る。しかしそれでもヨトは遠い存在だ。故に君たちは否が応でも手を取り合い、ヨトに立ち向かう必要があるわけだ」

二人の救世主は各々の反応を見せる。それから同時に視線を交差さ

せ、黙り込む。

「……サイファアが否定しねえって事はどうやら本当らしいな」

「俺たちはヨトを倒すという目的において一致している」

「俺様はリリアを冬香にして持ち帰る」

「俺はリリアとこの世界を空白から救う」

互いに向かい合う。その目的は違っていても、共通の敵が居る。一人ではどうしようもなかった嘗ての決戦の日。だが、最も信頼に足る『こいつ』が居れば、まだ勝利の可能性は見えてくるかもしれない。

「なら、決着は」

「ヨトを倒してからつけよう」

二人は同時に小さく笑い、それから拳を突き合わせる。

打倒ヨトのための算段がついた瞬間、水路から息も絶え絶えにアクセルがよじ登ってくる。全員同時に一瞬アクセルに振り返り、そのまま話を続けた。

「えと、ちょっと待ってください……？　じゃあ、わたしたち『この世界の存在』は、ヨトの攻撃を何か一つでも受けた瞬間……？」

「うむ、消滅するな」

「じゃあ、わたしたちは……一緒にいっても足手纏い、という事で

すか……？」

「うむ、そうなるな」

あっけなく鶴来が答えたその言葉にショックを隠せないゲルト。落ち込んだ様子で一步後退すると、その足元に迫っていたアクセルを踏みつけてしまう。

「ふぎゅっ！！」

「そんな……。それじゃあ、この世界の命運を別の世界の住人である二人に押し付けるって事じゃないですか……！」

「俺はスルー！？」

「そんなのってあんまりですっ！ わたし、絶対に一緒に行きますから！」

「勿論その積もりだ。拙者も同行するよ。ただ、出来れば早めに行動を起こしたい。早ければ今日……いや、明日にでも作戦行動を開始する」

突然の決定だった。しかし遅すぎたとも言える。二人の救世主が揃い、神への反乱の目安は浮かんだ。後は実行に移すのみ。

世界が全て消えてしまってからヨトを打倒したところで全ては遅すぎるのだ。これ以上待っている余裕はない。夏流はその言葉に納得し、小さく頷く。

「なら、明日にはリア・テイルに突入する。とりあえず今晚は作戦会議というか、行動準備って事でいいか？」

夏流の言葉に反対する人間は居なかった。だがその中でただ一人、ゲルトだけは複雑そうな表情を浮かべていた。

明日……余りにも早すぎる。心の準備が出来て居ない。ちらりと夏流の横顔を見詰める。彼の心の中はきつとりリアのことで一杯になっ
っているのだろう。それは容易に想像出来たから。

立ち上がったアクセルがいよいよ泣きそうになりながら騒ぎ出す。
二人の救世主が同時にアクセルを殴り、その姿は再び水路へと消え
て行った。そんな本当ならば懐かしんで喜ぶべき馬鹿騒ぎも今は素
直に受け入れられそうにもなかった。

空白の日（3）

「で……。全員うちに転がり込んだ、と……」

カウンター席の向こうに立ち煙草の紫煙を吐き出しながらミュリア
は呆れたように呟いた。文字通りその場に大集合となった夏流たち
はひたすらに苦笑するしかない。

転送の準備の為に一度鶴来と分かれた彼らは一晚をどこかで過ごさ
ねばならない。ミュリアの店は飲食店であって宿泊施設ではなく、
部屋もそれほど多く存在していないのだが……。

「いや、長旅のせいで腹減っちゃいました……！ てか、ゲルト
のお母さんすげえ美人っすね」

「あら、当然ね。まあ泊めてあげてもいいんだけど、生憎部屋が足
りてないわよ？」

「……俺様は別にここには泊まらねえよ？ 手を組むとは言え夏流は『敵』だからな。そんなヤツがいるところで寝られるかつつの」

「強情だなあ、シユートは」

「うつせえ！ 兎に角飯だけ食えりやそれで満足なんだよ！ クソッ！」

一人毒づいてそそくさとテーブル席に向かって行く秋斗。何だかんだいいつつきちんとテーブル席に座る当たりが微笑ましい。

四人は一つのテーブルを囲む。料理を手早くミュリアに注文するとようやく一息つく事が出来た。

ミュリアが調理を始める。その間四人は暫く無言だった。各々言いたい事はあるのだが、こうして急に顔を突き合わせる事に成るといざ何を言えいいのかわからなくなってしまふ。

「っーかさ、ナツルお前今までどこ行ってたんだ？」

水の注がれたグラスを傾けながらアクセルがあっけらかんと訊ねる。沈黙はあっさり壊された。何故か全員一瞬脱力したが、黙っていても仕方が無い。

「過去の世界に行ってそれから十年前の戦争に参加して色々あつてここにいる」

「ごめん、全部詳しく話して……。そんな嫌そうな顔すんなよ！？ 傷つくだろっ！！」

「いや、あと何回この話をすればいいのかと思ったらな……。まあいいや、丁度いいから皆聞いてくれ」

そうして夏流はゲルトに説明したのと同じ事を少しだけ丁寧に説明した。

自分が過去で経験した事　これは掻い摘んでだったが　や、ヨトの存在。さらには異世界人であるという事。

それらの事実が初耳だったのはアクセルだけで、残りの二人は再確認という意味合いが強い。兎に角驚きの連続なのはアクセルだけで、彼はそれが更に驚きだった。

「なんでお前ら別にそれが普通みたいな顔してるんだ……？」

「っーか普通だから、俺様たちは」

「わたしはもう、一通りびつくりした後なので……」

「俺だけのけ者！？　そういうの良くないと思う……！」

「というか、アクセルたちは何をしてたんだ？　俺もこつちの世界での事は人伝にしか聞いて居ないんだが……」

「ああ、そうだったな。いや、俺たちは天使が出現してからずっと連中と戦うだけの日々だよ」

天使が出現し、世界の滅亡が始まったそんなある日の事。ディアノイア学園長であるアルセリアは全ての生徒に対して出撃命令を下したのである。

世界中のありとあらゆる物と戦うようにと。各々の守りたいものを守るようにと。その最後の命令と同時にディアノイアは機能を停止し、学園都市シャングリラは無人になってしまった。

命令があるうがなかるうが、生徒たちは故郷や守るべき人の為に戦

った事だろう。だがあえて命令として受けることで彼らには共通した認識と同時に絆のようなものが生まれていた。

たとえ離れ離れになろうとも、この世界から全ての存在が消えてなくなるうとも、絆で結ばれたディアノイアの戦士たちは一人も諦める事無く最後まで立ち向かうのだと。

そのディアノイアの気概、魂のようなものはアクセルやゲルトの心を今日までずっと支えてきた。孤独でもうこれ以上戦えないという絶望的戦況にあっても、その絆が今まで彼らを突き進ませてきたのだ。

信じていられたから今まで戦ってくる事が出来た。それは学園での日々が繋げた心の成果……。そして今、それを見失いかけていたゲルトも思い出す事が出来た。一人ではないのだという事を。

「あつちやこつちや転戦だよ。でも、結構な数の人間は逃げ延びてと思うぜ？ 殆ど無人だった北方大陸の地下遺跡とかに今は大勢の人が隠れてる。レンもそこで戦ってるはずだ」

「そっか……レンとは別れたのか」

「この世界でまだどこかで戦ってるやつが居るかもしれない。助けを求めている人が居るかも知れない。そう考えたらじつとしてらんなくてさ。でもそんな旅にレンを連れて行くわけには行かなかった」

少しだけ寂しげに笑うアクセル。しかしそれでも後悔はない。

「レンはレンの戦いをしていると思う。執行者の子供たちも、新しい世界を守る為に戦ってる。皆今はきつと自分の与えられた力と役目に感謝してるさ。こうして今、こんな世界でも守る事が出来るんだからな」

アクセルがそう語った所でミュリアが注文した料理を運んできた。それは彼らにも馴染み深いクイリアダリアの郷土料理であった。湯気を立てる食欲をそそる豪華な料理の数々に思わず生唾を飲み込む男三人。長い間ろくに食事を摂っていなかった彼らにとってこれはこの上なく幸せな出来事である。

「うおおおおおっ！！ い……生きててよかったあっ！！」

「め、メシだ……！ メシが食える！！」

「ああ……。十四年前の前線には無かった郷土料理だ……」
ザックブルム

三人が同時に各々の反応を示し、同時に食事を始める。その凄まじい勢いに若干引きながらゲルトが眉を潜める。

「もう少し落ち着いて食べたらどうですか……」

三人は全くゲルトに反応しない。無視しているというよりは視界に入って居なかった。全員さくつと料理を平らげて水を飲み干して一息つく。

「……うまい！」「……」

「……若いつていいわねー。おかわりする？」

「……御願します！」「……」

三人声を揃えて即答する。アクセルは涙を流しながら笑い、秋斗も夏流もどこか遠くを眺めていた。

「……で、何の話だっけ？」

「……この二年間、貴方達は何をしていたかという話ですよ」

「あー、そうだそうだ。兎に角俺はそんな感じ。旅の途中で同じく天使と戦ってたシュートと合流して、後はずっと一緒に戦ってたよ」

「俺様は一人でも充分なんだが、こいつがどうにも離れたがらねえからな……」

二度にわたり激闘を繰り広げた二人であつたが、今ではまるでそんな事は忘れてしまったかのようでさえある。全ての国家や組織が瓦解してしまつた今、彼らが争う理由など何もないのだから当然とも言えるのだが。

しかし夏流は何となくそれが嬉しかった。その気持ちを悟られぬように視線を伏せて微笑みを隠す。

「リア・テイルには物理的には近づけねえんだよ。何だかよく判らねえが……存在の軸をずらしてるっつかよ。兎に角飛んで近づいても駄目だつたんだ」

「あー……。なんだ、お前は飛べるのか？」

「あ？　つかテメエは飛べねえのかよ。救世主なら飛べんだろが。つかパンデモニウムにも飛んで乗り移つたし俺」

「……あ、そういえばお前一人でパンデモニウムに辿り着いてたな。なんだ、飛べたのか」

二人の奇妙な会話が続く。それを中断するかのように料理が再び運

び込まれた。

「ま……ヨトさえぶつ倒せば全部が終わるんだ。後の事はどうでもいいだろ」

秋斗はそう呟き一気に食事を終える。そうして一人席を立ち、店を出て行く。

その後姿は既に語る事はないと言う突き放した様子で三人はそれを追うことをしなかった。ただ彼の言葉　これで全てが終わると言う事の意味を考えていた。

戦いが終われば世界に平和が訪れる……そんな約束は出来ない。滅びかけた世界を復興できるかどうかは人の手に委ねられている。確かにそれは難しいだろう。

だが可能性はゼロではない。それをゼロにしたいなくて、せめてその手段だけは赦されたくて、こうして今でも足掻いている。夏流は食事を終えると立ち上がる。

「少し歩いてくるよ。考えを纏めたいんだ」

そうして秋斗同様に店から出て行く。その背中を見送り悲しげに目を細めるゲルトの肩を叩いてアクセルがウィンクする。

「いいのか？　おっかけなくて」

「……それは」

「あいつ……戦いが終わったらどうするんだろうな」

ゲルトの隣に座り、小さく息を付くアクセル。答えは既に判っている。何となく……その決意の残滓を感じ取る事が出来たから。

夏流はきつと居なくなる。ヨトを倒しても倒せなくても……。ゲルトは自分が焦っている理由に気づいた。不安の意味に気づいた。また、夏流を失う事実気づいた。

「アクセルは……夏流が居なくなつて、それでいいんですか？」

「そりや嫌さ。まだまだこれから夏流と一緒にやりてえことがあるし。俺、この戦いが終わつたら学園を復興するんだ。出来れば夏流と一緒にそれをしたかった。でも……でもさ。人にはこれだけはつていう、どうしても絶対に譲れない物があるんだよな……」

「譲れない……もの……」

「そういうのを守る為に頑張る友達を応援できなかったら、それはきっと俺自身が赦せない自分だと思つから。だから俺は、夏流の決定を信じたい」

「……………わたしは」

俯くゲルトに苦笑するアクセル。それから勇気付けるように少しだけ強く背中を叩く。

「頑張れ！ たまには自分の為に我俣になつて、『譲れない物』を守ってみろ！」

そうしてゲルトの手を引いて強引に立ち上がらせると店の外にぐいぐいと押し出して行く。

戸惑いながらも外に出たゲルトに微笑みかけるアクセル。ゲルトは少しだけ迷い、その迷うを振り切るように強く頷いた。

「行ってくる　！」

「おう、行け行けっ！　メシは俺が全部食っとくから安心しな！」

「はいっ！！」

最早アクセルの言葉はゲルトには聞こえていなかった。真っ直ぐに返事を残して走り去るその背中を見送りアクセルは肩を落して溜息を漏らす。

「はあ……。ちょっとへこむわ。夏流が異世界人が……。そっかあ……」

我慢しても強がっても寂しいものは寂しかった。そんな憂鬱な気分を吹き飛ばすように頭を振って空を見上げる。

偽りの空　。　しかしいつかはそれを取り戻してみせる。たとえそこに、友が居なくとも　。

「……………いいの？」

「あ？　何がだ？」

「夏流と手を組んだ事……。ヨトを倒す事」

「他に手がねーだろ。正直、俺とお前だけじゃヨトは倒しきれないしな……………」

秋斗の頭の上から飛び降りた白いうさぎがタキシード姿の女に姿を変える。憂鬱そうな瞳で秋斗を見詰めながらサイファーは風を受け

て髪を靡かせる。

イザラキの街を見下ろす奉龍殿の屋根の上、腰掛けてぼんやりと世界を眺める秋斗の隣に膝を抱えて座り込むサイファー。無言で世界を望む秋斗へと言葉を投げかける。

「夏流は今まで二回、秋斗を裏切った」

「……ああ」

「それでも……信じるの？」

「………」

「同じ事の繰り返し……そうなるかも知れない」

「……けど、そうじゃないかも知れねえ」

斜めの屋根の上に寝転がりホルスターから引き抜いた銀色の銃を太陽の光に向けて構える。

「俺は正しい……のかもしれない。あいつが正しい……そうかもしれない。そういう可能性の一つ一つが世界の残されている事、多分それが大事なんだろう」

「………」

「別に、この世界に感傷を持つてゐるわけじゃねーよ。こんな世界いくら滅んだってかまいやしねえ……。でも俺は、せめてこの世界の中で納得の行くエンディングを向かえてえんだ」

全て自分自身の為に行動してきた。でもその心のどこかで願っていた。『今よりもっといい未来はなかったのか』　？　誰もがそう願うように、願いは例外なく彼の胸にも去来する。

だがそれに一人では答えが出せなかった。何度も世界を繰り返した。自分なりに真実に近づき、それをもぎ取るうとしたつもりだった。それでも忘れられないものがある。如月秋斗の物語は『やり直し』の物語であつたと言えるだろう。長い長い時の旅もサイファーという相棒と共に乗り越えてきた。

だが今彼は今までにない未来に遭遇しようとしている。新しい可能性が開けようとしている。悔しく受け入れがたい事ではあるが、それはきつと夏流によつて齎されたのだと確信している。

否。彼もそう願っているのだ。そう在つてほしいと。彼の存在が世界に向かい合つた時、全ての歯車がかみ合つて動き出したのだと。気づけば何故か笑っている自分が居て小さく溜息を漏らした。

「……ありがとな、サイファー」

「……？」

「お前がいてくれたから今まで戦つてこられた」

「……………珍しく素直」

「茶化すなよ。お前には本当に感謝してるんだからな」

この世界に秋斗を召喚した監視者^{ゲイザー}。サイファーと呼ばれたその神はいつになく素直な秋斗を見詰める。

「お前がいなかったら俺はこつちの世界にも来られなかった。あいつが死んだ理由も知らず、あのまま俺は納得できねえまま生きてた

かもしれない。そう考えればお前には感謝しても足りないさ」

「……本当に、良いの？」

「なんだよ。まだいいのか？」

「……………彼にも監視者^{ゲイザー}が付いてる。ヨトと通じているかもしれない」

「だとしても、それでも構わない。それならそれで俺があいつをぶっ倒しておいしい所は全部もらって行っただけだ」

「……………」

いつに無く不安を露にするサイファー。秋斗は身体を起こし銀色の銃をホルスターに収めて白きゲイザーの手を握り締める。

「……………ありがとな」

その笑顔に最早サイファーは何もいう事が出来なくなっていた。だからその時彼女は彼に忠告する事を忘れていたのだ。大切な、たった一言を。

結果彼に訪れる事になる不幸について、いかに神の一人といえども彼女は知る事はない。ただ流れる時の中、小さく頷いて秋斗を見詰めていた。

「……………何を見ているんですか？」

ゲルトが涙を流していた人気の無い海辺。砂浜に足跡を残しながら

立ち尽くしていた夏流に背後から声がかかる。

少年はゆっくりと振り返った。ゲルトと夏流は対峙する。各々の思いを抱えて。

夏流の握り締めた砂が風に舞う。掌を開いた瞬間全ては美しく散って行く。その景色を眺めながら夏流は小さく呟いた。

「……この世界の事が大好きだった」

『だった』。過去形になってしまった言葉に胸が締め付けられる思いだった。そう、どちらも。

終わりが刻一刻と近づいている。ゲルトは夏流の隣に歩み寄り、共に海を眺めた。

「……そうですね」

沢山の伝えたい言葉があった。利己的な自分の気持ちがあった。

しかしその全てをゲルトは伝えないままにすることにした。言葉を飲み干し、想いは消化し様。忘れる事はきつと出来ないだろう。だが、忘れずに居られればきつと乗り越えていける。

我慢しようとしても悲しくて、それでも涙を見せる事はしなかった。海を眺める夏流は以前よりずっとすっきりした表情で笑うから。胸が詰まって言葉を失う。

そうして二人は何をするでもなく暫く海を眺めていた。それが二人の間に刻まれた最後の思い出になった。

翌日、決戦の日。リア・テイルへと向かう彼らに、運命の悪戯が襲いかかるうとしていた。

空白の日(3)(後書き)

くそれゆけ！ ディアノイア劇場Z

酔っ払いながら小説書くのは止めましょう

リリア「びえええええんっ！！」

ゲルト「ど、どうしたんですか急に……」

リリア「虚幻のディアノイアが終わっちゃうようー！！」

ゲルト「そうですねえ……」

リリア「しくしく……。連載が終わったらもう皆ともお別れなんだよう〜」

ゲルト「でももう100部ですし、いい加減終わつたいた方が良く気がしますよね」

リリア「うん……。文字数とかちょっと怖くて直視できなくなりつつあるよね」

ゲルト「空白の日も残すところあと三部！ 思い返すと色々な事がありましたね」

リリア「だから、最初のほのぼのムードはどこいったのっていう」

ゲルト「それはもう……いいじゃないですか……」

リリア「いい加減ロボット書きたいよね」

ゲルト「それもいいでしょうもう」

リリア「うう……！ この変なコーナーももう終わっちゃうんだよ
うううー！ 寂しいよーーうー！」

ゲルト「泣かないで下さいよ……。なんだかわたしまで泣きたくな
ってしまっじゃないですか……」

リリア「しくしく……」

ゲルト「……」

空白の日（４）

「救世主……ですか」

天空に隔絶された領域がある。神のみぞ知る絶対空間に侵入しようとする何者かの感覚にヨトは目を瞑ったまま振り返る。

ヨトの立つ祭壇から見下ろす世界は長い長い階段と通路だけが空間に浮かぶ不思議な世界だった。白く輝く光の回廊。闇の中にぽつかりと浮かび上がるその世界の最果て、ヨトは侵入者を待ち受ける。

侵入を妨害する事も可能である。だがそれはあえてしようとしなかった。完璧を望む神としては余りにも愚かな選択。しかし、それがヨトの願いであつた。

仮に己の願いが打倒されるべき邪なものであるのなら、救世主の刃はヨトの胸を貫く事だろう。だが、その救世主というこの世界の物ではない存在を打倒した時、彼女の願いは肯定される。

誰にではなく、自分自身でそれを肯定する為に。来るならば来い。救世主が相手ならば、願いの真偽は託される。世界の命運を分けるに足る一戦。

胸の前で十字を切り祈りを捧げる。どうかこの聖戦を見守っていて欲しい。願いを叶える為に。見届けてもらいたい。そう、この世界そのものに。

振り返る。結晶の中に閉じ込められたままのリリアが静かに目を開く。結晶に亀裂が走る。目覚めの時はもう間もなく。

彼女が目覚めた時、世界の道筋は決定されていなければ成らない。考えるまでも無い。世界の安定を妨害する存在を除外する。ヨトは振り返り、天に手を伸ばした。

「さあ、訪れなさい……。この世界の話をしましよう。我が百万の

祈りと願いを用いて、わたくしは救世主あなたを除外する　」

地上、イザラキの奉龍殿には既に夏流たちの姿が揃っていた。

夏流、秋斗の二名の救世主を軸にアクセル、鶴来、そしてゲルトをサポートに据えての特殊編成部隊　。

しかし、世界の命運を分ける決戦にしては余りにも戦力不足である。不安を隠さずに疑問を口にする夏流に鶴来は転術符を取り出して答えた。

「今から二年前、リリア・ライトフィールドには一度だけ会った事があってね」

それは物語の始まり直後。勇者と剣士は邂逅を果たした。それは偶然ではなく、意図された物……。

「その時にリリアには転術符を渡してある。彼女はそれをどうやら大事にきちんと持ち歩いてくれていたようだね」

リリア・ライトフィールドがお守りとして……というより、それは最早彼女の意地に近いものであったのだが、兎に角その転術符はアクセサリとして転用され今もリリアの肌に触れている。

転術符は所持者に転送魔法の能力を与える他、所持者の元へ転送する為のマーキングにも成り得る。鶴来の渡した転術符は特殊なものでこの世界上である限りは常に効果を発揮し続ける物であった。

「場所ならばはっきりしている。即座に拠点に乗り込む事が出来るのだから、長期戦にはなるまい」

「天使の類なら俺たちが相手をするからお前たちはヨトにだけ集中していればいい。サクッと倒してサクッと転術符で戻ってくりゃい

「いんだろ？」

「そういう事ですね。では、勇者部隊全員とは行きませんでしたか」

「ああ。行こう、皆！」

全員の武器を中央で重ね合わせる。音が鳴り響き決戦の火蓋は切つて落された。

奉龍殿内部、彼らの出発を待っていた『彼ら』の元へと移動する。地下の洞窟では既に準備が終えられ大地に巨大な転送魔法陣が浮かび上がっていた。

ヨトの居る領域へと足を踏み入れるためには彼らの力が必要になる。つまり、神の領域に足を踏み入れる許可を得ねばならないのだ。

『準備は万端か……？』

「ああ、宜しく頼む」

『……では、転送を開始する。『我々』はお前たちの健闘を祈る……』

龍の魔力が魔方阵を輝かせる。次の瞬間には救世主たちの姿は奉龍殿のどこにも存在していなかった。

光の中を夏流は突き進んでいた。白い白い、闇の世界。そこには何もない。虚無の空間。世界がやがて辿る結末の全て。

そこから目を反らさない。やると決めたのだ。救いたいと願った。その結末はそれだけで投げ出せない。自分の手で掴み取らねば意味がない。

かつて少年は間違いを繰り返してきた。あやふやな存在のまま世界

と向き合うことを恐れてきた。しかし今闇と向き合い己の心の赴くままに戦いへと望もうとしている。

光の粒が落ちて行く少年の肌に触れる。落ちているのか昇っているのかも判らない。ただただ流されていく。風はなかった。しかし、何か大きな流れに身体が突き動かされている。

世界中の全ての人々の願いや悲しみが胸に去来する。それは幻想なのか、或いは。光の彼方、扉のようなものが見える。それは決して扉ではない。しかし、それを両手で解き放った時。人は世界の限界を超え神の領域へと足を踏み入れた。

小さく、しかし確かに響き渡る足音。顔を上げる夏流の前には闇の中に浮かび上がる白い回廊が見えていた。壁は存在しない。故にその道がどこまでもどこまでも上へと続いている事が良く判った。

振り返る。仲間の姿は確かにそこにあつた。全員と視線を交わし、少年は振り返る事を止める。

「行くぞッ!」

返事はなかった。ただ揃えられた足音だけが世界の最果てに響き渡っていた。

空白の日（４）

雪の降り続けるディアノイアの中、アイオーンは静かに息を付く。冷たく凍えた窓ガラスに触れる。人の温もりは冷たさを溶かして行く。白い息を吐き出しながら女は空を見上げていた。

天空に続く白い回廊が見える。それは常人には見えざる領域。しかし、神の力を持つ存在であるアイオーンの目には確かに触れていた。

「……いよいよ、全てが終わり……そして始まってしまっ」

その眩きは憂鬱さに包まれていた。そう、アイオーンはこんな結末は望んでいなかった。しかし世界の声は、この世界の現実は何度でもアイオーンを裏切ってきた。

そう、何度でも何度でも……。そしてその中の現実には自らの全てを失い、解けてしまった自我は最早意味を成さない。

生きているだけの木偶人形。彼女は自らをそう称する事に何のためらいも持たない。涙は流さなかった。ただ祈るように空を見上げる。

「夏流……。君は今も、君のままなのかい？」

振り返ったアイオーンの視線の先、壁に打ち付けられたまま死に絶えているベルヴェールの姿がある。血は凍りつき、肉体も魂も存在も凍てついてしまったかのようにその死体は腐敗する気配を見せなかった。

まるで美しい一つのオブジェのようであえある。その死体の前には包帯を全身に巻いた男が立っていた。彼は振り返るわけでも何をすることもなく、ただアイオーンの視界の中で蠢く。

不気味なその姿に溜息を漏らし、しかしそれ以上アイオーンは何もしようとはしなかった。包帯男とアイオーンの利害は一致している。争う必要性は存在しない。

身体を抱きしめるようにしてアイオーンは目を瞑った。現実から目を反らした。もう、物語を見届ける事は出来ない。

世界が終わる音が聞こえる。滅亡の足音は、もう直ぐ傍に。

「流石は神の城だけあって、天使の護衛もちゃんとあるんだな……！」

十二の刀剣を操り近づいてくる天使たちを次々に迎撃して行くアクセル。足場は狭く、およそ5メートルほどの幅しか存在しない。延々と続く回廊を駆け抜けながら最前線でアクセルは剣を振るっていた。

翼を持ち飛翔する天使たちは空を縦横無尽に駆け回り魔法での遠距離攻撃や空中からの奇襲を繰り返している。近づいてくれば迎撃も出来るのだが、立ち止まっている余裕はない。

遠距離の敵は秋斗が撃墜し、近づく敵は順次各々迎撃するという特殊なフォーメーションで回廊を駆け抜ける。一体どれだけの時間を走っているのか、そもそも時間という概念が存在するのが怪しくなってくる。

その場所は非常に不安定だ。時の流れも無く、まさに永遠を体現したかのような世界……。どこまでもどこまでも走り抜けてもリア・テイルは見えてこない。神の居城など、幻のようなもの。

それでも信じて走るのなら道は開ける……夏流はそう信じていた。彼らの周囲を跳びまわるアクセルの剣が魔法を弾き返す自由行動する壁となり結界を張っている。彼らは無事、一人として怪我の一つも負っていないかった。

「まったく、数だけはいぜ……！」

「ぼやくなよ秋斗。もう少しだ」

「あ？ 何がもう少しなんだよ。全然先なんか見えてこねえじゃねえか」

「この空間に距離や時間や早さは関係ない。恐らくは信じる心があれば直ぐにでも神に辿り着けるだろうな」

「……という事は、誰か信じてない人がいるってことですか？」

全員の視線が秋斗に向けられる。その居心地の悪さに思わず青ざめた笑いを浮かべ、それから仲間に銃口を向けそうになる。

そんな秋斗を背後から叩き、諫める鶴来。全くその剣の動きが見えなかった秋斗は疲れた表情で立ち止まり目を瞑った。

「わーったよ、くそっ！！ 信じりゃいいんだろ、信じりゃあー！！」

「そうそう、素直が一番だぜ？」

「貴方も救世主なら少しは協力してください！」

「て、てめえら……。ここぞとばかりに言いたい放題言いやがって……っ！！」

「秋斗！ 早くしてくれ！ このままじゃあ体力が持たない！」

「……………がああああっ！！ 信じる信じる信じる信じる……………ッ」

一人で立ち止まりぶつぶつ呟き続ける秋斗。その秋斗をカバーするように残りの四人が円陣を組む。

しかし、辿り着ける事を信じると言われてもそれをどうすればいいのかは秋斗には判らなかった。一先ず頭の中にシンプルな構図を思い描いてみる。

ヨトを倒す秋斗。ヨトは土下座をして秋斗に命乞いをする。その自分のいい構図の中、何故か夏流が納得して秋斗の配下に下った。

そしてリリアは実は冬香でハッピーエンド……自分でも気持ち悪い妄想に発展してしまった。余りにも子供染みた夢に思わず苦笑しながら目を開くと。

「あん？」

そこはつい先ほどまで彼らが走り続けていた回廊ではなくなっていた。リア・テイル　その入り口に彼らはいつの間にか辿り着いていたのである。

或いは元々この場所に居たのか。それに気づかなかっただけで。何はともあれ侵入に成功した五人は各々乱れた呼吸を正しながら状況を確認する。

そこは白い白い空間だった。不浄の世界　。穢れを知らず、美しさを体現し続ける無垢なる空間。空気さえも澄んでいる気がして自分たちの存在は世界に現れた穢れのような考えさえ浮かぶ。

「リア・テイル……。本当にここが、最後の……」

ゲルトが呟き周囲を見渡す。そこは無人の居城。かつては彼らも何度も出入りした、クイリアダリアの象徴そのもの。

この場所が決戦の場所選ばれたというのであれば、それは皮肉であろう。ゲルトは自らの胸元に手を当て辛そうに視線を落した。

「で、ヨトのヤツは何処にいやがるんだよ。速攻ぶっ潰してやる」

「えーと？　まあ普通に考えて、こういうのは玉座か謁見の間か……二択って感じじゃないかね」

「ヨトなら謁見の間だろうな。あいつは俺たちを待っている気がする」

夏流の一言に全員が顔色を変えた。そんな気は確かにしていた。だがそれはつまり神が万全の準備を整えて待ち構えている事を意味する。

「はは……。今更だけど、俺たち伝説の神様と戦おうとしてるんだよな……。神話上の人物とバトるとか、正直想像わかねー……」

「……そうですね。ヨト神は、わたしたちにとっては当たり前のように身近な存在でしたから……。まさか、世界を産み落とした神が滅びを望んでいるなんて……」

鶴来は何も言わずに二人を見やる。夏流や秋斗のような異世界人にとつてはただの虚幻の神だが、彼らにとつては真実の神……。世界を産み落とした全ての存在の頂点なのである。

世界を滅ぼそうとしていたとしてもそれが神であることに違いは無い。むしろその滅びが神の決定打というのであれば、それは裁きである。神の采配に逆らうべきではない……。そうも考えられる。

だがそれでも二人は迷いを振り切っていた。もしも神様が世界の存続を赦してくれなくても。否。この世界の誰かに赦しなんて乞わなくても。

自分たちが続けたい、自分たちで選びたい未来がある。その為に罪を背負う覚悟ならば決めねばならない。生きる事は、罪と罰を繰り返す事でもある。

「……行こうぜ。真実を知る人間として、この世界の人間として……。出来る事を今やるんだ！」

「たとえ誰かに語り継がれる事が無い戦いだとしても……。わたしはそれでも、リリアを救いたい」

「……よし、行こう。何があってもヨトを倒す！」

たとえこの中の誰かが欠ける事に成ろうとも。

救世主たちは走り出す。謁見の間を目指し……。目的地へと進む道の途中、それを阻むように回廊には無数の異形の姿があった。それらは全てが黒い影に飲み込まれた悪意そのもの。預言^{マリ}されし者と呼ばれた怪物たちが救世主の行く手を阻んでいた。

「マリシア……！？ 神の尖兵つて所か！」

「見覚えのあるマリシアも居ますね……。彼らの魂はまだ、ここに囚われたままという事ですか」

斧を振り上げて迫るミノタウロス。翼を広げて紅蓮の炎を撒き散らすフェニックス。化物が同時に襲い掛かる中、夏流たちは武器を構えて迎撃に移ろうとしていた。

しかし次の瞬間、マリシアの動きが静止した。チリンと鈴の音が静かに響き、直後マリシアは細切れになって通路に霧散していた。何が起きたのかと全員が驚いている中、鶴来が長大な刀を肩に乗せ前に出る。その刀には先ほどのマリシアを切り裂いた血痕が残されていた。

「マリシアの相手は拙者が。君たちはヨトの元へ向かいたまえ」

「……鶴来」

「彼らの相手なら慣れている。それに拙者は……この決戦に關与すべき人間ではない」

この戦いが、世界というものが一つの物語だとすれば。鶴来の出番はとつくの昔に終わりを迎えている。

十四年前のあの日、彼女の戦いは終わりを告げた。今だ彷徨う勇者の末裔たちの全てが既に戦いを終えている。そう、神に抗うも世界

の未来を望むも全ては子供たちの世界。

「神に抗い、未来を得るのは我々ではない。大人ではなく、子供なのだ。君たちが勝利すべき相手はこんな雑魚ではない。君たちは無傷でヨトと対峙し、それを打倒せねば意味がない。故に拙者の出番はここまでだ」

長大な剣を片手で構え、その刀身に指先をなぞらせる。今までの鶴来とは違う、英雄と呼ばれた力を持つ達人の気配が空間を支配して行く。

鋭い視線で射抜かれたマリシアたちは思考することを赦されないその身に恐怖を刻む。化物、魔物をひたすらに討伐し続けてきた狩人を前に彼らは余りにも哀れな獲物に過ぎない。

「拙者はな、少年たち。この世界がどうなっても別段構わないのさ。イザラキの人間というのは得てしてそういうものでね……。世界が滅んでも、イザラキだけは存続を赦される。あの国は箱舟なのさ」

世界の全てが真っ白に飲み込まれても、イザラキだけは存続し続ける。永遠にして幻想の国。彼らの国が古代技術を用いたまま存在する事も、ヨトの手で滅ぼされない事にも意味がある。

全てが真っ白になってしまった時、始まりの人間を輩出するのはイザラキなのだ。神のよって選定された人間の子孫によって成り立つ神に順ずる存在の国……。それこそがイザラキの存在意義。

「だがな、拙者にも見たい物というのは存在するのだよ。例えば世界の人間の行く先や……。そうだな。物語の続きと言ってもいい」

今度こそ、世界は救われるのだろうか。それは鶴来には判らない事

だ。

イザラキという国の中で何度も繰り返されてきた歴史。彼らが観測し続けてきた人間たち。世界の流れ。それらを管理する事は出来ない。

世界は遷ろう物なのだ。神にも人にも予測は出来ない。犇き蠢くその一見すれば醜悪で目が回りそうな可能性こそ、世界と同義なのだから。

「拙者も『彼ら』と気持ちは同じだ。故に君たちに託す。過去の尻拭いは任されよう。君たちは未来を切り開け　！」

「……ああ。ここは任せるぞ、鶴来」

「……………承知」

目を瞑り微笑む鶴来。彼女が太刀を奮うと風が渦巻きマリシアたちを吹き飛ばして道を作って行く。

「往け！　己の戦いをする為に！」

「お前こそヨトを倒す世紀の瞬間に乗り遅れるなよ！　待つてるからな……………！」

四人が走り去って行くのを見送り鶴来は一瞬でマリシアを素通りして夏流たちの背中を守るように道を遮って剣を構える。

正面には蠢くマリシアの群像……。しかし女は全く恐れる事も無く、呼吸をするように剣に命を賭ける。

「……………そうだな。最後の最後、おいしい所は見させてもらおうか。それまで君たちの相手は拙者だ」

剣を構える。風が渦巻く。長い髪を風に舞わせながら鶴来は鋭い瞳を見開き静かに告げた。

「イザラキ龍王、八代鶴来……。いざ、参る！」

鶴来を置いて走り抜ける夏流たちの耳にも戦いの音が聞こえてくる。一瞬不安になる心を殺し、今はただ前だけを見る。

やがて見えた謁見の間へと続く扉を四人で同時に開け放つ。その先に広がっているはずの広間は存在せず、そこには光の祭壇があった。白い闇の回廊へと戻ってきてしまった彼らの背後にはただ扉だけが浮かんでいる。先ほどまで彼らが走ってきた通路の姿は影も形もない。

しかし今は振り返らなかった。階段を駆け上り。広々とした祭壇に立つヨトに駆け寄る。その背後では結晶に閉じ込められたリリアが眠っていた。

「リリアッ!!」

「生きてた……！ リリアはやっぱり、生きてたんですね……！」

「当たり前だろ！ リリアちゃんはなんだかんだで実は結構世渡り上手なんだよ！」

「テメエら、リリアが無事なのはわかったが問題はその手前にいるヤツだろが」

秋斗の言葉で三人は気を引き締める。目を瞑ったままのヨトは何も告げずにただ俯いたままその場に立ち尽くしている。神々しい光に包まれたヨトの存在に思わず息を呑む。それは紛れも

無く本物の神。人の形を持ち、同時に人を超越した存在。

白く輝く髪、そしてその服装もどこかリリアの姿を彷彿とさせる。

それもその筈、彼女は始まりの人間でもあるのだから。

世界が生まれる意思を体現した彼女のベースとなったのはやはり冬香なのだ。その姿がリリアと似通っているのは当然とも言える。改めてヨトと対峙し、夏流は悲しげに目を細めた。

「ヨト……」

「……来てしまったのですね、救世主。わたくしは悲しい……。どうして貴方達はこの世界の新たな始まりを祝福してくれないのですか……？」

「何が新しい始まりだ……。っ！ ヨト！ 俺たちの世界を、お前の気まぐれでどうにかさせてたまるかっ！！」

「わたしたちはまだこの世界で生きていたい……。叶えたい夢や、願いがある！ 皆未来がほしいんですっ！ 滅びや正しい道なんて、誰も望んでいませんっ！！」

「……それは、貴方達の我侭です」

ヨトが小さく呟く。そうして女はゆつくりと瞳を開いた。虹色に輝く瞳で人間を見詰め、ヨトは言葉を続けた。

「わたくしはもう、人間の世界を導く事に疲れてしまいました……。貴方達はいつになっても進歩しない。正しい未来を選ぼうとしない。争う事がまるで宿命であるかのように、危機として命を奪い合う……。世界は狂っています。混沌の息吹が大地を焼き、天さえも焦がそうとしている……」

「俺たちは確かに、間違ったり擦れ違ったりしてばかりだった。戦ってばかりで……。でも、それでもこうしてここにいる！」

「わたしも彼も、そして彼らも……。今までわたしたちが戦ってきたその全てが、無駄だったとは思いません」

振り返り、ゲルトは夏流を見詰める。そう、後悔はしても無かった事になんてしようとは思わない。痛みが前へと歩ませてくれる。正しい道を選ぶ力になる。

「だからっ！ たとえ世界が混沌でも！ 痛みを忘れてはいけな
んです！！ 悲しみも苦しみも、それを引き摺って進まねば意味が
ないから！」

「……貴方達も、彼女と同じ事を言うのですね」
ロギア

その言葉に彼らは少なからず衝撃を受けていた。しかし夏流と秋斗だけは落ち着いた様子でヨトの言葉に耳を傾ける。

「彼女は、いずれ訪れる空白リ・ヴァースの日に備え、世界を一つにしようとして
いました……。それは確かに崇高で美しい願いでしょう。しかし
それが齎した結末は、無尽蔵に増幅し続ける悪意の連鎖と戦火の炎
……」

「え……？ そ、それじゃあ……あの戦争は……？」

「今はその事は考えるな。兎に角目先の事を片付けるぞ」

背後からの夏流の言葉ではっとする。夏流は一番前に進み、ヨトと

対峙する。

神と救世主の視線が衝突する。ヨトは悲しげに、しかし喜びを浮かべる。微笑みと共に胸に手を当て、そうして言葉を紡いだ。

「世界を超え、時を超え……。世界を壊しに來たのですね……。？」
救世主、夏流　　」

「もうやめろ、ヨト。俺はお前と戦いたくない。お前がそんな事をしなくても、人間は明日に進んでいける。」

「でも、それでは設計図通りではなくなってしまう……。予定と異なってしまう……。わたくしは……。ただ、恐ろしいのです……。」

目を瞑り、苦しそうに喉元に爪を立てる。まるで喘ぐようにしてヨトは狂気染みた、怯えたような瞳で笑う。

「世界は人の悪意に満ちている……。その全てが世界を焼いてしまふのではないか……。？　わたくしの祈った平和な世界は、わたくしが守ろうとした人間の手で滅ぼされるのではないか……。？　それは、裏切りではありませんか？　不安なのです。わたくしの愛しい愛しいこの世界が……。わたくしを裏切るっ！！」

空に叫んだ。それは今までのヨトの落ち着いた儂い声色とは違っていた。ヒステリックな、今にも壊れてしまいそうなガラスのような声。

「怖い、怖い、怖い　　！　誰でもいいからわたくしを導いてほしい……。！　正解を教えて欲しい……。！　ただ、それだけなのです！　愛する世界が捻れて歪んで燃えてしまうくらいなら、わたくしはその世界を自らの手で壊し続ける……。」

「……………お前」

「わたくしは間違っているのですか！？ それとも正しいのですかっ！？ 誰でもいい、答えてくれれば！ わたくしの言葉に、頷いてくれれば……っ！ なのに、貴方達は何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も邪魔をするッ……！」

「違う！ 間違いか正解かなんて誰にも判らないっ！ お前は自分の目で世界を見ようとして居ないだけだ！ 俺たちは間違えて進んで行く……！ この世界で俺はそれを知ったんだ！ 間違っ事を恐れて、それで何もしなかったらお前は俺と同じだっ……！」

正しい事だけを選びたかった。間違えたくなかった。後悔しなくなかった。

だから世界を突き放した。彼女を突き放した。それは同じこと。己を恐れる心……。恐怖と罪悪感と絶望と、全てを一つの器に注いで書き混せて生み出された悪意とも混沌とも言える感情。

しかしその全ては恐怖と保身に根差している。人の心になればあつて当然のほの暗い想いの影……。夏流はそれと向き合う事をこの世界で学んだ。

だがもしもそれを知らないままならば、今でも瞳を閉ざして世界と向き合う事をしようとはしなかっただろう。痛みを見詰めた時、本当の心に気づく。世界の可能性に気づく。傷つきながらも進める明日が見える。

「もうやめるんだ、ヨト……ッ！ 誰かの言葉を待っているだけじゃ、何も解決しない！ 痛みと向き合って生きるんだ！」

「いや……っ！ わたしはそんな、痛みなんて知りたくない……！」

悲しみも絶望も……見たくない！ 見ないに越した事はないのだから……。そんなもの、無ければいいのだから……。！」

神の虹の瞳が救世主を睨みつける。夏流はそれに仕方が無く拳を構えて応えた。

「貴方がまたわたくしの大切な大切な彼女を奪うというのであれば……わたくしは神として貴方の存在を否定する！ 在るべき世界に還りなさい！ 全てを虚幻に委ねるのです！！ 救世主 ……！！」

ヨトが光の翼を広げて舞い上がる。白い光の粒が降り注ぐ中、夏流たちは武器を構えた。

「どうしてそうやって自分の事しか考えられないんだ……！ 否定を繰り返しているだけでは何も肯定することなんて出来やしないっ！！ 恐れているだけでは前には進めないんだッ……！！」

「黙りなさい！ 貴方は この世界から消えてしまえばいいっ！！」

ヨトの掌に魔力が収束する。天に翳した手は虚無の空間から光の弾丸を降り注がせる。膨大な魔法の雨を前に夏流は片足を大地にたたきつけて応えた。

大地から一瞬で空間全てに迸る電撃の嵐が全てを掻き消して行く。炸裂する光の乱舞の中、少年は静かに顔を上げた。

「消えるのは俺たちでも世界でもない……。消えるのは、ヨト！ お前の歪んだ願いだっ……！！」

最後の戦いが始まろうとしていた。

救世主と神の終焉

。二つの影は今、確かに交わろうとしていた。

空白の日（5）

ヨトの魔法が全て掻き消された瞬間、既に彼女は次の行動へと移っていた。

並の物理攻撃も魔法攻撃も今の救世主には通用しない。切り札は虚^リ幻魔法　！　掌から無数に放たれる泡のような雫のような黒い光がふわりふわりと夏流たちに襲い掛かる。

しかし次の瞬間泡は全て銀色の弾丸で撃ち抜かれていた。撃墜された闇の向こう、無数の剣を纏ったアクセルが襲い掛かる。

「うおおおおおおッ！！」

指と指の間に剣を挟み、両手に六つの剣を構えてアクセルは斬りかかる。流れるような動作から連続でヨトに襲い掛かり、飛翔していたヨトは大地に落された。

翼を羽ばたかせ大地への直撃を回避するヨト。上空で剣を投げ放つアクセルの一撃を結界で防御し、反撃に黒い閃光がアクセルに襲い掛かる。

光線のような消滅の波動を空中で剣を蹴って飛ぶことで回避し、アクセルは着地する。そのアクセルの着地を狙おうと腕を伸ばしたヨトの目の前に既にゲルトの姿があった。

両手に構えた魔剣の二刀流で交互に攻撃を繰り返す。ヨトは全てを自らの周囲に展開する結界で防御していた。次元の断層を生み出し不可侵領域を生み出す虚^リ幻結界　。ゲルトの魔剣はその結界に遮られていた。

ヨトが身体を楽に構えると全身から無数の閃光が放たれる。剣山のように全身から光を放つその一撃を受け、ゲルトの姿が消滅していく。

「……幻？」

ヨトが消滅させたゲルトの影が消え去って行く。本物のゲルト・シユヴァインは遙か後方に既に待避を済ませていた。

追撃しようとするヨトに秋斗の弾幕が襲い掛かる。銀色の弾丸が次々に撃ち込まれ、結界が軋む。

「ヨトオオオオオツ！！」

夏流が拳を構えてヨトに駆け寄る。消滅の球体が放たれるがそれらは秋斗の攻撃で相殺されていく。

援護を受けヨトまで辿り着いた夏流の蹴りが結界に鋭く減り込んだ。罅割れて軋み、ぐらりと揺れる存在次元。反撃の一撃を正面から拳で打ち抜き、夏流の一撃はヨトの結界を木っ端微塵に砕いた。

「……行ける！ 倒せない敵じゃない……！！」

ヨトの反撃を受けた夏流の腕は一時的に魔力を失い防御も攻撃も不能な状態に陥っていた。しかし膨大な魔力を引き換えに物理ダメージを相殺する事に成功する。

それがゲルトやアクセルであれば既に消滅していただろう。しかし救世主なら。渡り合う事が出来る。世界を消す力を相手にしたとしても。引けをとる事はない……。

「貴方達は……自分が何をしているのか判っているのですか！？」

「判ってるさ！」

「それでも ツー！！」

ゲルトが手首を自ら切り裂く。噴出す血は空中で光に変わり、アクセルの十二の剣に付与されていく。

渦巻く漆黒は魔力の剣を構成する。アクセルは空中に飛び上がり、十二の剣を一気に投擲する。

魔法剣と成ったそれらはヨトの結界をずたずたに引き裂き、ヨトの体へと突き刺さって行く。体中に剣を刺され、女神は苦痛に表情をゆがめた。

「テメエの御託なんざ誰も聞きたかあねえんだよッ！！　ボケエッ！！」

「俺たちは　ッ！！　自分の歩く道くらいッ！　自分で見つけられるッ！！　俺たちは　ッ！　同じ道を手を取り合って歩いていくんだッ！！」

秋斗が銃弾を連射しながら駆け寄る。同時に夏流も秋斗の隣を走り、拳に魔力を収束する。

二人はどちらからとも無く同時に魔力を一点集中させる。夏流は拳に。秋斗は二つの拳銃を正面であわせ、その銃口に。

金と銀の魔力が一気に膨れ上がって行く。極限まで練りこまれた魔力の一撃が放たれ、二つ混ざり合い螺旋を描きながらヨトに直撃する。

耳を劈くような轟音と爆発。電撃が空間に迸り、あちこちに拡散する。直撃を受けたヨトは美しいドレスをボロボロに焦がし、ふらつく足取りで何とか倒れる事を拒絶していた。

「わた、くしは……。倒れる、わけには……。世界は……。わたくしが……。守り……。続け……。なくては……」

確かな手ごたえに二人の救世主は武器を降ろした。しかし、それにしては妙な違和感がある。

以前戦闘した時は確かに不意打ちであつた事もあり、油断もあつた。今回は二年の月日を経て二人とも大きく力をつけたし、迷いも油断も無い。

だがそれにしてもヨトの力が余りにも弱弱しく感じられたのだ。それが杞憂であると自分に言い聞かせ、二人の救世主は前に出る。

「さあ、とつとりリアを返してもらうぜ」

「もうやめるヨト……。こんな事をしたって何にもならない」

美しく整っていた髪も今や解けて顔にかかっている。ヨトは虚ろな表情で前のめりに前進する。

「わた、くしは……。世界を……。まも……。る……。っ」

身体がよろめき、ヨトの身体がぐらりと揺らぐ。何故か夏流はその身体を支えていた。

血を流し、今にも力尽きてしまいそうな神……。夏流はそつとその身体を抱きしめた。ヨトはゆっくりと顔を上げ、夏流の瞳を覗き込む。

「あんたが守らなくなつていいんだ、世界は……。その責任の全てをあんたが背負う必要はない。世界は……。あんたを含め、全ての人間の手で紡がれる物だから」

「……………」

「おい夏流！ テメエ何してんだ！？ そいつから離れる！ 忘れ

たのか、テメエ全身めちゃくちゃにされて殺されかけたんだろうが
っ!!」

「夏流……」

「落ち着けて！ 確かにヨトは認めらんないけど……。でも俺に
だってヨトが頑張ってた事は判るぜ？ 倒さなくて済むなら、それ
に越した事はないじゃん」

「……確かに、彼女はもう既に戦闘できるような状態ではありません
ん。これ以上は、ただの集団暴行です」

「チ……ッ」

舌打ちし、秋斗は腕を組んで背を向けた。ゲルトはヨトを警戒しな
がら息を呑む。アクセルも出来ればこれで終わってくれる事を望ん
でいた。

「……あんたの気持ちは、良く判るよ。俺も、あんたと同じだった
から……。俺も、自分を信じられず……。未来を信じられず……。傷
つく事を恐れて、全てから逃げていた」

目を瞑れば直ぐに思い出せる過去の日々。そう、もしも彼がかつて
勇気を胸に抱いた少年であつたならば。この世界は、うまれていな
かったのかもしれない。

この世界は、こんなにも歪まなかったのかもしれない。それは最早
結果論であり、多くの偶然が作用する未来のことなど誰にも確かに
語る事は出来ない。

だがそれでも、信じて前に進もうと……。後悔しない道を選ぼうと。
そう胸を張れたのなら……。未来は違ったかも知れない。

「今でも後悔してる。これからもずっとそうだ。この痛みも、悲しみも消える事はない……。でもだからこそ、俺は同じ事を繰り返さない。繰り返さないって誓えるんだ。それは、この痛みがくれた勇氣だから」

「…………痛みが…………勇氣…………？」

「目を瞑って居ないで、もっと世界を自分の目で見るんだ。あんたには世界がどう映っているのか判らない。俺はあんたにはなれないから……。でも、言葉を交わして分かり合う事は出来る。諦めないでくれ、ヨト。こんな最果てに一人引きこもってたら、見える物も見えないから」

ヨトはゆっくりと瞳を開く。虹色の瞳に救世主を映して。

それから暫くの間、ずっと夏流を見詰めていた。そうしてまるで瞳のその姿を焼き付けたかのように、満足げに瞳を閉じて微笑む。

「…………わたくしは、一人では無かったのですね？」

「あんたは神様なんかじゃない。ただ少し特別なだけの人間だ。変わってるけど、一人じゃない。言葉は通じるし、思いは重ねられる。だから、一人じゃない」

「……………」

ヨトは何かを迷っているように見えた。だが少なくとも戦意はなくなったように思える。そうして全員が安堵し戦いの決着を確信したその時。

世界に亀裂が走る。空間が捻れる。全ての法則が歪む。世界の在り

方を根本から否定するような強い悪意。結晶が、砕ける音が響き渡った。

全員同時に視線をリリアへと向ける。そこには瞳を開き、結晶の中で動き出そうとするリリアの姿があった。ヨトが微笑み、涙を流しながらリリアを見詰める。

「……………ああ。目覚めたんですね 冬香」

その言葉を契機に世界が逆転する。光の回廊は黒く染まり、重苦しい空気が場を支配した。

あまりの威圧感に誰もが身動きもとれず、呼吸さえも忘れた。全員の視線が収束する中、かつてリリアと呼ばれていた少女が黒い翼を広げて大地に降り立つ。

舞い散る漆黒の光が世界に降り注ぐ。まるで生まれたばかりの存在が光を浴びて命を確かめるかのように、ゆっくりと。静かに息を吸い、少女は光の中で瞳を開いた。

「冬香……」

リリアは聖剣を携えたまま一直線に夏流へと歩み寄る。その動作から誰も目を反らす事が出来ずにいた。金縛りにあったかのように、時間が静止したかのように、全員がただ彼女の一拳一動に目を見張る。やがて夏流の傍まで歩み寄ったリリアはにつこりと微笑み、そうして懐かしい声色で囁いた。

「久しぶりだね。なっちゃん」

それと同時に聖剣がヨトの胸に深々と突き刺さっていた。

「え？　どう、して……？」

夏流に支えられた状態のまま、ヨトはそっとリリアに手を伸ばす。ヨトに頬を撫でられながらリリアは目を細め冷たい笑顔で囁いた。

「私を殺してくれたお礼。まだ、してなかったから」

「わたくしは……やはり、間違っていたのですね……」

「うん。こんな世界はね。元々全部、間違えているんだよ?」

ヨトの身体が燃え上がる。白い炎に焼かれ、神は大地に倒れた。めらめらと燃え上がる炎を間に救世主と想像主は対峙する。

「そうでしょ? ね、夏流」

そう、懐かしい……声色と共に。

空白の日(5)

「リリア……? リリア……なんですよね?」

「そうだよ、ゲルトちゃん。でも、そうじゃないとも言えるかな?」

二年の月日を経て成長したリリアの横顔はかつてのマリアによく似ている。夏流はそんな事を考えながらもそれが間違った思想である事を自覚した。

リリア・ライトフィールドでも、リリア・ウトピシュトナでも、ロ

ギアでもないその表情……。声……。落ち着き払った様子。同じ姿形をしていても、それがリリアであるとは思えなかった。本城冬香という人間がかつて存在した。彼女は現実の世界では命を落とした。既に彼女は这个世界のどこにも存在しない。だが、この世界の神が記録した冬香の心と記憶は確かに存在する。それは今勇者の少女の心の中に芽生え、全てを塗りつぶしてしまっていた。もう、そこに立っているのはリリアではなかった。その事実がどうしようもなく受け止められない。

「助けに来てくれたんでしょ？　ありがとね。でもね、ゲルトちゃん。別に、助けて欲しいなんて頼んだ覚えはないんだけどな？」

「ゲルト、避けるッ！！」

夏流の叫び声に弾かれるようにしてゲルトが魔剣を構える。目の前に一瞬で移動していたリリアの神剣の一撃を何とか受け止め、齒軋りしながら顔を突きつける。

「貴方は　ッ！！　リリアじゃないッ！！」

「リリアだよ。ううん、リリア、でもある……。かな？　でもね、ゲルトちゃんには前々から死んでもらおうと思ってたから丁度いいしそろそろ死んでもらおうかと思って」

「な　ッ！？」

ガードの上から凄まじい腕力でゲルトを弾き飛ばすリリア。背丈が伸び、攻撃のリーチも腕力も存分に成長を遂げている。長大な聖剣を片手に構え、リリアは風に長髪を揺らしながら微笑む。

「止めるリリア！！ 何をやってんだッ！！」

叫びながらリリアに跳びかかるうとする夏流の前に秋斗が立ち塞がる。二人は正面からつかみ合い、にらみ合う。

「邪魔をするなッ！！ 秋斗ッ！！」

「勘違いしてんじゃねえよ！！ 目論見通りリリアは冬香になったんだ、テメエこそ俺様の邪魔をするんじゃねえ！！」

取っ組み合いになる二人にリリアが放った魔法が迫る。白い光の弾丸がヨトの放つ虚幻魔法と同じものであると気づいた時、二人は咄嗟に身体を離して回避に成功した。

互いにバランスを崩しながら纏れる足取りで何とか停止する。リリアは神剣を肩に乗せたまま片手で連続で魔法を放つ。

「お、おいっ！？ 俺たちまで見境なしかっ！？」

「止めるリリアッ！！ 何やってんだ、お前はっ！？」

「二人ともうるさいよ……？ 昔からくだらない事で喧嘩してたけど、いよいよ本当にくだらない喧嘩だね」

「何だと……！？」

「秋斗はストーカーすぎ。正直キモいよ……？ 異世界にまで追い掛けられてウザいっただらありやしないし。夏流もさ、いい加減お兄ちゃん面はやめたら？ 結局何も救えないし、守れない……。夏流はいっつも逃げてばっっかり。この ヘタレ」

剣を構えたリリアが跳躍する。上空から振り下ろされた神剣の一撃が大地を砕き、残骸が二人に襲い掛かる。遮られた視界を突きリリアの蹴りが秋斗に突き刺さる。

派手に吹き飛ばされた秋斗が大地を転がる間、既にリリアは夏流との戦闘を開始していた。凄まじい勢いで繰り出される神剣をしのぎ、しかし夏流に反撃する様子はなかった。

「冬香……本当に冬香なのか!？」

「そうだよ、なっちゃん……。でも、そんな関係ないでしょ？
なっちゃんは『リリア』からも『冬香』からも逃げ出したじゃない」

思わずはつとする。そう、それは紛れも無い事実だった。

リリアはずっと夏流の傍に居た。夏流に強く依存していたとも言える。裏切られたくないと、信じたいと、少女はいつでも夏流を見詰めていた。

それはある意味では歪み、捻れ、曲がった心だったのかも知れない。それでも少女は真っ直ぐであろうと努力を続けた。必至に前に進むと足掻いた。

夏流に思いを伝えようとした。傍に居たいと願っていた。だが、夏流はそれを気づいていて見ないフリをした。『好き』だという言葉に、何一つ向かい合おうとはしなかった。

純粹な好意に対し、夏流の態度が誠実であつたとはお世辞にも言えない。それは自覚している。結果、リリアは夏流のその歪んだ態度を『正解』にする為に、早足で世界を一つにしようとしていた。

全ては夏流の為に。夏流に忘れられる為に。夏流が居なくなってしまう世界で、彼が心配せずに澄む為に……。

「でも……」

それが寂しくないはずがなかった。たかだか十五の少女であつたりリアにそんな覚悟が決められるはずもない。

それも判つていたのに。全部判つていたのに。同じ事を繰り返していた。二度、大切な人を傷つけていた。傷つきたくないから。自分を守りたいから。そうやって、いつでも逃げていた。

「リリアが気づいて居ないとも思つてた……？ 私はとても賢いの。貴方がそうやっていつも責任や愛情から逃れようとしている事は全部お見通しなの。貴方はリリアを見捨てたんだよ？ リリアを一人、闇の中に突き落とした。」

「　　ッ！！」

神剣の一撃が夏流を吹き飛ばす。倒れる夏流に追い討ちを賭けるように虚幻魔法の一撃が放たれる。眩い閃光の矢を魔力を振り絞つて受けた夏流ではあつたが、その身は一撃でズタズタにされてしまった。

魔力や存在といったものが蒸発して煙を巻き上げる。夏流はいよいよ立つてゐる事もままなくなり背後に大きく倒れ込んだ。

「り、リリアちゃん……！？ どうしちゃったんだよ！ 夏流がわかんないのかっ！？」

アクセルの叫びを遮つたのはゲルトだった。魔剣でリリアへと斬りかかるその動作は確実に殺意を湛えている。連続で剣と剣がぶつかり合い、ゲルトは夏流を庇うように躍り出る。

「アクセル・スキッド！ 彼女はリリアではありません！」

「リリアだよ？ リリアとしての記憶も、冬香としての記憶もある

もの。だから『私』は『私』なの」

「そんなものは詭弁です……！ リリアを返して！ リリアを返してください ツー！！」

交じり合う白と黒。二つの勇者のシルエットが何度もぶつかり合い、甲高い金属音が鳴り響く。

「楽しいね、ゲルトちゃん。覚えてる？ 昔もこうして 殺しあつたよねえっ！！」

魔力を込めた神剣の一撃を魔剣で受け止める。受け流したはずなのに衝撃が腕に走り、激痛と共にその威力を物語る。

リリアの力と神剣の力が共鳴し、破壊力は凄まじい程に跳ね上がった。確かにそう、かつて同じように剣を交えた。学園の傍の、誰も居ない草原で。

思い返す。あの日は雨が降っていた。冷たく悲しい心のうちのまま、擦れ違つたままりリアとぶつかり合った。全力を出し、リリアを下した。あの時は悲しかった。でも戦いが終われば心は晴れた。

なのに今は心が晴れる気がしなかった。リリアはもうどこにも居ない気がした。どうしようもなく悲しくなり、涙が浮かぶ。しかしそれは視界を遮り戦いを左右するから涙を流さぬように心を研ぎ澄ます。

「無駄なんだよゲルトちゃん！！ ゲルトちゃんが『リリア』に勝てるわけがないでしょう……？ 貴方は所詮、勇者としては出来損ない……っ！ 選ばれなかった勇者なんだからっ！！」

「出来損ないでも選ばれない勇者でもいい！ わたしはくだらない事にばかり拘つてきた！ でも、リリア……！！ それが貴方の言葉

だなんてわたしは思わない!!」

「ふーん……。でもねゲルトちゃん、君は大概ヘタレなんだよ。それこそ夏流さんと肩を並べるくらいのだへたれッ!! 何でもかんでも『リリア』の所為にして、君は自分じゃあ何にしようとしないうじゃないっ!!」

二対の魔剣の片方が弾き飛ばされる。隙に容赦なく剣に魔力を込めて思い切り振り下ろすリリア。回避には成功したものの、魔力の余波でゲルトの胸は深々と切りつけられていた。

「勇者とか騎士とかそんなこと関係ないのに、君はいつつも『リリア』『リリア』……。友達思い？ 違うよね？ 君は自分じゃ夢を追う事も出来ない弱虫だから！ 自分ひとりじゃ何も信じられないからっ!! だから他人をダシにつかって自分で手に入れた気になつて浸る！ 力も地位も名声も！ 全部君のものなんかじゃないんだよ！」

大量の血を噴出し、傷口を片手で抑えながらゲルトは後退する。噴出した血は黒く腕のようにうねり空中を舞う剣を受け取り主の下へと送り届ける。

傷口から溢れた血を刀身に塗りつけ魔力を込める。二対の剣は魔力と血を帯びて巨大化し真紅の大剣へと姿を変える。ゲルトが瞳を閉じて深々と息をつく。次の瞬間開かれた瞳は真紅、血を零したような赤に染まっていた。

「あ　　っははははははっ!!」

リリアが大地に神剣を突き刺し両手を広げる。少女の翼から無数の鎖が放たれてゲルトに迫る。

強力な行動阻害の術式を刻まれた封印魔法の全てを血の剣の乱舞で捻じ伏せてゲルトは跳躍する。上空から二対の大剣をリリアに叩き付けるが、リリアは翼でそれを受け止めてしまう。

「本当は勇者とかどうでもよかったんでしょ……？　ただ、『リリア』がやっているからやってるだけ。夏流さんの事だつてそう。『リリア』が好きになったから君も好きになる……。本当の気持ちなんて何処にもない」

「確かにそうかも知れない……。でも、貴方にそんな事を言われる筋合いはないッ……！」

翼で防がれた魔剣をありつたけの力で振り下ろす。翼を貫き引き裂いて大地に突き刺さった魔剣を視界に捕らえ、リリアは驚いたように目を丸くする。

「お前はリリアじゃない！　リリアにそういわれるのならわたしは納得できる！　でもお前は……！　リリアの心を覗き込んでいるだけのただの影だッ……！　リリアの心を汚すような行いは　断じて赦せないッ……！」

「信じるの？　『リリア』を……？」

「　　信じている。今も昔も、これから……。彼女の心を、言葉を、思いの全てを　　！　わたしは全肯定するッ……！　リリアの全てを受け入れるッ……！　お前のような存在が、わたしたちの間に割って入れるなんて思うなああああああああッ……！！」

剣を斜めにクロスさせてリリアを吹き飛ばす。翼でそれを受けたり

リアではあったが、翼には確かに傷跡が残っていた。真剣を振るい、リリアは不機嫌そうに眉を潜めた。既にゲルトはpeesを乱し、肩で息をしている。様子を窺っていたアクセルがゲルトと共に並び剣を構えた。

「なんだかよくわかんねえけど、お前がリリアちゃんじゃないって事だけはわかった。リリアちゃんはとっても優しい子なんだ。自分の身を犠牲にしたって大切な物を守る子だ。お前はリリアちゃんとは違う……。出会っていたのがお前だったなら、俺はここには立って居なかった」

アクセルの言葉にゲルトもはっとした。そう、もしも出会っていたのが『この』リリアだったなら。そうだ。きつとこんなに苦しくはならないのだろう。

そう、もっともつと自分は歪んだままで……。だから、それはそれでよかったのかもしれない。残酷な運命でさえ、素直に受け入れられたから。

「戦うつもりなの？ 『リリア』と」

「貴方のようなものに『リリア』の心が汚されてしまうくらいなら。わたしは、『リリア』を壊しても構わない」

「それは自分に対する言い訳でしょ？」

「ええ。それでも……。それでもっ！ 自分の手を汚してエゴを抱えてでも！ わたしたちは生き続けるんですッ！！」

「傲慢な命。本当に自分勝手だね。でも、丁度いいよ。壊しちゃいたいくらい、ムカツク！」

リリアの周辺に同時に^{リヴァイウ}虚幻魔法の球体が渦を巻く。周囲を高速で旋回し、炸裂する閃光は散弾のようにありとあらゆる場所に拡散し、全てを消し去って行く。

消滅の渦から身をかわす方法は存在しなかった。二人がそれに飲み込まれそうに成った時。鋭く大地を走る雷の光が二人を守っていた。

「夏流……」

「……リリア。お前の言うとおりだ。冬香……。お前の言う通りだ。俺は、ヘタレだった。馬鹿だった。どうしようもなく、ビビりだった……」

リリアを前に夏流は傷だらけで立ち上がった。そうしてリリアへと一歩ずつ歩み寄って行く。

「俺はいつもお前たちから逃げていた。そうやって自分の身を守っていたんだ。全部俺が間違えていた。全部俺が犯した罪だ。だからお前を責めるつもりはない。でも……！」

目を瞑る。後悔ばかりの日々を繰り返してきた。ならばいっそもう、笑えるくらい全てに向き合って……。

「それでもお前が好きなんだ！ 好きだ！！ 愛してるッ！！ もう、お前を離したくない！ お前が何を考えていても！ 俺をどう思っけていてもいい！ それでもいいから、聞いてくれ！！」

突然の夏流の行動に戸惑っていた。リリアは瞳を揺らしながら後退する。

「お前が好きなんだ！」

「……………」

「好きだー！」

「……………いや」

「愛してる、リリアー！」

「……………いやっ！」

「ずっと傍に居て欲しい！ 冬香！」

「いやあああああっ！？」

頭を抱えて悶え苦しむリリア。その全身から魔力が放出される。在ろう事が夏流はそれを両手を広げて全くの無防備な状態で受け止めたのである。

派手に吹き飛び全身から血飛沫を巻き上げながら大地を転がる夏流。彼の転がった後には血を引き摺ったような血痕が残り、リリアは呼吸を大きく乱しながら頭を抱えて苦しんでいた。

「いまさらになって……！ いまさらっ！ そんな事を ……！ 都合のいい事をおおおおおおっ！！！！！」

「 …… なんだ。ヘタレなのは貴方だって同じじゃないですか」

ゲルトの声が響き渡る。前髪の合間、リリアの震える瞳がゲルトを

見据えていた。

少女は剣を携えたまま前に出る。そうしてリリアと対峙する。足を止めずに近づいて行く。リリアは怯えるようにして後退し、剣を構えた。

「来るな……」

切っ先が震えている。迷いが浮かんだ剣筋にゲルトは小さく微笑んだ。

「言いたい事言いたいように言ってくれたけどね、リリア……。貴方だって結局恐れていたんでしょ？ 我俣を言って夏流に嫌われるのを。貴方は信じて居ないのよ。夏流の事も、世界の事も……！」

血の結晶が生み出す二対の剣。その柄を合わせて頭上で振り回す。二対の大剣は一つの巨大な両剣へと姿を変えていた。ゲルトはそれを長物の扱い方で振り回し、リリアに突きつける。

「助けて欲しいなら。助けてって叫ぶ努力を怠ってはいけない。貴方は信じる事を恐れてそれを放棄した。偉そうに全ての罪を他人に押し付けるな　ッ！！」

「あ……　ああああああああつ！！」

神剣を滅茶苦茶に振り回しゲルトに襲い掛かるリリア。ゲルトは落ち着き払った様子でその攻撃の全てを受け流す。

毎度踊るような動きには全く無駄というものが存在しない。その動作、心、力の全ては嘗ての全盛期の勇者、ゲイン・シュヴァインに見劣りする事も無い。

まさに貫禄のある勇者の戦いを繰り広げようとしていた。一方のリ

リアは取り乱し、心を揺らしたままでの乱雑な動作。まさに、十四年前の再来のように。

リアの剣がゲルトを貫く。しかしそれは幻影だった。血のように赤い薔薇の花が舞い散り、渦巻く華の中でリアは視界を失い戸惑う。

その身体に四方八方から連続で剣戟が襲い掛かった。反応し何とか防御しようとするもののおいつかない。体中を切り刻まれながらもヨトと同じ結界で防御を続ける。

「貴方は　わたしの最高の友達。一番だつて胸を張って言える、最高の仲間……。だからそんな貴方に、手加減なんてしてあげられない　！」

花卉の渦が吹き消されていく。ゲルトは両剣を高速で回転させていた。血の結晶と花卉が舞う中、ゲルトは剣を回転させながら突撃する。

「だから　ッ！！　わたしが貴方の目を覚まして見せるッ！！　わたしが道に迷った時に貴方が傍に居てくれたように！！　わたしが貴方を　！　導いてみせるッ！！」

「う……あああああッ！！」

リアの叫びと共に反撃が繰り出される。しかしゲルトの螺旋はそれを押し切り、リアの剣を吹き飛ばして体ごと突進して行く。

メイルシュートローム
「渦巻く闇の花卉　！」

黒と赤の竜巻はリアの身体を遙か上空へと弾き飛ばす。ゲルトは血の剣を屈折させ自らの傷口に手を当てて血と魔力を強力に練りこ

んだ刃を構築する。

魔力の弦を張り、まるで両剣を弓に見立てて構える。血と魔力と魂とその思いの全てを練りこんだ真紅の矢を構え、思い切り弓を引き絞る！

「漆黒魔法剣

メキドエディンシア

！ 射抜く極光

サジタリウス

ッ！！」

浮かび上がった魔方陣を突き抜けるように矢が放たれた瞬間、黒い極光が世界を照らし上げた。

光の速さで放たれた矢は空中に投げ出されたリリアの次元結界を一撃で粉碎し、その身体を射抜く。空中で炸裂して降り注ぐ薔薇の花弁を静かに見詰めながらゲルトは剣を二対に戻した。

頭から地上に落ちてきたリリアはびくりとも動かなかった。ただ血溜まりだけが広がって行く中、ゲルトは両手から剣を落してリリアを抱き起こす。

リリアは気を失っていた。その傷だらけの身体に回復魔法をかけながらゲルトはきつく唇を噛み締めた。

気づけば涙が溢れていた。涙の雫はもう留まる事は無く、ぽろぽろとリリアの頬へと零れ落ちて行く。

ぎゅうつと強くリリアを抱きしめる。大切な大切な友達。もう、全ての言葉は意味を成さない。

後悔や懺悔など無意味になってしまった。もう、後戻りなど出来ないのだから。救えたはずのリリアを、傍に居たのに救えなかったのは自分だから。

涙を流しながらリリアを見詰めるゲルトの背後、ボロボロになった夏流が立っていた。夏流はゲルトごとリリアを抱き寄せると額から血を流したまま優しく微笑んだ。

「弱くても、間違っていて……まだ、これからだ。俺たちは何度だって、新しい道を歩いていける。新しい心を交えていける……」

「……リリア、お願い……。わたしたちの話を聞いて」

「俺はリリアを愛してる」

「わたしもリリアを愛してる」

「だから」

リリアがゆつくりと瞼を開く。虚ろな表情で、しかしその頬を涙が伝った。リリアは二人の姿を見つめ、何も言わずに涙を流し続けた。悔しそうに歯を食いしばり、肩を震わせて。

戦いは終わった。もう、何もかもが終わったのだ。そしてこれから新しく始めていける。リリアを抱きかかえて夏流は立ち上がった。目を瞑って涙を流し続けるリリアに苦笑し、少年は振り返る。

秋斗は大地に座り込んだまま項垂れてぴくりとも動かなかった。それは彼が死んでしまったからではなく、この状況にどうすればいいのかわからなくなっている証拠であった。

そんな秋斗にアクセルが歩み寄り、手を差し伸べる。秋斗は無言でアクセルの手を借りて立ち上がり、夏流へと歩み寄る。

「……夏流、俺は……」

「……いいんだ。これから戻って三人で話をしよう。それで……喧嘩になるかもしれない。でも、それでも……話をしよう。何度でも、何回でも……」

秋斗はそれに応えなかった。ただ目を瞑り、眉を潜める。戦いが終わった。ゲルトは二人のその様子を眺め、微笑み……。そして。

「あつ」

小さく声をあげ、ゲルトは二人の救世主を突き飛ばしていた。二人が何事かとゲルトに視線を向けた瞬間、高速で飛来した何かがゲルトの真横を突き抜けて行った。

全員が沈黙する中、遙か彼方で轟音が響き渡った。全員の視線が音の方に向けられる。そこには3メートルを超える巨大な剣が柱に突き刺さっていた。

遅れて何かが大地に転がり落ちた。夏流の目の前に転がっていたのは、ゲルトの腕だった。

それを認識するよりも早く、ゲルトが夏流に覆いかぶさる。何かが閃光し、爆発の連続がゲルトの身体を蹂躪して吹き飛ばしていた。滅茶苦茶に傷ついて大地に転がるゲルトを見て夏流は顔を上げる。そこには居るはずのない人物が、あるはずのない力で立ち尽くしていた。

巨大な鎧の騎士。アルセリアは二人の救世主の前に立ち見下ろしている。そのアルセリアの背後、槍を携えたアイオーンが彼らを見詰めている。

「……………今、撃ったのはあんたか……………？ アイオーン……………」

アイオーンは答えない。それが答えでもあった。

「どう、して……………」

震える声で問い掛ける。アイオーンは黙って目を瞑り、視線を反らすかのように顔を背けた。

「どうしてだよ……………。何でだよ……………ッ！……………！ 答えるよおおおおおおおおおおッ！……………」

戦いは終わったはずだった。
ただ、夏流の悲痛な叫びだけが神の空間に響き渡っていた。

空白の日(6)

主を失い、神の領域は消滅の時を迎えようとしていた。

本来ならば夏流と秋斗を狙って放たれたアルセリアとアイオーンの一撃であったが、それはゲルトによって妨害されてしまった。揺れる世界の中、二人は夏流たちをただ無言で見詰め続ける。

「アイオーン……！ アルセリア……ッ！ 何のつもりだ！ どうして撃ったッ！？」

『ヨトは消え、神の寄り代であるリリアも貴方達は退けた。もう救世主になすべき事は残されていません。故に、退場を願っただけの事です』

「アルセリア……お前……ッ！！」

「どけっ！ 夏流！！！」

夏流に声をかけると同時に秋斗が閃光の弾丸を放つ。無数の光線のような一撃をアルセリアは片手で弾き飛ばし、投げはなつた剣に魔力を込めて吸い寄せる。

長大な剣を手にとるとアルセリアは背を向けた。アイオーンの下まで戻ると、その足元に転送魔方陣が浮かび上がる。

「待て！！ アルセリア！！ アルセリアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

二人の姿を追い掛けようとする夏流の肩を掴み、アクセルが静止す

る。世界の崩落は加速し、神殿のあちこちが虚無の空間へと崩れ始めていた。

アルセリアとアイオン、その影は転送魔法の発動と同時に消えてなくなってしまう。夏流は強く齒軋りし、それから振り返った。

「……撤退するぞ。秋斗、リリアを頼むッ!!」

「お、おい!? うお、投げんなッ!!」

戸惑う秋斗の背中にリリアを投げつけ夏流は倒れたゲルトに駆け寄った。

ゲルトは見るも無残な姿で倒れていた。全く動く気配の無いゲルトの姿に悪寒が走る。思わず肩を掴んで強く身体を揺さぶった。

「ゲルト……! おい、ゲルトッ!!」

「……………ッ」

「しつかりしろ!! これから撤退するから……! イザラキに戻るから……………」

ゲルトの身体を背負い、転がっていた彼女の腕を拾い上げて夏流は駆け出した。落ちていた魔剣や神剣を拾い、遅れてアクセルも走り出す。

虚空に浮かぶ扉を開くとリア・テイルへと続く道が姿を現した。来た道を戻りながら走る夏流たちの前、主と行き場を失ったマリシアたちが暴れ狂っている。

「俺が足止めする!! お前たちは駆け抜けるッア!! 時間がないんだ、急げ!!」

アクセルが叫ぶと同時に神剣でマリシアたちを斬り倒して行く。遠距離から銃弾を連射して突き進む秋斗に続き、ゲルトを背負ったまま夏流は走り続ける。

「くそ……！ どうしてこんな事に……っ！！」

ぼやきながら走る夏流たちの目の前、鶴来と別れた場所……。そこには山のように積もったマリシアの死骸とそこに突き刺さったままの太刀、そしてその傍らに倒れた鶴来の姿があった。

鶴来は全く動かなかった。息絶えていた。体中にマリシアの攻撃を受け、ぴくりとも動かない。夏流は歯を食いしばり、鶴来の太刀を魔物の山から引き抜いて駆け出した。

「くそお……！ くそ、くそ……っ！！ くそおおおおおおおっ！！！！！」

夥しい数のマリシアや天使の襲撃を受け、それでも夏流は無我夢中で走り続けた。永遠にも等しく続く光の回廊に出ると必至で元の世界に戻る事を祈り続けた。

すぐ背後では崩落を続ける大地と迫り来る天使の軍勢……。最早思考することは出来なかった。生き残る。絶対に生きて帰る。ただそれだけを考え続けた。

息も絶え絶えに傷だらけの身体に鞭を打って三人は走り続ける。その背中で揺られながらゲルトはゆっくりと瞼を開いた。

「ナツ……ル……」

「大丈夫か！？ 気がついたんだな！？」

「……はい。傷口は、止血してあります……。でも、身動きが取れそうに……ありません」

「そんな事は気にするな！　こういう時はお互い様だろ……！　お前がこうなつてなければ俺と秋斗が死んでたんだ！　恩返しくらい、させてくれよ　！」

「……そう、ですね……。ふふ、恩返し、ですか……。悪くない、です……」

「兎に角戻ってからだ……。！　生きて帰ってから……。！　絶対に、戻るんだ……！」

夏流の背中では少女が思っていたよりもとても大きかった。暖かくて、揺られていると心地よくて眠りについてしまいそうになる。

ふと、目が覚めたまま少女は夢を見た。夢というよりは過去を思い返したという方が近い表現かも知れない。兎に角ゲルトは決戦の前日の夜……。よりもよって大嫌いな母親との会話を思い出していた。

それは、決戦の前日。既に仲間たちは各々寝静まり、ゲルトは一人で誰も居なくなった店のカウンターに座っていた。考えていたのは未来の事。そして、過去の事……。

「……まだ起きてたのね」

階段の方から声が聞こえてゲルトは顔を上げた。そこには眠たげな様子で階段を下りてくる母ミユリアの姿があった。

普段ならそれだけで部屋に戻ってしまうのだが、何故かゲルトはその日に限ってそうしようとは思わなかった。ミユリアは無言で自分の分とゲルトの分のコーヒーを淹れ、カップをゲルトに差し出した。

「眠れないの？」

「……………はい」

一口コーヒーを口に含んでそれがミルクと砂糖をたっぷり入れたゲルト用のものであることに気づく。母はそんな所まで自分を見ていたのかと、ふとそんな事を考えた。

ミュリアは立ったまま静かにコーヒーを口にする。白い湯気だけが闇の中に浮かび上がる。殆ど照明は落され、カウンターだけが照らされる小さな明かりの中ゲルトは顔を上げた。

「明日の戦いを考えたら……………どうにも眠れそうになくて」

「怖いのか？」

「……………かもしれません」

いつになく素直にそんな言葉が口から出るのは恐らく夏流との再会のお陰だと思った。

彼と再び出会えて心に勇気を取り戻せた。すっきりとした気持ちで世界を向き合えるようになった。少しだけ嬉しくて、寂しくて、苦しい現実…………。甘いコーヒーで飲み干してしまえたらいいのにと考えた。

「やめちゃいなさいよ」

ミュリアの言葉に顔を上げる。

「戦いなんて……………意味がないわ」

その言葉の真意にもっと早く気づく事が出来たなら、ゲルトの人生は違ったのかも知れない。

ミュリアの持つカップは小刻みに震えていた。それを見てゲルトは初めて母が自分を心配してくれていた事に気づいた。

身体を震わせ、それでも懸命に強がってゲルトに心配をかけまいとしている母の姿を見て思わず小さく笑いを零してしまった。自分と母は良く似ている。だからきつと……受け入れ難い。

かつてミュリアがゲインを失いどんな気持ちで過ごしてきたのか、それをゲルトは確かにわかっていなかった。勇者という危険な夢を持つ娘……。父と同じ目にあわせたくないという願い。ミュリアの優しさの数々。そうしたものにもっと早く気づくべきだったのかもしれない。

だがそれは全て今までの擦れ違いがあり、こうして痛みを知ったからこそそうできるのだ。今ならば少しだけ、母の気持ちを理解出来る。

「……わたしが居なくなったら、貴方は……寂しいですか？」

「馬鹿言ってんじゃないわよ」

そう言う母の顔はとても不安そうだった。そんなこと考えたくも無い。瞳がそう伝えていた。ゲルトは苦笑し、そうしてコーヒ―を口にする。

「……美味しいです」

「………そう」

「本当はずっと、美味しいって言いたかった……」

黒い液体に映りこんだ自分の顔はくしゃくしゃになって泣いているように見えた。ゲルトはそうして目を瞑り、決戦に臨む心を整えた。勇者とは勇気ある者。世界を救うほどの全てを包み込むような優しさで勇気で戦う者。その末路は常にハッピーエンドであるとは限らない。

戦士である以上傷つき息絶える事もあるだろう。それがミュリアには堪らなく恐ろしかった。

娘が決戦の地に向かった朝、店の看板はクローズのままだった。カウター席に座り込み胸の前で手を組んでミュリアはひたすらに祈り続けていた。

娘の無事を。どうか、彼女だけは自分から奪っていかないでと。今までずっと、正面から向かい合う事が出来なかった。それでも彼女は大切な大切な一人娘なのだ。

「変なトコばつかあんたに似て……。嫌なものね、勇者の血筋っていうのは……。ね？ ゲイン」

常に肌身離さず持ち歩いているくしゃくしゃになって色あせてしまったゲインの写真をじっと見詰める。

今まで何度も捨ててしまいたくなくなった。何度も丸めてゴミ箱に投げ込んだ。それでも忘れられなくて、無かったことには出来なくて。

何度もゴミを漁って手に入れた、守り抜いた思い出。

ゲルトを失いたくなかった。ゲルトがいなくなってしまったらどうしたらいいのかもわからなくなる。でも、それは娘の夢を否定する事に他ならない。

二律背反する心の中、どんな風に触れ合えばいいのかもわからなくなっていた。いつ失うか判らない娘にどんな顔で合えばいいのかもわからなかった。

だから必至にゲインの汚名を払拭する為にシュヴァイン家を再興し

てきた。そうすることだけを目的にしてゲルトの事を忘れようとしていた。

それでもやっぱりくしゃくしゃになった思い出と一緒にゲルトの事は忘れられず、ずっとずっと気がかりだった。こんな終わりがけた世界でもせつかく再会できた娘なのに、彼女は救世主と共に神を倒しに行ってしまった。

「お願い、ゲイン。あの子を守って……！」

ぎゅつと握り締めて祈る。たった一人の娘の無事を……。

ゲルトはまるでそれを夢見るような気持ちで認識していた。想いが届いた奇跡だったのかもしれない。母の弱い姿に涙が止まらなかった。夏流の背に揺られながらぼろぼろ涙を零し、力なく微笑む。夏流の背に揺られてこうして触れ合って……。それはまるで夢のようだった。夏流とこうして、もっと傍にいたかった。

彼が好きなのはリリアだ。それはずっと前から判っていた。『リリア』に言われた通り、ゲルトはいつも傷つくことを恐れていた。

遠回りばかりして気づいた事がある。それだけ大切に扱ってきた気持ちがある。どうしようもないくらいに溢れ返り、胸を満たす優しい気持ち。

「ナツル……」

囁く声は届かなかった。夏流は必至に走っている。ゲルトの為に走っている。それが少しだけ嬉しく、寂しかった。

もっと早く自分の気持ちに気づいていたら、何かが変わったのだろうか？ ふとそんな事を考える。

夏流の事が好きだった。初めて会った日から惹かれはじめていたのかもしれない。でも、それが叶うはずもないと諦め、手に入らないなら壊したいとまで考えた。

彼の全てが欲しかった。でも心はリリアのもので、身体は彼の想いのものです。だからもう何も奪うところはなく、またもう一度諦める。

そうして諦めて諦めてを繰り返し、気づいたら自分自身も諦めていた。カラッポな自分……。でも、もう一度夏流に出会う事が出来た。死んだと思っていた。でも、本当は信じていたのだ。心のどこかで彼がまた助けに来る事を。また共に戦ってくれる事を。

夢のような時間を過ごした。戻ったらそれがまた続くだろう。リリアと三人、沢山の事を話して……。また、世界は綺麗に輝き出す。

リリアといがみ合った事。剣を交えた事。夏流と出会った事。学園で経験した全て。思い出を何度も繰り返す。何度も何度も、何度も。

その全てが愛しい。後悔がないといえば嘘になる。でも、その痛みさえ今は受け入れられるから。

ぎゅっと夏流の身体を抱きしめる。彼が顔だけで振り返る。ゲルトは力を振り絞り、声を上げた。

「……リリアは、元通りになりますよね……？」

「ああ。戻るさ。戻してみせる……絶対に」

「そしたら、また……。皆で、昔みたいに……」

「そうだな。他の連中も探すんだ。全部終わったんだ……。だからもう、なんだって出来るさ」

「……………そうしたら……貴方の生まれた世界を、見てみたいな……」

「……………それはどうかな。別に大した所じゃないし、こっちみたいに

面白いもんはないぞ」

「特別じゃなくても、別にいいんです……。貴方の生まれた家とか……そういうの、見たいじゃないですか……」

「そんなの見て何が楽しいんだ……」

「えへへ、内緒ですよ……」

背中に頬を寄せる。夏流と言葉を交わせる。今はそれだけでも満足だ。

叶わなかった恋も今は応援できる。自分の全てを賭けてそれを守る。守れた。その事が誇らしい。

「リリアのこと、大事にしてあげてくださいね……」

「勿論だ」

「リリアは、がんばりやさん、だから……。いつも、無理しちゃって……。だから、ちゃんと気づいてあげなきゃだめですよ……？」

「あ、ああ……」

「貴方は鈍いから……。少しは、異性の気持ちというものに気を遣うべきです」

「そ、そうだな……。うん、そうするよ。なんだか色々胸に突き刺さるお言葉だ」

「当然です。貴方とは、もう中々長い付き合いです……。いつで

も貴方を、見てきたんですから……」

「……大丈夫か？ もう少しできつと帰れる。休んでた方がいいぞ。天使も振り切ったし、あとは帰るだけだ」

「……そう、ですか。じゃあ、少し……休みますね。さつきから、眠くて……。眠くて、仕方が無いんです……」

ゆつくりと瞼を閉じる。心地良さそうに息をつき、体の力を抜いてゲルトは温もりを感じていた。

ふと、いつだったか。とてもとても懐かしい記憶を思い出した。それは遙か彼方、時の向こうで出会った人の記憶。その町は、白い想いに包まれている。

壁も、床も、空さえも白く感じられるその世界の中、人々の心もまた白く染まっている事だろう。それは純潔の象徴であると同時に虚無さえも形作ってしまう。

人の心の中から全ての闇を振りほどく事など出来るはずはない。光が何かに当たれば必ず世界に影を落す。影は必要なものののだ。光を浴びる為に。

光を浴び続ける為に、心を清らかに保つ為に……。その白い街に落ちた黒い影は一体どこに居ればいいのかろう？ 少女はふとそんな事を考える。

決して高くはない建造物はしかし小さな少女がどれだけ一生懸命に手を伸ばしても届くものではなかった。ただ高く高く空を遠ざけようとするようなその街の景色に時々意味もなく泣き出したくなる。

膝を抱えて一人誰からも忘れられたような袋小路で空を見上げる少女。黒い髪を吹き込む風に攫われながら静かに瞳を細め、空の景色を削り取る。

黒いフリルの付いたワンピースを着用した少女は髪の色も相まってこの白い街にはどこか似合わない。まるで一面真っ白のカーペット

に零れたコーヒーの雫の一滴見たいに、誰から見ても浮き彫りに成ってしまうような。

それは勿論人の心の問題で、だからそれは世界の全てなんかじゃないのに。誰もがそれを黒だと呼ぶから、指を指された少女さえそうなのだと思うってしまう。

一人ぼっちだ。心の中で小さく呟く。寂しくなつて涙があふれ出してくる。唇を噛み締めて顔をくしゃくしゃにしながら笑おうとしてみせる。

でもそれは無理だった。大切な、たった一人の友達を喧嘩をしてしまったから。ただそれだけのことなのにまるで世界が終わるカウントダウンのようにさえ聞こえてくる。

鼻を噉り、手の甲でこしこしと涙を拭ってみせる。そうしてずっと俯いていたからだろうか。少女は自らに差し込む影に気づかなかった。

「こんな所でどうしたんだい？」

声が聞こえた。慌てて顔を上げる。太陽の光を受け、そこに立っていたのは黒い影だった。

黒い少女は顔を上げる。自分と同じだ。そう思った。それは別に色が黒かったからではない。ただ子供ながらに直感を得たのである。そう、彼もまたきつとこの白いカーペットの上に落ちてしまったコーヒーの雫なのだと。染みになつて落ちなくて、誰もが嫌な顔をするような、そんな世界から弾かれてしまった存在。

自分と同じなのに、声を上げる事は出来なかった。少女は極端な対人恐怖症であった。初対面の男に応えることなど出来るはずもない。それなのに彼は腰を落とし、大きな手で少女の頭を撫でるのだ。金色の装甲に包まれた、大きな手。固くて冷たくて、でもそれはとても優しくかった。

自分の力が強いから、乱暴に何かに触れれば壊してしまう……そんな

な悲しみを知っている手だった。少女が涙の雫を拭って顔を上げる。

「……おにいさん、だあれ？」

男は仮面をつけていた。でもその声や、体格や、そんなものから年頃は判別できた。男は仮面を片手で外し、優しく微笑む。

光を背中から浴びるその人の顔ははつきりとは見て取れなかった。しかし膝を抱えた少女にはまるで自分を助けにきてくれた天使か何かのように見えた。

男は少女の身体を優しく抱き寄せる。そうして泣いてもいいのだと小さく囁いた。少女は涙を流す事はなかった。当然の事だった。だってこんなにも優しい誰かに抱きしめてもらえるのだから。その暖かさと匂いと感触と。急速に覚醒して行く記憶のカケラ。ふと、少女は小さな声で呟いた。

「」

貴方だったんですね。

「」

泣いていたわたしを、助けてくれたのは……。

全てが真っ白に染め上げられていく。それでも温もりと鼓動の音だけが聞こえてくる。

「」

ナツル。

「す……き……」

囁くような声で告げる、大切な言葉。

もう、告げる事は出来ないから。それが判ってしまっから。だから少女は微笑みながら眠りにつく。

心の中に溢れる優しい気持ちと沢山の思い出を胸に　。

空白の日（6）

「ほら、ついたぞゲルト」

「今すぐ医術師の所につれてくからさ……」

「くそ、ごめんな。足元がふらついて……どうにも身体がいう事聞かないんだ。ホント、だめだな……」

「なあゲルト……。お前のお陰だよ。リリアを助けられたのは……。お前がいてくれなかったら、きっと俺はだめだった。『あいつ』の言葉に押しつぶされてた」

「でも、お前がいてくれたから……。結構、いつもそうだよな。お前には救われてたんだ。きっとお前は……。俺と似てたから」

「目が覚めたらリリアと話をしような。それで、昔みたいにまた三人一緒にさ……。なあ、ゲルト……」

「
ゲ
ルト
?」

虚幻の日（１）

「魔王を　消す？」

魔王大戦終結の日。後に勇者と魔王の伝説が語り継がれる事になったその夜。

ラ・フィリアはプロミネンスシステムを稼動し北方大陸のパンデモニウムに照準を合わせていた。今や魔王軍と聖騎士団の戦いは熾烈を極め、どちらが先に倒れてもおかしくない。

拮抗した戦況は安定した勝利には繋がらない。プロミネンスの中、アルセリアは遠く離れた戦地の映像を眺めながら目を瞑る。

アルセリアの決定をアイオーンは決して快くは思っていない。しかしそれも止むを得ない。所詮、自分は機械仕掛けの神……。アルセリアによって存在を肯定される、ただの動くヒトガタなのだから。

プロミネンスの引き金はアイオーンが預かっている。アルセリアなら躊躇無くその引き金を引くことだろう。しかしアイオーンは迷っていた。戦地で今も決戦を繰り返している彼ら一人一人の顔が忘れられないから。

パンデモニウムの頂上では最後の決戦が始まっていた。白の勇者と呼ばれたフェイトと魔王ロギアは互いに剣をぶつけ合う。何度も切り結びながら二人は傷だらけになって戦いを続けていた。

各々の願いは恐らく同じ所に向けられていた。ただそこに至るまでの道と手段を違えてしまっただけ……。ロギアは額から流れる血が瞳に零れるのを察知して片目を閉じた。

「こうしておまえと斬りあうのは何回目だろうな……」

「さあな……！ ロギア、本当に最後までケリをつけるつもりなのか！？」

「当然だろう。一国の王として 神への反逆者として、その末路は凄惨な物でなければ意味がない。それこそおまえの、大聖堂の狙いなのだろう？」

細身のサーベルを突きつけ一人ほくそ笑む。風を受け銀色の髪を靡かせながらロギアは過去へと思いを馳せた。

ザックブルムの王としての定めを受けた時から彼女は神の存在を受け入れようとは思わなかった。世界にやがて騒乱が訪れ、勇者と呼ばれた騎士と魔王と呼ばれた姫の戦いが始まる事……。ヨトの預言書の複製品を手にした彼女はその結末を知ってしまった。

世界が何者かにより作られた事。世界はいずれ空白に飲み込まれてしまふ事。それを齎すのが、自分たちの祖にして唯一絶対の神。創造神ヨトであるという事。

世界の輪廻、繰り返される破滅から逃れた人種はイザラキだけではなかった。そのルーツがどこであれ、神の存在の核心、そして滅亡の未来を知る人間は確かに存在した。

神が世界をやり直す為に必要とした『始まりの国』。その国を彼女が担う事になったのも、決して偶然などではなかった。

「私は運命を受け入れない」

例えばそれが神の定めた滅びだとしても、それを受け入れる事はままならない。

「運命という言葉に正解を求めるのは簡単だ。傷つく事も無い。楽な道だ。だが、それでも 私は、『私』で在り続けたい」

サーベルを揮うロギア。彼女の戦争は初めからただその一点だけに集約する。

全てを犠牲にしても。世界の痛み全てを背負っても。それでも、神の采配などに自分を任せたくない。

誰かの意思に心を委ねるのは簡単で、一瞬で全ての痛みを肯定する。しかしそれは、『自分』ではないのだと王は悟る。

この世の全てを犠牲にしても、神を打ち滅ぼせるだけの力を手に入れる事。そしてこの世界の全ての人々に、空白の日の存在を伝える事。彼女が思い描いた、戦渦に包まれしかしそれでも真実の自由を求めた世界。それは今、彼女が愛した男の手で碎かれようとしている。

それもまた、一興。夢の終わりには相応しい。愛した男の手で、せめて凄惨に悲惨に、そして無残に終わりたい。夢を追いつけたのなら、その夢を砕かぬままで。

それが世界の望んだ自分の役割だとしても、構う事は無い。自分で望んで自分で始めた戦争。そこに、後悔など微塵も存在しない。

「おまえはどうだ、フェイト。おまえはそれでも、この世界の存続だけを信じ続けるつもりか？」

フェイトは神剣を手に眉を潜める。決してその心境は戦争の終幕に喜んでなど居なかった。

神剣フェイム・リア・フォース。それは、勇者の証。リアの一族に受け継がれてきた伝説の宝物にして神の涙の一滴。その剣を手にした者は存在を勇者に昇華させる。それは最早神の使徒にさえ等しい。

神の意思に従い剣を取った。リ・ヴァース空白の日を世界に広める事をよしとしない大聖堂は預言マリシアされし者や神剣まで持ち出し、魔王の軍勢を駆逐する事を決定した。

それと同時に魔王により広められた空白の日への反乱者を抹殺する

事こそクイリアダリアの　大聖堂の真の狙いであった。それは確かに世界の安定に繋がる。神を崇拝する大聖堂にしてみれば絶対的な正義であった。

しかし二つの組織の願いはかみ合わず、結果的にこうして悲しい戦いが繰り返されている。神を討つ者、神を信じる者……。フェイトは自分自身をそのどちらにも該当しない中途半端な存在として認識していた。

そう、彼は別に世界の為に戦っているわけでも神を討つ為でも神を守る為でもなく。あくまでも自分自身の為に戦っているのだから。

「俺は……誰かの為に戦うわけじゃない。俺のエゴに従って剣を取ってきた。今までずっと、たった一人で」

腐れた世界に産み落とされ、闇を渡り歩くような人生。人の死と命の儚さ、心の闇を塗りたくった体で生きてきた。そんなフェイトが見つけた光。クイリアダリアの城の中、花畑の中で太陽の光を浴びて微笑む女性に出会った。

「俺は　間違ってる。大聖堂のやり口は気にいらねえ。今俺は、自分の為といいつつ、結局納得の行かない戦いに参加している……」

それでも剣を構える。ロギアはフェイトの迷いながらもそれを振り切ろうとする強い眼差しを見詰める続ける。

「正しくなくてもいい。それでも俺には守りたいものがある。あいつを……あいつらを、俺は失いたくない！　神がどうか、そんな事はまだわからねえ！　世界がどうなるかも、まだまだわからねえ……」

「……神との戦いになれば、平和な世界はヨトを踏破するまで

訪れないだろう。成る程、要は家族の為……そういう事か」

「……俺達に出来ない事も、子供の代なら出来るかもしれねえ。それに 未来には、あいつがいる」

過去の世界に迷い込んだ未来の救世主。彼は今はもうこの世界にはいない。それでも、彼を信じることは出来る。

未来の世界がどうなるかはわからない。しかしそれは彼らが成し遂げることなのだ。未来に全てを投げ出すわけにはいかない。せめて、この戦いだけでも終わらせなければ。

「どちらが正しいのかはわからない。どっちも正しいのかも知れない。だから俺たちはこうやって剣でしか物事を決められない駄目な大人だ。だからせめて 剣でケリをつけようぜ」

「それには同意する。全く、華々しい大舞台だよ。これならば命を散らすに相応しい。どちらが勝っても 悔いはないだろう？」

二人は向かい合い、微笑みあう。そうして駆け出した二人のシルエツトがぶつかり合う時、パンデモニウムの周囲に広がる乱戦状態の戦地ではゲインたちが剣を振るっていた。

次から次へと現れる魔物を斬り伏せながらもゲインは仲間の姿を探す。勇者部隊全員、そして聖騎士団の半数近くを投入してでのパンデモニウムでの決戦。そこでゲインは背後で戦う仲間たちに声を投げかける。

「皆、撤退するんだ！！ もう時間がない！！」

時間がない。それはゲインの予感のようなものだった。

パンデモニウム攻略戦の作戦全容は勇者部隊によるヨトの打倒であ

る。しかしゲインは大聖堂がそれだけで終わらせるとは考えていなかった。

大聖堂は　アルセリアは、戦闘が長引けば間違いなくプロミネンスを発動する。その確信のようなものが彼の胸の中にはあった。一度プロミネンスが放たれれば海を越え大陸を越えて全てを薙ぎ払う閃光の中、この戦地で戦う命は全て焼け落ちるだろう。

それだけは避けねばならない。せめて、全ての命が救えなくても仲間や弟子の命だけは、絶対に守らねばならない。

「決着は直ぐに付く！　ログアが倒されれば魔物たちにも混乱が起きる！　今のうちに撤退の準備をするんだ！！」

聖騎士たちはその言葉に耳を傾けなかった。ゲインは舌打ちして魔物を切り殺し、ミュリアとルーファウスの手を掴んで強引に走り出す。

「ちょ、ちょっと！？　ゲイン、なにしてんのよ！？　今丁度ようやく攻勢に移って来たところなのに！？」

「師匠、どこへ！？　まだ仲間が戦っています！　敵を倒さないと！！」

「いいから僕の言うとおりにするんだっ！！　戦域を離脱して指示を待て！　いいか、これは命令だ！　勇者部隊の副隊長としての！！」

いつに無く真剣な様子のゲインに二人は戸惑っていた。自分たちを怒鳴りつける事など心優しいゲインがするはずもないと思っていたから。

その鬼気迫る様子に仕方が無く戦地を離脱する妻と弟子。それを確

かに見送り、ゲインは再び戦場へと舞い戻る。巨大な斧を振り回すブレイドと太刀で魔物を薙ぎ払う鶴来。最後に魔物と格闘を繰り広げていたメフィスを強引に一箇所に集めて叫ぶ。

「撤退だ！！ 逃げるんだよ、早くっ！！」

「お、おいゲインの旦那……！？ 今いいとこなのに……！？」

「いいから逃げるんだ！！ 急がないと、プロミネンスが　ッ！！」

その言葉をゲインが放つとほぼ同時刻、ラ・フィリアは水平に傾き発射体制を構築するとその砲身をパンデモニウムへと向けていた。照準は当然、勇者と魔王に向けられている。遙か彼方で存分に剣を交える二人。それを横から狙い打つような行為にアイオーンは震えていた。

しかし引き金を引かないわけにはいかない。真横にはアルセリアが立っている。自分がやらねば彼女がやるだけ。ただ、自分が罪から逃れるだけだ。

見殺しにする事には変わりはない。ならばとせめてその罪は背負えるように自分に言い聞かせる。心の中で何度も仲間に懺悔した。そして。

真紅の閃光が頭上を突き抜ける景色を、リア・テイルの庭でマリyahは一人見上げていた。

夜空を照らす真紅の閃光。それは一直線に戦場へ突き進み、魔物も騎士も飲み込んで炸裂する。

咄嗟にゲインはその光に背を向け、仲間たちを守るように抱きしめた。雄叫びと共に全力で魔力を解放し、仲間の盾となる。

凄まじい激痛に顔をゆがめながら、しかしその視線は空を見上げていた。パンデモニウムの頂上、照準が合わされたその場所に二人の

姿はある。

勇者も魔王もただただ啞然とする事しか出来なかった。決戦に全ての力を使い果たしていなければ、あるいはそれを凌げたのかも知れない。だが二人は今余りにも満身創痍だった。

二人は同時に力を放ち、プロミネンスの閃光を切り裂く。しかし剣が手から零れ落ち、二人は光の中押し流されていく。雲を突きぬけ夜を昼に塗り替えた閃光の一撃が過ぎ去った時、そこには瀕死の二人が倒れていた。

崩れ去ったパンデモニウムで倒れた勇者はゆっくりと顔を上げる。そこには全身に酷い火傷を負い、今にも死に掛けたロギアの姿があった。

ロギアは虚ろな瞳で空を見上げていた。星星が輝く夜の闇。そこはまるで自分たちが歩いてきた地獄のような世界に似て居る。

「ロギア……」

枯れた声で勇者は地面に突き刺さった神剣を引き抜き、血塗れの手でそれを引き摺って歩くフェイト。

自分たちの身に何が起きたのか、そしてどちらが正しかったのかを同時に悟る。そうして剣を振り上げ、ゆっくりと、ロギアの胸に神剣を突き刺した。

それは止めの一撃だった。ロギアの上に倒れこみ、二人の顔は息のかかる距離まで近づく。二人は涙を流さなかった。フェイトは目を瞑り、ロギアを抱いて小さく呟いた。

「……ごめんな」

それがロギアが生身で聞いた最後の声だった。

『良くやりました。それでいいのです、アイオーン』

ラ・フィリアの中、そんな声が響き渡った。
両手で鍵盤を叩きながらアイオーンは俯いて一言も声を発しなかった。震える肩をそのままに、ただ静かに涙を流す。
世界はそれでいいのか……。自分はこれでいいのか……。その自問
自答は何年経っても、そう。十四年経った今でも、心の中で繰り返されたまま。

虚幻の日（１）

ゲルトが死んだ……。その事実が受け入れられず、俺は肩を落し続ける。

悲しい……。のだろう。とても、悲しい。でも、何故か涙は零れなかった。悲しい、というよりは呆然と言った感じで……。身近な人物が、当たり前のように居なくなった。

それも、ただ死んだんじゃない。俺の背中で死んだんだ。それは、俺がもつと早く走っていれば助かったかも知れない。俺がもつと……もつと、何か出来たに違いない。

だからどうしようもなく何も考えられない。ゲルトが死んだ……。それは本当なのか？ 目の前に眠るゲルトを見て俺はずっと立ち尽くしていた。

ミユリアは泣いていた。かなり取り乱した様子で今はアクセルが付き添ってくれている。俺たちの戦いの結末は龍が知っていてくれたらしい。怪我の手当ての準備は出来ていたが、それを受ける気はしなかった。

ゲルトは傷だらけだった。俺も傷だらけだった。血は止まって今は固まっている。でも、多分とてもみすばらしい格好をしているだろう。

「ゲルト……。俺、どうしたらいいんだ……？」

ぼつりと一人で呟いた。こんなに心の中が真つ白になったのは久しぶりだ。冬香が居なくなつたと聞いた時……多分、それよりもつと辛かった。

あの時の俺は自分自身をどこか客観的に眺めていた。でも、それじや駄目だつて気づいて、今は自分の心でそれを受け入れようとしている。

もしも冬香がいなくなつた時、俺がまともだつたならこんなもんじやなかつたんだろう……。そう考えたら余計に辛くなつた。

「なあ、ゲルト……。俺に……何を伝えたかつたんだ？」

大地に膝を着きゲルトの手を握り締める。両手で包み込むゲルトの手は冷たかつた。ゲルトはまるで眠っているかのようにだつた。薄っすら微笑みさえ湛えて、苦しみとか悲しみとは関係ないみたい……。

強く強くゲルトの手を握り締める。自分でもどうしようもない悲しみが心の中で渦巻いている。俺……こんなにも、ゲルトの事を大事に想つてたんだ。

「ゲルト……っ！ ごめんなあ……っ！」

謝つて済むことじゃない。俺があの時もつとちゃんとしてれば……もっと、何か出来たはずなんだ。

やり直しなんか出来ない。後悔しても仕方が無い。わかつてる。わかつてるんだ。でも　そんな簡単には割り切れないよ……。

しばらくそうして崩れていると背後で扉が開く音が聞こえた。振り返るとそこにはアクセルが立っていて、何やら不機嫌そうな表情で

俺に歩み寄る。

「ナツル、そんなことしてる場合じゃない。大変な事になってるんだ。まだ終わってない……！ 早く奉龍殿に行くぞ！」

「……アクセル……」

俺は視線を反らした。ゲルトは死んでしまった。もう動かないんだ……。鶴来だつてそうだ。俺は、彼女の遺体さえも回収できなかった。

二人とも俺の為に死んだようなものじゃないか。ヨトを倒してリリアを救い出したのに……なんでこうなっちまうんだ？ 何で、まだ終わらないんだよ。

アクセルが俺の胸倉を掴み上げ、強引に俺を立たせる。アクセルは齒を食いしぼり、眉を潜めた。

「悲しいのは皆同じなんだよ！！ お前だけじゃない！ 俺だつて……俺だつて泣きてえよっ！！ でもまだ終わってねえんだよっ！！ ナツル！！ このままじゃ、ゲルトや鶴来さんのやった事が全部無駄になっちまうんだぞ！？ いいのかよ、それでえっ！！」

アクセルの叫び。その意味はわかる。そうだ、まだ終わってないんだ。まだ何かを遣り残してる。俺はここで立ち止まれないんだ。でも、それでゲルトを忘れるのか？ ゲルトの死を忘れて戦えるのか？ そんな薄情な事できたってしたくない。俺は……じゃあ、どうすればいいんだ？

「おい、テメエら何やってんだ。奉龍殿に行くぞ。外は大変な事になってる」

廊下から顔を覗かせた秋斗が淡々と告げる。俺は出来るだけ気持ち
を割り切って頷いた。アクセルも手を放し、小さく俺に謝っていた。
ヨトを打ち倒し、俺たちは空白の日を回避した。冬香として覚醒し
てしまったリリアも何とか奪い返してこうして戻ってくる事が出来
たんだ。

なのに、どうしてあんなに？ そもそも何が起こったんだ？ ど
うして……こんなに心は空しいままなんだ？

奉龍殿まで歩く間、殆ど何も考えられないままだった。何とか『彼』
の元まで辿り着き、重要そうな話が始まって俺は心そこに在らず
……。どうすればいいのかわからない。

この世界はどうなっているんだ？ アルセリアはヨトを倒す事に賛
成だったのか？ 何故俺たちを攻撃したんだ？

アイオン……。あいつが魔法を撃つたなら、ゲルトはアイオンに
殺されたも同然だ。一人で拳を握り締める。俺は……。ディアノイア
が怪しいって気づいていたのに。ヨトさえ倒せば全てが終わると思
い込んで、我武者羅に突っ込んで……。

『ラ・フィリアに強い魔力の反応を感じる……。天照プロミネンスが起動したの
だろう……。その砲身は今、イザラキに向けられている……』

ふと、とんでもない言葉が耳に入ってきた。思わず顔を上げて聞き
返してしまう。

「ここに、プロミネンスカノンが……？」

『恐らくはヨトの使徒の仕業であろう。ヨトが存在しなくなった今、
この世界は非常に不安定な状態にある……。『世界』そのものが、
空席となった神の座に困惑しているのだ』

「それは、何か拙い事が起きるのか……？」

『判らぬ……。この世界が神の手から離れたのは初めての事……。先例の無い事態だけに、世界がどうなるのかは予測不可能だ……』

「で、でもまだわかんないだろ!?　つか、まだ実際に世界はそのまま残ってるし……!　天使だって、いなくなっただろ!？」

俺の不安そうな表情を見てアクセルが努めて明るく発言する。しかしその言葉は静かに否定される。

「その天使がまだ残ってる事が確認されたんだよ」

腕を組んだまま目を瞑った秋斗が告げる。それは俺も疑問を抱かずには居られなかった。

「どういう事だ……?　天使はヨトの力に依存しているんじゃないのか!？」

「魔物だって主であるロギアが居なくなっても活動してんだろが。魔物も天使も本質的には同じ、魔力で構成された召喚物だ。主が消えたところで連中が消える事はないだろ」

確かに秋斗の言うとおりだ。これからやらなければならないことはまだ山のように残っている。ヨトが居なくなっただけで以上天使が際限なく増え続けるような事はないのだろうか……。

『その天使も今やラ・フィリアに従っているようだ……。プロミネンスがこちらに向けられたと同時に、天使の軍勢が直ぐ傍まで近づいている……』

「な　！？　それじゃあ!？」

「まだ、何も終わっちゃいねえって事だろ……。この国は確か結界で覆われてるんだよね？」

『……だが、それもプロミネンスの直撃を受ければ破壊される。そうなれば天使の侵入を阻止することは難しい』

「プロミネンスはいつ放たれるんだ？」

『今すぐ放たれてもおかしい事は何もない……。最早、『我々』ではあれを止める事は不可能だ……』

俺はその言葉を聞いて直ぐに奉龍殿を飛び出していった。背後で皆が何かを言っていた気がするがそんな事は気にしていられない。リリアはまだ、ゲルトの部屋の隣で寝ているんだ。リリアを一人にしておくわけにはいかない。それにゲルトだって、ここが戦地になったら……。

「くそ……っ！」

ゲートを使用して店の直ぐ傍に転移する。呼吸を乱しながら駆け抜けてゲルトの部屋を目指す。強引に扉を押し開き、そこで俺はゲルトを抱きかかえたリリアの姿を目撃した。

リリアは悲しげな表情で俺を見る。俺も恐らく同じような顔をしていたことだろう。いつの間にリリアは目を覚ましたのだろうか？　そんな疑問よりも、彼女が血塗れのゲルトの遺体を抱えて俯いている事が印象的だった。

「ゲルトちゃんは……本当に死んじゃったんだね」

消え入りそうなりリアの声。その眩きと同時に凄まじい轟音が街中に響き渡った。立ってられない程の激しい振動に思わず倒れこむ窓の向こう、作り物の青空を切り裂いて真紅の閃光が街を焼くのが見えた。

「~~~~~ッ!? つつう……! しゅ、シユート……無事か……!？」

プロミネンスの直撃がイザラキに襲い掛かった直後、街は大混乱に見舞われていた。夏流を追って奉龍殿を飛び出した二人も例外なく衝撃の影響を受け道端に転倒していた。

転送装置に派手に激突してしまったアクセルが顔を上げて周囲を見渡すが、後ろを走っていたはずの秋斗の姿が見当たらない。しばらくきよろきよろとあたりを見回していると秋斗は水路から這い上がってきた。

「……なんで俺様がこんな目に……ッ!！」

「あー……。でもそれなんか俺結構デジャヴってるんだけど……つと、それどころじゃなかった! 転送装置を起動……って、あれ?」

転送装置を起動しようとしてみるのだが、一向に機械が反応する気配が無い。もたもたしているアクセルを突き飛ばして秋斗が操作を行うが、やはり反応はなかった。

「……もしかして壊れてるのか?」

「え、お、俺の所為……?」

「デメエが壊したのかよ……。つかえねえなあオイ……」

二人が転送装置の前で試行錯誤していた時であった。人口の空を突き破って貫通して行ったプロミネンスの空けた穴を通り、無数の天使がイザラキの街に入り込んでいるのが見えた。

街のあちらこちらでは悲鳴が上がり、天使の攻撃がイザラキの街を壊して行く。二人はそれを見過ごすわけにも行かず、同時に武器を取り出して駆け出した。

「あークソツ！ 俺様はもう、戦う理由なんかねーってのに……！」

「いいだろ、最期まで付き合えよ……！ まだ 何も終わってないんだからなっ……！」

地上に降りてくる天使を迎撃する二人。しかしまるで世界中から戦力を集めたかのような膨大な量の天使たちに次第に追い詰められていく。

銃弾を連射しながら後退する秋斗。一般人が次々に殺戮されていく姿にアクセルが叫びを上げて突撃する。

神が滅んだ世界でまだ殺しあうというのならば、それは人と人の醜い闘争に他ならない。よりもよってこの戦いを喉けてきたのが自分たちの育った学園の主だという事実がアクセルにはどうしようもなく腹立たしかった。

上空から襲い来る天使の軍勢……。その全てが一斉に魔法を放つ。秋斗の『避ける』という叫びよりも早く、アクセルの姿は爆炎の中に消えて行く。

「アクセル ツ……！」

秋斗が叫びを上げた。しかし、煙幕が消え去った場所にはアクセルの姿は存在していなかった。その代わり、そこには何故か大きな壁が聳え立っていた。

一瞬で消え去った壁の向こう、そこには見覚えのある姿が構えている。大地に手を当てるアクセルに笑いかけているのは、かつて勇者部隊として共に戦ったブレイド。そして。

「こんな戦いは最早神など関係ない。これがお前のやり方だというのならば……僕はそれを赦さない」

空を舞う天使たちが次々に打ち落とされていく。七色の魔法が空を埋め尽くし、敵を葬り去って行く。

天から降りてきた白い影はそうしてゆっくりと顔を挙げ、細身のレイピアを揮った。アクセルと秋斗を庇うように前に出た二つの影。

「ブレイド……。それに レプレキア!？」

「よっ！ 久々の再会だっというのに大ピンチじゃん？ アクセル！」

白い歯を見せながら笑うブレイド。その笑顔に励まされ、アクセルと秋斗も彼らに合流して武器を構える。

「何だかよくわからねえが、テメエらが敵じゃねえって事だけは判った」

「……手を組むのが気に入らないのは、僕も貴様らも同じだろう」

「でも、今は ！」

「こいつらを、ぶっ倒すだけだっ!!」

空を埋めつくすような数の天使に四人は向かって行く。

遙か彼方、天空の塔では既に第二の砲撃の準備が整おうとしていた。

虚幻の日（2）

プロミネンスの衝撃を受けて屋根が落ちてきたところまで俺は意識を保っていた。その後一瞬意識が途切れて　　気づけば瓦礫の下に俺は埋もれていた。

自力でそれを跳ね除けて起き上がる。そこで俺は何かとても神々しい物を見た気がした。

リリアはゲルトを抱きかかえたまま光の翼を広げていた。ゲルトを瓦礫から庇ったその身体は傷だらけだった。額から血の雫を零し、それはゲルトの頬に伝って行く。

まるでそれがリリアの涙であるような気がして俺はゆっくりと彼女に歩み寄った。リリアは俺に微笑みかけ、それからゲルトの亡骸を渡した。

「……リリア」

「……ゲルトちゃんをお願い、夏流」

その口調は寂しげで悲しげで、でも確かにリリアのものだった。けれどももある意味冬香であるとも言える。俺には今の彼女が一体どちらなのか判断が出来ない。

しかしそこにいるのはリリアでも冬香でも大差はないのだろう。ゲルトの亡骸にそっと手を触れ、床に転がっていた神剣を拾い上げて背を向ける。

「リリアなのか？　それとも……冬香、お前なのか？」

「どっちでもないし、どっちでもある……。でも、今は　　。私に

出来る事をやらなくちゃ」

そう一言残し、リリアは翼を広げて羽ばたいて行く。天使で埋め尽くされた空を、神剣の輝きを引つ提げて真っ直ぐに。

まるでそれは光の矢だった。近づく全てを斬り伏せてリリアは大空を飛翔する。崩れた屋根から覗く壊れた空を突きぬけ、真っ直ぐにゲルトを抱きかかえたまま俺は立ち尽くしていた。今の彼女がどちらなのか……それは些細な問題なのかも知れない。少なくとも今彼女は『リリア』の願いも『冬香』の願いも抱えたまま、空へ羽ばたいて行く。

「……そうだな。ゲルトと、約束したもんな。リリアを大事にするって……。俺が信じてやらなきゃ、一体誰があいつを信じるって言うんだ……。なあ、ゲルト」

舞い上がる青空の彼方、リリアは剣を掲げて飛翔する。空の向こうから雲を切り裂いてプロミネンスの光が迫る。それを目の前にリリアは剣を高々と天に掲げ、魔力の全てをそこに収束させる。

「フェイム・リア・フォース……！ 斬り裂けえええええっ！
！」

何処までも長く伸びて行く巨大な光の剣。それをプロミネンスの光に叩き付ける。正面から激突した二つの光は激しく大気を振動させる。

リリアは叫び声を上げながら全身を焼かれつつ真紅の閃光を斬り伏せて行く。真っ二つに両断された光はイザラキを避けるように左右に分断され、海を切り裂いて大量の水を蒸発させていく。

「……行こうか。ほうっておくわけには、行かないから」

永遠の眠りについたゲルトに微笑みかける。ゲルトを抱えたまま俺は大空へと跳び立った。

屋根から屋根へと飛び移り、作り物の空を蹴って本当の空へと舞い上がる。正面からプロミネンスと衝突し、墜落していくリリアへと腕を伸ばして。

「リリアアアアアアアアア ツー!!」

リリアは空中でゆっくりと顔を挙げ、俺へと手を伸ばした。リリアへと思い切り手を伸ばし、その手を掴んで引き寄せる。

落ちて行く。空から海へと。炸裂した海から放たれる水飛沫の中、片腕で強くリリアを抱き寄せた。

「お前がどつちでも構わない。俺はもう……お前を離さない」

彼女は何も答えなかった。何も答えず、目を瞑って俺の胸に顔を押し当てる。逆様に落ちて行く天空の中、俺は二人を抱きしめたまま深く息を吸う。

そう、迷わない。立ち止まらない。諦めない。何かを守る為の力が欲しい。自分を、彼女を。世界を。海へと落下する直前、俺の体から放たれた金色の光が重力の法則を無視して行く。

激しい衝撃が海を揺らす。俺は当たり前のように空中に静止していた。やり方ならば判っている。何度も見てきたんだ。出来ないはずは無い。

金色の翼を羽ばたかせ、俺は空へと舞い戻る。リリアとゲルトをつれてイザラキの街へと舞い戻り、人気の無い通りに着地する事に成功した。

翼は直ぐに消えてしまった。思いのほか扱いは難しいらしい。肩で呼吸をしながらも自分が守る事の出来た存在に微笑が零れる。

「一緒に戦おう、リリア……」

「……いいの、かな」

「それはお前が決める事じゃない。何より俺がそうしたいんだ。そうしなきゃ気が済まない……。俺はお前を赦すよ。お前を肯定する。ゲルトがそうしたように……。俺はお前を肯定する」

リリアの手を引いて狭い路地を抜け出して。俺はその小さな手を絶対に離さないと誓った。

ゲルトと約束したんだ。だからもう、ウジウジなんてしてられない。約束したんだ。彼女が命を賭けて守ってくれた者……無駄になんか出来ない。

何よりこのままじゃ駄目なんだって心が叫んでるから。俺はこの世界で学んだ全てを無駄にしたくない。だから。

顔を上げる。大通りには大量の天使の死体とその前に並んだ皆の姿があった。何故だか知らないがブレイドとレプレキアまで揃っている。

戸惑うリリアを強く抱き寄せる。強引に彼女を連れて仲間の所へ歩いて行く。皆が一緒にいる。なあ、ゲルト……？ だから俺たちは、一人なんかじゃないよな。

忘れたりなんかしないんだ。どんな痛みも悲しみも、全て皆で分かち合っただけ。そうして俺たちは前に進めるんだ。

「……まだ、終わってない。だから、終わりにしよう。俺たちの手で……未来を刻むんだ」

声を投げかける。皆が俺たちを見ている。リリアはぼろぼろ涙を零しながら震えていた。その頭をくしゃくしゃに撫でて俺はリリアを

抱き寄せる。

「おかえり、リリア」

皆一緒に、終わらせるんだ。
俺たちが紡いできた物語を。

虚幻の日（2）

「一先ずは凌いだか……」

街中の各所ではまだ戦闘が継続されているエリアもあるが、大体の天使は迎撃が終了したと言えるだろう。
流石にこのメンバーで戦えば怖い物なしといった所か。全員傷だらけではあるが、無事に危機を乗り切る事が出来た。

「それにしても……どういう事なんだ？　なんでこんなに　仲間が居る？」

振り返る。町のあちこちには剣士やら魔法使いやら、兎に角沢山の増援が天使との戦いに手を貸してくれていた。都合よく何故か彼らは危機に現れこうして俺たちを救ってくれた。

レプレキアとブレイドもそうだが、一体何がどうなってこうなったのか……。困惑している俺たちの所に一人の剣士と魔法使いが駆け寄ってきた。

「よかった……！　無事だったんですね！」

魔法使いの女の子がそんな事を言う。しかし、この二人どっかで見た事があるような……。

「ここにいるのは皆、ディアノイアの生徒たちよ」

声は背後から聞こえてきた。そこには何人かの生徒と一緒に歩いてくるアリアの姿があった。その服装と顔立ちが余りにもリリアそっくりで思わず呆然としてしまう。

そうか、二年の月日が流れているんだから、アリアはもう丁度前のリリアくらいの年頃になるのか……。なんというか、流石は姉妹……。

問題はそんなことではない。とりあえずリリアとアリアのそっくりさはおいておくとして、彼らがディアノイアの生徒だという事だ。言われて見ると、この二人には見覚えがある。

「そうだ、確か学園で……。大聖堂に学園が襲われた時に会った……」

「覚えていてくれたんですね。少し、集まるのが遅くなってしまいましたけど……。力になれて良かったです」

そう言っただけで笑いあふ学園の生徒たち。彼らはみんな既に立派な戦士になっていた。全員がこの二年間、それぞれの戦いを生き抜いてきたのだろう。

「感謝してよね！ アリアとブレイドが一生懸命皆に声をかけて回ったんだから！」

「お前たちが……？」

「鶴来のネーチャンに、転術符をいっぱい預かってさ。あちこち転々としながら手を貸してくれそうなやつに渡してたんだよ。いつか、皆の力を一つにしなきゃいけない時が来る……そう思ってたさ」

ブレイドとアリアは互いに見詰めあい、それから拳をあわせて微笑んだ。何だか良く判らないが、二人ともいい雰囲気になってる……。ううむ、二年の月日というやつは流石に長いのだろうか。皆見れば背も伸びているし。ブレイドなんかかなり成長したな……。

「皆さんが危険だと聞いて駆けつけたんですが、何がどうなっているのか良く判らなくて……」

「そういえば連絡をしたのは誰なんだ？」

誰もそれを知らないのか、互いに顔を見合わせて首を傾げていた。しかしその疑念は直ぐに払拭される事になる。

「転術符を持つ者には、『我々』の声が届くようになってるのだ……」

全員が同時に空を見上げた。声は空から聞こえてきた気がしたのだが、別にこの声の主は空にいるわけではない。

声は『彼』の者だった。頭の中に響いてくるようなその不思議な声はそのまま続けて響いてくる。

『救世主よ……。プロミネンスの脅威は一時的だが凌ぐ事が出来たようだ。これからの事を、話し合わねばなるまい……』

「……そうだな。よし、奉龍殿に向かおう」

「街の事は私たちに任せてください！ 次の作戦が決まったら連絡してもらえれば大丈夫ですから」

皆は口々にそう言つて俺たちを応援してくれた。学園の仲間たち……こんな滅びかけた世界にも、こんなにも沢山の仲間がいたんだ。それが堪らなく嬉しくて泣きそうになる。でも、そんなことしている場合じゃない。俺たちは一刻も早く次の一手を打つ為に奉龍殿へと急いだ。

奉龍殿に辿り着いた俺たちを前に『彼』は瞳を開き、静かに息をついた。プロミネンスはそう連射の効く代物ではない。二連射するのにも酷使した事だろう。そう考えれば暫くは安全であると言えるが、それがずっと続くわけではない。

『まずは礼を言うべきなのだろう……。『我々』は死すれば世界に回歸する存在だ。死という概念は存在しない。だが……お前たちのお陰で多くの命が救われた』

「おいらたちは、自分に出来る事をただやっただけだぜ」

「誰かに強制されてここににいるわけではない。僕たちは……自分で選んでこの場所に来た」

この場所に召喚を行ったのは『彼』なのだろう。でも皆ここに来る事を己の意思で決めた……。そんな気がする。大切な物を二年間守ろうと戦い抜いてきた皆……。彼らの瞳には迷いはなかった。

『プロミネンスは暫く機能を停止するだろう……。だが、こちらにはプロミネンスを遠距離から破壊する手段が存在しない……』

「つまり、直接乗り込んで破壊するしかないって事か」

この世界にはもう、あんな兵器は必要ないんだ。プロミネンスもパ
ンデモニウムもリア・テイルも……。もう、この世界に大きな力は
必要ない。

神の啓示も、誰かの思惑も……。そんなものより一人一人の願う心
の方がずっと強い。その力はこうしていつでも一つになれる。俺た
ちはディアノイアを通して繋がっている。

「アルセリアがどうしてこんな事をしたのかは判らない……。でも、
俺たちは戦わなければまだ何も守れて居ないままだ」

振り返って皆の顔を順番に眺める。俺たちは大切な物を沢山失って
きた。失って擦れ違って戦って……。でもやっと未来を手に入れたん
だ。

自分たちの手に掴み取った未来を、こんな戦いなんかで無駄には出
来ない。それじゃあヨトを倒してまで世界を解き放った意味がない
じゃないか。

過去を無駄にするわけにはいかない。俺たちは沢山の人の願いの上
に立っている。だからもう、立ち止まったり出来ない。

「皆の力を貸して欲しい！ プロミネンスシステムを　ラ・フィ
リアを破壊して全てを終わらせるんだ！　もう憎しみも悲しみも…
…全部っ！！」

全員同時に頷いた。俺たちは一人じゃない。皆一緒に歩いて行くん
だ。物語の終わりのその向こうまで。

決意を新たに振り返る。問題は、これだけの人数をどうやってラ・
フィリアに運ぶのか、とか……。そういう具体策なわけだが。

これだけのメンバーならもう力押しで搭だろぅがなんだろぅが壊せ
そぅな気もするが……。さて、どうしたものか。

「その戦いの前に、まずは準備を整えないと」

声に振り返る。何もなかった空間に突然扉が浮かび上がり、扉が開くと同時に見覚えのある姿が現れた。

「メリーベル……!？」

メリーベルは車椅子に乗っていた。ごつごつした地面は動きづらいのか、疲れた様子で途中で立ち止まる彼女に駆け寄った。

「お前……一体どこから……？」

「バテンカイトス魔術教会から。久しぶり……ナツル」

以前に比べメリーベルはどこか元気がないようにも見えた。それも当然か。魔物の呪いを解いた彼女は病気がちな身体に戻ってしまったのだから。

どうやら歩く事も今はまま成らないらしい。それでも車椅子を押してでも会いにきてくれたんだ。今は何よりこの再会が喜ばしかった。扉から姿を現したのはメリーベルだけではなかった。彼女の父、メフィスに……それから初めて見る少年の姿がある。

「あの……貴方が本城夏流さん、ですか？」

「え？ あ、ああ……？ そうだけど？」

「初めまして。僕は、トレイズ・コンコルディアと言います。皆さんの事は、姉から伺っていました」

「姉からって……え？　もしかしてベルヴェールの弟か？」

彼は俺の言葉に素直に頷いた。なんというか、雰囲気は姉とは違すぎる。

トレイズはこの二年間ベルヴェールと一緒に行動していたらしく、この『空白の日』に隠された謎について探っていたらしい。

そうして神の存在やらなにやらにまでは肉薄したそうなのだが、ここ数日の間に行方知れずになってしまったという。

「姉は、ラ・フィリアに秘密が隠されているのではないかと探っていたようなんです。それで恐らく、单身シャングリラに……」

「……そうだったのか。無事だといいいんだが」

というか、この弟君どこかで見覚えがあるな。学園の生徒だったらしく、もしかしたら面識もあつたのかもしれない。

「何から話せばいいのか……。最初から話すと長くなってしまつので、一先ずその話は置いておきますけど……」

「ああ。それよりさっきバテンカイトスから来たって言ってたな？　ティパンはまだ無事なのか？」

「いや、残念ながらティパンは消滅したよ。ただ、くじらの腹は異空間に構築された特殊なエリアだ。街そのものや建造物が消滅した所で存続に問題はないのだよ」

「そ、そうなのか」

「建造物が破壊されたくらいで貴重な研究成果が失われては堪らな

いからな　と。一先ずは互いの無事を喜ぶとしようか」

このおっさんは相変わらずだな。十四年前でも付き合いがあったが、結局俺に気づく気配はなしか……。まあ、いいんだけどね。

「移動手段と拠点にはバテンカイトスを提供しよう。余り部外者を入れるのは好ましくないが、状況が状況だからな」

「助かります。あ、でも……転送地点が定まっていんじゃないじゃ」

リア・テイルに突撃する時はリアが持っていた転術符が目印になったからよかったが、シャングリラにそんなもん都合よく存在しないだろうし　。

『それならば問題ない』

しかしその予想とは裏腹に『彼』が語る。

『ゲルト・シュヴァインが設置した転術地点がいくつも存在している……。これならば、幾つかの方向から同時に攻め込む事が可能だ』

「ゲルトが……？」

彼女はずっと一人で戦っていた。仲間を探し、いつか戦いの日が訪れる事を予測して。

その信じ続けた、夢を追い続けた時間は無駄なんかじゃなかった。それが今この瞬間証明されたんだ。俺はそれが、堪らなく嬉しい。そうだ、この戦いにはゲルトも一緒なんだ。彼女の作った道が俺たちを明日につなげてくれる　そんな気がして、胸の奥から勇気がこみ上げてくる。

「それなら直ぐにでも攻め込めるな」

「……だから、準備と手当てをしてからにして。ナツル、ボロボロだよ？」

車椅子に乗った低い視点からメリーベルが苦笑を浮かべて呟く。確かに……ヨトと戦ってからそのままだ。

「そうだな……とりあえずは装備の手入れと傷の手当てだ。それが終わったらラ・フィリアに突撃……それでいいか？」

反対意見は無かった。皆笑いながら受け入れてくれた。

「それは兎も角！ ニーチャン、最後の戦いもリーダーなんだからしっかりしろよー！」

「え？ お、俺がリーダーなのか？」

「……ほかに誰がいるの？」

「ブレイブ克蘭のリーダーは、いつだってお前だったろ！」

皆にそう詰め寄られ、何だか気恥ずかしい。そういえばリーダーなんてもんをやっていた時期もあったっけ……。

でも、結局俺が何かしたわけじゃない。皆の力があつたからやってこられたんだ。今までだって、これからも。

「ふむ……確かに部隊名が無いと気合が入らないか」

「メフィスまで何言ってるんだ……。部隊名なんて、別に決めなくて今更」

全員の顔を見渡す。わかりきっていることだ。でも、どうやらみんなは俺の口からそれが聞きたいらしかった。

仕方ない連中だ。こんなもん、ただ気分を盛り上げるためにするだけのどうしようもないその場のノリだ。全員の合意が得られたわけでも、それを行使するわけでもない。

それでも俺は顔を上げる。そうして宣言する。最後の戦いに臨む、俺たちの名を。

「ここに、第三次勇者部隊^{ブレイブクラン}を設立する！」

各々様々な反応を返してくれた。不機嫌そうなヤツ。なんだか盛り上がっているヤツ。懐かしんでいるヤツ……。そんな中、俺はリリアに歩み寄る。

リリアは顔を上げて微笑みを返してくれた。彼女は勇者だ。ゲルトも勇者だった。でも、そうじゃない。勇者部隊ってのは……。それだけじゃないんだ。

「……私ね、思うんだ。勇者とか魔王とか救世主とか神様とか……きつとそんなのは心の持ち様で、人の見方でいくらでも変わる者なんだって」

そう、大切なのは心なんだ。ここにいて、いや、ディアノイアの生徒だったみんなが。勇者と呼ばれるに相応しい勇気を持っている。救世主と呼ばれるに足るだけの決意と覚悟、そして正しい力を持っている。だからこれは、皆の名前。俺たちが戦ってきた全ての象徴。

「だからね、みんな勇者なんだよ。それで、救世主で……。だから、

勇者部隊でよかったって思う。私たちは……同じ物を目指しているから」

リリアの言葉に皆は黙り込んでいた。多分、言わずとも判っている。俺たちはみんな、きつと同じ事を考えていた。

それでも真剣な様子で語るリリアに、どう反応すればいいのかわからなかったのだろう。おかしいような、嬉しいような……くすぐったい感触。

「それじゃあ皆さん、準備をしましょう！ まだ話しておかなければ成らない事もありますし……！」

トレイズ君がその声を上げた。姉に似て仕切り屋さんだ。俺たちはトレイズの言葉に苦笑し、それからバテンカイトスへと移動する事にした。

虚幻の日(2)(後書き)

くそれゆけ！ デイアノイア劇場Z

＊ラスボス直前ですよ編＊

ゲルト「死にました」

リリア「うん……。でもさ、ゲルトちゃんって本当に死亡フラグだらけで良く今まで生きてたなって思うよね？」

ゲルト「ええ……。主人公より瀕死になってると読者様でも噂のサブヒロインですから……」

リリア「『空白の日』で終わると思ってた人は残念でした」

ゲルト「もうちょっとだけ続きますよ」

リリア「でももう一週間以内には確実に終わるね……」

ゲルト「……本当に終わりますね」

リリア「うっ……。さーびーしいーよーうっ……」

ゲルト「だから……泣かないくださいようー！」

リリア「えーんえーん！」

ゲルト「うつ……！ えぐえぐ……！」

夏流「久しぶりに出てきたらなにこのカオス……」

リリア「びえーん！ 夏流さーん！！」

ゲルト「ナツルっ！！」

夏流「ひいつ！？ 本編収録前なのに衣類に色々な液体が！？」

リリア「この劇場も次でラストなんだよう！ なんかいい事言って締めくくってよう！」

ゲルト「ひつく……！ うええええん！」

夏流「最早ゲルトは台詞になってないし……。そ、そうだな……。いい事か……。うーん」

リリア「早く早く！」

夏流「……ここまで真面目に読んだ読者の皆様。これをここまで読む間に、もっとほかに色々な事が出来たと思いますよ。有意義な活動とか」

リリア&ゲルト「 なんじゃそりゃあああああ！！ 」

夏流「事実だろっ！？」

リリア「事実だけどおー！！」

ゲルト「そういう事言わないで下さいよ！ 読者の何倍作者が時間かけてると思ってるんですか！？」

夏流「作者も可哀相にな……。もっと別の事に時間を費やせば」

リリア「わー！ わあああっ！！」

ゲルト「さ、最終回に続きます！」

虚幻の日(3)

「はい、おしまい」

一言そう呟いてメリーベルは顔を上げる。治療をしてもらったお陰で体の具合は大分良くなっていた。

バテンカイトスの一室、今や彼女の研究室となったその部屋で二人きりで向かい合う。メリーベルにこうして世話になっていると二年前の事を思い出す。

初めて出会った時からメルには無理ばかり言ってきた。今までこうして戦ってこられたのもメルのお陰だと言えるだろう。

「こうしていると昔を思い出すわ」

「奇遇だな。俺も同じ事を考えていた所だよ」

二人して笑いあう。メルは昔よりずっと素直な笑顔を浮かべられるようになっていた。

この二年間の間、彼女もきつと自分の目的の為に努力を続けてきたのだろう。病弱に戻ってしまった身体を引き摺ってまたこうして俺たちの為に力を貸してくれる。それが全ての過去が無駄じゃなかったと教えてくれる。

「二年前、ナツルは死んだと思ってた」

「……だろうな。俺も死んだと思ったくらいだ」

「でも生きてた。こうしてまた会えた……。ゲルトの事は、残念だ

けど……。だからこそもう、これ以上誰にも死んで欲しくない」

車輪が軋む音がする。彼女は涙を流さなかった。でも、彼女が一番ゲルトの事を気にかけていたんだ。ゲルトが死んで悲しくないはずがない。

俺だって今も悲しい。でも今は涙を流す時じゃない。戦うべき時なんだ。だから悲しむのは後に回す。そうしなきゃ、ゲルトがきつと赦してくれない。

「今のあたしに出来る全てで武器を強化しておくから……。それがどれだけナツルの力になるかはわからないけど……」

「……なんか、悪いな。昔からずっとメルには頼りっぱなしだ」

「……いい。それくらいしか出来ないから。一緒に戦えるのは……これだけだから」

寂しげに微笑み、それから俺の手を握り締める。祈るようなその姿に俺は苦笑を浮かべて肩を叩く。

「……死なないで。まだ、話したい事が沢山あるから」

そうだ。二年前俺は生きて戻ってくると彼女に告げて、それっきり……。戻る事はなかった。

そういえばあの時メルが何かを言っていたような気がしたが……体感時間で二年前、しかも何度も死に掛けたとあって良く覚えて居ない。うーむ、こんなんじゃゲルトにぶっ飛ばされるな……。

一人で悩んでうなり声を上げているとメルは口元に手を当てて笑っていた。無邪気な笑顔……。それは彼女が何かを乗り越えた事を意味しているのだろうか。

「死なないよ。俺は、死なない……。死ねないんだ、まだ」

神を倒した責任を取らなければいけない。自分自身の手を汚してここまで這い上がってきた意味を失ってしまうから。

無かった事には出来ない。口先だけにもしちゃいけない。だから最後まで貫き通さなければ意味がない。俺も、彼女も。

メルの手を握り締め、屈んで彼女の頭を撫でる。メルは今にも泣き出しそうな顔で俺の背中に腕を回すと、ゆっくりと……。温もりを確かめるように俺を抱きしめた。

「夏流さんはいらっしやいますか　　っと、あわわ……。!?　　もしかして僕、お邪魔でしたか!？」

ふと、行き成り扉が開いてそんな声が聞こえてきた。メルは全くお構いなしに俺を抱きしめたまま文句ありげに首だけで振り返る。

そこにはトレイズが立っていた。なにやら俺に用事があったようだが、俺たちの状態を見て顔を紅くしてしどろもどろ……。いや、別にそういう関係じゃ……。ないよね？

「どうかしたのか、えーと……。弟君」

「え、いや、どうかしたっていうか……。この二年間で姉が調べた事をご報告しておこうと思ひまして……」

「そ、そう……。えーと、メル……。?　　ごめん、ちょっと行つてきていいかな？」

彼女はいかにも不満たらたらな様子で腕を放す。『あたしは武器を作るだけの存在なわけ?』とでもいいかげん。胸に突き刺さる……。

適当に笑って誤魔化しながらトレイズ君の腕を引っ張ってバテンカイトスの廊下に飛び出る。嫌な汗をかいてしまった……。なんだこのプレッシャーは……。

「それで、本題は？」

「はい！ アルセリアと学園と古代文明の関係についてなんですけど……！ 最初にこれに気づいたのって夏流さんだったんですね？ 姉がそう言っていました」

過去に確かに俺はベルヴェールと一緒にミスリルの流通がおかしな事になっていてという話をした事があった。まさかあいつ、二年の間にそれを追っかけてたのか？

案の定彼女はこの世界の裏にある様々な真実を追い掛けていた。大聖堂の生き残りや元ザックブルムの騎士などに話を聞き、なんと魔王大戦の真実にまで漕ぎ着けていたのだ。

魔王大戦、それは神を滅ぼし自由を得ようとする者と神を守り安息を守ろうとする者に二分された史上最大の戦争だ。しかしその真実、闘争の根本は空白の日に根差している。
リ・ヴァース

その闘争は結局勇者と魔王、その両者が同時力尽きた事によりなかなあに終わってしまった。結果的に王という頭脳を失った魔王軍が瓦解し、あとは物量作戦でクイリアダリアが勝利を収めた……。

「勇者と魔王が相打ちになったのって、プロミネンスの横槍が入ったからなんですよ？ そのプロミネンスを当時任されていたのがアルセリア・ウトピシュトナ……後のディアノイア学園長だったんですよ！」

「アルセリア……ウトピシュトナ？」

虚幻の日（3）

「……アルセリアはヨトに選定された監視者^{ゲイザー}だった。ゲイザーになった人間は、全員元々はただの人間だった。その人間が時の流れを停止させられ世界の流れから外される事でゲイザーは完成する」

「それじゃあ……今回のことって、アリアたちアリアの一族の問題って事なの？」

「そついう事になるな」

奉龍殿を前にした水路の淵、リリア、アリア、そしてレプレキアの三人の姿があった。

朽ち果てたイザラキの街に夕日が差し込む中三人は対峙する。それは運命でもあり因縁でもあり、そしてこれから解決せねばならない事でもある。

「僕の母の願いは、お前たちの手で叶えられた……。いや、正確にはまだ叶えられたわけではない。リリア・ウトピシュトナ お前がいる限りは」

そう告げてレプレキアは剣をリリアに向ける。リリアは何の抵抗もせずに切っ先を突きつけられたまま眉を潜めた。

「お前は最早神に等しい いや、それさえも超えた存在だ。ウトピシュトナの最高峰にまで昇り詰めたお前が、ヨトの代理人に成らないとは誰にも保障出来ない」

リリアは既に冬香との同化に成功し、二つの人格と記憶と心を両立させた非常に不安定な存在になってしまっている。それに付け加え、ヨトに力を与えられた事で限りなくヨトに近い。この世界を生み出した冬香に近い存在に変わり果てた。

ヨトの力が半減していた事も、全てはリリアに力を与えてしまった事が原因。つまり今のリリアは神であり勇者であり王であり……そして何者でもない。何でもなく、何にもなれる者……アンバランスな存在。

「アルセリアがこの世界をどうするつもりなのかは僕にも判らない。だからこそお前の答えを聞かなければならない。勇者王……お前はその力で何を成すつもりだ？」

レプレキアにとって空白の日の回避とヨトの打倒こそが至上の目的であり唯一の未来でもあった。母親が成し遂げようとしてしかし夢と散った人の世界の解放……。そのためだけに全てを注いできた。魔王と名乗った事も、クイリアダリアとの衝突を避けようとした事も、全てはその目的と母の願いの為……。決してクイリアダリアという国そのものを滅ぼそうとはしなかった、ロギアのことを継いでの事。

ヨトは倒された。ヨトを打倒することこそ生きる意味だった彼にとってそれは衝撃的だった。しかし結局全ては無駄だったのかもしれない。そんな諦めが心を支配した事もあった。

リリアとの戦いに敗北した時、自分の存在の全てを否定されたような気がしていた。リリアとレプレキア、二人は勇者と魔王という反対の存在であるというだけではなく、彼にとってはもっと深い繋がりがあつた。

そのつながりこそが彼を苦しめ、しかし今こうしてこの場所に立たせている。それは何かの導きなのかも知れない。運命と言い換えても良いかもしれない。レプレキアは迷いを押し殺した眼差しで問い

掛ける。

「……お前は世界を導く存在に成り得るのか？ 人々の自由を……この終わりがけた世界の中に見つけられるとでも言うのか？」

「……私は」

「ちょっと！ さっきから聞いてれば、リリアにばかりそんな事を押し付けないでよ！！」

二人に間に割って入り、レプレキアを押し戻して切っ先を反らすリア。小さな少女の乱入に二人の王は目を丸くする。

「アルセリアがウトピシュトナの一族だっていうなら、今の状況は確かにリアたちに責任がある！ 一族としてそれは何とかしなきゃいけない！ でも、それはリリア一人が悪いわけじゃないでしょう！」

「……アリアちゃん？」

「リリアは……お姉ちゃんは、これでも頑張ってきたんだよ！？」
魔王あんたは分かり合う為に努力をしたの！？ 世界を変えるために何をしたの！？ 戦ってるだけで何も見ようとしなくせに、偉そうな事を言わないでっ！！」

アリアの暴言をリリアはハラハラしながら眺めていた。おろおろしながら背後からアリアの首根っ子を引っ張って自分に引き寄せるリリア。一応相手は魔王とまで呼ばれた少年なわけで、妹の身を案じての行為だった。

どんな反応を示すのかと成り行きを見守っていたリリアの目に映っ

たのは何故か剣を収めるレプレキアの姿だった。確かにアリアの言うとおり　その顔はそんな心境を物語っていた。

「それでも僕は証明したかった……。正しかったのは、母なのだと。僕が君たちに敗北する事は……。君たちの存在が正しかったのだと言う事は……。それは、母の存在を無駄にしてしまう気がしたから」

「なによそれ！　そんなわけわかんない理由で突っかかってくんないっ！！」

「いいんだよ、アリアちゃん。違うんだよ……。レプレキア君の父親は　フェイト、なんでしょ？」

「えっ？」

「ど、どうしてそれを……」

二人が驚きを隠せずに居る中、リリアは一人優しげに微笑を浮かべて答える。

「何となく、そんな気がしてた……。かな？　ホントの事を言うと、冬香さんの記憶が流れ込んできて……。この世界の事は、もう大体なんでもわかつちゃうみたいなんだ」

「……うそ、じゃあ、えっ！？　レプレキアは、アリアたちの弟ってことになるの！？」

アリアの叫び声をレプレキアは顔を赤くしながら腕を組んで聞いていた。その態度にアリアが口をぱくぱく開けたり閉じたりを繰り返しながらリリアに詰め寄る。

リリアは一人目を瞑ったままなんともいえない表情を浮かべていた。アリアがリリアの胸倉を掴んでグラグラ揺らすのだが、リリアは何も言わずにただ笑い続けていた。

「アリアたちの父親ってっ！！ サイトテ ツ！！」

「何を今更……」

「うん……。ちょっと今更過ぎたよね」

「にゃああああああああああっ！！！！！！」

髪を掻き乱し空に叫ぶアリア。そんな次女の様子を長男と長女は苦笑しながら眺めていた。

「……結局、勇者の血には逆らえない。僕は母の願いをこの手で叶える事も出来なかった。彼女の無念を晴らす事も……何一つ」

拳を握り締め、悲しい瞳でそれをじっと見詰める。そんなレプレキアに歩み寄りリリアは両腕を広げて少年を優しく抱きしめた。

「ロギアは君にそんな事は望んで居ないんだよ」

「……………っ」

「ロギアはただ、君には普通に生きて欲しかったただけなんだよ。フエイトもマリアも、私たちにそれを望んでいた。それなのに親とか世界とかに囚われてこんな事になっている私たちは、きつと親不孝者だね」

レプレキアはただ抱かれるまま、成されるがままで目を瞑っていた。リリアの暖かい温もりで優しさを覚える。それは初めて彼が覚える母の温もりだった。

「それにね、ロギアならここにいるよ？ 身体はなくなっちゃったけど、心はまだここにある」

神剣を軽く掲げ、それをレプレキアにそつと手渡した。羽のように軽く、神の威光を示すように美しく、荘厳な刀身。神剣フェイム・リア・フォース、そこにロギアの魂を封じ込めたフェイトの気持ちを含め、今なら理解出来る。

彼が望んだ事、そして彼女が望んだこと……。何故ロギアがリリアを守り続けたのか。リリアを冬香という存在と分断させ続けていたのか。それは全て、フェイトの願いを叶える為に他ならない。

ロギアは常にリリアと冬香という二つの強い力の板ばさみが続けてきた。今やその意志は限りなくゼロに近く磨耗し、その声を聞き取る事は出来なくなっていた。

それでもロギアの魂はそこにある。それをリリアは感じている。だから神剣を手渡し、魔王の元へ。意思を受け継ぐ者の元へと手渡す。人から人へと受け継がれていく魂のバトン……。それは今、遠回りをしようやく在るべき場所へと回帰した。

「この剣は、レプレキア君にあげるよ」

「……神剣を……？ しかし、これは……」

「いいんだよ。もう、ロギアにはいっぱいいいお世話になったから……。それにこれはただの剣。ただ剣で、それ以上でも以下でもない。価値を決めるのも、在り方を定めるのも……。全ては持ち主次第だから」

そう微笑みかけリリアは一步身を引いた。そうして背にしていた二対の魔剣を鞘ごと手にとってそれをじっと見詰める。

「私には、こっちの剣があるから……。この剣と一緒に戦うよ。これはきつと神剣には劣るものだけど……。でも、神剣よりもずっと価値のある、大事な友達の形見だから」

ぎゅっと握り締め、それを腰に挿してリリアは空を見上げる。そこに描く姿をレプレキアとアリアは見る事は出来ない。だが、何を見ているのかは見えずとも判ってしまった。

神剣を握りしめ、レプレキアはそれを強く握る。顔を挙げ、それから目を閉じて呟いた。

「確かに受け取った」

「いや、ちょ、ちょっと！ それ、ウトピシュトナに伝わる大事な大事な剣なんだよ！？ いくら女王だからって勝手に渡しちゃ困るってば！」

「う、うん……。でもなんかもう、いいかなっておもって……」

「何がいいのかわかんないからーっ！ もー、だからリリアが女王なんて認められないんだよっ！！」

「うん、そうだね。だから今日から女王様はアリアちゃんに譲るよ」

また突然のリリアの発言に二人が目を丸くする。しかしこう何度も驚かされていると驚く気も失せて来る。何よりもリリアは既にもう決めてしまったからと言わんばかりに笑みを浮かべ、反論を聞くつ

もりはないように見えた。

「……そりゃ、構わないけど……。リリアはどうするの?」

「うーん? まあ、やることをやってから考えるよ。レプレキア君もアリアちゃんを手伝ってくれるよね?」

「え? 僕も……!??」

「当然でしょ! アンタはアリアの弟なんだから!」

「そ、そりゃそうなんだろうけど……。そういう問題なのか?」

「そういう問題なのっ!」

笑いながらレプレキアに詰め寄るアリア。その二人の様子を見てリリアは笑いながら背を向ける。

「……そういう未来を、守らなきゃ行けないから。こうなってしまう責任は、私がちゃんと取るから。だから、大丈夫だから……」

眩きと共にその場を去ろうとするリリア。その腕を背後から二人は握り締め引き留めていた。

「……僕たちも一緒に行く」

「そうだよ。リリア一人にだけ……お姉ちゃんにだけ、全部背負わせたりしないから」

「同じ運命を歩いてきたのなら……僕たちにだけ出来る事もあるは

ずだ」

「だから、そうやって一人で抱え込まない事っ！」

背後からリリアに飛びつくアリア。リリアは暫くの間呆けたような顔でアリアを見詰め、それから涙を流しながら優しく微笑んだ。

「アルセリアは、マリア女王の代より三つ前の女王の娘の一人だったそうです。年齢的に言えば、もう百歳近いはずですね……。なのにまだ生きてる。うーん、謎です！」

「謎ですって……そ、それだけなのか？」

「はい。詳しいことは、姉が全部一人でやっていたことなので、僕は端的にしか……」

使えない情報を一人胸を張って報告しにきたのだという事に気づいた時、夏流は深々と溜息を漏らした。

ふと、冷静に考えてみれば最早全ては調べるという段階ではなくなっているとも言える。アルセリアの真意……それは最早彼女に直接問い掛ける事でしか理解出来るものではないのだろう。

一人で腕を組んで納得している夏流だったが、トレイズは何故かそのまま話を続けた。

「それともう一つ報告があるんですけど」

「何だ？ 今度はちゃんと調べてあるのか？」

「ええ、勿論！ それぞれの古代遺跡を動かす為の管理ユニットの

話です」

管理ユニット。それは古代遺跡全体を統括してコントロールする為^{ゲイザー}に監視者に一つずつ与えられた従者の事である。

それらは機械仕掛けの命であり、人間に限りなく近い存在であると同時に全く別の存在でもある。監視者と管理ユニットはワンセットで行動する。監視者にとって管理ユニットは世界を監視する上で必要になる道具でもあるのだ。

「古代兵器は幾つもありますけど、天照^{プロミネンス}の管理ユニットは夏流さんもご存知の通り、アイオーン・ケイオスと呼ばれるタイプです。ですがアイオーンを倒すだけではプロミネンスは停止出来ません」

「……アルセリアもプロミネンスを動かせるんだろ？ 結局アイオーンは代理に過ぎないからな」

「はい！ それと、恐らく他にも何機かの管理ユニットがアルセリアの管理下にあるのではないかと言われています。その辺りにも注意して戦ってください！」

「……これまた役に立っているのか立っていないのかよくわかんない情報だなあ……」

「役に立てられるかどうかはまさに夏流さん次第ということですね…… あいたたた！？」

余りにも投げっぱなしの態度に思わずトレイズの頭を鷲づかみにして捻る夏流。首が妙な方向にねじれそうになり妙な音が鳴り響く。

「い、痛いじゃないですか……」

「お前はもういいから戻って他のメンバーの手伝いでもしてやれ……」

「判りました。それでは夏流さんもまた後ほど」

態度だけは爽やかなのだが、それだけといってしまえばそれまでである。夏流は腕を組んだままトレイズが去って行くのを見送り深々と溜息を着いた。

「やっぱり血筋なんだな……あの頭の悪い感じは……」

後頭部をぽりぽり掻きながら歩き出す。作戦開始まではまだ時間があるが、全員と一々話しているほどの余裕はない。ほんの僅か空いた空白を埋めるために夏流が向かったのはイザラキの街だった。どこへ向かうでもなくぼんやりと歩き続け、そうして気づけば砂浜へと辿り着いていた。つい先日ゲルトと共に訪れたそこで、しかし既に隣に彼女の姿はない。感傷に押しつぶされそうになる心をぐつと堪え、肩の上に乗ったうさぎの耳を唐突に驚づかみにする。そうして海目掛けてうさぎを投げ込む夏流。悲鳴を上げながら水の中に飛び込み、それと同時に人の姿になって這い上がってくるナナシ。ずぶ濡れになったタキシードの男を前に夏流は真剣な表情で言った。

「いつまで俺と一緒にいるつもりだ、ナナシ」

その言葉にナナシもまた深刻な表情で顔を上げる。シルクハットの鍔に手を伸ばし、鋭く輝く視線で夏流を射抜くように見詰めた。

「アルセリアが俺たちを裏切った……。なら、お前だってそうなん

だろ？ しらばっくれても無駄だぜ監視者 ゲイザー。いい加減、本性表せよ」

「……やれやれ、貴方にだけは敵いませんね……。本当は、ワタクシ自ら貴方に告げるつもりだったのですが」

二人の救世主と呼ばれた男が対峙する。緊迫した空気の中、二人が発する力が渦を巻いて行く。ぴりぴりと肌を突き刺すような高い魔力が張り詰めた空間でナナシは踊るように前に出る。

「騙すつもりは無かったのですが。こういう形になってしまった事を残念に思いますよ、ナツル」

「どういっつもりだ。どうしてアルセリアは……。お前たちは俺たちを狙うんだ？」

「それは貴方がこの世界の存在ではないからです。そうですね……。では、こうしましょうか？」

ナナシの全身が黄金に輝き、その様子が変貌を遂げて行く。光の翼を広げ、鋼鉄の爪を取り戻した英雄神 ナタル・ナハ。そこに存在しているのは最早うさぎのナナシではなく、夏流を敵と認識する存在だった。

「ワタクシに一撃加える事が出来たなら、貴方にそれを教えて差し上げましょう。尤も 貴方はワタクシからの魔力供給を絶たれた生身の人間となったわけですが」

それは圧倒的なハンデを課せられた賭け試合。しかし夏流は全く動じる事無く強気な視線で笑みを浮かべた。

「　そんな条件でいいのか？　だつたらさつさと始めようぜ。あんまりお互い、時間もないみたいだからな」

魔力供給を絶たれた　それはナタルの言うとおりのはずだった。そもそも夏流はこの世界の人間ではない。先天的に魔力というものを扱う能力は存在して居ないのである。故にナナシという魔力の充電器を使用することで魔力を得ていたに過ぎない。

今までのどんな戦いも全てはナナシの力を借りて何とか乗り越えてきた　少なくともそれがナタルの認識であった。しかし今、目の前の救世主はその当たり前の条件を踏破していた。

夏流の体からは今まで以上に溢れ出す力強い魔力が感知出来る。黄金色の輝きを前にナタルは目を細め小さく笑みを浮かべた。

二人が同時に駆け出し、拳を振り上げる。二人の男が共に歩み鍛え上げてきた二つの拳　。それが今、一つの場所で力強く衝突しようとしていた。

虚幻の日（４）

その神が救世主と過ごした月日は五年にも満たない物だった。

それさえも通算であり、彼が体感した時の流れではただか三年程度の事だろう。それでも二人が心のどこかで通じ合っていたのには理由があった。

ナタルとナツル……。二人の英雄の資質を持って世界に産み落とされた存在はよく似ていた。姿形が、という事ではなく。その存在の持つ本質が酷似していたのである。

それは形の無い物。運命とも偶然とも異なる。それは世界を産み落とした想像主があえて世界に練りこんだピース。

実在する人物をモデルとして彼は存在を描かれた。まるでそうあるようにと願われて生まれてきた彼はそう在るべく在り続ける。その願われた先の姿、二人の影が重なるのも無理は無い。

ナタルが救世主を召喚したのは決して偶然などでは無かった。始まりはそう、冬香がそう願ったから。彼女の願いを叶える為、彼は自らの真実の姿を世界に招き入れた。

それを後悔したのは今から何百年も前。その時から世界が何度も滅んだとしても変わらぬ思いで今もここに立っている。

揺らぐ事の無い決意。変わることの無い想い。その全てが彼を英雄足らしめる真実の力。その最強の英雄が今、目の前の一人の少年に目を奪われていた。

そこに居るのは異邦人。この世界に在るはずの無い者。生れ落ちるはずの無かった染。世界を解れさせるナイフ。そして何より、無力な人間風情。

異世界から召喚された彼には身に相応しい力しかないはずであった。その少年が今、神の加護も無く神である自分と対等に拳を合わせている。その事実に驚くという方が無理な話である。

二人の男の拳は均衡した力で激突していた。ナタルは目を見開き目の前の少年を凝視する。救世主と呼ばれた少年の口がゆっくりと笑みを浮かべる。

「どうした。こんなもんかよ、英雄神」

直後膨れ上がった夏流の魔力に吹き飛ばされる。身体が後退する。その事実には動揺を隠せない。空中で黄金の翼を広げ、海の上に着地する。

波打つ水の上に波紋が広がる。神は静かに顔を上げ、首を鳴らしている夏流を見据えた。

「……これは、驚きました。何故貴方にそのような力が……？」

「さあな。長い間一緒だったからお前の力が俺に移ったのか……それとも俺に才能があつたのか……。どっちだっていいさ。理由なんてこの際関係ないだろ？」

「確かに」

微笑みながら目を瞑る。確かに、意味や理由などこの際些細な事である。ナタルは己の両腕を覆う黄金の爪に魔力を通す。

両腕で拳を作り、それを構える。魔力でナタルのシルクハットが吹き飛び漆黒の長髪が金色に染まって行く。

風が巻き起こった。飛沫を上げながら迸る魔力が大気を振動させる。弱者ならばそれだけで震えて身動きが取れなくなるであろう圧倒的な力。夏流もまた、彼に匹敵するとはお世辞にも言い難い。

しかしそれでも少年は平然とその場に構えていた。それは力の差を克服して余りある想いがあるから。彼は一人でそこに立っている訳ではない。それを誰よりも知っているからこそ、ナタルはそれに驚

きはしなかった。

本当はわかつていた事だ。ナタルは少年を初めて見た時からその予感を胸に秘めていた。彼は『救世主として冬香に望まれた』存在なのだ。その意味はこの世界の法則さえも捻じ曲げる。

神が、世界が、その存在を肯定している。彼は何者にでもなれるし、同時に何者でもない。ただ願うままに己の力を揮い、想うままに法則を書き換える。

それが出来なかったのはこの世界と向き合おうとしていなかったから。自分の存在と、そして冬香の与えた役割を認めようとしなかったから。しかし今の彼は違う。

彼は言った。リリアを肯定すると。彼女の全てを肯定すると。それは世界を愛する行為に他ならない。この世界の全てを望むままに受け入れた事に違いない。

ならば今日の前の少年が自分と対峙するに足る存在である事も決して不思議などではない。疑問ならば払拭される。では、残す物は何か？

「正直な所、ここで戦う意味は全く在りませんが。貴方の存在に少々興味が沸いて来ました。これでは私闘に成わがままつてしまいますが……」

「俺も聞きたい事が色々あるが、とりあえずてめえをぶっ飛ばしてから考える事にした」

「昔から変わりませんね、貴方は。いつもいつでも強引なお方です」

二人が同時に顔を上げる。二つの影は同時に疾走し、海と砂が交わる場所で拳を再び激突させた。

衝撃に耐え切れずに二人とも後方に吹き飛ばされる。二人同時に身

体を捻り、反転と同時にハイキックを繰り出した。それは空中で激突し、互いの心を揮わせる。

目にも留まらぬ速さで攻防を繰り広げる二人の英雄。それは二人が同じ時間を過ごしてきた結果でもある。互いの全てを吸収し、高めあってきた二人にとってそれは当然の結果だった。

次にどこから拳が来る？ 蹴りは？ どうやって避ける？ 防ぐ？

その全てが流れるように頭の中に浮かんでくる。光の速さで繰り広げられた攻防の中、二人は何故か笑っていた。

この刹那、一瞬だけ二人は全てを忘れて互いの存在だけを見詰め合っていた。常に一つで同じ場所に居た二人。同じ世界を同じ視線で見詰めてきた。その絆は最早敵や味方という括りでは判断できない。ただ、全ての拳に想いを込める。それは言葉よりもハッキリとしたコミュニケーション。話をするよりも深く、呼吸をするように理解する。それはまるで踊っているかのようにであり、歌っているかのようにうでさえある。

二つの拳が互いの額に減り込む。二人は同時に後方に吹っ飛ばされて倒れこんだ。海に沈みかけたナタルが身体を起こし、夏流が砂を噛む。

「成る程。今の貴方は確かにワタクシの『敵』に成り得る……。とても危険な存在だ」

「言うわりには顔が笑ってんぞ、クソうさぎ」

「でしょうね。貴方との決着は、全力でつけたい……。心は偽れませんね。ワタクシは貴方を倒したい……。やはり、そういうものなのです」

「……この世界をどうするつもりだ？ ヨトは消えた。この世界の管理者はいなくなっただんだ」

「それでもこの世界は余りにも未熟すぎる。管理者であるヨトが未熟で不安定な存在であったように、全ては発展途上……。まだまだ誰かが『あやして』あげなければ成らない」

「管理者が居なくなっただと思っただけなら今度は保護者気取りか？」

「では、貴方は何を以ってしてハッピーエンドと成すお積りですか？」

ナタルは口元から流れる血もそのままに笑いながら両手を広げる。

「物語の幕引きは？ 二年前のパンデモニウムでの決戦、あれも充分にエンディングと呼ばたのではないのでしょうか？ そう、十四年前の勇者と魔王の決戦も……」

物語には幕引きがある。ハッピーエンドは一時的なものでしかない。恒久的な幸福など存在しない。

「幸福と不幸は光と影……。我々は平和を求め、しかしそれを壊してしまう二律背反する存在です。この世界は貴方や貴方の妹にとっではただの『物語』でしかないかもしれない。所詮は紙上の空論、それが一応幸せな形で決着すれば貴方は満足ですか？」

ハッピーエンドの定義など曖昧なものである。例えばそこに一握りの希望でもあれば、幸福な未来を予感出来さえすればそれは幸福な結末だと言えるだろう。

だが、それが訪れる保障は？ 誰が幸せを守ってくれる？ 目先に見えたハッピーなビジョン。それが実現する保障は誰にも出来ない。誰にもそれを守れない。ハッピーエンド……。それは、目前に迫った不

幸を忘れただけのエンディング。

「神を倒し、リリアを救えば貴方の物語はハッピーエンドなのか？ それは少々身勝手でしょう……？ ただ世界を投げっぱなしにただけです。貴方は救ったつもりになって、その実何一つまだ救えていないのです」

では、救いとは？

「目先の幸せを守り、その先にある不幸を切り抜ける『確約』です。それが無い限り世界は変わらない。リリアがどんな気持ちで自分を追い詰めていたのか貴方には判りますか？」

夏流は世界を去るだろう。それは彼の物語が終わる事に他ならない。だから世界を守りたかった。目先だけではなく永遠の幸福を実現したかった。この世界が偽りのものであると知る者ならば、その願いはより一層激しさを増して行く。

「リリアを追い詰めたのは貴方です。貴方の存在が、物語のエンドの存在が、この世界を狂わせてしまう。しかしそれは今は問題ではないのです。問題なのは、いかにして物語をハッピーエンドで締めくくるのか」

「それをお前たちが成し遂げるっていいのか？」

「誰かに成し遂げられる者ではありませんよ。一人一人に出来ることなど限られていますからね……。我々に出来る事は……ただその手伝いです。それに何より　ワタクシは正直に言ってしまうば、こんな世界『どうでもいい』」

男は胸元に手を伸ばしネクタイを緩めた。そうして長い後ろ髪を一つに束ね、光のリングで結ぶ。

強かな表情でナタルは笑う。腕を組み、水面に立ったまま翼を広げる。その興味の対象は 最早ただ一人。

「ワタクシは貴方に出会う為に生まれてきました。では、貴方が居なくなったこの世界にどんな意味があるのでしょうか？ ワタクシは知りたいのです。貴方が本当に彼女の英雄に相応しいのか」

「俺は英雄なんかじゃない。ただそう望まれているだけだ」

「期待には応えるのが役者の務め。貴方は貴方に相応しいだけのステージで演舞を行う必要がある。ワタクシはその相手として申し分ないだけのこの世の『悪』でしょう？」

「……お前が悪だっていうなら、俺だってそうさ」

「善悪論を繰り広げるのは筋違いです。ワタクシは『敵』……貴方という『正義の味方』が倒すべき『敵』。それが世界の決めた役なのです。演目は『救世主最後の戦い』。この長い長い物語の終焉に相応しいだけの演目でなければ観客は赦してはくれませんよ」

人差し指を立て、口元に運ぶナタル。そうして小さく無邪気な微笑を浮かべ、光の翼で空に羽ばたいて行く。

「終焉に相応しい場所で見えましょう。ワタクシと貴方、その両方の終着点に相応しい場所です。この世界の始まりの場所。貴方という役者が舞台上上がる事を心待ちにしていますよ」

「ナタルッ！！」

黄金の光は空に羽ばたいて行く。偽りの空を貫き、遙か彼方の空へ。それを見送りながら夏流は強く拳を握り締めた。

「……判ってるさ。俺は、この物語を幸せなものにしなきゃいけないんだ。それが……俺の役目なんだから」

拳をじつと握り締める。そこに描いている物は、この世界に來た時とは色も形も変えていたのだろうか。

虚幻の日（４）

「遅いぞ、ニーチャン！」

「……ああ。悪い、ちょっとヤボ用があつてさ」

バテンカイトスの中にある広間に戻ってきた夏流を仲間たちが呼ぶ。仲間の下に歩み寄ると車椅子を引いて近づいてきたメリーベルが豪華な装飾を施されたトランクを夏流に差し出した。

「これ、出来るだけ夏流の力に相応しいように強化しておいたから」

「ありがとう。大事に使わせて貰うよ」

「……大事に、使わなくてもいいよ」

ぽつりと呟くメリーベルの言葉に首を傾げる夏流。メリーベルは夏流の手を取り、不安を隠せない眼差しで言葉が続けた。

「壊してもいいから……。だから、ちゃんと生きて。何回だって直してあげるから……。だから、死なないで」

「……メリーベル」

夏流の手を強く握り締めるメリーベル。夏流はトランクから新しくなった神威双対を取り出し、それを両腕に嵌め込んだ。

黄金と同時に不思議な紫の光を放つ巨大な爪……。それがメリーベルの二年間の全てであり、夏流に込めた思いでもある。

触れるだけで伝わる事がある。まるで生まれ持った自分の腕のようなその感触を強く握り締め、夏流は屈んでメリーベルの頭を撫でた。

「ありがとうな……」

メリーベルは顔を挙げ、じっと夏流を見詰めた。それから目尻に浮かんだ涙を指先で拭い、車椅子を後ろに引く。

少年は振り返って仲間たちを見渡した。勇者部隊と呼ばれるそれら全てが彼を支え彼の礎となり彼の歴史となり彼の想いとなり彼の力となる。その全てにありつたけの感謝の気持ちを込めて頭を下げる。

「皆、ありがとう。でも、これは俺の戦いじゃない。俺たちの戦いなんだ。誰もそこから逃げられない。目を反らしちゃいけないんだ。だから皆全力で戦って欲しい。仲間たちに後悔だけはして欲しくない。皆と一緒に沢山の事を学んだディアノイアが決戦の地になったのは絶対に偶然なんかじゃないって俺は思うんだ」

全てはそこから始まった。全ての物語が動き出した。まるで偶然のように、まるで運命のように。導かれた全ての命がそこで交わり、そして力を手に入れた。

そこには出会いがあり別れがあり、そして全てがあつた。何一つ失うものなどない。たとえ命を落としたとしても、それ以上の物を守れる事もある。

「俺たちはディアノイアの子供たちだ。あそこで生まれ、あそこで終わる……。俺はこの世界を皆の腕に返したい。だから皆は手を伸ばして欲しい。自分の未来を思い描いて欲しい。それは夢でも空想でもなく、永遠に続くものだから。君たちの未来を、誰かの舵に任せちゃいけない」

傍らに立ち、俯いたままのリリアの肩を抱く。そうして夏流はにっこりと微笑み、それから声を大にして言った。

「俺はリリアが好きだ！ 世界とかそういうことは正直よくわからん！ でも、好きな女の子がいる！！ 皆だっているだろ！？ 恋とか夢とか友情とかっ！ そういうくっだらない物を持つてるだろ！？」

隊列を成したディアノイアの戦士たちが全員同時に笑い声を上げた。夏流はその笑い声の中リリアの手を握り締めて一緒に掲げる。

「そういうくっだらないものを忘れないで欲しい！ この世界は誰かが作って誰かが管理するものじゃない！ 皆が一人一人、そういうくっだらない気持ちで導いて行くものなんだっ！！ だったら俺は好きな女の為に戦うっ！！ 皆はどうだ！？ 何の為に死ぬる！？ そいつを胸に思い描くんだ！ 目を閉じて、心の中に！！」

仲間たちが次々に目を閉じて行く。夏流とリリアも同時に目を瞑った。その瞼の裏側の暗闇に映し出す未来のビジョンはきつと一人一人違うのだろう。

「それでも、その願いを。俺たちの心の風景を忘れちゃいけないんだ。俺たちはガキだ！でもこれから大人になって、世界を何とかしていかなきゃいけない！他人事じゃない『俺たち』の世界を！皆で一緒に取り戻そう！！」

「夏流……」

「俺たちはブレイブクランツ！！皆知ってるだろ！？勇者は『愛と勇気』の為に戦うんだっ！！俺たちは勇者だ！この世界を救う救世主だっ！！！！」

湧き上がるような仲間たちの声の中、夏流はそれを眺めて静かに目を閉じた。心の中に思い描く景色。そこに、たとえ自分がいなかったとしても。

それでも、幸せでいてほしいから。守られていてほしいから。この世界が間違ってしまったくないように。その未来を信じられるように。せめて心を置き去りにする為に。

「行こう。これで終わりだ。そして始めるんだ！誰かの為じゃなくて、自分の為に！俺たちの物語をッ！！」

バテンカイトスの中、仲間たちはそれぞれの未来を思い描く。そこには沢山の未来がある。それを守るのは自分たちに他ならない。

一人一人が自分を守る事が出来たなら。それが全員で出来たなら。世界はきつと救われる。未来はきつと幸福になる。

それを出来るかどうかは誰かが決める事じゃない。自分の世界の幸せを決定付けるのは誰かなどではない。自分自身の力で決める物。

バテンカイトスの広間に作られた幾つもの門が同時に開かれた。そ

の先にあるのは雪原。ゲルト・シュヴァインの残した道しるべを通り抜け、次々に戦士たちは出撃していく。

かつて学園で育ち学園を巣立ちそしてまた鳥たちは古巣へと飛び込んで行く。白い雪原に無数の足跡を刻みながら、雄叫びと共に真っ直ぐに。

夏流もまた、リリアの手を握り締めて前を見る。指と指を絡め、しっかりと歩く道を見据えて。リリアの心の中にあつた不安は一瞬で吹き飛んでしまった。少女は頷き、そうして門を前にする。

「ナツル！」

声に振り返るとアクセルが歩み寄ってきていた。そうして彼らの前に立ち、夏流の肩を強く叩いた。

「お前たちを絶対に搭まで無傷で送り届けてやる。お前たちの道は俺たちが切り開く……。アルセリアをぶっ潰すのはやっぱりお前らじゃなきゃな」

「アクセル君……」

「おいらたちは二人を信じてる！　おいらたちはおいらたちの戦いをするよ！　だから、忘れないで！」

「……あんなたちの後ろには、いつでもあたしたちがいる。身体は離れても、心は一緒に闘ってる」

「この世界には、きっと僕たちが望む正解なんてないだろう。それでも僕たちは……道を選ぶ事が出来る」

「絶対に勝つてよねっ！　これは女王命令なんだからっ！！」

それぞれの言葉を受け取った夏流の隣に秋斗が並ぶ。そうして周りには聞こえないような小さな声で呟いた。

「……ナタルは行ったのか」

「……ああ」

秋斗は小さく溜息を漏らし、腰のホルスターに手を伸ばす。二丁の拳銃を構え、二人の旧友に向かい合って。

「俺はまだ何も諦めてねえ。お前に勝つ事も、冬香の事も……。だが……。だけど……」

ちらりとリリアの方に視線を向ける。それから目を瞑り、眉を潜めたまま視線を反らした。

「ある意味勝敗は最初からついてたわけだ」

「……秋斗」

「変な気遣いは止せ。寒気がするぜ。それよりテメエ、自分の言った事……。曲げんじゃねえぞ」

「勿論だ。もう、俺は逃げない。どこにも逃げない。俺はここに居る。俺は、リリアの傍に居る」

「……ハッ。だったらせいぜい強がってな！ テメエがぶっ倒れても心配することないぜ？ 俺様が テメエの代わりに世界を救ってやる」

二人の救世主はそうして笑いあい、それから互いの武器を軽くぶつけ合った。

「俺様も一緒に行くぜ。アルセリアの奴は借りもある」

「ったく、ホントに素直じゃねえやつだな」

「ウゼエゾアクセル……。テメエ最初から最後までウゼエのな……」

全員の視線を一つに束ねる。そんな中、リリア一人だけが俯いたままだった。

そんなリリアの左右に二人の救世主が立ち、頭を同時に小突いた。涙目になって顔を上げたリリアに全員が笑いかけている。

「みんな……」

「行こう、リリア。俺が傍に居る。君を守るから」

「ここまで来てウダウダしてんじゃねえよ。とつとつ行って 速攻片付けるだけだ」

二人がリリアの肩を叩く。リリアは目尻に涙を浮かべながら小さく頷いた。

「それじゃあ」

「みんな……っ！ またね！ 絶対絶対、またねっ！！」

リリアが声を上げる。それと同時に仲間たちはそれぞれの扉の中に

姿を消して行った。

残された三人がそれを見送り、息をそろえたように扉を潜って行く。遙か彼方にある雪原。天使と生徒たちが戦いを繰り広げる最後の戦場を彼らは駆け出した。

雪原へと確かに足を踏み込み、息をそろえて賭けて行く。リリアが魔剣フレグランスを手に取り前に出ようとするが、二人の男がそれを赦さなかった。

覆い隠されるような形で強引に後ろに押し返されたリリアが魔剣を胸に抱いたまま目をぱくりさせる。二人の救世主は互いを見ないまま加速し、正面に群がる天使たちに突撃して行く。

「邪魔だああああッ！！」

夏流が次々に天使を蹴り飛ばし、秋斗が近づく全てを撃ち抜いて行く。リリアの目の前で繰り広げられる壮絶な戦い……。しかし勇者に出番は回ってこない。

「……相変わらずだなあ、二人とも」

そう呟きリリアは魔剣を収めた。どうせ後ろから何を言っても聞いて居ないのだ。子供のように意地を張って、二人は懸命に戦っている。

所詮はそんなもの。彼らにとっては当たり前。そう　もう何年も、そうして彼女を守ってきたのだから。

雪原の中、シャングリラの市街地へと突入したアクセルが走る。出来るだけ奥深くまで進軍し、夏流たちに道を切り開く為に。

アルセリアの強さは未知数だ。それ故に夏流には出来るだけ万全の状態で辿り着いて貰わねばならない。その為にアクセルは自身が持

つ思まわしき執行者としての能力を惜しげもなく行使する。

物音も気配も無く移動し、屋根から屋根へと飛び移る。ディアノイアの門の前に突然姿を現したアクセルに天使が気づくよりも早くそれらに剣を投擲する。

風で回転を加えられた剣は次々に天使の首を刈り取って行く。空中で剣を受け止めたアクセルの正面、門を守るように立つアイオンの姿があった。

「アイオン……。そうか、お前はそっち側に付いたって訳か」

アイオンは無言で槍を構える。その足元に魔方陣が浮かび上がり、噴出す紅蓮の炎がアクセル目掛けて飛来する。

「風よ」

アクセルは己の身体を竜巻で包み込み、炎を蹴散らす。二人の攻防の第一声はそれで終了した。アイオンは槍の切っ先を下ろし、躊躇いのある表情でアクセルを見詰める。

「……皮肉じゃあないか。君たちとボクとが戦う事になるとはね……」

「どうしてアルセリアにいたんだ？」

「どうしてもこうしても、理由ならシンプルさ。ボクは彼女の魔力によって生き存えている機械なんだからね……」

「アルセリアは夏流たちが止める。それでもお前は俺たちの『敵』なのか？」

「同じ事さ。ボクはアルセリアが居なくなればもう動いては居られない……。もう、この世界に存続する事は出来ないんだ。だから」

アイオンの足元から七色の魔法が吹き上がる。猛る龍のようなその力を前にアクセルは剣を両手に構えた。

「ボクは最後までボクの役割を演じるのさ　！　途中で降りる事は、何よりボク自身が認められないのだから　ッ！！」

「うわっち！？」

突然飛来した影の刃にブレイドは咄嗟に反応して回避運動を取る。着地点を狙って繰り出された矢のような一撃を斧を振るって弾き飛ばし、軽い身のこなしで雪を蹴る。

ディアノイアの外周、市街地^{マリシア}に続く坂道でブレイドを待ち構えていたのは漆黒の影を持つ預言^{マリシア}されし者であった。蠢く黒い影の気味悪さに思わずブレイドは顔を顰める。

「なんだこいつ……？　気持ち悪いなあ……。なあ、お前もえーと……監視者^{ゲイザー}なわけ？」

影は答えない。返答の代わりとして黒い影を放ってブレイドを攻撃する。ブレイドはどこからともなく飛来した二対の剣を手に取り、近づく影を両断する。

「問答無用、ってわけか　！　だったらこっちも遠慮はしないぜ！？」

剣を両手に構え、大地を疾走する。次々と繰り出される影の刃を切り裂きながら本体に直進して行く。

本体目掛けて二つの剣を同時に振り下ろそうとした瞬間だった。目の前の影は一瞬で姿形を変え、大剣を手にした男の姿に成り代わった。

影は大剣でブレイドの剣を受け止める。突然変化した戦闘能力に混乱するブレイドを一撃で吹き飛ばし、再び姿を変える。

次に現れたのは杖を持った女の姿だった。影が放つ漆黒の電撃がブレイドに迫る。

「んなるっ！」

空中で鏡のような盾を取り出して魔法を受け止める。それは魔法を弾き返す力を持った鏡の盾。威力を上乗せして返却された魔法を姿を変えた影は剣で両断する。

「魔法を切り裂く剣……まさか、リインフォース!？」

影を収納して着地するブレイドの正面、かつて勇者と呼ばれた男の姿をした怪物が頭を上げる。全身にぞわりと浮かび上がった瞳の全てがブレイドを見据えていた。

「……なんだか良くわかんねーけど、もしかして色々な戦闘スタイルに変化出来る……って事か？」

やがて姿が変わり、大剣を手にした小柄な少女の姿へと存在を確立させる。リリア・ウトピシュトナという少女が大聖堂での戦いの時コピーされた戦闘能力。それは神の力に目覚め始めたリリアに他ならない。

闇の神剣を掲げるリリアの影を前にブレイドは小さく笑みを浮かべ

た。それから何一つ武装しない姿のままで影を見据える。

「おいらにはピッタリ有能力だ。嬉しいよ　ここで会ったのが『お前』で、『お前だけ』でさ　」

そうして目を開き、ブレイドは天に腕を伸ばす。空中から飛来した『十二本の剣』。その中心に立ち、少年は風を巻き上げながら宣告する。

「　見せてやるよ。『盗賊』の闘い方って奴を」

雪原を飛翔する魔王の姿があった。空中から次々に魔法を放ち、地上の天使たちを焼き払って行く。

レプレキアに近づく敵は一匹たりとも生き延びる事は出来なかった。他の仲間たちに比べても圧倒的な力を誇る魔王と勇者のハイブリッド。人類としては限りなく最強に近い力を持つ少年を足元でアリアは応援していた。

「やれー！　やっつけるー！　早く終わらせろー！」

なにやら野次が聞こえてくるが、少年は溜息を漏らしてそれを無視する。ブレイドにおいていかれてしまったのがそんなに気に入らないのか、先ほどから八つ当たりを受けている。

地上に滑空しながら剣で次々に天使を斬りつけるレプレキア。その正面、天使たちの中に紛れて一つの影が待ち構えていた。

それは、巨大な斧を携えた大男。タイミングを合わせ、飛来するレプレキアを大斧で打ちつける。

剣でそれを受け止めるもあまりの力に吹き飛ばされるレプレキア。大地へ足を着き、着地の体勢を整えるレプレキアを男は追い掛けよ

うとはしなかった。

「よお、孫。ここは俺の担当でな。少々面倒だが、相手になるぜ」

そこに立っていたのは『フェイトの父』、そして『リリアの育ての親にして祖父』、ヴァルカン・ライトフィールドであった。

しかし彼らは知っている。フェイトの父はとくに死んでいるのだ。つまり目の前の男と地のつながりなど存在しない。

「一体どういうつもりだ……？」

「本職としての俺の力が必要とされたっただけだろう。なあに、心配することはねえ。孫相手なら、手加減くらいはしてやるぜ？」

「ふざけた事を……！」

「ちょっとおっ……！ おじいちゃんなら大人しく道を明け渡しなさいよおっ……！」

「元気な孫娘だな。小さい頃のリリアにそっくりだ！」

「そーじゃなーくーてーっ……！」

「まあいいじゃねえか。とりあえずかかって来いよ。どっち道時間はねえんだ。後悔のねえように……やれるだけやってみな」

「言われずともそうさせて貰おう。例え監視者が相手だとしても、僕の魔王としての力はその威光を砕いて余る　　！」

「口達者なぼうずだ」

二つの影が再び激突する。塔の周辺でそれぞれの戦いが始まる中、アルセリアは塔の頂上へと続く光の階段をゆつくりと昇り始めた。鋼鉄の鎧は脱ぎ捨てて、本当の自分の姿に戻って。眼下では自分が育んできたその成果が争い火花を散らしている。その姿に一度目を伏せて祈りを込め、そうして彼女は歩みを再び。

そう、全ては物語のハッピーエンドの為に。始まりと終わりの塔の前、全ての決戦を演じる為に。

虚幻の日（5）

「これが……ディアノイアの真の姿なのか？」

天空高く聳え立つ塔。その最上階に辿り着いた者は誰も居ない。

かつて魔王と呼ばれたたった一人の女が築き上げた理想。天空の向こう側、神と呼ばれた存在の元へと続く現実と虚幻とを繋ぐ架け橋。ラ・フィリアは美しい光に包まれていた。塔を包み込むようにぐるりと管を巻く螺旋階段が天空へと続いている。光で出来たその回廊を見上げ夏流は小さく息を呑んだ。

それは巨大な一つの大樹の様でもあるシャングリラという街のディアノイアという学園の中心部に聳え立つラ・フィリアという名の世界樹。降り続ける白い光へ手を伸ばす。

触れる事の出来ない幻の塔。その幻影の階段へと一歩足を踏み込んだ。そこに確かに道はある。夏流は振り返り、背後に立つ二人と共に階段を駆け上り始めた。

「……これが、ロギアがこの塔を作っていた理由だったんだね」

「魔王は神を殺す為にこの塔をわざわざこの場所に作ったってわけか。わざわざ敵国のど真ん中、この上にある場所を目指して……」

「ロギアやフェイトが作ってくれた道が今、俺たちをアルセリアの所へ……未来へ導いてくれる。ここまでやってきた事を全部無駄に出来ない。急ごう、もう直ぐそこに決着が待ってる」

夏流の心は固い決意で満ちていた。その輝く横顔をじっと見詰め隣を走るリリアはその手をそっと握り締める。

歩みを止める事はなく、しかしリリアの視線は夏流に問い掛ける。
この先にある終わり　その瞬間を迎えてしまえば、きっと自分たちの物語はエンディングを迎えてしまうから。

少年は少女と指を絡め、微笑みを浮かべる。リリアもまた微笑みと共に空を見上げる。そこに涙はなかった。

この戦いが終われば救世主は役目を終えるだろう。そうならば別れは逃れようもない。しかしそれでも構わない。二年前と今は違う。今は確かに心を通わせる事が出来たから。思い残す事は　何も無い。

「一緒に行こう、夏流！　『私たち』の夢が正しかった事を証明する為に！」

光の螺旋は続いて行く。雲をつきぬけ遙かなる宇宙へと。その向こう側にある誰の目にも触れる事のない領域へと。

地上での戦闘は苦戦を強いられていた。無限に増殖し空から降り注ぐ天使の軍勢に比べ、生徒達は圧倒的に数が少ない。一人、また一人と倒れて行く。

戦力の要でもある戦闘能力の高いメンバーがそれぞれ足止めを受ける事で他の場所での戦況は悪化の一途を辿っていた。絶望的な戦況……しかしそれでも諦める者は一人として存在しなかった。

学園前でのアクセルとアイオンの戦い　。アクセルはアイオンの放つ魔法を次から次へと両断し、かわし、いなし、やり過ぎして行く。

「夏流たちはもう搭を昇り始めたんじゃないか！？」

「かも知れないね……。彼らなら辿り着くだろうね、遙かなる天空の高みまで……。彼女^{リリア}はきと彼女^{アルセリア}に匹敵する。正に無垢なる祈りの力でね　！」

短い槍を回転させアクセルに襲い掛かる。アクセルが投げ放った剣の旋風が地面擦れ擦れを滑空する。空中へと舞うアイオンの両腕から大量の水が溢れ出し、アクセルはそれを剣で裂く。

足元全てに流れる水に魔力を込める。大地から連続で突き上げる氷の柱……。アクセルは空中に飛翔してそれを回避する。

地上から連続で放たれる光で構築された剣の嵐。闇のうねりがアクセルの全身を包み込み聖なる鎖がその腕を拘束する。

鎖を引いて空中からアクセルを手繰り寄せたアイオンの蹴りが鋭くアクセルの腹部に減り込む。吹き飛ばされたアクセルを鎖で引き無人の民家、レンガの壁に叩き付けた。

砕けた壁の向こう側、鎖に剣を突き立てるアクセル。しかしそれは並の修練で繰り出された拘束魔法ではない。圧倒的な熟練された技による魔法の極地。いかに祝福儀礼を受けた暗殺用のサーベルでも断ち切る事は叶わない。

「流石に強いな……。不動のランキング一位　女帝とまで呼ばれただけはある」

「もう一つの二つ名はご存知かい？　ボクも出し惜しみをして、全力で戦えずに後悔するのは嫌なんでね。君を倒して搭を昇らせてもらっよ」

大地に手を着くアイオン。その全身に紫色の光の線が駆け巡る。全身の魔力を右手に収束し、大気の『何も無い場所』に叩き付ける。空間がぐにやりと歪む。世界が軋む轟音に思わずアクセルは耳を塞いだ。次の瞬間空間に亀裂が走り、硝子の碎けるような音と共に赤黒く燃え立つ巨大な槍が世界に姿を現した。

槍を大地に突き刺すアイオン。次の瞬間彼女の魔力が大気を走りあらゆる場所に無数の魔方陣が浮かび上がる。

「おい、マジかよ……!？」

大地から。壁から。空から。

ありとあらゆる場所から骸骨の腕が伸びる。次から次へと世界に姿を現した亡者のその数、凡そ三百体。

その全てが頭蓋の内側から炎を浮かべ、全身を真っ赤に染め上げて動き出す。炎の剣や盾で武装したアンデッドたちは鈍重な足取りでアクセルに迫る。

「ネクロマンサー死術使い……! 禁術だろ、これっ!？」

「奥の手というのは最後まで隠し通すものさ」

明らかに勝ち目のない戦況にアクセルは仕方が無く撤退を試みる。しかし次の瞬間腕にまとわり付いた鎖がそれを赦さず彼の望む方向とは正反対へと歩ませる。

この世界で最強の魔術師を前にアクセルは冷や汗をかきながら両手に剣を構える。最早引き下がる事は出来ない。死を覚悟し、思わず心の中で妹へ謝罪する。

瞳を見開き、近づいてきた炎の亡霊を一撃で斬り伏せる。

「いいぜ、やってやる……! あいつらだって戦ってるんだっ! ! 俺はもう仲間を裏切らない……! ! 俺たち皆で行くんだ!

この先の世界へ　! !」

次々にアンデッドを破壊しながら直進する。埋もれるような数の骨の腕がアクセルへと伸びる。それを振り払うように剣を振り回し、雄叫びと共に前進する。

その叫び声の遥か向こう、アイオーンは新たな魔法の術式を組み上

げながらアクセルを待ち構えていた。

アクセルの戦場とはディアノイアを挟んで反対側に大剣を手にしたブレイドの姿があった。その正面にはリリアの姿に変化した黒い影。二人はしばらくそうして睨みあっていたが、痺れを切らした影が黒いリインフォースを掲げながら突撃する事で拮抗状態は崩された。振り下ろされる大剣を同じく大剣で受け止める。

一撃で防御を崩してしまうような凄まじい破壊力。その一撃は案の定ブレイドのガードを貫通し、その肩口に深々と突き刺さっていた。

血飛沫が上がる。しかし直後その血は全て美しい花弁となって消えて行く。幻影のブレイドがにやりと笑い、影の背後から何人ものブレイドが姿を現した。

その全員が別々の動きで影に斬りかかる。全方向から同時に斬りつけられた影がよろめく頭上、ブレイドが大剣を掲げながら跳躍する。光の剣が構築され、街ごと吹き飛ばすような重い一撃が繰り出される。真つ二つに両断された影が悶えながら一つに戻って行く中、ブレイドは剣を背後に構え、体勢を低く影を睨む。

「盗賊つてのはさ、盗むもんだろ？ でも物を盗むと皆怒るからさ、おいらは別のもんを盗む事にしてるんだ」

ブレイドの瞳が輝く。同時に構えた大剣の周囲に真紅の風が渦巻いて行く。それは、かつてゲルト・シュヴァインが使用していた彼女の奥義。

至近距離に近づきながら放たれた竜巻と強力な突き。その直撃を受けた影が獣のような悲鳴を上げる。吹き飛ばされていく影を追いつ、剣を格納して空間を飛び越える。

影の進行方向に姿を現したブレイドは両腕にナックルを構え、飛んできた影を蹴り飛ばす。防御を無視して対象を貫く雷の一撃。拳を掲げ、少年は呟く。

「^{レーヴァテイン}神討つ一枝の魔剣　！」

黄金に輝く拳を影の胸に打ち込む。迸る電撃が炸裂し、影を光の剣が貫いて行く。その身を空中に投げ飛ばし、後方へ跳躍。

「これだけ攻撃しても　！　倒れないわけねっ！！」

剣を取り出す。その数合計十二本　。それを全て空中に投擲し、ポシエットから無数の宝石を取り出しそれを大地に投げ込む。

全身を串刺しにされた影が落下すると同時に大地に転がった宝石が同時に発動しその身体を巨大な氷で封印する。少年はその傍で天に腕を伸ばす。

「確かこういうの倒すのに向いてるのは……えーと……。まあいいや！　全部混ぜれば　！」

腕に電撃の紋章が迸る。錬金術の工程を再現し、空中に擬似リインフォースを作り出す。かつて不死に限りなく近い力を持った錬金術師を貫いた錬金術の剣。

「さらに魔法剣化して　！」

漆黒の光と黄金の光、二つの輝きを織り交ぜた剣を空中に跳躍して刃先を大地に向けて滑空する。

黒い花弁と風と電撃と光を纏った超密度の剣で真上から両断する。氷と中身どころか大地まで深く両断した魔法の剣が消滅し、ブレイドは衝撃によるけながらガッツポーズを浮かべる。

「名づけて　！　勇者部隊フルコース！！」

自身が見た物を覚え、己の力に取り込んでしまう能力。戦えば戦うほど強くなる力。仲間たち全員の攻撃を受け、影は成す術もなく消滅する。

光の柱が天に立ち上る。それを見上げ、それからブレイドは脱力した様子で周囲を見渡した。

「これやると物凄く疲れるのが難点だよなあ……。さて、他の皆の手伝いに行くとするか！」

見れば正面で空が燃えている。なにやら見覚えのある炎の術に嫌な予感を覚えながら少年は仲間の下へと駆け出した。

虚幻の日（5）

「ディアノイアが……燃えてる……」

階段を昇り続けるリリアが眼下を見下ろして一言呟いた。

町が、世界が、まるで赤い光に飲み込まれていくかの様。その力が誰のものであるのか直ぐに判ってしまつて夏流とリリアは口をつぐんだ。

「地上で派手にやらかしてるヤツがいるみてえだな……。しかしなんだこの半端ねえ魔力は」

「……俺が知る限り、世界最強の魔術師が戦つてる」

夏流とリリアの悲しそうな表情に秋斗は気まずそうに視線を反らし

て舌打ちする。

「下の事は下の連中に任せておけよ。ここまで来て、仲間任せて、それでもそんな顔すんのは心配じゃなくてただの侮辱だ」

「お前の言う通りだな。アクセルたちなら上手くやるさ」

頷き合って上を見上げる。そこで搭の外周をぐるりを巻いていた螺旋階段は一度途切れ搭の中へと続いているようだった。三人は呼吸を合わせて階段を昇り切り踊り場に足を踏み入れた。

そこに立っている見覚えのある人物達に夏流は眉を潜めた。しかしその中でも更に一人、馴染み深い　しかしここに居るはずの無い顔が混じっている。

「……ベルヴェール……なのか？」

三人を待ち構えていたのは白、黒、蒼の三機の機械人形。白蓮、クロムロクシス、そしてベルヴェールの従者であったブリュンヒルデ。その三人の正面に立っているベルヴェールは全身傷だらけで前のめりに立っている。その瞳は何も移してはいない。体の各所、間接から赤い炎が燃え上がり、まるで錆付いた機械のような不自然な動きで弓を構える。

放たれた氷結の弓矢を秋斗が正面から打ち落とす。嘗ての仲間は既に息絶えていた。ネクロマンシーで操られている。それを成しているのは恐らく自分も良く知っている女。

「そんな……。ベルヴェールさん……」

「何ボーっとしてやがる！　知り合いだかなんだか知らんが、こいつらは敵だ！！　倒さなきゃならねえんだよ！！」

秋斗の激に二人は我を取り戻し武器を構える。その正面、見知った顔が並ぶ状況に夏流は前に出る。

「白蓮、お前はナタルについたって事か」

「……申し訳ありません、マスター……。ですが、これが我らに与えられた役目なのデス……」

白蓮は白い薙刀を構える。クロロは巨大なキャノン砲を両手で構え、照準をリリアに向けた。

「クロロ君……！ どうしてそんな所に……！？」

「返答。我々の役割はこの瞬間に成就される……。救世主を打倒し、世界の歪みを修正する……。ですがリリア、貴方だけはここを通しても良いと命令を受けています」

機械人形たちが道を空ける。魔剣を降ろしたリリアを見詰め、クロロは目を瞑る。

「アルセリアが貴方を待っています。この世界の幸福を、貴方と決定する為に……」

「悪いが俺も通らせて貰う」

返事をしようとするリリアを押しつけて夏流が前に出る。しかしそれは命令に含まれて居ない。救世主という異世界の存在を妨害する為に三つの影が道を遮る。

次の瞬間夏流は大地に片足を強く叩き付けていた。振動する大地か

ら電撃が放たれ三つの機械人形は同時にその場に膝を着いた。

「何度も言わせるな。俺も通らせて貰うと言っている」

「……マスター、その、力は……！？」

「知らん。だがお前たち程度で足止め出来ると思われるのは心外だな。俺は全力でナタルに会いに行かなきゃならないんだ。こんなところで余計な力を消耗するわけには行かない」

夏流の鋭い視線にその場の時が静止するかのような感覚。仲間であるリリアや秋斗でさえ思わず息を止めてしまう程、その声は力に満ちていた。

救世主は武器を構えた人形たちの間をリリアの手を引いて歩いて行く。いつ襲い掛かるかわからない彼らの合間、触れようと思えば一瞬で接触できるような距離を夏流は無言で渡りきっていた。

彼らが足を踏み入れた場所とは反対側にさらに上のエリアへと続く螺旋階段が伸びている。そこに夏流が足を踏み入れようとして、ようやく人形たちは動く事が出来た。

全員の攻撃が同時に背後から夏流に襲い掛かるうとしたその瞬間、全員の武器を撃ちぬく銀色の銃弾が飛来する。夏流たちを守るように武器を構えた秋斗が二丁の銃口から白い硝煙を巻き上げる。

「雑魚の相手は一先ず引き受けてやる！ テメエらはテメエらの決着をつけに行け！！」

「ああ。任せるぞ、秋斗」

躊躇いもなくそう頷く夏流。リリアの手を引いて消えて行くその後姿を見送り少年は小さく舌打ちする。

「……チツ。結局、いつも俺は主人公にはなれねえらしい」

「それでも、秋斗は自分の役目を果たしてる」

頭の上によじ登った白いうさがそう呟く。少年は笑いながら顔を挙げ、魔力を解き放つ。

「ハ　ッ！！　んなこたあ、言われなくたって判ってんだよっ！
」

「く……そ……っ！　こんなん、勝てるわけ……ねえだろ……っ！」

大地に膝を着き、ぼろぼろの体で血を吐くアクセル。大地は既に炎の軍勢に埋め尽くされている。

アクセルの周囲には骸骨の残骸が山を作っている。既にどれだけの数を葬り去ったかわからない。しかしアイオンの足元から魔物は次々に現れるのだ。全く光明と呼べるものは見えそうにもなかった。既に剣も幾つか折れている。腕が痺れて動かない。体中が酷い火傷で痛みよりも痛覚が麻痺する奇妙な感覚が身体を支配している。二対の剣を手に両足に最後の力を送り込んで立ち上がる。

「まだ立ち上がるのかい？　君も大概凄まじい根性だよ」

「根性と気合だけはうちのメンバーの誰にも負けないんでね……っ！　才能や特殊な血筋はないけど……。勇者に近づきたくてここまで来たんだ。努力と気力で補ってきた俺の人生、お前なんかにつて堪るかよ！」

「見上げた馬鹿道だ。だが、ボクもここでモタモタしていられないんでね。そろそろ終わりにしようか」

アイオンの頭上に無数の炎の槍が浮かび上がる。必殺の一撃を込めた大魔法を同時に七つ無詠唱で構築する。そこに綻びなど微塵も存在しない。

紅蓮の槍がアクセル目掛けて放たれる。空中から飛来するそれを回避しようとするアクセル。しかし腕に巻きついた鎖がそれを邪魔する。

「しま　ッ!？」

叫ぶよりも早く槍は飛来する。それがアクセルの目の前に迫る。刃先が胸を穿ち存在を燃やし尽くす直前。後方から飛来した何か

が魔法の槍を一つ消滅させる。その一瞬の隙に目の前に割り込んできたのは白銀の鎧に全身を纏った何者か。巨大な十字架が天に掲げられ、白い光の帯がアクセルを包み込んで行く。

「これは　？」

直後に一点に収束した紅蓮の槍が音を立てて空中で炸裂する。弾き飛ばされ砕かれた魔法の断片が降り注ぎ、周囲の亡霊を薙ぎ払って行く。

アクセルの目の前に立っていた騎士がゆっくりと振り返る。美しい羽飾りを施された兜の向こう、懐かしい声が彼の名を呼ぶ。

「よかったわ、間に合って。アクセル君が死んじやってたらここまで来た意味がなくなっちゃうもの」

「……まさか。うそだろ？ どうして……エアリオ……！？」

「姉上を呼び捨てにするんじゃない！ このシスコン剣士め！」

憎たらしい声に振り返る。そこには息を切らしてアクセルに駆け寄るマルドゥークの姿があった。

「マルまで……！？ ど、どうしてここに！？」

「私たちだけではないぞ。元聖騎士団、聖堂騎士団、さらには他国の騎士団に元魔王軍……。この世界の全ての力がここに向かっている」

シャングリラ周辺に突如として姿を現した数え切れないような膨大な量の援軍。それは文字通り街へと雪崩込み、傷ついた生徒たちを救う。

戦況は今一変しようとしていた。天使たちは増えた瞬間次々に撃墜されていく。生徒たちの誰もがそのありえない混成軍に呆気に取られていた。

「聞こえたのよ、夏流君の声が」

「だから間に合うようにここに急いだのだ。尤も、あの演説は少々どうかと思ったが……あの男らしいといえらしいのか」

夏流がバテンカイトスで仲間たちに向けて叫んだ言葉。その全ては世界中に配信されていた。

各地の精霊から精霊へ。僅かに世界の残った自然が、命が、その言葉と意思を乗せて世界中へ広がって行く。

龍の王から全ての龍へ。全ての龍から全ての命へ。そしてその願い

は世界の全てへ。広がって繋がった全ての願いは一つに折り重なり、誰が始めたわけでもなく自然と全ての人々が手を取り合いこの場所を目指していた。

かつていがみ合っていた命も、かつて共に戦った命も。見境無く全ての願いを引き連れて世界の思いがこの戦場へ流れ込んで行く。

増援の数は止まらない。一体何処にこれだけの数の仲間が居たのか？　そう疑問に思う者も居る。だがしかし世界は彼らが思うよりもずっと広く。そして一人の人間の采配でどうにかなるようなものでもない。

夏流の言葉は確かにきつかけになった。しかし誰もが自分の意思で、自らの願いを叶える為に走り出したのだ。守りたいからこそ無我夢中で、純粹だからこそ敵と手を取り合って。

「長い間潜伏して仲間を集めていた甲斐があつたという物！　加勢するぞ、アクセル・スキッド！」

「この世界の未来の事を、人任せにしちゃいけないものね」

「二人とも……」

「何やってるの、お兄ちゃん！　ぼーっとしている暇があつたらさつさと立って戦って！」

背後からの声に振り返る。そこには黒い装束に身を包んだ子供たちが立っていた。その全員がアクセルたちの周囲に滑り込み剣を構える。

その中には彼の妹の姿もあった。アクセルの身体に回復魔法をかけ、真っ直ぐな瞳で顔を上げる。

「レン……！」

「……救世主様の声が聞こえたんだ。それに、こんな世界になっちゃって分かった事もあるよ」

誰もが同じ脅威を前に心を一つに重ねて行く。そうして気づくのだ。孤独なのは自分だけではないと。心に落された影、しかしそれは混ぜあう事の出来る色。

触れ合い、助け合い、そうして人々は同じものを目指していける。そこに神様なんて居なくても。それでも当たり前のように明日を目指す。

それは人がまだ生き続けたいと願うから。まだ歩きたいと願うから。当たり前のように命を続けて行く螺旋。人の進化する魂。明日を目指す眼差しが、この世界を一つ一つ成長させていく。

回復魔法の光と共に妹の心もアクセルの中へ流れ込んでくる。少年は心を震わせ手を瞑る。

「そうだな……。もう、この世界に俺たちを救ってくれる神様はいない。いないけど……。でもっ!!」

それでも彼らは手を取り合う。

そうして世界を共に生きる仲間が居る事を知る。

時に憎しみ合い理解出来ない心を嘆き、力でそれを解決しようとする。

愚かしい争いが繰り返され悲しみの涙が大地に零れ落ちても。

そこから芽生える物がある。人は過ちを繰り返す度に痛みを刻む。心を学ぶ。

世界は進歩する。今解き放たれた赤子のように。ゆっくりと一歩ずつ彼らは歩き始めた。空想の世界の虚幻の存在　しかし彼らは一つになれる可能性をもって言う。

かつてヨトが願った世界。かつて世界が生まれたいと声を上げた時、

冬香が指し示した未来。世界の全て……。それは誰かに願われるものではなく、彼らが自分自身で選んで行く。

「戦うんだ、自分たちの手で！」

燃え盛る炎をエアリオの十字架が両断する。マルドゥークの放った魔法が道を切り開き、執行者たちが炎の野を駆ける。

アクセルは一直線に彼らの切り開いた道を駆け抜ける。傷だらけの身体で、それでも守りたい世界がある。男は雄叫びと共にアイオーンへと斬りかかった。

虚幻の日（6）

天空の搭から世界を見下ろす。その景色の中、アルセリアは過去へ想いを馳せる。

かつてまだ彼女がただの姫君であつた頃。その頃から世界はどれだけ変わったのだろうか。

繰り返される悲しみに零す涙も枯れ果てて今は既にあの頃の気持ちを思い出す事も叶わない。しかしそれでも、そんな磨耗しきつた魂でも……この世界に出来る事がある。

そこは神の領域。搭の途中、広がる白き円形の広場。美しく光沢する全てが彼女の姿を映し出し、雲の切れ間に世界の姿を見る。

静かに迫る終焉の時間。自分の幕引き、せめてそれだけは自分の手でおろしたいのだと願う。心の中の優しい記憶の全てを塗り潰しアルセリアは剣を構えた。

「遅かったですね。リリア・ウトピシュトナ……いえ、本城冬香と呼んだ方が良いでしょうか」

構えた剣を大地に突き刺し小柄な少女は問い掛ける。リリアの他、余計な救世主まで階段を登ってきている事は判っていた。二人を一瞥しアルセリアは悲しげな瞳で続ける。

「出来ればこの世界の問題はこの世界の人間で解決したかったのですが……。救世主夏流、ナタル・ナハがこの上で待っています。世界の始まりの場所、創造の部屋で」

「俺を妨害しないのか？」

「私が手を下さずとも貴方はナタルに敗北する。彼は私と同じくこ

の世界では絶対的な力を持つ戦神です。彼に何か物申すのであれば、その一言くらい告げる権利を与えてあげても良いでしょう？」

アルセリアはそう呟いて自らの背後を指差す。そこには更に空へと続く回廊が伸びている。夏流は小さく息をつき、それからリリアを見詰める。

リリアは夏流の瞳を覗き込む。そうして出会ったばかりの二人のようにながらに笑顔が浮かべ、それから親友の剣を手に視線を振り切つて。

「リリアはリリアの戦いをします！ 信じていてください、夏流さん……っ！！ リリア、絶対に！ 絶対に、勝ちますからっ！！」

少女の叫び。少年は頷き、それからアルセリアの真横を通り過ぎて行く。夏流を素通りさせる二人の視線が一瞬だけ交わり、そして離れて行く。

救世主は階段を駆け上がって行く。その足音が聞こえなくなった頃、アルセリアは大地に突き刺さった巨大な剣の上に飛び乗って柄の上に立つ。

「……少し、昔話でもしましょうか？ この世界を生み出した神様と……世界の平和を祈ったお姫様の物語です」

夏流は階段を昇り続ける。背後に残したリリアの事が気かりでないと言えは嘘になるだろう。しかしこの戦いはそういうものなのだ。

「昔昔、稀代の天才と呼ばれた高い魔力を持つ少女が居ました。彼女は王族にしてヨトの存在に近い高位の種族、リアの一族だった。彼女は毎日欠かさずヨトに世界の平和を祈っていました。一日も欠

かす事無く、純然たる心で」

階段をずっと走り続けている。夏流は息の一つも乱す事は無い。頭上遙か、頂上がようやく目に映る。

「ヨトは少女の純粹さに目を付け世界を見届ける役目を与えました。少女は喜んでその力を受け取りました。そうして世界を渡り歩く旅が始まったのです」

階段を駆け上る間夏流は様々な事を思い返していた。もう直ぐ自分の姿も意味もこの世界で形を成さなく成るだろう。そうするのは自分の意思。嘆く事は出来ない。

「ですが直ぐに少女は後悔しました。世界は悪意に満ちている。幼い生命である人間は何度でも世界を焼き命を散らしてしまう。美しい物に溢れたこの世界を汚れた人の心が壊してしまう。人間への怒りはやがて世界をこんな風に作った神への憎しみへと変わっていきました」

沢山の人の出会いが自分を変えてくれた。それも全てはこの世界に自分を呼んでくれた冬香の。そしてナタルのお陰だと少年は思っている。

「世界を憎しみに溢れさせ、愚かしい過ちを繰り返させる神……。世界を作った神は既にこの世には居ませんでした。在ろう事が想像主は自ら命を絶ち、この世界から居なくなったのです。そう、全ての責任を投げ捨てて」

まるで長い長い夢を繋ぎ合わせたようなツギハギの世界。そこで夏流は充分に沢山の物を手に入れた。失った物なら何も無い。ただ心

の中に、沢山溢れて滲む何か。

「姫は誓いました。自分の力で世界を導いて見せると……。しかし現実残酷にもヨトの定めた『空白』^{リ・ヴァース}を超える事もなく繰り返される。また、幼く未熟な痛みを知らない世界へと。その輪廻を食い止める事は神の力を受け入れてしまった少女には不可能でした。神の従者となった瞬間彼女は自由を失っていたのです。主である、嘗て毎日祈りを捧げた神を倒す事は彼女には不可能だった」

世界は虚幻の海に漂う小さな可能性のようだ。時に荒波にもまれて沈んでしまうその小さな輝き……。それを拾い集め、少年はここまでやってきた。

「故に必要としたのです。この世界を変え得る 神と同義の存在を。世界を救い解き放つ救世主を。願いは成就された。千の呪いの言葉を以って殺すことの出来なかった神は今居ない。居るのは人。ただ人だけなのです」

階段を昇りきった夏流の目の前に広がる空の世界。白い光に導かれ遠くに太陽が輝いている。遥かなる夢の高み。その場所でナタルは救世主を待ち構えていた。

「故に、私は人の身でこの世界を変える。私の長すぎた人生の全てを掛け金に博打に出るのです。貴方は私に引導を渡す存在……？それとも、ここで私に吹き消されてしまう愛らしい命？」

二人の英雄が向かい合う。白い光が降り注ぐ中、二人の男は拳を構える。

「証明して欲しいのです。物語の結末を……。この世界の幸福を。」

貴方が　この世界を産み落とした意味を！」

二人の男が同時に駆け出す。それと同時期、二人の白きリアの姫が剣を手に取り前へ。

四つのシルエットは別々の場所で交差する。交わる力と力。今、世界の幸福をかけた最後の戦いが幕を開けた。

空白の日（6）

二人の少女の影が衝突する。白銀の光を放ちアルセリアは自身の何倍もある巨大な剣を軽々と振り回す。

リアの戦い方とそれは酷似していた。二人の魔力も拮抗している。神に限りなく近い少女と神に選ばれた少女。二人は高速で何度も刃を交える。

「貴方は自ら命を絶った　！　何故なのですか！？　貴方は何故世界を見放したのですか！」

「『私』は……」

「この世界を作ったのならっ！！　その責任を果たさずして何が神かつ！？　貴方はただ自分の責任を投げ出して逃げ出した　！　未熟なヨトを放置して！！」

巨大な聖剣がリアを吹き飛ばす。空中に大剣を蹴り上げ、アルセリアは両手で魔法を放つ。光の矢が雨のように降り注ぎリアは両手に構えた二対の魔剣でそれを切り払う。
落下してきた剣を身体を捻りながら受け取り、地上を低く回転しな

がらリリアへと剣を振るう。巨大な剣を細身の剣では受けきれずリリアの腕に亀裂が走る。

骨が軋む。やがて耐え切れなくなった幾つかの軸が音を立てて圧し折れた。腕の骨が皮膚を突き抜ける。防ぎ切る事が出来ずにリリアの胸を切り裂いて大剣は踊る。

火花が散る。妙な方向に向いてしまった左腕に回復魔法をかける。

その腕は一瞬で再生し、既に痛みも違和感も存在しない。リリアが指を鳴らすと空中に無数の白い球体が浮かび上がり、アルセリア目掛けて降り注ぐ。

接触した存在を一撃で葬り去る^{リヴァイヴ}虚幻魔法。ヨトの力を受け継いでいる今のリリアにとってそれは造作も無い事であった。

長大な剣を担いでいるにも関わらずアルセリアは白いドレスを靡かせながら華麗に破滅の渦を乗り越えて行く。踊るようなそのステップにリリアは剣を一つにあわせ両剣の形にして走り出す。

「そう、私は逃げ出した……。怖くなったの。これ以上この世界に関わっていいのかわからなくなった。ううん。こんな夢の世界に現を抜かして居ちゃいけないんだって、彼が教えてくれたから」

フレグランスを片手で回転させながら跳躍する。低空を一息にアルセリアまで近づいた旋風は巨大な剣を何度も強かに打ち付ける。

その度に派手な火花が舞い散る。二つの偉大な剣が激突する度に二つの巨大な魔力が鎬を削り大気を揺らす。

「この世界に私は夏流の代わりを作った。『彼』は夏流の代役……。私はね、アルセリア？　ただ、夏流とやり直したかっただけなんだよ」

アルセリアが大地に突き刺した剣を軸に体ごと蹴りを放つ。一瞬で

剣を二対に分離させ身体を回転させて踊るようにそれを回避する。直後にカウンターで剣を振るうがアルセリアの生み出した魔力障壁で防がれてしまう。

そのまま体勢を崩したアルセリアを五回連続で左右交互に斬りつける。しかし障壁は切り崩せず、アルセリアは剣の上に着地してそこから魔法を放つ。

無数の鎖がリリアに迫る。同じく鎖で相殺し、剣を投擲するリリア。空中で幾重にも交差した鎖の上に舞い降りたアルセリアは剣を置き去りに空中からリリアに襲い掛かる。

二人は徒手空拳のまま鎖の上で拳をぶつけ合う。蹴り、拳、それが何度かぶつかり合い同時に放った魔法が衝突し相殺し爆発する。白煙の中二人は剣を手に取り後退する。リリアが指を弾き鎖を全て消滅させるとアルセリアは目を細める。

「そんなくだらない理由の為にこの世界を犠牲にしたというのはですか」

「そうだよ」

「……それが、この世界を産み落とした人間のやる事ですか」

「君は少し誤解をしているんじゃないかな」

リリアは剣を降ろし、小さく笑う。それは決してアルセリアを見て笑っているわけではない。ただ、自分自身の気持ち晴れやかだからこそ来る笑顔。

「この世界は生まれたくて生まれてきたの。世界は私が居なくてもいつかは独りで歩いて行く。それを邪魔していたのがヨトなら私にも責任はあるかもしれない。でも、『それがどうした』の？」

「……………」

「自分の力不足を私の所為にしないで。私にとってこの世界は偽りの世界。いつかは帰るべき場所があつて、会いたい人が居た……。ただ、それだけで充分だつた」

目を瞑り魔剣を振るう。リリアの背中に白い光の翼が現れ、それは光の粒になつてフレグランスを包み込んで行く。

「でも、そんな自分の我侭が怖くなつた。止めてしまいたくなつた。でももう止められなかった。だから私は逃げ出した。ヨトは私を現実の世界に返してくれなかった。だから私は 自ら死を選んだ」

光の羽が舞い散る。

それは友の願いを受けた剣。それを飲み込んだ白い光の翼が剣を黒白に装飾していく。

白と黒の交わるコントラストが願いを受けて巨大化する。リリアが瞳を開き二つの大剣を構える。

「私は死んだ。私はもう居ない。だから、今ここにいる『私』は幻……。それこそ、私こそが虚幻の存在。でも今、私は『リリア』と共にある」

光の風を受けて少女は目を瞑る。心の中に渦巻く二つの記憶と二つの心。その両方が、一つの愛を求めている。

「『私』は消えるよ。でも、『リリア』は消させない。『私』^{リリア}はこの世界の可能性。私が愛した大事な私……。だからリリア、謝

らないです」

ゆっくりと、一步一步前進する。

「リリアは謝らないです。自分の罪も自分の存在も世界の全てを肯定する。ゲルトちゃんがりリアにそうしてくれたように……リリアもこの世界と、それから冬香さんを信じます。だからリリアは、私は」

二つの心を重ねて一つの願いの為に歩む。その一步一步に迷いはない。

「一緒に消え去りましょう？ アルセリア。私たちの、忌まわしい過去と共に……。この世界を新しい命に明け渡す為に」

そう、迷いなら既にある。考えるべき事も存在しない。

あるのは戦いのみ。それは憎しみに根差すような愚かしいものではなく。自分たちの存在を確かめるために必要な儀式。

最上階で拳をぶつけ合う二つの英雄の影。二人は殆ど何も言葉を交わさないまま長い間ずっとそうして戦っていた。互いの拳が同時にお互いの頬に減り込み、二人の足が同時に二人の腹を穿つ。

同時に吹っ飛んでダウンする二人。ゆっくりと同時に身体を起こし、男二人は笑いながら向かい合う。

「……やっぱり強いな、お前は」

「恐れ入りましたよ、ナツル様……。貴方は最早ワタクシが始めてこの地にお招きした時とは別人……。その成長、心から喜ばしく思いますよ」

二人は同時に立ち上がる。ナタルがネクタイを緩め夏流が口から血を吐き出す。二人は同時に笑い合い、それから深く息をついた。

「ワタクシは愚かな存在です。愛する人を……ワタクシを生み出してくれた人を守る事も出来なかった」

シルクハット手に取り胸に当てる。瞳を閉じ、過去へ思いを飛ばす。

「ワタクシは貴方。貴方はワタクシ……。ワタクシは貴方の代わりでした。彼女はいつでも貴方を求めていた。その気持ちに気づきつつ応え様としなかった貴方……。二人の關係にどれだけワタクシがやきもきしたか」

「お前が……こつちの世界で冬香を守ってくれていたのか」

「彼女はワタクシの主でした。けれどもワタクシは貴方ではない。同じようで全く同じではない。いえ、全く同じに作られたとしても……そこに意味はなかったのです」

ナタルは元々はこの世界そのものであった。生まれたいと思う意思。それはヨトと精霊、二つの意思へと姿を変えた。

この世に産み落とされたナタルは龍の姿をしていた。全ての龍の頂点に君臨する龍王。原初の精霊。それこそ彼の正体。

「ワタクシはトウカと一緒に様々な場所を旅しました。共に物語を刻みました。ワタクシはトウカに永遠を願っていた。彼女の微笑みが途絶えてしまわない事を、切に……。しかし、彼女は気づいてしまったのです。この世界に入り浸り、まるでオモチャを扱うように世界を簡単に変化させてしまう自分のやってきた事が、どれだけ重要なことだったのか……」

帽子を投げ捨て口元の血を拭う。そうしてナタルは鋭い龍の金の瞳で夏流を射抜く。

「彼女は恐怖に震えた。自分が間違った事に……。そう、彼女は貴方と正反対だった。失敗を恐れる余り行動を起こさない貴方。失敗よりも先に行動し、過ちから目を反らそうとするトウ力……。どちらも本質は同じなのでしょう？　彼女は一つの魂を分かち合ったと言っていました。そしてそれはきつと戯言ではなかったのです」

「じゃあ、冬香は自分の力を恐れて……」

「ええ。ヨトは彼女を手放そうとしなかった。ある意味彼女をそこまで追い詰めたのはヨトだったのかもしれませんが。しかしヨトはただ、生まれたばかりの意思で一人になる事が怖かっただけなのです。誰か一人が悪かったわけではないのでしょうか。勿論その責任の一端は貴方にも在りますしワタクシにも在ります。しかし、誰か一人が背負うべきことではなかった」

ナタルが龍の翼を広げる。黄金の光の輪を背後に神々しい輝きを放ちながら龍神はふわりと浮かび上がり夏流を見詰める。

「アルセリアはヨトの力で存在を肯定されていた神の模造品。ヨトが消えた今彼女が消滅するまで時間はそう多くは残されて居ないのでしょう。ですがワタクシはこの世界の根源に根差す者であり、ヨトの消滅の影響を受ける事はない」

「アルセリアが焦ってた理由はわかったよ。で、お前はそれを手伝ってやりたかったと」

「ええ。何しろ古い友人ですから。消えてしまう前の一瞬、その輝きを放つ舞台くらいは整えてあげたいじゃあないですか」

「なるほどな……」

腰に手を当て夏流は深々と溜息を漏らす。

「じゃあお前、本当に今回の件はどくでもいいのな」

「ええ。どくでもいいのです。たった一つワタクシにとってどうでもよくない事があるとすればそれは貴方との決着に他なりません。いえ、それさえも自分の過去と決別を遂げただけの我侭なのですが」

「いいんじゃないねえの、そういうのも」

腕を組んだまま夏流が答える。笑顔を浮かべ、それから拳を空に掲げた。

「付き合ってやるよ、世界の最後の大舞台を乗っ取って組み込んだ馬鹿喧嘩。ここまでやって派手にやらなきゃ意味ねえからな」

「心より感謝しますよ、ナツル。貴方と出会う事が出来てよかった」

「ああ、俺もだよ。てめえをぶっ飛ばして、心置きなく俺は帰れる　ッ！！」

夏流が拳を構える。ありったけの魔力をそこに流し込んで。リリアが神剣と化した黒白の剣を構える。全ての思いをそこに込め

て。

「神討つ一枝の魔剣レーヴァテインその力を我は担う　　ツ！！！」コーライトニング

「この剣に私がこの世界で見つけた全ての想いと願いを込めて
ッ！！！」

黄金の光が。黒白の光が。大空を照らし上げる。

雲を突き抜け世界の限界を突き抜け未来を照らす真実の光。そこに
込めるのは勇気。そこに輝くのは愛。

二人は同時にお互いの存在をすぐ傍に感じていた。場所は離れてい
ても、心は直ぐ傍にある。

仲間たちが戦っている。その戦いのすべては『ここで二人が勝利で
きるかどうか』にかかっている。ここで勝てなければ全てが無意味
になる。白紙に戻る。

だから敗北は赦されない。故に二人は全てを出し切る。心の奥底か
ら湧き上がるものが魔力だというのなら、この愛も勇気も全ては力
に代わる　　！

「俺はリリアを愛してる　　ッ！！！」

「私は夏流を愛してる　　ッ！！！」

「　　だからッ！！！」

英雄神が雷撃を放つ。夏流はそれを掻い潜り、光の拳を担いで跳躍
する。

光の翼が救世主の身体を大空へと飛翔させる。一息に夏流は拳を降
りぬく。

鋼鉄の姫君が巨大な剣を振りかざす。リリアは二対の剣を低く構え、

体ごと舞うように斬りかかる。

踊るような二つのステップが交錯する。二つの拳が激突する。少年少女は同じ夢を見る。同じ願いをそこに描く。

「ブチ抜けええええええええええッ！！」

「鳴り響けええええええええええッ！！」

「もつと　　！」

「もつと、もつと　　！！」

「もつとだあああああああつ！！」

全てが光に包まれていく。胸の内側から溢れ出す思いは留まる事を知らない。世界に溢れた心は拳に、剣に宿り、眩く輝く力を放つ。夏流の拳がナタルの拳を砕く。リリアの剣がアルセリアの剣を断つ。二人の神は目を見開いた。自らの敗北が決定した瞬間であった。しかし二人の神は同時に微笑む。二人もまた同じように心を通わせていた。夏流の光が、リリアの光が、自分たちの存在を　そして過去から続く世界の闇を薙ぎ払う。

誰かに管理される世界は終わった。そして彼らが育んだ英雄たちは確かに今こうして世界の脅威を前に心を通わせている。憎しみ合う全ての命が一つに交わっている。

それこそが彼らの願い。アルセリアがディアノイアを作った理由。未来の英雄たちを　。神の居なくなったこの世界を守る、真つ直ぐで熱くて火傷しそうな魂。アルセリアが確かに残したかった物は　。幸福の予兆は　。ハッピーエンドの兆しは　。バッドエンドを乗り越える力は　。

今、その願いの全ては、ここに。

光が降り注いでいた。その景色をアイオーンは仰向けに倒れたまま見上げていた。

その体には無数の剣が突き刺さり、全身からじわりじわりと血の雫が零れて行く。同時にアイオーンは感じていた。自分の主が倒された事を。

体の自由が利かなくなっていく。騙し騙し動かしていたその身体も最早限界を迎えた。しかし今、こうして倒れる彼女に後悔はなかった。

アイオーンの視界に彼女を倒した剣士の姿が映りこむ。笑顔でそれを見詰めると、剣士はアイオーンを担いで歩き始めた。

「……どこへ、行くんだい……？」

「決まってるだろ……！ 夏流たちの所だよ！ あいつらが勝ったんだ！ もう、終わったんだよ！」

空を舞う天使たちが輝きと共に塵に還って行く。光の粒がディアノアの空を埋め尽くしている。まるで雪のような、しかし暖かな光の粒。

アイオーンを担いで歩くアクセルの正面、ブレイドが駆け寄ってくる。ブレイドは直ぐに状況を察してアイオーンを担ぐのを手伝い歩き出す。

「……君たち、は……」

エアリオが、マルドゥークが走ってくる。アクセルは何も答えずに搭を上げる。間に合わないかもしれない。それでも今は、搭を昇りたかった。

「どうやら時間切れみてえだな」

レブレキアと戦っていたヴァルカンの身体が突然輝き出す。周囲で天使が光の泡となって消えて行く中、ヴァルカンもその例に漏れずに消えてしまう。

世界に存在する全ての監視者^{ゲイザー}が消えて行く。ヴァルカンは斧を降ろし、光に消えて行く体で孫たちを見詰めた。

「そいじゃあ、まあ、しんどい世界だが……せいぜい頑張れよ」

風が吹き、突然目の前から姿を消してしまうヴァルカン。レブレキアは剣を下ろし、ヴァルカンの消えて行く空を見上げていた。

「……………行くのか？」

搭の途中、踊り場に座り込んだ秋斗が呟く。自らの周囲に倒れこむ無数の機械人形たちとの戦闘で傷ついた救世主の肩から飛び降りた白いうさぎ。

サイファアは人の姿に変身する。座ったまま相棒の姿を見上げ、秋斗は優しく微笑んだ。

「今まで、ありがとう……。サイファア」

「こちらこそ。無理しないで、頑張って生きてね……。たまには素直に成る事も、大事」

「…………余計なお世話だ、バカ」

サイファアは優しく微笑む。その姿に腕を伸ばす秋斗の目の前で風

が吹き、気づけばその姿はどこにもなくなっていた。

伸ばしかけた腕を落とし、秋斗は目を瞑る。その場に大の字に倒れこみ、深く息を付いて悲しみを飲み込んだ。

全ての人々が空を見上げていた。光の泡が世界を照らし上げる。幻想的な、神々しい景色。そこに沢山の悲しみと喜びを織り込んで、誰もが祈りを捧げる。

それは誓い。これからの世界を守り続けて行くと言う事。

それは労い。今までの世界を守り続けてくれてありがとう。

それは弔い。全ての犠牲になった命を、滅びかけた世界へ捧ぐ。空に舞う数え切れない祈り。その全てはきつと今、塔の中で消えようとしている者へと向けられていた。

胸に剣を突き刺され、アルセリアは口元から血を流しながら微笑んでいた。剣を握り締めた勇者は涙を流し、目を瞑る。

「ごめんなさい……」

「何故、謝るのですか……？ 貴方は、『悪』を倒したのですよ……？ 誇り褒められる事ではあれ……謝らねばならないような事は何もありません」

「でも……っ！……」

「行き、なさい……。私の子供たちを……貴方に、託しても……良いの、でしょう……？」

そっと、痛みを与えように。リリアは剣を引きぬいた。傷だらけになった互いの顔を寄せ、少女は小さく頷いた。

「ありがとう……。この世界を、作ってくれて。この世界を……守ってくれて。さあ、行きなさい……！ 貴方の物語はまだ、終わっ

ていないのだから……っ！」

リリアはアルセリアの小さな身体を優しく抱き寄せた。そうしてその口元の血を拭い、それから涙を振り払って駆け出した。

勇者が走り去っていく。階段を駆け上がっていく。それを見送りながらアルセリアは静かに目を閉じた。

長い長い夢を見ていたような気分ですく息を付く。全ての眠りはもう覚めた。世界は今、本当の姿へと移り変わっていくだろう。

神の手を離れた世界。しかしそこで人々は生きていける。そのためにディアノイアがあつた。そのために物語があつたのだから。

「私の身には余る……良い、夢物語でした。世界はやはり……美しいですね」

一陣の風が姿を攫っていく。ゆっくりと解け、光に代わっていく。舞い散る泡は花弁のように。世界の空へと回歸する。

リリアは階段を息を切らして走っていた。激しい戦いで消耗し、足元もおぼつかない。それでも必至に走り続ける。転んでも、纏れても、それでも前へ。

「夏流……っ」

遙か上空、階段は続いている。決着はもうついたのだろうか？ 焦る気持ちを必至で抑え、階段を駆け上がる。

一つ一つそれを駆け上がる度に別れの瞬間が迫っていく。それでも少女は走らずには居られなかった。これまでずっと走り続けてきたそう、それはこれからも変わらない。

一生懸命に走り抜けてきた道、その記憶を一段一段踏みしめて。勇者は辿り着いた。全ての終着、世界の最果て、物語の始まり、そして全てが終わった場所。

そこにはナタルが倒れていた。倒れたナタルの傍には夏流の姿もある。二人はどうやら相打ちだったらしい。凄まじい戦いの後、そして傷だらけの二人だけが残っている。

「夏流さあんっ!!」

倒れた夏流に駆け寄る。リリアの声に反応して救世主はゆっくりと身体を起こした。その傷だらけの身体を気遣う余裕も無く、全力で腕の中に飛び込んだ。

「夏流さーんっ!」

「おぶうつ!? 死ぬっ!?」

「夏流さん! 夏流さん、夏流さん……っ!」

口から血を吐く夏流を無視してリリアは泣きじゃくった。その様子に救世主は口元の血を拭い、勇者の身体を抱きしめる。

別れの時が迫っていた。それはお互いに何も言わなくても判っていた。ほんの、この時間だけでもいい。二人はお互いの存在を確かめ合う。

「リリア、忘れないよ……。夏流さんとの思い出、貴方がここに居たって事……。何もかも、全部!」

「俺も忘れないよ。泣き虫なへこたれ勇者がこの世界に居たって事……。一緒に過ごした時間の全て。いつか時が過ぎて、記憶は薄れて行くのかもしれない。それでも俺は、自分がリリアを好きだった事だけは忘れない」

「うん……。うん……っ」

二人はそうして暫く抱き合った後、ゆっくりと立ち上がった。リリアの涙を指先で拭い少年は苦笑する。

「そんなにぴいぴい泣くなって。もう、俺が居なくても……大丈夫だろ？」

「うん……」

「俺も、リリアが居なくても大丈夫だ。俺、この世界に来て良かったよ。変わったんだ、きつと……。こつちの世界でもきつと幸せには生きていける。でも俺の世界は向こうだから。俺の戦いは、俺の物語は、あつちでちゃんと自分で紡がなきゃ意味が無いから」

「うん……」

「だから、向こうの世界で頑張るよ。皆と過ごした事、学んだ事忘れない。今まで蔑ろにしてきた俺の事、俺の世界の事……全部、ちゃんとするから。ちゃんと頑張れるから」

「……………」

「だから、泣くなって……。大丈夫だから……」

涙が止まらないリリアを抱き寄せ、自分の胸にそっと押し当てる。夏流もまた涙を流していた。笑いながら、しっかりとした口調で話しながら、それでも涙は止まらなかった。

「離れたく、ないよう……」

「……俺もだ」

「ずっと一緒に居たいよう……」

「俺もだよ」

「でも……。夏流さんの事が好きだから……。その夏流さんの頑張るって気持ちを無駄にすることだけは、絶対にしちゃいけない」

「

リリアがそつと顔を上げる。涙で潤んだ瞳で、それでも笑ってみせる。

「リリアも頑張るよ？ こっちの世界で、精一杯頑張る！ 自分の物語を終わりにには出来ないから……。たくさんたくさん、いっぱい色んな人の思いを受け継いだから！ だからリリア、世界の心に応えたい！」

「俺も、リリアの頑張る気持ちを無駄には出来ない」

「「だから

「」

夏流が目を瞑る。その身体はゆっくりと、光になって解けて行く。いつの間にか階段を登ってきていた秋斗が階段に腰掛けたまま溜息を漏らす。そうして光に成り始めた自分の掌をじつと見詰めた。秋斗の視界に階段を登ってくる仲間たちの姿が見えた。しかし少年はその道を通そうとはしなかった。せめて最後の瞬間、あと少しだけでも二人きりにしてあげたいという彼にしては珍しい御節介だった。

夏流の背後、傷だらけのナタルが笑う。そうしてどこからともなく取り出したシルクハットを頭の上に乗せてタキシードの男は空に指を鳴らす。

天空に巨大な門が開かれる。全ての光の泡がそこに吸い込まれていく。全ての悲しみも願いも連れて、夏流の身体さえもそこに飲み込まれてしまう。

夏流は無言でリリアの唇を奪う。二人は抱き合ったまま長い間そうして唇を重ねていた。ナタルが空に浮かび上がり、門の前に立つ。別れの時を告げる光。夏流はリリアの頭を撫で、それから心からの笑顔を浮かべる。

「……それじゃあな。へこたれ勇者」

夏流が背を向けて歩いていく。リリアは胸に手を当ててその後姿を見詰めていた。

少年の姿はゆつくりと、一步一步空に舞い上がっていく。秋斗の身体が一足先に解けて消えて行く。少年はアイオンを背負ったアクセルに笑いかけ、それから指を鳴らした。

光と成って在るべき世界へ消えて行く秋斗。その友とそして相棒であるナタルが待つ門へ夏流は舞い上がっていく。

「……夏流さん。夏流！ 夏流 ツ！！」

リリアは走り出していた。見送るだけのつもりだったのに。想いが止められず、待ちきれず、走り出す。

途中で盛大に転んでしまった。それでも立ち上がって走り続ける。搭の端、それ以上先は存在しない場所まで。

「忘れないから！ 絶対絶対忘れないからっ！！ さようならっ！！ また！！ 絶対また、逢えるからあああああっ！！！！」

夏流が最後に一瞬振り返る。救世主はその時微笑んだような気がした。それはリリアの思い込みだったのかも知れない。或いは真実だったのかも知れない。

空に消えてしまった全ての光がはじけて門を掻き消して行く。雪のように降り注ぐ光の雨の中、仲間たちは最上階へと足を踏み入れた。

「……ニーチャン、いっちまったなあ」

「ああ。ヤツらしい、あつけない最後だ」

「夏流君……今までごくろつさまでした」

「ナツル~~~~ツ!!!! 元気でなああああああつ!!!」

「……………ありがとう、夏流」

仲間たちの声が空に響き渡る。リリアは胸の前で手を組み、静かに祈りを捧げる。

そんなリリアの体からゆっくりと、影が抜けるようにして本城冬香の姿が現れた。冬香の魂とも言えるその光を前に二人の存在は向かい合う。

冬香はリリアに微笑みかけ、それから光となって世界に広がっていく。それと同時にリリアは両手を広げ、天高く聳え立つ塔の上から静かに歌い始めた。

それは、再生の歌。神の力の全てを使って世界を痛みから解放する力。滅びかけた世界に、荒野と化した大地に歌声が響き渡る。

死に掛けた人々は次々に息を吹き返し、全ての傷が癒えて行く。大地には緑が戻り、空は晴れ渡り全ての世界の淀みが晴れて行く。

「この歌……？ ママが、歌ってた……？」

「きつと、リリアが歌っているんだよ。この世界を作った時のように……。命を生み出す力を持つ、彼女だから……」

地上から空を見上げるレプレキアとリリア。リア家に伝わる子守唄、創造の歌が流れる中二人は見詰め合い笑い合う。

リリアという少女が生まれた時から持っていた究極の力。その全てを燃やしつくし、世界を再生させる。命を一瞬で奪いつくす虚^{リヴァ}幻魔法^{イヴ}。それは究極の回復魔法でもある。

触れる全ての命を再生させる究極の歌声。死者の命さえも救い、世界を潤して行くだろう。

本城冬香という彼女の力の源が消えて行く。リリアはそれから長い間ずつと塔の上で歌い続けていた。

真実^{リ・ヴァース}の空白の日が世界を満たして行く。一人の少年の事を想い続ける。きつとこれからも、ずつと。

「
ありがとう、夏流」

消えてしまった冬香。リリアはその場に座り込み、両手を空に伸ばす。

晴れ渡る蒼穹の空。その日、世界は生まれた意味を知る。そして勇者の少女は己の物語の新たな始まりを予感していた。

世界は流れ続ける。永遠に。その目先にあるハッピーエンドを、その向こうにあるバッドエンドも超えて。

少女は空を見上げ続けた。それからずつと、見上げ続けた。それからお腹が音を立て生きている事を思い出させるから。仕方が無く、立ち上がり。

「……………よしっ！」

元気な笑顔で振り返る。少女は去っていく。塔の最上階から。
それが原初に記されたラストエピソード。それはつまり。
はじまり。 すべての 虚

虚のディアノイア

く 完 く

虚幻の日(6)(後書き)

くそれゆけ！ ディアノイア劇場Z

最終回

リリア「……おわっちゃった」

ゲルト「終わりましたね」

夏流「終わったな」

三人「……」

ゲルト「ま、まあ……何はともあれ完結記念ということで」

リリア「なんだか燃え尽きちゃって何もする気が起きないよ」

夏流「俺もだ」

ゲルト「も、もう二人ともしっかりしてください！ まだエピローグが残ってるんですよ!？」

リリア「え？ まじで?」

夏流「あ、そうなんだ」

リリア「でも終わっちゃったよね……」

夏流「終わっ たな」

ゲルト「……え？　こんなでいいんですか、このコーナー最終回なのに……」

夏流「いいんじゃないかな？」

リリア「なんかやることは大体やった気もするのですよ」

ゲルト「ま、まあ……それもそうですが」

夏流「そんなわけで」

リリア「今まで連載にお付き合いいただきありがとうございますがとうございましたっ！！　本当に本当に長くなってしまいましたか、ここまで読んでくれた人はみんな愛してる！」

ゲルト「ありとあらゆる意味で未熟でしたが、少しでも面白いと思っ ていただけたのなら幸いです」

夏流「むしろ本当にお疲れ様でした。もうちょっとだけ続きます」

リリア「むふふ、完結記念でリリアちゃん今までありがとうメッセージが山のように来るに違いないんだよ！　今のうちにお返事を考えておかないと」

ゲルト「……気楽ですねえ」

夏流「っーか、もう俺たち出番ないんじゃないの？　もう劇場これでラストなんだろ？　じゃあ返事するトコないじゃん」

リリア「あ」

ゲルト「……今気づいたんですか？」

リリア「虚幻のディアノイア2nd P a r a d xとかに続く！」

二人「それはない」

リリア「にやーっ！」

ゲルト「なんだかすごくグダグダですが……」

夏流「ま、むしろ劇場らしくていいか」

リリア「それじゃあみんなーっ！！　いつかまたリリアの事を思い出してねー！」

三人「……今までご愛読ありがとうございました！」

リリア「神宮寺先生の次回作にご期待ください……！」

夏流「俺たちの戦いはまだ始まったばかりだ！」

ゲルト「ええ？」

エピソード

夏流、元気ですか？ 私は多分、元気ではないでしょう。

この手紙が届いたら、秘密基地に行ってみてください。夏流に見せたかったものが、そこにあります。

何もかも、ただそこに残してきました。夏流ならきっと私の思いに気づいてくれると信じています。

もしかしたらとても大変な事かも知れませんが。夏流を苦しめる事になるかも知れません。

それでも私は、夏流に託したいのです。お父さんでも、お母さんでもなく、他の誰でもなく……夏流に。

あの夏を覚えていますか？ 私は今でも鮮明に思い返す事が出来ます。

なっちゃん。きっと、あの時のなっちゃんは、正しい事を言っていたんだね。

そろそろ、お別れです。書き始めたらきりがなくなっちゃうから……名残惜しいけど、これまでです。それじゃあ、お元気で。

最後に……さようなら、なっちゃん。ありがとう。

本城 冬香。

エピソード

その冒険はそんな冬香からの手紙で始まった。彼女がこの手紙を俺に寄越したのは、一体いつ頃だったのだろうか？

きつと自分がしでかしてしまった事の重大さに気づいた直後あたり

だろうと俺は思った。それはつまり、きつと俺に助けを求めていたという事だ。

そう考えると今でも憂鬱な気分になるが、いつまでも落ち込んではいられない。冬香は自殺した。その事実だけは現実世界に戻っても変わらないのだから。

冬香が俺に何を残し、何を伝えたかったのか。それは考えれば考えるほど深みに嵌る泥沼だ。でも俺はその答えを自分で見つけ出せると信じている。

手紙をぼんやりと眺めながら欠伸をする。いつの間にかこれを肌身離さず持ち歩くようになっていたあたり、我ながらかなり女々しいのだが……。

「またそんなもん眺めてんのか、おセンチ野郎」

背後から何者かに肩を叩かれる。まあこんなに強く肩をぶつ叩いてくるのは一人しかいないわけだが。

「秋斗……。もう少し落ち着きつてもんがもてないのかお前は。もう二十歳だろうに」

「あ？　落ち着いてんじゃねえかよ、充分」

そついう態度を落ち着いているとは言わない。

時が流れるのは早いもので、俺が現実世界に戻って二年半。今は地元に戻って大学に通っている。

師範せんせいの家に住んでいても別に良かったのだが、すっかり異世界で鍛えた技を披露してしまった事をきっかけに居づらくなってしまったのだ。

あんまりにも俺が上達したもんだから一体何が起きたのかと根掘り葉掘り聞かれそうになり、ほぼ逃げ出すような形で実家に戻った。

とりあえず俺の目先の目標は大学をきちんと留年せずに卒業して就職する事、それから親父と仲直りする事だ。両方とも世界を救うとかそういうのに比べると大分見劣りするが、これがなかなか難しい。親父はそもそも俺を目の敵にしているし、今更あの歳になつて素直に仲直りも出来ないんだろ。大人というやつは時に不便なものだ。大学は大学で秋斗にあちこちつれまわされる所為で中々勉強に打ち込めないし、困つたものだ。まあこっちに帰ってから一先ず秋斗とは元通りの関係に戻れただけマシなのだが。

「昼飯どうすんだ？ 手紙見ても腹は膨れねえだろ」

「あー……。俺、今日はこれで上がりだ。家に帰ってなんとかするよ」

「ハッ！ そうかいそうかい、じゃあ俺はお邪魔出来ねえな」

ニヤニヤ笑いながらそんな事をほざく秋斗。その向こうで見知らぬ女性が手を振っている。

「あれ誰だ？ 明らかにお前を呼んでいる気がするんだが」

「あ？ 彼女だけど」

「え？ お前、あれ？ あの子彼女だったっけ？」

「あー、お前に紹介したのもう別れたから」

早っ！？ 僅か三日でアウトか！？ 最短記録更新だな……。せめて一週間は持たせろよ……。そんな事を考えるのだが勿論口にはしない。秋斗は残念ながらモテ

るのだ。性格も根性もひねくれている事を理解してやれる心のひろい女性が現れる事を友として切に祈る……。

「じゃ、俺様はもう行くぜ」

「ああ。また明日だな」

「気が向いたらな」

お世辞にも真面目な生徒とは言えない秋斗が彼女（新）と一緒に講堂を去っていく。その後ろを見覚えのある彼女（旧）がついていったような気がするのだが、見なかった事にしたほうがいいのだろうか。

なんだか疲れた……。秋斗といると退屈しないんだが、逆にトラブルが多すぎて困る。何でもかんでも最終的には俺が片付ける事に成るんだし……。

一人で大学を後にする。大学からは車で実家まで帰宅する。やたら豪勢な家を前に溜息を漏らす。

こんな家に住んでたんじゃ肩がこるよ……。冬香に押し付けて逃げた自分が恨めしい。

結局俺は三流大学でだらやってるだけだし、なんだかなー。これでよかったんだろうか。まあ別にいいか。適当に納得して家に上がる。

昼時だからか台所からは食欲をそそるいいにおいが漂ってくる。部屋に戻る前に顔を出すと、昼ドラを見ている母親の向こう側でナタルがフライパンをふっていた。

「おや、おかえりなさいナツル」

「ただいま……。お前完全に執事みてえになってんぞ……」

「ははは、そのようなものでしょう。居候の身ですからね。これくらいはさせていただかないと」

さて、なぜこいつがここにいるのかという話になるわけだが……。ラ・フィリアで意識を失った後、俺はあの古ぼけた館の屋根裏に戻った。時間は殆ど進んでいなかった。あれだけ向こうに居たっていうのにまだ冬休み期間中だったのだから驚きだ。

例の一件以来、向こうとこちらを繋ぐ力は途切れてしまったらしい。ナタルでも戻れなくなったらしく、こつちの世界に何故か一緒に来てしまったこいつを家に置かざるを得なくなったのだ。

白いワイシャツに黒ズボン、花柄の可愛いエプロンを付けたナタルはどう見ても超イケメンである。女みたいな顔をしているくせに長い髪を今は三つ編みにしているから余計になんだか嫌だ。

「ナツル、今日は貴方の好きなオムライスですよ」

「オムライス好きになった覚えはないんだが……」

「あら、いいじゃないオムライス。私は大好きよ、ナタル」

「これはありがたいお言葉……。奥様、味見しますか？」

そしてうちの母とナタルはやたらと仲が良い。まあ家事全般を何でもこなすナタルが一番貢献しているのは母なのだろうが。

父は内心穏やかではないのか、ナタルの前では最近頑張って家事を手伝ったりしている。良い傾向なのかおかしな傾向なのかわからないが、ナタルのお陰で家の空気は少し変わったようだ。

「そっいえばバイトを始めたんですよ。ナツル、職場まで送って頂

けますか？」

「バイトって何をだ？ お前にも出来るようなのってあんの？」

「はい。ホストのバイトです」

さらっとなんかいっとる。ああ、オムライスうまいなあ。

「不肖ナタル・ナハ、このままただの石潰しであるつもりは在りませんよ！ 今日からじゃんじゃん稼いで、本城家に貢献致します！」

充分うちは金持ちなんだが。

「もういいからお前も食べよ……」

「おっと、そうでしたね。今日は卵を変えてみたんですが、お味はいかがですか？」

俺の前の席、テーブルに付いたナタルが嬉しそうに微笑を浮かべながら顔を寄せてくる。何となくム力ついてその顔面に拳を減り込ませる。

大体まあ、そんな感じの日々。何かが劇的に変わったわけではない。あんな大冒険を体験して直、こちらの世界は平和極まりない。

しかしそれを退屈だとは思わない。俺はこの世界で生きる。自分の物語を生きる。変な厄介者が一人増えたが、それはまあそれで……。食事を終えて部屋に戻る。昨日は遅くまで秋斗に付き合わされた所為で寝不足だ。ベッドの上に寝転がり目を閉じる。

昔はそれこそ毎日のようにあっちの世界の夢を見た。皆が元気でやっている夢だ。リアの事も思い出す。相変わらずへこたれで、夢なのにべそかいていた。

なんというか、それでこそ我らのへこたれ勇者様という感じが。変わらないで居てくれる事もあるとありがたい。夢の出来事なのにそんな風に思う。

今でもふと、思い返したようにあの洋館へ足を向ける事がある。何ヶ月かに一度、昔はもつと頻繁に。ただ足しげくそこに通ううちに俺は思い知るのだ。向こうの世界とのつながりは消えたのだと。

もう戻れないし出会う事もない皆。それでも俺は思い出を胸に生きていける。だから大丈夫。

それなのに何故かまたその場所に足を踏み入れる。迷いの森を抜けて洋館へ。今の俺にとってはもうこれだけでも大冒険だ。

人並外れた力なんて一つも無いただの俺に戻った俺。思えば全ては夢のようだった。虚幻の世界で体験した事が全て俺の夢だったのならそれはそれで笑えるのに。

洋館の鍵を外して内部へ。階段を昇り廊下の梯子を登って屋根裏部屋へ。俺は時々そこで一日を無為に過ごす。本を読みふけったり、ぼんやり考え事をしたり。

文字通りそこは俺の秘密基地。昔と変わる事の無い、確かなもの。机に突っ伏して眠りに付く。ここで眠れば、向こうの世界を夢見られる気がして。

「リリア……」

君を好きだつていう気持ちは今でも変わってない。でももう会えないから、前に進んで行く。

退屈で平穏でどうしようもなくただっ広い世界を俺はやっと自分の足で歩き始めたから。

全ての人々に感謝を。そうして俺はいつしか記憶を薄れさせ、この未練さえも断ち切る事が出来るのだろうか？

ゆっくりと立ち上がる。夢はいつか覚めるから。立ち上がり上着を羽織って部屋を出る。扉を閉める。階段を下りる。

「えっ？」

誰かの声が聞こえた気がして振り返る。慌てて階段を駆け上がり、廊下を走って梯子を昇り扉を開いて屋根裏部屋へと顔を覗かせた。そう、俺の冒険はこの場所から始まったんだ。それはきっとこれからも続いていく。ずっとずっと、続いていく。

「大丈夫か？」

梯子を上る、崩れた本の山に埋もれるようにして転倒しているそいつに俺は歩みより、そつと手を伸ばした。

そいつは顔を上げて満面の笑顔で俺を見る。懐かしい気持ちで俺は彼女の手を握り締め、本の海から引っぱり上げた。

軽い、しなやかな身体。彼女が俺の名前を呼ぶ。俺は彼女の手を握り、彼女の名前を呼んだ。

ここから始まった全て。ここで終わった全て。また何度でも始められる。物語を紡いでいける。

「久しぶり。へこたれ勇者様」

彼女が微笑む。小さな口で言葉を紡ぐ。耳を澄ませ、その一字一句を聞き逃さないように俺は目を閉じた。

リリア・ライトフィールド。勇者で魔王でお姫様で………ついでに妹で神様で。

泣き虫でへこたれで誰よりも頑張り屋さんな白い勇者の少女に、俺

は確かに出会った

。

アンコール（前書き）

これは本編の曖昧な終わりが嫌だあああ！！ という人のためだけに存在するもう一つのエピローグです。

もしかしたら期待はずれな内容になっている可能性もありますので、もういいや！ という方だけ読み進めましょう！

アンコール

「先生、おはようございます!」

「おはよう」

嘗て世界を空白に塗りつぶそうとする戦いがあつた。それは後の歴史に名を刻む世界の安定を求めた神と異世界より現れた自由を求め

た救世主の戦い。

人の身を超越した存在同士の決戦。しかしその戦いが終わった時、そこに立っていたのは人間だった。

勇者王リリア。この世界に生きる人間ならば知らぬ者は居ないとまでされる最強の英雄。千の魔法を使いこなし、その剣の一撃は空を割る程の威力であったと伝えられている。

魔物をばったばったと薙ぎ払い、神をちぎっては投げちぎっては投げ、最終的には古代兵器であるラ・フィリアさえ一人で奪還したとかなんとか、そんな噂が流れている。

それが根も葉もない噂である事を当時の戦いを生き残った仲間を知っている。しかし噂は噂を呼び、勇者王リリアと呼ばれるその人物がどのような姿をしていたのか、脚色され続ける幻想の姿に最早正解は見えなくなっていた。

世界を救った英雄。勇者。女王。女神。あらゆる言葉で表現されるリリア。しかしその姿はラ・フィリアでの決戦以降霞のように消えてしまったのである。

彼女が一体どこに行ってしまったのか、それを仲間たちでさえ知らない。しかしどこかでリリアは元気にやっているだろう。そんな風に誰もが考えていた。

「おはようございます、学園長」

「おう！ おはよう、ゲルト先生！ 今日も元気になー！」

につこりと微笑を浮かべ、スーツ姿のゲルト・シュヴァインが微笑みを返す。

英雄学園ディアノイア。リリアが齎したと呼ばれる奇跡の力、^{リヴァイヴ}虚幻魔法により世界は再生した。最後の決戦の地、そこで命を落としてしまった戦士たちさえも蘇ったとされている。

事実彼女、ゲルト・シュヴァインはその戦いの直後にごく平然と目

を覚ました。イザラキの地、ベッドの上に寝転がっていたゲルトが目覚めた時、母は大層驚いたという。

ディアノイアの職員室、自分の机の上に鞆を置いてゲルトは窓辺に立ち学園を見渡す。今日も晴天快晴。生徒たちの声が明るく響いている。

ゲルトが学園の教師になったのはある意味偶然の産物であった。一度は完全に崩壊したディアノイアの制度を整えるために活動を開始したアクセルに付き添い、彼と共に学園の復興に参加したのである。尤も、それはゲルトにとっては暇つぶしの類のつもりだった。リリアもいなくなり、戦いは終わった。しかし問題は山積みで何から手をつけたらいいのかもわからない。呆けるゲルトを強引に学園に引き込んだのがアクセル・スキッドであった。

「今日もいい天気ですね」

「おう、そうだなあ」

適当な返事は床から聞こえてきた。ゲルトの足元、腹筋を鍛え続けているソウルの姿がある。

立派な髭を蓄え、今では学園長に就任したソウル。その視界に自分のパンツが映っている事に気づきゲルトは無言で学園町の顔面にハイヒールを減り込ませた。

「そういえば、ルーファウスが呼んでたぞ？ 研究室にいるそうだから授業の前に顔を出して来い」

「はあ……。ルーファウスがですか。わかりました」

額から血が流れているのにも関わらずソウルは平然と爽やかな微笑を浮かべている。最早何を言っても無駄だと割り切りゲルトは溜息

と共に職員室を後にした。

学園の復興に一年。そして教師になってから二年の月日が流れた。新しくなったディアノイア、しかしその場所は昔と何一つ変わる事はない。

廊下を歩くゲルト。擦れ違う生徒達の姿。学園は新しい歴史を刻み始めた。

古代兵器としての力を失ったディアノイアは今は嚴重に封印を施され眠りにについている。勿論、ふざけた変形などする事は無い。元通りの平和な学園……退屈なその日常をゲルトは何よりも愛していた。ルーファウスの研究室に辿り着き、ノックをしてから扉を開ける。そこにはスーツ姿で立つアクセルの姿もあった。

「なんだ、ゲルトも呼ばれてたのか？」

「……アクセル・スキッド。戦闘学科の授業はもう始まりますよ？」

「今日は自習だぜ！ まあそれは兎も角、お前もこっち来いよ！」

「はあ」

ルーファウスの机まで歩み寄るゲルト。そこにはボロボロの紙きれが転がっていた。

それが何なのか一瞬理解に苦しむゲルト。しかしそれを手にとつて見て直ぐに気づいた。それは どこかへ居なくなってしまうたりリアからの手紙だった。

「何故かぼろっぼろで、何度も転送されたらしくてこんな有様だけど、どうやら俺達に宛てた手紙らしいんだよ」

「それでも一応魔法で修復を試みたんだがな」

ルーファウスが肩を疎める。しかしそんな事はお構いなしにゲルトは手紙を開いていた。

「ゲルト・シュヴァイン様、並びにアクセル・スキッド様……。学園に居るであろう貴方達にこの手紙を託します……」

ゲルトちゃん、アクセル君、元気にやっているでしょうか？ リリアは今北方大陸からオルヴェンブルムに戻る船の中でこの手紙を書いています。

北方大陸ではブレイド君と再会しました。今では魔物を討伐するブレイド傭兵団と名乗っているみたい。元気に今でもあちこちを走り回ってるよ。

そうそう、ザックブルムの復興は順調みたい。レプレキア君も頑張ってるみたいけど、アリアちゃんはどうかなあ？ これからオルヴェンブルムに戻ったら少し様子を見てきたいと思います。

北方大陸はザックブルムに統一されるみたいけど、南方大陸はまだまだ色々な国が犇っていて危ないです。各国が力を取り戻してきた今くらいが一番バランス管理が難しいんだろうね。

今、リリアは悪そうな人をばったばったとやっつけながら旅をしています。最近は人の親切さと温かさを再確認する毎日です。お金が無くて何度行き倒れたことが判りません。

「リリアちゃん……相変わらずだな……」

「馬鹿が加速しているんじゃないか、あの小娘……」

旅は兎に角お腹が減ります。でもいろいろな物を見る事が出来てとても楽しいです。この世界には沢山の国が在ります。北方と南方、

二つの大陸だけでもかなりの数でしょう。

最近、大陸の外側に対する興味というものが出てきました。風の噂で、ディアノイアでも同じような計画が練られている事を聞きました。確か、『勇者探検隊』だったかな。

生徒有志で世界の開拓を始めるなら、リリアもそれに参加したいなとも考えています。それがいつやるのか決まったら連絡を下さい。

「住所不定のリリアちゃんにどうやって手紙返すんだ」

「……さあ」

あ、そうそう。リリアはこれからティパンに向かいます。魔術教会でメリーベルさんと再会する予定です。長年計画していた秘密のプロジェクトが成功するかもしれないんだ。

そうになったらきっとゲルトちゃんたちも喜ぶだろうと思います！リリアが責任以って計画を実行してくるから安心してね。ちなみに何が起るのかはまだ秘密。

「教えるよ!？」

そんなわけで、リリアは今平和に世界を旅しています。元気にやってるし、そのうち気が向いたらディアノイアにも遊びにいくから待って下さい。

そうそう、旅の途中で友達が一人増えました。あとで紹介しに行きます。それでは。

「……なんというか、リリアらしい手紙ですね」

手紙を折りたたみゲルトは小さく溜息を漏らした。アクセルとルーファウスもなんともいえない表情を浮かべている。

そんな三人に授業開始時間を告げる鐘の音が届けられる。三人は同時に立ち上がり、ゲルトは手紙を机の上に戻した。

「あのリリアの事です。どうせそのうちへらへらしながら戻ってくる事でしょう」

「だなあ……。しかし、リリアちゃんの無事が心配だ。いや、リリアちゃん本人よりもそれに巻き込まれる周りの事が……」

「戻ってきたら絶対に一発は殴ります」

笑顔で拳をぎゅうつと握り締めるゲルト。その様子に男二人は黙り込んでしまった。

ゲルトはルーファウスの研究室を出て廊下を歩く。自分の生徒たちが待つ教室へ。

廊下から見上げる空は青い。リリアもきつと同じようにどこかで空を見上げている。そう信じられるから、ゲルトはリリアを不安に思ったりしなかった。

その青空の続く場所、遥か南東の交易都市ティパン。そこで同じく青空を見上げる女の姿があった。

長い栗毛色の髪を風に靡かせ、旅慣れた格好で窓辺に立つ女。暢気な様子で鼻歌を口ずさむ女の頭の上、懸命によじ登ろうとする白いうさぎの姿があった。

「サイファー、頭に爪立てないでよう」

「……うん、ごめん」

女はうさぎを抱きかかえると頭の上に乗せて笑う。そのままその場でくるりとターンして見せるとうさぎは眠たげに目を瞑っていた。

魔術教会本部、くじらの腹^{バテンカイトス}。その廊下を歩くリリアの姿があった。二十歳になったリリアは昔と変わらない無邪気な笑顔で空を見上げる。

その背後、通路をうろろするリリアに近づく影があった。黒いスーツ姿のメリーベルが車椅子を押して接近する。それに気づいてリリアは振り返った。

「あ、メリーベルさん！」

「ここ、色々な場所に繋がってるから不用意にウロウロすると飛ばされちゃうから気をつけてって言ってるでしょ？」

「あ、そうだったっけ？ えへへ、次からは気をつけま〜す」

溜息を漏らすメリーベル。その膝の上にサイファーを乗せ、リリアは車椅子を押して歩き出す。

「実験、成功したの？」

「まあ、大体は……。あとは実際に起動してみるだけだけど」

二人が向かったのはメリーベルの実験室だった。その扉を開くと、部屋の中央には巨大な魔方陣が描かれている。

メリーベルが三年間研究し続けた成果がその魔方陣^{ワールドトラス}。世界超越^{トゲート}魔法、それがその魔法の名前であった。

神の存在が消えた三年前、この世界は夏流の世界とのつながりを隔てられてしまった。強固な世界の壁を越える力は既に今のリリアには存在しない。今のリリアは、ただの勇者なのだから。

しかし、余りにもそれでは不憫だとメリーベルはずっと研究を続けていたのだ。成果そのものは半年前には既に出ていたのだが、世界

を点々とするリリアを捕まえるのは難しく、ようやくこうして邂逅するのには長い時間がかかってしまった。

魔方阵の中央に躍り出るリリア。その足元にぴよこんとうさが跳ねる。二人が立つ魔方阵がうつすらと輝きを放ち不思議な風がリリアの髪を揺らす。

「もう直ぐに発動出来るの?」

「うん。でも、まだ戻りの手段が見つかってない」

「じゃあ駄目じゃない……?」

「それを探してきて欲しい。多分、ナタルが一番詳しいと思うから、まずはナタルを探して。それにまずは一方通行でも向こうに道が開ける事でこっちからも召喚が出来るようになるかもしれない」

「じゃあ、リリアは向こうでうさぎさんを捕まえて、あとは待ってればいいの?」

「そういうこと。問題は転送座標なんだけど……」

そう呟いたメリーベルにリリアは自らの右腕を差し出す。そこには銀色に輝く鎖のブレスレット。

「これと同じ反応を探して」

「……まだつけてると思う?」

「うんっ!」

「……判った。それじゃあ、どうなっても知らないけど、ブレスレ
ットの反応がある場所にリリアを転送するわ。言っておくけどこれ
禁術だから、失敗しても責任は取れないから」

「いいよ。リリアが自分で決めた事だもん」

につこりと微笑むリリア。魔方陣の中心に立つリリアを光が包み込
んで行く。車椅子に座ったままのメリーベルが魔力を発動させる。
魔方陣の輝きにリリアの姿がかすんで行く。部屋全体を真っ白に染
め上げるような眩い輝きが放たれた直後、リリアの姿は世界から消
滅していた。

光の海の中、リリアは目を閉じて落ちて行く。上下左右の感覚が無
くなっていく。自分が何者なのか、どこにいるのかさえ判らない。
それでも彼女は信じ続ける。遙か彼方、世界は隔てられていたとし
ても、巡り合えるのだと。神様の力で隔てられても、何度だってそ
れを超えてきた。

輝きの中、落ちて行く。眩い螺旋の中、リリアはそこで確かにもう
一人の自分の影を見た。

アンコール

誰かの声が聞こえた気がして振り返る。慌てて階段を駆け上がり、
廊下を走って梯子を昇り扉を開いて屋根裏部屋へと顔を覗かせた。
そう、俺の冒険はこの場所から始まったんだ。それはきっとこれか
らも続いていく。ずっとずっと、続いていく。

「大丈夫か？」

梯子を上る、崩れた本の山に埋もれるようにして転倒しているそいつに俺は歩みより、そつと手を伸ばした。

そいつは顔を上げて満面の笑顔で俺を見る。懐かしい気持ちで俺は彼女の手を握り締め、本の海から引つ張り上げた。

軽い、しなやかな身体。彼女が俺の名前を呼ぶ。俺は彼女の手を握り、彼女の名前を呼んだ。

ここから始まった全て。ここで終わった全て。また何度でも始められる。物語を紡いでいける。

「久しぶり。へこたれ勇者様」

彼女が微笑む。小さな口で言葉を紡ぐ。耳を澄ませ、その一字一句を聞き逃さないように俺は目を閉じた。

リリア・ライトフィールド。勇者で魔王でお姫様で……ついでに妹で神様で。

泣き虫でへこたれで誰よりも頑張り屋さんな白い勇者の少女に、俺は確かに出会った。

「久しぶり、夏流さんっ！」

リリアが満面の笑みで言う。俺は彼女頭をくしゃくしゃに撫で、それからやたらと背の伸びたりリリアを強く抱きしめた。

アンコール（後書き）

というわけで、**ディアノイア**はこれにて決着となります。

SFがメインの僕としてはこの手の異世界ファンタジーというのは不慣れでてこずる事も多かったのですが、こうしてやりきってみると中々興味深い日々でした。

一月一日に始まったディアノイアは四ヶ月を経て110話にて完結となりました。ここまで馬鹿みたいに長い作品を書き上げられたのも読者様のお陰でございます。

と、毎回長期が終わると思うのですが、今回は特に色々な人との新しい出会いがありましたね。そういうのもまた長編を書いて良かったと思います。

自分の歴史では考えられない読者数だったり感想もいっぱいいたりアンケートしたり占いしたり本当に色々在りました。色々在りすぎて本当に楽しかったです。

何より自分がやりたくて始めたディアノイア。〇〇のシリーズでは三作目となりました本作、思い入れは流石に深いですね。

途中ロボットが書きたくて何度投げっぱなしになったことか（笑）

その度に読者様の感想に支えられて必至に書きまくって来ました。ほぼ毎日更新するぞおおおおおと気合を入れたわけですが今冷静に振り返ると物凄く頑張りました僕。

色々な登場人物に広すぎる世界観、纏まる気配のないシナリオ、ほのぼのする気がない登場人物たち。色々な紆余曲折がありました。最終的には暗い決戦になるのは分かっていたのですが、中盤までは何とかあの序盤のほのぼのしたカンジを続けようと思っていたのですが、途中で諦めて自分らしくやることにしました。

異世界ファンタジーは激戦区で面白い物や人気の物は沢山あります。そういう作品の中でどれだけ自分を出せるか、というのが今回のテ

ーマでもありました。

色々な意味や思いを込めて執筆し続けた四ヶ月間、とても充実していました。ちょっと作品についての思いを語ってというメッセージとかもあつたので少しだけ語って見ます。

異世界ファンタジーって主人公が異世界に行く以上、エンディングは別れしかないのだと僕はずっと考えていました。今もそう考えています。

結局他の世界なんて他人事です。ディアノイアはそういうものをどうにかしようとして、だったらいつそ最初は主人公は異世界をなんとも思わない状況から始めようと考えました。

夏流は今までの主人公とは違ってかなりキャラが目立たず不安定なヤツでした。それが物語を経験して行く中でいかに成長し、変わっていくのか。

主人公にはどうにかしてこの世界で得るものがあつて欲しかった。しかし結局異世界なので他人事です。そこで何が学べるのか、今でも正直よく判っていません。

妹が既に死んでいたり、結局夏流は異世界に行っても得るものつて殆ど無い。だから結局得られるものは経験と絆だけなのです。

オチとしては既に最初からああいう形になることは確定していました。異世界ファンタジーってのは難しいです。特に僕は現実にまで幻想が浸食してくるのはあんまり好きではないのです。

ナタルが現実に残る、リリアがやってくる……それはもしかしたら夏流の夢なのかもしれません。出来ればそうであってほしい。でもきっと最後まで諦めずに頑張った彼らなら、諦めないでまた巡り合える方法を考え付く氣もします。

物語のエンディングは存在しない。この物語は特に物語の中の物語なわけです。夏流はいつか居なくなります。その時点で世界は終わるわけではないでしょう。

たとえ僕がこうして執筆を終えたとしても続くものがあるかもしれない。もしかしたら読者様の中で未来が空想されるかも知れない。ハッピーエンドはそうした目先の幸福をイメージできるかどうか。現実でもそういうことはあるんだと思います。結局自分の物語は自身が生きていくための物。だからそれを投げやりにしたり他人任せには出来ない。自分で選んで自分で走りぬけばその終わりがバッドでも後悔はしないはずです。

夏流は特に特別な存在ではありません。三流大学生になってそのうちテキトーな企業に就職する事でしょう。それでも人生は人生、それを選ぶのは彼の自由です。

世界という言葉が多用しました。しかし世界とは曖昧な言葉です。よく聞く言葉ですが結局世界って何？ そう考える事も多いと思います。

この場でいう世界というのは色々な意味を持つのでしょうか。でも結局世界は自分自身です。自分の見聞きするもの、自分の描く物語、それが世界なのかもしれません。

そういう気持ちで世界を連呼してみましたが、皆さんにはどのように映ったでしょうか？ あんまり深く考えるような作品でもないのデキトーに読み飛ばした人はそれが正解です。

よくある異世界ファンタジーとは一風変わった自分のファンタジー、そういうものを目指して始めたこの作品。どのような物語を描けたのかは正直自分にはわかりません。

ですが皆さんの心の中には既にそれぞれの『世界』が見えていることだと思います。そしてそこに名前をつける権利は読者様全員が持っているのです。

さあ、この名前もなかった世界に貴方の色で名前を刻んで見ませんか？ そんなわけの判らない言い訳のような台詞であとがきとさせていただきたいと思います。

この長い長い小説をここまで読んでくださった皆様には本当に感謝

の一言しかございません。お帰りは気をつけて。そしてまたどこかで巡り合える事を楽しみにしております。

2009/04/06 / 神宮寺飛鳥

なんとなく続きそうな終わりにしてみただけと別に続きません。もしかしたら気が向いたらTRPG化するかもしれないけど……どうだろうなあ。

マナの手紙(1) (前書き)

続きを書いてという声が余りにも多いので、ファンサービス(?)的な感じでちよつとだけオマケです。本当に短期連載予定なので、大したものは期待しないでね。
それでもOKな方はどうぞお進み下さい。

マナの手紙（１）

拝啓、家族の皆様へ。

今、わたしはシャングリラへ向かう列車の中でのこの手紙を書いています。

北方大陸と南方大陸を結ぶ大陸横断線が運行を開始してから三年。まだまだ出来たばかりの列車はとても綺麗で、椅子もふかふかです。でも一つだけこの素敵な列車の旅で悲しい事があります。それは、どの席も全てが相席だという事です。しかも個室です。相席なのに個室です。閉鎖的です。

家族の皆様はご存知の通り、わたしはとても激しい人見知りです。こんな狭い空間に知らない人と二人にされたらその時点で既に死んでしまいそうです。

ああ、神様……。願わくば早くシャングリラにこの列車を辿り着かせてください……。そんな祈りも神様には届きません。それもそのはず、神様は十三年前に滅んでしまったそうです。

今でも歴史に残る人類の歴史上最大の決戦、後に第三次勇者聖戦と呼ばれた戦いから早くも十三年……。当時はまだ小さかったわたしは、その時の事を殆ど覚えていません。

でもこうして今でも世界の各地にはあの戦いの名残が残っています。北方大陸から海を渡り、南方大陸へと移動して行くと、草原には沢山穴が開いていたり、今はもう誰も住まなくなった廃墟などが並んでいます。

列車から見る世界は窓から見渡すサイズに凝縮されてしまっているけど、それでもわたしにとっては見るもの全てが新鮮です。ザックブルムから出た事のないわたしは、やはり世間知らずなのでしょう。

英雄学園ディアノイア……。そこは、神と人との決戦の地でもあつ

たと聞いています。同時にあの伝説の勇者、リリア・ライトフィールドを育てた場所という事もあり、今では超、超、超進学が難しい英雄学園です。

世界に三つある英雄学園のうち、一番歴史があつて一番有名な英雄を輩出している英雄学園ディアノイア……試験に合格し、今正にそこに入学できるという事実がわたしは今でも夢のように感じられます。

「夢じゃない……よね？」

ほつぺたをつねつてみると痛いです。でも夢の中でも痛みを感じる時つてありますよね？ えーと、じゃあもしかしてこの手紙も夢なのでしょうか？

合い向かいの席には一人、女の子が座っています。全身をすつぽりと綺麗な銀色のローブで覆い、さつきからずうつと、ずうつうつと、お菓子ばかり食べています。

部屋の中は物凄く甘い匂いが充満していてクラクラします。女の子は口の周りをジャムとかシロップとかでベッタベタに汚しながら、指先を舐めたりしつつ御菓子を頬張っています。

定期的に車内を巡回するメイドロボがそのお菓子の食べかす、ゴミを片付けて行くのですが。一体どれだけの量を食べているのかわかりません。彼女はザックブルムからずうつと乗り合わせていますが、一時も休む事なく食べ続けています。

こんな人が居るものなのでしょうか。もしかしたら本当に夢の中で、実は合格通知も夢でしたゝみたいな感じだったら本気で落ち込みます。暫くはご飯も喉を通らない事でしょう。

「……あのー？」

夢かどうかを確かめるために夢のような人に声をかけてみます。

しかし、彼女は全く答えてくれません。

「はっつ……」

駄目です。完全無視です。へ、へこむ……。

落ち込みながら部屋を出ます。廊下は狭いですが、他の車輛には食堂車とかもあって、大陸横断列車、“パーシヴァル”の旅は快適です。

「……はあ、空気が美味しい」

あの部屋の中はお菓子の匂いしかしていません。なんだかわたし自身甘い匂いがしている気がしてなりません。

確か、パーシヴァルはシャングリラ直行のはず……という事は、このまま彼女とはシャングリラまで一緒という事になります。

「はあ……。気まずいよ。気まずいよう……」

こんな所でくじけそうになっているわたしは、果たして本当にデイアノイアで上手くやっていけるのでしょうか？ 今は兎に角それが不安でなりません……。

“マナ・レイストーム”。

マナの手紙（１）

マナ・レイストームは大陸横断列車パーシヴァルの食堂車を一人

うろつろしていた。食堂車には彼女と同じくディアノイアに向かう生徒達の姿がちらほらと見受けられる。

英雄学園ディアノイア……。要塞都市シャングリラの内側に存在する、英雄を育成する事を目的とした教育機関である。

各国が連携して推し進める英雄学園計画の主軸を担い、第一の英雄学園として今も格式高く歴史と教養を兼ね備えた兵士養成学校なのである。

英雄学園計画とは、ディアノイアをモデルケースとし、同じく英雄を育成する事を目的とする兵士養成学校を配備するというもので、その計画の中でもディアノイアはやはり一番人気である。

マナはそのディアノイアに応募し、恐るべき倍率の中から奇跡的に生徒として選ばれたのである。しかし、少女は今不安に押しつぶされそうであった。

新入生が学園に向かう春の季節……。シャングリラ直行のパーシヴァルの中にはマナと同じ立場の少年少女の姿がある。それに混じり、既にディアノイアの制服を着用している生徒の姿もあった。

学園がより厳しく国とのつながりを深め、国家が運営する特殊な教育機関になり、同時に幾つかの学園が同時に存在する事になってディアノイアには嘗ては存在しなかった“学生服”が新たに考案されていた。

これから学園でそれを受け取る新入生は当然私服である。マナは自分の格好が如何にも田舎の雪山の奥から来ましたという雰囲気なのではないかとそれが気になって気が気ではなかった。

空いていたテーブルに付き、周囲のお仲間の姿を眺める。流石に南方大陸のクイリアダリア領土下にあるシャングリラに向かうとなると、生徒達も皆お洒落に見えてくる。

ディアノイアが学生服はそれだけでもう容赦なく物凄くカッコいい……。そんな気がしていたマナにとってディアノイアの制服は最早流行の神である。様々なバリエーションが存在している事も、有名なデザイナーがデザインしている事も、ディアノイア関連の雑誌で

彼女は予習済みであった。

「いいなあ、制服……」

一人そんな事を呟き、食堂車の中で読む事が出来る雑誌を一つ手に取った。それは英雄学園計画を特集した記事が載っている所謂女性週刊誌であった。

「あ……。リリアだ」

開いたページでは丁度“失踪した伝説の勇者王”、リリア・ライトフィールドの記事が載っていた。そこではリリア死亡説が大きく取り上げられており、マナは不機嫌になって直ぐに雑誌を閉じてしまった。

ちなみにマナは圧倒的にリリア生存支持派である。それもそのはず、美しく気高く、そして勇気を武器に神に戦いを挑んだリリアにマナは昔から強く憧れていたのだ。

リリア関連の情報は何でも知リたがったし、リリアが見たもの触れたものに触れたくてディアノイアにも憧れた。プレイブックラン勇者部隊グッズと聞けば買いあさり、使いもしない品々は実家に置き去りである。

「本当は全部持ってきたかったけど……」

目を瞑り、リリアの姿を思い浮かべる。神をも倒す世界最強の勇者。そして同時にクイリアダリアの女王でもある、世界最高に美しい女性……。

マナの頭の中できらきらとリリア像が輝き出す。若干十五歳にして既に勇者の器、女王に就任し一度は行方をくらませたが、世界が滅びかけた“空白の日”には颯爽と駆けつけて世界を救った英雄……。

「リリア……」

「おい！」

「わたしもディアノイアで、リリアの様なかつこいい英雄に……」

「おい、貴様！！」

「何ですかさつきから！　うるさいなあもうつ！！」

肩を激しく揺さぶられ振り返りながら叫ぶマナ。その背後には剣を構えた男が立っていた。

マナは一瞬目を丸くし、それから周囲を見渡す。そこでは新入生になる予定だった生徒たちが全員謎の集団に剣を突きつけられて震えていた。

そのうちの一つに自分も含まれているのだという事に考え至るまでにしばしの時間を必要とする。それからマナは慌てて両手を挙げた。

「あわわ……！？　何、何ですか！？」

「パーシヴァルは我々“ラダの使徒”が占拠した！　ほら、お前もさっさとあっちに行け！」

「は、はいーっ！」

切っ先を揺らす男に脅されマナは素早く逃げて行く。新入生たちを纏めて食堂車の隅に取り囲み、侵入者たちは剣をぎらつかせる。

ラダの使徒と名乗る人物たちは全員黒い装束に身を纏い、紅い仮

面で顔を覆っていた。新入生たちは剣を突きつけられ、まだ子供である事もあり既に泣き出してしまっている子もいた。

戦闘能力のある在校生も混じっていたが、新入生を人質に取られずには身動きが取れない。武器を構えた生徒達は中心部に背を預けて固まり固唾を呑んでいた。

「お前たちも武器を下ろせ！ 早くしないと新入生どもを皆殺しにするぞ！」

「……貴様らの目的は何だ？ 一体何を目論んでいる！」

制服に身を包んだ生徒の内の一人、腰にいくつもの剣の鞘をぶら下げた剣士が声を上げる。美しい少女の剣士は長い前髪を揺らしながら鋭い眼差しで使徒を睨む。

その視線は既に実戦経験を匂わせる、冷静で高圧的な態度であった。もしかしたら貴族の出身なのかも知れない……何となくマナはそんな事を考えた。

「知れた事……。ディアノイアの運営停止を呼びかけるための人質になってもらうのだ」

「ディアノイアは統率された軍組織だ。貴様らの低俗な要求に応えらなくても思っているのか？ 組織を危険に晒すくらいならば、我々は死さえ厭わない」

生徒達は全員武器を下ろし、少女の言葉に賛同するように頷く。しかし訓練された生徒達と異なり、新入生たちは皆脅えきっている。

「お前はそれでよくてもあつちの新入生どもはどうだ？ 学園はなんの罪も無い新入生を見殺しにするのか？ あん？」

「……卑怯者め」

「それはそれで世間に対するいい見世物になるだろうがな……！
まあどっちにしろ、このパーシヴァルはこのままシャングリラに突
つ込んで自爆させる！ お前たちは仲良く全員あの世行きだ！！」

男の叫びに新入生たちの悲鳴が上がる。そんな中一人だけ慌てる
様子も無く使徒たちを見詰めるマナの姿があった。

何を思ったかマナは立ち上がる。直ぐに見張りの使徒がマナに剣
を突きつけるが、マナは食い下がらない。

「悪事は絶対に成功しません！ 貴方達みたいな卑怯者が
悪が栄えた覚え無しですっ！！」

「何だ、あのガキ……？ おい、取り押さえろ！」

使徒二人に左右から捕まれ、強引に座らされるマナ。しかしそれ
に逆らうように暴れながら声を上げ続ける。

「悪はっ！！ 勇者がやつつけてくれるって決まっているんですっ
！！ 絶対に、ぜえゝつたいに、勇者が……！ “リリア” がっ！
助けてくれるんですっ！！」

「……何馬鹿げた事叫んでやがる、あの小娘……。第一その勇者は
とつくにくたばってるじゃねえか。もういい……おい、他の車両の
占領に行った連中はどうした？」

「……いえ、それが……定時連絡が途切れて」

次の瞬間であつた。使徒が封鎖する扉が光と共に爆発し、使徒が吹き飛ばされていく。

激しい爆風と閃光に誰もが目を瞑り身を低くした。土煙の中、小さな足音が響く。煙を抜けて姿を現したのは小さな小さなシルエツトだった。

「なん……だ、このガキ!？」

その少女は白銀に輝くローブで全身を覆っていた。手にはチョコレート。それを口に放り込み、指先を舐めながら顔を上げる。

「おい、愚民。チョコを寄越せ」

「……はあ？」

「チョコだ。聞こえなかったのか、愚民？ 甘くて黒くて、べたべたするやつだよ。そんな事もわかんないの？」

「何いつてんのかわかんねえんだよ、クソガキッ!！」

使徒の一人が剣を振り上げて襲い掛かる。誰もが目を瞑るような瞬間、しかし振り下ろされた剣は少女の小さな身を切り裂いては居なかった。

少女が伸ばした小さな手。それが剣の刃を挟み、二本の指で攻撃を阻止していたのである。大の大人が振り下ろした一撃だというのに刃先は微動タだにしない。

「誰に向かって剣を振り下ろしているんだ、この愚民　!」

少女は剣を指先で押し折り、身体を半回転させて蹴りを穿つ。男

の腹に突き刺さったその一撃。直後男は魔力の炸裂と同時に弾き飛ばされ、壁をぶち抜いて列車の外に放り出されていく。

男の悲鳴が響き渡り、それが直ぐに聞こえなくなる。ただならぬ空気に使徒たちが一斉に魔法を詠唱し、無数の火炎が少女目掛けて放たれる。

焔の渦に包まれる少女。しかしそれは一瞬で吹き消されてしまう。少女はマントをぐるりと捻り、魔法を全て吹き消して素顔を晒した。長い栗毛色の美しい髪。瞳は左右、緑と黄色で別たれている。小さな体躯を包み込む純白のアーマードレス。目が眩むような白い太股に括られたホルスターから少女が抜いたのは 銀色の銃。

「同じ台詞を二度も言わせるな。誰に向かって剣を振り下ろしているんだ？」

「ば、化物か……！？」

少女は銀色の銃を構える。容赦なく引き金を引くと同時にマズルフラッシュが起こり、少女の顔を何度も照らし出して行く。

魔法を詠唱しようとする使徒たちを次々に射抜く銀の閃光。ばたばたと倒れて行く。そんな中、剣を構えて雄叫びを上げながら突撃する使徒の姿があった。

「銃じゃ……！？」

マナが悲鳴染みた声を上げる。しかし少女は銃を振るい、そこに指先を這わせて唇を動かす。

「レーヴァテイン 神討つ一枝の魔剣その力を我は担う」

それは銃に秘められた力を解放する呪文。力の言葉を受け、銃身

は白く輝き、光の剣を纏う。

銀色の銃の刀身に浮かび上がる、白銀の刃。振り下ろされた男の剣をあっさりと両断し、踊るように身体を捻って少女は男を切り伏せる。

「伏せ」だ、愚民。私が誰だか判らないのか？」

倒れた男の頭をハイヒールで踏みつけ、少女はオッドアイに光を吸い込んで顔を上げる。

「私は“勇者”。ユリア・ライトフィールドだぞ。知らなかったのならば覚えておけ、愚民。“私がルール”だ」

食堂車の壁に空いた穴から吹き込む暴風に晒されユリアの髪は美しく靡く。

「……………ほんとに来た」

マナはそうして啞然としながらその様子を眺めていた。来る、きつと来る、絶対来る。その祈りは天に届いた。そして彼女をめぐり合わせたのだ。勇者に。

それが、マナ・レイストームとユリア・ライトフィールド、二人の出会いであった。

マナの手紙（１）（後書き）

く帰って来た！ ディアノイア劇場リターンズく

帰ってきちゃいました

マナ「はいこんにちは！ 虚幻のディアノイア続編、『マナの手紙』の主人公、マナ・レイストームです！」

ユリア「……主人公？」

マナ「はい、主人公です」

ユリア「私を誰だと思っているんだ……？」

マナ「それはそれ、これはこれです」

ユリア「……あつそ。いいもん、別に興味ないし」

マナ「またまたそうやってツンデるんだから」

ユリア「……ツンデってないもん！！」

マナ「ところでここって何をするとところなんでしょうか？ 冷静に考えると本編はとくに終わってるので別にやる事もないような」

ユリア「宣伝とか、説明とか」

マナ「あ、そうですね！ この続編『マナの手紙』は、基本的には

ぶんなげ小説ですっ！」

ユリア「……………なにそれ」

マナ「え、だから、続編としては微妙です。もう本当々にすごくてきとーなところで終わらせちゃうカンジだから、やったー続編きたーこれで二百部超える！　とか思っていた人は残念でしたー！」

ユリア「これは本編エピローグより十三年後のストーリーだよ」

マナ「この小説は、わたしことマナ・レイストームがユリアちゃんが可愛くてハアハアしたり、あとはユリアちゃんが可愛くてハアハアしたりする小説です！」

ユリア「そ、そうだったの……？　早くも嫌になってきたんだけど……………」

マナ「そうだったん、ですっ！！　ユリアちゃん！　可愛いようー！」

ユリア「ひiiiiiiiiっ！？　ママー！！　ママーッ！！！！！」

マナ「次回へ続くっ！」

マナ「なお、完結してると一々完結済みのところにでちゃってうざったいので一時的に連載中に戻しました。あしからずー」

マナの手紙(2)

拝啓、家族の皆様。

わたしのシャングリラへの旅路はとんでもない事になってしまいました。何と、ラダの使徒を名乗る謎の武装集団に大陸横断列車パ―シヴアルが襲撃されてしまったのです！

せつかく滅びを免れた世界でも争いは耐える事はないのだと強く実感しました。人間の中には良い者も居れば悪い者も居ます。所謂悪者というものです。

でもあの人たちはそれを正義だと信じてやまないのでしょうか。信じる正義が違うからぶつかり合う事もある……それは判るけど、だからって周りの人を犠牲にしていいいわけがありません。

悪い事はやっぱり悪い事です。人は傷つけてはいけないし、出来る事ならみんな笑って過ごしたい。それは親が子供に教えることで延々と伝えていかねばならないことですよね？

少なくともわたしはそう考えられるだけ家族に恵まれたのかも知れませんが。どうしてあの第三次勇者聖戦の痛みを知っている同じ人類なのに、こんなにも争うのでしょうか。

ディアノイアでわたしはその答えを見つける事が出来るのでしょうか。それが早くも不安で仕方ありません。

でも、悪い事ばかりではありませんでした。なんと、乗り合わせた女の子は勇者だったのです！これには流石に超びっくり！まさかの展開です。

勇者の女の子はとっても小さな女の子でした。まだ十歳くらいにも見えます。そんな小さい女の子が大の大人を次々にやつつける姿はただただ驚きの一言でした。

彼女の名前はユリア・ライトフィールド……ライトフィールド！つまり、正当な勇者の後継者なのです！もしかしたらリリアの

娘！？ 最早妄想が止まりません。

ユリアの活躍でラダの使徒は一瞬で全滅してしまいました。学園の生徒でさえ身動きの取れない状況下だというのに、もうバンバンやっつけてしまいました。あれこそ勇者の活躍です……！

「……えっと、ユリアちゃん？」

皆が啞然としている中わたしは彼女に声をかけました。ユリアちゃんは食堂車のテーブルの上から誰かの紅茶を勝手に飲みつつ振り返ります。

「えっと……。お菓子、食べる？」

自分が食べようと思っていたチョコクッキーを懷から取り出し差し出します。ユリアちゃんは目を丸くして口元からよだれをじゅるり。

明らかに食べたい様子だったのでクッキーを差し出します。するとユリアちゃんはそれを手に取り、上目遣いにわたしを見るのです。

「……………ありがとう」

そうして騒動も無視してそそくさと自分の席に戻っていくのです。そのちよこちよこした後姿が余りにも可愛らしく、わたしは思わずその場で妄想の世界に入り込んでしまいました。

あの伝説の勇者、リリア・ライトフィールドの娘さん……つまり、リリアはやっぱり生存！？ うは！！ やっぱり雑誌なんかよりわたしの想像のほうが正しいわけです！ 全国四億人のリリアファンに光明が差し込んだ瞬間にこうして立ち会う事が出来るとはああああああ！！

「君、大丈夫だったか？」

妄想に浸るわたしに声をかけてくれたのは制服を着た例の剣士さんでした。腰にいつぱい剣を携えています。そんなにいつぱい本当に使っんですか？ とは訊けませんでした。

とにかくそんなわけで、わたしのシャングリラへの旅は幸先のいい雰囲気が始まりました。パーシヴァル襲撃とかそんなの最早どうでもいいです。ユリア・ライトフィールド……絶対に目を離してはいけません。

絶対にリリアの娘さんと仲良くなりたと思います。そうすればきっと、わたしも伝説に近づけることでしょう。そんなわけで、わたしは今も頑張っています。

マナの手紙（２）

「はあ……。速攻見失った……」

溜息を漏らすマナ。絶対に目を離さないと誓ったユリアは小さな体で大きく跳躍し、シャングリラに着いたとたんにどこかに行ってしまった。

パーシヴァルから降りる人々の中に紛れ、マナは一人呆然と立ち尽くす。短い人生のチャンスであった……そんな事を考えながら。仕方が無く重い荷物を引き摺って歩き出す。勿論中身の八割はリリアグッズである。少女は額に汗を浮かべながら春の陽気に包まれたシャングリラへ躍り出た。

そこは彼女が思い焦がれた幻想の街。勇者を育み英雄を輩出し全ての若者が憧れるとまで言われた神の世界へ続く街、シャングリラ。シンボルである神の搭ラ・フィリアは今も天高く聳え立っている。

「でか……」

上着のポケットからパンフレットを取り出しマナは何度も繰り返し予習したページを眺める。

ラ・フィリア。それは嘗て魔王大戦と呼ばれた戦いで魔王口ギアが建造したとされる古代技術を応用した塔である。シャングリラそのものと連動しており、要塞に変形したり砲台になったり、そして最大の役割である神の国へと続く塔にもなるという。

「つまり三段変形……」

パンフレットを閉じ、人の波に押し出されるようにして歩き出す。シャングリラは要塞都市でもあり、この地が戦場になった事も歴史上何度もある。

中心部に聳えるラ・フィリアの麓にディアノイアは存在する。そこまでの道程は全て上り坂であり、マナは肩で息をしながら一生懸命に坂を上っていく。

「ディアノイア……！」

そうして見えてきた白い建造物に慌てて走り出す。

伝説の英雄を何人も輩出した学園、ディアノイア……。そこに自分も生徒として所属する事が出来るのだ。そう考えると長旅の疲れなど吹っ飛んでしまった。

不安や期待、様々な気持ちを胸に新入生たちが次々に門を潜っていく。扉の前で自らの手の平に“人”という字を書いて飲み込み、マナも門を潜っていく。

広い広い構内をパンフレットに従い歩いていく。学科によって講堂が分かれている為、マナは自分が通うことになるであろう魔術学

科の講堂を目指して行く。

新人生の中には素手に杖や剣など、愛用品とも思える品々を担いでいる者も居る。それに引き換えマナは武器も持たず、初級の単純な魔法でも成功するか怪しい素人である。そんな自分が恥ずかしくなり、思わず俯きがちになってしまう。

講堂に入ると直ぐに教師と思しき男が壇上に立ち、巨大な黒板を前に声を上げる。

「ここでは入学式の前にまず制服を支給する。魔術学科の制服は口ーブ式の物とアーマークローク、それから女子はこのワンピース型がある。まあ好きな物を取っていくことだ。名前を呼ぶので、呼ばれた物から資料と制服を受け取り更衣室で着替えを行う事」

「制服選べるんだ……。うん、そういえばそう書いてあったけ、案内に」

一人で納得しながら何度も案内書に目を通す。今日の行事については既に生徒達に予定表を含む案内が届けられている為、マナは特に慌てる事は無くここまで辿り着く事が出来た。

制服に着替えた後各学科で多少の説明があり、その後入学式となっている。マナは内心どきどきしながら自分の名前が呼ばれるのを待ち続けた。

一人、また一人と新入生たちが名前を呼ばれて講堂を去っていく。自分はまだか、まだかと待つマナ。しかしいつまで経ってもその名前が呼ばれる事はない。

ついには最後の一人になってしまったマナ。広い広い講堂の中、一人ぼつんと背中を縮こまらせて待っている。しかし教師は黙ったまま、マナの名前を呼ぼうとはしない。

「……おい、お前」

「は、はいっ！」

「……………誰だ？」

「えっ？」

状況が飲み込めず目を丸くするマナ。

「お前の名前も顔写真も名簿にないんだが……。何でここにいるんだ？」

「え？ えええええっ！？ ちょ、まつ！？ え、だってホラ！！合格通知持つてますよ！？」

慌てて教壇に駆け寄り合格通知を手渡すマナ。それを受け取り教師は内容をよく吟味する。

「……確かに合格ってサインがしてあるな」

「ですよー！？」

「だが、名簿にはない。多分あれだ、校長の書き間違えだろうな」

「はっ？」

「この入学許可は学園長であるソウル・ブーストナツコオが一任しているんだが……。あー。まあなんというか、あの人は結構テキトーでな。たまにこういう事があるんだ。不合格なのにサインしちゃったりするんだよ」

マナは合格通知を片手に真っ白になる。完全に固まっているマナをから目を反らし、教師は気まずそうに頭を掻く。

「この魔術学科の入学最低条件は、LV3の攻撃魔法の取得だけど、お前はいくつまで使えるんだ？」

「……LV2、ですけど」

しかも成功率は微妙である。

「じゃあ駄目だろ、どう考えても……。他の生徒を見たか？ 連中、既にLV6とかまで使えるやつまで居るんだぞ。ここに入学する前に、地元である程度修練を積んでるんだ。ここじゃ基礎からなんてやってねーぞ」

「そ……そんなあ……」

「ま、そういう事だから……。あー。残念だけど、俺もう行かないとだから。せつかくだから、校内見学でもしてけや。ホラ」

そうして教師はポケットから紙切れを取り出し、そこに文字を書き込んで行く。渡されたのは『この者の校内見学を許可する』という旨が記された許可証、そして教師の名前である“ザイオン・カーツ”という名であった。

それからザイオンのポケットマネーでいくらかの小銭……せめて食事くらいは取ってから帰れという優しい気遣いであった。そうしてザイオンは固まっているマナを放置して去っていく。

一人取り残されたマナはその場に三十分程微動だにせず停止し、それからボロボロ涙を零しながら一人寂しく講堂を出て行った。

校内はやけに静かだ。それもそのはず、既に入学式が始まろうとしているのだ。マナは涙をぐいっと拭い、肩を落として歩いていく。

「うつ……。せつかく南方大陸くんだりまできたのに、そんなのなによぉ……。」

最早一歩も歩けぬほどマナは意気消沈していた。校庭に設置されたベンチの上に腰掛け、放心状態で空を見上げる。

そうしているとまた泣きたくなってきた、青空が目に染みた。そうしてそこで沈んでいる事数分……。マナは背後からの声に振り返った。

「あら、どうかしたの？」

振り返るマナの視線の先、そこは黒いスーツ姿の女性が立っていた。眼鏡をかけ、凜とした空気を纏った女性……。彼女が学園の教師である事に気づくのにそれほど時間は必要なかった。

しかしマナは何も応えられなかった。今何か口を開けば泣いてしまいそうだったのだ。ひたすらに唇を噛み締め、涙目になって女性を見詰め続ける。

「……随分と大変な顔になっているわね。女の子がそんな顔をしていたら可愛くないですよ？」

そう言っただけで女性はハンカチでマナの涙を拭い、それをマナの手に握らせて微笑んだ。その優しさが胸に染み、マナの両目から滝のようにながれ始める。

「ありがとうございます……！！」

「ど、どういたしまして……。それで、どうしたのかしら？ 良かったらわたしに話してみない？」

「はい……。ぐすん、えっと」

そうしてマナは身振り手振り自らに起きた事を話した。学園長の手違いで合格通知を受け取ったものの、不合格になっていたという事。そして今帰る事も出来ず途方にくれている事……。

女性はその全てを腕を組んで聞いてくれた。時々相槌を打ち、困ったように微笑みながら。それだけでマナの気持ちは少しずつ落ち着いていった。

「……もう、学園長は。昔からそうなのよ、あの人は……。そうよね、ディアノイア……。入りたかったわよね」

女性がマナの頭を撫でる。マナは肩を落とし、深々と溜息を漏らした。

「皆の憧れなんだもの、サインするときくらい責任を持ってしゃきつとしてくれなきゃ困るわ。わたしからも学園長には良く言っておく」

「……でも、最早何をどうしたらいいのかもわからないんです。家族になんていえないのか……」

「……………そうね。だったら学園長に話をしてみましよう？ 彼が貴方を気に入れば、学園にも入れるわ」

「って、そんなテキストでいいんですかっ!？」

「学園長がそういう方針なのよ。ザイオン先生から聞かなかった？
学園長が新入生に関しては一任しているって」

マナの目が輝き、両手で教師の手を握り締めてぶんぶん振り回す。
その余りにも嬉しそうな様子に教師は少し戸惑い気味であった。

「でも、もう少しここで待ってもいいかしら？ 人を待っているの」

「はい、もうなんでもいいです！ 一時間でも二時間でも待ちます
っ！！」

「そう？ あら、でもそんな必要はなさそうね」

教師が立ち上がり手を振る。その様子に釣られ、マナもまた立ち
上がって視線をそちらの方に向けた。

視線の先、歩いてくる小さな影があった。まるで姫君のような美
しいドレスを身に纏った少女。ユリア・ライトフィールド。勇
者の少女との再会であった。

「ユリアちゃん！？」

「……ユリアと知り合いなの？」

「は、はい。ここに来る時にちょっと……」

二人が顔を見合わせている間にユリアはノンビリ歩いて二人の所
に寄っていた。ユリアはマナの顔を見て、それから隣に立つ教師の
顔を見上げる。

「ゲルト、久しぶり」

「ええ、久しぶりね。暫く見ない間に大きくなったわね、ユリア」

「……ゲルト？　もしかして、ゲルト・シュヴァインさん？」

マナが一人呆然とする中、ゲルトは腰を落としてユリアを正面から抱き寄せる。ゲルトの腕の中、ユリアは幸せそうに頬を緩めていた。

ゲルト・シュヴァイン　。　かつてリリアと背中合わせの存在として名を馳せたもう一人の勇者の名である。伝説の英雄の中でも沢山の武勇伝を持つゲルト・シュヴァイン、その人が今目の前に居るのである。

しかもつい先ほどまで親しげに話をして頭までなでてもらってしまった。その事実に気づき、一人でマナはテンションをあげる。小躍りしそうな気持ちになり、最早鬱な気分は吹き飛んでいた。

「そう。名乗るのが遅れてしまったわね。ゲルト・シュヴァインディアノイアで教師をやらせて貰っているわ。よろしくね、マナ」

「は……は、はいっ！　は……！？　え、夢ですか！？」

「え？　げ、現実だと思うけど……」

「はあああああっ！？　げ、ゲルト・シュヴァインに撫でられちゃったー！！　もうわたし、一生お風呂入りませんー！！」

「え……　つと、出来れば入った方がいいと思うわ」

「じゃあ入りますー！！　それより、えつと……ユリアちゃんは？」

ユリアはゲルトに暫く抱かれ、それからゲルトの後ろに隠れるようにして引っ込んでしまった。悪党の前ではもの凄まじい啖呵を切っていただけに、少しだけ照れた様子のそれが可愛くて仕方が無い。

「ユリア？ 珍しいわね、この子が人見知りするなんて」

「そ、そうなんですか？」

「ええ。この子、世界中のあちこちを転々としているというか、たらいまわしというか……。生まれ育ちはバテンカイトス、ついこの間までザックブルムのレプレキア王の城で生活して、これからはわたしの家で暮らす事になったのよ」

「とりあえずユリアちゃんの生い立ちが半端ねえことだけは理解しました」

「本当は両親が面倒を見るべきなんだけど、この子の両親は今どこで何をやっているのかさっぱりわからないのよ」

どこか困ったような、諦めたような溜息と共にそう語るゲルト。ユリアはいつの間にか校庭を走り出し、水路の淵をぐるぐると巡っている。

「あの、こんなこと聞くのはあれかもしれないんですけど、ユリアちゃんって……」

「リリア・ライトフィールドの娘よ　　って、ユリアッ！？」

見ればユリアは水路に落ちていた。ドボンという音と共に流れて行くユリア。血相抱えて走っていくゲルトが綺麗なフォームで水路

に飛び込み、一瞬でユリアを片腕に抱えて戻ってくる。

「何やってるのようもう！　だめでしょ！？」

「……だって、魚が泳いでたから」

「はあ……。メルはどういう教育をしてたんだか……。やっぱりユリアはわたしが育てるべきだったわ……」

一人遠い所を見詰めながらゲルトはぶつぶつと言葉を繰り返す。その様子には先ほどまでの気品のようなものは全く感じられない。腕から下ろされたユリアは身体をぶるぶる振って水を弾いていた。犬のような動作を取るユリアにマナの視線は釘付けになる。その熱い視線が怖いのか、ユリアはまたゲルトの影に隠れてしまう。

「ユリアちゃん、かわいいですね」

「貴方もそう思う！？」

「は、はい……？」

「ユリアったら子供なのに何でも出来るのよ！　もう超可愛いし、超パーフェクトっていうかもう天才なの！　ユリアはバテンカイトスで魔術教会会長である大錬金術師メリーベル・テオドランドから錬金術と魔術を学び、北方大陸最大国家ザックブルムの二代目魔王レプレキアから剣術を学んだ正に超エリートなのっ！！」

まるで自分の事のように目を輝かせて一息に語るゲルト。その様子に流石にマナも若干引いている。

「それにね、このお肌とか髪質とかはもう母親そっくりで、でも目の強気そうな所とか性格とかは若干父親よりかな？　とか考えちゃうの！　貴方もそう思うでしょ？」

「は、はい……」

圧倒されるマナ。その傍ら、ドレスを絞りながら顔を上げるユリア。その頭の上によじ登ろうとする白いうさぎの姿があった。

白いうさぎはユリアの頭の上に乗ったままのんびりとしている。それが何を意味するのか理解できず、マナは只管頭の上にクエスチヨンマークを浮かべ続けた。

「それじゃ、学園長室に行きましょうか。入学式が終わるまでまだ時間があるし、ユリアの着替えを済ませなきゃ」

そういつて校内に入っていくゲルト。ふと、貴方自身の服がずぶ濡れである事はかまわないのですか？　と訊ねたくなったが、それはなんだか気が引けて黙っている事にした。

水浸しになったユリアは小さくくしゃみをし、それからうさぎを頭の上に乗せたまま校内に歩いていく。マナもそれに続き、二人と共にディアノイアの中に入って行った。

マナの手紙(2) (後書き)

く帰って来た！ デイアノイア劇場リターンズく

* 読者数どんだけく*

マナ「こっそり連載するつもりだったのに物凄い読者数ですね」

ユリア「一体どこでどうやって聞きつけて来るんだろう……」

マナ「まあ、嬉しいことなんだけど、別に大したことない話だったという事を考慮するとね……」

ユリア「くしゅうしょうさま」

マナ「あ。アンケートにご協力いただいた方にはありがとうございます。デイアノイアは続編書いたからそんな連打しなくても大ジョブですよ」

ユリア「……ぶんなげだけどね」

マナ「えーと、あとは……何かいうことある？」

ユリア「ない」

マナ「ですよね」

マナの手紙(3)

拝啓、家族の皆様へ。

大変な事になってしまいました。なんと、学園長の間違いで合格通知が届けられたらしく、わたしは実は不合格だったそうです。

そりゃあ、そうですね……。わたしみたいな才能もない田舎娘がそんな簡単にディアノイアに入学できたら誰も苦労はしません……。

手紙になんて書けばいいのかわからず悩んでいましたが、とんでもない事になりました。なんと、あの伝説の英雄ゲルト・シュヴァインが学園長にとりなしてくれるそうなのです！

それだけではありません。やっぱりユリアちゃんはリアの娘でした。そしてなんでもゲルトさんと一緒に暮らす事になったんだとか……。

ユリアちゃんは本当に物凄いエリートでした。バテンカイトスで生まれ育ったという時点でもうなんか凄いです。でもつい最近までザックブルムに居たんだとか。全然気づかなかった……。

なんだか順序が逆になってしまった気がしますが、ディアノイアは本当にすごい所です。生徒もみんなエリートさんという感じで、入学できたとしてもついていけない自信がありません。

でも、あの伝説の英雄がこんなに間近に、しかも教師として色々教えてくれるというのだからこれはもう絶対に諦められません！！意地でも学園に入学して、維持でも英雄になってやろうと思います。それこそがわたしの目標であり、そして夢なのだから！

と、意気込むのは手紙の中だけにしておきます。正直な所不安で一杯で、こうでも書かないと気持ちが揺らいでしまいそうです。

「少し待っていてね。もう直ぐ学園長も来ると思うから」

「は、はいっ！」

学園長の部屋は………きたないです。なんかトレーニング機器が沢山転がっています。どれも胡散臭いですがかなり使いこまれている感じです。

ユリアちゃんは着替える為に更衣室に向かって、今ゲルト先生も居なくなりました。そうするとこの何だか汗臭い部屋の中に一人きり……。うう、学園長ってどういう性格の人なのでしょう？

「……机の上、プロテインばかり」

どういう事なんだろう。物凄いスポーツマン？ それとも筋力強化オタク……？ 何にせよ不安です。学園長がそんなにいかつい人だったらわたし、気絶してしまうかもしれません。

ここに来て人見知りスキル発動です。そういえば学園長って誰だったっけ？ たしか、ソウル・ブーストナツコオとか。

「フゝ、いい汗かいたぜえ！！」

「ひゃあっ！？」

扉の方を見ていたら何故か背後の窓から人の声が。振り返るとそこには上半身裸のムツキムキのおじさんが立っていました。

あれが学園長なんでしょうか。なんていうか………なんで入学式していたはずなのに『ハアハア』してるんでしょうか。すごい汗かいてるし。入学式してたんですよね？ あれ？

兎に角そんなわけで、ソウル学園長と出会う事になり、これから直訴する事になりました。家族の皆、幸運を祈っていてください。まあ、これが着く頃には結果が出ているのですが。

マナ・レイストーム。

マナの手紙（３）

「成る程成る程、話はわかった。つまり俺が馬鹿な所為で少年少女の夢を砕いてしまったわけか！ そりゃあ申し訳なかったな！」

ソウル・ブーストナツコオ。ディアノイアの学園長にして戦闘学科の現役教師でもある上半身裸の男は腕を組んで豪快に笑い飛ばす。正面に立ったマナは今にも泣き出しそうな顔をしている。ソウルは見た目がかなり厳つい上に学園長である。マナとしてはいつ怒られるかとビクビクしていた。

「ふむふむ、成る程……。ホイ、これがお前の制服だ。余り物だが文句はないだろ？」

「えっ？ い、いいんですか！？」

「おう！ どうせ一人や二人増えたって誰も判らねえだろ？ 大丈夫、合格通知そのものは持っているんだしな」

「で、でも……わたし……」

「なんだ、嫌なのか？ じゃあ返せ」

「返し、ませんっ……！」

制服をぎゅっと抱きかかえ全力で後退するマナ。その様子を見てソウルは満足げに微笑んだ。

二人がそんなやり取りをしていると学園長室の扉が開き、着替えを済ませたゲルトとユリアが入ってくる。ゲルトは代えのスーツに袖を通し、ユリアは制服に着替えている。

「お！ お前がユリアか！ いや、ママのちっちえ頃にソックリだなあ！！」

豪快に笑いながらユリアに駆け寄っていくソウル。巨大な体躯を揺らし、迫る筋肉……。ユリアは目を真ん丸くしてゲルトの後ろに隠れてしまう。

「学園長！」

「おっと……。大丈夫だ、怖くないぞ？ さあ、一緒に筋トレしようぜ」

どうしてそうなるんだろう……。マナは疑問を口にはしなかった。

「何はともあれ長旅ご苦労だったな。二人とももう休んでいいぞ。俺は筋トレで忙しいからな。ユリアの事はゲルトに任せる。じゃあな！」

再び窓から飛び降りて行く学園長。学園長室。そこは、ラ・フィリアという塔の中に存在する。校舎で言えば四階相当の高さからソウルは平然と飛び降りて行ったのである。その事実に気づき、マナが冷や汗を流す。

そもそもここまでジャンプして昇って来たのか、それとも壁をよじ登ってきたのか……。学園長室に窓から侵入するというのは言う

ほど容易くないのである。

「だ、だからハアハアいつてたのかな……」

本人がいない今真偽を確かめる事は出来ない。マナは疑問を頭の中から掻き消すように首を振った。

「わたしの出る幕も無く入学できたようね。おめでとう、マナ」

「はいっ！ ゲルトさん……じゃなくて、先生のお陰です！」

「そんな事はないわ。学園長はあれでも人を見る目はあるもの。貴方から何か特別な才能でもかぎつけたんじゃないかしら　って、ユリア！？　駄目よそれはお菓子じゃないの！　プロテインー！」

二人が同時に振り返るとユリアは机の上のプロテインカプセルを口の中に放り込んでいた。美味しくなかったのか、涙目になりながら震えるユリアをゲルトが引き摺ってくる。

「もう、ちよつと目を離すとこの子は……っ！　良くパーシヴァルで一人ここまでこられたわね」

「あ、ずっとお菓子食べてたんですよ。すごく大人しかったです。メイドさんが沢山持ってきてくれて……あれ？　今思つと不思議ですね」

「……多分、レプレキアが気を使ってくれたんでしょうね」

ゲルトが困った様子で溜息を漏らしている間、ユリアは小さく欠伸を浮かべていた。どうやら退屈らしく、眠たげに目を擦っている。

「……なんかユリアちゃん、行動が動物的ですね」

「そうね。犬リリアを思い出すわ……」

「い、犬リリア……？ リリアファンのわたしですら知らない謎の単語が……」

「可愛いので、犬みたいで！」

それが何であるのかは全く想像出来なかったが、なんとなくユリアの頭に犬の耳を乗せた妄想を浮かべ、マナは一人口元を抑えて笑っていた。

ユリアは二人が妄想の世界に入り込んでいる間、頭の上に乗っていたうさぎを抱きかかえながらぼーっと窓の向こうを眺めている。そうしてしばらくするとユリアのおなかが音を鳴らした。

「……ゲルト、おなかすいた」

「え……。ここ来るまでにあんなに食べてたのに……」

「うるさいな。私がいつどこで何を食べようと勝手だろ……？ 私は勇者で姫で、最強なんだからな」

拗ねた様子でそんな事を口にして顔をうさぎで隠すユリア。何はともあれそれから三人はゲルトの家に向かう事になった。

入学式で受け取るはずだった資料や説明などはもう受ける事が出来ない。丁度プログラムのにも昼休みの時間に入る事もあり、ゲルトの提案でマナも昼食をご馳走になる事になったのである。

そのついで、歩きながらゲルトは学園についての説明を続ける。

マナはそれを一生懸命に聞き取り、何度も相槌を打つ。二人の間、ゲルトと手を繋ぎながら歩くユリアはシャングリラの出店を見る度に涎を垂らしていた。

「ここがゲルト先生のお家ですか？」

「そうよ。元々は学生寮だったんだけど、今はディアノイアが管理する社宅って感じがしらね。どうぞ、上がって」

そこは巨大なマンションのように見える。マナにしてみれば都会にしかない建造物、興奮するなという方が無理な話である。それがあの伝説の勇者、ゲルトの家だというのならば尚更だ。

かちこちに緊張しながらマナはゲルトの部屋に上がる。そこはモノトーンで統一された落ち着いた空間。マンションにしては広々としたリビングに通され、そこで大きなテーブルに着く。

「いい暮らししてるなあ……」

とは言わないつもりだったが、つい口にしてしまった。ゲルトはそれを聞いてか聞かずか一人台所に向かっていく。

「はい、とりあえずこれ」

ゲルトが戸棚から持ち出して来たのは生クリームがたっぷり乗せられたショートケーキであった。ワンホールまるまるユリアの前に置くとユリアは目を輝かせる。

「とりあえずお祝いって事で買っておいたのよ。今日から一緒に住む事になるんだしね」

「そっか……。そういえば先生、その……どうして先生がユリアちゃん
の面倒を……？」

それは根本的な疑問であつた。ゲルトは言つたのだ。ユリアはリ
リアの娘なのだ、と。

然らばユリアを育てるのは母親であるリリアの役目のはず。とこ
ろがユリアの経歴の中に一つとして母の名が出てくる事はなかった。
もしかしたら訊いてはいけない事だったのかもしれない。しかし
リリアにずっと幼い頃から懂れてきたマナにとってこれはまたとな
いチャンスでもある。疑問を口にして、答えを得たい……。とても
純粋な瞳でただそれを現実にするマナにゲルトも悪い気はしなかつ
た。

とてもまつすぐな目をしているマナ。その面影にどこかリリアに
通じる物を感じる。いつでも真つ直ぐ、気弱だけれどどこかズレて
いて、へこたれてそれでも真つ直ぐなまま。

「……リリアは、行方不明なのよ」

ゲルトはテーブルに着きそう切り出した。

「リリアはユリアを生んで直ぐに居なくなつたの。本人はね、ちょ
っと買い物に行つてきますくらいの気持ちで出て行つたのかも知れ
ない。でも、そんなこんなで結局リリアは戻らなかつたわ」

その後、出産に立ち合わせ住処を提供していたバテンカイトスの
メリーベルがユリアを預かり育てる事になった。暫くしてずっとバ
テンカイトスの中というのも不憫と言うことで、外に連れ出せない
体の不自由なメリーベルに変わってレプレキアが世話を名乗り出た
のである。

クイリアダリア女王であるアリア・ウトピシュトナもそれを申し

出たものの、クイリアダリアは現在領土拡大と国境線での他国との小競り合い、その交渉で多忙である。結果、今となつては皮肉にも世界で一番平和な国となったザックブルムに預けられたのである。

「わたしもその頃は学園の仕事で忙しかったし、それに外部大陸とシャングリラを往復する生活だったから。そんな状態で子育てなんて出来ないもの」

本当ならば自分が世話をしたかつた……ゲルトの口調はそんな本音を垣間見せる。マナはその気持ちを汲み取りそれ以上追求する事はしなかった。

「こうしてディアノイアに入学する事になったのはユリア本人の希望なのよ。ね、ユリア　って、既にケーキワンホール消滅してる！？」

「げぷ」

「げぷって……そういう問題なのかな、ユリアちゃん……」

口の周りを生クリームでベタベタにしてユリアは顔を上げる。その口元をゲルトがナプキンで拭い、苦笑を浮かべる。

「メリーベルもレプレキアもこの子に甘すぎなのよ。甘やかしてばっかりだから、お菓子しか食べない子になっちゃったじゃないの……もう」

「お菓子以外も食べるよ？　果物とか」

「……あ、それでも甘い限定なんだね」

三人の間に謎の沈黙が走る。それからユリアはうさぎを部屋の中に放ち、浅く椅子に腰掛けて視線を伏せる。

「……ママを探したいの。だから、ディアノイアで強くなる」

「ママを……？ でもユリアちゃん、もう既に充分強いんじゃない」

「でも、もっと強くなるんだ。ママに追いつけるくらい、強くなる……。それで、ママを見つげ出す。絶対に」

顔を上げたユリアは真っ直ぐな瞳でマナを見詰めた。オッドアイの瞳は見ていると吸い込まれそうな程無垢に輝いている。髪を揺らし、椅子から降りたマナは部屋の中をはねるうさぎを追い掛け始めた。

「……ユリアは、外部大陸に居るんじゃないかって言われているの」

「外部大陸……？ えっと、それじゃあ……？」

「ええ。今の所、外部大陸は未開の地多いわ。外部との連絡を取り持つのはディアノイアの重要な役割でもあるの。何しろ英雄学園計画残りの二校は外部大陸にあるんだから」

外部大陸 未開の地。長らくこの世界は北と南、二つの大陸だけが人の暮らす世界だと言われ、そこより外側に目が向けられる事はなかった。

しかし魔王大戦、第三次勇者聖戦が終了し、人々は世界を復興させ平和の為に努めるようになった。一人一人の目はお互いの憎しみだけではなく、もっと世界へ……外へ。人類の視野は今も広がり続

けている。

お互いを憎しみ合うだけの時代では叶わなかった願いが、新たな手を握り締める事が出来る人々の住む世界へと続いて行く。リリアはそれを望み、そして世界の果てへと旅に出たという。

「噂話の域を出ないんだけどね。でもあの子ならそんな事になっ
てもおかしくないもの。だからユリアも行くって聞かないの」

「 “世界の果て” に、ですか？」

母の姿を求め、ユリアはより強く、そしていつかは世界の果てを
目指して行く。今はこの小さな部屋の中、小さなうさを追い掛け
回す小さな少女……。しかしその素質は母親であるリリアさえ軽々
と凌駕する。

いつかは世界最強の勇者になるかもしれない……。その可能性は二
人とも感じ取れるから。だから小さな少女の大きな夢をせめて応援
したいと願うのだ。とても自然に、真っ直ぐな気持ちで。

「難しい……。でも、素敵な夢ですね」

「出来ればあんまり危険な事はさせたくないんだけど……。でも、
そんなものよ。わたしたちも貴方達くらいの年頃の時は、無茶だっ
て判っていても自分の胸の熱さに真っ直ぐに生きていたわ。それを
邪魔してしまうのは、大人としてやってはいけない事だから」

「……………素敵ですね、そういうの。なんか……………わかる気がします」

無駄だとわかっていた。無謀なのは百も承知だった。それでも入
学試験を受けた。

奇跡のような合格。裏切られた夢……。それでも諦められなくて、

それでも小さな頃、夢見た勇者の姿に追いつきたくて……今もここで燻っている。

「わたしもディアノイアで、強くなれるんでしょうか」

「なれるわよ、きっと。この学園はね、力と知識だけじゃない……。きっと皆に、“夢”を与えてる。もっと遠く、遙か彼方……。今は目に見えない、手の届かないような理想だって、いつかは実現できる。きっと、一人じゃなくて仲間が居るなら、貴方にもね」

テーブルに頬杖をつき、ゲルトは優しき笑いかける。その笑顔に微笑み返し、マナは頷いた。

「……ところで、あのー。ユリアちゃんのお父さんは、今どこで何を……？」

途端、ゲルトの表情が暗くなった。あさつての方向に視線を反らし、冷や汗を流している。

「な、なんか聞いちゃいけない事でしたか……？」

「い、いいのよ。いいんだけど……。いいんだけどね……。もう、昔のことだから……うう」

一人どんよりとしてしまったゲルト。どうやら触れてはいけなかった過去に触れてしまったらしい。マナは一人あたふたしながらゲルトの肩を揺すり続けた。

「……きっと、死んじやいないのよ。リリアも、ナツルも……。ね。今もこの世界のどこかで、あの子の事を待ってる」

二人の視線の先、ユリアはうさぎを抱きかかえて微笑んでいた。天使のような笑顔を浮かべるユリア。マナはその姿を両目にしっかりと焼き付けた。

「わざわざここまで案内してくれてありがとうございました」

食事を終え、校内の案内も済ませてマナは荷物を抱えゲルトに頭を下げていた。明日からはいよいよディアノイアでの生活が始まるのだ。

学生寮まで案内を終えたゲルトは夕暮れを背に小さく頷く。マナは荷物を一度降ろし、ゲルトの隣に立つユリアに歩み寄る。

「ユリアちゃん」

「……ん？」

「明日から同じディアノイアの生徒として、一緒に頑張ろうね！
よろしく、ユリアちゃんっ！」

笑顔でそうして手を差し伸べる。ユリアは面を食らったように目をぱちくちさせ、それからおずおずと伸ばした小さな手で握手を交わした。

二人の重なったシルエットが夕日の中に浮かび上がる。ユリアは初めてマナに笑顔を見せた。子供らしい、無邪気でしかどこか大人びた笑顔だった。

ゲルトとユリアが帰路に着く。その後姿が見えなくなるまでマナは寮の前で二人を見送っていた。やがて夕日の赤が掠れ、夜の闇が世界を包み込み始める中、少女は深呼吸をして空を見上げた。

「……お父さん、お母さん。ここがシャングリラです。ここでマナ・レイストームは、自分の夢を追いつけます」

とりあえずは迷わずに部屋まで向かう事。そして“ルームメイト”となんとか早く打ち解けること。

マナ・レイストームの生活は始まったばかり。そして彼女と勇者の物語は、きつとここから始まった。

「お、おい……！ あれを見ろ！」

世界のどこか。見渡す限り砂と石に覆われた砂漠の大地、そこに浮かぶ陽炎が一つ。

ディアノアの蒼い制服とは異なり、紅い背服を身に纏う学園の生徒たちが指を指す先、そこには彼らがこれから討伐しようとしていた魔物の姿があった。

巨大な龍の姿をした怪物。それは全身を切り刻まれ、頭に巨大な剣を突き刺されて息絶えていた。その剣の大きさは余りにも巨大。まるでそう、巨人が扱っていたかのような、聖なる剣。

強すぎる太陽の光を浴びながら、龍の背の上に一人の女の姿があった。長い髪を風に揺らし、砂塵の中に生える。生徒達が啞然とするのを見下ろし、女は龍から飛び降りて砂を踏みしめる。

「えつと、君たちってもしかしてガーグランドの……？」

突然の質問に生徒達は顔を見合わせ、それからゆっくりと頷いた。

「そつか！　よかった、このまま砂漠で死んじゃうのかと思ったよ。
でも案外　結構イケるもんだね？　徒歩で砂漠横断、六十四日目
っ」

全身をスッポリと覆っていたマントを脱ぎ、女は光の下で大きく
身体を伸ばす。空に嬉しそうに叫び声を上げ、生徒たちが完全に引
いている中、彼女は満面の笑顔で言った。

「　で、さ。よかったら分けてくれないかな？　ご飯と、それか
らお水　！」

「ユリア、友達が出来てよかったわね」

「……別に、友達じゃないもん」

「そう？　でも、貴方にもいつか判る時が来るわ。一人では絶対に
歩けない道でも、仲間と手を繋げば進めるって事」

「……仲間？」

「そう、仲間。貴方にもきつと出来るわ。ここはそんな運命を引き
入れる場所だから。ディアノイアは　きつと貴方の運命を祝福し
てくれるから」

夕暮れの中を歩きながらユリアは頭の上のうさぎを下ろして腕に
抱える。そうしてうさぎの頭を撫でながら目を細めた。

「……仲間、か。そしたらママにも会えるかな……？　サイファー

……」

うさぎは何も応えない。ユリアが見上げる先。夕日の紅と夜の闇
が交わる狭間、幻想的な月と太陽の光がシャングリラを見下ろして
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8202f/>

虚幻のディアノイア

2010年10月10日11時16分発行